

---

# ONE PIECE - 全てはある日突然に

雷帝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ONE PIECE - 全てはある日突然に

### 【コード】

N1573L

### 【作者名】

雷帝

### 【あらすじ】

平凡な日本のサラリーマンだった主人公はある日目が覚めるとONE PIECEの世界にいた！  
何故？どうして？そう思いつつも頑張って生きていきます。  
主人公は最終的にかなり強くなる予定です

## 第1話（前書き）

ようこそいらっしゃいました

この作品はONE PIECEの二次創作作品となります

この為、現在進行中の原作のネタバレとなる部分が御座います  
ご了承の上、先にお進み下さい

## 第1話

今、自分の目の前には唐草模様のパイナップルに似た果物、のよ  
うなものがある。

喰うべきか、喰わざるべきか。

……能力の前に、自分が生き残る為に喰うしかないと分かってい  
ても、迷うものだった。

だが、喰わねば生き残れまい。

平和な日本という国で、別段格闘家なんてものをしてた訳でもな  
い運動不足気味のサラリーマンだった自分では、このワンピースの、  
島のひとつでは……。

それはある日突然起きた。

自分はその日、普通に仕事をして、ノルマノルマと煩い上司と、  
コストがかかるから値下げしろばかりの取引先に表では神妙な顔で  
頭を下げて、腹の内では悪口雑言を投げつけ、ドイツの的にして過ご  
す。そんな何時もの一日が終わり、ようやく一週間が終わった、明  
日は休みだと少しほっとした気持ちでベッドに転がり込んだ、筈だ  
った。

目が覚めたのは周囲の煩さと暑さだった。

おかしいなあ、まだ初冬で肌寒いくらいだった筈なのに、間違っ  
てエアコン暖房でもつけたか？と目を開けた俺の目に飛び込んで  
きたのは。

ジャングルだった。

当たり前だが、しばらく頭が周囲の状況を理解出来なかった。

しばらくぼんやりと周囲を見回し、混乱し、それから慌てて立ち

上がり……その視点の高さに違和感を感じた俺は自分を見下ろして……今度こそ絶叫した。

俺は別に自分が身長180越えのすらっとした絶世のイケメンで、バランスの取れたけれど鍛えられた体を持つスポーツマンなんていう馬鹿げた妄想を言うつもりはない。

だが、それでも俺は180に迫る身長はあったが……まあ、夜遅くまである仕事に、深夜に健康など考慮してない、ほか弁やら出来合いの惣菜を適当に買って食うという生活が体にいい訳もなく、少々お腹が悲しい事になってきていたが、それでも成人男性だった筈だ。

……なのに、今の自分はどうだ。

確かにお腹とかがぺっこり凹んだのは嬉しい。うっすらとだが、腹も割れてる。ここからきっちり鍛えていけば……とは思うが、明らかに『子供』なのだ。

まあ、不幸中の幸いというべきか、性転換まではしてないみたいだった。

漫画とかでなってしまう奴がいるのは知ってるが、現実に起きたらショックで呆然としてしまうと思う。

とにかくだ。

今の俺は身長は推測ながら、140以下。

服装はベッドに倒れこんだ時は、面倒なんでスーツの上下だけ脱いで、下だけパジャマに。上はカッターのままでネクタイだけ外してた、筈だったのに、今自分の視界に見えるのは、至極簡素な、そういう囚人服のような（念の為に言っておくがシマシマ模様じゃないぞ）ベージュの服だった。

もしか、と髪を何とか確認してみるが、どうやらこちらは黒のままのようだ。

……瞳の色は分らんが。

……さて、あれから（多分）島を彷徨った。  
島と判断したのは、波の音がしたので歩くとすぐに、海に出たか  
らだ。

より正確には見回しても海ばかり。振り返っても左右を見ても…  
…。

いや、希望を持って、俺。

きつとここは半島かどっかなんだ……。

……そんな風に思おうとしていた時もありました。

あの後、海岸を歩いていたらバツタリ出くわしたデカイ獣。

猿にも似た……けれど牙が口元からゾロリと覗いたソイツは俺を  
見るなり、襲い掛かってきた。

……ゴリラは優しい動物だから、威嚇はしても実際に襲い掛かっ  
てくる事はない、だから威嚇した時は逃げちゃ駄目だ、という話が  
あるんだが……俺は逃げた。

いやあ、鈍感な日本人の俺にだってわかったよ？

……この大ザルもどきが俺をご飯にしようとしてるって！！

本来海岸というのは走りづらい。

そういう意味では、海岸は逃げるには相応しいフィールドと言  
えないが……考えてみて欲しい。

未踏と思われるジャングルで、猿の形をした怪物と追いかけつこ  
するのとどっちがいいか。

……まだ海岸の方がマシに思えて、俺は必死に海岸を逃げ続けた。

……日が傾く頃には一周していた。

だから、俺はここが島なんだと諦めるしかなかったんだ……。

え？猿はどうなったのかって？

喰われました。

猿が。

俺が逃げ続けて、本当によくここまで逃げ切れたなあ、本当に人  
の生存意欲も馬鹿にしたもんじゃない。でも、そろそろ限界だ……

もうこれまでか、って思った時、俺を追いかけるのに夢中だったせいで注意が散漫になっていたんだろう。突然猿が横合いから襲われた。

ヒトデに。

いやあ、眼を疑ったよ？

何で陸にヒトデが、とか、サイズが違うだろう（一辺5mはあるとかというジャンボサイズ）、とかまあ思う所は色々あったんだが……裏面が口だらけの牙だらけなのを見たら、もう何か言う気持ちなくして、逃げましたよ。

でも、この逃走劇、無駄じゃあなかった。

走る中、何とか逃げるのに使えそうなものはないかと必死に周囲を探っていた俺は、家らしきものを目撃していた。

周囲が暗くなる前に、そこへ……！

残り僅かな体力を振り絞り……。

辿り着いた。

廃墟だった。

と言っても、より正確には「もう」誰も住んでいない建物だった。そう、人影を探した俺が見つけたのは白骨化した一人分の遺体だけだった……。

まあ、幸いというべきか、この建物自体はかなり頑丈に作られていたし、襲撃を受けた様子もなかったので、ここで一泊した。

内心不安だらけだったんだが、おそらく動物達にとってもこの既に白骨化した人物はかなり畏れる相手だったのかもしれない。

それが確信出来たのは翌朝、彼が遺した手紙というか日記というか……それらを読んでからだった。

そして、これによって自分がワンピースの世界に来たのだと、遺されていたものと合わせて確信するに至った。

ONE PIECE。

自分も始まった当初から読んでいたジャンプの人気漫画だ。

海賊王ゴール・D・ロジャーの最期の言葉をきっかけに大海賊時代を迎えた海の世界。

……冒険と、そしてそれを上回る危険に満ちた、平和な世界とはかけ離れた争いに満ちた世界だった。

漫画で読むならドキドキしながら読めても、自分がそこに当事者としているとなると不安で一杯になった。

ああ、念の為ながら、自分は何故かワンピース世界の文字は読め  
たし、試しに白墨を（インクは既に乾ききって使えなかった）使  
つてみたが、文字も書けた。これが分かった時、どれだけほっとし  
た事か……。

まあ、話を元に戻すが、どうやらこの遺体は、嘗てCP所属の工  
作員だったらしい。サイファーボール

……若い頃は出世を目指し、或いは権力をふるうのが楽しくて、  
裏仕事もこなしてきたらしい。

或いは天竜人が気に入った女性を、結婚式場から旦那を殺して奪  
ってきたり。

或いは政府の恥部を隠す為に、それをスクープしようとした記者  
を闇に葬ったり。

etc etc……。

だが、年を取ると、それらが辛くなったらしい。

若い頃は平然と行えた行為が段々と心を苛むようになり……やが  
て、ある任務でドジを踏んで死んだように見せかけ、彼は逃げた。

死んだように見せかけたのは、彼が長年裏の仕事に関わって、政  
府のヤバイ情報も多数握っていたから、らしい。

ただ、その辺は本人曰く「どうでもいい事だろうから」書いてい  
なかつた。

……ほっとした。

この世界のヤバイ事柄なんて聞いたって、自分の身が危険になる



だけなのだから……。

で、まあ、この無人島で彼はひっそりと生きてきた訳だが、最後に何か遺したくなったらしい。

誰が来るという訳でもないだろうが、もし流れ着いたなら、何か利用出来るものを遺してあげようと思ったらしい。

別段、罪滅ぼしなんてのじゃないとも書いてあった。どうせ死んだら地獄行きは今更変わらないと。

でも、遺されていたものは本当に有難かった。

水場の場所などを記した島の地図。

島の植物、その中でも各種の道具に使える植物や食べられる植物、逆に危険な植物のマップと絵（かなり上手かった）。

島の動物に関する同様の資料。

そして……。

彼が修めていた武術、基本武術や武器の扱いに加えて、六式を修得する為の鍛錬方法。

更に最後の任務で手に入れた悪魔の実。

悪魔の実に関しては、彼が遺した遺書の最後にこうあった。

『もし、貴方が今生き残る力がないならば、きつとこの悪魔の実  
は貴方の力となるだろう。残念ながら、私もこの悪魔の実が如何なる力を持っているかは知らないが（省略）食べるかどうかは貴方が決めるといい。きつと食べるべきかどうかは既に分かっているだろうから』

そう分かっている。

まず、この島が無人島だという事が確定出来てしまった。

となれば、誰かの助けを得る事は出来ない。自分で頑張るしかない。

武術の教本はあるし、武器も火薬とかを使う銃器はともかく、使

えるものもあるだろうが、自分には今を生き残るだけの技量がない。修得するにはそれなりの時間がかかるだろうし、それまで生き延びねばならない。

だから……。

感謝して、覚悟を決め。

自分は悪魔の実を口にした。

拙い。

エグミは酷く、口に残り。

体は吐き出せと訴える。

けれど、自分は無理に口の中に押し込んだ。

少なくとも。

悪魔の実は毒ではない。食べられる。……空腹と脱水症状寸前で死にそうな自分にはそれで十分だった。

とはいえ、さすがに口の中がたまらなかつたので、水場でがぶがぶと飲み干して……。

まだ、えぐみが残ってる気もするが落ち着いてきた。

さて、そうなるど気になるのは、自分が食べたのが如何なる悪魔の実だったか、だ。

悪魔の実大きく分ければ三種類。

超人系。

獣人系。

そして、自然系だ。

自然系が最強と謳われているし、実際物凄く強いが、他のだつて十分強い。例えば、海賊白ひげのグラグラの実だつて、超人系だといつし、白ひげの一番隊隊長マルコは獣人系悪魔の実の能力者だ。それに……。

原作どおりなら、自然系の悪魔の実なんて、殆ど残っちゃいない

だろう。

煙、雷、砂、氷、光、闇、火、マグマ。

風はドラゴンくさかったし……。

後は霧、水…は悪魔の実に反するから除くとして、自然現象となるのはっと思いつくようなものはそうそうない。

さて、そうしてみると、はたしてアレは何だったのか……。

同じCP所属のロブ・ルッチなどは身体能力が純粹に向上する獣人系こそが六式使いには最高なのだと言張っていたが……さて。

とばかりに自分の右手を見詰めて、発動させようと意識したその瞬間。

どろりと。

腕が銀色の液体へと溶けて崩れた。

慌てて、拾おうとしてもつるつると更に細かく崩れてしまう。

はた、と気付いて念じるとどうやら自在に動くようで、戻れと念じてみると……腕は銀の光沢などどこにもない、普通の腕へと戻った。

「……なんだ、こりゃ……！？」

呆然と叫ぶ。

超人系悪魔の実。

メタメタの実、モデル水銀。マーキュリー

それが自分が喰った悪魔の実だと理解するにはもう少し時間が必要だった。

## 第1話（後書き）

はじめまして

ふつと書きたくなり、勢いに任せて書き出したお話ですが、  
他で書いてるものもあるので、不定期になると思いますが、よろしく  
お願いします

## 第2話・癒し（前書き）

読んでいただけた方感謝です  
とりあえず、休みの間に出来るだけ投稿して、後はちょこちょここと

……

## 第2話 - 癒し

時間だけはあった。

時間しかなかったとも言つ。

まあ、何です。

この世界に辿り着いてから、はや1年が過ぎました。

幸い、遺されていた資料から食い物と水は確保出来るようになった。

危険な動物達はいたが…… 悪魔の実のお陰で生き延びた。

悪魔の実。メタメタの実、モデル水銀。

これは想像以上に便利だった。

水銀という常温・常圧で液体という唯一の金属だ。

つまり何が言いたいかというと、通常攻撃を受けても、自然系並に攻撃が効かないのだ。液体に攻撃しても、飛び散るだけで、有効的な打撃は与えられない。打撃、斬撃、刺突。その全てが無効。

加えて、原子番号が80という重さ。

原子番号は質量数と密接に関係している。まあ、何だ、要は見かけによらず案外重いつて思ってもらえばいい。水銀より原子番号が大きい＝重いものとなると…… 放射性物質を除けば鉛とかごく僅かだった筈、だ。少なくとも金や鉄より重い。

何が言いたいかというと、水銀を操つての攻撃は十分な破壊力を持つてる、という事だ。

こうした悪魔の実に関する話はまた後程語る機会も多いだろう。

ただまあ、悲しかったのは…… 日本人なのに、風呂に入れなくなった事だな…… いやね、抜けるんだよ、力が…… やつとそれらしきものを作った風呂に入るとき…… あやうく風呂で溺れ死ぬ所だった。しょうがないので、最近は簡単なシャワーだ。

どうやら死んだCPの人（名前とか身元が分かるようなものは全く残していなかった）も悪魔の实の能力者だったらしく、そうした設備とかもあつたんだ。

さて、こうして悪魔の实の使用が可能になつてからは食料を確保して、肉も狩るのも楽になつた。

そうして必要数を確保し、調味料作りやら薪やらを得て、暇な時間には全て鍛錬に当てた。

……というより、何かしてないと気が狂いそうだったからだ。

漫画の世界に入り込んだ、という事だけじゃない。

これまでの全て、生きてきた人生はまだまだ日本人として考えるなら、先は長いとはいえ30年を越える。

当然、親兄弟、友人や同僚……いる訳だ。

これまで趣味とかで集めてきたもの、楽しみにしていた漫画や小説。

……全てと切り離され、今いるのは生きている人一人いない絶海の孤島。

誰も傍にいない、一人ぼっちの世界。

寂しさ、という奴が何もしていないと込み上げてくる。

忘れる為にも死に物狂いで訓練を続けた。

気付けば、まだまだ粗雑で改善余地が多いと自分でも分かるが、一応剃と月歩、嵐脚は覚えていた。まあ、実の所「剃」の修得に一番時間がかかつて、それが出来た後は、後の二つは楽だった。

つか、本当に規格外だな、この世界……理論はわかってても、元の世界じゃ不可能だろうに。何しろ、水に足を踏み出して、右足が沈む前に左足を……の世界だからだ。

……指銃や鉄塊、紙絵はどうしたのかつて？

……紙絵は次に覚えようと頑張ってる。

けど……後の二つが、ねえ……。

実感が沸かないのだ、これが！

鉄塊は、指銃はそれらしきものは簡単に出来たのだが……俺にはわからない。これが悪魔の実の能力で固体化したものなのか、それとも六式で出来るようになったのか……！

多分前者だろう、初期からあっさり出来たし。

多分、これ以上はきちんと六式を修めている海軍の人にも見てもらわないと、その二つは無理だろう。

ちなみに最近では某H&Hであった、感謝の正拳一万本なんてのもやっている。

……終わる頃にはかなり時間が過ぎるからね、ありがたい。

さて、それはさておき……1年経った所でこうして日記を書いているのには理由がある。

家族が出来ました！

いや、人間じゃないけどさ。

それはある日の狩りに出た時の事だった。

基本、狩りは数日分纏めて必要なものを狩って、一部は干し肉にしている。これらは緊急用なので、大事に保存している。

無事大物を仕留めて……というか、全長5m近い猪もどきを持って帰れる自分の筋力が恐ろしくなってきた今日この頃だ。本当にこの世界鍛えればどんどん上限がないみたいに上昇していくよな……まあ、帰り道で、だ。

みゃう……みゃう……

そんな鳴き声が聞こえた。

動物とかの鳴き声に誘われて、下手に行くと危険な猛獣とかにバ



ツタリだったり、って事も多い。まあ、今の自分なら大丈夫だが、それでも無用ないさかいは……と思っていたんだが。

何故かその時は足を向けた。

藪を越えたその先には……巨大な1頭の剣歯虎、そしてそれに巻き付くようにしている大蛇。その2体の……死体だった。腐乱していない所や周囲の折れた植物の様子を見ると、まだそう時間は経っていないだろう。

『相打ちか』

鳴き声の主を探すとすぐに見つかった。

母虎だったのだろう、その腹の辺りですがりつくようにして鳴いている2匹の子猫、のように見える虎の子供。

元は3匹だったのだろうが、1匹は……体の半分が潰されて、母虎の顔の付近で転がっていた。

……弱肉強食。

自然界の掟だ。

そうして、敗れたものの子供は、他のものの餌食となる……中には運良く成人する奴も混じっているだろうが、このサイズの猫のような虎が生き延びれる程この自然は甘くない。

俺が近づくと……2匹は片方は俺に向かって唸り声を上げ（とはいえサイズとかがあるから可愛いだけだが）、もう1匹も唸ってはいらんだが……こちらは少々臆病なのだろう、もう1匹の陰に隠れるようにして唸っている。

……寂しかったんだ。

だから……。

ひよっとしたら、と思う気持ちがあった。

もし、この子達が未だ母虎の乳しか吸えないのなら、俺にはどうしようもない。

だが、ひよつとしたら……。

そう思った俺は水銀のナイフを生じさせると、肉を切り分けた。

……ああ、無論水銀を肉に染み込ませるなんて真似はしない。

そうやって切り取った肉を適当な小さめサイズにすると、それを子虎達の方へと放り投げた。

一瞬ビクリとして、片方に至っては逃げかけたが……俺が、その場に座って、何もしないのを見ると、もう片方が恐る恐る近づいて……

肉をさつとかつさらって、兄弟の方へと持ち帰り、二人で夢中になつて食べ始めた。

……良かった、どうやら既に肉が食えるくらいにはなっていたらしい。

三日間かかった。

三日の間、この場所を動かず（いや、正拳突きだけはやったけど）、肉を切り取り、周囲の果物や薪を水銀を伸ばしてもぎ取り……ひたすら餌付けをした。

おそらくこの子達も母が既に動かないとわかつてはいたんだろう。そして、俺が自分達に危害を加えたりしないって事も理解してくれたんだろう。

三日が過ぎる頃には俺の傍で、手渡しで肉を受け取ってくれるようになった。片方だけ。

もう片方は臆病というか警戒心が強いというか……もう一匹が呼んでもびくびくしてる。

つか、元気な方は最初こそきつかったが、一旦慣れだすと凄く早かった。

何しろ、今じゃ俺の膝の上で肉を食ってるぐらいだ。

結局、更に一日が過ぎる頃にはようやくもう一匹も近づいてくれ

るようになって……俺は2匹を家へと連れ帰った。

彼らも、しばらくは母虎の方を振り向いていたが……駆け戻ったりはしなかった。

こうして、俺に家族が増えた。

みゃうみゃう……

朝に、昼に鳴き声を上げて、じゃれついてくる子虎達……ああ、本当に癒されるよ。

後に振り返った時、もし、この子達に出くわさなければ、俺は発狂していたかもしれない、そう思うような日々に措ける出来事だった。

## 第2話・癒し（後書き）

もう少し、孤島での話が続きます

……一応次回は更に数年が飛んで、某お人との出会いまで書く予定です

### 第3話・原作遭遇（前書き）

さて、いよいよ原作とのクロス開始です

### 第3話・原作遭遇

さて、あれから更に数年が過ぎた。

家族が増えたとして、生きる為の日々は変わらない。

ただ、チビ達が小さい頃は「家で帰りを待つてくれてる奴らがいる」というのは凄く嬉しかった。

無論、彼らは俺が持って帰ってくるご飯を楽しみにしている部分はあるだろうが、それだけじゃない。

家族として、ご飯が終わった後じゃれついてくる、ただそれだけの行為がどれだけ俺にとつて嬉しかったか。

小さい頃は2匹が寝てから、そつと寝床に移してから修行していた。

ある程度大きくなると、2匹は俺の鍛錬を傍で見ているようになった。

そして、今では2匹もすっかり大きくなって、一緒に狩りにも2年前辺りからは行くようになった。

ただ……。

……最近、帰ってこなくなった日もあるのが寂しい。

いや、動物というのは成人が早い。

結局、俺が何時しか彼らに依存していたのだろうな……そう理解出来たのはある日の出来事だった。

その日、俺は……呆然としていた。

巨大な船。

大砲を揃えた、その船は無論漫画の世界とは異なっていたが、模様やら何やらに覚えがあった。

……既に生きる事に必死な日々だったせいで、原作はあれこれ忘れてしまっていたのだが。

海軍の軍艦。

実物はこんなものなんだ……と思うまでもなく。

俺は駆け出していた。

そこにいたのは……間違いなく、数年ぶりの人だった。

そうして森の中から飛び出した俺に……一斉に銃が向けられた。

S I D E    ????

儂らはその時、偶々水の補給の為に近場の島に寄った。

本来ならば寄る予定なぞなかったのだが、少し前にやりあった海賊どもとの戦闘で軍艦の一部が破損。

運悪く、それが水タンクだった、という訳じゃな。

……かわされた儂の一撃が船を砕いたという見方もひよっとしたら出来るかもしれん。

海で真水という奴は貴重じゃ。

無論、海水を汲んで、それを蒸発させて、集めた水蒸気を冷やして……という方法がない訳じゃあないが、そんなもんは軍艦の全員の喉を癒せるようなもんじゃない。

どうしたもんかと海図を引っ張り出して艦長らと相談した結果、この島へと寄る事になったんじゃ。

無人島で、特筆する要素もない島じゃ。

水場はある。

天然の食材もそれなりに豊富。

だが、それだけ。

正規の航路からも若干離れているし、周囲の海流もあんまりよろしくない。何よりカームベルトのすぐ脇じゃ。ちよいと迷った海王類がこの島近辺に姿を見せる事もある。

何より危険な猛獣、毒を持った奴も多い。

まあ、つまりは危険を冒して開拓する程の島じゃない、って事じ

やな。

じゃから、島の森からそやつが飛び出してきた時、部下達が銃を向けたのは仕方がない。

無人島とされておった、この島で森から飛び出してくるなぞ野生動物という可能性が高い、と判断するのは当然じゃからの。

それでも即撃たんかったのは飛び出してきた相手のサイズが人サイズじゃったからじゃ。

漂流者は、このグランドラインでは常に可能性がある。

グランドライン。

カームベルトに挟まれた東の海、西の海、北の海、南の海の四地域とは異なる異質の海。

カームベルトには巨大な、それこそ軍艦でも一呑みにしかねんような海王類があるし、晴れ渡った空が突然に激しい嵐になる、などという天候の激変も珍しい話ではない。

伝説のようできて、伝説じゃない現実の話なんぞもゴロゴロ転がっておる。

当然、運悪く、そういうのに巻き込まれて船が難破なんぞという例は幾等でも転がっておる。そんな中で偶然、運良く島に辿り着いたという例もあるし、或いは海賊に襲われて気紛れで無人島に放り出された、或いは海賊共が処罰の為に仲間を置き去りにしたとか、まあ色々じゃな……。

森から飛び出してきたのが人である事を確認すると、儂は部下らを制し、歩み寄った。

……儂と比較すれば小柄に見えるが、まあ、普通の成人男性としてはそこそこ大柄の部類に入るじゃろう。

大体170〜180といった所か？とはいえ、まだ若いの。二十歳にもなっておるまい。



「さて……お前さん誰じゃ？」

「……お……おレ……ハ」

ふむ、こいつは結構な間、この島に一人でいたようじゃな……そうすると、この島に来た当初は子供の可能性が結構高い……となれば海賊という可能性は低いかな。

そう判断する。

人というものは、長らく一人で生活していると会話相手がいないせいか、必然的に話をする事がなくなる。

会話がなくなると……次第に話す事自体が困難になってくるんじゃないよ。

「ああ、無理に話さんでいい。こちらからの質問に頷いてくれれば、のう？」

SIDE主人公

ああ、良かった。

本当にそう思った。

長年話をしてない事がこれ程までに話す事を難しくしてるなんて……使わないから、全然気付かなかった。

目の前にいるのは結構な大柄の筋肉質な……黒髪に白いものが混ざりだしている髭面の男性。

当たり前の話だが、漫画顔や体型とは異なる、普通の人間だから、薄ぼんやりとした記憶を探っても誰か分からん。というか、そもそも時代が分からんし。

果たして、今は原作の何時頃なのか。

既に原作は始まっているのか。

或いは原作の未来なのか。

逆に原作の過去なのか。

「まず確認するが……お前さん、海賊か？」

首を横に振る。

「ふむ、じゃあ、漂流者かの？」

首を傾げる。

向こうもよく覚えていないと思ったのか……。

「ふむ？分からんと……お前さんもう長い事、この島におるのか？」

頷く。

しかし、これではラチがあかないと思う。話す事は難しいが、書く事なら問題はない。何時かに備えて練習していたからだが……今、紙はない……何しろ貴重なのだ、自分には紙なんて作れないし。

だが、幸いここには書くものが幾等でもある。

S I D E ???

ふむ？

しゃがんだと思ったら、砂浜に文字を書き出した。成る程、ここなら問題あるまい。

『気付いたら、ここにいた。もう何年にもなるが、それ以前は覚えていない』

「ふむ、この島にいる前の事は覚えておらんのか……？」

確認すると頷く。

ふむ、何らかのショックで記憶を失ったか？海賊にでも襲われたりして、頭でも殴られたのだろうか？

「しかし、よく生きられたの？」

『昔、ここに住んだ人が遺してくれた資料があった。残ってた日記によると、政府のCPって組織の人が、仕事に疲れて逃げたって書いてあった』

なんじゃと！？CP……サイファー・ポールの人間が……。

むう、それは後で確認せねばなるまい……しかし、そうか。特殊工員として彼らは厳しい訓練を受けている。こうした島でのサバイバル訓練も彼らは十分なものを持っている筈じゃ。逃げたとしても、生きていくのに十分な装備を整えてから逃げた筈……ふむ、残っていたものがあれば、何も無いよりはるかにマシ、か……。

「後で確認の為、案内して欲しいんじやが……ええかの？」

頷いた。

まあ、これぐらいなら書くより早いからの。

「ふむ、すまんの。代わりとっては何じやが、お前さんの身柄は海軍で責任を持って引き取ろう。仕事は……まあ、良ければ海軍に入るか？」

しばらく考えていたが、頷いた。

まあ、この島で長らく暮らしていた上に、島の外の記憶がない以上、まともな働き先がないのは推測がつく。そういう意味では、選

択肢がなかったんじゃろうな……。

まあ、儂が紹介出来る所なんぞ、そこぐらいしかないし、この海賊時代、悪い選択ではないと思う。

『一つ聞いていいですか？』

ん？なんじゃ？

考えている内に向こうが砂浜に新たに文字を書いていた。

『貴方の名前は？』

おお、いかん。

そういえば、まだ名乗っておらんんだな。

「ああ」

一つ頷くとニヤリと笑い、答えた。

「儂は海軍中将、モンキー・D・ガープじゃ！」

### 第3話・原作遭遇（後書き）

原作クロス開始

ガープさん登場です

時間軸的には原作のおおよそ19年程前を予定しています。ゾロが生まれた頃、ルフィが生まれる2年前ですね

生まれる前なら、まだガープさんも東の海とかよりはグラウンドラインの方が生活の中心だと思い、このようにしています

ガープの髪は10年前はもう白くなってますが、ロジャー処刑の3年後ぐらいならまだ黒いだろうと…心労も増えた筈なので白いものが混じってきてはいますが（ロジャーと会話してる所では黒いですが、この後ロジャーの彼女匿ったりしてますからね）

第4話・おらば、島よ（前書き）

島編終了です

#### 第4話・さらば、島よ

SIDEガープ

結局、あやつの言っておる事は本当じゃった。

この数年間で補修したのじゃろう、しっかりとした作りの建物からは日記の他、彼の言葉を裏付けるものも見つかった。

悪魔の実の事も記してあったので、確認してみた所、矢張り喰ったらしい。

まあ、この島で気付いた当初は何の心得もない素人であったというし、それでは悪魔の実でも食わんと生き延びれんじやろうなあ。で、とりあえずは現在は……それなりに鍛錬を積んだというので腕試しをしてみておる。

「馬鹿もん！それは鉄塊ではないわ！」

「ぐっ！」

こやつなかなかのものじゃのう。

実の所、六式こそ相手がおらんかったせいかな荒削りじゃが、既に四式までは一応修得しておる。

剃、月歩、嵐脚、紙絵。

特に紙絵は評価しても良い。

こやつの悪魔の実は、超人系でありながら、その実、防御能力は自然系に近い。液体状故に殴っても斬っても突いても効果がなく、向こうの一撃一撃は例外なく重い。まあ、幸いなのは、自然系常識外の攻撃能力はない、という事な訳じゃが。

ただ、悪魔の実で自然系の能力者にほぼ一貫しておる事じゃが、連中防御が甘い。

確かに、覇気でダメージを受ける事はあっても、致命傷になるか

はまた別問題じゃし（単純に量とか質の問題でもあるが）、結局どこかで『自分には攻撃は効かない』と油断しておるんじゃろうな。じゃから、実力的には下の相手にも攻撃喰らったりするんじゃ。

そうした中、こやつは余計な攻撃はきっちりかわそうとしておる。その点は評価してやってもよかるう。

鉄塊と指銃はまあ、確かに鉄塊を修得せねば、指銃は会得出来んし、鉄塊は自分の能力と区別がつけづらいじゃろうしな……。

しかし、あの拳による一撃じゃったか、あれは凄い。する事がなかった。

それ故に一日一万本の突きを毎日やってきたらしい。一万本。

言うは易し、行うは難し、じゃな。感謝して正拳突きを放つ。一回に五秒かかったとして、一万だと五万秒、おおよそ十四時間。その間ひたすら正拳突き。考えるだけで気が遠くなる話じゃな……。何時の間にか覇気すら纏うようになったらしいが、あの一撃は避けられなかった。本気で放てば、果たしてどれ程のもんになるのか……帰ったら、クザン辺りに受けさせてみるか。

ガープがそうニヤリと笑った際、どこかでサボリの常習犯がゾクリと背中に怖気が走ったかは定かではない。

#### SIDE主人公

ガープ中將と組み手をやっております、アスラです。

余り日本人らしくない名前と思いますが、むしろ当然。何故か名前が出てこなかったのです、自分の日本人だった頃の名前が。

日本でやってた事ははつきり思い出せるのに、何故か名前は出てこない。

名乗った後、こちらの名前も聞いてきたガープ中將が、俺の様子を見て、名前も忘れてしまっておるのか、と思っただらしく、二人で



相談して新たにつけた名前だからだ。

いや、当初は孫が生まれたらつけようと思っていた名前じゃ、とか言っただけで名前を上げた時にはちょっと惹かれたけど、さすがに原作のあのイメージが強いで、それは「じゃあ、お孫さんが生まれるまで取っておいてあげてください」って断った。

最終的にふっと思ひ浮かんだ阿修羅から、名前を取った。

俺の武術の腕だが……駄目だな。

それなりに自信はあった。

実際、動物達には十分有効だったし、海兵達にも効いた、が、ガープ中将には全然効かなかった。

とはいえ、むしろ安心した。

俺は日本では普通のサラリーマンだった。なのに、この世界に来てからというもの、幾等する事がなくて、加えてサバイバル生活強要されてる状態なせいという事もあったが、鍛えれば鍛える程上限なしに上がっていくように感じられる状況に怖くなっていたんだ。

それが、上には上がいる。

それを実感出来て、少しほっとした。まあ、俺がやってたのが所詮教本と武芸を行わない動物レベルだったのに留まっていたのも大きいとは思ってた。

ちなみに、俺は悪魔の実の能力で、水銀を固めた武器を作り出す事も出来るが、これらは本部に戻ってから、武器を扱う連中に紹介してくれる、って事になった。

……未来を考えると、矢張りこうした武器を使った戦闘や素手も鍛えておきたい。

特にヤミヤミの実。

悪魔の実の能力を封じるとはいえ、白ひげにはやられていた所を見ると、あくまでティーチの奴の力は悪魔の実の効果を封じるだけなんだろう。それなら武芸を鍛えれば……特にまだルフィが生まれ

ていないって事を知る事が出来た事から色々話を聞いて、今が原作の19年前だと知る事が出来た（海賊王の処刑からまだ3年って聞いたのが決定打だった）。

今から鍛えておけば……きっとそれなりに上へと行ける筈だ。

何時起きたのか覚えていない事や、何時から始まるのか分からないような事例もある。だが……原作の不幸の一部だけでも止めたいと思う。

如何に漫画の世界で悲劇が起きていても、所詮は漫画の世界。

どんなに腹の立つ悪役がいようが、クズがいようが、彼らを倒せるのは漫画の主人公だけだ。

だが、俺は今、そいつらをぶちのめせる世界へと来た。

正義を背負う海軍だから、悪を未然に止めてみせる、なんて事は言わない。ただ単に……俺がやりたいからやる！スパンドムの顔面にパンチをぶち込んでやるとか考えたら爽快じゃないかね。

その為には海軍に入るのは、いい手だ……後は……きちんと情報を集めないとな。

忘れてました、じゃお話にもならない。

そうして、遂に島を離れる日がやって来た。

というか、軍艦はとくに離れる準備は出来てただけど、俺の修行とか資料の回収とかまあ、細々した事があったのと、海兵とはいえ矢張り偶には地上に足を下ろしたい、って事もあり、しばらく休暇の如く交代で上陸していた訳だ。

すっかり大きくなった家族を連れて、砂浜に出る。

始めて見せた時は驚かれたが、今ではすっかり皆了解してるから、銃を向けられたりする事はない。

何でも、グラン・タイガーと呼ばれる種とかで、余りに慣れる種ではないらしい……強さに関してだが、体格だけなら上回る種は結構いるが、その俊敏さと破壊力はかなり高い方に分類されるも

のだという。  
知らなかった。

そうして、砂浜から軍艦に向って歩き出したが……ふと気付いた。片方は一緒についてきているのだが、もう片方がついてきていない。

森から出てきた所でじっと座り込んでいる。

「どうした？」

声を掛ける。

もう1頭も不思議そうに首を傾げている。  
と。

森からもう1頭のグラン・タイガーと子供達が出てきた。

「あ……」

そうか。

お前には新しい家族が出来たのか。  
そうだよな、もう自分がこの世界に来て、お前達と始めて出会ってから、もう何年も過ぎているんだ。お前だってもう小さな子供じゃないんだもん……。

うおっ……

そう傍らのついてきてくれた兄弟も寂しそうに鳴いたが、でも引き止めようとも、戻ろうともしない。

一声吼えると……あいつはそのまま家族と共に森へと姿を消した。  
た。

その姿が木々に完全に隠れるまで、俺ともう1頭は見送っていた。

姿が見えなくなると、俺は軍艦の傍で、様子を見てた筈だが黙って見ていてくれたガープ中将の所まで歩いていった。

「お世話になります」

「……………いいんじゃない？」

何を、とは問い返さない。ガープ中将が言いたい事は理解出来ている。というか、さっきのアレ以外にはあるまい。

寂しさを押し殺して、黙って頷く。この数日で、大分元通りに会話が出来るようになったが、こみ上げるものがあった、声が出ない。始めてあいつを拾った時から、これまで……………1人と2頭でずっと生きてきた。

でも、今日からはそこから1頭が抜ける。

けれど、それは悲しい別れじゃない。新しい家族をあいつは得たんだ。それならあいつの、これまでの家族としては喜んでやるべきだ。

そうして、俺は軍艦に乗り……………マリンフォードを目指す事になった。

#### 第4話・さらば、島よ（後書き）

今回は海軍の島マリリンフォード……の前に少し話が入る予定ですが  
虎さんは片方だけついてきました

悪魔の実は一種類につき一個だけですから、チョッパーの為にもヒ  
トヒトの実とかは出しませんw

ただまあ、別の方向で何か食べさせたいとは思っています

## 第5話・対海賊

海軍の島、マリソフォード。

地理的条件こそが、そこを要所としてきた。

海軍の要塞があるから、そこが重要なのではない。そこが重要だからこそ、海軍が要塞を置き、それが重要性を更に高めた、というのが正解だろう。

今、我々はそこを目指していた。

いた、と過去形な理由は単純だ。

今、我々とはどうか、軍艦は進路変更しているからだ。

『海賊』

その一報が入った事により、軍艦はその進路を変えた。

ゴール・D・ロジャーの処刑以来、急速に増加する海賊達。

海賊というと、どんな連中を想像するだろうか？

法に縛られる事なく、自由に航海するアウトロー？弱きを助け、強きをくじくヒーロー？

残念ながら、そんな連中はほんの一握りにすぎない。

原作でも、主人公である麦わらのルフィ、白ひげエドワード、赤髪シャンクス、過去の海賊だがルンバー海賊団もそんな雰囲気を持つ海賊だった。

だが、初期に出てきた金棒のアルビダは恐怖でクルーを縛っていたし、道化のバギーは町一つを制圧し、奪っていた。

ルーキーの中でもルフィを上回る賞金首だった海賊キッドは、自身の夢を馬鹿にしたという理由があったとはいえ、多数の命を奪ってきた。

それが海賊だ。

考えてみれば、当たり前前の話だ。

白ひげや赤髪のような大海賊ならば、『自分のシマ』という場所を支配し、そこから上がりを受け取る代わりに他の海賊からの保護を与えるという、昔風のヤクザみたいな真似も出来たのだろう。

ルフィのように少数からなり、しかも強者の揃う海賊ならば、同じ海賊でも悪事を働く連中をぶちのめして奪うという手もあるだろうが、普通の海賊はただ奪うしかない。

それもなるだけリスクを減らさなければ、下っ端がついてこないから、より容易な場所、すなわち平穩に暮らしている民間人を狙う、という事になる。

『海賊は悪』。

それは決して嘘ではないのだ。

……たとえば、今の海軍が多くの矛盾を含んでいたとしても。

とりあえず、今回はそんな葛藤は必要ないらしい。

賞金額七千万ベリーの海賊、『砲撃の』ハルード。

とはいえ、今回の相手は悪魔の実の能力者ではない、らしい。

原作ではポコポコ出てくるから忘れていたが、悪魔の実は希少だ。事実、思い返してみれば、白ひげの隊長クラスでも、悪魔の実を使っているのはほんの数人だった。……まあ、漫画な以上分からなくてもない。悪魔の実の方が戦闘見栄えするからなあ。

で、問題となる賞金首の前には俺がいる。

ガーブさん曰く『やってみる』、だそうだ。

さて、問題は、相手がどういう攻撃手段を使ってくるか、だが……。

というか、見れば分かるよな、大型の大砲を平然と構えているのを見れば。

確かに大柄だ。

2mを越す身長に、みっしりと筋肉のついた肉体。

そして、大砲にした所で元の世界の大砲とは比べ物にならないくらい低性能な事は理解している。砲弾が丸い時点で予測はつく。だが……それでも大砲を個人の携帯火器としているのは矢張り非常識だと思うんだ。

とか考えてる内に大砲を撃ってきた。……成る程、だから二つ名が『砲撃』か。

『紙絵』でかわす事も出来たが、それをやると船が破損してしまう。つか、それまで考えてる可能性があるな……という訳で『鉄塊』の練習がてら、やってみた。

うむ、見事にはじけたな……。

今でこそ、こうして普通に戦闘出来ているが、初めてジャングルで戦闘した時は酷いものだった。

当たり前だろう、俺は元々ごく普通の日本人だったんだ。

現代の、普通の日本人が命がけの戦闘なんて、体験してる訳がない。

実際、初めて猛獣と対面した時はすくんで体が動かなかった。俺が悪魔の実を食って、普通の攻撃が無効になっていなければ、当の昔にあの世逝きになっていただろう。

やっとの事で兎みたいな動物を狩ったが、今度はそれを殺せなかった。

つぶらな瞳でじつと見詰められていると、どうしようもなく罪悪感が浮かんできて……。

結局、殺せず逃がしてしまった。

それが、何時頃からだっただろうか……動物を殺せるようになってたのは。

殺意を向けてきたから殺す、自分が生きる為に殺す。

当たり前の話だが、出来るようになるまでには随分とかがかった。

正直、今も人間相手という事で内心は不安で一杯だ。



いや、不安とは違うか……どこかに未だ日本人としての感覚が大分鈍ってはいても残っているのだろう。

『人を傷つける事』 或いは『殺す事』

日本に描いては、それは犯罪とされていた行為。

けれど、こちらの世界では当たり前前の行為。

ましてや、相手は海賊。こちらを殺す気で攻撃してくる。

漫画ではない、ゲームでもない。

それが現実。

そして、内心で躊躇を感じながらも、体は動く。これも数年間の狩りの賜物だろう。

大砲を撃ちはなつた海賊……ハルードは恐るべき速さで次の砲弾を込め、発射してくる。その速さと来たら、単発の筈の大砲がまるで連射式に見える程だ。

しかも、その狙いは正確無比。

成る程、大砲の反動を抑え込む筋力と、大砲の扱いの技量がこいつを高額の賞金首に押し上げた原動力か。

そうは思いつつも、まだ隠し技あるんだろうなあ、と思いながら接近する。

『鉄塊』には欠点もある。

最大の欠点は使いながらの移動が出来ない、という点だ。

不可能ではない。実際、原作でもCP9のジャブラはやっていたが、同時に彼は『出来るのは自分だけ』とも言っていた。少なくとも、彼が知る範囲では他に出来る者はいなかったという事だろう。

まあ、それはそうだろう。筋肉を緊張させて、体を硬くしているのに、その状態で通常通り動ける方が普通はおかしい。

自分の場合は、幸い食らっても何とかなる。

だからこそ、思い切ってやる！

『紙絵』でかわし、瞬間の隙をついて、『剃』で接近する……だが、攻撃の瞬間矢張り躊躇してしまった。

『殴つたら、怪我をしてしまうのでは、当たり所が悪ければ死んでしまうんじゃない』

そう思ってしまったのだ。

その一瞬の躊躇が、相手の反撃を生んだ。

脇から、『お前はベルセルクのガッツか』と言いたくなるような小型の大砲を取り出し、ぶっ放してきたのだ。

まともに喰らう……それも、『鉄塊』のかかっていない状況で、だ。

当たり前のように自分の体に大穴があいた。

一瞬勝ち誇ったような相手の顔を見つつ、溜息をついて。

相手の顔が驚愕に陥る前に連撃を叩き込み、吹き飛ばした。それで終わり。もう立ち上がってくる事はなかった。

「ふむ、まだまだじゃない……とはいえ、破壊力は大したもんじゃ。後は経験じゃのう」

ガープさんの言葉に頷く。

結局、こういうものは慣れなんだろう。そして、慣れなければ、この世界では死んでいく。今のだって、相手は殺意を持って、こちらを殺す気の攻撃だった。……助かったのは、こちらの体が液体金属である水銀故に貫通していったからに他ならない。

……ちなみに、兄弟……いや、この際公開してしまうと、雌なんで妹か？ グラン・タイガーのアリス（ア繋がりで名付けた）は普通に他の海賊達を倒していた。

……いや、だってさ。あつちは別に躊躇とかしないし……俺と生  
まれたての頃から鍛錬してたお陰か、剃と月歩と紙絵使いこなすん  
だよ……最近じゃ鉄塊、俺より先に使えるようになったし……そら、  
普通の海賊じゃ太刀打ち出来んよな。

## 第5話・対海賊（後書き）

とりあえず初の人間相手の戦闘

大分、相手をどうこうする事に対する意識は数年間の狩りのお陰でマヒしてますが、矢張り、まだまだ躊躇あり

とはいえ、悪人なら殺してもOKなのがこの世界なのですよね、物騒な世界です

## 第6話・これからの事（前書き）

2万突破！来て頂いた方感謝です

さて……

うむ……今回ラストの事に関して悩んでいます

なので、アンケートというか、感想で賛否を書いていただければ、  
と思います

反対意見が多いようであれば、別の方法を考えたいと思いますので  
よろしく願います

## 第6話・これからの事

さて、マリソフォードに到着した。

到着した俺はそのまんま大将とご対面……なんて事になってしまった。

いや、あんたら。いきなりそれまでの一般人を軍の最高司令官にいきなり会わせるなんて何考えてるんだ！？って思ったが、ガープさんだから、で納得するしかない諦めた。

ガープ中将与センゴク大将は昔からの戦友だ。

ああ、この時代はまだ先代のコング元帥が健在で、センゴクさんは大将だったんだな。

『どなたに会いに行くのですか？』

『おう、ここで大将なんぞやつとるセンゴクの奴じゃ』

という会話が合った。誰に会いに行くのか聞いておいて良かった。下手したら、センゴク元帥と呼んでたかもしれない……。

本来ならば、ガープ中将も大将に昇進していてもおかしくなかった。如何に品行は問題があるとはいえ、英雄とまで呼ばれるにはそれだけの実績を積み上げてきた。大体、そんな人でなければ、息子が世界最高額の賞金首になったのに、平然と海軍軍人やっつてられる訳もないか……。

「おう、センゴク、邪魔するぞい」

「……一体なんだ、ガープ」

センゴクさんも『また何を持ち込んできやがった、こいつは』と

いう顔をしつつも、ガープ中将を追い出す様子はない。

……考えてみれば、きつともう戦友と呼べるだけの相手も殆ど互いにいないのだろう。

この世界は過酷だ。一步間違えれば、英雄と呼べるだけの実績のある人間でさえ、簡単にあの世逝き、だ。

きっとセンゴク元帥も、自分が出世しようが、変わらず友人として接してくれる、昔からの戦友の事を放っておけないんだろう。

そんな事をつらつらと考えている内に、俺の事についての説明が終わったようだ。

「ツー訳で、こやつを海軍軍人にしようと思っんで、階級やってくれ」

「……まったく、お前は……」

どこか頭痛をこらえているようなポーズだが、本気で頭痛を覚えているかは疑問だ。

こつという相手だ、というのは分かっているようだし、すぐ立ち直っているし…… 案外、ポーズとしてやってるだけかもしれないね。

「まあ、いい。で？そいつは使えるのか？」

「おう、ここに帰ってくる前に、七千万の賞金首を一对一で捕まえておったわい。ま、まだ甘さがあるから、そこら辺は今後の課題じゃな」

「ふむ……よかろう、ならば少尉の階級を与えておく。ただし、しばらくは誰かにつけて研修だ」

……いきなり少尉!?

と思ったが、一億という賞金で本部の大佐クラスが出張るとかいう話を思い出した。

また、この世界の様子からして、階級というものは相当大雑把だと思っっている。

コビーやヘルメツポとて、次に出て来た時は下士官だ。それも通常ならば、ベテランがなるような、ある意味少尉以上に我々の世界ではなるのが困難な階級。

……要は実力と上の匙加減次第なんだろうなあ、と思ってしまう。なんていい加減な所だ。まあ、だからこそ、力さえあれば、原作までに結構上まで行けるって事でもあるんだけど。

ちなみに、現在は海兵服だ。正義のコートに関しては、サイズの関係もあるので、明日支給だそうだ。

……というか、あれよあれよ、という間に決まったね！当事者の自分置いてけぼり。まあ、中將と大将の会話になんて割り込めなかったのもあるんだけどさ。

さて、『何か質問なり希望する事なりはあるか』との事だったので、部屋と当面の生活費と、それに資料室の閲覧を希望してみた。

前二つはすんなり出たし、後半に関しても、『思い出せる事がなにか、年表とか地図とかを見てみたい』と言うとあっさり許可が出た。

まあ、閲覧許可そのものは低いけど、見たいのは本当に年表とか百科事典とか、地図とかなので、問題はない。

……確認してみたが、やはりオハラは昨年起きた事件か、と思う。1年前は記されていたオハラが、今年からは綺麗さっぱり消えている。ここにある資料とて、海軍のお膝元なのと、まだほんの1年前という時間しか経ってないから、だろう。

さて、こうして資料を確認しながら、これからの方針を考えてみ



る。

まず体を鍛える事は続行だ。

幸い、これまでの鍛錬で、一通り六式も身についた、覇気も一応使えるようになった。

となれば、後はその鍛錬を継続すると共に、悪魔の実の力を使いこなせるようになっていかないといけない。

ここで、自分なりの悪魔の実に関する考えを纏めてみようと思う。

その1、悪魔の実によって生み出された力は、質量保存の法則を無視する。

これは、Mr.3のドルドルの実や、赤犬大将の『大噴火』の技から予測される事だ。

彼らの生み出す蠟の量や、マグマの量は明らかに能力者の体重を超えているが、彼らは平然とそれを生み出している。つまり、自己次第で、大量の水銀を生み出す事も可能と思われる。

その2、生み出された物質は操る事が出来る。

ドルドルの実もそうだが、ドクドクの実のマゼランも毒液で、『毒竜（ヒドラ）』なんて技を持っていた。

つまり、形状などを操って、操作する事が可能だという事だ。

……この考えが合っているとしたら、その1とあわせて、自分が考えている技が実現できそうだ。

その3、悪魔の実には『技』だけでなく『質』もある。

これは赤犬大将とエース戦から予測した事だ。

あの時、赤犬大将は自身の能力を『火の上位互換』だと言っていた。

だが、果たしてそうだろうか？

マグマの温度は、当時興味を持って調べてみたのだが、実は案外低く、800度〜1200程度。地球のコアで6000程度と推測されている。

さて、火つて、そんなぐらいいし温度上がらないだろうか？

んな訳はない。火も赤から青、白へと温度が上がっていけば、その温度はマグマをはるかに越える。実際、宇宙には万に達する温度で燃える星もある訳だし。

そう考えると、エースは能力を使いこなす為の『技』は磨いたものの、『質』を上げる事は怠っていたのではなからうか、と推測出来る……とはいえ、これは責めるのは酷だろう。

普通の火でも十分攻撃力ある訳だし……赤犬大将と遭遇するまではアレで十分過ぎる威力があっただろうから、だ。

でも、『質』を上げてれば、返り討ちにあつたのは赤犬大将だったかもしれない、んだ。とはいえ、エースは海賊だからなあ……自分とはこのままいったら、敵対するんだよね。

その4、覇気もまた同じ。

覇気使いである白ひげ海賊団の隊長クラスに赤犬大将が攻撃された時、『厄介じゃのう』と言いつつも、首筋を斬られても平然としていた。

これから推測されるのは、覇気もまた量と質、それに元々の攻撃力が影響してくるんだろう。

その5、毒などは普通に効く

これは言うまでもないだろう、ドクドクの実が実例だ。

さて、これらを踏まえて、考えている事がある。すなわち。

……矢張り赤犬大将ことサカズキには退場してもらった方がいいだろう、という事だ。

彼は悪人ではない。むしろ正義の権化だが、自身を『正義』と断定する者程、実際は却って残酷に、容赦ない殺戮が出来る。我々の世界で自爆テロなんてやらかす人達だって、『自分達は極悪人である！』なんて思って、やってる訳はないだろう。

きつと彼らだって、『自分達は正義だ』『自分達は神の御意志に沿った行動を行っている』と思ってるのだろう。

無論、見方変われば、正義もまた変わるんだけど……。

実際、彼は昨年、オハラに描いて、『政府の命に反した反逆者（考古学者）が乗っている（かもしれない）』という理由で民間人の避難船を容赦なく撃沈した。そこまで疑うなら、どこかの島に降ろす前に検査すれば……いや、それでも万が一、を考えたんだろう。

ただ、漫画でサカズキ大将の部下のみならず、クザン中將も『やりすぎ』だと引いていたように、サカズキ大将はとにかく、容赦がないのだ……原作時も大して性格が変わってたように見えないから、きつとこれから二十年近くの間も大勢を殺していくのだろう。そして、その中には海賊や反政府組織だけじゃなく、間違いなく巻き込まれた民間人も混ざっているのだろう。

エースを殺す相手だから、じゃない。どうにも好きになれないからだ。

とはいえ、どうするか。

……いや、方法はある。

毒物が効くなら……そう、水銀もまた毒物だ。

だが、果たしてそれは許されるのだろうか？

公害という水銀の毒がもたらした歴史を持つ日本人として……やってもいいのか。

元の世界で原因説明までに長い時間がかかったように、この世界でも同じ事が起きるだろう……ましてや、赤犬大将だけ体調不良となつたとしたら、分かる訳がない。

自然と最前線に立てる体ではない、となり、引退へと追い込まれ

る事だろっ……。

だが……。

これは毒ガスなんかと同じく、最悪の禁じ手なんじゃ……そう思うと……どうしても迷いが出てしまう。

これに関しては容易に結論が出そうになかった。

……ガープがつれてきた新人が部屋を去った後で、当人に確認する。

「ところで、奴は大丈夫なのか？」

「あゝまあ、まだ何かありそうじゃが、悪人ではない。まあ、大丈夫じゃろっ」

「何故そう判断した？」

「儂の勘じゃ……！」

「……」

センゴク大将は頭を抑えた。こいつの勘は恐ろしい程よく当たるからな……真面目に調査してる方としては時折バカらしくなる事がある。まあ、奴がそこまで言うならば、海軍全体の不利益になるよ  
うな真似はするまい……。

## 第6話・これからの事（後書き）

えー、前書きでも書いた通り、考えている事は正直、自分でも悩んでいます

念の為に書きますと、水銀が原因で引き起こされた公害、すなわち水俣病を1人を対象として人為的に引き起こす、って事だからですばれる事なく、確実性は高いんですが……矢張り、倫理的に、ねえ？

ですので、アンケート募集です

賛成か、反対かご意見求む、です。よろしく願います

反対意見が多ければ、別の方法での話へと進めたいと思っています

## 第7話・センゴクの決定（前書き）

前話でのアンケート現在も募集中！  
よろしくお願ひします！

## 第7話・センゴクの決定

『……まあ、どちらにせよ、相手は現在でもう中将だ。新米少尉と接点がある訳じゃない。すぐに結論を下さなくても大丈夫だろう』

そう結論を下して、どう介入可能か、アスラが頭を切り替えた。先送りとも言う。

その足元で、アリスがふわ、とばかりに大きなあくびをした。

そして、アスラがそんな事を考えている正にその頃。センゴク大将は既に動いていた。

ガープ中将相手にはああ言ったが、この新人は期待出来るとふんだのだ。

悪魔の実の能力者であり、六式使いであり、覇気使いでもある。環境が環境故に、修行しかする事がなかった、その結果として、基礎はがっちりと組みあがっている。

これだけ揃えば、期待しない方がおかしい。

まず、少尉の階級に関してはすんなり承認が出た。

実の所、海軍としては急速に悪化する海の治安維持の為に、有能な人材は喉から手が出る程欲しい状態が続いている。

3年前の海賊王ゴールド・ロジャーの処刑。

だが、本来海賊時代の終焉を告げる筈の、それはロジャーの死に際の一言で、逆に海賊時代の幕開けを招いてしまった。

『俺の財宝か？欲しけりやくれてやる。探せ！この世の全てをそこに置いてきた！』

ひとつなぎの大秘宝　ワンピースと呼ばれる、それを求めて大勢の海賊達が海原へと漕ぎ出した。

## 大海賊時代

巷では、そんな呼び方すら広がりつつあるぐらい、海賊達は一気に増えた。

酷い例では、海軍から離反して、財宝探しに飛び出した連中までいる。

実の所、ロジャーの財宝が何かは海軍上層部は理解している。それだけに……それを誰かの手に渡す訳にはいかない。情報操作によって、財宝は幻、そんな方向に持っていく事も検討されているが、それには時間がかかる。

当座は人員を増やし、海賊を取り締まっていくしかないのだ。

海賊王ゴールド・ロジャーは死んだが、海賊提督こと金獅子のシキは昨年収監されていたインペルダウンから脱走した。インペルダウン初の失態であり、この事は嚴重に秘されているが、ある意味一隻のクルーだけで構成されていたロジャー海賊団よりも危険視され、現在も搜索が続けられている。

また、シキが脱獄後、ぷつぷつりと消息を絶った現在、最大の大物は白ひげエドワード・ニューゲート。

グラグラの実際の地震人間であり、同時に幾つもの海賊を傘下に収める大海賊だ。

この他にもピンキリというか、まだ白ひげのような良識ある海賊はともかく、質の悪い海賊も多数発生している。こうした質の低い海賊はワンピースを目指すのではなく、ただ単に自分達の欲望を満たすべく行動するから余計に性質が悪い事になる。

さて、そんな時代故に海軍は繰り返すようだが、有能な人材を求めており、それ故に鍛え方もなかなかハードだった。



「さて、これで正式に海兵となるのは決まったが、どうするか」

センゴクは少し考える。

七千万を一蹴したのだ。そんなじよそこらの海賊相手なら引けを取るまい。そういう意味では最初からグランドラインを担当する軍艦に配属して問題はあるまい。

その一方で、ガープからの話が気になる。

彼の話を総合すると、おそらく、あのアスラという人物はまだ、人を殺した事がないのだろう。

それは、民間人としてならば良い話だ。

だが、海軍としては、それでは駄目なのだ。

「……荒療治となるが、奴に預けてみるか」

そう呟くと、センゴクは電伝虫を使い、連絡を取る。

『これはこれは、一体何用ですかのう』

すぐに連絡は繋がった。

向こうとしても、急に大将であるセンゴクが連絡してきた事で少し驚いているようだ。

「すまんが、そちらで1人預かってもらいたい」

そう告げ、アスラについて説明する。

ガープ中將が立ち寄った無人島で救出した事。

その島で何年も1人で暮らしていた事。

島にいる前の記憶がない事。

CPを脱走した人間が残した資料を元に生き延び、修行をしてい

た事。

悪魔の実の能力者である事。

六式使いである事。

覇気使いである事。

最初はわざわざ大将が、1人の少尉の事について電話してきた事に疑問を感じていた様子だったが、全てを語る頃には、電伝虫の向こうの相手も面白そうな口調となっていた。

『成る程、そいつは見えそうですね』

実際、悪魔の実、六式使い、覇気使い、そのいずれか一つであっても、普通の海兵と比べ、遙かに期待が持てるのだ。

「ああ、だが、まだ戦った事はあっても、相手を傷つける、殺すという行為については躊躇いがあるようだ。いや、これまで民間人だったと考えるならば、むしろ良い話なのだが、これから海軍で海賊達との戦いを繰り返していくとなると、それではいかんだ」

『確かにそうですね。それで、儂に預けよう？』

「ああ」

『死ぬかもしれませんが？』

「奴の食った悪魔の実は、メタメタの実、モデル水銀。こと防衛に措いては自然系にも匹敵すると謳われる悪魔の実だ。そうそう死ぬ事もあるまい」

『成る程……了解しました。このサカズキ、責任持ってそいつを

鍛え上げてさしあげましょう』

……アスラが知らないところで、未来の赤犬大将、現サカズキ中将に預けられる事が既に決定してしまっていた。

「……とりあえず、既にトムズ・ワーカーの海列車開発は進んでると……全線開通と司法船が向うのは何時だったか……」

アスラはと言えば、そんな事を知る由もなく、自分の目的である介入をどう行っていくかを考えていた。

トムズ・ワーカーに関してはまだ最低七年以上あるから、それまでに……ナミの故郷に関しては、ジンベエの七武海入りがアールンが出て行くきつかけだから、その時期を……という具合にだ。

ルフィの成長は妨害する事になるかもしれないが……だからといって、見過ごせる程人間出来てない、というか、そのまんま何もせずにいたら、この世界に来た意味がない。

「……シャンクスに関しては諦めざるをえないよな。何時フィッシュ村に来るか正確な日時なんて分からないし、あ、でもそうするとアールンがココヤシ村に何時行くかも正確な日取りがわからないか……ネズミ大佐が何時あそこに配属になるかとかその辺から分からないかな……」

計画は更に武器に関しても及ぶ。

「……一応武器は自分の能力で生成出来るけど、矢張り大業物とか手に入ったら、ほしいよなあ……あ、でも手に入ったら、きちんと武器の扱い方も練習しないとイケないけど、そうなるのであればこれをもってな……」。

でも、原作見る限り、海楼石って加工が難しそうだから、覇気使  
って武器強化出来るようにしないと……でないと海楼石での銃弾と  
か普通に作られてるだろうしなあ……ないどころか、スモーカーの  
十手にしたって結構歪だったし……偶然そという形になったのを使  
ってるだけって可能性もあるよな……」

翌日、自身がサカズキ中将に預けられる事が決定した事を伝えら  
れて、内心でムンクの「叫び」の如き気持ちになる事など知りもせ  
ず、悩み続けたアスラの計画は、結局、ご飯時なのに悩み続けるア  
スラに痺れを切らしたアリスに甘噛みされて食堂へ連れて行かれる  
まで続くことになる

## 第7話・センゴクの決定（後書き）

とりあえず、明日のGW中は何とかもう1話あげたいですね…

その後は仕事が始まるんで、3日〜1週間に1話ペースになるかも

…

## 第8話・苦い経験（前書き）

アンケート感謝です

矢張り、水銀による『故意』の傷害に関しては反対意見が多いようですので、『故意』による水銀使用はやめておきます

## 第8話 - 苦い経験

アスラです。

サカズキ大将の下に配属されました。

その際、コートを支給されたんですが、これってマントみたいな構造になって……というか、まんまマントとしても使えるようになっていました。成る程、だから漫画の海兵らは皆コートをきちんとして着ずに羽織っていて、しかもずり落ちなかったのか。

など関係ない事を考えているのは、多少現実逃避気味なのもあるだろう。

何て言うかね？

サカズキ大将があれだけ同僚にも問題視されるような行動を起こしておきながら、それでも大将へと昇進出来た理由がわかったような気がします。

黄猿大将はどうにも掴み所がないけれど、少なくとも青雉大将はまともな理性があった。

センゴク元帥も少なくとも恥だからと、LEVEL6からの大量脱走を隠そうとする世界政府に対して激怒するだけの……そう、言うなれば、『手段を問わず、恥を隠さず、平和に暮らす人々の生活を守る』という意志が見えた。

では、何故、そんな人達の中で、サカズキ中将が大将へ昇進出来たのか。

その答えが眼前で展開されています。

激烈な戦闘。

サカズキ大将……じゃない、中将の軍艦はとにかく戦闘が多い。

しかも、戦果が多だ。成る程、本人の実力と、他を上回る高い成績を持って、大将へと昇進した訳か……。

何しろ、サカズキ中将の船では兵士も必死だ。

なにしろ、戦闘によって、逃げたら原作の白ひげ戦でも出ていたが、『臆病で逃げたなんぞという不名誉を受けるくらいなら』とかいう理由で殺されていたが、別段それは自身の指揮する船でも変わらない。

つまりは恐怖で支配してるんですよ！この人。

原作だと、金棒のアルビダ、元の世界でなら旧ソ連の政治委員…

…いや、スターリンとかの方が近いだろうか。

まあ、こっちは自分も最前線で戦ってるけど。

成る程、これならそりゃあ戦果も上がるというものだ。

そして、海軍としては、きつちりと他を越える戦果を上げている以上、サカズキ大将の…じゃない、中将のやり方に文句を言うつもりはない、という訳だ……。

目の前の海賊三人を体から飛び出した水銀の槍で串刺しにしながら、自分はここに初めて来た時の事を思い出していた。

着任すれば、その船の責任者、ここではサカズキ中将に挨拶に行く事になったのは当然だろう。

普通は一介の少尉なんぞ、挨拶して、ろくに視線も向けられず他に気を取られながらの返事を受け、退出……なんてのだったってアリだと思っただけだが、今、自分は一対一で睨まれてます。いえ、ご当人は普通に見てるんでしょうけれど。

「……お前がアスラ少尉か」

「はい！よろしくお願い致します、サカズキ中将閣下！」

一応仕込まれた敬礼で挨拶を返す。

敬礼するのは元々、いちいち複雑な礼儀を覚えなくても軍隊での



挨拶全て、これ一つで簡略化させる為なのがそもそも目的なだけあって、とにかく、こいつを覚えて相手の階級と名前間違えなければ、何とかなる。

「ああ、いい。楽にせい」

「はっ!」

と言つても、勝手に椅子に座つたりはしない。あくまでやすめの姿勢だ。

この辺は前世のサラリーマン時代の記憶が役に立つ。

『ああ、楽にしてください』と言われて、取引先の前でだらしない格好を見せる訳にはいかない……よく考えれば、社会人としては当たり前のような気もするが。

「とりあえず、お前は悪魔の实の能力者だそうだな……獲物を仕留める事は出来るのか?」

「はっ? あ、はい、それは可能ですが。島では狩りや身を守る為に能力を使つておりましたので」

いきなり悪魔の实の質問か……とはいえ、どんな能力か聞いてくるのかと思いきや、獲物を狩るのに使えたかどうか? 一体何を考え、てそんな質問をしてきたのだろうか。

もっとも、その答えをアスラはすぐ知る事になったのだが。

「よかるつ、ついてこい」

そう告げ、サカズキ中將は部屋を出てゆく。

一体何かと思いつつ、その後について部屋を出る。

甲板へと上がったそこには海兵らが待っていた。全員がサカズキ中將の姿に緊張を隠せないでいる。

そのサカズキ中將が合図をすると、彼らの間から、5人の……おそらく、格好や容貌からして海賊なのだろう。そいつらが縛られた状態で俺達の前に放り出された。

猿轡はされていないので、彼らは中將に卑屈に笑って命乞いをしているが、サカズキ中將はその嘆願にもそよ、とも反応を見せない。どころか、平然とした、或いは当たり前のように言った。

「アスラ少尉、こいつらをお前の能力で殺せ」

……一体何を言われたのだろうか。

瞬間、頭が理解する事を拒んだ。

俺が呆けている間に、サカズキ中將は平然と告げる。

「こいつらは町を襲い、そこに住む人々を多数殺害した連中だ。死刑は確定している。アスラ少尉はまだ誰かを殺した経験はないぞうだな。民間人だったという事だから、それは大変結構な事だ。だが、海兵となるならば、ここでこいつらを殺せ。お前自身がこれから生き残る為にな！」

のろり、と彼らに視線を向ける。

彼らは絶望に満ちた表情で、俺に命乞いの叫びと必死の懇願を込めた視線を向けてくる。

成る程、さつき獲物を狩れるか聞いたのはこの為か。確かに悪魔の実の能力で、猛獣とかでもしとめられるなら、人間相手の攻撃力としてはお釣りがくる。

しかし……。

この無抵抗な状態の彼らを、5人を殺す、のか？自分が？

周囲の海兵らに思わず視線を向けてしまう。

幾人かはサカズキ中将同様の厳しい視線を向けてきていたが、殆どの兵士は気の毒そうな視線を向けてきた。けれど、誰からもサカズキ中将にとりなしの言葉を発する者はいない。

そして、サカズキ中将はといえば、仁王立ちでこちらを睨むように見詰めている。

……どうやら、やるしかない、らしい。  
だが……。

改めて、拘束された5人を見る。

そうして、今度はサカズキ中将を見る。

……現実是不変ならない。

背中に冷たい汗が出てくる。

「命令だ、やれ」

震えながら、彼らに手を向ける。

それだけで、恐怖に駆られたのだろう、5人が必死に後ずさって逃げようとする……逃げ場などどこにもないのに。それでも、生存本能が後押しするのか、逃げようともがく。

その姿に躊躇する俺を後押しするかのよう。

「やれ！」

サカズキ中将の声が周囲を震わせるかの如き大音声で響き。

気付けば、自分の手から伸びた銀の槍が、彼らの1人を貫いていた。

「どうした。まだあと4人おるぞ。きちんと目を逸らさず、相手を見て仕留めるんじや。そいつらを殺すのはお前じゃとしかと認識して相手を殺せ」

そうして、俺は5人を、自らの悪魔の実で殺した。  
その夜、初めて人を殺した事で眠れなかった俺をサカズキ中将は  
自室に呼んで、酒を出してくれた。

確かに、それは有難かった。

確かに、あれは必要だったのかもしれない。何時かは自分は人を  
殺さなければならなかっただろう。この世界では……。

あれは必要な事なのだと、海賊は滅ぼさないといけないのだと語  
るサカズキ中将に、だけど、俺はどうしても感謝の念を持つ事は出  
来なかった。

理解はしよう、けれど、納得は出来なかった。

そうして、あれからどれだけの日々が過ぎたのか。

サカズキ中将と共に先陣を切る事の多くなった俺は、必然的に殺  
した数も増えた。

自然系悪魔の実の能力者であるサカズキ中将、防御に関しては自  
然系並と謳われる超人系悪魔の実の能力者である俺の2人が最前線  
に立てば、海兵の被害は大きく減らす事が出来る。

加えて、俺自身の能力の制御も、サカズキ中将という悪魔の実の  
中でもマグマという、不定形の物質を操る点では俺と同じ経験豊富  
な能力者の指導と実戦によって急速に磨かれていった。

幾つかの考えていた技も可能になってきた。

そうして、現在、また新たな海賊を潰すべく戦闘に突入している。  
自身の背後に伸びる九本の尾にも見える水銀の塊が蠢き、或いは  
味方へと向けられた銃撃を防ぎ、或いは海賊を取り込み、或いは砲  
弾を防ぐ、これが俺の考えていた能力の一つ、『九尾』だ。

当初は『ヤマタノオロチ』なんてのも考えたんだが、造形を簡略  
化する事で操る本数の方を増やしてみたものだ。

海軍大尉『銀虎』のアスラ。  
それが今の俺の呼び名だった。

## 第8話・苦い経験（後書き）

さて、次回からは少し更新に間があきます

GW終わって、仕事が始まるもんで……

まあ、3日に一度ぐらいの更新ペースを考えております

更なるアンケートです

虎のアリスを、ヒトヒトの実で人化って意見がありますが、皆さんはどう思われるでしょうか？

希望者が多いようであれば、導入したいと思います

## 第9話・ある日の訓練と今後と（前書き）

前話の『銀虎』について……

既に気付いた方もいますが、原作に既に『銀ギツネのフォクシー』  
というキャラが登場してるのですよね……『九尾』って技名から分  
かる通り、当初はとうか、それがなければ、自分も主人公の二つ  
名を『銀狐』にするつもりでしたw

## 第9話・ある日の訓練と今後と

にゃ〜ん

機嫌よさそうに、アリスが遊んでいる。

BGMは海兵達の悲鳴だ。

時折、サカズキ中将の怒声が混じる。

何をやっているのか？

答えはアリスを相手とした、海兵の訓練である。ちなみに、現在は休息と真水などの補給を兼ねて、島へと上陸中だ。

アリスは虎であるが、現在では五式使いとなっている。

使えるのは、剃・月歩・鉄塊・紙絵・嵐脚。指銃だけは、鉄塊との複合技だったからか、取得出来なかった。する必要がなかったとも言っただが。

その答えが今、目の前にある。

模擬弾とはいえ、軽々と弾き返してじゃれつくアリスの姿が……そう、あの子ときたら、俺でもまだ出来ない鉄塊をかけた状態で動き回るといふ真似を平然とやっているのだ。……ジャブラが未来に措いて知ったら、どう思うのかな……。

元より、アリスは今家庭を持って島に残った兄弟より、好奇心旺盛で甘えん坊だった。

今はもう傍にいない、もう一匹が本来の猫らしい気質、小さい頃はさすがに傍にいたが、ある程度大きくなって狩りが出来るようになる、ふらつと出て、時には獲物を持って帰るようになっていったのに対して、アリスは自分の後についてきたがった。

とはいえ、まさか、子猫サイズの頃からついてきたい一心で、剃を覚えるとは思っていなかったのだが。



子猫サイズの頃からついてきたがるせいで、剃による移動で置いてきていたのだが、ある日自分の横を負けない速さで走ってるアリスを見つけた時は、思わずすっころげて、水銀を辺りにぶちまけてしまったものだった。

しょうがないので、今度は天窓から月歩で抜け出すようにしたら、やっぱりしばらくしたら、同じく月歩で追いかけてきた。

その後は諦めて、一緒にアリスとは出かけるようになった。下手に追ってこないように閉じ込めたりしたら、壁なりぶち破りかねなかったからだ。

……アリスは天才なんだろう、それこそ自分なんぞより遙かに。

自分はする事がなかったから、遺されていた資料、要は教科書を元にひたすら練習に練習を重ねて、修得した。

アリスは、好奇心から自分の行動を見て、真似をして、それだけで修得した。しかも、文字なんぞ読めないのに、だ。

鉄塊も自分より早く修得した。

ジャブラの鉄塊拳法と同じ事を今日の前でやらかしてるが、同じ事を未だ自分は出来ない。

嵐脚は……ああ、楽しそうに前脚振って、真空の刃を生み出している。

ぎゃああああああああああ……

ああ、海兵さん達、ご苦労さん……

とりあえず、当たると危ない奴だけ地を這うように伸ばした『九尾』で止めておく。これはあくまで訓練であって、殺し合いではないからだ……。

みゃあみゃあ

うっぎゃあああああああああ！

……うん、きつとアリスはそう思ってるぞ。

悲鳴？そんなの聞こえない。

まあ……多少複雑な気持ちがないと言えば嘘になるけれど、けれどもアリスは大切な家族だ。あの子が生きていける助けとなる力を得られたなら、まあ、いい事だ。

さて、少し俺の現状を説明しておこう。

現在、俺は大尉だ。

この艦に措ける立ち位置としては、サカズキ中将、艦長兼任の高級副官でもある大佐、形としては大佐付きのいわば、副官の副官の地位にあるのが俺だ。まあ、実際にはサカズキ中将のもう一人の副官としての面の方が強いんだけど。どうしても、一隻の船だからねえ、大佐とはいえ、中将の副官としての面が強くなるんですよ。

この大佐だが、戦闘の実力以上に各種の書類仕事とかその辺が得意だ。

まあ、自分の元の世界の大佐と違って、この世界では戦闘力もないと昇進が認められないから、この人も結構強いんだが、中将が最前線に立ってしまつので、必然的に後方で指揮官をやる事になる人でもある。

ついでに言うなら、組織のマネジメントや海軍に措ける書類処理のやり方の、俺の先生でもある。

サカズキ中将が言うには、…まあ、順調に全てがいった場合の話だが、今後更に1年から2年程をかけて、大佐まで昇進したら、どこぞの支部を切り盛りさせるなり、軍艦を預けるなりして経験を積み、更に1年から2年で将官への昇進という方針だそうだ。

……っていうか、早過ぎないか？

そう思って聞いたら、それだけ期待されてるのもあるが、使える人材に関してはとつと上に来てもらわんと困る、という切実な問題もあるらしい。

グランドラインの海兵は他の海の海兵と比べて2階級は上クラスの実力というが、逆に言えば、それだけ地方のレベルが低い、という事でもある。

まあ、それは原作のココヤシ村でアーロンと結託していたネズミ大佐を見れば分かるだろう。

ヒナ大佐やスモーカー大佐（当時）らは、ルフィを相手にしても、互角以上の戦いぶり……というかむしろ圧倒する程の実力を見せた。まあ、当時のルフィがまだまだ未熟だったとか、ヒナ大佐の時は直接戦闘ではなく艦船による戦闘というのもあったのだろうが。

逆にネズミ大佐はルフィに一蹴され、彼が出来たのは自分が賄賂を受け取っていた事を隠して、ルフィを賞金首とする事だけだった。

『斧手』のモーガンは島を恐怖で支配していた。

それも、サカズキ中将のとは違い、自らの私利私欲の為に、だ。

まあ、何が言いたいかというと、そういう人材でも使えそうなら、或いはモーガンがキャプテン・クロを捕らえた（と催眠術で思い込ませられていた訳だが）ように功績を立てたなら昇進させて一つの支部を預けざるをえない、本当に優秀な人材はグランドラインに集中させて、やっとな必要な量を確保している、というのが海軍の現状だ。そうした、質の悪い人材が結果的に海軍への不信感を増大させる事があると分かっている、それでもそれしか方法がない。

まあ、20年経っても、それが改善されてない事を知っている訳だが、海軍本部としては何とかしようという努力はしてる、という事だ。

さて……どうやら、アリスの訓練、という名の当人にとっては遊びが終わったようだ。

アリス自身は満足げな様子で、こっちに駆け寄ってきて、甘えた

ように俺に顔をすりつけてくる。相変わらぬの甘えん坊だなあ、と思いつつ、ほんわかした気持ちでこっちも撫でてやると、ごろごろと気持ちよさそうに鳴き声をあげる。

向こうでは、まあ、結局アリスに全滅判定を喰らった海兵達がサカズキ中将の怒声を食らっている訳だが。

さて……次は俺だ。

この1年余り、俺はサカズキ中将からスパルタで悪魔の実の制御訓練を実施させられてきた。まあ、お陰で1年できっちり、少なくとも自分の考えていた形が一応制御出来るようになったのだから文句を言う筋合いではない。

だが、それ故に未だ本気でサカズキ中将と戦った事はなかった。

……これから、その互いの能力をフルに使った勝負が行われる。

正直、勝てないだろうが、やるだけやってみよう……この時はそう思っていた。まさか、サカズキ中将を時間をかけて説得して、性格矯正を図っていくしかないだろうか、さすがに故意に病気にするのは拙いから……そう思うようになった後で、あんな事になるとは、この時点では予想だにしていなかった。

第9話・ある日の訓練と今後と（後書き）

今回は赤犬大将と主人公の訓練、という名のガチバトル  
今話ラストの意味は……次回にて

第10話 - 激突(前書き)

## 第10話 - 激突

サカズキ中将VSアスラ大尉。

とはいえ、同じ海兵同士。互いに本気でやりあって怪我をした所で喜ぶのは反世界政府組織か海賊達だけだ。

それに加えて、確かにアスラが強いとはいえ、中将と大尉では（少なくともこの世界では）実力に差がありすぎる。サカズキ中将が自然系悪魔の実の能力者に対して、アスラ大尉は超人系悪魔の実の能力者という差もある。

別に超人系が弱いという訳ではない。

ただ、矢張り耐久力という面とか攻撃の無効化という面では矢張り自然系の方が強いだけの話だ。

なので、今回の試合はアスラがサカズキ中将にまともに一撃を与えるまで、という事になっている。

何とも中途半端というか、不完全燃焼っぽいのが、霸気やらフルに使って、互いが本気でやったら、島も当人達も、えらい事になるのが分かってるので、さすがに誰も何も言わない。

そうして、互いが距離を置いて……試合は始まった。

如何に本気ではない、というか広範囲へ影響を与えるような攻撃は考慮するとはいえ、この2人の戦闘は近くで見ると冗談抜きで命の危険に晒されるので、海兵らは全員軍艦に戻り、試合開始は軍艦の大砲による空砲だ。

どろり、と。

試合開始直後に、双方の体が一部崩れる、或いは体から液体が噴出す。

こぼこぼと煮え滾る溶岩が。

銀色に輝く液体金属が。

或いは片腕を灼熱に輝かせ、或いはその光背に巨大な九本の尾を生み出す。

更にアスラは自らの両腕を銀で包まれた大きめの鉤爪のような手で包み込む。

これが命がけの試合ならば、互いの隙を窺い、駆け引きを繰り広げる所だが、これは試合だ。どちらともなく、無造作に踏み込み、互いの拳が激突した。

さて、水銀の沸点は摂氏356・73度である。

一方これに対して、マグマの温度はおおよそ800度から1200度程度。

結果、ぶつかりあえばどういいう事が起きるかというところ。

ぶしゅつしゅつしゅつしゅつ

双方の一撃がぶつかりあった瞬間、凄まじい白煙が上がった。

瞬時に沸騰した水銀が蒸発しているのだ。

もつとも、アスラとて自らの水銀がサカズキ中将のマグマと激突した時、こうなる事は理解していた。

だからこそ、両腕に事前に多めに水銀を纏わせておいたのだから。熱した鉄板に水を垂らした時、少量ならば瞬時に蒸発して何も残らないが、蒸発する以上に大量に流し込めば蒸発よりも供給の方が上回るのと同じ理屈だ。

ゴムに斬撃、バラバラに打撃、雷にゴム、砂に液体というように悪魔の実それぞれには固有の弱点とでも言うべきものがある。それが何かはアスラ自身も色々と確認してきた。その結果、水銀が無効化出来ない弱点に相当するのは電気だと分かっている。これだけは金属の性質上、防ぎようがない。

とはいえ、高熱も余り相性はよろしくない。だが、蒸発以上の量



をもってすれば、対抗可能だと思っていたのだ。だからこそ。

周囲には当然のように大量の白煙が巻き起こり……。瞬間気付いて、血の気が引いた。

さて、水銀は猛毒だ。その事は理解出来ている。

だが、全ての水銀が同じように危険かという点少々違う。

例えば、ジメチル水銀は最も強力な神経毒であり、おまけに普通のゴム手袋なぞ貫通する。元の世界では、ラテックス手袋の上に数滴こぼしただけで、死に至ったという例がある程だ。

反面、金属水銀ならば、比較的吸収される事なく、飲んだとしても体の中を通過する事も、ある。無論程度問題であり、嘗て始皇帝は不死の妙薬として水銀を飲んでいた事が死に繋がったといわれる。さて、何が言いたいかというと、水銀蒸気というのは極めて毒性が強い、という事だ。他の経路に比べ、蒸気は肺から容易に取り込まれ、その強い毒性は脳に障害を与え、最終的には死に至る。実際、奈良の大仏では、金の溶け込んだアマルガムを塗って、加熱により水銀を蒸散させるというメッキ方法だった為に職人に多数の水銀中毒による死者が出たと言われている。

そして、目の前では猛烈な勢いで、水銀が蒸発している。

「さ、サカズキ中将！少し待った！」

それ故に思わず、アスラは叫んでいた。

赤犬大将は余り好きなキャラではない、というのはあった。だが、今彼は漫画の登場人物などではなく、1人の人間として自らの前にいる。1年余り、自らの師としても悪魔の実の（流動性の物質を操る者同士として）使い方を教わってきた。

……嘗て漫画の中で好きじゃなかった、というだけで『こいつなら死んでもいいや』と思える程、アスラは人間を捨てていなかった。だが。

返答はサカズキ中将の豪腕だった。

「中将!？」

「……………」

「中将! 大事な事なんで「やかましいわ!」!？」

尚も叫ぼうとするアスラだったが、帰ってきたのはサカズキ中将の怒鳴り声だった。

「貴様、今は真剣に戦っている最中であろうが! その戦いの最中に『少し待って』なぞ何を考えておるかっ!」

「し、しかし…………っ!？」

それでも、事が命に関わる事故に尚も言葉を続けようとしたアスラの口元に問答無用とばかりに煮え滾った豪腕が叩き込まれる。その一撃で顔の下半分から首の半ば以上が蒸発、吹き飛び、そして再生する。

それは、これ以上ベラベラと話すつもりはない、というサカズキ中将の意志表示でもあった。

おそらく、これ以上語った所で、サカズキ中将は耳を貸してはくれまい。

それどころか、これ以上下手に言えば、試合が終わった後も激怒して、話を聞いてくれない危険すらある。

それなりの付き合いがあるだけに、アスラにはそれが分かった。だから。

無言で戦闘態勢へと再び戻る。

少しでも早く、試合にケリをつける。

だが、焦ってはならない。

相手は自分より格上の相手。そんな相手に焦れば、待っているのは確実な敗北、いやこの場合は、決着のつかないまま延々と続く現状、という所か。

戦闘は激化していた。

少々怒ったサカズキ中将、迅速に自らの全力でもって試合にケリをつけたいアスラ大尉。

双方の思惑の結果として、試合は覇気こそ使っていないものの、悪魔の実の能力をフル活用した激しいものになっていた。軍艦で見えていた海兵達は目前で先程まで自分達が訓練に使っていた島が地形を変えていくのを呆然とした様子で見詰めていた。

『九尾』の尾の1本がそれまでの狐の尻尾のようなふわり、とした見た目を瞬時に極薄の刃と変じて横に薙ぎ払う。

トン、と飛び上がったサカズキ中将の下を通り過ぎるそれが、森の木々を数十mに渡って切り払ってゆく。

空中に浮いたサカズキ中将へ何時の間にか上空へと伸ばされていた3本の尾からまるで雨のように銀の槍が降り注ぐ。

「火山弾！」

その声と共に肩口がまるで噴火口のように盛り上がり、そこから無数の灼熱の弾丸が吐き出され、槍ではなく、大元の尾を穴だらけにして、槍の勢いを削ぐ。

軽く言っているが、流れ弾となった火山弾の幾つかが或いは山を直撃して山肌を吹き飛ばし、或いは森に火事を引き起こし、しかし、火事は次の瞬間には雪崩のように襲い掛かった水銀に飲み込まれ消

火される。かと思えば、その膨大な水銀は次の瞬間には伸びてきた尾へと分散して吸い込まれ、先程スタスタにされた尾も一瞬で再生されてしまう。

この一連の攻防だけで、半径100m余りの空間はボロボロの、どこの月のクレーターだ、というような惨状を示している。

この光景を軍艦から見ていた海兵らはつくづく思った。

巻き込まれたら死ぬな

しかも、これでまだ、彼らの戦闘は互いに手加減中なのだ。

いや、アスラ大尉はどうか分からないが、少なくともサカズキ中将が本気を出したら、これを越える惨状が展開する事になる。

ちなみにアスラは水銀を切り離しての飛び道具とはしない。無論、理由は水銀の毒性を考えての事だ。現在の彼はまだ切り離れた水銀のコントロールが出来ない、という事もある。

それが出来れば、大分戦闘の幅が広がるので、水銀の化合物の生成共々鍛錬中だ。

短時間ではあるが、当然水銀蒸気もふんだんに発生している。

それ故に、アスラは内心の焦りは次第に増幅しつつあった。

水銀の中毒は、その症状の幾つかは摂取さえ止まれば、改善の余地がある。だが、重度の被爆となれば最早手遅れだ。そして、単純な能力の衝突同士では、きりが無い、そう思わせる状況にあった。なら。

「む？」

サカズキ中将は疑念の声を上げた。

最初こそ何やらいきなり戦闘の中「ちょっと待った」などと言い出したアスラだったが、その後はその戦闘能力をフルに活用し、激

闘を繰り広げている。

無論、サカズキからすれば、まだまだ改善の余地はあるが。

九本の尾から繰り出す連続攻撃を突如やめ、正面で構えを取ったからだ。

まだ距離は50mはある。

遠距離攻撃か？いや、それならこれまで同様九尾の応用技で十分な筈。あれこれと手を伸ばすよりは、少数に絞った幾つかの技を磨いた方がいい筈だ。自身の『大噴火』のように巨大な拳を飛ばすよりは『九尾』で十分。

これが本当の命をかけた勝負ならば、ここで追撃をかけるなりすべきだろうが、これは弟子の様子を見る試合だ。何かしよう、というならば黙って、成果を見てやるうではないか。

そう思い、腕組みをして待ち構える。

辺りは水銀の蒸気で濃い霧に包まれたような状況になっている。

『この蒸気の制御が可能になれば、これらで視界を遮り、当人だけ視界を確保するという事も可能かもしれない』

そう思った次の瞬間。

「白銀街道」

その声が聞こえたと思った瞬間。

アスラはサカズキ中将の内懐に飛び込んできていた。

さすがに驚愕したサカズキ中将の目に先程までアスラが立っていた位置から自身へと真っ直ぐ伸びる銀の道が見える。

『そうか……目に見えん程薄く伸ばした水銀を一気に道として、そこを伝って移動したか』

おそらく先に見えていた体は人形。

この蒸気の霧が立ち込めていなければ、不自然さに気付いたであろう造形だったのかもしれないが、本体は自然系の如く薄く伸ばして少しずつ近づけていたのだろう。

自然系の破壊力すら上回る広域破壊能力を持つグラグラの実があるように、超人系にはこうした得意分野では自然系すら上回る部分がある。

そうして、ここまで飛び込まれば。

「拳砲！」

空気を切り裂く瞬間さえ感じさせずに、アスラの正拳突きが放たれた。

そう、斬られた事さえ空気が感じなかったかのように、放たれ、サカズキに吸い込まれた後になって、空気が動いた。  
毎日かかさず一万本。

日課と化した、ひたすらに努力によって積み上げた拳。

こればかりはサカズキとて、敵う気がしない。まともに喰らい、衝撃で吹き飛ぶ。まあ、ダメージは霸气は込められていないから、そう大した事はないが……いや、霸气なしで尚自身に衝撃を届かせる一撃、というのは桁が違う。

「ふむ……見事だ。よかろう、合格としよう」

そうして、この一撃で試合は終わった。

『白銀街道』は自身の切り札として、アスラが開発していた技だったが、まだまだ未完の技だった。

理由は単純で、発動に時間がかかりすぎる。

今回のように、視界が悪く、相手が待っていてくれないと決める

事が出来ない。

水銀を相手まで伸ばすにしても、普通に伸ばせば一目瞭然だから、見えないぐらいに薄くしたら、ゆっくり伸ばすしか出来ない。

この辺りが最大の改善事項だ。

戦闘終結後、水銀中毒の危険をサカズキ中将に訴えたが、逆に拳を喰らった。

『そのぐらいで戦闘を中断しようとしたのかあ！』と。

だがまあ、水銀蒸気の中、あれだけ動いたのに、元気そうであつたと少しほつとしたアスラであつた。

……

「ぐ……」

部屋へ戻り、サカズキ中将はずしり、と体を椅子に沈めた。

ぐらり、と視線が揺らぐ。

成る程、これが水銀中毒の症状という奴か、と思い、しばらく休んでいると、次第に収まってくる。

アスラの中断要請を無視して、戦闘を続けた結果がこれだったが、それは自分の判断の結果。それに関して、アスラに文句を言つつも、後悔するつもりもない。

この症状がどの程度のものかは分からないが、マリンフォードへ帰還後、早々に検査してもらふ必要があるだろう。

「……当面あいつの技を鍛えるのは、遠距離からじゃのう」

帰還前の大訓練（実際、アリスとの訓練で大怪我はしてないものの、あれこれと怪我を負った海兵は多い）だったから、海賊さえ遭遇しなければ、問題はないだろう。いや、大物に出くわさなければ、

アスラだけでも十分か。

大分成長したものだ、とどこか息子のようにも思えるアスラの事を思い返し、かすかに笑みを口元に浮かべ、サカズキは取り出した酒を煽った。



## 第10話・激突（後書き）

色々試行錯誤した結果こうなりました

アンケートにご協力頂いた皆さん、ご不満もあるかもしれませんが、  
ご了承下さい

いや、よく考えるとこの2人が真っ向衝突したら、どうやっても水  
銀の蒸気出るなあ、と…

## 第11話 - 異動(前書き)

今回はややオリジナルの展開が混じっております

そして、ユニークアクセス1万突破!

PVアクセス、10万突破間近!来てくれた人に感謝です

## 第11話 - 異動

「……そうか、当面無理か」

マリنفォードの元帥の部屋。

コング元帥の部屋に、サカズキ中将が訪れていた。他にはセンゴク大将も来ている。センゴクが来ているのは、次期元帥として既に内示は出ているからだ。

マリنفォードに帰還後、サカズキ中将は即効で、軍医にかかった。

無論、嚴重に口止めした上で、信頼出来る相手に、だ。

その上で、その結果が判明した時点で、コング元帥に面会の約束をとったという訳だ。

「はい、サカズキ中将の検査を行った結果、命には別状は御座いませんが、水銀による中毒症状が発生しており、現場での作業は当面困難……より正確には、艦船での激しい実務は医者からの観点からはお勧め出来ません」

「ふむ……長時間の艦船勤務は困難か……まさか、このような事になるとはな」

ふう、と溜息をついたのはセンゴク大将だ。

精々あと数年で引退確定と言われるコング元帥に対して（事実、金獅子のシキの海軍本部襲撃の際もセンゴク大将とガープ中将の両名に任せきりだった）、これから海軍を担っていかねばならないセンゴク大将からすれば、ここでのサカズキ中将の前線勤務からの離脱は痛かった。

アスラ大尉をサカズキ中将の下に配置したのはセンゴク大将だっ

たから、その辺もある。

「仕方ありませんな。アスラの奴が気付いて止めようとしたのに、無視して強引に続けた僕のミスです」

とはいえ、サカズキ中将自身は責任は自分にある、との主張を崩さない。

無論、コング元帥やセンゴク大将とてアスラ大尉を罰するつもりはない。今回の件は、犯罪ではなく、事故だからだ。それも、被害者に最大の責任がある、だ。

例えるなら、停止していた車に自分からバイクが突っ込んで怪我をした、といった所か。

「……復帰は可能なのだな？」

「時間はかかりますが……自然系の能力者なのが幸いしました」

実は極端な解決方法を試している。

ピカピカの実の能力者であるボルサリーノ中将のレーザーでもって、頭部から胸部を吹き飛ばす、という荒療治だ。水銀が入り込んでいるなら、これで一掃出来るはず、というこの作業で実際に症状が改善したのだから、医者としては、もう悪魔の実（自然系）は出鱈目というしかない。

完全に完治しなかったのは、おそらく軽い症状が出ていたのを既にサカズキ中将が認識していた為、破損部の再生の際もその認識の元に再生してしまったのだろう、と判断されている。

これが、超人系や獣人系であれば、ここまでの派手な治療（？）は出来なかったから、不幸中の幸い、といった所だろう。

「……ふむ、数年は後方勤務。時折、緊急出撃時のみ様子を見な

がら出勤要請に応じる、という所か？」

「それが妥当でしょう」

完治する、という保障はない。

だが、とりあえずはこれでいくしかない。

「ふむ、そうになると軍艦が一隻あくな……それとアスラ大尉はどうする？」

これには全員が押し黙った。

アスラ大尉は大尉という階級では足りない程に強い。それはサカズキ中将自身が確認した。サカズキ中将曰く『実力的には既に大佐、いや少将ぐらいまでなら、やりあった所で遅れはとらんでしよう』、との事だった。

無論、悪魔の実の力も込みでの話だが、そこら辺は皆了承している。

とはいえ、まだ荒削りな部分も多分にある。

出来る事ならば、もう少し、あと1年ぐらいは鍛えてやりたい。使い潰すのではない。あくまで、今後のおそらくは数十年の間海軍の重要な立場で働けるであろう人材だけに、若い内に鍛えておきたいのだ。

「……クザンの下につけるか」

コング元帥が発言したのは、しばらくしてからだった。

「クザンの下に、ですか？」

「そうだ。高熱を発する相手はサカズキ中将が既にその身で実証

済みだ。後は逆に低温の場合、どうなるのか。クザンはサカズキとは勤務態度も真逆だからな、その辺の経験を積むという意味合いもある」

最初は首を傾げたセンゴク大将やサカズキ中将だったが、確かにそれなら納得いかないでもない。

水銀は融点が摂氏でマイナス38.83度。

つまりは、クザン中将の攻撃を受ければ、固体化する。そうでなくとも、北の海の極北地域やグランドラインの一部地域ではそれを下回る気温も発生する事がある。

固体化した時、これまで同様の事が出来るのか？

その辺の訓練と、サボリ癖のある上官をどう働かせるか、或いはそうした上司を持った際、下がどう苦労するのかを実地で体験させる、という意味合いがある訳だ。

「……正に逆の発想ですな」

「アスラは将来的には確実に上にくる。それなら、自分がサボれば、下がどれだけ苦労するかを知っておいてもらうのは意味がある」

サカズキのある種呆れたような声に、コング元帥がそう答える。

センゴク大将も了承し、サカズキ中将の後方勤務とアスラ大尉の異動がこうして決まった。

この結果を受けたアスラには水銀中毒の事は隠された。

正確には、水銀中毒症状は確認されたが、軽度のもので、完治可能。ただ、大事を取って当面後方勤務になる、という事だけが伝えられた。まあ、医師からもそう告げられて、どことなくほっとした様子だったという。

そうして、アスラが新たな船に乗り込んで出航したのとはほぼ同時刻。片手に花束を持ち、サカズキ中將は静けさが支配する場所を訪れていた。片手に杖を持っているのは、やや平衡感覚の異常が発生しているのを念の為に、だ。

そこはマリノフォードの一角に設けられた墓地だった。

そうした墓の一つの前でサカズキ中將は足を止める。

そこには嘗ての彼の家族が眠っていた。

嘗て、まだ自身がこのグランドラインの海軍本部ではなく、地方の支部にいた頃の話。

海賊の非道によって惨殺された我が子と、それを守ろうとして犯され、そして殺された妻。その時自身は軍務に出ている、襲撃を知ったのは、帰還してからだった。

加えて、それを行ったのは、彼が『もう、しない』『海賊を止めて、田舎に戻る』と哀れに訴えるが故に見逃した海賊達だった。

それから、我武者羅に、如何なる相手でも犯罪者には容赦せず軍務に専念してきた。

海賊を許せず、見つければ、殲滅してきた。

その中で、その力を見込まれて、海軍本部へと招致され……その際に妻子の墓地もまた、ここに移されていた。

「久しぶりじゃのう……長い事来れんですまんかったな」

墓に花を添える。ここに来る時は、嘗ての誓いを思い返す為、そうしてこれまで戦ってきた。

今回の件は、これまで我武者羅に戦ってきた故に一時的に休みを貰ったようなもの、と本人は認識している。

必ず、復帰してみせる。

それは、自身の誓いの為だけではない。

「息子みたいな奴が出来たんじゃ。あいつに罪の意識を背負わせる訳にはいかんので。」

だから、その為にも必ず自分は復帰してみせる。

誰かに言うつもりはない。この事は全て自身がその胸の中で誓っておけばいい事だ。

『これから当分は、これまでより来れそうじゃ』、そう告げると、杖をつきながら、サカズキは墓地を立ち去った。後には花束が静かに風に揺れていた。



## 第11話 - 異動（後書き）

サカズキ中将の戦う理由に関しては、原作に出ていないのでオリジナル展開です

正直、サカズキ中将に関してはどう扱つか迷ったのですが……とりあえず、当面リタイアです

少し心境に変化をもって、将来復活予定ですが

## 第12話 - 寒冷対策

クザン中将。

原作の青雉大将であり、ニコ・ロビンの件などに代表される、ガープ中将と並ぶ人情味のあるキャラクターである事から、自分も好きなキャラクターだった。

……そう、だった、だ。

何故過去形なのか？

それは……漫画と現実が違う、って事をつくづく噛みしめているからに他ならない。

考えてみれば、当たり前の話なのだが、クザン中将とて年がら年中命令違反を犯している訳ではない。

彼は海軍のお偉いさんであり、当然基本的には命令に服している。そうした中で極稀に、どうしても納得のいかない命令や状況などによって、彼は命令違反を覚悟して、行動している。

そして、これまた当たり前の話なのだが、命令違反の行動である以上、部下にも隠しての隠密行動となる。

結果、我々の前に残るのは……仕事をサボりまくる上司の姿だけなのだ！

漫画では、そんな日常がずっと描かれる訳はなく、陰で苦勞している部下を尻目に、独自の動きを見せて、物語に絡む場面しか描かれない。

だから、そうした、苦勞してる海兵達が知らない行動を見て、漫画の読者は『いいキャラだなあ』と感ずる訳だ。

さて、では、そうした苦勞している自分達はどうかだろうか？

今回の異動で俺は少佐になった。

直属の上司はクザン中将づきの大佐だ。そうして、今日もまた……

…。

「それじゃ、後任せるわ。適当にやっておいでくれ」

クザン中將が、書類をまだ残したまま、そう言って立ち上がった瞬間、俺の手元で書類が皺になるのを理解しつつも、ぐしゃりと握り締められた。

正面の席で仕事をしている大佐の手元でバキリと何かが碎ける音がした。

愛用のアイマスクをつけたまま、外へ出て行こうとするクザン中將に俺達2人の怒声が響き渡った。

「仕事しろー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

サカズキ中將は確かに鬼のように厳しかった。

部下に対して求められるものも多大だったが、当人がそれ以上に艦で一番仕事をこなしていたから、まだ諦めもついた。

クザン中將はそれとは逆だ。

さて、現実に仕事をしているサラリーマンの皆さん。或いは未だ学生の身なれど何時かは働く事になる皆さん、少し考えてみて欲しい。

自分達が一生懸命仕事をしている横で、自分の仕事を片付けもせず、それどころか部下に仕事押し付けて、自分は居眠りしている上司がいたら、どう思うか？

答えは各自多少異なるだろうが、どう考えても良い気持ちにならない事だけは理解してもらえるとと思う。

これで、せめて突然いなくなったりした時、何をしているのか。或いは漫画で見られるような、人情味ある行動を見せてくれてたりしたら、まだ多少は俺としては気持ちが落ち着くかもしれない。

だが、そんなものは全然見せない。

当然だろう、逃げたのがばれた、とはいえ、本人が関わったという事を海軍全体に隠しとおしたまま、去年はオハラでニコ・ロビンを逃がしてるのだ、この人は。

部下にそう易々と気付かれる程やわな仕事はしていない。

加えて厄介なのは、クザン中将のヒエヒエの実の効果だ。

この実は、原作を知る人なら知っていると思うが、攻撃力に関しては他の2人、黄猿大将や赤犬大将に大きく劣る。しかし、その最大の力は、本来弱点である筈の海が弱点にならない、という点に尽きる。

何しろ、白ひげのグラグラの実による攻撃を受けて、バラバラになって海に落ちてても、そのまま湾全体を凍らせて、浮上した白ひげのモビー・ディック号含めた4隻を閉じ込めてしまう程だ。

お陰で、クザン中将は自身が悪魔の実の能力者でありながら、海に落ちたら、という心配をせずに自転車で海を渡る。

まあ、早い話が、軍艦から自転車でこっそり抜け出されたら、追いかけるようがないという事だ。

まあ、彼の放任主義は、部下に任せるが、責任は自分が取るとしている分まだマシではある。

信頼出来る部下に仕事を任せ、その結果起きた事柄で不都合が生じても、その責任からはクザン中将は逃げない。それは任せた自分の責任として認めているからだ。

だが……それでも、だ。それでも、山のような仕事を押し付けられて、本人は気持ちよく昼寝してたら、矢張り腹は立つのだ。

お陰で、異動が決まった時は楽しみだったのが、今ではすっかりサカズキ中将が懐かしくなってしまうた……それに気付いた時には漫画読んでた頃とはえらい違いに自分でも愕然としてしまったものだった。

さて現在、自分達が乗った軍艦は北の海を航行している。

自分が異動になった理由は、説明されたが、どうやら上層部はとことん自分に不利な状況を今の内に体験させておく腹らしい。まあ、自分としてもいざという時頼れる上司がいる内に体験出来るのは良い事なので、文句を言う気はないのだが。

寒冷地で自分の能力がどうなるか試してみたが、矢張り粘つきを感じるというか、固体化に近づいているようだ。

ただ、尾を操る難易度は多少増すものの、元々自分は本来液体の水銀を攻撃の瞬間固体化している。

つまりは、逆に攻撃は楽になる訳で、そういう意味では、どっこいどっこい、という感じだった。

問題は、完全に固体化した時だ。

これに関しては、クザン中將による『氷河時代（アイスエイジ）』で実験を行った。

まず、凍っても通常の超人系や獣人系の能力者のように動けなくなる、という事はなかった。

自然系以外の能力者がこれを喰らった場合、固まって動けなくなる。砕かれれば、命を失うのだが、自分は固体化こそしたものの、普通に金属の体として動けたし、砕かれても再生出来た。

『お前さん、本当に超人系の能力者としては規格外だね』

と呆れたように言ったのは、クザン中將だ。

いや、貴方達自然系の規格外に比べれば可愛いもんです。

しかし、改めて自分の能力が『防御に関しては自然系並』と言われる理由が実感出来た。

ただ、攻撃に関してはさすがに固体化してしまうと、『九尾』の使用は困難という事が分かった。動かすのにかなり力が必要な感じ

で、これでは普段のように自由自在に動かすのは厳しい。  
武器を生成するのはむしろ簡単なのだが……。

『お前さん、武器の扱いは並だね』

と、試しに武器を生み出して戦ってみたら、クザン中将に言われた。

まあ、仕方ない。以前は武器の扱いも学んでみようと思っていたのだが、実際は無理だった。アレもコレもと手を出しては、どうしても器用貧乏にならざるをえない。

それよりは誰にも負けない『唯一』を！と思い、素直に拳を鍛えている。

何しろ、自分は幸いな事に武器と殴り合っても大丈夫な体だ。その為、当初予定では刀とかを習う予定だった未来のモモンガ中将（まだ大佐だった）らとは、結局、戦闘技能の鍛錬の相手としてだけお願いする形になっている。

そこで、最近寒冷地用として、新たな技を作ってみた。

「うおっと！」

体から飛び出した槍が掠めて、クザン中将がかわした所へ更に襲い掛かる槍。

現在の場所は極北地域にある海軍支部の一つ。

この地域は朝晩には極端な温度低下が見られ、ここでは自分の体というか水銀も凍結する。

そこで単純に体から槍状の水銀を飛び出させる技を作ってみた訳だ。

何しろ、元が柔らかかろうが、水銀はれっきとした金属。固体化すれば、人間の体なんぞ尖ってれば貫ける。

移動に関してだが……。

「こちらは固体化するのを逆利用して、足の裏に車輪を作ってみた。所謂ローラーブレードって感じのを車軸を高速回転させて動く。」

「つか、お前っ！槍にさりげなく霸氣纏わせてないか、っ！」

「やだなあ、そんな訳ないじゃないですか」

「ええ、全くですな。全く霸氣なぞアスラ少佐は混ぜておりませんぞ。中將の見間違えでしょう」

実を言えば、現在模擬戦でクザン中將に向けて連射される槍の中、牽制に突き出される槍にさり気なく霸氣を混ぜてみたりしている。

……観戦中の大佐と目が合い、2人してニヤリと笑った。

「お前らっ！俺が普段仕事してない事絶対根に持ってるだろうっ！」

「「いえいえ、とんでもない」」

ええ、思い切り根に持たせて頂いています。

本当に、サボるのも大概にせーよ、あんた自分達の上司なんだから。

## 第12話 - 寒冷対策（後書き）

漫画で見る限り、上司に欲しいのはクザン中将な気がしますが、実際に現実世界にクザン中将みたいな人が上司だったら、たまらんだらうなあ……と思いつつ書きました

私も社会人ですが、仕事をしない上司には本当に頭にきました……



### 第13話 - 主人公達

遂に大佐になった。

クザン中将づきの大佐も正式に将官に昇進した。

この一年半余り苦楽を共にした仲だけに、お互いの昇進を喜び、祝いあった。

……もちろん、クザン中将も祝ってくれたんだけどね。

この一年半は鍛錬と組織運営の勉強の積み重ねだった。

全く無茶な話だと思っ。

自分の中身はともかく、表側は見た目20程度の若造だ。そんな若造に促成で元の世界で言えば、士官学校と軍上級学校の教育を3年程の期間で纏めて受けさせるっていうんだから……。

無論、足りない部分はまだまだある。日々これ勉強だが、とりあえず部隊運用は出来るようになった。

海軍に入って、はや3年余り。

原作開始まであと16年……。

「で、自分は何故ここにいるんでしょう?」

「わっはっはっは!お前さん、海軍に入って以来ずーっと仕事ばかりじゃったじゃろう?偶には休む事も必要じゃぞ!」

「ガープさんは何時も休んでるように見えますが」

「気にするな!儂は気にせん!」

(いや、気にしましょうよ)

まあ、とはいえ、この航海自体は別段サボりでも、規則違反でもない。

大佐になった事で、正式に一艦任される事になった。

とはいえ、主要な人材（航海長とか）はベテランとはいえ、一般の海兵はまだまだ新人も混じっている。自分が艦長となったのに合わせて異動になった者も多い。というか、この艦自体が新造なので、クルーは一部クザン中将やサカズキ中将時代の艦から来てもらったものの、その大部分は他からの移籍組で構成されてるのだ。なので、正式にセンゴク大将から。

『航海に慣れる為にも、一度適当な処まで好きに行って来い』

と、艦の人間同士のすり合わせも兼ねて、出航したのだ。

特に目的地は設定されていないので、決まった期日までに帰港すべからず、何ら問題はないし、何しろグランドラインは何が起きるか分からない。如何に軍艦とはいえ、突発事態（海賊との戦闘や突発的な異常気象等等）で帰還が遅れる事も多々あるので、多少は帰還がずれ込んでも連絡さえ入れておけば融通も利かせてくれる。

……自分としては、これを機に一度高名な海賊、その中でも話の通じそうな……そう、白ひげとかと話してみたのだが……出航間際に入り込んできたガープさんに東の海への出発を決定されてしまったという訳だ。

まあ、ガープ中将が乗り込んできた訳は分かっている。

……生まれたのだ、孫が。

すなわち。

漫画の主人公、後のモンキー・D・ルフィが。

そこで自分の試験航海がてら、自分が孫に会いに帰るから、乗せてけ。ついでにお前も孫に会っていけ！だから便乗させる、という事らしい。

尚、ガープ中将の事を電伝虫を通じてセンゴク大将に伝えると、相変わらず疲れたような声を出してはいたが、どうやらきちんと今日までの仕事はガープ中将は片付けて来たらしい。無論、だからといって中将クラスが勝手に出歩くのはよろしくないのだが、その辺は諦められているらしい。

それに仕事を片付けたといっても、あくまで今日までの仕事で、これから帰ってくるまで、書類は溜まりまくっていくのだが……まあ、それで困るのはガープ中将だ、自分は知らない。

それに落ち着いて考えてみると、悪い話ではない。

東の海は原作通り最も平和な海だ。

新造艦の慣らし運転、乗組員同士の連携もまだまだこれからだ。

そうした状況下において、危険地域を処女航海とするよりは、安全な地域を動くのは良い方法だろう。

(……ひよっとしたら、その辺も考えてくれたのかな?)

アスラはもう、漫画の世界で見えていた姿が相手の姿の全てだとは思っていない。

思えば、ガープもまた、慕われていた人物だった。

それはきつと、気さくな人物というだけでなく、相手を思いやり、気持ちを考えて行動する上司であったからに違いない。元の世界でもよくある事だったが、些細な事でも相手に不快に感じていた、という事は多い。

やった当人は軽い気持ち……例えば、無造作に店の前に自転車を止めたら、その後で通った車椅子の人が酷く通りにくくて非常な迷惑を被った、という事があるかもしれない。ネットでだって、ほんの軽い気持ちの発言が、画面の向こうで相手を酷く怒らせるかもしれない。

人に慕われる、慕われ続けるというのはそれだけ難しい話なのだ。

(それに……)

会ってみたい、という気持ちがあるのも確かだ。

今はまだ1歳のモンキー・D・ルフィに。

そして、確か海賊王が亡くなって生まれるまでの日数を考えると……今大体4歳程度になったであろうポートガス・D・エースに。

海賊達、それも若くして億を超えるような者はこれまで出会ってきた者達は……アスラ自身が出会った者はいずれもまだ、少ないけれど、ひとかどの男達であり女達だった。

それはそうだろう。

ただ単に賞金がかけられるだけならば、犯罪を犯せばいい。

だが、海軍にかけられる賞金が億を越えてくるような輩は……危険人物と判断されるような人材はそれだけの人物ではない。

元の世界で言えば、1つの新たな会社を立ち上げ、それを成功させるような、そんな人物達だ。

そうして、そんな中には稀に、そうやって立ち上げた会社を大規模な、世界的に知られるような企業へと育て上げる人物も登場する。おそらくはそうした人物こそが、この世界では或いはドラゴンのような、或いはシャンクスのような人物なのだろう。

それに気になるのは原作における、ガープの子育ての方法だ。

海軍に入りたいと願いつつ、孫の幸せを願いつつ、行っている事はどうにもチグハグだった。

超英才教育といよりは、超スパルタ教育というべきか？

もう少し、やりようとかがあるのではないか、そう思うのだ。もし、そのやり方を本当にやっているのなら……。

(それを変える事で、或いは原作の原点を変えられるかもしれない)

そう思う。

もし、エースが海軍に入っていたら……それはきつとセンゴク元帥とて原作のようにばらす必要はなかった筈なのだ。若くして、海賊達という荒くれ者達の中で頭角を現し、1つの海賊団を立ち上げ、白ひげというグランドラインでも最強クラスの大海賊の配下の中でも、僅か16名しかいない隊長クラスの1人となった。

そんな人物ならば、きつと海軍内でも頭角を現すだろうし、もし、海賊王ロジャーの息子たる事がばれたとしても、それは上層部の秘匿事項として海兵である限りは沈黙が守られる事だろう。

……目の前に、未来において世界最悪の犯罪者として知られる人物を息子に持ちながら、堂々と海軍の英雄として海軍中将をしている人が目の前にいる事だし。

加えて、ココヤシ村にも立ち寄れる可能性がある。

今の時代なら、もうベルメールはコノミ諸島のココヤシ村に帰っている筈だ。

コノミ諸島はルフィ自身がそうであったように、目的地であるフーシャ村からグランドラインへと通るコースの通り道となりうる。それはまた逆もしかり。

そして、フーシャ村への航海コースは艦長たるアスラの権限だ。

そんな思惑も乗せつつ、軍艦は海を進んでいた。

(くあ)

密かに気合を入れるアスラの背後で、そんな彼をじつと見詰めていたアリスが大きく伸びをして、丸まった。

……今日もいい、天気だ。

### 第13話 - 主人公達（後書き）

いよいよ、原作主人公であるルフィが生まれる時間帯になりました

……原作見る限り、ガープ中将ももう少しやりようがあると思うの  
ですよ  
子育ては

## 第14話・子供への対応（前書き）

今回の話から現時点でまだコミックスとなっていない原作での話が  
出てきます

コミックスのみ、アニメのみで原作をご覧になっている方はその点  
ご了承ください

## 第14話・子供への対応

「馬鹿ですか、貴方は」

相手が中将である事は分かってても、そう言いたくなかった、いや言ってしまった自分を許して欲しい。

分かってはいるんだ、これが今の自分にとっての現実の世界であり、そうである以上、佐官が将官の批判を行うのはよろしくないけれど、まあ、これはオフでの発言って事で勘弁してもらいたい。

……どうしても言いたくなかったんだ、ガープ中将の行動をいざ見ると。

ガープ中将の息子、孫、養子。

いずれも中将自身は立派な海兵に、と望みながら、誰一人として海軍に入る事はなかった。

その理由を何となく知る事が出来た気がした。

中將の子育て孫育ては過激というのさえ生易しい。というか、間違った方向へ全力全開投球という感じだ。

最初の騒動は、孫を鍛えると称してどこぞの無人島に放り出そうとした時だ。

……1歳の子供を、だ。

幾等見張りというか、危険と思った時介入する為の人間をつけるとはいえ、何を考えてやがるのか。ちなみに、自分が知った理由は単純だ、ガープ中将、俺に頼んできたのだ。その介入というか見張り役を。

それで嫌な予感がして、まさか……と思いつつ確認してみると、エースは山の上の山賊に預けたのだという。それも、なんちゃって山賊ではない、窃盗・詐欺・略奪・人殺しまでやって来たれっきとした山賊だったらしい。



もう、しない事を誓う事と、孫を育てる事を条件に見逃してやったというが……絶対まだやってるだろう。彼らの住居は山の上。そうなると、畑などを耕す事は困難だ。

無論、森の恵みや動物を狩る事は出来るだろうが、てっとりばやいのとは間違いなく山賊家業だ。

さて、そんな処に子供を放り込んだとして、果たしてどうなるだろうか？

ガープさんはどう考えてるのか知らない。

或いは、犯罪者の手口をきっちり学んで将来に役立てるとか、或いはああいう奴らの行動見てれば、ああいう仕事が良くない仕事な事を理解するだろう、と考えているのか……いや、これだとガープさんが連中が未だ犯罪してるのを知った上で見過ごしてる事になってしまふな、そうすると、素直に厳しい環境の中に放り込む、という事だろうか……。

しかし、だ。

現実はどうだろうか？

……まあ、普通に考えて手伝いという形で犯罪の道へ引きずり込まれるのがオチだろう。

鍛えたいのなら、普通に海軍の支部で信頼出来る人間にでも預けなさいよ……。

そもそも人格の形成は幼少時の経験や体験が大きな影響を与えているとされている。

基本的に愛情を注がれてるかどうか、などは主観的なものなので、親と子の認識は一致しない事がある……正に今のガープさんがやってる事だろう。

小さい頃は目に見える形での愛情を注ぐ事が重要……まあ、こういうのは本とかでも溢れてた元の世界なら昨今割とよく知られてる事だった訳だが……これらを踏まえて、今のガープ中将の行動を見

てみれば……。

・ 幼い頃から、1人ジャングルに放り出す  
・ 幼い頃から、親と引き離して、全然関係ない犯罪者に預ける  
……うん、大人になったエースやルフィがあんな明るい性格になったのが信じられないくらいだね！いや、漫画で読んだ幼少時のエースの様子を見る限り、本来はもっと危険な人物になっていたはずだ。……山賊ダダンの処でも愛情を注がれていたようじゃなかったようだしね……。

少なくとも、『お爺ちゃんのいる海軍に入りたい！』って思える要素の欠片も見当たらない。

という訳でそこら辺ガープ中将に説明した訳だが……。

「なあに、大丈夫じゃ！儂の孫じゃからな！」

そういう問題じゃねえんだよ……！

という訳で、冒頭の発言へと遂になってしまった訳だ。

そして、今、自分はというと、山賊ダダンのアジトへと向っている。

ついてきているのはアリスのみ。

まあ、このぐらいの自然環境なら、熱帯ジャングルで走り回って、獲物を狩っていた自分らは何ら問題ない。普通の人の感覚で言えば、平地を走ると大差ない速度で……いや、まあ、基本の速さが違うけど、とにかく高速で森の中を駆け抜けてゆく。

『とにかく、1度エース君連れ戻してきますから、その間絶対ルフィ君、放り出したりしないで下さいよ！』

ガープさんは約束は破らない人だから、『わかったわかった』と、

いい加減そんな返事でも、その辺は大丈夫だろう。

この島は大きい。

『不確かなものの終着駅』、元の世界でも同じようなものがあった。有名なものが、というか正にフィリピンのスモークーマウンテンだ。そんなものが出るには、それだけのゴミを排出するだけの存在が必要だ。フーシャ村1つで賄えるような量のゴミではない。

結構大きな町がある……だからこそ、ストリートチルドレンのよ  
うな生活をしていても、何とかなってしまうのだろう。

時折、方向を確認しつつ、コルボ山の山賊のアジトへと向う。

さすがに目立つような所に作られてはいないので、時折足場を形  
成したり、月歩で上空へと昇り、建物を探す。

ガープ中将に場所を聞いてはいたが、あの人そこら辺いい加減だ  
からなあ……。

それでも、無事到着出来た。

ここに来るまでに、猛獣とかもいたんだが、アリスが睨んだらこ  
そこそ逃げていった。

(ゴンゴン)

と扉をノックする。

剣の速度で玄関前に降り立ったから、見張り台からもろくに見え  
ていなかった筈だ。お陰で、なにやら中では慌てたような音がする。  
ガチャリ、と扉が開くと、完全武装で身を固めた山賊達が立って  
いた。

先頭に立っているのが、原作でのエースとルフィの仮親だったダ  
ンだろう。

「一体どこの誰……って海軍!？」

「……海軍本部アスラ大佐だ。聞きたい事がある」

って言ったんだけど、パニックに陥ったのか連中武器を抱えて向  
つてくる。

まあ、さすがに東の海。

原作のフーシャ村で、1千万に満たない賞金首がシャンクス相手に  
でかい顔してた事考えると、この程度か……無論、瞬殺した。怪  
我なんて負わせてない。グランドラインではこういう事は船長クラ  
スは出来るような奴は限られていた……まあ、あそこそこを比較  
するだけ無駄だが。

「え〜と、すみません、それで何の御用でしょうか？」

えへへへ、とばかりに愛想笑いをしている面々。

勝てないと見るや、この変わり身はまあ、こちらとしては有難い  
話ではある。手間が省ける。

「エースはどこだ？」

「へっ？」

「ガープ中将から預けられている子供がいる筈だ。どこにいる？」

俺がそう言うと、やばい事がばれたかと思っただのさ。

連中、自分達は何も知らないとか、預けられてるだけだとか、  
必死に言い訳し出した。……別に、お前らがどうこうって事じゃな  
く、子供の教育に悪いから、ただ単に村に連れ戻しにきただけだと  
言ったら掌返したように、あっさり教えてくれたが。

どうやら、エースはエースって事らしく、既に彼らには手に負え  
なくなりつつある、という事だろう。

何でも予想通り、森に入ってまだ帰ってきていないらしい……と

すると……。

「『不確かなものの終着駅（グレイターミナル）か、どっちだ？』

確かエースが資金集めをはじめたのは5歳の頃から……そろそろいてもおかしくない時期、か……。

ダダンから場所を確認すると、俺はそちらへ再び走り出した。アリスも音もなくついてくる……匂い大丈夫かな。スモークーマウンテンもそうだけど、自然発火してるゴミ山なんて悪臭の巢だろう。

……あ、山賊ほつたらかしたった。

まあ、いい。見逃してるのは、中将本人だ。責任も自身で取ってもらおう。

## 第14話・子供への対応（後書き）

原作見る限り、どう考えてもガープ中将の子育てって間違ってる  
しかなかった

というか、あれでまだ良い方向に育ったルフィが奇跡だろう  
という訳で、うちの主人公は、この時代から介入開始です

第15話・出会い（前書き）

おまたせしました、エース登場です

## 第15話・出会い

SIDE アスラ

さて、スモークーマウンテン、じゃない、不確かな物の終着駅か。  
着いた方がいいが、臭い。

「……海軍だ」

「……ああ」

「……一体何の用だ…？」

ざわざわと周囲が煩い。

まあ、仕方ないだろう。ここは物も人も不要になったものが集まるとされている。すなわち無法地帯。そんな所に海軍将校の制服を着た人間が来れば、それは周囲から警戒もされるだろう。そう思っていたら。

「おい……手前、何の用だ」

「ここはお前らの来る所じゃねえ。とっとと帰れ」

どつちやらここをねぐらとするチンピラらしい。

まあ、気にしても仕方がないので、放っておいてエースを探す。  
とはいえ、結構広いからな、この中から子供1人を探すとなると…  
…結構手間だ。

「おい、聞いてんのか！」



怒鳴り声を上げてくる、さつきからんできたチンピラ。

まあ、周囲の人間がびくついてたり、武器持つてる所を見ると、そこそこ使える方なんだろう、きつと。

「ああ、ちょうど良かった。おい、お前らエースって子供を知らないか？まだ4歳ぐらいなんだが」

ぶち切れたのか、2人して襲い掛かってきた。

……いかん、少しいい気になってしまったか。

とりあえず、片方は俺がぶちのめし、もう片方はこっちが手を出す前にアリスがノックアウトした。というか、あの様子からすると、臭いから近づくな！って感じだな、まあ、まともに風呂も入ってないんだろ、確かに匂いが凄いのは否めない……。

なので、アリスに関してはここで待つてるように伝える。

寂しそうに、『みゆう……』と鳴いたが、悪臭の辛さには勝てなかったらしい。素直に頷いて、少しでも匂いの元から離れようとしたのか、少し離れた木の上へと駆け上っていた。

……あれ？虎って木登れたっけ？と思ったが、まあ、月歩で空駆けれるアリスには関係ないだろう、そう思い、ゴミ山へと足を踏み出した。

ああ、無論、先程ノックアウトした2人にも聞いたが、2人ともエースの事は知らなかった。

さあて、どこにいるのかね……というか。

「しまった、俺、エースの外見知らない」

漫画と現実じゃ実際の顔立ちは違うからなあ。

とりあえず、それらしき子供なり捜して、確認するしかないか……。

……彼はこの時、自分がどこまでONE OIECEの原作を読

んでいたか、自分が読んでいた話の段階でこの地が出ていたか、思い浮かべる事はなかった。

そう、この地の事を彼は当たり前のように原作に出ていたと感じていたのだが、それに違和感を覚える事はなかったのだった。

S I D E エース

海賊になりたい。

自分の親は世界的に有名な大海賊、海賊王ゴールド・ロジャー。けれど、自分はそんな親父はまるで敬意など払えない。

母には感謝している。

母は父を愛したただけの、普通の女性だった。けれど、俺を守る為に命を賭けて、自らの内に隠しとおした。普通、子供は妊娠してから出産までの期間が多少の違いはあれど、42週を過ぎれば過期妊娠と呼び、母体に深刻な影響を及ぼしかねない。

だが、エースの母、ポートガス・D・ルージュは実に20ヶ月、85週以上もの間エースを自らの内に隠し通した。……そして、それと引き換えに自らの命を失った。

だからこそ、俺は母には大恩を感じているし、母の姓を名乗っているのも別に父を嫌っているとか、父の姓を名乗れるような世界情勢ではないとかいう事以上に、母に感謝しているからだ。

ガープに関しては、まあ、当人のやる事は無茶苦茶だが、感謝はしている。

最初は俺が事故で死ねばいいのかと思っていたのか、と想像していたが、最近単なる素だつて分かってきた。

英雄とも呼ばれる海軍中将でありながら、親父ことロジャーの最期の頼みを受けて、母を匿ってくれたし、俺が生まれても海軍に突き出したりはしなかった。

……ただ、矢張り父とは違う気がする。

感謝はするが、尊敬はしてない、て所か？出来なかったとも言っ  
んだが。

それでも俺は海賊目指している。

最近、俺は友人が出来た。この地に住む、ストリートチルドレン  
の1人で、サボっていう。

妙にこいつとは気があった。

ひよっとしたら、俺も1人で寂しかったのかもかもしれない……。  
2人で今日も相談している。

「……だからさ、海賊になるには何が必要かって話なんだよ」

「そうだよなあ。矢張り船じゃないか？」

海賊、一言で言ってしまうえば、海の犯罪者。

裏を返せば、海に出て、犯罪をすれば海賊。

逆に言えば、海に出れなきゃ、そいつは海賊じゃなく、山賊って  
事だ。

この大海賊時代、山賊は海賊に比べ大体質が劣る。質の高い奴は  
まず海へ出て、ロジャーの財宝を目指すからだ。……何たって、海  
賊王の残した財宝だ。並大抵のもんじゃないだろう。

けれど、船は高い。

ちよっとそこらで買っつて訳にはいかない。

「……まずは、そうなるとやっぱし金だよな」

「ああ……」

ただ、貯めるといっても、普通の方法で貯められるものではない。  
手っ取り早いのは矢張り奪う事だが、2人だって真面目に働いて

る一般市民の皆さんから強奪つてのはどうにも気分がよろしくない。それに何より、そういう人から奪った金じゃはした金だろうし。かといって、4歳の子供が銀行襲った所で、返り討ちにあうのがオチだろう。

仮に上手くいったとしても指名手配されるだろうから、船を造ってもらうにしても、果たして誰が作ってくれる事やら。金さえ出せば調達してくれるような奴らがいるのは2人も知ってるが、そういう場合は通常の船の入手手段以上に余計に金もかかるし、そうやって手に入れた船は欠陥がある可能性もある。……どこの世界でも、海賊でも調達屋でも情報屋でもそうだが、少数の『本物』の陰には多数の『偽物』がいるものだ。

「体鍛えて、犯罪やってるような奴らから掠め取っていくしかねえな」

「ああ、それしかねえだろ。可能なら奪うのが一番だけだな」

犯罪者から奪えば、その金を狙ってくるのは、奪われた本人だけ。犯罪者が官憲に『盗まれた!』って言える訳もない。

それに、そういう奴らなら上手くいけば、普通の獵師とか漁師なんかの市民とは桁違いの大金を持つてる事もある。まあ、そんなに上手く行く事は滅多な事じゃないだろうが。

だが、彼らのそんな予定は、予定で終わる。

ダン!

突如として、彼らの立つ枝に振動が走る。

はっとして、2人がそちらを見ると、そこには海軍の制服を纏った男が1人。

「お前がポートガス・D・エースか？」

そう言っ、男は自分達に視線を向けてきた……。

## 第15話・出会い（後書き）

エース登場です

とはいえ、ここでの展開自体が現在進行形で進んでる状態なんで、  
場合によっては書き直す場合があるのはご了承ください

## 第16話・連行

SIDEアスラ

エースを見つけるのは苦勞した。

何しろ、普通にゴミの小山の上に登って、見下ろしてみれば、子供の姿はあちらこちらに見える。

……捨て子なんだろう。

裕福と言われる元いた日本でさえ、捨て子は常にいた。

増してや、常に世界全体を見回してみれば、捨て子なんてどこにでもいただろう。

「……この中からエース1人を探し出すのか……」

先程叩きのめした2人組み以来、数人を叩きのめした所でそれ以上手を出してくる奴はパタリと止まった。無駄と気付いてくれたのか、それとももっと強い奴を呼びに行っただのか……まあ、今静かならそれでいい。

さて、それじゃまあ……。

「おい、そこの子供達」

剃で高速移動して、子供達の集団の横に出現する。

どうやら、ゴミの中から売れそうなものを拾っているらしい。……こういう子供達を見ていると、自分のやろうとしている事が所詮偽善に過ぎないという事がよく実感出来る。

自分は漫画に登場したキャラだから、エースを知っていたし、彼が未来において名を上げ、そしてどんな最期を迎える事になるか知っていたから……介入を決めた。

けれど、それはこの場で見れば、1人の子供を助けるだけの話。

その他大勢の子供達は、これからもこの場所で生きていかなければならない。

それでも……やらないよりはやる、だから俺は手を出す。

びつくりした子供達にお駄賃を出して、エース探しを行ってもらう。

何しろ、これまでろくに金を使う機会がなかったせいで（海の上では使う場所がない、衣食住の基本は海軍が面倒みってくれる、元の世界みたいなゲームもなければ、溢れる程大量の漫画や本もない）、財布の中身にはそれなりの余裕がある。

この人数に駄賃を出した所で全く問題がない。

その上で、エースを探してもらおう。子供は同じ子供に探してもらうのが一番だ。一番最初に見つけた子供にはお菓子をおまけにつける、と言ったら張り切っていた。

まあ、実際、迅速に発見してくれたので、追加の駄賃とお菓子を渡しておいた。

………ついでに、俺が離れてみせた途端に、予想通り、チンピラが子供達を包囲して、渡したばかりの金を奪おうとしたのですかさず戻って、全員遠投の為のボールになってもらった。結構飛距離はあったと思う。人を野球ボールみたいに投げるなんて、俺も随分遠くに来たもんだ……。

その後は、まあ、離れてみせても誰も来なかったなので、大丈夫だろう。

………多分、な。

そうして、今、俺はエースと……もう一人の、こいつはおそらくサボだな。

その前にいる。

………この子に関しては、原作に出てこない。というより、エースが小船で島を旅立つ時、ルフィに別れを告げた時、その隣に彼は



なかった。つまりはそういう事だ。

2人とも警戒感バリバリだ。

まあ、こんな場所で、海軍にエースが呼び止められては、な。

「……誰だ、お前！」

エースと思われる子供が叫び、武器とも言えない棒を構える。

「俺か、俺は海軍本部大佐アスラだ」

俺がそう名乗ると、背後に感じていた気配が急速に立ち去っていくのを感じる。

俺の名乗りを聞いて、海軍大佐に手を出すのは危険と判断したんだろう。

「か、海軍の大佐が何の用だよ！」

つておお、このサボって奴、震えながらもエースを見捨てて逃げたりしない。

この年で大したもんだ。

「なに……ガープさんの子育てとか鍛え方に問題を感じてな、少し手を出させてもらいに来たって訳だ」

ニヤリと笑うと、エースが「爺さんの……？」と呟いた。

警戒感を緩めてはいないが、とりあえず理解は出来たという所か？

「……それで俺をどうする気だよ」

「なに……」

エースの問いかけに応える前に、俺は2人の背後に回り、ひよい、とばかりに抱え上げる。

原作の頃のエースじゃあ、さすがにこんなに簡単に接近させてはくれないだろうが、今はまださすがに年齢が年齢だけあって、剃での動きについてこれなかった。

## SIDEエース

海軍大佐と名乗るそいつがここに来た理由は分かった。

大方、爺から何か言われて来たんだろう、そう思ってた睨んでいたのに。

急に忽然と目の前から消えたに、『えっ?』とばかりに、つい呆けた顔をした次の瞬間には、既にその両腕に俺達は抱えられていた。

「「なっ!」」

俺達は確かに子供だけど、だからこそ逃げ足や直感には自信があった。

何しろ、俺もサボも4歳の子供だ。当たり前だけど、幾等鍛えた所で、大人や危険な猛獣相手に正面から戦える訳がない。

じゃあ、どうするか?

答えは簡単だ。正面から戦わなけりゃいい。

不意打ちで先制を取って殴り倒せばいい。罠に嵌めて、相手の動きを止めて倒せばいい。けれど、その為には相手より先に気付かないといけない。

相手に先に気付かれたら、不意打ちなんて出来る訳がない。

相手に先に気付かれたら、罠に誘い込むのだって危険が増す。

山の中で駆け回って、鍛えられてたつもりだったけど、こいつには全然効果がなかったみたいだ。

しかも、俺らが山を走るのとは段違いの速度でまるで空を走るかのような勢いで森の中を駆けている。何時の間にやら、並走する形で巨大な虎が駆けていた。

この山で見かける主より小さいけど、威圧感が半端ない……！この辺りの獣のボスでさえ、こいつ見たら服従のポーズするんじゃないだろうか……？そんなぐらい、こいつは迫力があつた。

……この海軍大佐のペットか何かか？少なくとも敵じゃないようだけ。

結局俺達は、自分で駆けてたら何時間もかかるような道程をほんの僅かな時間で駆け下つてた。

「……あいつ、途中では本当に空走つてなかったか？」

崖とかあつてもお構いなし。

両腕に俺達を抱え込んだまま、垂直の崖を駆け上がり、谷を飛び越えた。そんなものなんてないかのように、普通に走り、普通に越えてつた。俺達には同じ事は絶対出来ない。

爺と話をしている大佐を睨んでると、サボがこつそりと話しかけてきた。

「……気付いたか？」

「ああ、あいつ俺達より早く森の中とか動いてたよな？」

多分これだろうと思つたのだが、どうやら違つたらしい。

そうではなく、あの密着位置から財布を掏れなかつたらしい。

……あの状態で財布が掏れなかつた？それで生計を立てているサボが？

一体どういう事かと考えていたが、その前に爺と話しを終えたら

しい、あいつが歩み寄ってきた。

「……………それで俺達をどうするんだよ」

「そうだな、お前達海賊に憧れているらしいからな……………」

ニヤリと表現するような顔になって、あいつは言った。

「ひとつ、社会科見学と洒落込もうか」

第16話・連行（後書き）

さすがに毎日投稿かそれに近いペースはきついかな  
次回ぐらいから3日に一度ぐらいのペースに落とそうかと悩み中……

第17話・海賊（前書き）

まず申し上げておきます

今回は残酷な描写があります

ご了承下さい

## 第17話・海賊

SIDEエース

アスラ大佐。

そう名乗る爺さんの部下（？）に連れられて軍艦に乗る事およそ半月。

連れて来られたのは、ある町……だったもの。

「……何だよ、こりゃあ……」

サボと2人して咳いてしまう。

そこにはきつと以前は賑やかな町が広がっていたんだろう。

けれど、今は廃墟と化した町。

あちらこちらに、或いは斬り殺されたと思われる死体が転がっている。

コツン、と足に当たったものがあって、一瞬木かと思ったら、黒焦げになった人の腕だったのに気付いて、2人して喉の奥からこみ上げるものが……出る前に、傍にいた別の海兵が袋（船酔いした奴用らしい）をくれたので、その中に吐いてしまった。

あちらでは、動かなくなつた子供を抱えた母親と思われる人が半狂乱になって子供を今も揺さぶり続けている。

あつちでは、弱弱い動きで、腹から溢れた自分の臍物を自分の腹に戻そうとしてる奴がいる。

あつちでは、びりびりに裂かれた服を着た虚ろな表情の女の子が……あれって……そりゃ確かに男と女がいりゃ起きる事かもしれないけど……っ！

真っ青になっている俺達に、横で顔色さえ変えずに部下に指示を出していたアスラ大佐が、俺達に言う。

「ここは、少し前に海賊の襲撃にあった町だ」

「……海賊の？」

「そうだ。海賊達に奪われ犯され殺され焼かれた町だ。……よく見ておけ」

ぐるり、とアスラ大佐は周囲を見回して、言った。

「これがお前達が憧れた海賊が、今も世界の海のどこかで、ごく当たり前に行っている事だ」

SIDEアスラ

俺はこいつらに、この光景を見せたかった。

……通常はこの町サイズなら、ここまで酷い事にはならない。

ただし、それは海賊がここを襲った連中より優しいから、なんかじゃない。ただ単に、町も警戒しているから、通常は海賊船が発見され、有志による守備部隊が動き、更に海兵に連絡がいく。後は海兵が来るまでどれだけ粘れるか、だ。

ここを襲った連中は、そこら辺を熟知していた。

既に襲った連中は分かっている。

懸賞金1000万ベリー『狂賢』のジャゼル、東の海ではなかなかの額の海賊だ。

今回は、奴は事前に部下を町へ別の町からの定期便を使って送り込み、襲撃と時間を合わせて見張りと通信設備を逸早く制圧。結果、町は見事なまでの奇襲を受ける事になった。

予備というか、町長の家に裕福な人間のステータスとして置かれていた電伝虫からかろうじて、近隣の町へと連絡がいき、そこから



海兵に連絡がいき、駆けつけた時には、しかし既にジャゼルは姿を眩ました後だった。

……海賊の中にも無論、漢気のある奴はいる。

原作の白ひげや赤髪なんかがその代表例だが、実の所大部分の海賊はこういう普通に暮らしている人達を襲撃して、その財貨を奪う奴らだ。

子供がアウトローに憧れるのは世の常とも言える事だ。この辺は親とかに規則で縛られている反動って面もあるんだろう。

だが、原作のエースはやがて、こういう言い方は何だが、『立派な』海賊になる。

だからこそ、その前にこいつには憧れと現実って奴をしつかり見せておいてやりたかった。傍で、エース達が『俺達は海賊になっても、こんな事しない！』って喚いてる。

……甘いな。

「お前、仲間を作るつもりはあるか？それとも、お前達2人だけでずつと航海するのか？」

「？そりゃあ、仲間を集めるつもりだけど……」

「なら、そいつらを食わせるのはどうするつもりだ？他の海賊を襲うか？襲えなかった時はどうするんだ？海の上で偶然他の海賊に遭遇して、そいつらが自分達が倒せる程度の相手で、尚且つそいつらが自分達の腹を満たすのに十分な食料や財貨を持っている……どれだけの低確率なんだろうな？」

現実はそのものだ。

これが白ひげ並の大海賊ともなれば、幾つものシマを持ち、そこに他の海賊からの庇護を与える代わりに上納金を得るなんて事も出

来るが、そんな事が可能なのは、その旗を見ただけで他の海賊がびびるような大物だけだ。

その辺りは黙って、指摘してやると、エースもサボも悔しげな様子で俯いた。

町を歩きながら、部下達に命令を下しているが、時折崩れた瓦礫の中にまだ人がいるって時は水銀で持ち上げるのを手伝ったりもする。

ただ、俺自身の提案による実験部隊が俺の船にはいるから、基本はそいつらが対応する。ああ、もちろん、他の海兵達も手伝うんだが。

本来、船には船医が乗っているが、その数は限られたものだった。それを、サカズキ中将に直訴する形で、海賊の襲撃を受けた町などで救護活動を行なえるよう、医療部隊を拡充したのだ。

更に、クザン中将の時には無論ちゃんど説明もしたし、『やっていい』という承認も得たが、ドクターベガパンクにも伝手を貰って頼みこみ、レスキュー部隊を道具込みで創設した。

無論、そんなに大勢の医者はいないし、道具もまだまだ数も少ないので、一部の船に試験的に積まれてる状態だが、提唱者の俺の船には当然積まれている。まあ、こうした積荷を載せると、どうしてもその分武装だの他の所に皺寄せが行くんで、嫌がる海兵も多いって実情があるんだが。

だが、この編成はこうした町での救援活動には有効だ。

というか、まんま前の世界での災害救助部隊を元に考えたんだけど。実際、医療部隊の所に、町の殆どの場所からはつきり見える高いポールの上に掲げられている旗はまんま赤十字の旗だ。

普通の海兵が走り回って、怪我人で歩ける奴は旗の所に行くようにメガホンで叫んでいる。

もちろん、その途中で歩けないような重傷者とか見つけたら、担架を持った海兵を呼んで、運んだりしている。

……さつき吐いたばかりなのに、先程担架に乗せて運ばれていった死体……目が飛び出して舌共々でろんと垂れ下がった拷問にあつたと思しき死体を見て、またエース達は吐きそうな様子になっている。

無理もないか、こいつらはまだ4歳だ。俺だつて初めて人を殺した時も、人が無惨な死体になって転がっている時も気分が悪くなつて吐いちゃまった。

それでも……こいつらには見せておくべきだと思つたんだ。

そうして……。

こんな事をやらかした海賊がどんな目に遭うのか、をな。

「アスラ大佐。ジャゼルの足取りを確認致しました」

そこへ待ち望んでいた連絡が来た。

……ジャゼルの誤算は、抑えたと思つた他の所へ通じる電伝虫を、1つ、町長の所にあつたものを逃した事だ。

だから、思う存分ここで遊んでいた所へ海軍発見の報を受けて、慌てて逃げ出す羽目になった。

そうなると、問題が生じる。……そう、食料や水だ。特に水は積み込むのが面倒な上に、必須の物資だ。

周辺の町や村に可能な限り、連絡をして、水場に関する連絡をお願いしていた……そこらにしても、どのみち近くの町が襲撃受けたつて話を聞いてたから、海賊への警戒を強めるついでだ。快く了承してくれた。

……そして、その内の1つから連絡が入つた。

……さあ、それじゃ狩りの時間といくかね……。

## 第17話・海賊（後書き）

さて、次回はエース達の目の前で海賊討伐……  
憧れと現実、そして結果を見てどう動くかは、今後の展開をお待ち  
下さい

さて、どこまで行けるか分からんけど、行ける限りはなるだけ毎日  
に近いペースで更新頑張ろう

第18話 - 撃沈（前書き）

次話でエース編は一旦終わり

## 第18話 - 撃沈

### SIDE海賊

『狂賢』のジャゼルは不機嫌だった。

当然と言えば当然の話で、上手く行っていた作戦が最後の最後で台無しになってしまったからだだった。

とはいえ、配下の海賊連中は然程びびってはいなかった。これは別にジャゼルを舐めているからではない。1つには確かに画竜点睛こそ欠いたものの襲撃により財貨の獲得などは成功したし、何よりジャゼルは確かに恐ろしいが、反面自身の命令に従って、その結果取りこぼしがあった場合は、不機嫌ではあっても部下は殺したりはしなかったからだ。

この辺り、公正な裁きとでも言うか、そこらは厳しく、逆に言えば部下自身の失敗はどんな命乞いをして、許される事はなかった。……まあ、結果としてジャゼル海賊団はジャゼルの命令を聞く従順な、逆に言えば命令通りの事しか出来ない海賊団となっていたが、当人は自分の命令をきちんと聞く配下を問題だとは思っていなかったし、部下は部下でそういうのが自然と残り、ジャゼルに諫言したり、疑念を呈するような奴は残ってはいなかった。

（まさか、あんな所にも余所へ通じる電伝虫があるたあな……）

実の所、今回見逃した電伝虫は町長の所にあつたとはいえ、町長の執務室などとは全く関係のない所に置かれていた。

執務室などは真つ先に襲撃されており、町長も真つ先に殺されていた。

では、どこにあつたかという、何と町長の秘書官、その物置の中だった。

何故そんな所にあつたかという、実はこの町長の汚職の為だつた。無論、そんな所にあつた事から分かるように、秘書官もまた汚職に関わっていた。

この町の子算での購入予定物資に関して、とある商人と結託して情報を流す事で代わりに賄賂を受け取っていたのだつた。

結果、町長は即効で殺されたものの、秘書官自身は何とか物置に隠れる事に成功。無論、最終的には見つかつて殺されたのだが、その前に救援が来れば助かる！と電伝虫で海賊の襲撃を伝え、助けを求めたのだつた。

商人とて、何故向こうがそちらの連絡先を知っていたのか、と問われる危険はあつたが、そこはやり手の商人の1人だ。売り込みした際に、『是非ご用命があればこちらに……』と営業の一環として連絡先を秘書官に渡していたのだとして真実を隠しきつた。

何より、海賊に襲われていたとなると、最悪商人自身までこの後被害を受ける危険がある。黙って見過ごす訳にはいかなかった。

かくして真相は海軍へと伝わり、最寄の支部から出撃が行なわれると共に、近隣の軍艦にも連絡がいった。

ただ、これがジャゼルにとって本当の意味で『予想外』だつたのは、やって来た軍艦だ。

ジャゼルが町が救援を求めるのに成功した事に気付いたのは、軍艦がやって来るギリギリだったが、それでも物置に隠れている所を引きずり出された秘書官が金庫の番号など情報を引き出される中、チラチラと時計を見ているのに気付き、締め上げた所白状したのだ。今からでは財宝はともかく、水など補充する時間が足りないものもあると見たジャゼルは海軍への奇襲を考え、財宝や食い物を積めるだけ積むと出航、近くの小島の陰に船を隠していたのだが……やって来たのは海軍本部の大型戦艦であり、マストには本部中将の乗艦を示す旗が翻っていた。

さすがに、そんなのを相手にしては、それこそこちらが瞬殺され

てしまう。

やむをえず、ジャゼルはこれ以上にここに留まるのは危険しないと判断し、脱出。近隣の水源から水を補給しに動いた。……もちろん、この時見張りは厳重に置き、そのお陰で軍艦の姿が僅かに見えただ段階で出航の用意を開始していた。

向こうは大型な分、こちらの海賊船の方が速度が早い。

(どうやら、向こうの大砲の射程に入る前に逃げられそうだぜ)

内心ほっとしたジャゼルだったが、それが甘いものでしかない事を、所詮東の海の常識でグランドラインの常識は理解出来ない事を、直後に悟る事になった。

SIDEアスラ

「どうやら捕捉したようです」

「そのようじゃのう」

アスラの言葉にニヤリと笑って腕まくりをするのはガープ中将だ。あちらは原形は民間船とはいえ、ヤバイと思っただらすぐ逃げられるよう、快速船。近代風に言えば駆逐艦とかフリゲートとかそうした分類に属する。

それに対して、こちらは確かに同サイズの民間船と比べれば相当性能が高いものの、所詮は大型で重武装の戦艦。

速度の差は必然で、まともに追撃戦なぞやっつけられるものじゃない。

かといって、砲撃の射程に入るにはまだ時間がかかる。

……ただし、この艦にはそれを遙かに上回る射程を持つ相手が今乗っていた。



そう、すなわち。

「拳骨流星群！」

ガープ中将の拳で殴られた砲弾が、大砲すら上回る連射可能な長距離砲撃として、飛来するなど東の海の誰が想像出来るだろうか？  
フーシャ村の住人ならまだありうるが……グランドラインの常識という名の非常識を体現する一撃を予想だにできなかったジャゼル艦は、この砲撃をまともに喰らった。

海賊船は既に穴だらけ。

急速に速度を落とし、軍艦との距離は急速に詰まっていく。

その光景を、エースとサボはというと、啞然とした様子で見ている。エースにした所で、ガープ中将の拳骨が物凄く痛いのは知っていても、まさか船を殆ど拳骨でボコボコにしてしまうというのは予想外だっただろう。

逃げられないと悟ったのだろう、海賊達は武器を構えてこちらを待ち構えている。

当然だ、自分達が何をやってきたかは自覚しているだろうし、例え降伏した所で助命されるとは思っていない筈だ。それならば、せめて一太刀……そう思う気持ちは分かる。

だが、アスラは生憎、それに付き合うつもりは毛頭ない。

「ふむ……どうやら、先頭におるのが船長らしいのう」

船首にいる俺の横にガープ中将もやって来る。

銃を構えている海賊もいるし、まだ射程範囲外とはいえ、まぐれ弾が飛んでこないとも限らないのだが……まあ、この人の場合、鉄塊で弾くか。アリスはというと今回は万が一に備えてエースとサボのお守役を頼んでいる。……まあ、頼んだ時、快く頷いてくれたアリスに比べて、どうにもアリスを見るエースとサボの顔色が悪かった

ような気がしたが、まあ気のせいだろう。

決して、『暴走したり、邪魔したりするようなら噛んでいいから』  
と言ったのが原因ではあるまい。

さて、どうするか、だが。

所詮、ジャゼルは小物だ。

小物を相手にして、部下達が怪我をするのも馬鹿らしい。なら。

SIDEエース

俺はダダンの所の連中相手にして、自分が強くなったと錯覚して  
た。

きっとダダンより、今日の前で追い詰められてる海賊達の方が強  
い。

1つの町の住人をあいつらは打ち破ってる。ダダン達にはそんな  
事は出来ない。

けれど、今、彼らは爺さんたった1人の前に既に敗北寸前だ。

船がこっちの方が明らかにでつかいって事はその分たくさんの兵  
隊と大砲を載せてるって事だ。逃げられないとなれば、後は数で押  
し潰されるだけ……。

俺はそういう風に思ってた。

けれど、派手な海戦なんていう、そんな考えはあっさりと目の前  
で粉碎された。

『九尾』

そう呟いたアスラ大佐の体から銀色の液体が溢れ出したかと思う  
と、それらは後背で巨大な9本の尾を形作った。

そうして、その尾が急速に伸びて……次の瞬間、海賊船はそこで  
待ち構えていた船長や海賊達諸共バラバラに切り刻まれていた。

それこそ彼らの決死の思いも何も傍若無人に薙ぎ払って。彼らの覚悟になど付き合う必要はない、と余りにも無造作に、蹂躪していった。

……ぞつとした。

町を滅ぼした海賊達を、爺さんとアスラ大佐はたつた2人であつという間に皆殺しにしちまった。……その癖して、爺さんもアスラ大佐も平然として顔色も変える様子がない。アスラ大佐はもちろん、爺さんもあんだだけ砲弾打ち込んでれば、きっとそれで死んだ海賊達も何人もいるはずなのに……。

何だか2人が俺達とは違う生き物に見えた……。

「いいか」

そんなアスラ大佐は俺達に振り向いて言う。

その背後にさっきまであつた巨大な銀色の尾は、もうない。そして、その更に向こうでは解体された船が沈んでいきつつあつた。

「これが海賊の末路だ」

弱い者から奪い、そして最後は殺される。

普通に暮らす者達ならば嘆く者がいる。死んでも弔ってくれる者がいる。

海賊は違う。常に海軍に追われ、殺される可能性に警戒し続け、やがてその大部分は殺される。

疫病の発生などを懸念する場合でも、町や村の人間と異なりゴミとして本来の弔いとは別の場所で焼却されるだけ。墓も何もなく、死んだ彼らの為に遺されるものは何もない。

まだ、幼いエース達にはそこまでの事は理解できなかったけれど、けれど、だからこそ、憧れが現実という、どうしようもないものに押し潰される事を感じ取っていた。

## 第18話 - 撃沈（後書き）

夢と現実の違い、って事を実感して、その上でエース達がどう動くかそこら辺は私独自の解釈になりますが、どうかご容赦を

ココヤシ村のベルメールさんの所、実は描写されてませんが寄ってるのですが…

何故描写されてないかは、さらっと書く事になると思います

第19話・将来展望（前書き）

これにて東の海編終了

次回から再びグランドラインへと帰還です

## 第19話 - 将来展望

『狂賢』より小物だったが、他にも数名の海賊を討ち取り、我々はフーシャ村へと戻ってきた。

そろそろ帰還せねばならない頃だ。まあ、確かに東の海はグランドラインとは比べ物にならない位気軽な海で、突然海王類が襲撃かけてくる事もないし、ログポースなしでは航路が分からないという事もない。突然異常気象が発生する事もないし、出会った海賊もグランドラインの連中と比べれば、実に弱かった。

まあ、こんな海だからこそ、ある意味ルフィみたいな性格の奴には良かったのかもしれない、と思う。

もし、この海がもっと危険な海だったら、ONE PIECEの物語は始まった途端に終わっていたかもしれない。何しろルフィは原作を見れば分かる通り、自身の正義に従う男だ。

それだけに、RPGゲームと同じだ。

RPGゲームだって、いきなりボスの支配地域からがスタート地点だったらそれこそどうにもなるまい。

ルフィは海賊の実力が最も劣る東の海だったからこそ、弱い海賊らと戦い、経験を積み、強者と戦えるだけの実力をつけていったのだ。

……まあ、ルフィも同じ事ぐらいはやらねばなるまい。

とりあえず、こここの所エースとサボはめっきり塞ぎこんだ。

最初のケース以来塞ぎがちだったのだが、最後の町での事もあった。

サボの洩らした、『……なあ、俺達海賊になりたい、って間違ってたのかな……』という弱気な言葉に、エースが反発して、『海賊になるのを諦めるのかよ！俺達はこんな海賊にならなきゃいいだろうが！』と言ったのを、その町の子供が聞き付けたのだ。

大人はまだ、睨みはしたものの、小さな子供とあってそれ以上は言わなかった。

それに噛み付いたのは、同年代の小さな子供達だった。特にエースが堪えたのは、小さな女の子、喧嘩になった少し大きめの男の子の妹と思われる彼女の叫びだった。

『何が海賊よ！何で私達のお父さんお母さん殺したような奴らになりたいつて思うのよ！』

胸倉を掴まれるのではない。

殴られるのではない。

小さな少女の、顔中をくしゃくしゃにして、涙をボロボロと流した、その叫びにエースは何も応えられず、呆然とした様子で俯くしかなかった。

……俺もガープさんも2人にこの航海の間、特に何も言わなかった。自分の目で見て、自分で感じてもらうのが一番だと思ったからだ。

この航海の間、ガープさんとはじっくり話し合った。

この人を説得せずして、今後の原作通りの展開は避けられないと思ったからだ。

……正直に言おう、俺は白ひげには生きていて欲しいと思っている。

別に白ひげがいい海賊だから、なんて言つつもりは毛頭ない。だが、調べれば調べる程、現段階でもって彼が倒れる事は却って世界の海に無用な混乱と争いを発生させると悟らざるをえなかった。

『海賊王』ゴールド・ロジャーが倒れ、海賊提督『金獅子』のシキが行方を晦まし。

現在の海賊界は再編の真っ最中にある。

その中で厳然と聳え立つのが、大海賊白ひげだ。

原作を見れば分かると思うが、彼は財宝でも名誉でもなく、求めたのは家族だった。それ故に、息子の1人であるエースの為に家族総出で助けに向かい、そして命を散らした。

……だが、あそこにエースがいなければ？

エースが捕まったのは、自身の隊の副隊長であった黒ひげが四番隊長サッチを殺したからだったが、白ひげは、黒ひげの追撃は不要と異例の指示を出していたのを、他の隊長達の制止も振り切ってエースは黒ひげを追い、そして破れ、処刑台へと送り込まれた。

黒ひげが白ひげの船の誰かを殺すのは、避けられまい。ヤミヤミの実を発見するのが彼自身でない限り、それは起こる。

だが、その時エース以外の人間が黒ひげの隊長だったらどうだろうか？

海軍も、エースの公開処刑に踏み切った理由の大きな1つに、彼がゴールド・ロジャーの息子という面があった。

もし、原作のエース同様、その時の黒ひげの隊長が制止を振り切って追ったとして、だ。

捕らえられたのが、エースではなく、別の隊長だったら？果たして、公開処刑にまで至っただろうか？白ひげとの全面戦争、勝つても負けても損害が馬鹿にならないそれに、踏み切っただろうか？

それに、エースでなければ、ゴールド・ロジャーの息子でなければ、大渦蜘蛛スクアードは白ひげに刃を突き立てたりはしなかっただろう。……元々は、ディカルバン兄弟より先、真っ先に指揮を任せられようとしたぐらいに信任が厚い男だったのだ。それが、ロジャーの息子という衝撃に、戦闘の興奮、サカズキさんの言葉で惑わされ、ああいう事になった。

そう……エースでなければ、相当状況は変わる筈なのだ。

まあ、無論、そうした未来の事象だけじゃなく、本音という部分もある。



夢を追うのはいいが、現実を見て、エースには出来ればガープ中将が望んだように海兵になつて欲しい。

……もつとも、これは厳しいかな？とも思つてしまう。

実際にはそんな事はないと思うんだが、ロジャーの息子の自分がどの面下げて海軍に入れるんだ、という気持ちもあるだろうし、母を追い詰め死に追いやつた海軍になんか、と思う気持ちもあるだろう。

それでも、エースもサボも、今からならまだ海賊になりたい、という想いには修正が効くんじやないかと思うんだ。

その為には、ガープさんを説得しないと始まらない。

……あんな劣悪な子育て環境だけはやめさせないと。幼い頃からサバイバルつてのも良くない、幼い頃から犯罪組織の一員なんてのも全くとって宜しくない。

という訳で、ガープさんを説得して、この2人、しばらく俺の船に乗せる事にした。

センゴクさんには見習いとして乗せる許可をもらった。……さすがに当初は一体何を言い出すのかと思われたようだが、ガープ中將の子育て方式を聞くと、さすがに呆れて了承をくれた。部下の海兵達には、ガープ中將のお孫さんと、その友達をしばらく海兵見習いとして乗船させる、という方向で伝えた。

既にガープ中將の非常識子育て法は部下達の間には広まっていたから（俺と中將が口論にも聞こえる議論してたのを聞いてた者が結構いた）、むしろ子供達に同情してた連中が多く、割とすんなりと受け入れられた。

というか、一番納得していなかったのは、エースとサボ当人だった訳だが……。

まあ、なんだ。

アキラメロ。

なお、ココヤシ村のベルメールさんにノジコとナミだが、会う事

は出来た。

出来たが……今は何も出来なかった。

現在の付近の責任者はプリンプリン大佐。

原作では自身の正義にかけて海賊は放っておけないとアーロンパークに襲撃をかけ、返り討ちにあつた海軍第77支部の准将兼司令官……の過去だ。

つまりは、正義感の強い、それなりに有能な海軍の人間だ。

現状、この平和な村周辺に、彼以上の戦力を派遣する余裕など海軍にはあるまい。ベルメールさんらも退役した海軍の人間、それもこちらは本部大佐、との接点や会話などそんなにある筈もなく……面識を作るのが精一杯だった。

何とか、原作の悲劇は回避したいものなんだが……所詮は、またしても偽善だが、なに、トボーン大佐風に言うなら、俺のモットーは『やらない善よりやる偽善』、って所かね。

偽善だからって、やらなけりゃ誰も助けられない。偽善でもやれば、誰か助けられる人はいるなら、俺はそれを選ぼうじゃないか。

## 第19話 - 将来展望（後書き）

原作を知るからこそ助けたい人もいる訳で

けど、原作で描かれる事だけが全てじゃない事もまた多い訳で  
その中でやれる事をやってみよう

主人公はその為に、結構見方によってはというか将来の作戦的には  
海軍に不利とも思える行動だっ取りますよw

## 第20話・シャボンディ諸島（前書き）

さて、グランドライン帰還して物語はまだまだ続きます

タイヨウの海賊団に関して修正する事にしました  
申し訳ありません

## 第20話・シャボンディ諸島

ルフィには既に家族がいない。

そうと知って、グランドラインへと帰還の際、連れて帰ってきたマリントフォードには海兵向けの居住地がある。当然ながら、ガープ中將も俺も滅多に使わないが、家がある。というか、家族がいない孫だつてなら家に連れてきてあげろよ、ガープ中將！

なお、俺の家は俺の趣味で、完全に日本風の家屋だ。

さて、帰還後は、出撃と帰還の繰り返しだった。

さすがに、この階級ともなれば、即座に昇進という訳にはいかない。まあ、余程の大物を逮捕すれば、そりゃあ昇進するが……。

とにかく、大佐という階級は案外と忙しい。

この階級となると、元の世界は知らないが、億越えの賞金首に対応する事になる。ルフィも億を越えると、対応したのは黒檻のヒナ大佐だった。

彼女の場合は、その戦法もあつて小型艦艇を用いているが、自分の場合は大型戦艦を用いている。

理由は単純で、俺の場合は自分の船に医療部隊やレスキュー部隊を載せているからだ。

小型の船は確かに機動性も速度もいいが、反面搭載量が限られる。武器弾薬、食料、飲料水を載せ、戦闘要員に航海要員を乗せれば、もう一杯一杯になつてしまふ。とても、医療部隊やレスキュー部隊に、彼らが使用する大量の医薬品やレスキュー用具を載せる余裕なぞありはしない。

実際、俺の戦艦でも一部大砲とその弾薬を降ろして改装、ようやとと載せる場所を確保したというのが実情だ。

まあ、そうはいつても、実際に海賊の被害に遭った場所や、或いは災害の起きた場所など海軍が駆けつける場所では非常に重宝して

いるせいで、2年余りが過ぎた最近では余所からの応援要請がある程だ。

こうして実績を上げてきた為、一部では最初から載せる場所と出動を容易にした艦を設計しようという話が出ている。いや、出ていたというのが正確だな。

海列車が完成間近であれば、海賊王の船を作り上げたトムさんを提案したかったが、まだ時間がかかるというか、今が追い込み時期らしく、さすがに無理があった。

……そうそう、つい最近、とある島で500人の兵士が人質になり、それを13歳の少年が事件を起こした海賊を殲滅して解決するという惨事が起きた。……事件ではなく、惨事といったのは、兵士もまた犠牲となったからだ。そう、分かる人はもう分かっただろう、後のCP9最強の使い手、動物系悪魔の実ネコネコの実モデル豹の能力者、ロブ・ルッチだ。

……いや、だからどうだって訳ではないんだが、矢張り原作の登場キャラクターの名前を聞くと、感慨深いものがある。

まあ、ルフィや海軍のお偉方とこれだけ接しておいて今更って気もするがね……。

さて、前述した新型戦艦だが、出ていたと過去形で語ったのは、実は既に建造が始まっており、初代艦長が自分に決まっているからだ。

この2年の功績で准将に昇進し、新造艦を任される事になった訳だが、しかし艦装員長として活動するには艦の進水まで、もう少し時間がかかる。かといって、これまで使ってきた戦艦は長らくの航海で大分あちこちが痛んでおり、乾ドックに上げてオーバーホール中。何しろ木製の艦体なので定期的なメンテナンスが必須なのだ。

という訳で、その間マリンスフォードから程近いシャボンディ諸島駐留部隊への出向という形になった。

……シャボンディ諸島か。  
あのクソつたれな奴らもやって来る場所だな……。

実は、この配属が決まったのは、センゴク大将らの間でアスラ大佐に、海軍が沈黙せねばならない裏を見せるべきという意見が上層部の間で出てきた為だった。

アスラが既に次期幹部として上上がるのはほぼ確定だ。

コング元帥の引退も、もう間近で既に一部の業務に関してはセンゴク大将への引継ぎが始まっている。

実を言うと、現在の海軍上層部は高齢化が進んでいた。

コング元帥もそうだが、3名の大将の内センゴク以外の2名、16名の中将の内半数以上が遅くともあと10年以内に次々と引退する事になると看做されていた。

センゴクが元帥に昇進して、コングの後を継ぐとなると、大将に至っては3名全ての席が空く事になる。

この内、大将は現在の中将から選ばざるをえないから、実は然程選択肢はない。だが、最終的に殆どの席が空く事になる本部中将に關しては、これからの海軍を支える人材から選出せねばならない。

それだけに、若い世代に期待が向いていた訳で、その有力な1人であるアスラには、背負う正義に反しながら、しかし、それを守らねばならない闇を今の内に、シャボンディ諸島駐留部隊の責任者は少将であるから、まだ上がいる内に経験させておくべき、という判断が下ったのだった。

無論、アスラとていきなり配属された訳ではない。

この諸島での注意事項、特に厄介なのはなにを置いても天竜人、そしてそれに比べれば遥かに劣るがヒューマンシヨップだ。

正義感で、その双方に無闇につっかかったらえらい事になる。

という訳で、まずはマリノフォードでシャボンディ諸島で気をつけるべき点に関して教育を受けた。

……正直、聞いてるだけで吐き気がしそうになった。

これまでの海軍の正義っていうのは自分の元の世界……日本での一般的な正義と同じだった。だが、このシャボンディ諸島は違う。いや……正確には天竜人が行く所全てがそうなるのだが、滅多にマリジョアから出てこない天竜人が割りとよく降りてくるのが、このシャボンディ諸島なのだった。

連中が黒と言えば、白でも黒。殺せと言われたら、子供でも殺せ。逆らったら、例えそれが天竜人がその相手の旦那や妻を奪ったりとかとにかく天竜人が全面的に悪かろうが、殺せ……おい、正義の二文字はどこにいった。

サカズキ中將には聞きづらかったので、クザン中將に相談した所  
『……悪法でも法は法なのよ』との言葉が返ってきた。

『悪法でも、法は法』か……古代ギリシアの哲学者ソクラテスの最後の言葉だな。

そして、ヒューマンショップに関してだが、要はここは奴隷売買所だ。

もちろん、この世界でも本来奴隷売買は世界的に禁止。それだけに、何でそんな処を守らねばならんのだ、というのが本音だが、ここに集うのは世界各国の王侯貴族。場合によっては天竜人まで加わるので治外法権として扱わざるをえないらしい。

……正直、精神的な疲労が激しそうな場所だ。心を殺さねばやっていけそうにない。

とはいえ、辞令は辞令。嫌だからやりたくありません、なんて言える訳がなく、シャボンディ諸島に赴任した。

ちなみに、アリスはマリノフォードに置いて来た。

寂しがってはいたが……何かの間違いで天竜人に出会って、『あの猫ちゃん欲しいアマス！』なんて事になったら堪ったものじゃない



い。俺の意思もアリスの意思も無視して、連れて行かれるに決まってる。そんな危険な可能性がある以上は、置いていかざるをえなかった。

しょうがないので、海軍の制服で危険地域を最近はうるついでいる。

最初は私服で行こうかと思ったのだが、責任者の少将から常に制服を着込んでおくよう通達された……というか、忠告を受けた。

つまりは、海軍の高官と分かる軍服を着ていれば、天竜人も自分の護衛を命じる事はあっても、その命令を聞いている限りはどうこうされる危険は少ない。

だが、もし私服の所で見つかって、気に入られでもしたら……過去には、実際にそうして、私服で出かけた所を天竜人と出くわして第1夫人だとか第1夫という形で連れて行かれた海兵とか、場合によっては気晴らしに撃ち殺された海兵がいたらしい。

それ以来、シャボンディ諸島では海軍所属の人間は制服着用必須となり、そうなる了一般の海兵では危険地帯に入り込むのは極めて危険な為に安全な極一部の地域のみが警邏地域となる。

かくして、諸島の大部分は海軍がノータツチな地域と化す。……成る程、海賊王の副船長、『冥王』シルバーズ・レイリーなんて超大物が安心して潜伏出来る訳だ。

まあ、俺には関係ない。

普通に制服のまま危険地域に入り込んで、戻ってくる生活を送っている。

当たり前だが、そうした地域に入り込めば、さすがに人攫いは海軍軍人を狙って襲ってくる事はないが、海賊なんかと出くわす事もある。人攫いにしたって、奴らに狙われてた女性とかが俺に助けを求めてくる事もある。

ちなみにそういう場合は、問答無用でぶっ飛ばす事に決めている。特に後者の場合、下手すると、どこぞのお偉いさんからの依頼でなどと抜かす危険があるので、奴らが口を開く前にこちらから先

手を打つて、『人攫いか』と呼びかけ、頷いたが最後全員全殺しにしている。……ああ、死人に口無しだよ、本当に。

海賊はまあ普通に仕事だから賞金そのまま出る訳じゃないが、それなりの馬鹿にならない額の報奨金が出るので叩きのめして、そのまま連行している。

俺は別に片端から逮捕している訳じゃない。

むしろ見逃している奴も多い。

本来なら逮捕しないとイケないような奴もいるんだが……ここじやもつと悪どい犯罪を各国の王族がやらかしてるからな。正直、やつてられるか、という気分だ。まあ、この諸島では静かに暮らしてる奴限定で、ここでも騒動起こすような奴は別だが。

お陰で、顔見知りの美味いメシ屋の親父とかが出来た。

この人も昔は何があつたらしいが……今は普通のメシ屋の親父だ。ちなみに初めて来た時は結構隔意あつたんだが、ここで代金踏み倒そうと暴れた海賊のボス（懸賞金1億5千万だった）を粉碎して、普通にメシを頼んだら、凄く気に入ってくれて……これを機に、この辺りで受け入れてもらえた、という事情がある。

そして俺は探していた、ある場所へようやく辿り着いた。

……『シャツキーSぼつたくりBAR』。

……名前は覚えてたんだが、どのグループにあるか完全に忘れてたので、探すのに随分時間がかかった。

いるかどうかは分からない、原作でも結構留守にしている事が多いようだったし……だが、上手くいけば、ここに彼が、生ける伝説シルバーズ・レイリーがいる。

さて、それじゃお邪魔しますかね……。

## 第20話・シャボンディ諸島（後書き）

という訳で、伝説達との出会いです

フィッシャー・ガイガーはもう少し修正する事にしました

## 第21話・伝説（前書き）

今回はのんびり

タイヨウの海賊団について、前話から削りました  
こちらは改めて書きたいと思います

## 第21話 - 伝説

開かれたBARの扉。

この辺りは一際人が少ない。まあ、そういう場所を選んで店を構えているのだろうか……。

シャッキーもまた、大海賊の1人だからだ。

そして、BARの中には、シャッキーと思しき女性がカウンターの中に。そしてカウンターには1人の男性がゆっくりとグラスを傾けていた。

その顔は間違いなく、手配書で幾度となく見た顔。

生ける伝説、シルバース・レイリー。

S I D E レイリー

久方ぶりにここに戻ってきた。

ロジャーがグランドライン一周を成し遂げ、海賊王と呼ばれるようになり……そして、その命が病で尽きる前にと団を解散して、はや7年余。

ローグタウンでの、あのロジャー最期の言葉から、今の世の中は賑やかになった。

『相棒、俺は死なないぜ?』

別れ際に言われた、あの言葉。

どういう事かと思っただが、死に際の彼の言葉を聞いて、大笑いした。

人は忘れられた時、本当に死ぬのだという。

本来ならば、海軍はあの処刑を持って、海賊が跋扈する時代を終わりにしたかったのだろう。海賊王と呼ばれた男さえ、海軍は捕ら

えるのだと、最早海賊王とて消え去るだけの存在なのだ……。  
だが、あの一言で、その思惑は雲散霧消した。

『俺の財宝か？欲しけりやくれてやる。探せ！この世の全てをそこに置いて来た！』

海賊王ゴールド・ロジャー。

その財宝が未だ不明だったのが、この言葉で世界中の男達に火をつけた。

あれ以来大海賊時代は幕を開けた。

……まあ、私はもう引退した身だ。今では、当時のクルーの大半もどこで何をしているのかも分からん。当時見習いだったシャンクスは既に一端の海賊として名を知られつつあるみたいだが……。

老兵は死なず、ただ消え去るのみ。

コーティング屋のレイさんと呼ばれるようになり、自分達の後に続く海賊達をレッドラインの向こうへと導いてきた。

ある者は名を上げ、またある者は消え……。

そうして、先日また新たなコーティングをしてやったのだが、この海賊は何とも無粋な男だった。要は、コーティング代金を踏み倒そうとしてきた訳だ。まあ、時折海賊の中にはおるな。元気でよろしい。

とはいえ、覇気をぶつけてやったら、船長以下全員気絶してしまっておったからな。連中の財宝を迷惑量込みで全額頂いて、そのまま賭場に向ったのだが、久方ぶりに大勝ちした。

数日をそこで過ごした後、気持ちよくここに帰ってきた訳だが……。

……  
そんな所へ、1人の客が来た。

その服装を見れば、一目瞭然、海軍、それも准将だ。

そういえば、最近この辺りで新しく来た海軍の准将が話題になっておったな。確かアスラ准将とかいったか。結構好意的な意見だっ

た筈だが……まあ、こんな所を1人でうろつけるのだから、結構な腕と思っていたが、成る程、これはなかなか……。

興味本位で軽く覇気を叩きつけてみたが、あっさりと受け流しおった。

「隣いいですか？」

思わず楽しそうな笑みを浮かべて、隣をどうぞ、とばかりに示した。

シャツキーも何やら面白そうな顔をしている。

「なかなか派手にやっておるようじゃないか？新人君」

「いえいえ、昔の貴方には負けますよ、レイリー」

ほ、分かった上でこの態度か。

答えは分かっているが、敢えて口に出してみる。

「儂を捕まえに来たかね？」

「やめときましよう。貴方がた2人相手にして勝てる気がまるでしませんし、ここじゃ凶悪犯罪者がおえらいさんで御座いとふんぞり返ってるみたいですからね。今更でしょう」

ニヤリと笑って返してきた。

何だか楽しくなって笑い声が洩れた。こやつが言っておるのは、明らかに天竜人の事だろう。

まあ、連中はこうした若い、まだ海軍の正義を信じれる世代からすれば嘖飯ものじゃろうからな。

「で、それでは儂に何の用かね？」

そう問いかけると、何やらこやつ懐に手をつ突っ込んだ。何を出すのかと思いきや、分厚いメモと筆記用具だ。それでどうするのかと思いきや……。

「ほう、ロジャーの頃の裏話が聞きたいと？」

「ええ……こういうのは裏話の方が面白い。海軍の方は割かしガープ中將が話してくれるんですが……海賊の、特に海賊王と呼ばれた人の事なんて聞ける人は限られていますからね」

成る程、裏話か。

確かに、表立ってはこう言われていたが、実の所自分達は……そんな事は結構あったな。

まあ、傍目には落ち着いてても、内心はパニック寸前だったなどよくある話だ。

「まあ、今じゃ時効って事だけでもいいから聞かせてほしいんですよ、無論、秘密にしておきますから。……例えば、ゴール・D・ロジャーとポートガス・D・ルージユの馴れ初めとか」

その言葉に一瞬間があいて、それから内心で驚愕した。

何故その事を知っている？

ガープが話したか？……いや、あの男はああ見えて、存外に口が堅い。話すべきではないと判断した事は断じて話すまい。……そもそも話して、奴の立場がよくなるような話ではないのだ。

「ああ、エースは元気ですよ。今はマリンフォードの俺の家にいます……ガープさんの鍛え方が無茶苦茶でねえ」



……一瞬、人質代わりにでもする気かと思ったが、気配からして、  
どうやら本気でその気はなさそうだ。

あくまで、引き取った一人の子として、語っている。……まあ、  
ガープの無茶苦茶ぶりには笑わせてもらったし、同時にガープらし  
いとも思った。

しかし、1つ確認の意味を込めて、尋ねてみる。

「しかし、君はエースの事を海軍に突き出そうと思ったりはしな  
いのかね？海軍は今でも完全に諦めた訳ではないのだろう？」

そう、そうすれば、彼自身の出世には大きな鍵になる筈だが？  
さて？

「何故です？……別にロジャーがどうしようが、エースには何の  
責任もないでしょう？親は親、子は子。エースが世界に何をしたん  
です？」

それを聞いて思わず笑ってしまった。  
久方ぶりに、白ひげのような物言いを聞いた。  
シャッキーも笑いを堪えているようだ。

「ふむ、良かるう。そうだな、それじゃまずは……」

シャッキーが用意した酒とつまみを目の前の……アスラ准将に出  
す。

それを見ながら、その晩は久方ぶりに昔に、ロジャーが生きてい  
た頃に思いを馳せた。

## 第21話・伝説（後書き）

という訳で、結構あっさり会えました

というか、延々引き伸ばしたりするのもどうかと思いましたので……  
さて、次回は……いよいよ連中が出てきます

## 第22話・天竜人（前書き）

失われた時代って何でしょうね

オハラ of 学者達が真実を知ったと判断された途端の、五老星のあの態度ですから、まあ、大体想像つきますが……

## 第22話・天竜人

先だつてのシルバース・レイリーとの話は楽しいものだった。

ぼつたくりBARとありながら、シャッキーは別に法外な金を要求したりはしなかった。至極美味い酒とつまみで、至極良心的なお値段……つまりは、ああも堂々とあんな看板を上げているのは、余計な輩がやって来るのを避ける為なのだろう。

もし、想像通り彼女もまた大海賊の一味というならば、本人が生活していくだけの金は十分持つていてもおかしくないだろうと思えるからだ。

……レイリーは、まあ浪費すれば、どんな大金があってもきりがないという事なんだろう、きつと。

そして、今日は……最悪の気分だった。

傍若無人、正義の名を目の前で踏み躪られながら、こちらは手が出せない相手。そう、天竜人の来訪だ。

天竜人。

どうもこいつらには何かありそうだ。俺自身はまだまだ予測だが、本当はこいつらこそが世界を今のようにした、元凶だったんじゃないかと考えている。でなければ、オハラがそうであったように、ああも過去を徹底的に、それこそ失われた時代を研究したら抹殺するまでに封印したりはしないだろう。

本当に天竜人の祖先こそがこの世界を救ったりしたならば、堂々と研究でも何でもさせればいいんだ。

内心では、そう思いながら、今俺は目の前を歩いてきている天竜人の前に整列している。それも、駐留部隊の司令官である少将の横で。

実の所、このシャボンディ諸島の駐留部隊司令官という職は普段

は楽な職だ。

治外法権の場所が多い、手が出せない場所が多い、しかも、それらは治安が悪いからではなく、世界政府がそうするように命じているも同然、という事は逆に言えば、見回りとか治安維持しなければならぬ場所が少なくてすむ、という事でもある。

犯罪起こすような連中にした所で、そうした場所だけは神妙にしているか、入らなければ後は自由なんだから、普段は住み分けが出来ているから、治安責任のある場所での騒動は実は滅多に起こらない。

時折、どこぞで海賊が暴れているという通報があった時とかは、さすがにそれ以外の場所でも出撃しなければならぬが、それでさえ通報がなければ放置出来るし、そもそも下手すれば海軍本部大將まで出てきかねない場所で、本当の意味で大物や期待のルーキーに属する海賊が騒動起こす訳がない。

原作のルフイは……あれは例外だ。ルフイとて、ケイミーが攫われ、尚且つヒューマンショップで天竜人が出てきたりしなければ、あんな大騒動にはならなかった、しなかつただろう。

なので、普段は暇で、その一方重要な場所だから、実入りもでかいという……まあ、そうは言っても逆に僅かな仕事がある時は迅速で確実な仕事をしないといけない場所でもあるから、海軍も本当に不真面目な輩は責任者につけたりしないんだが。

お陰で普段は楽な職場なんだ。

責任者の少将も真面目に仕事をする人だから、昼前には大体書類仕事なんて終わってしまうし、後は見回りという名の仕事ぐらいしかないんで、前の時のように自由にうるつきまわる事も出来る……今日のこんなイベントを除けば、ね。

まあ、前の世界のサラリーマン時代もあった事さ。

気に喰わない上司の怒鳴り声に、表立っては神妙な表情して腹の中では盛大に文句を言っていたり、殴り倒したくなるような嫌味や要

求、無茶苦茶なクレームばかり言ってくる取引先や客に表だけは申し訳なさそうな顔して、頭下げたり……。

ストレス溜まる話だが、よくある事だった。それと同じさ、今日一日の我慢我慢……。

……なんて思ってた時が俺にもありました。

(……ぐああああああ、腹が立つ！)

ストレスが滅茶苦茶に溜まる。

元の世界の上司や取引先なんて考えたのが拙かった。むしろ、元の世界で言えば、江戸時代とかの参勤交代の大名相手とかそういうレベルの話だと考えるべきだった。

時代劇とかで本とかで見た事はないだろうか？『下にい〜下にい〜』とか言う先触れと共に長い行列作って行進して、その両脇で農民とかが平伏してるアレだ。

うん、正にアレだ。

アレも、前を横切ったりしたら、『無礼者！』で斬られたりした、出来たらしいからねえ……。

何が言いたいかというと、先程の話なんだが……。

- 1、小さな子供が1人天竜人の前を走り抜けました。
- 2、怒った天竜人がその子供を捕らえさせて、撃ち殺そうとしました。
- 3、母親が出てきて、命乞いをしました。
- 4、その母親が相当な美人だったので、天竜人がその女性を『第14夫人にしてやるえ』とか言いだしました。
- 5、もちろん、子供はそのまま放置状態で、母親だけ強制的に連れていかれました。

……辛い。

周囲の人から……駆けつけてきた父親（父親も泣きながら悔しげに俯いて、でも子供を離さなかった）に抱きしめられながら、母親を呼んでいた子供の姿が、連れ去られながら子供と夫を呼ぶ母親の姿が……物凄く辛い。

周囲から浴びせられる憎しみの籠った視線が凄くきつい。それでも、俺らは、天竜人のすぐ後ろについて歩む俺らは顔を歪めたりする事は出来ない。

気配から探っても、海兵らは殆どが何とも言えない雰囲気か漂っている。

……ここら辺が困った話だ。

不良の海兵、人を踏み躪っても平気で、金や出世の為ならゴマをすれるような輩ならこういふ場所は正に望む所なんだろうが、そんな人間は逆に何かあったが最後大問題になる、ここには配属されない。

結局、真面目に仕事が出来た奴が配属される訳だが……そういう奴は『正義』という奴をしっかりと胸に持った連中が多いから、こんな光景を見せ付けられる仕事は非常にストレスが溜まる。ここでの仕事は基本海軍本部から交代で配置されるらしいが、成る程ごもつとも……こんな仕事をずっと配置させられ続けてたら、精神がもたんだらう。

ちらりと先程見えた背後で握られた少将の手も強く握りすぎて、色が白くなっていた。

本当に精神衛生上、悪い場所だ。

このまま、ヒューマンショップという名の奴隷販売所（ここは外での警備だ……中では奴隷売買そのものが行なわれているから、海軍は入らない）まで何事もなければいいと思っていたんだが……。

平伏していた、ある男が脇に置いていた売り物と思しき果物の籠。そこから1つの果物が転がり落ちた。

……普段なら特に問題は起きなかつただろう。  
……それが天竜人の足元に転がって、踏み潰してしまう事にならなければ。

本来なら、謝るのは踏み潰した側だ。だが……ここではそれは当然嵌まらない……！

「貴様……」

睨み付けた天竜人の手が腰の銃へと伸びかけて……いかん！

そう思った時には、既にこちらの体が動いていた。とはいえ、この場で、天竜人を殴り倒す訳にはいかないのです、果物を転がしてしまった男の方を地面に叩きつける。

「天竜人様に何を失礼な真似をしている」

とにかく声だけでも……サカズキ中将の怒っている時の声を真似して、冷徹に聞こえるように、声を出してみる。

叩きつけられて、呻き声を上げる間もなく気絶した男の姿に天竜人は腰に伸ばしかけた手を止め……。

「ふん……気が削がれたえ」

そう言つて、気を失った男の体でぐりぐりと靴の汚れを踏み躪るように拭つてから、再び歩き出した。俺も何も言わず、黙つて天竜人の背後につく。

……まあ、実の所男自身への打撃はそう強いものじゃない。むしろ、気絶させるのを優先したから、見た目の派手さに比して、怪我とかは負わせたりしていない。しばらくしたら目が覚めるだろう。

あのままだと間違いない、射殺されていただろうから……。

ちなみに、ヒューマンショップに着いて、外で警備を始めた後、



少将から『危険な事をしたな……だが、よくやった』と褒められた。どうやら少将には気付かれてたみたいだな。

結局、この後は連れて行かれた女性の姿に気持ちが塞いだものの、特に何事も起きずに終わった。

え？ 奴隷？ いた事はいたんだが……凶悪な面構えで、手配書で見た覚えがある遊び半分の大量虐殺、拷問やら悪逆非道で有名な海賊だったんだ。同情する気も奴の顔見た途端になくした。

……けど、むしろ翌日、見覚えのある顔、昨日果物を落としてしまった、あの男性から『ありがとうございました、お陰で昨日は助かりました』とお礼を言われた時の方が辛かった。

……やめてくれ、何も出来なかったんだよ、俺は。

そうして、俺はこの日を最後に、駐留部隊の交代に合わせて、マリンフォードへと帰還する事になった。

## 第22話・天竜人（後書き）

という訳で、天竜人との邂逅でした

現実世界でもストレスは溜まりまくります…本当に

第23話・マリージョア襲撃（前編）（前書き）

今回は前後編です

## 第23話・マリージョア襲撃（前編）

あのクソつたれな連中との邂逅から1年程。

原作まであと13年程の日。

マリンフォードに緊急召集がかかった。

説明を聞きながら、思い返していた。

あくそういえば、あったねえ。冒険家フィッシャー・タイガーによる聖地（？）マリージョア襲撃事件。

無論、そういう事件があったのは覚えてはいた。

けど、誰かに言う事はなかった。

言った所で、馬鹿げてると思われるのがオチだろうし、どうして知ったのかと思われる可能性もあるが、何より。

（ざまあみる）

天竜人へのそんな想いが最大の理由だったんだが。

とはいえ、出撃はしなければならない。

先発は光速移動が可能なボルサリーノ中将。

続いて、剃と月歩が可能な人員が続く。

更にその後に部隊を率いて海軍の本隊が続く。無論、俺は第二陣だ。指揮官じゃあない。悪魔の実の能力者ではない中将クラスには六式使いが多く（原作のモモンガ中将とか）、彼らが指揮官となる……けど、単なる剃と月歩の使い手ではなく、結果的に熟練の六式使いのみが第二陣に集められた理由がよく分かる。

夜の闇の中、空中を駆けるのは酷く危険で恐ろしい。剃と月歩を覚えただけの新人じゃ無理だろう。

下手すれば位置感覚を間違えて海にドボン、高度を上げるのを間違えればレッドライン大陸に激突する。

幸いなのは、しばらく駆けていると真っ赤に燃えるマリージョアが見えた事だ。こう言っちゃなんだが、いい目印になる。

熟練者ばかりな事もあり、何とか全員無事にマリージョアへと到着した。

ああ、怖かった。

さすがに中将クラスは顔に出さないが、結構ほつとした様子の人や疲れたような様子の人も見られる。

とはいえ、ここからが本番だ。

中将からの命令は簡単だ。

最大の目的は天竜人の保護。

次の目的として暴れている連中……まあ、大抵は解放された元・海賊連中だが、そいつらの排除。

この事件を起こした犯人は、この時点ではまだ判明していないから、名前も何も上げられないし、俺も言うつもりはない。

問題となったのが、それ以外。

ここに連れて来られた一般人の扱いだった。

彼らの中には天竜人に無理やり連れてこられた者も多い。そうした人々がこの事件を最後の希望として、いちかばちかの脱走にかける可能性は……十分にある。

ただまあ、運が良かったのは、ボルサリーノ中将が保護した天竜人の言葉だ。

『逃げ出したような奴隷なんぞいらんえ!』

まあ、そうした人達を救助する事自体は当初予定通りだったんだが、その言葉のお陰で大分気持ち的に楽になった。

無論、連中からすれば……。

『逃げ出した奴隷なんぞに構うぐらいなら、自分達を助ける！』  
とか。

『あいつらなんぞどうなってもいいから、自分達が怪我しないようしっかり守れ！』という事だったんだろうが……。

こちらとしては、その言質を有効に活用させてもらう事にした。

まあ、中将らは保護と言っていた訳だが……。

『間違えて逃がしてしまった場合でも、特に問題とされる事は無いぞい』

と、わざわざ言う辺り、本音が出ていると思うんだ。

それに他の中将らが何も言わなかったのも。

まあ、自分の勝手な判断かもしれないが、そう言ったのがガープ中将だった辺り、当人はそういうつもりで俺達に言ったんだと思うんだけどね。

実の所大部分の天竜人は自宅地下の安全な場所……要はシエルタに逃げ込んでいるらしい。

ただまあ、外に出ていたりして、街を逃げ回っている天竜人が保護対象となる。

……そういえば、この事件の折に、蛇姫達も逃げ出したんだよな。彼女らのイベントに絡めないかとも思ったが、どこで攫われたのか、何時攫われたのかがはっきりしなかった。何しろ、ハンコツクの現在の年齢が分からない。それが分かれば、まだ多少は推測も出来たんだが……。

ただ、今起きていると考えると、彼女の年齢は原作開始時点で16+14で30歳……うーむ、ルフィって17なんだよな。彼に惚れるまで男と縁がなかったとすると……やめよう、何か背中に悪寒が走った気がする。

どうせ誰が相手でも、ナミだろうとロビンだろうとルフィより年

上だ。

それに出くわすかどうかは疑問だ。

このマリージョアは今に至る所で炎に包まれているが、かなり広い都市であり、それだけに海兵も分散して動いているが、尚力バ―しきれない。

俺が彼女らに出くわすかどうかは疑問だな……と知っている間に、襲われている女性を発見した。

ハンコックらではない。1人だけだし。

襲っているのは海賊と思われる奴だな……。

うん、さくつと倒しました。

しかし、この女性どこかで見た覚えがある……爆弾入りの首輪もしていないし……思い出した、彼女は……1年前助けらなかった、あの連れ去られた女性だ。何という奇遇な。

話を聞けば、これが最後の機会だと決死の思いで逃げ出したのだとか。

「……確かに、食べ物も衣服も生活は贅沢なものでした……でも、私達は人とは見られていないんです。天竜人の方々にとって私達は単なる物なんです」

確かにそうかもしれない。

……人が人として見られないのは辛い。そして、物である限り、何時捨てられるか分からない。特に連中は飽きるのも早そうだし。そして、飽きたらどうなるか……考えたくはないだろう。いや、実際に飽きられた妻が捨てられるのを見た事があったらしい。

だから、見逃してくれ。夫と子供の元へ帰らせて下さい、と必死に頭を下げる女性の姿を見ては……元々助けるつもりだった俺としては、その手助けをする気になったのはしょうがないじゃないか。

「おお〜その人を逃がすのかい？」

！何時の間に……いや。

この人なら、こっちが気付いた時には、もういてもおかしくないか……何しろ。

「……ボルサリーノ中将……」

光の速度で動くのだから……この人は。

「逃がすのなら〜あつちに逃がすといひよ〜？下っ端の為の船着場があるからねえ〜今なら持つて行き放題だよ〜？」

おや？

「構わないのですか？」

「構わないよ〜？わつしは天竜人様からは奴隷とかどうでもいい、つて聞いたしねえ〜。ただまあ、天竜人様を見つけた時は、そちらを優先すると、天竜人様から引き渡せつて言われた時は従うようにねえ〜？」

「はい、それは了解致しました」

「おお〜それじゃ、またねえ〜…八咫鏡」

と言うのが早いか、ピカリとした輝きと共にボルサリーノ中将の姿は消えた。

……さすが、雷と並んで最速の悪魔の実の能力者。

とりあえず、彼女を抱えて即効で移動した。何しろ言われた通り、



天竜人と出くわしたら、そちらを優先せざるをえない。となれば、その前に連れてゆく！

幸い、そちらへ移動すると、今しも船で脱出しようとする奴隷達  
がいた。

海軍の姿を見て、怯えていたが、俺が捕まえる気がない事と、彼女を頼む旨を伝えると皆割りとするなり了承してくれた。……折角なので、彼らの首輪も外しておいたら、泣いて感謝された。

爆弾つき首輪だが、俺の能力は液体金属だから、鍵穴から流し込んで操作すれば、鍵開けも可能なだよ。

第23話・マリージョア襲撃（前編）（後書き）

という訳で、当初はどうしようか迷っていたマリージョア襲撃編です  
ハンコック達はどうしましょうかねえ……と悩み中

一応出す予定ではあるのですが

第24話・マリージョア襲撃（後編）（前書き）

それでは後編をお送りします

## 第24話・マリージョア襲撃（後編）

燃え盛る街の中、2つの人影が対峙していた。

無論、片方は俺だ。

何故、こうなったのか……それは少し前に遡る。

あの女性を船着場に送った後、俺は街を駆けていた。

そうした中、少女らを引っ張る男を発見した。

……問題は、その男が海賊ではなかったからだ。おそらくは天竜人の護衛か下働き。そうすると、あの少女達は……。

「……天竜人の奴隷か」

助けるのは簡単だが、奴の口から天竜人に海軍が奴隷を逃がしたと伝わっても拙い。

となれば、口封じしかあるまい。

そう思った時。

陰から動いた巨漢が、正に瞬殺、といった風情でその男をぶちのめした。……頭が爆ぜている。即死だな。

とはいえ、これであの少女らも助かるか？と思ったのだが……。

「その男、出て来い」

……気付かれていたか。

すっ、と陰から姿を現す。隠れていても、この場合相手からの不信を煽るだけだろう。

「……海軍か」

炎に照らされたその姿を改めて見てみれば……魚人だった。  
何か妙に嫌な予感がするのだが……。

「俺はアスラ、海軍本部准将……お前は？」

「ワシはフィッシャー・タイガー……冒険家だ！」

そう言っただけを取った。

こちらにも彼の戦意に体が反応する。

くそ！矢張りそうか、こいつがフィッシャー・タイガー……この  
マリージョア襲撃の張本人か！

……とはいえ、彼が俺に対して戦意を示す理由は分かる。

彼らからすれば、俺達海軍は天竜人の奴隷みたいなもんだらう……  
完全に否定出来ないのが悲しいが。

そして、普通の意味での奴隷と違い、奴らの手足となって力を振  
るう……ある意味連中のような相手からは一番に嫌われる相手だ。

だが、俺としてはこいつらを逃がしてやりたいが……。

くそ、フィッシャー・タイガーの気配が……強い。これは……そ  
んな手加減なんかしてたら……死ぬな。

この体になって以来、死とは随分遠い感覚になっていたが、久方  
ぶりに感じる死の気配。

しかし、妙なもんだ……この世界に初めて落ちて、怪物みたいな  
奴に追い回された時は、もう生きる事に必死で、何も考えられな  
かったものだが……今は、笑みが浮かんでくる。

互いに踏み込み。渾身の一撃を見舞う。

「拳砲！」

「鮫瓦正拳！」

っ！矢張り、この漢も覇気使いか……っ！  
そして、この圧力。  
双方の渾身の正拳突き同士が激突し、双方が弾かれるように距離を取る。

「銀槍！」

「魚人柔術、空気投げ！」

くお、俺の水銀の槍が投げつけられた空気の砲弾に軌道を逸らされる……！

原作でジンベエが海流を掴んで投げていたが、空気まで投げるかよ……！

互いの最大の武器は格闘。どちらともなく、互いに距離を詰める。

「指銃・黄蓮！」

指銃を連射するも。

「魚人空手、鮫肌掌底！」

それもまた弾かれる。

「魚人空手、五千枚瓦正拳！」

！しまった、この位置からだとは避けきれない……っ！

「鉄塊・剛！」

くお！？最強の鉄塊で尚衝撃が来た……っ！

頭がグラグラする……くそ、これでも拳割れてないのか。

とはいえ、向こうも自分と互角に遣り合ってるせいで、警戒して  
るみたいだな……実際には若干こちらが押されてるぐらいなんだが、  
こっちが増援が来る可能性があるのに対して、向こうは1人だ……  
なら、話し合いの余地はある、か？

「待て！お前海賊じゃないと言ったな？」

「……そうだ」

一瞬迷ったらしい。

確かに、彼は、フィッシャー・タイガーは今海賊ではないが、  
この後タイヨウの海賊団を旗揚げする。……マリージョアを襲撃し  
た彼では、それしか道はなかっただろうが……。

「我々が受けた命令は、天竜人の保護と、暴れている海賊の討伐  
のみ、だ。奴隷とされていた人々やそれ以外の人達を捕らえろとい  
う命令は一切受けていない」

「……………」

さあ、どうする？

時間は俺にとっては味方だが、お前にとってはそうじゃあるまい？

「……よかるう。ならば」

とフィッシャー・タイガーが応えかけた所で、俺は手を上げ、彼  
の言葉を遮る。

……電伝虫だ。一体何が？

「はい、アスラです」

『アスラ准将か、センゴクだ』

何事かと思いきや、センゴク大将の命令は、本隊の到着、展開が始まった連絡と共に、俺にマリンフォードに戻つての出撃を命令するものだった。無論、俺1人ではなく、既に幾人かに連絡が行っているらしい。

理由は簡単で、既に逃げ出した奴隷達の内、一定以上の大物達は小物をカモフラージュに既に脱出したらしい。そいつらを追撃しなければならぬ。

出撃命令が下った名前を聞けば、ボルサリーノ中将、クザン中将、オニグモ少将、モモンガ少将、ストロベリー少将……逆に残留の面々を聞けば、引退間近の大将や中将の名前がズラリ……成る程。バリバリの現役を前線に回して、後方と化しつつあるこの場所には名前のある、つまりは天竜人に手を抜いていませんよ、と思わせる面々を置いておく、と……。

如何に老いたりとはいえ、残ってる小物程度どうにでもなる、という所か……。センゴク大将とガープ中将はこちらに残るみたいだが、これは2人の名声ともし厄介な奴が残っていた時に対応する為だろう。

「了解しました」

『頼んだぞ、既にボルサリーノは向った』

さて……。

「という訳だ、どうする、フィッシャー・タイガー。もう、海軍は本隊が到着したぞ」



「……成る程な、そろそろタイムアップという訳か。まあ、俺はどうとでもなるが……」

あ、さっきの少女達か。

俺達の戦闘の余波で動けずにいたらしい。というか、長女と思しき女の子、物凄い美少女だな……って三人組？まさか……。

「……ボア・ハンコック？」

「っ！何故、私の名前を……！」

ああ、まだこの頃は、私なんだ……と、ふと思った。

何で、こつも原作の人物達と遭遇するかな……。

「……すまない、フィッシャー・タイガー。シャボンディ諸島までいい。彼女らを送ってやってやってくれないだろうか」

言いつつ、彼女らの首輪に水銀を伸ばし、鍵を外す。

足元に転がった首輪に彼女らは驚いたように、そして首を撫で……姉妹同士で抱き合って泣き出した。

「……人間は嫌いなのだが……だが、よかるう。これも何かの縁という奴だろう」

急いで簡単に手紙を書き、13番GRに彼女らを届けてくれるよう頼む。

……13番GR、そう『シャツキーSぼったくりBAR』だ。レイリーがいれば問題ないが、いなくてもシャツキーだけでも何とか……匿ってくれるぐらいはしてくれ、と思う。思いたい。

そうして、俺はそのまま出撃し……それから一月。

ハンコックから三姉妹はマリンフォードの俺の屋敷にいる。

……あれ？

第24話・マリージョア襲撃（後編）（後書き）

という訳で、ハンコックさん達登場です

矢張り人気が高いみたいですねー

無論、彼女らの背中には竜の足跡が押されています

彼女らが主人公の屋敷に入るまでは……次話にて……出せるかな？

## 第25話 - 後始末（前書き）

襲撃事件の後の顛末です

ユニークアクセス5万突破！

PVアクセス50万突破間近！

感謝です！

## 第25話 - 後始末

さて、何故ハンコックらが俺の家にいるのか。その辺を語る為には、少し時間を遡らねばならない。

今回の出撃には各自が快速船を使用した。

当然だ、追撃戦闘となるのに大型の戦艦を使用する奴はいない。脱走した海賊達の再逮捕もしくは殲滅そのものは迅速に行なわれた。

捕らえられた海賊達は、天竜人が希望した場合はその元に戻られ、希望しない場合はインペルダウンへと送られた。……もつとも、どちらも海賊達にしてみれば選びたくない選択であったのは間違いなく、尊厳ある内に命を絶つ事を選んだ者は多かった。

まあ、海賊という道を進んだのも、こうした結末となったのも彼らの選択の結果だ。

おおよそ2週間。

一通り、逃げ出したと思われる海賊を討伐し終えた時には、それだけの時間が過ぎていた。

今回出撃した一同には交代で休暇が出た為、自分の順番となった際に気にかけていたシャボンディ諸島に向った。……まあ、結果から言えば、シャッキーさんが彼女らをバイトとして雇い、途中からはレイリーさんもいてくれた。

とはいえ、ハンコックからも相当迷ったらしい。

フィッシャー・タイガーは約束通り、シャボンディ諸島までは送ってくれたが、そこからは一切関与してくれなかったらしい。

まあ、仕方ないと思うが。

そうして、俺は海軍だ。その海軍から渡された逃避先……確かに疑う余地は十分だろう。

行ってみれば、海軍がお待ちかねで、そのまま天竜人に引き渡されたら……そうも思ったらしいが、結局の所『行き先がない』という点が大きかったらしい。

彼女らは九蛇海賊団の一員だ。例え、捕まった時が見習いだっただとしても、それは変わらない。そうして、彼女らの本拠地アマゾン・リリーはカームベルトの真っ只中。通常の船では命がけの航海になる。……少なくとも、彼女らの航海術と入手可能な船程度ではどうにもなるまい。

だからこそ、もし、騙されたのなら、その時はせめて九蛇の一員として恥じない最期を、とまで覚悟して向って今に至る、と。

……確かに、疑って来ない可能性もあつたんだよな。まあ、結果良ければ全て良しとしよう。

さて、ここに到着して更に驚いた事があつた。

……彼女らの背中だ。

天竜人の奴隷にされた人々の背中には『天かける竜の足跡』とか抜かす焼印が押される。……酷い話だよ、本当に。

だが、今の彼女らの背中には……。

「これは……刺青、なのか？」

彼女らの背中には或いは美しい華が、或いは獰猛な蛇が、という具合にそれぞれに違った形で描かれていた。

「驚いたかね？」

「さすがに」

レイリーさんが話を振ってくる。

どうにも、彼とは話があう。理由は分からない、俺が見た目20

代でも中身は40突入したのもあるのかもしれない。

「まあ、あれだ。天竜人の奴隷から逃れたいと思う者は想像以上に多いという事だよ」

それは当然だろう。

「そうして、彼らが今のようになったのは何時からだと思うかね？」

少なくとも結構な時間が過ぎているであろう事は想像がつく。

世界政府が成立、というか、この世界に来て改めて歴史を確認したが、今の政府が成立したのが800年前。その時の20人の王の子孫が天竜人な訳だが……さて、人が腐敗せずにいられるのはどれくらいだろうか？

権力を握った輩は腐敗する。

最早、これは必然とわかっていい。

増してや、彼らが握るのは世界の権力だ。最初の頃は真実を知っている者も多いだろうが、200年も経てば、その気になれば本当の歴史は隠蔽出来るだろう。

そうして、権力闘争を泳ぎきった連中やその子供ぐらいまではまだ、自分達の権力の脆さも自覚出来ているだろうが……何時しか元の世界の中世の貴族というものがそうであったように、何時しかそれを当然の権利と考えるようになっていくものだ。

元の世界での古代中国が割りと分かりやすいだろう。

大体2000年から3000年。そのぐらいで大きな勢力を誇った王朝、例えば漢も前漢がおおよそ2000年、後漢も2000年程度。唐や明もそのぐらいで、滅亡を繰り返している。

裏を返せば、それぐらいあれば腐敗するには十分だという事。

さて、現在の世界政府は成立して800年。

そうだな、300年ぐらいした辺りで、今の天竜人の行為が当たり前になっていったと考えると……500年か、それでも長いな。そんな事を考えてながら聞いているレイリーさんの話は続いていた。

「まあ、正確な数までは分からんが、奴隷にされた人々の中にも逃げ出す者はおる。大抵は殺されるが、中には運の良い者もおる。そうして、元の数が多く、長い時間があつたが故にその数もそれなりの数となる」

それはそうでしょうな。

レイリーさんの話によれば、そうやって逃げ切った人々が一番苦しむのが矢張り背中足跡なのだという。

これがついている限り、その人は天竜人の奴隷という立場から完全に逃れる事が出来ないからだ。

何時しか、それを何とかしようという者達が現れた。

これもまた当然だ。逃げる事が出来た当の人々、或いはその家族や恋人。彼らに同情した善意からの人間もいるだろうし、単純に商売の気配を嗅ぎ取ったような奴もいるだろう。

とにかく、工夫を重ね……長い時間をかけて、彼らはそれを、背中の足跡を元に芸術として仕上げる事で偽装する形に完成させた。

タイヨウの海賊団が後に焼印を重ねて、足跡を太陽へと変えたように、彼らは足跡を元に背中に刺青という形で芸術へと変える。

無論、ばればれば天竜人ひいては世界政府から海軍に追われる事になるのは確実なので、彼らは深く潜んでいる。

……原作のハンコックらが彼らに接する事は逃げ出した当時は殆ど不可能だっただろう。彼らとて、本来ならば網を張って、逃げ出した奴隷達の前に密かに姿を現すらしいのだが、今回は逆に大規模すぎて出るに出来なかった。

こっそり、なら海軍も動かない。だが、今回は派手すぎて海軍も



大規模に動き回っている上に、逃げ出した数が多すぎる。

かくして原作では彼らの事は知られないまま、ハンコックらは世界の海を彷徨い、やがてニヨン婆と出会い、アマゾン・リリーへと帰還する事になる、と……。

そんな連中がいるって事を知ってれば探しもするだろうが、知らないから彼女らは以後10年以上に渡って、怯え続けたって訳か…。

一方、レイリーやシャッキーは当たり前のように、彼らの事を知っていた。

なので、ハンコックらがここに逃げ込んだ後、彼らの事を話した上で『どうするかね?』と尋ねたらしい。

……原作での事を思い返せば、彼女らがどう応えたのかは予想もつこうというもの。

かくして、レイリーさんが彼らに繋ぎを取り、ハンコックらの背中から足跡はその姿を消した……いや、正確にはわからなくなってしまった、というべきか。

見事なものだ。

「さて、アスラ准将。ここからは取引としての意味合いもあるのだが」

「何でしょう?」

「彼女らを君の家に置いてやってはくれないかね?」

「……理由を聞いても?」

要は一番安全な場所だという事だ。

まあ、普通逃げ出した天竜人の奴隷が、マリンフォードの海軍将

校の家で暮らしているとは思うまい、との事。

まあ、確かにそれには同意だ。

加えて、まあ、俺が引き受ければ、この事を知っている当人の口からも洩らしにくいだろう、との事。

あー……匿ってる時点で、彼女らの事ばらせば、俺が処罰されるって事か。

そうだよな、天竜人の奴隷を家で世話してるってのがばれば、それは確かに処罰の種になるよね。……まあ、それさえばれなければ、問題はない。彼女らにはまだ賞金なぞかかっていないからだ。

見習いの内に捕まってしまったので、まだ悪事なんぞ働いてもいいし。

後は、彼女らを引き取った理由づけだが……まあ、これは問題あるまい。ここで、俺が海賊か人攫いか分からないが、女性が襲われていたので助けました、彼女らは帰る場所もない、との事なので当面引き取りたいのですが。そう言えば、許可は出るだろう。

こう言っただけだが、彼女らは美少女だ。後にはああなるマリィーゴールドも、今はまだ体型普通だし。

「ふむ……いいでしょう。彼女らが了承さえするのならば」

「そう言ってくれると思っていたよ。彼女らは既に承諾済みだ」

……さいですか。

しかし、何故俺の所に来る事了承してくれたのかね。

……まさか俺に惚れた？……いや、まさかね。

とにかく、そうした理由で俺は彼女らを家に置く事になった。海軍本部には前の通り、シャボンディ諸島で人攫いか海賊かは不明だが襲われている女性を見つけたので救出した、と言っただけならOKが出た。相手は粉碎したのでペースト状になったのなら回収し

てきますが、と言ったら『いらん』と言われました。……まあ、この辺は俺がシャボンディ諸島に出張中、結構な数の海賊やら人攫い潰してたので、『ああ、またか』『（女性に関しては）そういう事もあるだろう』と思われたらしい。

以後は普通に彼女らは俺の家で……本当にかいがいしく働いてくれている。というか家事をこなしてくれている。彼女らの笑顔を見ていると、俺も元の世界で見ていた原作の悲劇を少しは変えられたのかな、そう思いたくなってくるな……いや、そうじゃない。

悲劇を変えていくんだ、俺の手の届く範囲だけでも。改めてそう誓えるだけの価値はあった。

……しかし、なんだ。これはルフィ×ハンコックのフラグへし折ってしまったかね。

ガープ中將がアレなので、家にいる3歳のルフィの面倒を案外手馴れた様子で相手しているハンコックを見ながらそう思った。

## 第25話・後始末（後書き）

中身の人は日本人な訳です

さて、原作を見てみると、原作キャラで年齢的に合う人って案外少ないんですよ

ロビンが原作開始で28ですから、これぐらいなら問題ないにせよ、ナミだと18歳です

現代の日本で30台まで育った人間がナミぐらいの年の子、それも小さな女の子の時代を知ってる子に手出すかというところ……ちよつと倫理観がね

かといって、ロビンでは高額賞金首ですからねえ……彼女が考古学者たる事を諦めれば、まだ打つ手はあると思いますが、諦めるようではロビンではないとも言えます

第26話・帰る場所（前書き）

何だか反応が怖いと思いつつ書き上げw

## 第26話・帰る場所

「おかえりなさい」

「ああ、ただいま」

迎えてくれたのは、最近ご近所ですっかり『若奥さん』と認知されてしまってるハンコックだ。

あれから更に1年程が過ぎ、俺は少将となった。

そうして、今年伝わってきた重大ニュース。

『海列車の初航海成功』

そう、トムズ・ワーカーによるパツフィング・トムの処女航海が成功裏に終わったのだ。

これで海賊王の船、オーロ・ジャクソン号の建造による世界的凶悪犯への加担という罪の償いは一旦緩和され、残る目指すは全線開通。計画によるとあと4年。

……つまりはスパンダムによる事件まで、あとそれだけだという事だ。

しかし、もつたいない。

何故、彼を捕らえないといけなのか、と思う。船大工が依頼によつて船を造るのは当然の事だ。それが凶悪犯になるかどうかは、結局の所使い次第……。まあ、武装船って時点で海賊と気づけ、海賊と気付いて船の建造を断れ、という事かもしれないが、それにしたつて処刑なんて話が出たのは、矢張り世界政府がそれだけロジャーを怖れていた、という事なのだろう。

……そして、スパンダムのドアホのせいで、未来にトムは処刑され、海列車は結局W7とエニエス・ロビーを結ぶに留まる……。もし、

トムが生きていたら、海軍本部とも結ぶ事も可能だっただろうに。物凄くもつたいない。

昨今、エニエスロビーで司法勉強と言って立ち寄るようになってい  
るのも、その目的は裁判長との面識作りだったりする。

あと、一応嘘ではないぞ？

デッドオアアライブ、手配書に記されている生死を問わず、の一文。これが記されている海賊はまだ、分かりやすい。

だが、手配書に記されていない海賊、或いはその海賊に無理やり仲間にされたような人員などはどうするのか？この辺がどうにも微妙なのだ。

いや、サカズキさん辺りなら『問答無用』で全部やっちゃいそう  
なんだけど。

結構この辺、将官の裁量に任されている。お陰で聞いたら、全員  
が全員違う答えが返ってきた。

「ふむ、そのあたりは各自ごとに違うな。だが、悪事を働いてい  
た者で手向うならそれは仕方あるまい、素直に投降するならまた話  
は変わってくるが」

「そんなもん、適当でええんじゃ」

「そうだねえ〜……悪事を働いてた奴は処分しちゃってもいいん  
じゃないかねえ……？」

「ん？攻撃してくるなら倒す、降伏するなら捕虜で、後は専門に  
任せりゃいいんじゃない？」

なのでまあ、一応司法の責任者に裁判の参考例として、話を聞い  
ている。

しかし、なんだね……。

ハンコック、最近ますます……色気が増してきた。さすが未来に  
措いて世界一の美女と謳われただけの事はある。

とはいえ……彼女らにも彼女らなりの道がある。……俺がその道  
を歪める訳にはいかない。

SIDEハンコック

アスラが帰ってきた。

思えば、彼との初の出会いは、余りいいものではなかった。

フィッシャー・タイガーによるマリージョア襲撃。

あれが、彼との馴れ初めだった……。

あの襲撃の時、私と妹達はこれが最後の機会とばかりに逃げ出し

……天竜人の護衛に捕まった。

抵抗はしたが、何しろ私達の技術は覇気こそ修得していたとはい  
え、12歳の時から停止していた。それから4年、まともな武術の  
鍛錬さえする余地がなかった。

そんな環境下で、護衛故に体を鍛えているような相手に勝てる訳  
がない。

抵抗はしたものの、私達は捕らえられた。せめて悪魔の実の力を  
コントロール出来ていれば、また話は違っていたのだろうが、生憎  
連中が私達に悪魔の実を食べさせたのはあくまで余興の為。

普段は、海楼石が嵌められて悪魔の実の力は封印され、妹達は蛇  
に変身して踊らさせられた。従わねば、私が海水を満たした器へと  
突き落とされた。

逆もまた然り。

……そんな環境で、精密な悪魔の実の制御が出来る訳がない。

最後の希望もこれで断られたか、そう思い、最早これまでかと諦  
めかけもした時、彼らは現れた。

フィッシャー・タイガーの一撃で護衛は即死した。



その後、出てきたアスラはフィッシュャー・タイガーと戦闘を繰り広げた。

これだけで終わっていれば、彼が負けていれば、きっと私達は彼の縁はなかった。だが、彼が引き分け、そうして私達に道を示してくれた事から事情はまた変わった。

きっと、あそこで彼が私達にシャボンディ諸島でお世話になったお2人を紹介してくれなかったら……私達はきっと背中 of 竜の足跡に怯えながら、世界を逃げ続けていただろう。

それはきっと私達の心を歪めていたに違いない。

こうして、穏やかな気持ちで、料理を作り、隣人と会話し、買い物をして、洗濯をして……。これまでの時間が時間だっただけに、そんな普通の生活が何より愛しい。普通、きっとそれはその有難さを知らない人達にとってはつまらないものなのだろう。

だが、非日常が幸せなものだと誰が決めたのだろうか？

私達が空想によって平穏な、天竜人に捕まっていた時を想像したように、平穏な何もない生活を送っている者は逆に波瀾万丈な、或いは海軍に入って、或いは海賊となって活躍している光景を想像するかもしれない。けれど、彼らはもし、そうした道に踏み込んでいたら、逆に海賊に捕まって拷問されたり、海軍と戦ってインペルダウンに放り込まれたりしていたかもしれない、という未来を想像したりはしない。

……当たり前だ、誰が空想でまで辛い事を想像するだろうか。

だからこそ……空想が叶った私達は、今が楽しい。それをくれた、アスラにも感謝している。無論、そのきっかけをくれたフィッシュャー・タイガーや、シャツキー、レイリーにも感謝している。

ただ、1つだけ不満なのが、アスラの態度だ。

アスラは未だ私に手を出しもしない。……私なりに体に磨きはかけてきたつもりだけれど……私には魅力がないのだろうか？

SIDEアスラ

サンダーソニアとマリーゴールド。それにエースとサボから問い詰められた。言い方は違えど、彼らが言うのは要は……。

『ハンコツクの事をどう思っているのか』、という事に尽きる。

……うーむ、あんな美人に元の世界で好意を寄せてもらえるなんて事なかったからなあ……。

正直、実感が沸かなかった。

なので、『いや、美人だと思うし、好意も持ってるよ？けど、彼女ならもつといい人もいるかと……俺に縛られる事もないだろうと思ってたんだが』と応えたら、全員に溜息つかれて、『鈍感』呼ばわりされた。

ちなみにルフィだけは全く、何の事が理解出来ていなかった。

その晩の事に何があったかは秘密にさせてもらおう。

ただまあ……ハンコツクが最近時折見せていた陰が消えた事と、後は……太陽が黄色かったとだけ、な。

「それじゃ行ってくる」

「行つてらっしゃい」

キスを交わす俺達を、物陰からエースとサボはにやにやしながら、ルフィは全く何をしているのか分かってない様子で、そして、サンダーソニアとマリーゴールドは嬉し泣きして見てた。……あいつらめだが、まあ……悪い気分じゃないな。

ついでながら、一緒に出かけるアリスは横で不思議そうに俺達を見ていた。

「それじゃアリス、彼の事をお願いね？」

「みゃあ」

撫でられて、機嫌良さそうに鳴いたアリスと共に俺は再び出航する。

……帰る所がある、待っていてくれる人がいる、というのは嬉しいもんだな

## 第26話・帰る場所（後書き）

色々考えましたが、結局このように

オリジナルキャラは登場させても、元よりキャラがそれなりに多いワンピースでは埋没してしまいそうですし……かといって、女性となるとロビンは無理。ナミやノジコは10年以上待たないといけない。ベルメールさんとは現状接点がない。アルビダは言うに及ばずなので、情の深い女性でもある彼女に、とさせていただきました

## 第27話・最近の出来事（前書き）

とりあえず、今回までは日常編

次回から再び事件などの動きがまた始まります、その予定です

## 第27話 - 最近の出来事

さて、まず語っておこう。

マリージョア襲撃事件以後、海軍の体制が変わった。

形としては襲撃事件の責任を取って、という形でコング元帥が引責辞任という事になった。まあ、実態としては、コング元帥自身ももう年も年なので、引退間近だったのが多少早まっただけの話だ。

そうして、あいた所にセンゴク元帥が入った訳だが、そうすると3大将の内の一席があく事になる。

いや、それだけでなく、これを機に他の2大将らまで引退を決めてしまったのだ。

結果、大騒動になった。

海軍最高戦力たる3大将がそっくり空になってしまったのだから当然だが。

とはいえ、既にある程度予測はされていた為、上層部自体は慌てる事なく、間もなく正式に3大将の新任が決まった。

黄猿大将ことボルサリーノ大将。

青雉大将ことクザン大将。

そして……赤犬大将ことサカズキ大将、の3人だ。

サカズキ大将の名前に驚く人は多いのではないか、と思うが、実はあの人、何時の間にもやら復帰していたのだ。とはいえ、戦闘スタイルは以前とは大分異なるものとなった。

前は最前線に自身も出て、自らの手で殴り倒す、という戦法を好んでいたのだが、残念ながら、完治とまではいかなかったらしく、今のサカズキ大将は杖をついている状態だ。

まあ、だからといって向こうから近づいて白兵戦闘になれば、まだまだ大将に相応しい強さを見せるのだが、基本は不動。激しい動きを行なうより、極力動きを減らし、悪魔の実の能力を用いた戦闘を行う。

原作キャラの中では、インペルダウンのマゼラン所長の戦い方が比較的近いだろう。あれよりも少し能力を使った戦闘寄りだが。ちなみに杖を手放していない事から、俺が申し訳なさそうな顔になっていたら、殴られた。曰く。

『見当違いの同情なんぞするでないわい！これも俺の選択の結果じゃあ！そんな態度は俺への侮辱じゃと気付かんかい！！』

という訳で、最近は以前同様に接するようにしている。

まあ、それに実際問題として相変わらず強いのは変わらないし、大将に就任しても誰からも文句が出なかったのも確かなのだが。ただ、以前より多少性格が丸くなった気はする。俺の結婚式の時、始終口元に僅かながら笑みを浮かべて、最後の方では目に僅かに涙が浮かんでいたし……。無論、俺は気づかない振りをしておいたが。

……。まあ、逸早く出産祝いと称して、まだ生まれてない内からベビーベッドを送ってきてくれた時はさすがに驚いたが。

また、3人が大将となった為に空いた他、同じくこれを機に引退した人も含めた中將の席にオニグモ少将らが昇進して、中將となった。

俺自身もこの時、少将へと昇進し、周囲は既に『次に席があいたら昇進する可能性が高いのはアスラ少将』という空気が出来つつある。そして、大参謀たる、おつるさんとかガーブ中將のような例外はあるものの、ずうっと戦い続けるのは矢張り大変な仕事で、それだけに年を取ると引退する海軍軍人も多く、引退間近な中將の中には公に『ちょうどいい中將の席を継げる奴がいなかった』から中將に残っているという話があるくらいだ。……事実なんだろうな。

……。お陰で美人の嫁さんを貰ったのと合わせて、最近妬みの視線が結構混じってるような気がしてならない。

まあ、事件に巻き込まれたのを助けた女性と結婚、というのは実

は海軍軍人には案外あるケースなので（というか海の上では出会いはなんてないので、海軍軍人のお相手は大抵見合いか、それ。後は極少数の幼馴染とかその辺だ）、俺とハンコックの結婚自体はごく普通に見られているのは助かる。

最近の仕事事情はこんなもんだ。

私生活の方はというとこれはもう、文句なしに充実している。

……子供が出来るとまた世界が変わるものだ。いや、まだ生まれておらず、妊娠中なのだが。そりゃあ、一月程の航海から帰る度に励んでいれば、子供も出来るといふものです。

この世界ではまだ、出産率などというものはないが。

ただまあ、問題があるとすれば……妊娠しても、ハンコックは綺麗だったという事か。

この間、エースとサボが『バカップル』と呟いているのが聞こえた。……そう見えるのだろうか？

まあ、前の世界と違って、生活費には十分な余裕がある。出来れば、子供もたくさん欲しいもんだよ。

## SIDEサンダーソニア

最近の私達は幸せに暮らしていた。

ただ、それだけに不安が生まれる。何時か突然に何か不幸が襲ってくるのではないかと……。

無論、実際にはその危険は少ない。

私達はシャボンディ諸島には足を運ぶ事は滅多にない。行く事があるとするれば、必ずアスラ兄さんと一緒だ。大体、私達がシャボンディ諸島に行くのはレイリーさんとシャッキーさんに会いに行く時だけで、他は殆ど立ち寄らず直行で帰る……あそこには余りいい思い出がないからだ。

無論、それでも兄さんに手を出してくるような奴らはいるが……



艇子摺るような相手は見た事がない。最近、億越えの賞金首と出くわした事があつたが、完勝していた。……大将相手に組み手が出来るという噂は本当らしい、と実感した一コマだった。

（ちなみに私達を救ってくれた、もう1つの組織は刺青に彫り直した後は基本的に接点を持たないようにしているそうなので、むしろ行かないようにした方がいいらしい）

そして、今住んでいるマリンフォードは海軍の島だ。

この島に襲撃を掛けてくるような相手はそうはいない。いるとすれば、精々現状白ひげクラスの世界最強クラスの大海賊ぐらいだろうが、そんな相手だからこそむしろ仕掛けて来る事はない。そういう意味では世界で一番安全な場所だろう。

ただ、私達の脳裏にはあの日の事が常に残っている。

それまで通りの生活が続くと思っていた、あの日。突然人攫いに襲われ、奴隷として売り飛ばされた……全てが変わった、あの日の事を……。

特に今、姉さんは到底戦えるような状態ではない。

次第にお腹が大きくなって、幸せそうにお腹をさするハンコック姉さんの姿を見ると、それだけにこの光景を壊したくない、そう強く思う。

だからこそ。

「……強くなりたい、って？」

アスラ兄さんは、鋭い目でそう言った。

そこには、普段の姉さんに向けてのような優しい光ではなく、真摯な光が浮かんでいる。間違いなく、真剣に話をしてくれている。

「理由を聞こうか？」

と言われても、そう大した理由はない。

結局の所、何かあった時に姉さんを、妹を守るだけの力が欲しいだけの話だ。ただ、そう言うのと、『そういうシンプルな理由の方が実感が沸くな』と感心したように頷いた。

ただ、驚いたのは、既にマリーゴールドからも同じような事を頼まれていたらしい。

彼女は彼女で、『何かあった時、姉さん達を守るようになりたい』と言っていたらしい。

「まあ、いいだろう、海軍にも女性士官はいる。エース達のついでだ、申請ぐらいいは出しておいてやる。これぐらいなら、問題なく通るだろう」

そして、実際、あっさりと申請は通った。私達は形としては海兵見習い扱いになるらしい。

まあ、まだなるかどうかは分からないのだけれど、その辺を確認する、という事らしい。ここで、私達を教えてくれる女性は、姉さんより若干年上の女性で、真面目な良い女性だ。

黒のスーツを好む彼女は現在20になったばかりの中尉だという。

「貴方達、筋がいいわ。ヒナ感心。何時か私も部下がもてたら、貴方達みたいな筋のいい人が来てくれたら、ヒナ感激」

結構仲良くなって、話も弾んだ。

私達も姉がいると聞いて、その姉がアスラ少将の奥さんだと知ると、何だか羨ましそうにしていた。お相手がいるのが羨ましいと言っていたけれど、ヒナ中尉、時折見かける同期とか言われる男性、確かに葉巻を常に啜えてるとか、格好がだらしない所はあるかもしれませんが、結構話をされてる時の中尉楽しそうですよ？

## 第27話・最近の出来事（後書き）

さて、次回からはまた、事件なりに関わっていくアスラの予定です  
一応、現在の計画では、原作での「白ひげ戦」に相当する辺りで、  
話を一旦終えるように書いていくつもりです

まあ、予定通り進んだとしても、原作とは完全に離れた所を突き進む  
ことになると思いますがw

ラストの展開と予定は完成してるので、何とかそこまで到達したい  
ものです

## 第28話・赤髪（前書き）

トムさんの前に……

シャンクス登場です！

気付いたらこんな話になっていました

## 第28話・赤髪

1年程した頃、俺は東の海へ来ていた。

ルフィとエースを連れて、だ。

サボは、このゴア王国に余りいい思い出がないらしく、来たがらなかったたので、今回も留守番だ。

……まあ、実は事情は既に知ってる訳だが。

ゴア王国は東の海でゴミ1つ落ちていない、もったも美しい町と言われているらしいが……俺から言わせれば、美しいものしか見ようとしてない、ゴミの住む町だという気分だ。

確かに、頂点に天竜人を置き、こんな連中が統治する町がもったも美しいなんて言われるようでは、革命軍のような存在が出てくるのも当然だろう。……原作のワポルもそういえば、ドラム王国の王として暴虐を尽くしていたんだっただ。

さて、エースとルフィを連れて来ている理由だが、一言で言ってしまうえば、里帰りだ。

エースとルフィをうちで引き取った後の話だが、フーシャ村のスラップ村長とマキノさんの連名で手紙が来た。要は『元気でやっているか』という事に尽きる。確かに、スラップ村長に至ってはモンキー家とはガープ中将以来の付き合いだしな。気にするのもむべなるかな。

という訳で、せめて1年に1度はと里帰りして顔見せに行っている訳だ。

ルフィはというと、最近は『俺は海兵になる！』と言って、ガープ中将が泣いて喜んでた。まあ、息子さんが息子さんだから……とはいえ、それならばかりに鍛えようとしたやり方は……原作通りにしかけたので、ガープの孫という事で遊びに来ていたセンゴク元帥とガープ中将で取っ組み合いの喧嘩していた。

さて、フーシャ村に来て、まず最初に目についたのは……一隻の海賊船。

……あの旗って……。  
そうか、もうそんな時期だったのか、とふと感慨深い気持ちになった。

……原作を知る者ならば分かるだろう。そう、赤髪のシャンクスだ。

海賊という事で、ルフィが船を睨んではいたし、エースも心配そうに村の様子を見回していたが、当然シャンクスは海賊としては相応にまともな部類なので、村は穏やかなものだ。

多分、酒場「PARTY'S BAR」、そうマキノさんがやっている酒場だ。

行ってみると矢張り彼らはいた。

まあ、海軍の軍服にコート姿で登場した自分に警戒の視線を向けたが、マキノさんからの話を聞いて、「で、俺達を捕らえるかい？ 『銀虎』」との問いかけに俺が「今は休暇中だ」の一言で断つて……そういえば、シャンクスに普通に『銀虎』と呼ばれたな、案外そっちの筋には広まっているのだろうか？ とりあえず、一旦落ち着いた。

ちなみに後でこっそり聞いてみたら、海賊の中での要注意人物として名前が挙がってるらしい。

で、しかし、だ。

最初は気のいい奴らだったんで、気が合った。知ってるのかと思つて、レイリーさんの話を出したら、シャンクスは元海賊王の船のクルーだけあって、話も合い……気分よく呑んでいた筈だったのに……。

何故、俺とシャンクスは睨み合っているんでしょね。

もっとも念の為に言えば、シャンクスの仲間達はニヤニヤ笑いな

がら見ている、という時点で実はそんなに大した事じゃないのが原因なのは理解してもらえと思う。

事の発端は……まあ、あれだ。ルフィが……悪魔の実を食べてしまったのだよ。

この世界のルフィは原作とは異なり、彼らが一応一億ベリーで売れる実という事で、きちんと取り扱っていた事から、『海賊が大事にしてる物なら奪ってやれ！』ぐらいの感覚だったようだ。

そうして、まあ、こっそり取って開けてみれば中には変な実。首を傾げつつも、齧りついて……余りの拙さにこぼした。

「アスラー、これ物凄くまじい」

と、見せに来て、びっくり仰天したのは、俺とシャンクス。2人して……。

「そいつを食ったのか!?!」

と、驚いて叫んでしまった。

悪魔の実を食うと泳げなくなると聞いて、泣きそうになったが、俺が『俺も、センゴクさんも、クザンさんも、以前に肩車してくれたボルサリーノさんも皆そうだよ。うちではハンコック達お前の姉さんの3人全員がそうだな』と言ったら、一気に機嫌直した。シャンクス達は次々に出てくる海軍元帥や大将の名前に微妙な表情をしていたが。

なお、悪魔の実は、原作通り、ゴムゴムの実だった。

さて、ここからが問題だった。

この後の2人の会話をざっと見てもらおう。

アスラ（以下ア）「きちんと実の管理ぐらいしておけよ、一応高

く売れるんだらうが」

シャンクス（以下シ）「すまん。まあ、実を食ってしまったのは気にしないから、それで水に流しておいてくれ」

ア「いや、気にするも何も、お前達の管理不注意だらうが」

シ「（むか）悪魔の実を食べたのは気にしないと言ってるんだから、細かい事を気にするな」

ア「（むっ）何が細かい事だ。重大な事だらうが」

シ「ケツの穴の小さい野郎だ（ぼそ）」

ア「ケツを広げられた経験があるのか、ホモ野郎（ぼそ）」

シ・ア「……………なんだとこの野郎！」

後で落ち着いて考えてみると、シャンクスと2人して、『何であんな事でイラついて喧嘩したんだらうな？』と首を捻る事になった程あっさりところなつた。

まあ、だからこそ、周囲の連中も笑っていられたんだらう。

可能性としては2人共結構酒が入ってたという事なのだらうが……  
…いかな、以後少し酒は控える事にするか、と決める事になった。

さて、こんな場所に空気を読まずに入ってきた奴らがいた。

バキ！と扉を蹴破って入ってきた男達……。

「おれ達は山賊だ。 が、…別に店を荒らしに来た訳じゃねエ。酒を売ってくれ、樽で10個ほど」



もう分かる人には分かっただろう。山賊ヒグマだ。  
とはいえ、全員その時は俺とシャンクスに注目していて、誰もそいつには注意も払わない。

「おい、手前ら……」「うるせえ!」「……っ!手前ら、俺を無視するとはいい度胸だ!こいつを見る!」

そう言っつて、懐から賞金首の証である手配書を取り出す。額は原作の通り、800万ベリー。確かに、最弱の海とも呼ばれる東の海では高額の種類に入る……例えば、コビーが捕まっていた海賊『金棒のアルビダ』の賞金額が500万ベリーだったから、確かに当人としては自分が賞金首としては一流だと思いつ込むのも分からんでもない。だが、なあ……。

「あんな事言っつてるぞ、相手してやったら、億越えの海賊君」

「賞金首なら、お前が捕まえたらどうだ、天竜人の小間使い。ああ、すまんすまん、海軍本部少将殿だったな」

億越え!?海軍本部少将!?!とか言う声が横から聞こえるが無視だ無視。

まあ、実際シャンクスにかかった賞金額は億をとうに超えている。さすが未来の四皇にして、この時代に措いても世界最強と謳われる剣士、王下七武海のみホークのライバルなだけはある。

とはいえ、こうした事も後から冷静になって考えたから思いつけた訳で……この時はどうなったかというところ。

「……表に出る、この野郎」「」

本当に、酒は呑んでも呑まれるもんじゃないね。

そして、村に被害が出ないよう俺達は移動した。何の気なしに、他の連中もゾロゾロとついてきている。

その中には山賊連中もいた。

俺達が「覚悟はいいか?」「はっ、手前こそ遺書の準備は出来るんだろうな?」とか言い合ってる所へ、さっきのヒグマの奴が俺達の言葉がはったりだと思ったのか……。

「手前ら！俺を無視するんじゃない……！」

ああ、もう……。

「……ごちゃごちゃうるせえな」「」

2人して殺気を込めてギロリと睨んだ途端に、真っ青になって震えだしたが、もう止まる筈がない。

「「勝負の……」「」

俺は握り拳を固め、シャンクスは腰の剣を抜き……。

「「邪魔だあ!」「」

ぶっ飛ばした。

ちなみに、海まで飛んでった奴は、海に落ちた所を近海のヌシにぱっくり美味しく頂かれてしまうのだが……。

この後、俺達は盛大な喧嘩を繰り広げたのだった。  
で、だ。

運動すれば、酒も抜ける。

久方ぶりに覇気こそ入っていないものの、思い切り喧嘩して、体

動かして……。息が切れて、ちったあ冷静になってきた。

ふと横を見ると、何時の間に集まってきたのか、村人も海賊も、ルフィやエースも混じって俺達の喧嘩を肴に酒盛りしてやがった。

「……なあ、シャンクス」

「……なんだ」

「……俺達何でこんな喧嘩してたんだろうな」

「……聞くな」

ああ、もう、自棄になって2人で飲みなおしたよ。ルフィもエースも俺に倒せなかつたのかと文句言ってくるし、海賊……ラッキー・ルウやヤソップからは『なんでえ、もう終わりかよ』『おい、賭けは引き分けみてえだぞ』とか言ってくるし……散々だった。

まあ、お陰でシャンクスとは、仲が良くなったのは救いではあったと言っておこう。原作と違って腕を失うという事もなかったし。

……決してそうでも思わないとやってられない気分だったという事はないからな？

## 第28話 - 赤髪（後書き）

という訳で、ルフィは原作同様ゴム人間となりました

今回は、ルフィの動向が主体

また、シャンクスは腕を失う事はありませんでした

ヒグマをぶっ飛ばした場面は、原作のあの場面を思い浮かべて頂ければ……

第29話・身勝手な策謀（前書き）

いよいよ、トムさん編と……（もいもい）  
の開始です！

## 第29話 - 身勝手な策謀

その事件そのものは順調に進んだ。  
進みすぎた。

……それ故に、もう1つの事件に措いては悔いしか残らなかった  
……。

赤髪のシャンクスとの出会い、ルフィがゴム人間となった、あの  
日から気付けば3年弱。

アスラは今度こそと正式に引退する中将の跡を継ぎ、中将となっていた。当人からすれば、これで孫相手にのんびりという気分だろうが、アスラにしてみれば最近めつきり目立つようになった嫉妬の視線が痛い。おまけに、仕事が忙しくなったせいで、子供の相手が十分に出来ないのがまた、痛い。

結局、子供は娘が産まれていた。ルフィは妹が生まれたと喜んで  
いたが、初めての自分より下の子に興味深々だ。

アリスは……すっかり懐かれて、最近ではよくルフィ共々背中に  
乗せて歩いているのを目撃する。……俺ももつと接してやりたい  
んだが……ちなみに、最近ハンコックは2人目を妊娠した。

今度は男の子がいいな、と2人で話している。

さて、少し話を戻すが、嫉妬されていると言っても上や同格から  
はそうでもない。

問題は下からだ。僅か10年少々で海軍最高幹部の一角へと昇り  
つめたアスラへの嫉妬は激しい。奥さんが物凄い美人で、夫婦仲は  
熱愛続行中、子供も生まれて私生活は順風満帆となれば尚の事だ。

もつとも、ではアスラ以外の人員を中将に、とするには問題があ  
った。

海軍の大將が海軍最高戦力と呼ばれるように、海軍で一定以上の地位を得る為には、強さが不可欠だ。それも上へ行けば行くほど、それは並大抵の強さではすまない。特に中将ともなれば、大將に空きが出来た時にはその席を埋めねばならないから、尚更だ。

何が言いたいかというと、アスラを却下して、その席を埋めるのに周囲が納得出来る程の実力を持つ者がどこにもいなかった。何しろ、少将大佐級でさえ、今のアスラが相手ではまとめて吹き飛ばされるだけという意味合いでは一般の海兵と変わらない。

シャンクスとやり合って以来、シャンクスを通じてミホークとも縁を作るのに成功し、鍛え続けたアスラは更に力をつけ、現在の中將の中では最強の一角と看做される程になっていた。

というか、組み手の相手が3大將や世界最強の剣士だ。しかも、大將連の内、サカズキ大將とは諸々の事情により無理だが、他2人とは遠慮も何もいらぬ、覇気だけは使用不可、という実戦さながらの試合が出来る。

事実、黄猿大將とやる時は『本気でやるなら、どこぞの無人島、それも岩礁みたいな島を使え』と通達が出る程だった。

理由は単純明快。

この2人がやりあった結果、少々熱くなりすぎたお陰で、訓練施設が複数壊滅した、言ってみればそれだけではあるのだが……。何しろ2人ともそうそう簡単には死なない体だ。

ただ、海軍としては、毎度訓練の度にこんな事が起きてはたまらない。

尚、この件に関する黄猿大將のコメント、『ちよつとした運動じゃあないかねえ？』。アスラ中將のコメント『その点は申し訳ありませんが、偶には大將含め全力で鍛錬する事も必要なのではないかと、互いに怪我をしない範囲で』。

怪我をしない範囲が覇気を使わない場合、物凄く広い者同士がやるとどうなるか、判明したのだった。

さて、アスラ自身が後悔するようになった事例の始まりは海列車の開通にあった。

この海列車の開通に合わせ、司法船が赴くと聞いたアスラはセンゴク元帥に1つの報告を行なった。

「……………司法船へのテロ行為の予兆だと？」

「未だ可能性の段階ではありませんが……………」

センゴク元帥にしてみれば、どういう話だと思いきや、最近開発に成功した海列車、そのW7とE2Eスロビーを結ぶ列車開発を成功させた造船技師への司法決定を下す司法船が今度W7へと向う。

その判決そのものは、無罪になるだろう、という事で、海列車が当初計画通りの性能を發揮している現在、順調に行けば更に海軍本部も結ぶ事で交通事情は大幅に改善されると期待されていた。

その向う船へのテロ行為が計画されている、という話がある、となれば放ってはおけない。

「……………確かに、司法の船への攻撃は可能性としてはありえるだろう。自業自得とはいえ、裁かれた内容に恨みや不満を持つ者もいるだろうからな。だが、何故今なのだ？」

「……………今ならば、ちょうど責任を押し付けられそうな人材がおりますので」

「……………船大工のトム、か？だが……………」

「これを」



差し出したのは廃船となった多数の小型の船が写った写真だ。  
これは何だ、と疑念と共にアスラへと視線を向けるセンゴク元帥  
に対して、これがトムの元で修行している若い船大工見習いの作っ  
たものなのだと説明する。

「問題は、この作成者の目標が海王類を仕留められる船、なので  
す」

「！この武装に見えるのはそれか……という事は」

「はい、その船を再生利用すれば……司法船を攻撃した責任は彼  
に押し付けられます」

「……………」

センゴク元帥は唸り声を上げる。

海王類は巨大な魚類だ。それにある程度打撃を与える事が可能な  
船となれば、確かに司法の船を攻撃する威力は十分だろう。いや、  
そもそも攻撃した、という事実があれば、それで十分だ。とはいえ  
…………。

センゴクは決してアスラが全てを語っているとは思っていない。  
とはいえ、まるきり嘘を言っているとも思っていない。おそらく、  
アスラが偶然か何かは分からないが言っている通り、襲撃が行なわ  
れる可能性があるのは確かなのだろう。

そして、それが本当に拙いものならば……そう、分かりやすい例  
でいえば、天竜人が遊びで行うような話なら、わざわざトムに責任  
云々とは言うまい。彼らがそれをやったとしたら、堂々とやらかし  
て、それを咎める者などいない。そうすると…………。

(……政府の裏方か？或いはどこぞの貴族か王族辺り、か？)

だが、それならそれで、政府の方からさりげなく元帥である自分には指示が来る筈だ。

拙いものならば、さりげなく止めてなかった事にせよ、と。或いは見逃せ、と。

そうしなければ、最悪同士討ちになる。それが無い、という事は……いや、最悪独断の可能性もないではないが、それまで気にしては、手遅れになる。

それに……船大工トムの海列車は今後、世界政府にとって有益なものになる筈だ。腕に関しては、かの海賊王ゴールド・ロジャーがグランドライン一周を成し遂げた船、オーロ・ジャクソン号の建造で証明されている。

「よかろう、ならば……少数による作戦を許可しよう。司法船にはお前から伝える。ただし」

中止命令が届いた場合は、ただちに捜査を停止して帰還する事。それだけを告げて、センゴク元帥はアスラ中將による行動を許可した。無論、その点に関しては事前予想済みだ。

後はセンゴク元帥に確認を取ったが、極力極秘に当たる事です承を得られた。……センゴクにしてみても、きちんとした理由もなしに騒動を起こすなら、そいつが政府の人間だろうが何だろうが罰するに躊躇はない。

海軍でも、時折特に支部の人間に多いが、犯罪を犯す者は必ず出る。その同類ならば、捕縛はむしろ当然だろうと思っている。

「で、俺達が動員ですか？」

「文句言わないの、きちんと仕事しないとヒナ怒るわよ」

さて、アスラが今回連れて来たのはちょっとした部隊と将校が2人。スモーカー少佐とヒナ少佐。この2人も順調に昇進し、現在は少佐となっていた。実の所、真面目さの度合いではヒナ少佐の方が明らかに上だ。逆に言えば、素行には問題があるのに、同じ階級にいるという時点で、スモーカーの優秀さが分かる。

また、司法船には既に顔見知りになった裁判長を通じて事情をこっそり伝えてある。

「まあ、そういうな。実の所、やらかしそうな奴は目処はついてるんだ」

既にW7に上陸して、確認した。

この時、CPS主官を務めていたスパンダムの姿を……。無論、きちんとどのような相手なのかの確認は離れた所から尾行を行い確認を取った。

サカズキもそうであったが、それぞれに事情はある。

原作でのヘルメツポが、後に反省し、きちんと迷惑をかけた相手に謝罪し、立派な海兵となったように。

原作では非情に見えた赤犬大将が、こちらの世界で実際に話をしてみれば、確かに犯罪者に対しては非情であっても、部下や一般人に対しては情の深い人物であったように。

しかし……。まあ、はつきり言っただけだ。

無論、ヘルメツポ同様改心する余地はあるかもしれないが、それは1度自分のやらかした事を反省させてからの話だ。

「あれ、じゃあその人今すぐ捕まえたら、終わるんじゃないかと、ヒナ思考」

「同感ですな」

「……生憎、現段階では何もしていないのでね……加えて色々厄介な裏事情って奴があるのさ」

とはいえ。

予定通りならば、奴はやらかすだろう。

だからこそ……。

お前にはここで一旦退場してもらっつぞ。

誰のせいでもない。俺自身の為に。

SIDE スパンドム

「くそっ……」

CP5 主官を務めるスパンドムは苛立った声を上げて、地面を蹴り飛ばした。

彼自身の望みは、更に上へと上る事。

彼の父親は嘗てオハラで世界政府に関わる重大な問題を事前に把握し、功績を上げた。そうして、現在彼はCPの長官として君臨している。スパンドインは息子であるスパンドムが地位を継ぐ事を望んでいるが、まあ、これは本来余りよろしくない話ではある。だが、スパンドムが誰もが認めざるをえない功績を立てれば、それも可能となるだろう。

だからこそ、スパンドムはこの地へとやって来た。

船大工トム、彼の弱みを掴んだと思ったからだ。そうすれば、彼が持っているとされる古代の兵器ブルトンの設計図を入手する事も出来るというもの……。

だが。

彼の目論見はいともあっさり砕け散った。

船大工トムへと『海賊王の船を造ったそうじゃないか、これが世界政府にばれたらどうなると思う』と言ったはいいが、奴はあっさりと『そんな事とくに知られてる』と返してきた。

そう、そんな事はもう10年以上前に知られているという事実。更には、もう数日もすれば司法船が正式にトムへの無罪を告げにやってくるだろう、と噂される現実……。

加えて、自分を吹き飛ばした砲弾……。

バトル・フランキーと呼ばれるその船の祝砲によって、彼自身は吹き飛ばされた。

悪意がなかったとはいえ、だから許そうなどと言える訳がない。誰だって痛いものは痛いのだし、当人の行動で大怪我させられかけたとなれば、普通は怒る。

ただ、あの時はより重要な案件があったから、それでもまだ、そちらを後回しに出来たというのに……。

(何かないか、いい方法は……：奴を追い詰める為の方法は……)

その時、スパングラムの目に写ったのは廃船島に放置された多数の小型船……そして、その帆に残る『BATTLE FRANKY』の文字……。

……そういえば、あの船には強力な武器が搭載されていたな。

彼なりのよい考えが思い浮かび、ニヤリとスパングラムは笑みを浮かべた。

……その行動が既に予測されている事など想像だにする筈もなく。

## 第29話・身勝手な策謀（後書き）

結構外見のイメージが欲しいと言われる方が多いですね…

個人的にはそれなりのイメージがあるのですが、そうですね…

ご存知の方がいるか分かりませんが、私自身は…

漫画『BREAK AGE』の久我透とか、小説『スカーレット・ウィザード』、『クラッシュ・ブレイズ』のケリーがイメージに近いですかね…ケリーに関しては海賊王的なイメージの方です。…主人公は海軍で、イメージは海賊王なのは何か妙な気分です  
髪の色は黒髪で、目の色は青みがかつた黒、そんなイメージです

ちなみに今回の題名には、スパンダムだけではなく、所詮主人公のやってる事も…という意味も含んでおります

### 第30話・計画通り(前書き)

さて、今回はちょっと視点がころころ変わるといいますか、見づら  
かったらご勘弁を……

### 第30話・計画通り

夜の闇に紛れ、彼らは再び廃船島を訪れた。

正確にはその一角、30隻以上放置された『BATTLEFRANKY』の確認だ。

初期のものは使い物にならず、最近のものも……おそらく、あの子供の言う事が本当ならば、海王類を相手にしてきた為だろう、どの船も破損が多かれ少なかれあり、それでも割りと最近のものから4隻程が武装・船体共に使えるレベルである事が確認出来た。

「くつくつく、これなら問題なさそうだな？」

スパンダムはニヤニヤと笑って船を撫でる。

彼の計画はこうだ。この船を持って、やって来る司法船を攻撃する。

当然ながら、この船を造った、あの小僧は捕まるだろう。司法船に攻撃を仕掛けた船と武器の製造を行なったとなれば、トム同様罪に問われる事は確実だ。ましてや、そんな強力な武器を搭載したまま放置していたとなれば尚更の事。

後は、あの小僧の命を助けてやってもいい、という事を囁いて、トムからプルトンの設計図を手に入れればいい……。

「しかし、スパンダム隊長。本当に設計図を手に入れたら、あの小僧を助けてやるのですか？司法船に攻撃を仕掛けたとなれば、それを覆す手続きも面倒なものになると思いますが……」

「ああ？何で、そんな事をしてやらなくちゃなんのだ？俺は『してやってもいい』と言ってるだけであって、『してやる』とは一言も言うつもりはないぞ」



そう、そのつもりだ。

自分に砲弾を命中させた、あの小僧は死刑にでも何でもなっ  
てしまえとスパンダムは本気で思っているし、設計図を手に入れば、  
あんな小汚い小僧の事などどうでも良かったとも言える。

そして、設計図を手に入れば、俺の功績は出世するのに十分な  
ものになる……。

そんなバラ色の光景をスパンダムは夢見ていた。

準備を整え、後は司法船を待つだけ、という所まで用意すると、  
彼らCPSはその場を離れた。

……彼らが離れたと確信出来るぐらいの時間が経った後、付近の  
高台の一角が動いた。

「……撮れたか？しかし、矢張りあいつらあの4隻を選んだな」

「ええ、もちろんよ。それにそうなるように誘導したんだし。そ  
れより貴方、このまま禁煙したらいいと、ヒナ思考」

「だが、断る。それじゃ、アスラ中将に連絡しとくか」

「仕込みも万全、後は待つだけ、でも忙しかったわ。ヒナ疲労」

そう呟くと、2人は速やかに道具を片付けると、その場を立ち去  
った。

後には廃船と、出番を待つ4隻の船だけが残された……。

そうして、司法船がやって来た。

裁判長は機嫌のいい様子で、トムが約束を果たしたという事から、

無罪を告げるつもりらしい。

元々、この裁判長はトムの子で死罪とは、やりすぎだと感じていた1人だった。

こうした、武器や船を造った事で責められるのは、間違っている。責められるべきは、あくまでそれを使って、悪事を働いて連中であって、造船技師にせよ武器職人にせよ彼らはそれを作るのが仕事だ。そういう意味では、今回は珍しく全てが上手くいったと言えるケースであり、1つだけ除けば晴れ晴れした気持ちだった。そう、1つだけ。

顔馴染みのアスラ中将から伝えられた司法船への攻撃計画。

裁判長にとつては、まったくもって腹立たしい話だが、何より腹立たしいのは、その罪をトムへと擦り付けようとする、その汚さだ。だが、まあ。こうした計画とは秘匿されてこそ意味がある。事前に分かっていたら、こちらとて対策も取れるし、その為にアスラ中将が乗艦している。

見張りも目立たぬように増員され、周囲を警戒している。と、予想通り奴らはやって来た。

「右舷に小型船4隻を確認！事前連絡を受けていた艦と特徴が一致します！」

この時、当たり前だが、襲撃船に乗っているCP5の面々は襲撃の成功を疑っていなかった。

この襲撃の肝は、世界政府の司法船に襲撃を掛ける馬鹿などいる訳がない、という思い込みにある。それがあるからこそ、襲撃船は司法船からも帆の文字が見えるぐらいに十分に近づく事が出来る。だからこそ……全ての前提が間違っていた時、襲撃が上手くいく筈もなかったのだ。

海王類にさえ打撃を与える砲撃が次々と放たれ……。

その全ては司法船の甲板から伸びた銀の尾に捕獲された。幾つか

は取り込まれた後爆発したようだが、尾はびくともせずそこにある。それどころか、砲弾を受け止めた4本の尾に続き、更に4本の尾が襲撃船に伸びてきた。

慌てて、CP5の面々は脱出する。

彼らは自分達が捕まった時、主官たるスパンダムが自分達を庇ってくれるなどは微塵も思っていない。それどころか、自分達が捕まったとなったら、全ての責任を自分達に擦り付けて、知らん振りをするに決まっている！と全員が確信を持って断言出来る。

はつきり言ってしまうえば、利害以外に互いを結びつける関係がない連中だった。

とりあえず、結果から言えば、アスラの尾が到達する寸前に彼らは何とか海へと飛び込む事に成功し（距離がある程度あったのと、迷わず即座に逃げたのが幸いした）、尾は船4隻を丸ごと持ち上げて、司法船へと運び去った。

CP5の面々は任務を完全に成功させる事は出来なかったが、司法船に対して『BATTLE FRANKY』というトムの弟子の作った船が攻撃を仕掛けた、という事実は作ったと自分を納得させて、迅速に撤退していった。

「……と、思っているでしょうね」

「うむ、まあ、まさか犯人が奴らだとは思わなかったが……」

CP5が一応作戦成功と思って必死に逃げている頃、司法船ではアスラ中将与裁判長の間で、そんな言葉が交わされていた。

そうして……全ては計画通りに事は進んでいた。

トムと、アイスバーグ、それにカティ・フラムが裁判長の前にい

る……が、彼らは拘束はされていない。

トムとアイスバーグは怪我を負ったりはしていない。

原作では司法船が攻撃を受ける様に、廃船島にフランキーの船を確認しに行つて、スパンダムによって攻撃を受ける訳だが……。

まあ、ある意味当然の話で、4隻のみがまともに使える船であり、その4隻で襲撃を掛けたという事実に加えて、それこそあつという間にフランキーの戦艦が司法船に回収されてしまったので、何か行動する間もなかったのだ。

だが……司法船に対して、フランキーの船が攻撃を仕掛けたのは確か。

「凶器を存在させた責任を問いかけてんだと何度も言つただろうが、バカンキー……！」

だからこそアイスバーグは激怒する。当然だろう、折角上手く行つていたので。

もう、無罪は間近だった。

それが……。さすがにフランキーもアイスバーグの怒声にも何も言えずに俯いてしまう、何か言えるはずがない。

「これでトムさんが政府に連れて行かれる事になったら……おれはお前を……！一生許さねエぞ……！フランキー……！」

フラッキーの胸倉を掴むアイスバーグだったが、そこへ嫌らしい声がかけられた。

「残念だったなあ？お前らはここで終わりだ！」

群集の中から部下を引き連れ出てきた、ニヤニヤと笑みを浮かべながらスパンダムが告げる。

お前がやったんだろう！とフランキーがスパンダムをなじるも、司法船を政府機関が襲う訳がないだろう、とスパンダムはとぼける一方、街の住人もまたそれもそうだと信じてしまう。……何しろ証拠が全くないのだから当然かもしれないが。

だからこそ……フランキーは悔しかった。

自分のミスで……自分がアイスバーグの言う事をきちんと聞かなかったから……こんな事になってしまった。

だからこそだろう、フランキーが思わず……。

「あんな事をする船なんて……俺の船じゃねえ！」

そう叫んでしまった次の瞬間。

フランキーは物凄い力で胸倉を引っ掴まれた。掴んだのは……トム。

余りの迫力に、周囲の住人もスパンダムでさえも何も言えない。

「いいか、どんな船でも……造り出す事に”善”も”悪”もねエもんだ……！この先お前がどんな船を造ろうと構わねエ……だが生み出した船が誰を傷つけようとも……世界を滅ぼそうとも……！！生みの親だけはそいつを愛さなくちゃならねエ……！！生み出した者がそいつを否定しちゃならねエ……！！」

それはトムの理念。

オーロ・ジャクソン号という彼の傑作を駆った海賊王ゴールド・ロジャーの為に、罪に問われながらも歪めない信念。

「造った船に……男はドンと胸をはれ……！！」

周囲は呆然としていた。

何時しか忘れていた船大工の理念。すっかり寂れてしまっていた、

このW7に未だ残っていた船大工の心意気を示したトムに、もうW7の市民からは誰からも責め立てる声は出なかった。

「ふ……ふん、だが、な、今更そんな……」

「そうだな、今更手遅れだな」

スパンダムが気圧されつつも、口に仕掛けた時……群集を割って、海兵の一団が姿を現した。

先頭に立つのは……海軍本部中将アスラ。

「罪人を捕らえるのは我々の仕事だ……裁判長」

「うむ」

と、頷いた裁判長の姿を見て、ますます増長したスパンダムは「そうだなあ、これでおしまいだな」とそう声を掛けた。

そう、誰もがそう思った。トムもアイスバーグもフランキーもW7の住人も、そしてスパンダムも。

「ああ、そうだな……終わりだ」

そう告げて、アスラが指を鳴らすまでは。

一斉に海兵の銃口が上げられ……それがスパンダムとCP5のメンバーを指向するまでは。気付けば、既にCP5は完全に包囲されていた。逃げ場は、ない。

「なっ……な……」

慌てたように周囲を見回すスパンダムに、アスラは冷厳に告げた。

「CP5 主官スパンダム、及びCP5 隊員一同に告げる……貴様  
らを司法船襲撃の犯人として拘束する」

### 第30話・計画通り（後書き）

計画通り

と内心アスラはニヤリ笑いです

ちなみに出てくるのが遅かったのは、出番待ち以上にフランキーに反省を促す為という意味合いもあります

確かに作ったものを使って悪事を働いた奴が一番悪いのは確かですが、今回の件に関してはフランキーにも多めに責任がありますので



### 第31話 - 因果応報（前書き）

さて、スパンダムの結末です

### 第31話 - 因果応報

「な……なん、なん……」

余りの驚きのせいか、スパンダムは声が出ないらしく、口をぱくぱくと開け閉めしながら、海兵らが向ける銃口を見るばかりだった。その様子を横目に、アスラは種明かしをしてゆく。

「実は、少し前……といっても昨日今日の話ではないが、に司法船を襲撃する計画がある、という話があつてな……」

話し始めた海軍中将の言葉に、スパンダムは少し冷静に頭を働かせる。

自分が決めたのは司法船が来ると聞いたのと、フランキーの船からの攻撃を受けた後偶然の話、となると自分が考え付くより、明らかに前の話だ。

「それで、可能性が最も高いのがここだ、という事で網を張っていたのだよ」

そう、ここは既にアスラの仕掛けた罠で一杯になっていた。

フランキーの戦艦は4隻を除いて全て工作し、すぐには使えなくしていた。そうした上で、廃船島には見張りを立て、その戦艦を狙う連中の監視と盗聴を行い、更に4隻にも運転する映像や発言を記録する専用の電伝虫を配置してあった。

あの場にスモーカーとヒナがいたのは、他の海兵らは、他に怪しい艦船が入港なり、隠れていないか、或いはそうした怪しい組織がないかの確認に走り回っていたからだった。

そうして、そこにまんまと入り込み、映像から計画から額縁つき

で証拠をばつちり押さえられたのが…… スパングダムらCP5だった。既に言い逃れも何も不可能なぐらいに証拠を押さえられてると知り、スパングダムの顔色もCP5の面々の顔色も段々と青くなっている。

「まあ、結局罠に入り込んだのは貴様らだった訳だが…… 分かつたら、大人しく捕まってもらおうか」

そう言つて、拘束するよう指示を出しかけたアスラ中將を遮つて、スパングダムは懸命に声を上げた。

「ま、待て！ 待ってくれ！ い、いいのか！？ 俺達は世界政府の五老星からの命令を受けて動いてるんだぞ！」

実際は命令を受けているのではない。許可を得ただけなのだが。とはいえ、スパングダムの頭の中ではそのように書き換わっていた。

「ほう？ どのような命令だ？」

「そ、それは…… 秘密だ！」

問いかけるアスラの言葉に、スパングダムは口ごもつて、結局そう言った。

無論、スパングダムからすれば、機密というか極秘情報をべらべらと喋れる筈がなかったただけなのだが、周囲の者、それはスモーカーやヒナラ海兵、裁判長にトムズワーカーの面々、更には周囲の一般人、要は真実を知っているアスラとスパングダム以外からすれば、『あ、こいつ適当な事言つて誤魔化そうとしてやがる』としか思えなかった。

無論、アスラもその事を理解しており……。

「話にならん。連れて行け」

そう命令を下す。

当然のように、海兵らもまた動き。

「ま、待て！本当だ！そのトムが持っている筈の古代兵器  
プルトンの設計図の回収が任務なんだ！」

その時のスパンダムの後ろにいたCP5の面々の気持ちは1つに  
なった。

『ばらしやがった、こいつー（呆然）』

当たり前の事だが、そもそもそのようなものが存在する事自体が  
重要機密だ。

例え殺されようが、洩らしてはならない。秘密工作に関わる人員  
には、そうした覚悟が求められ、今回のそれは間違いなく、それに  
関わる重要問題な筈だった。

「……古代兵器プルトン？」

「そ、そうだ！けれど、トムがしらばっくれるから、奴を犯  
罪者に仕立て上げて、追い詰めれば、交換条件として設計図を入手  
出来ると……そう思って、司法船に奴の弟子の作った船で襲撃かけ  
ようとしたんだ！」

頼むから、もう黙ってくれ！

CP5の面々からすれば、そう心の中で叫んでいた。重要機密を  
口にしただけでなく、トムへ仕掛けた罠を海兵やら司法船の裁判長

以下司法船の面々やら一般人多数の眼前で自白している現状はド壺に自ら飛び込むようにしか見えなかった。  
いや、実際にそうなのだろうか。

「こつ言っているが……どうなんだ？ トムさん、でいいかな？」

「ああ。しかし、プルトンのう……はて……おお！」

「何か思い当たる事が？」

「ああ、ずつと昔に見た覚えがあるわい。もうとつくに燃やしたが」

アスラとトムという言葉にスパンダムが『嘘をつくな！』と喚いたが、トムの答えはあっさりしたものだだった。

『だって、ワシ船大工で、兵器なんぞ関係ないからの』。  
むしろ、あんな危ないもの、さつさと燃やした方がいいと思った、と語るトムにスパンダムはただ、喚いていた。

「まあ、疑うんなら、会社でもどこでも調べてくれてもいいが……」

どうする？ とアスラ中将与裁判長に交互に視線をやるトムの様子に、スパンダムも不安になってきたらしい。

プルトンの設計図は彼にとっての起死回生の一手、というか正に蜘蛛の糸だ。それがなくなれば……彼の首がどうなるか。スパンダムからすれば考えたくもなかった。

「まあ、とにかく、センゴク元帥を通じて確認を取ってみるが……  
ああ、すいません、センゴク元帥ですか？ 実は……」

.....

五老星曰く『そんな設計図の事なぞ、聞いた事もなければ、そんな事を命じた覚えもない』

極秘情報を洩らした奴を庇う程、五老星はお人好しでもなんでもなく、いともあっさり切り捨てられた。

更に、CP長官たるスパンダインへも確認の連絡は飛んだのだが..... スパンダインからすれば、五老星からさえ見捨てられた息子を庇うのは自らにも危険が及ぶと判断し.....。

『息子がそんな愚かな行動を取るとは..... 本当に情けない話です。かくなる上は、罪を償い、少しでも早く真人間となって戻ってくる事を親としては望むばかりです.....！』

いともあっさり涙の演技と共に切り捨てた。

完全に見捨てられたスパンダムはこの後、懸命に訴え、トムの会社の設計図を確認する事を求めるが、探しても結局、古代兵器ブルトンの設計図と思われるものは見つからなかった。

どこかに隠したのだろうか！と尚も喚くスパンダムだったが..... 当たり前だが、彼のそんな妄言に付き合うつもりは、最早裁判長以下誰もいなかった。

更にこれ以上巻き添えを食うのは御免だと逸早く悟った部下達は、アスラの持ちかけた司法取引に即座に応じた。

..... スパンダムの事を全く信用していなかった彼らは万が一に備え、これまでスパンダムが犯してきた犯罪行為の証拠をそれぞれが隠し持っていたのだ。

これら全ての証拠は取り調べに当たっていた司法船の一同を呆れ返させるに十分過ぎる程のもので.....。

「元CP5主官スパンダム、その犯罪行為は明確。よってインペ  
ルダウンへの投獄を命ず」

泣き喚き暴れるスパンダムは、けれどそれを許される筈もなく、  
インペルダウンへと運ばれ、収監される事になる。

そして……改めて、本来、司法船がやって来た目的が果たされる  
事になった。いや、正確には追加の事柄が増えたのだが。

……そう、トムズ・ワーカー社長であるトムへの海賊王の船建造  
に関する罪の判決。そして……今回の事態の原因の一端を担う事と  
なったフランキーへの判決である。

### 第31話 - 因果応報（後書き）

以上スパンダムの決着でした

トムさんは無論、原作同様プルトンの設計図を残しております  
ただ、その形が少々変わっていたのですが  
その辺の関わる話は次の話ぐらいで語れると……いいな



### 第32話・布石

船大工トムへの判決は簡単に終わった。

『無罪』

無論、その前にトムが問われた罪が何か、やら、けれどそれに対して功績がどうこう、双方を云々で無罪という流れになってはいるのだが、重要なのはその一点だ。

そして、誰もが、この判決は結果を理解していたから、誰も驚かなかった。

問題はその後、フランキーへの判決である。

「さて、ではまず理解しておらねば意味がないから聞こう。船大工カティ・フラム。君が何故裁かれねばならないか分かるかね？」

「それは……俺の造った船が司法船を攻撃したから、です」

裁判長の問いにフランキーはぼそぼそとした声で、それでもはっきり聞こえる声で答えた。

周囲の人間も、それが彼の罪なのだと思っていたが、裁判長はやれやれ、とでも言いたげな様子で首を振った。

「そうではない……そうではないのじゃよ」

え？と皆が裁判長を見る。その中にはトムやアイスバーグもいた。では、フランキーは何故裁かれているのか？

「お前さんが裁かれているのは、純粹に造った船を放置していた

事じゃ」

裁判長が順々にその理由を語っていく。

「司法船を攻撃したのはあくまでもスパングムの罪。お前さんの罪ではない。じゃが……あの船はお前さんが誰の為でもなく、お前さん自身の目的の為に造っていたと聞いた。それに相違はないか？」

「……はい、間違いありません」

そう、あの戦艦はいずれもフランキーが海王類を倒す為に、それだけの為に造ってきた戦艦だった。

誰かが何を成し遂げる為ではない。フランキー自身が成し遂げる為の船達だった。

それを聞き、うむ、と頷くと裁判長は続けた。

「あの船は誰でも使えるような状態で転がっておった。アスラ中将らが細工して、4隻以外はまともに使えんようになってはおったが、確認した所武器だけとか一部が使える船なら当初はもつとあったそうじゃ」

その上で、裁判長は問う。

『その攻撃力がW7の民に向けた時はどうするつもりだったのか』と』

別段、戦争で奪われたとか、そんな事を想定せずともいい。

もし、子供達が廃船船で遊んでいる時に、遊んで弄くっている時に武器が発射されたらどうするつもりだったのかと。

大人でもいい、廃船島で使えるものがないか探している時に、武

器が誤作動を起こして発射されたらどうするつもりだったのかと。W7の住人達も、すっかり頭から飛んでいたその可能性に気付いて騒ぎ出す。

事実、廃船島で海兵らが作業している間にも、子供達の姿は周囲に確認する事が出来た。

子供達にとつて、廃船島は格好の遊び場だ。

そんな中、形の残っているフランキーの戦艦を遊び場にして、そうして遊んでいる中で武器が発射されるような事態になったら……それは決して架空の話ではない、現実によりうる事態だった。

それをかみ締めるフランキーの脳裏にアイスバーグから言われ続けた言葉が浮かんでいた。

『凶器を存在させた責任を問いかけてんだ、バカンキー！！！！』

造るのはいい。

だが、造った以上は責任を持たねばならない。

船大工の場合、それがきちんと設計通りの力を持っているか、という事になるが、今回のフランキーのケースで言えば、彼が製作者なだけでなく、オーナーなのだから、きちんと管理にも責任を持たねばならない立場だった。

今回はアスラ中將が仕掛けを作っていた為に助かったが、もしそうでなければどうなっていたか……？中將が出てくる前に、スパンダムが言っていたように、トムまで巻き込んで処罰を受けていただろう。

ぎりっ、と歯を鳴らすフランキーの様子を見て、裁判長は言った。

「……理解出来たようじゃの。それでは判決を言い渡す。と言うても、お主にはいずれかを選んでもらう」

選ぶ、という言葉に「はて？」という様子になる。

「1つ目は、今後10年間、解体を担う事。設計図を描くまでは許すが、模型も含め、一切の船の製作は許さん」

造るのではなく、解体を専門にせよ、という事。

今回、管理をきちんと行なわなかったが故に起きかけた事を反省させる為の処置。

設計図を描いてもいい、というのは温情に見えるが、その実かなりきつい。

例えるなら、漫画を買ってきてもいいが、読んではいけない。ゲームを買ってきてもいいが、プレイしてはいけない。そんな意味的な処罰を含めた処置だ。

「もう1つは、海軍にて奉仕。お前さんの武器そのものはかなりの威力とコンパクトさを持っておった。それを考え、今後10年間、武器開発部で研究と製造を行なう事じゃ」

こちらは純粹に彼の能力を評価しての事。

既に海王類をも倒す武器を完成させた事自体は評価出来る。

しかし……それは船には一切関われない、何かを壊す為のものを作り続ける道。

最終的にフランキーが選んだのは……。

……

結局、前者を選んだか。

ある意味原作通り、とでも言うべきか。

裁判の後、アスラは1人の人物と会っていた。

「今回は、ありがとうございました」

そう言って、頭を下げるのはアイスバーグだ。

「しかし……一体何の為に？」

自分に会いに来たのか、疑問に感じているらしい。

まあ、もつともだろう。アイスバーグはトムの件にも、フランキの件にも直接関わっていない。だが、俺の用は彼でなくてはならない理由がある。

「ああ、君に頼みがあつてね……」

「頼み、ですか？」

そう、俺が話したのは、原作のガレーラ・カンパニーだ。

このW7の造船所をまとめ、1つにする事で、それまで他に足元を見られていた木材や鉄の購入をも有利とし、W7を活性化させた方法だった。

現代でも、このような方法はある。

複数の企業が並び立っていれば、売る側は他が高く買うなら、そちらに売ってしまう。逆に買いたいと希望しても、そのお値段では……他の造船所からはとという話が来てまして、で余計に高く売りにつける。

競争原理が働かないという欠点などはあるが、少なくとも今のW7を活性化させるにはそれしかないだろう。

しばらく考えていたアイスバーグも同じ考えに至ったらしい、何度も頷いていたが、ふと顔を上げて、真剣な顔つきで尋ねてきた。

「2つ聞きたいのですが」

「どうぞ。答えられる範囲なら」

もっとも、聞きたい事は大体想像がつく。

「では、1つ目ですが……何故私に？」

矢張り予想通りだった。

答えは簡単だ。他に人がいない。確かに、トムは誇りある優れた船大工だ……だが、それだけでも言える。彼には、会社を大きくしようとか、そういう欲も意思もない。ただ、優れた船を造りたい、正に職人の鑑だが、今回の件には不向きだ。

フランキーは論外。今後10年間は解体専門だし、そもそも彼は街の人達から少々アレな目で見られている。

そうして、トムさんの咆哮で多少は活が入ったとはいえ、まだまだ、この街の他の住人には、そこまで何とかしようという気概は未だ、ない。

今回の件では、まず人の信頼を得なければならない。

諦めずに、前へ前へと進む気概を持ち続けなければならない。

おそらく、それが可能なのは目の前のアイスバーグのみ。

その辺を説明すると、『そこまで見込まれるとは……これは、やるしかなさそうですね』、そう言って、ニヤリとお互いに笑いあった。

「で、もう1つの質問なのですが……貴方は何故このような事を考えたのです？海軍中將が、このW7の復興の事など考える必要などないはずですが？」

ああ、矢張りそれか……それはだね。

「それは……秘密です」

矢張りこの言葉を言う時は、人差し指を口に当てて、片目を瞑るポーズだな。

一瞬、アイスバーグは呆気に取られた顔をして、苦笑を浮かべた。言うつもりがないと判断したんだろう。

……まあ、俺からすれば、別段大した意味合いはない。原作通りにしたいと思ったのだと思う奴も……まあ、他に原作を知っている奴がいれば思うかもしれない。

それもある。

ただ、それ以上に、今後この街にある程度の発展の基礎が築かれなくては、海列車一発で終わってしまう。

海列車は優れた技術だが、余りに天才によって築かれた芸術品過ぎて、トムが亡くなった後は誰も作れなくなった。建設に携わっていたアイスバーグは残っていたのに、それでも、だ。

無論、トムが生き残った以上今すぐ途絶えるという事はないだろうが……海列車といった技術は受け継いでいかねばならない。

1度途切れた技術は復活させるのが大変だ。

俺は1度夢見た事がある。今は、船に頼るしかない、ログポースでログを溜め、航海するしかないグランドラインを、島と島を結び疾走する海列車の姿を……。それが出来た時……きっと海はまたもう少し平和に近づける、そう思うのだ。

例え、そうなる前に……おそらくは起きるであろう、大きな争いが。

それでも……技術が残っていれば。

きっと残った側が、より平穏な世界を作ってくれろと信じるから。

### 第32話・布石（後書き）

うう、W7終わらなかった

はい、実はまだ終わってません！

次回はトムさんのプルトン設計図焼いちゃった発言の真相含めて、  
お送りします



### 第33話・信念（前書き）

プルトンに関しての種明かしです  
日常編は……もう少し待ってね

### 第33話・信念

決着のついた、その晩の事。

トムズ・ワーカー本社、階段の裏側にある隠し部屋のような場所で、1人トムは人を待っていた。

既に、アイスバーグもフランキーも帰り、コロロも今頃は夢の中だろう。

司法船も明日には出港して、帰還の途につく。

部屋の中には幾つもの棚がある。

そこには、多数の資料がきちんと整頓して収められている。

先だって、CP5の面々が調べていった資料だが、むしろ却って整頓されたぐらいだ。当たり前の話だが、探し物をする時、ドラマかどこそのように、片端から床に落として散らかしていくという手法は間違っている。

それは時間がない時、手っ取り早くないかどうかざっと漁る時や、或いは警告として行なうべきものに過ぎない。

想像してみるといい。

何百枚かの白紙の紙を床にばらまいて、確認していく光景を……。きちんとまとめて、冊子のようにしてから確認していくのと、1枚拾ってはまた床に捨て、また次を拾って確認……。どちらが効率的かは言うまでもない。これは終わった、こちらはまだ、という具合にはつきりさせていく必要があるのだ。

海列車を作るには、10年の月日がかかった。

その全てがここにある。

「……待たせたかな？」

「いや、構わんわい」

そうやって柵を見ていると、待ち人が来たのだろう、声が掛けられた。

トムは立ち上がりながら、そちらに向き直る。

「ようこそ、トムズ・ワーカーへ。アスラ中将」

そこにいたのは、同じく明日にはこの地を離れる海軍本部中将アスラの姿だった。

双方が用意していた酒を準備して、呑む。

しばらくは双方素直に今日の事について、或いは酒の味について話をしていたが、やがて落ち着いたと思えた頃、トムが口を開いた。

「今回の件には礼を言う。お陰ではれんかった」

そう言って、頭を下げる。

いやいや、と手を振るアスラは柵に並ぶ資料に目をやった。

「……プルトンの設計図、それ自体は確かに燃やされた、それは事実だが」

「別の形で残しておらんとは言うたらんかったのう」

たっはっは、とトムが笑う。

実は、今回の件に関しては、もっとずうっと早い時期から始まっていた。

トムと接触し、プルトンの設計図の事を指摘したアスラは、既に政府組織CPによって薄々感づかれている事を伝え、それを複写す

る事を勧めていた。

それもただ複写するのではなく、幾つにも分割して、だ。

最終的にそれを受け入れたトムは密かにプルトンの設計図を複写、分割した。例えば、機関だけ取っても、配管の一部、駆動装置の一部という具合におおよそこれだけで100枚を越える。

その上で、それらは分けて、海列車の膨大な資料に紛れ込ませてある。木を隠すなら森の中、と言わんばかりに隠されたそれらの資料を見破るには、船の知識を豊富に持ち、海列車の構造を理解し、設計図がそのように分けられているという前提を持って、1枚1枚探してゆく、そうして『これは違うのではないか?』という設計図を見つけ出し、更にそれを一定の組み合わせで組み合わせる事によって初めてプルトンの設計図が浮かび上がる。

スパンダムらCP5はさすがに、船の知識も海列車の構造も理解しておらず、更には『プルトンの設計図』というものがあると思っていたが故に、幾度もプルトンの一部を実際に目の当たりにしながら、遂にそれに気付く事はなかった。

当然だろう、アイスバーグでさえ、その為にプルトンの設計図を何度も見ながら、気付く事がなかった。海列車の資料の中には失敗例も多数残されている。とはいえ、その失敗の中から成功に至る鍵が生まれた事もあり、研究成果の全てがここに収められている為、アイスバーグという専門家でさえ、誤魔化されてしまった。

そうして、スパンダムが来るほんの4日前に全ての複写は完成し、プルトンの設計図本体は焼却されたのだった。

「しかし、よかったんか?こんな事をして」

トムの言葉はもつともだ。

海軍本部中將という立場の人間が、それも出世街道を驀進して、次代の大将ともみなされている相手が、何故ここまでの危険を犯して、自分に肩入れしてくれるのか。

むしろ、プルトンの設計図というものを、CPに先駆けて知ったのならば、自分の身柄を押さえて、手柄とすればいい筈だ。

そんなトムの思いを込めた視線にアスラは静かに口を開いた。

「……武器というものにはね、際限がないんだ。より強い武器を生み出した所で、相手はそれを上回る武器を持つとする、もしくはそれに匹敵する武器を持つとする。そうして対抗可能な武器を持てば、また相手は……とね」

特に、こんな世界では尚更。

アスラの脳裏にあるのは、元の世界の軍拡競争だ。誰もが相手を上回る、ないし相手に匹敵する武器を持つとし、相手に馬鹿にされない、一目置かれる武器を持つとし……気付けば、世界を滅ぼすに十分な核兵器で世界は埋め尽くされた。

そうして今も、世界のあちらこちらで、核保有競争は続いている。情報を独占してしまえばいいではないか、と思う者もいるかもしれないが、所詮1度表に出してしまった兵器はそう遠くない内に、対抗する為に相手の組織も持つ。

そう、核兵器も、その情報をアメリカが嚴重に秘匿しながら、それでもスパイによって嘗てソ連が手に入れたように。

プルトンがどれ程恐るべき破壊力を秘めた古代兵器なのかは、アスラもまた知らないが、それを世界政府が手に入れ、そして建造したが最後、間違いなく革命軍もまた、それをいつかは分からないが手に入れる、そう思っている。

後は……どちらかが倒れるまで、或いは双方が矛を収めての和議を結ぶまで果てのない軍拡が待っている。

アスラの思いたる『平和な海』、たとえそれが利き手にナイフを持って後ろ手に隠したような平和であっても、構わない。

その為には、プルトンなどという兵器は邪魔なのだ。

元の世界の事まで詳しく語った訳ではないが、トムもアスラの想  
い自体は受け取ってくれたらしい。

「たっはっは。まあ、ええわい。男が決めた事ならそれでええ。  
ドンと胸を張っておればええ」

「とはいえ、秘密は守ってくれよ？俺には嫁さんと子供もいるん  
だ」

それ以上はこの事について双方とも語る事はなく、翌日にはアス  
ラもまた、海軍の部隊と共に帰還していった。

この数年後、W7にはガレーラ・カンパニーが成立。世界政府御  
用達の大企業となっていく。トムもまた、アイスバーグの想いと信  
念に賛同し、一応は名目上はガレーラ・カンパニーの要職に就く事  
になったが、実際には経営にはまるで興味を示さず、殆ど設計と建  
造の現場を走り回っていた。

また、フランキーは、こうした会社に入れなかった、あぶれ者達  
を、その本来の親分肌から拾い、アイスバーグと喧嘩をしつつもフ  
ランキー一家としてガレーラ・カンパニー御用達の解体業者として  
の地位を確立していく事になる。

そうして……帰還したアスラは、センゴク元帥より1つの儀礼へ  
の参加命令を受ける事になる。

新たなる王下七武海、『海侠』のジンベエの就任式典である。

### 第33話・信念（後書き）

という仕掛けでした

木を隠すなら森の中、映画だとインディ・ジョーンズの第1話ラストの光景による仕掛けに近いでしょうか

ちとアスラなりの信念を出してみました

この世界は海賊が多いですが、そこにプルトンみたいな兵器が持ち込まれるよりはマシだと思っただけですよね

第34話・幕間（前書き）

100万PV突破！

10万ユニークアクセス突破！

ありがとうございます



### 第34話・幕間

『海侠』のジンベエ。

魚人海賊団船長、懸賞金額2億5000万ベリー。

それが、新たなる王下七武海となる者の名前。

魚人海賊団は、聖地マリージョアを襲撃したフィッシャー・タイガーが設立した【タイヨウの海賊団】の正当なる後継者とも言わべき海賊団だ。

3年前、フィッシャー・タイガーが亡くなった後、タイヨウの海賊団は幾つかに分裂した。

その中でも最大の勢力を維持し、更に分裂した幾つかをもその後吸収したのが、魚人海賊団となる。

これらをまとめあげるにあたって、大きな存在となったのが、ジンベエだった。

元の世界風に言えば、昔ながらの任侠の大親分とも言うべき、仁義に厚いジンベエはそれ故に慕われ、信用されていた。単なる実力だけでなく、それこそがジンベエを魚人の海賊の中でも一際抜けた大海賊に押し上げたと言ってもいい。無論、その実力自体も王下七武海に任じられるのに十分なものがある。

世界政府としても、魚人といい加減にある程度の和睦を成し遂げたかったという事もある。

魚人島はマリージョアの真下にあり、フィッシャー・タイガーの侵入以降警備は強化されたとはいえ、やはり一番警備上危険な場所にある事には変わらない。

ましてや、海中では魚人と人魚に敵うと考える程、世界政府は能天気ではない。

人魚や魚人の希少価値から、少しずつ数が海賊やら人攫いやらに

削られていくのなら、まだ問題なかっただろうが、白ひげが魚人島に対して『ここは俺の縄張りにする』と宣言して以降、海賊の襲撃も人攫いの襲撃もパタリと止んだ。

最終的に、魚人との和睦の条件として世界政府が提案したのが、王下七武海への編入。

これによつて、タイヨウの海賊団以来の魚人海賊団への懸賞金を消し、魚人のリーダー的存在たるジンベエに世界政府に措いて一定の地位を与える事で、和解を成し遂げる事になったという訳だ。

ジンベエとしても、向こうが譲歩したのに、何時までも意地を張つても仕方ないという事もあり、双方が折り合った……というのが表向きの筋書きだ。

実際には、まあもつと色々ドロドロした駆け引きがあつただろうが、軍人である俺は知らん。

さて、ジンベエ自身は問題ない。

原作において、彼自身は白ひげへの恩義の為に、自らの地位も命もいともあっさりと賭けた。逆に言えば、それだけ信義に厚い、一度友誼を結べば向こうから裏切るような相手ではない、という事でもある。

むしろ、俺にとつての問題は、この七武海への就任に伴い魚人海賊団から解き放たれた男の事だ。

『ノコギリ』のアーロン。

懸賞金額1億1000万ベリー 2000万ベリー。

……おかしいとは思つたんだ。

嘗てジンベエと肩を並べたとまで言われた男がたつたの2000万ベリーしか懸賞金がかかつていないなんて、と。

調べてみれば、理由は簡単だった。

ジンベエは義理人情に厚い男だ。それ故に、世界政府からの条件として、アーロンを魚人海賊団から追放する形となつたが、その際

に彼にも魚人海賊団への王下七武海と同様の処置を望んだ、らしい。正確には、その一部、というべきか。

最終的にそれは認められ、それまでアーロンにかかっていた懸賞金は一端リセットされ、0ベリーとなった。

2000万という額は、その後追放されたアーロンが東の海へ流れていく過程で、改めて懸けられた懸賞金額だった、という訳だ。成る程、1度0になってから再スタートしたとなれば、その懸賞金額としても納得がいくというものだ。

……そう、既にアーロンは解放されている。

東の海へ入った事は確認されており、既にココヤシ村近辺に勢力を張りつつあるという……。つまりは既にナミの義母であるベルメールは……おそらく生きてはいない。

ちよつと調べてみたが、あの地域担当の海軍支部の責任者は、ネズミ大佐。

調べてみると、実力というか武力でのし上がったのではなく、献金や上へのゴマスリで昇進……。どう考えても、アーロンに買収されてるよね！アーロンに対抗可能な武力持っていないのに、特に潰されたりしてないんだから。

俺には打つ手がなかった。

この事件とW7での事件はほぼ時期的に重なっていた為、W7の案件が解決を見た頃には、既にアーロンは東の海へと流れていった後だった。

そして、海軍本部中將を最も平和な海へとほいほい出させてくれる程、海軍は暇な組織ではない。

まあ、今は、ジンベエの就任式に出席しているが。

実の所、これだって、W7から帰還後すぐに行なわれたものではない。

新たなる王下七武海の誕生はある種の一大イベントだ。無論、黒ひげティーチのように比較的地味に行なわれるものもあるが、基本

としてプレスにも公開されるし、一定以上の海軍大将ないし中將らの出席もある。特に今回のような、魚人との和解という意味合いもあるものとなれば、尚更の事だ。

さすがに、他の王下七武海は誰も来なかったが。

何が言いたいかというと、俺が帰還してから、しばらくは待機になった訳だ。

いや、実際センゴク元帥からすれば、休暇代わりという意味合いはあつたんだろう。今回の件は余り公に出来る話ではないから、表立つての表彰は出来ないものの、司法船への襲撃を防ぎ、権力を乱用した連中によって無実の者が罰せられるのを救うという功績を挙げた事は事実だ。

任務に出ている他の中將ら（の内、式典に参加予定の者）が全員揃うまでにもう少しかかるから、どのみちそれまで任務に出す訳にもいかない。だから、家族とゆっくりしてろ、という温情な事は疑いないし、実際ハンコックや娘のエスメラルダとも久しぶりにゆっくりと一緒にいれたし。

……なに？娘の名前の由来？これは、ハンコックの妹2人が共に花の名前（うん、サンダーソニアもれっきとした花の名前なんだ。ちなみにユリ科な）なので、当初俺はサクラと名付けようと思ったんだが……何だか幸薄くなりそうな気がしたので桜と同じバラ科の品種の中から選んだ。

……こんな名前を知ってたのは、親父がバラが好きで、庭で栽培してたから、幾つか知ってただけなんだけどね。決して、宇宙を行く女海賊の名前から取った訳ではない事だけは断言しておく。

とはいえ、今頃東の海で何が起きてるか知ってる身としては……どこか心にそれがあつたらしく、ハンコックからは心配された。というか、心配をかけてしまった。

まあ、今回の事件の事で、と乗り切つたんだが。まあ、完全に嘘じゃない。そうすぐに、世界政府が古代兵器プルトンの設計図をトムは燃やした、と信じてくれるとも思えんからなあ……。うまく隠

蔽出来るといいんだが。

……更に問題なのは、俺にはこの休暇後、式典に出た後も任務が入っていた。

ある意味仕方のない話だ。W7は確かに意義のある仕事ではあつたし、センゴク元帥も『予想とは違ったが、よくやった』と言つてくれた。別段頭痛をこらえているような様子もなかった。彼には彼なりの正義があるからこそ、権力を使って好き勝手するような輩は許せないという事だろうか。

とはいえ、自分の判断で入れた仕事だけに、他の仕事をこなさなければならぬ。

今回の式典では、ジンベエと話が出来た。それはいい事だ。

見た目は厳つくとも、原作同様漢気のある、好漢だと話をすればすぐに分かった。……あれは味方にいれば頼もしいが、敵に回せば物凄く厄介な相手だ。

そして、原作同様、もし海軍が白ひげと戦う事態が発生したとなれば……彼は矢張り原作と同じ選択をするだろう。

既にエースとは将来の話をした所、素直に海軍に入るのは未だ拘りがあるらしく、かといつて海賊になる、という気持ちにはなれないらしく、しばらく賞金稼ぎをして腕を磨きながら、数年程の間に結論を考えてみる、という話になっている。サボはというと、エースに付き合う、という事らしい。

まあ、すぐにではないが、そうなると原作とは展開が異なるし、将来は海兵となれば……白ひげとも無駄な衝突をしなくてすむのだが。今はまだ、白ひげがいた方が間違いなく、海は平和であり続ける事が出来るんだ。

……そうして、俺はこの式典の後1年余りの間、東の海へと向う事は出来なかった。

そうして、『ノコギリ』のアーロンの消息はぱったりと途絶えた

……つまりはそういう事なのだろう。

俺が東の海へと向かう事が出来たのは、翌年、ルフィらの故郷へ向かう里帰りに合わせてだった。

### 第34話・幕間（後書き）

日常を書くこうかとも思ったのですが……

ココヤシ村の事が心に残っている状態で、楽しい気持ちになれるとも思えないので、今回は幕間の出来事（W7の事件とアローンの事件との）として書きました

アローンの懸賞金額に関しては、独自解釈ですが……明らかにジンベエの懸賞金に比して、肩を並べたって割りにはアローンの額って安すぎるので、こういうのもありかなーと

### 第35話・待ちわびた日

さて、東の海へ向かえるまでに、何があったのか、ざっと書き記してみよう。

当初は通常の任務だった。

俺の任務というのは、基本は各地の支部では対処不能な所への支援だ。更に俺の場合は、この地位が上がってからというもの、新造された艦船のシリーズ、所謂病院船やレスキューシップ、工作船の責任者にもされてしまった。

当初こそ、俺の戦艦みたいに、高価でも一隻にあれこれ詰め込んだが、さすがに無理があると看做されて、専門の船を安く建造してそれを護衛つきで派遣する、という体制に変わった訳だ。

どついう事かというところ、最悪海賊に襲われて崩壊した街の再建、その始動段階における海軍側の総責任者にさせられる事だつてあるという事だ。

街が海賊に襲われ壊滅的被害を受けた。

よし、じゃあただちに病院船と工作船を護衛つきで派遣する。

護衛に俺もつく、となる場合もあれば、後方から指示を飛ばす時もある。

お陰で、場合によっては同格の中將に護衛のお願いをしに行く事もある。

重要な場所だと（少なくとも現場の支配者である貴族とかがいて、ややこしい場所とかってケースもあるんだ、これが）、俺が直接行って、貴族達と会談、場合によっては国王とかと話をするつても決して珍しい話じゃない。

……うん、王様とか貴族とかと話す機会も増えたんだ。

そうして、実感した事。こいつら大部分は腐ってやがる……。

偶々会えたアラバスタ王国コブラ王などは積極的に民と交わり、同じ目線で話しが出来る好人物だったが、殆どの連中は普通の民を



人とも見ない傲慢な連中がゴロゴロしてた。

なんで、この職になっても、元の世界の如くストレスで悩まされにやならんのだ……以前と違い、おべっかを使う必要はないとはいえ、話すのが苦痛な相手とにこやかに会談しなければならぬ、というのは辛いのだよ。

こんな仕事で1年余り追われてる時、その事件は起きた。

医療大国と謳われたドラム王国における医師の大量追放。

うん、新たに王位を継いだワポルによってイッシー20を除く医師が追放されたのだ。この追放された医師を積極的に受け入れたのが、病院船などの登場で船医不足が慢性化していた海軍だった。

……そして、当然のように、俺が責任者にされた。

結果、この間はろくに世界情勢を落ち着いて調べる事さえ出来ず、たまにある休暇もどっかの海に出かけるなんて余裕はない、というか休暇が取れたら、家族と一緒にいないと、普段なかなかいられないのだから、という生活だった。

新たに大量の医師を雇用し、それを配属して……。

それらが終わり、世界情勢もとりあえず落ち着いている、という状況になってようやくと、俺は纏まった休暇が取れ、東の海に向かったという訳だ。

ちなみに今回は、家族一同も連れて来ている。

念の為に言っておくが、ちゃんと許可は取った。さすがに働かせすぎたと思っていたのか、センゴク元帥や大参謀おつるさんの目が妙に優しくなった気がしたのは、きっと気のせいだ。

とりあえず、引き受けてくれたサカズキ大将（基本この人は後方勤務が増えた）に後事を託して、俺は久方ぶりの休暇に出た。

……とはいえ、休暇になるかは分らんが。

まあ、精神的にずうっと……小骨が刺さったように気になり続けている事を片付けると考えれば、いい話なのだろう。

ココヤシ村。

とはいえ、真つ当に戦艦で乗りつけるのはどうかと思うので、周辺の支部（ネズミ大佐の所なんぞ泊められるか！）にて情報収集。

……既に確認した話では、プリンプリン准将が指揮下の部隊を率いて討伐に向かい……返り討ちにあったそうだ。元々見た目には少々アレだったとはいえ、この辺りでは有数の実力者だった事は確かだ、それがあっさりと返り討ちにあった事と、残る中では最高位に位置するネズミ大佐が交渉に当たっている、そうしてとりあえず暴れ具合も見境ないというのはない、という事で、放置状態になっていたらしい。

……『ノコギリ』のアーロンが。

まあ、分からないでもない。

仮にも元は億越えのグランドラインの海賊だ。正直に言ってしまうえば、この辺の海兵では太刀打ち出来まい、という気持ちがある。

だからこそ、彼らは事なかれに走ってしまったのだろう。……だが、それも今日で終わらせる。

その信念を持ち……だが、海軍が来たと知られては、ネズミ大佐が隠蔽工作に走る可能性もある、と敢えて少数でココヤシ村のアーロンパークへと向かった。

ちなみに服装は何時もはどこかのマフィアのようなスーツ姿だが、今日はカウボーイハットにカウボーイみたいな上と……まあ、下は普通のズボンだけど、色は統一してるぞ、そんな格好で向かった。

「シャハハハハ！いいって事よ、何を今更水くせえ！いい世の中ってのは金がうまく回るもんさ！」

「チチチチチ、いや、今回もありがたく受け取らせてもらっよ」

その頃、新たに築かれたアーロンパークでは、アーロンと海軍第16支部責任者ネズミ大佐が正に癒着そのものの光景を展開していた。

アーロン一味の幹部たる立場に置かれているナミだったが、この光景を見る度に苛立ちが募る。

裏切り者と看做されようと、アーロンから1億ベリーで、この島を買い取るという約束をしたが故に、彼女としては海図を描き続けるしかない。力で太刀打ち出来ない以上、ある意味この光景は彼女にとっては金さえ溜めればと信じられる光景でもあるのだ。

「じゃあまあ、頼むぜ？」

「チチチ……任せたまえ、海軍本部には何時も通り、何も問題はないと伝えておくとも」

アーロンにしてみれば、この金で海軍本部から厄介な相手が派遣されてこなければ、それで十分元が取れる。

グランドラインにいた頃のアーロンは嘗て天竜人の奴隷とされていた事もあり、人という種族に憎悪を抱いている1人だ。だが、海軍の上層部というのは極めて厄介な相手が揃っている。それを認めない程アーロンは馬鹿でもない。

魚人海賊団にいた頃は、大将クラス相手とかはともかく、十分に対抗可能な戦力があつた。

しかし、今はそうではない。

元々、タイヨウの海賊団に入った後、ジンベエと肩を並べていたと言われていたが、確かに単純な実力では最初はジンベエと肩を並べていたかもしれないが、何時しかその差は開き、魚人海賊団でも信望はジンベエに集まり、アーロンは魚人海賊団のジンベエの配下の1人として周囲からは看做されていた。

この辺の事情を軽く説明すれば、人という種に憎悪を抱き、なま

じつか自分の力に自信のあったアーロンは魚人の能力頼りの喧嘩殺法で暴れてきた。

一方、人にも認めるべき相手はいる、という姿勢を持つジンベエは、フィツシャー・タイガーに師事して魚人空手と魚人柔術の達人となっていた。

あくまで喧嘩殺法のアーロンと達人からきちんと武術を学んだジンベエ。その実力差は同じ魚人であるが故に次第に明らかなものとなっていた。とはいえ、アーロンは人を憎悪する反面、同じ魚人の事はきちんと認められるだけの理性がある。だからこそ、アーロンは嘗ては肩を並べたジンベエがフィツシャー・タイガー亡き後、自分の上に立つ事も認めた。

ただ、王下七武海に入る事は許せなかった。

それは人に膝を屈する事になるように感じられたからだ。

無論、アーロンとて頭では理解している。このまま魚人が世界政府の敵と認識されるのは拙いと。ただ、理性と感情が一致するかは別問題だ。

だからこそ、ジンベエが七武海に入るのを悩みぬいた末に決断した後も、同じように納得いかない面々と暴れ回っていた。とはいえ、これは同時に、ジンベエの七武海就任に納得いかない者を、感情を理性で抑えられない者を自分の元を集めていたという面もある。

そうして、自分はそうしたある意味魚人のハズレ者となった者達を引き連れて魚人海賊団を出た。そのお陰で、ジンベエの七武海就任において、これ以上海賊団内部に騒乱は起きなかった。

別に犠牲になったつもりはない。ジンベエに謝られても、却って腹が立つ。現状はあくまで俺が納得した上で、選んだ結果だからだ。誰に強制された訳でもない！

とはいえ……。

その結果として、選んだ道が唐突に終わりを告げる事になるとは、アーロンも……そして、同席していたネズミも考えもしなかった。

「見つけたぞ」

突如として現れたカウボーイスタイルの男性、顔もまた大きめの帽子に隠れてはつきりとは見えない。

「2000万ベリーの賞金首『ノコギリ』のアーロン……と海軍第16支部のネズミ大佐か」

「シャハハハハ……なんだ、賞金稼ぎか？」

ゆらり、とアーロンは立ち上がる。

こうした連中は決していなかった訳ではない。嘗て自分に懸けられていた賞金額からすれば、今の賞金額は5分の1以下だが、それでもこの平和ボケした東の海では最高額クラスだ。さすがにネズミ大佐も彼の懸賞金を無しにする事は出来なかった。

身の程を知らずに首を狙ってくるものはいるが、まあ、実際問題としてグランドラインの賞金稼ぎ達にしてみれば、割が合わない。億越え級の実力者を倒して得られるのが2000万ベリーでは、わざわざ東の海まで行く気が失せる。

かといって、普通に2000万ベリーを高額と違って、やって来る程度の賞金稼ぎにやられる程アーロンは弱くない。

ただ、言おう。

今日ばかりは彼は運が悪かった、と。

### 第35話・待ちわびた日（後書き）

今週のジャンプを見て、色々と思いついた事柄が増えました  
ある程度予想した事もありますが……とりあえず、今回の事件も組  
み込んでのお話が頭に湧いてます  
……が、まずはアーンです

第36話・戦う者達（前書き）

アスラとアールン…  
の前に戦う人達です

### 第36話・戦う者達

アーンとアスラ。

両者の踏み込みはどちらともなく、ほぼ同時だった。

互いに真つ向からの拳の一撃。

ほぼ互角に跳ね飛んだ両者だったが、これだけでも、双方とも互いの力量を感じ取っていた。

『さすがアーン。殴り方は力任せなのに、これでもこちらと真つ向やり合うか。魚人の怪力は侮れんな』

『ちつ……技で俺の力と相殺しやがった。こいつ、単なる自信過剰ななんかじゃねえ』

表面上は変わらぬ素振りを見せつつも、空気は緊迫の度合いを増した。

早い話が、双方とももう少し本気を出す事にしたという事だった。

その一方で蹂躪されている者達もいる。

もちろん、子分達はアーンの事を信頼してはいたが、信用する事と何もしないのは違う。

特に幹部と呼ばれる面々の中でも武闘派の面々、タコの魚人であるはっちゃん、エイの魚人であるクロオビ、キスの魚人であるチュウの三者は、しかし、翻弄されていた。

誰に？

それぞれを見ていこう。

「にゅっ!?!」



めこり、とはっちゃんが地面に叩きつけられた。  
先程から同じような展開が続いている。

目の前には、ちょこんと不思議そうな様子で、アリスが座り込んでいる。

「ま、まだまだ……にゅっ!？」

諦めずに起き上がるうとした所を、いいから寝てなさい、とでも言わんばかりにはたかれて、また地面に沈んだ。

軽くやっっているように見えるが、当初はっちゃんは自慢の六刀流で斬りかかったのだが……。

「蛸足奇剣！」

「ふみゃあ！」カキンカキンカキンカキンカキンカキン

「にゅ、にゅっ!？」

と、鉄塊で弾かれた所へ、鉄塊がかかったままの前足で一撃。爪は立っていかないが、何しろグラン・タイガーの魚人すら上回る怪力でもって、しかも鉄塊つきの一撃だ。アスラが『鉄槌』と呼ぶ、この一撃ではっちゃんは地面にめり込み、以後は意識が戻って起き上がろうとする度にはたかれるという光景が続いていた。

ちなみにアリスの周囲には、はっちゃんを助けようとした他のアローン一味の魚人達がこちらは起き上がる事さえ出来ずにめり込んだままになっていた。

一方、クロオビを相手どったのはサンダーソニアだった。

ちなみにこちらも一方的なものとなつてしまつた。

原作で披露した覇気の力で相手の動きを読む、という手法を既に身につけていた彼女は、結果クロオビでは到底太刀打ち出来なくなつてた。

というか、まあ、修行する事を選んでから鍛錬してもらつた相手は海軍本部の佐官以上に、場合によつては将官まで加わる。

更に実戦経験を積むと称して、アスラに連れられてグランドラインの海賊達とやり合う事もあつた。

お陰で、こうして、クロオビの攻撃にも冷静に対処が出来る。加えて、彼女にはもう1つ有利な点があつた。

『……先だつて、魚人空手の達人という方にお相手していただけたけど……あの方と比べると遅いわね』

威力、速度、練りこみ具合全てが格下だつた。

とはいえ、これはクロオビを責めるのは酷だろう。何しろ、サンダーソニアが先日相手をしてもらった相手というのは他ならぬ王下七武海の一人、ジンベエだつたからだ。

偶々、海軍本部に用件があつてやつて来たジンベエを見つけたアスラが、この後取れる予定の休暇でおそらくアーロン一味と戦うだろうと考へていた事から、彼女らに稽古をつけてもらえるよう頼んでいた。

ジンベエとしては別に断つても良かったのだが、就任式以来の知り合いであるアスラの頼み（実はアスラは王下七武海の面々、特に武を誇るミホークとジンベエの2人とは積極的に接して、鍛錬密度を上げていたりする）である事と、サンダーソニアとマリーゴールド2人が鍛える願いが、姉を姉の子供を、自分達の家族を守るだけの力を手に入れたいと知り、そういう事なら、と軽くではあつたが、稽古をつけてくれたのだつた。

結局、この後もクロオビは翻弄され続け、息切れした所を狙つて

獣人化した彼女の蛇スラムの一撃でクロオビはその意識を刈り取られる事になった。

チュウを相手どつたのはマリーゴールドであり、こちらは3名の中では一番善戦していた。

マリーゴールドだが、実は外見は原作とは大分異なる。食事とトレーニングによって体を作った……要は相撲取りと同じやり方でやったのではなく、純粹に海軍の鍛錬方式で体を作った彼女はかなりすりりとした体を保っており、最近では海軍中佐の1人という雰囲気な所が密かに目撃されたりしてたりする。

「水鉄砲！」

「紙絵！」

もう1つの理由として、チュウの戦い方もある。

チュウの戦い方は基本は銃砲使用と同じ遠距離攻撃、一方マリーゴールドの攻撃は基本は格闘戦の距離だ。

つまりは、距離を取られるとマリーゴールドとしては毒液ぐらいしか、戦い方がない。

かといって、姉程覇気の扱いが得意でない彼女は、動きの先読みも難しい。

どちらかといえば、マリーゴールドはサンダーソニア以上に六式に適正を見せ、現状鉄塊・紙絵の二式使いとなっていた。防御を優先して覚えたのは、密かにいざとなれば姉の盾となって、という覚悟を持っていた為だったりする。

幸い、使う機会はなかった訳だが、今はその機会を存分に発揮していた。

とはいえ、接近戦闘に持ち込まねばどうにも手の出しようがない。

剃でも覚えておくべきだったかと悔やみつつも、マリーゴールドは焦りは見せる事なく……というか焦りを見せたが最後、上の力量の相手からは完敗を喫してきた為にあくまで心の動揺を抑えつつ、隙を窺っていた。

優勢に戦いを進めているチュウだが、こちらはこちらで焦りを内包していた。

何しろ、自分の攻撃が通用しない。

距離を取りすぎればひらひらと避けられ、偶に命中コースに乗っても、弾かれる。自分の不調かとも思ったが、ハズレ弾の着弾痕を見れば、そんな事がない事も分かる。となれば、相手が何らかの力量でもって、自分の攻撃を凌いでいるという事になる。

『悪魔の実か？』

とも思ったが、変身した姿を見れば、ヘビヘビの実系統の一つ、おそらくはモデル：キングゴブラ。

どういう仕掛けかと思ったが、なまじ自分の技に自信を持っていた事もあり、チュウは今度こそ、とばかりに攻撃を仕掛けた。

そして、それが勝負を決めた。

焦りを心に仕舞い、冷静さを保ち続けたマリーゴールドに対して、焦りから彼女しか見えていなかったチュウ。彼らの決着はチュウの水が切れる、という所からチュウが破綻を迎えた。

水の補給を忘れ、カラになった事に気付いて、そちらに意識が向いた一瞬に、マリーゴールドが間を詰めた。

『蛇神憑き、炎の蛇神！！』

ここが決め所とばかりに、試しに開発しつつあった技でもって全力で叩き込まれた一撃は、見事にチュウを直撃。

これを沈黙させた。

そうして、それぞれが決着をつけた頃、アスラとアeronもまた、決着がつきつつあった。

### 第36話・戦う者達（後書き）

という訳で、アリス、サンダーソニア、マリーゴールド戦でした  
実力的にも現状、この順になります

第37話 - 魚人アーロン（前書き）

対アーロン戦決着です

### 第37話・魚人アーロン

アスラとアーロン。

両者の激突はアスラの踏み込みが早かった。

『刹』

無言のままに、瞬時に自身の間合いの内へと踏み込み。

『指銃・黄蓮！』

片腕による指銃の連射を行なう、が。

「……浅いか」

間を詰められたと気付いたアーロンが瞬時に筋肉に力を入れ、『鉄塊』そのものには及ばないものの、恐るべき頑強さを発揮した。確かに刺さりはしたが、それはいずれも浅く、筋肉を貫くには至っていない。そして、アーロンと言えば、この一撃で相手の素性を察しつつあった。

「今のは……成る程な、手前の正体読めてきたぜ」

アーロンは先だってまで、グランドラインにいた海賊だ。

当然、その中には海軍の人間もいたし、六式（の一部）の使い手もいた。

先程の技は間違いなく六式の1つ、指銃<sup>シガン</sup>。その応用技。

六式は海軍の技だ。少なくとも、全く関係のない海賊が使うような技ではない。となれば、目前のこの男の正体として可能性は幾つ



か上げられるが、うち1つは退役した海軍将校。だが、退役したにしては技の切れがある。

そもそも、六式の1つを使ったと仮定するならば、先程の踏み込みも同じだろう。

六式の内2つを使い、片方に至っては応用技を使えるような相手をほいほい手放す程、海軍は暇ではあるまい、だからこの可能性は最も低い。

もう1つは、こいつが海軍を脱走した相手だという事。だが、そんな輩は普通は海軍から手配されて海賊となるし、そもそも自分とやり合う必要などあるまい。

となると可能性の高いのは2つ。

1つは政府系のCPなどの組織による自身の抹殺。

もう1つが現役海軍将校による……自分の行動を知つての討伐か……いや、単なるそれなら私服の意味がない。休暇かそれとも、ネズミの行動を知つて、そちらもまとめて捕縛する為か……。

まあ、ネズミが破滅しようが、知った事ではないが……改めて海軍将校を買収するのは面倒だ。

この辺りを瞬時に脳裏で計算し、改めて全身に力を入れる。最早、彼には油断も手抜きも存在しなかった。

一方アスラはアスラでこう考えている。

先程の反応は、早かった、果たしてこんな奴に原作初期のルフィが太刀打ち出来るのだろうか？

『原作より強いんじゃないのか？こいつ……』

だが、少し考えてみれば、当たり前かもしれないと思いなおした。何しろ、今日の前にいるアロンは1年程ちよつと前までグランラインにいた。これに対して、原作のアロンは8年近くに渡って東の海に位置し、周辺を支配して、強者と戦う事もなかった。

当然、如何に自分で鍛えようとも、なまじ正当な武術ではなく、喧嘩殺法で戦ってきただけに鍛え方も自分流とならざるをえず、実戦から遠ざかったとなれば、その力量はどんどん落ちていく。

そうすると……今目の前にいるのが、最強の頃に近いアーロンという訳か……。

面白い。

ならば、しばし純粋な武術のみでお相手させてもらおうじゃないか。

『嵐脚・断!』

連撃を考えずに放たれる嵐脚が一直線にアーロンへと向かうが、アーロンはこれをおかす。

「鯨・ON・DARTS!」

瞬時に襲い掛かってきたアーロンの歯の一撃を。

「紙絵」

ひらりとかわし、更にカウンター。

それをかわし、牽制とばかりに掌に掬った水を弾丸の如き一撃で放ってくる。

かと思うと、アーロンが取り出した巨大なノコギリ『キリバチ』を振るってきたが、こちらは『鉄塊・剛』でその歯ごと砕く。

確かに、強大な腕力により吹き飛ばされたが、それだけだ。

アーロンはミホークの剣術に遠く及ばない。いや、そもそも剣術を修得していない。魚人の能力に、その中でも一際優れた腕力を誇る自らの身体能力にあぐらを掻き、正当な鍛錬を怠った。

人という種は魚人のように怪力を持たず、水中で自在に行動出来

る訳でもない。

海王類に比べれば、遙かに矮小。

しかし、それを技で、技術で、数で克服し、世界政府として、この海だらけの世界で魚人や人魚をも支配体系に組み込んでいる。

周囲を見回せば、アリスが早々に決着をつけて、こっちを興味津々に見ていたのは知っていたが、どうやら一番梃子摺っていたマリ―ゴールドも終わったようだ。

「そろそろ終わりにしよう、アーロン……どうやら周囲の決着もついたようだいな」

「抜かせ……！」

アーロンの形相は凶悪なものとなっている。

部下が全員やられた、というだけではない。

既にアーロンにも分かっていた。この目の男は強い。それこそ自分が手加減される程に……！

おそらく、こいつはまだ何かしら力を隠している。そう見たアーロンの予想は正しく、これまでアスラはあくまで六式のみを使い戦っていた。悪魔の実の能力も一切使わず、攻撃の無効化も行なっていない。その全てを受け止め、かわしていた。

単なる喧嘩殺法で六式とやり合う。その凄まじさはアスラも認めていた。成る程、グランドラインの億越えにこれなら値する、と。

だが。

それだけだ。

アーロンからすれば、水中へと逃げ込んで、自身へと有利にしたかったが、アスラはそれを許さなかった。

何しろ、移動速度で言えば、六式を使うアスラが遙かに優位に立つ。

剃で回り込み、水中への道を断ち、空中から飛び込みを図れば、月歩で空を舞い、動きの制限されたアローンを内陸へと吹き飛ばす。荒い息をつきながら、アローンは水中への逃亡は断念せざるをえなかった。これ以上水中へ飛び込む事を狙えば、それが自身の隙となり、体力を削られ続けるだけ……。  
なら、己の最高の技で葬るのみ……！

「受けてみる……！ 鮫・ON・歯車<sup>トゥース</sup>……！」

全身を捻り、回転しながら突進する。

自らの身体能力頼りの喧嘩殺法を得意としてきたアローンの最強の技、自らの肉体による全力の一撃をアスラは。

「鉄塊……真剛！」

真つ向より受け止めた。

単なる剛、ではない。自らの肉体を悪魔の実の能力によって金属とした上で行われる鉄塊・剛。その強度は本来鉄を砕く威力ならば粉碎される鉄塊を遥かに上回るものとなる。基本の強度がタンパク質で構成される肉ではなく、重金属が基本となるのだから当然かもしれないが、結果。

「ガッ………！？」

アローンの一撃をも弾いた。

自慢の鼻もへし折れ、よろけるアローンの懐に踏み込み。その一撃を拳に籠める。

「拳砲」

それは己の最高の一撃。

欠かさず積み上げられてきた鍛錬の結晶。

だが、それだけではない。単発故に足りなかったものをここに籠める…！

「斉射三連！」

大気を引き裂き、音すら置き去りにして放たれた一瞬の三連撃。

撃ち込まれ、アーロンが吹き飛んだ後になって、正に砲撃の如き轟音が遅れて響き渡る。

転がったアーロンが起き上がる気配は、もうなかった。

### 第37話 - 魚人アーロン（後書き）

億越えすらまとめて相手どって圧勝する大将クラス  
そんな相手と真っ向やり合う以上、本気を出せば圧勝……という感  
じを出したかったですね、出せたかなあ  
矢張り、戦闘描写は難しいです…

## おまけ（前書き）

おまけ、という名の仮定のお話

もし、悪魔の実の能力全開でやってたら、こうなる予定というのを  
ちよつと簡単な描写にて

あくまで、おまけですので、本編とは関係がありません

おまけ

「九尾」

その一言で。

巨大な銀色に輝く尾がアスラの背後に出現する。

その内の一本が急速に伸びるとそこから伸びた多数の槍がアーロン一味の船を穴だらけとし、沈めてゆく。

その内の一本が上空で巨大な槌となり、アーロンパークそのものを叩き潰す。

更に左右へと伸びた2本から放たれる銀の槍はアーロン一味の魚人を悉く刺し貫いていった。

「て、手前……っ！」

アーロンが瞬時にして、壊滅状態へと追い込まれた自分の帝国の惨状に呻き声を上げる。

僅かな間の内に、それこそ1分足らずで海賊船も、彼らの家も、そして一味もその全てが或いは骸を曝し、或いは廃墟と化し、或いは残骸と化した。

「悪いな、いちいち相手にしてる時間がもつたいなくてね」

アーロンの脳裏にこの光景は1つの名をもたらすのに十分だった。

「そうか、手前が……『銀虎』！」

海軍本部中将、『銀虎』のアスラ。

銀の尾を生やす彼の名は海賊達の間響きつつあった。



最近、というか自分がグランドラインを離れる前ぐらいから後方勤務が増えていたようだったが、一度前線に出てくれば、彼のもたらず光景は海軍大将のもたらずそれと大差なかったからだ。

「まあ、そうだな。そして、君もこれで終わりだ」

「くそっ……」

気付けば、新たな尾がアーロンを包囲していた。

そして、アーロンが何かを為す前に、絡み付いてくる。

無論、アーロンとてすんなりと捕まってやる気はない。

だが、彼の自慢の怪力も、液体の力の前には無力だった。幾等腕を振るっても、打ち砕けず、次第に自身は包まれてゆく。かといって、水銀という重金属の中では魚人の能力なぞ意味がない。

普通の人間と同じく、アーロンが嫌っている人間と同じく溺れるだけの話。

魚人の彼が、まるで泳げぬ人間のように、もがき。

そうして、その抵抗すら何の意味も成す事なく、アーロンもまた銀の球体にどぶり、と呑みこまれた。

直後、球体がぎゅるり、と捻り上げるように回転して、解かれた時、そこに転がったものは最早人の形をとどめていなかった。

「悪いな……」

五分と経たずして1人の億越えの海賊が作り上げた全てを砕き、けれどアスラの瞳には何の感慨も込められていなかった。そう。

この程度など特筆するまでもない、当たり前前の事に過ぎないのだと、それを実感させるのには十分すぎるほどに。

## おまけ（後書き）

六式のみで相対した時はそれなりに梃子摺ってるように見えたと思うので、もし能力全開にしたら、どうなるのかをちよつと書いてみました

ただ、これをやるとさすがにネズミ大佐がアスラの正体に気付いてしまう可能性が高まるので、この辺を封印していました

### 第38話 - 内部事情

「チチチチチ……いや、見事なものだね、よくやってくれたよ」

アーロンを撃破した、その直後にかげられた声。

その方向を見れば、ネズミ大佐、そして彼の部下達。部下達は早くも、アーロンの一味、既に倒れた魚人達を次々と捕縛を始め、更には一部はアーロンパークから財宝の運び出しを始めようとしている。

そればかりか、アーロンも捕縛しようとしていた。

おそらく、アーロンが形勢不利と見た時点から、これを見越して動き出していたのだろう。

立場に物を言わせて、アーロンに懸けられた懸賞金を始めとして、捕縛の功績も含めた全てを自らの懐に入れようと考えているのだろうが……。

「どうするつもりだ……アーロンと結託していた腐敗軍人が」

「チチチ……言葉に気をつけたまえ！」

アスラの言葉に、笑っていたネズミ大佐がくわつと形相を変える  
と、強い口調で怒鳴りつけてきた。

そうして、彼は『自分が本当にこんな海賊と結託する筈がないだ  
ろう、自分はいいつの間隙を窺っていたのだ！』と主張するが、アス  
ラは平然とネズミに近づいていく。

……ネズミは小物だ。

虚勢の迫力など、本物を知るアスラにはそよとも迫力を感じさせ  
ない。

アスラがこれまで出会ってきた本物達……。

海軍のセンゴク元帥やガープ中将、大将達。

或いは王下七武海を構成するミホークやジンベエ。

或いは海賊の中でも白ひげや赤髪……。

彼らは無駄な凄味などいちいち出したりはしなかった。そんな必要はなかった。

彼らはそこにあり、普通にいるだけで、存在感を漂わせていた。

比べればネズミ大佐のそれは……紙とすら言えない。空気に等しい。

歩み寄ったアスラは。

「!？」

問答無用で、ネズミ大佐の頭を掴み、地面へと叩き付けた。

周囲からは一瞬の静寂の後、銃が構えられる音が響く。視線を向けるまでもない、ネズミの配下である海兵達が銃を向けたのだろう。彼らの表情は一樣に卑しい、或いは怯えている。

「……貴様らも海軍に所属する海兵だろう。恥を知る者は銃を降ろせ、こいつが何をしてきたか知っているならばな……」

アスラの小さく、しかしよく通る声が周囲に響くが、銃を降ろした者は殆どいなかった。

とはいえ。

『……3人か。まあ、全くいないよりはマシだな』

そう考えているアスラに向け、起き上がったネズミが怒りの形相で喚いた。

「き、貴様……！私にこんな事をしてタダで済むとでも……！」

「黙れ」

ただ一言。

それだけで、ネズミも周囲の海兵らも体が硬直し、声が出なくなる。

威圧する訳ではない。脅迫している訳でもない。

ただ、そこにあるだけで、周囲に余計な事を言わせない本物の力がそこにあつた。

それでも、震えながらも声を出せただけ、ネズミ大佐は凄いと海兵らは思えたぐらいだ。

「……ふ、ふん……だ、だが、俺に、海軍に手を出した以上、お前も手配してやる……！ 貴様、なんて名前だ！」

ふん、とアスラは鼻を鳴らす。

所詮は虎の威を駆る狐ならぬ鼠。

この後に及んでも、それしか言えないか。

「海軍本部所属、アスラ中将だ」

「そ、そうか！ 覚えたぞ、海軍本部のアスラちゆう……じょ……？」

ニヤリと笑い、指を突きつけて威勢良く喚こうとしたネズミ大佐の聲が尻すばみに小さくなっていく。

それと同時に、ようやくと頭でアスラの言葉を理解した海兵らが一斉に『へ？』とでも言いたげな、呆気に取られた様子になる。

ネズミはと言えば、慌てて、自身の脳裏をフル回転させる。

ネズミ大佐はこれまでゴマスリとおべっかと金の力で、現在の地位までのし上がってきた。当然、その脳裏には海軍上層部などおべ

つかを使うべき相手の容姿などもインプットされている。が、まさか今の立場でそんな相手に出くわすとは思ってもいなかった彼はその可能性というか、姿を完全に忘れていた。

が、海軍本部中将というのは海軍に措けるエリート中のエリート。何しろ、海軍本部に駐留する将官の数は決まっている。

海軍元帥1名、海軍大将3名、そして参謀を含めた海軍中将が16名。合計20名しかいない海軍の頂点達。

その中の1人の顔は、紛れもなく眼前の男にネズミ大佐の頭の中で一致した。

それが理解出来ると同時に、ネズミ大佐はムンクの叫びの如き様相を示す。周囲の海兵達も『えー！えー！』とばかりに顎が外れんばかりに口を全開にして、声を出さず叫んでいた。

もちろん、それを嘘と決め付け、この場を乗り切ろうとする事は出来る。

だが、果たしてそれが可能かと問われたならば……まず無理だろう。

一番手っ取り早いのは、目の前の中将を殺して、本部からの確認にしらばつくれる事だが、それは無理だ。そんな事が出来る程、海軍本部中将は弱くない。大体、真相を知って、部下の内何人が自分の命令に従う事が……。

次に考えたのは、偽者と決め付ける事。こんな場末の場所に、海軍本部中将がいる筈がない……だが。

やった所で、何の意味があるのか。相手が本物ならば、自分が喚いた所で何ら状況は変わらない。本部に伝えた所で、相手が本物ならば、本部中将と支部大佐、その信頼度は天と地、月とすっぽん。自分の言う事などまるで相手にされまい。

となれば……残る手段は……。

そうやって、ネズミ大佐が必死に頭を巡らせている間に、アスラは近海に待機させておいた自分の艦を呼び寄せていた。

その間にも百面相でころころと顔色と顔面を変えるネズミ大佐の様子を何の気なしに見ていたアスラだったが、どうやらネズミ大佐の脳裏で結論が出たらしい。

「いや、まさか、本部中將の方とは思ってもよらず……」

満面の卑屈な笑顔で、揉み手をするネズミ大佐。

どうやら、ゴマスリで何とかこの場を乗り切ろうと決めたらしい。ちなみに、逮捕に動いていた海兵はともかく、アーロンの財宝を運び出そうとしていた海兵らも今では全員が直立不動だ。下手にこれ以上財貨を運び出したりしたら、ネコババする可能性を疑われる事になる。その時、追求されるのは自分達だ！

ネズミ大佐の忠実な部下として、おこぼれに預かっていた彼らは危機に敏感だった。ただ1つ、完全に手遅れな以外は。

ネズミ大佐としては必死だ。

ここを何とか乗り切らなければ、自分は破滅。懸命に、これまでのアーロンの暴虐を訴えたり、自分では勝てないと思い、やむなく隙を窺って雌伏の時を過ごしていただの、或いはさすが海軍の至宝と謳われるだけの事はある、だの更にはアーロンの犯罪の証拠を提出したりと必死だったが、アスラはというと、サンダーソニアらが呆れた様子で見ているのとも異なり、それらを完全に無視して、海の方を黙って

見ていた。

ネズミ大佐も、やがて、何を見ているのだろう、とふつと海側に視線を向ける、それに釣られて彼の部下の海兵らも視線を海側に向けると……そこに見え、近づいてくるのは海軍本部の大型戦艦。

やがて、錨を降ろした、その艦から降りてきた人員がアスラの元へと駆けつけると、副官と思しき人材が正義のコートを差し出し、

更に整然と成立する有様によつと目前の人物が海軍本部中将なのだ実感したのだった。

#### SIDEナミ

虚脱状態のままネズミ大佐当人も、その配下の海兵らも海軍本部の海兵らによつて一旦捕縛される中、ナミはその光景を呆然と見詰めていた。

彼女もまた、ネズミ配下の海兵によつて、他のアーロン一味同様拘束されていたのだった。

彼女の心の内は、様々な思いで渦巻いていた。

今更来るぐらいなら、何故もつと早く来てくれなかったという思いがある。アーロンがこの周辺にやって来た当初に来てくれれば、そうすればベルメールもあんな事に、ならなかったのではないか、ゲンさんもあんな怪我を負わずとも済んだのではないか、そう思うのだ。

だが、同時に安堵の気持ちもある。

自分は捕らえられるかもしれない、だが、間違いなくこれでこの島はアーロンから解放される。

そう思った時、ふつと目の前に立った人がいた。

ああ、確かこの人はアーロンを倒した、ここにいる中で一番偉い人だ。

「アーロン一味の航海士、ナミか」

確認のように呟く。

そして、私は荷物のように担ぎ上げられ、持ち上げられる途中で自分でも気付かぬ内に拘束されていた縄は切られていた。

何時切ったのかさえ、分からなかった。

そうして、私を担いだまま、アスラと呼ばれていた海軍中将は歩



き出した。

どこへ行くのか？そんな私の問いへの答えは簡潔だった。

『コロヤシ村』と。

### 第38話 - 内部事情（後書き）

今回はナミ編終結、そしてその次の冒頭を書きたいですね  
今日でアーロン編完結できんものかとも思っただんですが、長くなり  
そうだったもので

### 第39話・ナミ（前書き）

アーン編決着です

次回から、原作で現在進んでいる過去編にリンクします

原作を単行本でしか読んでいない、という方には次回からの話でまだ収録されていない話が出る可能性があります、というか高いです

### 第39話・ナミ

ココヤシ村は一種異様な雰囲気に含まれていた。無論、原因は言うまでもない、ナミを連れた海軍の将校が現れたからだ。

村人達の雰囲気は複雑だ。海軍将校が新たに現れたという事から、遂にアーロンの支配が終わったのではないか、と期待する者もいれば、ネズミ同様彼もまたアーロンに屈した1人ではないかと疑う者かと思えば、ナミに対して裏切り者と憎悪の視線を向ける者もいれば、きつと何か理由があったのだと信じる者、ナミの選択も仕方ない事と諦めた者様々だ。

そんな中から、歩み出てきたのは、1人の男性。傷だらけの全身、帽子には風車が一輪。駐在のゲンさんだった。

「失礼ですが……どちら様でしょうか？」

力及ばずとも戦った結果が、その傷だ。見た目は敵つくとも、心は優しい。だからこそ、ナミへ向ける視線にも心配げな光が宿っている。

「海軍本部中将、アスラだ。休暇にて東の海へ来たが、『ノコギリ』のアーロンが好き放題していたようだったので……結託して海軍の名を汚していたネズミ共々捕縛した」

その言葉に。

一瞬呆けた村人達だったが、次の瞬間、歓喜の声が沸き起こった。アーロンの支配がやっと終わった。

実際には1年少々ぐらいだろうが、それだけ恐ろしかったのだから。金を払わなければ殺される、金を払えなければ殺される、逃げ

ても矢張り殺される。逆らったりしたら、もちろん殺される。

……確かに並大抵の重圧ではないだろう。

それだけにこうして、喜ぶのも分かるが、そんな中に幾人かは心配そうな視線でナミを見ている。ゲンさんと……あれはノジコか。それに幾人か同じような視線の村人がいるな……。

だが、そんな中にベルメールと思われる姿は、ない。

だが、それでも……まだナミには心配してくれる人が、信じてくれる人がいる、それだけでも良かったと思う。

「それでは……その、ナミは……」

ゲンさんが言いつらそうにしているのは理解できる。

ナミは突然、アーロン一味に入ると宣言し、今ではアーロン一味で幹部的な待遇を得ている。

それだけに心配なのだろう。

ひょっとしたら、これが今生の別れ、の為に連れて来た可能性もあるからだ。

「ああ、分かっていると思うが、どういう理由があるにせよ、海賊の一味であった以上は無罪放免という訳にはいかない」

矢張りか、どこかつらそうな顔になるゲンさんや、悲しそうな顔になるノジコ。

だが、ナミが口を開く前に、ナミが彼女らに自分の事を心配させまいと憎まれ口を叩く前に、アスラは続けた。

「だから、連れて来た。しばらくは、海軍で奉仕活動だからな。まあ、1年おきぐらいならうちの連中の里帰りに同道ぐらいは何とかなるかもしれんが」

「……………え？」「……………」

てつきり処罰されるものだと思っただけに、当人であるナミ自身も、或いはゲンさん、ノジコ、村人らから一斉に声が上がった。

「そうだ。まあ、ナミだったか、お前が何故アーロン一味に入ったのか知れば、まあ年齢的なものもあるし、そもそも原因の一端は海軍にあるからな。既に元帥にも連絡して、了承を得た。一応名目上とはいえ幹部扱いだった以上、無罪放免とはいかないから、しばらく海軍の……測量部隊で働いてもらう事になるな」

望むなら、そのまま海兵としての雇用もあると言われて、呆然としていた一同の中で、真つ先に我に返ったには、実はノジコだった。何故、アーロン一味に入ったのか、それは彼女が一番疑念に思っていた事だったからだ、それを目の前の海軍将校は知っているという。ナミは間違いなく、ベルメールを母として慕っていた。

その母を殺したアーロンの一味に何故入ったのか……彼女はそれを知りたかった。

その問いに、ナミ自身は『言わないで！』と叫んだものの、アスラはそれを無視して、告げた。

そう、ナミが『アーロン一味の測量士として働く代わりに、ココヤシ村のある島を1億ベリーで買う』という約束を。正確には、買う権利を得た、という事を。

聞いたが故に、村人達も理解した。

ナミはナミなりに、このココヤシ村の事を考え、戦おうとしていたのだと……。

ちなみにアスラがセンゴク元帥に承認を求めたのは本当だ。無罪放免も考えて相談したのだが、矢張り名目上とはいえアーロン一味の幹部であった、という事実がある以上、それは困難という事で、一応同じく名目上海軍で働くという事で帳消しにする、という形に

なっていた。

真実を知り、ある者は恥ずかしげに視線を逸らし、ある者は安堵の息を洩らし、ある者は感嘆の視線を向ける中……当のナミは。

「どうして……」

俯いて、搾り出すような声を上げた。

「どうして……そこまで知る事が出来たなら、どうしてもっと早く来てくれなかったの！」

涙をボロボロと流しながら、アスラを糾弾する。

そうすれば……そうすれば、ベルメールさんも死なずに済んだかもしれないのに！と泣きながら、掴みかかる。

ベルメールは最後まで母だった。2人分の金しかないから、とナミとノジコの分を払い、自身の分はないからとアロンと戦い、そして殺された。

嘗ては諦めていた。

アロンには勝てないのだと、兵を出した海軍将校がアロンにあっさりと殺され、別の海軍将校がアロンと結託して私腹を肥やしているのを見て、真つ当な手段でアロンをどうこうするのは無理なんだと。

けれど、違った。

海軍にはまだまだ強い人がいて、ネズミ大佐なんかよりずっと権限を持った人がいた。

だからこそ悔しかった。

アスラもまた、ナミの好きなようにさせていた。だが、言葉にして謝る事はしなかった。

謝るのは容易い。

だが、謝ってどうするのか。

日本人の感覚では謝る、というのは別にこちらの責任を認めるものではない。あくまでその後を円滑に進める為の挨拶のようなものだし、アスラの内にも或いは取引先からの、或いは客からのクレームだったり、純粹な苦情だったりに『申し訳ありません』とまず謝った記憶がある。

だが、王侯貴族らと付き合う、付き合いざるをえなかった中で、その感覚はアメリカなどと同じなのだと思せざるをえなかった。謝れば、それをダシにして、『こちらの責任』としてくるような連中ばかりだった。無論、こんな田舎でそんな事を言うような、考えるような者はまずいないだろうが……それ以上に。

自分達もまた全力で行い、そしてこの結果となった。実際、この辺りでもそれと知られた将校であったプリンプリン准将は彼なりの正義に従って、アーロンを討伐に向かい、そして命を落としている。海軍本部は本部で、懸命にグランドラインの大海賊達と戦い続けている。東の海にアスラほどの海軍軍人が来る事自体が基本的に例外中の例外なのだ。

今だけ謝っても……それを癖としてしまえば何時どこでつい出てしまつか分からない。だからこそアスラに出来る事は、泣きながらアスラにすぎるナミを黙って立ち尽くす事だけだった。

この翌日、ナミはアスラの軍艦で共に旅立った。

その旅立ちに見送りに来た人間は少なかつたが、出航の後アスラの軍艦には、立派なみかんの木が積まれていた。



第39話・ナミ（後書き）

ナミはこのようになりました

名目上とはいえ、仮にも幹部だったのは確かなので……

ちなみに、ネズミ大佐は財産没収の上、三等兵から再スタートとなります

## 第40話・ゴア王国（前書き）

\*この話以降しばらくは、原作で現在連載中の部分に関する記述があります

ご了承下さい

## 第40話・ゴア王国

SIDEハンコック

東の海で最も美しい国と呼ばれる国、「ゴア王国」。

最も、アスラに言わせれば、『天竜人の真似事を悪い意味でしている国』『東の海で最も心が腐敗した国』だという。

確かに、国の都の内部は美しい。

こうして、歩いていてもゴミ1つ落ちておらず、浮浪者の姿もなく、活気に満ち溢れている、ように見える。だが、その実、王国軍による通称ゴミ狩り部隊によって、人さえもゴミと看做し都の外に捨てている、確かに人を人として見ない腐った国だ。

この国の貴族達は天竜人を確かに、思い出させる。

彼らもまた、いや、天竜人こそが本家なのだが、自分達とそれ以外で区別し、人を人として見ない点では同じだ。

そもそもアスラ自身は余りこの都には来たくなかったらしい。

彼の目的自体はフーシャ村であり、そこに住む村長や酒場のマキノら、ガープ中将と知り合いであり、エースやルフィにとつてもう1つの家族とでも言うべき人達だ。

だが、今のアスラの立場がそれを許さない。

実際、フーシャ村に直行する事も出来ず、まずはゴア王国王都にやって来たのは挨拶の為だ。本当の目的は黙っておいて、表向きは海軍本部による表敬訪問という形になる。

アスラは現在海軍における後方勤務本部長とでも言うべき職責にある。

当初は病院船や工作艦などの支援艦全般の扱いだっただのが、何時しか補給の為の艦艇まで押し付けられ、当然その護衛部隊に関してもある程度独自の権限を与えられている。銀河英雄伝説など未来のそれと異なるのは、本人が最近は偶に、になつてしまったが、なま

らない程度に前線に出たり戦闘訓練を積んだりしている事ぐらいだろう。

実の所、海軍内部においても、現在のアスラが有する権限は相当にでかいが、地味な裏方な為、あれもこれもと押し付けられて気付けばこうなつてた、というのが正しい。

これに関するアスラ自身のコメント、『まるで旧日本帝国海軍みたいだ』。

まあ、補給の重要性が理解出来てない訳ではないのだが、やはり派手で見栄えがする前線勤務に就くのを好む者が多いのは事実だ。

話を戻そう。

とにかく、その職責と立場などからアスラは各国王侯貴族との面識も深くなり、知名度も上がりつつある。

ただし、別にこれが羨まれているという訳ではなく……書類仕事に忙しい事を理由に他の大将中將に頼んだりしているのだが、最近では皆何だかんだで逃げてしまつてから、しょうがなく国際会議やらに出席している面もある。

これに関する以前に代わりに出席したオニグモ中將曰く『精神的に物凄く疲れる、メシも喰つた気がまるでせんかつた』だとか。

まあ、何が言いたいかというと、アスラ中將という本人が望むかどうかはさておき、王侯貴族の間でネームバリューが高まりつつある人間が、まあ、本人に言わせれば『俺は世界政府の外交官じゃねえんだぞ!?!』になるが、別に向かう場所があつて補給に立ち寄つただけ、ならともかく、そんな人物が王国にやって来て、ろくに知られてない村の人間に会いに来ただけで、はい、サヨナラ、なんてやらかしたらゴア王国の面子丸潰れだ。

結果、アスラは、全然用事もないのに、ゴア王国王都にやって来て王族に挨拶に向かい、今晚は今晚で晚餐会に出席予定になっている。

一応、明日は家族サービスを兼ねて、王都を回る事になっているよ

うだが……本当はさっさとフーシャ村に行つて、のんびりしたい、というのが本音だろう、としがらみが多くなつたものだと言ハッコックは苦笑する。

ちなみに、本日ハッコックは王都の中心街に子供達と一緒に出向いている。

もちろん、彼女らだけではなく、サンダーソニアとマリーゴールドがついてきている。アリスは残念だが、何しろ見た目が見た目なので戦艦でお留守番だ。

娘のエスメラルダは今年6歳。新たに生まれた息子、カルラはまだ1歳になつたばかりだ。

(ちなみに息子の名前はアスラが自身の名前から取つた阿修羅と同じ八部衆の内、彼が覚えてた名前から取つてたりする)

エースやサボはもう14歳、もうじき15歳になる。サボは詳しい年齢を言いたがらないが、同い年ぐらいだろう。ルフィもはや11歳だ。……まあ、ルフィはガープ中将の性格を本当に受け継いだというか……何故こうもガープ中将に似たのだろうか？と皆不思議がつている。

サボは、このゴア王国には余り来たがらなかつたのだが……今回はうちの家族全員がしばらく出かける、という事についてきた。あの屋敷に一人ぼっちなのは寂しいだろうし、かといって同僚に預けようにも、始終誰かが海に出ている状態なので、誰かに任せる、というのが難しかったからだ。

とりあえず、エース達は王都の外、『不確かな物の終着駅』グレイトミナルに行くつもりらしい。

まだ、フーシャ村にいた頃、信じられない話だが、エースはガープ中将に山賊に預けられていたらしい。……型破りな人ではあるが、本当に何をしていたんだか。

それで、当時色々と見つけて隠していたりした物などをルフィに見せてやろう、という事らしい。

……正直、ゴミの山という事で余り行かせたくはないのだが、汚いからといって止めるのは、そこに住む人々、その中には捨てられた人達もいる、を否定するようで、嘗ての天竜人の奴隷だった身としては言いづらい、というか言いたくない。まあ、女の子であるエスメラルダは連れて行かないという事だし……これは純粹に治安が悪いからだ。親の欲目を差し引いても、エスメラルダは綺麗な子だし。

だから。

「しょうがないわね、余り遅くなりすぎないようにするのよ」

そう言うしかなかった。

が、直後駆け出そうとした、サボがぎよっとした顔で急に立ち止まると、私の後ろに隠れた。

何かあったのだろうか？エース達も『ん？』という顔になっているが、当のサボはブロックサインで『すまん、先に行っててくれ』と、どこか焦った様子で合図している。

ルフィは正直、余りというか全く空気が読めない子だが、エースはきちんと読める子だ。

だから、ルフィが大声で『サボー、どうしたんだ？』と言い掛けたのを『サ』の段階で口を塞いで引きずっていった。

さて？と思った所へ、声をかけてきた相手がいる。

「これはこれは、美しいお嬢さん。失礼ですが、お名前を伺ってもよろしいですか？」

シルクハットに燕尾服。

ちよび髭の小太りの男だ。だが、着ている物はかなり上質だし、身のこなしそのものは洗練されており、卑しさはない。おそらくはゴア王国の貴族だろう、と素早く推測する。

しかし、自分が美女の部類に入る事は客観的な視点から見ても否定しないが、だからといって、赤ん坊を抱いている女性に対してそんな言葉をかけてくるか、と密かに思う。まあ、実際は原作にはない柔らかさと、日々が幸福に満ちた生活が送れている為に原作以上の人を魅了する美女っぷりだったりするので、男性からすれば、いや女性から見ても物凄く魅力的で子供を抱いていようが何だろうが気にもならない程、お陰で周囲からの視線が凄かったりするのだが、ハンコック自身はそうした視線に慣れてしまっていた為に全然気にしていなかっただけだったりする。

「ハンコックと申します。現在入港中のアスラ海軍本部中将の家内ですわ」

とはいえ。

これを告げれば、まあ普通は引くのだが。誰だって海軍本部の間を敵に回したくはない。それでも平然と手を出してくるのは天竜人だけだろうと思うし、だからハンコックは絶対彼らがいそうな場所、いる場所には行かないようにしているのだが。

実際、この時も貴族と思われる男性は、『そ、そうでしたか。いや、私はこの国で貴族を務めている者でしてな、それなら今晚の晩餐会でお会い出来るかもしれませんね』と言って、そそくさと離れる。

無論、ハンコック自身も『ええ、そうですわね』と当たり障りのない答えを返してはいるが、無論出るつもりは毛頭ない。

あんな魂の腐ったような連中がうようよしているような場所ももう2度と顔を出したくはない。

ちなみに男性はサボには目も向けなかった。

まあ、大体ハンコックの傍にいれば、男性は彼女に視線が行ってしまい、まだハンコックすら上回る背丈と体格を持つ美形であるア

スラならともかく、サボのような子供にはまるで注意がいなくなる。

ちなみに、どこか天然な雰囲気を持つエスメラルダは、たとえばサボ『お兄ちゃん』に手を繋いでもらって、ニコニコとご機嫌だった。少女本人も実に可愛らしいのだが、何しろまだ6歳だ、成人男性となるとハンコックにどうしても目が行くのはしょうがない。

さて、男性の姿が雑踏に紛れたのを確認した後で、ハンコックはサボに問いかけた。

「さて……行ったようじゃが、どうする？ エース達の後を追うか？」

「えーと……いや、やめとく。今日は素直に船に帰るよ」

サボがそう答えたのは、無論まだ、あの貴族の男性が傍に　そう、ハンコックは薄々察して黙っていてくれたが、あれはサボの父親だった　いる可能性があったからだ、それ以上に。

「お兄ちゃん、行っちゃおうの？」

と寂しげな瞳で、そうまるで捨てられる子犬のような瞳で悲しげにサボの顔を見上げたエスメラルダのせい、というのが正しいだろう。まあ、エスメラルダを泣かせたら後が怖い、というのも間違いなくあるだろうが。

結局、この後彼らは家族揃って、中心街を回り、美味しいものを食べて、買い物をして、と楽しんだ後軍艦へと戻る事になる。エースとルフィは帰って来なかったが、夕方になると『不確かな物の終着駅』<sup>イターミナル</sup>から王都へ入るのは非常な危険を伴う事から、つつい遊びすぎて帰りそびれたのだらう、明日帰って来たら叱らなければ……そう考えていた。



その晩、グレイターミナルが業火に包まれるまでは。

## 第40話・ゴア王国（後書き）

という訳で原作リンク部分です

サボの父親は原作同様養子を取っており、美女に鼻の下を伸ばしてたので気付いていません

時間系列的に確認してみましたが、現状の先週号でルフィが10歳になったら、と言っている事からあの時点で原作開始の7年少し前その後、1年ぐらいは経っているような描写となっているので、今回時期が重なったとして、使っています

尚、悩みましたが、最終的にハンコックの年齢が明らかになった事から、そこら辺ちよこちよこ修正しております

時間軸的にどっか抜けてるところがありましたら、よろしくお願ひします

## 第41話・動く者達（前書き）

明日発売の原作展開次第で修正を行なう可能性のある部分が含まれてます

## 第41話・動く者達

地位や立場というものは厄介だと思う。

元の世界でサラリーマンをしていた時代は早く上へといきたいと思っていた。それが子供が早く大人になりたい、と同じものでしかなかったと気付いたのは、こちらの世界に来て何時の頃だったか。

子供の頃早く大人になりたい、と願っていた者でも、実際に大人になると子供の頃に戻りたい、と思うのはよくある事だ。

そして、俺は現在の地位、海軍本部中將となつてから、何度めか知れないが、『もつと気楽だった頃、階級が低かった頃に戻りたい』、今更そうもいかないと分かつていても、ふとそう思う時があるのだ。

特にこんな、貴族連中と腹の探りあいをしながら、ろくにメシも喰えずに会談してる時などは。

実際、彼が今までに出会った王族の中で、真つ当な人間は2人。1人はアラバスタ王国国王コブラ。もう1人は昔の名前は捨てたと云っていたが、話と外見からするに原作でカマバツカ王国にいつて帰つて来たらオカマになつて国が崩壊したという王、だったオカマ。だが、偶然から話を聞けば、彼の心は、彼の瞳に写るものは違っていた。

よくよく考えれば、息子がいたのだ。彼がおかしくなつたとしても、本来は息子たる王子がいれば国は存続出来たはず。たとえ無能であつても、周囲にいた貴族達が祭り上げれば、王国の存続には問題なかった筈なのに国の崩壊にまで至つたのはカマバツカ王国女王エンポリオ・イワンコフの思想に触れたから。

後に革命軍として知られる思想に賛同し、(色々な意味で)目覚めたからこそ協力して王や貴族によって支配される国を崩壊させた。

もつともそんな相手は僅かな例外のみ。支部の海兵とて、大概の

貴族達にとっては小間使い程度の感覚でしかない。

だが、それが海軍本部中將となれば話は別、立派な王国でも一定以上の礼儀を持って扱われる。

はつきり言ってしまうえば、本当の意味での将官は『偉大なる航路』グランドラインにしかないからだ。いや正確には生きている者は、というべきか。先だって、アーロンに殺されたプリンプリン准将は殉職と認められ、海軍本部准将の地位を正式に贈られている。死後に、だが。

二階級特進とかはないのか、と思うかもしれないが、元々支部と本部では実質的な扱いとしては三階級相当の地位の差がある。

先だつての第16支部長ネズミ大佐も、一度『偉大なる航路』グランドラインに入れば、大尉相当としてしか扱われない。

従つて、支部の人間が殉職した場合は海軍本部の正式将官として認められる、というのが正式な扱いになっている。ちなみに佐官までは支部所属相当で二階級特進（支部大佐の場合で支部少將）となるのは、その方が遺族年金とかが良いからだったりする。

まあ、何が言いたいかというと、海軍本部中將というのはかなりなステータスだという事だ。

だからこそ、突然の訪問にもこうして晩餐会などが開かれたりする。もつとも、俺の場合はもう1つ事情があつて、昨今の諸事情のお陰で海軍の交渉ごとの顔になつていいるせいもあつたりする。

……逃げるんだものよ、皆。

とはいえ、そのせいでこちらに挨拶してくる面々に対応していた為に、俺から離れた所で相談している者達には気付かなかった。

『どうする、まさか本部中將が来られるとは』

『なに、街に出られるのは明日だという。今晚の内に片をつけておけば問題はない』

『若いが、海軍における重鎮であり、海軍の外交担当とも言える御仁だからな。このゴア王国でゴミが転がっているという話を持ち帰られては困る』

『左様、世界政府のお役人、ましてや天竜人様に声が届いたらと思つとぞつとするわ』

『既に手筈は整つておる。ゴミはゴミに片付けさせるのが一番じやて』

笑いあうその姿からは、ごく普通の老人達による雑談にしか傍からは見えなかった。そこには命を奪うという緊張感がまるでなかったからだ。

そして、貴族達がその内容を耳にした所で、気にもとめなかっただろう。何故なら、彼らにとってそれは当たり前前の話だったからだ。彼らに人の命を奪う、という感覚はない。

彼らにとって、『不確かな物の終着駅』グレイターミナルに生きる人々も、手駒となつて動く……偽りを信じ、貴族となれると思つて動く海賊ブルージャムも、いずれも自分達と同じ人だと見えていない。彼らはゴミであり、道具でしかない。それならば、不要になれば焼却するのは当然だからだ……。

そうして。

その日の夕方、グレイターミナルから一斉に火の手が上がった。

SIDE サボ

サボは必死に街の中を走っていた。

エース達はまだ帰って来ていなかった。そして、この暗くなる中燃え上がった炎。それは轟々と音を立てて、壁の向こうを真っ赤に染めている。ゴミは多数の生ゴミを含有している。言い換えるなら

ば、多湿でそうそう簡単に燃えるものではない。熾火のように自然発火によって燻る事はあっても、あれ程の大火となる筈がないのだ。では何故、走り抜けた中心街の中で広がる噂ではブルージャム海賊団の仕業なのだという。海軍本部の戦艦が来た事で、彼らを帰らせる為に大規模な火事を起こしたのだと噂されている。

だが、サボは薄々悟っている。

そもそも、あれだけの大火となれば、大門にまともに近づく事さえ出来ない筈だ。それなのに、何故あかも確定したかのような噂が広まっているのか。

……おそらく、黒幕はこの国の貴族達。

大門の前に到着したサボは、壁の向こうにきつと人がまだいるであろうのに、救援活動も何も行わず、水も持ち込まれず、大門を閉鎖して、ただ武器だけを持って壁の向こうを警戒している軍人達を見て、確信した。救出活動を行なうつもりがあるのなら、例え火の勢いが激しくて消火を諦めざるをえなかったとしても、消火の為の水ぐらいはそこに置きっ放しになっていてしかるべきだからだ。必死になって、サボは兵士に訴えたが、邪魔だと突き飛ばされ、殴られた。

如何に同年代に比べれば鍛えているとはいえ、所詮サボはまだまだ子供。複数の軍人相手では到底太刀打ち出来ない。

どうすれば、そんな時、空を駆ける人影に気付いた。

S I D E ア ス ラ

くそ……っ。

引き止められて、高町に泊まる部屋を与えられた俺は自分の迂闊さを呪っていた。

夕方暗くなる頃に突如燃え上がったグレイターミナル。

そうして、問い合わせた貴族から発せられた言葉。

『いやいや、ただ単にゴミを焼却してるだけで……世界政府には我が国にはゴミなどないとよろしくお伝え下さい』

あそこにも、人は暮らしているのではないか、という問いにも平然とした……いや、何故そんな事を言うのか分からない、という顔で彼らは答えた。

『人？確かにあそこに住み着いている生ゴミはいますが……気にされるような事ではないでしょう？』

……この瞬間俺は悟った。

長年の教育の結果として、彼らの価値観、視点は根本的に俺と異なる。彼らにとつて、この国における『人』とは高町に暮らす人間で、百歩譲つて中心街で暮らす人間まで。グレイターミナルの住人は彼らにとつて、元の世界でゴキブリを潰すのと同様に感覚的に変わらぬのだと理解せざるをえなかった。

……正直、悪寒が走った。

目の前の貴族という存在が、自分とは全く別の生物にしか見えなくて……。

俺はその場を離れ、月歩で背後からの引き止めるような声を見無視して天を駆けたが、それはこれ以上この場にいる事に耐えられなかったのも間違いなく、ある。

そうして、天を駆けた俺が大門の近くまで来てみたが、矢張り門の外は業火に包まれている。

ふと下を見ると、サボの姿が見えた。

軍隊に突き飛ばされた姿を見て、即効で降りて、おそらく執拗に食い下がっていたのを鬱陶しく思ったのだろう、いい加減にしろとばかりに銃床で殴り倒そうとする軍人を逆に蹴飛ばしておく。

少々これまでの苛立ちが籠っていたせいか、10mばかり飛んだ気もするが、まあ死んではいないだろう。



「大丈夫か？サボ」

「アスラ…… エースとルフィが…… 2人がまだ帰って来てないんだ……！きつとまだ壁の向こうにいるんだ！」

すがつてくるサボの言葉に鋭く舌打ちする。

無論、つつい夢中になって遅くなっただけ、という可能性もあるが…… この状況から考えるに一番可能性が高いのはブルー ज्याムらの会話なりを耳にして、拘束された可能性が高い、か。殺されていないと信じたい所だが……。

「アスラ、これってやっぱり…… この国の貴族とかが？」

「…… ああ」

隠しても仕方がない。俺はサボもまた、この国の貴族の出身である事を知っている。

それだけに、薄々察しているんだろう。

当初現れて仲間を蹴り飛ばした俺に銃を向けたが、俺の正義のコートを見て困惑して銃を下げたゴア王国軍に事情を説明する。『英雄』ガープの孫が壁の向こうにまだいる、という事を知り、最初は困惑し、次第に混乱してゆく。

まさか、『遊びに行った海軍中将（それも知名度が物凄く高い）のお孫さんをまとめて焼き殺しちゃいましたあ』となったら、まず責任を取らされるのは…… この国の貴族達ではなく、作戦実施の責任者である軍人達だ。

混乱しつつも、責任者と思われる軍人が泡を食った様子で俺に説明、という名の言い訳をしてくる。

あれこれ言っているが、要は。

『今更この状態じゃ消火の手段もないし、かといって大門を開けて搜索活動も無理』

という事だ。

となれば、方法はただ1つ。

「ならば、いらん。……サボ、お前はここで待っている」

そう告げ、俺は月歩で空へと再び舞い上がり、壁を越えた。

……ここで、エースやルフィを死なせる訳にはいかない。原作では助かった、だからこの世界でも助かるとは限らないのだから。

S I D E ????

大騒ぎになっている軍人達から私は少し距離を取っていた。

先程空を駆けていった海軍中将の姿はもう見えない。

空を駆けてゆく彼の姿に、六式なんて知らないゴア王国軍人達はマスクのせいで顔は見えなかったが、どこか啞然とした雰囲気を見ればらくは漂わせて、海軍中将の姿が壁の向こうに消えていくのを見ていた。

彼らに止めようはなかったとはいえ、これで彼が死んだりしたら、彼らの首は物理的に飛ぶ事になるからだろう。

そのせいで、今大騒ぎになっている。

と、先程海軍中将が声を掛けていた少年が走り回っていた軍人に突き飛ばされる形で吹き飛んだ。私の方に飛んできたのを受け止める。

「大丈夫か、少年」

名前を知らないので、とりあえず、そう呼びかける。  
すぎるようにして、少年は私に語りかける。

「おっさん……この火事の犯人は王族と貴族なんだ……この町は壁向こうのゴミタメよりイヤな匂いがする……！人間の腐った匂いがするんだ……！」

血を吐くような叫びと云えばいいのだろうか、苦悩がその声には詰まっていた。

きつと誰にも言えなかったのだろう。この後の言葉を聞けば、それはあの海軍将校にも言えなかったに違いない。言え、帰る家があるならば、戻るよう勧められるかもしれないから。

「俺はこの国の貴族の生まれなんだ……けれど……俺は貴族に生まれた事が恥ずかしい！」

その言葉にショックを受けた。

この少年が貴族の生まれだという事ではない。遂にゴア王国が、子供にコレを言わせた事にショックを受けた。

「分かれるとも……俺もこの国に生まれた、けれど、まだ俺にはこの国を変えられる程の力がない……！」

「……俺の話聞いてくれるのか……信じてくれるのか」

「ああ……忘れない」

信じるとも、そして忘れない。

その言葉に込められた悲痛な想いを、魂の独白を疑ったりなどするものか。

後に世界最悪の犯罪者と呼ばれる革命軍の指導者モンキー・D・ドラゴンは背後よりかけられた声、同胞であるオカマ王エンポリオ・イワンコフの『準備が出来た』と呼ぶ声に応えながら、そう誓った。

#### 第41話・動く者達（後書き）

感想で悪魔の実をエースが手に入れたのは出航後、とのご指摘がありましたので明日を待たずして、修正しましたw  
うーむ、さすがにそこまで細かく覚えてなかったですわ。ジャンプですつと読み続けてきた作品ではあるのですが

第42話 - 業火の中で (前書き)

うーん、原作の展開はああだったか……

## 第42話・業火の中で

エースとルフィ。

2人が捕まったのは、ブルージャン海賊団の話を偶然聞いてしまったからだった。

とはいえ、最初は偶然の盗み聞きだった。

このゴミ山を、そこに暮らす人々と燃やそうとしている彼らの話を聞いて、エースとルフィの反応は異なった。

既に海軍で訓練を受けていたエースはこれは拙い、と考えると同時に自分達だけではどうにもならない、という事も理解していた。同年の子供達に負けない自信はあるが、相手は仮にも海賊の一味自分達だけで勝てるような相手じゃない。

ここは戻って、アスラに連絡するなり、海兵に来てもらうなりした方がいい、と考えたエースは気付かれないように、じりじりと下がったが、そこでルフィが問いかけてきた。

ルフィは、というとはどうやらよく聞き取れなかったらしく……。

「エース、あいつら何話してたんだ？」

そう尋ねてきた。

ここでエースが失敗した！と後で思った事だが、つい。

「あいつら、ここに火をつけるって話をしてやがる」

……そう答えてしまった。

本当は、エースとしては続けて、『だから、アスラ達に伝えに行くぞ』、そう言うつもりだった訳だが、そこはルフィというか……思わず叫んでいた。

「えっ！火をつけるって、あいつら悪い奴なのか！？」

思わず天を仰ぎたくなったエースだったが、その時間さえも惜しいとばかりにルフィの襟首を引つ掴むと全速で走り出した。

が、さすがにそこは所詮子供の足、その上に咄嗟に反応出来なかったルフィを引きずっているのだ。しばらく後には、捕まって杭に縛られた2人がいた。

計画を知られた、という事で殺すか、と剣を突きつけられた2人だったが、破れかぶれでエースが怒鳴った、『俺達の保護者は海軍の中将だぞ！』という叫びが状況を変えた。

無論、エースからすればアスラの名を借りる事も、自分の力ではなく親に言いつけるような真似をした自分にも腹を立てていたが、今は少しでも生き残る確率を上げるべきだと、考えていた。

海賊がびびって自分達を殺すのに少しでも迷えば、それだけチャンスが生まれるかもしれないからだ。

そうして、普段ならば余りよろしくない結果を招いた可能性も高かったこの言葉は、現在のブルージャム海賊団だからこそ、有効的に働いた。

何しろ、彼らは今の仕事が終わったら、貴族となれるのだ。単なるゴミ山のガキならともかく、本当にそうだったら……下手したら、それが元で貴族となれる話がなかった事になるかもしれない。

海賊だけに、海軍本部の戦艦が訪問しているという情報は逸早く掴んでいただけに、『ひよっとしたら……』と疑う気持ちは拭えなかった。

「そうか……お前ら、海軍中将が保護者か」

ブルージャムは最終的に結論を下すと、ニヤリと笑みを浮かべながら、言った。



「なら教えてやろう……いいか、今回の俺達の仕事は、この国の王様の命令なんだよ。いいか？俺達は自分達の悪さの為にやってんじゃない。王様からここを燃やせ、って言われたから、やってるのさ」

だから、俺達は悪いんじゃない。この国じゃ、ここを燃やすって事が正義なんだぜ？

そう告げるブルージャムにエースやルフィは嘘だ！と叫んだが、まあ、その辺は予想していた事だ。

騒がれると面倒なので、焼却作業が終わるまでとばかりに猿轡をして、杭に拘束されていた。

「仕事が終わったら、迎えに来てやるよ。大門で待ってる軍隊通じて海軍に帰してやるから、それまで大人しくしてな」

そう言っただけブルージャム海賊団の一味は立ち去ったが、それで大人しくしている程、エースもルフィも諦めが良い子供達ではない。

必死にもがき、道具を使い、ようやくロープが切れた時には、しかし、周囲は既に火に包まれていた。

脱出を図った2人だったが、火に行く手を阻まれ、逃げ惑う中……ブルージャム達と再び遭遇した。

「誰が逃げていいと言った、悪ガキ共がア！」

ブルージャムの怒鳴り声。

その方向を見れば、ブルージャム海賊団の一味……とうに逃げているだろう、と考えていただけに、エースとルフィも驚いた。加えて、あれだけ昼過ぎには機嫌が良かったように見えた彼らは一様に追い詰められた者特有の雰囲気と表情をしていた。

まあ、彼らの気持ちも事情を知っていれば分からないでもないだ

ろう。

好き好んで隠れ住まねばならない立場を選んだ訳ではない。そんな彼らに投げかけられた王からの『お前達を貴族にしてやるう』、という言葉につい伸ばしてしまった手……。

自業自得とはいえ、その結果として、彼らは手酷く裏切られた。

まあ、そうは言ってもこの頃、貴族の屋敷で交わされていた子供からの。

「何故、ゴミ山の人間は燃やされてしまうのか？」

という問いに対して親である貴族が答えた……。

「彼らが貴族に生まれてこなかったのがいけないだよ、ことうのを自業自得というんだ」

という会話を聞いていれば、誰だって怒るだろうが……まあ、だからこそ、ことういうメンタリティを持つ相手と、けれどにこやかな笑顔で会談せねばならない事にアスラは疲れ、他の中將らが代わりに出席を嫌がって逃げ出す訳だが。

はめられた、その事を自嘲気味に語ったブルージャンは、逃げようとしたエースとルフィを捕まえさせた。

無論、エースとルフィが本当に海軍本部中將が保護者なのかは知らないが、可能性があるのなら、何だって使ってやるうという考えによるものだ。

この炎さえ抜け出せば、言っていた事が本当ならば何かの交渉の種に使える可能性は、ある。

「ことうなりや、何が何でも生き延びて、俺は貴族共に復讐してやる……！」

そうブルージャムが呟いた時。

エースとルフィ、2人を捕まえていた海賊の腕が吹き飛んだ。結果として、抑えられていた腕が突如消えた事によってエースとルフィの2人は地面へと転がる。

一瞬、誰もが何も考えられなかった。

「はア？」

一拍置いて、訳が分からない、といった風情でブルージャムが呟いた次の瞬間、2人の海賊はそのまま豪快に吹き飛ばされて、炎の海へと飛び込んでいった。無論、好き好んで自分から突っ込んだ訳でない事ぐらいは誰にでも分かる。

断末魔の悲鳴が一瞬の硬直を生み。

そうして、エースとルフィ、2人の背後に空から舞い降りた人影1つ。

「大丈夫だったか？」

「アスラ！」 「手前は……！」

エースとルフィが歓喜の、ブルージャムが苦々しげな呻きを洩らす。

そこにいたのは、海軍本部中将アスラだった。

## 第42話・業火の中で（後書き）

原作ではメラメラの実は出なかったか……

けど、2人はどうなったんでしょうねえ？

しかし、まさかあの場面であの人が来るとは……

そして、ドラゴンの後ろにいる人って……矢張りあの人ですよね？

### 第43話・ココロノソコ

「大丈夫か？怪我は？」

どこから来たのか、ブルージャム海賊団の一味には分からなかった。彼らの眼からすれば、まるで海軍中將が空から舞い降りたように見えたからだ。

現実には事実そうなのだが、所詮東の海の田舎海賊の悲しさというか、まさかそんな相手がいるとは思わず、何かトリックを使ったのだと思い込む事で平静を保っていた。が、当の海軍中將はといえば、彼らの事を完全に無視して、子供達の事を気に掛けている。

「おいっ！手前、何無視してやがるっ！」

苛立った海賊の1人が怒鳴ったが、完全にアスラはといえば、無視を決め込んでいる。

むしろ、子供達の方が余程ブルージャムらを気にしている。

「あ、うん、大丈夫」

「あすらー」

エースと、ルフィは気にしつつも、アスラに答える。

部下が苛立ったお陰で、却って平静になれたのだろう。ブルージャムが周囲を部下らに包囲させて話しかけた。

「こいつはいい所に来てくれた……どうやらここまで来たって事はこの状況を何とか出来る方法が何かあるんだろう？それに……」

あんたが、ここに来たつて事は軍隊連中も大門を開けて、対応せざるをえないだろうからな。

船長のその言葉に一同の目の色も変わる。

ブルージャムの『貴族どもに復讐してやる』という言葉は何も彼一人に当て嵌まる言葉ではない。ブルージャム海賊団の誰もが多かれ少なかれ持つている気持ちだ。

だが。

「さて、それじゃ帰ろうか」

ブルージャムらがないかのように、アスラは笑顔でエースとルフィを抱え上げる。

さすがに、これにはブルージャムもまた、額に青筋が走った。海賊連中が襲い掛からないのは、ブルージャムの言った、この状況を何とか出来る方法がある、という言葉が押し留めているに過ぎない。

「手前、いい加減に……!!」

ゴツ!!!

ブルージャムが怒鳴りかけた瞬間、海軍中将からそんな音を立て、風が吹いたように感じた。

無論、実際はそよとも吹いてはいないが、その効果は劇的なものがあった。次々とブルージャム海賊団の面々が倒れていく。

ブルージャム本人は何とか耐えたものの、一瞬意識が飛びかけた。

「手前ツ……何をしやがった……!!」

余裕を失い、ブルージャムは銃を向ける。

先程起きた事を知っている者が見れば一目瞭然。覇気をアスラが

放ったのだ。原作でもエースが同様に無意識の内に放った訳だが、こちらはきちんと制御出来る者が、その意思を持って放った。結果、ブルージャムにも影響が及んだという訳だった。

「ほう、耐えたか……ところで、知っているかね？」

「……あん？」

「銃というものは詰まっていると撃てないどころか、暴発するものだという事をだ」

くくツとブルージャムは笑った。

下手な脅しだ。いや、そう思いたかつたのかもしれない。得体の知れない技によって部下達は全員意識を失った。先程まではこちらが圧倒的優位と思っていたが、今では一対一だ。

「じゃあ、試してみるか」

そう言って、ブルージャムは引き金を引き。

直後破裂した銃がブルージャムの右手の指を吹き飛ばし、破片が彼の顔に食い込んだ。

「……ッ!？」

「嵐脚・袈裟懸」

一瞬の間をおいて襲ってきた激痛に、残った左手で顔面を抑えて叫ぼうとしたブルージャムが声を上げる前に。

振られた脚がX字型の傷をブルージャムの体に刻んだ。

そうして、今度はブルージャムもまた、ゴミ山の上へと崩れ落ち

た。

仕掛けは簡単だった。会話をしている間、ブルージャンは銃を右手に持ったまま下り下げていた。

静かに細く伸びた九尾の尾は、銃身に潜り込み、水銀の塊でもって銃の中を塞いでいた。結果、それを嘘と判断して引き金を引いた結果として、銃は破裂したという訳だ。

「行くぞ……この状態では俺も動けん。一旦街の中へと戻る」

何か言いたげな2人を押さえ、アスラは再び空を駆けた。

……残されたブルージャン海賊団を炎はやがて、火をつけた当人達も区別する事なく、包んでいった。

一旦大門の内へと舞い降り、サボと合流。

引き渡すと、アスラは引きとめようとする軍隊を無視して、再び炎の海へと戻った。

「さて、しかし、どうするか……」

せめてブルージャンの海賊船が使えれば楽だったのだが。

ブルージャンの一味は『貴族になるなら、足がつきそうな証拠隠滅』とばかりに船にも火が回るようにしていた。お陰で、見事に業火に包まれて、彼らの船はまるで使える状態ではない。

かといって、アスラ的能力と炎では相性は余りよろしくない。

いや、大量の水銀で押し包めば消して消せない事はないのだが、それをやれば間違いなく大量の水銀蒸気が発生する。

自身から自然蒸発しないよう抑える事は出来るが、さすがにこれだけの広大な範囲にそれをやって、蒸気を発生させない自信はない。そして発生すれば、助けても重篤な水銀障害で多数の死者が発生す



るだろう。

その時見えたのは。

一隻の船と。

船首に立つ1人の男。

ダウンー!!!

轟音を発して、ゴミ山が炎ごと吹き飛んだ。

結果として、ゴミ山には一筋の道が出来る。

海までの道、船が待つ脱出路の誕生によって、ゴミ山の住人達は一縷の望みを賭け、船へと走る。

幼い子供を親が背負い、老婆を子供達が支え、足を引きずる怪我人に肩を貸し、懸命に船へと向かう。

「はっ……彼らの方が、あの腐れ貴族どもより、余程人間らしいじゃないか……さて」

ふわり、と船の舷側へと舞い降りるアスラ。

幾人かはぎよっとするが、逆に動じる様子のない者が3名。

1人は王下七武海の一角たる者、『暴君』バーソロミュー・くま。

1人はカマバツカ王国の女王（永久欠番）エンポリオ・イワンコフ。

そして、最後の1人。

革命軍のトップ、ルフィの実の父親、モンキー・D・ドラゴン。

「自然系……風か。ドラゴン」

「何か御用かな？海軍本部中将『銀虎』のアスラ殿」

平然と返してくるのは、さすがに未来において世界最大の犯罪者

と世界政府が呼ぶだけの事はある。

「いや、ただ単に感謝をね」

ゴミ山の住人を救ってくれた事に礼を言つと言つアスラに面白そうな表情になる。

「ほう？てつきり我々を捕らえにでも来たのかと思つたが」

「俺は休暇中だ、本来はな……それに」

その後の言葉は呑みこんだ。

思つても、アスラの立場では口にしてはいけない。……奢り昂ぶつた貴族どもなど滅んだ方がいい、など。

アスラの心の奥底では常に、その声は喚き散らしている。

貴族や王族との付き合いが深まる程に、そんな思いが、嘗ての少なくとも名目上は平等を標榜していた社会を知るが故に、そうして性根が腐り果てた貴族らの姿を知るが故に湧き上がり、そうしてそれを押し殺して、笑顔で応対してきた。

今の革命軍に海賊を抑えるだけの力はない。今はまだ、世界政府の、海軍の力は世界の不条理に眼を閉ざしてでも必要とされているからだ。

「……今回は救援活動中という事で立ち去らせてもらおう。……縁があればまた、会おう」

それだけ告げ。

アスラは再び空へと舞い上がった。ドラゴンの能力ならば、撃ち落す事も出来たかもしれないが、それが行なわれる事はなかった。

翌日、街を回る事なく、戦艦は抜錨。表向きの理由として、ゴミ

が燃えただけとはいえ、しばらくは片付けが優先されるであろうから、として出航し、フーシャ村へと移動、後グランドラインへと帰還していった。

その途中に掴んだ情報を聞く限り、あの場に革命軍がいた事を知る者は誰もいないようだった。

「さて……あいつらは、この腐った世界を変えられるのかな」

戦艦の甲板でそう呟いたのを聞いた者は誰もいなかった。

### 第43話・ココロノソコ（後書き）

アスラの心の奥に押し込まれていますが、まあ、貴族の腐敗っぷりには腹わたが煮え繰り返る想いを幾度もしています

まあ、原作の天竜人や貴族の言動は明らかに腐り果てた外道達ですからねえ

ドラゴン達がやろうとしているのが、共和制や民主制なのかは知りませんが、少なくとも今の王国は倒れた方がいい、と想うような国も多いと思います

とはいえ、今すぐ世界政府がなくなれば、大海賊時代故に泣く人も多い……そんな本音です

まあ、サラリーマンの必須スキルですね

本当に、顔は笑ったり神妙な顔して、目の前の相手の顔を殴り飛ばしてやりたいと想った事はどれだけある事が……

## 第44話・日常編1（前書き）

少し今回はパロディ気味の話になっております  
キャライメージが………というのをご勘弁下さい  
その上で、ご了承の上、ご覧下さい

## 第44話・日常編1

これは今より少し前の話。数年前の事。

海軍の町マリンフォード。

グランドラインでも要衝に位置するが故に、海軍の要塞が築かれたこの本部は空飛ぶ海賊、海賊艦隊提督シキとの戦いを含め、これまで1度ならず激しい戦いで要塞が損壊しつつも、地理的要因故に再建され続けてきた。

その一角で。

激しい睨み合いが続いていた。

片方は海軍の『英雄』ガープ中将。

もう片方は海軍最高戦力の一角、海軍大将赤犬。

どちらも苛立った様子だが、どちらかと言えば、ガープに常になく怒りがあり、赤犬大将にはガープにはない余裕があるように見える。尚、この場にはセンゴク元帥もいたが、どこか頭痛を堪えているような様子だった。

そうしてガープが吼える。

「なぜ、なぜじゃ……！」

「ふん……これまでの行動を省みてみるがいい……！」

赤犬ことサカズキ大将も、どこか挑発染みた様子で返す。

しかし、ガープが怒れば怒る程、むしろサカズキ自身には余裕が生まれているかのようだった。

「何故……何故貴様がエスメラルダに……！」

一瞬言葉を区切り、ガープは吼えた。

「『じーじ』って呼ばれとるんじゃあああああ！」

その言葉にサカズキ大将は優越感に満ちた笑みで返し。

センゴク元帥は深い深い溜息をつき。

そうして、センゴク元帥の隣に控えていたアスラは呆れた様子で見ている。

そもそもの発端は、アスラの子供、エスメラルダが大きくなってきた事がある種の元だった。

そうして、『まーま』の言葉が発せられた事から、残る面々の内から『誰が一番に名前を呼ばれるか』という、そこはかたない駆け引きが生まれるようになった。

『ぱーぱ』は仕方ない。

それはアスラだけに許された呼称だ。

だが、それ以外は……。

そうして、最初に『にーちゃ』と呼ばれたサボが喜び、【ガーン】とでもいう擬音でもつきそうな様子でエースとルフィが愕然として落ち込んだり。

或いは先に『ねーちゃ』と呼ばれたサンダーソニアにマリーゴールドが羨ましそうな様子を見せたりする光景が見られた。

そうして。

今日は偶々であったが、最初に何時ものようにガープ中将が仕事をサボってやってきた。

続けて、仕事帰りにアスラに誘われてセンゴク元帥とサカズキ大将がやって来た。

元々は仕事と一緒に終わったサカズキ大将にアスラが『よければ、ご飯食べて行きませんか？』と誘ったのがきっかけだった。

現在ではサカズキ大将が男やめめな事を知っているアスラはこうして、サカズキ大将を誘う事がある。元より現在のアスラの家は大家族だ。

妻であるハンコックとその妹2人に、エースにルフィ、サボもいる。これに今は娘も加わり、時折他の大将や中将まで寄っていく。ぶつちやけると、年を喰った人物や長年戦ってきた為に家庭を顧みなかったが故に一人身となった者、或いは純粹に若い頃から仕事に熱中してきて気付けば家庭を築いて来なかった者などが案外多かつたりする。

例外はモモンガ中将など一部の者だけだ。

結果として、家に帰っても寂しいのか、アスラの家が賑やかな事もあり、何かと寄っていく者は多い。更に、部下らが挨拶に寄ったり、場合によっては仕事を追っかけてきたりと海軍の上層部の中ではアスラの家は相当に賑やかだった。

それでまあ、そこへ通りかかったセンゴク元帥も誘い、久方ぶりに3人で酒でも呑むかやって来て、まあそこで自分の家の如く、（仕事がある筈なのに何故か）くつろいでいたガープ中将にセンゴク元帥が雷を落としたりと色々あった訳だが……そこで事件が起きた。

寝ていたエスメラルダが、眼を起こし、ぐずった。

それに気付いたサカズキ大将が一番近くにいた事もあり、恐る恐るながらあやしていた所、サカズキ大将の指を握り、笑顔でこう呼んだのだった。

「じーじ」

と……。

さあ、ここから大変だった。

実は女の子の孫にそう呼ばれるのを楽しみにしていたガープ中将



(中將の孫じゃありません、ってツツコミはスルーされていた)が、サカズキ大将に怒りをあらわにした。

これで、ふええ…と泣き出したエスメラルダをあやしなから、サカズキ大将が『ふふん』と少し優越感の混じった笑みを浮かべた事が原因となり…遂には庭で2人が対峙する状況を生んだのだった。

「……………センゴク元帥」

「……………なんだ」

「……………うちの庭っていうか、この近辺の家、あの2人の喧嘩の後無事に終わってるんでしょうか？」

「……………終わったら、あの2人の給料から修理代は差し引く」

まあ、彼らの名誉から言えば、少なくとも彼らは抑えようとはした。

拳骨流星群やら大噴火のような大規模破壊攻撃は双方とも抑え、主に接近戦での勝負と短距離での能力使用に留めた。

が、それでも。結果から言えば、この2人の喧嘩はアスラの家の庭を滅茶苦茶にしただけでは飽き足らず、塀を倒壊させ、周辺の家屋数軒を粉碎するに至った。

尚、この喧嘩を止めたのは、大勢来たので、それならご馳走を作ろうと買い物に出かけていたハンコックが帰ってきて、この余りな惨状を見た彼女が……………。

『何をしとるのじゃー!』

という怒声と共に投げつけ、サカズキ大将とガープ中將2人の頭

に直撃した鍋2つ（覇気つき）であった事を追記しておく。

「……のう、サカズキ」

「……なんだ」

「これはないと思うんじゃない？」

「文句を言うな、確かに喧嘩したワシらが悪い」

そのまま怒ったハンコックに叩き出された2人の姿が、その晩屋台で見られたそう。

追伸ながら、再建されたアスラの家の庭だが……。

「……何故一部が公園化してるんだろっね」

アスラが何気に気に入っていた日本庭園の一角に私設公園というか、遊具が設置されていたそうである。

ちなみに、全額某2人が出したそう。

……相手が相手な上に、好意からなのも分かっていたので何も言えなかったが、物凄いミスマッチにアスラは複雑な表情をしていた。ただまあ、周辺のお宅の子供達にも解放して、役には立ったそう。

## 第44話・日常編1（後書き）

何話か、こうした遊びの話を入れる予定です

尚次回は、アスラの仕事模様をお送りする予定です

## 第45話・積載過多

これは、ゴア王国の一件が起きて更に少しばかりの時間が過ぎた頃の話となる。

カリカリカリ……

その部屋に響く音は筆記の音だけだった。

山盛りが幾つも積み重ねられた部屋の中、幾人もの海軍の軍人、その中でも事務処理方の人員＋ がひたすらに書類を処理していた。その＋ の1人。

部屋の中でも比較的奥、というか一番奥の手前。基本的にこうした部屋は偉い奴程奥にいるからつまる所ナンバー2に位置する場所に座っていたアスラが声を掛けた。

「おつるさん」

「何だい」

「どちらも視線は書類に向き、手は書類を処理し続けているままだ。アスラに至っては1つの山が終わると、その山を九尾の一本……先端を器用にも手の形として、処理済みの場所に運び、また別の尾が新たな山を持ってきている。」

「かと思うと、時折最奥に座る大参謀おつるさんの手元に積みあがりつつある山を別の場所へと運んだりもする。」

「矢張り、人員の増強は不可欠だと思っんだ」

「同感だね」

組織が出来れば、書類も出来る。

訓練1つとつても、申請なしでやれば事故が起きる危険も増えるし、必要な道具もある。

かくして、場所の申請、各種消耗品の申請、食料申請にどんな訓練を行なうかを記載した提案書などなど。終われば終わったで、破損した施設の補修申請に傷んだ武器の補充申請、怪我人がいれば報告書を書き、訓練の結果に関してまた報告書を書き……と何枚も書類が必要になる。

組織が巨大になれば、当然書類の量も飛躍的に増える。

ましてや、ここはマリンフォード。

全世界をカバーする世界政府直属組織、海軍の総司令部が置かれた海軍の島だ。

くだらない事から重大な事まで世界中の支部とから情報が集まり、更に本部や場合によっては世界政府からの情報も大量に入ってくる。そして、その処理を行なう最高責任者はセンゴク元帥だが、1人で処理出来るはずもない。

かくして、大將や中將が間に入り、各部門の責任者として権限を与えられ、自分の権限の範囲で処理出来る書類は各個に処理していく事になる。

例えば、おつるさんは、大参謀と呼ばれているが、実態は現代風に言うならば、総参謀長と呼ぶのが相応しい。

一方、アスラは……これは一口に言うのは難しいが、後方勤務本部長とでも言えばいいのだろうか？事務方の実質的なナンバー1に何時の間にもやら祭り上げられていた。

ではあるが、下手をすればまだ責務が増大しそうなのが、この世界の怖い所であったりする。

理由は簡単で、皆が確かに書類仕事を嫌がるというのはあるが、それ以上に出動が多いのが最大の理由であったりする。

海軍大將にせよ中将にせよ、各地への派兵は多い。

何しろ、世界中に海賊は多く、地方の支部で手に負えない海賊もまた必然的に多い。大抵の場合は、大佐クラスから少将クラスの派遣で何とかなるが、彼らが敗退でもしようものなら、今度は大將中將が出向かないといけなくなるし、ただでさえ新世界では大物の海賊達がうようよしている。こちらに備えて一定数の大將中將は駐留し、緊急時には出勤しなければならない。そして、この緊急時、というのが存外に多かつたりする。

結果、本部で書類処理を行なう人員は必要最小限に削られ、更に使えると分かれば、あれもこれもと役職という名の面倒ごとを押し付けられる事になる。それを出世したと喜ぶか、仕事が増えたと悲しむべきかはきつとその職に就いているか就いていないかで決まるだろう。早い話、就いてない者は傍から見ても妬ましく思っても、実際に就けば、そんな気持ちなど吹き飛ばすという事だ。

少なくとも、アスラはそうだった。  
きつと、この部屋にいる面々も同感だろう。

「まあ、問題はうちのどこを逆さにして振っても、そんな人員の余地なんてない事だね」

「そうですね、先だってやっと確保した人員も結局過労で倒れた人員の穴埋めで消えましたし……」

トップ2人の遣り取りに耳を澄ませていた事務処理方の一同から声にならない溜息が洩れた。

アスラ自身も悩みは多かった。

実を言えば、アスラはワンピース原作が結構お気に入りだったとはいえ、マニアというレベルではない。

何が言いたいかというと、細かい年表まで覚えていない、という

事だ。

多少は覚えていた。例えば、海賊王が処刑されたのが原作の何年前か、という事だ。だが、そこからとなると、何年前に何が起きた、などいちいち覚えていない。

例えば、トムの事件にした所で、海列車の完成具合と司法船の運航状況を確認して、事件が起きる時を読んだ訳だし、アーロンにした所でジンベエが王下七武海の一員となる時期と追放された時期を見計らっていただけの話だ。

空島への行き方はアスラは聞いた事がないし、エネルが何時空島を制圧するのも知らない。

そもそも、彼と自分とでは相性が最悪で、どうこう出来るかは正直自信がない。

（後、原作開始までに起きる出来事で、俺の原作知識って奴でどうこう出来る可能性があるとしたら……）

精々、アラバスタ編と後はモーガン、ワポルぐらいのものだろう。モーガンにした所で、キャプテン・クロと遭遇しなければ、モーガンが少しでも歪まないように持つて行くぐらいが精々だ。……彼は決して強くない。海軍大佐とあっても支部大佐である彼は本部大尉程度。サンジに手も足も出なかった鉄拳のフルボディと同格だ。……いや、まあ。フルボディもあ見えて、決して弱くはないのだが……そこらのゴロツキ海賊団程度なら2人で壊滅させる程だし。それでも、斧で全力で斬りつけて、居眠りをしていたガープ中將に全然傷を与えられなかった、という時点で本部と支部の差は分かるだろう。

ワポルに関しては、海賊になった後なら、ぶちのめしても誰も文句を言うまい。

反面、海賊同士の問題に関しては手の出しようがない。

例えば鼻唄のブルック。双子岬のラブーンに真実を伝えるぐらい

しか出来ない。

ゲッコー・モリアは王下七武海の一員であり、彼が海賊をどうこうする分には手出しが出来ないからだ。

(悩みばっか増えるなあ)

この年で若白髪を気にしないといけなくなりそうで、それもまた憂鬱になりそうなアスラに、おつるさんから声が掛けられた。

「アスラ、センゴクさんが呼んでるよ」

何だか、物凄く嫌な予感がした。

(予感的中)

そう思わざるをえなかった。

センゴク元帥の下に赴き、何か命令でも下るのかと思いきや、叙任。何に？と問われたなら片方は『世界政府外交官』としての肩書き。ぶつちやけると、これまでも似たり寄つたりの事をしていて、中には結構重要な案件もあった。まあ、何が言いたいかというと、本来外交官でもないのに、外交問題に関わるような話をせざるをえなかった、という事だ。

世界政府としても、これは良くないと思っただらしいが、現在のアスラの立場上、必要な事もまた事実。なら、いつそ正式に外交官にしてしまえ、という事になったらしい。いいのか、それで！と叫びたくなったアスラのだが、五老星が決定したという以上、いいのだろう、きつと。

「それと、もう一つお前に任せられる事になった部署がある」



「お断りしていいですか」

『却下じゃ』

ですよー。

ちなみに上からセンゴク元帥、俺、五老星の1人だ。

預けられる事になった部署、それは何とCP！何故そんな事になつてしまったかという……俺も絡んだ、トムさんの事件が原因らしい。

あのCP5による司法船への襲撃計画は大問題に発展した。

まあ、当然といえば当然の話なのだが。

で、本当の問題はここからで、念の為にとCPの内部監査を極秘に行なえば、出るわ出るわ、不祥事の山が次から次へと。矢張り組織というものは上にならえ、をするようで、これでもか！というぐらい汚職不正のオンパレード。やってないのは反乱と革命ぐらいか？というぐらいには強盗殺人から下は食事代の踏み倒しまで、してない犯罪を探すのが難しいぐらいだった。

さすがに、これは拙いという事で密かに逮捕を行なおうとしたが、そこは鼻の効くCP長官スパンダイン。自分の周りに司直の気配が蠢いたと悟るや、即効で逃げた。何しろ、自分の息子が襲撃かけようとした司法関連の人間だけに、これだけやっておいて許してもらえると考える程甘い考えは持てなかったらしい。……しかし、これから奴はどうするのか。革命軍でも拾ってくれないだろうし、海賊にでもなるか、どこかに正体隠して身を潜めるしかないと思うのだが。

とはいえ大多数は逃げ損ない、CPの人員も多数逮捕された。何しろ、全く逮捕者が出なかったのがCP9所属人員だけというから聞くだけで泣けてくる。

さて、そうやって逮捕者を除いて、まあ、訓戒や減給程度で済ん

だ者や無罪だった真面目君、汚職に興味がない趣味人らで再編した結果、何とCPはCP1とCP2だけになってしまったそうだ。

サイファーボール

「……三分の一ですか」

『CP9を除けば、四分の一じゃな』

全く頭が痛い、と言っているが、センゴク元帥や俺も頭が痛くなりそうだ。

で、権力握った連中は軒並み逮捕された結果、とりあえず頭になれそうな奴がない。

CP9のロブ・ルッチはと思ったが、何しろ表に出てこない連中なので、CP9からすぐに長官を出すのは難しいらしい。まずは表のCP1〜8のどこかに移して、そこで功績積ませて長官に、という事になるらしいが、何しろCP9はトップクラスのエキスパート集団だ。下手に他の部隊に移す事も出来ない。

サイファーボール

『それであ、CPがこうなるきっかけを作ったお前に、当面倒を見させる事にした』

「……俺、世界政府の直轄の諜報組織とは何の関係もないと思うんですが」

『何、お前さんは外交官、つまりは世界政府の役人でもあるじゃろう？（ニヤリ）つまりはワシらの命令を聞く必要もある訳じゃ』

……ハメラレタ。

と言つてもどの道逃げ場なんぞなかったか。……まあ、それに、悪い事ばかりじゃない。彼らがいれば、特にアラバスタの調査にはとっても役に立つだろう……そう思わないとやってられない。

……通話が切れた後、セングク元帥から『……今夜は酒でも呑みに行くか、奢ってやるぞ』と凄く優しさの籠った笑顔で言われたのが何かムシヨウに悲しかった。

第45話 - 積載過多（後書き）

どうも合わなかった方が複数おられたようなので、ゲスト出演した  
作品名を削除

明日は日常編2投稿予定です

## 第46話・日常編2（前書き）

前話ラストでクロス作品の紹介をした所、合わないと思われた方が  
おられたようで、申し訳ないです

## 第46話・日常編2

SIDEハンコック

全員を送り出した後、ハンコックは動きやすい衣装に着替え、庭に出る。

余談だが、アスラ邸の庭は母屋を挟んで前後に存在しているが、前面が3に対して、後面の庭は1程度の比率しかない。ただし、どちらが綺麗かと言われたなら、間違いなく後面だろう。

というのも、前面の庭は完全な露地となっているからだ。

元々は、ここにも芝ぐらいは張ってあったのだが……軽い鍛錬の場として使われた結果、芝が持たず、気付けば剥き出しの地面。それならどうせ、剥げるから、とその後は完全に放置状態になっていた。

まあ、鍛錬に使うだけあって踏み固められてはいたが。ちなみに、ハンコックが出てきたのは、前の庭だ。

「さて、それではアリス、今日も頼むぞ」

「みやあ」

ハンコックの声に、アリスは任せとけ、とでも言いたげな様子で、楽しげに鳴いた。

最初は普通に体を動かしていたハンコックだったが、最近は武术が楽しくなったのか、アリスに相手を頼むようになっていた。

アスラは最近物凄く忙しいし、エースやルフィにサボ、サンダーソニアにマリーゴールドは自分達自身が今、勉強中の身だ。教える側に回れる余裕はない。

……しかし、アスラが見たら内心で『さすがに別世界での王下七武海の1人』と思っただかもしれない。

前庭で鍛錬していた一同の動きを見、アスラの説明を聞き、アリスの実地を受けて、ハンコックは六式を使えるようになっていた。まあ、一応、というレベルでしかないが、2人の妹達がこれを見たら、物凄く落ち込みそうだった。

まあ、アリスに頼むようになったのはもう1つ真面目な理由があって、彼女の悪魔の実の力にアリスならば反応しない、という事もあったのだが。

ハンコックの食べさせられた悪魔の実は、超人系悪魔の実、メロメロの実。

この悪魔の実の効果を最大限に発した場合、男女問わず彼女にメロメロになった上、最終的には石化してしまう。その効果は、試しに発動させた結果、モモンガ中将すら石化してしまった程だ。無論、慌てて解除する事にしたが。

ちなみにだらしなくにやさがったモモンガ中将の石像を奥さんが見てしまった為に、後でえらい夫婦喧嘩が勃発したらしい。結果？どこも、惚れた弱み、怒った奥さんには勝てなかったらしい。

原作では、咄嗟に痛みで意識を逸らしたモモンガ中将だったが、こちらでは能力の使用実験という事もあり、そこまでやる事もないだろうと判断したか、見事に喰らったらしい。

なら使うなよ、と言いたい所だが、まだ制御が甘いらしく、激しい訓練を行なっていると無意識に発動させてしまう事があった。

だが、ここに唯一例外がいた。

メスであり、動物であるアリスは、とても賢いがさすがに人間の女性にメロメロになるような感性を持っていなかったらしく、普通にハンコックの相手をする事が出来た。

そして、アリスはそんじょそこの海兵如きでは束になっても勝てない程の強さがある。鍛錬の相手としては十分だった。

「よし、では始めるぞ」

「みゃう」

ぐツ、と力を入れて宣言するハンコックに、アリスも頷いた。

……こんな仕草を見てみると、本当にこの子、人間の言葉きちんと理解してるんじゃないだろうか、と思うハンコックだった。

ドン！

と音を立てて、アリスが加速する、ただし空中で。

月歩と剃の複合技『剃刀』。

鋭い軌道で空を駆ける。

『嵐脚・乱!』

それをハンコックは無数の嵐脚を放ち、迎え撃つ。見る人が見れば、「殺す気か!？」と血相を変える所だろうが、ハンコックには焦りはない。

実際、殆どの刃をアリスは難なく交わし、命中したのは僅かに1つか2つ。それも常時発動状態の『鉄塊』で弾かれた。

嵐脚を放てばどうしても隙が生まれる。

本来ならば、嵐脚の連打で刃の壁を作るつもりだったハンコックだったが、高機動の動きに惑わされ、壁を作るには至らなかった。

その隙に、アリスが一気に距離を詰める。

「くっ!」

咄嗟に『鉄塊』状態で上に交差させた腕で受け止めるが、ズシン!とした重みと共に足が地面に僅かながらめり込む。



『鉄塊』がかかった状態での掌の一撃、『鉄槌』が炸裂した。もつとも、これでもアリスが手加減してくれている事をハンコックは知っている。

本気のアリスが上空からの打ち下ろしからの渾身の一撃……通称『天槌』を炸裂させてもしたら、ハンコックは地面に膝のあたりまでめり込み、交差させた両腕もへし折れていただろう。

実際、先だってアスラの配下に収まったCP9が挨拶に来た折には、同じ鉄塊拳法を使う身として気になったのだろう。

ジャブラと名乗る男……ちなみにいきなりサンダーソニアに求婚して、全員を唾然とさせたが……彼とアリスとが勝負をして、激戦の末に『天槌』が炸裂。空中で喰らったが故に踏ん張れず、ジャブラは肋骨数本を折る怪我をする結果になった。

もつとも入院中のジャブラ曰く『次は勝つ！そして、サンダーソニアさんに婚約指輪を！』と吼えているらしい。

なお、当のサンダーソニアの方は……これまで男性と余り縁がなかっただけに混乱しているらしい。

さて、場面を試合に戻そう。

『鉄塊・輪！』

両足を一直線に伸ばし、鉄塊状態のまま回転して、アリスへと一撃を加える。

ガン！と、とても、肉体同士がぶつかったとは思えない音を立てて、アリスが距離を取る。

無論、鉄塊に関してもアリスの方が熟練者な上に、鉄塊拳法なんてのを使える事から分かるだろうが、最も得意としている六式でもある。ちなみにアリスは正式には五式使いのだが、あのロブ・ルッチをしてさえ『六つ全て使えてこそその六式使いだ』との持論を展開せず、黙って最後まで真剣に見ていた所を見ると、それなりに認

められていたと考えるべきだろう。

そうして、着地した次の瞬間。

アリスが突進した。

ただし、刹の速度で回転も加えて。

『鉄塊玉』

CP9のフクロウがそう呼んでいた技だった。  
咄嗟に『鉄塊・剛』で受けたが……。

「くっ！」

何しろ、ハンコックとアリスでは重量に差がありすぎる。

大きく弾き飛ばされて、壁に叩きつけられた。

体が痺れているが、まだやれる、と思い、懸命に体を起こしたハンコックだったが……アリスはというと追撃をかけもしないどころか、ハンコックの方をそもそも見ておらず、顔を横に向けている。

とはいえ、ハンコックも別にそんな態度を怒ったりはしない。アリスが門の方を見ているという事は……。

「まま〜ただいま〜」

今年7歳になる娘のエスメラルダが学校から帰ってきたという事だ。

アリスはさすがに虎なだけあって、耳も人間より遙かにいいから、逸早く気付いたという訳だ。

「みゃあ〜」

早速アリスが撫でてと言わんばかりに擦り寄る。

どうも、エスメラルダは撫でるのが上手いらしく、撫でてもらうとアリスは何時も気持ち良さそうにしている。エスメラルダも小さい頃から一緒だったアリスにはすっかり懐いており、余所の子供ではさすがにおっかなびっくりのアリスにも普通に触れ合える。その間に、ハンコックも埃をはたいて、身だしなみを整える。

「おかえりなさい、おやつがあるから、手を洗いに行きましょうね」

「はい！」

ハンコックは縁側に寝かせていたカルラを抱えると、反対の手でエスメラルダと手を繋いで家へと入っていく。無論、アリスもまた尻尾をご機嫌良さそうに振りつつ、その後をついていった。

## 第46話・日常編2（後書き）

少し、クロス先に関しての言い訳模様を

私自身はあちらでのアスラを完全に設定のみ使用した別のアスラとして拝見していました。ガンダムにおけるGガンを見ているような気分でしたかね

というのも、私自身の話が予定通りに進めば、マリンプォードでの白ひげとの戦争は起きない予定ですし、アスラの戦闘方法も強者との戦闘時は悪魔の実の力を補助に用いた覇気と格闘戦を基本としてイメージしている為です

この為、悪魔の実の力で戦うアスラというのも、ああこういうのも新鮮だな、と見ていました

元々、ワンピースという作品自体が海賊を主役とした作品ですし、こちらのサイトでは最強オリ主という作品も多いので私自身は然程気にしていなかったのですが……苛立ちを感じた方が案外おられたようで、申し訳ないです

ルフィも、東の海では他者から感謝されるような行動してきましたが、最近インペルダウンから凶悪犯罪者を多数脱獄させ、エースの処刑が失敗した世界の混乱の影響なんて考えもせず、助けに行きましたしね

Mr2ことボン・クレーとてアラバスタ王国の人々にとってはクロコダイルに次いで憎まれてる相手でしょう……彼がいたからこそ、内乱があそこまで大きくなった訳ですし

まあ、ああいう作品もありなのではないか、そう思ったのと同時に、さすがにあんな能力持った相手には勝てないだろう、とアスラが戦ったら敗北を予想していたのもありました

### 第47話・日常編3（前書き）

投稿ミスった

削除が出来なかったので、48と47の投稿の日付が逆になっています

後書きにてアンケート

### 第47話・日常編3

「ふう」

私は一仕事終えて、一息ついた。

私の名前はナミ。

東の海ココヤシ村のベルメールさんの娘で、一時的に魚人海賊団アーロン一味の幹部になり、今は海軍の測量士な12歳だ。

アーロンがアスラ本部中將によってやられて、逮捕された後、私はココヤシ村を離れ、海軍本部マリンフォードへとやって来た。それ自体は別に気にしていない。

事情は村の人も今や知っているとはいえ、矢張りわだかまりのある人もいるだろうし、逆に申し訳ないという気持ちを持っている人もいるだろう。ゲンさんなら黙って頭をくしゃくしゃにして、それで終わりにしてくれるだろう。ノジコなら「信じてたから」と笑って、何時もと同じに振舞ってくれるだろう。

けれど、殆どの人とはどうしても、良い方向か悪い方向かはさておき、関係は変わってしまった。

……何が言いたいかと言うと、居辛いのだ、今のココヤシ村は。

とはいえ、幾等海軍本部中將とはいえ、そう簡単に測量室入りになれるのかと疑問に思ってはいた。

が、実際にはマリンフォード到着後、ナミを連れて測量室に直行、責任者として話をしているとすんなり決定していた。

後で知った事だが、アスラ中將は事務方のトップに近い人だそうで、当然測量室にとっても幾つか間接的に役職を挟んだ上の上な立場の人らしい。

そりゃあ、すぐ許可も下りる訳よね……許可出すの自分なんだも

の。

とりあえず、私の肩のアーロン一味の入れ墨はそこに新たに入れ墨を加える事で、全く別の形に変わった。これがアーロン一味の入れ墨だったなんて、入れてた事を知ってる人でも分からないだろう。測量室の人達は親切だった。

どうも私に関しては、育ての親を殺された後、残った姉や知り合いを助ける為に海賊に協力する事になっていた女の子、という事になっっているらしい。……うん、嘘じゃないわね……。

そのせいで、大変だっただろう、と可愛がられている。

照れ臭いのはあるけれど、それ以上にさすが、世界政府の海軍本部マリンフォード所属の測量士の人達。

私の腕も決して悪いものじゃないのは、アーロンが保証していたけれど、この人達は凄い。私が1枚仕上げる間に、何枚も仕上げて、しかも私より綺麗だ。正に職人芸。素直に尊敬出来る技術者達だ。

覚えはいい、と褒められているけれど、全然追いつけた気がしない。でも、だからこそ目指す価値がある。

一応数年後には選択する事になる予定なんだけど……何を？と言われたなら、ココヤシ村に帰るか、このまま海軍の一員となって測量室に所属するか、という事だ。無論、私がそれまでに測量室の一員となるに十分な技術を持っている事が、前提だけれど。

ただまあ、もし選べたなら、このままここで働きたいな……。

さて、一仕事終えて、時計を確認すると、もうじき16時だった。私は一応見習い扱いだが、年齢が年齢って事で定時、すなわち17時には遅くとも帰るように決められている。今日は少し早いけど、これからもう一作業すると、確実に17時を過ぎてしまう。

海図を提出した所、時間を考えて、もう上がるよう言われたので、お言葉に甘える事にする。

「それじゃ、区切りがついたんで、今日はこれで失礼します」

「ああ、気をつけて帰るんだぞ」

皆に挨拶して、私は家路につく。

今、私はアスラ中将の家に厄介になっっている。海軍本部マリノフオードで誰かに襲撃されるとも思えなかったのだが、さすがに、12歳の女の子に1人暮らしさせる訳にはいかない、って事になったらしい。まあ、もつともな話ではある。

いいんだろつか？とも思ったけれど、アスラ中将曰く。

『1人やそこから増えても同じだ』

との事。ついてみれば、賑やかな家。

その後子供が増えた結果、今ではナミも含めて常に10人+1匹が暮らしている家だ。ハンコックさんも最初私が連れられて行った時は眉を潜めていたけれど、アスラ中将が何やら話した後は、至極穏やかで優しい様子になった。

というか、こっちのが素だつて事は、すぐに分かったけれど。

「ただいま」

最初は恥ずかしかつた言葉だけど今ではすっかり慣れた。

「おかえり、おやつあるわよ」

「みゃ」

「ナミおねえちゃん、おかえり」



口々に迎えてくれる今の家族。

私はベルメールさんの事を忘れるつもりはない。

彼女は確かに本当の産みの母ではないのかもしれない。だが、それがどうした。あの人は私にとっては紛れもなく母だった。

その事を私がアスラ中将の家に住む事になった時、ハンコックさんに言ったら。

『そうか、良い母上だったじゃな』

と凄く綺麗な笑顔で微笑まれた。

……同じ女性なのに、真っ赤になって俯いてしまった。

アスラ中将にも言った。

『ああ、忘れないでいてあげるよ？人が本当に死ぬ時は、その人の事が忘れ去られた時だって言うからな』

そう言って、頭を撫でられた。

だから私は忘れない。

けれど、アスラ中将もハンコックさんも私はノジコと同じく家族だと思っている。わざわざ口にはしないけど。ただ、私の感覚的に言えば、お父さんとお母さんって言うよりは少し年の離れたお兄ちゃんとお姉ちゃんって感じだろうか。……2人とも格好よくて、凄く綺麗なんだもの。ハンコックさんなんて、2人も子供を産んだとは思えない。私もあんな大人の女性になりたいなあ……。そんな風にぼんやりと考えていると……。

「ナミく、食わないなら、それ俺がもらっていいか？」

「空気読みなさいよ、バカルフィ！」

物憂げな私の様子に気にもせず、私の前に置かれたおやつに指を  
啜えて『くれ』と言い出すルフィに、うがーっと思わず吼え  
てしまう。

全く、この食い意地の張ったバカは……！エースにサボも笑って  
んじゃないわよ！

穏やかな、ある日の出来事だった。

### 第47話・日常編3（後書き）

アンケートを行ないたいと思ひまして……  
先だって、非難轟々になつていたクロスですが、私なりのクロスさせた、同じ場面での話しを番外編として書くかどうか迷っています  
無論、伝龍さんの同意が得られたら、の話ですが、設定を見ていると、あちらの主人公にも結構隙もあるようなので、かなり展開とラストは異なる事になりそうです

私なりの展開を読んでみたいと思われる方は感想のラストにYES  
のYを  
いや、もうあの話関連はいいよ、と思われる方はラストにNを入れて下さい  
よろしくお願いします

## 第48話・日常編4（前書き）

投稿ミスった

削除が出来なかったので、48と47の投稿の日付が逆になっています

アンケートをこれをもって締め切ります

多数のご意見ありがとうございました

今回、アンケートのみにお答え頂いた方へはこちらで一括してお礼  
申し上げます

ありがとうございました

## 第48話 - 日常編4

時折思ふ事がある。

あの時、あの場所で、エースと出会っていなかったら、自分はど  
うなっていたのだろうか、と。

俺はゴア王国の貴族の家に生まれた。

貴族、貴い一族と書く訳だが、俺からすれば、醜族だ。

外面こそ綺麗に着飾って取り繕っているが、その内面は見るに耐  
えない醜悪さだ。

俺の親は2人と俺なんて見ていなかった。あいつらにとって、  
俺は自分達がより楽しい思いをする為の道具で、重要なのは俺が王  
族と結婚するかどうか。

俺が王族と喧嘩して怪我をした時も、あいつの方が武器を持って  
喧嘩を売ってきたのに、母は俺を叱り飛ばし、王族にぺこぺこ頭  
を下げていた。これがまだ、表だつてはそうせざるをえなかったと  
いうなら、救いはある。けれど、違った。

だから、俺は家を飛び出した。

事故にあつた風を装つて……。

そうして、俺とエースは出会つた。既に『不確かな物の終着駅』グレイターミナル  
で一目置かれつつあつたエースが、俺を何故気に入つたのかは分か  
らない。

俺だつてそつだ。飛び出した事は後悔しないが、不安があつたの  
は確かだ。

何しろ、俺は貴族生まれの高町育ち。

端町さえまともに行つた事のなかつた俺が、更に危険地帯である  
『不確かな物の終着駅』グレイターミナルで暮らしていけるのか、いきなり危険な奴  
に出くわして、やられたりするんじゃないかと内心ではビクビクし  
ていた。

それがばったりエースに出会つて……何でいきなり信用出来たの

か。

エースだって、何で最初から友好的だったのか。当時のエースの普段がそうじゃないって事は、その後の付き合いですぐ分かったけれど、でも何故か俺もエースの事は信じられた。

敢えて言うなら、ウマが合った、としか言いようがない。

グレイターミネル

そして、エースと一緒にいるという事で、『不確かな物の終着駅』で俺も一目置かれるようになり、エースから色々教わったお陰で俺もここでやっていけるといいう自信を持つ事が出来た。

そうして、互いの夢として海賊として海に出ようと誓い、その為に必要な金を溜めようと貯金を始めて……。

そうして、アスラに出会った。

アスラはエースの爺さんで海軍本部中将、英雄とも呼ばれるガープ中将の子育てのやり方に問題あり（まあ、実際俺もそう思ったし、真つ当な常識を持つ人は皆賛成してくれた）、としてエースを引き取りにやって来た。

その際に、俺がエースの友達って事もあり、俺も連れてった。まあ、俺が孤児だと思ったからだったんだろうが……。

そうして、俺達は……『海賊』を知った。

『海賊』に俺達は夢を持っていた。

16年前に処刑された海賊王ゴールド・ロジャー。彼の処刑直前の言葉。

『俺の財宝か？欲しけりやくれてやる！探せ！この世の全てをそこに置いて来た！！』

その一言で、世界は大海賊時代と呼ばれる時代へと突入した。

海賊王と呼ばれた男が遺した財宝。

それをゴールとして、一斉に皆が海へ出た。我こそが次の海賊王

だ！として……けれど、皆当たり前の事を忘れていた。

勝者は1人だけ、って冷酷な事実をだ。

そうして、更に言うならば、大多数は本当の意味でのスタート地点にさえ立つ事が出来ない、って事もだ。

海賊王の宝はグランドラインのどこかにある。それは確実だ。

だけど、殆どの奴はグランドラインにさえ入れない。

そうして苦労してグランドラインに入り、そこで生き残ってレツドラインに辿り着き、大陸を越えて新世界に入って……初めて本当の意味でのスタートラインに立てた、と言える。

じゃあ、そういう大部分の奴はどうするのか？

いや、そもそもスタートラインに立てる程の奴だって、どうやってそこまで辿り着くのか。

当たり前の話だけれど、世界のどこかにある目的地を目指すなんて事をしているのに、のんびり商売をしながら何て奴はいないだろう。誰も目指していない土地なんてのならともかく、世界中からそこを目指して人が集まってくるというのに……。

結果、海賊は奪う。

海賊王の財宝なんてものに興味を持たず、普通に生き、普通に暮らしている人々を襲い、財貨を奪う。その過程で頑張って溜めた財貨を奪われまいと抵抗する人達を殺し、犯す。より酷い時は売り飛ばし、拷問したりもする。

そうしてやってく連中の中には、何時しか海賊王の財宝を目指しての冒険ではなく、そうやって人を殺し、奪う生活こそを楽しむようになる連中もいる。もちろん、海軍に追われるようになった事による恐怖とかそうした事も影響があるだろう。

そんな海賊の所業って奴をたつぷりと見せられ……もちろん、中にはマシな海賊がいたのも事実だけれど、そんな奴は本当に一握りの連中だった。

だから、自分達は海賊になるのは諦めた。

というか、現実を見せられて、その気が失せた。

自分達は自分達なりに夢を追い求めたいと思うが、その為に頑張っ  
て普通に暮らしてる人達から奪って自分達がやっていくんじゃ、  
結局貴族達と同じじゃないか、って思った事もある。

なので、最近は一ースと自分は賞金稼ぎをしようって話になって  
いる。

素直に海軍に入るには、自分も一ースもどっちも政府組織つての  
にわだかまりがあったからだ。まあ、ルフィは素直に海軍に入るっ  
て言ってるし、それはそれでいいと思うんだけど。

今はまだ、俺達は迷ってる。

自分達が本当にしたい事は何なのか、って。

海賊になるのは止めた、けど、海軍に入るのもわだかまりがある。  
でも、賞金稼ぎだって、これで生きていくんだ、つてのにはどうも  
首を傾げてしまう。

だから、とりあえずは旅をして何をしたいか探してみたい、と思  
ったんだ。

それを言ったら、アスラには幾つか条件を出されたが、約束した  
らOKを出してくれた。

1つは最初は東の海から始める事。

理由は、あそこが最弱の海だから。

まあ、初めて海賊退治して、金を稼ぐって事やるのにいきなりグ  
ランドラインはないよな。

2つめは、旅の途中で海軍の不正を見つけたら、知らせて欲しい  
って事。

ナミの時みたいに、どっかの支部がバカやってたからって、いき  
なり殴ったら俺らが悪者にされちまう。けど、アスラに連絡取つて  
からなら、結構やりようもある。

まあ、その他偶には連絡入れるとか、あったりしたんだが、代わ  
りに小さいけど船をくれる約束もしてくれた。



まあ、今は頑張つて、夢をかなえる為……いや。

何を成し遂げたいかを見極める為に、俺達は海へ出る。そこで生き抜いて行く為に腕を磨かないとな！

アスラには感謝してるんだ。

まあ、お兄ちゃんと慕ってくれるエスメラルダと別れるのは寂しいし、憧れのハンコックさんに会えなくなるのも寂しい。

けど、俺も男だ。エースは六式が気に入ったらしく、頑張ってるけど、俺は武器を使う方が性にあってるんで、刀を使ってる。

「おい、サボ、早く行こうぜ」

「分かった、すぐ行く」

おっと、エースの奴が呼んでる。

今日も鍛錬の時間だったな。さって行くか。

第48話・日常編4（後書き）

アンケートにご協力ありがとうございました

Y：2票

N：15票

ですので、あの件に関しては、すっぱり切り捨てる事としますw

## キャラクター設定集

### 設定集

それなりに話が進んできたのと、年が分かりにくいと思われるので、まとめておきます

(46話時点)

### アスラ

#### 海軍本部中将

超人系悪魔の実『メタメタの実・モデル水銀』を食べた金属人間。当人の頭の中には現代日本のサラリーマンとしての記憶があるが、気付けば『ONE PIECE』世界に転移していた。

ただ、この世界で気付いた時には既に十代の少年の姿であり、それ以前のこの世界での記憶はない為、色々と悩んでいた時期も実はあったりする。

名前は元の名前が思い出せなかった為に(日本の時代のも、この世界のもの)、阿修羅からアスラと名乗っている。年齢はこの世界の肉体が何歳なのか分からなかった為正確な年齢は分からないが、推測ながら現在31歳という事になっている。実はシャンクスと同一年の計算になる。

最近は事務方に完全にとっ捕まっている状態。

外見は、某クラッシュブレイズの海賊王ことケリーに似ている。

黒髪青みがかつた黒瞳。

身長225cm。……これでもワンピース世界では決して高い方ではない。

### ・九尾

水銀から生み出した尾を模した九本の水銀の塊を背中から生やして攻撃や防御に使用する

・白銀街道

水銀を極薄に伸ばし、それを伝って一気に移動する

また、普通に水銀を伸ばして、橋のような使い方をする事もある  
間合いを瞬時に詰めたり、純粹な移動手段として使用したりする

・拳砲

某漫画の感謝の正拳一万本を繰り返した果てに辿り着いた一撃

音速を超えた一撃で、通常はこれに覇気を込める

・拳砲・斉射三連

全力を込めた音を置き去りにする拳砲の三連撃

・六式

言わずとした六式各種

アリス

グラン・タイガーと呼ばれる種類の虎。

アスラが気付いた無人島で拾った虎の子供の兄妹の内、妹の方。兄は島から離れる際、出来ていた家族と共に島に残った。

六式に関してはアスラ以上の天才で、鉄塊拳法を発動させる事が出来る。

ただ、手の構造上、指銃<sup>シガン</sup>だけは修得出来ず、正式には五式使い。  
尾を除く全長で4mに達するが、これでもオスよりは小型。

・鉄塊拳法

原作におけるジャブラと同じ技。鉄塊をかけたまま動ける

・鉄槌

鉄塊をかけたまま繰り出される猫パンチ

ただし、人を大きく上回るグラン・タイガーの怪力から繰り出される一撃は常時発動の鉄塊と相まって正に鉄槌そのものの破壊力

・天槌

上空から『剃刀』で加速をかけた上で、下へ向かう重力も加算して

全力で繰り出す鉄槌

破壊力は抜群で、鉄塊をかけていても最大破壊力であれば肋骨を纏めて粉々に粉碎する威力があるが、反面隙が大きく、かわされると地面に自身が激突する危険があるなどリスクもでかい。

・剃刀

ロブ・ルッチが使用していたものと同じもの。月歩と剃の複合技

・鉄塊玉

原作で、フクロウが使っていたのと同じもの。鉄塊を掛けた状態で高速回転と剃の移動速度を加えた体当たり

ハンコック

原作における王下七武海の一角、アマゾン・リリー皇帝陛下にして世界一の美女。

6年前の現在23歳。

この世界では、フィッシャー・タイガーの聖地マリージョア襲撃の際、アスラと出会い、フィッシャー・タイガーの助けを借りてシャボンディ諸島へ。更にそこからシルバース・レイリーの元へと訪れる事になる。

そこで、背中の『天翔ける竜の蹄』の焼印を刺青によって隠蔽する技術を持つ集団を紹介してもらい、そのお陰で、原作と異なり平穏な生活を営んでいる。

アスラと結婚し、現在7歳になろうかという娘がいる。

つまり、アスラは自覚してなかったが、ハンコックが16の時に結婚した訳で……羨ましい。

超人系悪魔の実『メロメロの実』の能力者。

原作に比べ、平穏な生活を送っている為に、王下七武海とやりあうような実力は持っていないが、本人曰く『護身の為』に六式をアスラの説明を聞き、練習を見て、アリスとの実践で修得してしまった。身長191cmで、ハイヒールと合わせると2mを越えるぐらい、

- ・嵐脚・乱
- ・鉄塊・輪
- ・鉄塊

全て原作と同じもの

エスメラルダ

間もなく7歳になろうかというアスラとハンコックの娘。

2人の血を引いているらしく、黒髪に黒瞳。

ハンコック似の将来が期待される美少女。

尚、名前の由来はバラの品種から

カルラ

もうじき2歳になろうかというアスラとハンコックの息子。

アマゾン・リリーの女性は女しか産めないと聞いていたので、実は

ハンコックからも生まれた時は驚いた。

この為、アスラは女性しか生まれないのは、アマゾン・リリーの環

境に原因があるのではないかと密かに思っていたりする。

名前の由来は阿修羅と同じ八部衆の1人、迦楼羅王から。

ナミ

現在12歳。

アーロン一味の入れ墨を原作同様、別の入れ墨を入れる事で別の模様に変えている。

現在は海軍測量室の見習いとして、日々海図の練習。

将来に関しては、このまま海軍に入るかどうか悩み中。

ルフィとは、現状姉と手のかかる弟とでも言うべき関係のようだ。

サボ

現在年齢不明だが、おそらく14前後。

ゴア王国貴族出身の子供だが、自分を見てない父母に嫌気が指し、全てを捨てて『不確かな物の終着駅』へと事故で死んだ風に装い、家出した。

そこでエースと出会い、更にアスラと出会う。

当初は海賊を目指していたが、海賊の現実を目の当たりにした事で、自らの道を探しにエースと共に賞金稼ぎとなる予定。

ルフィ

現在11歳。

一応六式を使えるようになった他、悪魔の実の使い方に関しても色々々とアドバイスを受けた結果として、史実より早く使えるようになった。

最近ではゴムの体を使った自身独自の技と六式を組み合わせ、新しい技を作っている。

ギア2とギア3も一応使えるが、これは一日一回とアスラに限定されている。少しずつ練習を加えてきた結果として、それぐらいなら後で脱力感を感じるものの体への負担は疲労程度に抑えられるようになったが、それ以上は体への負担がバカにならない。

・鉄塊

ガープの拳はゴムでも受けられないので、必然的にこれで耐える為に一番早くに取得した。

・ゴムゴムのピストル・鉄槍

原作と基本は同じだが、インパクトの瞬間に鉄塊と併用している為、威力が上昇している

・ゴムゴムの指銃乱打

シガントリング  
ガトリング

ゴムゴムの銃乱打の指銃版

・ギア2

原作と同じだが、軽いギア2を最初は10%程度の体に負担がかからないLvから、少しずつ%を高める事で一日一回程度なら疲労ですむようになっていく。ルフィの切り札

以下順次追加予定（46話時点）

エース：現在14歳

シャンクス：現在31歳

白ひげ：現在66歳

現在、原作開始6年程前



## 第49話・裏の日常（前書き）

割り込み投稿すると、更新したと表示されないんですね  
一番下のが更新日時となるのか…

## 第49話・裏の日常

「つまらん」

「まあ、そう言うでない」

「あ、これ〜も〜我らが仕事なればあ〜」

はあ、と溜息をついたのはカクだった。

今、彼らはCPの訓練所に来ている。これもまた、先だって新たなCP長官となったアスラ中将の命令によるものだった。

先だつての監査で、CPは大量の逮捕者を出した。

結果として、今やCPは大規模な戦闘に駆り出された訳でもないのに、壊滅寸前だ。

当初は、『自分達には関係ない』を貫いていたCP9だったが、すぐに弊害は現れた。

……これまでのCP1〜8の面々を指揮下に置き、スパンダインは仕事はちゃんとしていた。だからこそ、発覚がここまで遅れたとも言えるが、基本的にCP9自身が裏づけ捜査を行なう事もあるが、彼らは僅か7人が正規の隊員となる少数精鋭部隊だ。

無論、サポート部隊はあるが、単純な情報処理には人手が足りない。

一般的に諜報部隊というと派手な印象があるが、アスラの元の世界での映画で007がやらかすような派手な仕事は滅多にあるものではない。実際には、大部分の諜報員が行なう事は地味な情報を集めての調査だ。

それは大量の新聞であったり、或いは通信であったり、その中から情報を拾い集め、組み立てていく。

必要なら、金で釣り、脅迫して情報を引き出す。

そうやって集めた情報から判明した宝石を元にCP9のような実働部隊が動く。原作において、CP9がW7に役職持ちになる程、何年も潜入していた事を考えれば、納得いくだろう。

あの件とて、可能ならば誰にも気づかれない事なく、必要な古代兵器の情報のみ入手して、バラバラにあの町を出て行くのが理想だった。まあ、この世界ではそもそも、そういう潜入話自体が立ち消えになっている訳だが。

さて、話を戻すが、これまで細々して地味な、けれど重要な情報分析や足を使った情報収集を行っていたCP部隊が一気に1/4になった結果として、情報整理に支障を来たした。

実行部隊を削る訳にはいかないが、今のままではまともな活動が不可能。

そこで、とりあえずはCP部隊の再建をアスラは最優先とした。

五老星も、今の状態での活動が最悪の状態にある事は理解していたから、アスラが内心涙が出そうな気持ちで、センゴク元帥に暇そっうだった黄猿や青キジも赤犬が引っ張ってきて、何とか纏めた再建案を了承した。

1年。

それで、前より劣るのは仕方ないが、とりあえず組織として動けるまでに持っていく。

その為には、余り手段を選んではいられなかった。

まず、逮捕された人員から、さすがに連続強姦犯や強盗殺人犯は無理だが、他の連中には減刑を条件に、これまでと同じような活動を行なわせた。CPへの復帰は叶わないが、これをきちんとこなせば、1年後には多少の報酬も得られるし、インペルダウン送りも免れる。後は普通の刑務所で何年か我慢すれば、社会復帰も叶う。

ただし、これを機に脱走した場合、或いは懲りずに罪を追加で犯した場合DEAD ONLYの賞金首として手配され、即効で命を狙われる事になる。

早い話が、今のままなら死刑にならない面々をインペルダウン送りか、それとも協力するか選べ、とき脅した訳だ。逃げたり、問題起こしたりしたら、その罪も加算して死刑になるけど、1年頑張れば、その後が楽になる。そういう話だ。

この取引は五老星にすんなり承認され、一方捕まったCP隊員達の大多数はこの話を持ちかけられると、即効で話に乗った。

インペルダウンの恐怖は誰もが知っていたし、そこに何だかんだで理由つけて送られるぐらいなら、1年頑張ろう、という事だ。

こうして時間を稼いでいる間に、まだ育成途上だった人員らを鍛え上げていた。

前述の一時解放処置を受けた面々に強制的についていかせて、実地も受けさせる。ちなみに同行させられる囚人側は命令権はあるし、無事に連れて帰ってくればボーナスも出る。反面、全滅なんて事になったら大幅減給となっている。

だからといって、何もさせずに後方で待機させておくとかは許されていないので、結局は懸命に自分達のノウハウを叩き込むという事になっている。何しろ、1年経てばその後が楽になるとはいえ、世界政府の役人に復活出来る訳じゃないから、金は幾等あっても足りるという事はないからだ。

そうして、CP9もまた、一時その裏活動を停止して、各地にて教官役として派遣されていた。

ちなみに、もう1組、ジャブラ&ブルーノ&フクロウ組もまた、別の場所に派遣されている。こちらはジャブラが非常に熱心で、ブルーノも真面目な為、こちらより大分楽らしい。

カクとしては溜息をつきたい気分だ。

ジャブラが真面目且つ張り切っている原因は分かっている。そりゃあ、アスラ中将の命令に『よし、分かった、未来の義兄の為なら一肌脱ごうじゃないか!』と言い出せば、誰だって分かる。

ちなみに、カリファはCP9の本部で書類処理中だ。

なお、CP9が指揮下に入った事で、『生命帰還』を覚えられるかも、とアスラが一瞬考えて、どこをひっくり返してもそんな技を新たに取得する為の時間が取れない事に気付いて落ち込んだりしている。

（まあ、クマドリはああ見えて案外まともじゃから、大丈夫じゃろう。問題はむしろ……）

と、カクはちらりとつまらなそうにしているロブ・ルッチを見やる。

一応大丈夫だとは思う。政府から任命された「長官」の命令には従う男だし、前の長官と比べれば遙かに今の長官は色々な意味でマシでもある。

事実、中将はルッチと模擬戦を行なって勝つてもいる。

一応模擬戦となつてはいるが、最後はルッチは『六王銃』ろくおうがんまで用いて、そして敗北した。

カクが見た所、おそらく純粋な六式の技術ではルッチの方が上だ。だが、悪魔の実やそれ以外の技全てをひっくるめた戦いになれば、アスラ中将にルッチは三戦全てで完敗した。特に最後の試合では、ルッチが開始早々に間合いに入った瞬間に吹き飛ばされ、終わった。悪魔の実ではなく、純粋な武の力によって。

それ以後は、少なくともカクはロブ・ルッチがアスラ中将について不満を言うのは聞いた事がない。反抗はする心配はないだろう。

ただ……この男はそもそも『殺しが正当化される』という理由でCP9に在籍している男だ。

先だって、戦闘の後、アスラ中将から何やら言われた後、どうも口数が少ないが……。

（頼むから、未熟だからとかで殺したりせんでくれよ）

そう内心で思いつつ、何やら胃が痛くなりそうなカクだった。  
一方ルツチはといえば……。

(……王下七武海か)

来年までの間に幾つかの部隊を使って、試験として調査を命じる  
と言っていた。

実の所、原作でもルフィの船長としての姿勢はきちんと認めてい  
た。

同様に、自分すら上回ったアスラ中将の事もきちんと認めている。  
無論、自分の六王銃ろくおうがんを防いだのは悪魔の実の力だろうが、それも含  
めて本当の実力だ。その辺は気にしていない。

そうして、その調査の中に、王下七武海もあるという。一応、他  
にもダンスパウダーなど禁制品の取り扱い調査や各国の内情(アラ  
バスタ王国やドラム王国など)への潜入調査なども実地訓練の一環  
として行なうらしいが……。

その中で、将来的に『王下七武海と戦う可能性』をも密かに明か  
してきた。

無論、あくまで可能性、戦わずに済めば、それにこした事はない、  
とも言っていたが……。

(あの様子では、確信しているな)

面白い、と思う。

世界三大勢力の一角、王下七武海と称される政府公認の海賊達。  
弱い相手を殺すのももう飽きた。

強者と命をかけた戦いにこそ、心が躍る。

先だつてのアスラ中将との戦いも破れはしたが、楽しかった。た  
だ、そうやって楽しむ為には、手足となって調査を行う人員が必要  
不可欠だ。

ぐるり、と周囲を見回す。

どいつもこいつも未熟だ。六式全てを使いこなせずとも六式使い以上に強くなれる実例を先だって目の当たりにしたが、あれはきっちりと使いこなせていたからだ。今いる人員はいずれも振り回されている状態だ。

だが、こんな連中でも枯れ木も山の賑わい、作業を行なう手駒にはなるだろう。その上で、足手まといになるならば、その時改めてどうするか考えればいい。

そう考えると、ルツチは笑みを浮かべながら、『とりあえず、仕事だ、行くぞ』そう、カクとクマドリに声を掛けると歩き出した。

## 第49話・裏の日常（後書き）

投稿ミスっても削除出来ない

一番下が更新日時になるみたいだから、キャラクター解説を一番下に置こうとすると更新された则表示されない

……うーむ、扱いづらい

昨日、投稿ミスってそう思いました



## 第50話 - 世界最悪

政府諜報機関CPが機能不全に陥った。

この情報を受けて、蠢くものもまた、いた。

南の海に位置する、とある王国。

この王国の王族、貴族は天竜人に憧れていた。憧れだけならばまだ、いい。だが、問題はその行動まで真似た事だ。まあ、天竜人の絶対的権力に憧れた、という面もあるのである意味仕方のない事かもしれないが。

結果として、この国では王族貴族の絶対的権力と、それ以外の一般人、という区分がはつきりついていた。

しかし、悪い事に天竜人程、住む場所や利権に差はなかった。

結果どうなったかという点、天竜人がやらかすような綺麗な人妻や娘を奪うといった行動の一方で、頑張っただけで一般人が商売で利益を上げて、それで僅かでも貴族の経営している店に損害が出ようものなら、店は潰され、連行される、といった行動が常態化していた。当然、貴族らも全てが全て能天気な『自分達は選ばれた民だから、この生活も当然』と考えていた訳ではなく、怨まれている事をきちんと理解している者達もあり、自分達の住む場所を要塞のような頑丈な壁でぐるりと囲い、国の軍隊とは別に資金をたつぷりと回した近衛隊によつてガツチリ守られている。

ただ、そうした『特別』を演出すればする程、調子にのる者も多く……国の歪みはその大きさを増しつつあった。

その日までは。

その日の昼、何時もの事が起きた。

貴族街から出てきた貴族が、1人の女性に目をつけ、強引に連れ帰ったのだ。

自分はこの国の人間ではない、そう言った女性だったが、『この国では我らが法だ』と問答無用で連れ去られた。

もつとも……夜に彼女の行動を見れば、どっちが引っ掛けられたのかは疑問だったが。

その晩、お楽しみの前一杯と持ってこさせた貴族は、酒に混ぜられた眠り薬でいい気持ちで夢の中だったからだ。

「ヴァターシを抱こうなんて、そうそう簡単にはいかなっキャブルよ」

彼女（？）はそう呟くと、素早くその家……当然、貴族街の中にある宅からするりと外へ出た。

なまじ、外へガツチリとしたガードが行なわれているだけに、中は案外警備が甘い。彼女……いや、エンポリオ・イワンコフは門の入り口付近に身を潜めた。最悪の場合は、彼女自身が門を制圧する必要があるのだが……。

この少し前。

優しいな風貌の老人が、門の詰め所に差し入れを持ってきた。

「おっ、爺さん。今日も悪いな」

相貌を崩す警備兵の様子を見ると、これは昨日今日の事ではないらしい。

実際、この老人の仕事は貴族街内部の清掃などを行なっているのだが、1年ぐらい前からだろうか、差し入れをしてくれるようになっていた。井戸でよく冷やした珈琲や干したナツメヤシなどだ。最初は警戒していた警備兵だったが、老人は差し入れを置くと、そのまま自分の仕事をこなしに帰ってしまう。

無理に勧めるでもない。ためしに飲んでみたが、よく冷えて美味

い。

何しろ南の海での夜だ。暑い中、この差し入れは歓迎され、何時しか日常となっていた。

兵士の声に、老人は何時も通りのにこやかな笑みを浮かべて、顔を振ると、そのまま何時ものように帰っていった。見回りをすませた1時間程したらまた取りに来るし、何よりよく冷やされた珈琲が放って置いたらぬるくなってしまふ。皆ありがたく、喉を潤した。

……そして、1時間後。

街中の見回りを行なった老人が門脇の部屋を見やると、そこには兵士達が全員思い思いの格好で寝こけていた。

それを確認すると、老人は手に持つランタンを持つ腕をゆっくりと右に2回、左に2回回した。

しばらくすると、イワンコフ（女性ver）が駆けつけた。

「うまくいったみたいっキャブルね」

様子を確認すると、イワンコフは即座に門の門を開けにかかる。

その様子を確認して、老人は頭を下げて、一足先に行く旨を告げた。

「……気をつけるツキャブルよ？」

……何と言うべきか、イワンコフは迷った。

結局、彼女に言えたのは万感の思いを込めた、それだけだった。

老人はけれど、変わらず微笑みを浮かべたままの顔で、懐に刃を抱き、街中へと急ぎ足に戻っていった。

その背中をイワンコフは作業を並行して行いつつ、見送っていた。イワンコフは老人の事情を知っていたからだ。

……老人には若い頃、美しい妻がいた。

だが、彼女は美しかったが故に、ある日突然、貴族に連れ去られた。

その時は老人は諦めた。貴族に逆らっても、意味はないと思っていたし、貴族の下なら自分の所にいるより贅沢な生活も送れると思っていたからだ。

妻が数年後、無残な死体となって、捨てられているのを見るまでは。

夫の事を忘れられない彼女に業を煮やした貴族が彼女を惨殺した上、夫であった彼の家の前へと捨てたのだった。

それでも彼はその時耐えた。

彼の元には娘がいたからだ。

そして、娘は美しく成長し、やがて気のいい若者と愛し合い、夫婦となった。

孫も生まれ、ようやく老人が不幸を忘れかけていた時。

娘が貴族に連れ去られた。

絶句し、内心でマグマが荒れ狂った老人が、それでも貴族の元へ自暴自棄となって怒鳴り込まなかったのは、連れ去られる妻を守ろうと抵抗したが故に致命傷を負わされた娘婿が、今にも絶えそうない息の元、老人の孫を、娘の事を懸命に頼んだからだった。

そうして、老人はそれから間もなくして、脱走を図った娘が捕まり消息を絶った事を、その貴族の召使……老人に同情した人物からそつと伝えられた。

それでも老人は孫の事を思い、耐えた。

だが、その孫ももういない。

2年程前の事。孫は同じ子供達と遊んでいた時、貴族にぶつかってしまい、怒った貴族に殺された。まだ12だった。

絶望し、そして激怒した老人に彼らが……革命軍が接触してきたのは、それから間もなくだった。

以後老人は彼らの協力者となり、今日この日を迎えた。

(……せめて、本懐を遂げられる事を願うのが彼への感謝の気持ちだッキャブルね)

そう心の葛藤にケリをつけると、イワンコフは二重の門を開け放った。

その日、王国は大混乱に陥った。

恐ろしく頑丈な上に二重になり、間には鉄格子まで入っている筈の門があっさり解放され、そこから一般市民と武装兵で構成された面々が侵入したからだ。

無論、彼らは遂に王族貴族の横暴に耐えかねての決起であり、武装兵が加わっていたのは、近衛以外の一般の軍隊は一般市民からの出身のみで構成されていた為に、賛同した者が多かったのだ。

これを迎撃すべき近衛はというと、装備も訓練の度合いも、全てが上の筈だったのだが、何故か急な体調不良に武器は異常が続出、加えて最初から門を突破されての市街戦を余儀なくされるなど数だけでなく、全てにおいて不利だった事もあり次第に劣勢に追い込まれた。

そうなってくると、命がけで参加した側と、金で雇われただけの側とで矢張り差が出てくる。

市民側はここで負ければ、貴族からの報復を考えるととにかく勝つしかない。それ故の決死の思いに押され、犠牲を出しつつも遂に近衛の防衛線は破られ……王宮と貴族街に市民軍が雪崩れ込んだ。

王族も貴族も……このごに及んでも、まだ間抜けな事をほざいていたが、それらは却って市民の怒りを買っただけで、惨殺される貴族や王族が相次いだ。例えば……。

『貴様ら！貴様らの汚い足で我が庭に踏み込むとは何たる奴！首を撥ねてやるから、その剣を寄越せ！』

『我輩の安眠を邪魔するとは死刑じゃ！死刑！誰か、こやつらを死刑にせよ！』

『これだから下々の者は……さつさと貴様ら自害せよ。それで私の目を汚した罪は許してやる』

……こんな事を武器を持った市民や兵士を眼前にして、ほざいていたのだから、どうしようもない。

当然だが、剣を渡す奴も、命令を聞く奴も、自害する奴もいる訳がなく、彼らは全員殺された。剣で切られ、銃で撃たれ、殴られ、それでも喚いていたが、本気で殺されそうになっているとようやく気付いて命乞いをした時には既に遅かった。

結局、王国はこの日をもって、倒れた。

王族貴族の内、王族は滅亡し、貴族も実に8割がたがこの一夜に殺された。殺されなかった者も僅かな子供を残して、皆殺された。

……子供であっても、歪んだ教育を長らく受けてきた子供達は、ごくごく僅かな例外を除き（サボのような）、正に貴族の縮図でしかなかったが故に市民の怒りから逃れられなかった。

遂に貴族から解放され、明るい雰囲気か街を包む中、イワンコフは墓地へとやって来ていた。

眼前の墓には老人の名前が刻まれている。

「……あなたは、今頃向こうで奥さんや娘さん、娘婿やお孫さんと仲良くやれてるツキヤブルかね」

この革命において、多大な貢献を果たした老人は、妻や娘が眠る墓地の一角で致命傷を負いつつも、妻を連れ去った貴族はもう亡くなっていたが、まだ生きていた残る2人の首と共に自身もまた倒れているのが発見された。

その顔は穏やかなものであったという。

この王国を含め、複数の王国帝国にて、革命軍によるクーデターがこの後1年程の間に頻発。

CP再建の間をつかれた形となったこの革命は、CPが総力を挙げて追うも、何しろCPメンバーの大量逮捕による混乱の中に未整理のまま放置された膨大な情報の中に、必要な情報もまた埋まっているとされる状態では手の打ちようがなく、結果革命軍の後背を世界政府は仰ぎ続ける事になる。

この結果、世界政府は革命軍のリーダー、ドラゴンへの危険視を強め、「世界最悪の犯罪者」として各国政府の最重要警戒対象となっていく事となる。

## 第50話・世界最悪（後書き）

前回の話と繋がる回でした

次回次々回は再び日常編予定  
ルフィ、そしてエースのお話を予定しています



第51話・日常編5

【SIDE：ルフィ】

「ゴムゴムのお〜〜」

腕をぐるぐると回して、加速をつけて振る。

ゴムと化した肉体はそれでびよーんと伸び、相手に向かう。

「ピストル！」

インパクトの瞬間、『鉄塊』をかける。

ガアアアアン！と轟音を立てて、爺ちゃんが吹っ飛ぶ。とはいえ、これで倒せるようなら、苦労はしねえ。

案の定、吹っ飛びながら地面に両手をつけて、反転。あっさり姿勢を立て直して地面に立つ。

「わっはっは、ようやっと使いこなせるようになったよっじゃのう！」

にやりと爺ちゃんが笑う。

ゴムになったお陰で、普通のパンチは効かない筈なのに、爺ちゃんやアスラの拳は痛い。

爺ちゃん曰く『愛のある拳』は防げない、って事らしい。……なんか、アスラが呆れてたが、何でだろうな？

と、爺ちゃんがあっとうという間に接近してきて、っていうか、『刺』だ！

「ふん！」

ゴイン！と盛大な音がするが、何とか『鉄塊』が間に合った。とはいえ痛え。

けど、立ち止まってたらずぐやられちまう！

何しろ、今回は爺ちゃんとは肉がかかっているんだ！それもアスラがお土産にくれた凄え美味い肉！海王類って奴のらしいけど、アスラ曰く『近海に群が出たんで、ストレス発散』とか言ってたな。何だっただろ。

最後の一本、それは俺が食う！！

「ゴムゴムの鉄槍！」

足を揃えて、発射。さすがにこの至近距離じゃ回避しきれず、再び爺ちゃんが飛ぶ。とはいえ、爺ちゃんもガツチリガードしてたせいで、姿勢を崩さないままだ。このままじゃすぐ追撃がくる！

だから追撃をかける！

「ゴムゴムの指銃乱打！」

指銃シガンを銃乱打ガトリングの要領で乱射する。

さすがに、この攻撃は堪えたのか、爺ちゃんが下がる。

よし！これで距離が取れた！

今回、爺ちゃんは遠距離攻撃は使わない。

別にここが鍛錬場なら、爺ちゃんの事だからそこの壁でも砕いて作った瓦礫（大抵鍛錬場が半壊する）で拳骨流星群もどきを仕掛けてきたり、或いは嵐脚を使ってきたりするが、ここはアスラ家の前庭だ。ここでそんな事やったら、ハンコックに怒鳴られて、爺ちゃんは肉食えずに叩き出されちまうからやんない。

爺ちゃんが不利に思えるかもしれないけど、そこはアスラ曰く『ハンデ』、だつて言つてた。

「ギア2（セカンド）！」

足に力を込め、血流を加速する。

これで、一時的にだけど、刹を上回る速度が出せる。この技はどうしても、その性質上ちよっとだけど発動までに時間がかかるから、少しだけ距離が取りたかつたんだ。

オレも技は殴る技だから、接近しないといけない。けど、接近したら爺ちゃんの間合いに入っちまうから、一気に勝負を決めないと！

「ゴムゴムの〜〜！」

両腕を置き去りにして、踏み込む。

これで腕が戻ってくれば、バズーカが…！

「拳骨流星乱打！」

つてやべえ！？

そう思った瞬間にはカウンターで爺ちゃんの拳骨の弾幕を喰らって、吹っ飛んでた。

駄目だ、負けた……。

「肉が……」

そう呻いて、体が動かないオレはがっくりと力を抜いた。

【SIDE：アスラ】

「わっはっは！ワシの勝ちじゃな、ルフィ！」

ガープ中将が勝ち誇っている。

っていうか、大人気ないですよ、中将。あんた孫に食い物譲るぐらしいなさいな……。

山のようにあった筈の海王類の肉。それも爺ちゃんにエース、ルフィが殆ど食っちゃまった。っていうか、アリスよりたくさん食うって何だよ、どこに入ってるんだ、あんたら。

漫画で見た事はあったが、実物を見るとまた違和感が凄い、とアスラは思う。

「やっぱ、ジジイが勝ったか」

「まあ、当然だろ」

エースとサボも、やっぱり、という顔で頷いている。

まあ、ルフィもこの年で原作に比べれば相当強くなっていると思う。ゴムの体を使った戦闘術に加えて、六式が使えるようになってるんだから、当然かもしれないが。

原作とやり方は違うが、この辺はやはりきちんとした先生に教わった方がいい。

まあ、野生児ならではの強みもあるだろうが、少なくとも技は、ね。

実際、油断するとすぐ、ガープ中将はルフィやエース、サボをどっかに連れてってしまふ。というか、俺がデスクワークでなかなかルフィらの相手が出来なくなった事や、気付くのが遅れるようになった事も大きい。

何より、ガープ中将はルフィの祖父であり、父であるドラゴンがここ、マリンフォードに来れる訳がない以上、正式な保護者はガープ中将だ。彼が連れて行くととなると、俺ならともかく、他の面々じや止めづらい。

お陰で、最近はずっかり性格が原作のまんまだ……。幼い頃はかなりの真面目人間になってただけだなあ。

まあ、今の所、ルフィは未だエースやサボに勝てないでいる。で、エースやサボはまだガープ中将に勝てないでいる。多少のハンデをつけた所で、こうなる事はまあ、分かっているだろう。

「よし、それじゃ……む？」

勝利したガープ中将が肉の方を見やって訝しげな声を上げる。おや？最後に残ってた箸の肉がない。……ああ、成る程。

「って、何でエースが食っておるんじゃ!？」

「あ

殆ど無意識に食ってたか、やはりエースも食い意地が張っている。まんまと漁夫の利をかつさらわれたガープ中将だったが、お陰で今度は中将VSエースの勝負が勃発してしまった。

「ちよつとルフィ、大丈夫？」

「うーナミくいてえ……」

ルフィはと見れば、ナミに介抱されているようだ。どうにもナミからすれば、ルフィは危なっかしくて放っておけない、らしい。

今はまだ、恋愛感情にまでは至っていないようだが……さて、どうなるかな？

こんな賑やかな光景が、ある意味アスラ邸の日常でもあった。

なお、ついでながら、ルフィは麦わら帽子を被っていない。  
シャンクスとルフィはそこまで親しくならなかったから……代  
わりに俺が「MARINE」の文字の入った海軍の帽子をやっ  
てる。

……こうなると、あいつの2つ名って何になるんだろうな。

## 第51話・日常編5（後書き）

日常編のルフィ編です

前半はw

ルフィは原作程無茶な修行をしてみませんが、ある程度大きくなったのと、アスラが忙しくなった事からやっぱりガーブがちょこちょこ引っ張り出したせいで、それなりの野生児になったというか、やっぱりガーブに似た性格になっちゃいました

第52話・日常編6（前書き）

それでは日常編一旦締め  
最後はエースです



## 第52話・日常編6

海賊王と呼ばれた親父の事が嫌いだった。

なのに、俺が選ぼうとしたのは海賊の道だった。

自由な海賊に、平和に暮らしている人々は襲わない、と謳った所で、一般人から見れば、海賊は海賊に過ぎない。以前にアスラに指摘された事だが、食っていけなくなった時、どうするのだろうか？それでも平和に暮らしてる人達に迷惑をかけまいと飢え死にするのか、それとも襲うのか。

それにさえ、自分は答えを出せなかった。

母は、俺が最初に海賊になるうと思っていた事を知ったら、どう思ったのだろうか？

『お父さんに似たのね』と笑うのだろうか……。

エースはこれからの道を悩んでいた。

1度は海賊になるうとしたが、現実をああも見せ付けられては、何も言えなかった。

何より、エース自身があの子の叫びへの答えを持っていなかった。

かといって、海軍にすんなりと入るには引掛かりがある。

そういう意味では、ルフィやナミが羨ましいと思う。

ルフィは祖父に英雄と呼ばれるガープ中将を持ち、一時はルフィもまた海賊に憧れていたが、何しろ小さい頃からマリンスフォードという海軍本部で育てば、そんな幼い憧れなぞどこかに消えてしまう。何しろ、仲のいい友達の、ルフィ自身も可愛がってもらった海兵のお父さんが海賊との戦闘で亡くなって……という事だつて実際に1度ならず起きている。

そんな状況で生活していれば、自然とルフィも何時しか海賊を嫌

うようになつていった。

アスラがまだ時間に余裕があった頃、俺達と同じく海賊に襲われた町への災害救助に連れてった事があったが、そうした事が余計に海賊を嫌う思いを強めたようだった。

『赤髪』のシャンクスとの出会いで、海賊にも中にはまだマトモな相手がいるのだという事を知りはしたが、だからといって、なりたいたいなどと考えを改める事はなかった。

ある程度の年齢までは基礎固めだったが、それを過ぎた頃から技を取得し、今では六式を使いこなすようになった。

最近ではハンコック姉さんやアリスが相手してくれてるが、ハンコック姉さんとはもかく、アリスにはまだまだ勝てない……っていうか、ハンコック姉さん、何時の間にか六式使えるようになったんだ？ 悪魔の実を食った事もいい方に働いているようで、順調に実力をつけつつある。

このままいけば、本人の望み通り海兵になれるだろう。

ナミは『自分の目で見た世界中の海図を描くこと』とはつきりした夢を持っている。

その夢を叶える為には、海軍の測量部隊はある意味最適の所だ。最近では、自分で行きたい所に行けるように、と航海術も学びだしたらしいが、こちらにも才能を發揮しているらしく、何より天候を体で感じるというか予兆を逸早く感じ取れる天性の才能があるようで、最近では海軍の航海科から引き抜きがかかっているという話だ。彼女はアーロンという魚人海賊団から弾き出された存在によって、母を殺された。

そして、アスラという海軍軍人によって生まれ故郷の村は救われた。

当初こそ、何故もつと早く来てくれなかったのか、という思いを抱えていたようだが、元よりナミは聡明な子供だ。

わかつてはいた。わかつてはいたが、それでも誰かに言わずにい

られなかった。

それを理解していたからこそ、アスラは黙ってそれを受け止めた。そうして、今ではナミはルフィに次いで海軍に入る事を考えている。まあ、今の所スカウト合戦が激しいようだが、海賊に関しては嫌な思い出がある事もあって、憎んでいる、ようだ。まあ、母親殺されて、更にここ、マリントフォードに来てからはルフィと同じ思いを体験してるからな……そうやって当然だろう。

そう、2人とも進む道を決めている。

はつきりと、『自分はこうするんだ!』『こうしたいんだ!』っていう誇るものがある。

……サボ?サボは俺と同じだって言ってる笑っていた。

あいつも、1度は海賊つてもものに夢見て、それを砕かれた人間だ。だけど……あいつは貴族の生まれだ。だからどうだって訳じゃないが、少なくとも出生を知られた所で、まあ本人の希望で海軍に入るのには何も問題はない。

……けれど、俺はどうだろう?

俺は表向き、ルフィの兄であり、ガープ中将の保護下にある。正式には。まあ、実際はアスラが保護者やってる訳だが。

けれど、俺の本当の父親は……海賊王ゴールド・ロジャー。

もし、それが知られたら、海軍に入れる訳がない。いや、最悪、俺を捕らえにアスラが、ルフィが来る事になるかもしれない。

ジジイはさすがに、誰にも言っていないみたいだけど……俺が賞金稼ぎって道を考えてのも、結局逃げてるだけなんだ。

そんな事を思いながら、寝付けずにアスラの家縁側に座って裏庭をぼんやりと眺めてた。

アスラ曰く『日本庭園』とか言ってたけれど、この裏庭は表と違って、緑豊かだ。1度ジジイとサカズキ大将の喧嘩で大被害を受けたけれど、今じゃすっかり直った。

……何だか、静かにぼんやりしたい時、ここにいると何だか落ち着くんだよな。

とはいえ、時間が時間だ。

もう、深夜と違っていい時間だし、起きてる奴は誰もいない……そう思ってた。思ってたけど、横に座る奴がいた。アスラだ。

「……まだ、起きてたのかよ」

「というか、仕事が長引いて今帰った所だよ」

……。どんだけ仕事大変なんだよ、もう日が変わってるぞ。

アスラは最近、めっきり帰りが遅くなった。

ハンコック姉さんは寂しそうだけど、その分お休みの日には家族サービスしてるみたいだし、忙しい理由も分かっているからな……。

「で、どうした。何か悩み事みたいじゃないか」

「……何でもねえよ」

つい、ぶっきらぼうに言ってしまう。

アスラはエースにとっては兄のような存在だが、だからといって今考えているような事を……。

「何だ、自分が海賊王の子供だから海軍には入れないって悩んでるのかと思ったよ」

驚愕して、アスラの顔を見たけど、声は出さなかった俺偉い。

危うく寝てる皆を叩き起こす所だった。

とはいえ、我慢できたからって驚きが消える訳じゃない。

「うん？何だ、その様子だと知らないとても思っていたか？」

思っていた。

っていうか、何でアスラが知ってるんだ？一瞬ジジイが教えたのかと思っただけで、さすがにそれはないと思っただけ。幾等ジジイが迂闊でも、あれでも海軍本部中将だ、言っただけいい事と悪い事の区別ぐらいはついてる筈……多分。

「……何時から知ってた？」

「割と最初からかね」

最初から……まさか、と思っただけ俺にアスラはけれど、伸ばした尾で持ってきたお茶を淹れながら、続けた。

「ああ、言っておくが、別に監視のつもりなんてものはないからな？俺がお前達を引き取ったのは、ガープ中将のやり方が無茶苦茶だと思っただけは本当だし、それが原因なのも本当だ」

ほら、と淹れたお茶を渡してくる。

この時間になると昼は暖かくなったと言っても案外冷えるものであったかいお茶は結構美味かった。

「……それでアスラはどうするつもりなんだよ」

「別に何も……お前が海軍に入りたいなら、入ればいい。俺とガープ中将が後見役だ。お前自身も強いし、十分上を目指せるだろうよ」

「……俺、海賊王の息子だぞ？」

「ルフィは、今世界政府が世界最悪の犯罪者って呼んでる男の息子だけだな」

「へ？」

聞けば、ルフィの親父さんはドラゴンっていう名前の、革命軍のリーダーらしい。

世界でもっとも危険な男って呼ばれて、莫大な賞金がかけられているとか……いいのかよ、ジジイ……そんな息子がいるのに平然と海軍本部中将やってて。

ただまあ、その後もアスラと色々話したけれど、俺でも海軍に入っても大丈夫だって事は分かった。

まあ、そりゃあゴールド・ロジャーの息子って事は黙ってなけりゃ拙いけどな。

ただ、道が少し広がったような気がした。

……気のせいかもしれないけれど、賞金稼ぎをやるうと思つのは変わらないけれど、きっちり将来って奴をもう一度考えてみるとすつか。

第52話・日常編6（後書き）

これにて一旦日常編締め

次回からは再び本編に戻ります

第53話・世界会議（前書き）

本編再開です



## 第53話・世界会議

「だからこそ！我々は早急に革命家ドラゴンに対して、何らかの対策を取らねばならんだ！」

西の海に位置するイルシア王国タラツサ・ルーカスが世界会議で吼えていた。

……原作より切羽詰ってるっばいな。

こりゃあれか、サイファーポールCPが開店休業状態なのも影響してるのかね。

……そんな事を世界会議の一角で、アスラはぼんやりと見ながら考えていた。

世界会議。

それは世界政府に加盟する世界中の国の代表で構成される議員によつて行なわれる会議だ。

当然、その重要性は高い。だからこそ、各国とも切れ物、或いは自国の利権の代弁者をこぞつて送り込む。いや、送り込むというのは正しくない。ここで認められる事はそのまま、各国に自分を認められるという事に等しい為、むしろ最高権力者が自ら足を運ぶ。

こうなつた背景には1つの噂話がある。

ここに送られた、とある王国の大使が天竜人に気に入られ……。

『気に入つたえ！お前をお前の国の王にしてやるえ！』

と宣言し、最高権力者になりあがつた、という伝説染みた話だ。

ある意味上手い話だと思ふ。この話には本当にそんな事が起きたかどうかは関係ない。この話に必要なものは、『ありえる話』である事、それだけだ。そうすれば、まさかと思つた人間でも、万が一を恐れ、下っ端を派遣など出来まい。かくして、世界会議には最高

権力者が確実に集う、って訳だ。

従って、今、ここにいる面々がそのまま、その国の実質的な最高権力者であると見ていい。

(それにしても……)

ふと周囲を目だけを動かして見る。

原作ではドラム王国国王ワポルがバカにした訳だが、会場全体の雰囲気といえば、ワポルと同じような雰囲気がおよそ半分、タラッサー・ルーカスに賛意を示しているのがおよそ半分に、極少数の泰然としている雰囲気の中で、という所だ。

ちなみに最後の連中は例外なく、国で慕われている連中だ。

革命なんぞ起きる心配もない、或いは起きればそれは自分の責任ときつちり割り切れる連中だな。

しかし、予想以上に賛意を示している連中が多いな……これはあれか、最近革命軍による革命が頻発した事が影響しているとみるべきか……。

あ、今、ワポルがバカにした発言をしてるな。

あいつに賛同してる連中は……まあ、殆どは実感出来てないのだろう。革命ってものの恐ろしさを、自分達が民からどう思われているかを……。

「まっはっはっは。なぐにを馬鹿な事を。たかだか1人の犯罪者をそこまで恐れるとは情けない」

……はて、原作ではこういう言い方だっけ？

駄目だ、覚えてないや。まあ、状況によって発言内容なんて変わるだろうしな。

嘲笑するワポルだが、お陰で会場の雰囲気は最悪だ。確かにワポルに賛同して笑ってる奴もいるが、半数と言ったように残り半数は

ワポルの発言と態度に不快感を示している。

尚も同じ1国の国王を馬鹿にした発言を繰り返すワポルだったが、そこに冷静極まりない声が、冷や水をかける事になった。

「黙ってはどうかね？」

腕組みをし、腰を降ろしたまま。決して声を荒げた訳でも、大声を出した訳でもない。

けれど、その声は会場全体に響いた。

アラバスタ王国国王ネフェルタリ・コブラ。

彼の一言で、会場の雰囲気は一変した。さすがというべきか……。ワポルも会場の空気が変わった事を感じ取ったのだろう。コブラ国王を睨みながら、どっかと椅子に腰を下ろした。

さて、会議は白熱した。

革命によって国王が倒された、この事自体には不快感を示す王らは多かった。ドラゴンの脅威に関しては、所詮1人の犯罪者と看做し、その上でその一介の犯罪者風情に王が殺されたのが（直接ではないにせよ）腹を立てる者が多かった。

そうして、案の定こちらにもとぼっちりが回ってきた。

「海軍は何をしているのだ！」

そんな声が会場に響き、アスラに視線が集中する。

アスラがここに出席しているのは、海軍の代表者を出す際に、世界政府の外交官という立場まで持っている彼以外に誰がいる、とあつさり決められてしまったからだ。

まあ、CP長官という立場とかその辺も大きいのだが……。

とぼけた様子で、アスラは返事を返した。

「何を、とは？」

「何故、海軍は革命を起こした連中を取り締まらないのだ！」

「そうだ、そうだ、と一部の連中が騒ぎ立てるが、殆どの連中はそういった騒ぎ立てている連中を苦々しい顔で睨んでいる。確かに、海軍が本気で動けば、革命を起こした国の1つや2つ、楽に潰せる。それなのに、海軍が革命を起こした国に対して、全く何も対応を起こそうとしない事に不満を言う連中、まあ、予想はしていた。」

「海軍が動かないのには、きちんとした理由がある。それを理解しているからこそ、大部分の連中は海軍が海軍だと騒ぐ連中を睨んでいるという訳だ。」

「よろしいので？」

「何？」

「海軍が各国内部に干渉して本当によろしいのかとお聞きしている」

その言葉に、騒いでいた連中は一斉に押し黙った。

「そう、世界政府には決まりがある。それは『各国家内部へは基本不干渉』、という事だ。」

それが原則だ。

「そりゃあ誰だって、自分の国の内部に世界政府が相手だからとて好きに手を伸ばされたくはない。世界政府としても、だからってどの国も世界政府に加盟を渋るようじゃ困る、結果としてこんな基本原則が成立した訳だ。」

「ちなみに『基本』とあるのは、天竜人に手を出されたり、或いは世界政府に多大な影響が出るような事件を起こしたり、或いは重大

な犯罪者の追跡などが起きたら、世界政府が動くのは変わらないからだ。二番目の場合は、オハラへのバスターコール発動などが実例に当たるし、三番目などは原作のアラバスタ王国への麦わらの一味の問い合わせなどが実例に当たる。三番目も海軍があっさり引き下がったのは、この案件があつたからだ。

この原則があるからこそ、海軍は革命が起きた国への物理的な干渉が行なえない。

王達も下手な干渉を行なう事が出来ない。

『革命軍が関わっているとされる事態においてのみ』という例外を設けた所で同じ事だ。それは前例となり、『革命軍が動いている可能性がある』、それだけで世界政府や海軍が各国へ直接介入する口実となりうる。

結局、この後は海軍の責任を追及される事もなく、この一件は、終わった。

……そう、この一件は、だ。世界会議が一件だけで終わる訳がない。各国の王だって暇じゃない身をわざわざこの地まで足を運んでいるんだ。まだまだ案件は残っている。他もこう楽だといいいんだが……。

ちなみに、事件が起きた際の連絡性を速める為、また救援の手筈を迅速に行なう為に海軍の出張所を各国の都に置かせてもらうという案件、赤十字もどきの提案は今回も否決された。……有効性は理解してもらってるんだが、これが世界政府が干渉してくる氷山の一角になるのを恐れられているんだよな……。

会議も今日は一旦終わり……アスラは会場の外へと出た。

あれから、CP長官として責められる場面も多かった。スパンダインの野郎、本来裏方の筈なのに、あの野郎は自分の出世と権力、金の為に表に結構出て、名前と顔を売り込んでいた。

そのお陰で、彼の失脚と後任がアスラ中将だ、って事もばれていたので。

まあ、各国の内情に関しては、前述の理由でアスラが責められる事はなかったのだが……いや、各国ともCPが自国に潜り込んでいるのは知っているが、そこは黙っているのがお約束って奴だ。とはいえ、あれこれ責め立てられる中で、『1度全部吹っ飛ばしてやりたくなるな……』と思いつつ、顔は神妙に受け答えをしていた。

……嘗てのサラリーマン時代なら、殴り倒しても最悪会社を首になるだけだったのに……こっちに来て、出世はしたが、それ以上に面倒も物凄く増えたよなあ……。

何だか、前世とっておくが、その当時の上司に内心で悪口を言っていたのを少し悪かったな、と思ったアスラだった。

まあ、まだ世界会議は続くが、今日はこれで終わりだ。

周囲を見回したアスラはふと、小さな女の子を見つけた。……はて、どこかであの子見たような……そう思った時、1人の少女と一致した。

少女の傍に歩み寄ると、アスラは。

「こんにちわ、ビビ王女」

そう呼びかけた。

そう、この少女こそアラバスタ王国王女ネフェルタリ・ビビ。原作の、あの少女だった。

「ええつと、おじちゃん誰？」

おじさん、という言葉に内心ぐさつと来つつも、まあ、よく考えれば『俺も2人の子供がいるお父さんだしな』……と思い返したアスラは自身が以前に会っている事などを伝えた。

嘘ではない。

コブラ国王とは以前に面識があったが、あの親馬鹿国王が娘と延

々離れていられる訳がない。だから、もつと小さい頃にも会った事があつたし、今回もこうして連れて来ていた訳だが……何しろ、ここはクソ真面目な会議の場だ。こんな所でこんな年の子が楽しめる場所がある筈もない。

まあ、聡明な子だ。話している内に思い出してくれたらしく、逆に遊ぼうと誘われた。

……まあ、いいか。正直、腹に一物抱えた奴や、能天気な傲慢な奴らばかり相手にしていて精神的に疲れた……うちの子と遊んでやってるつもりで相手にしていると、コブラ国王がやって来た。

顔見知り故、挨拶して、折角だから食事でも一緒にどうかね、とのお誘いに、ビビ王女も一緒に食べようと手を引つ張ってくるのにコブラ国王と顔を見合わせて笑つて、了承した。お互い子供がいる者同士、先に立ってはしゃぎながら歩くビビ王女の後について歩きながら、コブラ国王と子供の事で色々と話しながら彼らは歩いていった。

……ちなみに、アスラは気付いていなかったし、原作で忘れていたエピソードだったが、ビビの姿を見かけたワポルが先程彼女の父親に恥をかかされた、とちよっかい出そうとして、アスラ中将の姿に気付き、しばらく眺めていたが、やがて舌打ちして諦めて去っていった事を彼は知らなかった。さすがに、ワポルとて海軍本部中将の前で子供を苛める度胸はなかったようだ。

気付かない所で、原作をまた一箇所変えてしまっていたアスラだった。

### 第53話・世界会議（後書き）

今回は世界会議でした

ちなみに、ビビに声を掛けたのは、知り合いの子だった事

こんな所で1人遊んでるのが気になったといった所です、アスラムも小さい娘がいますからね



第54話 - 契約（前書き）

今回は遂に、彼女が登場です

## 第54話 - 契約

世界会議より遡ること少し。

西の海より、1人の女性がグランドラインへと突入に成功した。

彼女の名はニコ・ロビン。

嘗てバスターコールで滅ぼされた考古学の聖地オハラ出身の少女だ。

オハラは、正にその性質故に滅んだ。

本・ネグリフ

失われた歴史を知る為には、歴史の本文と呼ばれる巨石を調べるしかない。だが、それを調べる事は世界政府が禁止している。彼らは嘗ての失われた時代の事を隠蔽したいと願っているからだ。

彼女もまた、本来ならば抹殺されるはずだった。

そもそも、オハラの民は全て、脱出した民さえも赤犬大将ことサカズキ中将によって脱出船ごと砲撃によって抹殺された。

ニコ・ロビンの元へも現在の青キジ大将ことクザンが迫っていた。だが、ある意味、このサカズキ中将の行動が青キジの行動を変えた。友であった元・海軍中将ハグワール・D・サウロ。彼の問いにクザンは答えられなかった。サカズキの行動を彼もまたやりすぎだ、と感じていたからだ。

サウロは海軍の軍艦をまとめて沈めた事で目立ちすぎた。彼を見逃す事は出来ない。だが、1人の少女だけならば……他の考古学者達は最後まで学者である事を選び、燃え盛る叡智の樹から一冊でも本を逃れさせるべく、命をかけて奮闘した。

だから、1人を見逃しても、気付かれぬかもしれない。

……そう思い見過ごされはしたが、結局彼女の逃亡は気付かれ、7900万ベリーの賞金がかげられた。……僅か8歳の少女に、だ。

彼女は悪事に手を染めつつも、懸命に生き延びながら、自らの願いを。

嘗ての仲間達が目指した歴史の本文ポーターリフの解読を果たそうとして……  
やがて真の歴史の本文リオ・ポーターリフがグランドラインにある事を知り、突入を狙  
っていたのだが……。

本来ならば、それにはもう少し時間をかける筈だった。  
だが……そんな折、偶然にだが、1つの情報が入ってきた。

『サイファーポール政府諜報組織CPが機能不全に陥った』

……ロビンにとって、このCPは嘗て、彼女の故郷を滅ぼす原因  
となった男が支配する組織だった。

それ故に、彼女はそこの情報は優先的に集めていたのだが……そ  
れが幸いした。

スパンダイスが地位を追われ、逆に犯罪者として息子はインペル  
ダウンに収監され、本人も逮捕を逃れ逃亡した、との話はロビンに  
とっては少し気が晴れた思いだった。

そして、CPが立て直される前の、この時期は千載一遇のチャン  
スだった。

それ故に彼女はグランドラインへの突入を決定し……成功した。

「ふう」

そうして、彼女はある島へと侵入を成功させ、潜んでいた。

ここまで来るまでに大分苦労をした。

だが、かなりの確率で、ここには間違いなく歴史の本文ポーターリフがある筈  
なのだが……。

「……問題は、どうやれば見れるか、ね」

この島の名はサンディ島。

グランドラインでも相当に大きな部類に入る島だが、その島の大

部分を砂漠が占めている。

この地を統治する王国の名はアラバスタ王国、グランドライン有数の大国だ。

そして、おそらく歴史の本文がある場所は……。

ポーンケリフ

「アラバスタ王国王都アルバーナ……」

それもおそらくはアルバーナ宮殿の中。

この国の王族は民に慕われている名君と呼ばれる王だが、さすがにお尋ね者の自分が世界政府に禁じられている物を見せて下さいと出向いた所で見せてもらえる訳がない。

さて、どうすべきかしら……。

適当にカジノで賭け事をしながら、彼女は考える。

悪魔の実ハナハナの実の能力者である彼女は好きな場所に手や目を生やす事が可能だ。逆に言えば、使い次第で相手の手札を見たりする事も用意だという事。なまじっか稼ぐ手段が限られている事もあり、こうした事ばかり上手くなってしまった。

とはいえ、今は目立たないようそこそこに儲けすぎないようにやっていた、筈だった。

「お客様」

「……私かしら？」

ボーイがやって来て、声を掛けてきた。

何かしら、特にイカサマとかした覚えもない。目をつけられるような事はしていない筈だけど……。

「はい、お客様にオーナーがお会いになりたいと」

……！ここ、レインベース最大のカジノ、レインディナーズのオナーと言え……！  
とはいえ、目をつけられたとなれば、今逃れるのは困難だろう。  
……王下七武海の一角、サー・クロコダイルが相手では部下も幾人いる事か。

「……分かりました、案内してくださるかしら」

何より、ここで暴れば、それだけで目立つ上完全に彼を敵に回す。

……ここは、会ってみるしかなさそうね。

### 【SIDE：クロコダイル】

「手前が、ニコ・ロビンか」

俺の目の前には、1人の女がいる。まあ、美人っていったいい女だが、こいつの価値はそこじゃねえ。

俺の情報にアラバスタ王国の歴史の本文ポネグリフの情報が引つ掛かったのはしばらく前の事だ。

そいつには、世界政府ですら警戒せざるをえない兵器の情報が記されているという。そいつを手に入れれば、俺は王下七武海を越え、世界政府と対等の立場になれる、所詮今の立場は奴らのおこぼれに預かってるだけだからな。

だが、問題があった。

歴史の本文ポネグリフって奴は読める奴が殆どいない。

何しろ、そいつに触れる事自体を世界政府が禁じてやがる。そんな代物を読める奴となると、普通はお尋ね者だ。表の世界からは隠れてやがる。

だが、この目の前にいる女は、その数少ない例外だ。

『オハラが悪魔』ニコ・ロビン。

世間にはこいつの過去の写真の手配書しか出回ってねえが、そこら辺は蛇の道は蛇って奴だ。まあ、度胸は据わってるみてえだな、俺を目の前にしても、動じた様子はねえ。はったりだとしても、大したもんだ。

「それで、私に何のようかしら」

ふん、声も震えてねえか、とりあえず合格だ。

「簡潔に言おう、俺に手を貸せ。代わりにお前の望むもんを見せ  
てやる」

「……………あなた……………」

「歴史の本文ポーター、それが読みてえんだろぅが」

こいつは考古学者だつて事らしい。  
オハラは、考古学の観点から歴史の本文ポーターを解読してて、その結果として世界政府にとって拙いもんを明らかにしちゃったらしいな。そう、知られりゃ全て吹き飛ばしたくなるような代物を。

「分かって言ってるのかしら？」

「愚問だな。最近、世界政府の耳と目がややこしい事になったお陰で、俺も動きやすくてな」

あれは有難かった。

世界政府って奴には体面って奴があるからな。おまけにサイファーCPが馬鹿やった相手が、よりもよって犯罪の調査を行う部署、司法その

もんだ。誰だつて、顔面殴られて、黙ってる奴はいねえよな。

結果として、こっちは動きやすくなった。とはいえ、世界政府も馬鹿じゃねえから、そう遠くない内にすぐに元通りって訳にゃいかんだろうが、問題ないところまで立て直してくるのは目に見えてる。それまでに、どれだけこっちに有利な態勢を作るか、だ。

「で、どうする」

最終的な判断を聞くとするか。

協力するなら、實際嘘を言うつもりはねえ。こいつが求めているものは俺にや興味がない代物だ。わからねえが、何か欲しいもんがある、って奴は信用出来る、互いに求めるものがあって、そいつを手に入れる為に、手を組んだ方が互いに利益がある限りはな。

まあ、断ったら、殺すまでだ。こいつは色々知っちゃならねえ事も聞いたしな。

「……断る余地も理由もなさそうね」

ふう、と溜息をつく、ニコ・ロビンは不敵な笑みを浮かべて、言った。

頭の回転の早い奴は好きだぜ。

「いいわ、貴方に協力しましょう」

「いいだろう、交渉成立だ。とりあえず、お前さんにも立場があるな、とりあえずこのカジノの支配人でもやってもらう方がいいな」

黙って頷いた。

まあ、こいつにとっても、ここは居心地がいいだろうぜ。ここには政府関係者は立ち入り禁止だ。王下七武海って立場はそこら辺は

便利でな、こっちが表向き頭下げてる限りは、その契約を破って立ち入ったりはしてこねえ、まあ少なくとも表向きは、な。

「ああ、1つ聞いておいていいかしら？」

「なんだ」

「これから私が働く事になる組織の名前を教えてくださいのだけど」

ああ、そついや言っ  
てなかつたな。

俺はニヤリと葉巻を啜えた口に笑みを浮かべると言った。

「バロックワークス  
BWだ」



## 第54話・契約（後書き）

という訳でニコ・ロビン登場

そして、CPの大混乱がここにも影響を及ぼしています

次回は、アスラ視点

少し時間を進めての話となります

ちなみにB・Wと当初は入れようとしたんですが…どうも変に変換  
で間があいてしまうようなので、敢えて・を省いてます、ご了承ください  
さい

## 第55話・舞台裏の寸劇

【SIDE：アスラ】

「……ダンスパウダー、だと？」

はて、こんなに早い時期に名前が上がってたかな？

サイファーボール

CPからの報告書を片手にアスラは首を傾げ、呟いた。

「はい、偶然ですが、相当量の生産と密輸が行なわれている模様です、表向きはアラバスタ王国発注となっている模様ですが」

その様子を疑念を示したと受け取ったのだろう、目の前に立つ男が能面のような顔で答えた。

世の中全て正道だけでは立ち行かない。この男も、そうした陰の1つだ。

サイファーボール

実はこの男も、逮捕されたCP職員サイファーボールの1人だ。罪状は『情報漏洩』及び『収賄』。早い話が、情報を洩らす事によって賄賂を受け取っていた、という事だ。見た目からはそこまで金にキラキラした男には見えないのだが、真面目だからこそ女に入れあげたらしい、が、その女は散々貢いだのに彼が逮捕が決まるや、一緒に逃げてくれという男にその場は安堵させるように抱き寄せて、微笑んでいたというのに、『まずは落ち着いて』と差し出された酒を飲んだ男が次に気づいた時は牢獄の中だった。

要は、さっさと見限られて、眠り薬を飲まされた拳句、売られた訳だ。

事情はどうあれ、間違いなく彼の行動は重罪であり、本来ならばインペルダウン行きが確定していた男だった。

……ただし、極めて優秀な男でもあった。

それ故に、敢えて罪を見逃して、表向きは『再雇用はしない』と

あつたのに、そんなものは知らないとはかりに再雇用された男の1人だった。こうした特に優秀な為に、表向きとは別に現在も職員として働いている者が実はそれなりにいたりする。

……まあ、この男の場合、強烈な女性不信に陥った上、まあ、今後は裏切らないだろう、と看做されたのもある訳だが。

「ふむ……」

アスラの脳裏で事態が回る。

既に、CPサイファーボール大量逮捕事件から1年以上が過ぎ、原作5年前に突入。

何とか、CPサイファーボールも再稼働を始め、情報もそれなりに集まるようになってきた。そんな中で入ってきた情報。正直、ダンスパウダーをCPサイファーボールの試験対象の1つに加えて、何かしら見つけた場合はポーナス（例えば原料が採れる場所の発見など、実際に作っているかどうかは別として）って具合にしておいたのが幸を奏したか……。

まあ、ダンスパウダーは製造・所持いずれも世界政府によって正式に禁止命令が出ている訳だが……。

「表向き、という事は疑念がある訳だな？」

「はい」

そう答えると、男は頷き、報告を続けた。

「ダンスパウダーの情報は相当秘匿されていたのに、いざ見つかるなり、アラバスタ王国が関与している、という情報はいともあっさりと手に入りました。無論、内部情報故に警戒が甘かったという可能性がない訳ではありませんが、それにしても上層部に関する情報が余りにも少なすぎます。無論、管理している責任者らの情報もないどころか、忽然と全員が姿を消していました」

「……つまり、わざと見つかるようにした可能性がある、という訳か」

「はい、無論、故意でもなく、ただ単に本当にアラバスタ王国が裏にいて、それに反感を持っていた者が行なった事、という可能性もゼロではありません」

少し考える。

……これはおそらく、バロックワークスの仕業だろう。だが、さすがというべきか、クロコダイルは自身の影すら、この報告書の中にも見せていない。

「……この件はしばらく私が預かる。考えてみたい事があるから、下がっていい」

「了解致しました。それでは何かありましたら、またお呼び下さい」

……さて、どうするか。

正面から？まさか、王下七武海が関わっているという証拠もないのに、乗り込んだ所で馬鹿を見るのはこちらだ。

調査？どうやって？各国内部への調査は表立っては出来ないし、王下七武海の一部が早々尻尾を見せるとも思えない。

とはいえ、見過ごすには余りに大きな事件だ。

……原作では、あの事件は表向きは海軍が解決したとして、麦わらの一味という一介の海賊が事件を解決したのだという事は伏せられた。当然だろう、王下七武海の選定は海軍が行なう。

それなのに、その選んだ相手が大規模な事件を起こし、海軍はそれに全く気付かないまま、海賊が代わりに事件を解決してくれまし

た。どの面下げて、そんな事を世間に公表しろと？

だが、コブラ王に協力を求めるのも無理だろう。知り合いだからこそ、きつちりと公私の区別はつける。あれはそれが出来る男だ。となれば……。

「原作ではW7、ガレーラカンパニー。こちらはアラバスタ王国、バロックワークス……」

そして狙うは原作は古代兵器プルトンの設計図、こちらは王下七武海の一角サー・クロコダイル。

鍵のかかった引き出しを開け、CP9への直通電伝虫を取り出す。さて、それでは始めよう、クロコダイル。戦わなくてもいい者達が戦い、死なずとも良い者達が死んだ。それを食い止められるかは、現段階ではまだ分からない。或いは、こちらが確実な証拠を掴む前に、奴が作戦を成功させるかもしれない。

だが、奴はまさか、バロックワークスBWの存在と、そのトップがサー・クロコダイルであると知っているとはまさか、思うまい。

そこがこちらのアドバンテージだ。

「……ああ、私だ。ルッチか、CP9の実働要員全員を連れ、ただちに私の所へ出頭せよ。……そうだ、仕事だ。それもとびきり危険な香りの伴う、な」

さあ、戦闘開始だ。

【SIDE：ニコ・ロビン】

カジノで支配人として仕事を始めて半年程した頃の事だった。

「土産だ、くれてやる」

ククロコダイルがぐるぐる巻きに拘束した人間を地面に転がした。  
なにやら、見るからに不機嫌だ。

「どうかしたのかしら？」

「下手を打ちやがってな」

話を聞くと、ダンスパウダーの製造施設を政府に嗅ぎ付けられたらしい。いや、嗅ぎつかせたというべきか。

ダンスパウダーの製造施設は定期的に場所を移動させている。今回摘発された場所は廃棄される事が決定されていた場所だった訳だが、どうも小細工をして、アラバスタ王国が背後にいるような書類をわざと残したらしい。

「あら、どちらにせよ、何時かそう思わせるんでしょう？それなら、今回の一件は望む展開じゃないのかしら？」

「手前が分かかって、言ってるのと分かかってなきゃ、ぶち殺してやる所なんだがな」

ああ、これは相当怒っているわね。

「そうね、早すぎるし、あからさますぎるわね。見つけさせたのが、世界政府の組織相手なのもマイナス」

「その通りだ」

計画通りならば、政府には何も流さない筈だった。

あくまで、王国内部で静かに噂話として、ダンスパウダーの話は

流れ……『偶然にも』王国の一般人が『コブラ国王』がダンスパウダーを手に行っている所を見てしまうが、運良く気付かれずに逃げ出せた……そんな流れを予定していた。

世界政府は決して馬鹿ではない。この件が蟻の一穴となる可能性もある以上、クロコダイルが不機嫌なものも最もだろう。

「それで、どうしてその男が私へのお土産になるのかしら？」

「よく、そいつの顔を見てみな」

腫れ、薄汚れているが、その顔をよく見てみると……その顔は。

「……スパンダイン!？」

さすがに驚きの声を上げる私に、クロコダイルが面白そうに笑った。

どうも、このスパンダイン、捕まりそうになって逃げ出した後、王下七武海の一角であるクロコダイルの下に、これまで彼がCP長官として集めてきた情報と引き換えに保護を求めたらしい。

とりあえず使える間は使っておくか、とクロコダイルは本拠地から離れた所で、そこそこの規模の組織の責任者として使っていたらしいが……今回の独断で堪忍袋の尾が切れた、という訳か。

「好きにしろ、お前にとっちゃ怨みがたっぷりある相手だろう？」

スパンダインとはえば、卑屈に私に笑みを浮かべている。

しかし、何故、クロコダイルは私にこの男を差し出したのだろう。……クロコダイルの性格ならば、自分できっちり片をつけたとしてもおかしくない筈だが……いや、むしろ自分の手でトドメを刺しておかないと、こんな男相手では安心出来まい。

大体、こんな所にまで持って来て、私との関係が知られたら、クロコダイルとて困るはず。

それなのに、こんな所までこんな、何かしら弱みを握ったと思ったらそれを元に脅迫するのを恥じない、口が軽くて使えない男を持つてきたのは。

そこまで考えた時点で気付いた、

私を試す為か。

つまる所、常に確認していないと安心出来ない、そういう事だろう。

恨みのある筈の相手すら、見逃すような相手じゃ信用出来ない、そういう事が……。

それなら、私の取る道は1つだけだ。

「お久し振りね、私を覚えているかしら、スパンダイン」

「だ、誰かね？私は貴方のような美しいお嬢さんに怨まれる覚えなどないんだが……そ、それより、ミスター・クロコダイルに説明してもらえないだろうか！私は決して、彼に悪影響を及ぼすような真似はしていない！こ、今回ので政府組織を翻弄してみせるとも！」

ぺらぺらと軽い口だ。

クロコダイルは、たとえば、興味なし、というのがありありと分かる。もう、クロコダイルの中では、この男は既に死んだものとして扱われているのだろう。

「そう、覚えていないのね。……オハラであんなに世話になったのに」

そう言うと、一瞬考えるような素振りを見せ、次第にスパンダインの顔が蒼くなっていく。



「ま、まさか……ニコ・ロビン？」

にっこりと微笑んであげると、スパンダインは必死に言い訳を始めた。

あれは自分の本意ではなかったのだ、政府の命令で仕方なく、あの、あんな事になるとは思っていなかった、ただ単にこれ以上研究するということ警告だけのつもりだった、だのもう内容さえとにかく、思いつく限りの言い訳を並べているとしか思えない有様だ。

……こんな男のせいで、クローバー博士達は……母は……オハラは滅んだのか。

『二輪咲き（ドスフルール）』

敢えてゆつくりと腕を生やし、スパンダインの首に巻きつける。スパンダインは必死に逃れようとするが、無駄だ。彼自身の体から生えている腕からは逃れられない。

『……クラッチ』

ゴキリ、と音をして、首の骨をへし折る。そのまま首を締め上げていると、やがて痙攣してスパンダインは動かなくなった。

冷たい亡骸となったスパンダインを見下ろしていると、パチパチと拍手する音がして、そちらに視線を向けると、クロコダイルが笑みを浮かべて、手を打っていた。

「おめでとつ、と言っておいてやろつ。これでお前は仇を討った、って訳だ。気分はどうだい？」

「そうね……」

確かに言われてみれば、その通りだ。

だが、何故か喜びとか、憎しみとかそういった強烈な感情は湧いてこなかった。

「案外、何も感じないものね」

そうかい、とクロコダイルは更に笑みを深めた。

その笑みが何故か、私を更なる深みに引きずり込む蟻地獄のように見えた、ような気がした。

## 第55話・舞台裏の寸劇（後書き）

という訳で……

原作では、世界政府にすら隠し通したBWに対して動いたアスラ

BW内部で起きた裏事情と寸劇、でした

次回はCP9の再登場です。ジャブラはサンダーソニアとどうなったのか、そこら辺も少々……

第56話・石井と田舎と（前書き）

CP9登場です

## 第56話・召集と出撃と

「CP9、出頭致しました」

「ご苦労、全員かけたまえ」

ルッチが代表として、一步前に出て敬礼するのにアスラも敬礼を返して、座るよう伝える。

既に各人の前には資料と冷水が置かれている、のだが……。

「……長官、その前に」

「……何だ」

「ジャブラの奴がどうしたかご存知でしょうか？」

ルッチが聞いてきたのも無理はない。

ジャブラの奴、先だってからやに下がって、満面の溶け崩れた笑みでこうしてアスラ達が少々不気味なものを見る目で見ていても、まるで気にしていないからだ。

「……知っている」

「よければ、お伺いしても？」

「ああ……」

そうして、アスラが語ったのは先日の事だった。

アスラもハンコックからの又聞きとなるのだが、ジャブラが挨拶

に来たのだそうだ。

そうして、サンダーソニアから『姉と妹だ』とハンコックとマリーゴールドを紹介されるや、ジャブラはハンコックの手を取って、いきなり。

『義弟と呼んでください』

そう、かましたのだった。

口説くではなく、義弟と来るとはさすがに思ってたハンコックからも驚いたらしいが、そう挨拶するなり、マリーゴールドにも『今度、義兄になりたいと思ってます、ジャブラです。よろしく』と挨拶したのだそうだ。

そうして、その後は何時も通りサンダーソニアに熱い気持ちを語っていたそうなのだ……。う

まあ、大抵の男は3人姉妹で会うと、ハンコックに目を奪われる。それなのに、口説く様子の欠片も見せず、サンダーソニアに一直線……逆に言えば、その態度に3人姉妹もジャブラの事を気に入った。

結果、お付き合いをサンダーソニアが了承したのだそうだ。

「……成る程、了解しました。それでは強制的に元に戻しましょう」

( 残酷な光景が続いております、しばらくお待ち下さい )

「……さて、話を始めようか」

惨劇が繰り広げられたように思えたが、今は全員が真剣な表情で

アスラに注視している。

その中で、アスラは先日が発見からの動きを伝えてゆく……自身  
の本来は知られていない情報すら混ぜて。

「先だって、ダンスパウダーが確認された」

「……ダンスパウダー、ですか。生産はおろか、所持も禁止され  
ている一品ですわね」

カリファが確認するように呟く。

その言葉に頷いて、アスラは続けた。

「偽装工作によって、アラバスタ王国が関わっているように見せ  
かけていたが……黒幕がいる。ハロックワークス BWと呼ばれる秘密組織だ」

ハロックワークス  
「BW、か。聞いた事のない名前じゃのう」

カクが疑問を口に出す。

ちなみに、アスラは仕事をしていれば、細かな口調はどうでもい  
いと宣言しているから、各自が今では普通の口調で話している。

この位ずぶとくなくれば、CP9は勤まらないという事か。

「そうだな、だが、トップは大物だ。まだ、未確認情報も多いが、  
Mr・0をトップにオフィサーエージェントと呼ばれるトップの1  
3組のエージェントを筆頭にビリオンズと呼ばれる幹部候補達、そ  
れに下っ端連中で構成される相当大規模な組織だ」

「ほう。それは相当ですな」

ブルーノが、そんな組織が今まで知られていなかったとは、と疑

問の籠った声を発する。

その言葉にも頷きを返すと、アスラは核心に触れる。

「その原因にはトップの立場も影響している。奴には世界政府も下手に手を出す訳にはいかないからな……王下七武海には」

「……………!」「……………」

さすがに全員の雰囲気が変わる。

「アラバスタ王国の王下七武海とくりゃあ」

「チャパパパ……サー・クロコダイルだチャパ」

クマドリとフクロウもまた、口では茶化しているような口調だが、その表情は真剣そのものだ。

「それで、義兄者、奴の狙いは予想出来ているんですか？」

かしこまった口調で言うジャブラに、『誰が義兄だ』と思わず突っ込みそうになった者は1人や2人ではなかったが、黙っていた。まあ、最大の理由は義兄呼ばわりされた、アスラが平然としていたからだだったが……。

ちなみにアスラ自身はというと、『最終的にはサンダーソニア次第。彼女が選ぶならそれもまた仕方なし』と判断している。

「そうだな……現状、全ての情報を総合して最有力なものは……  
昨今賑やかな革命軍の真似事か」

その最後の一言で、全員がクロコダイルの狙いを察した。



誰も、クロコダイルが革命軍の理想に共感して、などとは思ったりしない。そんな殊勝な人間だと誰も思わない。となれば、革命の一部……王国を倒し、後は……自身が王になるつもりかと察したのだ。

「無論、これは現段階からの推測であり、ここから別の情報が入ってくるに従い、状況が変わる可能性はある」

全員が黙って頷く。

それはこうした事件ではよくある事だからだ。

「従つてまずは情報集めだ……ルッチ、カリファ、カク、お前達3名はBWへの潜入を凶れ。裏でそれと見込んだ相手や、或いは賞金稼ぎにも声を掛けているようだから、その辺が楽だろう」

3人が頷くのを確認する。

「ブルーノ、お前は拠点となる場所をアラバスタ王国に作れ。酒場でも何でもいいが、気取られるなよ」

ブルーノも黙って頷いた。

「ジャブラ、お前は連絡役だ。動きを悟られた時は一番口封じに狙われる可能性の高い所だ……へまをするな」

「あいよ、義兄貴」

もう、ジャブラの台詞には誰も突っ込まなかった。

「クマドリ、フクロウはダンスパウダーから洗え。もし、連中の

集積場所が分かり、王国が関わっているという情報がそこにあった時は……分かつているな？」

「殺すのではなく、情報之裏づけとくらアな」

「チャパパパ、後は後片付けチャパ」

アラバスタ王国が行なっている、クロコダイルが関わっているにせよ、そう見せかける工作が行なわれるであろう事は容易に想像がつくだけに、その裏づけが重要だった。

「分かっていると思うが、王下七武海への干渉に各王国内部の潜入捜査……共に禁止事項だ、分かっているだろうが」

「……………我々が捕縛もしくは殺されても、政府は何ら関与しない……………」

1つ頷くと、全員に出撃命令をアスラは下した。

……全員がいなくなった後で、改めてアスラは椅子に深く腰掛け、今回の件を振り返っていた。

……今回の一件は大部分がアスラの独断だ。

原作知識に基づき、現時点ではダンスパウダーとアラバスタ王国、その2つのキーワードのみでありながら、王下七武海への干渉を決めた。もし、失敗すれば何らかの処罰もありうるだろう。

だが。

この一件はだからといって、放置した場合の影響が大きすぎる。処罰の可能性を考えに入れても、動く価値は、ある。

(……………全く、俺の動き次第で最悪万単位の人間の命に関わってくるとか……………)

昔のサラリーマン時代が懐かしい。思えば随分遠くに来たものだ、とふとアスラは苦笑しつつ思った。

## 第56話・召集と出撃と（後書き）

今回、アスラも結構危ない橋渡ってます

王下七武海に干渉、けれど、しないと起きうる悲劇や責任も考えないといけません

実際、この任務

アスラの立場だと、放置しても責任問題がおきますし、関与してもばれたら、やっぱり責任問題起きるんですね

ちなみに何故か、次の話を考えてたら、リリカルなのは新しいストーリーが頭に浮かんできた、何故だろう

**第57話・下準備（前書き）**

新たに後書きにてアンケート

期限は土曜のお話アップまでとさせていただきます

## 第57話 - 下準備

潜入調査を行う時、重要となるのは拠点だ。

無論、各自の行動も大事だが、彼らとて、必要な物資をどこでも好きなだけ調達出来る訳ではない。

情報をまとめ、一時物資を貯蔵し、必要に応じて或いは物を或いは金を提供し、いざとなれば隠れ家ともなる。それがCP9ブルーノが設けようとしている拠点だった。

それだけ重要な場所であり、必要に応じて使う場所だから、他の面々も協力している。

まず、場所だが、これはすんなり決まった。

アラバスタ王国首都アルバーナの一角、酒場などで賑やかな場所を僅かに避け、けれど不自然ではない程度の一角。

当初はレインベースも考慮されたが、現状与えられた話が本当ならば、レインベースは黒幕であるクロコダイルの本拠地だ。さすがにリスクの方が高すぎる。

何しろ、余りに人で混むと、困る。けれど、余りに人が来なければ、却って目立つし、何故潰れないのかと疑念を持たれでもしたら、余計に目立つ。

ほどほど、がベストなのだ。

こうして、確保された場所は既に建てられた建物を選ぶ。新品の建物など目立つ事この上ない。

ただし、新たに店を開く為の改装と称して、作業員を入れる。無論、この作業員もCP所属の工作班だ、文字通りの意味での建設などに携わる専門人員だ。アスラ中将の改革はこうした面にも影響を及ぼしており、CP9の活動も以前は信頼出来る作業員を雇っていたのに、最近はこれだ。

この改装で酒場としての体裁を整えると共に、窓も扉もない部屋を2、3設けておく。

これがブルーノが拠点管理に回された理由の1つであり、彼のドアドアの実の力でなければ、強引に壁なりを突き破るしか内部に入る手段がない隠し部屋だ。こうした部屋は或いは物資貯蔵に、或いはほとぼりを冷ます為の隠れ家として使用される。

さて、こうして店が一通り仕上がると、後は店名を決めねばならないが、こういうのは適当で良いので、『ブルーノズ・バー』というそのまんまな名前を上げておく。

こうした改装にはどうしても多少の日数がかかったが、これから場合によっては年単位で使用する拠点だ。

手間を惜しむべきではない。

そうして、新装開店の当日。

近所に軽く挨拶兼ねて招待をしておいた為に、多少の人が集まった。

彼らの評価は『悪くないが、これという売りがない』『すぐ潰れるって事はないと思うが、流行らせたいならもう少し工夫を』という所だった。悪くない評価だった、CP9の拠点としては。

こうした『招待された人々』に混じって、CP9の面々も店内に入り、酒が大量に入り招待客が前後不覚になる中、1人また1人と隠れ部屋へと移動する。

そして、全ての客が去り、店を片付け、閉めた後で、ブルーノもまた隠し部屋へと移動した。

「すまん、少々遅くなった」

「構わん、では作戦会議を始めよう」

ルッチがCP9の現隊長みたいな事をしているが、別に彼自身は

CP9長官を務める気は全くない。興味が湧かない。

もし、彼はこの面子の中の誰かがCP9の長官として新たに任じられたなら、普通にそれに従うだろう。そんな彼が纏め役をやっているのは純粹に、この中で一番強いからに他ならない。過酷な任務において、一番強い、一番あてに出来るというのはそれだけで敬意を払われる存在だからだ……性格に問題があるにせよ、仲間を牙を剥く程馬鹿でもないし。

以前は、力なければ仲間になる予定の人員でさえ殺しかねなかったが、今のCPの状況もあり、そうした行動も鳴りを潜めている。

ジャブラが少し前まで煩かったのだが、彼女が出来てから、静かになっている事もあり、スムーズに事は進んでいる。

「とりあえず、BWについてだが、ざっと調べてみても相当隠蔽された組織だという事は分かった」

バロックワークス

「ああ、アスラ長官からの資料によれば……」

トップにMr.0ことサー・クロコダイルを抱き、以下13組のオフィサー・エージェントを中心とする秘密組織。

この内、特に中核と言えるのが、5以上の上位オフィサー・エージェントとMr.13アンラッキーズと呼ばれる動物によって構成される連絡役も兼ねる処刑部隊。

特に、Mr.5以上のオフィサー・エージェントは悪魔の実の能力者である可能性が高い、と来ている。

「だが、逆に言えば、6から下は結構潜り込みやすいという事じやの」

そうカクがめた。

しばらく、全員が考えている。



「……俺とカクとカリファで潜り込む訳だが、資料によるとオフィサー・エージェントは男女1組を基本とするとある。出来れば、どこか1つに潜り込みたい所だな」

「そうね、ビリオンズとか言われる幹部候補だとある程度集団で動くのが基本のようだし、単独行動もしやすい事を考えるとやはりある程度上にはいつておいた方がいいわね……」

「まあ、とりあえず裏からあたってみよう。ビリオンズとかいう連中がどの程度かは知らんが、まあ、わしらなら普通にやるとれば大丈夫だと長官は言っておったからの」

とりあえず、潜入組はオフィサー・エージェントを直指す事に決まった。

まずはアルバーナの裏を、それで駄目なようならレインベースへ潜り込んでみる予定だ。

「ブルーノとジャブラは当面はここを拠点に情報収集だな……」

こちらは現状そんなに派手に動く必要のない部署だ。

まずは、噂話を地道に収集していく事になる。

おそらく、推察どおりならば、既にダンスパウダーは使用され始めている筈。そうなれば、おそらく王家に対する不信感を煽るような噂が既に流れ出しているはずだ。

それらを探り、必要なら拷問にかけてでも知っている限りの情報を引き出す。

無論、一人一人の持つ情報は大したものではないだろうが、積み重ねれば、より大きな情報が得られるものだ。

まあ、ここら辺は地道で、根気のいる作業だが、どうせやるのは

本部の専門のスタッフであり、自分達ではないから、その点は気楽なものだ。もつとも、いざ事態が動き出せば、ジャブラは一際目立つ行動を取る事になるから、危険もぐつと増すのだが。

なにしろ、目立たないように潜入している3人や、酒場で拠点を  
バロックワークス  
守るブルーノに対して、外部から積極的にB Wへの接触を図る存在に見えるようになるはずだからだ。

もつとも、ジャブラ自身は冷静に、しかし燃えまくっている。理由は実は誰もが知っている。

『義妹をいきなり泣かせるような真似はするなよ』

アスラが最後にジャブラに伝えた一言が彼を燃え上がらせていた。だが、同時に氷の冷静さを保たねば、この仕事では容易に命を落とす。だが、生き残る意義を見出せた以上、ジャブラは大丈夫だろうと周囲の人間も見ていたし、おそらくはアスラがああいう発言をしたのも、確かに本音もあるだろうが、こっちの意味合いもあるの  
だろうと判断していた。

「クマドリとフクロウはダンスパウダーの追跡だな……」

目立つという意味では、こちらもジャブラに負けていないが、追う物が違う。

ダンスパウダーという物品自体が世界政府が製造も所持も禁止している品である以上、確認されたならば、それを世界政府が追うのはむしろ当然の話だ。

一応、2人にはC P 2所属という表向きの裏の顔が用意してある。当たり前だが、長官を務めるアスラが正式に用意した、本物な偽の身分証明な訳だが。

それに、ダンスパウダー自体は、あくまで不信感を煽る為の小道具であり、いざとなれば、ククロコダイルは切り捨てるであろう事も

推測されていた。

それなのに、2人にそれを追わせるのは、世界政府が彼らの組織ではなく、別の方向を追っているのだとBWバックワークスに思わせる為であり、担当の2人以外は気付いている事だが……。

『こいつら目立つからな……』

いずれも、色んな意味で目立つ2人だ。潜入工作よりは暗殺などで使われる方が多いのも、その為だったりする。

逆に言えば、この2人が当人達なりに『普通に』動けば、他の動きを隠す煙幕となるはずだった。

「……他に質問はないか？ よろしい、では各自全力を尽くせ」

そう告げると、時間をずらし……たりはしない。ここに入ってしまったら、問題ない。ブルーノが生み出した『空気開扉エア・トア』の力でもって、大気を移動し、外の目立たない場所へと出る。

その後は全員が互いを、いや、クマドリとフクロウは共に行動する故に、一緒に動いたが、他は最早見向きもしない。

ここから先は、互いが互いを知らない、初対面の縁のない間柄として動く。

そう。

例え、彼らの内の誰かが今正に殺されようとしていたとしても、見知らぬ人間として動く。間違っても、仲間の為に飛び出すなどという事はしない。

それが出来なければCP9の一員とはなれないし、そうした状況に陥らない為に力が必要だからこそ六式を完全に修得しなければ認められない。世界政府諜報組織CP、その中でも一際濃い闇がこの日から動き出した。

## 第57話・下準備（後書き）

さて、下準備といいますが、CP9が動き出す準備です  
諜報は地味で、準備が念入りに必要です

さて、アンケートといいますが、実はカクとカリファにあります  
原作では悪魔の実を途中で食った2人な訳ですが、実はうちの作品  
でもどこかで食べさせようと考えています

獣人系と超人系なのも同じなのですが……

原作と同じ実でいいんじゃないか、と思う方は1を

折角だから、オリジナルの悪魔の実で、と思う方は2を  
それぞれ感想の最後にいれて下さい

ご意見お待ちしております

## 第58話・BWの事情（前書き）

えー…

本日は体調不良の為、感想への返信は省略させていただきます……  
話も短めかも…うぐ、頭が痛い

## 第58話 - BWの事情

「ふん……」

バサリ、と書類をクロコダイルは机の上に置いた。

現状、戦力の補充は上手く行っている。

元々、BWは、クロコダイルが王下七武海就任以前の、彼自身の  
バロックワークス  
海賊団がその原形にある。だからこそ、識別マークとしての『翼とレイピアを添えたドロクマーク』というクロコダイルの海賊時代の旗を元にしたマークが識別マークとなっている訳だ。

クロコダイルの以前の懸賞金額は8100万ベリー。

これは同じ王下七武海の中でも見ても、七武海最高額のドフラミンゴの3億4000万ベリーやゲッコー・モリアの3億2000万ベリーなどと比較すると明らかに低い。

……ただし、クロコダイルからすれば、懸賞金の額などに興味はない。

懸賞金が高いという事は、より危険な存在と認識されたという事であり、それは余計なリスクを抱え込むという事と同義だ。それに、そもそも誰がやったかなどと目立たずとも、必要な目的を果たす事は十分可能だ。

こつした意識はクロコダイルのある種特殊な海賊とした。

通常の海賊は、事件を起こした際、むしろ自分の行動だと顕示する。懸賞金の額は自身を大物とする最短距離として、中には懸賞金の額を偽装する者すらいるぐらいだ。

これに対して、クロコダイルは自らの行動を隠蔽した。

密かに陰謀を巡らし、狙った街や財宝を奪う。

襲った際も、自身が行なったという痕跡を目撃者含めて消す。

効率的に、より安全に。

その結果として、行なつた犯罪による本来の度合いに比較すれば、懸賞金額は半分以下に抑えられている。

無論、本来ならば2億に迫る額の懸賞金がかけられる程の犯罪を犯しておいて、全く彼の仕業だと分からない程世界政府は馬鹿ではないが、生憎証拠がない。

事実、クロコダイルは敢えて、高名な他の海賊の行動を模した事件も起こしており、余計に彼の犯罪だと断定しづらい状況だったが、それだけに危険視が強まり、クロコダイルの王下七武海への推薦が行なわれ、彼もまたこれを受けた。

クロコダイルには不満がある。

俺と王族貴族共、その行動に何の違いがある、という事だ。いや、むしろ連中の方が性質が悪い。

自分達海賊は、自分達の力でもって、罪と自覚して犯罪を犯す。連中は、権力でもって、罪を罪と思わず、自分達の当然の権利と勝手に定めて犯罪を犯す。

その違いは、といえば、所詮海賊と見られているか、それとも世界政府に認められた王族貴族であるか、それだけだ。

だからといって、力で王国を築いたとて、世界政府に認められる可能性は低い。それは、以前に同じような事があった際、500人からの人質がありながら、それごと世界政府が海賊を葬つたという一例で十分だ。

ならば、どうするか。

自身を海賊ではない、権力者の側に置く為には、そう思ってきた。そうして、最終的に選んだのが王国の乗っ取り。

王下七武海の名を生かして、どこぞの王国の王女なりとの婚姻という策も考えたが、どうせそこに愛情なぞというものはない。それに、その場合義父となるであろう王や、周囲の貴族連中のうつつとしさを考えると、それが一生続くと考えると、どちらが主となるのか分からない。

そこでクロコダイルが選んだ方法が、民衆に王族貴族を倒させ、民衆によって英雄である自分を新たな指導者として擁立させる策。

これなら、世界政府も自分が新たな王になる事を受け入れざるをえまい。下手に断つて、革命軍の勢力下に入つては元も子もないからだが、民衆にしても革命と看做されて、世界政府に敵視されるよりは良いはずだ。

だが、その為には世界政府が革命軍の心情的味方になつては困るような王国である必要がある。地方の消しても特に問題のない国では困る……それに、世界政府が敵となつても、もし、自分の仕業とばれても手を出すのを躊躇うような一手を握つておく必要がある……。

それら全てを満たす国として、最終的に選んだのが、ここアラバスタ王国だった。

改めて、現在の勢力を考える。

予定を早めて、現時点から動きを開始したのには無無論理由がある。サイファーボールCPが機能不全に陥つた。その情報をクロコダイルは逸早く把握していた。正確には、自身の周囲に司直の手が伸びてきた事を悟つたスパンディングが、自分に助けを求めてきた、というべきか。

それ自体は正解だと思う。

世界政府関連組織は論外、各国政府もまた世界政府に逆らつて奴を匿つてくれる程ではあるまい。海賊はこれまで追つてきた相手だ、下手をすれば自分を売つて、世界政府につなぎをつける者さえいるだろう。四皇クラスなら別だが、彼らが自分をわざわざ受け入れてくれるとは思えない。

王下七武海にした所で、ジンベエは仁義のある男だから一旦受けられれば、守ってくれるだろうが、スパンディングなどという小悪党をそもそも受け入れてくれるかは怪しい。

その他取捨選択の末、スパンディングが選んだのはドフラミンゴとクロコダイル。そうして、同じ（格が違うとはいえ）陰謀家として



の観点からクロコダイルに逮捕状の出るおおよそ一月ほど前から接触してきた。

結果、その時点からCPの活動には支障が出ていた。当然だろう、クロコダイルが後の保護を引き換えに、自分の活動に支障がないよう、CP内部に強制捜査の噂を撒くよう支持していたのだから。

「……奴自身は価値が低かったがな」

色々な情報をもたらした、とはいえ、スパンダインは自身の身を守る最後の種として、CP内部の重要情報はなかなか明かさなかった。

同じ陰謀家として、役に立たなくなったと思われたら殺されると悟っていたのだろう。結局、最後は情報以上に、独自判断で勝手な行動に出た事が問題視されて、処分された訳だが。

こうした秘密組織で、独断行動は厳禁だからだ。とはいえ。

「……まあ、コマは大体揃った」

フロンティア・エージェント。

自分の計画の核となって動く、最強の手駒達。ニコ・ロビンなど目をつけていたが、これまで手が出す余裕がなかった者も含めて一揃い揃った。ある意味、これが揃ったからこそ、計画を前倒しする気になったと言える。

特に重要なのは、以下の3名だ。

組織のナンバー2においたミス・オールサンデーことニコ・ロビン。

オフィサー・エージェント最強、西の海の「殺し屋ダズ」ことM

r・i・

それにマネマネの実の能力者であるMr・2。

無論、彼ら3人だけがればいいという訳ではない。クロコダイ  
ルはそれ以外の、雑魚とも思えるような連中の使い勝手や、そ  
う連中の必要性も知っている。

だが、やはり自分の計画の中で重要な立場を占めているとな  
ると、この3人が筆頭上がるのも事実だ。

「問題は何時気付かれるか、だな……」

クロコダイルは何時までも世界政府にばれない、とは思って  
いない。

ただ、最終段階まで気付かれなければ、その時点で自分の勝  
ちだと理解もしている。正式に世界政府に救援を求める権限  
を持つ王族がいなくなれば、その時点で世界政府に堂々とアラ  
バスタ王国に侵攻する事は出来なくなるからだ。

「CP9あたりの顔が分からなかったのも痛い」

CP9の情報はCPの最重要機密だ。サイファーボールもし、世界政府に捕ま  
ったとしてもスパンダインは処刑まではいかないだろうが、ば  
らした事がばれば、間違いなく処刑の階段を昇る事になる。

それゆえに、最後までそうした『話せば、自分が殺される』  
ような事だけは聞き出せなかった。

（どうせ死ぬなら、全部話して死ねばいいものをな）

そう思うが、あの男からすれば、あれでも限界だったのだら  
う。

「だが……」

今更止まる事など出来はしない。

それに、世界政府は未だ気付いていない筈だ。気付く前にどれだけこちらの段階を進める事が出来るか……。

そこが勝負の鍵となるだろう。

「とりあえずは戦力の充実だ。今のままじゃフロンティア・エージェントどもはまだまだ使える奴が少ないから……」

最重要の自身の手足となって動くオフィサー・エージェントの充実を急いだ分、他に皺寄せがいった。

目晦ましの部分も担う賞金稼ぎ組が弱い。

まあ、こちら辺は兵隊でもあるし、これからの充実を図っていくしかないだろう……。

そう考えると、クロコダイルは再び仕事へと戻っていった。

## 第58話・BWの事情（後書き）

アンケートは現在も募集中

カクは原作のままでもいいけど、カリファは、というのもOKです  
よろしくお願いします

## 第59話・任務遂行と遭遇

「案外あっさり見つかったのう？よよいっ」

「チャパパパ、長官の言った事がまた1つ信憑性を帯びたチャパ」

ダンスパウダー搭載船。

首都アルバーナに停泊する船の1つが、ダンスパウダーを使用している船である事は容易に突き止められた。

元より、疑念を持った市民が動いて、偶然ダンスパウダーを発見するように情報が流されている。逆に言えば、わざと知られるようにしている訳で、専門の捜査官がそのつもりで動けば、場所を突き止めるのは容易かった。

本来、嚴重に秘匿されてしかるべき情報がこうもあっさり手に入る事自体が、情報操作の存在をサイファーボールCPの情報分析官は見出していた。

サイファーボール

CPはこれまでと比べて、再建の過程で大幅に体制が変わった。

これまではCP1～9に分けられているだけで、内部でその支部ごとに分業体制が敷かれていた訳だが、これをまずCP9が裏専門部隊である事は変わりないし、唯一問題がなかった部隊なので、こはそのままだが、CP1～8を情報分析、情報収集、情報工作、事務その他一般（調理・会計部門なども含む）、工作支援（拠点設置や各種調達）、教育・育成（スカウト含む）、内部査察、戦闘の8つに分け、これを必要数に応じて、各拠点に配置するという体制を取った。

例えば、教育・育成ならば本部に置き、一括して行い、工作支援も一定数を置くと共に必要に応じて増派されるという具合だ。

これらを統括する為に、新たにCPOを設け、いわばここが長官直轄の総司令部となる。

これによつて、これまでCP1で手に入れた重要情報が他のCPに伝わっていない、という事態も起きていたのだが、それらを回避すると共に、各部署が自分の担当範囲で好きに行なっていた情報工事も本部からの支持で世界全体の情勢を見て行なわれるようになった。

これによつて、これまでCP1〜8の数字が割り振られていた世界の8つの拠点は、東の海支部、西の海支部、北の海支部、南の海支部、グランドライン第1〜第4支部という具合に呼称も変更された。

……まあ、お陰で長官たるアスラの責任が更に重くなつて、やらないといけない改革だったとはいえ、アスラは重い溜息をついたりしているのだが。

まあ、とはいえ、そこはお役所仕事。

既に長官のアスラが承認を与え、五老星からの承認も得ているとはいえ、今年の改定には間に合わなかった為に、正式な変更は来年からで、現段階では内部で仮証明発行で代用している状態で、外からは旧来以前の状態だ。

だからこそ、今回クマドリらに渡された身分証明が、アラバスタ王国を含む領域を担当していたCP2のものであったりする訳だが……。

今回の改訂で、CP4（事務系）が1つにまとめられたのは、とにかく書類の提出は食堂以外のCP4の窓口に出しておけばいい、という態勢をアスラが作りたかつたからであり、『たらい回しは許さん』と元の世界のお役所仕事の最たる部分を避けたかつた為だったり、或いはCP9への配属を希望する場合は、まずCP8で実戦経験を積むと同時に六式を修得し、その上でCP6（教育部門）で3ヶ月〜半年の研修を受け、その上でCP2（情報収集）とCP3（情報工作）両部門で各半年〜1年の実地研修を積む事と定められ

た。

最大で期間に倍近い差があるのは、やはり天才というものはいるから、なのだが……もつとも、天才と思って配属してCP9から苦情が発生するような事態になればボーナス査定にも関わってくるので、まず滅多に早期卒業はないだろうとアスラは判断してたりする。なお、原作組はワンゼは悩んだ末、CP4（調理部門）へ、ジェリー、ネロはCP8へ配属されている。

ちなみに、監獄に収監された元CPの面々の素行は逐一監視されており、出所後の行動如何で再雇用される態勢も準備されている。甘いと思う者もいるだろうが、そうでもない。これはあくまで、『仕事がないからと海賊なりに転向されるよりはマシ』という判断から決定された事であり、反省の余地なし、と看做された者で、危険人物と看做された場合は闇から闇へと葬る準備すらされている。

さて、話を戻そう。

今回、発見された当初は、CP8（戦闘部隊）によって襲撃をかけるという案も検討された。

だが、その場合当然だが、アラバスタ王国に了承を得てから、という事になる。逆に言えば、今の時点で『世界政府はアラバスタ王国に内偵かけてましたよ』と堂々と宣言する事になる。それは今の時点では拙い。クロコダイルとの戦闘はまだまだ、これからだからだ。

最終的なアスラの決断は『消せ、世界政府が関与した証拠を気取られる事ないよう跡形もなく』だ。

容赦ないように思えるが、アスラの基本的な正義の源は『より多数の、より平和な世界をもたらす正義』だ。その方がより多くの人間が平和に過ごせると看做せば、嘗て東の海でシャンクスとの戦闘を回避したように、海賊を見逃しもする。

その一方で、こちらの世界に来て海軍に入って早々にサカズキ中

将こと現赤犬大将に預けられたからだろう。容赦のない部分もまた本人が意識していない内にあつたりする。

結局、こうした判断の結果として、最終的に『極少数による殲滅』が決定された。

ゆえに、彼らがここにいる。

「それじゃ行くチャパ」

「りょうくかいくだあゝあ」

双方余計な会話はそれ以上必要ない。

こうした裏仕事こそCP9の本分。クマドリ・フクロウ共に静かに動き出した。

アラバスタ王国にダンスパウダーの密輸を行なうのは、オフィサー・エージェントの部下となるビリオンズの1人、Mr.メロウと呼ばれる男が責任者だ。

マスクメロンのような帽子を被り、『半熟』と書かれたシャツを着ている彼は、だがその日、大いなる災厄に見舞われていた。

「一体どこのどいつだ、襲撃かましてきたのは!？」

「……分かりません!」「」

少数なのは間違いない。

だが、その少数によって、彼の部下は次々と消されていく。そう、消されていく、だ。倒されるのではない、殺されている。

この世界に入った時から、ある程度の覚悟はしていた。

組織での昇進狙いとはいえ、こうした発覚すれば怨まれる仕事を



していれば、とどこかで覚悟はしていた。

だが、それはこんな暗殺のようなやり方ではない。彼が想像していたのは、計画通りに物事が推移し、押し寄せる市民に詰め寄られる状況だった。その際に国王が黒幕だと思わせる事が彼の任務であり、逆上した市民にリンチに合う危険はあったものの、十分生還を狙えると考えていた。

だが、今回の襲撃者は自分達に姿を見せようとしなない。

まず、見張りが消されたが、これとて争ったような音さえしなかった。これは見張りが相互に気付く余裕すらなく、瞬殺された事を意味している。声をあげる余裕すらなく、悲鳴すら上げさせる事なく、一撃で命を狩る。これらは明らかに相手もまた、プロである事を意味している。

本来ならば、さっさと逃げたい。

だが、逃げてどうなるのか。

何ら任務を果たせないままに逃亡した所でやって来るのは、Mr. 13 アンラッキーズによる爆弾の配達だろう。せめて、相手が何者なのかぐらいは把握してからでないかと逃げるに逃げれない。それはおそらく、他の者も同じだろう。

だが……。

このままでは……。

「くそ、どうすりゃいいんだ……」

つい出るばやき、だが、それに答えが返ってくるとは思っていなかった。

だが。

「チャパパパ、大人しく死んでおけばいいチャパ」

「……！？」

いきなり聞こえた声に、慌てて振り向くと、そこには大柄で口にチャックのようなものがついている男がいた。

その足元には先程まで語っていた部下達……だったものが、転がっている。

「……お、おい、そいつら……は」

「ああ？ああ、こいつらはもう死んでるチャパ。お前らは皆殺し決定してるチャパ」

倒れる音すらしなかった。

フクロウはこう見えて、『音無し』と呼ばれる程の「剃」の達人だ。こつした無音暗殺術こそがフクロウの持ち味であり、今も瞬時に間合いを詰めた上で、背後から眉間と喉に親指で「指銃」を撃ち込み、声を上げる事さえ許さずにその場にいた3人全員を殺したのだった。

「い、一体手前らは何者なんだ……っ！」

答えが返ってくるとは思えなかったが、それでもMr・メロウはそう問わずにいられなかった。

「チャパパパ、それは」

だが、あっさりとい癖というべきか、フクロウがばらしかけた瞬間。

(ゴン)

「何でもかんでもペラペラ喋るんじゃないよよいつ」

新たにクマドリが姿を現し、手にしたキューでフクロウの頭部を一撃して黙らせた。

最も、常人ならばそれだけで頭が陥没しそうな一撃を喰らっても、フクロウ自身は「痛いチャパ」と、しかし平然とした様子で頭をさすっっているだけだ。

しかし、実際もし、情報をばらしたが最後、処分されるのは決定済みだ。

そのあたりの処罰規定もきっちり厳しく設定されており、これまでに以上にフクロウの口の軽さは文字通りの意味で当人にとっての命取りとなりかねないのだった。

というか、ばらしていい事と悪い事がはっきり区分されており、そういう意味ではフクロウの口の軽さが怖いクマドリだった。

「そうだったチャパ。でも、俺らの所属ぐらいは言っても大丈夫チャパ」

「まあ〜のう。我らはC P 2、冥土の土産によく覚えておく、よよいつ」

そうクマドリが答えた次の瞬間、フクロウの姿が音も無く消え。

ケリ・ポアント  
「蹴爪先！」

「チャパ!？」

迎撃された。

さすがにクマドリも驚く。が、同時にそちらを見て、2人して思

わず呟いた。

「んが〜はっはっは〜よく突き止めたわねい、と言いたいけれど、あんた達はお邪魔虫よ〜う！」

「…………オカマじゃの〜う」

「オカマチャパ」

そこにいたのは…………両肩から白鳥の首が伸びた服、マントをまとい、服もまた何とも言い難い。

顔立ちはとにかく濃く、化粧までしている。笑いながら、くるくと舞うその姿は何とも言い難い光景だった。

「<sup>ミスター</sup>Mr…………！」

2、と言いかけて、かろうじて口を閉じるMr・メロウだった。さすがに、そこまで言ったら、口封じ確定だ。

「お前誰チャパ」

「あちしは用心棒よ〜う！さあ、ここはあちしに任せて、とつととあんた達は脱出しなさい！」

くるりと舞うのを止めて、びしりと決めるその姿に隙はない。

その言葉に察した生き残り達もまた、『先生！それじゃ頼みます！』と用心棒をお願いするような事を口にしつつ、その場から走り去ってゆく。

本来ならば、Mr・2ボン・クレーはここでコブラ王が黒幕であると思わせる為に待機していた。

それが潰れた以上は、これが機を見るに敏な奴ならば、例えばMr・1や3ならば、とっとと見捨てて脱出していただろうが、そこは人情に厚いこの男。特に、このような状況での指示を受けていない事をいい事に、立ちほだかつたのだった。

だが。

「付き合う必要は感じられんのう、よよいっ」

「同感チャパ。ここは任せるチャパ」

そう言うなり、フクロウの姿が音も無く消える。当然だ、CP9である彼らは陽気な面があれども同時に冷徹な人殺しでもある。この場での必要事項は確かにCP2が動いてると教えてやれるならそれで構わないが、本来は皆殺し。CP2が動いていると思わせるのは、あくまでついでに過ぎない。故に、本来の任務を遂行すべく、フクロウが剃で動いた。

それに反応しようとした、ボン・クレールだったが。

「指銃<sup>シガン</sup>Q-!」

「アン・ドウ、クラーーーー!」

即座に動いたクマドリの一撃にフクロウを見逃さざるをえなかった。

「生憎、お前さんにや〜ここで死んでもらうよよいっ」

「んん〜う、あんたを放置しとくのは危険そうね〜い」

互いに相手を容易ならざる人物とみて、戦闘態勢に入る。

ここに、史実では存在しなかった戦いが始まるうとしていた。

## 第59話・任務遂行と遭遇（後書き）

という訳で、原作でも人気の高いボンちゃん登場です

男気はある人物ではありませんが、実際高額賞金首に相応しく、アラバスタ王国を危地に陥れた、という面ではクロコダイルに次ぐ責任のある人物だとも思います

次回は戦闘場面と共に、私なりの解釈で何故ボンちゃんがBWに協力したのかも書いてみたいですね

## 第60話・小手調べ

クマドリとMr・2ボン・クレイが激突するのは別の所で決着がつく話もある。

Mr・メロウはビリオンズと呼ばれるオフィサー・エージェント直属のメンバーであり、このダンスパウダー作戦のまとめ役だ。

それだけに、彼の姿は誰もが知っている。

現状の不安な中で、逃げ出す事に組織の恐ろしさを知るが故に、誰もが逃走を躊躇う中、リーダーが必死に逃げ出していればどう思うだろうか？

『彼も逃げ出したなら、俺達が逃げても』

そんな心理に陥った彼らは自然とメロウに集合する形で逃げ出した。

1人が2人に、2人が3人に、増えるにつれて、その集団は目立つようになり、次第に人は合流した。中には何が起ったのか気付かぬままに、リーダーが逃げ出そうとしている、という話を聞き、合流した者や、逃走しようとする音で皆が逃げ出そうとするのを見て、ようやく何かが起きた事に気付いて慌ててついていった者もいた。

相当数が殺されていったとはいえ、それなりの規模を持つ船の事だ。どこに隠れていたのか、残っていたのか、総数で20名余が甲板に出てきた。

何しろ、船の事だ。

別に接岸していた訳ではなかったが、港には間違いないし、停泊しているのは間違いないから、飛び移れない距離ではない。ただ、船の甲板から地面に飛び移るとなるとやはり危険なので、急いで階段を下ろして駆け下りようと、ある者は必死に、ある者は訳も分か



らぬままに、昇降機に向かおうとして。

『鉄塊玉』

弾き飛ばされた。

「チャパパパ、やっぱりお前らそいつに釣られて出てきたチャパ」

フクロウのこの一言で全員が悟った。

Mr・メロウは既にフクロウにリーダー格だと看做されていた。そして、いちいち船の中を探して回っているのは、その間に甲板に上がって逃げられる者も出る可能性がある。ならば、話は簡単だ、彼らに甲板に自分達から出てもらうように仕向ければいい。そうすれば、後はそこをまとめて片付けてしまえばいい。

「それじゃ死ぬチャパ」

ある者は武器を手に向かってきた。

ある者は命乞いをした。

ある者は懸命に逃げようとした。

武器を手に向かってきたものは次々と殺された。

命乞いをして、やはり殺された。

逃げようと、岸に飛び移った者もいたが、やはり船の甲板から地面まで飛び降りるとなると、下っ端のチンピラ程度では足を痛める者が続出。上手く逃げた者も即座に地面に降り立ち、追ってきたフクロウに次々と殺された。

「た、頼む！許してくれ！俺が知ってる事なら何でも話すから…  
…っ！」

そうして、最後に残ったのがMr・メロウだった。

「本当に何でも話すチャパ？」

「ほ、本当だ！だから……！」

目の前で次々と仲間が殺されていったのだから、Mr・メロウとしても必死だ。そりゃあ、周囲に転がっている物となった者達の仲間入りをしたいとは思わないだろう。

「それじゃ、お前を庇った奴の事を話すチャパ。詳細に」

「そ、それは……！」

Mr・メロウの顔がただでさえ血の気が引いて、青くなっていたのが白くなり出した。

当然と言えば当然だ。確かに言えば、この場での命は助かるかもしれない。だが、明日の太陽を見る事が出来ると考えられる程、メロウはお気楽になれない。

前門の虎、後門の狼どころか、前も後ろも死神が鎌を構えて立っているとなれば、どうすればいいのか……。

ここは、万が一に賭けて、今を逃れる方がいいのか？ いや、しかし、下手をすればただ殺すだけじゃなく、死んだ方がマシな拷問にかけられるかもしれないし、それなら今楽に殺してもらった方がいいのかも……。

最早、Mr・メロウの脳裏では、どうやったら助かるか、ではなく、どちらの方が楽に死ぬるか、になりつつあったのだが……。

「あゝもういいチャパ」

「え？」

何時までも喋ろうとしないMr・メロウにフクロウが喋る気なしと判断を下す方が早かった。

『ジューゴン  
獣巖』

シガン  
指銃の速さで放たれた超重量のパンチ。

それに、ビリオンズとはいえ、所詮は本物のレベルからすれば雑魚でしかないMr・メロウに耐えられる筈もなく、頭部は弾け、息絶えた。

そうして、死体が転がる中、フクロウは考えをまとめていた。

（あの時、こいつはミスターと呼んで、慌てて口を噤んでいた手ヤパ）

1つは名前を呼びかけたのだろうが、ここが長官の言う通りの組織だとすれば……おそらくは数字。

パロックワークス  
BWはエージェントにMr・と数字をつけて呼称するという。ただし、それは上位エージェントの話。逆に言えば……。

（奴が5以上の数字にいるのか、それとも下にいるのかで、また変わってくるチャパ）

とはいえ……。

（まあ、殺しておいた方が後が楽チャパ）

とりあえず、そう結論を下すと、まずはとばかりに何時の間にか

ら姿を現した新CP5こと工作支援部隊に後片付けという名の隠蔽  
工作を頼むと、再び船の中へと姿を消した。

【SIDE：ボン・クレール】

（拙いわねい）

クマドリと交戦しながら、ボン・クレールは考えていた。

先程、この男は自分達はCP2だと名乗った。

CP2、政府系諜報組織CPの一員。サイファーボールとなれば、今この場で戦つていても、放つておけば増援がやって来る可能性は高い。

元々、ボン・クレールことベンサムがBWバロックワークスに入社を決めたのは、交換条件が良かった為だ。

ボン・クレールは1人のオカマを探していた。

『奇跡の人』イワさんこと、カマバツカ王国の永久欠番、女王エ  
ンポリオ・イワンコフ。

突然消息の途絶えた、憧れの人を探して旅していたボン・クレール  
に接触してきたのがBWバロックワークスだった。

現在の居場所、政府の大監獄インペルダウンへと収監された、と  
いう情報と共に、彼らは接触してきた。逮捕理由は明らかに不当な  
ものだった。その罪とは『猥褻物陳列罪』……一体何が猥褻物だと  
いうのか、何故そんな罪で、あの人インペルダウンなどへ収監さ  
れねばならないのか。

怒るボン・クレールにBWバロックワークスは、計画を成し遂げたあかつきには、解  
放を働きかける事を約束してきた。

彼らのボスが誰かは言えないが、確実に働きかける伝手があるの  
だと、そうでなければ、インペルダウンへ収監された囚人の情報な  
ど入手出来るものではない、と伝えてきた。

元々、クロコダイルがイワンコフの事を探っていたのは、彼のル

キー時代の汚点の為だ。

その汚点を知る存在こそが、そして未だ消せてない相手こそがエ  
ンポリオ・イワンコフ。それゆえにそれとなく、場所を探っていた  
のだが、まさか、こんな所で役に立つとは当初クロコダイルも思っ  
ていなかった。

そうして、最終的にボン・クレーはその条件を飲んだ。

故に、彼はここにいます。

（それに、先程もう1人が逃げた連中を追ってたけど、追いつ  
かれたら、あいつらじゃ殺されてしまうわねい）

片割れが、こうしてオフィサー・エージェントの1人である自分  
が押しつつあるとはいえ、戦っているのだ。

ビリオンズの連中では……そして、もし、相手が帰ってくれば、  
こちらとしても相当厳しくなる。

「指銃<sup>シガン</sup>Q、！」

手にしたキューでもって、連射してくる攻撃をかわし、Mr・2  
ボン・クレーは踏み込む。

「白鳥アラベスク！」

連射された蹴りが、クマドリの全身に叩き込まれ、クマドリが吹  
き飛ぶ。

その瞬間を見計らって、壁を蹴り壊し、船の外へと飛び出す。

「んがっはっはっは！それじゃ、またねっい！」

踊るような姿勢のまま飛び出し、こちらは見事に岸へと飛び降り

たボン・クレーはそのまま夜の闇へと姿を消した。

少し間を置いて、壁の穴からクマドリが外を確認する。

「いったくようじゃくのう？」

「チャパパ、いいのかチャパ？」

大したダメージを受けていないように見えるクマドリの背後から何時の間にか戻ってきたのか、フクロウが声を掛ける。

「そうくいうお前もく黙って見てたくよよいつ」

「チャパパパパ。顔は覚えたチャパ。それなりに大物なら、あいつには動いてもらった方がいチャパ」

今回、クマドリは【生命帰還】を敢えて使用してはいなかった。

その上で、最後まで鉄塊を使用して防御した為に、見た目ほどのダメージは受けていなかったのだが、フクロウの言う通り、顔は覚えた以上、そして彼が組織でも大物の1人と思われる以上は密かに手配を回して、彼の姿を見張っておいた方がいい。そうすれば、彼の動きから重要な拠点の見当がつけやすくなる。

それにやりあって分かったが……。

「結構くお、厄介な奴くよよいつ」

鉄塊で防御しても、尚最後の蹴りは衝撃が全身に来た。

僅かにながら、自身の体に痣に近いものが出来ているのをクマドリは感じていた。まあ、大した事はないから、明日には綺麗さっぱり消えているだろうが、鉄を蹴って逆に鉄にダメージを与えるというのは相当なものだ。

「とりあえず、一旦戻るチャパ」

「そうするかよよいつ」

その翌朝、港は大騒動になった。

突然、一隻の船から火の手が上がったかと思うと、たちまち業火に包まれ、燃え落ちたからだ。

どうやら、油を搭載していたと思われ、荷主という男性ががつくりと肩を落としていたが、どうやら船員の火の不始末という事らしく、港湾の役人からは罰金を科される事を伝えると呆然としていた。

……その荷主も、一部の慌ててやって来た船員の行動もCPの人員による演技であつた訳だが、本当の船員達が全員昨夜の内に皆殺しにあつた事さえ知られる事なく、この件は『船員の火の不始末による船の火災』として記録されるのみで、ダンスパウダーの事など、誰も知る事はなかつた。

## 第60話・小手調べ（後書き）

という訳で、ボンちゃんりの理由をざっと書いてみました

インペルダウンで、ボン・クレーがイワンコフが捕らわれている事を知っていましたが、普通の海賊にインペルダウンに誰が捕らえられたか、などと知る事は出来ないのでは、と思い、王下七武海であったクロコダイルから教えられたとしました

実際、拷問で次々死んでいってるでしょうからねえ、誰が入ったかはともかく、公表はろくにされてないんじゃないかと…



第61話・BWの黒幕達（前書き）

アンケートにご協力ありがとうございました  
結果発表は最後にて

## 第61話・BWの黒幕達

「クソが……！」

バサリ！と机に報告書を叩きつける。

その音で少し頭が冷えた気がして、しばらく右手で顔面を覆って気持ちを落ち着ける。

「あら、どうかしたの？ご機嫌斜めのようだけど」

「……ロビンか」

顔面を覆ったまま、左手のフックで書類を示す。

読んでみる、という様子ニコ・ロビンは書類をめくった。

「……あら」

成る程、これはクロコダイルの機嫌が悪くなるのも納得がいく。

報告書は2冊あった。

片方はMr・2ボン・クレーによるもの、もう片方は港湾に潜んでいたビリオンズによるものだった。

Mr・2の報告書は、彼の見た目と異なり、きちんと丁寧に書かれていた。

が、内容的には問題満載だ。

1つは交戦相手、CPがこれ程早く出てくるとは予想外だった。

1つは、これはもう1つの報告書にも関係しているが、ダンスパウダー作戦の失敗。

1つは、Mr・2自身の行動だ。

「CP2、ね……確か、ここアラバスタ王国を含む海域を担当する支部だったかしら」

「ああ……そうだ。あのスパンダインの奴め、つくづく祟りやがる」

最初の交戦相手に関して、ロビンが呟くと、ようやく落ち着いたのか、クロコダイルが何時もの調子で応える。

サイファーボール  
CPが現在再編を行なっている事は既にその筋では知られている話だが、どのように変わるかはまだ知られていない話だ。

ただ、以前の通りだとすれば、今回彼らが名乗ったCP2というのは、このアラバスタ王国を含む領域を担当していた支部であり、ダンスパウダーという話を調査していて、ここに辿り着いたというのであれば、一番可能性がありえる支部だ。

そうした意味では、スパンダインが世界政府にダンスパウダーの事を洩らす事になった結果が、今の状況を招いたとも言える。そういう意味では、クロコダイルのぼやきも当然だ。

だが、CP2が動いたという事は、クロコダイルの反乱の事を悟ってではなく、あくまでダンスパウダーの調査の結果である、と見る事も出来た。

「でも、気になるわね……」

「何がだ？」

「……このやりあった相手の強さ、よ」

ニコ・ロビンが気になったのは、Mr.2とやり合った相手の強さだった。

Mr.2は2という数字が示すように、オフィサー・エージェン  
トの中でも相当に強い部類に入る、見た目はアレだが。  
そのMr.2と相手は一对一で渡り合ったという。

「そんなに強い相手がCP2にいるものなのかしら？」

「……可能性としては幾つかあるな」

1つは偶々、今回派遣されてきた相手が強かったという可能性。

1つは再編されているという新生CPでは、サイファーボールそうした強さが戦闘  
要員としては求められているという可能性。

そして、最後が……CP2ではないという可能性。

「偶々、という話なら何ら問題はないが……」

「純粹に実力が上がったか、もっと危険な所からの派遣だったら  
厄介ね」

「……とはいえ、現状ではこれ以上は何も分からん。警戒するし  
かなかるう」

確かに、この点に関してはこれ以上のやりようがない。

スパンダインが生きていれば、確認のしようもあつたかもしれないが……生憎、死人にこれ以上何かを聞くのは不可能だ。もっとも、  
だからといって、生かしておくという選択はあの時はありえなかつ  
たから、仕方がないのだが。

「しかし、ダンスパウダーの失敗は痛いな……」

「そうね、しかも、噂すら絶たれたみたいだし」

こちらに関しては、港湾の作業員として潜り込んでいたビリオンズから、上げられた話だった。

折角の船とダンスパウダーが見事なまでに、普通の火災にされて綺麗に処分されてしまった。

「……だが、この砂漠の国では、ダンスパウダー以上に効率的なものはそうそうない」

それもまた、事実だ。

「……やむをえん。作戦を一時凍結する。少しほとぼりを冷ました上で、戦力を整える」

「それが妥当かしらね……」

焦っても、いい事はない。

そもそも、現状を見るに、明らかにCPはダンスパウダーを狙って動いている。元々、ダンスパウダーは製造・所持双方とも禁止とされている品物であり、そんな情報を得た以上、世界政府が動くのはむしろ当然だ。それ自体は予想していたのだが、ただ1つ予想外だったのは、動き、突き止めるまでの速さだった。

「しかし、Mr・2の奴も余計な手間をかせさせてくれる……当面は顔を変えさせると共に、服も変えさせるしかあるまい」

普通の相手ならば、もつと激昂する所だが、Mr・2はマネマネの実の能力者だ。

確かに、変身している間は戦闘力は相当落ちるが、今は、正体を隠すのが優先だ。

あの場での正解を言うならば、ボン・クレーはMr・メロウなど見捨てて、自分はさっさと誰にも気付かれる事なく脱出すべきだった。だが、ボン・クレーには仲間を見捨てて逃げる、という事が出来なかつただけだ。とはいえ、クロコダイルからの命令はあくまで『ダンスパウダーの使用をコブラ王の仕業と思わせる』というものであり、市民以外にはれた時どうしろ、という指示は下していなかった。

オフィサー・エージェントはその辺りの行動に関しては、結構な自由度が与えられている、そうした意味ではMr・2の行動は望ましいものではないにせよ、間違つた行動ではない。

「いずれにせよ、しばらくは大人しくして、戦力の建て直しと戦略の練り直し、だな……」

「そうね……ねえ、1つ聞いていいかしら」

「なんだ」

「……貴方、この計画が成功して、王になったとしてどうするつもりなの？」

それはロビンが聞いてみたい事ではあつた。

クロコダイルの計画が、この国の乗っ取りである事は分かつている。だが、その先はどうなのか？

これがお話なら、『あらたなるえいゆうは、とうとうおうさまにそくいしました、めでたしめでたし』で終わる事も出来るだろうが、現実はその簡単には終わらない。手に入れたとて、物語は終わらない。

むしろ、現実とは手に入れたそこから、全ては始まる。

だからこそ、ロビンは聞きたかつた。もし、順調に全てが進み、

国を手に入れた時、その国を守る力として古代兵器を使おうとクロコダイルが考えている事を知っていたからだ。

「そうだな……」

断つても良かったが、何の気なしにクロコダイルは、ロビンの疑念に応えてやる事にした。

## 第61話・BWの黒幕達（後書き）

### アンケート集計

1：原作そのままの悪魔の実

16票

うちカクのみそのまま：4

うちカリファのみそのまま：1

2：オリジナルの悪魔の実

16票

……なんと、同数に終わりましたwどうしよう

ただ、カクはそのままの悪魔の実で、カリファは変更と言うご意見が4票、カリファはそのまままでカク変更という票が1票それぞれ入っています

そちらを考慮すると、オリジナルの悪魔の実の方が多くなるのです  
すなわち……

1：原作と同じ悪魔の実

2人とも変わらない方がいいは12票

カクはそのままキリンで、カリファは変更が4票

カリファはそのままアワアワで、カクは変更が1票

2：オリジナルの悪魔の実

こちらは動じず16票

……悩みましたが、二人ともオリジナルの悪魔の実で進めたいと思



いま

## 第62話・BWの黒幕達2と…

【SIDE：クロコダイル】

「まあ、簡潔に言ってしまうえばな、考えていない」

あまりといえばあまりな答えにロビンは思わず眉根を寄せた。ふざけているのだろうか、或いははぐらかしているのか、そう思ったからだ。

「別にふざけている訳でもない。大体そんなものだろう」

クロコダイルは問う。

お前は何故、歴史の本文を、ポネグリフ追われてまで追い続けるのかと。

ニコ・ロビンの懸賞金額は7900万ベリーに達する。

だが、所詮7900万ベリーでもある。

この金額は確かに西の海で見たならば、大金だ。だが、グラントラインの基準で見れば、決してずば抜けた高額とは言えない。

そして、この金額はニコ・ロビンがオハラ壊滅後懸賞金をかけられてから、今日までざっと16年余り、全く上昇していない。つまり、ロビンがこれまで生きる為にやって来た事は懸賞金を上げる程の事ではなく……逆に言えば、世界政府から見た、ニコ・ロビンの脅威度とは『歴史の本文を解読出来る事』、このただ一点につきるという事でもある。

……おそらく、交渉と彼女が歴史の本文を諦めれば、彼女の懸賞金額を外す事も可能だろう。

「そもそも世間一般の海賊連中も同じ事だ。海賊王になりたいとほざく連中は大勢いる。だがな、奴らにもないだろうさ、海賊王となつて、何がしたいのか、という事はな」

俺は海賊王になる！

いいだろう、目的があるのはいい事だ。

俺は尊敬する人を海賊王にしたい。

気にしない、したければ勝手にすればいいだろう。

では、そんな彼らに問おう。

『海賊王となった後、或いは海賊王にした後、それからどうする  
』？

おそらく、答えられる者はいないだろう。

あまりに巨大な目標が目の前に聳え立っている為に、それを踏破する事にばかり頭が行き、それを踏破した後の事、その向こうには何があるのか、踏破した後はどうしたいのか、その辺を考えている者などどれ程いるのだろうか。

……クロコダイルから見ても、そんな海賊がいるとしたら、白ひげぐらいのものだろう、と思う。

これはどの世界でも同じだろう。

例えば、アスラの元の世界で例えるならば、有名大学に入りたいと思っっている人がいても、入った後、何を学び、何を研究して、それを活かして、どんな仕事で何をしたいかまで決めている人はそういうものじゃない、という所だろうか。

「……ふう、分かったわ。けれど、バロックワークス BWで貴方についてきてる面々はそうじゃない人もいるんじゃない？」

そういう連中はどうするのか、と言外に問う。

Mr.1はいい。彼はクロコダイルに心酔しているし、己を律する事の出来る人物だ。

Mr. 2もいい。見た目はアレだが、きちんと誠意を持って対応すれば、恨みを残さない相手だ。望みの相手をインペルダウンから解放できずとも、こちらが騙したりせず毅然とした対応を取れば、こちらを怨んだりもしないだろう。

問題はそこから下だ。

そこから下は一気に品性が低下する気がする。

ビリオンズなどは、エリート候補と称してはいるが、その実海賊連中と大差ない、そうした連中をどう扱うつもりなのか？

バロックワークス

「別に問題なかるう？BWでの貢献度に応じた地位をやるとは約束しているが、その地位にそのまま最後までいられるとは誰も言うてはいない」

「……そういう事、ね」

それでロビンも悟らざるをえなかった。

確かに、初期に措いては以前に王国で務めていた者を排して、貢献した者達が新たに役職を得るのかもしれない。

だが、クロコダイルはその中から、本当に役立つ者はそのまま引き立てる事はあっても、大部分の荒事にしか使えない、引いては統治に役に立たない連中は何かと理由をつけて処理していくのだろう。

「まったく……その上、貴方の性格からして、傲慢で理不尽な統治っていうのもやらないでしょうし……案外、普通にビビ王女でも娶って、王族の一員になった方が安全確実なんじゃない？」

「俺に、あんな小便臭い小娘を抱けつてか？」

「あら、あと何年かすれば、綺麗になるわよ、あの子」

「はっ、どうせ抱くなら今、綺麗な女を抱きたいもんだな。頭の悪くない女なら尚いい」

言っただけで、そうロビンは笑うと、仕事へと戻っていった。

クロコダイルも改めて、策を練り直さねばならない。

ダンスパウダーの新たな手配もしなければならぬし、加えて、新たなCPサイファーボールに関する情報も集めねばならない。特に新しい長官だ。前職のスパンダインはある意味御しやすい相手だったが……16名しかない海軍本部中將でありながら、CP長官などどんな奴だ、と思う。

1度、王下七武海の権限を活かして、マリントワードに会いに行ってみるか、と決める。

書類を片付けながら、先程の事をふと思い出した。

「……そういえば、ニコ・ロビンも今、綺麗な女だったな。頭もいい」

クロコダイルとて、男だ。女に興味がない訳ではないし、抱く事もある。ただ、大抵の相手はそんな気の効いた会話を互い出来る程の教養はなかった。

だが、生涯に渡ってなどと考えるのはアホらしいが、単純に楽しむだけなら、ああいう女を征服するのも悪くないかもしれん。

ニヤリ、と笑ったその笑みは、明らかに肉食動物が獲物を見つけたかのような笑みだった。

## 【SIDE：アスラ】

報告書は読んだ。

仕方ないというものの、Mr.2ボン・クレイを逃したのは痛い。原作で人気のあるキャラクターなのはどうでもいい。今、重要な

のは、彼がその悪魔の実の関係上、極力早くしとめる必要のある相手だという事、それだけだ。

「……どうにも、この仕事をしていると、考える事が殺伐としていていかな」

書類から視線を外して、苦笑する。

その上で、改めて考えてみる。

マネマネの実の能力者であるMr・2ボン・クレールことベンサムは、クマドリとフクロウが判断したように特徴ある姿と容姿だけに泳がせておいて……という手法が使えない。

まだ、CP9クラスなら気配なりで追跡という事が出来るかもしれないが、そんな事が出来るのはごく一部だ。

通常の隊員ではまず不可能だし、気付かれて逆に攻撃を仕掛けるなり撒こうと行動するなりされれば、あっさり倒されるか、撒かれてしまうだろう。

とはいえ、これは彼らが悪い訳ではない。知らなかった以上、仕方がない事だ。

そして、未だボン・クレールの情報が入ってきていない以上、これ以上アスラが直接、誰その能力がどういう能力か、などと言えない。そもそもクロコダイルが今回の件の黒幕だという事も、相当危険を犯しているのだ。

(Mr・1ならある程度情報が入ってくれば、見当がついたとも言えるんだがな……)

有名な殺し屋だけに、そういう手も打てる。

まあ、今回はこれで満足するしかあるまい。1000点満点ではないが、まず及第点だ。ダンスパウダーを潰し、サイファーボールCPが動いている、パロックワークスただし、ダンスパウダーを追ってのもので、BWに感づいたものか

は分からない、という状態で、だ。

どうやら、クマドリにせよフクロウにせよ、あそこでMr. 2が出てこなければ、メロウにメッセンジャーをやってもらう予定だったらしいが、彼程度の実力で振り切られる、というのは怪しまれる可能性があるのです、出てきてくれて助かった、という所か。

「……しかし、今回の件でクロコダイルも警戒はするだろうしな……どういふ風に動くか……」

黒幕こそ分かっていても、結局BWとの戦いは手探り状態が続く。こちらが優位に立っていると、油断していれば、あっさりひっくり返される危険もある。

これが数年は続くのかと思うと、本当に頭が痛くなりそうだった。そう思っていると、ドアがノックされる音が響いた。

「入れ」

その声を掛けると、入ってきた伝令が、センゴク元帥が呼んでいる旨を伝えてきた。

何かしら、今回の件でやばい事でもばれたか、とも思ったが、どうやらアスラだけではなく、大將中将全員召集らしい。センゴク元帥の性格からして、CPの件で何か言ってくるならば、まず警告ぐらいは一対一で言ってくるであろうし……。

はて、一体何事だろうか？

そう思いながら、アスラはただちに向かった。

まさか、向かった先で、ある意味ありがたく、ある意味迷惑な、あんな事が待っているとは考えもしなかった。

第62話・BWの黒幕達2と…（後書き）

今回は、少し陰謀とは無縁のお休み風のお話を…  
ずっと駆け引き続きでは、緊張しますしね！

とりあえず、私なりの理由はこうなりました  
くになりたい、と思っても、案外そこから先は考えてないと思うので  
まず、成し遂げて、そこからまた改めて、次はこうする、と……  
弁護士になりたい！と思つて、きちんと計画立てて大学入つて、勉  
強して見事になったとしても、何を得意な分野とするか実際にやっ  
てみないと分からない事もあるでしょうからねえ



## 第63話・海軍の事情

会議室。

その中でも特別な、ここに入れるのは海軍では本部中将以上の階級にある者だけだ。

そこに入ったアスラの足が思わず止まった。

理由は、目の前に広がる光景だ。片方には既にボルサリーノ大將こと黄猿大將の他、幾人かの中将が座っている。黄猿大將の隣2つがあいているのは、青キジ大將とガープ中将のものだろう。

一方、机の対面側は……誰が座っているのかよく分からない。

理由は、黄猿大將らの側には各人の前にそれなりの厚みの、けれど1mには届かない……大体50〜80cm程度だろうか？それぐらいの厚みの書類の山が積まれている。

これに対して、もう一方は……書類に埋もれていた。

机の上には幾つもの山が積み重ねられ、椅子の脇にも背後の壁際にもうず高く積まれている。

そうして、机の一番奥にはセンゴク元帥がどっしりと腰を下ろしていた。

(……見なかつた事にしたいなあ)

センゴク元帥に敬礼と答礼による挨拶を交わした後、そう思い、書類の少ない側に座ろうかと思つたが、その前に書類の山の陰から顔を覗かせたおつるさんが、呼びかけた。

「ああ、来たかい、アスラ坊。あんたはこっちだよ」

そう言つて、書類がうず高い山をなしている側にある、もう一つ

だけ空いている椅子を指差す。

やっぱりか、そうどこかで諦めと共に思いつつ、山に当たって崩さないように椅子に座る。

それからしばらくして、他の中将や青キジ大将とガープ中将もやって来て、全員が揃った。とはいえ、全ての席が埋まっている訳ではないが、これは巡回に回っている面々の席だろう。

ちなみに、この場には巨人族の中将はいない。

基本、巨人族の中将はいても、巨人族の大将以上は海軍の歴史を探しても、殆ど存在しない。理由は穿ったものでは、『巨人の寿命が人の3倍になるから、一旦なると人間になかなか大将とかの位が回ってこなくなる』という意地悪なものもあるが、実の所、書類のせいだったりする。

中将までは現場の功績のみで何とかなるんだが、そこからは書類も大量に面倒見ないといけないんだが……海兵の大半は人間サイズで、書類もそれ相應……さて、人間サイズの書類を巨人が処理出来るだろうか？それも中将という階級に見合うぐらいに大量に……まあ、難しいのは分かるだろう。人間で言えば、切手サイズの紙にびっしり書かれた文字を読み取って、それにいちいちサインしないといけないんだ。かといって、書類を全部巨人サイズに直すには手間も時間も足りない。

かくして、巨人族の中将らは存在しても、それ以上の昇進は厳しくなってしまう、という訳だ。結果、作戦会議でもない限り、巨人族の中将らは会議に出席しなくなる。逆に言えば、ここで会議をやる以上、戦闘に関係するような議題ではない、という事だ。

「揃ったな」

センゴク元帥の方をアスラが向くと、こちら側には自分の他に赤犬大将とおつるさんの2人だけが座っているのが見えた。残りは全員反対側だ。

一体何だろう、さすがに疑念を持ちつつも、すぐに語られるだろう、とアスラは黙っていた。

「さて、お前達を招集したのは他でもない。目の前の光景が何か分かるか？」

そうセンゴク元帥から言われて、改めて各人が自分の前を見る。それはどう見ても……。

「書類じゃのう」

「書類だねえ」

「書類だね」

「書類じゃな」

代表する形で、大将3人とガープ中將が口々に言う。おつるさんが何も言わないのは……あの様子だとセンゴク元帥が言いたい事を既に知っているという所か。

「そうだ、書類だ……そして、各人の前にあるのが、お前らがこの十日間でそれぞれ処理した書類だ！」

センゴク元帥の言葉に、1度自分の周囲を取り囲む書類の山を見た。

そうして、目の前に並ぶ黄猿大将青キジ大将から中將一同の書類の山を見た。……何故かな？えらい差があるんだけど。

ちなみに、一番山が低いのがガープ中將で、次に低いのが青キジ大将なのは思わず納得してしまった。

「いいか、お前ら……赤犬におつるさん、アスラに頼りすぎだ！  
なんだ、この量の差は！」

怒られた面々が一斉に目を逸らした、いや、ガープ中将だけは堂々としたもんだ。自慢にならないけど。

「まったくお前らは……アスラ中将、最近『マーキュリー』号を使う機会があったか？」

と、センゴク元帥がアスラに尋ねた。

その言葉に、アスラは当面の記憶を探ったが……。

「……いえ、ないですね」

そう答えるしかなかった。事実だし。

少し説明しておく、マーキュリー号とは、アスラの中将としての正式な旗艦であり、同時に『緊急展開部隊及び護衛艦隊』の総旗艦でもある戦艦だ。

本部中将の乗艦する海軍の一角を担う部隊の総旗艦なだけあり、担当している部隊の性質上、艦内病院に工作室まで備え、少なからぬ物資の搭載も可能で、武装も十分という船だ。まあ、その分速度が犠牲になっっている訳だが、何しろその役割は病院船やレスキュー部隊の作業艦に物資を搭載した輸送船などを連れて向かう事な訳で、そうした部隊を置き去りに出来ないから、多少速度が遅くても問題ない、というのが理由だったりする。

ただ、アスラの仕事の役割上、あちらこちらへと飛び回らねばならないのも事実で、この船とは別に、アスラには、もう一隻の準旗艦が与えられている。

「最近は、ヘルメスしか使った覚えがありませんね……マーキュリーは預けっぱなしですよ」

もう一隻の準旗艦たるヘルメス号は、こちらは武装や積載量よりも速度を最重視されて設計された巡洋艦に分類される艦だ。

2隻も旗艦相当の艦が与えられているのは珍しいのだが、ヘルメス号では本部中将の正式な乗艦としては格が足りず、かといって普段からマーキュリー号を使用するには、鈍足が祟る、という具合だった。

アスラの言葉にセンゴク元帥は頷いて言った。

「いいか、赤犬もおつるさんもアスラも人間だ。体調を崩す事もあるのだぞ！」

さて、こうして話を聞いていると分かってきた事だが……センゴク元帥はある日、海軍の回ってくる書類回ってくる書類がふと、決まった名前ばかり目に付くのに気付いたらしい。

今まで気付かなかったと言うなかれ、海軍のトップたる元帥などという地位に立つと、海軍の仕事だけでは終わらないのだ。

おまけに鬼のように忙しいのは変わらないし……。

まあ、ただ一旦気になって調べてみると、赤犬大将おつるさんアスラ中将の3人に対して、他全員の書類を合わせても3人に到底届かないと判明したから、こうして怒っている訳だ。

そこで、どうやら我々を休ませると共に、これまで押し付けてきた他一同に書類の処理を代わりに命じる、という行動に出る事にしたらしいのだが……。

そうすぐには終わらなかった。

ガープ中将を筆頭とした、サボリ組（仮称）の抗議は無視出来たが、3人からの意見は無視出来なかったからだ。

大変なのは、センゴク元帥も同じであり、赤犬大将らに休暇を与えるのならば、元帥も休まねばならない旨を赤犬大将とおつるさんが主張した。ちなみにアスラはと言えば、目上の2人が既に自分も同感な意見を発言している以上、大人しく黙っていたりする。

元帥は『いや、自分にはやらねばならない仕事がある』『こればかりは誰かに任せる訳にはいかん』と反論した訳だが……。

「それはワシらとて同じじゃあ」

「私らとて、そういう書類はあるんだよ」

「今、手を放す訳にはいかない書類は山程ありますからね……」

これまた3人からセンゴク元帥と同じ言葉が返ってきた。

別にこれは休みたくないから、という言い訳ではなく、休みが欲しくない訳ではないが、純粋な本音として確かに誰かに任せる訳にはいかない書類とかはあるものだ。アスラの場合だと、CP長官としての書類とか……。

それも理解出来るので、一時はセンゴク元帥も悩んだのだが……  
ガープ中将の。

「ほれ、そう言つとる事じゃし、これまで通りでええじゃないか！」

という言葉に、逆にセンゴク元帥が切れてしまった。

結局、十日間の間、センゴク元帥・赤犬大将・おつるさん・アスラ中将は当人指定の緊急要件以外は午前で上がる事。

残る書類は全部、黄猿大将を総責任者として、以下青キジ大将ガープ中将他中将一同で処理する事、と相成った。

ちなみに逃亡者が出た時には、他一同で責任を持って処理を行な

う事と定められた為、この後の十日間は逃走を図る青キジ大将を問答無用で黄猿大将がレーザーで吹っ飛ばしたり、逃げ出したガープ中将を他の中将らが数人がかりでマリンスフィード中を追いかけっこをしたりと、大騒動に事欠かない日々となった……。

少なくとも、この日々が終わった後、一部を除く面々がもう少し真面目に書類をこなすようになった事や、赤犬大将やアスラ中将への酒や栄養ドリンクなどの差し入れが増えた事、十日間の間、効率悪化でえらい大騒動になった事などは密かな噂になった程だったのは確かなようだった。

### 第63話・海軍の事情（後書き）

今回は、この休暇の間に起きた、ある事件です

しかし、今週号の最新話を見ると、サボ生きてるっばいですねw



## 第64話 - 休暇そして

さて、センゴク元帥、赤犬大将、おつるさん、アスラ中将。

いずれも責任感のある人達だ。まあ、だからこそ、他と比べて大量の書類を処理するハメに陥った訳だが。

そうした人達が、いざ休暇となったからとて、即放り出して、「後は任せた！」とやれるものだろうか？

当たり前だが、そんな事が出来るくらいなら、ここまで苦労していない。

それに、当面彼らにしか処理出来ないような案件だって、多数ある。という訳で、一時的に担当となる中将に引継ぎを行い、副司令官や副官に後事を頼み、それでも処理出来ない場合の対処を決めた。

この内、一番厄介だったのは、アスラだった。

理由は単純で、実質3つ以上の役職を兼任しているのと同じだったからだ。

後にアスラ自身が回顧録で述べている通り、過渡期における一時的なものではあったからこそだった。

1つは緊急即応部隊。

これは既に何度か語られているが、海賊の襲撃や災害による救助を行なう部隊だ。病院船やレスキュー部隊に相当する部隊を載せたり各種の工作道具を載せたりしている工作船、物資を運ぶ輸送船などで構成される部隊だ。

2つめは護衛艦隊。

前述の部隊は所属している船の種類から想像がつくだろうが、戦闘力には欠ける、というかほぼ皆無だ。せいぜい乗ってる操船の為の海兵らぐらいなので、当然護衛を行なう艦隊が必要になる。これはそうした部隊だ。

ちなみに、この艦隊の旗艦がアスラの正式な旗艦である戦艦『マ

「キユリー」だったりする。

3つめは造船総監。

これは何故かというところ、最初の部隊を構築する際、これまでになり艦種も含まれていた。

結果、最初は相談しながら、造船担当技官らと交渉して、あーでもないこーでもない、と場合によっては、W7のトムやアイスバグの助言も受けつつ造船を行っていた訳だが、『それならいっそ造船の責任者もやった方が手続きが楽だろう』と任された仕事だった。

それなら、艦の設計が終わった後、戻せばよかったのだが、そのまま任されてしまった仕事だった。

4つめはCP長官。

これは完全に世界政府に所属する仕事だ。

なので、普通は海軍の人間が就任する事はないのだが……まあ、諸事情という奴だ。

とにかく、ただ単純に海軍内部の報告書と作戦案を練っている他3人に比べて、ややこしい仕事なのは確かだ。

まあ、あちらはあちらで、世界中の各支部から情報が集まってくるので、量が大変なのだが……。

ちなみに、後の話だが、アスラ以後、上記の4つを兼任する人間は現れなかった。緊急即応部隊と護衛艦隊もそれぞれに責任者たる中將が置かれ、救援活動に入った後は緊急即応部隊担当の中將が、戦闘時は護衛艦隊担当の中將が優先指揮権を得る、という形に変わった。

ただ、アスラの苦勞が無駄だった訳ではなく、CPサイファーボールから迅速に緊急即応部隊に非常事態の連絡が入るようになったのは、間違いなくアスラの功績だった。

さて、この内、最後のCP長官は他に任せる事は出来ない。

何しろ、これは本来世界政府の文官の仕事だ。海軍本部中將が行なう仕事ではない。ので、これだけは休暇中もアスラが担当しなければならぬ……が、センゴク元帥が午前中以後は緊急時以外仕事禁止と通達してしまったので、こちらも一時的に各CP1〜8の責任者に任せる形になる。

ただ、他の仕事は大丈夫だろう、と任せ……センゴク元帥も赤犬大将もおつるさんも自分でないと駄目な仕事を片付け、やっと当初予定したとおりの休暇に入った時には当初の会議から二週間以上が過ぎていた。

「ふう……」

午前中に、書類を片付け、午前11時には帰宅。

……何時以来だろうか、とアスラは遠い目をした。最近はずっと午前様だったからだ……といっても、夜が更けて日が変わったの午前だった訳だが……。

既に休暇に入って4日目。

一日目は落ち着かなかつたが、疲れているだろうから、とハンコックが気を使ってゆっくりさせてもらった。

翌日は家族サービスでお店を回った。

ハンコックや娘の服、息子の服や子供の為の玩具を買ったり……まあ、役職が増えれば、給与も増える。

酒や煙草に使うアスラでもない為、金ばかり溜まっていたりする。まあ、何か趣味を探したらどうだ、とは言われているのだが……。さて、ワーカホリック化していただけに、3日目からはする事がなくなってしまった。

子供の相手をしたり、家の庭の手入れをしたり……まあ、してみただが。

何しろ、木の上を刈るにした所で、当人は縁側に座ったまま、カッタする事が可能だ。予想以上に早く終わってしまった。

「……暇だ」

掃除なんかの手伝いもしてみたし、別に問題もなかったのだが、ハンコックはきちんと掃除整頓してるものだから、すぐ終わってしまった……。

で、当人はというと、子供を連れて、ご飯の買い物に出かけた。エースとサボとルフィは本日も海軍の訓練所で鍛錬の真っ最中。アリスは、ハンコックらについてった。

……お陰で、今家にはアスラしかない。

「……センゴク元帥らも同じようになってるのかなあ……」

ちなみに、センゴク元帥は家で奥さんとノンビリしたり、アスラの元の世界で言う所の詰め将棋をやったりしていた。

赤犬大将は、特に何をしてもなく、のんびりとしていた分、アスラと同じような事を呟いていた。

おつるさんも、既に旦那と死に別れていたが、そこは女性の強さという事か、盆栽を手入れしたり、あれこれと少なくとも時間のつぶし方に四苦八苦している事はなかった。

まあ、そんな風に彼らがゆったりしていた時、他の大将や中将達は大騒動になっていた訳だが……。

と、そんな時、呼び鈴が鳴った。

はて、誰か尋ねてきたのか、案外サカズキ大将あたりが暇をもてあまして、やって来たのだろうか？

……そう思っていただけに、玄関で出会った相手の顔は予想外だった。

「よう、あなたに会うのは初めてだな。上がらせてもらっていい

か？」

「……構わんよ、ただ、葉巻は遠慮してもらいたいね。今出かけてはいるが、小さい子供がいるんでね」

そうかい、と笑って葉巻を玄関に置いてある灰皿（吸う人がいるんだ）に押し付けて、入ってきた。

……まさか、こうして出会うとはね。サー・クロコダイル。

何時か出会う事は予想していたが、その時は戦場かとも思ってたんだが……。

## 第64話 - 休暇そして（後書き）

原作、サボが怪我で記憶喪失になってたり？

さて、感想で予想もされていましたが、クロコダイルやって来ました

## 第65話・会談

マリolfordに来る事はそんなに難しい事じゃねえ。

俺達、王下七武海にはマリolfordの永久指針エターナルポースが与えられている。当然だな、なけりゃ緊急招集がかかってても、俺達は1つ1つ島を渡っていかないといけないねえ。

まあ、無論、連絡はした。

ちとマリolfordまで行きたいってな。センゴクの奴は渋い表情をしていたが、俺達はマリolfordを訪れる権利がある。

理由を聞かれたが、とりあえず別に理由を言う必要はなかったからな、適当にはぐらかした。

まあ、お陰でかなり渋い表情をされたが、こっちとしては奇襲を仕掛けた方が、相手の本音を引き出すにはやりやすいからな、それに向こうとしても、こっちが行きたいって言うてるのに断る理由はないからな……。

ま、海賊がマリolfordをうるつくのが気に入らんのは分かるが。

『いいだろう、だが、騒ぎを起こす事は些細なトラブルを含めて許さんぞ』

「当たり前だ、マリolfordで騒動起こす程馬鹿じゃねえよ」

最終的に、そんな会話が交わされて、了解は得られた。

さて、そうやって許可を取って、マリolfordへやって来た訳だが、生憎アスラ中将って奴はいなかった。

さぼってでもいやがるのかと思ったが、港で出迎えた奴に聞いてみりゃ、逆らしい。あんまりに仕事漬けになってるもんだから、強

制的にお休みになつたらしい。成る程、そういう性格の奴か……。まあ、とりあえず家へと案内してもらつた。何しろ、俺が今回マリンフォードに来たのは、アスラ中将に会う為、だからな。別に嘘じゃねえ訳だし、な。

途中で、拳骨のガープが、他の中将、オニグモとモモンガに追いかけてたのを見かけたが……。何だつたんだろうな？

さて、そうやって着いた家にいた奴は、ガープらと違って細身の奴だった。

別に細身が悪い訳じゃねえ。黄猿大将なんかもそうだしな……。だが、奴が弱いなんぞと抜かす馬鹿はいねえだろう。海軍本部中将をひ弱なんて判断する奴は酷い目を見るのがオチだな。

「よう、あなたに会うのは初めてだな。上がらせてもらつていいか？」

「……構わんよ、ただ、葉巻は遠慮してもらいたいね。今出かけてはいるが、小さい子供がいるんでね」

了解了解。

それじゃ、上がらせてもらうとするか。

さて、こいつがアスラ中将。

ざっと集めてみた情報を確認する限りでは、なかなか非常識な立場にある奴だった。

艦隊指揮官なのはいい。どうせどの中将も多かれ少なかれ、そういう立場を持つてるもんだ。

だが、そこからが普通じゃなかった。造船総監にCP長官。普通は若造が兼任するような役職じゃねえ。

……もっとも、こいつの場合は別の意味合いもあるようだ。要



は海軍の次世代を担う奴、って事だ。当たり前だが、普通は海軍で若くして中将なんて階級にはあがれねえ。

仏のセンゴクや英雄ガープを筆頭に、多少それより若いとはいえ、十年もすればご老人って奴が大勢いる。しょうがねえ話だ。俺ら海賊と異なり、海軍という組織の中じゃあ実力だけ示せばいいってもんじゃねえ。

海軍に入り、実力を示し、実績を積み、その上で1つ1つ階段を昇っていく。当然、それには時間がかかるし、比較的若いモモンガ中将でも50前だ。

そんな中、唯一と言っていい、30代の本部中将。そりゃあ、期待も高まるだろう。現状の海軍は下手すりゃ、センゴクの引退の後釜がいねえ。今の大将連中だけじゃなく、中将連中も大半がセンゴクの引退と自分の引退に大きな差がないような連中だ。

だから、連中は期待してる、って訳だ。

次の次か？そこらあたりの世代でトップになる事を期待されてるから、今の内に経験をとばかりにあれこれとやらされてる訳だ。ま、今回はそれが行き過ぎって事でストップがかかった辺りかね。

「土産だ」

用意してきた酒をドン、と卓上に置く。向こうはチラリと視線を向けると、適当につまみを用意していた。

「……それで、何の用だ？」

「つれないねえ。海軍と海賊とはいえ、こっちは王下七武海って事で、お前らと仕事が重なる事もあるんだ。挨拶に来て、何か問題でもあるのかい？」

封をきった酒を注ぎながら、互いに会話を交わす。

……微妙だな。いや、酒じゃねえ。目の前のこの中将殿だ。

緊張しているようにも見える、だが、リラックスしているようにも見える。策を巡らしているようにも見えるし、何も考えていないように見える。……確か、アスラ中将は世界政府の外交官でもあったな。七面倒くさい王族貴族どもと渡り合うだけの腹と頭は持つているって事か。実力は……弱けりやこつちは楽だが、そんな奴が本部中将にこの年でなれる訳がないな。

ただ、1つだけ確信出来る事がある。

それは、奴もまた俺を観察している、って事だ。さて、それじゃしばらく会話を楽しむとするかな。

「俺は最近、アラバスタ王国に居を構えてるんだがな、なんか王国に困った事でもあるかい？CP長官殿」

「さすがに耳が早いな……しかし、おかしな事を聞くな。海賊のお前が王国の事を心配するなど」

「そりゃあ、気になるさ。今の俺は世界政府の直属の王下七武海、民衆の味方だぜ？」

「ああ、そうだったな。なに、今の所特に困った問題などないさ。平和なものだ」

まずは互いに小手調べ。

どうせ、互いに思ってる事は同じだろう。ぬけぬけと面の皮の厚い野郎だ、ってな。

こいつがCP長官である以上、先だつてのアラバスタ王国の事など先刻承知だろう。無論、知らない、下の連中が勝手に動いてるって可能性がない訳じゃねえが、そういう馬鹿じゃねえだろう？ええ？

「そいつは良かった。何しろ、先だつて港で火事があつてなあ？  
そこで怪しい姿を見かけたつて話があつたんだ」

「ほう、そいつは初耳だな。さすがに、各国ごとの細かな件に關しては目が行き届かなくてな」

「そうかい、でまあ、その怪しい姿つて奴が俺が調べた限りじゃ、  
CPのメンバーつて話があつてな？ 本当の所はどうなんだい？」

「ほう、そんな噂があるのか。生憎、うちはあくまで世界政府の  
下っ端だからな…… 各国で騒動起こすような真似はしてないさ」

敢えて直球で切り込んでみたが、本当に驚いてるように見える。  
いいねえ、こういう腹芸が出来る奴は好きだぜ。

まあ、こっちはこつちで、『知つてるぜ』つて告げて、牽制する  
事が目的だ。何故知つてるのか、Mr. 2が俺と繋がつてる事がば  
れる危険がないか？ ないねえ、最初から知つてるのでもない限  
り、せいぜいMr. 2から情報が流れたと思う程度だろう。

そう、問題は『最初から』知つてるかどうか、だ。

こいつが知つてるのが、ダンスパウダーの一件だけならまだ何と  
でもなる。だが、それにしても先だつてのMr. 2と真つ向やりあ  
つた奴が気になる。俺の勘がビリビリと危険を訴えてきやがるんだ。  
そして、こんな時、勘を無視したらろくな事にならねえ。

しばらくなごやかな（に見える）雑談が続く。

「ま、CPメンバーつてのは噂だな」

「そつだろうな、こちらは誰も動かしていないというのに……」

ぬけぬけと語ってくれやがる……。

「そういやオカマがやりあった、アラバスタ周辺担当のCP2って今度の組織改訂でどうなるんだ？自分の住んでる周辺がどうなるか気になるんだが」

「その辺は企業秘密だ」

「まあ、そりゃそうだろうがな」

全く顔に動揺も何も出さない野郎だ。おっと、酒も気付けば、もう残り少ねえな。向こうも気付いたか。

「代わりを出そうか？」

「いや、ちょうどいいから、これで失礼するさ。こっちも案外忙しくてな？」

断って、立ち上がる。まあ、あちらさんも社交辞令って奴だろうな。それなりに強い酒を持って来たつもりだったが、酔った様子はねえな……。

向こうも立ち上がった所で、一言。

「ところで……」

「うん？」

「おたく、ジンベエやミホークと手合わせしてるそうじゃないか。俺ともお願い出来るかい？」

「ふむ……」

互いにニヤリと笑いあう。

ああ、そうだな。俺達海賊とお前ら海軍は、本来こんな関係が似つかわしい。

「いいだろう、暇をもてあましていた所だ」

さて、目的は果たした。

気付いてるのか、気付いてねえのか……少なくとも、CPがこいつの命で動いてるのは確信出来た。くくっ、酒が入って気が緩んだか、それとも故意か……こちらへの警告って可能性もあるな。

とりあえず、軽くこいつの力って奴を見せてもらおうとするか。

## 第65話・会談（後書き）

クロコダイルとの会談でした

陰謀会話って難しいですよ

露骨すぎると片方が間抜けに見えるし、ある程度は露骨じゃないと『え？これで分かるかあ？それは無理だろ』ってなっても駄目だし…  
ほどほどが必要なのですが、難しいです

ちなみに、今回砂ワニがアスラの介入に気付いたのは、『オカマがやりあつた』という部分をアスラがあつさりスルーした為、クロコダイルは『こいつ既に詳細を知っているな』『やりあつたのがCPなのは確定か』と判断した次第です  
露骨すぎましたかね？

海賊はいうなればベンチャー企業

規模は小さいけれど、実力さえ示せば若造でも社長です

海軍はこちらは大企業。

安定はしてるけど、上へ上がるにはそれ相応の時間も必要です

それだけに世代交代が上手くいくかは大変ややこしい問題だとは思  
います

この世界にお茶の木はあるのかな？

紅茶があれば、煎茶や烏龍茶も可能な訳ですが……多分出すと思  
いますw

結局、あれは葉の醗酵とか加工とかの違いがあるだけですからね

## 第66話・死合（前書き）

>がぶりえるさんへ

申し訳ないです

昨日、返信コメントをミスって、削除・書き直ししようとした所、間違えて、コメントの削除ボタンを押してしまいました  
大変失礼致しました

## 第66話・死合

さて、会話は終わりだ。

先程の会話はCP2という名をクロコダイルが上げた時点で、こちらも妥協した。

ある程度は掴まれているのは承知の上だ。むしろ、あれでクロコダイルが『ダンスパウダー』の件に本来自分がいなかった歴史同様関わっていると分かっただけ良しとしよう。

向こうが踏み込んだので、交換として情報を提供しておく。

こちらの最優先隠蔽事項は『CP9が動いてる事』と『クロコダイルの本当の狙いを知っている事』の2つ。それらをどうでもいい情報でどれだけ攪乱出来るか、だ。

そんな会話をしていたからだろう、体を動かさないか、という話にのったのは。

戦場として選んだのは、マリンフォード周辺に設けられた海軍の鍛錬施設の1つ。

その中でも割りとはばり、というか廃墟前の設備だった。

マリンフォード自体はそれなりの大きさがあるとはいえ、所詮は小さな島だ。国サイズの島とは違う。その為、そこで暴れると特に大将や中将クラスの場合、マリンフォード自体に大きな損害を与えかねない。

……その実例は、アスラにも分かる。原作では、白ひげがマリンフォードに1人で大損害を与えていたし、黒ひげが能力を奪った後は、島自体を周辺の海域ごと傾けていた。

こうした事から周囲の小島を利用した鍛錬施設が設けられていた。

「また、随分とボロボロな場所を選んだな、おい」



どこか面白そうに葉巻を再び啜え、クロコダイルが言った。  
あちらこちらが崩れ、管理を行なっている筈の海兵すら姿を見ない。

「当然だろうな、ここは元々損傷が激しく、今度取り壊しが決まっている設備だ……逆に言えば、壊れても問題ないし、お前の能力を目撃する海兵もいない」

「ほう、優しいこつたな」

クロコダイルとしても、その方が望ましいのは確かだ。何も好き好んで、自分の手の内の全容を海軍にさらけ出してやる気はない。それなのに、今アストラとこうして遣り合おうとしているのは、どこか矛盾していると自分でも理解しているが……。

「さて、それじゃあ、始めるか……」

「ああ」

すつつ、とクロコダイルが身を沈める。

生憎、ここらの場所はどうにも湿気が多い。

しようがない話ではある。小さな島だ、海からの湿気は存分に流れ込むし、そもそも海軍の本拠地の傍が荒れ果てている訳もない。

この周辺の小島はこうした訓練施設や海軍の造船所に停泊施設などが多数ある。

この場所も今こそこうしてボロボロだが、遠からず綺麗に再び蘇るのだろう。……もっとも、この勝負の後で形が残っていれば、の話だが……。

「グラウンド・デス  
「浸食輪廻」

地面に触れたクロコダイルの掌を中心として、急速に大地が砂に還る。

クロコダイルの大技の1つだが、今この場所で、自分と同等かひよっとしたら格上かもしれない相手に、手加減も何も無い。そもそも、まずは自分の有利な地形にするのは当然の話だ。

(さあ、どうする?)

そんな目でクロコダイルはアスラを見ていたが、アスラ自身に避ける気はない。

この戦いは命まではとらない戦いだ、ならばここで試しておくに越した事はない……。

そうして、砂はアスラの足元に迫り……そのままアスラに何ら影響を与える事なく、周辺一体を砂漠へと化した。

「なに？」

疑念の籠った声をクロコダイルが上げる。

当然だろう、何も影響が出ないとは思わなかったのだ。原作で、ルフィの草履でさえ枯れていたように、接触すれば何かの影響が出るとクロコダイルも判断していたのだろうか……。

『荊』

今度はこちらの番だと言わんばかりに、瞬時にアスラがクロコダイルの内懐に入り込む。

『シガン  
指銃・黄蓮  
オウレン』

連射された指銃がクロコダイルの全身を穴だらけにするが、クロコダイルは平然としたものだ。  
サラサラと流れる砂が空いた穴を瞬く間に埋め、穴を無視して、クロコダイルが踏み込む。

「三日月形砂丘！」  
バルハン

三日月形の砂が、アスラの体を通り抜け……何も影響を及ぼさなかった。

1つ舌打ちして、クロコダイルが距離を取る。  
にらみ合う中で、双方が今までの攻防を分析していた。

アスラは……。

(……原作に自分が介入を続けてきたから、クロコダイルの能力が変わっていないか不安だったが……どうやら同じくスナスの実の砂人間なのは変わらんか。これで、ルツチらにクロコダイルとやり合う際の注意が出来るな)

クロコダイルは……。

(……最初の浸食輪廻の時は、或いは僅かに空中に浮かんでいるという考えも視野に入れてたが……三日月形砂丘も効かないとなると、純粹に俺の水分を吸うという能力を無効化可能な悪魔の実の能力者と考えた方がいいか。……厄介な野郎だな)

「砂漠の向日葵」  
デザート・ジラソール

クロコダイルがアスラの周囲の砂を流砂と化して、呑み込もうと図るが。

『剃刀』

月歩と剃の合わせ技で一気にクロコダイルの上空へと移動し、足を振り上げる。

『嵐脚・断!』

巨大な真空の刃がクロコダイルを頭から両断する。

だが、当然、自然系ロキアの能力者であるクロコダイルに効果がある筈もない。

「おいおい、殺す気か？」

そう言いつつ、掌にくるくると回る砂。

あれは、とアスラが思った次の瞬間には、巨大な砂嵐がアスラを呑みこんだ。当たり前だが、アスラは空を飛べない。月歩はその優れた脚力で、あくまで強引に空を駆けているだけだ。だから、こうして空を掻き乱されては、機動は困難になる。

クロコダイルの得意技の1つ、『砂嵐』サーブルス。

それに呑みこまれた為に、やむをえず地上に降り立った所を、今度はお返しとばかりにクロコダイルが狙う。

「砂漠の金剛宝刀」デザート・ラスパーダ

四つの砂の刃が地上に降り立ったばかりのアスラを襲い、その内2本までは交わすも、残り2本が直撃した。

体の3分の1程が3枚に卸されて……次の瞬間には元に戻る。

試合と言いつつも、お互いの攻撃はいずれも普通の相手ならば致命傷。試合という名の殺し合い。

アスラがあっさりと体を再生した、それを合図として、しばらく双方とも睨み合い……。やがて、クロコダイルが、ふう、と溜息をついて、両手を上へと上げた。

「やめだ、やめだ。どうやら、お互い相手に攻撃しても意味ねえらしいな」

「そのようだな」

無論、互いにまだ奥の手はある。

クロコダイルは毒などを隠し持っているし、アスラも覇気を用いていない。

だが、双方とも分かっていた。これ以上は殺し合いになると……今は、それは双方とも避けたい。アスラにしてみれば、王下七武海の一角を手合わせで殺害する事態は避けたい。まだ、十分な証拠は握っていないのだ。

クロコダイルはクロコダイルで、こんな海軍本部の傍の島で、海軍本部中將を殺すなどという事態になるのは避けたいと思っている。簡単に倒せる相手ではないのは十分分かったし、自分が倒される可能性もある。これ以上やりあってもメリットはない。

先程復活する時にアスラの傷口から見えた銀色からある程度推測も出来た事であるし。

だからこそ、どちらともなく、互いの船を呼び、帰還する事にした。

背を向けたアスラに向け、ふとアスラを半身で振り向いたクロコダイルが声を掛ける。

「そうそう、実は最近、予想外の大損してな……」

「……？」

おそらく、ダンスパウダーの事か、あたりをつけるが、何故ここでそれを言い出すのか、アスラも半身になって、クロコダイルに視線を向ける。

「しばらくは大人しく貯蓄する事にしたよ。お前さんも予想外の事態には気をつけな」

それだけ言うと、クロコダイルは今度こそ背を向け、立ち去っていった。

その背を見送りながら、アスラは呟いた。

「……厄介な野郎だ、絶対分かって言いやがったな」

素直に受け取れば、単なる金の話だ。

だが、裏読みをすれば、今回のダンスパウダー殲滅作戦で、予想外の被害が出たから、しばらくは大人しく戦力補充でもして大人しくしてるとも聞こえる。問題は、もし、そうだとしてもそれが本当なのか分らない、という事だ。

或いは、そう思わせて、むしろだからこそ活発に動くのかもしれない。

ダンスパウダーの陰で動いているのにこちらが気付いているのに、向こうも気付いたか？とも思うが、いや、違っだろうと思いつく。おそらく、これもまたこちらの動きを探る為だという事か。

……どちらでもいいのだろう。これでこちらの動きが活発になるうが、停滞しようが。

活発になれば、それだけこちらの動きを探るのが容易になる。停滞すれば、戦力補充など力を蓄えるのは容易になる。

「……まだまだ、先は長そうだな」

たとえば、クロコダイルの狙いが分かっているとしても、それを証明出来るだけの証拠を集めなければ、王下七武海の一角に対して公然と手を出す事は出来ない。

それが分かるだけに……原作でCP9が何年も潜入捜査していた事を思い出し、胃が痛くなりそうだと思いつつ、アスラも船へと戻っていった。

余談だが、この鍛錬場所は当初の計画が、島の半分以上が砂と化してしまった為に完全に崩壊し、それならばと近場なのを生かして、マリンフォード在住の家族の海水浴などの遊び場として再建される事になる。……ちなみに、この再建計画の責任者は建造・建設に権限を持つ緊急応部隊と造船総監双方を兼任するアスラだった事は因果応報という言葉を当人に思い出させるには十分だったという。

第66話・死合（後書き）

明日は、センゴク元帥らのお休みの日々を書こうと思っています

アスラがこんな事してる裏では、元帥達は何をしていたのか



## 第67話・休暇（赤犬大将編）

忙しい日々から離れ、ふと訪れた暇な時間。

アスラから譲られた、最近ちよいとお気に入りの煎茶を淹れて、一すすり。

ふう、と息をついた。

我武者羅にやって来た為に、趣味もなく、かといって黄猿や青キジら同僚は殆どがこれまでのサボリの結果として、今頃は仕事に追われまくっている筈だ。

数少ない休暇組であるセンゴク元帥やアスラは久方の休みという事で、家族サービスをしているかもしれない。そんな処へ割り込むのは気が引ける。

大将という階級故に無駄に広い家で、サカズキ大将はぼんやりと何をするでもなく、ただ一言ポツリと呟いた。

「……………暇じゃのう」

思えば、若い頃に妻子を失って以来、無我夢中だった。

自分があの時……………なまじ情けをかけたが為に、全てを失い、それ故に海賊を憎み、殲滅してきた。それ自体は今でも変わらず、諸事情から前線に出る事は減ったが、一度前線に出れば、未だ殲滅戦を展開する事に変わりはない。

ただまあ、平時に戻った時、ふと寂しさを覚える事がある、という所が変わった所か。

ついでに言うならば、サカズキは海賊との戦いで容赦ないのであって、それ以外でなら案外話を聞いたりする事もあったりするのだが、何しろ普段の殲滅戦闘の有様が有様なので、案外知られていなかったりする。まあ、それ以外の相手などそうそういないのも事実なのだが……………。

「……少し外を回ってくるか」

このままぼうつとしていたのも何とも不健康な気がする。

そう思ったサカズキは、どれ、と杖を片手に立ち上がった。

衣服は普段と異なり、最近、作られるようになった作務衣と呼ばれるものだ。実は、これらを含めて最近色々これまでと変わったものが作られるようになった。

理由は単純で、元の世界を懐かしんだアスラが作らせていたりする。

変なものは作らせていない、というか、割と人気が高いので問題は起きていないし、そもそもこうした生産設備を一括して管理するのは造船総監、つまりアスラだったりする。

造船総監と言うと、造船だけ担当しているように思えるが、実際は海軍の生産設備全般を担当している。兵器は艦に搭載する以上、造船と密接に関係してくるし、衣類などはわざわざ部署を設けても数は結構なものになるが、将官を置く程ではないので結局造船総監に一括で纏められていたりする。

この作務衣も、『良ければ家にいる時にでも』とアスラから贈られたものだったが、まあ、確かに家にいる時まで堅苦しい服装を着込む事もなかるう、と着てからは、案外気に入っていたりする。こうしていると、本当に敵ついでに、普通の隠居という風情だったもつとも、見る者が見れば、目なり仕草なりには今も尚最前線で戦う現役が纏う空気とでも言うべきものがあつたが。

のんびりとマリンフォードを歩く。

マリンフォードは確かに海軍の街だが、海軍の要塞と戦闘設備だけが全てではなく、むしろ大部分を占めるのは海兵の家族が住む居住区と彼らの生活を支える商業区だ。

むしろ、戦闘施設は要塞とマリンフォードを囲む城壁部分であり、

訓練施設や主たる造船設備など海軍の重要施設の大多数はマリノフォード周辺の島にある。まあ、もちろん、マリノフォードにも訓練施設はそれなりの数があるのだが。さすがに訓練の度に必ず船に乗らないといけない、というのは面倒臭い。ただ、中将クラス以上同士の訓練となると、崩壊しかねないのだ。

実際、以前にはセンゴク元帥とガーブ中将の喧嘩で施設がまとめて壊れた、とか、黄猿大将とアスラ中将の試合でまとめて施設が破壊されたという実例もある事であるし……。

とはいえ、それも要塞付近に限られ、生活の場とは関係ない。それだけに、マリノフォードを歩けば、平穏な日々が広がっていた。

ある意味、この光景を守りたいからこそ、海兵は命をかけるのであり、だからこそ、こうして日常を味わう事は大切だ。改めて歩いていて、サカズキはそう思う。

「そういう意味では、アスラも家族と過ごす時間をもう少し取らせるべきじゃろうな……」

確かに仕事を押し付けすぎたかもしれない。

幾等給与は増えるとはいえ、さすがにそろそろ仕事を絞るべきだろう。造船総監とCP長官はともかくとして、緊急即応部隊と護衛艦隊は別の中將に預けた方がいいのかもしれない。

(しかし、そうすると旗艦の変更もせねばならんな……)

現在の旗艦たるマーキュリー号から、より速度の出る高速戦艦へと変えて、ヘルメス号を普通の乗艦として使っている状況を改善すべきだろう、と思う。マーキュリー号は艦内病院すら備える大型艦なので、護衛艦隊の旗艦としてそのまま使うのが相応しい筈だ。

そうした事を考えながら、一件の酒場ののれんをくぐる。

新世界にあるワノ国風と呼ばれる雰囲気のお店で、米から作られた

酒ライスワインを中心に、新鮮な魚を用いて、生で食べるという変わった調理方法などで知られている店だ。

とりあえず、ライスワインと刺身、それにつけ合わせを適当に頼み、やがて運ばれてきた酒と肴で一杯やる。

周囲には仕事帰りや、或いは非番の海兵らで賑やかだった。昔を懐かしみながら、穏やかな気分になっていると、急に店の一角が騒がしくなった。

なんじゃ、と思い、そちらに視線をやると、将官らと思われる一団が店の人間に絡んでいるらしい。

周囲の声を聞くと、酔ってやって来た拳句に、騒ぎ出して、周囲の人間に迷惑をかけ出した。将官なので、周囲の人間も言い出せないでいる中、さすがに店の人間がもう少し静かにしてもらえないかお願いに行った所、絡みだしたらしい。

さすがに、見過ごせず、サカズキは杖をつく、そちらへと歩いていった。

「おい、貴様ら」

「あん？」

階級を見ると、少将らしい。他にもう一人少将がいて、後は大佐に中佐が合計5名程いる。

「ここは騒ぐ所じゃないわい。静かにせい」

「うるせえなあ、ジジイはすっこんでろよ！」

確かに、今のサカズキの姿はどこぞの隠居した爺さんと思えなくもないのだが……。

「……貴様ら、礼儀というもんがわかつたらんようじゃのう」

「ああ？爺さん、怒ったのか？」

相当酔っているらしく、ふてぶてしい態度で睨んでくる。

「……少し性根を叩き直してやるうか」

「はっ、いいじゃねえか。そこまで言うんなら、相手してもらおうじゃねえか、なあ？皆！」

少将が言うと、他の連中もやいのやいのと囃し立てる。それを聞く度に、サカズキの額にビキリと青筋が浮かんでいるのだが、彼らは全く気がついていない。

一部の海兵が心配して声を掛けてきたのだが、サカズキは心配いらんと彼らと共に店を出た。

更に一部の海兵はこの状況を心配して、駆け出した。おそらく、上に報告に向かったのだろう。

そうして、マリンフォードにある鍛錬施設の1つへと到着した。

「さあて、そんなじゃジジイの相手は誰から……「構わん、全員まとめてかかってこんかい！」……後悔するぞ、ジジイ」

既に限界に近い状態にあったサカズキが杖をついた状態で怒鳴りつけると、彼らは一斉に攻撃を仕掛けた。

ある者は嵐脚を放ち、一部の者は悪魔の実の能力者だったらしく、その能力でもって攻撃を仕掛ける。

盛大に砂煙が上がり、管理の海兵がさすがに騒ぎ出す。

「ちよ、ちよっと！やりすぎですよ！相手はご老人……！」

「はっ、あのジジイがかかってこいと言ったんだぜ？いいから、すっこんでろよ！なあに、これで大怪我しても……」

「誰が怪我をしとるじゃと？」

海兵と少将の遣り取りを遮るようにして、重厚な声が響いた。さすがにぎよっとして、少将大佐中佐らが砂煙の方向を見ると、そこには平然と怪我1つなく立つサカズキがいた。

「……貴様らが海兵とは、恥知らずめが……！徹底的に叩き直してくれるから覚悟せい」

その言葉と共に、ゴボゴボと両肩が粟立ち、真つ赤なマグマとなつて流れ落ちる。

足元にわだかまったマグマから、サカズキの胴体よりも太い2対の竜がその巨大な体を伸ばし、頭部を一団に向けた。

「ろ、自然系ロキア！？」

「あれ？確か、あの能力って……」

ようやっと酒が抜けてきたのか、首を傾げる一団だったが、もう遅い。

「そういえば名乗つたらんかったのう……儂の名はサカズキ、海軍本部赤犬大将の方が通りがええか？」

赤犬大将、その言葉を聞いた瞬間、完全に酔いが吹っ飛んだのだろつ、少将に大佐中佐全員の顔が青を通り越して白くなる。



第67話 - 休暇（赤犬大将編）（後書き）

という訳で赤犬大将編の休暇のある一日をお送りしました

まあ、実際海軍本部だろうとやはり問題を起こす奴はいると思うんですよね

明日はセンゴク元帥編をお送りします



## 第68話・休暇（センゴク元帥）

「……ふっ」

1つの解を割り出し、センゴク元帥は満足げに息をついて、お茶をすすった。

アスラ中將が海軍に入ってから、幾つかの遊戯も考え出した。

今、センゴクがやっているのも、そうした遊戯の1つ、将棋だ。

なまじ、この世界では遊びというものが少なかつた為に、カードやチェスに相当するものがある程度だった。それ故に、遊びに飢えたアスラが以前に幾つかの遊戯を考え出したのだった。

さすがにコンピュータゲームには手が届かない為、例えば、それは将棋であり、囲碁であり、オセロであり、TCGだった訳だが：

…この内、TCGは想像以上に流行らなかつた。結局の所、島ごとの需要しかない事や所詮カードの種類がアスラの知識の範囲内であり、種類が限られていた事が原因だろうとアスラは判断したが、反面、他の遊び、特に将棋やオセロは爆発的に広まつた。

将棋とチェスの最大の違いは、取った駒を自分の手駒として扱えるかどうか、という事にある。

センゴク元帥が気に入ったのは、そこだ。

彼は仏のセンゴクと呼ばれているが、同時に智将とも呼ばれている。そうした彼にとって、相手の勢力を或いは利を持って、或いは謀略を持って敵を味方としてしまう、という策は当たり前だったが、この将棋は擬似的ながら、それを再現出来ると感じた次第だ。

すっかり嵌ったセンゴク元帥にとって、最近同好の輪が広がり、同じくアスラが概念を説明した詰め将棋はセンゴク元帥にとって暇潰しの格好の遊びになっていた。

こうした概念が一旦広まると、次から次へと新しい詰め将棋の盤面が紹介されたりする状況だったのは、それだけ娯楽に飢えていた

のだろう、人々は……。元の世界からの借り物と自覚していたアスラは生活に困っていない事もあり、こうした遊びを自由に解放していたので普通に紙や板切れに書いても遊べるという事が急速に世界中に広まる要因となっていた。

また、海軍にとって重要なのは、アスラが元の世界では当たり前だった、駒に磁石を仕込む、という手法を取った事だ。海軍の船に娯楽として搭載されたこれらは、海が多少荒れようが、普通に遊ぶ事が出来るとしてよりカードに負けず、大勢の人間を惹き付ける要因となった。

「……ふむ」

パチリ、と新たに発売された詰め将棋の本を元にセンゴクは駒を置く。

何しろ、まだ世界に広まって10年と過ぎていない遊戯だ。センゴクにとっても予想外の盤面が出てきたりして、実に面白い。ちなみに、遊びを考案した、とされるアスラ当人は案外将棋とか弱かったりして、現在ではセンゴク元帥らに勝てなかったりする。

「あなた、お昼ご飯ですよ」

「む？おお、もうそんな時間か」

楽しい時間とはついつい、時間を忘れて没頭してしまうものだな、と苦笑を浮かべながら、センゴク元帥は立ち上がった。

センゴク元帥自身は幸い未だ奥方と死別していないが、亡くなった者も多い。軍務経験が長いと、辛い思い出もある。

例えば、過去には彼を庇って死んだ嘗ての戦友の子が、父を失い、その後の苦勞で母をも失い、海賊となってセンゴク元帥に怨みを抱き、刃を向けてきた事もある。或いは、戦傷で引退した嘗ての仲間

が、たまたま隠居した島の近くを通りかかった為に立ち寄った所、周辺の支部が放置していた海賊に襲われた村で、村は殆どボロボロ、そんな中すっかり痩せ細り、衰えた彼が不自由な体でそれでも畑を耕していた、という事もあった。

ただ、そうした思い出もまた、大事な思い出だ。

辛くとも、それでも前へと進まねばならない。その覚悟を決めさせた思い出でもある。

そういう意味合いでは、アスラはそうした経験が少ない、というか殆どない。或いは、自身が敵わない圧倒的強者との戦いというものを経験していない。そのあたりが次世代を担う者としては不安材料だ。

……とはいえ、後半に関しては現状のアスラがそこまでの危機感を抱くとすれば、それこそ四皇の一角でも相手にせざるをえまい。

(まったくままならんものだ)

「あなたーご飯冷めちゃいますよー？」

「ああ、すまんすまん」

つい考え事に意識が集中してしまったようだ。慌てて、センゴク元帥は居間へと向かった。

気付けば、夕方になっていた。

昨日はのんびりと妻とマリンフォードを何をするでもなく、2人で回った。

お互いに何を話すでもなく、何をするでもなく、ただ静かに散策をし、途中で公園のベンチでただ穏やかに時を過ごす。古女房ゆえの気のおけない、傍にるのが自然な関係。

とりあえず、明日の午前中に明後日の分まで何とか処理して、明後日からしあさつてにかけて、日帰りだが近くの温泉保養施設へと行って来る予定だ。何しろ、ここ何年もそういう夫婦2人でどこかに行く、という余裕がなかった事でもあるし。そう明日からの事に考えを向けていると。

「あなたくガープさんが来られましたよ」

そう妻が声をかけた。

上がつてもらうよう、センゴクが声を掛けると、しばらくして、ガープが酒瓶を片手にやって来る。

「おう、センゴク、何やら黄昏とるのう」

「仕事はどうした」

つい出る癖のようになっていいる言葉だが、さっきまでずっと書類仕事だったと何やら疲れたような様子でガープは言う。思えば、この友人とも長い付き合いだ。

本来ならば、彼は自分同様大将へと昇進してもおかしくない立場だった。

悪魔の実の能力者でこそないが、若い時分から無茶はするものの、幾つもの功績を挙げ、実力も人望も高かった。先代のコング元帥からも幾度となく大将への昇進を打診され、その全てを『柄ではない』何かをするにはこのぐらいが適当だから』と全て断ってきた。

そんなガープは、今でも海軍に残り、自分へとある意味傍若無人、ある意味気さくに声を掛ける、数少ない友だ。

若い頃からの友人達も、その殆どはある者は海賊との戦いで命を落とし、ある者は引退し、ある者は病気や怪我で、ある者は出世街道から外れて、中には海賊へと身をやつした者も、と様々な理由で

海軍本部から姿を消していった。

今でも海軍に残る、なんだかんだで気のおけない仲にある者など、  
ガープを除けば、おつるさんぐらいのものだろう。

「……昔を思い出しとるのか？」

「……ああ、仕事に追われている時はともかく、こうしてふと時間  
間が出来ると、な」

ふう、と溜息をつき、さりげなく妻が持って来てくれたつまみと  
杯にガープが持って来た酒を注ぐ。

「お互い、長生きしてもうたからな」

「……ああ」

どこかしんみりとした空気が流れる。

ガープとて、普段は笑っているが、息子の事では忸怩たるものがあるだろう。……ドラゴンの事はセンゴクも知っている。生真面目な、人間味のある、苦しむ者を見捨てられない人間だった。……だからこそ、あんな道を選んでしまったのだろう。

センゴクとて、現在の世界に何も思わない訳ではない。

嘗ての友の中で、海軍を去った、或いは海賊に身を落とした者の中には、現在の王族貴族の暴虐に、正義を背負いながらの矛盾に、  
現実に打ちのめされてそうした道を選んだ者もいる。

……海軍と海賊として遭遇した時に、その魂の叫びとでもいうべきものを投げかけられて、内心で全く動じなかった訳ではない。だが、それでも海賊は叩き潰してきた。

これでいいのか、他にも道はあったのではないか、そう問いを続けつつ……気付けば、こんな所まで来ていた。

互いに、相手の気持ち分かるが故に、口数の減る、けれどどこか安心出来る空間。

長年、共に背を預け、互いに命を預けて戦ってきた男同士だからこそ分かり合える、そんな雰囲気は確かにそこにはあった。

とつぷりと日が暮れる頃、ガープはセンゴクの家から帰って行った。

「おう、センゴク」

「……なんだ」

「あまり背負いすぎるな。偶には肩の力を抜け。……老けるぞ」

「ふん、先に白髪だらけになった奴に言われたくはないな」

違う、そう言って、ガープは笑いながら、片手を上げて去っていった。

その姿を見送りながら、どこか肩が軽くなったような気がした。

ガープの姿が見えなくなってから、さて、家に入るか、と振り向いた時、向こうから見知った顔が歩いてくるのを見かけた。全身傷だらけの男と葉巻を啜えた男、どこかその全身から疲労が漂っている。とはいえ、その顔を忘れる訳がない。

「どうした、ドーベルマン中将、ヤマカジ中将」

「……!?これは、センゴク元帥」

敬礼してくる2人に、センゴクもまた敬礼で返す。

「仕事が終わったか？」

「はい……どうにも疲れますな。と言いますか、これだけの仕事をこれまで4人にお任せしていたのかと思うと、内心忸怩たる者を感じます」

「同感ですな。まあ、ガープ中将に逃げられたのも痛かったのですが……」

ねぎらいの言葉をかけようとしたセンゴクだったが、ヤマカジの言葉に聞き逃せない単語があった気がした。

「ガープが逃げ出した、だと？」

「はあ、夕方までは何とか我々も逃がさないよう見張っていたのですが……一瞬の隙をつかれて逃亡されて……」

「一時は追い詰めたのですが、この近辺で完全に姿を見失い……仕事を放置しておく訳にもいかず、やむをえず帰還した次第で……あの、センゴク元帥、どうかされましたか？」

次第に顔面が引きつり、ふるふる震えだした元帥の姿に中将2人も違和感を感じる。

当のセンゴクは、たとえば、ようやくとガープが何故突然うちに来たのか、理解出来て怒りが湧きあがってきた。何の事はない、まあ確かに昔を思い出したというのがない訳ではないだろうが、最大の狙いは隠れる先として選んだという事か！

海兵らもまさか、元帥の家に踏み込む訳にもいかないし、中将ら

は中将らで、まさかガーブが逃げ込む先に何時も怒鳴られているセンゴク元帥の所を選ぶとは思わなかったのだろう。

それが分かっただけに、思わずセンゴク元帥は怒声を上げずにはいらなかった。

「ガ

プ

！」

……その怒声はマリンフォード全域に響き渡ったそうである。



第68話・休暇（センゴク元帥）（後書き）

というセンゴクさんのある日の休暇でした

さて、次は一応おつるさんになるんですが……  
あの人難しい……

第69話 - 休暇（大参謀つる）（前書き）

この人、あまりどういいう人かでてないので、独自解釈が多々あります  
ご了承ください

## 第69話・休暇（大参謀つる）

大参謀つるの朝は早い。というか、仮にも長い事軍人をやつてきた人間が朝寝坊するはずもない。

朝起きると、まず、おつるさんは亡くなった夫と息子の遺影に手を合わせる。

退役大佐だった夫は普通に病気でぽっくり逝ったが、息子は海賊との戦闘で逝った。

息子は結婚していたが、嫁も海軍軍人で現在は孫ともども南の海だ。おつるさんの権限があれば、マリンフォードに呼び寄せる事も出来たが、夫の死の原因となった海賊を捕らえるまでは、と現在も南の海にいる。

グランドラインに入ってこようとすると動きは1度ならず見せていたが、その度に嫁の率いる部隊との戦闘で決着がつかず押し返されているという。

先日には手紙が来た。

向こうも幾度となくこちらに阻まれた為に苛立っている。おそらくは次こそが決戦になるだろうと。

『無論、勝利するつもりで戦いますが、それでも駄目だった時は、後をよろしくお願い致します』

そんな手紙が届いたのは、つい先日の事だ。

勝つて欲しいとは思つ。

けれど、正義が必ず勝つのはお話の世界だけだ。

現実には海軍が敗北し、或いは海軍が墮落する事も多々あるのが現実だ。大体、海軍が必ず勝てるのならば、大海賊時代なぞと呼ばれたりはしていない。

遺影に手を合わせ、勝利を願う。

その後は午前中は仕事に出る。

だが、休暇中という事もあり、その量は少ない。

手早く片付けると、書類の山に埋もれる黄猿や青キジ、他の中將達に挨拶して一足先に帰る。なんだか、半死半生にも見えるが、まあ大丈夫だろう、これまで私ら4人で片付けてきた仕事だ。

「それじゃ、先にかかるよ、しつかりな」

さて、それじゃとりあえず晩御飯の材料でも買って帰るかね。

材料を買っての帰り道、幾人かの知り合いと会い、話をする。

……けど、こうしてみると、随分と昔馴染みも減っちゃったねえ。長生きすると、どうしてよね。

ふと、自宅に戻り、茶を啜りながら、これまでを振り返ってみる。

自分の場合は、まだ随分とマシだったのだろう、とふと思う。

夫も子も、嫁も孫も皆海軍だ。

そう、孫もまた海軍に入った。今は確か、嫁共々決戦に向かってる頃だろう。そのぐらいの都合ぐらいは海軍本部中將であってもつけてもいいだろうしね。

だが、こうして、身内が皆海軍というのは恵まれている。

革命軍という世界政府に真つ向喧嘩を売る組織を立ち上げ、尚且つ成功させているドラゴンという息子を持つ、ガープの所は最たるものだが、実の所真面目で正義感が強い者程、現実に出くわした時、その反動から極端に走ってしまう者が出る。

海軍は『正義』を背負う。

だが、正義とは何か、それは重い話だ。

ある者にとっての正義は、別の立場の者には正義ではない。

海軍と海賊の正義が合わないのは無論だが、時には民衆の正義と海軍の正義が合わない時もまた、ある。

そうだった時、どうするのか？

答えは簡単だ、世界政府はただ押し潰すのみだ。

橋の上の国、テキーラウルフでは単なる犯罪者のみならず、諸々の理由から世界政府への加入を拒んだ国の人間もまた強制労働で働かされている。

果たして、それは正しいのか？

今、革命軍が落とした国とて、表向きは世界政府に所属しているままなのも、そこに理由がある。革命軍は次第に規模を拡大しつつあるとはいえ、まだまだ発展途上。その落とした国全てを海軍から守りきるだけの戦力は未だ、ない。

その一方で、海軍は海軍で新世界で勃興してきた大海賊達、四皇らへの警戒を強めている。

グランドラインへと革命軍が本格的に勢力を伸ばしてきた時、その時こそが本当の意味での世界政府と革命軍の戦いが始まるのだろう。……そして、それは親と子の戦いが始まるという事でもある。

革命軍のトップを務めるドラゴンは、ガープの子だ。

当然、海軍にも多数の知り合いがいた。

真剣に語り合い、真剣に夢を語り、真剣に悩み……親とは異なる道として今、革命軍に加わっている者はドラゴンだけではない。それどころか、親子共々革命軍に加わった者さえいる。

(……心の内に確たる恥じる事のない正義を持つからこそ、海軍と戦う道を選ぶ。世の中何とも救えないねえ)

彼らの正義は堂々と誇りを持って語れる正義だ。

果たして、天竜人の、世界政府の力で押し潰す正義と比べた時、果たしてどちらが後世において正義と判断されるのか……。

(いや……愚問だったね)

正義は所詮、相対的なものだ。

世界政府が勝利すれば、今の正義が正義として残り、革命軍は悪となるだろう。逆もまたしかり、革命軍が勝利すれば、これまでの行為が行為だ、世界政府の悪行が公になり、世界政府は一夜にして悪となるだろう。

無常ではあるが、それが世の常、という奴だ。

そんな事を思った、翌朝の事。

またしても、午前中は何時ものように、と海軍要塞へとやって来た、おつるさんの所へ走って来た海兵がいた。

「つる中将閣下！電報が2通届いております！」

「ああ、そうかい」

礼を言って、受け取ったつるは、中身を見て、少し顔をほころばせる。

その様子を、同じく仕事とばかりに通りがかったセンゴクが見かけた。

「おや、どうかしたのか？」

「なに、嫁と孫からだよ」

ああ、と納得した様子のセンゴク元帥を横目に、にこやかな笑顔で、つるは仕事へと向かう。

懐に収められた2通にはそれぞれ短く。

『勝ちました!』

『勝ったよ!』

万感の思いを込めて、それだけが送られていた。晴れた空を見上げて、おつるさんは思った。

(今日はいい気持ちで仕事が出来そうだねえ)

**第69話 - 休暇（大参謀つる）（後書き）**

今回は才チなし、そしてちと短め！  
次回からはまた本編に戻ります



## 蛇足（前書き）

モルボルさんへの返信で少し書きましたが…  
当初第69話 - 休暇（大参謀つる）のオチとして予定していたお話  
です

## 蛇足

(今日はいい気持ちで仕事が出来そうだねえ)

そう思いながら、執務室へと通じる扉を開け放った、おつるさんの目に飛び込んできたのは……。

「ガープ！ 貴様やはり、昨日は書類残したまま、逃げておったな！」

「煩いわい！ 男なら過ぎた事をぐだぐだ言うてないわい！」

折角のいい気分を台無しにする馬鹿2人。

ふう、と溜息をつくとおつるさんはぐい、と腕まくりをした。  
……そして。

「全く、いい年した男2人が何やってんだい」

何事もなかったかのように、おつるさんは書類を片付けていった。その隣で、水滴をポタポタと垂らしながら、干されている男が2人。

「……お前のせいだぞ、ガープ」

「……お前が細かいのが悪いんじゃ、センゴク」

海軍最高位たる元帥と、英雄とまで讃えられる中将が洗われて干されているという、ある意味非常にシュールな光景。

書類を届けに来た海兵がぎょつとして、続いて必死に笑いを堪え

ながら下がる中……。

しかし、2人はこれ以上騒ぐ事も出来ず、ただ、時が過ぎるのを耐えるしかなかったという。

尚、この一件は海軍の黒歴史となったそうである。

蛇足（後書き）

というEDが当初予定でした  
どちらが良かったですかねー

## 第70話・バスターコール（前書き）

こつした海軍の闇や海軍の事情などを少し書いてから、エースらの話に突撃予定です

## 第70話・バスターコール

これは、あの休暇から1年程過ぎた、原作から4年程前に起きた、ある事件である。

その日、1つの連絡がセンゴク元帥に、世界政府の五老星から入った。

しばらく黙ってその電伝虫からの伝達事項を聞いていたセンゴクは、切れた後、少し考えて要塞内へ召集をかけた。

「……………」

アスラはセンゴクに呼ばれ、執務室へ向け、歩いていた。その顔は険しい。

現在のアスラの立場は、海軍本部中將として造船總監の任にある。また、世界政府の外交官とC P長官としての立場はそのままだ。

こちらは海軍本部とは命令系統が異なるからだ。緊急即応部隊と護衛艦隊は、その後赤犬大将の提言に従い、2人の中將に移管された。

これに伴い、アスラの戦艦は新鋭の高速戦艦『メルクリウス』へと変わった。現在は、それを旗艦とし、ドックなどを守る警戒艦隊を率いる形となっている。

センゴク元帥の部屋へと向かう途上で、オニグモ中將が、モモンガ中將が、ヤマカジ中將が、ストロベリー中將が途中で顔を合わせ、合流する。

「一体元帥も何の用かのう」

薄々理解しつつも、ヤマカジ中將がそう呟く。

「ふん、中将5名が揃うとなれば、アレだろうよ」

その言葉を受け、オニグモ中将が呟く。

アレ、の言葉に一同の顔が引き締まり、自然とその視線が一番若く、経験のない者、すなわちアスラ中将へと向く。他の4人を代表する形でモモンガ中将が口を開いた。

「アスラ中将、分かっていると思うが……」

「ご心配なく……お忘れですか、俺のもう一つの役職はCP長官ですよ？」

言外、既に事態を把握している、そう言われて、一同はそれ以上何かを言う必要がないと悟った。

それから先は誰も口を開く者はいなかった。

センゴク元帥は、部屋に中将5人が揃うと、厳しい表情を崩さず告げた。

「既に5人の中将が招集された、という時点で気付いている者もいると思う。バスターコールの可能性がある」

バスターコール。

5人の中将と10隻の軍艦によって行なわれる集中砲火だ。

発令は元帥と3人の大將が行なうのが基本だが、ゴールデン電伝虫が誰かに預けられていたり、世界政府からの直接命令で下される事もまた、ある。

「今回は、後者だ」

世界政府の五老星からの直接命令で、待機状態に置かれるという。おそらくは、何らかの交渉なりが行なわれているのだろう……もし、まとまらねば……その時は、という事だ。

「よろしいでしょうか」

一同を代表して、オニグモ中将が手を挙げる。

彼は中将の中でも年長に属し、こうした場合では代表としての立場となりやすい。

そのオニグモの問いとは、どこに対して何故かを聞いてもいいか、という事だった。まあ、ある意味当然の質問だ。時には何も言う事は出来ない、ただ黙って従え、という事もある。

ただ、今回はそうではなかった。

ただ、言うのはセンゴクではなかったが。

「もつともだ。アスラ、説明を」

頷き、前に出る。

一同もこの時点で、情報を掴んだのがCPだと理解する。

「歴史の本文、ポネケリフご存知だと思いますが、その情報が一部洩れた可能性があります」

一同の顔がピクリ、と動いた。

「どうやら、反世界政府組織の1つが、それを手に入れたらしく、記載されていたと思われる兵器を作っている、という話です」



「……本当に、そんなものが作れるのか？」

歴史の本文はポネクリフ解読自体が極めて困難だ。オハラのような考古学の権威とて、長い時間がかかった。

ましてや、世界政府に知られれば、即殲滅されかねない代物だ。センゴクの疑念は当然と言えるだろう。

「分かりません。ただ、不完全だとしたら、却って危険な可能性があります。……誰も、きちんと作られていない、素人がマニユアルを見ながら作った大砲を使いたいと思わないでしょうか？」

アスラの言葉に一齐に渋い表情になる。

確かに、誰もそんなものはいらない。というか、さっさと廃棄処分にしてしまいたい所だ。

成る程、不完全な情報に基づき、訳の分からない物を作っているならばとっとと早めに消してしまおうという所か。

「事情は分かったな？それでは出撃せよ」

……結果から言えば、バスターコールは発動された。

ただ、1つアスラにも想定外だったのは、民間人に多数紛れている可能性があった為に、というか反世界政府組織とは大半が一般市民をその主体とする為、見分けがつかない。

それ故に島から脱出する全ての船に対して、バスターコールが命じられた事だった。

……すなわち、皆殺し命令。

おそらく、事前に把握している情報から判断すれば、今自分の船が撃沈した大型の商船に乗っていた人々の内、実際に反世界政府組織に加わっていた者の割合は10分の1以下だろう。

「ククロコダイルめ……」

そもそも、この情報はバロツクワークスへの内偵の中から浮かび上がってきたものだった。

ククロコダイルは本当に、戦力の充実を図る方針に切りかえたらしく、あれから1年、表立った動きは見せていない。

だが、こちらを掻き回すつもりなのか、それともこちらの動きを探っているのか、自分の組織とは関係ない不満分子に情報を或いは奪われるという形で、或いは裏組織を通じて、流している。

今回もそうした一件の1つ。

正体不明の情報をニコ・ロビンに解析させ、その情報を流した。

本当に使える物ならそれでよし、ロビンが嘘をついているなり、或いは危険過ぎて取り扱いが困難なりで、爆発なり起こしたならそれもそれで何かに使える。

今回流された情報は、おそらく歴史の本文の写しの写し、或いはもっと間に入るかもしれない。

ククロコダイルでなくとも、危なすぎて使う気になれないだろう。実際、今回に関してはロビンに解析はさせたものの、使い物にならないだろうと判断していた。

だが、海軍としては、僅かでも可能性があるのならば、動かねばならない。

それが本当に動くかどうか、が問題なのではない。動く可能性が、失敗して大爆発する可能性がある事が重要なのだ。

今、また新たに船が撃沈された。

投げ出された人々は必死に泳いでいるが、そこへ容赦なく砲弾が降り注ぎ、彼らもまた単なる肉塊へと変わっていく。

幾人もの上げる呪詛の声は、軍艦まで届く。

一部の海兵には吐く者や、顔を真っ青にして手を止めてしまう者、これ以上撃ちたくない拒否する者もいる。

それを或いは叱り飛ばし、或いは命令し、或いは殴り飛ばし、砲撃を続けさせる。

アスラは地獄の光景をすっかりと目に焼き付ける。この光景は自らの命令の結果として、世界政府の知る所となり、今、こうして全てが業火の中に消え去ろうとしている。

その事実から目を逸らしてはならない。自分の息子と同じぐらいの子供が必死に手を伸ばし、けれども何も掴めず海に引きずり込まれようとも、これもまた海軍の最高責任者の1人が負うべき責務。

怨まれて当然、憎まれて当然。その全てを正義の名の元に、背負う。故に、彼らの背に負う、正義の文字は重い。

この日、また地図から1つの島が消えた。

## 第70話・バスターコール（後書き）

海軍なら避けられない話として書いたものです

唐突な印象を与えるかもしれませんが……今書いておかないと書く機会がなさそうで

少しこうした海軍内部の事情、革命軍などを書いてから、エース達の旅立ちへと突入予定です

無論、クロコダイルとの陰謀も丁々発止と行なわれていますが、今回書いたように、少し活動を低下させています

## 第71話 - 海楼石

さて、今日は少し海楼石について語ろうと思う。

何故、この石の事を言い出すのか、たとえば、先だつてのバスターコールが原因だ。

あの事件は現段階でも、クロコダイルが関与したという明確な証拠が掴めてはいない。

あの事件の経緯はこうだ。

CP9、それも上手く内部に潜入したカクからブルーノを通じて連絡が入った。

『新たに入手された正体不明の情報が奪われたらしい』

首を傾げつつも、この奪われた情報を追跡した所、例の反世界政府組織へと繋がり、彼らがその入手した情報を元に、危険な兵器を世界政府に対抗する為に開発中、という所まで順当に掴んだ。

更に、深く探る内に、その兵器が歴史の本文ポネグリフに基づくものである事も判明し、さすがに捨て置く訳にはいかないと世界政府に報告する事になってしまった。

が、ここで首を傾げてしまった。

クロコダイルは何故、情報を奪われながら、それを取り戻す手筈を見つけなかったのか？

あの馬鹿にされたら、相手を確実に殺す性格の男が、今回の件に關しては一切追撃の手を出した様子はない。こんな時こそ、殺し屋であるMr.1の出番だろうに……。

更に、歴史の本文ポネグリフの情報。

……誰が翻訳したのか？

あれは世界全体を探しても、解読が可能な人間は少ない。それな

のに、反世界政府組織は情報を入手するなり、兵器の製造を開始した。つまり連中が手に入れた時点で解読が終わっていた事を意味している……あの杜撰な組織に、歴史の本文の古代文字を解読出来る人材がない事は判明済だ。

その他諸々を全部合わせ、アスラは『クロコダイルが裏で手を回している』と判断せざるをえなかった訳だが……。

カクでさえ、『正体不明の情報』までしか分からなかった。つまり、現段階で確定可能な最高のものがコレだ。これで、しかも未だ『これぞ』という証拠を掴んだ悪事を行っていないクロコダイルを追求するのは無理がある。

（ロビンは余りに杜撰な内容だから、危険性を示す為に解読したのかね……）

全ては灰となってしまうたから、その情報がどれだけ杜撰だったのかは最早知る由もないが、そのまま翻訳した所で危険すぎて使い物にならないと判断した、という事だろうか。それなら、生兵法で解読して大事件になるよりは……ニコ・ロビンの考えはそんな所かとこればかりは推測するしかない。

さて、話を戻すが、クロコダイルは自然系悪魔の実、スナスナの実の能力者だ。

そして、一方現段階でこちらのCP9は悪魔の実の能力者は獣人系が2名と超人系が1名。

如何にスナスナの実が液体に弱いとわかっていても、厳しい。

そこで、アスラは、クロコダイルに問答無用でダメージを与えられる武器を確保しよう……とはいえ、覇気なんて教えたから覚えられるものでもないし、今からではルッチらもアスラも厳しい。

そこで代わりに選んだのが、海楼石で武器が作れないか、という事だった。

海楼石。

海の化石とも呼ばれる、原作でもよく訳の分からなかった石だ。その性質は悪魔の实の能力者の能力を封じる力を持ち、力づくで壊せないというかダイヤモンドより硬く、その癖手錠やら建物やらの建築素材にも使われるなど加工しやすい(?)という何とも矛盾した代物だ。

こんなアイテムなのに、武器として使用される光景はるくに見た覚えがない。

当初こそ、スモーカーが能力者を捕らえる網や、自身の十手などに組み込んでいたが……かの白ひげとの戦争でさえ、海楼石の一番隊隊長マルコの手に、オニグモ中将が嵌めた手錠だけだった。だが、クロコダイルと戦う可能性があるなら、海楼石製の武器があれば非常に有効だ……とあって、アスラは海楼石の武器を探してみたのだが……調べれば調べる程。

「……武器に使われてない筈だよ」

そうぼやかざるをえなかった。

海楼石の武器が必要な程の相手は限られてくる。

超人系は基本不要だ。

ゴムならば斬撃主体で戦えばいい、バラバラになるなら打撃で戦えばいい。

白ひげの例だと、グラグラの实は確かに広域破壊の能力を持つ悪魔の实だったが、白ひげ自身への攻撃は普通の武器で十分通っていた。スクアードの一撃然り、最後の最後、黒ひげとその配下による一斉攻撃然り、だ。

獣人系も、その基本は言うに及ばず。

どちらも例えば、アスラ自身のメタメタの实モデル：水銀のよう

な、白ひげ海賊団一番隊隊長マルコの獣人系幻想種トリトリの実モ  
デル：不死鳥のような例外はあるが……。  
となると、海楼石の武器が必要なのは基本自然系だ。<sup>ロキア</sup>

さて、ここで問題となるのが……自然系の属している組織だ。

原作に出てきた自然系の悪魔の実の能力者は……。

煙：スモーカー、火：エース、雷：エネル、砂：クロコダイル、  
氷：青キジ、光：黄猿、マグマ：赤犬、闇：黒ひげの全部で8種類  
が確定している。ドラゴンが何とも風くさいが、確定している訳で  
はないので、ひとまず置いておく。

さて、この上で見た時、気付く事はないだろうか？

現段階で、『火』と『闇』はまだ能力者そのものが出てきていな  
い。

『雷』は空島なので、青海には全く関与していないし、知られて  
もない。

『砂』は現段階では王下七武海。

残る『煙』『氷』『光』『マグマ』は全て海軍所属。

あれ？と思った人は正しい。

そう、現段階では、はっきり存在している自然系悪魔の実の能力  
者は、全て世界政府の側なのである。

原作の段階でも、はっきりとした敵側の自然系は『火』のみだっ  
た。そして、あの時、世界政府側には能力で上位にある『マグマ』  
が既にいた。

……こんな状況下で、自然系<sup>ロキア</sup>に有効な海楼石製の武器を量産しよ  
うとするだろうか？

いや、する訳がない。というか、表立ってする奴がいたら、海賊  
と結びついてるんじゃないかと疑う。下手に作った海楼石製の銃弾  
一発で海軍最高戦力が亡き者にされでもしたら、もう泣くしかない。

「……ルッチらの為に製作するにしても……」



その為には、何に使うのか、海軍上層部と世界政府を納得させる必要がある。

現段階では十分な証拠の揃っていないクロコダイルの危険性を説明し、説得を成功させ、クロコダイルという所詮はたった1人の自然系悪魔の実の能力者の為に、下手すれば海軍大将すら危険に晒される海楼石製武器の複数生産を承認させる……。

「……無理だな」

それをやるぐらいなら、白ひげ戦でやったように、海楼石製の手錠を貸し与える方がよほど認められる可能性が高い。

そこまで考えてやつと、『ああ、だからあの時、オニグモ中将、海楼石の手錠を使つてたのか』と納得した。

そう考えると、スモーカーの十手や網は、おそらく試作品だったのだろうか、と思った。……あれらの性質からして、悪魔の実の能力者も取り押さえられるように、と作られたはいいが、すぐ危険性に気付いて、量産される事なく終わったのがどういふ伝手を使ったか、スモーカーに流れた、という所だろうか？

「……どちらにせよ、海楼石を使う案は使えないな。何か別の方法を考えるしかないか」

ふう、と溜息をついて、アスラは休憩中の考え事をやめ、仕事へと戻った。

……如何に役職が減ったとはいえ、まだまだ仕事はあるのだからして。

## 第71話・海楼石（後書き）

という訳で、海楼石に関してクロコダイル対策を考えるアスラに混じって、私なりの考察を出してみました

実際、この状況下では海楼石製の武器作る意義が感じられないんですよね、世界政府には……

## 第72話・その頃の或る組織

世界政府の手は世界のいたる所に伸びている。

その配下たる海軍の戦力も、また世界のいたる所に配置されている。

だが、世界の全てではない。

故に、世界には世界政府すら手の届かない空隙が生まれ、そこに世界政府と敵対する者が巢食う事も、ある。そう、例えば、ここに、革命軍の拠点たるバルティゴのように……。

【SIDE：ドラゴン】

「バスターコールが？」

革命軍もつまる所は、反世界政府組織の1つだ。故に、他の反世界政府組織と関係を持つ事もある。

今回、壊滅した所は革命軍と繋がりがあつた訳ではないが、起きた事柄が問題だつた。

バスターコール。海軍が行なう殲滅戦。

発動は元帥と3人の海軍大将、もしくはその誰かからゴールデン電伝虫を貸与された誰か、後は世界政府の頂点たる五老星ぐらいしかする事は出来ないし、その性質上滅多に発動されるものではない。

「発動の原因は分かつたか？」

そう、『滅多に』、だ。単なる反世界政府組織、というだけで発動させるようなものではない。

実の所、反世界政府組織自体は規模を問わなければ、それこそ大小無数にある。

大は革命軍のような国を落とす規模から、小はそれこそ小さな町

の不平分子まで様々だ。それらに片端からバスターコールを発動させていたら、それこそ世界が滅ぶ。今回壊滅した組織も、決して小さい訳ではないが、革命軍と比べると遥かに小さいのも事実だ。

「いえ、さすがにバスターコールの発動理由までは……」

「そうか……そうだな」

実の所、革命軍には海軍内部にも協力者、賛同者がいる。

これはドラゴンの出自にも影響がある。

ドラゴンは英雄ガープの息子であり、当然今の道に入るまでは、海軍とも密接な関係があったし、親しい友もいた。

無論、ドラゴンがこの道に入った事で縁の切れた者も大勢いるが、海軍とて天竜人や世界政府のやり方に対して怒りを感じる者も大勢いるのも事実だ。

そうした人間には海軍を離れ、革命軍に加わった者もいるが、敢えて海軍に残って革命軍に情報を提供し続けてくれている者もいる。とはいえ、さすがに海軍の最高位にある、中将以上には革命軍とて手が伸びてはいない。

無論、危険を承知で無理をするなら、可能かもしれない。しかし、こう言っては悪いが、危険をおかしてまで得なければいけない情報という訳ではないのも事実だ。

……非情なようだが、もう終わった、終わってしまった事なのだから。

それに、現在、革命軍にはより気になる事があった。

「ところで、イワンコフさんは上手くいっているのでしょうか？」

「……分らん、さすがにインペルダウン内部まではどうにもならんからな……上手くいっていると思いたいが」

そう、オカマ王エンポリオ・イワンコフが革命軍幹部としてインペルダウンへと収監されているのだった。

もう2年近くが経つ。

上手くいっていいが、上手くいっていなければ、命を落としている可能性も、ある。

彼……いや、彼女（？）と呼んだ方がいいのだろうか？まあ、濃い人材ではあるが、頼りになる、人望のある人物であるのも、また確かなのだ。そんな彼女（？）が捕まったのは、ある意味意図的なものだ。

インペルダウンに嘗て、カマバツカ王国に来て革命軍に協力して自らの国を崩壊させる道を選んだ王の息子がいる。それを知ったイワンコフが敢えて潜入を図ったのだ。

怨まれているだろうが、それでも構わない。

かの王は、自らの立場を捨ててまで協力してくれたのだから、その子が、それが原因で道を踏み外してしまったのなら、王が既に亡き今、自分がそれを助ける、そう誓い敢えて世界政府に捕まった。無論、ちゃんと勝算あつての事だ。

カマバツカ王国は【色んな意味で】、世界的に有名だ。

その女王（永久欠番）であるイワンコフが処刑された、となれば何があったのかと勘ぐる筋は多いだろう。その結果として、万が一イワンコフが革命軍の一員と判明したら……1国の王ですら世界政府に敵対する側に加わり、革命軍として活動する。それが世界に与える影響は大きい。

ならば、インペルダウンに何らかの罪状をつけて放り込み、黙らせるのが一番という読みは当たっていた。

「インペルダウン内部の大空洞……偶然とはいえ、この情報を得る事が出来たのは大きい」

だからこそ、潜入を決意出来たと言ってもいい。

この情報がなければ、さすがに共倒れにしかない可能性の高い、インペルダウン潜入は試みられなかっただろう。

(……無事でいろよ、イワ)

【SIDE：イワンコフ】

「ヒーハー！ようこそ、囚人達の秘密の花園！ニューカマーランドへ！」

その頃、インペルダウンLv5.5。

ニューカマーランドへと、更なる新人が『鬼の袖引き』と呼ばれる消失を遂げ、やって来た。

「な、何じゃこりゃあ!？」

その男の名は、元CP5主官スパンダム。

彼もまた、このインペルダウンに収監されつつも、必死に脱走を図っていた囚人の1人だった。

そうしてある日、偶然必死に逃げ込んだ先で足を滑らせ……これまで、あの手この手で交わしてきた地獄に遂に落ちた。

これまでか、と思ったが、偶然に偶然が重なり、空洞へと落ちた。

『しめた、俺の運はまだ尽きていない!』

そう信じ、スパンダムは奥へと進み……。

しかし、辿り着いた先は、ある意味別の地獄だった。

スパンダムはノーマルであって、オカマに興味はない。だが……

ここはオカマ王の君臨するオカマの王国。ここがインペルダウンの

内部と思えないのはいいとして、誰もがあつちに逝ってしまった格好をした世界だった。

「おやあゝ？ヴァナタ、ひよっとして……前CP長官の息子ツキヤブルね？」

サイファーボール  
CPの拳動は革命軍にとっても最優先で把握しておくべき情報だった。

だからこそ、長官の情報も詳細に把握していた。弱みなり、性格なり把握しておけば使える事があるからだ。事実、以前は金で片をつけた事例もあった。まあ、革命軍と知られた訳ではなく、犯罪者と勘違いされた為ではあったが。

「そ、そうだ、よく知ってるじゃ……前？」

え？とばかりに、驚いた顔になるスパンダムだった。

彼は、何時か父がここから解放してくれると思いき、必死に生き延びてきたというのに、まさか、その当の父が既に亡くなつてるとは考えもしなかった。

まあ、さすがにイワンコフもスパンダムが死んだとは知らなかったが、解任された事ぐらいは知っていた。

「んゝフッフッフ。ヴァナータの失態が原因で、サイファーボールCPに捜査の手が伸びた結果、スパンダイン前CP長官も犯罪者として地位を追われたツキヤブルよ。そして、CP長官の後任はヴァナタをここへ送り込んだ海軍本部中将ツキヤブル」

厄介な相手が就任したと話題になっていたから、イワンコフも覚えていた。

ガーンという文字が背後についていそうな程、愕然と顎を開

きつぱなしにしていたスパندانムだった。最後の希望が断たれ、今では嘗て自分をここに送り込んだ海軍本部中将アスラがCP長官…  
…それは彼にとっては大シヨックだった。

「まあ、お互い今じゃ囚人仲間だ。仲良くしようぜ」

「そうそう、貴方も仲間になりなさいよ」

真っ白に燃え尽きたようなスパندانムだったが、親しげに肩を抱いてきた連中の姿を見て、我に返った。

『俺はノーマルだー！ー！』ともかくスパندانムの前にイワンコフが立ちただかった。

「ん〜フッフフ。まるで決心がついてナツキャブルね！けど、安心しなさい。すぐ楽にナツキャブル」

構えるイワンコフの姿に何かとてつもない嫌な予感がして必死に暴れ……る前に、その貫手がスパندانムへと叩き込まれる。

「エンポリオ・女ホルモン！」

イワンコフはホルホルの REAL のホルモン人間だ。

その力は、ホルモンを自在に操り、人体を中から変えてしまう、言わば人体のエンジニア。そうして、この能力を喰らった人間は…  
…。

「え！？ええええええええええええ！？つてキヤー！？」

男が女になる。

性格も、女性ホルモンの影響で女性らしいものへと変わってしまった



う。

元スパンダムとは思えない程可愛い女性姿へと変貌し、可愛い悲鳴を上げる。

……後は女性のまま当面を過ごし、女性らしさが身についた頃、元に戻せば……肉体男の精神女性。つまりは……。

「ア~~~~ツ！ニューカマーランド！！」

次の新人囚人がやって来た時、イワンコフのバックで、レオタードに網タイツで踊るスパンダムの姿があったのだった。

第72話・その頃の或る組織（後書き）

という訳で、前半と後半でテンション変えてご覧下さい

インペル内部では、こんな事が起きてます

### 第73話・思惑

【ニコ・ロビン】

「どついつ事なの！」

クロコダイルの執務室に、激しく机を叩く音が響いた。

机を叩いたのはニコ・ロビン。このカジノ『レインディナーズ』の支配人を務めている才女だ。その彼女は普段はにこやかな笑みを浮かべて、対応している。だが、今、その顔は厳しく引き締められ、虚言は許さないとばかりに、椅子に腰を下ろすオーナーであるクロコダイルを睨みつけていた。

そのクロコダイルは、といえば、こちらは対照的に椅子に体重を預け、常どおりの笑みを口元に浮かべ、葉巻を啜えて燻らせていた。

「何が、どういう事、だ？」

「とぼけないで！先だって、翻訳した資料の内容よ」

先日、バロックワークス BWが手に入れたものとして、クロコダイルから渡された資料があった。

現在、バロックワークス BWはその上層部こそ開店休業状態で静かにしているものの、下部組織たる賞金稼ぎの部隊は活発に動いている。

何しろ、組織というものは存在しているだけで、金がかかる。

人件費、訓練にかかる各種の経費、宿泊する建物や移動に必要な船舶、その他諸々……。

賞金稼ぎはこうした経費を少しでも浮かせる為に金を稼ぐという目的と、名を売る為などが、その理由だ。実際、こうして作り上げた賞金稼ぎの組織への勧誘、という形で新たに勧誘を行なう事もあ

そういう意味では、表立っては賞金稼ぎのギルドとしての面をも有するようになってきたと言える。

賞金稼ぎ達とて、好き好んで危険を冒したい訳ではないから、入る事を選ぶ者も多い。そうした中から信用出来る、使えると判断された者が更に、B Wへと勧誘される訳だ。  
パロックワークス

そうした賞金稼ぎ達によって、餌食となった海賊団があった。

彼らが持っていた財宝は、基本的には役割や働きに応じて分配されるが、中には使えない物、金にならない物などが混じっている。こつした中から、何かしら曰くのありそうな物などが上納金と共に後方に送られ、更にその中から、ごく一部が意味のある物と判断されて、何かしらに利用される事になる。

(無論、本当は使えるのに、使えないと判断されて、クロコダイルの目に留まらぬまま消えていく物もある)

今回は、そうした中で見つかった1つの書類の束が発端だった。古く、黄ばんだその書類には解読不能な文字らしきものが並んでおり、当初は何かしらの暗号文かと思われた。場合によっては、昔の海賊なりが残した財宝の在処を示すもの、という可能性もある為念の為にクロコダイルに回り……気付いた。

ニコ・ロビンに翻訳させたものの、内容は不明だった。

ロビンによると、誤字脱字、虫食いも多く、推測で埋めた部分もある。到底使えるような代物ではない、とは聞いていたが……。

「聞いているの!？」

「……うるせえな」

もう一度音を立てて、机を叩いたロビンに、けれどクロコダイルはのっそりと立ち上がる事で応えた。

はっとロビンが気付いた時には右手で首元を掴まれて、クロコダ

イルが足を乗せていた事務机とは別、ロビンの背後にある応接机に横たわるように押さえ付けられていた。

「ぐっ……」

「なあ、ニコ・ロビン。お前、自分の立場つてもん分かってねえなあ？」

現段階では押さえているだけだが、その気になれば、クロコダイルはその右手でロビン自身の水分を吸い取る事が出来る。

そもそも、ロビンも悪魔の実の能力者ではあるが、クロコダイルの能力とは相性が悪すぎる。

ロビンの持つハナハナの実の能力は、いたる所に腕や足を生やす事だが、あくまで生えるのはロビン自身の手足だ。したがって、極端に重い物では持ち上げられない事もあるし、硬いものを殴れば手足を痛める事もある。

そして、当然だがクロコダイルの自然系悪魔の実、スナスナの実が相手では、今ロビンが自分の手で掴んでも引き剥がせないように、手を生やした所で無理だ。

いや、単純な力だけならば数を増やして生やせば対応も出来るだろう。

だが、砂と化した腕は掴めない。

掴んでも掴んでも、一瞬砂を掴むだけで、すぐに腕は再生する。

その癖、クロコダイル自身はガツチリとロビンを押さえ込んでいる。

「立場つてもんを理解させてもらいたいのか？」

そう言いつつ、クロコダイルは左手のフックをロビンの襟元にかけ。

一気に引き下ろした。

服の裂ける音が部屋に響き、臍の辺りまで、一気に白いロビンの肌が露わになる。

「……っ！」

だが、ロビン自身は服を押し上げる胸元が露わになることも、睨むだけで悲鳴を上げたりはしない。

「いいねえ、ニコ・ロビン。……本気でものにしくなりそうだぜ」

ニヤリと笑いながら、つつ……とフックをロビンの肌に這わせる。屈しないとばかりに、表情一つ変えず、クロコダイルの目から視線を逸らさなかったロビンだったが。

『六輪咲き（セイスフルール）……』

クロコダイルのロビンを押さえる右腕から6本の自身の腕を生やす。

『うん？』とばかりに疑念を示すクロコダイルを尻目に、その右腕を一斉に掴み……。

『グラップ！』

瞬間、6本の腕がそれぞれに砂を掴み取った為に一瞬、腕が途中から本体との接続が切れる。その力が緩んだ一瞬の隙について、ロビンはクロコダイルから逃れた。

はだけた胸元を抑え、クロコダイルを睨みつけるが、当のクロコダイルはと言えば面白そうな表情を崩しもせず、追撃をかけるでもなく、余興は終わったとばかりに事務机に腰掛けた。

そのまま視線を外さないクロコダイルから、ロビン自身も視線を外さないままに、後退し、扉から外へと出る。

扉を閉めてから、やっとふう、とロビンは深い息を吐いた。……吸われた訳でもないだろうに、喉がカラカラだった。

【SIDE：クロコダイル】

ロビンが出て行ったのを確認してから、笑みを崩さないままにクロコダイルはふと思う。

今回の件に関しては、実の所、クロコダイルにとっても予想外の結末だった。

葉巻に改めて火をつけながら、今回の一件を思い返す。

そもそも、ロビンに翻訳させたものの、実際にクロコダイルが見ても、念の為に科学に心得のある配下に確認させても、到底使い物になるとは思えなかった。

だが、何分にも古代の兵器だ。

予想外のものが得られるかもしれないし、或いはまかり間違つて、本来とは別種の、だが使える物が生まれる可能性もある。

そこで、クロコダイルは情報を流した。

使えず、爆発して終わるならそれもまた良し。

使えるなら、自身が制圧すると事で世界政府に自身の手柄として示すという手もあった。

海軍が連中を捕縛するなら、その反応でこちらの内部を探るつもりだった。

そう、クロコダイルは、バロックワークスBWには既に世界政府の手の者なりが入り込んでいると判断している。

バロックワークス世界政府の手は長い。ましてや、BWは自分で言うのもなんだが、規模が順調に拡大しつつある。目立つのは本来の目的から目を逸ら

させる役に立つが、同時に他組織から入り込みやすくもなるし、世界政府の監視も惹き付ける。

それだけに、今回流した情報の内、上へ行く程詳細な情報を流してあった。その反応次第で、内部にどこまで食い込んできているかの調査を行うつもりだったのだが……。

予想以上に、今回使った反政府組織が杜撰だった。

さすがにクロコダイルとて、今回の情報が、歴史の本文を元にしていないという所までは配下には例えMr・1であっても流してはいない。

だが、今回、海軍はバスターコールを発動させ、島ごと住民ごと全てを吹き飛ばす、という手段に出た。

それは取りも直さず、歴史の本文由来の兵器を製造中という事が洩れたという可能性が高い。

もし、BW經由でそこまで流れたなら、とっくにクロコダイルの所に世界政府の人間が雪崩れ込んできている。

「役立たずどもが……」

吐き捨てるように呟く。

世界は何時だって想定外の事ばかりだ。



### 第73話・思惑（後書き）

という訳で、異なる組織からの観点でお送りしました

そろそろカクやカリファの悪魔の実を出して、エースとサボの旅を  
始めないとなあ……

第74話・出航予定（前書き）

後書きにて応募求む

## 第74話・出航予定

「来年？」

原作開始を四年後に控え、しかし、まあ原作通りなんてもう欠片も進まんだらうな、という思いの元、今日はアスラは家族で食事をしていた。

以前の役職だけで4職という状況が半減した事から、それ以前の量の仕事に慣れていたアスラは割と余裕が出来ていた。

お陰で、こうして晩御飯を家族と共に取る事も出来る。そんな中、エースとサボが来年いよいよ航海に出る、と宣言したのだった。

「ほう、そうか！しかし、エース、お前海軍に入ればええもんを」

「そうじゃのう。お前さんじゃったら、はなっからそれなりの役職に就けるっちゅうもんじゃろうに」

……家族？

いや、ガープ中将与サカズキ大将が当たり前のように食卓においてメシを喰らっているのはまあいいとしておこう。誰も違和感感じていないし。

そう思い、アスラは2人がいる事に関しては考える事を止めた。

「そうだぜーエースもサボも一緒に海軍に入ろうぜ」

ルフィが文句を言っている。

実は、エースとサボが来年出航する、と宣言した事から対抗意識を燃やしたのか、ルフィも『じゃあ、俺も来年海軍に正式に入る！』と言い出したのだ。

そして、海兵としてならば、14歳であつても問題はない。何しろ、周囲には経験豊富な大人が大勢いる。

子供にした所で、見習いや従卒といった形でもっと小さい頃から海軍に関わっている者もいる。まあ、さすがにそこまで小さい子供らがいるのは、孤児対策としての面もある訳だが……。

そして、ルフィはもっと幼い頃から海兵の訓練施設で鍛錬を大人に混じって続けてきた。

ゴムゴムの実を食ったゴム人間になつてからは、同じ能力者である中佐大佐場合によつてはそれ以上が（具体的には中将大將が）混じつて、色々とコツを教えてきた。誰しも、最初から能力を上手く使いこなせた訳ではない。

結果として、初期こそ上手く能力を扱えず、ルフィは地面にパンチを打ちつけたりしていたが、現在では様々な派生技をも併せ持ち、大佐クラスとでも真つ向やり合うだけの力を持っている。英雄ガープの孫、という事もあり、海軍でも期待されていた。

……もつとも、センゴク元帥などはどう見ても、小さなガープとでも呼ぶべきルフィの姿に少々不安を抱えていたのも事実だったりする訳だが……。

まあ、ルフィからすれば、これまでずっと一緒に頑張ってきた、目標としてきた相手が突然いなくなってしまう、その事を寂しく感じていた。

当然といえば、当然だが。

「悪い、ルフィ。それも考えたんだが、俺はやっぱり世界を回つてみたいんだ。海軍とか海賊とかそういう視点抜きでさ」

「ま、折角だし、エース1人で行かせるのも不安だしな。俺も付き合うつもりなんだ。それに、俺も世界を見て回りたいてのは同じだし」

が、それぞれにエースもサボもそれを断った。  
それを聞いて、ルフィ自身は残念そうに、けれど、『なら、俺も』  
とルフィが言わないだけ、成長したとも言える。

「ふむ……」

アスラからすれば、もうそんな時期か……と思う。  
何時かは原作同様エースが旅立つだろう、とは思っていた。

以前の晩以来、エースは少し吹っ切れた。

海賊王ゴールド・ロジャーの息子、その事を吹聴しない限り、普通に海軍に入る道もある、と実感出来た事もあるし、アスラにせよ、ガープにせよ、エースの素性を知りながら、これまで知らん振りをして、エースがどの道を選ぶか見守っていてくれた、という事もある。

まあ、エースがどの道を選ぶにせよ、今しばらくは見守ってやりたい所だったが……。

「いいだろう、なら祝いだ。その時は2人で使える船を一隻プレゼントしてやるう」

どうせ、自分もハンコックも無駄に贅沢する性質ではない。というか、未だ周囲の人間曰く『あいつらはお互いがいれば、それで幸せなのは変わっておらん』、な状態なので、余計な事に使う必要がない、とも言う。

そして、アスラは高給取りだ。

役職がつくと、大変な分給与は増える。ただでさえ、中將という階級は責任は重しいし、最前線で命を張るが、その分基本となる給与は高いのに、そこに上乘せされた役職分で一時は凄い事になっていた。その頃に比べれば減ったとはいえ、小型の船を一隻与えるぐら

いは何の問題もない。

ハンコックも『そうじゃな、それはいい事だ』と賛成してくれたのだが、その後が別の意味で大変だった。

ガープが『僕も船を贈る！』と言いだしたのだ。

当然、エースとサボが『爺！船二隻あつたつてしょうがないだろ！』と怒鳴る事になり、それを受けて今度はガープがアスラに、譲れ！と言いだして……。

呆れて見ていたサカズキがここでボソリと『アスラが建造しないと言いだしたら、それで終わりじゃな』と言ったせいで更にヒートアップする事になった。確かに、造船総監であるアスラが建造許可を出さなければ、ガープが発注した所で成立しない。

まあ、最終的にアスラとガープの喧嘩……になりかけた所で、勢いよく立ち上がったガープが食卓をひっくり返した事で、ハンコックにたたき出された事から、決着はアスラの不戦勝となった……。

さて、その翌日の事。

アスラは電伝虫で連絡を取っていた。

『……ンマー、はい、こちらガレーラカンパニー』

「ああ、アイスバーグさんかい？こんにちわ、アスラです」

『ああ、これはどうも。何か御用ですか？』

アスラは今回、海軍の設備を使うつもりはなかった。

元々、海軍の造船所は大型船を造るのに最適な状態になっているし、今回必要なのは軍艦ではなく、むしろ海賊の船のような単艦で長期間快適に過ごせる類の船だ。

その為に、アスラが選んだのが、ここだった。

「……という訳で、トムさんをお願いしたかったんだが」

『たっはっは！いいじゃろう、そういう事なら引き受けたるぞい』

『……トムさん、そんな簡単に』

『なあに！男が夢を追い求め、航海に出ようというんじゃ！男ならドンと自分の夢に胸を張れ！』

「……その様子だと了承していただけのようですね」

トムは部屋の電伝虫を繋いだ筈が、と思ったが、どうやらアイスバーグがトムの部屋に来ていただけだったらしく、電伝虫からはトムとアイスバーグの声が代わる代わる聞こえてくる。

トムは、現在は少し暇だ。

海列車はその後、エニエスロビーと海軍本部をも繋いだ。

ただ、そこからどこに伸ばすかが大きな問題となっている。

グランドラインの始まり、リヴァースマウンテンからは先へと進むにあたって、7本のルートがあるが、当然ながらその内どれかを選んで海列車を引く事になる。

だが、一旦引いてしまえば、そのルートは比較的安全になり、裏を返せばそこそがグランドラインの新たなメインルートとして沿線は発達する事になる。反面、他の6つのルートは主流から外れるだけでなく、海賊がメインを避けて流れ込む事が予想される為に、うちのルートこそ！と熾烈極まりない駆け引きと脅迫と買収が飛び交っている状態だ。

世界政府としては、下手にこれに巻き込まれたら厄介な事が目に見えているので、この件に関しては、世界会議の各国協議に丸投げ

した、のだが……お陰で、あつちにふらふら、こつちにふらふらと迷走を続けている有様だ。

そのお陰で、トムは後進を育てるのに専念出来、海列車に関しては数を増やして、本数を増やすぐらいなので、放っておかざるをえなかった研究含めて、結構したい事が出来ているらしい。

エースとサボが利用する事や、どういう用途に使う予定なのか、などを伝えた後、アスラは後は任せる事にした。

こつという事は専門家に任せ方がいい。腕は、オーロジャクソン号を建造したトムだ、海列車を建造した事もあり、腕は世界最高峰の1人と言われている。

(……ある意味贅沢な船だよな)

どのような船が完成するのだろうか。  
楽しそうに、ふと口元に笑みが浮かんだ。



## 第74話・出航予定（後書き）

エースとサボ出航……の先日談って感じですよ

彼らの船は、ルフィらがゴーイングメリー号を得たように、トムさん建造の船をアスラからプレゼントされる予定です  
さて、ここで、折角なので、彼らの船の名前を募集致します  
名前の決定自体は私の独断と偏見で決定しますので、ご了承下さい

第75話・休暇がてらの…（前書き）

締め切りを書き忘れていた

エース&サボの船名投稿締め切りは、明日の投稿が終わるまでとさせて頂きます

前述の通り、私の直感や語呂で決めさせて頂く予定ですので、ご了承ください

## 第75話・休暇がてらの…

エースとサボの為の船に関しては、了承が得られた。

1年前から、となると随分手間をかけるように思えるが、実際はトムは忙しくないが、忙しい。この矛盾した理由は、海列車そのものに関しては世界会議の結末がつかない事には新たな路線が敷けないから、そんなに忙しくないから、教育を行なう余裕はある。

だが、この次世代の船大工の育成という仕事は大変だし、何より幼少時に見た海列車に憧れてこの世界に入ってきた者は多い。そうした彼らにとって、トム存在は正に憧れそのものであり、事実彼の話や勉強は面白く分かりやすいと何時も立ち見で溢れる盛況ぶりだ。

結果として、個別に教わりに来る者も多く、その一方でガレーラの船の建造にも関わっている。

あくまで、忙しくないのは海列車の事だけで、こちらに関してはあれから1年以上の時をかけて、建造をマニュアル化した為に海列車の生産そのものはトムではなくとも可能になっている。ちなみに、アスラは一定の数が求められる規格船に関しては、流れ作業を導入しており、海列車にもその導入が検討されたのだが、現状ではそんなに大量の数は求められない、として未導入だ。

まあ、アスラの海列車による島嶼艦横断鉄道計画自体は、トムもアイスバーグも夢として賛同しており、何時かは、と流れ作業のマニュアル化や海列車の改良も進められていたりするのだが……。

さて、そんな魚人だから、トムに依頼をするとなると、それなりに時間がかかる。

そもそも、コンセプトを元に一から設計図を引き、船の建設となると小型の船であってもそれなりの時間を要する。

今回の場合であれば……。

- 1、少数で動かせる船である事。最低人数は2名。
- 2、ある程度までの増員に耐えられる事。
- 3、一定期間の長期航海に耐えられる事。

これらに加えて、もう一つ。

4、旅の経費を稼ぐ為に、賞金稼ぎを行なう予定である為、海賊船を追尾可能な速力と、多少なりとも反撃可能な武装、攻撃による衝撃に耐えられる船である事。

といった、軍艦に準じる性能が必要になる。

これがややこしい。

そもそも軍艦というものは大体そうだが、速力・機動性・武装・防御に必要な応じて割り振らなければならぬ。全てを万遍なく高くする事は出来ない。攻撃力と防御力を高める為に、大量の大砲と分厚い装甲版をつければ、船は重くなる。そうなれば、速力も機動性も悪くなる。

重い荷物を背負って走れば、どうしても遅くなる、という事をイメージしてもらえば分かりやすいだろう。

逆に軽くすれば、今度は防御などに皺寄せが来る。

アスラの元の世界で言う所の、ゼロ戦の場合は、エンジン出力の関係で、敵機を撃墜可能な武装、敵機に追いつける速度と、どの機体にも負けない軽快さによる機動性に、太平洋という広大な海での戦闘可能なように航続距離まで追及したら、防御に回せる部分が残らなかった、という冷酷な現実がある。

まあ、何が言いたいかというと、これが商船ならば積載量が最重視、次いで逃げる時や荷物を運ぶのに必要な速度、武装や防御はそれからな訳だが、賞金稼ぎの船として使う以上は戦闘に自分から突っ込んでいく船な訳で、きっちりした船を仕上げるとなるとやはり

時間がかかるのだ。

【SIDE：アスラ】

「……………ふむ、あっちも始まったか」

新鋭戦艦メルクリウス号艦上の司令官執務室で片端から書類を捌きながら、アスラはある書類にふと、視線を落とした。

以前の旗艦であったマーキュリー号、準旗艦たるヘルメス号は前者はそのまま緊急応部隊の旗艦として残り、後者はお役目を解かれて通常の巡洋艦としての艦隊勤務へと戻った。

乗組員に関してだが、マーキュリー号の艦長は昇進して少数の纏まった数の船を運用する事になったので、ヘルメス号の艦長が昇進してメルクリウス号の艦長に就任、更にマーキュリーとヘルメス双方から引っこ抜いて、運用を行なっている。

マーキュリー号をを運用していたスタッフからすれば、以前とはまるで運用の基本から違う高速戦艦に戸惑い、ヘルメス号の側からすれば巡洋艦から戦艦へと変わった事による戸惑いがある。無論、どちらもベテランだから、その内慣れるだろうが、その為には航海を繰り返す必要がある。

以前よりは仕事量がマシになったので、また海に出られるようになった事もあり、アスラも慣熟航海に時折こっして付き合っている次第だった。無論、そこには、軍艦という船の慣熟戦闘の性質上、海賊との戦闘も予定されているから、という現実もあったが。何しろ、慣熟航海の性質上、新世界ではないが、ここがグランドラインなのは間違いないのだから……………。

そんなアスラが処理した書類は電送虫で海軍本部に送られ、CP本部など別の所へも運ばれ、逆に向こうからも書類が電送されてくる。

アスラが呟いたのは、そうした書類の1つ、東の海での事件の1つだった。

イラストラル

### 【海賊キャプテン・クロの捕縛】

逮捕にあたった海兵は、海軍第7支部。しかし、モーガン軍曹を除き全滅。軍曹本人も顎と右手に重傷を負うという事態だった。

この功績により、海軍では、いずれかの支部にて少佐に昇進を予定しているらしいが……。

「……史実ではアレだからなあ。どう考えても、催眠術で歪んだんだろうが……」

駄目元で、一応部下にしたいと申請を出してみる。

使える海兵なら本部としては、幾等でも欲しい、という事から要請自体は決して珍しいものではない。

支部少佐予定だから、本部少尉相当になるか……。

まあ、あくまで申請が通ったら、の話だ。こうした申請そのものは多く、アスラも何度も書類を提出し、そうしてやって来たある者はグランドラインでも活躍し、ある者は力不足で各海の支部へと戻された。もっとも、支部とて戦力が欲しいのは変わらないから、本部長の申請とはいえ、全てが通る訳ではないのだが。

モーガン自身がどこまでいけるか……そもそも性格がどうなるか……そのあたりが不安材料だが……。

そう考えていると、扉が盛大に開け放たれた。

海軍本部長の部屋に入ろうかというのに、口には複数の葉巻。服装は決してきちんとした服装ではないが、アスラ自身が『きちんと仕事と、外では状況を弁えた行動をするなら、多少の融通は認めよう』という事で、気にしていない。というか、この男の場合、葉巻を加えていない姿や丁寧誠実な姿が原作の影響のせいか、想像出

来ない事もあるし……。

「失礼します。間もなく目的地に到着します」

「ああ、分かったよ、スモーカー中佐……」

そう、彼の名は海軍本部中佐スモーカー。ちなみに、W7の事件時に少佐だったのに、未だ中佐なのは少佐 中佐 少佐 中佐 大佐 中佐とあれから功績を幾度も上げながら、2度も素行不良で降格を喰らっているからだ。

まあ、もてあまされていたからこそ、アスラの『面白そうだ』という理由から副官に求めた申請が通ったりしたのだが。

ちなみに、現在既に彼は自然系悪魔の実モクモクの実を食った『煙人間』になっているが、未だアスラに勝った試しはない。

とりあえず、もうじき、という事で書類を片付け甲板へと出る。その前に広がる光景は……。

「……リヴァースマウンテン、か……」

この山は幾度見ても凄い。そう思う。

東の海へ向かう際は、未だ海楼石を敷き詰めるという方法が確立していない事もあり、通った事があったが、海が山を登るといのはとんでもない光景だ。

今回は、入り口の灯台を1度見学してみると言っている。  
無論本音は……あの為だが。

「……アイランドクジラか……」

「珍しいですな」

本来西の海のみには生息する巨大な鯨。それがこのリヴァースマウンテンには生息している。

……ルフィらがいない今、原作通りのルートを通る事がない今、あいつに真実を告げてやらねば。理解出来るかはともかくとして、だが……。原作を変えた、それが自分の務めだろう。



第75話・休暇がてらの…（後書き）

次回ラブーン登場

原作と違い、ルフィが海賊として世界を回る約束をすることはないので、少しというか相当異なる展開を計画しています

## 第76話・ピンクスの酒（前書き）

本日をもって、エース&サボの船名募集を終了します  
発表は明日の話の投稿にて

## 第76話・ピンクスの酒

リヴァースマウンテン麓にある灯台。

この灯台へとアスラは1人やって来た。

部下らは現在真水の補給と、交代で休息を取っている。まあ、周囲に見るべきものなどないので、大体が船で寝転がって、疲れを取っているのだろう。

かと思えば、リヴァースマウンテンの激しい流れに真つ向立ち向かうように吼えるアイランドクジラの様子に、気を取られている者もいる。

「……失礼、どなたかおられるかな？」

ひょっとしたら、原作の如くラブーンの体内で過ごしているかと思っただけだが……。

「……どなたかな？」

どうやら、今日は外にいたようだ。

まあ、一応灯台守な訳だから、ずっとラブーンの体内にいる訳にはいかんよな。よく考えれば。

向こうは、こちらの海軍の服装を見たはずだが、まったく顔色も何も変えてないな……さすがというべきか。

「お初にお目にかかる、私は海軍本部中将アスラという」

「ほう、儂は……」

「知っているよ、海賊王の船医クロツカス殿」

瞬間、目が鋭くなった。

到底今年で御年68歳とは思えない迫力だった。気の弱い奴なら即気絶だな、こいつは……。

「ああ、勘違いしないでくれ。俺が知ったのは偶然だし、隠居した爺さんを今更捕らえる気もない」

「……………」

信じてないな、そりゃ当然か……。

「今日来たのは本当に野暮用だよ……そもそも捕らえる気なら、シルバース・レイリーに会った時騒動起こしているぞ」

「……………レイリーに会ったのか」

「ああ、今はシャボンディ諸島で、コーティング屋やってるよ。酒と博打で金が飛んでってるようだ」

「あいつらしい」

よつやつと、厳しい表情が緩んだな……。

これで話が出るか。

少し落ち着いたらしく、裏に回って椅子に座る。

「で……わざわざ海軍本部中将殿が来るとは何だ？ロジャーの事でも聞きに来たか？」

「いや、今回俺が来たのは、ただ1つ……ルンバー海賊団といえ

「ば分かるかな？」

再び眼光が鋭くなった……。

「あいつらがどうかしたのか？」

「ん……多分、貴方が入手した情報では彼らは逃げ出した、って事になってるんじゃないかと思っただけだ。ほんのつまらんお節介に來ただけだよ、仕事のついでにな」

表向き、ルンバー海賊団はグランドラインから逃げ出した、という事になっている。

その理由をアスラは知っている。

最早、ルフィが原作通りにここを訪れ、そしてブルックと出会うという可能性は絶たれたと言ってもいい。だからこそ、伝えなかった。別に何かを得たいと思った訳じゃない。ただ、動物でありながら仲間を信じるラブーンへちよっとお節介をしてやりたかったただけだ。

ルンバー海賊団がヨーキ船長以下何名かが伝染病にかかり、やむをえず、カムベルトの帯を通過しての脱出劇を凶らざるをえなかった事。

これが成功した反面、鼻唄のブルックを中心として航海を続けた残った面々が魔の三角海域、通称フロリアントライアングルにて、戦った海賊団に勝利したものの仕込まれた毒によって全滅した事などを語った。

「……そうか」

アスラの話を聞き、クロッカスはどこか沈痛な、だが同時にどこかほっとしたような様子で溜息をついた。

おそらく、ルンバー海賊団達の陽気な面々の事を思い、その死を悼むと共に、彼らが決してグランドラインを逃げ出した訳では、ラブーンの事を忘れてしまった訳ではなかった事を知り、どこか安心したのだろう。

「すまん、これで長年のつかえが取れた…」

クロツカスがそう礼を言おうとしたのを遮って、アスラは続ける。

「ただ……」

「？」

「ただ1人、未だ生き残り、何とか航海を続けようとしている者がいる」

「！？」

椅子に背を預けていたクロツカスが飛び起きた。

「鼻唄のブルツク、悪魔の実の1つ、ヨミヨミの実の力で死から生き返った。ただ、1人では大型船を動かす事が出来ず、長年霧の海を漂い続けていた、が……先だって王下七武海の1人、ゲッコウ・モリアの悪魔の実の力で影を奪われ、今は霧の海から出る事も出来ないでいる」

「……………貴様、何者だ？」

さすがに、クロツカスが疑念の声を上げる。

それはそうだろう、落ち着いて考えれば、どうにもアスラ中将与

名乗った人物の情報はおかしかった。

クロツカスにしてみれば、これまで誰も知る事のなかったロジャ―達、自らの嘗ての仲間達の事。ルンバー海賊団という50年も前の既に消えた海賊団の存在、自分が遂に『逃げ出した』という話しが掴めなかったというのに、別の真実をさらりと出してくる事、更にはその海賊団と自身の関係に加えて、ブルツクの事まで……。

怪しいというレベルの話ではない。

「さあな……俺はCP長官も兼任しているが……今回の事は本当にお節介さ」

CP長官、の言葉に『そういえば、そんな中將がいたな』と思っただクロツカスだったが、それでも疑念は大きかった。だが、それ以上アスラは話すつもりはないようで、そのまま立ち上がり、自身の船へと戻って行った。

……実の所、真実など話した処で信用されまいと思っただからだっただが……。

結局、アスラが立ち去った後、クロツカスは悩みつつも、ラブーンへと真実を告げた。

彼が何故あのような事を語ったのか、何故あのような事を知っていたのか、疑念は多々あったが、単なる戯言と笑って聞き逃すには、余りにも彼の言う事は真実を多々含んでいた。

……そして、何より。  
クロツカスもまた、ルンバー海賊団の彼らの事を信じたかったのだ。

大人しく、ただ静かに聴いていたラブーンだったが、その翌日。忽然と、ラブーンはその姿を消した。

「……行ったか、ラブーン」

急に静かになった双子岬で、クロツカスは静かに佇んでいた。

【魔の三角海域 フロリアン・トライアングル】

年中霧に覆われ、不気味な程に暗い海域。

楽園とも謳われる魚人島へ通る時に必ず通る海域だ。

嘗て、ルンバー海賊団もグランドラインの半ばたる魚人島を目指し航海を続け、そしてここで力尽きた。

毒にやられ、1人また1人と倒れていった。

そうして、最後に倒れたブルツクは、しかし、ヨミヨミの実の力で黄泉返り……けれど、この霧ゆえに1年の時が過ぎていた為に肉体は腐敗を過ぎ、既に骨だけと化していた。まあ、成長はしないがそれでも普通に飲み食いし、涙も流せるとは悪魔の実は本当に出鱈目だ。

コツコツ……と荒れ果てた幽霊船と化した船の甲板を1人ブルツクは歩く。

黄泉返った当初は、この甲板に仲間の遺骸が転がっていたが、50年もあれば、さすがに葬儀も終わる。といっても船内に納めただけだが、なに、こんなものは当事者の気分の問題だ。

ブルツク本人も、黄泉返った当初、この船で再び航海を続けたかった。

だが、この船は大型船だ。

たった1人で動かせるような船ではない。それならば、やむをえない。誰か通りがかった船に乗せてもらおうと考えていたのだが、何しろここは魔の三角海域、濃い霧でまともな視界はなく、ごくごく稀に傍を通りがかった船も自分を見かけると悲鳴を上げて逃げていった。

まあ、落ち着いて考えれば、無理もない。

昼なお暗い、1年に百隻以上の船が難破するとも言われる魔の海



域で、ボロボロの幽霊船に佇む、動く骸骨。普通は逃げる。

それでもブルックは諦めず、嘗ての約束を守る為に生き続けてきたが……1年前の1件でいまや自分は太陽の下を歩けなくなってしまうた。

スリラー・バークとそこを支配する王下七武海の1人、ゲッコウ・モリア。

カゲカゲの実の能力者である彼に、ブルックは影を奪われ、取り返しに向かったものの、己の影を入れられたサムライ・リユーマに敗北した。

ふう、と紅茶を片手に今日も霧を眺める。

ふと振り向けば、そこにはピアノが一台。

嘗て、仲間達と最後の唄を演奏した時にも、これで演奏を行なった。

何の気なしに、ブルックはカタリ、とピアノを開いた。  
演奏するは無論、あの唄。

くヨホホホくホホホホく  
ピンクスの酒をく

歌い始めたブルックだった。

嘗てはこの音楽を引く時は誰かが一緒に歌いだしたものだだった。

正式なものは、五重奏クインテットで演奏するこの音楽だが、1人でもそれは可能だ。だが、演奏するとふと最後の時のあの事が思い浮かぶ。

四重奏カルテットに、三重奏トリオに、二重奏デュエット、そして最後は己1人の独演ソロに……。だからこそ、最近最後までこの音楽を弾けた試しがなかった。だが。

ブオオオー！ブオオオー！

「!？」

突然響いた巨大な音。

だが……そのリズムにブルックは覚えがあった。

「まさか……!？」

すうつと暗い辺りが更に陰る。

巨大な魚影が船に寄り添うようにしているのだ。その姿はあれから比べればとてつもなく巨大になっているが……!

「ラブーン……!あなたなのですか……!」

ブオオオオオオー……!

ブルックの叫びに歓喜の声をクジラが上げる。

呆然とその姿を見詰めつつも、演奏は止めない。その音楽にあわせ、ラブーンも嘗てのそれとは異なるとはいえ、懸命に声を上げ歌う。

「……なんです、あの岬で……まっけてくださいと……いったじやないですか……」

ブルックは片手で演奏しながら、片手で顔を抑える。

今では目玉もない骨だけの顔だけれど、その眼窩からはとめどなく涙が零れ落ちた。

かつて仲間を失った時にも、こんな風に泣きながら演奏した。あの時は悲しみの涙だった。けれど、今は違う。44年ぶりの仲間との……。

ピンクスの酒を とどけにゆくよ  
われら海賊 海割ってく〜

それから魔の海域に新しい伝説が加わった。

その幽霊船では殺されて、骨だけとなった骸骨が音楽を鳴らしているのだという。そうして、歌うと島のように巨大なクジラが共に歌うのだという……。

それは確かに恐ろしい光景なのかもしれないが、それでも聞きたいような楽しい音楽なのだという。

## 第76話・ピンクスの酒（後書き）

という形にいたしました  
如何だったでしょうか？

実の所、これには裏設定がありまして、アスラもモリアが海賊以外にも襲っているという事実は伝えていきます  
しかし、世界政府は多少の犠牲よりもモリアを王下七武海に引きとめ続ける事を選び、アスラの干渉を許可しませんでした。それ故にアスラはこのような行動に出ています

## 第77話・旅立ちの翼

【SIDE：アスラ】

その日、アスラは東の海から本部移籍が決まったモーガン軍曹改め少尉に伴う資料をふと出来た時間を使って確認していた。

「……改めて見れば見る程、穴だらけだな」

ふと溜息をついた。

言うまでもなく、モーガンが捕らえたとされるキャプテン・クロの逮捕時の状況だ。

そもそもの状況がおかしい。

生存者はモーガンのみで、他は海兵全員が死亡。モーガンは重傷その癖、キャプテン・クロは捕縛されている。しかも、この一文。

『尚、キャプテン・クロに目立った外傷などは見当たらず』

という部分を見つけた時は、検証に当たった海兵の頭の中を見てみたくなった。

海軍の船に残っていたのは海兵の死体と、縄を掴んだまま怪我で意識を失ったモーガン、後は縄で縛られて大人しく座っていた無傷に等しいキャプテン・クロ。

海賊と思われる死体はなし。キャプテン・クロの船もなし。

海兵の死因は大多数が刀傷によるものと思われる。

この辺りからだけで、幾つもの事が分かる。

例えば、刀傷という事は接近戦を繰り返した、という事だ。となれば、双方とも全滅に至るまで戦ったとするならば、こちらの船にも海賊の遺体が転がっていないとおかしい。なのに、転がっていたのは海兵の遺体のみ。これは、海賊側は遺体を回収する余裕があつ

たと考えられる。

で、その時点でキャプテンが捕まっているのに、助けない訳がない。……よほど人望がないならまた別だが、キャプテン・クロはそういう三流とは違うみたいだしな……まあ、所詮覚悟が出来てない時点で二流だが。

更に、海兵らは唯一の生存者のモーガンでさえ意識を失っていたのに、キャプテン・クロと思われる人物には脱出しようと試みた形跡すらない、という。普通、殺されるのがほぼ確定状況で、自殺志願者でもない限り、脱出を図るだろう。

「……キャプテン・クロも間抜けなら、それにあっさり騙された海兵はもつと間抜けだな」

ふう、と溜息をつく。

これは原作通り、間違いなくキャプテン・クロは生きている、という事なのだろう。

……とりあえず、この件はそうした事を書き足して、改めて調査を行うよう要請書と共に放り込んでおく。理由は、休憩中に偶々何の気なしに見ていたら気付いたが、という事にした。

まあ、普通は一介の海軍本部少尉の情報を本部中將がじっくり見るなどない。

何しろ、海軍には万単位の軍人が所属し、一方本部中將は僅か16名。偶然でも装わなければ、じっくりと本部に招かれる事になった事情と解決した事件の詳細なんて読まれる事はないのは、他ならぬアスラ自身が理解している。

何しろ、余りに多数の紹介や推薦などが回ってくるせいで、丁寧に1つ1つ見ている余裕がないのだ。

結果、人事部から回ってきた書類をざっと見て、問題なければ承認印を押す事になる。アスラとて、このモーガンのような少尉の関わる案件など普通はここまで詳細に目を通したりはしない。そんな

時間もない。今回は原作に出てくるモーガンとキャプテン・クロの件だからこそ読む気になったし、気付いたとも言える。

……もっとも、だからこそ現場にはしっかりとらわれないといけないし、こんな報告書を真面目に上げてくるような奴がその職に就いているのかと思うと頭痛がしてきそうだが。

ふう、と熱い珈琲を口にして、ふと時計に気付いた。

……そういえば、そろそろエース達はW7に着いてる頃か。

「アスラ中将！」

ふとそう思った時、部下の1人が慌てて部屋に入ってきた。

「？なんだ」

「あの……ガープ中将がお孫さんらについて行かれてしまって……残りの仕事はアスラ中将に任せた、と言われたらしいんですが……どうしましょう？」

一瞬固まったアスラだったが、ある意味あの人らしい、と思わず苦笑してしまった。

「まあ、いいさ。今更だ……で、どれくらい残ってるんだ？」

「はあ、それが……」

9割がた、と聞いて、さすがに固まったアスラだった。

ちなみに、最終的にセンゴク元帥に報告して、毎度おなじみな真面目な4人で分担して作業した事を付け加えておく。

【SIDE：W7】

「わっはっは！いや、いい進水式日和じゃのう！」

「てか爺、なんでいるんだよ！」

「仕事しないと、後で怒られるぞ？」

一方その頃W7。

海列車マリノフォード駅から、終点W7駅まで直通が走っている  
ので、時間さえ間違えなければ、きちんと着けるのが強みだ。

現在では複線となつて、途中で追い越しや切り替えも設けられて  
おり、海の上を走るといふ以外は正に普通の鉄道と何ら変わらない。  
とはいえ、エースとサボ、引率でやつて来たハンコックに護衛で来  
たアリス、一緒についてきたルフィにナミ、エスメラルダとカルラ  
という一行に加えて、何故かガープがいた。

無論、時間的にガープは仕事のはずである。そもそも、だからア  
スラがこの場にいないのだから。

エースとサボのツツコミも当然と言えるだろう。

「たっはっは！よく来たのう」

駅で出迎えたのは、トムさんその人だった。

さすがに、ガレーラカンパニー社長にして、W7市長まで兼任す  
る事になった、いまやこの都市の最重要人物であるアイスバーグは  
いない。むしろ、トムさんが直々にやつて来る事自体極めて珍しい。  
実際、トムさんにも密かに護衛がついているのだが……まあ、こ  
の面子相手に襲撃かけようとする馬鹿はいないだろう。

さて、完成した船だが、当初予定通りの小ぶりな船である。



「まあ、宝樹アダムは使えんかったのが残念じゃったがな」

「子供の最初の船には高価すぎるわい。大体、あいつは大概が流れるのは裏ルートじゃろうが」

このサイズの船でも最低1億はかかるのは確定。しかも、海軍が金を出して裏ルートは拙いだろう、という言葉にさすがに、一同もひきつる。とはいえ、嘗て、オーロジャクソン号に用いられて、グランドライナー一周が為されたように、可能ならば使いたい素材なのも確かなのだ。

「まあ、何時かお前さん達がドンとそんな船が必要になったら言って来い！」

そんな時は作ってやる、と、たっはっはっは、と笑うトムさんにエースもサボモニヤリと笑って指を立てた。

そんな事を話している内に、ガレーラカンパニーのドックの1つに到着した。

ガレーラカンパニーは世界政府御用達の大型船から小型船まであらゆる規模の船を可能とする。これは、複数の造船所を統合した事によるメリットの1つであり、それぞれの造船所ごとの特色と技術を生かしているとも言える。

今回、使用したのはそんなドックの1つで、その一角に納められていた船はサイズ的にはそんなに大きくはない。

だが、美しく、速そうな船だった。

「こいつが、お前さん達の為に作った船だ。見ての通り基本は速度、それから見えん所では航海の快適さの追及だ」

逆に防御と攻撃力は低めなのだという。

とはいえ、耐久力と防御はまた別で、砲弾を軽々と弾き返すなんて真似は出来ないが代わりに撃たれて穴だらけになるのが、ちよつとやそつとでは沈まないという。

この辺は部屋の扉ごとがそれぞれに隔壁となる工夫の採用に加えて、最下層が水浸しになっても、次の層が、それが駄目になってもまだ次の層が、と水没する事で押し上げられる空気を保持する事で浮力を維持し続けるという工夫がなされている。

攻撃に関しては、船首に1門と左右に各1門。フランキーによる協力を得たこの砲は射程重視の砲だという。

「まあ、お前さん達がやるのが賞金稼ぎつちゆう事で戦闘力重視も考えたんだが、最初は2人だっというし、あまり重武装にしても扱えんからなあ」

だから、武装に回す分を他にまわしたのだという。

将来に備えての拡張性も至る所に工夫して保持された船は中に入っつてしばらく回っていたエースとサボも気に入らなかつた。

「よし！それじゃ、後は航海に出るだけだな！」

「航海術はちゃんと覚えたんだろっな？エース」

「当たり前だろう！」

さすがにエースも旅に出ると決めてからは、サボと2人で互いに必要な事を詰め込んだ。

料理もそうだし、航海術に簡単な医術とどちらかが倒れても、ある程度は対応出来るよう頑張った。この辺好きこそものの上手なれ、というべきだろう。急速に必要な事を修得していった。

(ちなみに料理はハンコックが、航海術はナミが教えたが、医療

に関してはアスラの伝手で元ドラム王国の医師を紹介してもらった)

「おお、それとあと決めておかねばならん事があるぞい」

トムさんが、ふと思い出したように言った。この船の名は何とす  
るのか?と。

にかつとエースとサボは顔を見合わせると声を揃えて言った。

「この船は……俺達の燃える心を、誇りを忘れないよう……誇  
りある焔、ストルツ・フランメ号だ!」

## 第77話・旅立ちの翼（後書き）

という訳で最終的に悩みましたが、暁さんのストルツ・フランメを採用させて頂きました

多数の応募ありがとうございました

今回、異世界の船という事で、我々の世界の神様や神話関連は残念ながらはらずさせて頂きました

最終的に、カナメ・カノリさんの不屈ことフォータレザーとどちらにするか悩んだのですが、今回はこちらを選ばせて頂きました

## 第78話・カイゼン

モーガン少尉が海軍本部にやって来た。

とはいえ、俺が会う事はない。

なんだかもどかしいが、立場的に仕方がないとも言える……相手は新たに海軍本部に配属されたばかりの新人少尉、こちらは海軍トップの一角である中将。

この状況では、中将がわざわざ足を運んで声を掛けるどころか、赴任の挨拶に来させる事さえ困難だ。そう、例えるなら今の状況は、世界トップクラスの大企業で、中途採用の平社員と執行役員ぐらいの立場の差がある。精々が、この状況下では直属上司となる少佐ぐらいが今会える最高階級クラスだろうし、先だつての指摘の確認にせよ、いちいち気にしていると思われるのもどうか、と思えるし……。

悩ましい。

せめて、大佐クラスならまだ可能性はあつたんだが……さすがにそれじゃ手遅れだしな。

ただ、逆に、というかモーガンの件で気付いた事をもっと大元の点で改善する事は今の立場だからこそ可能だ。

そこで、中将以上が参加する会議で、先だつての案件を出してみた。

「……つまり、海軍の認識に問題がある、と？」

「そうですね、これは先日偶々気付いたケースなのですが……」

そう言って、センゴク元帥以下会議参加者の前に先だつてのキャプテン・クロの案件を提出する。

「……ふむ、確かに疑念がありすぎるな」

さすが智将の異名を持つセンゴク元帥。早くも気づいたか。

更に言うならば、他の一同も馬鹿じゃない。あくまで日々の忙しさに追われて、こつした細々した事に気付かなかっただけで、ちゃんと目の前に置かれて、『この件に関しておかしな部分があるんですが』と言われた上で読めば、ちゃんと理解出来る頭がある。だからこそ、全員が真剣な顔つきになっている。

このキャプテン・クロのケース自体は海軍本部にしては小さな件だ。被害にあつた当事者達、惨殺された海兵らにとっては悪いが。

問題は、これが至る所で日々横行している可能性が高い、という事だ。

1つ見つければ何とやら、というが、こつした件は大概氷山の一角だ。

そう、この件が事実ならば、海賊達が死んだと見せかけて実は生きていたといったケースを含め、『海軍が思考を放棄しているせいで、海賊らにまんまと出し抜かれている可能性が多々ある』、という事を示している。

まさか、この報告書を書いた奴が特に馬鹿だった、なんてお氣楽に考えれる訳がない。

「確かに、こりゃあ逃げられとるんじやろつなあ」

「そう〜だねえ〜こんな話は〜他にもあるのか〜い?」

赤犬大将の言葉に賛成した黄猿大将がそう尋ねてきたので、とりあえずざつと部下に探させた、『状況的に疑念のある』と思われる案件をまとめたものを提出する。

これらが提出を命じて即出てきたのはCP改革の産物で、情報分

析担当はこうした資料を分類して収納するように命じてあったから、今こうして役に立っている。

「へえ、こんなにあるの」

さすがに青キジ大将も真剣な表情で資料を確認している。

今回提出したのは比較的重要と思われる案件に限っているが、中にはそれこそ、『VIPが被害にあった為、事件の解決をさかされた結果として、一般市民が犯人に仕立て上げられた』、と思われるものさえあった。

「こうした件を今回の議題として出した理由としては……」

1、肝心要の犯罪者を取り逃がしている可能性。

これは今回の件が正にそれだが、実の所クロコダイルのケースも似たようなものだ。

簡単な陽動や引っ掛けにあっさりかかる奴が多すぎる。

その結果として、出勤したのに海賊を取り逃がしたり、誤認逮捕したり……しかも後者が最悪だ。この世界、司法が一部例外はあれどもまだまだ真つ当な働きには程遠いせいで、一般市民が捕まったらそれを晴らすような手段がない。

……なんせ、この世界弁護士だの、上告だの制度がないからなあ……  
……場合によっては、逮捕した奴がそのまま裁判官に、なんて事まで起きている。

2、懸賞金などの虚偽申請

これも分かるだろう。

今回のキャプテン・クロのケースで、モーガンには報奨金が出ている。生き残ったのが彼1人、という事もあり、さすがに仕事の一環であるから本来の懸賞金額よりは下がるが、結構な金になる。ま

あ、彼の場合は見舞金なんかも上乘せされるんだが。

ただ、今回はともかく、偽装で賞金稼ぎと組んで海賊がやらかそ  
うものなら、1と相まって面倒な事この上ない。

少なくとも、より明確な確認方法の導入は不可欠だろう。

まあ、この2つが特に大きいな。

これ以外にも細々した事は結構あるんだが、成績を誤魔化す為の  
強権逮捕とか、その辺は個別の件として併記してあるから、よしと  
しよう。今はあくまで、この件による直接的な影響だ。

「……今回の、モーガン少尉だったか、そいつが関与したつちゆ  
う可能性はあるんかのう？」

「いえ、確認しましたが……彼が発見された当初瀕死の重傷だっ  
たのは確か。おそらくは暗示の類を用いられたのではないかと」

「暗示、だと？」

「正確には催眠術だが、暗示というものは本人の願望に従えばより  
効果的にかかる。」

まず意識不明瞭な夢の中にあるような状態にする必要があるが、  
これは大怪我で意識が朦朧としている状態にあれば、特に何かをす  
る必要もあるまい。

次に願望だが、モーガン軍曹（当時）のそれまでの行動を見る限  
り、正義感の強い真面目な海兵だった。そんな彼がその時、願って  
いた事は何だったか？それは当然、キャプテン・クロの逮捕だった  
だろう。仲間達が命を散らし、自分も瀕死。このままでは、仲間が  
報われない、そんな思いの中、朦朧とする意識に……。

「仲間達が命がけで、キャプテン・クロを捕縛し、海賊を追い払



う事に成功した』

と、囁かれたらどうなるだろうか？

そうして、目覚めた時、『キャプテン・クロを名乗る人物が捕らえられた』と聞いたら……暗示自体の作用と相まって、それを信じてしまうだろう。

そんな暗示や催眠術の専門家の言葉を告げた。別に催眠術はジャンゴの専売特許ではなく、海軍やCPにも使える者はいるし、中にはジャンゴを上回る者もいる。まあ、これらはより正確には、そうした使い手達の意見を参考意見としてまとめさせたものなんだが。

「ふうん……なまじ正義感が強い真面目な海兵だけに、それを利用されたって所だねえ」

おつるさんが、そう言った。

参考意見と、おつるさんの言葉を聞いて、赤犬大將が体重を椅子に預け直した。……サカズキさん、貴方、もしモーガンが自分から関与してたなんて結論になったら、燃やしに行く気満々でしたね？

「ふむ……確かに言いたい事は了解した。それで、アスラ中将。この件に対して、どのような対応策を行なうのがいいと思うか？」

センゴク元帥の言葉に一同の視線が、アスラに集中する。

「はい、まず皆さんにご理解頂きたいのは、すぐにどうこう出来るような問題ではない、という事です。根が深い、というだけの問題ではありません。これまでのやり方をガラリと変える必要があります。今までと違った見方をして、ちゃんと状況を考える、という事でもあります」

ふむ、と頷く者もいれば、黙って聞いている者もいる。ただ、ガープ中將も含めて理解出来ていない人はいないようだ。

……ガープさんも真面目にやれば、頭悪くないのに。そう思いながら、アスラは話を続ける。

「この為、この状況を改善するとすると、正直に申し上げて抜本的な対策を行なわざるをえません。現在の海兵らの育成自体の変更を手をつけざるをえませんので……例えば、ストロベリー中將」

「なんだね？」

一番近くにいたストロベリー中將に、アスラが声を掛ける。

「今から、ご自身で育成方法を変える事は可能ですか？ 具体的には武術や書類処理だけでなく、書類の裏事情を読み取ったり、或いは策略を教えたり、とか……それも少数ではなく、ある程度纏まった数の相手に」

「……………無理だな」

少数ならば、教える事も可能だろう。

だが、これまで海軍はあまりにもそうした領域をCPなどに任せすぎてきた。結果、脳筋ばかりが増えて、或いは戦闘力を鍛える為の流れは出来ていても、謀略面など頭を働かせる部分が完全に疎かになっている。

まあ、だからといって、謀略面ばかりが重視されたら、今度は元の世界の旧日本軍よろしく、謀略畑の参謀ばかりが幅を効かせて好き勝手という事になりかねないから、そこら辺は注意しないといけないんだが……。

あくまで、謀略面を見抜く力は必要だが、自分から謀略を企む必

要はない、という事を徹底する必要がある。

最終的な判断として、海兵育成のプログラムに作戦立案や作戦看破の為の教育を組み込んでいく事になった。

これから、大変だな……まずは教育の内容から考えないと……。

立案者の責任として、『教育総監』に任じられたアスラは深い溜息をついた。まあ、この役職はあくまで『臨時』なのが救いだが。

## 第78話・カイゼン（後書き）

モーガン少尉は今後様子見、大元からの改革を押し進める事にした  
アスラです

まあ、脳筋な人多そうですね、海軍  
上はそうでもないんでしょうが……

## 第79話・出航

「……あの悪ガキどもがもう、なあ……」

「ふふ、時が経つのは早いものじゃ」

アスラとハンコックは、マリィフォードの岸壁にいた。

これから、エースとサボが旅立つ。

ストルツ・フランメ号はガープ中将がフーシャ村に向かうのに同道し、そこからは中将と別れて行動する事になる。

この航海が実質的に当面の兄弟の別れとなる為、ルフィとナミもまた、フーシャ村まではストルツ・フランメ号にて航海を行なう事になっている。尚、ルフィは正式に海軍の一員となった為、とりあえず軍曹の階級が与えられている。とはいえ、ルフィの実力ならばすぐにもっと上へ上がってくるだろう、と予想されているのだが。

当面は、ガープ自身に任されている。危ぶむ声もあつたのだが、センゴク元帥の『なら、小さなガープとでも言うあいつが問題を起こさないよう抑える自身があるのか?』と聞かれると、誰もが目を逸らした。

無論、これとは別にセンゴク元帥はガープだけを呼んで、密かに話をしている。

何しろ、ルフィの熱血な正義感とでも言うべきものと、その正義感故に革命の道へと進んだドラゴンという例がある。だからこそ、センゴクも、それ故に道を誤らないよう心配していたのだ。特に、下手に天竜人の、彼らの言う所の下々民に対する行動を見たら、ぶち切れかねない。

だからこそ、ガープの手元に置いて、ある程度仕込むよう伝えていたのだ。

アスラの元に置くという事も考えたが、アスラは何しろ書類に追

われている時間が多く、ルフィに細々と目を向けてもらえない。

ガープもその辺りは理解しているから、口ではセンゴク元帥に対して軽口を叩いていたものの、目は真剣だった。

さて、話を戻して、今回はサンダーソニアとマリーゴールドもガープ中将の船に同道する。

彼女らも一応海軍所属となったというのもあるが、それ以上に『偶にはアスラとハンコックに夫婦水入らずで過ごさせてやろう』という事に家族一同が賛成したからだ。

何しろ、これまでアスラの家には本来の家族とは別に、エースとサボ、ルフィ、ナミ、それにサンダーソニアとマリーゴールドがいて、ガープとサカズキもちよくちよく当たり前のように来訪していた。

したがって、本当の意味で夫婦水入らず、というのは長い事なかったのだ。

まあ、広い家だから、特に問題なかったのだが……やはり、そこは気分の問題だ。

サカズキ大将もこれに合わせて、久方ぶりの航海に出るので、家に残るのはアスラとハンコック、エスメラルダにカルラ、後はアリスだけになる。

本当は、アスラとしてもエースとサボの処女航海にはついていきたかったのだが、それをやると、今度はハンコックと一緒にいる時間がなくなるので、諦めたのだった。

したがって、エースとサボとは、アスラはここでお別れになる。

「それじゃあな、2人ともエスメラルダとカルラの妹が弟作ってやれよ」

「真面目な顔で朝から何言ってるのよ、あんたは！」

きりつと真面目な顔でいきなりそんな事を言うエースに、ナミが思い切り突っ込んでいた。

まあ、確かに朝っぱら言う事ではあるまい。まあ、ハンコックは顔を真っ赤に染め、両手を頬に当てて、「そんな、いや、でもアスラが望むなら」と呟きながら、まるでいやんいやんと言わんばかりに首を振っていたのだが。

そんな中、アスラはサボの元へと歩み寄った。

エースが六式をはじめとする、格闘戦闘を鍛えたのに対して、サボは武器を用いた戦闘を鍛えた。この為、モモンガ中将や、ぶらりとやって来たジュラキール・ミホークにまで鍛えてもらい、今では相当な腕前を持っている。少なくとも、そこらの海賊如きにはまず負けはしない。

「サボ、お前刀はどうするんだ？」

「ん？ああ、どっかの島に寄った時に買おうと思ってるよ」

サボが現在腰に挿しているのは、海軍支給の無銘の刀だ。

頑丈だが、特徴はない。

まあ、長らく使ってきた愛刀ではあるが、所詮元々は訓練用に支給された数打ちの一本だ。真の名刀には程遠く、本物と刃を合わせれば腕が互角でも簡単にへし折れるだろう。

「だと思つたよ。ほら、餞別だ、持って行け」

苦笑を浮かべ、アスラはコートの陰になっていた手に持っていた一本の刀をサボへと差し出した。

「これは……？」

受け取ったサボは刀を抜き、息を呑んだ。  
刀は黒刀。

刃文は乱刃丁子乱れ。  
吸い込まれるような正に名刀だった。

「大業物、美髯切長船だ。持って行け」

さすがにこんなものは貰えないサボは慌てる。

それは当然だろう。大業物は僅か21刀工。

一本辺りの価格は優に1000万ベリイを超える。餞別には確かに高すぎる代物だろう。

「気にするな。そいつはミホークからの餞別だからな」

「……え？」

短い期間ではあったが、紛れもなく師匠の1人であった世界一の  
大剣豪の名を言われ、呆気に取られるサボだった。

「あいつが持っていた刀の一本を餞別にと寄越してくれたんだ。  
有難く貰っとけ」

「……でも」

俺には、まだこの刀は重過ぎる、とサボは語る。

当然かもしれない、世に名だたる剣豪が、この刀一振りを手にするのにどれだけ苦労している事だろう。そうして、それでも手にする事の出来ない者の何と多い事か。



「あと、ミホークから伝言だ」

「……師匠から？」

「『刀に負けるか、それとも刀に勝るか。後はお前次第だ』、だ  
そうだ」

「……………」

じつとサボは手元の刀を見詰める。

刀の名に負け、その刀を持つに値しない男で終わるか、それとも  
……………」

「……………分かった。答えはこれから俺の行動で示してみせる、って  
師匠に伝えておいてくれ」

「分かったと言いたいが……俺だと何時になるか分からんがな」

違う、とサボと2人して笑みを交わす。

こうした些細な事も、これで当面終わりとなるかと思うとなんと  
も寂しくもある。

エースには、こうした贈り物はないが、これはさすがに得物がある  
かないかの違いだし、さすがにアスラとて、悪魔の実を手配する  
事は出来なかった。

エースがメラメラの実をこの世界でも食つかどうかは分からない  
が……それは縁があれば、食う事になるだろう、と知っている。

「お、サボ、いいもん貰ったな？」

「おお〜立派な刀だな！」

「あら、結構綺麗な刀ね？幾等ぐらいするのかしら」

エース達も寄ってきて口々に言うが、欲しいと言わないのはエースとルフィは素手格闘戦を鍛えてきたし、ナミは嘗ての経験から少々金に煩い所はあるが、金の亡者という程ではないからだろう。

「ようし、そろそろ出航するぞい！」

準備が整ったのだろう、ガープ中将が声を掛けてきた。

小型船であるストルツ・フランメ号と違い、大型戦艦であるガープの旗艦はさすがにそれなりに出航に時間がかかったのだが、それもようやく終わったようだ。

「元気でや（れよ／＼るんじゃぞ）！」

「がんばってねー」

「がんばれー」

「みゃうー！」

アスラ一家が見送る中、遂にエース達は出航していった。

これから、彼らは共に旅をする仲間を探しつつ、旅を続けていく事になる。

無論、早々に予定外の事態でくじけてしまう事もあるかもしれないし、名を馳せる事になるかもしれない。原作とは大幅に変わってしまったこの世界で、果たしてどのような冒険を彼らが繰り広げていくのかは、アスラにも分からなかった。



## 第79話・出航（後書き）

刀の名称ですが、悩んだ末、『髭切』と『備前長船』を合わせて作っています

備前長船系は、有名どころは本当は最上大業物がズラリと並ぶんですが、ワンピースの世界では、未だ最上大業物はミホークの持つ「夜」しか出ていないので、大業物としています

## 第80話・ココヤシ村（前書き）

モニターが不調だ

ひよっとしたら逝かれるかも……もう長い事頑張ってくれたからなあ  
逝っちまった場合は、更新しばらく止まるかもです……

予備にと仕入れたノートとかあるんですが、接続のセットアップと  
かまだやってる時間がないんですよねえ……  
休みが欲しいです

## 第80話・ココヤシ村

「もうじき、ココヤシ村だな」

ガープ中将の戦艦と共に航海してきたからだろう、さすがに妨害に突っ込んでくるような奴はいなかった。

まあ、普通の海賊はわざわざ海軍の戦艦と好き好んで遣り合おうと思う奴はいない。

海賊が船を襲うのは、あくまで積荷を狙っての事だ。海軍の戦艦など貴重品などろくに積んでいる訳がないし、僅かな護衛が乗っているのが精々の商船と違って、乗っているのは全員が鍛えられた海兵だ。

早い話が、労多くして、益少ない。そんなもん、襲いたくないに決まっている。

ましてや、海軍本部中将の座乗を示す旗があがっていれば、普通は逃げる。

かくして、今回の航海は至極穏やかなものだった。

もっとも、彼らが東の海に来る時は、まず騒乱など起きた試しがない。今回はガープと一緒にだったが、普段はアスラと一緒に。海軍本部中将と一緒にという意味合いでは同じだったからだ。

お陰で、ストルツ・フランメ号の処女航海としては、操舵などに慣れるという意味合いでも快適だった。

嵐などにも遭遇したが、そこは世界最高の船大工の1人であるトムさんが自ら設計図を引き、建造に携わった船。小型でもグラントラインの嵐にもびくともせずに乗り切った。

そうして、東の海へと入り、彼らがまず目指したのはココヤシ村。今回はアスラ一家を除く皆が乗っている。

折角、ナミもいるのだから、フーシャ村へ直行するよりは、とナミの故郷へも寄る事にしたのだ。

同時に、ここまでの航海で、幾つか問題点が明らかになってもいた。

船は問題ない。確かに素晴らしい船だ。

ただ、やはり、2人では厳しい。確かにこの船は2人でも何とか動かせるが、最低でも操舵には1人が必要だ。当たり前だが。

そして、帆で動く船である以上、何かあった時にはもう片方が帆を畳んだり、逆に展開したり、ロープワークが必要になったりと走り回る事になる。

そうしながら、海図と睨めっこしてコースを算出し、食事を作らなければならない。

舵の固定は可能にせよ、大海賊時代のこの時代だ、緊急時に備えて、常にどちらかが起きている必要がある。今は海軍の戦艦が傍にいるから大丈夫だが、エースとサボの2人でとなれば、現実には昼に動き、夜は適当な島の沖合いにでも停泊して、というのが妥当だろう。

「やっぱ、もう少し人手を増やす必要があるなあ」

眉間に皺を寄せて言ったのはサボだ。

「大丈夫大丈夫、何とかなるって」

「あんたらはお気楽すぎんのよ！」

エースとルフィが口を揃えて笑いながら言うが、ナミがそれを怒鳴りつける。

まあ、この子供達は大体こんな感じだ。

常に前向き、超ポジティブなエースとルフィに、真面目なサボと

ナミが突っ込み役となりやすい。ちなみに、エスメラルダは真面目派だが、ナミよりはサボ側で、丁寧に懇々と言い聞かせる形での説教になる。カルラはまだよく分かっていないようで、エスメラルダの真似をしてはしゃいでいる、といった所か。

「でも、まあ、確かにもう少し人手が欲しいな。俺らじゃ料理のレパートリーも限られてるって分かったし」

試しに作ってみた。

確かにまともに食えるものが出来た。味もまず問題なかったが、問題が発生した。サボが今言った通り、料理のレパートリーが少ない為に一週間もすれば、同じ料理が卓上に並ぶのだ。更に、病気の治療法に関しても未熟だった。

「出来れば、医者、コック。後は航海術が出来る奴が2人ぐらいは欲しいよなあ」

それぐらいいいないと、夜の航海なんて真似も出来ない。今はまだ、いい。

しかし、4人でもそれなりに支障が出ているのだ。これから長期間の航海をしていくと考えるとなんと心もとなかった。

しかも、仮にも賞金稼ぎの船だ。ある程度なりに戦闘能力がないと、あつという間に鬼籍に入る事になるだろう。そうした悩みを抱えつつも、彼らはココヤシ村へと到着した。

「みんなー！ただいまー！」

ナミが島に着くと、手を振って駆け出していく。その姿は年相応の少女のものだ。



あれから、島民らとは文通をしながら連絡を取り、互いの気持ちも数年の月日が落ち着きを取り戻してくれた。今では、解放直後の互いの複雑な気持ちから来ていた微妙な距離も解消されている。

とはいえ、やはり、親しい人と顔見知りとでは対応も変わる訳で、ナミが一番に飛び込んで行ったのは、ベルメールが亡くなった今、父親のような存在であるゲンさんだった。

ノジコは島中央付近の家にいたはずだから、少し遅れてやって来るだろう。

「ゲンさん、ただいまー！」

「おお！大きくなったなあ」

飛び込んできたナミをゲンさんは受け止める。

ゲンさん自身は全身の傷もあいまって強面に見えるが、その中身は優しい。だからこそ、島民にも慕われている。

久方ぶりに会えたゲンさん相手に最近の話をしていると、ノジコが駆けてくるのが見えた。

ノジコもまた、手を振るナミに気付いたのだろう、手を振りながら、彼女もまた駆けてきて、互いに抱き合う。

幸いというか、海軍に行った後早々に手紙が届いていたから、アスラ中將が言った通り、海軍への奉仕活動それもナミがやりたかった事を学ぶという環境で楽しく仕事を学んでいると知り、ほっとしたものだ。だが、何しろグランドラインの海軍本部だ。なかなか里帰りする事も出来ない。

こうして会うのも久しぶりだ。

だからこそ、互いに積もる話も多い。特に、変わり映えしない田舎のココヤシ村と違い、海軍本部マリンフォードは刺激的だ。話す事も多々ある。

そうした積もる話が一段落ついた所で、ノジコがふと他3人を見

ながら、ナミに囁いた。

「でさ、ナミ。あんたの本命って誰？」

ピクリ、とゲンさんの耳が動いた、ような気がした。

「いないわよー！」

「そつかあ。……で、本当の所は？」

あくまでエース、サボ、ルフィの3人の誰かが本命なのだろう、と囁くノジコ。

それを否定するナミに、娘を取られる父のような気持ちとでもいうのか、ノジコが何か言う度に体が揺れるゲンさん、という構図がしばらく繰り返し広げられる事になった。

「はっ！まさか、あの時助けてくれた海軍中将とか！？」

「アスラは奥さんも子供もいるわよ！」

そんな会話を交わしながら、何時しか2人は笑っていた。

そんな光景を見ながら、ゲンさんは厳しい顔を崩しはしないが、心の内ではほっとするものがある。

思えば、結局短い期間で終わったとはいえ、あのアローンの占領はこの2人にも重い陰を落とした。

母と慕ったベルメールを殺され、ナミは彼女なりに出来る事と  
思い悩んだ末、事情があつたとはいえ、アローン一味に入った。無  
論、ノジコはそれでもナミを信じていたが、やはりそんな環境で互  
いに笑いあうなど不可能だった。

それが今、こうして笑いあえている。

それがゲンさんには何より嬉しかった。きっと天国のベルメールも笑顔で、この光景を見ているだろうと信じて……。

（だが、まだ男にやるには早すぎる！）

と、これだけは完全に過保護な男親の思考で、じろりとエースらを睨むゲンさんだった。

……ちなみに、睨まれた3人はと言うと、実力ではゲンさんをはるかに上回る3人ながら、何故かその視線に背中がゾクリと来るのをさけられなかったのは、これも父は強いという事になるのだろうか？

そうして、数日の滞在の後、再び彼らは旅立って行った。

## 第80話・ココヤシ村（後書き）

まずはココヤシ村にて

そして、幾つか不具合発覚

というか、確かにヨットで1人で世界一周するのは耳にしますが、機械のない、しかも大海賊時代故に襲撃の危険も考えないといけないこの世界じゃ、2人で航海するのはきついですよ

## 第81話・再会と語らい

ココヤシ村を旅立ち、一同はゴア王国フーシャ村へと到着した。フーシャ村はルフィの生まれ故郷だが、主にガープの事が原因で、間もなくマリンフォードへとルフィも移った。

だが、それ以降も極力1年に1度はフーシャ村へと訪れる事にしてきた為、結果としてエースやサボにとっても、もう1つの故郷でも呼ぶべき感覚がある。まあ、サボにとってはゴア王国は実際故郷な訳だが。

ゴア王国首都へはガープは立ち寄る予定はない。

元々、ガープにとっては、フーシャ村は故郷だ。村長とは、もう親子三代に渡る付き合いが続いている。逆に言えば、アスラのようにゴア王国に立ち寄るのにも理由が必要な立場ではなく、里帰りの一言でゴア王国へも理屈がつく。

まあ、アスラの場合は本部中将以外にも色々と厄介な肩書きがあり、一方ガープはとにかくフリーダムなのも原因な訳だが。

まあ、とりあえず親しい人間が多いという事だ。

だから、あちらではエースとサボが村の若い面々と遂に航海に出る事を決めた事を話して、贈り物として貰った船を見せ、羨ましがられている。

かと思うと、ルフィが未だ新品の海兵服をマキノや村長に見せて、話し込んでいる。

あちらでは、ナミが村の女の子らと話をし、マリンフォードなどで仕入れた品をお土産に渡したり、かと思えばガープが昔馴染みの面々と話に花を咲かせていた。

その中で、サボは何かしら追加のクルーになりそうな情報を集めていた。

無論、この村の人間を連れて行く予定はない。

彼らは皆、普通の村人であり、農民であり、商人であり、獵師であり、漁師だ。それぞれに異なる道はあれど、戦い、という道とは縁遠い、平穏な生活を送っている人達に他ならない。そんな彼らを巻き込む予定はサボにもない。

ただ、情報を集めるといふ行動を行なえば、それは間違いなく、見えないものよりも見えるものの方が多くなる。CP長官の立場にあるアスラが僅かな休暇の折に教えてくれた事だが、知る、という事は選択肢を増やす事だ。

無論、情報の多さに溺れる事は論外だが、情報を集めなければ、それだけ間違つた選択を行なう可能性は増えるし、或いはより良い選択があつたのに、知らないままに終わるかもしれない。

まあ、大抵は役にも立たないクズ情報なのだが、そんな中に海上レストランというものが開かれているという話を聞く事が出来た。

どんなものかは話してくれた商人も知らず、ただそういふものが出来たらしいという事だけなのだが、それはそれで興味を惹かれる。何しろ、この航海の間、結局ナミや隣の戦艦のコックに頼んで料理を作ってもらっていたのが実情だからだ。

刺身と煮込みと塩焼き、茹でに揚げと干したもの。この繰り返しには、お互いのレパトリーのなさに笑うしかなかった。まあ、この辺はアスラとて似たようなものなのだが、彼の場合は家では料理上手な奥さんが、船では専門のコックがいるので問題はない。

後で、エースに話してみるか、とサボは脳裏に書き込んだ。

## 【SIDE：ガープ】

夜のフーシャ村の郊外。

そこにガープは佇んでいた。

殆どの人間は既に寝静まっている時間だ。さすがに、ガープの戦艦は交代での見張りが立っているが、緊急時に対応する為に彼らが

船から降りる事はない。

一方、この位置は船からは完全に死角。

山賊が来る程山に近くもなく、村から散歩で来る程近くもない。そんな場所だった。

海軍のコートも纏わず、制服も纏わず、アロハシャツとでも言うべき服装なガープはただ腕組みをして、海を睨んでいた。

どれだけ経っただろうか。

短いような気もしたし、長いような気もしたが、ふと風が吹いた。ガープは視線も向けようとしなかったが、何時の間にか、ガープに並ぶようにして1人の男が立っていた。

「久しぶりだな、親父」

「お前も元気そうじゃな、ドラゴン」

視線を互いに交わす事もなく、2人はそれでも声を交わした。

そう、彼の名はモンキー・D・ドラゴン。ルフィの父であり、ガープの息子。そして、現在は革命家として高額の賞金首でもある。

本来ならば例え息子であっても、いや息子だからこそ捕らえねばならないのだが、ガープが今の服装をしているのは自身が今は海軍の一員としてここにいる訳ではない、という事を示す意味合いもあった。

「ルフィには会ったのか」

「いや。あいつは海兵になる道を選んだ。まあ、それもいい。男が自分で選んだ道だ。だが、それだけに革命家の父親が、今あいつの前に姿を現すのは良くないだろう。遠目に見るぐらいはしたがね」

ドラゴンも、この父には悪い事をした、と思っていない訳ではない。

確かに無茶苦茶な父だったが、嫌いではなかった。

どうしても今の世界が許せず、革命家という道を選んだドラゴンだったが、今ではガープの選んだ道の意味も分かる。

ガープが海軍に入る道を選んだ時代、世界には革命軍などというものはなく、海賊も今程蔓延っていた訳ではなかったが、それだけに海賊達は凶悪で、凄腕だった。

今は大海賊時代と言われているが、それは単純に憧れだけで海へと漕ぎ出した、海賊という犯罪者となる事を理解して海へと出た訳ではない連中も多々含んでいる。彼らが海賊を名乗っているのは、海賊王ゴールド・ロジャーへの憧れだけで、戦い方さえ知らない素人海賊団などという嘗てなら信じられないような者までいる。

無論、海へと多数が出た為にダイヤがその中から出てくる可能性も高まったが、現在の大海賊時代を一言で言えば『粗製濫造』、これが相応しい。

だが、当時。

フーシャ村を出て、海軍へと入ったガープはきつと凶悪な海賊達に泣かされる人々も大勢見た筈だ。

世界政府への不満よりも、天竜人への怒りよりも、そんなものを抱いている余裕などない時代だったかもしれない。

無論、だからといって自分の道が間違っているとも思っていない。長すぎたのかもしれない。

或いは最初から何か狂っていたのかもしれない。

1つだけ言える事は、世界政府も天竜人も海賊も今の世界は平穩に暮らす人々にとっては大差ない存在だという事だ。

海軍もまた、真剣に正義を胸に抱いて励む者がいる一方で、自らの欲に負け、人々を苦しめる者もまたいる。

いずれにせよ、世界は変わらねばならない。そして、今度はほんの僅かな、一握りの人々が全てを握る世界ではあってはならない。



ドラゴンはそう信じている。

「早いものじゃな。お前が今の道へと踏み込んだ時は、革命という存在がこれ程世界にとって大きなものとなるとは思わなんだ」

「それは当然だ、親父。それだけ世界は、人々は今の世界の有り様に疑問を抱いているんだ。不満と言い換えてもいいかもしれんがね」

ふん、とドラゴンの言葉を鼻で笑う。

「小さな火はあるじゃろうな。だが、それを焚き付けて、大火にしるのは間違いなくお前達、革命軍じゃ」

「それは否定せんよ。けれど、今のままでは駄目だという思いだけは間違いないと信じている」

その言葉に一瞬黙り込んで、ガープは言った。

「だから、ゴア王国にも革命を起こすか」

「……………この国が限界なのは親父にも分かっている筈だ」

ドラゴンは否定はしなかった。

そして、ガープもまた否定しなかった。

サボが涙と共に叫んだ言葉から何年が過ぎただろう。子供にさえ、『貴族に生まれた事が恥ずかしい』と言わしめたゴア王国は軋みを上げて倒れようとしていた。

嘗ては今程の歪みはなかった。

だが、何時しか、無論煽る者達がいたのも確かだっただろうが、

王と貴族、そしてそれ以外との関係は崩壊しつつあった。貴族とて気付く者もいたが、それは大抵の場合、軍による威圧に終わった。

……その軍隊でさえ、大半を占めるのは、それ以外に属する一般人である事を忘れて。

一旦崩壊が始まれば、それは王と貴族が気付かぬ内に、軍の大部分さえ取り込んでゴア王国に業火を燃え上がらせようとしていた。

ドラゴンが今日この日にここにいるのは、無論ガーブが図ったのもあるが、ドラゴンの事情もある。

「……ルフィに父親を討たせるような事にはさせるなよ」

「今更だな。それを言ってしまうえば、俺と親父もそうだし」

それ以上は互いに語らなかつた。

そのまま互いに1度も視線を交わす事なく、親子は互いに背を向けるとその場から立ち去った。

この3日後、エースとサボが旅立つのに合わせて、ガーブの戦艦も出航。

ゴア王国が倒れたのは、更にその2週間後の事だった。

第81話・再会と語り（後書き）

という訳で、この親子の会話でした

サボはバラティエの噂を得ました

無論、そこにすぐに行く訳ではありませんが……  
その前に…

## 第82話・デビュー戦

激しい音がして、刀に重いものが叩きつけられる音がした。

この時ばかりは、サボは自分の新たな愛刀が黒刀である事に心から感謝した。もし、これが以前の数打ちの刀であれば当に折れていたのであろうし、黒刀でない名刀であれば折れずとも、下手をすれば曲がっていたかもしれないからだ。

エースとサボは初めての賞金稼ぎを行っていた。

ガープと別れ、航海に出て数日。

小型船と見て、海賊船の方からやって来た。

ストルツ・フランメ号の性能ならば余裕で振り切る事も可能だったが、それではこれからの仕事にならない。旗を確認すれば、相手の海賊は懸賞金額350万ベリー、『鎧猿』のアルポリ。

自分達の初仕事としては物足りないが、ここから俺達の物語が始まるんだ！とばかりに寄ってきた所に逆に襲撃をかけた。

……その結果がこの有様だ、と思う。

実力から言えば、彼らは自分達より遥かに弱かった。

一撃で吹き飛ばされ、斬られ、自分達は順調に相手を倒していたはず、だった。

だが、そこから違った。

彼らは倒されても倒されても、立ち向かってきた。

血を流しながら、懸命に足にしがみつき、両腕をへし折られても歯で噛み付き、腹を刺されてもそのまま武器を掴んできた。

「くそ……放せ！」

体にしがみついていた連中を振り解こうとしたサボはふと目の前

の光景に気付いて、目を疑った。そこには大砲が自分に向けられていたからだ。慌てて、仲間ごと撃つ気か、と叫び、しがみついている連中には死ぬ気かと叫んだが、意地でも離れるものかと更に抱きつき、大砲を操作していた連中は容赦なく発砲した。

『鉄塊・剛!』

最強の鉄塊でかろうじて防ぐが、さすがに衝撃まではこの状況では防ぎきれず、吹き飛ばされる。

幸い、それで大怪我を負った連中も引き剥がせたので、起き上がりつつ、エースの方を見れば、あちらも船長を相手に苦戦していた。どう見ても、エースが苦戦するような相手ではないのにも関わらず、だ。

(アスラが東の海から始めろ、って言った意味が分かったような気がする……)

人を初めて殺す、という事の衝撃も、そんな衝撃に浸っている余裕すら与えられなかった。

彼らは弱い。自分達がこれまで相手をしてきてもらった人達に比べるべくもない。

エースとサボは気付く余裕もなかったが、これは彼らが逆に乗り込んだ際、『賞金稼ぎだ!』と名乗った事もあった。

賞金がかけられているような海賊というのは、裏を返せば何らかの犯罪を行なった海賊達である。

そして、この時代。

大海賊時代と呼ばれる程に巷に海賊が溢れているような状況では、海軍も一罰百戒とばかりに厳罰主義で望んでいた。

何が言いたいかというと、実際に犯罪を犯した海賊の一味など、

よくて長期の刑務所という名の緩慢なる死刑。悪ければ、即効で死刑が待っていた。

これが同じ海賊ならまた反応も変わっていただろう。

海賊相手ならば、逆にここまで抵抗する方が馬鹿馬鹿しい。何故なら、同じ海賊ならば敵わないと悟ったらさっさと降伏した方が殺されずに済む可能性が高いからだ。

確かに溜め込んだ財宝や食料を奪われる可能性はあるが、最悪でも殺される可能性が高いのは船長ぐらい。場合によっては、相手の配下になってしまふという手もある。だから、同じ海賊相手ならばここまで抵抗せず、さっさと船長なりが敗れた時点で降伏する事も多いが、逆に海軍や賞金稼ぎでは話が異なる。

『どうせ、捕まったら助からない』

そう言い切れるだけの悪事を実は、『鎧猿』一味はやって来ていた。

その割に懸賞金額が低いのは、仕事をした時は極力皆殺しにして証拠を残さずやって来たからだ。

しかし、証拠が薄いからといって、疑われている可能性は高い。

となれば、捕まれば死刑となる可能性も高いだろう……そこへ賞金稼ぎがやって来た。

かくして、彼らは自分達が生き残る為に、或いは仲間を生き残らせる為に命を賭けた戦いを繰り返しているという訳だ。

そんな事情はエースもサボも分からない。

だが1つだけ分かった事がある。

これまでやって来たのは所詮試合だったという事だ。

海軍元帥が、大将が、中將が相手してくれた。時には王下七武海が相手をしてくれた事もあったし、海軍の将官佐官、それもマリ

フォードの本部所属の面々が相手をしてくれた。

ただ、エースやサボが強くなった時、一手入れた時、怪我をしないように素直に負けを認めていた。

如何に激しくとも訓練と実戦は違う。

如何に相手が弱くとも、命を賭けて挑んできた時、人は想像以上の強さを発揮する事がある。

それが今、彼らが体験している事実だった。

この戦いは激しく、けれど、実力差故に、短時間で終わった。

如何に必死に戦おうとも、海軍本部で幼少時より一流の面々に鍛えられた者と、穏やかな海で弱い者から搾取していた者達とは根本的に差がありすぎた。

……もつとも、勝者の2人が果たして勝った気になれたか、といえば、そんな気分にはなれなかった。

周囲には血の海が広がり、海賊船に他に生きている者は誰もいなかった。

「……………なあ」

「なんだよ」

しばらく座り込んでいたエースがやっと、という声でサボに話しかけた。

「これが……………本当の殺し合いなんだな」

「……………そうだな。アスラが東の海から始めろって言った意味がやっと分かった」

それからしばらくは彼らは動けなかった。

ただ一つ分かっているのは。

こうした事は、これからもありうるという事実のみ。

そして、アスラもガープもこうした現実を乗り越えてきた、という事だけだった。



## 第82話・デビュー戦（後書き）

本日ショックの余り短めです

何があつたかつて？

間違えて、携帯ごと洗濯しちゃったのさ！

はい、見事に壊れました……

### 第83話 - 決意

まず結論から言うと、エースとサボは賞金を受け取れた。賞金がかかっている船長は当然持ち帰ったが、幾つも初めてならではのややこしい事態が発生してしまった。

まず、当然起きる問題だが、遺体の保存だ。

船には機能を追求されていて、小さいながらも遺体の保管庫に相当する倉庫というか安置場所まで『賞金稼ぎ』として使用すると分かっていたのである。きちんと設けてあったのは幸いだった。これに関しては、エースもサボもいざ『どこに置く?』となった時、困り、簡単な船の解説をひっくり返して、安置所を発見した時安堵の溜息をついたものだった。

そりゃあ、誰だって自分が寝る船室に遺体と一緒にいたくない。かといって、倉庫に置くのはそれはそれで、食料と一緒に遺体が置いてあるのかと思うと何とも不気味な気持ちがある。自分達が殺した相手だとなれば、尚更だ。

次に困ったのが船の処置だった。

自分達の船ではない。海賊船だ。

自分達が乗っているのより更に大きな船であり、曳行など不可能だ。

かといって、まさか死体だらけの船をそのまま放置、という訳にもいかない。

最終的には遺体を船内に押し込んだ上で、船に穴を開けて沈めるに至ったが、遺体を担いで船から漏れ出さないよう押し込む作業も、船が沈むのを見ているのも気持ちのいいものではなかった。

気持ちのいい船乗りがいたら、むしろ精神面を気にした方がいいだろうが。

最後に、自分達の船だ。

今回は良かったものの、自分達の船に戻った時、冷や汗が流れた。原因は船と船の固定に関する部分だ。

今回は持ち堪えたものの、即効で乗り込んだ為に簡単にしか固定されていなかった双方の船の接点は舷側は傷だらけになっていたり、固定していた筈のロープは船に挟まれて結構危ない状態。引っ掛けた鉤爪は外れかけていた。

もし、鉤爪がロープのどちらかが持ち堪えられなかったら……その時は船は流れ出していた筈だった。そうして、あんな戦況と心理状況ではそれに気付く余裕などあるはずもなく、きつと船を失っていただろう。

それらをようやくと全部片付け、証拠となる海賊旗と賞金首の遺体を引き渡し、ここでまた確認に騒動が起きた。

これが本当に、賞金首の遺体なのか、似せた死体を持ってきただけではないのか、という確認からエース達への聞き取り調査まで様々だった。

この辺は、実はアスラの改革のせいでもあり、供述に矛盾点がないか、本物なのかの確認が必要になっていたからだ。

それもやっと終わり、賞金を受け取り、海軍支部のある町の港に停泊させたストルツ・フランメ号の上で、エースとサボはぼんやりと夜の町を眺めていた。

「……なあ、サボ」

「……なんだよ、エース」

幸い、2人とも怪我などは特に大きなものはなかった。

何しろ、確かに必死であったが、攻撃力という面では彼らの攻撃

力は大して高くはなかったからだ。というか、単純にエースやサボの基準となる攻撃が規格外だったとも言おう。

そりゃあそうだろう。人一人を一撃で殴り殺せると威張っているような相手に対して、これまでエースやサボが見てきた、相手してもらってきたのは、一撃で大型船が轟沈するレベルが当たり前だ。

必然的にエースもサボも人体を殴って壊せる程度の攻撃力なら対処のしようは幾等でもあるし、万が一まともに喰らっても耐える自信はある。

とはいえ。

「……お前は大丈夫か？」

「……そういうお前こそ」

精神的なものはまた別だ。

あの時は必死だった。

攻撃が通用する、しないの問題ではない。初めて目の当たりにした、命を賭けて立ち向かってくる相手。

これまで気圧される事はあった。だが、それは言うなれば鬪気だった。『お前を殺す』、そんな意志を込めた殺意をエースもサボも1度は経験している。

アスラが頼み、エースはサカズキ大将から、サボはミホークからそれぞれに浴びせられた事がある。あの時は気付けば腰が抜けて、地面にへたり込んでいた。きっと、あの時のあれがなければ、今回の戦いでもっと自分達は硬直し、怪我を負っていたかもしれない。そして、人を斬る、殴り殺す感触。

終われば、あの時の感触が手に蘇ってくる。

互いに語ってこそいないが、2人が2人とも夜に1度ならず、あの時の事を、必死の形相で襲い掛かってくる相手を、倒しても峰打ちで打ち倒しても幾度でも立ち向かってくる相手に遂に殺してしま

つた時を。その時の相手の形相と感触、そして断末魔の悲鳴と至近距離で見た命を失う者が浮かべる顔とを……夢に見て飛び起きる事がある。

互いに自分が悲鳴を上げていたであろう事も、それを同じ船にいて相棒が気付いていないとも思っていない。だからこそ、互いに気遣う会話を交わした訳だから。

「……………あれが、戦い、か」

「ああ、試合じゃなく、自分が相手が互いを殺そうとする戦い、なんだな」

ふう、と揃って溜息をついた。

あれが例外なのだ、2人も思っていない。冷静に考えてみれば、海賊が自分を捕らえに来た海軍だの賞金稼ぎ相手に必死に戦うのは当然だし、無力化だけですむはずがない。たとえ、その場は無力化出来ても、隙あらば暴れようとするだろうし、逃げようとする。そして、現状の自分達だけではそれに対処しきれとも思えない。……………純粹に人手が足りないからだ。

そうなると答えは1つだけだ。殺さねばならないだろう、これからも。

「……………何時か慣れちまうのかな」

「慣れたいとも思わないけど、なっちまうんだろうな」

アスラやガープの事を思い出す。

海軍の将官ともなれば、誰もが相手を殺した経験がある。そして、彼らは幼少時に初めて見せられた海賊の末路の光景でアスラやガープが相手を殺したのを目の当たりにしている。

あれが、慣れた姿なのだろうか？そして、何時か自分達もああなるのだろうか？

肉を切り裂く感触を、肉を叩き潰す感触を、これから幾度経験すれば、ああなるのだろうか？

そもそも、死刑となるのを分かっている、生きたまま引き渡すのは、単なる逃げではないのか？

考えれば、考える程エースとサボには分からなくなる。

ただ、1つだけ確実なのは、今更引けない、という事だ。今から『やっぱりやめる』と言って、いきなりマリソフォードに戻る事も出来まい。というか、やったらさすがに恥ずかしい。

「覚悟決めるしかないな」

「……ああ」

結局、彼らに出来るのは、前に進む事、それを改めて決意する事でしかない。

ある意味、この日から賞金稼ぎとしての、彼らの道は本当の意味で始まったのかもしれない。

慣れる事は仕方がない。

慣れなければ、心が壊れる。

だが、決して、楽しむ事だけはしないようにしよう。2人はそう誓う事になる。

そうして、そんなある日、彼らは『それ』と出会う事になる。

第83話・決意（後書き）

昨日の続きから、悩むエースとサボです

出会うものは……

まあ、アレとかアレとか……

## 第84話・二重の出会い

「……なあ、これって」

「ああ……」

エースとサボ、2人はあれから幾つかの海賊団を倒す事に成功していた。

ある海賊団は『自分達はまだ悪事をしていない』と哀れっぽく泣きついてきた事があった。事実、懸賞金額がかかっていなかった事と、2人にこてんぱんにやられた事から、海賊旗没収と村へ戻る事を条件に解放してやった事があった。

ある海賊団は自信満々に2人に襲いかかってきて、返り討ちにされた。

ある海賊団は普通に脅してきて、最後の1人まで戦って全滅した。1つだけ彼らに共通している事があったとしたら、素人海賊団以外の、本物の海賊達は命がけで戦ったという事だった。賞金稼ぎである2人と戦い、そして生き残った者など誰もいなかった。

そうして、ある日の事。

倒した海賊が詰め込んでいた宝物をとりあえず、2人は整理していた。

こうした宝物こそがある意味、賞金稼ぎにとって大きいと言える。別にネコババする気はない。ただ、襲われた場所が分かっているだけいいのだが、分からないものや全滅してしまったものもあるし、何より何も礼もなしに、という訳にもいかない。結果、こうした宝物は1割が正式に賞金稼ぎらの物になるし、何か特別なものがあるば、望めばまあ、よほど大切にされていた物や遺品とかでもない限りは大体手に入れる事が出来た。



死体が転がる中、物を漁るといふ行為に何も感じない訳ではないが、これも仕事の1つと割り切るしかないのが実状だった。……何しろ、何があるのかしつかり把握しておかないと、誤魔化される危険があるからだ。下手に腐敗した海兵が担当でもしようものなら、気付けば大半は何処かに隠されて、僅かな現金だけが渡される、という事さえある。アスラ中將による改革が進みつつあるとはいえ、そうすぐに全部変われば苦労はしない。それにこうした連中は対応策が取られれば、それに対応してまた新しい方法を考えるイタチゴッコが起きるものだからだ。

したがって、簡単でも良いので目録を作って、それに担当する海兵のサインを貰わないといけない。

それだけにこんなごちゃごちゃに適当に突っ込んであるようなのは厄介だ。

「……………ん？なんか、がっちり鍵かかってんな……………よっと、って？  
おーい、サボ……………」

「どうした？エース……………って？」

2人が見詰める視線の先には唐草模様の実が1つ。

「……………悪魔の実？……………」

まさか、こんな雑魚海賊団の所で見る事になるとは思わず、2人の声は思わず重なっていた。  
そうして冒頭に戻る。

「なあ、この悪魔の実って何の実だと思う？」

「分かれば苦労しないって……………」

悪魔の実にはそれなりに種類がある。

だからこそ辞典なんてものが製作されたりする訳だが、2人の船にはそんなものは搭載されていない。何しろスペースが限られているのは確かなので、もっと積むのを優先すべき品がたくさんあったのだ。

悪魔の実を食べれば、まず弱くなる事はない、というのは聞いているし、知っている。

だが、問題は何の実か、だ。

いくら弱くなる事はない、と言っても変な実は実在する。

そんな実を食ったら、と思うとやはり躊躇いはある。

それに海で泳げなくなる、というのも大きい。力を手に入れる代償としては小さいと思うか、海を往く自分達としては大きい事と考えるべきなのかは微妙な所だ。

「……………サボ、食うか？」

「いや、俺はあくまで船長じゃないからな。やはりここは船長が食うべきだろう！」

この船を貰った時、どっちが船長か揉めた。その時、最終的にはジャンケンで決める事になった（発案：ハンコック）。その結果として、エースが船長になったのだ。まあ、2人だけだし、サボも副船長なので殆ど意味がないとも言いが。

まあ、サボの言葉にぐつとエースが詰まった。

『船長命令だ、食え』なんて言わないのは、やはりそれはさすがに冗談で誤魔化せない事になりかねないと察しているからだろう。

「……………アスラに聞いたら分らないかな？」

「……やめといた方が無難だろうな」

ふと思いついてエースがサボに言うが、サボから返って来たのは否定の言葉だった。

というのも、悪魔の実には確認されただけで相当な種類がある。その悪魔の実を全部覚えていたとは思えない、という事だ。別に記憶力が悪いからとかそういう訳ではない。

……覚えても意味がないからだ。

既に悪魔の実の能力者であるアスラは、新たに悪魔の実を食うという事は出来ない。出来ない以上、どんな悪魔の実が手に入ろうともそれは所詮アスラの手元にある限りは倉庫の肥やしにしかならない。まあ、部下に与えるという手はあるが、全部の悪魔の実を覚えるなんて努力をするぐらいならば、手に入った時辞典で調べた方が効率がいいのは確かだ。

無論、アスラなら頼めば探してくれるかもしれない。

だが、あのクソ忙しいアスラにそんな事を頼めるか、と言えば……それは無理だ。というか、もし、家族サービスの途中だったりしたら、目も当てられない。エースもサボも休暇ぐらいアスラには家族と楽しんで欲しいという気持ちを持っているのは変わらないからだ。

アスラの手をわずらわせず、この悪魔の実の正体を知る、となると、偶然にアスラが知っていた時ぐらいのものだろう。

「よし、食おう」

しばらく睨んでいたエースが、ぐわつと手を伸ばした。

「お、おい、エース!？」

さすがに慌てたサボがいいのか?と確認するような声を出した。

「……悪魔の実は希少だ。売る事も出来ない訳じゃないが、売るのはもつたいたいし、次に何時出会えるかなんて分からない。出会えないかもしれない」

それなら、食った方がいい、というのがエースの主張だったし、確かにそれは間違っていない。

「……分かった、お前が覚悟して食うなら、俺は何も言わない」

互いに視線を見合わせ、エースが悪魔の実にかぶりついた。やはり、滅茶苦茶に不味かったらしく、だばーっと吐いた。

「汚ねえな、オイ!？」

サボが叫び、すぐに視線が鋭いものへと変わった。

エースもまた、不味さに顔をしかめてはいたものの、甲板に向けて視線を向けている。

「……誰か来たな」

「ああ」

それだけ言うと、一気に甲板に向け、2人は駆け上がった。

何しろ、まだ船長らの死体は転がったままだ。持ち去られでもしたら、自分達が仕留めたのだと証明する手筈がなくなる。つつい、周囲に船がいなかった事もあり、油断していた。それに気付いたからだ。

そうして、駆け上がった2人が見たのは……1人の男。

「おいおい、なんだ、こりゃあ？」

短く髪を刈った若い男。

腰には何故か3本の刀が挿してあり、うち1本は相当な業物の氣配を漂わせていた。その男はといえば、死体が転がる中でも平然とした様子で頭を掻いていた。ちらり、とサボが舷側から視線を向ける。自分達とは反対側に小さな小船がつけられているのに気付いた。あの船でこの船にやって来たのだとすれば、おそらくこの男は1人なのだろう。とはいえ、あんな小船で海を航海するなど死にたがりなのだろうか？などと思ってしまう。

「んあ？あーお前らか？この船、こんなにしたのは？」

「……ああ、俺らは賞金稼ぎだからな。俺はサボ、こつちがエース。お前は？」

ああ、と納得したように頷き、彼は言った。

「ゾロ、ロロノア・ゾロだ」

## 第84話・二重の出会い（後書き）

悪魔の実とゾロとの出会いでした

携帯、再入手

ただ、データの復旧が面倒です……  
というか、郵便局に取りに行くのが面倒だった……仕事の関係上、今日行かないと相当先になっちゃうからなあ

第85話・会話の末（前書き）

寝落ちしちまったい

ほぼ書き上げた所で椅子に座ったまま寝ちまった…お陰で首が痛い  
疲れってたまるとやだね

## 第85話・会話の末

「ゾロ？」

サボが記憶を漁る。こうした事にはエースがあてにならないのは長い付き合いで学習済みだ。

「……確か、最近賞金稼ぎで名前が売れ出した奴、だったか？」

「ああ？別にんなつもりはねえんだけどな……なあ」

と、ゾロはある島の名前を上げる。

何でも、その島に帰りたいのだが、なかなか帰れず、その旅費として海賊を狩っていたという事らしい。

そういう事ならば、と島を海図で探すエースとサボ。どうでもいい事だが、この会話と調べ物は全て血塗れの死体が転がる海賊船の甲板で為されている辺り、エースとサボも大分感覚が麻痺している。

「ああ、あつた……」

「そうだな、あつちになるな」

そう言っつて、サボは右を向いた。

「あつちか」

そう言っつて、ゾロも右を向いた。

互いに向かい合っている事で、サボから見ればゾロは左、完全に反対方向を向いている事になる。



「……って反方向だ、アホンダラ！」

そう、この後幾度も教え直した結果、彼ら2人は結論を下さざるをえなかった。こいつは救いようのない方向音痴だと。

事実、ゾロの方向音痴は既に病気だ。

何しろ、彼は目の前を飛んでいる相手がついてくるように言っているのに、それに了承しているのに、一本道で、当たり前のようにはぐれる事が出来る程だからだ。

「……分かった、もう一緒に船に乗れ。すぐって訳にはいかないが、お前が彷徨い続けるより早いだろ」

遂に呆れたというか、疲れた様子のエースがそう結論を下した。

「いいのか？悪いな」

（こいつに任せてたら、絶対奇跡でも起きない限り、辿り着かねえだろ）

まあ、無論航海の間は（舵取り以外）はやってもらおう予定だ。

ゾロとしても小船よりは、小さいとはいえちゃんとした船で航海出来るのなら、それに越した事はない。エースとサボに航海予定を見せてもらい、一応予定としては2ヶ月後に到達予定なのを確認して、納得したのもある。

とりあえず、彼らはローグタウンへと向かう予定だった。

そうして、その日は近くの島に停泊した。

そして翌朝。

何気なしに、彼らは腕試しの場を砂浜に作っていた。

まあ、あれだ。

彼らなりに、やはり思う所があったからだ。互いに刀を下げる者同士、腕試しをしてみたいとサボもゾロも思ったのも大きい。これが単なる雑魚なら、そんな気も起こらない所だった訳だが。

ちなみに、エースは今回は見学だ。

昨晚試してみた所、彼が食った悪魔の実は自然系、火を象徴するメラメラの実だった。

無論、この事にはエースもサボも喜んだが、同時にエースには不満も生じてしまった。理由は単純、温度が低いのだ。いや、無論、相手を焼き払えるか、という意味では十分高いのだが、何しろエースは幼少時よりサカズキ大将のマグマグの実の力を見てきている。それに比べるとどうしても……という事で、今はアレコレと温度を上げる事は出来ないかと、力の使い方の試しと共に修練を重ねている所だ。これが終わるまでは下手に手合わせも出来ない。

何しろ、昨晚はつい浮かれて火を出した結果、危うく船に引火しかけた。

とりあえず、ある程度の制御が出来ないと出航も安心して出来ない。今日のこの手合わせは、その時間的余裕という面もあった。

「そんじゃ、やるか」

「ああ」

言いつつ、ふと腰の刀を見てサボが聞く。

「しかし、何で3本も刀を持つてるんだ？」

「……ああ、俺は3刀流だからな」

……一瞬サボは何を聞いたか分からなかった。

3刀流？

複数の刀を持つというのは古来より工夫はされてきたが、ものになつた例は殆どない。

理由は単純、両手で握つた方が威力が出るからだ。

刀という武器は決して軽いものではない。まあ、それ自体はアスラの元の世界はともかく、筋力が馬鹿げたものに成長するこの世界でならば構わないだろうが、そうなると今度は相手が両手で持つ刀に対して、複数の刀を持つ相手は片手の力で対抗しなければならぬ。

力と技術双方でもって鍛えねばならないから、数を増やせばいいのもではない。

「……役に立つのか？」

だから、思わず聞いてしまった。

世界最強の大剣豪たる師匠も使う刀は最上大業物「夜」1本だ。

「そいつは……あんた自身の目で確かめな」

両手に数打ちの2本の刀。

更に口に大業物「和道一文字」を咥え、ゾロは立つ。

「……ああ、そうしよう」

言いつつ、サボもまた刀を抜き放つ。その刀を見て、ゾロも『おっ？』と言わんばかりに目を見開く。

「そいつは……」

「黒刀『美髯切長船』だ。お前さんが咥えてるのと同じ大業物だ

「よ」

成る程、とばかりに頷くとゾロは構えを取った。  
サボもまた、自然体ながら両手で刀を握る。

「それじゃあ……」

「いざ尋常に……」

「勝負！」

第85話・会話の末（後書き）

エースの悪魔の実はメラメラの実そのままにしました

自然系だと他にあまりないし……雪とか霧ぐらいですかね？あと残  
つてるとしたら

他に自然系で思いつくのないだろうか？

第86話・真剣試合（前書き）

後書きにて自然系に関して少し考察

## 第86話・真剣試合

「……ちっ」

ゾロが鋭く舌打ちする。

分かったのだろう、今のサボが自分より強い、と。

嘗て達人同士の戦いにおいては、互いが刀を抜き放ち、そのまま刃を仕舞った、という話がある。刃を合わせる前に互いの実力を理解し、やり合ったとしても千日手となるのが見えたからだという。

その領域までは至っていないが、それでもゾロには自分より強いかどうか、ある程度の検討はつく。まあ、ある一定を超えると、今度は強者の気配そのものを誤魔化されてしまうので、また分からなくなってしまうのだが。

今のゾロは3刀流の構えを取っている。

一方、サボは下段の構えだ。こちらは余り実践的な構えとは言えない。どうしても振り上げるのが遅くなるからだ。

『誘ってやがるのか』

打ってこい。

つまりはそういう意味なのだろう。

(上等だ!)

一気に踏み込む。

3刀流は元々、幼馴染でありゾロの師匠である道場主の娘、くいなに勝とうと思って刀を増やしていった結果だ。

1本では足りないなら2本で。

2本でも足りないなら3本で。

……子供の戯言だ。

分かつてはいる。数を増やせば勝てるものではないぐらい。

二天一流という流派がある。これは力で刀を振る事を前提とした流派ではなく、『断つ』のではなく、全身運動によって『斬る』を前提とし、『受け止める』ではなく、『受け流す』事を前提とした見かけによらず『柔』の剣だ。

しかし、ゾロの剣はそのような柔剣ではなく、剛の剣と言ってもいい。

そういう意味でも本来は1刀でもつての剣技を磨いていくべきなのだろうが……ゾロには今更このやり方をやめられない、止める訳にはいかない理由がある。

幼馴染にして、唯一勝つ事の出来なかった、くいな。

彼女は自身を上回る天才でありながら、互いに最強の剣士たろうと誓った直後、事故であっさりと亡くなった。

だからこそ、彼女との誓いをゾロは果たそうとする。

嘗て、遂に彼女に勝てなかった己と、その持てる技でもって最強の剣士となる事によって。

だからこそ、目指すのは世界最強の大剣豪と名高い存在、ジユラキユール・ミホーク。

斬りかかったゾロの両手に持つ2本の刀。

同時に振り下ろされたそれを、サボは刃を合わせ、受け流す。

受け止めるのではなく、流す事、それこそが刀の本領だと言わんばかりに、受ける事で防御と同時にゾロの体勢を崩す。

だが、その姿勢からゾロは口に啞えた第3の刀を首を振る事によって、サボの追撃を防ぐ。いや、正確にはサボが無理をせず、距離を取った。

ただ、この一瞬の攻防でも分かった。



「……まだ、完成には程遠いな、それ」

「ああ、そうだろうよ」

双方共に、その事を理解していた。

「だがな、俺は世界最強を目指すんだ。何時かはミホークにも届いてみせる!」

「……ミホーク師匠にか。あの人相手じゃお前はまだまだ『夜』を抜く価値さえないだろうな」

ゾロの意気込みは買う。

しかし、気持ちだけで勝てるなら誰も苦労はしない。

サボは自分が決して弱いと思つてはいない。

だが、それでも自分より強い者はいくらでもいる事も理解している。短い間だったとはいえ、自分の師匠でもあったミホークもそうだが、その当人と真つ向やり合える剣豪であり、四皇の一角でもある『赤髪』のシャンクス2人の戦いを見せてもらった事もある。

この時はアスラも当然おり、海軍・海賊・王下七武海が同時にそこにありながら、互いに知らん振りをして、頂点の3者のみが剣（拳）を交わすという、ある種の力オスになった。ちなみに、この時は岩礁程度の島とはいえ、1度の手合わせごとに1つの島が、合計3つの島が崩壊していたりする。

地を揺るがし、天を裂く、そんな彼らの戦闘に比べれば、自分の力など所詮はその足元にも及ばない。

けれど、何時かは届いてみせる、そんな思いがあるから、ゾロの決意も分からないでもない。いや……剣に命を賭ける者ならば、何時かは、というのは必ず思う事だろう。

「……お前、ミホークを知ってるのか」

「ああ。短い間だったが、鍛えてもらった身だ」

自分の実力が足りなかったせいで、ミホーク的に言えば軽い基本だけだったが……まあ、彼が教えたという事自体が酷く珍しい。

「それじゃあ、出来る限りやらせてもらわねえとな………どんだけ通用するか試させてもらおう」

言いつつ、再び前へ。

「鬼………斬り！」

両手を交差させ、突進。左右から両手に持った刀を振り、更に首を捻り、上から振り下ろす。3方向からの斬撃をもって、逃げ道を塞ぐ一撃だが……。

これをサボは円回転で防ぐ。

右を弾き、上を弾き、左を弾く。

片手で、口で持つ刃は両手で持たれた刃より速度がどうしても落ちる。下位の剣士には通用しても、同程度以上の剣士ではその剣速の遅れが、その結果を生む。せめて、腕力が明らかに上回ってれば、それを押し切る事も出来ただろうが、それも出来ない。

弾かれて、体勢を崩したゾロへと刃が走る。

それをかろうじて、引き戻した左手の刃で防ぐが、無理な体勢からの防御に加えて、数打ちと黒刀の大業物の純粋な質の差で左手の刀が折れ砕ける。

一步下がり、加えていた和道一文字を右手に、左手にもう一本の刀を握りなおす。

元よりゾロとて最初から3本の刀を制御出来た訳ではない。むし

る少年時代は2本の刀で精一杯だった。そういう意味では、3刀流よりは2本が、更に元から習っていたのは1本の刀術だ。全ての本数において経験がある。

「鷹波！」

斬撃を飛ばして牽制し、接近する。

その斬撃をサボは下手に回避せず、一刀の元に切り払い、振り切った先で刃を返す。

「式斬り……応登楼！」

振り下ろされた斬撃と。

「昇竜！」

天に駆け上がらんとせんばかりに豪速を持って振り上げられた刃とが激突し、打ち負けたゾロの持ち直した左手の数打ちがやはり耐え切れずに折れる。

それでもゾロは諦めない。

納刀し、居合の構えへと移る。

既に、ゾロはこれが試合だという事は頭から吹き飛んでいる。そんな手加減をして勝てる相手ではないと判断しての事だ。

「一刀流居合……獅子ししん唱歌！」

「飛燕一閃！」

居合の速度には居合とばかりに迎え撃たれた刃は……最終的にゾロの刃が飛ばされる事で終わった。

力ではない。速さと腕の差が噛みあつた刃を弾き飛ばしたのだ。幸いというか、さすが大業物というか、和道一文字が折れる事はなかったが……手を離れ、突き刺さった刃に駆け寄り間もなく、ゾロの喉元に美髯切長船が突きつけられる。

「これまで、だな」

「……ああ……俺の負けだ」

一瞬間が空いたのは、これがあくまで腕試しの試合だということ。ゾロが忘れていた為だろう。

ふう、と大きく溜息をつく、ゾロはどっかりとその場に腰を下ろした。

「強ええな、あんた」

「俺より強い奴はいっぱいいるさ。まだまだ修行の日々だよ」

そうかい、とサボの言葉に答えて、ゾロは立ち上がると、和道一文字を拾い、鞘に納めた。

その上で手放した2本の刀……の残骸を見やる。粉々に砕かれ、殆ど鏝と柄しか残っていない。さすがにこれを使うのは無理がある。

「しかし、どうすつか。こいつはさすがに使い物にならねえ」

本音を言えば、サボからすれば、これを機に一刀流に戻したらどうだと言いたい所だが、不利を承知で鍛えているという事は何かの意味があるのだろう。少なくとも、刃を合わせた限りでは、お遊びではない何らかの信念を感じ取っていた。

……単なる遊びではあそこまでの鍛えられた刃にはならない。

だからこそ、ゾロにそんな事は言わなかったが、そうなるに確か  
に、この砕けた刃をどうにかする必要がある。出来る事なら、新た  
に調達する刃は大業物と言わなくても、少なくとも数打ちではない、  
それなりの業物が欲しい所だ。

「……とりあえず、ローグタウンで武器屋に寄ってみるか」

「そうだな」

まあ、ゾロとて恨み言を言う気はない。

むしろ、大業物と打ち合ってよく耐えてくれた、という気持ちの  
方が強いし、そもそも折れるのが嫌ならせめて1本目が折れた時点  
で止めている。

1本はこつちがもとうというサボに、ゾロも悪びれる事なく、悪  
いな、と応じている。

……そんな2人をエースは横目で見ながら、自身の能力の制御に  
いそしんでいた。

その掌の炎は指先から立ち上る橙の炎ではなく、回転し青白く輝  
いていた。

## 第86話・真剣試合（後書き）

決着はこのようになりました

やはり、現時点ではまだゾロでは勝てません。ちなみにサボの技名に関してはあるゲームのものを使用しています

自然系に関してですが、この中で水、土、植物の三種に関して少し私なりのご意見を書いておきたいと思います

まず、水ですが、これに関しては悪魔の実が水と相性が悪く、お風呂程度のたまった水でさえ溺れてしまうところがあるので、さすがに悪魔の実としても存在しないのではないかと判断しています

また、色々と設定はかなり作りこまれている作品なので、水という自然系はもし出てくるとしたら、結構重要な人物に使われる可能性があると思うので、使用する予定はありません

土に関してですが、こちらは物質的な存在を持ち、また白ひげの三番隊長ダイヤモンド・ジヨズを見ても、超人系と思われます

植物に関しても同様で、こちらも超人系と判断しています

自然現象ではない為、肉体面を持つ為、土系統と同じというか大地に関連するものは基本超人系なのは、と判断しています。

この能力に関してはフォクシーのノロノロビームなどと同様に離れた植物への干渉と、触れる事による植物の改変（某幽遊のような鞭など）がイメージとしてあります

## 第87話・ローグタウン1

ローグタウン。

海賊王ゴールド・ロジャーの誕生の地であり、同時に終焉の地でもある。

ここではその為、ロジャーの処刑台が観光名所になっているのだが……同時に治安も極めて悪い。原作では？と思うかもしれないが、あれはスモーカーが豪腕を持って、徹底的な治安回復を図った結果だ。その結果として、ルフィらが入り込むまで海賊の影響を排した平和な町になった。

一方、現状はというと、これはアスラの手抜きだった。

アスラの記憶ではローグタウンの描写は割と平穏な、むしろ海軍の影響が強い町として記憶にあったが、副官にスモーカーを配置した結果として、ローグタウンの状況は旧来のままだった。

アスラの失敗は平和な町が旧来からの状態だというイメージを持っていた事で、結果的に治安が悪い状態のまま放置してしまった事になる。

この町を現在担当している海軍本部大佐ヨウゴークはといえば、海賊達から賄賂を受け取り、私腹を肥やしているともっぱらの噂だ。したがって、下の者には頑張っている者もいるが、一番上が動かないから大抵そういう頑張る下っ端は長生き出来ない。

ただ、ある程度以上の実力を持つ者達にとっては問題ない町でもある。

確かに危険といえば危険だが、所詮東の海での基準という面もあるからだ。だからこそ、海軍本部大佐級の人物ならば実力的には十分、海賊達とて敢えて敵対しようと思わない相手な訳だが……。

「いやあ、いい獲物が手に入ったな」

そんな町の中をゾロはご機嫌な様子で歩いていた。

一方、その後ろを歩くエースとサボは微妙な顔だ。

無論ついてきた理由は簡単で、ゾロを1人で町を歩かせたら絶対迷うからだ。下手をしたら、何時まで経っても武器屋に辿り着けないという事態を招きかねない。だからこそ、先程までは左右からゾロを挟む形で武器屋を訪れたのだった。

武器屋の主、いっぽんマツは商人としては最低の部類だった。

何しろ、ゾロの刀、和道一文字を大業物と見抜いたまでは良かったが、それを安く買い叩こうとしたのだから……とはいえ、ある意味この町では仕方ないとも言える。何しろ、人が人を騙し、人が人を殺す。それが海賊の溜まり場である、この町では普通の事なのだから。

だが、それでも、商売人としては最低でも、人としてはまだ漢気のある男だった。

### 三代鬼徹。

妖刀として名高いそれを仕入れたものの、余りに危険なそれを、業物であるそれは売れば100万ベリを超えると知りながら、一山幾等の刀の山に突っ込み、誰にも売らないようにしてきた。

無論、それだけにゾロがそれを惹かれるように手にした時も売れないと反論したのだが、ゾロが空中に投げ上げた三代鬼徹に腕を差し出し……己の強運で持って屈服させたのを見て、彼に惚れこむや、己の家宝をゾロに託した。

「名は、雪走<sup>ゆはしり</sup>。黒漆太刀拵、刀紋は乱刃小丁字。良業物の1本だ」

高額のそれは、別にナミのように財布の中身限定などという事は言わなかったエース達からすれば買える金額だったが、すっぱりと『金はいらない』と、優れた刀は優れた剣士の元にあるべきだと言



って譲らなかつた

まあ、だからこそ現在ゾロは機嫌がいい訳だ。

まさか、失った数打ちの代わりに安く名刀を2本手に入れる事が出来るとはさすがに思っていないなかつたのだから、その喜びようも当然だろう。もつとも、ゾロの行動には逆にサボなどは眉を潜めざるをえなかつたのだが。

確かに、彼の強運は理解した。

妖刀をも屈服させるとは確かに認める部分もあるが、だからといって、あんな危険を冒す必要はあつたのだろうか？

そんな悩みを断ち切る事になつたのは、海賊達だつた。

別段彼らに喧嘩を売ってきた訳ではない。

絡まれている子供を庇う女性の姿を見かける事になつたからだ。

残念ながら、この町ではよく見かける光景だ。

女性は腕は悪くないが、守るべき相手がいるだけじゃなく、海賊の数が多し。加えて、東の海の海賊としてはなかなか腕は悪くない。何が言いたいかというところ、大変苦戦していた。

ただ……。

その女性の姿を見た途端、ゾロが駆け出した。

余りに躊躇いのないその姿に、普段のゾロとは違うが故に、一瞬遅れて、慌ててエースとサボも後を追つた。

「はあ……はあ……」

「おい、姉ちゃん。いい加減諦めな」

追い詰められている。

案外、海賊が強かつたのも誤算だつた。

だが、最大の誤算は数だ。

最初は子供がぶつかつてしまい、どうやら彼らが財宝の1つと見

ていた壺を割ってしまったのが発端だった。

怒った海賊が武器を抜いた所で、彼女が駆けつけ、割って入った訳だが、その時点では3人だった。これぐらいなら、動きから見てもなんとかなる、と判断しての行動だったが……。

ところが、1人を叩きのめした所で、ゾロゾロと仲間が近くの酒場ともいえない呑み屋から出てきたのだった。

けれど、諦める訳にはいかない。

ここで諦めたらどうなるか？子供達も逃がせなかった。彼女自身の刀は業物の1つ、時雨だ。売れば大金になるだけに、自身の誓いを自身で破る事になる。加えて、彼女自身も自分で言うのもなんだが、まず見目良い部類に入る。こんな連中に屈した後の事など考えたくもない。

けれど、このままでは……。

そう彼女が思った時だった。

「3刀流……龍巻き！」

口に刀を両手にも刀を携えた男が突っ込んできて、まとめて海賊を吹き飛ばした。

吹き飛ばす海賊達だったが、無論それで全滅した訳ではない。『なんだ、お前は！』などと怒鳴り、左右に分かれて包囲しようとしたのだが……。

「火拳！」

「渦潮！」

海賊達にとって不運だったのは、とにかく相手が悪かったというに尽きる。

まあ、一步遅れて突っ込んできたエースとサボが左右の残る海賊

達を吹き飛ばし、あっさりと1つの海賊団がここに終わりを迎える事になったのだった。

「おい、いきなり駆け出してどうしたんだよ？」

エースがゾロに言うが、当のゾロはといえば、女性に釘付けになっていた。

その様子を見て、エースとサボはというと、ニヤリと笑って少し引いて様子を見ている。彼らは何を考えたのかは丸分かりだが、それさえ今のゾロの目には入っていなかった。

当の女性とはいえば、一瞬の殲滅劇に呆けていたが、やっと落ちて着いたのか、ペこりという擬音をつけたくなるようなお辞儀をした。

「あのっ、ありがとうございます！」

「あ、ああ、いや……」

口ごもるが、ゾロとて仲間がいる状況でさっさと立ち去る訳にもいかない。

ちなみに、エースは子供達に懐かれていた。この辺は刀ではなく、さっきの火による攻撃が子供達の琴線に触れたらしく、火で芸をして遊んでやったりしている。

そうして、彼女は名乗った。

「あの、私、たしぎ、って言います」



## 第87話・ローグタウン1（後書き）

という訳で、たしぎ登場

ローグタウンの環境が異なる上、彼女もまだ海軍ではなく、ゾロも賞金首じゃないので反応も結構変わってきます

ローグタウン編はもうしばらく続きます

## 第88話・ローグタウン2（前書き）

悪魔の実に関して盛り上がっておりますが…

えー、あれは正式な募集ではありませんからね？

自然系を出すとしたら、本編が終わって、原作でいう所の劇場版相当の外伝にて出す事になると思いますので、たくさんデータを頂いても出せる場が相当先になると言えますか……

## 第88話・ローグタウン2

似ている。

それがゾロの第一印象だった。単に容姿だけではない、雰囲気から何からそっくりだった。

そう……亡くなった自らの幼馴染くいな、彼女とたしぎと名乗った女性は本人ではないかと思わずゾロが思ってしまった程、瓜二つだった。

「あのっ、それでその刀って……」

思わず考え込んでしまうゾロに、たしぎはキラキラと輝く視線を向けてきた。

ん？とばかりに、顔を上げたゾロに彼女は彼の腰にある刀に熱い視線を注ぎながら言った。

「ああっ、それはやはり大業物21工の一振り！和道一文字！」

「そちらは良業物50工の一角！雪走！」

「つて！そちらは業物80工から三代鬼徹！」

さすがにゾロが、いやエースやサボも呆気に取られる程、熱意が籠った声だった。

更に、彼女はサボの腰の刀にも目をやると……。

「うわあ……そちらも大業物21工の一振りですか！美髯切長船ですね！」

「つていうか、拵えを見ただけで分かるのかよ……」

思わずゾロが呟いた。

刀本体を見たのは、先程の……彼女にとっては一瞬だっただろう。今は4本の刀全てが鞘に入っているが、彼女は見間違えたりはしなかった。その様子に、エースに遊んでもらっていた子供達が口々に、『あゝたしぎ姉ちゃんの刀好きが始まった』と笑いながら言っている。

「はいっ！私、海賊に、犯罪者に奪われた刀を取り戻すのが目標なんです！」

言いつつ、刀剣一覽や刀ガイドブックなどを取り出してみせる。

一発で、3人にもこの女性がどういう趣味なのか理解する効果はあったが。

まあ、しばらく堪能すると我に返ったらしく、慌てて謝っている。

「す、すみません！私、貴重な刀を見るとつい……」

「あゝいや、気にすんな」

ゾロとしても、幼馴染そっくりな容姿と声の女性にぺこぺここと謝られてはどうにも違和感がある。

結果として、ぶっきらぼうに受け答える、という事になってしまふ。

「ええと………それなので、確認ですが、貴方達は海賊じゃないですよね？」

おそろおそろ、という様子で確認するたしぎに、『賞金稼ぎ』と



いう事を伝えると、ほっとした様子だった。

「しっかし……この町、治安悪いよな。海軍は何やってるんだ？」  
話が落ち着いたとみて、エースが呟くと、たしぎが唇を噛んで俯いた。

そうして、ぽつぽつと、彼女はこの町の現状を話してゆく。

海軍本部大佐が駐留はしている事、けれど、ヨウゴーク大佐は海賊と結託して私腹を肥やし、金で裁判結果を歪める為、真っ当に働いている人間は苦しんでいる事など、だ。

「もちろん、真面目に頑張ってる海兵さんがいるのも確かです。でも、命令には従わないといけないとかで……」

上は大体そんな感じなのだという。

あくまで、未だ真面目に頑張っているのは下っ端のレベルだという。

そうして、下っ端というものは実力が足りない。応援を呼んでも、応じてくれないので、現在は町の有志と協力して自警団を結成するのが精一杯な状況だという。

「……この状況を変えられるとしたら、海軍のもつと上の……ちやんと正義を守ってくれるような人に訴えるぐらいしか変える方法が思いつかないけれど……でも、私達じゃ訴える方法がない……っ」

「あゝ……俺もねえなあ」

涙を流して俯くたしぎに、ゾロも困ったように呟く。

一方、エースとサボは互いに顔を見合わせて、言った。

「「あるぞ」」

「そうですね、やっぱりないですよね……ってあるんですか！  
」？」

「はあっ!？」

ちょっと待ってくれ、とりあえず連絡を取ってみる。  
そうエースが断ると懐から取り出した電伝虫で連絡を取り出した。

【SIDE：アスラ】

アスラが部屋を出ようとした時だった。

『ぷるるるる……ぷるるるるる』

電伝虫が声を上げた。

はて、誰だと思いつつ、この電伝虫に直接かけてくるような相手  
は限られている、と思い直し、通話を取る。

「はい、どなたでしょう?」

『あ、アスラか？俺だよ、エースだ!』

聞こえてきたのは懐かしい声。

ここ最近は何がなかったとはいえ、もう、10年以上も耳に  
してきた声だ。聞き間違えるはずもない。

「おお、エースか！久しぶりだな。もう少し連絡を寄せせ。ルフ  
イもナミもエスメラルダもカルラも寂しがっているぞ」

そう言つと、どこか慌てたように言い訳をしている。

とはいえ、何か用事があつてかけてきたのだらう。それに俺もこれから会議とあつて、早々に話を切り上げ、エースの話を聞く。…どうにも抽象的なので、途中からサボに変わったが。何で、あの一家はガーブさん含めて、ああなんだらう……。話を聞いて、眉をしかめざるをえなかつた。

……まさか、ローグタウンが原作と違い、スモーカーがいないだけでそんな事になつてゐるとは……。

そういう事なら、協力したい所だ。海軍本部大佐がそんな事をしているのならば、我々が責任をもつて処罰するべき事柄だが……。

「証拠はあるか？」

とはいえ、状況証拠だけで相手を処罰する訳にもいかない。仮にも相手は本部大佐なのだ。幾等中将だからと……いや、中将だからこそ、公正であらねばならない。息子同然の相手から聞いたというだけで、処罰する訳にはいかない。

そこで、サボが幾つか傍らにいる誰かに確認していたようだが…その上で、作戦を提案してきた。

「ふむ……」

まあ、かなり強引だし、無理を押しせば道理が引つ込むような作戦だが、とりあえず法を犯している訳ではない。

「……いいだらう、それに……」

と、アスラもまたこちらの状況を伝え、準備しておく事を伝えた。……上手くいけば、全部片がつくだらう。



## 第88話・ローグタウン2（後書き）

今回は、アスラもちよいと登場しました

原作でも、モーガンが好き勝手やっている時、部下らは真面目な人らが揃ってたようなのに、止める事は出来ませんでした  
モーガンを叩きのめした後、好き好んでではないにせよ、島から出て行ってくれと言わざるをえませんでした

（まあ、島を出るルフィらへの敬礼と、その後の台詞は良かったですが）

けど、きちんと規則にのっとってなら、問題ない訳で……

### 第89話・ローグタウン3

ヨウゴーク大佐はその日、何時も通りに過ごしていた。

彼は本部大佐という階級にある通り、強い。

彼とて最初から今のようになった訳ではない。

彼が今のように強欲になったのは、ある挫折が原因だった。

それまで支部で頭角を現し、実力をつけて本部へ召喚。

そこでも、才能を発揮し、功績を順調に上げ、彼は本部大佐へと順調に階梯を進めていった。このままいけば、未は海軍本部の中樞へも夢ではない、そんな時同じように階梯を、いや、彼以上の速度で駆け上がってきたのがアスラ中将だった。

強さだけならば、ヨウゴーク大佐は諦められた。

悪魔の実の能力者。それは海軍においても出世に大きな影響を与える。実際、海軍本部の中佐以上になると能力者がそれなりの割合で混じってくる。

事実、現在の海軍元帥に3人の大將は全員が能力者だ。

もし、アスラが強さだけの人間ならば、彼は素直に諦めただろう。能力者には敵わない、という理由でもって。

だが、それだけではなかった。

様々な提案をし、それを『やれるものならばやってみるがいい』とばかりに試された仕事をやり遂げた。

強いだけの男なら良かった。

能力者ではないヨウゴーク大佐は『俺だって悪魔の実さえありやあ……』と逃げられる道があったはずだ。

強いだけでなく、緊急展開の為の救助部隊を創設し、その為に艦隊を仕立て上げ、更には密かに掌握した情報でもってCPの陰謀を妨害した末に、CP長官の地位まで手に入れた。

何時しか、彼に押し付けられたとも見える仕事の量に、同情する向きも増えたが、それにヨウゴークはまた打ちのめされた。自分にはあれだけの書類は処理出来ない。

アスラ中將が美しい妻を迎え、上層部の覚えが目出度くなり、出世街道を駆け上がり、次代の大将元帥と看做されるようになっていく中で、ヨウゴークは酒に逃避した。

仕事こそ無難にこなし続けし、才能も示したが、既に次代のリーダーとして脚光を浴びるアスラ中將の陰の1人、そう、強い光があれば、その影に落ち込む者もまた多い。誰もがスモーカーのようにあいつはあいつ、俺は俺とばかりに我が道を行ける訳ではない。

会社とて、1人の社長や役員が生まれる陰で、何十人何百人が或いは退職し、或いは閑職に、或いは別会社へ転籍し、或いは部長や課長という役職に落ち着いてゆく。そして、組織である以上、海軍も同じだ。

同じように出世を重ねてきた者でも、ある者は何処かで止まり、ある者は更に先へ進む。ヨウゴークは前者であり、アスラは後者だったと、それだけの事だし、ヨウゴークとて理解はしているが、納得するのはまた別だ。

そうして、ヨウゴークはやがて、大佐という階級から動かぬまま、他の海へと赴いた。

彼が少し他の者と違っていたのは、彼の事務処理能力は十分評価されていたが、彼自身がこれ以上アスラという輝きを見続ける事から逃げたという事だった。

そうして、彼はローグタウンへと赴き……何時しか、そこで淀み腐った。

「ういっく……で、俺にどうしろってんだ？」

酒を手にヨウゴークは海賊の1人と会談していた。

「いやあ、ただちょっとね？海軍艦艇の到着が整備の為に遅れるだけですよ」

「整備の遅れか。なら、仕方ないな」

ちらり、と海賊が差し出した金塊を確認して、頷いた。

言いつつ、片手でその方面を担当する哨戒艇の点検作業に入るよう書類を仕立てている。

これで、その海域での海賊への被害は対処が遅れる事になるだろう。

「では」

と海賊が立ち上がりかけた所で、扉が盛大に開き、誰かが倒れこんできた。

入り込んできたのは、1人の少女、そして落ち着けと声を掛ける短髪の若者。その癖、若者は後ろから止めようと迫る海兵を押し返して、或いは武器を奪っていたりする。とはいえ……自分にごう出来るだけの腕はない、そう判断すると油断はせずとも敢えて反応する必要もないとばかりに鋭い視線を向ける。

「誰だ？」

「私は、このローグタウン自警団の人間です！……大佐！お願いします！海賊達の撲滅に動いて下さい！」

なんだ、とばかりに鼻を鳴らす。

隣の海賊もまた嘲りの笑みを浮かべている。

こっぴどした陳情は何度か起きる恒例行事だ。



「何故、私がそんな面倒な事をやらねばならんのだ？」

だから、ヨウゴークは彼の本来の任務を否定するような言葉を平然と吐く。

そう、これもまた恒例行事。

一般の生活を行なっている市民では、荒稼ぎを結託して行なう海賊達にその財布の中身で敵わない。だから、彼は動かない。商人達が結託して動こうとするなら、その前に海賊が襲撃する。こうして、この町は上手く回る。

何時も陳情に来る者がするように、目の前の彼女もまた、唇を噛み締める。

「……大佐は……この町がどうなってもいいって言っんですか！」

「それに、隣のそいつ手配書で見た事あるぜ。海賊だろう」

叫ぶ彼女と並ぶ若者もまた、言うが、大佐は面倒臭そうに答える。

「ああ、そうだよ、面倒臭い。海賊？私の懐を癒してくれるなら、構わないよ」

言いつつ、鼻毛を抜く。

「ああ、そうそう。君ら海兵に怪我させたから来週その分税を上げるから」

「！怪我なんかさせてません！」

「そうだぜ！俺らは抑えてるだけだろうが！」

「私がそう言ったらそうなんだよ。はい、決まり」

まったく面倒な、とばかりに視線を向けたヨウゴーク大佐は、だが、そこに浮かんでいた表情に疑念を感じる。

悔しげに俯くか、涙を流しているかと思えば、2人が2人とも笑みを浮かべているからだ。

加えて、先ほどまで揉み合っていた海兵も、きちんと整列している。

「何をしている？そいつらをさっさと叩きだせ」

命じたが、その声に被せるようにして、声が響いた。

『いやあ、叩き出されるのは君じゃないか？』

その声が聞こえた瞬間、ヨウゴーク大佐の形相が変わった。

その声を忘れる訳が、忘れられる訳がない。

椅子を倒す勢いで立ち上がった大佐の様子に、海賊もまた驚いている。その形相は面倒臭そうな様子を隠しもしなかった先程までと一変し、憤怒の形相だ。

気配もまた一変し、嘗ての、海軍本部にて前線を張っていた頃の剣呑な気配が周囲に満ちている。その気配は、たしぎが顔を青褪めさせている程だ。ゾロもまた、顔を顰めている。

「何故だ……」

だが、そんな事に構っている余裕などない。その声はこんな所で聞く筈がないからだ。

「何故、貴様の声がここで聞こえる！アスラ中将！」

第89話・ローグタウン3（後書き）

法ギリギリと言いつつも、余りギリギリっぽく見えない

まあ、海兵らの制止を振り切って最高責任者の部屋にいきなり押しかけるって時点で問題行動ですが

さて、いよいよ大詰めです

## 第90話・ローグタウン4

『何故、か。それは簡単な事だ』

声は海兵の1人から聞こえていた。

その海兵をヨウゴク大佐が睨みつけると、その海兵はニヤリと笑って、懐から電伝虫を取り出した。

……もう、気付いた者もいたかもしれないが、この海兵はエースの変装だ。

今回の作戦はこうだ。

まず、自警団に参加している、真面目な海兵を通じて海兵の制服を借りる。本来なら違反ものだが、電伝虫を通じてではあるが、海軍本部中將から直々に許可が出た為に海兵らも素直に協力してくれた。

その上で、エースとサボにこうした協力してくれる兵士と共に揉み合う振りをしつつ、ヨウゴク大佐の部屋へ乱入。

後は、見ての通り、という訳だ。

『大した手ではない、単なる引っ掛けだが、それだけに君は何時も通りに行動した。そうして、何時も通りの行動ゆえに君は今、このような状況になっているという訳だ』

『その通りだ』

アスラの声が響く電伝虫から更に別の声が響く。

「……センゴク元帥までお出ましですか」

『アスラ中將が事前許可を求めて、最高会議に持ち込んだからな。』

今ここには私以外にも3人の大将含めマリントンフォードにいる中将以上の全員が揃っている』

それを聞いてはヨウゴーク大佐としては笑うしかない。

先程の自分の独白は、海軍の最上層部全員に聞かれていたという訳だ、今更何を言った所で、どうにもなるまい。

そうと分かると却って諦めもついた。

『確認したい、何故お前はそうなったのだ。以前のお前を知る者に聞く限りではお前は十分次代を担う者の1人となれたはずだ』

「何故？そんなの簡単ですよ。自分で勝手に相手の実力と自分を比べて、自分で勝手に勝てないと諦めたんですよ、元帥殿。アスラ中将と自分とをね」

さばさばとした口調でヨウゴーク大佐は告げた。

向こうではどんな事になっているのか。きっとアスラ中将に思わず、といった視線が集中しているだろう。その光景を想像すると何故かおかしく感じた。

「別に、アスラ中将が自分を見下してた訳じゃない。誰かを意図して蹴落とそうとした訳でもない。ただね、比べちまうんですよ、自分をあっさり追い抜いて、上へと上がっていった奴を見ちまうと」

こうなったら、言いたい事を言ってしまうおうと決めたらしく、ヨウゴークは素直に話し続ける。

ただ、諦めがついたせいか、恨み言は言わなかった。

ただ、彼なりの事実を、淡々と語った。

「アスラ中将が有能で、実力があつた。ただ、それだけなんです

よ。それを見た自分が勝手に自分だったら、あんな事は出来ない、あんな力はない、あんな処理は出来ない。1つ1つの小さな事で勝手に自分が落ち込んで、自信をなくしていつちまった。ただ、その結末として今の自分があるだけなんですよ」

しばらく沈黙が部屋を満たしていた。

エースやサボ、ゾロやたしぎは、困惑していた。

海兵や海賊はどう反応していいか分からなかった。

電伝虫の向こうは苦虫を噛み潰していた。

『……成る程な。つまるところは』

「単なる自業自得もしくは自滅ですな」

はっはっは、と楽しみにヨウゴーク大佐は笑っているが、周囲からすれば笑い話ではない。

とはいえ、この場では立場上、一番上の人物が決断を下さねばならない。

『……無論、分かっていると思うが』

「大人しく逮捕されるつもりはありませんよ？」

どういつ判断にせよ、このまま無罪放免という事はありません。降格するにせよ、インペルダウン送りになるにせよ、或いは処刑されるにせよ、とりあえずまずは逮捕からだ。

『恥を知るなら、せめて結末ぐらい覚悟を決めんかあ！』

「……その声は赤犬大将ですな？ いやですな、そんな潔い人間だ

「だったら、自分こんな風になってません」

「開き直った人間は、こういう時強い。」

『……やむをえん。そうなると力づくという事になるが？』

「そうなるでしょうな」

そう言いつつ、ヨウゴーク大佐は4人に視線をやった。

「そうすると、さしづめそこらの子供らが自分の相手という事ですかな？」

海賊は論外。

海兵はそもそも自分より強ければ、自分より上か同程度の階級になっっているであろうから、これまた論外。

事件が発覚したのがそもそもさっきだから本部から増援が出てるはずもなし。

かといって、もつとも平和と謳われる東の海だけに、本部大佐を取り押さえられるような戦力が傍にゴロゴロ転がってるとも思えない。

結論。

今、ここにいる中で、戦力的に本部大佐を取り押さえられる可能性があるとしたら、戦力が不明なエース達しかありえない。

『……エース、サボ。お前達で本気の本部大佐を捕らえられるか？』

アスラが確認を取る。

これまで本部の訓練施設で遣り合ってきたとはいえ、それは所詮



訓練だった。今では、エースもサボも、それがどれ程甘いものだったか理解している。だが……。

「やるしかないんだろ？」

「なら、やるしかないだろ」

言いつつ、エースはニヤリと笑みを浮かべ、サボは溜息をつきながらそれぞれに或いは拳を打ち合わせ、或いは刀に手をやる。

腰が引けている海兵らはさておき、ゾロも前へ出る。

たしぎも出ようとした所で、エースが電伝虫を渡す。

「悪い、これ持って下がっててくれるか？そいつ壊されたら、えらい事だからさ」

だから守っておいてくれ、そう言われては反論もしづらい。

確かに、これが途絶えては海軍本部に状況が伝わらなくなる。

無論、今更なかつた事になったりはしないが、万が一逃げられた時の対応などに違いが出てくる。或いは、もし、事情を知らない、或いは大佐の私兵と化している海兵が出てきた時、もし、この電伝虫がなくなったらどうなるか？

……普通は、大佐に味方するだろう。

エースはじめ自分達が真実を叫んだ所で、素直に信用してくれるようでは、どこの誰かも分からない相手の言う事を信用して上司に襲い掛かるようでは、海兵は務まらない。電伝虫で、海軍本部上層部の声を伝える必要がある。

それが分かったからこそ、たしぎとしても足手まといに思われているのでは、だから下げられたのでは、という疑いを持ちつつも、下がらざるをえない。

「さて、それじゃ……始めようか？」

ヨウゴーク大佐の言葉と共に、戦闘は始まった。

第90話・ローグタウン4（後書き）

次回からいよいよ本部大佐との戦闘です

人間、諦めがいたら、覚悟も決まる

諦めがついたら、悟りが開けたようにすっかりした気持ちになれる…  
ってな事はあるよね？

主に、普通の人は学校のテストとかで

## 第91話・ローグタウン5

ヨウゴーク大佐の第一印象を一言で言うならば、筋肉ダルマ、だろ。

3mに達する肉体を分厚い筋肉で鎧ったその姿は、巨大なドワーフでも言うべきだろうか？

ヨウゴークは能力者ではない。

しかし、海軍で昇進しようと思えば、支部ならばコネや金で何とかなるかもしれないが、本部では戦闘での実力が必須だ。

そう、如何に墮落したとはいえ、本来億越えの海賊すら相手どる事もある本部大佐、決して弱い訳ではない。

「ふん！」

澄んだ高い音を立てて、斬りかかったゾロの刀が弾かれた。

その光景を見て、思わずエースが叫ぶ。

「鉄塊！？六式使いか！？」

「いいや、残念ながらどうにも不器用でな……真つ当に使い道になつたのはこいつだけだ。言うなれば、一式使いという所だが……」

ぐぐつ、と腕に力を込める。

「正式に言うならば、一・五式使いという所かな！」

放たれた拳は到底届かない距離で……けれど、的になったエースは直後、左腕を吹き飛ばされる。

そればかりか、背後にいた……逃げ損ねた海賊が「ぶべら!？」と妙な叫びを上げて吹き飛んだ。

エースの腕自体は瞬く間に燃え上がり、再生するが……。

「今のは……拳圧を飛ばしたのか？」

言うなれば、『嵐脚』の変形。

先程喰らった状況や、海賊の状態からして、斬撃ではない。おそらくは、打撃。

エースが声を上げると同時に、ヨウゴーク大佐もまた声を上げた。

「ほほう！自然系か？察するに『火』か……あと正解だ。自分は『ロキア判衡』と呼んでおる」

どこか羨ましげな声だった。おそらくは、自分にもそんな能力があれば、と一瞬思ったのかもしれないが、即かすかに頭を振って、切りかえた様子だった。

そうして、先程までの構えなしの状態から、ボクシングスタイルへと構えを変える。

「ならば、遠慮もいらんな……いくぞ！」

ヨウゴーク大佐の戦闘方法は想像以上に厄介だった。

速度でいえば、元々筋肉というのは重い。あの重量級のボディにみっちり筋肉がついているのだ。当然、『剃』をも駆使するエースやサボにやすやすと回り込まれる。だが、『鉄塊』を修得しているというのが厄介で、サボにせよゾロにせよ弾かれる。

エースはそれならば、と能力を使って火を放つが……。

「どうしたどうした！その程度の集束ではグランドラインでは通

用せんぞ！」

未だ集束の甘いエースの一撃では、まともなダメージが入らない。それに、エースはまだマシだ。

自然系の特徴として、単純な物理攻撃は無効化するというのがある。

だが、サボヤゾロはそうはいかない。

軽いジャブに見えるが、それを全力で回避する。

直後に、ソファが直撃を喰らって吹き飛んだ。

拳の直撃を受ければ、一撃で戦闘不能になりかねない重い攻撃。かといって、距離を取れば連射してくるジャブ、その一撃一撃に飛来する拳圧ならぬ『判衝』が見えぬだけに厄介だ。そればかりか、拳を完全に避けなければいけない、というのが面倒極まりない。

一步下がって避けるとか、紙一重の見切りとかがまるで役に立たないからだ。

一步下がって避けるのが意味ないのは分かると思うが、紙一重の見切りまで通用しないのは、皮肉にもヨウゴーク大佐の技に無駄があるからだ。

きつちりと集束しきれしていない衝撃が拳の周囲にまとわりつき、判衝の威力を低下させる代わりに、ギリギリで避けると衝撃に巻き込まれて、体勢を崩す事になってしまう。

最初に喰らったサボは、体勢を崩した所へ追い討ちの一撃を受け、かろうじて刀を盾にしたものの、そのまま吹き飛ばされて壁に叩きつけられた。

「うぐっ！」

咄嗟に『鉄塊』をかけて、打撲や骨折こそ防いだものの、衝撃までは防ぎようがない。

あくまで『鉄塊』は筋肉を引き締めて、表面硬度を上げる為の技であり、内臓や脳までカバーしている訳ではない。お陰で、少しふらつきながら立ち上がった所へ追い討ちをかけられそうになって…。

激しい音と共に割り込んだゾロが受け止めた。

そこにエースが追撃をかける。

もう、そこには当初考えていた生け捕りなどという生易しい考えはない。そんな事を考えていては、間違いなく自分達が返り討ちにされる。そう感じるだけの実力を確かにヨウゴーク大佐は示していた。

「蛍火……火達磨！」

周囲に作り出した炎の玉を目晦ましに放つ。

先程までの攻防で、自身の技がまだまだ甘い事を実感していたエースは、炎を全てヨウゴーク大佐の顔面に集中させる。

「ぐお!？」

さすがに、これは効いたらしく、大佐の体がよろけ、思わずといった風情で顔を抑える。

人間、目の前に物が飛んできたら思わずそんな反応を示してしまうのは、反射行動としては当然だ。

ただ、その結果として追撃のタイミングを失い、サボもまた距離を取る。

エースもサボもゾロも息が荒い。

短時間の戦闘ながら、濃密さと相手の強さ故に3人も消耗していた。

部屋の広さの関係もある。

これが、屋外であれば速度に勝る点を生かして、遠距離を維持して攻撃を仕掛け、消耗を誘うという手もある。

だが、ここは如何に大佐の居室で他と比べれば相応に広いとはいえ屋内だ。機動戦を仕掛けるにも限度があるし、この程度の距離なら、部屋内の全距離がヨウゴーク大佐の『判衡』の射程範囲内だった。

「どうした？最強と謳われる自然系の悪魔の実の能力者に加え、業物以上の名刀が都合4本。先程から見ておるに、六式も自分より多くの技を使えるのだろう？だが、まともに使えるのは一式のみ。精々一・五式程度の自分に敵わない」

淡々と事実を指摘するその声に、嘲りの響きはない。

「何故か？それはお前さん達が自分の力をきっちり理解していないからだ。どの技をどう使うか、どう極めるか。何も無い。例えば、現状同じ『鉄塊』を使っている、酒浸りで年くった自分よりそっちの方が消耗している。何故か分かるか？」

そうサボに視線を向け、聞いてくる。

もっとも、サボが答える前に答えを口にしていたが。

「それはな？筋肉の厚みの差だ。『鉄塊』とは筋肉を凝縮させ、鉄の硬度を生み、防ぐ防御方法。同じ鉄の強度ならば後は鉄の強度の厚みよ」

後は打撃の性質もあるな、と語るヨウゴーク大佐によく分かっているないゾロはともかく、エースとサボは唇を噛み締めざるをえない。要は、薄い鉄板と分厚い鉄の板では、どちらがより防ぎやすいか、という問題だからだ。



薄い鉄板を殴りつけてくるヨウゴーク大佐の場合は、防いだ所で衝撃が反対で防ぐ側にも届く。

だが、より分厚い鉄板を構える側に、斬りかかったのでは、なかなか反対側には届かない、という事だった。

エースは思う。

アスラなら、と。

自分が自然系、アスラが超人系だからどうだというのだ。アスラなら、この程度の相手に苦戦はしまい。

サボは思う。

ミホークなら、と。

世界一の大剣豪と謳われる師匠ならば、この程度の相手に苦戦などすまい。一撃の元に葬り去っているはずだ。

そう思って。

2人とも気付いた。

ああ、そうか。目の前の彼もまた、こんな気持ちをずっと味わい続けていたのか、と。

自分達はまだ若い。

何時しか届いてみせると未来を見ていられる。だが、ある程度年齢を重ねると、現実が見えてくる。自分が走る以上の速度で走り、最早追いつけなくなってしまった相手。

何となく、大佐がこうなってしまった理由が分かったような気がした。

けれど。

だからこそ、自分達が今、屈する訳にはいかない。

彼とて、最初から諦めた訳ないだろう。そんな人間は大佐まで昇進出来ない。

「……ほう、まだ立つか」

感心したような声を上げるヨウゴーク大佐の前で、息を整え、立ち上がる。

不思議と追撃はなかった。

「へっ、まだ諦める訳にやいかねえからな」

「これで諦めたら師匠に殺されるぜ」

「諦める訳にやいかねえってのは同感だな」

ふむ、と顎を撫でながら、ヨウゴーク大佐は言う。

「だが、気持ちだけではどうにもならんぞ？自身の利点と欠点、強みと弱み。自分を把握しての戦闘スタイルの構築……それらが出てこそその悪魔の実であり、業物だ。勝てないのならば、逃げるのもまた1つの手だ」

どこか諭すような口調だったが、ニヤリと笑って、3人はそれぞれに構える。

「嫌だね」「嫌だね」

そう答え、駆け出す。

もう、ここまで来れば意地だ。細かな技など意味はない。各自がそれぞれの最高の一撃をかける。3人の誰か1人でも当たれば、他が迎撃されても自分の一撃が当たれば十分な程の一撃を！

「火拳！」

エースが今の自分に出来る限りの集束を高めた炎の拳を放つ。

「竜破墜天！」

サボが空を蹴って、駆け上がり、上空から刀を叩きつける勢いで振り下ろす。

「三・千・世・界！」

そのサボの下を掻い潜るようにして、ゾロが踏み込み両手の刀を振り回す。

それらの一撃を。

鉄塊で弾いていた攻撃を。

拳で迎撃していた攻撃を。

ヨウゴーク大佐は何ら防御する事なく、笑みすら浮かべて受けた。

第91話・ローグタウン5（後書き）

ジャンプ掲載の最新話読むと、先週からまだ引っ張ってる

…… 一体何が載ってるやら

ドラゴンはどうやらくまに何があったのかわかってるみたいだし、その辺も知りたいなあ……

そして、サンジ哀れ

まさか、ここでもあの手配書がたたるとは

## 第92話・ローグタウン6

全身から血を噴出すヨウゴーク大佐に、3人は一瞬、いや、その場の全員が何が起きたか理解出来なかった。

つい先程まで、戦況は大佐に有利だった。

自分達は全力を込めて、一撃を打ち込んだ筈だった。

それでも、自分達はその一撃の内、1つ届けば良しと覚悟していたはずだ。

そんなどこか呆然とした彼らを横目にぐらりと体を傾けたヨウゴーク大佐は、それでも壁まで辿り着き、ずるずると座り込むように崩れ落ちた。

それで、ようやく我に返ったのか、エースとサボとゾロの3人は近づいた。

「ふう……」

全身を朱に染めながらも、尚もどこか悠然とした呟きをヨウゴークが洩らしたのを皮切りにエースが口を開いた。

「あんた……まさか」

最初から俺達に自分の幕引きをさせるつもりだったのか。

そう問いかけてよとした言葉を遮るようにして、ヨウゴークは言った。

「すまんなあ、最後まで逃げさせてもらってな」

ニヤリ、と笑ったその態度に、悲壮感も苦痛も何もない。

ただ、してやったりとも見える態度があった。  
互いに顔を見合わせる3人に、ヨウゴークは語る。

「生き残ったとてどうなる？良ければ、降格程度だろう……だが、その後の事を考えた事はあるかね？」

全身から血を流している。

何しろ、彼ら3人が全力を込めた一撃を防御なしで受けたのだ。

分厚い筋肉が血を押し留めてはいるものの、傷は深い物は内臓まで届いているだろう。……今は平気なように見えても、遠からず命は尽きる。むしろ、激痛が襲っている筈だ。

それでも、ヨウゴークは苦痛を表に出す様子はなかった。

「外へは隠せても中には隠せん。これが海賊の更正の為に階級を捨てた、だの言うならば非難する者がいる一方で、理解してくれる者もいるだろう」

そして、ふう、と息をついて続けた。

だが、賄賂と海賊との結託で降格なんぞ喰らって同情する奴はおらん、と。

「自分はこの年だ。今更まともな昇進の目もなしに、年下の上司の下で、これから周囲から何年も何十年も白い目で見られつつの飼い殺しかね？真っ平御免だ」

「……だから、俺達の一撃を受けたってのかよ」

ゾロがどこか不満げな様子で言った。

彼からすれば、本当に欠方ぶりの強者との死合いのつもりだったのだろう。

それだけに、この結末が御気に召さないらしい。  
その表情にくっくつと笑い声を洩らし、ながらヨウゴークは謝った。

「すまんすまん。だが、インペル送りや処刑なんてのも御免だったのだな。自分で選んだ結果だ、自分の幕引きぐらい選びたかったのだよ」

死に行く者の言葉となれば、ゾロとしても何とも文句を言いつらいのか、ちつと舌打ちして、そっぽを向いた。  
だが。

「それに死ねば……海軍は自分の死を偽装するだろうからね」

その言葉には思わず、3人が3人ともヨウゴークの顔を見た。  
そこで、ヨウゴークが何かに気付いたように、ほがらかな声を掛ける。

「おお、戻ってきたか。終わったから、君も来るかね？」

3人が振り返ると、たしぎの姿が恐る恐るといった風情で、ドアの陰から顔を覗かせていた。

「戻ったって……どっか行ってたのかよ？」

ゾロの呟きに、ヨウゴークが笑いながら、『君らが電伝虫を守ってくれと言っから、海兵共々巻き込まれんように逃げていたよ』と事情を話していた。

そこでふと我に返ったサボが先程の言葉の意味を問うた。

「そうだ！さっきのはどういう意味なんだよ、海軍があんたが死んだら、死んだのを偽装するって……」

「言葉通りの意味だよ。……人というものは具体的な形の見えないものを憎み、怒るのは難しい。分かりやすい形ある物をつい憎しみの対象として選んでしまうものだ。……自分が生きていれば、自分に罪があると分かりやすく示せばいい。だが、死ねば死んだ人間を怒り続けるのは難しい」

だから、自分が死ねば、放っておけば海軍が代わりに怒りの対象となる。だから、当たり障りがないよう、自分は事故死か病死、もしくはそこらに転がってる海賊に罪をおっかぶせて、戦闘中の死と偽装するだろうと語った。

電伝虫の向こうからは、聞こえているであろう誰も返事をしない。それが答えだった。

「……ふざけないでよ」

呻くような声で言ったのは、たしぎだった。

「あれだけ、金を筆記取って、海賊から賄賂まで受け取って、それで何もなかった事になるの！？貴方の贅沢の為に、どれだけの人が苦しんだと思ってるの！？」

「贅沢？」

だが、ヨウゴークは、その言葉にはきよとんとした様子だった。

「……ああ、そうか。そうだったな。金なら、その金庫に手に入れたのは全額放り込んだままだ。好きにしる。鍵番号は4050



9だ。まあ、苦しめたのは悪かったな」

「「「「はあ?」「」」」」

その言葉に一斉に呆れたような声が上がった。

「……………何かに使ったんじゃないのかよ?」

「うーむ、酒は味が分からんからな。むしろ、若い頃から呑んでいた安酒の方が性に合う。そして安酒なら大佐の給与で十分でなあ。女は、この見た目にこの年だ。どうせ、金と権力に寄って来るだけと思えば、燃え上がりもせんかったし、賭博はどうにも熱くなれんかったから、試しにやっつてすぐ止めたし……………」

サボの問いかけに、思わずといった風情で、ぶつぶつと呟く大佐に誰からともなく、『じゃあ、何でお金なんて受け取ったんだよ』という声が洩れた。

「……………なんでだろうなあ。きつとそれが自分が墮落したんだって、思う為の鍵だったのかもしれない」

どこか疲れたような声だった。

分かりやすい、自分がもつ上に登る資格を失った証として、金を受け取るという行動をしていたのかもしれない。

そう呟いた。

『……………お前の実力そのものは評価されていた。アスラには敵わずとも、次代ではそれなりの役職を占める事も可能であったろうに』

「……………ええ、分かっています。何で、でしょうねえ……………」

センゴク元帥の声に、次第にかすれだした声で、答えて、どこか虚ろになった視線を空中に向けた。

戦闘の余波で天井が崩れ、そこから太陽が姿を覗かせていた。それを見て、ふと気付いたように呟く。

「……………ああ、そうか……………自分は……………地面に動いてる人の力になりたくて……………海軍に入ったのに……………眩しい太陽に……………目を取られて……………見えなくなつて……………」

余りに眩しいアスラ中將という同期の姿に目を取られて、肝心の自分の大切なものを見失っていたのか。

そう呟いて、ふう、と一つ大きな溜息をついて俯いて。

その後は、もうヨウゴーク大佐はそれ以上言葉を発する事は永遠になかった。

第92話・ローグタウン6（後書き）

ここでヨウゴーク大佐退場です

もう少し、ローグタウン編続きます

第93話・ローグタウン7（前書き）

ローグタウンの海軍側の後始末編です

明日はエース達の視点からの結末になります

### 第93話・ローグタウン7

「で、それで私ですか、ヒナ了承」

ローグタウンでのヨウゴーク大佐の一件は実際に大佐が予想した通り、事故死として処理されていた。

大佐の攻撃の巻き添えで倒れていた海賊が使われなかったのは、本部大佐がこの程度の小物海賊に倒されるなどという話が広まると後が面倒だ、という事と、もし海賊に倒されたとなるとそれは殉職として扱わざるをえない為、昇進を考慮しなければならぬからだった。

この処理全体をアスラが担当する事になったのは、CP長官という立場に加えて、ヨウゴーク大佐自身が名前を上げたのも多少なりともあつただらう。

そうして、新たにローグタウンに配属する責任者として、アスラが選んだのがヒナ大佐だった。

「そつだ、何か聞きたい事はあるか？」

「そうですね、では一つ。何故私ですか？ヒナ疑問」

「ちらり、と視線を部屋の一角にやる。」

そこには先日准将へと昇進したスモーカーの姿があつた。

不機嫌そうに葉巻をくゆらせつつ、書類を片端から処理している。ちなみに、その卓上には葉巻の煙を吸い込み処理する小型の空気清浄機が置かれていた。これは、アスラが元の世界の記憶から葉巻の煙に余りいいイメージを持っておらず、とはいえ部下の能率を上げるには……と考えた末、Dr.ベガパンクに依頼して作ってもらつたもので、小型ながら性能は抜群だった。

その当人は自身に向けられた視線に気付いて、顔を上げる。

「……なんだよ？」

「別に」

最近スモーカーは少し変わったと思う。

以前ほどの海軍に逆らっても、自分の筋を通す、という部分が薄れた気がする。

元々、悪魔の実の中でも最強と言われる自然系の1つ、モクモクの実の能力者で、真面目な軍人だったから功績は同期の中でも群を抜いていたが、前述の理由が祟って、昇進と降格を繰り返してきた。それが最近、大人しい。

……嬉しいような、悴に嵌ってしまったのが寂しいような複雑な心境だ。

もっともスモーカーにしてみれば、アスラの説得に応じたただけだ。

『何かを為すには階級もまた必要だ』

事実、スモーカーとヒナが関わった司法船襲撃未遂事件とて、アスラが本部長将という立場になれば、止められなかっただろう。

本部長将が訴えたからこそ、元帥という海軍の最高権力者へと直訴が可能であったからこそ、迅速かつ真剣に受け止めてもらえた。もし、これがアスラが一介の大佐だったら、ああは行かず、おそらくトムらはスパンドムの計画通り処罰を受ける事になっていただろう。

或いは、ガープ中将。

彼もああも自由でいられるのは、彼が英雄と呼ばれる程の名声を持ち、海軍本部長将の地位にあるからだ。

要は原作通り、スモーカーが階級の必要性を理解した、という事

になる。ただし、アスラの介入により史実より早く。

さて、ヒナ大佐に問われたアスラは少し考えていた。

何と答えるべきか、と思ったが、敢えてストレートに行く事にした。

「不愉快になるのを承知の上で言うならば、君が見た目美人の女性だから、だな」

海軍としては真面目な実力者だから、という事になるが、と付け加えられたものの、さすがにヒナも頬が引きつった。

「まあ、苛立つのは当然だろうな。ただ、前任者が結果的にローグタウンの住人からは嫌われていただけに、今回送り込まれる人員には見た目分かりやすい、最低でも怨まれる度合いを減らす要素が必要なのだ」

本当の彼がどうだったかは問題ではない。

少なくとも、ローグタウンの住人が一般的に信じていたヨウゴーク大佐は汚職塗れで、不真面目な軍人だった。

そんな所に、見た目が不真面目な軍人を投入したらどうなるか……。

例えば、スモーカーは表面こそ不良軍人だが、その内実は至極真面目で堅物だ。だが、人というものはぱっと見た印象にも強く影響を受ける。無論、時間をかければそれも解消されるだろうが、その時間が問題だ。

その為に見た目が使えるなら、使った方がお得だ。

無論、これらに加えて真面目な実力者である事は必須だが。

「……了解しました、ヒナ承知」

まあ、理屈は分かったし、何よりこれは正規の命令に当たる。任務であるならば、当人の感情や希望は後回しにされるのが世の常だ。とあれば、自分の不快感など些細なものだ。あくまで見た目で判断するのは何も知らない一般市民であり、海軍上層部は能力で評価してくれるだろう、というのもあったが。

それに、この任務を果たせば上層部の覚えも目出度くなるだろう。

（スモーカー君には負けたくないものね、ヒナ決意）

もう1度スモーカーに僅かに睨むような視線を投げかけ、それに気付いて首を傾げるスモーカーを尻目にヒナは敬礼を行い、辞令を受け取ると退室した。

「……なんで、あいつああも睨んできたんだ？」

「……本気で気付いていないのか？」

退室した後、閉まった扉を見つつ呟いたスモーカーの言葉にどこか呆れたような口調でアスラは呟いた。

それが恋愛感情かどうかはさておき、ヒナ大佐がスモーカーに対して、明らかな対抗意識を持っているのは確かだからだ。

「何がですか？」

「いや、いい」

まあ、いい。

当人が気付くまで、或いはヒナ大佐自身が言うまで黙っておこうと決めて、アスラは別の書類を手にした。



もつ、そこにはローグタウンやヨウゴークの事は脳裏にない。  
……非情なようだが、そこまで考えていられない、というのがア  
スラの現実だ。

自身への妬み嫉みは気にしていたらキリがない。

そんな事は理解している。

CP9からの報告書を読みながら、動じなくなった自分にどこか  
寂しさを感じる。この報告書とて、偽装されており、普通の報告書  
の9P目と18P目と19P目を抜き出し、18Pの文章に紛れ込  
ませた本日分の符丁を元に残る2枚を『翻訳』するという形を取っ  
ている。内心では、慣れとしか言いようがないが、そんな事をさら  
りとしている自分に苦笑気味なのだが、それが表に出る事はない。

本当に何時からこうなったのか……そう思いつつ、確認していく。  
既に、CP9はBWに潜入する事に成功し、連絡役のジャブラは  
既に幾度かBWの要員と戦闘に突入、先日はミスター7と名乗る男  
を仕留めたとの連絡が届いていた。

とはいえ……。

(……クロコダイルが全く現状に気付いていないとも思えん)

急拡大する組織に、誰も潜入していないなどという事はありえな  
い。

サイファーボール

CPとて、外部から雇い入れれば、もつと簡単に戦力の建て直し  
も可能だっただろうが、それをせず既に構築されていた育成機関か  
らの卒業生を教育するという形を取ったのは、正にそれが原因だ。

実際、それでさえ、買収や脅迫その他で裏切る事を完全に防げる  
訳ではない。

クロコダイルとて、そんな事は百も承知だろう。きっと内部では、  
誰が潜入工作員なのか常に探られているはずだ。

（原作通りにビビ王女が入り込もうとしたとして……果たしてうまくいくか？彼女は、いや護衛隊長イガラムにした所で潜入調査は所詮は素人だ）

とはいえ、既に1度ダンスパウダー作戦を潰した結果として、未だアラバスタ王国は混乱が引き起こされた様子はない。

或いは、アラバスタに自身が居座っていると見せかけて、他で作戦を開始するという可能性も視野に入れておかねばならないかと思う。

（とにかく、何とか中核にこちらの手の者を送り込みたい所だが……）

最悪誰かに死んでもらうしかないか。

傍らで仕事をする副官改め副司令官となったスモーカーにさえ悟らせる事なく、アスラはそう思考を巡らせていた。

そんな自身の思考の、以前からすれば異常ともいえる思考に気が付かぬまま。

### 第93話・ローグタウン7（後書き）

という訳で、自分でも意識しないままに染まってしまってるアスラです

まあ、どこか二面性を抱えてしまうのかもしれませんが  
戦場で何人も敵を殺した兵士が、家に帰れば良き父親なんて例はザラにありますからね

アスラも家に帰れば、ごく普通の感覚を保ってますが……  
自分でも気付かない内に、仕事時の思考が……

第94話・ローグタウン8（前書き）

ローグタウン編終了です

後書きにて、前回のアスラについて少々

## 第94話・ローグタウン8

エースは渋い表情で船上からローグタウンを見詰めていた。サボは舵を取っている為、舵輪の傍にいるが、彼もまたローグタウンに複雑な目を向けていた。

それはゾロも、たしぎも、また同じだった。別に追い出された訳ではない。

原作のモーガン大佐を倒したルフィらと異なり、今回の一件は海軍最高司令部よりの直接命令に等しい。丁寧な扱いを受け、後任となるヒナ大佐の到着をもつて、ローグタウンを離れたのだった。

ヒナ大佐が到着するまでいたのは、それまでの方針とは真逆の方針となる海賊撃退の為だ。

あの時、同じ部屋にいた雑魚海賊は気絶してる所を連行されて、後で密かに処刑されたのだが、彼だけで済むはずがない。何しろ、これまでヨウゴーク大佐は複数の海賊から賄賂を受け取っていたのだから、大佐が死んだのを知らずにこのこやって来た海賊らを次から次へととつ捕まえていた。

そんな仕事も、ヒナ海軍本部大佐が着任した事で終わった。

ヒナ大佐は後始末の決定も持つてきており、この日をもって正式にヨウゴーク大佐は事故死したと発表された。

ローグタウンの住人らは喜び、次の海軍の人間は大丈夫かと疑いの眼差しを向けたが、何しろヒナ大佐は若くて美人、真面目さが全身から漂っているような人材だ。

自然と、『これなら大丈夫だろう』という空気が醸成されていった。

「……………あのヒナさん大丈夫なのかよ？」

ゾロが誰に聞くともなしに尋ねた。  
彼らは全員が、結果に何とも言いがたいものを抱えていた。  
戦いの結末もそうだし、その後の処理もそうだ。

「……大丈夫だろ、あの真面目だし、強いし」

「知り合いなのか？」

実の所、エースとサボはヒナ大佐とはアスラを通じて縁があった。元々は、トムさんの件で一時的に部下に入った間柄だったが、その後スモーカーが副官となった事で、エースとサボが時折彼に訓練をつけてもらう機会があった。

見た目によらず面倒見のいい彼だったので、随分とエースとサボも世話になったのだが……。

その際、よく参加したのがヒナ大佐だった。  
彼女が恋愛感情かどうかはさておき、スモーカーを意識しているのは確かだったので、内心エースもサボもニヤニヤしながら2人を見ていたものだった。生憎、自分達がいる間に仲が進展する事はなかったのだが。

まあ、そんな縁で、訓練所でも1度ならず相手をしてもらった相手でもあるが故に、エースもサボも心配していなかった。

当時既に能力者だった彼女だが、2人には全く能力を使わず完勝してみせた。

性格は、やるべき事はしっかりやるが、態度は不良っぽいスモーカーに比べて、きつちりとした優等生型。その癖に、スモーカーと未だつきあいがある事から分かるように、案外柔軟な所もある。

「へえ、さすが本部大佐って所か」

ゾロもそうした話を聞いて感心したような声を上げた。

まあ、ヨウゴーク大佐とやり合って、本部大佐という相手がどれ程強いのかは肌身で実感した。

自分とて強くなったつもりだった。

だが、その実はどうか？

同じ剣士であるサボには敗退し、その後エースとも拳と刀で合わせってきたが、未だ勝てない。

けれど、ヨウゴークは自分達3人を同時に相手どつてみせた。

そういう意味では、彼女が強い、それには納得が出来た。

知り合いと思われるエースとサボが口を合わせて言っているのだから、きつと真面目に治安を守ってくれる事だろう。さすがに、ヨウゴークの後釜に不真面目なのを送ってくる程海軍は馬鹿ではない、と思いたい所でもある。

とはいえ、それと今回彼女が本部からの決定として行なった発表には不満が残る。

「そうだとしても……海軍がちゃんと本当の事を公表してくれないなんて……」

たしぎが俯きながら呟いた。

そうだなあ……と3人も頷き、ぼんやりと町を眺め……。

「……って何で当たり前のように乗ってんだよ!?!」「……」

ようやくと気付いて思わず突っ込んだ。

「ええええっ!?!?」

「いや、お前本当に何でこの船に乗ってんだよ!?!?」

驚きの声を上げるたしぎに、ゾロが改めてツッコミを入れる。

その言葉に、たしぎは、改めてアレコレと色々な意味で驚きつつ、語ったのだが、彼女の言い分はこうだ。

元々、以前に語った通り、悪党が所持している名刀を回収しに、海へは出るつもりだったが、生まれ育ったローグタウンがあのような状況では出るに出来なかった。

けれど、それも内容はどうあれケリがついた。

そこでいよいよ海に出ようと思ったのだけれど、海賊は論外だし、かといって海軍に入るのは以前ならともかく、今はどうにも納得がいかない。そこで、賞金稼ぎであるエース達ならどうという人間か分かっているし、という事で出航に合わせて乗り込んだという訳だった。

「それに……」

「それに？」

「乗り込んだ時、何も言われなかったから、OKなんだと思って」

それを言われると、3人も沈黙せざるをえない。

余りに自然に乗り込んできたから、とかは言い訳に過ぎない。結局の所、自分達が気付かずスルーしていた事は事実だし、何が原因かと問われたなら……心のどこかで彼女を仲間と思っていたのだから。

「……じゃあねえなあ」

エースが頭を掻いた。

サボはにやにやと笑みを浮かべ、ゾロはどう反応したものかと妙な表情になっている。



「分かった、とはいえ、見ての通り船員が少ないからな。お客さん扱いはしないぞ?」

「もちろん!」

「ううして、たしぎが仲間に加わった!

」ところで、お前さん航海術とか出来る?」

「……えーと、私がやると何故か変な方向に行ってしまうんですが、それで良ければ……」

最終的に、料理当番になりました。

あと、ゾロと一緒に雑務とか。

まあ、実際に航海してみると分かるのだが、可能ならば夜は島の傍に停泊した方がいい。

夜の海なんて好き好んで航海するものではない。

……だが、まあ、そろそろ舵取りが出来る奴があと1人ぐらい欲しいと思うエースとサボだった。

## 第94話・ローグタウン8（後書き）

アスラですが、実の所今でも意識して処理する案件などは以前と同じく、情ある処理をしています

ただ、処理する件が余りに多すぎる為に、情理の内、普段は理の面が強く表に出てしまっています

例えば、子供の治療費が欲しくて賄賂に手を染めた海軍軍人がいたとして、『海賊からの収賄罪で、処罰』これが妥当なら、許可を出しています

無論、きっちり読めば、『子供の治療費が欲しかった為に』といった文章が目に入るので、そこまで細かく読んでいただけません  
また、一件一件、それが本当なのか確認取ってられないというの  
もありません

結果として、非情に見られようとも、理で処理していくようになってます

ただし、これらと全く違う処理をしてしまっているのがCP関連です  
裏世界に深く関わるこちらは、下手に情をからめてしまえば、却って危険な為に非情にならざるをえないという面があります

この為、こちらに関してはアスラは意識して徹底的に情を排除した  
対応を取っています、最早条件反射レベルで

第95話 - 模索(前書き)

本日は自身の明日の都合の為、返信は明日朝にて…

## 第95話 - 模索

エースは自身の掌をじつと眺めていた。

そこには赤い火が揺らいでいる。

精神を集中すると、火は回転を始め、周囲の酸素を取り込み赤から蒼へ、蒼から白へと輝きを増す。が……。

「ふうっ」

エースが息をつくと同時に、再び赤い火が揺らぐだけに戻った。

傍らで刀の手入れをしていたサボが手入れが終わったのか、音を立てて鞘へと戻した。

結構乱暴な扱いもしたし、盾代わりに攻撃を防ぐ場面もあったのだが、そこは大業物に位置する黒刀。元より恐竜が踏んでも一ミリも曲がらないと称される黒刀の中でも逸品に属するだけの事はあり、歪みも何も全くなく、何時も通りの手入れで済んだ為か、然程時間がかかった様子はなかった。

これがゾロなどは大変で、例え同じ大業物といえど和道一文字は黒刀程は頑強ではない分、歪みがないかの確認含めて手入れをしなければならぬ。しかも、それが3本あると来たものだ。当然、数が増えれば手間もその分増える。

かといって、手入れを怠れば刀は容易に拗ねる。

加えて、こうした愛刀ばかりは使い手本人の手で最後の手入れをしてやる必要がある。微妙な手入れの違いが、命をかける戦場では結果を左右する事もあるから手は抜けない。

だから、ゾロは今も船室で細かな手入れを繰り返している筈だ。

ちなみに、たしぎは自身の時雨の手入れが終わった後は、ゾロの部屋に入り込んで、うっとり刀を眺めているという……ある意味ゾロにとって非常に居心地の悪い状況を生んでいた。かといって、

騒ぐ訳ではないから出て行けとも言いつらい。そもそも、彼女が幼馴染に瓜2つというだけに、元より強い事を言いつらかったりする。さて、話を甲板に戻そう。

「……悩み事か？」

サボの問いかけにエースは沈黙していたが、やがて溜息をついて言った。

軽すぎる、と。

エースが知る自然系は4つ。スモーカーの煙、赤犬のマグマ、黄猿の光、青キジの氷だ。

この内、煙はまだいい。

元々、煙という性質上、余り攻撃には向いていないのは確かだからだ。

だが、火という一見攻撃に優れたように見える自然を手に入れただけに、エースは不満だった。

無論、ある程度理解はしている。

海軍大将という海軍の頂点に立つ彼らと自分を比べるのが間違っている、と。大佐相手でさえ苦戦した自分達だ。本部大佐の更の上、幾多の実戦を経て、世界最高クラスの戦力を持つに至った彼らとでは自分は所詮若僧に過ぎない。

だが……。

何時か肩を並べる所に行きたいと願う気持ちはまた別だ。

「……火つてのは重量がないからなあ……」

サボの呟きが全てを語っている。

単純な熱量においてはマグマに劣る。

あちらは高熱と質量を共に保有している。そこから生み出される攻撃は恐怖の一言だ。

光はその速さにおいて、他の追隨を許さない。

圧倒的な速さから繰り出される途轍もない質量へと膨れ上がった光速の蹴りは強烈だし、放たれるレーザーは一撃でシャボンディ諸島のヤルキマンマンングローブをへし折る破壊力を持つ。

瞬間移動とも取れる光速移動や閃光による目潰しなど小技も豊富だ。

氷は一見上の2つに比べると地味だし、直接的な破壊力という面では、上記の2つに大きく劣る。

だが、氷には絶対的とも言える強烈な特徴がある。

それが、海に落ちても平気という能力だ。

正確には海でも自身の能力が発動不可能に至る前に強い冷気が海をも凍らせてしまうのだが、悪魔の実にとって共通の弱点である水に対して絶対的なアドバンテージを持つ氷の能力は極めて強力だ。

……だが、火には、これらに匹敵する能力がない。

「やっぱりさ、何か『これ！』って奴が欲しいんだよ」

その気持ちはサボにも分かる。

それだけに一緒になって唸っていた。

彼らがこうして悩んでいるのは、やはり先だつての戦いが原因だ。あの時、彼らは3人がかりで本部大佐1人に敵わなかった。

最終的に勝利を収めたのは彼らだったが、3人が3人とも到底勝った気になれないでいた。当然ではあるが。

それ以後、彼らは彼らそれぞれが『どう極めていくか』を追求するようになっていた。

それが出来なければ、グランドラインに入る余地すらない。

これがまだ、剣士である3人は楽だった。

武器という要素は良かれ悪しかれ、ある程度方向性を絞ってくるからだ。

サボは速さへ。

六式と組み合わせた鋭さを追求する方向へ。

元々剛剣だったゾロはその方向へ。

3刀流というやり方自体が、力が強くなければ不可能なので、これは案外すんなりと決まった。

その為にはまず筋力トレーニングだ。

たしぎも決まった。

女性故に力の道へは進み辛い。無論、男性にも負けない力を持つ者はいるが、たしぎとは余り相性は良さそうではない。

故に彼女は技の方向を極めようと、型をこなしていた。

「やはり、温度かなあ？」

サボもこれらと比べれば、どうしても幅が大きい火に関しては、答えを出しづらい。

「やっぱり、そつちが妥当だよな」

エースとしても、集束と熱という2つの分野に絞るのがやはりイメージが湧く。

だが……。

「けど、温度って集中しないとすぐ下がるんだよな……」

それが問題だった。

結局の所、精進あるのみ、という事にまとまりそうだったが……。ちなみに、後にエースと電伝虫で話したアスラは、自然系悪魔の火とは熱なのではないか、という見方を示していたりする。共

に、形のないものであるし、熱を火という形を通じて発揮しているのではないか、そう思ったからだ。

そこから、『これは出来ないか』『こういふのはどうだ』とあくまで可能かどうかは分からないが、と断った上で幾つか提案してみたりするのだが……。

その結果が出るのは、まだ先の話である。



第95話・模索（後書き）

ラストで少し書きましたが、私は自然系の『火』っていうのは『熱』を内包してるんじゃない？って思っていたり

どちらも形がないですからねえ

熱に色がつけば、火になるというのは乱暴でしょうか……

現実と違って、燃やしてる物がある訳ではないので、そんなに的外れではないのでは、とも思うんですが……どうでしょう？

## 第96話・東の海の革命軍1

「もう、いいです！私だけでも行きます！」

そう言って、たしぎが勢いよく立ち上がると、肩をいからせて船から降りていった。

エースとサボはどこか困ったように、ゾロは深い溜息をついて、彼女を見送った。

そもそもの発端は、現在彼らの船が錨を降ろしている港のあるラフォント王国に到着し、酒場に繰り出した時に起った。

酒場は、元より彼らのような賞金稼ぎや船乗りが集まるような酒場だ。これは、情報収集という面もある。幾等何でも闇雲に探し回って、賞金首の海賊とバッタリ会える可能性は低い。

かと思えば、今の自分達では太刀打ち出来ない大海賊団……例えば、最近勢力を強めつつあるクリーク海賊団の船団などを相手にしたら、さすがに危険だ。

したがって、こうした酒場で噂を集め、場合によっては情報を買う。

どこそこの海賊団はどこを最近の縄張りとしているらしい、近海にこれこれこういう海賊団が目撃されたらしい、あの海賊はどうやらグランドラインに入ったらしい、などなど噂は様々だ。

何しろ、商人や普通の船乗りは下手に海賊に出くわしたら命の危険があるし、もし、命は助かっても船荷は奪われるのは確定だ。

自分達の命や生活がかかっているだけに、こうした情報は積極的に交換され、嘘もなしだ。何しろ、下手に嘘を言って陥れようものなら、そしてそれが知られたが最後、次からそいつにはまともな情報が来なくなる。

そして、こうした情報を求めて、賞金稼ぎらも集まる、という訳

だ。

無論、船乗りは船乗りで耳寄りな情報があれば、酒の一杯や小銭と引き換えに更に詳しい話を聞かせてくれたりする訳だ。

この辺は一足先に賞金稼ぎらしき事を始めていたゾロが教えてくれた。

そうして、酒場で何時も通りのお仕事を始めた時、王国の人間と思われる小奇麗な服装の官吏と軍人と思われる連中が入ってきた。

「諸君！我々はラフオン王国の者だ。我々は現在……」

少々長くなるので割愛するが、要は最近、この付近で革命軍と見られる連中が確認されるようになった為、戦力強化を図っている。報酬を出すから雇われる気はないか、雇われる気があるのならどこそこへ来るように、との事だった。

報酬そのものは馬鹿高い訳ではないが、日給だし革命軍が実際に来るとは限らない。いい小遣い稼ぎとみて、参加するつもりな連中もそれなりにいるようだ。

……で、彼らの中では、たしぎが乗り気だった。

反面、エースもサボも乗り気ではなかった。

乗り気でない2人を、たしぎがむしろ責める口調だった。

彼女の言い分からすれば、革命軍は平和な所に戦争を起こす犯罪集団、という事らしい。

間違っではない。間違っではないのだが……それが全てでもない。

革命軍。

世界各地の海で、多数の王国で革命を起こし、打ち倒している武装集団である。

リーダーの名はドラゴン。

エースは知っているが、フルネームはモンキー・D・ドラゴン。ガープの息子であり、ルフィの父にあたる人物だ。

世界政府も各国政府も危険視しており、世界で最も危険な犯罪者として高額賞金首となっている。

当然、無駄なまでに正義感の強いたしぎは、革命軍を海賊と同レベルに見ており……奴らが来るなら戦わないといけない！と燃えていたのだが……エースもサボも、ゾロさえも乗ってこず、冒頭の発言に繋がる、という訳だった。

エースとサボにしてみれば、ゴア王国の時の記憶がある。

ゴア王国も革命軍に倒された訳だが、2人とも全く同情しなかった。むしろ、倒されて当然だと思っていた。

そうして、このラフォント王国は、と見れば……煌びやかな王宮、贅沢な格好をした貴族、それとは対照的にどこか薄汚れた街並み、道端にうずくまる痩せた子供達といった光景を見ていれば容易に想像がつくというものだ。

「そういえば、ゾロ、お前は何で行かなかったんだ？」

「ああ？ いや、何かな、あの役人の奴気に食わない感じがしてな」

「どうやら勘だったらしい。」

とはいえ、結構役立つ勘だとエースもサボも内心感心していたが、実際、彼らもあの役人達に賞金稼ぎらを見下す空気があるのを感じていた。

「そういつお前らこそいいのかよ？ お前ら、海軍のお偉いさんとの関係があるんだろ？」

今度はゾロがそう聞いてきた。

まあ、その辺はローグタウンでの一件の後、詳しい事を話していた。あれを見せて、『全く何の関係も御座いません』と言って通じる筈もなかったからだ。

海軍に対して、ちよつと不信感が募っていた事もあり、下手に隠すと却ってこじれそうだった、というのもある。

「…………アスラの言い方を借りれば、あいつら別に悪じゃないからなあ」

「はあ？悪じゃないって…………確か、アスラって海軍本部の中将だよな？」

サボの呟きに、ゾロが何を言ってるんだ？という様子で聞いてきた。

まあ、確かに海軍本部中將が言う事ではなからう。だが…………。

「アスラの言葉を借りれば、革命軍ってのは『また別の正義』なんだとさ」

と、エースが告げる。

ドラゴンがルフィの父であり、ガープの息子であるという事をエースが知った事から始まった事だが、サボなら大丈夫だろうと後に伝えられた。

その際、悪党なのか、という問いにアスラが答えたのが先の回答に繋がる。

「世界政府と革命軍は表と裏だ、って言ってたな…………」

「ああ。正義と悪は黒と白、並べてこそ、その違いが際立つ。革命軍はそうした意味では世界政府を写す鏡であり、表裏一体。そし

て、正義の反対は、また別の正義だ。そんな事言つてた」

「……何だそりゃ？」

「よく分からん」

回りくどい言い方をしたせいか、エースはもちろんサボもよく分からなかった。むしろ、きちんと言った事を覚えていただけサボが凄いとと言える。

ただ、1つだけはつきりしているのは……。

「少なくとも、アスラは革命軍を海賊と同列には見てない」

エースの言葉にサボもまた、うんうんと頷いた。

そう、事実アスラは革命軍を海賊と同じ集団とは見ていない。彼らはもつと危険な存在だ。

海賊は奪う存在だ。

白ひげや赤髪であっても、海賊である以上はそれは変わらない。彼らが普通の海賊と違うのは、ただそれと引き換えに庇護を与え、という事だ。昔ながらのヤクザと同じだと考えればいい。ただ、名前のそれと知られた、大海賊でないとこの世界ではそんな事は出来ない訳だが……。

一方、革命軍とは置き換える存在だ。

支配する者と支配される者がいる。

その支配する者を打ち倒し、支配される者が支配する側になる。前者の海賊は世界政府にとっては確かに厄介者だが、彼らには世界を変えようという意志はない。世界政府そのものをどうこうしようという意識はない。

だが、後者の革命軍は違う。

革命軍は世界を変えようとする意志がある。だからこそ、恐ろし

い、だからこそ世界政府は危険視する。

両者は世界政府と敵対するという部分では同じでも、全く異なる存在なのだ。

「……いずれにせよ、たしぎを放っておくのも何か気が引けるしなあ……しばらく様子見だ」

原作で、ルフィに反抗したウソップと対応が違うと思うかもしれないが、あれとは全く異なる。

船長に反抗した、という意味合いではない。

エースが一応船長だが、彼はどうするかの決定を下していなかったからだ。

王国に味方するとも言っていない、味方するなとも言っていない。これが、味方するな、と言ってそれに反抗しての事であれば、また対応を変えねばならなかった所だが……今回は違う。何故、エースが決められなかったかといえば、王族貴族に対する感情が、自分にせよサボにせよ個人的に悪印象を抱いているという自覚があったからだ。何より、自分達はこの王国の事を良く知らない。表面上だけを見て決めているかもしれない。

そう思うと決断を下せず……結局、逸早く決断した彼女は行ってしまった。

「何か、厄介な事になりそうだな……」

ゾロの呟きに、2人も黙って頷いた。

第96話・東の海の革命軍1（後書き）

革命軍です

たしぎの成長……になるかな？

アスラとクロコダイルはどうした、と思う方もいるかもしれませんが、後々の為にこの話が必要なもので……もうしばらくお待ち下さい

メラメラの実に關してですが、基本としては熱方向で行く予定ですがヒエヒエは逆に低温、と熱に対する±という感じで、それぞれの象徴として、火と氷という形で現れていると……

まあ、この後変わるかもしれませんが



## 第97話・東の海の革命軍2

「……そういや、お前ら自身は革命軍の事どう思ってるんだ？」

ふと気付いたように、ゾロが問いかけた。

思い返してみれば、アスラ中將が言ったという話は出てきても自分達がどう思っているかは話がなかった。

「いや、何も」

「何もって……なんか思うんじゃないのか？」

2人の返答にさすがに呆れたような言葉を返す。

「といってもな……俺ら革命軍について何も知らないし」

「そりゃな。一般的な知識ぐらいは知ってるけど、じゃあ、革命軍の実態は、どんな奴が所属していて、そいつらはどんな目的を持っているのか、何を目指してるのかとか何も知らないんだ」

だから、安易に判断出来ない、自分の意見を言えないとエースとサボは言う。

実際、世間一般に出回っている革命軍に対する風評は基本として世界政府から発信されるものであり、当然、それらは世界政府から見た革命軍ではない。

では、革命軍とは何を指しているのか、危険な思想というのがどんな思想なのかとかは全く発信されない。

「例えば、ゾロ。お前、海軍元帥って言ったらどんなイメージが

ある？」

「海軍元帥ー？そうだなあ……」

ゾロは適当にイメージを上げていく。

実の所、ゾロは海軍元帥の事を知らない。というか、一般人は普通、海軍元帥と言われても海軍の一番偉い人ぐらいの感覚で、接点があるでないから気にもしない。

したがって、ゾロの上げるイメージも、厳つい、だの厳しいイメージだの、大柄だの強いだのといったイメージだ。

全く間違っている訳ではないが、と前置きした上で、それでも同時にエース達は昔からの友人と仕事しろ、しないで喧嘩して複数の家をまとめて潰したとか、結構ジョークの分かる人とかを話せば、ゾロとしても『へえ』と思う事は多い。

「だからさ、実際に革命軍とは話をしてみるまでは俺らは何も言えねえ」

「アスラはCPの長官もしてるからな。一番革命軍の事も知ってると思うから、アスラが言ってた事を上げただけさ」

とはいえ、そのアスラも革命軍の詳細な情報は教えてくれなかったという。

それだけ危険視しているのか、それとも事前知識はなしで、自分の意志で判断しろという事なのか……エースとサボは後者だと判断している訳だが。

エースもサボも世間一般に流布されているような悪辣なイメージが本当の革命軍だとは思っていない。

本当にそうなら、これ程革命軍が世界各地で王国や帝国を陥落できる程の力を持つとは思えないし、一般市民が支持するとも思え

ない。何より、ゴア王国にせよ或いは世界政府にせよ2人は正義とされる組織の後ろ暗い面も見聞きしてきている。

一概に世界政府が正しいとは言えなかった。

「……まあ、いいさ。んで？これからどうすんだ？」

とりあえず、考えるのが面倒になったのか、ゾロはそう言った。といっても、たしぎを切り捨てるのでなければ、出来る事など限られている。

とりあえずは、しばらくこのまま投錨して、本当に革命軍が来る可能性があるのかを探ってみる事になった。……どちらに味方するかも考えつつ。

#### 【SIDE：たしぎ】

一方、たしぎは傭兵契約を行なった後、街中を歩いていた。宿舎に関しては、契約金とは別個に後で政府から支給されるので各自が宿を確保するようにと証明書が渡された。どうも、宿舎の問題らしい。急遽雇う事になったので、部屋の数が足りない、かといって野宿をさせる訳にはいかない、という訳でこういう形を取る事になったらしい。

これを見せれば、大抵の宿には泊まれるようになっていくらしい。まあ、基本的に革命軍の襲撃は夜が多いので、夜の警備が重視されており、彼女も宿には朝になってから戻る可能性が高かったが。

という訳で、たしぎも、宿を探して町を歩いていた。

無論、船に戻れば彼女の部屋もあるのだが、あんな出方をして、眠りに戻るの気が引ける。

町中を歩けば、汚れた印象もあるが、活気ある街並みだ。

そんな平和な光景を守ってみせると、改めて気合を入れた彼女だ

った。

そんな彼女の口から洩れるのはやはり愚痴だ。

(……なんで、平和を、こんな人達を守るのに力を貸してくれないんだろう)

海軍に対して、多少幻滅するような事があったとはいえ、そういう性格が変わるはずもなく、彼女の不満はそこにあった。

革命軍に関して、だが、戦乱もない国に戦乱を起こしているのは事実だ。

だが、何故それが成功するのかを彼女は考えた事はなかった。いや、きつとそれだけ多数の軍隊を使っているのだ、ぐらいに考えていたのだが……。

そうして、歩いていると小綺麗な宿が見つかった。

ここなら、大丈夫だろうと確認の為、宿に入る。

「いらっしやいませ」

笑顔で迎えてくれた店員に、確認の為、証明書を見せる。

「……………ああ、大丈夫ですよ」

そう笑顔で答えると、たしぎは部屋へと案内された。

彼女は別に千里眼でも、透視能力がある訳でもない。

ただ、少し強いだけの普通の人間だ。

……だから、たしぎが部屋に入ったのを見送った後、部屋の前から立ち去った案内した宿の人間が憎憎しげな表情で一瞬、彼女が案内された部屋を覗んだのを知るはずもなかった。



第97話・東の海の革命軍2（後書き）

暑い日が続きます

いや、本当に

100話が見えてきたが……何か記念にやるべきだろうか？

## 第98話・東の海の革命軍3

今回、賞金稼ぎなど対革命軍対策として雇われた人員に手当てされた許可証、表向きこそ後で国が支払いをするという事になっているし、そういう事になっている以上は宿泊させねばならないが、どうせ連中が支払う気などない事は予想がつく。

とはいえ、うちはまだマシな方かと主人は思い直して溜息をつく。自分の宿は小奇麗ではあるが、反面酒などは余り出さず、晩御飯など頼まれた場合でも量を限ってある。

結果として、男らはこの宿を敬遠している。逆に、酒場などと併用されている宿などは災難だ。

まあ、潰れると色々面倒だからと潰れない程度に金は支払われるだろうが……。

「……あのお嬢ちゃんも知らないんだろうな、うん」

如何にも世間知らずといった風情のたしぎの顔を思い返して、宿の主人は彼女に文句を言っても仕方ないと思い直した。

宿の主人という仕事柄色んな人間を見てきた。その自分の勤が、彼女が良く言えば真っ直ぐな、悪く言えば騙されやすい人間だと言っている。きっと彼女は国が支払うと言った話を踏み倒すなど考えもしないのだろう。

ふう、と1つ溜息をつくると宿の主人は仕事へ戻った。

【SIDE：エース】

「……やっぱ、この国腐ってるな」

3人それぞれで街へと繰り出して、少し調べればすぐ分かった。

色々な国があるが、兵士が威張ってる国って余りいい国じゃない。世界政府の海軍はどうなんだ？って思うかもしれないが、あれだって、上層部が腐ったらもつと酷い事になる、というか地方の支部とかになると目が行き届かないから酷い事になるのは、先だつてのローグタウンが如実に示している。

軍隊つてのはどう言いつくろつた所で、破壊の為だけの組織だ。生産性なんてものは、ない。

まあ、この世界では俺の本当の親父の死に際の言葉のせいで、大海賊時代と呼ばれる程海賊が多いから、海軍が規模がでかいのは仕方ないんだが……。

そついう意味では各国の軍隊がある程度の規模を持っているのも納得出来る。

けれど、軍隊なんて本来は民を守る為の組織だから、威張る理由はない。

民も軍隊をけなす必要はないけれど、というか、なければいいなんて言い切る人間はきつと今の現実が見えてない人だろうが、先程見た光景、飲み食いして軍隊という力でもって踏み倒すとかはそれ以前の問題だ。

ぶちのめしてやるか、とも思ったが、自分は所詮余所者だ。

その結果として、あの飲食店の差し金と思われたら、あの店に却って迷惑がかかるかとぐつと堪えた。

「……革命軍つて、やっぱそついう事なんだろうか」

エースは馬鹿ではない。

勉強は苦手だが、それと展開を読むというのはまた別問題だ。

言い方を変えるならば、学校の試験や資格試験の成績がいい事と、営業で成績を上げるのはまた別の問題、とでも言えばいいのか。



(革命軍が出てくる所をそう知ってる訳じゃないが、少なくともゴア王国は腐敗してた、この国も腐敗してる。そうして、革命なんてものを起こす以上は倒した後、王様も貴族もいなくなるんだから、民衆から受け入れてもらわないと国なんて成立しない)

じゃあ、どうやって民衆を味方にする？

答えは簡単だ、権力を表立っては握らないようにしないとイケない。

腐った王や貴族と同列に見られれば、当然民衆は反発する。

(……けれど、権力を欲しないという態度を取るにしても、何らかの目的なり利権なりはある筈だ)

お金がなければ組織は組織として成立しない。

自分達のグループは僅か4人(現在3人)の小グループだが、それでも航海するとなれば、金がかかる。

船だって整備しないとイケないし、消耗品は取り替えないとイケない。

食料に水といった必需品だけでなく、酒などの嗜好品も必要だし、幸い自分達は皆白兵戦型だから助かっているが、砲撃などを行なえば砲弾などにも必要になる。破損すれば修理代もかかる。

こうして島に着けば停泊料がかかる所もあるし、と、何をしても金について回る。それは革命軍とて例外ではないはずだ。

とはいえ、世界政府の海軍と今なら同じ部分もあるか、と自分を納得させる。

海軍は世界政府の予算から、その運営費が出ている。

革命軍も幾つもの王国を陥落させたのだ、そうした王国から多少なりとも資金の融通を受けている部分はあるだろうし、何らかの迷惑での寄付や、自分達自身による交易などもあるかもしれない。

だとすると、この国に革命軍が迫っているという可能性は決して低くない。

王や貴族を倒しても、それを民衆が支持する国、というならばこの国は正にその通りだ。

別に、エースは腐った王や貴族が倒れようと知った事ではないが……今回は仲間が関わっている。  
とはいえ……。

(どうするかね)

たしぎに今の推測を話した所で、今の彼女がまともに話を聞くとは思えない。

そもそも証拠がまるでない。

(っっていうか、俺は何がしたいんだらうなあ)

そもそも自分は、自分が何をしたいのかを見つける為に旅に出たはずだ。

しかし……。

探せば探す程に知る事が増え、知る事が増えればまた悩む事も多くなる。

と、そこまで至った所で頭を振る。

(違う違う、とりあえずは今の状況をどうするか考えねえとな)

そう頭を捻るエースだったが……。

「とりあえず、目先の事から考えつか。……後ろの奴出て来い」

そう言って、後ろの……先程からずっと後をつけて来る相手に殺気を飛ばした。

## 第98話・東の海の革命軍3（後書き）

とりあえず、100話記念としては100話は普通になりそうだけど、それ以外にIF編として、海賊になった場合の話を書こうかなと思つてます

多分、白ひげの頂上決戦が舞台？

原作は一気に加速

引つ張つてたルフィが何をしたかが遂に明かされて……しかし、フランキー怖いぞ、アレは！

そして、海軍にも大変革……はいいとして、コング元帥引退したのかと思いきや出世しただけか！？

そして、億越えのルーキーも既に死亡かそれに似た感じっぽい状態になったのが……黒ひげに襲われたのは、唯一今週号に出なかった、あの人なんだろうなあ……

## 第99話・東の海の革命軍4

【革命前日】

たしぎが、その日夕方早めに赴いた所、騒ぎになっていた。

どうかしたのかと確認した所、革命軍の噂を流し、実は自分達が革命を起こそうとしていた若手将校のグループが、その計画を事前に察知され、逆に上層部の命令によって、その会合の場に突入が行なわれたのだという。

たしぎも、一応警備に当たっている人間だ。

その場にいた他の雇われ警備と共に走り出し、現場に駆けつけたが、どうやら終わった後のようだった。

「っ……」

実の所、たしぎが人の死を見た回数はそう多くない、というか皆無に等しい。

確かに乱暴された、怪我をさせられた、という事はローグタウンでは頻繁に起こっていたが、ローグタウン内で騒動起こされると後の書類が面倒とばかりにヨウゴークが睨んでいた為に、案外ローグタウン内部での事件は限られていた。まあ、その分町の外で騒動が起きていた訳だが。

結果として、たしぎも海賊とやりあっても、命を奪うまでの戦いは殆ど経験がなかった。

それだけに反乱を起こそうとした将校らの死体が乱暴に運び出されて行くのを見ると、引いてしまったのだ。

とはいえ、既に終わった事だ。

何かしら違和感を感じたが、その時は分からなかった為に、立ち去り……後になってふと思い出した。

(……………そういえば、何故あの死んだ人達って笑ってたんだろう……)

ふと思い出した違和感の正体。

あの将校達の口元に浮かんでいたのは悔しさでも、苦痛でもなく……  
……笑みだった。

【革命前日某所】

「……………彼らは？」

「……………全員亡くなりました」

「そうか……………」

「覚悟の上です。警戒が緩まない連中を油断させる為の囷となる事を全員が志願して行なった事です」

「……………そうだな、彼らの遺志を継がねば。そういえば、例の件はどうなった？」

「国に雇われなかった賞金稼ぎ達ですね？大部分は、仕事があるから、というのが理由だったようですが……………先だつてはヒヤリとしました」

「ほう？」

「いきなりでしたからね。『後ろにいる奴出て来い』と……………エースと名乗った賞金稼ぎですが、まあ、お願いをした上で、どんな人

間が分らなかつたから、後をつけてしまった、申し訳ないです、と謝ったら、特に何ぞ」

「ふむ……まだ、見込みはある、か？」

「分りません。少なくとも勧誘はまだ時期尚早かと……とりあえず、町にいる間だけでも構わないのでという条件で子供達が巻き込まれたら助けてもらえないだろうか、というお願いに了承を返してくれた所を見ると、悪い人間ではないようではあります……」

「……善人が我々に味方してくれるとは限らんからな……まあ、いい。彼らが命を賭けて用意してくれた舞台だ。皆に改めて気を引き締めるよう伝えてくれ」

「はい」

#### 【革命当日】

その日が雇われ警備の最後の日だった。

革命軍がやって来る、そういう噂が流れたが故の警備の増強だったから契約も、それが噂と確認された場合か、革命軍を撃退した場合は契約終了と明記されていたし、元々日給だ。一日辺りの給金が良かった事もあり、何も危険な事をしないで稼げた額としては悪くない、と小金を稼げた事を喜ぶ者が大多数だった。

まあ、戦闘なしで終わってしまった事を残念がる者もまたいたのだが、そういう人間も戦闘手当を稼ぎ損ねた、といった風情であり、精々が『儲け損ねたぜ』と笑っているぐらいだった。

それでも、ねぎらいと称して、簡単ながら酒も食い物も出た。

貴族が食う物らしく、簡単といえど味が良かったので、皆喜んで口にしていたが……たしぎだけは、どうも周囲の雰囲気になじめず、

見回りと称して外へ出た。

「ふっ……」

結局、革命軍という話は偽りだったのか、そう思うとどこか残念ではある。

彼女の場合は、革命軍という存在自体に興味があったからだ。何故、平和な国に乱を起こすのか、聞いてみたかった。

（きっと自分達が国を支配したいとか、そういう理由なんでしょうけれど）

そう思いつつ、歩いていると、ふと兵士の姿が見えた。

そういえば、とふと思う。

昨日の捕り物のお陰で、兵士達にも褒美の酒が振舞われていると聞いている。

『今日の見回りの連中は運が悪いよな』

そう兵士達や将校も笑っていたのを思い出した。

そうすると、彼らは酒にありつけなかった面々なのだろうが……  
彼女はここで再び違和感を感じた。

何故だろう？

そう思った時、彼らの表情にあるのだと気がついた。

当たり前だが、堂々と仕事中に酒が呑め、美味しい物を食べる時に自分達は仕事をしなければならぬ、そうならば普通はくさる。真面目な人間だって1人や2人いて、彼らは真剣だとしても、人が複数集まれば全員が仕事に真剣で真面目である事などありえない。

だが、今の集団はいずれも真剣な表情だった。



何故だろうか……ふと気になり、たしぎは、彼らの後を密かにつけた。

彼女が尾行している事など気付いていないのだろう。

1人の将校に率いられた兵士の集団はやがて門の1つに辿り着いた。

この都市は、外周部に海賊や山賊の襲撃を防ぐ壁が、庶民と貴族を隔てる所にまた別の壁が、更に王宮にもう1つ壁が、という構成になっており、夜になるとそれぞれの門は閉じられ、朝まで開く事はない。

と、下の将校が手に持った明かりを動かした。

シャッターを使って、長く3回、短く4回。

少し離れて見ていた、たしぎは気付いたが、そうすると城壁の上からも同じように光が点滅した。

それを確認すると、将校と兵士達は門の詰め所へと入って行く。

更に、城壁の上で明かりが瞬く。

短く3回、しばらく間を置いて、更に3回。首を巡らすと、離れた所からも同じく明かりが輝いている。

(……あれ？光っている辺りってどれも門がある辺りじゃ……)

城壁の上に見えていた影はそれを確認するなり、城壁から下へと降りる塔の中へと入っていく。

そして……。

(……え？)

間もなく、城門が開いていくのが、たしぎには見えた。

(ど、ど、どという事？確か門は朝まで開けないって……)

だが、そんな事を考えていられたのもそこまでだった。  
武装した集団が次々と門から入ってきたからだ。  
彼らは、門を開けたと思われる兵士らと頷き合っている。

（まさか……本当の革命軍が、来た！？）

急ぎ、たしぎは胸元のホイッスルに手を伸ばしかけて……今日で  
終わりだからと装備品を返却した後であった事に気がついた。

こうなれば仕方ないと、気付かれないように警備詰め所に戻った  
彼女は、だが酒が食い物に仕込まれていたのであるう、痺れ薬によ  
って動けなくなっている男達を見つける事になる。

そして、革命の夜が幕を開ける。

第99話・東の海の革命軍4（後書き）

明日が100話……

一応100話記念予定では、もしアスラが海賊の道を行っていたら

……というIF物を予定していますが……

さて、問題は書けるかな？ 正確には書く余裕があるかな？

多分、荒筋みたいな展開の物語になりそう…… W

アップされなかったら、余裕がなかったかと思って下さい……

その場合は、ご容赦を

第100話・東の海の革命軍5（前書き）

本日はお休みだったので、少し早めのアップです

## 第100話 - 東の海の革命軍5

たしぎは激しい戦闘に巻き込まれていた。

既に防衛線はガタガタ。

革命軍は余程周到に準備していたのだろう。酒や食事に仕込まれたのは雇われ者だけでなく、正規の兵も同じ。まともに動けるのはごく僅か。

更には内部からも裏切りが発生した事による影響によって、そんな僅かに残った者も、そうした人間が出る事を想定して待機していた裏切り者達によって次々制圧されてゆく。

「はあっ……はあっ……」

荒い息をつきながら、たしぎは隠れつつ歩を進めていた。

狙いは革命軍の指揮官。

海賊もそうだが、頭を潰すというのは状況を混乱、上手くすれば逆転の一手となりうる手段だ。

実の所、この集団はそれぞれに戦術目標が与えられた上で、最終的な目標やその為の方法、どこまでやるかなど全て事前の手順が決められていた為に、革命軍の指揮官を討ち取った所で最早止まるはずもないのだが、そんな事をたしぎが知る由もない。

そうして、彼女が見つけたのが……。

(……あれ、なの?)

周囲とは明らかに異なる服装。

刀の発祥の地、ワの国風の服装を身に纏い、その手には刀。その拵えを見た瞬間、たしぎは頭に血が昇る。……普段の彼女ならばここまで瞬時に、という事はなかったかもしれないが、現状が現状だ。

ましてや、相手は指揮官、周囲の兵は指示を受け、一時その傍らを離れた……今が好機！

そう判断すると、たしぎは一気に駆け寄り、時雨を抜き放つ。

甲高い音がして、たしぎの時雨が受け止められる。

その相手の獲物は……。

「やはり……業物「深海」……」

「ほう、見ただけでこいつの素性を見抜くか」

ざんばら髪に、ワの国の羽織袴、その上に衣を引つ掛けている壮年の男性だ。

もつとも、今のたしぎに、そんな事を気にしている余裕はない。

「しかし、斬りかかってくるという事は……いや、見た目からして、雇われた賞金稼ぎの1人、という所か。彼らには大人しく眠っていてもらうだけのつもりだったのだがな」

はつきり言ってしまうえば、革命軍としては王族貴族さえ倒せれば、後の面々をどうこうするつもりはない。

賞金稼ぎらは雇われただけで、今後の付き合いも考えると無傷で解放した方がいい。

兵士らは頭がいなくなれば、敢えて抵抗しようとは考えないだろうし、下手に彼らを皆殺しにでもしようものなら、今度はこの国を海賊から守る盾がいなくなる。

極力、無傷で。

それが、王国打倒の為の鉄則だ。王族貴族以外にも多数の血が流れば、当然怨みも生まれるし、国力も下がってしまう。

とはいえ、たしぎには今は関係のない話だ。踏み込んで、斬りつ

ける。

それを相手が受け流し、体勢の崩れた彼女の刀を弾き飛ばそうとする。

しばらく双方打ち合っていたが、腕でいえば、革命軍の剣客の方が明らかに上だった。たしぎが戦えているのは、相手になるべく怪我をさせまいと無力化を狙っているからに他ならない。

それが分かるだけに、たしぎとしては悔しさを噛み締めざるをえない。

「あなた達は……」

だから彼女は声を出す。

打ち倒して聞く事は最早適うまい。

「何故、平和な国に乱を起こすの……！ 貴方達悪党がこの国を荒らすなら、私は……止めたい！」

悪党の手にした名刀を取り戻すと謳った所で、この様だ。

「……平和な国か」

それでも、相手も何か思う所があったのだろう。

会話に乗ってきた。

「ならば、聞こう。この国の何処が平和な国だというのだ？」

「？何を……」

問われた意味が、たしぎには分らない。

戦乱に怯える事もなく、海賊に悩まされる事もなく、民が剣を握

らずに暮らせる国、そのどこが平和な国ではないというのか。  
彼女からすれば、そう思う事でも、他者から見れば、また別の光景が見える。

「貴様は知っているのか？この国で一欠けらのパンがなく、飢えて死んでいく子供達の姿を！」

「……え？」

たしぎはそんな光景は見ていない。

たしぎが見ていたのは、精々表の一步裏道程度。  
更にその陰。

普通に訪れる人間は足を運ばないよう国の人間が注意を促している、入り込んだ場合は責任を持ってない犯罪者の巣窟とされている大規模なスラム街が、この国には存在する。

国の顔たる港から上陸し、表の店で食事を取り、すぐに雇われた彼女はそこでの、この国の顔を知らない。

「ぶくぶくに肥え太り、食いきれぬと箸すらつけられずに捨てられる食材の山を！」

「飢える我が子に一欠けらでもと、貴族のゴミ捨て場に忍び込んで、貴族のものに手をつけたと殺される親の姿を！」

だから、彼女はそんな事は知らない。

知らないが故に、ショックを受ける。

呆然とするたしぎに、尚も彼は事実という名の剣を叩きつける。

「貴様がそれを正義というならば、構わん。我々は悪でも構わん」



「だが、奴らの掲げる自分達の為だけの、腐った正義には断じて負けん！負けてはならんのだ！」

吼える相手に、たしぎは何ら反論出来ない。

彼の言う事を虚偽だと決めつける事は簡単だ。

だが、それが真実であつたのなら？

彼の語る声に虚偽は感じられない。そうして、ふと彼女は気付いたが、先陣こそ武装集団が取つたようだが、その後が続いて入ってきている人影は明らかに民衆ではないだろうか。

私服のまま、武器も包丁だったり、めん棒だったり、単なる杖だったりと色々だが、それでも長年の怒りを叩き付けんとはかりに我先にと貴族街へ、更にその先の王宮へと突入してゆく。

……つまり、自分が守りたいと思っていた人達に支えられているのは、むしろ革命軍なのではないか？

その王宮もどうやら内部呼応した者達がいたようで、既に突入を許しているらしい。

「あ……」

そんな光景を見て、自分の思いへの困惑と叩きつけられた真実が痛くて。

思わず、たしぎはへたり込んでしまう。

その様子を見て、男はそのまま彼女に背を向け、自身の役割を果たすべく歩み去った。

その背を追おうと思う気持ちは、今のたしぎにはなかった。

第100話・東の海の革命軍5（後書き）

遂に100話到達

……3ヶ月少々かあ

初めて書き出した頃が5月頭だったから、よく続いているもんだ

## 100話記念・IFの物語

「遊騎士ドーマ、雷卿マクガイ、ディカルバン兄弟、大渦蜘蛛スクアード……総数44隻！全て白ひげ傘下の海賊達です！」

歴史は僅かに姿を変え、けれどほぼ正史通りに推移する。違いはリトル・オーズJrの特攻がなかった事ぐらい。当人は他と歩みを揃えて、海軍の巨人部隊を相手どっている。

やがて、後方に控える白ひげの傍らにスクアードが現れる。そうして、叫ぶは自分達を裏切ったと伝えられた言葉。

白ひげ傘下の海賊の中でも古株、信頼度の高いスクアードの言葉に傘下の海賊達は……笑いを堪えていた。

「……なに？」

それ故に、センゴクは疑念を感じる。

嘗て、ゴールド・ロジャーによって船員を失った経験のあるスクアードならば、突然伝えられた真実に動揺するだろうと、そう睨んでの人選だった筈だ。赤犬が上手くやったのは、スクアードの叫びを聞けば明白、だが……。

一拍の間を置いて、白ひげ傘下の海賊達が爆笑を始めた。

「おお！本当に言われたのが、スクアード！」

「で、誰が言ったって？なに、やっぱり赤犬？よっしゃ！賭け当たり！」

「げえっ！俺、大穴に賭けちまったよ！」

彼らの反応に知らぬ者は呆気に取られる。

それは、一瞬白ひげに対して怒りを感じたクロコダイルとて同じ事。『一体何が起きた?』とばかりに珍しく目を見開いて、啞然とした顔を隠さないでいる。

ただ、1つだけはつきりしているのは、彼らの反応は明らかに海軍の策を知っていた、という反応。

それが分るだけに、策を知っている海軍側の中将以上の面々は齒噛みする。

「おんやあゝ?知ってたのかい?」

「予想つくだろうよい?ああ、それとも一つ」

白ひげ海賊団一番隊長マルコと対峙する黄猿も訝しげな声を発するが、その目の前でマルコが懐中時計を取り出し、指で摘まむようにして黄猿にその盤面を見せる。

「なあゝんのもりだあい?」

「すぐ分かるよい……3、2、1……ゼロ」

ゼロ、とマルコが呟いた瞬間、城壁の至る所から火柱が上がる。

海賊達はそこに近づいていなかった為に被害はなかったが、砲台についていた海兵達に多数の被害が出る。

「……!おい、センゴク!あそこは弾薬庫だぞ!」

「ああ……何故だ!何故こんな事が起きる!……壁をただちに起動させろ!戦線を立て直せ!」

セングクは急ぎ、崩れ落ちた壁を塞ぐ為にも壁の起動を命じるが、それは壁を動かす装置が随所で破壊工作に会っており、作動不可能に陥っている事を告げられる。修理には少なく見積もっても数時間、到底この戦いには間に合わない。

余りに白ひげに都合のよいこの状況に、疑念の声を上げる海軍側だったが、そこに1人の男が海軍側から歩み出る。

彼の纏うは正義のコート。

階級は支部中佐。

帽子に、セングクがかけているような黒縁の眼鏡。鼻の下にはゆつたりした髭を蓄えている。

「分つていれば……先手を打つ事も出来る、そう思わないかい？ セングク元帥殿？」

ニヤリと笑ったその様子に、海軍側も事情を悟る。そうして、それが我慢ならない者もいる。

「貴様が……貴様が裏切り者かあ！」

怒りの声と共に何時の間にか駆け寄っていた赤犬大将が赤く輝くマグマの拳を支部中佐に叩き込み……激しい蒸気と共にその体に大穴が開いた。

「……？」

その感触に訝しげな表情を浮かべる赤犬の前で、中佐はニヤリと笑った。

「……裏切ったとは酷いな？俺は最初から裏切ってなんかいないぜ？」

そう言いながら、胸に大穴が開いたまま、彼は帽子を取り、眼鏡を取り、それらを次々と地面に落とす。

髭を剥ぎ取り……どうやら付け髭だったようだ……それもまた捨て、最後にオールバックに固められた髪をぐしゃぐしゃと手櫛で乱す。

そこに現れたその姿は……。

「貴様は……！」

「白ひげ傘下の海賊の1人……オーケストラ海賊団船長『コンダクター』アスラ！」

そう、裏切つてなどいない。

何故なら、最初から彼は海賊なのだから。

「……貴様！どうやって……」

「今だからこそ」

赤犬の叫び声に静かにアスラは語る。

「今だからこそ、可能だった。海軍の目も世界政府の目も親父達の動向に完全に向いていて、普段は注視されている海軍本部内部への視線はまるでガラ空き」

静かに、けれどシンと静まった空間ではその声はよく響いて。

赤犬の足元にわだかまるマグマと触れ合い、アスラの足元に満ちる白銀の液体が蒸気を上げ、次第に自身と赤犬を包む中、静かにアスラは語る。

「世界中から万単位の海兵が集まる中、当然全員の顔を知り、全員の顔を覚えている者などいない。今、この時期だからこそ見知らぬ顔が島を歩いていても、海軍の制服を纏ってさえいれば不審には思われる事はない」

そう、見知らぬ顔が歩いていたらとて何だというのだ。

島1つだけではない、世界中から海兵が集まっている今のマリンフォードでは知らない顔がいて当たり前。故に海兵かどうかはその身にまとう服装だけが頼りとなる。

それに気付いて、互いに海兵が周囲を見回し、薄ら寒い表情になる。

気付けば、知らない顔が周囲に幾等でもいる事に気付いたが故にひよっとしたら、この中にまだ海賊が紛れ込んでいるのではないだろうか？そんな疑心暗鬼が生まれる事は避けられない。それに気付いたが故に海軍の上層部は苦い顔になる。

「世界中から集まっているが故に、マリンフォードの地理を知らず、この時期ならば見知らぬ海兵が本来は立ち入り禁止の場所に入り込んだとて、そう強くは咎められる事はない」

北の海から、南の海から、西の海から、東の海から。

世界各地の支部からやって来た海兵達は当然マリンフォードの地理を知らぬ者もまた大勢いる。だからこそ、間違えて迷いこんだとしても、そう強くは言えない。精々、次は気をつけるように言われる程度だ。

その意味する所に気付き、更に苦い表情になる者が多数。

今、壁が展開されない理由に気付いたからだ。……おそらくは、そうやって入り込んだ先で、目の前の海賊アスラは壁の動力部を破壊したのだろう。

情報を握って、味方に流し、味方の混乱を未然に防ぎ、海軍側の作戦を崩す。

指揮者……コンダクター。

情報を握り、先手先手を打って、戦局を優位に運ぶ者。

伊達にそう呼ばれてはいない、という事かと海軍側は改めて実感する。

「ああ、そうそうそれと……」

まだ、何かあるのか、と何を言う気なのかと戦慄する海軍側に向け、アスラは何気ない事のように口を開く。

「機械の兵士って、敵味方識別装置が逆になったらどうなるんだろうねえ？」

大多数は意味が分らなかった。

分らないまま、次の瞬間襲い掛かった光に蒸発した者が多数出た。分った者は戦慄した。それが意味する事を。

そして、それ故に次の瞬間襲い掛かった光に対応出来たが、それが海兵を薙ぎ払うのを止めるのが精一杯だった。

「あらら……これはやばい状況じゃないの」

青キジが呟くのもむべなるかな。

戦線後方、本来ならば壁で遮断した上で挟み撃ちにするはずだった海側から姿を見せたパシフィスタが、けれどその攻撃の矛先を海軍側に向けてくるのを見れば、ぼやきも出ようというもの。

あれ一台で費用は軍艦一隻分にも匹敵する。それだけの金がかけられた切り札の一つが少しの小細工で全てが敵に回ったと思うと、腹立たしくなる。



敵味方識別装置は海賊側に弄られないよう、一旦起動開始すれば弄れるような場所にはない。つまりは、停止するまで暴れまわるまま……海軍を敵として。

「最後に赤犬大将……知ってるかい？」

「……何をじゃ」

対峙する赤犬大将に向け、アスラは指を立てて、それを左右に振りながら、なんでもない事のように告げる。

「水銀の蒸気って猛毒だって知ってた？」

はつと周囲を見回す赤犬大将。

気付けば周囲には濃厚な蒸気が立ち込めている。ようやくと、周囲も先程までの会話が畏だった事に気がついた。

咄嗟に下がろうとするが……その前にアスラが距離を詰めてくる。億を優に超えるグランドラインをその縄張りとする海賊の1人なだけあって、そんじょそこらの海兵では全く歯が立たない。

「く……！」

咄嗟に周囲を赤犬大将が確認すれば、黄猿はマルコとの戦闘が続いている。

青キジは白ひげ海賊団三番隊隊長ジヨズとの交戦が続き、どちらも見た目こそ余裕だが、他に手が回せる状況ではない。

そして自分は……。

(拙い！)

猛毒の立ち込める中、完全に相手のフィールドで戦闘。  
それに確か、海賊アスラは……。

(防御においては自然系並！メタメタの実モデル水銀の能力者！)

時間が経てば経つ程、自身が不利に陥る。

悪魔の実の能力者として毒は効く。だからこそ、インペルダウン所長たるマゼランが恐れられている由縁でもある。そして、それは赤犬大将とて同じ事。

中将らが前に出るが、同時に白ひげ自身も前線へと出てくる。

王下七武海は、ミホークは花剣のビスタと、ゲッコウ・モリアはジンベエと、バーソロミュー・くまはオカマ王イワンコフと交戦中、ドフラミンゴは水牛アトモスに対して優位に戦闘を進めていたが新たに白ひげ海賊団十六番隊隊長イゾウが割り込んだ事により、振り出しに戻った。ハンコックはやる気がないので、攻撃してきた者達に対してのみ反撃している。

ここで赤犬は覚悟を決めた。

本来ならば、防御壁を展開の後、青キジが凍らせた湾内を赤犬が砕いて足場を奪う予定だったが……最早、そんな余裕さえない。故に、敢えてアスラを無視し、背を向ける。

「俺を無視するとは余裕だな！」

背後から覇気を纏った一撃が叩き込まれる。呻き声を上げながら、だが、赤犬大将は己の役割を果たさんとする。そもそも、赤犬はスクアードの演技に気がつく事も出来なかった。あの時、気付いていれば、また別の対応もあったのではないかという思いがある。

「大噴火！」

炸裂した巨大な拳が火山弾となり、湾内に降り注ぐ。

その光景を確認して、赤犬大将は反撃に戻る。

海軍は世界の秩序の象徴、正義を背負うもの。ここで敗退する訳にはいかない！

結論から言おう。

白ひげ海賊団は二番隊隊長エースの奪還に成功した。

救出したのは、白ひげ海賊団の援護を受けた、麦わらのルフィ。

これに対して、海軍側も反撃に移ったが、既に毒に犯されていた赤犬大将は満足に動ける状態ではなく、黄猿はマルコに足止めされた。

足止めされていないければ、レーザーによる攻撃が可能だった筈なのだが……。

白ひげ海賊団の旗艦モビーディック号らを沈めたものの、肝心要のエースの処刑に失敗し、白ひげ達には遺体さえ残さず配下の海賊団諸共逃げ切られた。

誰が見ても、海軍側の敗北だった……。

この時、黒ひげは近くまで来ていたものの、白ひげが勝利して、離脱に成功するとみるや、自身が割り込んだとしても無駄に戦力をすりへらすのみと判断して、離脱。またの機会を待つ事にした。

赤髪は自身の出番がない事に加えて、ルフィが活躍していた事を喜びつつ、姿を見せる事なく同じく離脱。

激震が起きたのは、この戦いの後の海軍側だった。

戦争終結後、敗北の責任を取ると称して、海軍元帥センゴク、猛毒に犯され軍務の継続が困難になった赤犬大将、更にはガープ中將が辞任を表明する事になる。

世界は白ひげの力を改めて目の当たりにすると同時に、海軍への

ひいては世界政府への失望へと繋がり、新たなうねりが生じてゆく事になってゆく。同時に白ひげが、『一つつなぎの大秘宝』、ゴード・ロジャーの財宝は実在すると去り際に言い残した事によって、海賊もまた活発化。世界各地の海賊はグランドラインを目指す事になり、皮肉にもこれによって世界各地の海の治安は改善される事になった。

また、当初熱意をもって進められていた海軍の兵器パシフィスタに関しては、この戦争での印象が余りに悪かったのだろう。永久凍結される事になる。

世界は尚も動き続ける……。

## 100話記念・IFの物語（後書き）

という訳で、こんなのに仕上がりました

原作見てて、潜入工作はしないんだろうか？

とか、原作知識あったら、潜入した方がいいんじゃないか？と思って書いてみました

ちなみに、アスラの海賊の立場としては無人島にやって来た海賊に拾われ、やがて船長に

白ひげの傘下となり、親父として慕いながら頂上決戦でアレコレと策動

こんな所です

海賊団の名前とかに関しては、牙王海賊団とか、銀虎をそのまま使おうかと悩みましたが、敢えてわざとらしい名前に変更しました

こうした設定の為、冒頭の船の数も原作の43隻から1隻増えています

## 第101話 - 東の海の革命軍6

翌日。

ラフォント王国は打倒され、ラフォント民主王国となっていた。変わっていないのでは？と名前だけ見れば思つかもしれないが、これには訳がある。

国王自身は処刑されたが、その孫の赤ん坊が名目上の王位にある。無論、実権などは欠片もなく、象徴としてのみ君臨している。周囲の人間も、あくまで赤ん坊の世話の為につけられた人材であり、将来的には共和制の感覚を持つべく、教育が施されていく事になるだろう。

面倒臭い話だが、これも世界政府に『あくまで王族同士による騒乱ですよ』と釈明する為の口実だ。

世界政府も分かっているが、名目は立っているので多分、手は出せまい。

で、実権は、といえば、これは民衆によって構成される議会が握る。

「……って事になってる訳だ」

「……………」

サボが集めてきた情報に、たしぎはじっと俯いている。

一晚。

たった一晚で、それまで正義の側にあった王族貴族が悪に転落し、悪であった革命軍が正義になった。

昨晚の段階で、密かに革命軍の側に加わって、たしぎを探していたサボとゾロが、茫然自失となっていた彼女を発見して連れて帰って来てから、たしぎはどうも様子がおかしい。

ちなみに、エースが行かなかったのは、事前に受けた依頼通り騒然とする街中で子供達がゴロツキなどに絡まれたりしてるのを助けていたというのもあるが、彼の能力は目立つから、下手に革命軍に加わっている所を見られたりして、厄介な事になるのを避けた為だった。

「しかし、アスラが言ってた意味がやっと分ったな……」

世界政府と革命軍は表と裏。

確かにそうだ。

聞くのと目にするのでは、実感も異なるというものだ。

「うん？」

そんな時だった。

扉がノックされたのは。

ここは、町の宿の1つだ。とはいえ、たしぎが泊まっていた宿屋ではない。政府という支払い先がなくなった事から、正式に代金を要求する宿も増えた。

一時はそれで混乱したのだが、まあ、言ってる事はもつともだ。多少形は違えど、雇い主が破産したのと同じという事もあり、割と素直に払った人間が多かった。中には素直でない人間もいたが……そういう奴に対しては、そういう対応方法がある、という事だ。たしぎも同じように請求を受けた立場だが、彼女の性格からして文句を言うはずもなく、すんなり支払っていた。

ただ、さすがに政府に雇われていた、という状況は現状では余り嬉しい立場であるはずもなく……エース達の所に連れて来られていた。こちらは元々町の人間、ひいては革命軍に雇われていただけあって、何の問題もなかったからだ。

「誰だ？」

『ああ、すまない。先だって子供達を守ってくれとお願いをした者の使い、とでも言えばいいのかな？』

ああ、と納得した顔になったエース達の傍で、たしぎがその声に驚いたように顔を上げた。

そうして、開けられた扉の向こうにいた姿は……たしぎの想像通りの姿だった。

ワの国の羽織袴姿に、肩から衣をかけた格好。腰には業物「深海」。

あの時、たしぎに王国の素顔をぶつけてきた当人だった。向こうも気付いたのだろう。『おや？』という表情になった。

「彼女は？」

「ああ、俺達の仲間なんだがな……まあ、こいつだけは政府に雇われた側に入ってたからな……知り合いか？」

「昨晚の戦いの折に少々ね」

びくり、と震えるたしぎ。

ちらり、とその様子を他の3人が伺う。

実の所、サムライの腕の程は少なくとも、たしぎよりは確実に強い、と3人は判断していた。となれば、たしぎが無傷で帰ってきた時点で、相手の人柄は大体想像がつく。

血の匂いは消せない。

けれど、人斬りにまでは至っていない。

いや、目的を定め、誰かに剣を捧げた剣豪か、その辺だと見ていた。



「まあ、昨晚の様子から大体想像はつく。きっと彼女は疑わなかったんだろっ？王国側が正しいと」

事実その通りだったから、たしぎ以外の3人としては苦笑するしかない。

少し調べれば、王国がどんな国かは分かっただろう。

エースやサボはゴア王国での実体験があるから、素直にラフォント王国の言を信じられなかったが故に、自分達の目で確認しようと思ひ、その上で考え行動した。

実際、たしぎが帰ってきた時、彼女がスラムつてのがあるんですか？と聞いてきたので、サボが「ある」と答えた所、たしぎはそのまま黙り込んでしまった。

とはいえ、サボからすれば、スラムも、嘗て住んでいたグレイタ―ミナルも大差ない。

そして、スラムには互いに助け合う人の情があった。

……まあ、少し油断すれば、財布も何もかも消えてなくなるような場所ではあるが、そこは実地の経験者だ。巧みに相手の行動を逸らしていれば、見た目はともかく、すぐに相手もご同業と見て、手出しは止まっていた。

「さて、それじゃああなたは革命軍の人間か？」

「少なくとも、その使い程度の役割はあると思ってもらっても構わない」

ズバリ直球で尋ねたエースに対して、サムライは自分がそうだとは断言せず、けれど関係はあるとほのめかす。その答えにニヤリとエースとサボ、それに 敢えてサムライとでも呼んでおくが 彼が笑う。

たしぎは未だどこか呆然としているし、ゾロはと言えば、自分に

は理解不能とばかりに完全に腕を組んで壁に寄りかかり傍観者となっている。

「で？俺らはあんたらのお眼鏡にかなったのかい？」

大体彼が接触してきた理由の想像はつく。

先だつての依頼の時の反応、更に昨晚の行動。そのあたりから多少の検討はつけたのだろう。

「ふむ、想定済みか……やりにくいな」

サムライも苦笑している。

「では、こちらも率直に言おう。革命軍に手を貸して欲しい。世界政府の横暴を止め、民衆の手に世界を取り戻す為に」

第101話・東の海の革命軍6（後書き）

当人、名乗りません

まあ、見た目はサムライですね、革命軍の人W

名前は次回

今後、ちよこちよこ出す予定でもありません

第102話・東の海の革命軍7（前書き）

話を書いていたはずが気付いたら朝6時だった

はい、寝落ちです

## 第102話 - 東の海の革命軍7

「折角のお誘いですが、お断りします」

エースの言葉に、サムライはだが、笑顔のまま『そうか』とだけ答えた。

どうやら、ある程度予想はしていたようだ。

「その様子だと予想してたか」

サボの言葉に、隠すような事でもないとはかりに頷く。

「少なくとも、ベラベラと喋るような性質ではないと判断したのだがね？ただ、疑問に思ったのは、君達の行動だ。……王族貴族が雇うのに加わってれば、金になっただろうに、何故参加しなかったのか、と思ってるね？」

ああ、成る程、と頷いた。

確かに、疑問に思われても仕方ないだろう。実の所、暇な殆どの賞金稼ぎはあの募集に参加した。

当然だろう、普通は賞金稼ぎとてそんなに余裕はないから、金は欲しい。

しかも、雇い主は王国。権力で踏み倒される危険はないではないが、そこまで切羽詰っている王国ではない、いや、なかった。

「最初は何かしらの目的があるのかと思った。そう思って、誘いをかけてみたのだが……他の者と違って、君は受けてくれたからな、どう考えても一銭にもならないお願いを」

はつきり言ってしまうえば、エース達が引き受けたのは、たしぎの事があったのと、懐の暖かさのお陰だ。

元々、エース達はその実力自体は海軍本部で鍛えられていただけあって、東の海の基準に措いては桁外れに強い。

つまり、普通の賞金稼ぎであれば、自分で勝てる相手かどうかをまず見極めねばならない。勝てるからといって、賞金のかかっていない相手を倒しても意味はない。

これに対して、エース達は基本、狙う相手をいちいち選ぶ必要が余りない。

賞金がかかっているかどうか、ほぼその程度だ。

さすがに、『首領』クリークのような艦隊規模の戦力を有する相手では問題があるが……。

「次に考えたのは、何かしら目的があるのかと思った、この国に留まる事にね……仲間の為だけではなく」

たしぎが仲間である事は既に把握していたのだろう。

ただ、それ以外、例えば革命軍を探るといった動きがあるのでは……そう予測していた訳だ。

「だが、それもなかった、純粹に仲間の為に行動していたようだったからね……」

「そうだなあ……」

ちらり、とサボと互いに目を合わせる。

『言ってもいいか？』『構わないさ、隠しても仕方ない』そんな遣り取りを無言のままに交わすと、エースは口を開いた。

.....

「そうか、成る程、ゴア王国のな」

エースが語ったのは嘗てのゴア王国の記憶、『不確かなものの終グレ着イターミナル駅』の最後の思い出。

無論、グレイターミナル自体はまたすぐ再生した。

あの国がゴミを捨て続ける限り、決してなくなる事はない。なかった。

サムライ自身にも思い出のある国だ。

あの時、ドラゴンの旗艦に乗っていた折に聞いた、ゴア王国の貴族の子供の話、『貴族に生まれた事が恥ずかしい』、にはシヨックを受け、また同時に嬉しくもあった。まだ、そんな貴族が残っていた事に。

そして、ドラゴンが炎を吹き飛ばした折に、空から舞い降りた人影。

海軍本部中将アスラ。

確かに、彼がゴア王国に滞在しているのは知っていたが、まさかあんな所に突如現れるとは予想だにしていなかった。

一戦交えるのも覚悟したが、少しばかりの会話の後、現れた時と同じように空へと舞い上がり、立ち去った。

後で、あれが海軍の使う武術、六式の1つ、月歩と呼ばれるものである事を知った。

無論、サムライは知らない。

目の前の相手こそが、その貴族の子供である事を。

目の前の相手が、アスラ中将に育てられた人間である事を。

知らぬままに、彼は1枚の紙切れを差し出した。

「こいつは？」

「連絡先だ。まあ、縁があったらそこに連絡してくれ。例えば、革命軍に入りたい、とかな？」

エースの、『いいのか？海軍に通報するかもしれないぜ？』との言葉にもサムライは動じなかった。

サムライが言うには、その連絡先自体は自分が何を受けているのかも知らない、一般人なのだという。

ただ単に、金で次へと『連絡があった』という事を伝える役なのだとか。

この辺はさすがに、革命軍も世界政府に敵対する側だけに徹底している。

複数の、お金を貰って仕事をする何でも屋的な人間に、『この番号で連絡があったら、この番号にそういう連絡があったという事を伝える』という仕事を依頼し、更にそこから複数の経路を通じて伝達を行なっている。

が、実際にはその全てを追跡していつでも最後はただ、書類がまとめられているだけ、という意味のない場所へ導かれるようになってる。

細かい点はサムライ自身も知らないが、この辺も下手に情報が洩れないような仕掛けの1つであったりする。

「何か聞きたい事があれば、答えるが？まあ、答えられる範囲だかな」

その言葉に、ふと顔を上げた人間がいる。たしぎだ。



「……なら、1ついいですか？」

急に口を開いた事で、全員の視線が彼女に集中する。

「……革命軍は、本当にそこまでしないといけないんですか？今、世界は海賊さえいなければ平和だって思ったのに……力で政府を打倒しないとイケないぐらいなんですか？」

その問いかけに、サムライ　ヘイゾーは顎を撫でる。

確かに、それは革命軍の原点だ。

顔を改め、ヘイゾーはその事　たしぎの問いについて語り始めた。

第102話・東の海の革命軍7（後書き）

サムライの名前、最初はリヨーマにしようかと思いました

まあ、原作のリユーマの子孫とかそういう事で……

ただ、壮年の男性ってイメージが名前のせいか、わからなかったんですよね……

第103話・東の海の革命軍8（前書き）

たしぎ、って平仮名だと漫画はともかく、小説だと書き辛いですね  
……

## 第103話・東の海の革命軍8

「そもそも、世界政府は正義だと思うか？」

ヘイゾーはたしぎに、そう問いかけた。

「……正義じゃ、ないんですか？」

海軍が正義を背負うのは有名な話だ。

確かに、ローグタウンのヨウゴーク大佐のようなケースもあるのは事実だ。だが、同時に新たに着任したヒナ大佐のような相手もいるし、そもそもヨウゴーク大佐が間違った事をしてしまうと知るや、海軍上層部は即、彼女らに味方してくれた。ヨウゴーク大佐が抵抗したものの、特に問題もなく終わったのはその点が大きい。

「海軍も個別に見れば、正義をそれぞれが持っているかもしれないが……少なくとも、世界政府の上層部はそんなものは持っていない。世界政府によって苦しめられている人達がどれだけいると思う？」

たしぎには、そんな事を言われても想像もつかない。

反面、エースらには多少知識がある。

「世界政府じゃなく、天竜人じゃないのか？」

「そうだな、一番最悪なのは奴らだ……」

天竜人、それにはたしぎやゾロは首を傾げる。

存在を聞いた事ぐらいはある。

だが、その姿を実際に見た者や、どういふ事をしているのかを知る者は東の海ともなれば殆どいない。極稀に、いずこかの国に視察で来るなどして、1人や2人の天竜人を見る事はある。

無論、シャボンディ諸島などであれば、また話は別なのだが。

それで、サボが代わりにどんな連中かを簡単に話す。

気に入ったからと人妻であろうといきなり連れ去り、夫が勘弁して欲しいと嘆願すれば容赦なく殺そうとする。

間違つて果物でも踏み潰したりすれば、果物を売っている人間を不愉快にさせたと殺そうとする。

本来、奴隷を保有してはいけない事になっているが、当たり前のように奴隷を引き連れ、人を牛馬の如く扱い、飽きれば殺す、運が良ければ、改めて奴隷売り場に転売される。

もし、彼らを傷つけでもすれば、海軍大将がやって来る。

「そんな……」

「おいおい……無茶苦茶だな、そりゃ」

たしぎは絶句、ゾロは呆れ果てて何も言えない、といった様子だった。

嘘だと言って、という願いを込めて、たしぎはエースやハイゾーを見るが、真剣な表情で頷きを返すのみ。

実際、全て事実なのだから否定のしようがない。

「この東の海にもテキーラウルフと呼ばれる巨大な橋がある。…

…もう、700年も建設が続いている橋だ」

「はあ？」

700年、口にすれば簡単だが、それでは何世代もかかる。

「……一体何の為に？」

「分からん。特に目指す先もない……ただ、世界政府の命令で作り続け、倒れた人間は次々とあの世行きだ。無論、単純な犯罪者もいるが、ただ世界政府に加盟しなかっただけの国の人間が奴隷労働者として大勢働かされている」

世界政府の闇、という奴だ。

どこの組織でも、闇に相当する部分はある。革命軍とて例外ではないが、世界政府が問題なのはある意味現在世界の大半の国で採用されている王制にあると言ってもいい。

世界政府もまた、天竜人を王とした王制と言えるからだ。

王が優秀な人材な時はいい。

アラバスタ王国がそうだが、民の事をきちんと考えられる優秀な王に率いられた国は権力を集中させる事による意思決定の早さなど利点も多数ある。

だが、生憎世界政府が成立してからおおよそ800年。

世界の国の王はその大半が腐り切っている。

小さい頃から、絶対の権力の元、甘やかされて育てば、ある意味当然なのだ。

政治は結局の所、利点と欠点が存在する。

民主政治とて衆愚政治という言葉が存在するように良い事ばかりではないが、ただそうした事を考慮しても、現在の制度が制度疲労を起こしているのは明らか、少なくともそう考える人間が増えている。

そもそも、革命軍がこれだけの規模になったのは、そう感じている人間が多数いたからに他ならない。

「これらを聞いても、まだ、世界政府が正義だと思えるか？」

「……………」

たしぎとしては沈黙せざるをえない。

「だけど、革命軍が頑張ったら、世界政府よりいい世界が出来る  
とも限らないんだよな。ただ単に世界を混乱させました、で終わる  
可能性や、王様がいなくなったら国が崩壊した、って事だつてある  
んじゃないか？」

だが、同時にサボが冷静に言う。

それもまた事実だ、とヘイゾーは告げる。

未来は誰にも分からない。

革命軍がただ単に世界を混乱させただけで終わるのか、それとも  
世界政府と世界を二分するような、少なくとも世界政府が無視出来  
ないような、戦うならば世界政府としても相当な覚悟を決めねばな  
らないようなもう1つの世界政府とでも呼ぶべき存在となるのか、  
或いは世界政府に完全に取って代われるのか……それは誰にも分か  
らない。

「私が確信を持って言えるのは、『我々革命軍は今より良い世界  
を作るべく動いている。少なくとも中核にある者達はそうだ』、そ  
れしか約束出来ん」

「いんや、上等だと思っぜ。下手に取り繕ったりするよりよっば  
どいっ」

ニヤリとエースは笑った。

綺麗ごとだけで塗り固められた組織はむしろ、その下にろくでも  
ない素顔を隠し持っているものだ。

「ただ……俺はまだ、世界を見たい。俺が知ってる世界は殆どが伝聞だ。本当に世界はそこまでいってしまってるのか、例えば血反吐を吐いても……場合によっては親しい人と敵対する事になってでも成し遂げないといけない事があるのか……俺はそれを自分の目で確かめてみたい。だから、あんたの誘いには今は断らざるをえない」

そう語るエースの目はどこか遠くを見詰め……だが、真剣だった。エースを引き取り、育ててくれたのは確かに海軍中将であるガープであり、アスラだ。

その縁で、今の海軍の中枢を為す人達には本当にお世話になった。海軍元帥センゴクしかり、海軍大将であるサカズキ、ボルサリーノ、そしてクザン。他の14人の本部中將らもそうだ。

だが、片時も忘れてはいない。父であるロジャーはともかくとして、母であるルージュを追いつめ、死に追いやる事になったのも、また海軍であり世界政府だ。

以前と異なり、世界政府や海軍を単純に怨んではいけない。

だが、個別にはともかく、組織としては許しきれた訳でもない。エースが世界をその目で見て回りたいと願ったのはそこもある。ずっとマリンフォードにおいては見えないものがある。外から自身自身の目で見詰め、そして自分の未来を決めたい。果たして、自分は母の事にけりをつけて、世界政府の内でもやっけていけるのか。

或いは……。

「だから、正確には断る、じゃない。保留だ。だから、この連絡先は預からせてもらう……こんなんでいいかな？」

「十分だ」

エースの言葉に、ハイゾーもにこりと笑って頷いた。



既に決意を固めているサボは黙ってエースの言葉に頷き、ゾロは考え込み、たしぎは内心で決意を固めていた。

自分も船長に負けまい、と。

そうだ、何を悩む必要がある。

分からないのなら、見て、調べ、仲間と話し合い、考えればいい。何も今、全てを決めなければならぬと決まってはいいい。

そう決意を固めると、たしぎは幾度も頷いていた。

その翌日、エース達は出航した。

目立つし、忙しいだろうから、とヘイゾーの見送りも断ったその船上には、この島に来た時同様4つの人影があった。

## 第103話・東の海の革命軍8（後書き）

東の海の革命軍、これにて完

次回は、再びアスラへと舞台がしばらく戻ります

無論、エース達のお話もまだまだ続きます

ちなみにヘイゾーは感想で指摘された方がいましたが、正にその通り  
鬼平こと長谷川平蔵から取ってます

私、鬼平犯科帳好きなもので（主に原作の小説が）

## 第104話 - 邂逅

アスラの旗艦メルクリウス号。

この船は、以前の旗艦マーキュリー号とは根本的に異なる。

以前のマーキュリー号は速度より搭載量、見た目より性能重視の一本槍で、大型で無骨な優美さの欠片もない、だが使い勝手に関しては折り紙つき、という船だった。

これに対して、メルクリウス号は見た目はまるで軍艦らしくない。海軍のマークとでも言うべき模様やマリーンの文字さえ入っていない。代わりに、細かな彫刻や優美な船体を有している。

それも当然、この船はむしろアスラの世界政府の外交官としての役割を果たす為の船だからだ。

したがって、海軍の高速戦艦というよりは、世界政府の外交船に戦艦並の武装を施したものと考えた方がいい船だ。

まあ、何故こんな事をいきなり書いているかというと、襲撃を受けているからだったりする。

「九尾 枝垂桜」

伸びた銀の尾が一度幹を構成するかのよう上空に絡み合いながら上昇し、そこから枝のように枝分かれして広がった尾が船の周囲に展開、砲弾を受け止める。

硬質な金属ではなく、液体の水銀であるからこそ砲弾はその表面で爆発する事なく、受け止められ、処理される。

さすがに防御に回しながら、同時に攻撃という事が出来る程ではないが、可能だったらこの砲弾を投げ返したい所だろう。

「……海賊か」

「この船、見た目は戦艦というよりは豪華客船だからな」

と、スモーカーが葉巻を何時ものように啜えたままアスラの声に  
応じる。

そう、どうしても船は見た目で判断される。

世界政府の船ではあるが、自分はいくまで海軍本部中将だ、と主張したいアスラが世界政府外交官としての旗を掲げるのを嫌う為、結果として海軍とも世界政府とも分かるものが上がってない立派な船だけが残る訳だ。

「せめて、海軍の旗あげりゃいいだろうによ」

「……しょうがないだろう。今回は外交官の仕事で赴かないといけなくなつたからな」

だから、世界政府役人としての旗ならともかく、海軍本部中将ではないけない。

この辺軍人と文官での色々ややこしい駆け引きがあつたりする。

ただ、元々はアスラが外交官となつたのは、建前というか海軍での仕事の関係上だった為だ。それが、こうして外交官をやらされる事になつたのには理由がある。

といつても、大した事ではない。

ただ、単に訪れる場所が、新世界なだけだ。

新世界。

グランドライン後半の海をそう呼ぶ。

上手い例えではある。

グランドライン前半の海を、新世界を訪れた者は口を揃えて「あの海は楽園だった」と言う。

それだけ、グランドライン後半の海はその様相を変える。  
正に、新世界と呼ぶに相応しい。

無論、海軍の戦艦はこの海にも対応しているし、海軍本部中将クラスならば問題はない。多分。

逆に言えば、余り一般人レベルが行きたいような場所ではなく、かくしてアスラに押し付けられた訳だ。

(……とはいえ、断る事も出来る話ではあった)

世界政府とて、アスラの忙しさや海軍における役割は理解しているから、無理なら無理として別の人員を派遣する予定ではあった。

ただ、問題は……。

(……クロコダイルの野郎、新世界に拠点を隠していたとはな)

そう、バロックワークス B Wとの兼ね合いだ。

バロックワークス

B Wの拠点は旧来のものとは別に何処かに重要な拠点が隠されていると見られていた。

理由は単純。

密かにアラバスタ王国にダンスパウダーが持ち込まれている可能性が高いとの判断をCPの情報分析部門が出したからだ。

今回は首都に絞って持ち込み、王への不信感を煽るのではなく、複数の箇所にて分散して実行されている可能性が高く、しかも移動を繰り返しているらしく、そのお陰でなかなか捕捉出来ずにいた。

サイファーボール

そこで、CPとしては、そもそもの大元、すなわちダンスパウダーの持込方法が製造元のいずれかを潰す事を狙った訳だが、ここで重大な問題が発覚した。

まず、1つ目は持込方法。

どうも、クロコダイルが自分の船を使って運び込んでいるらしいのだ。

確かに何者かに勝手に積み込まれていたと下っ端に責任を押し付けて切り捨てたとしても、自身に火の粉が降りかかる可能性は高い、というか燃え盛る可能性も高い。

だが、反面王下七武海の一角であるクロコダイルの船や荷物を世界政府の人間だからといって検査する事は出来ない。こちら辺は外交官特権に近いものがある。

しかも、何ら証拠はない。

あくまで、状況的にクロコダイルがBWの黒幕と仮定した上で、その活発な行動や持ち込み方法が不明なダンスパウダーの事などから、『そうである可能性が高いと思われる』と判断しただけの話だからだ。

この時点で、持込ルートを潰すのは実質的に放棄された。

そもそも、クロコダイルが関わっている情報が把握出来れば、潰す以前にクロコダイルを堂々と正面から追求出来る。

次に製造元だが……こちらの問題が場所だった。

新世界。

確かに、クロコダイルもまた、新世界で活躍していた海賊だが……新世界にダンスパウダー製造工場を置くとは思わなかった。

理由は単純で、行って帰って来れる者が物凄く限られてしまうからだ。だが、それをクロコダイルは自身に関わるという大胆不敵にも程がある方法でクリアしてのけた。

さて、CPとして潰したいのは山々なのだが、何しろ重要な戦力であるCP9はそれぞれに動けない者が多い。

何とか、やりくりして、ジャブラは世界政府の警備部門の人間という事で乗せる事が出来たが……他は無理だった。

アスラ当人はというと、こちらも理由が必要だった。

まさか、何もなしにぶらっと新世界行ってきます、という訳にはいかない。かといって、状況証拠だけでダンスパウダー作ってそうだから行って潰してきます、と言って出かけられる程アスラの職務

は軽くない。

クロコダイルが絡んでいる、と言えれば納得はしてくるだろうが、それを納得してもらおう為の確たる証拠という奴がない。怪しい行動を取っているというだけならば、所詮、王下七武海は海賊。怪しい行動なんて誰もが取っているから、クロコダイルを特に指摘する理由がない。

どうしたものか、とまっている所へ舞い込んだのが今回の外交官としての派遣という訳だった。

「まったく……この忙しい折に……だが、まあ……」

放置しておく訳にもいくまい。

そう思いながら、向かってくる海賊船にアスラは視線をやった。

新世界といえど、全てが億を超える海賊ばかりではない。

確かに、下限は相当に上昇しているが、それでも原作の茶ひげが8000万ベリー越えだったように、或いは赤髪の新入りロックスターが9400万ベリーだったように、億に届かない者はいる。

今回の相手もそうだが、だからといって見過ごす訳にはいかない。

（まあ、白ひげらといきなり出くわして面倒事に巻き込まれるよりはマシか）

そう思ったアスラの目の前で。

いきなり海賊船が逃げ出す動きを見せた。が、次の瞬間襲い掛かった津波によって叩き潰された。

「……おいおい、ありゃあなんだ？」

スモーカーが思わず呟くぐらい、とんでもない光景だった。

「中将！新たな船が見えます！……あれは！？」

「口に出してないのに、本当になるとは……思うだけでもいけな  
いのかね」

見張りの叫びに、しかし既に誰が来たのか理解していたアスラは  
思わずぼやいた。

近づいてくる船は白い鯨を模した船首を持つ巨大な海賊船。  
世界最強の大海賊、白ひげの船、モビーディック号だった。



## 第104話 - 邂逅（後書き）

本日よりしばらくアスラ編に移ります

予定ではしばらく続いた後、今度はエース達に戻る予定です  
白ひげとアスラですが、お互い名前は知っていますが、実はまだ実際に会った事ありません

赤髪はロジャーの船の時代とかに知り合ってたんでしょうけどねえ、  
海軍中将と世界最強の海賊じゃ接点がないです  
ちなみに、赤髪は例外

## 第105話・対話

「中将、どうされますか？」

「……とりあえず、海軍旗と中将座乗旗を上げる。それで勘違いによる戦闘は避けられるだろう。もつとも……」

接舷の準備はしておいた方がいいだろうな。

艦長である大佐の問いに、アスラはそう答えた。

「ああ、乗組員には間違っても攻撃なぞさせるなよ？危なっかしい奴は大砲から引き剥がしておけ。以上徹底しろ」

念の為に、と付け加えた。

結果から言えば、その通りになった。

確かに攻撃を受ける事はなかった。

だが、白ひげのモビーディック号は海軍旗が揚げられても平然と接近し、メルクリウス号の隣に船を泊めた。

メルクリウス号もそこで振り切るなどという真似をせず、速度を合わせ、双方見事な操船を見せた。

こちら辺は海軍と海賊、その頂点に位置する操舵技術を持つ者同士在意地と意地のぶつかり合いと言えた。あいつらには負けてなるものか、と。

「……さて、それではお邪魔するとしよう」

「……あんたが行くのかよ？」

海軍の方から海賊の船に出向くのはかまわないのか？言外にそん

な意味を込めて、スモーカーが言うが……。

「なに、ご老人は労わるべきだよ。それに……モビーディック号に乗る機会なぞ次があるか疑問だからな」

そう告げると、白銀街道を発動させ、アスラはモビーディック号へと乗り移った。

当然だが、周囲は海賊だらけ。

ただし、雑然とした様子はなく、整然と隊列を組み、白ひげへの道を開いている。

（秩序というか躡というか……敵対したら厄介なのがよく分かるな、これだけ見ても）

そう思いつつ、平然とした様子で歩いていく先には老いて尚堂々たる威容を誇る巨漢。

口元には反り返る……アスラからすれば（そういえば、こんな髭みたいなのをつけたガンダムがあったなあ）と何となく懐かしい思いになっていたりする。

「白ひげか？」

「そうだ。お前は？」

「アスラ、海軍本部中将アスラだ」

悠然と口元に僅かな笑みを浮かべてアスラの問いに答えた老人。全身に点滴の管やら何やらつけて……とても健康とは思えないが……さすがに威圧感が凄まじい。

ふと周囲に視線をやれば、手配書なりで見た顔がちらほら。

左右には白ひげ海賊団一番隊隊長マルコと二番隊隊長ジヨズ。

他にも複数の隊長格がいるようだ。

とはいえ、襲い掛かってくる様子はない。皆分かっているからだ。ここで下手にどちらかが手を出せば、それは戦争になると。

原作では、家族に手を出された白ひげが仕掛けた訳だが、アスラが倒されれば、海軍が面子の問題で黙っていられない。ただまあ、白ひげ側としても、手を出してこないだろう、とアスラは確信している。

ここで戦えば、実際はどうあれ、外部からは中将1人を白ひげが一同でなぶり殺しにした、と思われかねない。

海賊というものは面子も大事なだけに、こちらから手を出さない限り、向こうが手を出してくる事はない、とむしろアスラはその点に関しては、白ひげを信頼していた。

「グララララ……そうか、手前が赤髪の言ってた若造か」

口ではそう言っているが、実際には聞く前から把握していたんだろうなあ、と思っっていたりする。

海軍でも海軍本部中将というのは僅かに16名。

海軍元帥と大将、中将クラスまでは白ひげが把握していないとは思えない。とはいえ、指摘した所でただの時間の無駄だ。

それに、赤髪海賊団の新人リロックスターみたいに折角乗ったのに、それなりに知名度はあると思っただのに「お前なんぞ知るか、アホンダラ」などと、まるで相手にされないなんぞよりマシだ。

「こちらは白ひげの話はよく聞いているよ。だがこうして会うのは初めてだな」

「グラララララ……そりゃあ、会う機会なんぞ普通はないからな」

とりあえず、案外と機嫌が良さそうなので先程の海賊について聞いてみた所、あっさりと教えてくれた。

何でも、名を上げようとしたのかどうか詳しい事は知らない、白ひげのナワバリに手を出したらしい。

……アホだな。

原作でも四皇のナワバリに手を出した海賊はいた。ただ、あちらは覚悟というか、その事を知った上で望む所とばかりに手を出したが、先程の海賊はあのモビーディック号を見るなり逃げようとした態度からして、ただ単に名前を上げる為の暴走だろう。

白ひげとやりあう覚悟なんぞ全くなしに、おそらくは……新世界へ入ってきたルーキーという所だろうか？

まさか、白ひげが直々に出てくるとは考えていなかったのだろう、考えが浅い奴だ。かくして、いざ実物の白ひげを目の前にしてびびって逃げようとした所を、グラグラの実の力で起こされた津波で船ごと粉碎された訳か……。

「それでどうだ、お前も俺の首を狙ってみるかい？」

「やめておこつ。上の命令もなしに、勝手に戦争の引き金を引く訳にはいかん」

そう……戦争だ。

世界政府の保有する最大の戦力たる海軍であっても、白ひげと戦うのならばそれは戦争になる。

それが四皇だ。

「だが、逆に言えば……上からの命令があれば、戦う。それだけだ」

そう言って、覇気を放つ。

……ふむ、抑え気味にしたとはいえ、殆どの連中は意識を失うには及ばなかったか。さすがに白ひげの船に乗るだけの連中だけの事はある、な……。

無論、白ひげ以下隊長クラスは顔色も変えなかった。

中将クラスの海兵達は皆、この力を操っている。使えて当然と思っ  
っているのだろっし、海軍本部中将の覇気がこの程度ではないと判  
断しているのか……挨拶程度のものだと判断しているのか……。  
さて、こちらの目的は新世界の国での外交と表向き理由を……  
いや、正式なものはそれで間違いない訳だが、それでこちらも引き  
上げかと思っただが……。

「グララララ……折角来たんだ、本気の一撃ぐらい見せていけ」

言いつつ、白ひげが傍らの巨大な槍に手を伸ばす。

……いや、あれは槍と言っているものなんだろうか？むしろ、薙  
刀の方がしっくり来るような気もするが……まあ、いい。こちらと  
しても世界最強の海賊と謳われる白ひげの力、1度拝見してみたい。  
さすがに白ひげが立ち上がった事で、周囲の連中も慌てて退避を  
命じている。

そうして、白ひげの一撃とアスラの拳砲とが互いに覇気を纏って、  
激突した。

結論から言おう。

原作の赤髪との一撃同様互いの覇気の激突は大気を割り、天を割  
った。

結果？

……押し負けたよ。残念ながら。

これで、グラグラの実の能力まで重なったらどうなる事やら。

……メルクリウス号の艦上から次第に離れるモビーディック号を  
見送りながら、アスラはそう思った。

第105話・対話（後書き）

という訳で、原作の白ひげと赤髪ばりの事はやりましたが、戦う事はありませんでした

しかし、今週のジャンプでも何か伏線が出まくりという感じですねw  
今後どのように明かされていくのか気になる所です

## 第106話・考察

「一体何があったんだ？」

メルクリウス号に戻り、右手を見詰めながら、幾度も握ったり開いたりを繰り返すアスラに、スモーカーが尋ねた。

当然だろう、モビーディック号に乗り込んだのはアスラのみ。何も起きないだろうとは思っていても、気にはしていたら、いきなり轟音と共に空が割れた。

これで何もなかったと考える方がおかしい。

「大した事はない、ただ単に白ひげと一撃合わしただけだ」

「ああ、そうか……っておい、十分重要的気がするんだが？」

冷や汗を流しながら、スモーカーが思わず、アスラに視線をやる。アスラは武器を持たない。

武器をそもそも使おうとしない。

武術を鍛え、拳を蹴りをその武器とする。

裏を返せば、白ひげともその拳で一撃を交わしたのだろう。

(……今の俺には無理だな。つつか、こいつも大概化け物だよな……)

自然系は確かに最強といわれているが、だからといって超人系・獣人系が劣っている訳ではない。

事実、スモーカーは未だアスラに勝てないでいる。

そのアスラといえば、右手を未だ見詰めていた。



あの瞬間。

白ひげとの激突で、さすがに素手な分、こちらが速かった。

だが、瞬間拮抗した後、押し切られた。

刃が届く寸前、瞬時に刃を返し、刃の背で甲板に叩きつけられたが、その一瞬でアスラもまた『鉄塊・剛』にて受け止め、大した怪我也も負う事なく、足をふらつかせる事もなく、自身の船へと帰還した。

だが……。

(……あの時、白ひげは武器を片手で持っていた。両手で持てば、当然威力も速さも増す……速さはまだこちらに分があるだろうが、片手に負けたんだ、両手持ち相手じゃ抵抗も出来んな……それに……)

白ひげはグラグラの実による衝撃をはいはしなかった。  
すなわち、あれでも白ひげは未だ全力を出してはいなかったという事。

(化け物め。さすが世界最強と謳われるだけの事はある)

既に水平線に消えようかというモビーディック号の姿に視線をやり、苦笑する。

(……次にアレとやりあうなら、力勝負は厳禁……いや、真つ向勝負そのものを避けるべきか)

アスラの悪魔の実は超人系メタメタの実モデル：水銀。

その能力を悔いた事はない。

だが、この能力では強者との戦闘には強さの上積みがしづらいのもまた事実だ。

防御は自然系並。

確かにその通りだが、裏を返せば攻撃は自然系に及ばないという事でもある。

例えば、先程の白ひげとの一撃。

白ひげはあそこから、まだグラグラの実の能力を破壊力に乗せ出来るが、アスラにはそんな事は出来ない。そう、マグマならば拳を鍛えると共に熱という附加要素がつけられる。青キジの氷ならば触れる事自体が武器となる。だが、水銀単体では霸気を纏った攻撃同士では無効化も出来ない。かといって、水銀を使って威力に乗せ可能な要素はない。

無論、広域大破壊を可能とする技はあるが、あれはあくまで周囲に味方がいない時のみ使える技だ。

それに、一対一の勝負向けの技でもない。

もし、白ひげと戦うなら、とシミュレートしてみるが、可能性としては2つ。

水銀で相手を包み込むか、それとも速さでもって手数で勝負するか。

(……包み込むのは無理だな。全方位に衝撃を放てる白ひげ相手じゃまとめて吹き飛ばされるのがオチだ)

となると、手数か。

命令がないのにやりあう訳にはいかない。だが、それは裏を返せば、命令があればどんな相手であろうとも殺りあう必要があるという事でもある。

そして、アスラには白ひげとの戦争の記憶がある。原作と今の世界は違うとはいえ、それは戦う可能性がゼロになったという事を意味するものではないから、アスラは戦う事も考えていた。

【SIDE：白ひげ】

「親父、あの男どうだったよ？」

既に定位置とも言える椅子に再び座り込んだ白ひげに、マルコが語りかける。

正直、単なる制裁ならば白ひげが直々に赴く必要はなかった。

白ひげ海賊団は世界最大級の海賊団だ。しかも、配下を含めて一味を家族としての結束力は鉄の団結力を誇る。

今回の馬鹿への制裁に関しても、配下の隊長クラスは元より、傘下の海賊団からも怒りの声が上がっており、許可が出れば我先にと乗り出していただろう。そういう意味では、一瞬で始末されて、あの馬鹿達は幸せだったのかもしれない。他の連中に捕まっていれば、楽には死ねなかつただろうから……。

とにかく、白ひげが足を伸ばしたのはこれまで実力を測る機会のなかつた海軍本部中將の話聞いたからだ。

といつても、別に警戒したとかそういう話ではなく、単なる暇潰し程度の感覚だった。

「そうさな……」

白ひげは思い返す。

さすがに、海軍本部中將に任じられるだけにはあつたという所か。

今の海軍本部大將らは凶抜けた者が多い。

比べれば、今はまだ物足りない。

だが……まだ若い。

今、世界最強の一角なぞと呼ばれている自分とて、若い頃からそう呼ばれていた訳ではない。

今の力に奢る事なく、研鑽を積み重ねれば……その先は？

「まだ、若い。だが、本物ではある」

「……成る程」

厄介な奴がまた増えたよ。

そうぼやくマルコに白ひげは顔を崩して大笑した。

## 第106話・考察（後書き）

前回の手合わせを振り返って、でした  
実際、毒の蒸気とか搦め手ならありますが、水銀だと純粋な破壊力  
の向上にはあまり役に立たないのですよね  
特に、このクラスの連中相手だと

## 第107話 - 情報収集

さて、傍から見た時、とつても大きいイベントがあったような気もするが、アスラ中將は今回の任務を果たすべく、目的地となる国へと到着した。

アインセル連合帝国。

国としては中規模、アラバスタには及ばないがそれなりに大きい。この国は周辺幾つかの島をまとめて国という、島1つ＝国という事が多いこの世界では珍しい国だが、それもこれも諸島という複数の島が連なっているから成立するともいう。

この国は珍しく帝国議会というものが存在し、皇帝に直言する権利を持つ。

議会に選ばれるのは各島の代表者であり、それは貴族とは限らない。

このような制度が作られる理由となったのは、やはり複数の島から構成される国、という要素が大きいだろう。何せ、新世界の国だけの事はあり、諸島で近場にある癖に島ごとに違うのだ、その特性が。

夏島の隣が冬島だったり、凶暴な肉食植物が繁茂する島の隣が平穏無事というのが相応しい緑溢れる楽園だったりする。種が飛んできそうな気もするが、どうも島ごとの気象の違いがそれぞれの島ごとの植生が移動する事を阻んでいるらしい。

そんなアインセル帝国の首都は一步町の外に出れば、凶悪極まりない植生を持つ島にある。

何で安全な島じゃないのかといえば、帝国発祥の地がここだからだ。やはり、平和平穏な島と危険な島とは住人の意識や鍛え方も異なるらしく、統一に動いた時、この島の住人を阻める者がいなかったからだ。

海賊も下手に森に踏み込むと襲撃前に酷い事になるから、そういう防御の面も考えてというのもあるが。

「さて、では行って来る」

「ああ」

アスラが外交団を連れて町へ出ると、船を守るのはスモーカーになる。

ジャブラもまた、アスラと共に船を降りた。世界政府の護衛の1人と表向きなっているのが当然だが、アスラが何事かを命じる形で途中で別れる。

自分から別れるとなると、周囲に疑問を持たれる可能性が高まるからだ。

そのジャブラはというと、ごく普通に疲れるなあ、というぼやき気味に一団を離れる。あれこれ命じられている事や場合によってはスモーカー同様手合わせの相手までやっているを知っていた一同からは笑いながら、『大変だな』と言われながら。

一団から離れると、ジャブラはそのまま町中へと向かう。

もちろん、ジャブラは表向きはぼやいていても、本当はそんな事は考えていない。色々命じられていたと思われているのは、下準備の為だったし、手合わせは彼の仕事柄むしろ望む所だ。

そうして、ジャブラは一軒の裏通りに近い店に入る。

雑貨屋風のその店は、それなりに繁盛している店で、間取りもそれなりに大きい。

「やあ、店主はいるかい？」

入ると、ジャブラは愛想の良い顔で、店員に尋ねる。

敵つい顔だが、妙に愛嬌があり、店員も特に警戒などした様子は

ない。まあ、見た目からして警戒されるようでは、諜報員失格だが。

「店主ですか？失礼ですが、どのような……」

「ああ、昔馴染みの知り合いでね……すぐに思い出せないようなら、『ジーン島の酒は美味かった』と伝えてくれるかい？多分、それで思い出してくれると思う」

分かりました、と言って、店員は下がる。

ジーン島は帝国を構成する諸島の1つで、酒は知る人ぞ知る美酒の生産地だ。ただし、原料が特殊な為なかなか手に入らないし、高い。そんな酒を酌み交わすとなると、店主とも親しい人間なのだと分かるだろう。

無論、これは合言葉だ。

ひょっとしたら同じ事を言うてくる知り合いの人間がいるかもしれないが、先に書いたようにジーン島の酒は珍しい上に高い。そんな酒を酌み交わす相手となれば、それなりに親しい人間しかいない訳で、店主が会っても問題ない人間となるだろう。

「会われるそうです。こちらにどうぞ」

程なく店員が戻ってきて、案内してくれた。

店主はやって来たジャブラを見て、笑顔を崩さない。ジャブラとは初対面なのだが、そんな様子は微塵も顔には出さない。ただし、代わりに……。

「おお、よく来られましたな。『あの時の酒はペネシーでしたか？』」

「いやいや、『あの時の酒はスコッティですよ』」



「おお、そうでしたそうでした。いや、あの時は『互いに酔いつぶれてしまった』『』」

「そうそう、『朝、目が覚めたら今度は請求書の値段につぶれそうになりました』『ね」

にっこりと笑顔になると、店主は『さあさあ奥に』『』、とジャブラを誘う。

ジャブラも、『それじゃお邪魔するよ』『』と笑顔で入って行く。

店員もそれに疑問を持つ事なく、店へと戻って行った。

奥へと入ると、2人の様子は一変する。

元々、この店はCPから金が出て設立された店だ。店主自身に案外商才があつた為に、今はこの規模だが、仕入れルートの構築やCPからの商品情報の提供など未だあれこれと恩恵も受けている。

さすがに新世界においてはCPといえど活躍の規模は抑えざるをえず、こうした各地の割と安定した国に拠点を置いての情報収集が中心になってしまっている。一応支部はある事はあるのだが、他と比べると活発な活動は困難だ。

「さて、事情は知ってると思うが……」

「分かっています。現状で届いているのはこれですね」

さすがに、新世界の無人の危険地帯にクロコダイルとて工場を置くはずがない。

何しろそんな事をすれば、必要な物資も全て現地調達ないし運び込む必要があるからだ。それは却って目立つ。水くらいなら現地で大丈夫だろうが、食料だの材料だのはそうはいかないからだ。食

料はともかく、自然とそうした原料調達がある程度可能な場所が選ばれる事になる。それがこの帝国だった、という訳だ。

植生が豊富なこの国では、薬の生産も活発だ。というか、国の産業としてはそれがメインだったりする。

したがって、分散して複数のルートから複数の店を通じて仕入れを行なえば、想像以上に目立たない。

「成る程……この島か」

「ええ、この島は帝国内でも割と製法が秘密なものが作られているというか、秘伝の薬の生産が多いですからね。工場への立ち入りを厳しく制限していても誰も疑問に思いません」

可能ならクロコダイルの尻尾を掴みたいが、クロコダイルはそこまで馬鹿ではない。

事実、この工場は一般的なものや、貴重な薬の製造も行なっており、別に貴人が買いに来ていてもおかしくはない。

「ペレイナ島……」

それが、ダンスパウダー製造工場があると思われる島だった。

## 第107話・情報収集（後書き）

ちなみに、最後の島の名前は黄金の三角地帯 黄金三角（ルパンの作品の1つ） この話の中でのルパンの偽名を元にしていきます

とりあえず、ジャブラが今回は活躍します

## 第108話 - 遭遇戦

目的の島は帝国を構成する諸島のほぼ中央に位置する。

その絶妙の位置故に、帝国第二の港と最大の薬草・薬種の市場を有し、その為にこの島には薬の製造工房も数多い。

ジャブラが目標としたのは、そんな中でも大規模な部類に入る工房。

先だつての地元諜報員が入手した情報によると、この工房の地上部分では普通の貴重な薬を生産しているらしい。だが、表向きには存在しない地下部分があり、そこが怪しいらしい。

ちなみに、これらの情報は例の諜報員の奥さんの親友の旦那が、ここに勤めている事、博打好きな事を把握した上で仕込んだ手の者を使い、博打で大借金を作らせ、それを気の毒に思った彼が肩代わりする形で旦那にも接近。酒を酌み交わして、説教しながら酔い潰し、あれこれ聞きだした、らしい。

とっても酷い方法ではあるが、最終的に血を見なかつただけ、まだマシな方法ではある。

ジャブラの服装は戦闘衣と呼ばれる特徴の全くない特殊な耐刃・耐弾繊維で編まれた服だ。

この上に暗緑色の衣を纏う。完全な黒色は却って目立つ為だ。

更に悪魔の実の能力を発動させる。

ジャブラも【生命帰還】をある程度使える為、その姿は獣人と呼ぶに相応しい。

この姿を取ったのは、身体能力の向上という面もあるが、それ以上に例え万が一姿を見られても、人間に戻れば正体の把握が困難な為という事がある。

音もなく工房に接近。

ジャブラの悪魔の実は、イヌイヌの実モデル：狼<sup>ウルフ</sup>。

当然、人間より耳も鼻も効く。

双方をフルに働かせ、人の気配を探る。

しばらくして、どうやら地上部分には既に人がいないと判断し、更に工房に接近する。そのままずりりと屋内への侵入を果たした。

当然中は暗いが、そこは動物の強み。自然系が自分自身を自然現象とし現象を引き起こす事が、超人系が自らの肉体を変異させ周囲に干渉する事が強さならば、獣人系の強みはその純粋な身体能力の向上にある。

暗闇にも戸惑う事なく、屋内を探る。

地上部分は事前情報通り、ごく普通の工房だ。

(さて、問題はここからだ)

地下部分へは当然だが、侵入経路は限られる。

物資搬入用の隠し扉、人員が通常出入りする通用口、複数の空気孔。この辺りになるが、まず前者2つは正直厳しい。

さすがに正面は警備ぐらいいはあるだろうし、扉を開ければ自然系だの透明になれる超人系だのでない限り普通は気付かれる。

となると……。

(……空気孔ぐらいしかないか)

とはいえ、勤め人の情報とてそういう施設がある、という事は分かって中へは入っていない。

逆に言えば、空気孔を降りた先が警備室だった、という可能性もなきにしもあらず。とはいえ、それを怖れては何も出来ない。蓋となる格子を外すと、両手両足を使って垂直に近い孔を降りてゆく。

無論、ジャブラは月歩を使えるが、脱出ならともかく隠密の侵入で使える訳がない。

ある程度降下しては匂いと音を確認、大丈夫だと判断すればまた降りて……と一般人なら嫌になりそうなぐらい根気良く時間をかける所はかけて降りてゆく。

……幸い使った孔は廊下に繋がっていたらしく、人の気配もない孔の中で器用に上下を反転させると孔の周囲を確認。何もないと思っただけで安心してると電伝虫が設置されていて、警備室に丸見えだったなんて間抜けな事になりかねない。

それもない、と確信してから静かに床に降り立つ。

ここから先は地図もない。

周囲を確認しつつ、素早く動いて確認していくが……どうやら、そう複雑な構造にはなっていないようだった。

(……工房、警備室、書類置き場を兼ねた事務室、休憩室、食堂、倉庫……後は個別の部屋という所か)

個別の部屋、というのが気になる。

単なる警備ならば警備室と仮眠も取れる休憩室で十分な筈だが……

…。

(或いは特別な誰かがいる、って事か)

とはいえ、今回の目標となるのは1つはダンスパウダーの現物。

これは倉庫だろう。

もう1つは資料。

例え、クロコダイルが直々に関わっているという証拠でなくとも、パロックス BWが関与している証拠だけでもあれば、それなりに意味がある。

こちらは事務室だろう。

問題は警備を消すかどうかだが……遠目に関け放たれた警備室内部の様子を確認し、ジャブラは消す事にした。

どうせ侵入者などいないだろうとばかりに、ぼんやりと電伝虫が

らの映像を眺めながら時折欠伸をしている。

電伝虫の画像の角度を弄りもせず、時折飲み物を口に運んだりしながら、仕事が終わるのを待っている様子だ。そもそも警備室の扉を開け放っている時点で気が緩んでいる事が伺える。

電伝虫の映像から、置かれている場所も大体見当がついた。

やはり厄介な事に倉庫入り口や事務室の入り口それに内部には電伝虫が置かれている様子だ。これではどうやっても自分の侵入は感知されてしまう。

( 刹 )

瞬時に駆け寄り。

『ん?』と警備員が緩慢な動作で風が動いた事に意識を向ける間もなく、彼の意識は暗転した。

救いだっただのは、何の苦痛もなく逝けた事だろうか。

そのまま、ジャブラは休憩室で仮眠中の交代要員も潰しておくが、どちらも体勢を整え、ぱっと見には仕事をしているように死体をセツトしてから、警報を切り、動く。

倉庫からはダンスパウダーの現物を確認し、更に事務室へ。

そうして、書類を探している時だった。

瞬間。

長年鍛え上げられ、彼を今まで生き残らせてきた第六感が警報を発し、それを脳が理解する更に一瞬間にはジャブラの肉体が自動的に反応して、全力での回避行動を取らせていた。

スバリ。

音で例えるなら、そんな感じか。先程まで書類を確認していた机が綺麗に2つに分かれて倒れた。

「……ただのネズミではないらしい」

そこにいたのは一人の坊主頭の男。

赤銅の鍛え上げられた肉体を持つ大男。

その分厚い胸に描かれるは【雫】。

(……こいつは……まさか)

声を出せば、そこから自身の正体に辿り着かれる危険がある故に、この状況でも声を出す事なくジャブラは呻く。

(BWオフィサーエージェントのトップ……Mr.1。こいつが  
この警備にあたっていたのか……)

自身の役割はここで戦って奴を倒す事ではない。

ジャブラの仕事は帰還して初めて意味を為す。

そもそも、彼は恋人が待っているのに、こんな所で死ぬつもりなどない。

ならば三十六計逃げるに如かず、といきたい所なのだが、生憎唯一の入り口を抑えられている。相手の仕草には隙がなく、その脇を抜けての脱出というのは出来そうにない。

ならば、戦うしかない。

一瞬でそう判断すると、ジャブラは拳を固めた。



第108話 - 遭遇戦（後書き）

という訳で、ジャブラ遭遇戦闘です

少しはスパイらしさが出たかな……？

## 第109話・手合わせ（前書き）

### 【重要】

少年誌のバトルものの宿命といいますが、どうしても後に出てきた相手の方が強いという現象が出てしまいます。

ドラゴンボールの強敵だったフリーザがセル編に入るなり雑魚になってしまったように……。

感想で何人かの方が指摘されているように、本来ならばジャブラが圧勝になってしまいましたが、それでは話になりませんので、BW側の戦力というか強さがある程度調節しています。

まあ、原作では頂上決戦後に新世界に入ったMr.1も原作3年前の段階で既に入っているという事で強さが上がっていると思っ  
てください。

ご理解頂けた方は本編をどうぞ。

## 第109話・手合わせ

ジャブラの戦闘方法は鉄塊拳法と称されるように、【鉄塊】をか  
けたままでの戦闘だ。

CP9ではジャブラしか出来ないのだが、CP長官の家でペットの  
虎がやってた時は正直へこみそうになったのはジャブラの秘密だ  
ったりする。

まあ、それはさておき、踏み込んでの一撃にジャブラは顔をフー  
ドの奥でしかめた。

音も手応えも生身の人間を殴ったものではなかったからだ。

もつとも、それを感じたのは相手も同じだったようで、Mr・i  
もまた顔をしかめた。

「……妙な技を使うな」

言いつつ、踏み込んできたMr・iが手を開いたままジャブラに  
向けて振るう。

能力者と見たジャブラは相手の能力が分からない事から回避する  
が、舞い上がったローブの裾に4本の切れ目が入る。

着地したジャブラの視線が一瞬そこにいったのに気付いたか、M  
r・iは告げる。

「俺はスパスパの実を食った刃物人間。俺の体は全身が刃だ」

手を顔の前にかざしてみせる。

確かに良く見れば、指の1本1本が刃物と化しているようだ。  
成る程、と納得がいった。

とはいえ、ジャブラからすれば、まだやりようがある、という気  
分だ。

何しろ、ジャブラが知っているのは海軍上層部の面々だ。CP長官のアスラの水銀なんてどう殴れというのか、という気分だし、海軍大將らの自然系など殴ったらこちらが酷い事になるか、その前にもっと早い速度で蹴り飛ばされるかのどちらかだろう。そういう意味では、殴れる相手なだけまだマシだ。

「そして、お前は何者だ？……先程殴られた感触はまるで鉄だった。貴様も能力者か？」

正解。

能力者である事は間違いない、ただし、Mr・1の想像とは異なるが。

「……だんまりか、いいだろう。それなら力ずくで聞きだすとしてよう」

そう言って。

Mr・1は踏み込むと、まるでチョップを行なうかのように腕を振り上げ。

瞬間、ジャブラは壮絶に嫌な予感がして、全力で跳び退った。

……それが正解だった事は見事に真つ二つに切り裂かれた鉄の作業台のなれの果てが示す事になった。

(……おいおい、斬鉄かよ)

斬鉄。

文字通りの意味で鉄を斬る技の総称だ。

単純な力任せの技では出来ない。

刃とは想像以上に繊細であり、力任せに叩き付けた所でひしゃげるのは刃の方だからだ。

力ではなく技。

同じ鉄の刃でもって鉄を断つそれは、達人の証でもある。

「……以前なら出来なかっただろうがな。新世界ではこれぐらいが出来なければ生き抜けんという事だ」

ジャブラが沈黙を守っている分、Mr・1が話す、という状況が続いている。

もっとも、お互い相手がどう思っているかは気にしていないから、これはこれで構わないのかもしれない。

(……相手が斬鉄が出来るとなると、無闇な接近は厳禁だな。とはいえ、さすがに指の刃で握った程度で斬鉄が出来るとは思えないが)

そんな事が出来るのはミホークかシャンクスレベルの連中ぐらいだろう。

(とはいえ、相手が刃物だと素材は鉄だろうからなあ。さすがに、嵐脚程度じゃ通用しねえだろうし)

とはいえ……。

(ま、仕方ねえ。久方ぶりにこのレベルの相手つても面白いか)

元々六式は格闘技だ。

今でこそジャブラも鉄塊拳法を身につけているが、かつてはそんな事は出来なかった。

殴り殴られ、斬られ……鉄塊を修得してからも僅かな油断が怪我

に繋がった。

考えてみれば、刃物で斬られれば痛いのが当然だ。

どうにも感覚が狂っていたらしい、とフードの下で苦笑する。

とはいえ……。

(まあ、脱出が最優先なのは確かなんだがな)

言いつつ、ジャブラは腕を上げ、拳を握る。

それを見て、Mr・1もまた戦闘態勢に入る。

そして。

瞬間、ジャブラがMr・1の内懐に飛び込んだ。

「!？」

驚いたのは無理もない。【荊】の速度はMr・1にとっても予想外だったからだ。

だが、そこはMr・1も歴戦の強者。

ジャブラの一撃を自ら後方に飛ばす事で勢いを弱め、今度はお返しとばかりに踏み込んで蹴り上げる。

普通なら蹴りなら受け止める所だが、相手はスパスパの実の刃物人間。当然、その足全体が刃物と化している上、これだけの一撃ならば斬鉄も可能とみて、ジャブラは【紙絵】で避ける。

(……本当なら、きっちり片をつけるまでやりあいたい所なんだがな……今は任務が優先だ!)

書類は一部しか手に入らなかったが、ダンスパウダーの現物は手に入った。

これがあれば、強制査察でアスラ中将が入る事も可能だろう。

……もっとも、迅速に行なわねば、即効で潰されるなりして証拠

隠滅される可能性があるが。

それだけにジャブラは一刻も早く帰還せねばならない。

(鉄塊拳法・狼弾！)  
オオカミハジキ

【鉄塊】をかけた両腕でMr・1を弾き飛ばす。

ダメージこそなかったものの、距離を取った事で瞬間隙間があった。

その瞬間を見逃さず、【剃】で駆ける。

Mr・1も今度は距離があつたからか反応するが、さすがに大降りの一撃、すなわち斬鉄の一撃は放てず、手で掴もうとするに留まる。その手を払い、そのままジャブラは逃走する。

一旦逃走してしまえば、ジャブラに追いつける速度がMr・1にはない。

加えて、先に警備を始末したお陰で、邪魔される事なく通用門からの離脱が可能だ。

無論、鍵がかかっていたが……。

(鉄塊拳法……重歩狼！)  
トロン・ホー・ロウ

拳の一撃で鍵が壊れ、扉が開く。

離脱してゆくジャブラの姿をMr・1は見送るしかなかった。

鋭く舌打ちすると、即座にビリオンズに連絡を行う。

ばれた以上は長居は無用だ。奴が早いか、こちらが早いか、後は手集の速度の勝負になる。

……結果からいえば、この勝負は痛み分けという形に終わる事になる。

ジャブラはアスラへと連絡を取り、島の近海に滞在していたアスラは即座に駆けつけ、工場へと飛び込むが、僅かな差で証拠となる

書類や人材には逃げられた。

ただし、生成されたダンスパウダーまで持ち出す余裕はなかったらしく、こちらは抑える事に成功した。

BWとCPの勝負は、未だ続く……。



第109話・手合わせ（後書き）

という形に終わりました

でも、感想で書かれた方がいた通り、バトルものの少年漫画ってどうしても強さのインフレが起こっちゃうんですよね……

## 第110話 - 読み合い（前書き）

気付けば、既に1000万PV突破  
100万アクセス突破！

ありがたい話です、本当に……読者の皆さんの感想は話を書き続ける気持ちの最高の燃料です

## 第110話・読み合い

【SIDE：アスラ】

「……そいつは西の海の殺し屋として有名なダズ・ポーネスだな」

アスラは踏み込んだ先の工房でぼやいた。

工房はよくぞこれだけの施設をと思うぐらいに大規模なものだった。

これだけの大地の掘削を周囲に気付かれずに行なうだけで大仕事だろう。少なくとも、この地に鍾乳洞なんてものは存在せず、また天然の洞窟が存在したという記録も存在しなかった。つまりは自然にあったものを拡張したという訳ではない、という事。

(……とすると、それなりの金がかかっている、という事か?)

だとすれば、問題ないのだが……。

今回の一件は帝国としてもかなりの問題となっているらしい。

ダンスパウダーは新世界であろうと関係ない。世界中どこでも製造禁止・所持禁止の一品だ。それはこの帝国においても同じ事。

それだけに、今は問題となった工房が何時からダンスパウダーを製造していたのか、どこの商人からどれだけの品を卸していたのかを捜査しているらしい。

どのみち、アスラはここにこれ以上は長居出来ない。

元より、ここでのBWへの探索は本来の予定にねじ込んだもの。

せめて、証人と証拠物件を押さえられていたならまた打つ手は増えていたのだが……現物を押さえたとはいえ、証拠がない。これでは、アスラが残って動くにはどうにも弱い。

そもそも、今回の一件とて、ダンスパウダーの密造という情報を得て、近海にいた海軍本部中將が応援に駆けつけた、という体裁を

とって帝国の内部捜査に介入している状態なのだ。

帝国が面子をかけて、『後は我々が』と言い出しては、これ以上『いや、私もまだ介入させて下さい』とは言えない。

「すまねえ、義兄貴。俺があそこでBWに気付かれなけりゃ……」

「……いや、お前はよくやった。まさかBWの中でもトップに近い所が詰めていた、とはな……」

全てにおいて完璧を望むのは無理だ。

最善を望み、次善を得られれば良しとする。それが現実で、実際下手を打たなくても、次善さえつかめない事はザラだ。

そういう意味では、今回のケースは元々地下にあった時点で厳しい条件だった。

地下というのは侵入経路が限られ、脱出経路もまた限られる。

そもそも、余計な場所を作っていないという事は見張る場所も限られるという事。

あの時、個室も探っていればMr・1の存在には気付いていただろうが、その場合はそもそも、その時点で侵入に気付かれていただろうから、だから、これは最善を求めた上での実際の状況から得た次善。

そう判断すると、アスラは撤退を決めた。

#### 【SIDE：クロコダイル】

「そうか、ダンスパウダーは押収されたか。まあいい、近くでほとぼりを冷ましてから移動しろ」

電伝虫の向こうで詫びるMr・1の声を聞きながら、クロコダイルは答えた。

然程機嫌が悪くはない。

(ふん、やはり奴は気付いていたか)

元々、あの拠点は獣人系悪魔の実の能力者、モグモグの実の能力者であるミス・メリークリスマスが掘ったものを整えたものだ。代わりなぞ幾等でも作れる。

(同じ島に1つだけとは限らないぜ？アスラCP長官さん)

前のダンスパウダーを抑えられた後、雌伏の時間を使って、戦力の拡張と鍛錬を重ねた。

懐かしい新世界に、配下の者を送り込んだのもその一環だ。

別に全員が一騎当千の実力を持たずとも良いが、オフィサーエージェントというある意味切り札的な連中には高い実力を持ってもらわないと困る。

死に掛けた奴らもいたが、そのお陰で能力頼りの連中にも喝を入れる事が出来た。

悪魔の実の能力は便利だが、食った後どうその能力を活かすかは、能力者次第だ。

折角強力な実を食ったのに活かせないまま果てる奴もいれば、食った実の能力自体は特筆するようなものではないけれど、万全に能力を活かす戦いを行なう事で恐るべき強者となる者もいる。

クロコダイル自身がダンスパウダーの密輸を行なったのも、実の所鈍っていたように思えた自分を今一度昔の現役の感覚を取り戻す為だった。新世界へ行き、そこで実戦経験を積む事、それこそがクロコダイルの真の狙いだった。

そうして、帝国はしばらくは躍起になって探るだろうが、既にあの目立って敵の目を惹き付ける囷にはそれなりのダンスパウダーも

残してあった。

そう、あの施設は最初から罠だった。

それなりの金と人員をかけた罠だったが、相手が相手だ。ククロコダイルはケチではない。

Mr. 1を警備においたのも、自分があそこを重要視していると相手に信じさせる為だったし、迅速な撤収が上手くいったのも偶然ではなく、元々ばれたらさっさと撤退する予定だったからだ。

まあ、相手の手際が良くてギリギリになってしまったのにはヒヤリとさせられたが。

(運び込んだ材料は地下道を通じて、既に別の場所へ運び込んでいる。購入された資材と実際に見つけたダンスパウダーや資材の量がつりあわないと分かっても、俺が運び出したという事が分かっている以上、あのCP長官も既に運び出されたものと判断するだろう)

以前は相手にしてやられたが……今回はこちらの勝ちだ。

ニヤリと笑うとククロコダイルは自らの仕事に戻った。

第110話・読み合い（後書き）

という訳で実は今回はクロコダイルの勝ちでした

今日は友人らとの付き合いで遅くなった！

彼らとの付き合いも10年以上と長いが、さすがに各自が仕事があるとなかなか会えませんね……全国に散らばってるし

## 第111話 - 世界の片隅で

世界は広い。

そして、広いようで案外狭い。

アスラがクロコダイルとそんな騙し合いの陰謀劇をやらかしてるのとはほぼ同時刻。南の海ではアスラがよく知っている面々が実に単純に暴れていた。

「ゴムゴムのお　　！」

ここは南の海に浮かぶ島の1つ。

分かりやすく説明すると、水と果物と獲物が豊富なこの島で網を張っていた海軍の軍艦。

この島には片方には広く穏やかな湾が。

反対には狭く入り組んだ入り江があった。

海軍側は入り江側に軍艦を停泊させ、湾に入り込んで停泊し、船を降りた海賊団に対して襲撃をかけたという訳だった。

「鎌！」

長く伸びたルフィの足が横薙ぎに振るわれ、まとめて海賊団を吹き飛ばす。

現在前線で暴れているのはルフィのみだ。

とはいえ、別に残りの面々が遊んでいる訳ではない。

ルフィはゴム人間だ。それ故に打撃は効かず、後世のそれと異なり球形の弾丸を用いる銃弾も通用しない。それを利用して、海兵らはルフィを巻き込むのを怖れる事なく、銃撃を浴びせている。

無論、何発かはルフィにも命中しているのだが、ルフィもまた喰らった弾丸をそのまま吹き飛ばすのではなく、少し方向を修正して



海賊団に浴びせるようにしている。

無論、そんな必要がない面々もいる。

ガープ中将とアリスだ。

何故アリスがここにいるかというところ……。

### 【回想シーン】

マリンフォードで、ハンコックがアリスに語りかけている。

「ルフィがガープ中将に連れられて出撃するそうなのじゃが……あの2人ではどうにも不安じゃ。ついて行ってやってくれんか？」

「みゃう」

とアリスは了承して頷いた。

以上回想終わり

という訳で、ついてきたアリスだが、ガープ中将が時折手元の銃弾を指弾の要領で弾いて、ルフィがすっかり気絶させ損ねた奴をきっちり落としている。

アリスはというと、こちらは鉄塊拳法モドキの使い手だ。

平然と銃弾の飛び交う中を闊歩し、張り倒していたりする。

今も、ルフィの死角から忍び寄った2人の刀と剣を持った海賊の前に【荊】で瞬時に出現する。

「みゃう」

ぎよつと目の前に突如出現した巨大な虎に足を止める海賊達だったが、アリスはそんな事お構いなしに、右前脚を振るう。

一撃目で刀と剣がまとめてへし折れて飛んで行き、二撃目で人も

飛んでいった。

「ちくしょう！」

追い詰められ、ルフィと渡り合っているのは、この海賊団の船長だ。

名は『鉄槌』のゼン。

名前の通り、巨大な鉄槌を武器として戦う海賊なのだが……槌と

いうのは当たり前の話だが、打撃武器だ。そして、ルフィはゴム。相性は最悪と言っている。こんな南の海で燻っているような海賊が

覇気を使える筈もない。懸賞金は300万ベリー。

そもそも、大振りすぎて、全然ルフィに命中していない。

「ゴムゴムのお　バズーカ！」

六式を使い、インパクトの瞬間【指銃】の要領で拳を固める。

鉄並の硬度に達した拳がゴムで加速され襲い掛かってきたその一撃に敵うはずもなく、ゼンはぶっ飛ばされて、気を失った。

その様子をガープ中将は思わず涙を流しつつ、ハンカチで目元を抑えて見ていた。

ガープ中将にしてみれば、孫と一緒にこうして海軍の一員として海賊退治なんて事が出来る日が来る事をどれ程待った事か、という気分だったりする。分からないでもない。息子が息子だし、孫同然に思っていたエースは結局賞金稼ぎとして海に出て、当分戻ってきそうにないし。

ただ、中将自身が感動していても、現実はまだ戦闘が終わった訳ではない。

もちろん、ハンカチで顔を抑えつつも、空いた左手で破れかぶれ

で特攻してきた海賊団の突撃隊長を、そちらに視線さえ向けず拳の一撃で容赦なく大地に沈めているが。ちなみに、その隊長は膝から上が砂に埋もれてしまい、慌てて海兵らが掘り出そうとしている。膝から下ではない、膝から上が上下逆で埋もれているのだ、中将の拳骨の一撃で。

この場合、『さすがガープ中将』と褒めるべきなのか、『手加減してやってください、大人気ない』と叱るべきなのかとても微妙かもしれない。

「中将！」

「うん？なんじゃい」

顔を緩めてルフィしか見ていなかったガープ中将だったが、呼ばれればそちらに意識も向ける。

「はっ！海賊船が動き出した模様です！どうやら仲間を見捨てて逃走を図ったものと……」

見れば、確かに海賊船がこっそり錨を上げて、逃走を図っている。どうやら、船長が勝てるかどうか様子を伺っていたようだ。しかし、負けてしまったので船に残っていた面々が慌てて、逃走を図ったという事だろう。

海軍の軍艦は島の反対側だ。

もし、ここで逃走を許せば、相当面倒な事になるだろう。

ガープもそれは理解しているはずだが、焦る様子は微塵もなかった。拳骨流星群用の砲弾が別に積まれている訳でもないのだが……。

ちなみに、とガープが視線を海賊船の上空に向ける。

釣られるようにして、海兵も視線をそちらに向ける。

そこには小さな獣の陰が1つ。

何時の間にか、逃走を図る海賊船の上空へと舞い上がっていたアリスだった。

更にそこから天を駆けるようにして、【月歩】による轟音と共に船へと舞い降りる。

「みゃうううううううううー」

### 【六式我流／天槌】

自らを砲弾と化したアリスの一撃はそのまま甲板を粉碎し、その下をぶち抜き、更にその下を……と貫通し、遂には船の竜骨をへし折った。竜骨を折られた船がそのままでいられるはずもなく、停止し、次第に沈みつつある。

慌てて、船から逃げ出す連中もいるが、島から別の島へと泳ぐのはこの連中では無理だろう。

かといって、既に湾は海軍の目が光っており、逃げ場所もまた、ない。

ふわり、とガープの傍らに舞い降りたアリスは、『もう、自分達の出番もいらないでしょ？』とばかりに毛繕いを始めていたりした。

アスラがグランドラインでクロコダイルと互いに相手の思考を読み合つての武器を交わさぬ戦いを繰り返している一方で、ルフィらはそんな事をやっていた。

元々、海軍本部中将がわざわざ出張するような相手ではない。

そんな彼らがここに来ていたのは、見回りがてら、ルフィの実戦経験蓄積の為、という一石二鳥を狙ったものだ。

……哀れなのは、海賊団の連中だったかもしれない。

「えーと、とりあえず崖に刺さっていた『鉄槌』のゼンは回収完了しました」

副官の報告を受け、ガープはまた網を張る。

何しろ平和な島だ。

食い物は豊富、危険な動植物もない。海賊を待つ間は海兵らにとってもバカンスのようなものだから、不満が出るはずもない。

「ようし、そんじゃまた、交代で休んでおいていいぞい」

中将の声に、歓声が上がった。

第111話・世界の片隅で（後書き）

一日ならいいけど、連日友人に引っ張り出されると……  
いや、いいんだけど、こっちにも都合が……

という訳でこんな時間になっちまいました……  
明日仕事なのに、遅くまでドライブは勘弁してくれ……

第112話・世界の片隅で2（前書き）

今回はあの人です

## 第112話・世界の片隅で2

荒い息をつきながら、一体の骸骨が走っていた。

妙な表現だが、そうとしか言いようがない。

骸骨はその名を『鼻唄』のブルックという。死んでも1度だけ蘇れるヨミヨミの実の能力者であり、しかし、既に1度死んだ本人としてはただのカナヅチな骸骨だった。

スリラーバーク。

霧の中にたゆたう島と見紛う巨大な船である。

これでも海賊船だ。

海賊団の船長の名はゲッコウ・モリア。王下七武海の一角であるカゲカゲの実の能力者であり、かつては新世界で四皇の1人カイドウとやり合った実力者でもある。

……もつとも当人からすれば、やり合ったとはいえ、結局敗北。有能で信頼出来た部下……海賊として船出してから苦楽を共にしてきた気のおけない仲間達を全て失った苦い思い出しかない。

それは現在のモリアの海賊団の構成を見ても分かる。  
生きている人間は僅かに3名。

天才外科医ドクトル・ホグバック。

『墓場』のアブサロム。

『ゴーストプリンセス』ペローナ。

……他は全てが死体だ。

正確にはホグバックによって改造され、モリアの能力によって他の人間から奪った影を入れ動かされる操り人形というべきか。確かに、生きている部下がいなければ、もう一度失う不安からは解消される。……それだけモリアにとってもかつての部下達を失った事はショックだったとも言える。



さて、ブルックもまた、この島で影を奪われた。

以後、霧の海から逃れられないでいたのだが、それは諦めた事とイコールではない。

以前から幾度となく、自らの影を取り戻しに潜入を繰り返し、ゾンビを倒す方法は見つけたが……。

「飛燕<sup>スワロー</sup>・ボンナバン！」

「！」

咄嗟に横に飛びのいたブルックの脇に黒刀が突き刺さった。

そのままブルックは服が汚れるのも構わず転がって距離を取る。

上空よりブルックを突き刺さんと舞い降りた当人は外した事に舌打ちしつつ、立ち上がる。

その名をサムライ・リユーマというワノ国の剣豪である。無論、もう死んでしまっている訳だが。

「今日はしつこいですねえ」

ブルックが言うのはもつともで、既にスリラーバークの外縁部近い。

普段はもつとリユーマは内側におり、逃げ出すブルックを嘲笑い、見逃してきた。それがしつこく追ってきているのは確かに珍しいのだが……。

「……貴様がそれを言うか！今日こそはアフロを刈るなぞと言わず、本体である貴様の息の根を止めてやる……！」

リユーマの姿を見れば、大体分かるだろう。

着流しは斑模様。

頭からは何か分からないねっとりした黒い物がへばりつき。まあ、その他アレコレ、とにかく見た目酷い有様になっていた。これ全て、ここ数日のブルツクの戦果だったりする。

「ヨホホホホ。生憎そついう訳には行きません」

言うなり、ブルツクは更に逃走を開始する

リユーマの身体能力は自分より上だ。

中身が同じで、使う技も同じならば、後は肉体の差が物を言う。元々伝説に名を残す程の大剣豪の肉体に、ドクトル・ホグバツクが強化改造を施しているのだ。真つ向やりあつて勝てる相手ではないのは、ブルツク自身が自分の体で散々に体験している。ただ、1つだけ現状、ブルツクが勝っているものがある。

「おのれ、まだ逃げるか……！」

今のブルツクは骨だけだ。

すなわち軽い。

リユーマは身体強化が施されたとはいえ、その分重い筋肉が増量され、耐えられるよう骨格も強化され……力が増し、技の威力も増した分、逃げ足ではブルツクが勝る。

とはいえ、ブルツクとて必死だ。

「逃がすか！夜明歌・クー・ドロア！」

どのような技かは自分の技だから分かっている。  
だが……。

「くっっっ！」

改造されたリューマの肉体から放たれる技は本来鋭い突きを放つだけの技を、衝撃波を飛ばす技へと変えた。

幾等向こうが足を止めているとはいえ、こちらも思うようには距離を広げられない。それでも……。

（あと……もう少しなんです！）

信じるものがあるから、ブルックは駆ける。

例えみつともなかるうが、例え無様だろうが構わない。

……………

そうして、遂にスリラーバークの最外縁部まで到達した。

ここから先は海だ。

途中からは海を走って、到達したブルック。

最早意地で、そこらにいた兵士ゾンビやらまで動員して追ってきたリューマ。

ただし、あくまで『あいつを殺すのは俺だ！』とばかりに他に手出しはさせなかったのだが……。

「もう、逃げ場はないぞ」

手出しはさせていないとはいえ、リューマの背後にも、ブルックの背後にも兵士ゾンビがズラリと並んでいる。

確かにこれではもう逃げ場はないだろう。

だが、ブルックには焦る様子はない。その態度にリューマは少し奇異を感じた。

「ヨホホホホホ。大丈夫です」

「……何がだ」

「ここが目的地ですので」

何？そうリユーマは問いかけたのだらう。

だが、彼がそう問う前に、大量の海水が襲ってきた。

飲み込まれた海水に、兵士ゾンビがまとめて押し流される。リユーマ自身は咄嗟に刀を突き立てると同時に壁を背にして耐えようとしたのだが……さて、モリアのゾンビは悪魔の実の能力によって動かされる以上、海に、更には塩に弱い。

塩分をたっぷり含んだ海水を浴びたリユーマの体からは抵抗も出せずに、影が抜けた。

「ヨホホホホ……ナイス・コントロールです、ラブーン」

ぶおおおおおおお　　！

びしり、と親指を立てて合図するブルツクの視界の先に巨大な体があった。

いわずとしたアイランド・クジラのラブーンだ。

ラブーンは鯨だ。そして、鯨には潮吹きという特徴がある。

……もう分かっただろう。ラブーンがわざと水面下から噴出す事によって、噴気で海水を弾き飛ばしたのだ。ちなみに、噴気自体は呼吸によるものなので、呼気による僅かな水分ぐらいしか含まない。

問題はラブーンが巨大だという事だ。

当人にとっては僅かな水を吹き飛ばしたつもりでしかなくとも、遥かに小さいサイズである人間からすれば大量の海水になる。幾度か練習を重ねたとはいえ、上手くいくかは分からなかった。いわば賭けだ。

まあ、最悪、駄目だったらラブーンに乗せてもらって脱出する予定ではあったのだが。

だが、結果から言えば、最高の結果となったようだった。

「さて、それでは余計な連中が来る前にさっさと逃げ出すと致しましょうか」

言いつつ、抜け殻となったりユーマの肉体と黒刀とを担ぎ上げる。

「……剣士としては正々堂々と戦って勝ちたかったですよ」

そう呟くと、海へと飛び降りる。

ラブーンの背に着地すると、ラブーンが泳ぎだし、巨大故に動きの鈍いスリラー・バークは急速に離れていった。

その背で水葬の準備をする。

やがて、霧の海を抜け陽光煌く海へと出る。

思わず、ブルックはその光景に目を奪われた。……ルンバー海賊団の仲間を失って、どれだけの月日の間、あの霧の海を1人彷徨っただろうか……。影を奪われてからは、太陽は厳禁だった。

もう、こんな光景を見る事は出来ないのではないか……。そう思った事も一度や二度ではない。

それが今、目の前に広がっている。……気付けば、涙が流れ落ちていた。

ラブーンと再会した時もそうだったが、どうも涙腺が緩みやすくなっているような気がする。

我に返ったブルックはリユーマの肉体を水葬に帰す。

……もう二度と眠りが妨げられる事がないよう願って。

「さて、行きましようか、ラブーン。……あ、もし、何かあって

はぐれた場合は落ち合う先は、クロツカスさんのいる双子岬ですか  
らね?」

ぶおおおおおおお !

持ち出したのは残っていた財宝と身の回りの品。そして、ルンバ  
ー海賊団の旗。

船を買い、仲間を再び募って……いざ冒険の旅の再開へ、ブルッ  
クは航海を開始した。

かけがえのない仲間と共に。

第112話・世界の片隅で2（後書き）

という訳で、ブルックも脱出です

まあ、この後色々あって……の予定です

次回はまたアスラとクロコダイルの話に戻ります

### 第113話・計画の修正

クロコダイルの計画は大幅に書き換わっている。それにロビンが気付いたのは何時だっただろうか。

「まあ、前の計画はな、明らかにCPにばれていたからな。これ以上続ける意義が見当たらん」

確認に行ったロビンに、クロコダイルはあっさりと答えた。そもそも……とクロコダイルは思う。

元々の計画では、ダンスパウダーを用いているのが王であると思わせて、内乱を引き起こす計画だった。

その為に、マネマネの実の能力者であるMr.2が重要な役割を担っていた。

無論、今でも彼の能力は便利であり、使いようは幾等でもある。だが、ここで重要なのは、内乱を引き起こす、という事自体にある。

基本的に内乱というものは、被害が大きい。実際、元の世界のアメリカが最大の被害を受けたのは南北戦争だったという。そう、第二次世界大戦でさえ被害という意味では劣るのだ。

「……当たり前だが、内紛で正規軍を真っ二つにすれば、そしてそいつらが正面切って遣り合えば、確かに俺が付け入る隙はでなくなるが……その分被害もでかくなる」

アラバスタ王国が弱体化しては意味がないのだ。

苦労して手に入れて、手に入ったのが疲弊した国民、半壊した軍隊、荒れた国土では理想国家なぞと謳った所で不満も出るだろう。

世界政府の介入の余地も大きくなる。



幾等、古代兵器で……といってもそれを即使えるという訳ではない。

「大体、古代兵器なんぞ見せ餌でいいんだ。実際に使う必要なんぞまるでない。というか、使ったら負けみたいなもんだ」

使う必要はない。

ただ、持っているぞ、と知る人は知っていればそれで十分だ。

元々、古代兵器でクロコダイルが狙ったのは、自分が世界政府に成り代わって、とか、世界征服なんて事ではない。あくまで、世界政府に手出しさせない為の、世界政府が手出しを躊躇うぐらいの武器だった。

けれど、その武器の情報を手に入れたとしよう。

すぐ作れるような武器ならいいが、むしろすぐには使えない、作るにしても時間がかかる武器だろうとはクロコダイルも予想している。となると、それが完成する間、世界政府の手出しを防ぐ必要がある。

かつて世界政府はオハラをバスターコールで滅ぼした。

それは、失われた時代を研究した、それだけだ。もし、クロコダイルが同じ事をしようとしたら、そして、それを防ぐ為の脅しがかけられる武器がなければ……今度はここにバスターコールが仕掛けられる可能性が出てくる。

それを防ぐ為には、アラバスタ王国の力が絶対必要だ。

「……半壊していない軍隊、豊かな国土。そいつらがいなければ、世界政府が強攻策に出た時、俺だけじゃ止められん」

世界政府には海軍という最終兵器がある。

そもそも、バスターコールが発動した時点で海軍本部中將が5名確定だが、クロコダイルがいると分かっていたら、海軍大將までお

まけでくつついてきかねない。さすがに、海軍大将と海軍中将をまとめて相手に出来ると考えられる程、クロコダイルは楽天家ではない。

そもそも、CP長官たる海軍本部中将アスラとやり合った結果から言えば、予想以上に厄介だ。

(奴は俺の右手が通用しなかった)

水分を吸い取り、干からびさせる右手が通用しなかった。相手の悪魔の実際の性質を考えれば当然なのかもしれないが……。

(仮にも海軍本部中将だ……奴も覇気は使えるだろうな)

少なくとも海軍の本部中将以上は覇気を使いこなす。

使いこなせずして、海軍本部中将は名乗れない。

すなわち、本気の奴とやりあう時は、自分にも攻撃を当ててくるという事であり、双方の戦いはおそらく肉弾戦。

(……勝てるか？能力なしの戦闘で奴に？)

自然系悪魔の実、スナスナの実の能力を得てからクロコダイルは……いや、元々自然系の能力者はなまじ大破壊力の技が使えるだけに能力を用いた戦闘に長ける事になる。

逆に超人系の能力者は一部を除き、破壊の力は限定的だ。

その為、肉弾戦闘に自分自身の能力を活かす者が多めだ。

決して自然系だから肉弾戦が弱いという事はないが、自然系の能力者と超人系の能力者のどちらが肉弾戦闘の鍛錬に時間を費やすかといえは……。

(……それに奴は本部中将だけじゃなく、CP長官……先だつ

て新世界の偽装ダンスパウダー製造工場に潜入してきた相手はおそらくCP9……まとめて相手にするのはさすがに不利だ)

沈黙するクロコダイルを不審げに見ていたロビンだったが、何時までたつてもクロコダイルが沈黙している為に声を掛けた。彼女とて組織のトップに位置する立場だけあって仕事はまだまだ残っている。何時までもぼうつとしている訳にはいかないのだ。

「それで、どうする訳？」

「……ああ、そうだったな。当初はアラバスタ王家は民衆の手で滅んでもらう予定だったが……そいつは取りやめだ」

にいつとクロコダイルは笑みを浮かべた。

「王家には最期まで民衆に慕われるままに……死んでもらう。世界政府の手によってな」

### 第113話・計画の修正（後書き）

という訳で陰謀の変更をば

あの計画って穴がありすぎる気がするんですが、どうでしょうね？

ちなみに感想で聞かれた事ですが、ブルックはルンバー海賊団の遺骸は基本は水葬にしています。下手にあのままにしているモリアに利用される事になったらそれこそ悔いても悔やみきれないからですが、ただし、全員の遺骨の一部を持っています

共に、世界を回しましょう、そんな気持ちを含めてのものです。何時か、かつての彼らの願い、グランドライン制覇を果たしたら、その時はヨーキ船長の故郷と一緒に埋めようと考えている、という設定です

## 第114話・アスラの日

アスラの朝は早い。

朝5時起きで、感謝の正拳突き一万本。

かつてはえらい時間のかかっていたこれも、今では1時間程で終わる日課に過ぎない。轟音を立てる訳でもなく、ただ静かに空を引き裂き、日々に感謝の気持ちを捧げつつ打つ。

当初は神様とかに願ってみたのだが、軍隊が仲間の為に戦うというのが戦う理由の一番に来ているように、具体的な形のないものへと祈るのはどうにもしっくりと来ない。やはり、愛する人がいて、その人との間に子供がいて……世界を回る子供達が平穩に暮らせている今に感謝を込めて、というのがここ数年来の彼の想いだ。

それが終わると風呂を浴びる。

時折、ハンコックも一緒に入る事があり、その入浴時間が妙に長引く事があるが……まあ、中で何が起きているかは覗かないのが吉というものだろう。

誰だって馬に蹴られるような野暮になりたくはない。

大体、それが終わると子供達を起こす時間、というか朝の7時頃になる。

朝食を食って、朝8時半には出勤。

まずは急ぎの仕事から片付けていく。現在の仕事は造船総監が海軍の役職としては与えられているが、こちらは余り急ぎという事はないので、やはりCPからの報告が主となる。

「……やはり、BWは活動を新世界に移しつつあるか……」

アラバスタ王国に目をつけているのは変わらない。

だが、その為の物資の調達や人員の雇用、その他の拠点の内、主

なものを新世界に移しつつある。

無論、厳しい環境下にある新世界、移したはいいが潰れる人員もそれなりの数に及ぶようだが、その辺は実力のない者の淘汰と割り切っているのだろう。

(……砂漠の王国、クロコダイルにとっては正に最高の地だからな。早々狙いを変えらると思えん)

アラバスタ王国はスナスナの実の能力者であるクロコダイルにとって最高に力を発揮出来る土地だ。

加えて、長い歴史に、多数の人口、豊かな国力と非常に美味しい国だ。

(……とはいえ、それだけに落とすのは容易い話ではない。ダンパウダーの作用と思われる動きも別に王都に集中している訳でもないし、コブラ王と思われる影が別の街で目撃されている訳でもない)

そもそも、王たる立場にある者がそうはいはいと他の街へ姿を現すはずもない。

というか、現していたら国の他の人間の方が困る。それはフラフラと彷徨しているのと同じであり、仕事を放棄しているという事と同義だからだ。……加えて、これが青キジ大将のように襲われた所で返り討ちに出来る実力があるのならばともかく、国王が1人で出歩こうものなら、護衛が大変だ。

原作ではビビ王女がほぼ単独で潜入捜査なんぞ行なっていたが、あれだつて反乱軍の成立による国内の混乱がなければ誰かが止めていただろう。

王都でダンスパウダーが用いられていたのは、コブラ王がいてもおかしくない場所だったから、な筈だ。

では、『今は何を企んでいる？』

現状、アスラが悩んでいるのはそこだ。

国内で移動しつつ、あちらこちらでダンスパウダーを用いているのは、国内を混乱させるつもりなのだろうか、とも思うが……何分材料が足りない。

そして、アスラ中將にとって大問題なのは……これらをじっくり考えている時間がない。

仕事はまだまだ山積みだからだ。溜息をついて、とりあえず判断を保留にして、仕事に戻る。

そうして、午前中は造船総監含めた海軍としての仕事をこなし、午後からはCP長官としての仕事をこなす。

夕方からは会議に参加する事も多い。

おつるさんは大参謀と呼ばれているが現代風に言うならば参謀総長に相当する。アスラはそのサブ、副参謀長とでもいうべき立場に任命されている。書類仕事もそうだが、CP長官として現在の世界情勢について最も知識を有している人物でもあるからだ。

時間があれば、この後、主にボルサリーノ大将こと黄猿、或いはクザン大将こと青キジと近くの訓練施設で汗を流す。

他の本部長と手合わせする事もあるし、少将や大佐級をまとめて相手する事もある。今日のように。

「九尾 乱れ桜」

内心では別名：禁鞭モードと呼ぶ広域破壊モードだ。

無数の鞭へと枝分かれした銀の尾が周囲を破壊する……ただし、これでもかなり威力を抑えてはいる。

本気でやると、というか本気でやらないと意味がない大将相手は

ともかく、通常の相手ならこれで十分。周囲を粉碎してまとめて死屍累々の惨状になる。

これでも、海軍大將が相手となると勝率は5割を切るのだから、アスラとしては鍛錬を欠かす事など出来ようはずもない。

特に先だつての白ひげとの手合わせ以来、より早く、より鋭い一撃を追及している身としては尚更だ。

受け止めるのは限界があると紙絵の技もアレコレと試してみたりしている。

これらが終わるとまた残りの書類仕事がある。

文官や書類を待つている面々からすれば、こちらに専念して欲しいのだろうが、何しろ海軍本部中將だ。腕が鈍るようでは大問題だし、アスラとて望まない。

海賊相手の出撃とてない訳ではない。

というか、中將クラスの出撃が求められる事は案外と多いし、そういう時は大抵というか間違いない億越えクラスの危険な相手である事が大半だ。

だから、センゴク元帥など上層部が文官らを牽制してまで、アスラの鍛錬の時間を確保する。

これらが終わるともうとつぷり夜も遅くなっている。

ハンコックは起きて、アスラを迎えたがるが、それをやると翌朝朝食の支度などの為に早起きするハンコックが体を壊すとアスラが説得して、遅くなる場合は先に寝るように説得したお陰で最近は先に休んでいる事も多い。

こうして、帰ったアスラは布をかけて置いてある晩御飯を食べて、就寝する訳だが……。

(……………どう考えても、BWに対応する時間が足りん……………)



最近思っているのは、そればかりだ。

CP9は頑張ってくれているが、相手が相手だ。本来ならば、アスラとてもっと積極的に動きたいのだが……。

そう思いつつ、ふとCP9らの活動報告を思い浮かべた。

## 第114話・アスラの一日（後書き）

明日からはCP9の活動報告をしばらくお送りします

先だつて出番があつたジャブラ以外ですが

## 第115話・CP9：ロブ・ルッチ

ウーツ鋼製の棍が振るわれる。

凄まじい勢いで放たれた突きは、一発目が目標とされた海賊が獲物を持つ右腕の肩を砕き、二発目が左の肩を砕き、三発目が腹にこちらは少し手加減されて打ち込まれ、海賊は瞬く間に意識を失い倒れた。

それでお仕舞い。

30人からいた海賊達は全員が全員大怪我をして呻いていた。

「いや、さすがです！Mr.6！」

「素晴らしいお手並みです！」

それまで隠れていた、というか、Mr.6ことロブ・ルッチが（邪魔だから）隠れていると言って下からせていたミリオンズが海賊が全員ぶちのめされたのを確認して、出てきて、口々に褒め称える。

『嫌い、褒めた所で何も出んぞ』

と肩にとまるハトが言うが、ルッチ本人はミリオンズの姿を見ないまま、どこからともなく取り出した酒瓶をドンとミリオンズ達の前に置いていた。

「ゴチになりまーす」「」「」

一斉にミリオンズ達から声が上がった。

無論、ルッチ当人は背を向けているのだが……。

その夜。

テントを張り、ぶちのめした海賊達の見張りはミリオンズ達に任せ、ルッチ当人は棍の手入れをしていた。

ウーツ鋼が強靱な硬度を誇るとはいえ、あくまで本来得意とする素手戦闘の技術を見せない為の一時的な相棒とはいえ、戦闘に用いる以上手入れを怠るべきではない。

(……とりあえず、ここまでは来たか)

フロンティア・エージェントの最高峰。

ここから先はオフィサー・エージェントの領域だ。

周囲には気配がない事は分かっているが、口には出さない。無論、ハトも全く口を開こうとしない。

ミリオンズとなっているが、あの中にはビリオンズが混じっている事をルッチは知っている。間違いなく、自分を監視する目的だろう。

ここで、ルッチが先程見せたような、『無口無愛想無表情で、会話は全て肩にとまったハトが行なっている変人』『棍を武器とする武術家』『褒められると、或いはおだてられると、口ではどう言ってもつい酒だのを出してくれる、おだてに弱い人間』といった顔を作っているのも偽装の一環だ。

(……ブルーノが伝えてくれたが、ジャブラが先だって新世界でMr・1とやりあったという……俺が誘われているのもそれか?)

ルッチが賞金稼ぎとして活動をして程なく勧誘があった。

ちょうど、フクロウとクマドリがダンスパウダー船を壊滅させた辺りで、BWが戦力強化を図って募集を強化した辺りだ。

そこから上がってくるのは簡単だった。

幾等実力を隠しているとはいえ、ルッチはCP9最強の戦闘要員

だ。そこらのミリオンズ・ビリオンズなどと名乗っている雑魚に負けはしない。オフィサー・エージェントでも連れてこなければ、相手にもなるまい。

とはいえ、そこまで大っぴらにやる訳にはいかなかったので、それなりに時間はかかったが、お陰でここまで来た。

そんなルッチに異動の話が来たのはつい先日だ。

『とある島での警備任務』。

警備という事で当初は渋っていたが、向こう曰く『退屈する事はない』仕事だと言っていた。

当初はそんなに襲撃の多い島か？と思っていたが、新たに情報を得てみると、新世界の島の可能性が出てくる。

(であるならば、受けるべきだな。施設の情報が得られるのも大きい。……新世界で鍛えられるのならば、それもまた良い)

ルッチは以前、アスラCP長官に敗れた。

別に怨むつもりはないが、このまま負けたままというのも純粹に悔しいという気持ちもある。

(……俺にもまだ武術家としての心があったという事か)

手入れを終えた棍を確認しながら、内心で嘲う。

殺人を合法的に行なえるからと所属していたはずだった。

これまで何十人何百人ではすまない数を殺してきた。

自らの両手は所謂『血で真っ赤に染まっている』状態だろうが、それを悔いる気は微塵もない。全て自分が選んだ道だ。

その翌日受諾の意思を伝え。

Mr.6ことロブ・ルッチは新世界へと旅立つ事になる。

第115話・CP9・ロブ・ルッチ（後書き）

まずはルッチ

現在、原作では出てこなかったMr・6となっています

明日はカク、続いてカリファと続く予定で、それぞれの悪魔の実も登場予定です

一応、どんな実か、特徴などをそれぞれの話の後書きで書く予定です

第116話・CP9：カク&カリファ（前書き）

2人の悪魔の实の詳細に関しては後書きにて

## 第116話 - CP9 : カク&カリファ

CP9のBW潜入組の残る2人、カクとカリファはコンビを組んでいる。

これが同時に、というのであれば恣意的なものを疑わねばならなかったが、カリファがまず、ミス・マンデーとなった。ちなみに他に候補として原作の彼女がいたのだが……やりあって勝てる訳がない。

一応手合わせはしたのだが、すぐに彼女が負けを認める事になった。

その後、偶々それまでのMr.8が『事故』で亡くなった事から下から新たにカクが昇進する形で現在のMr.8に収まり、2人でコンビを組む事になった。

彼らがやる事が賞金稼ぎであり、海賊とて好きでやられる奴がない以上、社員の中には返り討ちにあう者も当然いる。

それ故に、こうした死亡は決して珍しい事ではなく、場合によっては内部情報が洩れる事を防ぐ為の暗殺すら行なわれる為に、前Mr.8の『事故』死も疑問がもたれる事はなかった。

さて、BW所属の賞金稼ぎ達は大きく分けると2つに分かれる。

片方は原作のウイスキーピークが代表例だろう。

同じ組織に所属している利を活かし、集団でのチームを組み、海賊を油断させ大勢で襲う。

これだと1人当たりの儲けは確実に減る。

だが、反面安全性は格段に増す。

もう片方はその真逆だ。

1人ないし2人程度のチームで海賊を狩る。

これだと危険性は格段に増す事になるが、反面、上手く行った時



の儲けは前者を大きく凌ぐ。

どちらが正しいという訳ではない。

敢えて言うなら、どちらも正しい。

自分の力量を把握し、自分が生き残れる道を選ぶ。如何に大金を稼いでも自分が死んでしまっただけは意味がないし、反面、力があるのに何時までも安全に小銭を稼いでいては上に上がれない。

無論、カクとカリファのコンビは後者だ。

「悪いのう、ここでお前さん達の旅は終わりじゃ」

グランドラインに入ってきた後、極めて幸運にも比較的トラブルなく進んできたのだろう。

前半の海を半ばすぎようかという所まで来ながら、未だ2000万に届いてない賞金首を前にカクはそう告げた。別に格好付けなぞではなく、死屍累々と呼ぶ有様が相応しい周囲の光景を見れば、むしろ当然の言葉と分かるだろう。

「くそ……！なめやがって！」

言うなり、目の前の男の姿が変わっていく。

ほう、と感心したような声をカクは上げる。どうやら、本気で運が良い海賊だったようだ、まさか悪魔の実まで手に入れていようとは。

「これが俺の……ワニワニの実モデル：メガネカイマンだ！」

ふむ、とカクは顎に手を当てる。

目の前には完全に服を着たワニと化した海賊がいる。

「……いいじゃろっ」

言いつつ、カクもまたその姿を変える。

「なら、ワシも見せてやろう……これがワシの悪魔の实の能力。ゾオン系古代種、ゾウゾウの实モデル：マンモス、じゃ」

カクが悪魔の实の能力を使ったのは別に面白半分でも、相手に合わせてやった訳でもない。もちろん、見せびらかしたかった訳でもなく、純粹な意味合いがある。

カクは悪魔の实の能力者となってまだ日が浅い。

【生命帰還】の技を用いて、獣人とでも呼ぶべき姿になっているが、失敗して完全にマンモスの姿になってしまった事も1度や2度ではない。

平時なら問題はない。

問題は戦闘時だ。

如何に格下が相手であろうとも、戦闘では緊張がそれなりに発生もするし、強者が相手となればギリギリの所で制御出来ないと困る。故に能力者となってからは、カクは積極的に悪魔の实の能力を使う事になっている。もちろん、BWの目がない所限定だが。

「鼻銃<sup>ヒガン</sup>！」

鋭く伸びた鼻が相手に突き刺さり、結局それだけで戦闘は終わった。

「……カリファ、どうじゃ？」

周囲を警戒していたカリファがしばらく耳を澄ませていたが、問題ないと首を縦に振る。

「大丈夫そうですね。周囲に意識のある存在はいません」

カリファもまた、悪魔の実の能力者だ。

カリファの食った悪魔の実はパワパワの実。身体能力を一種類強化する事が出来る。今はそれで、周囲の確認をしていたのだった。

「どうです？慣れましたか？」

最近は、2人して悪魔の実の欠点と利点を洗い出すと同時に、それに慣れる為に実戦を積み重ねている。

今日のような相手は雑魚だったが、中には億に迫る相手もいた。

「……以前よりは大分マシになったようじゃのう。とにかく、ルッチが新世界側に回る以上ワシらはこちらの海の事を探らにやならん」

先だつての情報で、Mr.6ことルッチが新世界へ異動する事が確定した。

確かに、重要拠点の情報を探るという意味では嬉しい話だが、喜んでばかりはいられない。

幾等重要拠点の幾つかを新世界に移したからといって、今現在で尚、一番クロコダイルが狙っている可能性の高い場所がアラバスタ王国であるという事実は変わらない。

当然、グランドライン前半の海には前半の重要性があり、そちらの調査も怠れるものではない。

「……こつからは余り目立たないよう気をつけにやならんわ」

「そうね、潜入組が全員新世界へ行つて、こつちが全然探れない内に手遅れになりました、じゃ笑い話にもならないわ」

確認しあいながら、2人は再び任務へと戻っていった。

## 第116話 - CP9 : カク&カリファ (後書き)

今回はカクとカリファでした  
今回はフクロウにするか、ブルーノにするか、クマドリにするか……  
以下は2人の悪魔の実について

カク

【ゾオン系古代種ゾウゾウの実モデル：マンモス】

イメージ的には某キン肉マンのマンモスマンのようなイメージに近い  
獣人化すると手足の肥大化（筋力の増大）などが起ると共に、鼻が  
伸び、長大な牙が生える

この牙を用いての6刀流並の技を用いれないか試行錯誤している  
パワーや頑強性に優れる分、敏捷性は劣る

カリファ

【超人系パワパワの実】

肉体の何か一種類の力を強化する事が出来、例えば嗅覚を強化すれば  
猟犬さえ越える嗅覚を、視覚を強化すれば夜闇さえ見通す

また、筋力を強化する事で強大な力を発揮する事も出来る

反面欠点としては、常に何か強化しておかねばならず、完全なOF  
Fは出来ない（通常は解毒作用を強化している）

切り換えが自分の意志によるもので、自動では起きない為、突発的  
な事態、例えば視覚強化中の閃光弾などを喰らえば酷い事になる

また、一種類しか強化出来ない為、筋力を強化して強大なパワーを  
発揮した場合、その直後に筋繊維の断裂、耐えられなくなった骨の  
骨折や脱臼などが起る為、激痛に見舞われる事になる

また、治癒能力強化によって、治癒が完了するまで、そうなった部  
位がしばらく使用不可に陥る事もある

## 第117話・CP9：クマドリ

鋭く突き出された棍の先が掠める。

錫杖を牽制とばかりに突き出すが、するりと避けられる。

その瞬間の隙について、棍がクマドリの腹を抉った。

「ぐっ！」

咄嗟に【鉄塊】をかけたものの、衝撃は鋭く内部浸透する。

クマドリは呻き声を上げつつも、錫杖を大きく振り回し、それを相手は軽やかに回避するが、結果として距離が開いた。

（容赦ないのう……）

内心で苦笑しつつも、表情に出すような真似はせず、目の前の『敵』を睨む。

……BWのMr.6、すなわち、ロブ・ルツチの姿を。

そもそも、クマドリが新世界を訪れる事になったのはルツチとの連絡の為という面が強い。

これまでは、ブルーノがアラバスタ王国王都に設けた酒場が連絡場になっていた。

だが、新世界に行ってしまったのは、そうはいかない。

そこで、新世界にあるBWの拠点の情報の受け渡しの為、或いはそうして得た施設を探る為にクマドリが赴いたという訳だった。実際問題として、新世界にBWが重要拠点の幾つかを移したというのは非常に面倒な状況を生み、前半の海と後半の海（新世界）双方の連絡が大きな問題となっている。

ブルーノの酒場は潰す訳にはいかないが、とにかく人手が足りな

い為、最近でCPからの要員を派遣して、ブルーノ当人も動かしている有様だ。

グランドライン前半にはカクとカリファが潜入状態、フクロウとブルーノが情報の受け渡しと入手した情報を元に捜査。

後半こと新世界にはルッチが潜入、ジャブラとクマドリが以下省略。

そうして、クマドリが現地協力者から渡された情報を元に、ある施設に潜入し……その警備に当たっていたMr.6と遭遇し、今に至る、という訳だ。

何故、こんな状況になったのか？

それを一言で言えば、『運が悪かった』としか言いようがないだろう。

ルッチがいる施設にクマドリとて潜入するつもりはなかった。

ところが、ルッチが移動中、新世界の突発的な異常気象により船が破損、急遽この島の施設に意図せず立ち寄る事になった。無論、本来の目的地がある為、翌日には移動予定だったのだが他ならぬその異常気象によりクマドリの到着は逆に早まり、当初予定より1日早く到着し、施設への潜入を行なった所、こっそり盗み食いをしていた警備に運悪く遭遇。

更に拙い事に盗み食いがばれていた為に駆けつけていた他の者達に見つかり……現在に至る。

(……ルッチ以外はどうとでもなるんじゃないが……)

更に言うならば、ルッチは六式を一切用いていない。

だが、そもその実力に大きな差がある以上、余り慰めにならない。

「ええい……！【生命帰還】！」

髪がうねくり、ルッチを絡めとろうとするが、ルッチは棍をぐるぐるとすかさず回転させ、逆に髪を絡めてそのまま振り回す。

絡まった為にすぐに切り離せぬまま、その大元の体ごと振り回されたクマドリはそのまま床に叩きつけられた。

『もう1度言う。素直にどこの手の者が吐け。そうすれば、命は助けてやるかもしれないぞ?』

ルッチの肩のハトが言うが、そんな訳がない。

ルッチならば、CP9の情報を守る為に、きっちりと自分を情報を吐く前に始末してくれるだろう。その点に関しては、クマドリは確信というか信頼しているし、怨む気は毛頭ない。

逆の立場なら、自分でもそうするだろうからだ。

「生憎、そういう訳にゃあ〜いかんのう〜よよいっ!」

全身痛むが、そこは見得を切る。

だが、ここで幸運な事が起きた。

一部の者が加勢すべく、という名の元に功名を上げようと弱ったと見えたクマドリの背後から襲い掛かったのだ。

無論、クマドリがそんな連中にやられる筈もなく、逆に彼らを盾に逃走を図る。

「それじゃあ〜これでおさらば、じゃあ〜よよいっ」

【判】でもって全速力で駆ける。

入り口付近に固まっている連中は壁を走り、そのまますり抜ける。そこはビリオンズであっても所詮は雑魚。【判】の速度に目がついていかず、あっさり抜かれる。



ルツチは見えていたし、追う事も可能なのだが……六式を披露出来ない以上、『邪魔だっ！』と障害物と化した連中をわざわざ掻き分けて、進むが既にこちらを見ているビリオンズ連中の頭上を駆け抜けて言った後だった。

「あれ？あいつはどこに？」

と言っている連中に、『何を馬鹿な事を言っている。お前達の頭上をぬけて行ったぞ』と叱咤し、急ぎ後を追わせるが、無論追いつける筈もなく、また少数で勝てる筈もなく、3名程が返り討ちにあつて、脱出される事になる。

とはいえ……ビリオンズ連中に見れば、邪魔をした拳句逃げられるという失態を重ねた事になる。その事を指摘した上で、ルツチはビリオンズ達を精神的に追い詰めながら、BW上層部に報告すると告げた。そうなれば、当然ビリオンズ達の階級は下がるだろう。焦った彼らは何とか上に黙っていてくれと懇願した拳句、ルツチの肩のハトは『……今回だけだ、次はないぞ』と告げた。

無論、ルツチとしてはそうなるように仕向けた訳だが……。そして、何もなかった事にする以上、特にこの島に滞在する理由もなく……翌朝には予定通り出航した。

ビリオンズ達は自分達で捕らえて、功績を！と動くが……結果から言おう。

クマドリは怪我を負いはしたものの、ルツチがそこは巧妙に行動不能になるような怪我は避けていた事もあり、翌日傷の応急処置を済ませ、再度潜入。

無事、必要な一式を確保し、島からの脱出に成功する事になるが……ビリオンズ達はまさか、再度戻ってくるとは思わず、施設の外への搜索に熱を上げ、施設をがら空きにしていた為気付かなかった。

そして、報告が為されていない事をいい事に、結局見つからなか

つた為に『何事もなし』と偽りを続ける事になる。

第117話・CP9：クマドリ（後書き）

必要なら味方同士で殺し合いもします

今回は余計な介入を活かして、逃走しましたけれど

搜索範囲が広がったせいで、CP9も苦労してます

## 第118話・CP9：ブルーノ

「……こいつは×、こいつはここは だが、どうもな……」

ブルーノは採点を行っていた。

採点。

それだけ聞けば、勉強を思い出して嫌な気持ちになる人もいるかもしれないが、CP9本来の任務からすれば平和的に思えるかもしれない。

目前で、死体が生産されている状況を平和的と言えれば、だが。

そもそもは、最近の人手不足が原因だ。

アラバスタ王国に留まらず、BWの活動領域が新世界まで広がった為に、CP9も部隊を分割せざるをえなくなった。

こうなると、ブルーノも酒場の主人で拠点担当と言っていていられず、最近ではフクロウ共々アラバスタ王国での調査活動に携わっている。

そんな時にアスラ中將から尋ねられたのが、『六式使いでない者でも何かに使える奴はいないか?』という事だった。

一瞬否定しかけたし、何でそんな事を、と思いましたが、よくよく考えてみれば、アスラ中將の傍には五式使いにしてルッチ以外に勝利を収めうる(ちなみにブルーノも未だ勝っていない)グランタイガーのアリスがいる。

六式使いでなくとも勝てる実例がいては、頭から否定する訳にもいかないか、と思うと同時に確かに重要任務に使えないとしても何かに使えるかも、と思ったのは事実だ。

そこでまず、候補生に任務を命じた。

CP9の仕事に関わる可能性がある、などという事は告げたりはしない。

もし、捕まった場合に情報が洩れる危険があるからだ。

場所もBWとは全く関係のない組織の1つだ。

そこへブルーノは一足先にドアドアの実の能力を用いて潜入し、そこへ潜入してきた候補生達の動きを採点していたのだった。

さて、六式という武術はその名の通り六つの技とその派生技から生る。

迅速な移動と脱出を可能とする【荊】

空中移動を可能とし、活動の範囲を広げる【月歩】

全方位からの攻撃を防ぐ為の【鉄塊】

鉄を貫くような、けれどその分大振りとなりやすい攻撃をかわす為の【紙絵】

接近戦闘用の【指銃】

主に遠距離戦闘用の【嵐脚】

この六つだ。

こうしてあげてみると分かるが、それぞれは密接に関わっており、1つが欠けるとそれを補う何らかの方法がない限り、対応不可な事態が発生しやすくなる。

事実、候補生達もそれが原因で倒れていた。

無論、5名という少数で一介の組織に潜入する任務をテストとはいえ与えられるような連中だ。六式まではいかずとも、それなりの技は使える、のだが……。

まず、【鉄塊】【指銃】の使える二式使いが倒れた。

幾等攻撃を弾いても、他が【荊】を使える中で1人使えない、では次第に遅れがちになり、孤立していく事は避けられない。

最期は包囲されて、連続攻撃を受け、【鉄塊】が解けた所に集中攻撃を受けて倒れた。

「……矢張り基本的には六式全てが使えん事には意味がないか」

あの虎はあくまで類稀な例外、という事だな、とブルーノは内心で溜息をつく。

まあ、あの虎……アリスの存在は『六式が使えれば強いという訳ではない』という大事な事を思い出させてくれた。『六式全てを使えずとも強い奴は強い』という事も思い出させてくれた。

その点に関しては感謝している。

「……後は『海イタチのネロ』のみか」

四式使いという事だが、成る程、使える技を見れば足を使った系統は取得しているようだ。

「接近戦闘に難あり」

【嵐脚】を掻い潜ってきた相手を拳銃で牽制する。

拳銃で怯むなり、回避した際に【剃】で距離を取る。

距離を取れば、【嵐脚】なりでトドメを刺し、それでも接近してきた一撃を加えてきた相手の攻撃は【紙絵】で回避する。

上手くいっているように見える、だが……。

「やはりこうなったか」

最大の難点は防御が【紙絵】一本槍という事にある。

回避の【紙絵】と受けの【鉄塊】。

前者は相手が少数ならばいいが……集団で攻撃を受けると一気に脆さを露呈する。

吹き抜けの空間で、周囲から銃弾を撃ち込まれ、懸命にかわしていたが……。

「せめて、空中で技を使えるようにしておくべきだったな」

一発が命中。

体勢が崩れた所へ二発目が。

三……四……五……。

力なく地面に叩きつけられるまでにネロの体には無数の銃弾が撃ち込まれ、既に絶命していた。

「……全滅。使える者なし」

エアドア  
空気開扉。

大気をドアと化し、ブルーノはもう用済みになった組織の施設から離脱する。離れた場所へ移動した後、手元のスイッチを押すと、施設は大爆発を起こした。……仕掛けておいた爆発物によるものだった。

「上手く潜入出来なければ、1度脱出を図るのも手だ。柔軟な判断が欠けているようではCP9は務まらない」

別に1度で任務を果たせとは命じられていない。

今回の仕事で命じられたのはあくまで、『某組織の某施設の機密書類の奪取』のみ。一応期日は定められているが、その間なら幾度でも挑戦して良い。

潜入に失敗して、発見された時点で強硬策に彼らは出た訳だが……取れる手段は他にもあったはずだった。

諜報員に求められるのは強さだけではない。

柔軟な判断、冷静な思考、必要なら何年でも耐える忍耐に一定水準以上の専門的な知識など数多い。だからこそ、CP9は少数精鋭なのだ。

ブルーノはそれ以上紅蓮の炎に包まれる施設に目を向ける事なく、

必要な書類を抱えてその場を離れていった。



第118話・CP9：ブルーノ（後書き）

必要な技術は数多く、求められる物もまた多い

現代の諜報員だと大分違うと思いますが、ワンピース世界の連中は映画の世界をいってる面々ですからねー

## 第119話・CP9：フクロウ

フクロウはCP9の実働要員という中では最弱の部類に入る。

悪魔の実といった特徴がある訳でもない。

ただし、それはあくまでCP9という組織において、の話でその  
実力はCP9の一員という時点で十分だろう。

むしろ、フクロウの問題は別の所にある。

すなわち、口の軽さだ。

チャックを自分の口につけて、うっかり喋らないようにしている  
ぐらいだが……自分で開けていれば世話はない。ジャブラの一件も  
それこそあつという間にエニエスロビー全体に広まったのだが……  
こちらは皆知つてはいるが、口に出す者はいない。

理由は単純で、ジャブラに聞いたが最後、口から何かが出そうな  
程の惚気話を延々聞かされる事になるからだ。

相手の女性をネタにしようにも、CP長官を務める海軍本部中将  
の妻の妹。軽口の対象にするにはどうにも腰の引ける相手だ。

さて、何が言いたいかというと、本当にそこまで口の軽い人間が  
政府の暗部を担当する組織の更に深い所にいる組織に配属されたり  
するだろうか？

そんな訳がない。

これはフクロウのそんな一面のお話……である、多分。

「チャパパパ……暇だチャパ」

フクロウは暇だった。

と言つても、先日までは恐ろしく忙しかった。

当然だろう、現在CP9は総動員態勢だ。

フクロウはグランドライン前半部を担当するチームに入っているが、ブルーノ共々このポジションが実は一番忙しい。何故そうなるかといえば、CP9がやる仕事はBWだけではない、という事に尽きる。

先だつては革命軍の幹部の暗殺を命じられ、果たしてきた所だつた。

「おつ、フクロウさん、お疲れさん」

顔見知りの衛兵が声を掛けてきた。

常に気を張っていては精神が持たない。どこかで気を抜ける場所が必要とも言えるのだが、CP9にとってはある意味このエニエスロビーこそがそう言える場所だつた。

司法の島エニエスロビー。

海賊含めた犯罪者にとつては自らを或いは処刑に、或いはインペルダウンへと送り込む恐ろしい場所でもあるが、法の側に立つ者達にとつては、こここそがホームだ。

ちなみに、裁判長は現在はバスカヴィルに代わっている。ちなみにトムの件でなかなかの大岡裁きを見せた先代裁判長の引退理由は高齡の為、だつた。

「今度はどこで仕事してきたんだい？」

「チャパパパ、今回は南の海チャパ」

あっさりと洩らす、この辺はまあ許容範囲だ。

「へえ、どんな仕事だつたんだい？」

「暗殺チャパ」

……きよ、許容はん、い？

まあ、そこら辺はエニエスロビーの衛兵。暗殺という言葉も聞いても驚いたりはないが……とはいえ、他のCP9の面々やアスラなどが聞いたら即効で沈黙させられるのが確定だろう。

「へえ……今回は誰だい？」

「チャパ、それはきつと……」

「きつと？」

「秘密チャパ」

そんな返答にも衛兵は何時もそれだなあ、と笑っている。

実は、フクロウ、結構口が軽いが、相手にも処罰がいくような話に関しては喋ったりはしない。自分が自分の軽口や口が滑った事で処罰を受けるのは自業自得だが、それに巻き込まれた方はたまったものではない。

もし、フクロウがお構いなしに喋るような相手だったら、衛兵とてこつも気安く話しかけたりはしない。そこには確かに、相手に対する信頼があった。

そういう意味では、フクロウもストレスが溜まる。

何しろ、彼が遠慮なしに口が本当の意味で滑っても問題ないのは、CP9の同僚達であり、或いは長官だけだった。

だが、同僚達は滅多に出会えない状況になっているし、長官はそうそう会えるような相手ではない。

とはいえ……。

「やはり軽口は楽しく滑るものチャパ」

だからこそ、相手は選ばないといけない。

第119話・C P 9：フクロウ（後書き）

難産だ…

フクロウの暗殺シーン書くつもりでしたが、結局こつなりました

何と言いますか……

暗殺って場面を直接に書くと地味に

第120話・ある1日の出来事（前書き）

今日は何かグダグダ……  
っていうか、頭が働かない

## 第120話 - ある1日の出来事

アリスは虎だ。それもグランタイガーと呼ばれるグランドラインの一部の島にのみ生息する大型の獣。

アスラの元の世界に生息する虎より2回り以上大きいその巨体は初見の者を圧倒する。

……とはいえ、アリスがマリنفォードにやって来て以来既に10年以上の月日が過ぎた。さすがにそれだけいけば、マリنفォード在住の一般人も慣れる。

最近ではアリスを見てびっくりするかどうかで、以前から暮らしていた人かどうか見分けられる程だ。

「おっ、アリスちゃん散歩かい？」

「みゃう」

今日も今日とてマリنفォードの街並みを散歩するアリスだった。マリنفォードは治安がいい。

海軍のお膝元の島だ。それでも悪事を働くものが全くいなくなる訳ではないが、事故や突発的な衝動的なものによる以外殺人なんてものはまず起きないし、盗みを働く奴もいない。

街の住人に聞けば、『そうだね、そういうえば昔、某准将の息子が不良ぶってお店から物を盗んだ事あったんだけど傍にいたセンゴクさん…… ああ、当時は大将に追いかけてとっ捕まってるね、そのまんま海軍に強制入隊だよ。え？ああ、今は生真面目に海軍大佐なんてやってるよ』という話が聞けたりするだろう。

治安がよければ、安心して商売も出来るし、活気も生まれる。

そんな賑やかな街の中を全長数mに達する大型の虎が機嫌良さそうに散歩する。ある意味とてもシニールな光景だが、誰も気にして



いないどころか、小さな子供がよじ登って背中ではしゃいでいたりする。

これが、小さな動物なら餌とかを貰ったりする事もあるのだろうが、さすがに巨大な虎に餌をやるのは少々この街中では難しい。

とはいえ、アリスは困る事などない。

おなががすいたのなら、マリンフォードの幾箇所かに行けばちゃんとご飯が貰えるからだ。

「おや、久しぶりだね。ご飯食べていくかい？」

「みや？みやあ！」

ある場所を通りがかった時、白衣を着た人物から声を掛けられた。ちなみに傍には腹巻にマサカリを担いだ男がいて、アリスは小首を傾げたが見覚えがある事に気づき、頬を摺り寄せる。

「うおっ！？だが、俺は口の固い男、気持ちいいとかもつとやってくれとは口が裂けても言わねえぜ！」

などと当人が言っている間にご飯が用意される。

ここのご飯は少し変わっているが、美味しい。何とというか、毎日食べる飽きてしまうが、時折無性に食べたくなるとでも言えはいいのだろうか？

綺麗に平らげ、遊んで帰ったアリスを見送った人物は傍らの戦桃丸から電伝虫を受け取るとある所へと連絡を取った。

「……やあ、センゴク元帥。問題なし、順調に推移しているよ」

『お手数をおかけします、Dr・ベガパンク』

「なに、兵器をただ作るより余程楽しいさ」

実の所、アリスは元々『スペシャル』な個体ではあった。  
グラントイガーは本来、群れる種族ではない。

基本的に家族をその生活単位とし、成長して新たに家族を得ると、  
場合によってはそれまでの家族と戦う事すらある獰猛な種族だ。

なのに、アリスにはそれが無い。

兄妹なのか姉妹なのか或いは姉弟かは知らないが、もう1匹の行動が本来のグラントイガーとしての行動であり、かといって番としてアスラ中將を見ている訳でもない。

家族としてアスラを、更にハンコックを受け入れ、更に他の一同も受け入れている。

はつきり言ってしまうえば、このマリ克福ード全体を自分の属する群として受け入れているとしか思えない行動を取っている。

「ただ、それだけに前のままでは群を攻撃すると思った相手に対する過剰反応の危険があった」

『そうだ、特に天竜人の方々がいるからな……』

その結果、アスラ中將が離反なりという事になったらえらい事だ。  
そこでセンゴク元帥がDr.ベガパンクに相談の上、特別な食事をアリスに与える事で知性とも言うべき部分を、自製の部分を高めている。

ベガパンク自身は武器の開発が好きではない。

だが、どんな技術とて結局の所使い方次第だ。

例えば、サイボーグ技術を現在も鋭意開発中だが、これを兵器として使うのがパシフィスタ計画であり、その素体として選ばれた王下七武海の一角、バーソロミュー・くまが原作においてどうなった

かは言うまでもない。

だが、この技術を兵器ではなく、他の部分に使えばどうか？

例えば、事故や海賊との戦闘などで腕や足を失った人に使えば？  
そうすれば、日常生活を普通に送る事も可能なはずだ。

Dr. ベガパンクはお金や技術レベルの不足がどういいう事を招くかよく知っている。

故郷のバルジモアで、幾度或いは資金が不足して、或いは必要な加工技術が足りなくて断念した事か。

自らの技術を使えるレベルに開発し、コストダウンを果たし、世界の人々が使えるようにする。その為には世界政府の支援が必要であり、その為には兵器開発を行なう事も必要だと理解している。

とはいえ……やはり、こういう事の方がまだ気楽なもの確かだ。

さて、そんな風に言われているなどと考える事もせず、アリスはご飯を食べた事もあり、のんびりと海辺の港近くの岸壁でお昼寝としゃれこんでいた。

街中ではさすがに子供達が群がってくる。

普段なら遊び相手を務めるのも楽しいのだが、やはりおなが膨れた後は少しゆっくりしたい。

そんな時にはアリスはここに来る。

或いは海軍本部に入り込む。

今日は何となくこっちの気分だった訳なのだが、間が悪かったよ  
うだ。

「ん？何で、こんな所で畜生が寝てやがる。おい、どけ！」

えらそうな声にひょいと顔を上げるとそこには大柄で厳つい顔の男がいた。

肩には海軍本部大佐の真新しい階級章がついているのだが、アリ

スには分からない。首を傾げていると、大佐は苛立ったのかアリスの尻尾を踏んづける。

「みぎゃあ!？」

さすがに驚いて飛び上がったアリスはなにをするんだ、とばかりに睨みつける。

一方、海軍本部大佐の方はといえば、所詮グラントイガー1匹という考えがある。これぐらいなら、海王類でも相手する俺ならどうとでもなる、と……。

実の所、この海軍大佐、その実績が認められ海軍本部に誘致が決まり、今日到着した人物なのだった。

「ふん、畜生でも怒るか……ほれ、かかってこい」

余裕の姿勢で手招きする海軍大佐にアリスは怒って飛び掛った。

……ちなみに周囲の『知っている』面々は海軍本部大佐に哀れみのこもった視線を向けていた。……結果？言うまでもないだろう、しばし後に機嫌良さそうに尻尾を振りながら立ち去るアリスが立ち去った後には、ボロクズと化した大佐が転がっていた……。

アリスの日常はこんな感じだ。

ちなみにこの大佐に関しては後日談があり……あの猫野郎!とばかりにどこの家で飼われているのかと探ったのだが、有名なだけにすぐに分かった。

そこで殴りこみをかけて、ハンコックの美しさに目を惹かれて口説きだしたのだが……相手にされず逆上した。

のだが。

「おい!俺は海軍本部大佐……!」

「人の嫁さんになにしてやがる？」

旦那か、ちようどいいとばかりに振り返った先には海軍本部中将。更には横にはアリスがついて、不機嫌そうに唸っている。

……結局、この大佐。アスラの配下になり、連日しごかれている  
そうである。

第120話・ある1日の出来事（後書き）

アリスの1日でした

何だかグダグダになってしまった……

寝て、疲れ癒そう

明日からは、モーガンさんの現在を3話ほどで……ちなみにウソッ  
プにも関係しますというか出ます

第121話・モーガン討伐記（前書き）

原作では初期の悪役だったモーガン大佐です

この話では大尉ですが……

本部大尉ですから支部大佐相当ではあるんですけど

## 第121話・モーガン討伐記

「ああ、元気でな」

海軍本部でモーガン本部大尉がスモーカー准将に対して一礼していた。

アスラも結構相手をしてやっていたのだが……さすがに大尉の見送りに来れるような立場ではない。そもそも、幾ら縁があったとはいえ、准将が見送りに来た事自体がかなりの例外なのだ。

モーガンがこの島に来た頃はどこか歪んだ気配を漂わせる男だった。

だが、アスラがキャプテン・クロ逮捕時があまりに曖昧である事から詳しく調べるよう指示を出した事から彼の状況は変わった。

幾ら聞いても、余りに漠然としたイメージしか湧かない為、催眠術も用いての調査が行われた。何しろ海軍は巨大組織であり、後ろには世界政府があり、アスラが動いた以上CPという伝手もある。催眠術が使える者もいた。

モーガンとしても自分の出世がこのままでは……と焦っていた為に同意したのだが……その結果、何かしらの暗示がかけられているようだ、という事が判明した。

そうして、その暗示を解くべく治療が行なわれ……ある日突然それは解けた。

解けた時、モーガンは……慟哭した。

本来、モーガンは仲間思いの真面目な海兵である。原作ではそれが歪められていた訳だが……思い出した時、彼は無残に殺された仲間達の姿を、その中に立つクロ達の姿を思い出したのだ。

……自分がクロを捕らえてなどいない事も。



全てを伝え、今もどこかに潜んでいるであろうクロの逮捕に向かいたいと東の海へと戻る事を願ったモーガンに、当初は海軍もそのまま行かせても、という雰囲気だったが、アスラがストップをかけた。

当人曰く『モーガンの事件のお陰で、海軍の改革の端緒がついた。これも何かの縁だ』との話だったが、とにかく、キャプテン・クロと戦えるだけの実力をつけるべきだ、と伝えたのだ。

モーガンも確かに今のままでは返り討ち、と納得し、海軍で鍛えた。

その姿は鬼気迫るもので、鍛え実戦に出撃し、また鍛えて……。

1度ならず、重傷を負った事もあったが、それでも鍛錬を止めようとはしなかった。

特に彼が熱心に取得したのは六式の中でも2つ、【剃】と【鉄塊】だった。クロの速度と攻撃に耐えるにはこれがいい、とばかりに励んだ成果があり、修得した事とそれなりの実力がついたと看做された故に、ほぼ1年後の現在、アスラ感覚で原作の2年前弱となった今、こうして再び東の海へと戻る事になったのだ。

「息子さんの事はいいのか？」

「あいつはここでこのまま鍛えてやって下さい」

原作と異なり、ヘルメツポは今では真面目に鍛えている。

何しろ、原作では父親は町の絶対的な権力者だったが、マリンプォードでは一介の尉官。

遊び呆けようにも父親は真面目に仕事中。

ふざけようにもちよっと周囲を見れば偉い海軍軍人がゴロゴロしている有様。

こんな状況では自然と態度も改めざるをえない。

元々、ヘルメツポも原作で素直に『自分が間違っていた』と頭を下げる事が出来たように、その後の彼を見れば分かるように真面目な頃のモーガンの血が流れている。

今では海軍に入って、下から上を目指して鍛えている。

「とりあえずお前さんの立場だが、本部直属の巡察官っていう立場になる。どこかの支部に配属して訳じゃなく、小型の艦船であちらこちらへ移動して手伝いと監査って立場だな」

「はい。ありがとうございます」

モーガンにとってもその方がありがたい。

キャプテン・クロはどこに潜んでいるか分からないからだ。

どうやら、クロ自身は一味を離れているらしい。

最近手配書で確認したが、クロの右腕と言われたジャンゴが海賊団の長となっている。

まず、狙うはそこだろう。

ジャンゴは『あの時』も間違いなく、クロの傍にいた。あの後、どうなったのか、何故クロが捕まったという事になっているのかについても知っているはずだ。

……とはいえ、そうすぐに狙った海賊に会えるはずもない。

東の海で出会った最初の海賊はこちらが小型の海軍艦艇と見るや、逆に攻撃をかけてきたのだが……。

「……こんなものか」

あまりの呆気なさに逆に拍子抜けしてしまう。

以前の自分なら苦戦していた。

『金棒』のアルビダ。

懸賞金額400万ベリー。

力自慢の猛女だったが……この程度の力の持ち主ならば、マリンフォードにはゴロゴロしていた。何しろ、ガープ中将など船より巨大な鉄球をぶん投げてくるような真似までするのだ。

おまけに、それに他の面々も平然と対処するし……。

そんな中で生活していれば、ごつい金棒を振り回してくるぐらいなんだというのか。1年程ではあったが、自分が恐ろしく濃密な日々を送っていた事に、グランドラインの常識がどれだけ東の海とかけ離れているかを実感したモーガンだった。

彼の役割上、海兵もグランドラインの海兵達だ。

この程度の弱小海賊団にやられるほど弱くはない。

「モーガン大尉！」

「なんだ？」

「は、捕らえた海賊の1人なのですが、その相手が」

「あつ、あの！」

話している時、誰かが後方から声を掛けてきた。

見ると、海兵に抑えられながら少年が声を上げている。

「僕を……海兵にしてください！」

## 第121話・モーガン討伐記（後書き）

ちなみに、アルビダの懸賞金が400万と100万安いのは、原作からまだ2年弱時間があるからです

その間捕まってるから、多少は上がるだろうと

そういえば最近、アミューズメントの景品とかで白ひげらの手配書がプリントされてるものを見たんですが、あの懸賞金額で合ってるんですかねー？

ロジャー20億、ドラゴン13億、白ひげ12億、シャンクス6億1千万、ミホーク5億7千万で、エースが2億9千万……

シャンクスが割りと低めなのは、自分から動く事が減ってるって事なんですかね

## 第122話・モーガン討伐記2

「そうか、そうすると、あの少年は間違つて乗船した、と？」

「はい、海軍入隊を目指して船に乗り込んだのはいいものの、間違えて海賊船に乗り込んでしまい、航海士兼雑用係として使われだした、という所だったようです。生き残っていた海賊達からも確認しました」

ふむ、とモーガンは鋼の顎に手をやって考える。

どうやら、嘘ではないようだ。

それに、乗り込んで間もないという事はまだ罪も犯していない。それなら、海兵になりたいというのなら採用してもいいだろう。

「ふむ、そういう事ならば取りあえずは見習いという形で採用しよう。正式な採用は俺から上へ確認を取る……ああ、それで少年の名前は何だ？」

「コビーだそうです」

コビーの朝は早い。

といっても、別にそれは問題ない。アルビダの船では1人早起きして、あれをしろこれをしろ、で扱き使われていたが、海軍の船では単純に夜番と交代して、仕事を始めるだけだからだ。

とはいえ、コビーに今出来る事など限られている。

確かに勉強していた事もあり、航海士の真似事も出来るが、本職のそれとは比べ物にならない。

なので、今は他の面々に混じって掃除だ。

そんなコビーの動きを確認しながら、モーガンは考えていた。昨晚、本部に電伝虫で連絡を入れた際、申し訳ないと思いつつも上へと伺いを立て、スモーカーが対応してくれたお陰で、アスラ中将へと連絡が行き、あつという間に片がついた。

まだ犯罪に関わっていないのならば、問題はない、という事だった。

ただ、問題はコビーの動きだ。

勉強はしていたようだが、体の鍛え方が明らかに足りない。

将来的には、マリソフォードへ送った方がいいだろう。ヘルメツポと同じぐらいの年だ。互いに切磋琢磨する間柄となってくれば、そう思う。

ただ、その為には向こうでの訓練に耐えられる体を作っておかねば……。

かくして、この日からコビーの地獄とも言うべき鍛錬の日々が始まる事になる。

何しろ、周囲にいるのは全員グランドラインの海兵達だ。

基本となるレベルが今のコビーには高すぎる。

ただ、海兵達がそれでもコビーに感心したのは、確かにコビーは下手だし、体力が全然出来ていない。

だが、諦めなかった。

時間はかかっても、体力が限界に達しようとも、皆と同じ訓練の課題をこなし続けた。

そんな日々を送り続ければ、次第に体も出来てくる。

ただし、そうなるとコビー自身への鍛錬も次第に本来の海兵の鍛錬に近づけていっている為に、なかなか当人には成長しているという実感はなかったのだが……。

さて、コビーがそうやって訓練を続けている一方で、モーガンは仕事をしている。

何時もコビー一人の相手をしている訳にはいかないからだ。

「ふむ……」

ジャンゴ海賊団の航路を計測していると不思議な事に気付く。

海賊には縄張りとも呼ぶべきものがある。

ある意味当然の話で、互いに好き勝手に荒らしては、海賊同士の潰し合いになってしまう。海賊行為を行なうのはあくまで利益を得る為なのだから、ある程度は住み分けが必要だ。

当然、ジャンゴ海賊団にもそれはあるのだが、彼らが荒らしていない場所がある。

1つはある意味当然の場所だ。

母港としてある港町であり、ここでは海賊も大人しくする。そこで暴れた場合には、他ならぬ同じ船の海賊達からの処罰を受ける。

これは仕方のない話で、どんな海賊であろうとも母港がなくては立ち枯れるしかない。

食料や水は略奪でどうにかなっても、船の修理はそれなりの施設が必要だし、時間もかかる。

しかも、修理や整備を行なっている間は海に出れない。

そんな所を海軍に通報されでもしたら、お仕舞いだ。かくして、母港では海賊は大人しくなり、それどころか他の海賊が襲撃をかけたもしたら、住民と協力して守る事さえする。

港町としても、ちゃんと（少なくとも彼らの町では）法を守ってくれて、お金を落としてくれるならお客様だし、下手に海軍に知らせたりして追い詰めるなりして暴れたりされても困るので、結局正体を知りながら見て見ぬ振りが横行する訳だ。

さて、話を戻すが、ジャンゴ海賊団は母港以外にその縄張りに裕

福な町や村を幾つか含んでいる。

だが、その中で母港でもないのに全く襲撃を受けていない村があった。

「シロップ村……」

確認すると、この島には資産家の家族が住んでいるらしい。

だが、この村への襲撃は1度もない。

そう、1度も、だ。ジャンゴ海賊団の縄張りへの侵入で、別の海賊がこの島を狙った時にはジャンゴ海賊団が撃退したという話もある。いや、無論、海賊が自分の縄張りを守るのは当たり前なのだが……。

ステルスの実験船で面白い話がある。

余りに優れたステルス性を持っていた為に、波でレーダー波が反射して白く表示されている海の中に船の形が黒く、くっきりと映し出されていたという笑い話だ。

同様に、正にシロップ村は襲撃を受けていないが故に、モーガン大尉の目を惹きつけていた。

「……気になるな、1度確認してみるか」



## 第122話・モーガン討伐記2（後書き）

襲撃を受けてないだけに、不信感を募らせる島、という訳でした  
キャプテン・クロにしてみれば、襲撃をかけて自分がいたただく資産  
を削られては困りますからね

……と思って、このような演出にしてみました

前半は完全にコビーのお話ですが

### 第123話・モーガン討伐記3

村人と海軍が対峙していた。

無論、海軍側にも村人はいる。だが、朴訥な風情の村人達の大多数は片側に寄っていた。

その先頭に立つのは、カヤの両親だった。

そもそも何故このような事態となったのか。

シロップ村へと訪れた海軍は当然、村人から奇異の目で見られる事になった。

当然だろう、海賊の襲撃を受けたというならばともかく、それ以外でこうした村を海軍が訪れるという事は滅多にない。

当然といえば当然で、こうした小さな村には一定以上の規模の船の整備も本来困難だ。たまたま、この村には資産家の家族が住んでいる為に、彼らが使う船の為の簡易整備施設があるが、それとて軍艦の整備を行えるようなものではない。

そんな視線を物ともせず、海軍は即座に行動に移った。

『百計のクロ』の手配書を持ち、村人に確認を行なったのだ。

これで村人が皆、困惑して誰の事を言っているんだろう？的な反応を示していれば、誤解でした、で終わる所だが……そのような事にはならなかった。

ある者は素直に『おんや、こりゃあ……』と、資産家の執事となつた人物の事を上げ。

ある者は庇おうとしたのか、『い、いや、ワシは知らんよ？』と不審な挙動を見せた。

彼らは役者ではない。

全員が、それこそBWのMr. 2みたいな面々ならば騙しきつたかもしれないが、そもそも彼らはクロが海賊であったという過去す

ら知らなかった。

そうして、易々とキャプテン・クロの情報を得た海軍の面々は列を連ねて、向かうのを素直な村人としては黙って見ていられず……冒頭の光景へと移る訳だ。

到着した時、クラハドールことクロはむしろ堂々と姿を見せた。現状では下手に身を隠す方が自分に不利になると見抜いたからだった。

その上で、堂々と以前は海賊であった事や、間違っていた事に付き、足を洗おうと決めたのだと見事な演技でもって、村人の同情を誘った。

もちろん、キャプテン・クロの内心は異なる。

資産家の両親の殺害の為に事故に見せるか、病気に見せるかを検討中であり、娘と共に葬るか信頼を醸成する為に敢えて生かして、かいがいしく世話をしてみせる事で信頼を得るか、そんな計画を練っていた折に海軍がやって来たのだった。

しかも、先頭に立つ相手にクロは見覚えがあった。

さすがに、自分が死んだ事にした時に使った海兵の顔ぐらいは覚えていてる。

『誤魔化そうとしても無駄か』

ジャンゴの催眠術が解けていると思われるその様子に、部下を内心で罵った後、穏やかに取り繕い、村人を巻き込むという策に出たのだった。

さあ、どうでる？

クロが内心でそう確認した時、村人の言葉を聞いたモーガンは静かに答えた。

「……そうだな。確かにそうなのかもしれん」

海軍の責任者と思われる人物の言葉に村人達の顔が明るくなった。

「だが、法は法だ。全ては罪を償ってからだ」

だが、すぐにその言葉で村人の喜色は一瞬で消えた。  
尚も言い募ろうとした村人を制し、モーガンは告げる。

「反省しました。はい、分かりました、では意味がない。犯罪を犯したならば、罪を償い、その上でやり直せるならば、それは我々海軍としても喜ぶべき事だ」

「けど……」

「ならば聞こう。お前達は自分が被害にあっていないからそう言う」

モーガンの言葉にむっとした様子の村人もいたが……。

「同じ事を、その男の、海賊の被害にあい、家族を、愛する人を、我が子を、友人を、隣人を失った他の村や町の人々に言えるのか？」

続けてのその言葉に、誰もが言葉を失い、そうして沈黙せざるをえなかった。

そう、この村の人間はクロの被害に遭っていない。

だからこそ、クラハドルことクロが善人を装えば、信じようと考える事も出来る。だが、クロに殺された人間は1人や2人ではないし、そうした人間はクロの事を許せるはずがない。

そう言われては、村人も反論出来なかった。

「……これは仕方ないですね」

だから、クロのその言葉を誰もが当然と受け止め。

次の行動を止め損ねた。

そのまま、カヤを抱き上げ、刃物を突きつけた行動を。

「え？」

誰かが理解出来ていない、というような声を上げた。

無論、モーガンら海軍は「やっと本性を現したか」とばかりに警戒を怠つていなかったのだが、何しろクロは油断なく村人の真っ只中にいた。それを蹴散らして即取り押さえる事はさすがに出来なかったのだ。

……いや、まあ。昔のサカズキ大将なら庇う村人ごと吹き飛ばしていたかもしれないが……。

「まったく、予定が全てダメになってしまいましたよ……しょうがないですね。役立たずどもが」

豹変に村人らは混乱していたが、少なくとも理解出来た事が一つだけあった。

それは……あの真面目な態度が偽物だったという事。

クロからすれば、村人達も役に立たなかった腹いせに消していきたい所なのだが、今手元にあるのはナイフ1本のみ。本来の得物はもし見つかった時、怪しまれる事必定なのでここには置いておけなかった。

そうして、手元には先程まではお嬢様と呼んでいたカヤ。

ナイフ1本で村人だけなら皆殺しにするのは訳ないが、目の前には海軍がいる。……明らかに雑魚の、東の海で見かけてきた海兵と

は一線を隔した連中が。  
彼らを捌きながら、同時に村人を殺すのは面倒が過ぎるところか、自分の墓穴を掘りかねない。

クロは逃げ出す事に集中していた。

海軍はどうやって少女を助け、クロを捕縛するかに集中していた。村人はクロの豹変とカヤへの不安、そして空気の重さに自然と無言になっていた。  
だからこそ。

「必殺」

その声は決して大きくはないのに、よく響いた。

「タバスコ星！」

それは恐ろしいまでの正確さでクロの眉間に着弾した。  
眼鏡のブリッジの僅かに下に着弾したそれは、簡単に潰れて中身を飛び散らせ……左右に散ったそれは必然的に目にも僅かながら飛び込んだ。

「っ!？」

強い刺激に思わず目を抑えて　　クロが蹲りかけた瞬間に動いた者が2人いた。

1人はカヤ。

その声が聞こえた瞬間に、彼の事を信じていたからこそ、心の用意が出来ていた。

だから、足が地面についた瞬間、緩んだ腕から抜け出した。自らしゃがみこむ事で。

もう1人はモーガン。

【荊】

一瞬の作られた隙に、自らの全力で駆け寄り、だが、途中で少女が屈み込もうとしているのを、その視界で確認した。

刹那の時ではあるが、笑みが洩れそうになる。どうやら、先程の狙撃手を随分と信賴しているようだ。そう思いつつ、少女を助ける為に、掴みとる為に開いていた左拳を握り締め。

渾身の力で叩き込まれたストレートは、再びクロにカヤを人質とさせる前に吹き飛ばしていた。

第123話・モーガン討伐記3（後書き）

最後に誰がやったかは、言うまでもないですね

しかし……3話で終わらんかった

もう少し続きます

5話ぐらいはいきそつだなあ……下手したらもっと……いやいや……



## 第124話・モーガン討伐記4

殴り飛ばされたクロだったが、実際のダメージは少なかった。

喰らう、と理解した時点でカヤを諦め、後方へと自ら飛んだからだ。そのまま、クロは凄まじい速度で走り去ったが、モーガンは即座に追う、という事は出来なかった。

これで彼がただの一兵卒というなら、それでもいいのだが、今の彼は指揮官だ。

海兵を村人の護衛と追撃とに分ける。

副官に護衛部隊の指揮を預け、村人らに歩み寄った。

村人らは、というとなかなか盛り上がっているようだ。

どうやら幼馴染なのか、鼻の長めの少年と少女が何やら仲が良さそうな雰囲気で、会話を聞くとあの少年が先程の一撃の主らしい。

ただ、どうも……話自体は妙な方向に流れているらしく……。

『成る程、口先だけの小僧ではないようだな！だが、カヤが欲しければ儂を倒してゆくがいいっ！』

『貴方っ！いきなり何を言ってるんですか！？』

暴走する旦那を妻と思われる女性が張り倒している。

思わず笑いを堪えてしまう。

どこも、旦那はなかなか夫人に頭が上がらないのは変わらないようだ。子供達は子供達で真っ赤になっている。

「失礼、少しよろしいかな？」

とはいえ、延々見ている訳にもいかない。

ひとまず逃げたクロを追跡する事と、警備に海兵の半数を残していく事を伝え、その後、残る半数を率いて、モーガンはクロの追撃に向かった。

一方、クロは、といえば、既に目的地に辿り着いていた。

ジャンゴ海賊団、元クロネコ海賊団の元へ、だ。

何故、ここに、といえば、海軍がいるからだ。

元より、例え1年船を離れようが、キャプテン・クロの統制はそうそう乱れはしない。

命令に従い、海軍の軍艦を発見した時点でその様子を探っていた。そうして、その船が海軍本部から来たらしい、という話を聞いた時点で、彼らは軽いパニックに陥ってしまった。

『おい、どうしよう!?まさか、海軍本部が俺達狙ってるんじゃない?』

という訳だ。

無論、過大評価も甚だしいのだが、きつちりと新たな船長として君臨出来るような奴が船にいれば、クロが陸に上がった時点でそっちに実質的な権限が行ってしまう。

それが起きなかったのは、クロの統制が優れていたというのもあるが、それ以上にクロを上回るリーダー的存在がいなかった、という事もある。

結果どうなったかといえば、不安に駆られた彼らは海軍に先んじて、この島に到着していたのである。

もちろん、その後海軍がやって来た事により完全にパニックに落ち板彼らをクロは面倒ではあったが、宥めていた。

とはいえ、海軍がいる状況で船を出させる訳にはいかないので、入り江に隠れさせていた訳だが……。

「殺してやる……」

久方ぶりに両手に武器をつける。

『猫の手』と呼ぶ、この武器は指の先に刀がついている手袋と考  
えればいい。

当然、こんな武器をつけている間は指がつかえないから、眼鏡の  
位置を直す時も、掌で直す癖がついていた。

実を言えば、戦闘ではなく逃げる事も考えた。

臆病以前に、やり合った所で何も利益はないからだ。

だが、船の出航というものは、時間がかかる。

部下どもは『しばらく大人しくしてるしかねーや』とばかりに、

降りていた。それを人員を集めて乗せ、錨を揚げ、帆を展開し、船  
を動かすのと海兵達が走って追いかけてくるのとどちらが早いのか。

間違いなく、後者だろう。

そして、それなら、追いつかれた時点で海賊側の戦闘態勢が整っ  
ている方がまだマシだ。

ジャンゴの催眠術に関しては特に何も言わなかった。

ここでジャンゴを処罰した所で利益が何もない、という事もある  
し、少し落ち着いて考えれば催眠術が使えるのが世界にジャンゴだ  
けというはずもなし。それに、催眠術はそこまで絶対のものでもな  
い。

別に頭の中身をそっくり書き換える訳ではない。

そんな事が出来るとしたら、悪魔の実ぐらいだろう。

何らかの要因、例えばショックな事であるとかで唐突に忘れてい  
た事などを思い出す事もあるし、催眠術が使われたと気付けば同じ  
催眠術を使える人間を用いて解こうとする事も可能だろう。

どんなものでも完全なものなどない。

あの時点ではジャンゴの催眠術はきちんとかかっていたし、事実1年余は誰も追っては来なかった。

（また一からやり直ししかないな。とりあえず、海軍の奴らは殺して、シロップ村の連中にも死んでもらわねえとな）

あの長っ鼻野郎はじっくり鬨り殺しにしてやる、そう思う。  
ウソップの事は知っていた。

嘘つきではあったが、村人は何故彼が嘘をつくのか知っていたし、村人達にとつては憎めない存在、という奴だった。

だが、それだけにどこまでが本当で、どこまでが嘘が分かりにくい少年だった。

見方を変えれば、自身の実力を隠していた、とも言える。

まあ、いずれにせよとりあえずは……。

「来たか……」

海軍の連中を殺してからだ。

モーガンを先頭として、近づいてくる海兵らに海賊達も臨戦態勢に入る。

ただし、大抵の連中は岩陰などに隠れている。

銃という奴はこれで結構面倒で、一定以上の連中には効果が殆どないのは確かだが、逆に言えば普通の奴には効く。真正面から打ち合いなどしては、命が幾つあっても足りない。

故に正面から立つのはこちらは4名。海軍は1名。

海軍側にはモーガン海軍本部大尉。

海賊側にはクロ以下ジャンゴ、シャム&ブチのニャーバン兄弟が静かに立つ。

互いに言葉を交わす事はない。

本来ならばクロとしては全員での攻撃を仕掛けたい所だが、クロ

の最強の攻撃は連携攻撃など不可能だ。

それに普段連携を取っていない者同士がいきなり連携を組んだ所で、よほど相性がよくない限り、むしろ状況は悪化する。

故に、ブチがまずは駆け出す。

シヤムの得意技は武器といえば腕に斧が固定されているだけのモーガン相手には有効ではないからだ。金品を盗んだ所で意味はないし、さすがに武器は……あれは盗めないだろう。

ただし、連携しての攻撃は意味がある。

だからこそ一拍遅れて駆け出す。

そこへ。

「嵐波！」

大きく右腕の斧を振りかぶったモーガンが渾身の力を込めて、斧を振り下ろす。

距離は十分あったのだが……。

何を、と馬鹿にする間もなく、放たれた真空の斬撃が慌てて避けたブチの陰、ブチの巨体に隠れての奇襲を仕掛けようとしていた、だがそれ故に自分も前がよく見えなかったシヤムに襲い掛かり。

「へ？」

気付いた時には直撃を喰らっていた。

吹き飛ばされるシヤムを見ながら、モーガンは呟いた。

「まずは1人」

第124話・モーガン討伐記4（後書き）

気付いたら朝だった

仕事から帰って、どうしても強い眠気が取れなくて、少し横に……

気付いたら朝でした

疲れが溜まってるのかなあ……

## 第125話・モーガン討伐記5

シヤムを吹き飛ばした技の名は『嵐破<sup>らんぱ</sup>』。

見れば分かるかもしれないが、基本は【嵐脚】の変形だ。

モーガン大尉は接近戦はとりあえず、腕の斧を使った戦闘技術を鍛えた。ただ、【剃】と【鉄塊】は全ての六式の基本であるからそれはいいのだが、射程のある攻撃がなかった。

【嵐脚】を修得したい、という気持ちはあったが、1年足らずでやるには時間が足りない。

それでも、右腕からだけとはいえ、似たような攻撃を出せるようになったのは、もうこれは執念の賜物と言っていいだろう。

まあ、とはいえ渾身の力大振りになってしまふ為、隙がデカイとかの欠点はある訳だが……。

とはいえ、1人やられたからとて海賊が止まれば苦労はしない。

ブチ自身は無傷だ。

だからこそ、ここで引けない。背後にはクロ船長がいる。

『すいません、やられました』

で、戻って許してくれるような人ではない。

……ただでさえ、想定外の事で苛々しているというのに、下手に刺激しようものならまず殺されるのは自分達じゃないのか!?!?という脅迫観念がある。

だからこそ自分の自慢のパワーでもって叩き付けたのだが……。

「……………!?!?」

「ぬるいな、力自慢、か？その程度で片腹痛い」

力自慢、確かにこのブチは力自慢なのだろう。

だが……モーガンの基準がそもそも人外レベルが基準となっている。1度マリソフォードでの大將中將クラスの模擬戦闘を見れば、この程度の力で自慢しているのが本当に哀れになってくる。

というか、モーガン自身も以前はそれなりに豪腕とっていた自分の井の中の蛙状態を実感させられたのを思い出して、少し悲しくなったが……。

それなりにブチは頑張った。

頑張ったのだが……自分と真つ向力比べが可能なパワーに、瞬間的にクロに匹敵する速度が加わっては勝てるはずがなく、ブチが倒れたのは、それから間もなくの事だった。

「ぶ、ブチまで……」

その光景に驚愕するジャンゴ（+黒ネコ海賊団一同）だったが、クロ自身は冷徹にその光景を見詰めていた。

（厄介な奴だな。瞬間的な速度は俺の【杓子】に匹敵するか？パワーでは真つ向ブチの奴と張り合う上、シヤムを一撃で仕留める威力の飛び道具もあり、と……）

力と速さで互角以上となると、厄介だった。

実の所、クロは用心深い。

逆に言えば、強敵との戦いはなるべく避けてきた、或いは強敵を罠に嵌め、全力を出し切れない状態に追い込んで仕留めて来た。それは間違っていないやり方ではある。

ただ、同時に強敵と真つ向やりあう、という経験が少なめなものも事実だ。



だが……今回はどうあってもやりあうしかない。

クロとモーガン。2人の視線が合った。

そして、次の瞬間。

2人の姿が消えた。

ここで、海兵と海賊、双方の反応は全く逆のものになった。

【杓死】の危険性を知る海賊達は悲鳴を上げて、それまで岩陰から覗かせていた身を完全に隠し、屈めた。無論、そんな事とは知らない海兵らはそんな事はしなかった。

結果として。

「がつ!？」

海兵の1人が斬られた。

【杓死】と【剃】には大きな違いがある。

【杓死】は常に高速で動く業だ。

【剃】とは瞬間的に高速で動く業だ。

そこには大きな差がある。

すなわち、モーガンはクロを追撃する事は出来るが、同じ速度で動き続ける事が出来ない。

故に停止したモーガンをクロは何を斬っているかを知らぬまま斬りつけていたのだが、【鉄塊】で弾いていた。

モーガンが停止したのは、海兵らに警戒を命じる為でもある。

まあ、実際には海兵らも慌てて姿を隠していたのだが……実際、周囲は斬撃の痕が物も人もおかまいなしに、手当たり次第に斬られる。

先に倒されたシャムとブチの内、まだ多少は動けたブチは懸命に動かない体を動かして岩陰に入ったものの、シャムは転がったままだ。

斬られていないのは正に偶然の産物で、兄弟のブチとしては『船

長、斬らないでくれ!』と願うばかりだ。

ブチなどが息を呑みつつ見詰める中、クロはようやく停止した。

「……………ふん、案外と人は斬れていないか」

くい、と眼鏡を掌で直し、クロは呟いた。

【杓死】で動いている間は何を斬っているのか自分でも分からな  
い。

部下とて、ひたすら身を小さくして自分が斬られないようにして  
いるしかない。

ただ、クロ本人からすれば不満もい所だ。

海兵らを削る事も出来ず、モーガンは……………。

(……………服に切れ目はある。斬られているのに本人には傷がない。

……………面倒な、何かの防御する技があるって事か?)

無論、モーガンにはモーガンの見方がある。

(……………追いつく事は出来る。だが、ずっとあの速度で動き続ける  
ってのは面倒だ)

双方がにらみ合う中、戦場の外では、また別の動きがあった。

こっそり、そーっと……………海兵が、海賊達が、ようやくと動けるよ  
うになったブチはシャムをモーガンの視界に入っているのを覚悟の  
上で回収して逃げ出し、海兵は海兵でクロの視界に入っている事を  
覚悟の上でじりじりと後退を続けていた。

この時ばかりは、彼らの思いは1つだった。

(頼むから、俺らが安全圏に逃げるまで、動かないで!)

幸いその願いは叶い、2人が再び動いたのは海兵と海賊双方が大  
きな岩の陰にそれぞれ避難し終えた後だった。

実際の所は、モーガンとクロ双方が示し合わせた結果だ。

モーガンからすれば、海兵達が避難するまで動きづらい。クロに  
しても、別に部下を無駄に斬りたい訳ではない。先程までの動きで  
モーガンさえ倒せば何とかなるという事も理解した。であるならば、  
海兵らが逃げるまで、部下らが逃げるまで待つても問題はない。

そして、誰もいなくなった瞬間。

2人の戦いは第二ラウンドを迎える。

## 第125話・モーガン討伐記5（後書き）

モーガンは強くなりました

けど、クロも強いです

という展開です

まあ、熟練者なら【剃】でもっと動く事も可能なのですが、モーガンの錬度では短時間が限界だったりします。それが可能だったら勝負ももう少し楽なんですけれど

むしろ、モーガンは【鉄塊】の方が得意だったり、という設定だったりします

第126話・モーガン討伐記6（前書き）

後書きにて今週号のジャンプのネタバレ記述があります

## 第126話・モーガン討伐記6

【SIDE：海軍】

「何！？それで……そうか」

短距離用の電伝虫で前線と連絡を取り合っていた副官が声を荒げた。

実の所、後方待機していた隊は、村人の護衛任務だけが仕事ではなかった。

今回は、まんまと逃げていたと思われるキャプテン・クロの再捕縛が任務だ。何しろ、海軍側がまんまと騙されて、1度は手配を解いてしまった以上、再度手配を上げるのは海軍の面子が丸つぶれだ。何が何でも、海軍が捕縛しなければならぬ。

対象がはつきりしている為、モーガンや副官はクロの戦い方をあただけ手に入れ、対応策を考えた。

ある程度予想していたとはいえ、まさかいきなりシロップ村で出くわすとは思わなかった為に、その為の準備が整っていなかった為に、かといってゆっくり準備しては逃げられる危険があるから、と先遣隊とは別に後から急ぎ運ぶ事になっていたのだ。

だが、その作業を行なう為の海兵が、キャプテン・クロの攻撃で怪我をした、との報告が入った。

こうなると、彼には及ばないが誰か……そう考えた時、ふと思いついた事があった。

褒められた事ではないかもしれない。だが、確率を少しでも上げられるなら……そう考えた副官は……。

【SIDE：クロネコ海賊団】

「いいか、そーっとそーっと、静かに急ぐんだ」

ジャンゴはクロがモーガンとの戦いに向かう前に自分に命じていた事を必死にこなしていた。

もちろん、部下達も必死だ。

ちなみにシヤムはブチが決死の思いで回収してきて、今は一足先に船の中だ。

今回の件ではクロから聞いた話では、自分達が襲撃を掛けていない場所から逆にこの村が気付かれたのだという。

さすがに、キャプテンのいる場所には怖くて襲撃なんかかけられなかったのが原因ではあるのだが……あの船長がそんな言い訳を聞いてくれるか、これが終わった後どうなるか考えただけで恐ろしい全員、一丸となつてとにかく、これ以上不機嫌の種を作らないよう全力を尽くしていた。

#### 【SIDE：戦闘中の2人】

2人の戦闘は長期化していた。

クロが高速移動を繰り返している間は、モーガンは【鉄塊】で耐える。

クロが停止した瞬間に、その位置を確認し、【剃】で移動をかけるのだが、何時停止するかが分からない上に、視線で『どこだ？』と探して、見つけてから移動する為にどうしてもタイムラグが生まれてしまい、その結果としてその間にクロに再度動き出されてしまう。

その繰り返しだった。

両者とも内心では焦っている。

だが、それを表に出す程愚かではない。あくまで表は悠然と、裏では状況の打開の為にそれぞれが打った手が何時完成するかが勝負

の鍵になっていた。

そうして、先に準備が整ったのは海軍だった。

戦闘の中、恐るべき正確さで、薄い煙幕弾が飛来した。

戦場の各地に着弾したそれは、煙を発生させたが、それは薄いものだった。

(……どういう事だ?)

クロは不審を感じた。

クロの攻撃は無差別広範囲だ。煙幕が展開されようが、別に関係はない。むしろ、煙幕など展開しては海軍側の方が困るだろう。それにそもそも煙幕自体が確かに狙いこそ正確に見えるが、明らかに薄い。

これでは十分な煙幕としての役割を果たす事は出来ないだろう。

周囲がよく確認出来ないので、一旦停止した瞬間。

クロは目の前にいた斧を振り下ろす姿に戦慄した。

種は簡単だ。

煙というのは確かに視界を狭める。

だが、同時に煙の流れはその中で動く者の動きに追従する。

滅茶苦茶に動かれ続けたら、その内また分からなくなってしまうが、今回は幸いクロ自身も疑問を感じたのか早々に停止してくれた。そして、クロがああ速度で動いている間、周囲が見えないという事は彼自身の動態視力がああ速度に追従出来ない、すなわち【剎】で動けばそれを見る事は出来ないという事。

煙の動きを目で追い、斧を振り上げて構え、停止した瞬間に移動して、後は振り下ろす。

何度も使えない、下手をすれば1度しか使えない奇襲だったが、その機会を見事に捕らえた。



(殺った……！)

モーガンは思ったが、クロもさすがだった。全力で後ろに下がり……だが、完全には間に合わなかった。

「……以前はお前の右腕を奪った、今回は俺の左腕、か……腹の立つ話だが、これでお相子という所か？」

そう、モーガンの斧はクロの左腕を、その二の腕半ばから先を切り落としていた。

向き合った際、斧が一番近いのは左腕になる。それ故に逃げ損ねた、とでも言えはいいのだろうか？

もつとも、モーガンにしてみれば仕留めたと確信したのに、左腕一本で逃げ切られた、という思いが強い。

煙作戦とて、元々是对クロ対策に悩む中、ふとモーガンがスモーカー准将の事を思い出して提案した事がきっかけだ。とはいえ、むやみやたらに大量に煙幕弾を撒き散らしてもこちらの視界が狭まるだけ。

狙撃手を用いて、戦場の計算された場所に狙って、必要なだけの煙幕弾を撃ち込む必要があった。

が、その肝心の狙撃手が戦闘開始早々に負傷。

これを副官は民間からの協力で最終的に賄った。

……もう、お分かりだろう。

ウソップの見事な狙撃術に目をつけ、一応腕を確認したが、問題ないレベルと判明した時点である種の強制協力要請を行なった。まあ、ウソップ自身が先程の自分の行動に自信をつけていた事もあり、おだてられては結構あっさり協力を了承したのだが。

そして、ウソップは見事に期待に応え、指示通りの場所に指示通りの煙幕弾を着弾させた。

その結果が、今、目の前の光景だった。

「降伏しろ。俺がかつて負ったのと同程度の傷とはいえ、もう戦えまい」

かつて、自分が負ったからこそ分かる。

単純に攻撃力が半減しただけではない。

血止めが出来ぬから、腕からは血が今尚滴り落ち、必然的に体力が奪われてゆく。血止めをしようにも、クロの右手には未だ武器が嵌ったままだ。これでは、腕を紐で縛るなどの止血作業も出来ない。かといって、武器を外している余裕はない。

体力が落ちれば、それは持久力の低下を招く。

このまま我慢比べをした所で、先に限界に達するのはクロだろう。

「ふっ……くだらない事を言う。そうした所で、こちらの未来などないだろう？……表向きは処刑された身だ。改めて秘密裏に処刑されるか、インペルダウンに放り込まれて、世間からは抹殺。そんな処か？」

「……………」

モーガンとしても否定出来ない。

海軍の汚点とでも言うべき今回の事態だ。既にキャプテン・クロは処刑された、という事になっている以上、改めて処刑した所でどこからも文句は出まい。

「…………それに遅れたが、こちらの準備も出来た」

「なに？」

瞬間、クロが駆けた。

また襲ってくるか、とモーガンは警戒する。煙はといえば、元々モーガンの視界を極力遮らぬよう薄く展開されていた。既に風に流され、消えてしまっている。  
だが。

「っ！しまった！」

モーガンの視線が海上を捉えた。

そこには点々と海に浮かぶ数隻の小船。その先にはクロネコ海賊団の母船『ペザン・ブラック号』。

小船を跳ねるようにして、跳ぶ人影が1つ。キャプテン・クロだ。そして、『ペザン・ブラック号』は出航準備を整えている。

……どうやら海軍と海賊では目指す所が違ったようだ。海軍側があくまで相手を捕縛乃至殺す為に活動したのに対して、海賊側は逃走する為に活動したようだった。まあ、そもそも双方の基準が違うから当然なのかもしれないが。

(……【月歩】があれば、追えたのだが……嵐破では船まで届かんし、船を沈める事も出来ん)

可能なのは、同じように小船を伝って追う事だが……。

銃撃されれば、それだけで足止めされる。【鉄塊】は極々一部の例外を除けば、かけたまま動けるような技ではないからだ。

そのモーガンの視線が、船に辿り着き治療の為に部下が駆け寄るクロと絡んだ。

(逃がさん。いずこへ逃げようとも追って、必ず捕らえる)

(この腕の借り、必ず返す)

互いに相手への殺意を叩き付けたが、それも一瞬だった。

そのまま海賊船は出航してゆき、反対の港まで戻らねば軍艦のな  
い海軍はそれを見送るしかなかったのである。

## 第126話・モーガン討伐記6（後書き）

という訳で、モーガンとクロの戦闘はこのようになりました  
次回でモーガンの話は一旦終了予定です

そして、ここからは今週号のネタバレが含まれます  
いや、書いておかないといけない事でしたので……

ルフィのメッセージがようやくと明らかになった、と思った思惑を  
吹き飛ばしたのが遂に明らかになった覇気でした……

『霸王色』とあるので、てっきり覇気に色があるのかと思っていた  
ら……睨んだだけで気絶させる、あの力の使い方をそう呼ぶのかよ  
！？と驚愕

というか、覇気の使い方、『色』で表すんですね……

という訳で、感想のレス返しに『アスラは霸王色じゃない』とか書  
いた事ありましたが、すっぱり忘れて下さい

ゴア王国編できっちり使ってしまったので……アスラは霸王色の  
覇気を使えます

まあ、色とかじゃなく技術的なものみたいなので、別に霸王になる  
資質とかそういうのとも関係ないみたいだし……

1度は改訂も考えたのですが、何しろ現在126話  
これを全部一旦見直すとなると……多分1週間かそこらは更新止ま  
りそうなので断念しました

という訳で、これまでは覇気に関する情報が不十分だったので、そ  
こら辺はご容赦下さい

## 第127話・モーガン討伐記7

結果から言えば、キャプテン・クロは逃げ切った。

やはり、自分が戦っている間に船の支度をさせていたのだろう。

肘から先の左腕を失いながらも、全ての部下を取りこぼさず、海軍から逃げ切ってみせた。

無論、それは海軍が諦める事を意味しない。

これからは再びクロネコ海賊団はキャプテン・クロの下、海賊として復活し、海軍側はそれを追う、という事になる。

まあ、逃げられた以上は焦って追撃を行なっても仕方ない。海は広い。闇雲に追ってもすれ違いになる可能性が高い。

という訳で、海軍としては長期の航海の為に出航準備をしていた。

そんな中、モーガン大尉はウソップの家を訪れていた。

ウソップの家は母であるバンキーナが亡くなってからは、ウソップの1人暮らしだ。

幸い、父であるヤソップがシャンクスに誘われて海へ出る時、契約金と称してシャンクスが渡した金をそっくり生活費として（自分が溜めていた分も合わせて）残していつてくれたので、生活には困らない。

まあ、モーガンはそんな事は知らない訳だが。

まさか、目の前の相手が新世界で名を轟かせ四皇の一角に数えられている大海賊『赤髪』のシャンクスの幹部の1人、ヤソップの息子だとは思っていない。考え付く訳がない。

知っていたら知っていたで大騒動になっていた可能性もあるが、今は知らない故に落ち着いた雰囲気は漂っていた。

知らぬが仏って素晴らしい。

「今回は色々助かった、改めて礼を言わせてくれ」

そう言って、モーガンは頭を下げた。

慌てたのはウソップだ。まさか、海軍本部大尉なんて相手に素直に頭を下げて礼を言われるとは思わなかったので、わたわたとしている。ここで、空気を読まずに威張ればある意味ウソップらしいとも言えるのだが、あれはわざと場を和ませる意味合いも含めてやっている面も大きい。ので……。

「あ、いえ、そんな大した事は……」

と、この場ではしどろもどろになりながら、頭を下げていた。

とりあえず、お茶など出して、ウソップの本職にすら勝る狙撃術を褒めていた。

父親から習ったという事を話した際、危うくウソップは父親が海賊という事を口が滑りかけて、慌てて誤魔化したのが、どうやらモーガンには父も亡くなったと誤魔化し方から捕らえられたらしく、それ以上追求される事はなかった。

内心で胸を撫で下ろしたウソップだったが、そこへ更に爆弾が投下される事になる。

「ところで、あのカヤさんとは両思いなのかね？」

「ぶほっ！？げほ、げほおっ！」

まさか、そんな事を聞かれるとは思わず、むせてしまった。

「い、いきなり何を？」

動揺しまくりなウソップの様子に微笑ましいものを感じながらも、

顔を引き締める。

ウソップも真面目な話と気付いたのだろう、座り直した。

「今、世界は大海賊時代などと言われている。若者はこぞって海賊を目指して海へ出る……。大半の者はその先に何が待っているかを考えようとせず、な」

モーガンの語る声はあくまで厳しい。

「もし、好きな、惚れた相手がいるのならば、海賊は目指さない事だ。……海賊の末路などろくな事にはならんし、名の売れた海賊となれば、惚れた相手にまで迷惑がかかる」

その代表的な例が海賊王ゴールド・ロジャーだ。

海賊王と謳われた彼の最期は処刑だった。

もちろん、世間一般で言われているとは異なり、海軍が捕らえたのではなく自首のだが、重要なのは海賊王と呼ばれた男ですら最期は処刑で死を迎えた事。

彼の関係者はことごとく追求を受け、処罰を受けたという事だ。

「…… ことごとく？」

「そつだ、ことごとく、だ」

海賊王の船を造った船大工は、それが仕事であったがそれでも罪に問われた。

現在、世界政府御用達の造船企業ガレーラ・カンパニー相談役であるトムがそれを免れたのは、一重に彼の腕の良さが罪に問う以上に価値があると認められたからにすぎない。

もし、トムが海列車という画期的な船を示す事が出来なければ、



それを開発出来なかつたら……彼は今頃この世の存在ではなかつただろう。

「海賊王に恋人がいた、という話があった。その話があっただけで、怪しいと疑われた村の住人は皆取り調べにあった。妊娠している娘がいれば、取調べだ」

それがおよそ1年続いた。

今月は誰それが生まれそう、今月は誰が……ひたすら可能性がある限りは海軍は追い続け、遂に『さすがにこの段階で生まれてないのならば、間違いだったのだろう』そう思われるまで、村人は厳しい取調べに合い続けた。

「別に海軍になれとは言わん。だが、お前が惚れた女がいるのなら、海賊だけは止めておけ。海賊の末路なぞろくなものじゃない。残るのは悪名だけだ」

そう言つとモーガンは立ち上がった。

もし、海軍に入る気があるのならば、自分が仲介役になると告げて、名前などを伝えていった。

……そうして、モーガンが帰った後には悩むウソップのみが残された。

この後、モーガン自身はクロを追うものの、コビーは本部へと送られうる事になる。追撃の中に、素人を乗せ続ける余地はなかった。本部へ向かう船の隣にはウソップの姿もあつた事を記しておく。

後に、マリンフォードで出会つたルフィ、コビー、ヘルメツポにウソップは 無論先に海軍に入り、悪魔の実の能力者にして海軍本部中將の孫という後ろ盾もあるルフィが一番昇進が早かつたのは事実だが だが、そんな事お構いなしに友人として、或いは競い合う仲間として共に励み、高めあう仲間として接してゆく事になる。

**第127話・モーガン討伐記7（後書き）**

これにて、一旦モーガンの活躍する場面を閉じます

次回の更新も明日です

## 第128話 - 旅立った者

ウソップは海軍の軍艦で鍛錬の合間の休憩時にふと島を出る事を思い返していた。

最初にウソップが海軍入りを話したのは、ウソップ海賊団の面々、たまねぎ、にんじん、ピーマンにだった。

もちろん、彼らからは責められた。

それはそうだろう。少し前まで『ごっこ遊び』のレベルとはいえ、海賊を名乗っていたのに突然、正反対の組織である海軍に入ると言い出したのだから、当然だ。

彼らからの言葉を黙って聞いた上で、ウソップはモーガンからの言葉を語った。

「俺は今まで、海賊になるって事の意味を深く考えた事がなかったんだ。いや、海賊になった奴にも結構いるんだと思う。憧れだったり、夢を追うだったり、或いは周囲に流されたりで」

じつと3人の目を見て、ウソップは語る。

3人も真剣な表情でウソップを見ている。

「俺だって海賊になるなんて言ってた以上、自分が捕らえられたら、なんて事は覚悟してた、けどな……」

ウソップの夢を砕いたとも言えるのは、やはり罪もなしに巻き込まれる人達の事だった。

たまねぎ、にんじん、ピーマンも語られた事を聞けば、そして問われたなら考えざるをえない。

海賊の道とは突き詰めれば、他者に迷惑を与える道だ。

海賊という行為に基本、生産性はない。

もちろん、中には例外もいる。例えば、原作に出ていたサルベージ王マシラや海底探索王シヨウジヨウなどだ。彼らは船を襲う事よりも沈んだ船を探索し、そのお宝を入手していた。その目的は海に沈んだと思われる黄金の島ジャヤの探索であった。

海底探索という仕事はそれだけを正式な仕事として世界政府と契約すれば、賞金がかげられる事もなかっただろう。実際、気のいい面々であった事だし。

だが、普通の海賊は異なる。

自分達がメシを食う為にどこかの港に腰を落ち着けて、商売で金を稼いだ上で世界に冒険に出るのならば構わない。だが、そんな酔狂な人間はまずいない。

誰かから奪う。

それが海賊だ。

そうして、海賊王になったとて……最期は周囲の人からすら、ただ日々の平穩すら奪う。

海賊王と呼ばれた男、ゴールド・ロジャーの事を語られては、3人にも反論は出来ない。

3人も考えてみた。

海賊として名を上げて……その先に何が待つ？それまでどうやって生活する？今はいい。今はウソップは父の残した財宝がある。3人は親に養われる立場だ。だが、一人前になったら、海へ出たら自分で稼ぐ手段を考えねばならない。それはどうやって稼ぐ？

そして、海賊になったとて……賞金がかげられれば、この村へ戻ってくる事さえ難しくなるだろう。下手に戻れば、それは村の人間に迷惑を与える事になる。

原作のココヤシ村とて、あれは賞金をかけた海軍にもネズミ大佐という存在ゆえに村人が反発を抱いていたのが大きい。

「俺にだって守りたいもんがある。傷つけないもんがある。お前らは……どうだ？」

「……」

こんなに早く。

こんなに早く、現実というものが突きつけられる事になるとは思わなかった。

ウソップを団長にして、3人で嘘を言ったりして遊んで……。

彼ら3人はまだ、それも出来るだろうが、ウソップはそろそろ卒業しなければならぬ。今なら、海軍の記憶も鮮明だ。動くならば早い方がいい。遅い程、『ああ、そういえばそういう事があったな……』で終わってしまう。

それに3人だって、親が処罰されるなんて見たくない。カヤが泣く事になる光景なんて見たくない。

だから、涙を堪えて俯いた。

「本日をもって　ウソップ海賊団の解散を宣言する！」

ウソップはぼろぼろと涙を流しながら。

3人も涙を遂に耐え切れず流しながら　けれど、それに反論する事はなかった。

それに比べると、カヤとの別れはさらりとしたものだった。

「そっか、行くんだ」

ウソップの決心を込めた言葉に、カヤはあっさりとした口調でそ

う言った。

一大決心という気分のウソップの方が、え？という気分だ。

「決めたんでしょ？行くんだ、って」

「あ、ああ」

「なら行って来なさい。……止めたくはないの、決断したのなら」

につこりと微笑むカヤは可愛くて……思わず、ウソップは視線をそらしてしまう。

そうしてカヤは告げる。

そう決めたのなら、私は応援するだけだ、と。

「諦めないでね？勇敢な海の男になるんでしょ？」

「お、おう……」

何か、それ以上口に出せなかった。

カヤもそれ以上は口にしなかった。

けれど、静かに2人は並んで座っていた。

そんないい雰囲気を見ている者が二組程。

「うおおおおお！あの小僧、カヤにーい！」

「貴方、少しは大人しくしてなさい」

びったんびったんとふん縛られた体を海老のように跳ねさせる夫

を足元に転がして、夫人は温かい視線で娘とそのボーイフレンドの様子を双眼鏡で見っていた。

そして、もう1組は。

「……カヤ姉ちゃんを泣かしたら、俺らでボコろっ」

「うん」

たまねぎ、にんじん、ピーマンが元・団長への決意を固めていた。

そうして、この二日後。

モーガンの船に同乗させてもらい、ウソップは島を出る事になる。

## 第128話・旅立った者（後書き）

感想欄でウソップの話の希望があったので、書いてみました

……カヤが案外苦戦しました

オチはどうしようかと思ったんですが、何だかつい……



## 第129話 - 蠢くものは

【SIDE：マリソフオード】

コビーとウソップの海軍入り。

この情報はアスラの元へも上がっていた。

本来なら新兵の情報などアスラの所へ上がってくる道理がない。今回の場合は、モーガン大尉の直属の上司が書類上スモーカーとなっていた事から、アスラへも伝わったに過ぎない。ちなみに、一介の大尉が直属になったのは海軍改革の原因の1つとなったからだったりするのだから、世の中何が幸いするか分からない。

(……まあ、モーガンの推薦という事になっているし、モーガンの息子のヘルメツポと同じ所に放り込んでおけばいいだろう)

具体的には、ガープ中将の所へ。

まあ、中将なら生半可な鍛え方はすまい、と判断する。下手に訓練で相手が怪我をしないようにと手加減などされては、却って悪影響が出る。やるなら、徹底的に、だ。

(……ルフィは、先だって本部中尉になった。このペースなら史実の始まる頃には大佐も夢じゃなからう)

バカンスという名の実戦訓練で、ルフィは小物ではあるが多数の海賊を捕らえた。

その功績で、ルフィは海軍本部中尉に任じられている。

原作でも、故郷のフーシャ村を出発して、1年と経たずに本部大佐クラスとも真っ向遣り合えるだけの実力を身につけたルフィだ。そのポテンシャルはさすがの一族と言うべきだろう。

「……あちらはこれでいい。問題は……これか」

手元の、世界政府から送られてきた書類に視線を落とす。  
そこには……。

【アラバスタ王国の革命軍への賛同具合を確認せよ】

と記されていた。

全く何を言い出すのか、とも思うが、同時にその理由も見当がつかなく。

先だって、アラバスタ王国で事件があった。

これまで王国の各地でゲリラ的に行なわれていたダンスパウダーの使用が複数箇所で見つかったのだ。

それを聞いた時点で、アスラは当然、『わざと発見させたな』と判断した。

そこまでは想像通りだった。

ただし、想定外だったのは犯人というか黒幕とされていたのはコブラ国王ではなく、世界政府。

悪辣だったのは、本物の世界政府の重要書類に使われる紙を使っていた事だ。……こういう重要なものでも、金次第で裏に流れる、流す奴が必ずいる。

しかも、全てで見つけられたのではなく、見つかったのは一箇所だけ。

また、ある場所では逃亡に失敗した人間が1人だけ捕まっていた。全てで見つかってれば、逆に怪しさが増すものを。

その当人曰く。

『自分は雇われただけだ』

『各国の力を弱める為に、とか言っていた』

そう、証言したという。

……お陰で、アラバスタ王国は疑心暗鬼だ。

コブラ国王がわざわざ公式見解として、『デマなどに惑わされないように』と発表しなくてはならない程に。

何を計画しているのか。

……コブラ王ら王宮の人間は、色々と世界政府へ通じるルートがある。世界政府がそんな事をしていない、というのはすぐに分かるだろうが……今回厄介なのは、別の部署がやってないとは限らない、という事にある。

可能性がある、それだけで十分だ。

「お陰で、こんな指令が来るといふ訳だ……この忙しいのに余計な指令を……」

クロコダイルの狙いはアラバスタ王国の乗っ取りという事では変わらない筈だ。

してみると、国民と王との乖離を狙っているのだろうか？王が世界政府を庇い続けられ、それと同時に世界政府が蠢いているという話の流れが続ければ、反乱も起きる可能性が出てくる、のか？

何か違和感を感じ続けているアスラだった。

【SIDE：アラバスタ王国】

「別に、国王に不信任を抱かせる必要はない」

クロコダイルはロビンを相手に自身の計画についての話をしていた。

最近、クロコダイルはこうしてロビン相手に話をすることが多い。

考えを纏める、という事もあるし、ロビンが頭の回転が速い為に欠点の指摘もしてくるのが良いらしい。クロコダイルは自分の命令に反する事は嫌うが、自分の考えの穴の指摘は自分なりに計画を見直したり、自分の見落としに気付けるので受け入れていた。無論、意味のある内容でなければ駄目だったが、その点ではロビンは合格だった。

「王家には最期の瞬間まで国民の信頼を受けていてもらう、という事だったわよね？」

「ああ。今回の狙いは王家じゃない。国民だ」

そう、笑いながら言う。

王家と国民とでは手に入る情報の質も量も違う。

王家ならば嘘だと断定出来るような情報でも、国民レベルではなかなか真実は不明だ。何しろ、この世界にはインターネットなどというものもないし、電話に相当する電伝虫でさえ一般家庭に転がってるようなものではない。

基本的には口コミであり、噂話だ。

「だから、世界政府がこの国を弱らせようとしてる、ダンスパウダーで早魘を起こしてる、なんて話も複数伝わってくりゃ、真実を確かめる手段がなきに等しいから、疑いの気持ちも出る」

「……でも、それを国王がデマだって言い続けてたら、王家に対する不満も出るんじゃない？」

ロビンの言葉はもつともだ。

だから、世界政府も動かす。

CP長官といえど、所詮は世界政府の人間には違いない。上から

探れと命じられれば、動かざるをえない。

どのみち、奴の事だから既にBWに腕利きを送り込んでいるだろうが……。

「この国の王は高潔だろう。けどな……アスラ中将、お前の上には結構腐ってる奴がいるんだぜ？」

第129話・蠢くものは（後書き）

アスラとクロコダイルを描きましたが、明日はまたエース達にしばらく戻る予定です

第130話 - 新たに乗り込んだ者は（前書き）

うーん、今日はどうにも頭がうまく働かない……

## 第130話 - 新たに乗り込んだ者は

「さあ、メシが出来たぜ、イカ野郎ども」

ねじり鉢巻きをした板前風の男が料理を持ってくる。

その後ろからは丸サングラスをかけた男が同じく料理を運んでくる。

たしぎは妙な顔になっているが、エース達は最初こそ驚いたものの、今では全く気にしていない。当人に全く悪気がなく、昔のチンピラ時代の癖だと分かっているからだ。

パティとカルネ。

原作で、『極道コンビ』と呼ばれた2人が、現在ストルツ・フランメ号に乗っている理由は、元々この2人、本人達曰く『乱闘を起こしてしまい、300軒目のレストランから追い出された』ので、海上レストランのバラティエを目指していた。

ところが、何しろ本職がコックの2人。

小船だった事もあり、マストが折れ、漂流していた所をエース達に拾われたのだった。

とりあえず雇ってもらえるかどうかはさておき、バラティエまでは連れて行く事になった。元々、海上レストランという珍しい場所には興味があるし、運が良ければコックを雇えるかも、という事もある。

予定ではゾロの故郷に寄った後、海上レストラン、バラティエに向かうという方針だ。

さて、パティもカルネも見た目はアレだが、料理を愛する腕は確かな2人だ。

一応調理は出来るとはいえ、次第にレパートリーが尽きて、同じような食事ばかりになっていった一同にはコックの乗船は本当にあり



がたかった。

確かに、コックの乗船は必須ではないのかもしれない。

だが、なんだ、どうせ食べるなら美味しいものを食いたいというのが人の常という奴だ。

大げさな、と思う人がいれば……1度、同じメニューを一週間繰り返してみるといい。

そんな出会いもあったが、やがて船はゾロの故郷であるシモツキ村へと到着した。

ゾロが幼い頃から修行を続けてきた道場。

ワノ国風のそこが、ゾロの原点。

とはいえ、ゾロ自身は既にエース達に話しているが、このまま彼らと旅をする予定だ。だが、やはり師匠へとその旨を伝えておきたいのだという。それが彼なりのけじめなのだとか。

元々、彼の持っていた大業物、和道一文字も、この道場の主の物だという。

……本当ならそれを継ぐ筈だった彼の娘は、もういない。

「師匠、只今戻りました」

「おかえり、ゾロ君」

眼鏡をかけた穏やかそうな人物だった。

とはいえ、ここにエース達はいない。

師匠と会うのならば、と遠慮したのだった。

『先にきつちり挨拶って奴をすませてこい。終わったら、俺らも紹介してくれ』

そう言って、船で待っている。

「師匠、俺は……海へ出ようと思っ」

世界一の剣豪になりたい。

その為には、今のままでは駄目だ。

ゾロの思いを黙って聞いていたコウシロウは1つだけ確認をした。

「ゾロ君、海へ出るのは、最強の剣豪になりたいと願うのは君自身の願いですか？」

コウシロウにとって、唯一の懸念はそこだ。

くいなとゾロとが共に励み、夢を目指した事は知っている。

だが、娘の為に最強を目指して欲しくはない。

目指すのならば。

「ああ、俺自身の願いだ。はじまりはくいななどの競争だったかもしれないけれど、俺は、あいつとの誓いと俺自身の野望の為に世界一の剣豪を目指す」

顔を上げ、コウシロウの目を見てそう断言したゾロを見て、内心でほっとした。

「分かりました。それなら、私からは何も言う事はありません。

……行きなさい、そして君自身の夢を叶えなさい」

「おう。師匠、今までありがとうございました！」

そう言って、ゾロは深く頭を下げた。

その後、紹介を受けた仲間達の姿を見て、やはりコウシロウが酷

く驚いたのは、たしぎだった。瓜二つとっていい程に似ている彼女を見て驚愕するコウシロウを見て、ゾロがニヤリと笑ったりと色々あったのだが、たしぎもコウシロウから刀の教えを受けて、結構勉強になったようだ。

コウシロウ自身も娘が帰ってきたようで、教えている時どころか嬉しそうだった。

そうして、彼らは再び海へ出る。

「おし！それじゃ次はバラティエだな」

「どうせなら、落ちろよ。落ちて、このまま船に乗っててくれ」

「ひでえ！？」

エースの掛け声が響くと共に、ゾロが酷い事を言う。

もっとも、そんな事を言うのはゾロが彼ら2人の腕を認めているからこそだ。もっとも……。

( ) ( ) (いや、実際そうなってくれないかな……) ( ) ( )

エースにサボ、たしぎも声にこそ出さなかったが、同感だったりする。

それぞれに思いを抱きつつ、船は進む。

目指すは海上レストラン、バラティエ。

第130話・新たに乗り込んだ者は（後書き）

ゾロの方は原作でもそれなりに書かれているというか、和道一文字を託されたりしてるので、あくまできちんとことわりを入れに行っただけ、という事でさらっと流しました

コックは今、この2人が乗船してます

さて、サンジとどっちを乗せるべきだろうか……

## 第131話・バラティエ

海上レストラン、バラティエ。

海に浮かぶ船を店とするそこは、知る人ぞ知る名店だ。

海の上という、ある意味辺鄙な場所にあるにも関わらず、客が足を運ぶのは料理が美味いからに他ならない。

オーナーの名は赫足のゼフ。

かつては海賊として名を馳せた男だ。

彼はかつて、海賊でありグランドラインを1年航海し、無傷で帰還した大海賊であった。

だが、オービット号を襲撃した際に起きた嵐が全てを彼から奪った。

オービット号もクック海賊団の船も、そして客船の乗員も海賊団の団員も皆、全ては海に吞まれた。

助かったのは孤島に流れ着いたゼフとサンジのみ。

荒れ果てた食い物もない孤島で、サンジに食料を譲る為に自らは同じく流れ着いた財宝を詰めた袋を食料に見せかけ、切断した自らの右足を食って生き延びた。

その後、嵐の中でサンジの声をかすかに聞き取っていた船が、再び孤島の近くを通った際に「声が聞こえた」という証言から今度は晴れていた事もあり立ち寄った結果、2人はかろうじて救出された。とはいえ、ゼフは名の知れた海賊であり、当然高額の賞金がかかっていた。

そんな彼が、救出された時、海軍に逮捕されなかったのは、1つは長い孤島での窮乏生活で手配書と同一人物とは思えない程に痩せ細り、髪の色も変わっていた為に手配書の『赫足』のゼフだと気付

かれなかつた事。

そしてもう1つがサンジのお陰だった。

オービット号は何故消息を絶つたのか。

その理由を一足先に元気になったというか、話を聞ける程に回復したサンジに当然質問が飛んだ。その結果として、オービット号が嵐で沈んだ事が判明した。

そこまではいい。

海賊に襲われたか、自然現象かと看做されていたが、自然現象ならば問題はない。だが、問題は残るもう一人の人物だ。

サンジはオービット号の見習いとして正式に書類にも記載されていた。

だが、ゼフは当然だが、書類に名前などない。

もし、サンジが『沈む前に自分達を襲ってきた海賊だ』と証言していれば、きっとゼフは逮捕されていたであろうし、長い窮乏生活で体が弱っている上、利き足を失ったゼフには抵抗する余地もなかっただろう。

だが、サンジはゼフに恩義を感じていた。

当時の調書によると、サンジはゼフを『コックの1人が怪我をして調理が困難になった為、足りない人手を補う為に船長が現場で雇った臨時雇いのコック』として説明したらしい。

何しろ、本当に怪我をしたコックが出たのか？とか、船長が臨時雇いを行なったのか？など確かめる術はない。

全ては海の底で、当人達はこの世の住人ではない。  
サンジが『実は……』ともしっかり語れば、それを信じるしかない。

まさか、自分達を襲った海賊を庇っているとは誰も思わないから、それが疑われる事もなく、2人は衰弱した体が回復した後、解放された。

この時、運が良かったのはオービット号の流れ着いた財宝の相当量が彼らのものとなった事だ。

持ち主のはつきりしている物、所謂家宝とかそついうものは相続者の手元に戻った。

だが、宝石などは非常に面倒な事になった。

何しろ、所有者を確定する方法がない。

『そのネックレスは母が愛用していたものです』

と名乗り出た者がいた少し後には。

『そのネックレスは妹の誕生日に父が贈ったものです』

と名乗り出る者がいる始末。

では、双方ともその証拠を、と言われるとどちらも出せなくて、証拠は海の底だと主張する始末。

とうとう会社が匙を投げた結果として、『オービット号の乗員の物』とする判決を出し、生き残りである（と看做されていた）ゼフとサンジの2人にある意味押し付けられたのだった。

無論、その後人を雇って奪おうとした者、騙しとろうとした者なども出たのだが……サンジだけならばともかく、如何に全盛期より劣ってしまったとはいえ、赫足のゼフがそんなじよそこらのチンピラ如きに負ける訳がない。全て返り討ちにされた。

その後、海上で飢える事の辛さを身を持って味わった2人は海上で食事の出来る場所を、と願い、それを形としたのが海上レストランであるバラティエだ。

もちろん、最初から海上レストランを造った訳ではない。

最初は店のある島に開き、そこでサンジも鍛錬に励んだ。

サンジは元々見習いだった。

だからこそ、本当の意味でコックになる為に料理の腕を磨き、加

えて、財宝を奪おうとして雇われた連中に足手まといとして狙われたのが悔しくて、足技もまた、ゼフから習った。ゼフも未熟な腕を見かねたのか、或いは戦いの度に足手まといになるのを面倒に思ったのか、しっかりと教えてくれた。

そうして、店の知名度を上げると共に、コックらを勧誘し……。遂に海上レストランは開店したのだった。

「うん、美味しい」

「美味しいな」

「美味え」

「美味しい……」

その日、バラティエにやって来た船には6人が乗っていた。

内、4人は美味しい美味しいと言いながら気持ちいい食べっぷりを見せていた。下品な食べ方ではない。確かに大食いだし、速度も速いのだが汚くはない。

こちら辺はハンコックの教育の賜物と言えよう。ゾロはゾロで、矢張りたしぎの前では、くいなに見られているような気分がするらしく、がつつく様子はない。

彼らに対して、残る2人は真剣だ。

美味しいとも何とも言わず、料理を味わって食べている。静かに見極めようとしている。

この様子にはエース達も何も言わない。

エース達にとっての海賊との戦い同様、バティ達にとっては今こそが真剣勝負の場なのだと理解しているからだ。

「シェフに会わせてくれ」



食い終わったバティとカルネは真剣な表情で頼み込み  
ここで  
働かせて欲しいと願った。

その目を見たゼフはただ一言。

「よかるう」

と了承した。

本物は本物を知る。バティらはまだまだ腕は未熟だが、熱意は本物と見たゼフは彼らを受け入れた。

溜息をついたのは、むしろエースらである。

「「「「はあ……これで美味しいメシともおさらばかあ（ですね）」

「「「

そんな彼らの様子を見ていたゼフは一言告げた。

「サンジ、お前、こいつらと旅に出てみる」

## 第131話・バラティエ（後書き）

とりあえず、勝手に想像したバラティエ誕生までのお話＋  
次回は、サンジに関するお話になります

## 第132話・その理由は

赫足のゼフは思う。

思えば、あの嵐で孤島に小僧と2人流れ着いた時、自分は1度死んだのだと。

以前の自分であれば、子供と2人孤島に、となればあんな真似はしなかっただろう。財宝も食い物も全て我が物にして、恥じなかったはずだ。その結果として、子供1人が飢え死にか、それとも自分に蹴られて死のうが大して気にも留めなかっただろう。

それなのに、結局自分は子供を救った。

食い物全てを子供に分け与え、自身は自らの足を食って生き延びた。

とはいえ、食い物もなくなり、最早これまでかと思っただが、最後の最後で助けは来た。

しかし、気付けば船の中だったとはいえ、自分は賞金首。

とはいえ、逃げるだけの力もなく、助かったが、行き先はインペルダウンか処刑台かと観念したが、サンジの証言で助かった。

もっともサンジの反応自体は疑問に思う事ではない。

ストックホルム症候群といい、或いはもっと身近な言い方をするなら吊り橋効果という。

窮地を共に超えた経験は強い連帯感を生み、本来は敵のはずの相手からの親切な対応は親友のような間柄を生む。今回の場合も基本は同じだ。

たった2人孤島に流れ着き、敵だと思っていた人物の思いもよらぬ好意に気付いた為に隔意が反転した、という感じになるか。

しかし、自由の身になったとはいえ、改めて海賊をしようという気持ちにはならなかった。

片足を失ったという事もある。

部下達を失ったという事もある。

だが、それ以上にあの子供に対して情が湧いてしまった。

そうして、料理を教え込んで、足技を教えて……本人に熱意も才能もあつたのだろう。今ではすっかり一人前のコックであり、足技に関して一流だ。

だが……。

自分に恩義を感じているが故に、自分の願いを押し殺している。

かつてのクック海賊団最後の襲撃時のサンジの願い、オールブルを見つけるといふ自分の夢と同じ夢を持つ子供は、今も願いを抱え込みながら、船を出ずにいる。

そうして、今もゼフの言葉に睨むような視線を返していた。

「落ち着け、ちゃんと理由はある」

「なんなんだ、一体」

自分の夢を追って欲しいなどといったら、それこそこじれるだけだろう。

「お前、船でのコックを一人前になってから体験した事はあるか？」

「……………」

サンジは沈黙した。

実の所、サンジは航海する船のコックという経験は少ない。

それこそ見習いの頃、オービット号にあのまま乗ってれば、やがて経験を積み、一人前の船のコックとなっていただろうが、船はそうなる前に沈んでしまった。

その後は島で料理店を開いて経験を積み、修行し、今のバラティ工も元々料理店としての運用を前提とした船。

通常の意味での船とは異なる。

そして、船のコックとは通常の料理店のコックとはまた異なる。船とは小さな閉じられた空間だ。

限られた食材、限られた調味料。全て望むものが揃うとは限らず、調理器具も専門のものが揃っているとは限らない。

新鮮な食材など得られるのは最初の内だけ。少し長い航海ともなれば、途中からは新鮮な食材は釣りたての魚だけ、という事も珍しくない。

けれど、そんな中でコックは美味しい料理を作らねばならない。サングが乗っていた客船などはその代表例だが、『新鮮な食材がなくなりました』で客が不満を感じるような食事を出すようではコック失格だ。

「何時か、経験の為にやらせるつもりだった。とはいえ、でかい船ならもうコックはいるだろうし、下手な奴の船に乗せるのもと思っていたが、その奴らはちょうどコックが船から降りる事になったし、見た所目も問題なさそうだ。……いい経験だと思って、船のコックを体験してこい。……そちらの面々は構わないか？」

何やら成り行きに困惑していたエース達だったが、コックが乗ってくるといふなら文句を言う筋合いはない。

変な相手ではないようでもあるし。

「……分かった。そういう事なら引き受ける」

そう告げるとサングは荷物をまとめてくる、とその場を立ち去った。

その背を見ながら、ゼフは思う。

願わくば、航海で自分の夢をもつ一度思い出してほしいと。

(お前の夢見たオールブルーは、俺の夢でもあるんだぜ……息子  
よ)

### 第132話・その理由は（後書き）

サンジって、船でコックとして働いてた期間はそんな経験ないんじゃないかと思います

オービット号の頃はまだ未熟でしたし、バラティエは船っていつても料理店ですからね。普通の船とはまた異なります

原作ではサンジは大量の料理を作り出してますが、現実の船では壊血病が恐れられたように、最後はカビの生えたパンとか湿った乾パンでも食ったようにきちんとした料理つてのは現代では考えられない程、帆船時代のものは大変だったみたいですからね

### 第133話・サンジの悩み

サンジは悩んでいた。

船のコックは普通の店のコックとはまた違う。

頭では理解していたつもりだったが、現実に体験してみればまた違った事柄が続出していた。

エース達の船は小型船とはいえ、長期の航海にも耐えられるつくりになっている。

海賊を追う結果として、無寄港航海が1月近くに及ぶ事もない訳ではない。前回は正にそうだった。

サンジ自身が問題と思う事はその時起きた。

当初サンジは普通に食材を使つて調理を行なった。

最初はそれで良かったが、次第に食料庫は貧相になっていき、メニューに頭を悩ますようになった。

最終的な海賊の捕捉が当初より遅れた事もあり、最後の頃のメニューはそれこそ魚とパンのような食事になってしまった。まあ、それでも魚に関してはそれなりに料理人としての意地を見せたが……。

(……俺が経験不足って言われたのはコレか)

サンジはそう思う。

無論、エース達はサンジを責めたりはしなかった。

一番サンジに対して怒っていたのが、サンジ自身だったからだ。

普通の店ならば、毎日食材が入荷する。

新鮮なものから使用し、その日その日の食材の様子を見ながら、最高の料理を作る。



船は違う。

新鮮な食材は限られる。

その中で、しかも航海の日取りから何日手持ちの食材のみで調理を行なうかを考えねばならない。最初に豪華な料理を出せば、次第に料理が貧相になっていくから却って不満を募らせる事になりかねない。

『ご利用は計画的に』

の、キャッチフレーズのある某会社ではないが、船のコックとは正にそれが要求される。

「こりゃ、もう一度勉強のし直しだな……」

そう呟いたサンジだったが、調理場に入って早々に。

「って何してやがんだ、手前は!?!」

そう怒鳴る羽目になった。

理由は単純、調理場にエースが入り込み、食料庫を漁っていたからだ。

「いや、何か腹減って」

その言葉に、何かサンジの頭の中で切れたような音がしたような……そんな気がした。

これが港に停泊中の船なら問題はない。

たとえば、食料が不足しても、『あ、調味料が切れてら、ちよっくら買って来るわ』、ですむ。

だが、今は航海の最中だ。

しかも、航海の航路の関係上、20日余り島に立ち寄る事はない。そうして、この日程は嵐などで長くなる事はあれ、短くなる事は殆ど期待出来ない。

確かに余裕をもって、多めに食料は搭載してあるとはいえ、限られた食材だ。サンジが頭を絞って、『この日のメニューはこうこうして、この日は……』と、航海が予定通りに進んだ場合のメニューを一通り考えた上で、航海が長引いた事も考えて、5日程度のメニューも考慮して組んだというのに……。

例えるなら、こんな事を想像してみるといい。

難しく、大変な量の仕事なり宿題なりを懸命に片付けて、提出したら、当の相手が……上司でも先生でもいいが、『あ、それ必要ななかったから』と、そのままゴミ箱に放り込まれたら……どう思うだろうか？

サンジの答えは大爆発だった。

「ふざけんなあ！お前は船長だろうか！」

「おおっつ！？」

サンジにしてみれば、これは譲れない。

エース達の役割が戦う事であるならば、食事を作る事はサンジの役割だ。

己の職分を侵されたと感じた故の怒りだったが、その言葉を聞いた上でエースは言った。

「なあ、サンジ」

「なんだ！」

「俺達は戦う時、予定通りに行くなんて事はまずない。大抵何かしら予想外の事が起きて、事前の作戦通りに物事が終わった事なんて数える程だ。……お前は料理やってきたっていうが、これまで全部予定通りに進んでたのか？」

虚をつかれたような表情になったサンジだった。

思い返してみれば、予定外の事など幾らでもあった。

急に大量にやって来た客、伝票の間違いによる食料品の不足、届いた品が間違っていた、嵐で届くはずの荷が届かない。数え上げれば、きりが無い。

そんな時、自分達はどうしてきた？

諦めたか？

周囲に当り散らしたか？

違う、ある物で工夫し、対応してきたはずだ。

それが料理人というもののはずだ。

……大事な事を忘れていた、それに気付いたサンジだった。

「……ありがとな、船長。確かにその通りだ、大事な事を忘れる所だったぜ」

計画を練るのは大事だ。

だが、計画に縛られてはいけない。想定外の事が起きた時、それで諦めてはならない。状況に応じて、新しい方策を探し、成し遂げてこそそのプロだ。

「そうか、そりゃあ良かった。……じゃあ、俺はこれで」

そう言って、立ち去ろうとしたエースの肩をサンジががっしりと掴んだ。

「確かにその事には感謝する。感謝するけど……手前が盗み食  
いしたって事実はちゃんと残るぜ？」

「……やっぱり駄目か？」

かくして、サボも混ぜて、みっちり説教を受ける事になったエー  
スだった。

もっとも、この後もエースの盗み食いにサンジは悩まされる事にな  
るのだが……。

### 第133話・サンジの悩み（後書き）

船って限られた空間で……

普通の料理店で働くのとはまた、異なると思っんで、こんな話をば

サンジがどの程度船で働いていたかでまた変わるとは思いますが

## 第134話・成長、そして

エースの鍛錬であり、仕事である事がある。

海水を満たした大型の寸胴鍋を下から熱する。

熱された海水は蒸発し、蒸気を集めるよう工夫されて上に被せられた鍋の蓋に集まり、やがて結露して下へ落ち、待ち構えていた器に集められる。

完全に海水が蒸発した頃合を見計らって、火を止め、冷えるのを待つ。

これで水が得られる上、寸胴鍋に残った塩は塩で調味料に回され、余った分は島に上陸した際に売る。

塩は生存に必須の物資ゆえに、どの島も多少の自給はしているが、やはり大量生産という訳にはいかない。

岩塩は産出地が限られ、塩田は乾燥した雨があまり降らない時期がある場所でないといけない。

なので、こうしたまとまった塩の売却は喜ばれる。

得られた水は、樽に納められ、古い水から消費してゆく。

まあ、時には新しい水を飲みたくなるが、それは島なりが近づくまでは我慢だ。

こうした作業を行えば、水が得られると分かっているても、通常は燃料もまた有限だからそうそうは出来ない。だが、エースは火の自然系能力者だ。熱には事欠かない。

加えて、これらの作業は細かな制御にはもってこいでもある。

まあ、それでも思っておかないと虚しくなるといいうのもあるのだが。

「よし、今日の分は終わったぞ」

鍛錬は剣士はイメージトレーニングと筋力トレーニング、素振り。サンジもそれなりに足を動かしてはいるが、矢張り船の上では限界がある。

そんな彼らの不満を解消する行動が……。

「見えたぞ！海賊船だ！」

という訳だ。

とはいえ……。

「……おい、これで終わりか？」

ゾロが不満そうに呟いた。

それも尤もな話で、あつという間にケリがついてしまったからだ。

少し時間を遡ってみよう。

まず、エースが先手を打った。

『火拳！』

炎が拳をかたどって、膨れ上がる。それこそ船並のサイズの拳の一撃で、船の上部、帆を焼き払ってしまった。

帆船が帆を失くせば、まともな航行は不可能だ。きちんと調節したので帆柱までは吹き飛ばしていない。……帆柱まで吹き飛ばすと相手を皆殺しするのでもない限り、後が面倒なのだ。

この辺の細かい制御は、日々の鍛錬の賜物だ。

行き足の止まった船にエース、サボ、ゾロ、たしぎが乗り込んで

ゆく。

サンジは船で留守番だ。

本業がコックというのもあるが、誰かが船にいなければ、もし逆に自分達が攻め込んで留守にしている間に海賊が船に乗り込んだ場合、母船を乗っ取られてしまう可能性があるからだ。

とはいえ……。

エースが焼いてゆく。

サボがなぎ倒してゆく。

ゾロが吹き飛ばしてゆく。

サボとゾロの戦い方は剣士同士ではあるが、前者が速さと技に持ち味があるのに対して、後者は力といった印象を与える。

たしぎは、この中では一番劣っているが、それでも安定した戦いを展開している。

女性という事でちょっとかきをかけようとする連中もいないでもなかったが、すぐにそんな余裕は吹き飛んだ。

そうして……。

「貴様ら！どこの……！」

「邪魔だ！」

名乗る時間さえ与えられず、船長はゾロに吹き飛ばされた。

船長が雑魚扱いされる光景を見てしまったのは、戦意など保てるはずもなく、降伏したのだった。

「……そろそろ限界なのかもしれないなあ」

海軍に引き渡すまでの処理が終わった後で、エースが呟いた。誰もがわかっていた。



元より、エースとサボの本来の強さは東の海の枠に収まるものではない。

ゾロも才能があつたのだろう。サボと手合わせをする中でどんどん強くなっていった。

たしぎは……まあ、頑張ろう。

そんな面々が揃っているのだ。命の遣り取りという壁を乗り越えさえすれば、はっきり言って相手にならない。

「……今度、アスラが東の海に来るそうだ。その時、相談してみよう」

アスラ自身は休みを取るのは気が引けていた。

クロコダイルと陰謀合戦をやっている最中に、少しの間とはいえ本部を離れるのは気になる。

だが、休みを取らねば効率は下がるし、家族サービスもしなければならぬ。

それに、上が休まねば下が休めない。休んでみせるのも、上の仕事といえは仕事だったりする。という訳で、東の海で1年余り動いていたエース達に久方ぶりに会いに来るのだという。

「もし、OKが出たら……グランドラインへ入ろう」

第134話・成長、そして（後書き）

アスラだけじゃありません、会いに来るのは……  
そうして……

えー次回は久方ぶりにバトル予定

## 第135話・準備運動（前編）

ドン・クリーク。

東の海では大物の彼の特徴は卑怯とその海賊団の規模だ。

海賊艦隊を擁し、その数は実に50隻に及ぶ。

原作と違い、現時点で既にこの隻数に達する程に彼の配下の規模が膨れ上がったのには、原作のアーロンが早々に潰されたり、或いはそれなりに名の知れた海賊が東の海で次々とエースらによって潰された結果として、特に弱小規模の海賊が『このままでは次は自分だ』との危機感から傘下に入るようになったのも大きい。

クリーク自身は『これだけの規模の海賊となれば』と遂にグランドラインへと入る事を内心で決めており、艦隊を集結させていた。

普段から全ての船を集結させては目立つ事この上ないし、稼ぎも悪くなる。

結果として、普段は大体3〜4隻程度の船団を組ませて行動させていた。

そうして、集結し、グランドラインを目指そうか、と船を進める途中で、客船と思われる優美な艦とそれに寄り添う小型の船を発見する事になる。海賊の常として、彼らはその2隻に襲撃をかけた。

……地獄を見るとは思いもよらず。

アスラは旗艦メルクリウス号に家族を乗せてやってきた。

それだけではない。

エースらに会うという事でマリソフォードに戻っていたルフィも同行していた。ちなみに、ガープも来たがったのだが、実は仕事をさぼりまくっていた事が判明し、元帥大将総出で缶詰にされている。ただし、予定外の同行者もいた。

王下七武海『鷹の目』のジュラキュール・ミホーク。

ふらりとやって来た彼は、特にする事もない、とばかりに同行し

ていた。どうも、シャンクスが最近何かと白ひげを除く他の四皇と小競り合いをしているらしく、手が離せないのでアスラの所に来たらしい。

そして、エースらと合流した所でクリーク海賊団に襲撃を受けた。

エースらは想定外の事態に緊張していた。

クリーク海賊団はその規模故にエースらは手を出せないでいた。数とは力でもある。

1つの船団ならば潰せるだろう。

だが、それをすればクリーク海賊団自体が敵に回る。もし、1つ2つの船団では埒が明かないと艦隊全てが向かってきては、自然系であるエースなどはともかく、他は危険だし、そもそも船が沈められる可能性が高い。

それだけに偶然とはいえ、クリーク海賊団の全艦艇集結した状態での遭遇に緊張を隠せなかった。……もともと、それは僅かな間で消えるのだが。

半包囲の形で近づいてきた海賊団だったが、先手を打ったミホークの一撃が炸裂した。

ただ、刀を抜き振りぬくのみ。

それだけで、艦隊の先陣を切った船団の1つが2隻が沈没、2隻がその余波で航行不能に陥った。

その2隻はアスラの『大嵐脚』で次の瞬間には真つ二つにされて沈んだが。

海軍本部中将アスラ、そして、王下七武海ジュラキュール・ミホーク。

世界でもトップクラス、上から数えた方が遥かに早いような実力の持ち主を相手にして、東の海の……弱い故に群れているような連中が敵う訳がない。

何しろ、ミホークが刀を1度振るえば船が1隻沈み。

アスラが拳を1度振るえば船が1隻沈み。  
ミホークが刀を振りぬけば、射線上の船がまとめて沈み。  
アスラが九尾を展開して、荒れ狂えば周囲の船がまとめて沈んだ。  
他の面々は……どうしていただろうか？

ハンコックは全く動揺する様子も見せず、子供達の相手をしてい  
た。

子供達も全く恐れもせず、母や久しぶりに会うエース達にまとわ  
りついていた。

アリスは『自分の役割はこの船を守る事』と船首に陣取っている。

「ふみゃー！」

と、一声鳴くと空へと飛び上がり、飛来した砲弾を前脚でぺしっ  
とばかりに打ち返していたりする。

ルフィはと言えば、「おおー！すごい！」と目の前で展開さ  
れる一大スペクタクルに歓声を上げている。

とはいえ、自分自身もその中に飛び込もうとはしない。

今の自分では、あの拳と剣の嵐の中に飛び込むのは足手まといに  
しかならないと分かっているからだ。素直にアリスと共に砲弾を弾  
き返したりと船の護衛に共に回っていた。

エース達は……アスラの『まあ、休んでいる』との言葉に最初こ  
そ気兼ねしていたのだが……最初は顔をしかめ、次に呆気に取られ、  
最後は達観したような顔になっていた。

もっとも、ゾロは目をギラギラさせていたが。

目の前に展開されるのは自身の目指す世界最高の剣豪の技。

（今の自分にあいつに立ち向かえるだけの力があるか……？）

そう思い、幾度も脳裏で戦ったら、と仮定してみたが、まともに

技も通じず切り伏せられる結果しか思い浮かばなかった。もつとも、ゾロの顔には諦めではなく、だからこそ目指す意味があると言わんばかりに目は輝き、口元にも笑みが浮かんでいた。

クリークは訳が分からなかった。

グランドラインへ入る前の前祝いというか、前菜のつもりで軽く片付けるつもりだった2隻の船。

だが、そこからは巨大な斬撃が放たれていきなり船団の1つが全滅し、そこからは一方的だった。

「馬鹿な……！どうなってやがる！」

逃げようにも、クリークの船は船団の中央付近にいた。

そうして左右に展開した暴風は荒れ狂いながら挟み撃ちにする形で迫りつつあった。

既に後方の艦にも被害が出ていて、全滅は時間の問題という有様だった。

（何故だ！？何故こうなった！一体何が起きてやがる！）

クリークが内心で喚いている間にも次々と艦は沈む。

何しろ、2人の前では特別な技など必要ない。

普通に剣を振るえば放たれる剣風で船が沈み、集団戦闘用とアスラが割り切っている能力を振るえば船がまとめて沈むのだから、正に作業そのものでしかない。

もし、片方だけであれば、艦隊を生贄にして逃げる事も出来たかもしれないが、2人であった事がクリークから逃げ場を奪っていた。そして、気付けば艦隊は全滅し……左右からほぼ同時に着地した

ものがいた。

その姿を見て、クリークは目を見張った。

片方は一目で分かる。

海軍本部中将。

もう一人も高名故に覚えがあつた。王下七武海の一部。

世界でも最高峰に位置する両者の登場に、何故東の海にこんな化け物どもが！？と混乱と動揺を隠せなかつた。

「時間的にはほぼ同刻か……こちらは25だ」

「こつちは27だ。まあ、範囲攻撃ならこちらの方が得意だからな」

特に気負うでもなく、軽い日常会話のように聞こえるが、その会話に含まれる数は彼らが沈めた艦隊の船の数なのだろう。

……逃げるにしても、元々海賊である王下七武海だけならともかく、海軍本部中将という立場にある人間が海賊を見逃してくれるとは思えない。

（いや！何を恐れる事がある……！確かに、配下の連中はやられたが……どうせグランドラインに入れば戦う相手だ）

すつとクリークの前に立つ男達がいる。

片方はクリーク海賊艦隊戦闘総隊長、通称『鬼人』のギン。

もう片方は第2部隊隊長『鉄壁』のパール。

（そうだ、俺にはまだこいつらがいる）

そつ気を取り直した。

しかし、こつという奴らがいるとは……グランドラインの情報を手

に入れねばならない。雑魚はどうせすぐにまた集められるが、盾代わり以上のものにはなりそうにない。もう少し質を厳選する必要がある。

野望も実力も本船の部下どもを配下に持つ俺にはある。だが、情報がなければ、余計な手間と思わぬ損害が避けられそうにねえ……それはある種の逃避だったのかもしれない。無論、クリーク自身は気付いていなかったが……。



**第135話・準備運動（前編）（後書き）**

まずは軽く準備運動……

はい、相手が悪かったんですけどね、クリーク

次回、ギンとパール戦

その後……成長を見ると称した試合予定です

## 第136話・準備運動（後編）

「どちらがいい？」

「……まだ、あちらの方が多少は試し甲斐がありそうだ」

隊長格なのだろう。

というか、知っているのだが、『鬼人』のギンと『鉄壁』のパール。

格としては前者が遥かに上だ。

なので、一応聞いてみたのだが、ミホークはあっさりギンを選んだ。まあ、予想出来ていた事だが……単純な実力という面ではギンが一番上だろう。

アスラとミホークが敵の目前でそんな話をしている前で、1人の男が名乗りを上げていた。

「はあーっはっはっは！鉄壁！よって無敵！」

巨大な盾を前後につけ、腕や足にも盾のついた盾男。

それが、第2部隊隊長『鉄壁』のパールだ。

軍艦の砲撃も効かない鉄壁の防御が自慢で、今まで経験した61回の戦闘で一滴たりとも血を流したことがないという事が自慢だ。もっとも……。

「あれ？」

パール自身が胸を張った後、目を前方に向けると既にそこには誰もいない。

思わず疑念の声を上げたパールだったが。

「拳砲……」

自分のすぐ前から声がしたのに気付いて、視線を向けると既にそこには海軍の姿。

一瞬慌てたが、『大丈夫だ！自分の防御を破る事は軍艦の砲撃でも無理だったんだ！』と思い直す。……軍艦の砲撃なんてものが、この世界の本物達の一撃に比べれば玩具に等しい事は先程まで艦隊の沈む光景で散々見せられていたと思うのだが……。

「弾種：徹甲！」

瞬間、アスラの腕が銀色に輝き、貫通に適した形状へと拳が変形する。

その叩き込まれた一撃は、ただそれだけで盾を叩き割り、パールの体を「く」の字に変形させ、余りの勢い故に背中盾まで割れた。更にそのまま吹き飛び、転がり……海に落ちる事はかろうじて避けられたが、完全に白目を剥き、口元からは泡を吹いていた。

誰が見ても、戦闘不能だ。

シン……と静まり返った艦上では、新たに巻き起こった剣戟の音だけが響いていた。

「どうした、それで終わりか」

ミホークの手にあるのは小さな短刀。

首から下げていた十字から抜いた、その小さな短刀で鉄球がついたトンファーを思わせるギンの武器を軽くあしらっている。アスラ以外、周囲の誰も気づいていないのだが、ミホークの足はその場から一歩も動いていない。ギンは回り込もうとはしているのだが、ミ

ホークの技がそれすら封じている。

自分達の最強の隊長が軽くあしらわれている。  
それは、クリーク海賊団の気持ち打ち砕く光景だった。

原作のギンは情に目覚めた男だった。

だが、あれはグランドラインで心を挫かれ、窮地の中でかけられた情けが身に染みだからこそ一皮剥けたと言える。

今のギンはまだ、情のない、クリークに絶対忠誠を誓っただけの非情な男に過ぎない。

それはただの機械と大差がない。

それでも懸命に戦うギンごとミホークを狙っている男がいた。…  
…言うまでもないが、この海賊団の長、ドン・クリーク当人である。  
役立たず、と看做した相手には容赦しない。

一対一の戦いに横槍を入れるのは卑怯だという感覚もない。  
むしろ、好機。

そう見て、毒ガス弾を構え、狙っていた。

(奴を仕留める礎になれるんだ、本望だろうぜ)

そんな自己中心的な理屈を立てて、猛毒MHSを用いる機会を狙っていた。もちろん、それなりに打算はあり、ギンはクリークがこのような場合に毒ガス弾を使うという事を予想しているだろうし、位置どりも考えている。ギンからならば見えるであろう一撃は、防毒マスクを持っているから大丈夫だろうという読みもある。

もっとも…クリークはそちらに気を取られる余り、この場には2人敵がいる事を忘れていたと言える。

「おい、クリーク」

「煩い、黙っている……」

「お前、気付いてないのか？」

「煩い、静かにしろ……この機会を逃す訳にはいかん……」

「いや、お前俺の事忘れてないか？」

なに？

と、声に視線を向ければ……至近距離に立つには海軍本部中将。

「……………」

クリークの顔には『しまった、忘れてた』と書いてある。

もつとも、アスラからすれば、それも仕方ないかな、とも思っている。既に、ミホークだけで一杯一杯なのだろう。何しろ、自分の最も信頼し、最も強い手駒がミホークには遊ばれている。

その相手に匹敵する相手がもう一人いるなど……考えたくもないという気持ちは分かる。

アスラはいえ、その間に他の船員らを片付けていた。最早、この巨大ガレオン船で意識を保っているクリーク海賊団はクリークとギンしかいなかった。

「まあ、何だ。寝ておけ」

問答無用で、ウーツ鋼の鎧の防御など物ともせず叩きつけられてクリークが気絶するのと……ギンがミホークにナイフ一本で片付けられるのはほぼ同時だった。

メルクリウス号に帰還してきたアスラは残る片付けを部下に任せ

る。

その上で、エース達に視線を向ける。

「さて……軽い準備運動は終わった。それじゃ勝負を始めようか」

第136話・準備運動（後編）（後書き）

という訳で

準備運動はアスラとミホークにとっての準備運動、でした

クリークは真つ向アスラと戦うのも考えたんですが、考えれば考える程まともに相手にならず……もうあっさり片付けさせました

毒ガス以外、トゲトゲマントも、大戦槍も全然効きそうになくてw

## 第137話 - 後始末と組み合わせ

近くの無人島へと彼らは降り立った。

クリーク達は賞金のある面々だけ捕縛され、今はメルクリウス号の牢屋の中だ。

別にアスラは賞金が貰える訳ではないので、エース達に引き渡しても構わないのだが、何しろ数が多い。総数53隻に及ぶ海賊艦隊の全てを捕らえるには到底人手が足りない。

『多分逃げたのもいるだろうなあ』

と思うのだが、確認する術がない。

考えてもみてほしい、1隻平均100人としても5300人だ。

この内、誰が死んで、誰が逃げて、誰が捕らえられたのか。手配書がある相手ならまだしも、下っ端となればどうにもならない。

船本体は全滅したとはいえ、ポートまで全滅したとは思えない事でもあるし……。

とりあえずの対処として、懸賞金のかかった者は前述の通り、残りは唯一残った海賊艦隊旗艦のガレオン船に可能な限りは乗せて、残りは海兵によって別の岩礁の島へ。周辺の支部に連絡を取って、複数の支部から移送の船が集結する事になっている。

この辺りの細かい事は下の者がやる、というか、アスラは元々休暇中だ。

部下に任せて本来の予定を果たす事にした。

「さて、それでは模擬戦を始める」

今回の組み合わせは簡単だ。

素手かそうでないか。



なので、アスラとはエース、ルフィ、サンジが。  
ミホークとはサボ、ゾロ、たしぎが挑むという形になる。  
今こうして、並んでいるがここまで色々あった。

まず最初は、たしぎだった。

ミホークの背負う最上大業物、黒刀『夜』。

一目見た瞬間、魂を奪われたようにふらふらと近づき、ミホークの後ろに回ってうっとりした瞳で見詰めていた。ミホークも気付いてはいたのだが、殺気もなし、この程度の腕なら例え背後から襲ってきたとして相手にもならぬと放置していた為に起きた事だった。そして、いざこうなってしまうと、なまじ放置していただけに今更「見るな」とも言えず、結果非常に珍しい光景が展開される事になった。

たしぎとて、相手は王下七武海にして、世界最高の剣豪。  
海賊ではあるが、犯罪者ではなく、悪党でもない。

さすがに手を出す馬鹿さ加減は先程までの光景で存分に思い知っていた事もあり、堪能した後残念そうではあったが、割と素直に離れた。

続いては、サンジだった。

メルクリウス号に乗り込んで、最初に目にしたのはハンコックだった。

原作の彼女も確かに美しいのだろう。

だが、元より世界最高の美女と謳われる程の資質を持つ女性が、不安なく暮らせる環境を持ち、愛し愛される日々を送っていたらどうなるか……その答えが目の前にあった。

「生まれる前から愛してました！」

完全に目がハートマークになって、ハンコックにどこから取り出

したのか、花束を捧げているサンジがいた。  
そうして次の瞬間……エースとサボとルフィにとっ捕まって引きずられていった。

「やめろって！」

「今すぐそいつを引っ込めろ！」

「死ぬぞ！」

真剣な表情で押さえ込もうとする3人だったが……。  
素晴らしい美女を目の当たりにしたサンジはそれを振り切って動こうとして……。

「みや」

アリスに押し潰された。

正確には、「おいたは駄目よ？」とばかりに前脚で押さえ込まれた。

これが普通の獣ならサンジは振り切れたかもしれない。

だが、相手は六式を取得した、海軍本部の将官クラスとも真つ向やり合える巨大な虎だ。カも体格も技術も経験も全てがサンジより格上な相手では、サンジとてどうにもならなかった。

動けずジタバタと暴れているサンジに、エース達が口々に言う。  
ハンコックが子供もいる人妻である事や、海軍本部中将たるアスラの奥さんである事などだ。

だが……。

「俺はあんたに勝負を申し込む！」



## 第137話 - 後始末と組み合わせ（後書き）

模擬戦の組み合わせ発表

今回はまず、剣士組からになります

ちなみに、前回のアスラがえらい短時間でクリークの船の一同を片付けた方法ですが、実は簡単で『霸王色』の覇気を用いています

## 第138話・VSたしぎ

王下七武海にして世界最強の剣豪ジユラキール・ミホーク。彼に挑むは若き力、サボ、ゾロ、そしてたしぎ。

「さて、お前達の力を見せてみる」

彼らは互いに目配せをして、たしぎが前に出る。

それぞれが考えた。

勝ちたいならば、1度に挑めば良い。

だが、これは殺し合いではない。

これは模擬戦であり、加えて、1度にかかった所で勝てるかどうかは大いに疑問符がつく相手だ。

それならば、剣士として相對したい。

それが彼らの結論であり、たしぎが一番に出てきたのは、こう言っ  
つてはなんだが一番弱いからに他ならない。

つい、とミホークは少し屈むと足元から小枝を1本拾い上げる。

「まずは剣を抜かせてみる。全てはそれからだ」

まさかナイフさえ抜いてもらえないとは思わず、たしぎもさすがに険しい表情になる。ミホークなりの見極めという事情を知っているサボなどは何とも微妙な表情になっているのだが……。

アスラはと言えば、ミホークの持つ小枝が覇気で強化されているのに気付いている。

あれならば、細い小枝とはいえ、相手には鉄の棒同然だろう。

結論から言えば、たしぎは翻弄され、ナイフすら抜かせる事は出来なかつた。

手首のスナップを効かせた一撃一撃に、たしぎは右に左に面白いように振られた。

どれだけやっても届かないのではないか……。

幾度やつても同じ事の繰り返しに……何より、心が折れた。如何に優れた武器を持つと、如何に優れた技を持つと、心が折れては勝てない。

「ここまでだな」

それに気付くと、ミホークは背を向けた。

心の折れた者に興味はない、という事だろう。

そうされても、たしぎはへたり込み、俯いたまま顔を上げる気配もない。

当然だろう。

彼女とて、自分がこの中では最弱といってもいい事ぐらいは理解していた。今の自分にはエースやサボはおろか、ゾロにも全く歯が立たない。ましてや、世界最強に何時かはと思えるぐらいに近い位置にいる2人相手では太刀打ち出来ないであろう事も。

だが、こんな結果は想定していなかった。

ミホークが持つのは、この砂浜に転がっていた、たった1本の小枝。

自分の持つのは業物【時雨】。ミホークの持つ最上大業物【夜】には敵わないものの、いい刀だ。

なのに、たった1本の小枝を断つ事はおろか、折る事さえ出来なかった。

それどころか、ミホークは片腕を軽く動かしていたように見えたのに……簡単に払いのけられた。その気になれば、彼女を打つ事も容易かつただろうが、打たれる事はなかった。

……それは相手が女だからという訳ではない。

ただ単に、そうする価値もないのだと、そう思われている事がよ

く分かった。

ぜいぜいと荒い息をつく彼女に、誰も声をかけられない。或いはかけない。

ある者はかける言葉が見当たらず。

ある者は次にはあれに自分があたるのだと余裕がなく。

ある者はそれを告げるは自分ではないと確信するが故に何も言わなかった。

「1つだけ言っておく」

「……………」

ミホークの声が掛けられて、ようやくのろのろと擬音でもつきそうな様子で、たしぎが顔を上げる。

「今のお前は技以前に心が弱すぎる。お前は命の遣り取りをしていても敵わないと分かれば、諦めるのか？」

所詮は試合だと、模擬戦だと考えていないか。そう問いかけている。

例え敵わずとも、これが命の遣り取りをしていれば、目の前に死が迫っていたらどうだったのか？諦めるのか、それとも足掻くのか？どちらを選ぶにせよ、今この時に全てを諦めた様子を見せている。

それだけで失格だ。

ミホークが認める『強き者』ではありえない。

「剣士として立つ以前の問題だ。さっさと失せろ」

ミホークはこうした事には容赦がない。

彼が認めた『強き者』には寛容な所もあるが、『弱き者』と看做せば慰めの言葉すらかけない。

分かっているだけに、アスラとしては苦笑せざるをえないし、分かっているだけにサボとしては『やはりこうなったか』と溜息を内心でつかざるをえない。

反面、ミホークの事を殆ど知らない面々の殆どからすれば、『それはあんまりじゃないか?』という様子だった。

それ故に、とぼとぼと戻ってきた彼女を一同が慰めているが、ミホークはそれには完全に我関せずの態度のまま告げた。

「次はどちらだ?」

「俺だ」

そう言いつつ、不敵な笑みを浮かべゾロが歩み寄った。



## 第138話・VSたしぎ（後書き）

剣士組は自分の誇りにかけて、1対1を選びました

ミホークはそれを選ぶなら、それもまたよし、という感じですよ

たしぎはこうなりました

まあ、賛否はあると思いますが……彼女の場合、原作でもどうも自分の正義に酔ってるような印象がありましたので……

## 第139話・VSゾロ

ゾロは普段は左腕に巻いている黒い手拭を頭に締める。

和道一文字を口に咥え、左右の手にそれぞれ三代鬼徹と雪走を握る。

奇妙な構えと言えば構えだが、それにはミホークは特に何を言う事もなかった。

グランドラインは広い。

能力者か、そうでない者という違いはあるが、オニグモ中将などは背中に生やした腕を用いて、更に多くの刀を同時に扱う。3本程度でどうこう言う事はない。

重要なのは格好でも戦い方でもない。

ミホークは強さに関しては、此度においては期待していない。いや、1つだけ今回の模擬戦の最後に期待している戦いがあるのだが……それはゾロにもサボにも関係はない。

サボに関しても、自分達の域に達するにはまだまだかかるだろうと見ている。

「さて、はじめよう」

ミホークの手にあるのは相変わらず小枝が1本。

まずは、これを斬れるかどうか、だ。

ゾロもそれは理解している。……下手な小細工が無意味な事もだ。故に。

「鬼……斬り！」

最初から全力全開だ。

駆け寄り、両手を交差させた構えから3本の刀で逃げ道を塞ぎつ

つ、斬る。

これで斬れるような相手ならば苦勞はしない。

だが、小枝を狙うのは難しい。

小枝を斬ろうとしては駄目だ。小枝を防御に回させて、その際に小枝が耐え切れないだけの一撃を繰り出さねばならない。無理な姿勢に陥らせられれば、尚良いのだが……。

くるり、と回転させた小枝。ただ、それだけでゾロの刀は3本とも綺麗に弾かれた。

(くそっ、これでも駄目か……なら！)

「虎……狩り！」

振り上げた3本の刀を振り下ろす。

完全な力技だ。3本の刀の内、1本でも届けば……。

(これでも駄目なのかよ！)

左右の2本は更に外側に弾かれ、次の瞬間には顎を叩かれる。それだけで、口に啣えた刀は上へと跳ね上げられる。

それがほぼ同時。

殆ど感覚的には全く同時に3本共が弾かれたとしか感じられなかった。

しかも、その力が桁違いだ。

手から口からすっぱ抜けそうになる刀を懸命に抑える。

(……これが世界最高の技と力か。成る程な、サボが「勝てない」って言う訳がようやっと身に染みて理解出来たぜ)

小枝1本で刀をあしらう。

何かしら種はおそらくあるのだろうが、それだけではない。如何に鉄並の強度があつたとしても、所詮小枝は小枝。細いそれに刀を叩きつければ普通は曲がるぐらいはする。まともに受け止めれば、折れ曲がりやがて耐え切れず折れる。それが無いのは、ミホークの腕だ。

(弾き飛ばしているように見えるのは強く打ってるからじゃねえ。俺が振り下ろす力、振り回す力。こっちの力をそのまま別の方向に向けてやがるんだ)

だから、こちらが力を入れれば入れる程、強く弾き飛ばされるように感じる。

だが、だからといって力を抜くなど出来る訳がない。

柔の剣ならば、それもまた可能だろう。だが、ゾロの剣は一部例外はあれど、紛れもない剛の剣。力を抜いた剛の剣など子供のちゃんばらにも劣る。

(なら……)

方法はただ1つ。

ただ、ひたすらに自らの全力をもって当たるのみ。

そうして、1時間以上の時が過ぎた。

その間、ひたすら全力で振るい続けていただけにゾロの全身からは汗が流れ落ち、息は荒く、けれど目はひたすらにミホークを捕らえて離さず、両腕は痙攣しつつも未だ刀を握り続けていた。

「もう、やめておけ。いい加減肉体も限界だろう。これ以上無駄な作業をしても時間の無駄だ」

ミホークには逆に疲れた様子も見えない。これだけ見ても、どちらが優位にあるかなど一目瞭然だ。事実、ゾロの体力は既に限界を超えていた。ただ素振りだけならば、ゾロは1日中でも振っていられる。だが、今は目の前に『鷹の目』のミホークがいる。それがもたらす緊張感は並どころではない。猛烈な勢いでゾロの体からは体力が奪われていた。けれども。

「……………無駄じゃ……………ねえ」

喉がひりつく。だが、それがどうした。

腕も足も鉛のように重い。だが、それがどうした。

心臓は激しく『もう休め』とかなり立てている。だが、それがどうしたというのだ？

自分はまだ生きている。

生きて、立っている。

「俺はまだ……………生きている。……………なら、無駄じゃ……………ねえ……………」

たしぎもまた、ゾロの様子に心配そうに見ている。

だが、同時に何かしら感じるものがあるようだ。

「諦めねえ限り……………生きている限り……………諦めなけりゃ無駄な事なんて……………ねえ！」

ともすれば抜け落ちようとする手に力を籠め、痙攣する足で大地を踏み締め。

技を繰り出すより前に。

ゾロは右からの烈風によって吹き飛ばされ、そのまま意識を失った。

その光景を少し離れてみていたアスラからすれば、次のようになる。

小枝から手を放し、落としたミホークが一瞬、小枝が地面に落ちるよりも早く手を背に回し、【夜】を抜き放ち、放たれた一撃はそちらに構えられた【雪走】を紙のように切り裂きつつゾロに迫り、寸での所で停止した刀の姿に、その瞬間に思いだしたかのように切り裂かれた大気が荒れ狂い、ゾロは吹き飛ばされたのだった。

（認められたか）

一瞬だった。

一瞬にして、ミホークの刃は元に戻され、未だ空中に浮かんでいた小枝を再びミホークは手にしていた。

傍から見れば、遂にミホークがこれ以上は無駄な事、と小枝による一撃を加えてゾロを吹き飛ばしたように見えるだろうが……あの瞬間、間違いなくゾロはミホークに【夜】を抜かせたのだ。

諦めないから、幾度弄ばれようとも心を折れさせなかつたからこそ、認められた。

慌てて駆け寄った一同に介抱されるゾロに、アスラとミホークは共に、ただ黙って視線を向けていた。

## 第139話・V S ソロ（後書き）

このような結末になりました

如何だったでしょうか？

諦めず、ひたすら水滴が岩に穴を穿つような無駄にも見える努力を延々とそれでも諦めずに行なう、その先に何が待っているかも分からないけれど、それでもやる

そののどれだけ難しい事か

諦める方が楽なんですけどね。でも少しずつでもやれば、何時かは何かを得られる可能性があるんです

## 第140話・VSサボ？

サボはあの一瞬、黒いものが閃いたのを見た。何がと断言出来る程ではないが、確かに【夜】は抜かれたのだらう。

ならば、ゾロもまた認められたという事。

たしぎは何が起きたのか分からなかった。

小枝をミホークが変わらず手にしているから、多分あれで打つたのだと思うが……それにしても、他の人達の顔が違う。

何かあったのだろうか。

けれど……諦めない事。無駄かもしれない、徒勞に終わるかもしれない、けれど諦めない。

自分はどうかだっただろうか……ふとそう思った。

ゾロは確かに見た。

あの一瞬、ミホークの背に広がった夜の闇を。

刀身を見た訳ではない。

ゾロに見えたのは瞬間、ミホークの背に黒く、まるで夜のように何かが広がったように見えただけだ。

だが、分かった。

あれこそが、【夜】の姿だったのだろう。

体は動かない。雪走は斬られた。だが、それでもゾロは笑っていた。

最後はサボだった。

「今更お前にこれは必要あるまい」



そう言って、ミホークは指で小枝をパキリとへし折った。  
それは、その小枝が別に細工されていない事を示すようでもあった。

ミホークが折った理由は今更、サボを試す必要はないからだだったが。

とはいえ、【夜】を抜くような真似はしない。

それはこの後、だ。

故に此度手にするのは、無銘の刀。数打ちの安物にすぎないが、紛れもない刀の一振り。

一方、サボは己の愛刀となった【美髯切長船】を構える。

「さて、お前がどう成長したか、見せてみる」

そのミホークの言葉で戦い……いや。  
訓練という名の地獄は幕を開けた。

……

「……ぜえ……ぜえ……」

「さすがにもう動けんか」

サボはといえば、打たれ、転がされ、吹き飛ばされ、で満身創痕の有様だ。

無論、致命傷どころか骨折みたいな重傷さえ負ってはいないのだが……代わりに全身明日には青痣だの打ち身なので痛みで悶えるのだらうな、と思えるような怪我が一杯だ。

「まだ無駄が多いな。確かに剣筋そのものは覚悟が出来てきたよ

うだが……」

案外きちんとした態度でミホークは指摘してゆく。その様子を眺めつつ、アスラは、こうなったのは、自分とシャンクスの子のせいでもあるか、と懐かしく思った。

以前に、3人が集まって島1つ沈めた後でふと、という感じでシャンクスが言った。

『ミホーク、お前弟子を育てようとか思わないのか？』

『興味ないな』

予想通りといえば予想通りの答えが返って来たが、そこからアスラとシャンクスが口々に言う事になる。

最終的にミホークが折れた。

無論、認めるかどうかの最終判断はミホーク次第だが……。

結局、アスラもシャンクスもミホークの剣がそのまま消えるのを惜しんだ。

確かに、ミホークは世界最高を謳われる大剣豪だ。

だが、ミホークも何時かは老いるし、何時かはその命も尽きる。それで、彼が積んだ研鑽が露と消えるのは惜しい。

仏頂面ではあれど、丁寧に教えるミホークの姿にアスラは『案外似合っているんじゃないのか……？』、そう思った。まあ、口には出来ない話だが。

「……さて」

1つ頷き、振り向く。

そこには笑みを浮かべて立つエースとルフィ、何やら妙な情念を轟々と燃やすサンジの3名。

「次は我々の番だ。……始めようか」

## 第140話・VSサボ？（後書き）

果たして、これをVSサボと言えるかどうか？という意味で「？」がついてたり

まともな試合にまだなりませんからね

かといって、前話のゾロみたいな事も既にやっちゃってますし……なので、サボに教えてくれてるミホークの様子とその原因を書いてみました

まあ、今回はこれで……

この後、ルフィ、サンジ、エース。締めが一番ド派手な2人の対戦予定です

第141話・V S ルフィ（前書き）

疲れてると頭が働きませんね……  
いや、ほんとに

## 第141話 - VSルフィ

モンキー・D・ルフィは原作と異なり、既に実戦に参加している。その違いの理由は、たとえば、やはり環境の違いとしか言いようがないだろう。

強くなったなっていない以前に、原作では周囲に頼れる大人はいなかった。何かミスをした時、それをリカバーしてくれるような者、する事が出来る者がいなかったのだ。

だが、この世界では違う。  
ルフィの周囲には海軍本部の要人達が大勢おり、多少の失敗程度なら幾らでもひっくり返してくれる。

さすがに新世界まで行ってしまえば無理だが、東西南北4つの海ならどうにでもなる。

とはいえ、実戦デビューしたばかりの新人が海軍本部中將に勝てれば苦勞はしない訳だが。

「おーし！いくぞ、アスラー！」

「何時でも」

ぐるんぐるんと腕を回し、ルフィが声を上げる。

一方、泰然自若と待ち受けるのはアスラだ。

「ゴムゴムのお ヒストル銃！」

まずは小手調べ！とばかりにルフィが腕を伸ばすが……。

「不用意すぎるな」

まるでその攻撃が来るのが分かっていたかのように体を動かしたアスラは伸びた腕を掴む。そうして、そのままルフィを振り回し、森へと地面へと叩き込んだ。

「うっう　目が回る……」

もっともそんな事をしたのもルフィの体がゴムという前提があればこそ、だ。

ゴムは打撃には滅法強い、というか無効化する。それは相手が地面であつても変わらない。

が、回転させられた事によって目が回るのまでは防ぎようがない。とはいえ、アスラは追い討ちをかけるつもりはないから、しばらくするとルフィは頭を振って、気を取り直した。

「くっそー！なら……」

言うなり、ルフィは高速で駆ける。目にも止まらないその速度は【剃】だ。

ちなみにルフィは未だ六式を同時に使う事は出来ないが……逆に言えば、こういう事なら出来る。

「ゴムゴムの銃乱打！」

全周囲から拳が弾幕となつて襲い掛かる……が。

「ふむ、なかなか考えたな」

既にルフィの背後にいたアスラがルフィの頭に手を載せた。何をしてくるか分かつていれば、付き合う必要もない。

瞬間移動に見えた種は単なる【白銀街道】を用いただけの事。

【見聞色】の覇気。

相手の行動の先読みを可能とする力でもって、ルフィの行動の先の先を読みきり、回避している。

アスラはミホークと異なり、叩きのめすような事はしない。存分にルフィに技を使わせ、その行動がどうか指摘する。

時折、覇気をまとわずして一撃を加えてはいるが、覇気を使わなければゴムのルフィには通じない。

ルフィもアスラがその気になれば自分に打撃を与えられるのは知っている。逆に言えば、つきあってくれているのが分かる。

存分に今の自分の力を振るい、全力の今の自分を見てもらうつもりで動き続けた。

「だはーっ！もう、駄目だ！」

疲れきったルフィが大の字になって地面に転がっている。通用はしなかった。

だが、全力は出し切った。そんな満足感があった。

「よし、次は絶対当てるぞ！とりあえず、腹減ったからメシ！」

しばらくすると、ルフィは起き上がって、走っていった。

「……元気な奴だな、相変わらず。さて……」

アスラが視線を向けると、そこにはサンジが待っていた。

こちらはもう少し本気で相手をしてやるべきか？



第141話・VSルフィ（後書き）

何というか……

仕事で疲れてる時って頭が働きませんね

ルフィ戦というかルフィとアスラの訓練現場をお送りしました  
ルフィの場合、真剣とか深刻な場面がどうにも想像つかなくて

第142話・VSサンジ（前書き）

やはり、たまにはきちんと休まない駄目ですね…

## 第142話・VSサンジ

サンジが何時の間に仲間になっていたのか、アスラも知らなかった。

原作と異なる展開、原作と異なる世界、それだけに今では『少なくともこれを起こそうと考えている奴がいる』という程度にしか、アスラの原作知識は意味がない。無論、アスラ自身の意志による干渉が殆どない、新世界などであればまた話は異なるのだろうか……。ただ、サンジなら行動の予測はつく。

もし、ナミを連れて来ていれば、ナミに一目惚れしたかもしれないが、今頃はナミは測量隊と共に航海中のはずだ。

まだまだ世界には未知の領域が数多く眠っている。それだけに、ナミは今回の測量を楽しみにしており、エースらとの再会が出来ないのは残念そうだったが、元気に出かけていったので、今ここにはいない。

とはいえ……。

(まさか、ハンコックに目をつけるとはな……いや、まあ、予想された範囲か)

原作では容貌としての美しさだけで世界一の美女と謳われた。

ならばそこに、穏やかな日々を送ってきたが故の女性としての柔らかさや、愛し愛される者故の美しさ、母としての抱擁感を加えればどうなるか？

それが今のハンコックだ。

(まあ、いい)

アスラは考える事を打ち切って、目の前のサンジを見る。

先程までのルフィとの試合という名の鍛錬を見ても、尚気煙を吐いている。

「では、お手並み拝見といこうか」

戦いそのものはやはり一方的だった。

アスラは一切悪魔の実の能力を使ってはいない。だが、それでも通じない。

手と足という違いはあれど、2人は共に格闘家だ。

そして、2人の間には絶望的なまでの鍛錬の積み重ねと経験の差があった。

単純な年齢によるものだけではない。

これまでサンジは鍛錬だけの積み重ねだった。エースらと航海を共にするようになって、多少の戦闘経験は積んだが、最弱とされる東の海で、しかも船長クラスではなく船を襲ってくる下っ端との戦闘ぐらいだ。

これに対してアスラは海軍に入って以来戦闘を重ね、グランドラインで新世界で、億を超えるような相手と戦った回数も両手両足の数では足りない程に戦ってきた。

その差は大きい。

「首肉！」

首を狙った一撃は受け流すように左腕で流され。

「肩肉！」

肩口を狙った一撃は右腕で流され。

「背……！」

回り込んでの一撃を放つ前に引き戻され、放たれた拳、寸止めされながら衝撃でもってサンジは吹き飛ばされた。

荒い息をつきながら、サンジは目の前のアスラ中將を見た。

まるで相手にならない。

けれど、今でも尚手加減されているのがよく分かる。

クリーク海賊団を相手にしていた時、アスラの一撃は船をも粉砕していた。

だが、今放たれた一撃は自分を吹き飛ばすのみ。

（でかい……これが海軍本部中將。世界でも上から数えた方が早い実力者って奴か）

これまでサンジの知る最強は『赫足』のゼフだった。

だが、ゼフは見えていた。

確かに強くとも、自身が強くなるに従い、何時かはそこへ、と目指せるものがあつた。

だが、アスラには見えない。

その底など今のサンジには見通す事が出来ない。

だが、だからといって……。

（あんな野郎認められるかあああああああ！）

一体何だ。

顔は美形。

立場は海軍本部中將。

奥さんは超絶的な美人で仲睦まじく、可愛い子供までいる。おまけに強い。

本音を言えば悔しい、そんな思いがサンジの心を熱く燃え上がらせる。

左足で高速回転する。

考えてはいたが、未だ未熟故に使えなかった技。

高速回転する事で右足に高熱が集中し、赤く輝く。

「ディアブルジャンプ  
悪魔風脚！最上級挽き肉！」エクストラ・アッシ

己の全力を込めた一撃。

灼熱の右足で放たれる高速の連続蹴りに。

ただ一撃。

真つ向から放たれた、ただの正拳突き。それだけで、サンジの連続蹴りは押し返され、吹き飛ばされた。

先程までの軽い吹き飛ばしではなく、それこそ何も出来ずに吹き飛び、受身すら取れずに幾度も跳ね飛びながら砂浜を転がってゆく。

意識が飛ぶのを感じながら。

（畜生、それでも届かなかったか……まあ、お似合いだったのは分かってたけどよ）

分かってはいた。自分の思いが所詮は横恋慕であり、2人の間に自分が割り込む余地など皆無である事など。

それでも。

それでも1人の男として挑んだ。

そうして完膚なきまでに敗北した。

（まあ……お陰ですつきりしたさ）

ここまでやられれば、諦めもつく。

そんな思いと共に海へ着弾してド派手な水飛沫を上げつつ、サンジは意識を失った。

## 第142話・VSサンジ（後書き）

たっぷり寝ました

というか、気付いたら半日以上寝てました。……やはり1日の睡眠時間が4時間かそれ以下ってのは問題あるね

サンジ編をお送りします

サンジも頑張りましたが……やはり戦闘経験に圧倒的な差があると思っんですよね

実力差もある事から、このような結末といたしました

次回はエース戦です



## 第143話 - VS エース

最後の1人、エースは武者震いしていた。  
やはり強い。

サボもゾロもサンジも強かった。けれど、誰もが相手にさえされなかった。

自分はどこまで通じるのだろうか……。

そんな思いを抱え、エースはアスラの前に立った。

今の自分を全部見せる、そんな思いと小細工が通じる相手ではないと言う事から初っ端から全力だ。

一気に全身から炎が立ち上り、手が火そのものになる。

「……それは……悪魔の実。それも自然系、火か」

「ああ」

驚いていないようだが、まあ、見れば分かる事ではある。

もちろん、アスラからすれば原作通りにエースが火の自然系の悪魔の実を食ったのか、珍しく原作通りだな、とか思ったりしている訳だが。

と、そこまで考えた所でアスラが拙い事に気付き、顔をしかめる。

「待て、火だと？」

「ああ……行くぜ！」

アスラが止める間もなく、エースが攻撃を仕掛ける。

炎の弾丸を連続して放つが、これは紙のようにヒラヒラとした動

きですり抜けられる。

（【紙絵】か！だが、まだまだ！）

自身もまた六式を使うだけに、相手の技に予想がつく。

喰らっても平気な筈だが　とも思うが、これが鍛錬だというのは、普通の人間は喰らえば終わる。なら、かわすのが普通かと思いい、更に連続で放つが、効果は薄い。

ならば、と一気に接近する。

エースの接近にアスラが足を止め　次の瞬間、瞬時に身を引いた。

正義のコートの襟元が蒸発し、次の瞬間即座に戻る。それを為したのは、エースの右腕から伸びる蒼い刃。

「……炎の温度を上げ、刃と為したか」

「ああ、集中してやっと上げられるんだけどな」

集中し、集束させる事で炎の刃と為す。

理想は自由自在に伸長させる事だが、戦闘の最中に刃に集束させながら相手の動きを見るのは困難だ。結果として、何とか一定の長さの刃をやつと為す事が出来た。

幾度か振るうが、矢張り最初の奇襲を凌がれた時点で、掠りもしない。

それなら、と跳び退って、距離を取った。

「アスラ、こいつが今、俺に出来る最高の技だ」

「……いいだろう、来い」

そうして、エースは集中する。  
この技はまだとても実戦で使用出来るようなものではない。  
余りにも集中に時間がかかりすぎる。  
ただ、その分威力は絶大。  
それは。

「【火閃<sup>かせん</sup>】！」

瞬間。

アスラの胸に穴が空いた。  
無論、次の瞬間には流れ落ちた水銀によって塞がったのだが……  
さすがにアスラも少々驚いている。

「どうだい？ボルサリーノさんの攻撃を思い出して作ったんだ」

熱線と言えはいいのだろうか。

火を、熱を集束させ、放つ。厳密には速度はボルサリーノこと黄  
猿大将のそれよりは劣るのかもしれないが……人間に反応出来るよ  
うな速度ではなかった。

ふう、と溜息を1つつき、アスラは言った。

「成る程、確かによくぞこれだけの短期間でこれだけ能力を使え  
るようになった。だが、長々と続ける訳にはこれでいかなくな  
った」

疑念を浮かべるエースにアスラは告げる。

水銀は猛毒なのだ。

熱によって蒸発する水銀は肺を犯し、人を死に至らしめる。その  
速度は通常の液体として飲み込み、胃より吸収されるものより遙か  
に早い。

すなわち、長引く事は水銀の体を持つアスラと火の体を持つエースとでは、エースが毒によって重大な損傷を受ける可能性がある、という事。

さすがに真剣な表情になるエースに見せ付けるように、アスラは拳を顔の前に上げる。

「いいか、エース。能力者の戦いは能力もそうだが、最後は肉弾戦だ。……何故なら、お前の自然系もそうだが、能力者には遠距離攻撃が効かないような能力も多いからだ」

例えば、ルフィのゴム。

打撃には無敵とも言える強さを誇るルフィの肉体は、戦艦の砲撃でも弾き返してしまう。

自然系ならば言うまでもない。全てがすり抜けてしまう。

「だが、拳でもいい、剣でも刀でも、弓でもいい。レーザーなどとは広域の破壊力は劣っても、通常の攻撃が効かない能力者相手でも、それを通す力がある。海軍本部の中将以上は皆使えるこの力を

【覇気】という」

瞬間。

アスラはエースの内懐に飛び込んでいた。

エースが、しまった、と思った時はもう遅い。

振り抜かれた右の拳が、武装色の覇気を纏った一撃が、エースの頬を捕え、意識と共に吹き飛ばしていた。

### 第143話・VSエース（後書き）

エース戦はこのように……

え？エースが強すぎる？

或いはこういう事が出来るのか？って？

……原作ではエースってルフィの兄貴って事は出てましたが、殆ど能力とか活躍場面が出る事なく、あっさり死んじゃったんですよまあ、ルフィらが主人公なんで仕方ないんですが……もう少しちゃんと出してあげて欲しかったなあ、と思います

## 第144話 - 怪獣大決戦（前編）

【SIDE：アスラ】

エースも能力の研鑽はやってきたらしい。

やはり、比較があつたのが良かったのだろう。向上心とは結局の所、競う心から生まれる。

かつて、ある登山家が「何故山に登るのか」と問われた時、「そこに山があるから」と答えたという。たった1人ならば今より上を目指す必要がどこにある？

この世界のエースは赤犬大将のマグマの熱を知り、黄猿大将のレーザーを知っていた。

だからこそ、自然系という悪魔の実を手に入れても、奢る事なく能力の開発を行い、あれだけの力を得た。とても楽しくなる。

……これからやるメインイベントと合わせて。

この世界に来たと初めて知った時には、こんな状況が来るなんて夢にも思わなかった。

世界最高の剣豪と謳われる『鷹の目』のミホークと真っ向やりあうような日々が来るなんて誰が想像する？

【SIDE：ミホーク】

海軍本部中将アスラ。

彼と初めて出会ったのは、シャンクスを介してであった。

どちらにせよ、何時かは彼と出会ったであろう。

だが、もし、シャンクスを介してでなければ、今のような関係となっていたかは疑問だ。

『面白い奴がいたんだよ』

そう言われて引き合わされた時、アスラは少将だった。

どのような相手かと思っただが、当時から若くして長い長い時をかけたであろう拳を放つ男だった。

何時しか、自分達の間のアスラ中將も混じるようになった。

シャンクスが海賊として名を上げて、一向に逮捕しようという動きすら見せないアスラ中將に少し興味を抱き、『捕まえなくていいのか?』と問うてみた事がある。

海軍の連中は大抵の場合、それぞれの正義がある。

心に抱いた何かがなければ、大抵の場合、何時しか駄目になる。この男のそれを見極めるつもりだったが。

「彼を捕まえた方が世界で平穩に暮らす人の数は減る。だから掴まえる気はない」

そう言った。

白ひげや赤髪は抑えた縄張りを搾取する連中ではない。……成る程、カイドウ辺りとはやりあつたという話を聞くのに、シャンクスは放置するのはその辺りか。……海賊だから捕まえるではなく、それぞれの海賊の中身を見るか……自分もまた面倒だからと世界政府側に位置しているとはいえ、海賊だ。さて、こちらの事はどう思っているのか。

思えば、あの時に初めて本当の意味で興味を抱いたのかもしれない。

【SIDE：他一回】

いよいよ始まる。

世界最強クラスの2人による試合という名の死合が。

互いに殺す気はないだろう。

だが、あのクラスの2人の一撃一撃は容易に人を殺す。

ようやく起き上がってきたサボやゾロも視線を向ける。彼らは既に沖合いの船の上だ。とてもあの2人の戦闘は同じ島で見られるものじゃない、という事でそこから望遠鏡で見ている。唯一望遠鏡など使わず見てるのはマスト上の見張り台に登っているアリスぐらいだろうか。

そうして、視線の先で2人がそれぞれ、アスラは構え、ミホークは【夜】に手をかけ。

次の瞬間、轟音と爆煙が砂浜を覆い尽くした。

「え？一体何が起きたの？」

たしぎが声を上げるが、誰も説明出来ない。

せめて、肉眼で見ているらば、もう少し分かったかもしれないが、望遠鏡<sup>ごし</sup>ではやはり視界が悪い。

「みや〜みやみや〜みやあみや」

「え〜つと、アスラとミホークが抜き打ちの一撃やったら、衝撃波で砂浜が吹き飛んだってさ」

「みやみやあ、みや〜みやあ」

「その後は砂が煙幕みたいになって見えないって」

「……………って分かるのかよ!?!」「……………」

アリスの鳴き声を何故かすらすらと解説するルフィに、エースにサボ、ゾロにたしぎ、サンジが一斉に突っ込む。

ハンコックは苦笑しているし、子供達はよく分からない様子で皆



の顔をきよるきよるしながら見ていた。

さて このままでははつきり見えないので、視点を2人に戻そう。

構えから、アスラは正拳突きを。

ミホークは無造作に引き抜いた【夜】を振り抜き、斬撃を飛ばした。

それだけで発生した一撃は互いを目指し、中間よりややミホークよりで激突し、轟音と共に激突した付近の砂浜にクレーターを生み、砂煙を濛々と舞い上げた。一瞬拮抗したかに見えたが、次の瞬間斬撃が押し切り。

アスラへと飛来する前に、2手3手とばかりに飛んできた新たな拳圧に、掻き消された。

武器を用いて飛ばす分、斬撃一発の威力はミホークの方が高い。

だが、新世界で出会った白ひげとの一撃以来、アスラは自身の一撃一撃の上限は最強の者達には届かないと判断した。故に速さと工夫。

一撃の重さではミホークの剣に敵わずとも、手数の上では拳は剣に勝る。

そのまま両者は駆けながら、砂浜を離れる。

どちらともなく、森へと入り込み、或いは攻撃し、或いはかわす。互いの一撃一撃で森を粉微塵に破壊しつつ けれど、両者は笑っていた。

さあ、存分に殺り合おうじゃないか。

**第144話 - 怪獣大決戦（前編）（後書き）**

いよいよアスラとミホークの激突です

上手くバトルの派手さを描く事が出来るかどうか不安です……  
では、また明日

## 第145話 - 怪獣大決戦（中篇）

「あー、俺はもう少し近くに行く。ここじゃ全然何やってるか見えねえ」

そう言うなり、エースがいきなり空に駆け出した。

その後を、「ああっ、俺も行くよ、エース！」と言いながら、ルフィも追いかけていく。

更にそれを「おい、お前らだけ行くなよ！」と言いつつ、サボもついていった。

それを呆然と見送ったのはゾロにサンジ、たしぎだ。

当然だろう、いきなり目の前で3人が空を走り出したのだから。

「……人って空を飛べるもんなのか？」

そのゾロの疑問に答えてくれたのは海兵の1人だ。

あれは、六式と呼ばれる海軍の武術の技の1つなのだ。さすがに詳しい事は教えてくれなかったが、それで納得はした。ただ、問題は、ゾロらには現状追いかける方法がない事だ。

今、あの島に上陸する気にはなれない。

攻撃の巻き添えを食ったが最後、一撃で消し飛ぶのは間違いないし、試したくもない。

アリスは……ちらりと彼らを見た。

アリスもまた月歩は使えるが……とはいえ、誰かを乗せて駆けるのは大変な事もあり、大人しく座っておく事にしよう。

さて、場面を再び島へと戻そう。

島は一瞬ごとにその様相を変えていた。

轟音を上げ、衝撃波が森を薙ぎ払っていく。かわしたアスラを捕えきれず、そのまま海を真っ二つに割った。

お返しとばかりに連射された衝撃波がミホークを襲い、背後の巨大な岩山を貫通痕で穴だらけにした。

「やはり遠距離戦闘では埒があかないな」

どちらともなく、そう呟いた。

確かにそうだろう。ただ、それなりに広い島の3分の1を更地にしておいてから言うべきではない事かもしれないが。

まだ残っている部分も被害が大きい。未だ無傷なのは島の4分の1程度だろうか……上空からそれを見た面々は既に呆れ果てている。

まるで示し合わせたかのようにアスラとミホークは接近戦の距離へ。

通常ならば手前で止まる互いの制空圏に躊躇なく踏み込み、ミホークの斬撃が薙ぎ払われ、それを瞬間、足をぱしゃりと液体にして地に沈ませたアスラがその姿勢のまま『踏み込み』、拳を放つ。

その拳をギリギリの所で見切り、かわしたミホークが【夜】を切り返す事なく、その背で払おうとするのをアスラが【夜】の腹を叩いて、上へと軌道をずらす。

そして。

(！右ではない、左！)

これまでなまじ右のみを使ってきたアスラが、左を使う。

両手利きではなかったアスラだが、手数を増やすならば両手を使わない手はない。

それに別に右しか鍛えてこなかった訳ではない。このレベルになるとバランスよく鍛える事が最終的な強さへと繋がるからだ。

右で払い、左で3連撃が来る。

それをミホークは引き戻した【夜】の柄で受けるが、勢いに弾かれる。

次の瞬間、空が陰る。

上空から九尾が絡まりあい、単なる液体金属の球体として降ってくる。

無論、アスラ自身も前から急速に距離を詰めてきており、上に対処すればその間に懐に入り込まれる、が。

焦る事なく、ミホークは連続して【夜】を振った。

それで放たれた斬撃がまるでミホークを包む繭のように、そして次の瞬間全方位に広がった。

それで刻まれた球体は液体となって地面に散らばり、アスラ自身はその斬撃の隙間を【紙絵】ですり抜け、再びミホークの前に立つ。

こうして書くとき長いようだが、実際には刹那の攻防であり、余波が酷い事になっている。

外れた一撃だろうが、それはあくまでアスラに、ミホークに対して外れた一撃であり、背後の島はよけたり出来ないから、散々な光景になっている。

ちなみに、最後にミホークが放った斬撃は上空にも飛来し、エースにルフィ、サボが必死になってよけていたりする。

それでもまだ、両者とも船の方向には攻撃を飛ばしてはいない。大丈夫な距離を保っている筈だが、万が一という事もある。ついでが入って、あそこまで届いてしまっただけは拙い。

が、反面上空までは目が行き届いていない。届かせる余裕がない。互いが互いに集中し、確かに直撃こそ喰らっていないが、双方無数の小さな傷がある。

効かない攻撃に意味などない。

効かない攻撃など真剣勝負にならない。

ミホークは悪魔の実の能力者などではないから当然だが、ミホー

クは当たり前のように刃に覇気を纏わせているし、アスラもそれに文句を言う気配は微塵もない。

瞬時の間の後、再び彼らは躊躇なく互いの刃と拳の間合いへと突撃した。

尚、現時点で既に島は5分の1が崩壊し、海に消えつつあった事を追記しておく。

第145話 - 怪獣大決戦（中篇）（後書き）

戦闘描写は難しいですね……

次回決着！

第146話 - 怪獣大決戦（後編）（前書き）

いよいよ戦闘終了です



## 第146話 - 怪獣大決戦（後編）

拳を放ち、剣を振り、かわし、打ち斬る。

戦いはそれこそ島を更地にし、それだけでは足りぬとばかりに崩壊させてゆく。

船にいるゾロ達にははつきりとは見えない。

常に木々が土砂が吹き飛び、彼らの姿を隠しているからだ。

だが、それでも凄まじい事がその中で起きている事は分かる。

彼らの視界にあつた森が土煙に隠れ、煙が別の場所で起きた突風に吹き飛ばされた時には森が消え。

聳え立っていた岩山が揺れ、崩壊してゆく。

アスラとミホーク、2人の一撃一撃がそれに抗する事を許さず、ただその射線軸上にあつたのが不運だったとばかりに、無造作にその存在を粉碎してゆく。

上空から見るエース達の目にはまた別の光景が写る。

それは次第に削られ、崩壊してゆく島の姿だ。

元々は1つの島だったはずが、削られ行く内に幾つかの小島となり、その中でも小さなものは余波で吹き飛び海へと消え、それなりに大きなものでも激突に耐え切れずそれもまた海へと消えてゆく。

それは彼らとやりあつた2人がどれだけ手加減してくれていたのかを思い知らされる光景だった。

だが、そんな戦いは何時までも続かない。

如何にかわそうとも、互いの制空圏に自ら踏み込み、真剣勝負をかわしているのだ。僅かな油断どころか隙も、ミスも許されない戦いは何より心を削り、体力を削る。

そうして、破局は遂に訪れた。

ほんの僅かなミホークが【夜】を持ち直した瞬間をアスラは見逃さなかつた。

それがわざと作った隙であろうが、それをも噛み砕かんとばかりに踏み込み、左右両腕からの連打を放つ。

だが、案の定ミホークのそれはわざと作った隙だった。

それ故にすぐさまミホークからもまた、反撃の一撃が狙い済ましで放たれる。

これが、最初の頃であれば、互いの体を掠めた程度だっただろう。だが、長い神経をすり減らす戦いが双方から咄嗟の動きを鈍らせていた。

アスラの左から放たれた攻撃がミホークに着弾し　ミホークの一撃もまたアスラへと突き刺さった。

(……3発。右腕上腕と肋が何本かいかれたな)

冷静にミホークは割り切り、左腕一本で【夜】を持ち直し。

(……神経は無事、だが右はもう無理か)

指先が動くのは確認した。だが、するりと右肩に入り込んだ刃がアスラの右腕を真紅に染め上げている。

どちらが重傷だろうか？

数ならばミホークが受けた数が3に対し、アスラが受けた傷は1つだ。だが、ミホークが手にするのは刃物。刃物で斬られた結果として、血が流れ出る。そして、血が流れ出るというのは体力を容赦なく奪うという事でもあり、それは長期戦を断念せざるをえなくさせる。

もっとも、それはミホークとて同じ事、肋がやられた以上は内臓の損傷も懸念材料になる。

迅速に片をつける必要がある。

どちらがマシか。

ハンマーで何発も殴打されると、刃物で深々と一刺し刺されるのはどちらがマシか。

どちらも命に関わるという点では大差ない。

だから 互いに足を止めた。

互いにゆっくりと歩み寄る。

それでようやく攪拌の収まった大気が静かな海風となり、島だった大地を覆う土煙を吹き飛ばしてゆく。……そこに現れたのは何もない小島が1つ。

かつての島の10分の1程度にまで縮んだそれが、島の最後の残骸だった。

その中央に2人は歩み寄り、構える。

ミホークは【夜】を背負うように半身となり。

アスラは左手のみで祈りを捧げるかのように顔の前に手を立てる。嘗て、アスラの知る原作で、この構えを取った老人はこう言った。『祈りとは心の所作。心が正しく形を成せば祈りは成立する』のだと。故にアスラの祈りもまた形を成す。

互いの武器に覇気が凝る。

物質となれと言わんばかりに凝縮されたソレは周囲に圧力となって吹き荒れる。離れて見ている者達にさえ、その両者の覇気の余波が背を粟立たせ、第六感とでも呼ぶべきものは脳裏で全力で警戒の鐘を鳴らす。

エースも、サボも、ルフィも慌てて島の上空を離れ、船へと戻る。

『これ以上ここにいてはいけない』

勘と言い、人がかつて持っていた野生の本能ともいう、その内なる声に従わない者はろくな結末を迎えない。

その点、まだ彼らは賢かった。

そして、3人が離れ、船へと降り立ったのを見計らったかのように

に。

2人が動いた。

ミホークの誇る最上大業物【夜】が袈裟懸けに振り下ろされ、アスラの左拳が形状を変えつつ、ミホークに放たれた。

次の瞬間、轟音が響き、再び土煙が沸き起こった。

そうしてそれがしばしの後、静かに吹いた風に吹き飛ばされた時……アスラの拳はミホークの眉間の僅かに手前で停止し、ミホークの【夜】はアスラの右の首筋の僅かに手前で停止していた。

それと引き換えに、2人のそれぞれの背後にあった大地は綺麗に消し飛び、かつてそこにあつた島は2人の周囲に、僅かに舞台のように残るのみだった。

「引き分けか」

「そうだな」

どちらともなく呟くと拳と剣を降ろし、その場に座り込んだ。

「これでこちらの3勝1敗8引き分けだな」

「……一番初期の3連敗がなけりゃなあ」

現状負け越しているアスラがぼやいた。

手合わせに参加するようになった最初期の事。

シャンクスと戦い続け、世界最高の剣豪としての名声を確立していたミホークに対し、当時少将であったアスラは経験が不足していた。

3敗を喫した頃には新世界にも入り、研鑽を積み、以後は勝ち越していたのだが……。

「まあ、いいさ。これ以上はまた次の機会だ」

「足場もなくなったからな」

2人が動きを止めた事で終わったと判断したのかメルクリウス号では2人を収容する準備が急ピッチで進んでいた。

一足先に空を駆けてくる一同にさえ視線を向けず、アスラとミホ1ク2人は互いを鋭い視線で射抜きながら、けれど尚口元には互いを隙あらば噛み裂かんばかりの獰猛な笑みが浮かんでいた。

第146話 - 怪獣大決戦（後編）（後書き）

という結末になりました

島1つ、また消えましたWので、ミホークはともかく、アスラはまた始末書が増える事になります

まあ、この辺は黄猿とか赤犬なんかも書いたりしてると思っんですけどね

青キジ以外は全開で戦ったら始末書書いた経験あるんじゃないかなと予想してみたり

## 第147話・戦い済んで

試合は終わった。

メルクリウス号に戻り、アスラとミホークも治療を受ける。

もつとも、アスラの怪我はそう長く残る訳ではない。

今回はミホークによる覇気が込められた一撃だったが故に、このような深手を負ったが、自然系ロキアがそうであるように怪我自体が長々と残らない。今回の怪我也日が変わる頃には治っているだろう。切り落とされた腕であっても、覇気による影響がなくなれば再び生やせるのだから。

「さて」

治療が終わった後、食堂にエース達を集める。

こちらは司令部要員や要人用の食堂で、一般兵士の食堂とはまた別の食堂だから静かなものだ。

アスラ自身も普通の食堂の方が気軽なのは確かなのだが、そこは海軍本部中將という立場が邪魔をする。やはり、下っ端にとっては中將が一緒の食堂にいてはどうにもくつろげない者が少なからずいるらしいのだ。

アスラも言われてみればそうか、と思い、こちらの食堂を利用している。

如何に気さくな相手であっても、社長だの専務だのが一緒の食堂にいたら……そりゃあ緊張もするだろう。

さて、そんな食堂だから綺麗なものだ。

さすがに船の中という事もあり、落としたら割れる花瓶などは置いていない。いや、花瓶そのものは用意されているが、仮にもこの船は軍艦だ。戦闘にも突入する事のある船に普段から出しておくの

は割れる危険を増すだけでしかない。

なので、花瓶などは招待客や臨時の政府のお偉いさんなどが同乗している時に仕舞ってある倉庫から出してくる事になっている。

その大きなテーブルに一同が座り、用意された食事を食べながら話をする。

尚、この食事風景は実に対照的で、アスラやハンコック、ミホークにサボらが綺麗な食べ方をしているのに対して、エースにルフィ、ゾロは原作通りの食い気に溢れた食い方をしている。ゾロも最初はどこの豪華食堂だと躊躇いがあったようだが、エースとルフィの様子に何時しか何時も通りの食べ方になっていた。

「……まあ、結果から言えばだ、お前達もグランドラインに入っても大丈夫だろう」

実際、強くなった。

比較対象が対象だから実感が湧かないかもしれないが、彼らの実力は……いやまあ、たしぎはまだまだ足りないが、それでもそれはあくまでグランドラインまで入り込む船の船長クラスと比較しての事。

船員レベルならばまず問題ない。

……それに、強さという意味ではこれ以上、東の海に置いておく事に意義はない。

元々、単純な強さでいうならば、グランドラインでもやっていけるだけの強さがあったエース達にそれでも東の海から始めるよう言ったのは、一重に心構えの問題だった。

それさえ為ったのであれば、グランドライン入りはまず問題ない。

喜ぶエース達を連れて、甲板へと上がった。

空は傾き、もうじき暗くなる。

今晚はここで一晩明かし、明日出航となるだろう。



甲板に上がったのは何となく、というのもあるが、覇気というものについて多少は教えておいてやるうと思つた事もある。さすがに食堂では多少見せてやるにせよ、雰囲気のアレだったからだ。

そして、さて、という段になって。

ふと傾き、沈みつつある太陽の中に何か1つ見えた。

「うん？」

目をしばたき、そちらに目を凝らす。

アスラの様子に待っていた他の面々も「はて？」とばかりに振り向く。ミホークは我関せずとばかりに右腕を釣つて佇んでいたが、彼もそちらに視線を向けた。

その視線の先には……1つの黒点。

それは次第に大きくなり……。

「……………人？いや、あれは……………」

「……………骸骨、だな」

確かに骸骨だ。だが……………悲鳴を上げているという事は生きている？  
そこまで考えた時、ふと思ひ当たる姿があつた。まさか。

やがて、それは海に着弾……………する寸前に猫か犬か、とにかく足跡を思わせる陥没を見せ、無傷で骸骨を送り届けた。この陥没痕は知つている。……………王下七武海の1人にして、革命軍幹部バーソロミュー・くまの能力ニキュニキュの実？

ただ問題は……………。

ここにあつた島は『少し前まで』という形容詞がつく、という事  
だつた。

何が言いたいかと言つと……………。

「……沈んだな」

「ああ」

前ならば島があつたのだろう場所、けれど今は海へと姿を変えた場所であり、悪魔の実の能力者である彼が泳げる筈がない。覚悟していれば海の上を走っていたかもしれないが、まさかこうなるとは予想もしていなかっただろう。

ぶくぶくと沈んでいった。

外見が外見だが、とにかく動いている以上見捨てる訳にもいかない。海の上では救助を行なうのは義務だ。ましてやそれが海軍ならば尚の事。

悪魔の実の能力者であるアスラは救助に関われないが故に他の皆と共に縁に歩み寄って、けれどその心の内で疑念が渦巻いていた。

ク  
（何故、ここにいる。何故くまの能力で飛ばされてきた？ブルツク）

第147話・戦い済んで（後書き）

次回は何故やって来たのかを書く予定です

くまも、島に飛ばすつもりでした

まさか、島が消えてるとは思いませんでしたからね

第148話・飛んできた理由（前書き）

寝落ちしちゃいましたね

……仕事って疲れる

## 第148話・飛んできた理由

『暴君』バーソロミュー・くまは、王下七武海に名を連ねる海賊であり、同時に革命軍の幹部でもある。

表向き、彼は王下七武海では珍しい世界政府の召集命令にもきちんと応じる七武海という評価を受けているが、実の所それは当たり前の話だ。

七武海を召集するような話では、それなりの作戦が実行に移されるという事でもある。

その為の会議に堂々と顔を出せるのだ。その結果として、革命軍に影響が出るような事案であれば、事前に手を打っておく事も出来る。

さて、今回の召集に関して言えば、革命軍には影響のある話ではなかった。

それは良かったのだが、1つ面倒な話を聞く事になった。

最近、海で噂になっている話がある。

### 【唄う骸骨】

海の上、船も何もない海上で音楽を鳴らしながら歌う骸骨がいる、という噂話だ。

これだけなら問題はなかった。

海では色々な噂話がある。

荒唐無稽なものから、説明がつくもの、荒唐無稽なようで実際に存在しているものなど様々だ。

これもまた、その1つだろう。

問題は、それを天竜人が見てしまった、という事にあった。

薄く立ち込める霧の中、どこからともなく聞こえてくる音楽。不審に思った天竜人が船の縁へと歩み寄った瞬間　霧が一瞬晴れ、

見えたのは海上でピアノを弾く骸骨の姿。

そして、それはふとこちらに気付き、笑いかけた。

……それを見た直後、天竜人は気絶した。

目を覚ました後、天竜人は喚いた。

アレを何とかしろ！と。

困ったのは海軍だ。

何しろ、この話は現状噂話の類だった。大体、特に騒動を起こしている訳でもない相手に海軍が出撃するのも何だ。とはいえ、天竜人からの直々の命令といわれれば、何らかの対応をせざるをえない。くまに伝えたのも、その一環だった。

……問題は偶々それを見つけてしまった事だった。

【SIDE：ブルック】

「いい天気ですねえ」

ブルックはラブーンの背に揺られながら、溜息をついた。

何しろ、仲間が集まらない。どころか、船が手に入らない。

何分、この見た目だ。

島に行っても怯えられるし、船に近づけば悲鳴を上げて逃げられる。

船を買おうと思えば買えるのだが、1人では船なぞ運航出来る訳がない。どうしても、共に旅をしてくれる仲間が必要なのだ。それが音楽好きであれば、言う事はない。

「お前が【唄う骸骨】か」

だから、いきなり現れたその姿に驚愕せざるをえなかった。

ただし、ブルックは新しい海賊に関しては、まだまだ知識が少な

かった。さすがに海軍ぐらいは目を通していたが、その下の制度に  
関しては何しろ知識を確保する手段が少ない。

これが原作ならば、教えてくれる人もいたし、資料もあつたのだ  
ろうが……。

「あのどちら様でしょうか？」

「……バーソロミュー・くまだ」

少し間があいたような気がした。

「はあ、くまさんですか。それで何か御用ですか？」

だが、ブルックに語られたのは自身の存在の否定。

ブルック自身はただ好きな事をして、大切な仲間と航海をしてい  
るに過ぎない。見た目だけで、それを否定する者がと思つたが、天  
竜人の傍若無人さは昔からか、と思いなおした。

「成る程、けれど、私としても」

何かあつた時の為に大切なものは身につけている。

とはいえ戦闘時には邪魔になつてしまふ為に或いは腰に、或いは  
背負っているそれを下ろそうとして。

「旅行するなら、どこに行きたい」

くまの言葉に停止した。

さすがにブルックも、何を言いたいのか疑問に思つたが、ブルッ  
クは案外付き合いがいい。というか、元々ノリは悪くなかつたのだ  
が、昨今はこうして人と話をする事自体が楽しい。

「そうですねえ、出来れば、音楽が好きな方が、強い剣士の方と会ってみたいですね」

どこ、と言われても……ワンピースのある場所などは自分で目指す場所だ。

誰かに連れて行ってもらいたい場所でもないし、旅行で行くような場所でもない。それなら、音楽が大好きな相手か、それとも刀を託せるような相手か……そんな人達に会いたかった。自分を受け入れてくれるかは分からなかったが。

「分かった」

そして次の瞬間、ブルツクは消えた。

【SIDE：くま】

とりあえず、希望を聞いた上で飛ばした。

別に「殺せ」と言われた訳ではない、あくまで「何とかしろ」、

……今の上までは特に何かをする前に海軍に殺されるのがオチだろう。

希望を聞いた内、音楽好きはよく分からなかったが、剣士に関しては心当たりがあった。革命軍故にちよくちよく海軍には接触して情報を確保している。

そんな中に、先だつてアスラ中将の休暇の話聞いた。

海軍の重要人物だ。加えて、重要戦力でもある中将は何かあった際は緊急呼び出し、場所や電伝虫のトラブルなどによって連絡がつかない場合は迎えを走らせなければならぬ為、休暇1つとっても一応の予定がはっきりしている。



ただ、アスラ中将だけならば飛ばしたりはしなかった。

偶然ばったり出会ったミホークから「少し用事が出来た。アスラ中将に会ってくる」と僅かな雑談の際に口にした事を覚えていなければ。

確か、今から送れば、東の海の島の1つで出会えるはずだ。

そう考えていた時、足元のアイランドクジラがようやく状況を理解したのか、誰かを求めるような、誰かを探すような、そして自身への怒りへと転じるのを感じた、ような気がした。

「安心しろ」

くまとしては、理解してくれるかは分からないが、語る。

おそらく、この鯨は彼とは強い絆で結ばれているのだろう。仲間を突如として消されれば、怒るのは当然だ。だからこそ、分かってくれずとも、くまはきちんと説明した。

骸骨（名前を知らない）がこのままでは危なかった事、殺してない、あくまで別の場所に移動してもらっただけで、ちゃんと生きている事などを淡々とした口調で伝えた。

「……という事だ」

分かっただろうか？と思ったバーソロミュー・くまだったが、やがて鯨　ラブーンはくまの船へと身を寄せた。

どうやら理解してくれたようだとは判断し、くまは船へと戻る。

バーソロミュー・くまの船の乗組員は見た目こそ海賊だが、その中身は全員が革命軍所属の軍人だ。巨大な鯨に驚きつつも、くまをきちんと迎えた。

くまが移動すると共に、ラブーンは身を翻す。

……約束した再会の場所へと向かう為に。

「くまさん、お疲れ様です」

「ああ……当座はこれで何とかなっただろう。本来の予定に戻るぞ」

「はっ」

部下達が動き、船を動かす為に動くのを見送りつつ、くまはふと鯨の姿を目で追った。

……何時かまた世界のどこかで出会っような気がした。

第148話・飛んできた理由（後書き）

夕べは眠かった

書いてる途中でとにかく眠くて、五分だけとタイマーをセットして

……はい、気付いたら朝でしたね

さて、こうして飛来しましたブルック

ブルック自身は過去の人物なので、くまを知らないという事になっています。何しろ原作でも海賊王らがまだ若造だった頃の人ですからねえ

しかも、あの霧の海で幽霊船で彷徨ってました

王下七武海というのはゲッコウ・モリアの事で知ってると思います  
が……

## 第149話・飛んできた男

「ヨホホホホ、はじめまして！」

引き上げられた骸骨は実に明るかった。

濡れてはいたが、きっちりとしたスーツを着込み、ステッキを手にした彼はブルックと名乗った。

アスラは知っているが、知らない皆は引いている。当然だろう、見た目は骸骨そのものだからだ。悪魔の実の能力者だろうか、とも思うが、普段から見た目が変わる能力というのは聞いた事がない。

「おお、これはお美しい！」

挨拶をしたブルックが早速目をつけたのはハンコックだった。

口説くのかと思った一同が苦笑しつつ、『人妻だよ』と言おうとした。ハンコックが口説かれるのは何時もの事であり、アスラもそれに目くじらを立てる事はない。……強引に手を出そうものなら地獄を見るが。

ただ、ブルックは一同の予想を超えた。

「パンツ見せてください！」

そう言って一礼した。

ハンコックが冷たい視線になり、一同が固まる中、ブルックが銀色の尾で持ち上げられた。

「このまま捨てるか」

分かってはいた。

分かってはいたが……アスラも目の前でやられると、こつも腹が立つものだとは思わなかった。

「そうじゃな、さっさと捨ててしまおう」

「たーすけてー！」

ハンコックも同意する。

既に頭以外を綺麗に銀の球体に包まれたブルックは声を上げるしかない。

固まっていた一同が、さすがに海軍本部中將が犯罪者かどうか分からない段階で殺人（？）を行なうのは拙いとりなして何とかブルックは解放された。

「すいませんでした！」

解放されるや見事な土下座を披露したブルックにどうにもハンコックも毒気を抜かれた様子で、「もう、やらぬように」との言葉で終わらせたのだが……。

今度は固まっていた一同の中からふらふらと歩み寄った者がいた。

「そ、その拵えは……！」

無論、たしぎだ。

彼女の視線はブルックの腰に吸い付いている。

「間違いない！それは大業物21工の1つ！刃紋は乱刃大逆丁子！黒刀・秋水！」

さすがに、ブルックも腰にささったままの刀にすりすりとは頼擦り

されるとは予想していなかったらしく、固まっているというか、他一同は引いている。実際、サンジが初めてストルツ・フランメ号に乗った時も、うっとりとし入れをした己の愛刀時雨を見詰めて、頬擦りしているのを見て、一気に引いてしまい、以後彼女を口説く事は遂になかった。

「あー……まあ、とりあえず彼女は置いておいて……とりあえず、話を聞きたいんだが、構わないか？」

「ヨホホホ……随分と変わったお嬢さんで……はい、いいですよ。たしぎの悪癖を目の当たりにして、さすがに何と言っているいいものやら分からない顔をしたアスラの言葉にコレ幸いとブルツクも話に乗った。」

「……で、お前さんは『鼻唄』のブルツク、と？」

「ヨホホホ、はい」

あっさりと明かした相手に、アスラも憚然とした表情だ。

「お前さ、今、目の前にいるのが海軍本部中将で、その相手に自分分は3300万の賞金首の海賊です、って名乗る意味理解してるか？」

「あ」

ポーン、と擬音が立ったような気がした。

「45度！」と壁に頭を預けて、落ち込んだ様子を見せるブルツ

クに、だが、アスラは溜息をついて言った。

「……まあ、お前の手配は当に無効になっているからな。別に構わんのだが」

ええ！？

と驚くブルツクだが、これはある意味当然だ。

何しろ、ブルツクが死んだのは今から実に48年前の話。以後全く音沙汰がなく、生きていれば今年88歳の高齢。死んだと看做されて、手配が抹消されたのは今から10年以上前の話だ。

「それにお前の外見からどうやってブルツクだと証明する気だ」

外見は重要だ。

箔をつける為に、偽りの名を名乗り、凶悪な海賊の振りをしていた小物を討ち取って賞金を渡したりしたらどうなるだろうか？

そんな事が起きないよう、手配書とてらしあわせて、見た目は厳重に確認される。

実の所、原作でサンジの手配書が似顔絵になっていたのは相当に問題視されていたし、似顔絵とそっくりな外見を持つデュバルが鉄仮面で顔を隠して、サンジに強い恨みを抱いたのもそこら辺にありたりする。あれだけ似ていると、デュバルの首なら間違いなく賞金が出るからだ。

一方、ブルツクは……見た目骨だ。

確かにアフロやサングラスは本物そっくりだが、何しろ48年前の海賊だ。それもゴールドロジャーなどの超有名所とは違う。直接会った人間など海軍を探しても現役組にはまずいないし（ガープやセンゴクでさえまだ下っ端だった）、引退組でも果たして今のブルツクと会って、「間違いない」と断言出来る程覚えている者がいるかどうか怪しい。

「はあっ！確かにその通りです！安堵したけど、心臓のドキドキが止まりません、って私心臓ありませんでした！」

そんな事を言うブルックを前に、アスラは「さて、こいつどうしたのか」と悩むのだった。



第149話 - 飛んできた男(後書き)

ブルツクの賞金に関してはこのようにしてみました

実際、彼がブルツクだ、って証明物凄くしづらいですからね

もし、ブルツクの手配が残っていたとしても、なまじアスラが推し進めた改革が進んでるだけに、賞金が出る可能性は低いです

## 第150話・これから

【SIDE：アスラ】

「それで、どうする？」

アスラはブルックに問いかけた。

ヨミヨミの実の……元・人間。

今のブルックを人間と呼ぶのは正直難しい。見た目で怯えられたように、頭部に大事なトーンダイアルが入っているように、今のブルックには脳や心臓は言うに及ばず目玉や内臓も何も無い。

普通の人間ならば、なければどうにもならない物が全てないのに、ブルックは普通に考え、物を見て、物を聞く事が出来る。原作で紅茶を飲んでいた所を見ると味も分かるのか。

（そもそも）

今のブルックはどうすれば殺せるのか？

骨をへし折ってもカルシウムをとれば治る。

通常の間人ならば脳でも心臓でも或いは内臓を傷つけられても死に至る。血を一定以上に失えば失血死する。目を突かれれば失明して物が見えなくなり、耳を潰されれば音が聞こえなくなる。

……その全てがブルックには無効だ。

『死んでも1度だけ蘇れる』

それがヨミヨミの実の能力だと考えられてきたが……或いはブルックの現在の姿こそがヨミヨミの実の本当の能力なのかもしれない。すなわち自らの死体を魂とでも呼ぶべきもので持つて動かす能力。

が、そんな事は今は関係ないと外には出さず、内心で頭を振る気

持ちで振り払う。正直検証してみれば、魂の存在とか死後の世界とか色々面白そうではあるのだが。

「どう、とは？」

一方、ブルックもどういふ事かと首を捻った。

当たり前か、とアスラも思う。先程の問いからは意図的にはあるが、色々と省いているのだから。

話をして気付いたが、ブルックはゴールド・ロジャーの財宝というものに興味がない。

無論、海軍が世界政府が秘しているワンピースの存在もだ。

……当たり前か、ブルックの現役時代は海賊王となったロジャーがまだ駆け出しの頃、ロジャーが海賊王となり刑死した時より、更に20年以上も前の話だ。

当然、ロジャーの最期の言葉など知る筈もない。

「君は、グランドラインを走破したいというのは別に何かを狙ってではないんだろう？」

【SIDE：ブルック】

「そうですねえ……敢えて言うならば、それが仲間達と共に抱いた夢だったから、でしょうか」

嘗て失った仲間達。

伝染病に罹り航海の途中でカームベルトを抜けて脱出せざるをえなかったヨーキ船長。

聞いてみた所、何と幸運にもカームベルトからの脱出に成功したらしい。ただ、それ故にロンバー海賊団はグランドラインから逃げ出したという話が定説になっていたらしい。

……ヨーキ船長はどれだけ悔しかった事か。

最期の時まで共に航海を続けた仲間達。

当初の予定とは異なったが、彼らとの最後の演奏は無事ラブーンにも聞かせる事が出来た。ラブーンは無事だろうか。約束した双子岬で待っていてくれるといいのだが。

嘗て自分達が目指したグラントライン一周はロジャーが為したという。

当時は才気ある若者だった彼が成し遂げ、海賊王と呼ばれたのだと聞くと何とも不思議な気持ちになる。いや、これは仕方のない話か。

何しろ、自分は彼らの若い頃を知っている。

今、大海賊と呼ばれる白ひげもまだ若いヒゲを生やす前の事を知っている。……もつとも向こうは自分達の事を覚えているかは怪しいが。ひよつとしたら音楽好きの賑やかな集団として微かに覚えているかもしれない。

殆どは消えた。

夢を目指し、生き残った僅かな人間が名を残す。アスラが聞いたなら、1将功成つて万骨枯る、という言葉を思い出したかもしれない。

今はかつてとは違う。

だが、それでも……。

「きつと、皆で見た夢を果たさぬ限り、私は前に進めないのだと、きつとあの時あの場所で死んだままなのだと思っんですよ。だから私はグラントラインを走りきってみたい。新たな海賊王になりたいからじゃない、ひとつながりの大秘宝、ワンピースなんて今聞いたばかりの事なんて更にどうでもよろしい」

そう、だからこそ。

ブルックにとって、果たさねば先へと進めない。

第150話・これから（後書き）

……次の休みは思い切り爆睡しよう  
またしても寝落ちして、そう確信してます

## 第151話 - 決断と焦燥

ブルックはとりあえず、双子岬を目指す、という事でエース達の船に同乗する事になった。

アスラの戦艦メルクリウス号は最新の技術で……というか、船底に海棲石を敷き詰める事で、カームベルトを比較的安全に踏破可能になっている。

無論、偶然海王類に出くわす可能性はゼロではないが、1体や2体程度ならば海軍本部中将クラスの手相手ではない。

この為、アスラはリヴァースマウンテン、ひいては双子岬を経過せずに海軍本部へと帰還する一方、普通にグランドラインに入る予定のエース達は必ず双子岬を通過する。どうせ通り道なら、という訳だった。

割とブルックは皆に溶け込んでいた。

ルフィはブルックが音楽家と聞いて、自分の仲間となれ、と海軍に勧誘していたが……ブルックの夢を叶えるという意味では海軍では自由に航海を続けるという訳にはいかない。

海軍は命令を受けて航海を行なうからだ。

エース達はエース達でブルックを勧誘している。

話を聞いている内に、ブルックが音楽だけでなく、航海術にも優れた知識を持っている事が分かったからだ。

何しろ、ブルックは彷徨っている間、する事がなかった。

最初は音楽を練習していた。

ピアノを、バイオリンを、様々な楽器を練習し、演奏していたのだが……何しろ、ブルックはこの体になってから睡眠の必要性も食事の必要性もなくなった。そうなるのとやりにまくなって……15年もした頃には船にある音楽でソラで弾けないものがなくなった。

続いて手を出したのは書物だった。

船に積んであるような書物だ。娯楽本などは他の船を探してもごく僅かで、殆どは航海に関する本だ。

読んで、勉強して、分からない所は読み直して……気付けば20年余り。自らの、ルンバー海賊団の船だけでなく、霧の海を彷徨う他の船からも回収して手に入れた本をも読み……すっかり知識に関しては航海術も身につけていた。

まあ、さすがに実地の経験が皆無なのは仕方ないが、ブルックにはグランドラインの前半を航海してきた経験がある。航海術をここまで取得している者が他にいない為、エース達としては単純な戦力としてだけでなく、航海術を取得した人間(?)をこれからグランドラインを旅する為に確保したい所だ。

ブルックとしてはそれは構わないのだが、問題が2つ。

1つは仲間であるラブーンが存在だ。

ラブーンが双子岬に無事戻ってきていれば問題はない。

だが、問題は戻ってきていなかった時だ。

その時はブルックは待つ事を決めている。果たして、その時エース達はどのようなのか、という問題がある。

2つめはブルックの目的はグランドライン一周なのに対して、エース達はそれぞれにまた目標が異なる。ただ……。

「うーん、俺も未だ目的がはっきりしてないし……グランドライン一周に付き合うのもいいかもしれない」

「そうだな、それもいいかもしれない」

「まあ、俺は構わないぜ。別に俺の目指すものは影響ないしな」

「私の目的にも別に影響ありませんね」



「まあ、折角だし付き合っさ。……それに世界を回ればひよつとしたら」

いざ考えてみると、別に付き合っつて不都合がある訳でもない。エース達はグランドライン一周を目指すか、という話になりつつあった。

ルフィはそれを羨ましがっていたが……。

一方、それを聞いて鋭い視線を一瞬向けたのがアスラだった。……グランドラインを一周するという事はただの冒険では済まない。

ひとつなぎの大秘宝 ONE PIECE。

グランドラインを制覇するという事は、それを手にする危険がある故に、世界政府はONE PIECEの存在を消してきた。……それが今の世界をひっくり返す危険があるが故に。

彼らは白ひげがそうであるように興味はないのかもしれない。だが、ここで大きな問題がある。

【海賊王ゴールド・ロジャーの子が、再びグランドラインを制覇する】

エースの出自がここで影響してくる。

無論、これを知る者は僅かだが……1人危険な相手がいる。すなわち、革命軍総司令官ドラゴン。ガープの息子であり、ルフィの父である彼ならば当然、エースが我が子ではない事を知っている。ならば、誰の子なのか。

ガープはこれまで幾人もの海賊と戦い、その中には殺めた者も多

数いるが、その子を引き取った事は1度もない。いや、無論海軍の施設に預けたような例はあったが、子として引き取った者はいない。薄情と言うなかれ、そんな事をしていてはきりがないからだ。

では、何故エースだけ？

……考えすぎかもしれない。けれど、可能性は、ある。

(くそ、ここの悩む事になるのであれば、あの時ブルックを粉々に砕いておくべきだった、か?)

原作の登場キャラだから、再び会わせてやりたいと思った話だったから、そう思ったから手を出した。

けれど、ルフィ達ではなくエース達との出会いが、エース達にグランドライン一周を考えさせてしまうとは……エース達だけならばグランドライン一周を止める手は幾らでもあった。

だが、ブルックを止める事は難しい。

そして、今更エース達を止める事も、ブルックを砕く事も難しい。この時宿った焦燥はアスラの胸を焦がし続ける事になる。……あの瞬間まで。

## 第151話 - 決断と焦燥（後書き）

ルフィではなく、エースだからこそグランドライン一周は拙いブルツクの夢だからこそ、それを阻むのは難しいそんな感じに書いてたら幸いです

……同じ海の事に関して、現実では物凄く言いたい事が起きました  
が、政治的な事なのでこれ以上は黙っておきます  
しかし、やはりやらかしたか……

## 第152話・グランドラインへ

アスラは去ってゆくストルツ・フランメ号を内心複雑な思いで見送っていた。

本当ならば、エースに忠告したかった。

エースを苦しめる事になろうとも、『海賊王の血筋』というものが持つ意味を伝えたかった。エース程の頭があれば、その意味に気付いたはずだ。

だが、既に決めた後だった。

それでは、グランドライン一周を何故止めたのか、サボ達にも説明せねばならない事は必至だ。

偽りで誤魔化すという事は一時的には何とかなっても、長期的には必ずばれる。

いつその事、アスラが自身の海軍としての立場から止めるという事も考えたのだが……エースが納得しなければこっさり行ってしまえばそれまでだし、エースが納得したらしたで、どこか苦悩が潜む筈だ。

最終的に色々考慮した結果、アスラは沈黙という選択肢を選んだ。選ばざるをえなかった。

(……どのみちこれ以上打つ手がない。ガープ中將にも相談してとことん秘匿するしかあるまい)

そう溜息をついた。

その姿にハンコックも気付いていたが、彼女自身は何も問う事はなかった。

アスラの立場上、妻であっても言えない事が山程ある事は知っていた。聞いた所で、言えないとなればそれはアスラを苦しめるだけでしかない。

ミホークは我関せずを貫き、メルクリウス号の船上は何とも言えない雰囲気のまま帰還の途についた。

一方、アスラ達と別れたストルツ・フランメ号の船上は打って変わって明るいものだった。

こちらはアスラがそんな事を考えているとは思っていない。

そして、ブルックはムードメイカーとしては一級品だったし、学ぶ事も多かった。

何しろ、彼はとある王国の正規軍で隊長を務めた後、ルンバー海賊団の一員となった。そうして、ヨーキ船長が病に冒されて、やむをえず船を降りた際、残った者の間で次の船長に選ばれたのはブルックだった。

音楽や航海術だけでなく、船長としての体験談やグランドラインにおける注意点など興味を惹く事は一杯あった。

グランドラインの異常さ自体はエースやサボは多少は知っている。だが、これまでは体験といっても海軍の軍艦に乗って、熟練の船乗り達が大勢乗っていて、万が一の事態にも海軍本部中将が同乗していれば大抵の事態は鎧袖一触といういたれりつくせりの状態だった。

今は違う。

全てはこのメンバーで乗り切っていかなばならない。

ただ、それらは同時にエースにせよ、サボにせよ、ゾロにせよ、或いはたしぎやサンジ。皆が、出来ればブルックの同乗を望ませていた。

(……了承はしてくれた訳だが)

やはり、鍵となるのは双子岬でブルックの仲間だというアイラン

ドクジラに会えるかどうかが鍵だろう。

例え、いずこかで死んでいたとしても、ブルックはきっと待ち続ける筈だ。……かつてラブーンという、そのクジラがルンバー海賊団を待ち続けたように……はつきりと死んだかどうか分からない限り、ブルックは平然と何十年でも待ち続けるだろう。

だが、エース達はそうはいかない。

待つか、それとも待たないのか。

待つのなら、それはどの程度までなら待つのか。

如何に仲間にしたいと言っても、限度がある。

願わくば、既に戻っているか、短期間で戻って欲しいものだが……

……こればかりはどうなるか分からない。

サボヤゾロ達とも話し合い、最大で1月までは待とうと話を決め

……。

やがて、彼らはリヴァースマウンテンの傍まで近づいた。

轟々と音を立て流れる海流に乗る。

話には聞いていた。

ブルックから実際の話も聞いていた。

だが。

……見ると聞くとでは大違いだった。

海が山を駆け上がる。確かにこの光景は1度は見ておくべき光景だろう。

海軍の戦艦と違い、カームベルトを安全に抜ける事が出来ないから、とはいえ、アスラがりヴァースマウンテンを登るルートを通る事を勧めた訳は理解した。危ないのは事実ではあるが……。

「！コースがずれました！このままでは柱に衝突します！」

一旦コースに乗ってしまったえば、船は操船出来るようなものではない。

むしろ、下手に操船しよう和海流に逆らえば、舵が折れるだけ。だから全員が舷側に張り付き、船の針路に注意を払っていたのだが、僅かなズレが起きたらしく、船が急速に片方に寄りつつある事にブルックが気付いた。

「任せる！ 火拳！」

駆け寄ったエースが特大の火拳を放つ。

柱に激突した拳は大爆発を起こし、その爆風が船の針路を僅かにずらす。間髪いれず、エースは2発目、3発目と放ち、船のコースを修正し、それは成功する。

「よっしゃ！進路が戻ったぞ！」

サンジが叫んだ。

これ以上は何も起きないでくれ！そんな願いが通じたのか……やがて、船は勢いよく空を舞い 着水。今度は凄まじい勢いで下り始めた。その到着地点はグランドライン。

原作と異なり、前方に突如として障害物が現れる事もなく、派手な水飛沫と共にストルツ・フランメ号は着水した。

エース達がグランドラインへと到達した瞬間だった。

## 第152話・グランドラインへ（後書き）

前の話の最後に関する話は……すいません、まだ当面先の話です  
というか、この物語の一度幕を閉じる予定の話に関わる話なので…  
…まだ数ヶ月は先かと  
何時か出てきた時、「ああ、これがあの時の」と思い出してもらえ  
れば幸いです



## 第153話・再会

「どうもお久しぶりです、クロツカスさん！」

「……確かにな。お前さん、ブルックか」

リヴァースマウンテンを下り、その麓にある灯台にエース達は辿り着いていた。

以前ならば、ラブーンの治療の為にいるとは限らなかった灯台守のクロツカスだったが、ラブーンが旅立った今は当たり前のように灯台に住んでいた。

そこへやって来た小型船に、当初は「また、新たな連中が来たか」程度の感覚だったが、まさかそこから降りてきた着飾った骸骨がルンバー海賊団のブルックと名乗るのは予想外だった。

アフロを生やした骸骨という姿ではさすがに当初は半信半疑という印象のクロツカスだったが、話をしてみれば確かにブルックと納得するしかなかった。

そうなるに疑問なのはラブーンと出会えたかどうかだ。

「ラブーンとは？」

「ヨホヨホ、無論会えましたとも！」

とすると、今いないのはどういう事だろうか、と繋がる。

ブルックが見捨てたという可能性はありえない。

そこら辺は信頼している。

しかし、そうするとはくれた、という事だが……ここで疑問が生じるのはブルックがリヴァースマウンテンを下ってきた船に乗っていたという事だ。

ブルックが遭難したと聞いたのはグランドラインの中間点近く、霧の海での事だとクロッカスは聞いていたし、ブルックから聞いた話もそうだった。では、何故グランドラインの外から来た船に乗っているのか？

グランドラインの周囲にはカームベルトがある。

海王類の巣であるそこを抜けるのは命がけだ。1匹や2匹ならともかく、大量に來られては手が回らず対処しきれない。

「それがですね、実は……」

(中略)

「……という訳なんですよ」

既に、アスラを通じてあの巨漢の正体をブルックは教えられていた。

アスラにしてみれば、あの肉球のような着弾痕を見れば、誰の仕業か一目瞭然だった訳だが。

「成る程な、王下七武海の一角、バーソロミュー・くまか……」

それを聞いて、王下七武海の事を知っているエースとサボは納得した。

が、納得しきれない者もいる。ブルックだけではない、ゾロやたしぎ、サンジも王下七武海という存在についてよく知らないからだ。いや、ブルック以外はサボのこの一言であっさり納得した。

「七武海の名前の通り七人いて、ミホーク師匠もその1人だ」

「成る程、凄く強い海賊って事か」

「世界政府公認の物凄く強い海賊って事ですね」

「成る程、物凄く強いのはよく分かった」

何しろ、他ならぬミホークが海軍本部中将と目の前で真つ向やりあつた挙句、島1つ壊滅させてしまったのだ。これで、王下七武海が雑魚だ、などと思う奴はいない。

ブルックはどうにも現在の感覚からはずれていたが、それでも王下七武海の1人が海軍本部中将と真つ向やりあつて、引き分けたと聞いて、その強さに納得した。それでよく助かったものだど、「ああっ、何だか今になって胃がキリキリと痛み出しました、って私胃ありませんでした！」と、それでもボケをかましていた訳だが。

空を飛ばされた結果として、東の海へとブルックは飛ばされた。

幸い、はぐれた場合の合流地点はこの双子岬と約束していたから、しばらく滞在させて欲しいとのブルックの言葉にクロツカスも喜んで了承してくれた。

久方ぶりに会う2人だ。積もる話も多かろうと、その夜エース達は船へと戻り、2人で話しこんでいた。

ブルックはクロツカスが自分達を探す為にゴール・D・ロジャーの船に乗り込み、現在伝説で語られる海賊王のクルーの1人となっていた事にブルックは驚くと同時に、そこまでしてくれた事に感動して礼を述べたり、逆にクロツカスから、その時にルンバー海賊団がグランドラインから逃げ出したとの話しか掴めず、恥ずかしながらつい最近までそう思っていたと謝られたり、いやいや、病気でヨーキ船長がグランドラインを離れる事になっただけじゃなく、全滅して消息が途絶えてしまった自分達のせいだからとブルックが止めたりと話は止まる事がなかった。

もちろん、本当の事情を先だつて会ったばかりの海軍本部中将ア

スラが教えてくれたという事を知り、びっくりする場面もあったが。

さて、話合い、ラブーンを待つのは一週間と決まった。

短いように感じるかもしれないが、東の海からリヴァースマウンテンに回り、ここまでやって来るまでにもそれなりの日時を消費している。それと合わせるとそれなりの時間を待つ事になる。

もちろん、ブルックは一週間を過ぎようが、今度は自分が待つ番だと、この地に残る事を宣言しているから、その場合は残念だがここで別れるしかない。

そうして　その一週間はあっという間に過ぎた。

「……それじゃあ残念だけど」

「ヨホホホ、仕方ありません。というか、どうも私の都合につきあわせて申し訳ありません！」

もちろん、それはエース達が決めた事だから文句を言うつもりはないし、仲間を待ちたいと願うブルックの気持ちも分かる。

共に後ろ髪が引かれるものを感じつつも、エース達は出航していた。

その船の姿をブルックは見送っていた。

エース達は今の自分を受け入れてくれた人達だった。一緒に行きたかったという思いはある。だが、それ以上に今の世ではただ1人ではなく1体の仲間であるラブーンを見捨てる訳にはいかない。

次第に小さくなる船の姿を見送っていたが、クロツカスがうながし、ブルックも踵を返して戻ろうとした。

その時。

ぶおおおおおお

！

はつと振り向いたブルツクの視線の先で。

ストルツ・フランメ号が浮き上がってきた巨大な鯨の口の中に、エース達の叫び声と共に消えていった。その光景にブルツクは。

「お帰りなさい！ラブーン！」

無事に戻ってきたラブーンの姿に歓声を上げた。

第153話・再会（後書き）

ラブーン帰還です

クロツカスさんとラブーン、2人との再会でした  
きつと、2人は夜を徹して語り合った事でしょうW

## 現時点での人物解説（前書き）

本日は希望のあった人物紹介を改めてアップしました  
多分、これで全員だとは思っていますが……抜けてたらご指摘お願い  
します

## 現時点での人物解説

### 【人物紹介】

・アスラ

本作の主人公。

原作開始2年前の現在、35歳。

海軍本部中将【銀虎】

超人系悪魔の実、メタメタの実【モデル：水銀】を食った、水銀人間。

防御に関しては自然系並。

本来はこの世界の住人ではなく、気付けば漫画として知っていたこの世界へとやって来た漂流者。

攻撃は水銀を用いた質量攻撃と格闘術。

水銀の能力を使う際には背後より生やした九尾を用いて戦う。

覇気は武装色を得意とするが、霸王色・見聞色も使える。

彼の正義は『最大多数の最大幸福』であり、白ひげや赤髪はそれ故に出会っても手合わせ以上の事はしない。

海軍では現在、造船総監であり、政府の役人としては外交官とCP長官を務める。以前は災害救助などの緊急展開部隊やその護衛部隊の指揮官も兼ねていた。

旗艦は外交にも用いる為見た目は豪華客船な特殊な戦艦、メルクリウス号。

尚、見た目は茅田砂胡さんのクラッシュユブレイズなどに登場するケリー・クーアがモデル。

・ハンコック

原作での蛇姫。アマゾン・リリーの皇帝でもあった世界一の美女。

この世界ではアスラの奥さん。現在27歳。

原作と異なり、背の天かける竜の蹄を入れ墨にて消した事で心安ら



かな日々を送っており、原作より相当柔らかい。

この為、原作以上に魅力的な美女。  
才能に恵まれた女性であり、見よう見まねで六式を修得した。ただし、本人が前線に出て戦うという事はなく、あくまで息子や娘を守る為。

原作同様超人系悪魔の実メロメロの実の能力者であり、霸王色の覇気を得意としている。

・エスメラルダ

・カルラ

2人の娘と息子。

が、原作開始時点でも10歳に満たないので戦闘で活躍する予定はない。

・アリス

グラントイガーと呼称される巨大な虎。

母虎を失った直後に、この世界に来て間もないアスラと出会い、以後行動を共にしてきた。

ある種の天才で、虎でありながら六式を【指銃】を除く五式まで使いこなし、六式使いと真つ向戦つて勝利する実力者でもある。

本来グラントイガーと呼ばれる種は単独行動を好み、家族単位のみをその守護対象とする。

この為、自身が新たにつがいを見つけるなどして、新しい家族を形成した場合は、前の家族である母や兄弟姉妹と戦う事もあるのだが、アリスはある種の突然変異であり、マリンフォードの海軍自体を家族集団として看做している模様。

同じ母から生まれた兄弟がいたが、そちらは本来のグラントイガーの性質故に島に残り、以後は会っていない（会うと上記の理由から殺し合いになる危険性が高い為、アスラが連れて行っていない）  
密かにセンゴク元帥の依頼でDr.ベガパンクにより知能を高める

薬が投与されており、言語を喋れないものの人の会話を理解出来る程の知性を持ちつつある。

原作ではジャブラのみに可能であった【鉄塊拳法】を使いこなす。

・エース

原作における火拳のエース。

この世界でも自然系悪魔の実メラメラの実を食い、火人間となっている。

原作開始2年前の現在18歳。

幼少時よりマリンフォードで育ち、海賊の無法を目の当たりにしてきたが、同時に母の命を間接的に奪う事となった海軍に入るのになわだかまりもあり、自分の願いを見定める為に賞金稼ぎとして世界を回っている。

六式使いであり、アスラから覇気概念を教わり、現在修行中。

・サボ

原作では航海に出た途端に天竜人による砲撃で海の藻屑に……なっただと思いきや、革命軍のドラゴンに助けられていたと思われるゴア王国の貴族の子。貴族というものに幻滅し、死んだと見せかけて家を出していた。

彼もエース同様、マリンフォードで育った。

年齢は多分、エースと同じ18歳。

彼自身は何かしらの目指すものがあるようだが、エースに付き合い共に旅に出る道を選んだ。

六式を使えるが、【鷹の目】のミホークに師事し、刀を使う。

。愛刀は旅に出る際にアスラに渡された大業物/黒刀【美髯切り長船】。

・ルフィ

原作主人公。

原作同様超人系悪魔の実ゴムゴムの実を食ったゴム人間。  
現在15歳。

このお話では海軍に入隊。ガープに感動の余り涙を流させた。  
現在、海軍本部中尉の階級を持つ。  
エース、サボとは兄弟のようにして育ち、彼もまた六式を修得。実質的な戦闘力は原作のそれを上回る。

・ナミ

彼女の場合は、故郷の村を襲ったアーロンが早々にアスラにより撃滅。

ただ、さすがにすぐは気まずがるうとアスラに引き取られた結果、現在は海軍に所属している。

測量隊に属して海図を張り切って書いているが、その才能を見込まれ航海士としても勧誘されている。

現在16歳。

ルフィを放っておけず、あれこれ手出ししていたが、それが恋愛感情に発展するかは未だ不明。

・サンダーソニア

ハンコックのすぐ下の妹。

ちなみに年齢は探してみたが、見つからなかったので25歳と仮定。獣人系悪魔の実ヘビヘビの実【モデル：アナコンダ】の獣人。

ジャブラに一目惚れされ、求婚された。

当初は迷いもあったが、姉らに紹介した際の態度に心を許し、ジャブラの求婚を受け入れた。

ジャブラが現在、重要任務中の為婚約中。

・マリーゴールド

3姉妹の一番下の妹。

同じく年齢が不明だった為に22歳と仮定。

獣人系悪魔の実へビへビの実【モデル：キングコブラ】の獣人。原作と異なり、無理に筋肉をつける必要がなかった為に、ちゃんこを食べて体型が変わるといふ事がなかった為、背こそ高いがほっそりとした体型である。

海軍本部中佐と結婚を前提としてお付き合いしている。尚、現時点で彼の登場予定はなかったりする。

#### ・ゾロ

原作同様三刀流を使う剣士。

現在は17歳。

大業物【和道一文字】と業物【三代鬼鉄】、これに良業物【雪走】を途中から使っていたが、ミホークとの勝負で【雪走】が破損した。現在はとりあえず、と渡された海軍の数打ちの太刀（安物ではない。頑丈さが取り得）を使っている。

#### ・たしぎ

原作と異なり、故郷で海軍本部大佐ヨウゴークに関わる一連の事態の中で海軍にも疑問を感じ、エース達と行動を共にしている。

年齢は今年、19歳。

原作同様の刀マニアで、そのマニアっぷりはサンジをも引かせる程。武器は業物、時雨。

現状、仲間の中では最も弱く、当人もそれを内心で気にしている。その内、その悩み故の混乱を書きたいと思っています。

#### ・サンジ

原作における【黒足】のサンジ。

原作同様のフェミニストだが、ナミとは未だ出会っていない。

ゾロと同じく原作開始2年前の現在17歳。

原作と異なり、船のコックとして未熟だからと【赫足】のゼフに修行としてエース達と行動を共にしている。

当初は失敗も多く、その中で船のコックとして成長してきた。余り戦闘というものに興味を持っていなかったが、アスラとの戦いで何かに目覚めたっぽい。

・ブルック

現在86歳。

超人系悪魔の実ヨミヨミの実を食った骸骨（アンデッド？）。

元々はルンバー海賊団の一員であったが、48年程前に霧の海で毒を使う海賊と戦い、一味は全滅した。

その後、王下七武海の一角ゲッコウ・モリアに影を奪われていたが、ラブーンの協力により影を取り戻した。

ただ、見た目が見た目だけにあちらこちらで騒動が起きており、遂には天竜人まで驚いた事で、バーソロミュー・くまにより東の海へと飛ばされた。

彼自身は黒刀は使わない為、持ち主を見極めようとしている。当初はミホークに預けようと思ったらしいが、ミホークから「良ければ奴に渡してやってくれ」とゾロを示唆された事から、ゾロを見極めようと思っている。

この辺、少し書く予定です。

元懸賞金額3300万ベリーだが、現在は失効している。

・ラブーン

アイランドクジラ。

島のように巨大な鯨であり、かつてルンバー海賊団の音楽に惹かれ、仲間となった。

当時は現在より遥かに小さい体だった。

長年ルンバー海賊団の逃走を信じず、双子岬で待ち続けていたが、アスラを通じてクロッカスより話を聞き、遂に旅立った。

霧の海でブルックと再会を果たし、協力してサムライ・リユーマを倒して影を取り返すのに貢献した。

ブルックが飛ばされた後、双子岬に向かい、無事合流を果たした。

・ウソップ

現在15歳で、マリルフォードで修行中。

故郷に隠れ潜んでいたキャプテン・クロだったが、その撃退に功があったと認められ、推薦状を得て海軍本部へとやって来た。

幼馴染のキャとは何となくいい雰囲気。

同期にコビーやヘルメツポがいる。

・シャンクス

現在35歳。

原作同様、新世界最強クラスの海賊、四皇の1人【赤髪】。

当時見習いではあったが、海賊王ゴールド・ロジャーの船の一員だった。

このお話の世界では左腕を失っておらず、現在も世界最強クラスの剣豪の1人。

アスラとは妙に意気投合し、時折鍛錬と称して手合わせを行なっている。

・ミホーク

王下七武海の一角【鷹の目】

世界最強の剣豪とも称される人物であり、現在39歳。

武器は背中に背負う最上大業物/黒刀【夜】

アスラとの戦績は現在3勝1敗8引き分け。

アスラに頼まれ、サボに剣を手ほどきした。

・サー・クロコダイル

自然系悪魔の実スナスの実の砂人間。

原作同様アラバスタ王国乗っ取りを考えている。

アスラに先手を打たれたが、それをバネに更に計画を練り直し、B

Wの現在の規模は新世界にまで及ぶ厄介なものとなっている。最終的な目的は変わらないようだが、ロビンを片腕に計画を進めつつある。

#### ・ロビン

超人系悪魔の実八ナハナの実の能力者。

現在26歳。

BWの一員として、クロコダイルの傍らで計画を進めている。

元々は考古学の聖地オハラで考古学を修めた才媛だったが、それ故に世界政府に狙われている。

現在懸賞金額7900万ベリー。

#### ・トム

原作では処刑された海賊王の船を造った船大工。

この世界ではアスラが干渉した結果、CP5スパンドムの陰謀を乗り越え、現在も健在。

古代兵器プルトンの設計図は分散させて膨大な資料の山に紛れ込ませてある。

海列車の開発者であり、世界有数の船大工。現在はガレーラ・カンパニーの相談役だが、現在も尚、現場に立つ。

エース達の乗る船、ストルツ・フランメ号の設計・製作責任者。

#### ・フランキー

原作と異なり、この世界では海列車に跳ねられたりしなかった。サイボーグ化もしていない。

現在32歳。

彼が建造し、放置していた兵器類が悪用されかけた結果として、現在は船の建造には関与が禁止されている。

ただし、設計や船に載せる兵装の開発などは許可されており、実は彼の設計した兵器の一部は海軍に採用されていたりする。

・スパンダム

元・CP5主官だったが、司法船襲撃の現行犯他多数の罪によりインペルダウンに収監された。  
現在37歳。

当初は父であるCP長官が何時か助けに来てくれると信じていたが、その父スパンダインも汚職が摘発されて地位を追われた事を知られ、ショックを受けた所にオカマ王イワンコフによって女性化され、その後肉体は戻ったが最早手遅れ。

現在はインペルダウン内部のニューカマーランドで、立派なオカマとしてその身を磨きつつある。

・サカズキ

海軍本部大将【赤犬】

自然系悪魔の実マグマグの実を食ったマグマ人間。  
アスラとの試合によって、水銀の蒸気という猛毒によって身体に軽い障害を負ったが、現在では復帰している。

ただし、戦闘方法は嘗てのものより悪魔の実の能力を用いた不動の戦闘スタイルが中心となっている。

・ガープ

海軍本部中将【拳骨】

ルフィの祖父であり、革命軍総司令官ドラゴンの父。  
海軍の英雄で、センゴク元帥とは若い頃からの戦友。

老いて尚、海軍本部でも屈指の実力を誇るが、ルフィが海軍に入るといふ夢が叶った事もあり、自身の年を内心で少し意識しつつある。書類から逃げるのは変わらずで、それが妙な所で騒動を引き起こしたりする事もある。

・スモーカー



海軍本部准将【白蛾】

自然系悪魔の実モクモクの実を食った煙人間。

現在32歳。

原作より早く、アスラによって地位の必要性を理解するに至った為、以前程の行動の荒さがなりを潜めている。アスラの部隊の副将を務める。

・ヒナ

海軍本部大佐【黒檻】

超人系悪魔の実オリオリの実を食った檻人間。

現在30歳。

同期であるスモーカーを明らかに意識しているが、恋愛感情にはまだ至っていない模様。

原作のスモーカーが就任していたローグタウンを管理する責任者として前任の失態を注ぐ為に送り込まれた。

現在はローグタウンは彼女の手腕により原作同様治安の良い街となっており、海軍本部へ呼び戻すべきとの声も出ている。

・モーガン

海軍本部大尉【斧手】

キャプテン・クロに破れ、部下であるジャンゴの手によって催眠術を仕掛けられたが、モーガンの事を原作で覚えていたアスラが彼の報告書を元に海軍におけるミスとその改革を推し進めた結果、副産物として彼にかけられた催眠術の存在が明らかにされ、現在は解除された結果、催眠術にかけられる前、友情に厚く正義に燃える男として復活を遂げた。

一応、六式の内、鉄塊と剃を使えるが、まだまだ未熟。

キャプテン・クロを追い詰め、その片腕を奪うも逃走された為、現在は東の海を回りつつ尚もキャプテン・クロを追っている。

・ヘルメツポ

父が変わった事により、彼も変わった。

原作ではモーガンが島1つを支配していた為に、そこで父の威光を盾に好き勝手していたが、マリソフオードでそんな事が出来るはずもなく、また父が催眠術から解き放たれた事もあり、原作同様真面目に鍛錬し、着実に実力をつけつつある。

・コビー

アルビダの船に間違えて乗って間もなく、解放された。

この為、未だ事件には関わっていないと判断され、ウソツプ共々海軍本部に海兵候補として送られた。

現在はヘルメツポの同期としてウソツプと3人で鍛錬に励んでいる。

・ロブ・ルツチ

CP9所属

アスラの配下最強の手駒。

現在26歳。

獣人系悪魔の実ネコネコの実【モデル：豹】を食った獣人。

六式使いであり、現在確認されている中では唯一の六王銃をも使いこなす最強の六式使い。

BWに潜入捜査中で、現在Mr.6の地位にある。

アリスがジャブラに真つ向勝利した事もあり、六式使いでない五式使いなどでも、強い奴はいると再認識した。

・カク

CP9所属

現在21歳と、CP9の中では最年少。

獣人系悪魔の実古代種ゾウゾウの実【モデル：マンモス】を食った獣人。

同じくBWに潜入中。

原作ではイガラムが就いていたMr. 8の地位にある。

・カリファ

CP9所属。

現在

超人系悪魔の実パウパワの実を食べている。

この実は身体能力を何かしら一種強化する事が出来るというものだが、一種類の強化である為に色々と制約も多い。

BWに潜入中のメンバーの1人で、ミス・マンデーとしてカクと共に行動している。

・ジャブラ

CP9所属。

33歳とCP9所属メンバーの中では最年長。

獣人系悪魔の実イヌイヌの実【モデル：狼】を食った獣人。

サンダーソニアに一目惚れし、アタックをかけた続けた結果恋人に。

現在幸せの真っ只中。

このまま進めば結果的にアスラの義理の弟になる為、アスラを義兄と呼んでいたりする。

BWに対する捜査においては連絡役を務めている。

以前に同じ【鉄塊拳法】でアリスに敗北した事で落ち込んでいたが、現在はそれをバネに鍛錬に励んでいたりする。

・ブルーノ

CP9所属。

現在28歳。

超人系悪魔の実ドアドアの実を食った扉人間。

当初はBW捜査作戦では拠点の管理を務めていたが、BWの規模拡大により拠点である店をCPのサポートメンバーに任せ、当人も動いている。

・クマドリ

CP9 所属。

現在32歳。

BW捜査作戦では遊撃部隊であり、BWにかかりきりな他の面々の代わりに各地を転々とする日々。

・フクロウ

CP9 所属。

現在27歳。

クマドリ同様、遊撃部隊として行動中

## 現時点での人物解説（後書き）

本日は本編ではなく、こちらにて

……人数多いと案外時間がかかりますね……

明日はまた本編アップを行ないます

## 第154話・平穏と激動

「……あああああああ！？」

残念ながらと、後ろ髪を引かれつつブルックと別れての航海を再開……し始めた途端に巨大な鯨が出現、エース達は船ごと飲み込まれた。

幸いというべきか、齒鯨ではあったが、別に船を食べるつもりで飲み込んだ訳ではないらしく、噛み砕かれたりしないままではあったが、気持ちのいいものではない。

やがて、巨大な空間に彼らは到着した。

原作ではクロツカスが治療の過程で内部をアレコレと弄っていた為に明るかったし、空の色になっていたが、現在はまだそこまで変えられておらず、光がない為に暗く、星も見えなかった。

「……止まったみたいだな」

「……どこだ？」

広大すぎるだけでなく、暗い。お陰で、端が全然見えない。

「素直に考えれば、胃だろうな」

確かに飲み込まれたものが到着するのは胃だろう。  
とすると……。

「じゃ、じゃあ、このままだと胃液で溶かされちゃうんですか！？」

と、なる。

「よし、それじゃあさっさと中から焼いて」

そう、エースが腕まくりしたが、それを止めたのはサボだった。

飲み込まれる直前に見えたが、自分達を飲み込んだのは巨大な鯨だった。それだけならいいのだが、問題はブルックが待っていた仲間というのが巨大な鯨だという事だ。もし、この鯨がブルックが待っていたという仲間ならば……もし、中からこの鯨を攻撃して、結果として殺してしまえば、おそらく次はブルックと戦う事になるだろう。

それは避けたい。

「……待つか」

皆にも否はない。

幸い然程待つ必要もなく、迎えが来た。

前方より、小船が1隻。明かりを灯し、ブルックとクロツカスがやって来たのだ。やはり、この鯨はブルックの待っていたラブーンだったらしく、エースは焦って焼いたりしなかった事にほっとしたものだった。

後は簡単だ。

明かり代わりにエースが炎を灯し、外へ出た。

飲み込まれたという事は船が通るに十分な大きさがあるという事。何ら工夫もいらぬ。ラブーンがお腹と海が並行になるように口を開けていてくれれば、広々とした洞窟を通過するのと大差ない。無事外へ出た一同は改めてラブーンに紹介される事になる。

翌日、出航するストルツ・フランメ号の船上にはブルックの姿が、そしてその傍らにはラブーンの姿があった。

その頃、アスラは海軍本部へと帰還していた。

自らの執務室へ向かう途中で、1人の中佐が自然に歩み寄り、書類を手渡ししながら、特殊な発声法でアスラにのみ聞こえる声で「長官」と呼びかける。

その声に、アスラも僅かに眉が動くが、特に顔色も変えずに書類に目を落とし、「詳しい話を聞きたい、執務室で話そう」と告げ、中佐と共に入っていった。

その態度はごく自然な様子であり、誰も違和感を感じる事はなかった。

この中佐の名前はジャグラー中佐。

だが、彼の身分証明は偽造であり、同時に本物でもある。

海軍本部にジャグラーという名の中佐は存在しない。そういう意味では彼の身分証は偽物だが、身分証は世界政府の正式な発行品であり、海軍が認めたものだ。そういう意味では本物だ。

彼の本名はジャブラ。

もうお分かりだろう、今見につけている身分証はCP9の為に用意されている偽装なのだ。

ただ、ジャブラは大抵の場合、報告は家でしている。早い話が、サンダーソニアに会いに来るので、その際に聞いている。そこでなら割と突っ込んだ感想も聞きやすい。

逆に言えば、アスラが家に戻るまで待っていられない重要な事だという事。

執務室に入るのを待って、アスラは問いかけた。

「何があつた」

いちいち回りくどい物言いはしない。真っ向から切り込んできた



問いかけに、ジャブラもまた回りくどい言い方はしなかった。

「世界政府の役人が殺された。アラバスタ王国正規軍の軍人によつて」

自らの席に座ったアスラは「現状分かっている部分の報告を」と、未来の義兄弟の立場からではなく、CP長官とCP9の一員という上司と部下としての立場から命じた。

アスラも何かしら、クロコダイルの重要な部分が動き出したと感じたからだ。

事実、満を持して、というべきかこの後、バロックワークス BWの行動は活発化。

アスラとクロコダイル。

2人の戦いは原作を待つ事なく、急激に加速していく事になっていくのだった。

## 第154話 - 平穏と激動（後書き）

エース達に新たな仲間が加わり、平穏な旅が始まる一方、激動も始まりです

今回は、今回とは逆に前半がアスラ編、後半がエース編になります

次回後半からのエース達版のウイスキーピークをお楽しみに

## 第155話 - 重い陰謀軽い陰謀

アスラの視線が鋭いものになる。

そこにいたのは冷徹なCP長官であり、重責を担う海軍本部中將だった。

「どういう事だ。BWの構成員によるものか？」

まず考え付くのはそれだ。

BWの構成員はアラバスタ王国の至る所に潜んでいる。原作でもアラバスタ王国における最終決戦で正規軍と反乱軍の話し合いを崩壊させたのは正規軍に紛れ込んだ構成員による1発の銃弾だった。

「いいえ、犯人は構成員ではありません」

ジャブラも真面目な態度で返す。

TPOが読めずして、諜報員は務まらない。

「……ふむ、どういう事だ」

「構成員ではありませんし、表向き一切の繋がりはありません。ですが、裏の裏を探っていくと今回の事件を起こした軍人はどうやら、BWに対して弱みを握られていた模様です」

「ふむ、ジャブラ、お前が報告に来た、という事は……」

「お察しの通り、BWのMr.6……ルッチが掴んだ情報です」

カク達からは情報は流れてきていない。

となると、相当限られた情報、という事が……下手に動けんな。そうアスラは判断する。

出来れば即座に動きたい。

だが、それは即効で情報を掴んだとクロコダイルに知らせる事であり、情報が極々限られた者しか知らないのであれば、ルツチの身に危険が及ぶ。ロブ・ルツチならば切り抜けられるだろうが、今、相当に深い所まで入り込んでいる情報源としての彼を失うのは痛い。

「加えて、アラバスタ王国において、殺された役人の悪評が異様な速度で広まりつつあります」

役人を殺した軍人は急速に偽りの英雄に仕立てられつつあるのだと。

では、本当に役人がそこまで悪評を立てられる人物だったのかというところではないのが厄介だ。もちろん、清廉潔白な人物がやっつけていける程政治という分野が甘い世界ではない以上、多少は後ろ暗い所があったのは確かだ。

だが、間違いなくやり手であり、人望もある人物だった。

それが厄介な状況を生んでいる。

……実際にどうあれ、作られた英雄像はその当人を守る盾となる。アラバスタ王国の住人は彼が処罰を受ける事を許容しないだろう。そうなれば、コブラ国王とて簡単に処罰するという訳にはいかなくなる。

逆に、世界政府も引くまい。

殺した軍人の引渡しなり、処罰なりを求めるはずだ。間違いなくアラバスタ王国と世界政府の間で緊張が高まるのは必至だ。

この件が厄介なのは、単純に「実は真相はこれこれこうで、軍人がこうだった」と証明した所で民衆を納得させられるかどうか分からない点だ。民衆が「捏造された話なのではないか」と疑うのは確実であり、そこをクロコダイルに煽られれば……。

「……ＣＰに動員をかける。こちらも民衆に情報を流してゆく。それぐらいならば、ルツチに辿り着かれる事はあるまい。ブルーノを一時アラバスタ王国内における指揮官として、クマドリとフクロウを一時ブルーノの指揮下に置く。ジャブラ、お前はルツチとの接触を保て、何かしら掴んだ場合、直ちに知らせる」

「了解しました」

この後、アラバスタ王国においては噂話が錯綜。

処罰を求める世界政府と、動くに動けぬアラバスタ王国の双方の間で駆け引きが繰り広げられる事になる。

真相はどうでもいい。

どちらが自分達に正義あり、と思わせる事が出来るか……。勢力としてはＣＰの方が上だが、全てを投入出来ない上に、アラバスタ王国に深く食い込んでいたＢＷは結果として双方引かぬまま、裏での激突は加速してゆく事になる。

さて、そんな諜報戦が起きている一方で、エース達はそんな世界情勢を知る事もなく、航海を続けていた。

ゾロもたしぎもサンジもグランドラインの航海に関しては、その特殊性と必要な物などを知らなかったが、エースもサボもブルックもグランドラインでの航海を知っている。

グランドライン突入の許可をアスラから得た際に、ログポースを受け取っていた。

本来ならばブルックが見につけておくべきかもしれないが、何しろブルックの腕は骨だ。身につけても、滑り落ちてしまうので、悩んだ結果、エースが装着していた。

これは、ログポースの破損を防ぐ為、という意味合いもある。  
自然系ロキアの能力者の場合、理由は分からないが、身につけている物  
に対してもその影響力は働く。原作では、シャボンディ諸島におけ  
る黄猿と【海鳴り】スクラッチメン・アプーの戦闘が代表例だろう。  
あの時、黄猿はスーツごと腕を切り飛ばされ、爆破攻撃を受けて上  
半身と下半身が泣き分かれになっても、自然系ロキアの力でもって復活し  
た際に、スーツもコートにも破損は全くなかった。体と共に再生さ  
れている。

つまり、エースが身につけている限りは、ログポースも破損しよ  
うが再生可能という訳だ。

やがて、航海を続けるエース達の前に現れたのはサボテンを思わ  
せる岩を持つ島だった。

その島の名を……ウイスキーピークという。

島では船がやって来るのが見えていたが、確認した所、船は海賊  
旗を上げてはいない。

賞金稼ぎの島だ、相手が海賊なら歓迎した上で、酔い潰してから  
殺して、サボテン岩に埋めてしまうのだが……相手が海賊でないな  
らば、はつきり言ってお呼びじゃない。ま、海賊旗を上げてないだ  
け、という可能性もあるから追いつたりはしないが……。

それより、BWの賞金稼ぎ達が目をつけたのは、船の傍を泳ぐ巨  
大な鯨だった。

「……あれなら、当面の食費が浮くな」

それを見た責任者の呟きが、全てを示していた。

『酔い潰して、寝ている間に仕留めてしまおう』、酒に眠り薬を  
仕込んでおけば、大した量も必要ないはずだ。

そう判断すると、彼らは偽装を始めた。

……それが彼らにとって大きな災いの始まりだったとは思ってもせ



## 第155話 - 重い陰謀軽い陰謀（後書き）

……クロコダイルの計画そのものは事前の予定通りなんですが、先だつての事件がそのまま当て嵌まる事に気がついた  
中国人船長をアラバスタ王国軍人、世界政府役人を海上保安庁に当てはめると分かりやすいかも

どっちが悪いかとそういうのは考えずおいといて、世論は国としても無視出来ないのでからね。一旦その方向で固まった世論は……



## 第156話・ウイスキーピーク最後の日

ウイスキーピークは賞金稼ぎらが集まる島だ。

バロックワークス

BWは賞金首の情報の提供や武器のサービスなど、勧誘の際に協力する事によるメリットを示すが、組織である以上は運営の為に一定額の上納金を求められる。会費と言い換えてもいい。

とはいえ、これまで全部自分達でやらねばならなかった面倒な部分を一括でやってくれるというのは賞金稼ぎらにとってもメリットは大きく、一旦入った者で辞める者は滅多に出ない。

さて、実力者はいい。

カクとカリファのコンビが代表例だが、彼らは情報を受け、海賊を真つ向襲撃し、潰す。

規模や危険度、評価などについてはBWから提供を受け、効率よく仕事をこなしている。

こうした場合は、会費分はすぐ超える。

問題は、弱い場合だ。弱いメンバーであつてもお金を稼がないといけないのは変わらないから、群れる。群れて、より安全確実な方法を探り……完成したシステムが、このウイスキーピークだった。たとえ、100人からの海賊団であろうとも酒に酔わせた上で倍以上の人間で襲い掛かれば……普通はやられる。

そうやって、彼らは金を稼いできた訳だが、このシステムには当然難点がある。一人頭の稼ぎが少ない事に加えて、酔い潰したりする為にはそれなりの金がかかる、という事だ。

ある程度は倒した海賊の船に積まれたもので補えるが……それだけでは足りないので、自給自足の手段は常に模索されている……そんな処に超巨大な鯨が現れたのだ。狙われたのも仕方ないといえは仕方ない話ではある。

『この島では、旅人は誰でもうと歓迎するのが慣わし』

そう言つて、飲ませ食べさせた。

無論、中には睡眠薬を仕込んで、だ。既に彼らが賞金稼ぎの一団であり、倒しても金にはならない事は判明していたし、昨今海軍が改革の結果として、賞金の支給が厳密になつていたから別の海賊団に見せかけて金を受け取るという事も無理だと判断していた。

「……よし、それじゃ後はあの鯨だけだな」

その夜。

寝静まつた頃を見計らい、ウイスキーピークの面々は海へと向かつた。

だが……。

「ヨホホホ……人の仲間は何をなさるおつもりですか？」

その声に夜空を見上げた一同は……固まつた。

別に空を飛んだりはしていない。ただ、近くの家の屋根に声の主はいた。だが……見た目が問題だった。骸骨なのだ、そのまんま。

幾らスーツを着ているとはいえ、そんな相手が夜、月明かりに佇んでいたら……そりゃあ誰だって硬直もしようというものだ。

ただ、彼らの硬直時間は短かった。否、短くさせられた。

「まあ、大体予想はつく、っていうか知ってるがな」

今度は前方からだ。

そこにいるのはエースの姿。どこか皮肉の籠つたようなふてぶてしさを感ぜさせる笑みを浮かべている。アスラが見たら、原作で敵を前にした時のエースだ、と思つたかもしれない。

「まあ、仲間に手出そうとされて黙ってる程、俺らも寛大じゃないんでね」

「そいつは同感だな」

今度はブルックが立つのとは反対の路地からだった。サボが、ゾロが暗がりから姿を現す。

「つたく、食い物に薬なんぞ混ぜるんじゃないよ。料理を粗末にする奴は許せねえな」

サンジが退路を断つように背後から現れた。

たしぎは、その脇に黙って立つ。

眠らせたはずの全員が全員、普通に現れた事にウイスキーピークの一同は動揺を隠せなかった。

一同は或いはそもそも胃とか内臓がないから。

或いは疑念を抱き。

或いはメシの味に違和感を感じ。

或いは他の人間に忠告されて。

エース達は全員が健在だった。寝たフリをして、彼らの話を聞いてみれば、食料確保の為にラブーンを捕獲しようという話が為されている、となれば、後は簡単だ。

どうしても集団というのは行動が遅くなる。

さっさと回り込んで彼らを包囲したという訳だった。

こうなると、ウイスキーピークの住人らも覚悟を決めざるをえない。

一斉に武器を構える。

何だかんだいって、エースらは数が少ない。酔っていない、眠っ

ていないのは予定外であったが、数はこれまで潰してきた海賊団との比ではない。何とかなる！そう判断したものは多かった。

……彼らは忘れていた。

自分達が何故群れていたのか、Mr. 8らが何故この場にいなのか……。

そんな彼らを尻目にエースらも戦いの準備を整える。

エースの腕が炎に包まれ、周囲に小さな蛍のようにも見える輝きが浮かびだす。

サボが、たしぎが刀を抜き、ゾロが手ぬぐいを頭に締め直して、口に和道一文字を構える。

今回、ゾロが片方の手に握るのは大業物【黒刀/秋水】。

見定めるといふ目的でブルックが持っていたのだが、どのみちブルックが持つている限り、刀は死蔵されるしかない。それならば、使う姿から見定めようといふ事で貸与されていたといふ訳だった。ゾロとしても、数打ちの刃よりこちらの方がいいのは間違いない為、すんなりと借り受けていた。

サンジは何時ものように両手をポケットに突っ込んだまま、自然体で佇んでいる。

そして。

ブルックが手にするステッキを掴み、仕込み杖となっている中から細身の刃が姿を現す。

月明かりにその刃が輝いた瞬間、戦いは始まった。

## 第156話・ウイスキーピーク最後の日（後書き）

原作でも、ルフィは寝ちゃってましたが、ゾロとナミは起きてました  
サンジは……まあ、原作と違い食べ物に薬を入れたせいで気付かれ  
たと思っただけです  
たしぎだけ寝てるとかも考えたんですが、最終的に全員起きてても  
らう事にしました

## 第157話・ウイスキーピーク（前編）

「いくぜ！火拳変形・焰波！」

エースの放った一撃に、BWの面々は戦慄した。

前から巨大な火の津波が襲い掛かってくる！

赤々と燃えるが故に後方からもはつきりと見えたその一撃に、BWの面々は誰もが慌てふためき反転して逃げようとする、が……集団が全員反転するというのは難しい。1人でも遅れれば、その1人が邪魔になり、またそれが別の渋滞を生み……と、大混乱に陥る。

混乱状況に陥っただけで、逃げる事も出来ぬまま彼らは火の津波に飲み込まれ……。

「……あれ？」

ほむらなみ

焰波は、火拳を薄く伸ばし、幅と高さを大幅に拡大させたものだ。

では、何故それをエースはアスラ相手に使わなかったのか？

理由は困惑しているBWの面々が示している。……弱いのだ、致命的なまでに威力が。これがマグマならば質量がある。マグマに飲み込まれば、例え厚みが薄かろうが命を落とす事は確定だが、火は違う。よほどの高熱でない限り、一瞬で通り過ぎた火では火傷すら満足に負わせる事は出来ない。

火の上でさつと手を横に振ってみれば、分かるだろう。

要は、見た目だけのコケオドシなのだ、この技。強者相手では使うだけ無駄だ。

だが、雑魚の集団相手ならば絶大な威力がある。相手を倒すとかではなく、相手の陣形やら各人の心を混乱させるという意味合いで、だが。

そして、混乱した所で間が空いた。

その間に集中したエースは、恥ずかしさを誤魔化す意味合いも籠め、怒って襲い掛かってくる相手を巻き込みながら……。

「火災旋風！」

上昇気流をも利用して、炎の竜巻を生み出す。今度は見かけだけではなく、巻き込まれた相手は燃やされながら、上空へと舞い上げられ、風を巻き込んだ事で高熱となった火に焙られ焼かれてゆく。何とか竜巻から放り出されても、全身こんがり焼かれて命に関わる重傷を負い、戦闘不能だ。

目の前にそんな仲間が落ちてきた事もあり、完全にBWの前への足は止まった。

「さて、後はあいつらに任せるか」

前方を炎の竜巻で塞ぎながら、エースは面白そうに呟いた。

そもそも今回の件を悟った時点で、エース達は1つの決定を行なっていた。それは、たしぎの成長だ。

彼女には自信がない。

なまじ周囲にいる連中が最初から強かっただけに、自分自身の力に全く自信が持てず、結果的にそれが余計に強くなる事を妨げている。

ブルックはラブーンが狙われた事で怒っているから、こちらは止めるだけ無駄だ。

だが、他の者は足止めとサポートに徹し、たしぎに経験を積ませる事で一致したのだった。

「ヨホホホ！ラブーンを食べようだなんておバカさん達ですね！許しませんよー！」

「「ぎゃあああああああ!?!?!」」

ブルックの方は存分に暴れまわっていた。

元よりブルックは元・3300万の賞金首。東の海での最高額すら上回る賞金首だ。そんな相手と真つ向遣り合えるだけの實力があれば、こんな所で群れていない。

連続して放たれる突きによって、次々と戦闘不能に追い込まれてゆく。

「はあ!」

「むむっ?」

そんな中、両手に金属バットを携え、王冠を被った男が立ち上がった。その傍らにはシスター服をまとった大柄な女性が立つ。

「ヨホホホ、どなたですかな?」

「俺の名はMr・9!」

「ミス・ウエンスデーだ」

名乗りを上げると同時にシスターはばさりと服を脱ぎ捨てる。その下には……。

「ヨホホホ、失礼ですが、余り似合っておられないようで……」

声はいい。だが、筋骨隆々とした体にワンピースというのは実に似合っていない。



げんなりとした表情を顔が残っていればブルックも浮かべていたかもしれない。彼女は原作ではミス・マンデーと呼ばれていたが、カリファの存在により1つ下のこの地位にいた。

「言っている！熱血ナイン・根性バット！」

優れた体術で連続して行なわれたバク転で加速をつけ、バットを叩きつける。

が、ブルックはそれをするりとかわす。さすがに細身の剣でそんなものを真つ向受け止める気にはなれない。如何にブルックが護衛戦団の団長だった頃から愛用している名剣とはいえ、歪みが発生でもしたら面倒だ。こんなものを真つ向受け止められるとしたら、剣や刀としては黒刀ぐらいのものだろう。

くるり、と回転するように回避して距離を取るブルックに対して、Mr.9はニヤリと笑うと……。

「かつ飛ばせ！仕込みバット！」

向けたバットの先が発射され、ブルックに巻き付いた。そこへ駆け寄ったミス・ウェンズデーが拳を振り上げ……。

「カ・イ・リ・キ！メリケン！」

その頭蓋骨を粉碎すべく殴りつけた。

「「なっ!?!」」

土煙が上がり、念の為に素早く距離を取った2人の前に見えた光景は……。

「ヨホホホ、いや、危ない危ない」

絡んだ鎖がしっかりと絡みつくにはある程度の柔らかさが必要だ。肉があつてこそ、こうしたものは絡む。分かりやすく言えば、ウレタンの棒と金属の棒ではどちらが絡みつかせやすいか、という問題であり、ブルツクの骨だけの体は存外に絡ませにくい。少なくとも腕を抜くぐらいは容易い。

そうやって抜いた片腕で、ブルツクは頭蓋骨を首の骨から外して持ち上げていた。当然、頭蓋骨があつた部分を狙つた一撃は見事にハズレ、地面を激しく叩いただけだつた。

ブルツクからすれば、頭蓋骨を砕かれるのは困る。アフロはもう生えてこないし、そもそも頭の中には仲間との最後の演奏を納めたダイアルも入っている。

よいしょ、と声を上げて頭をネジをはめ込むように、再び取り付ける。

慌てて武器を構え直す2人を前に、ブルツクはくるくるとステッキを回しながら、歩き出す。

「鼻唄三丁……」

次の瞬間、ブルツクの姿が消えた。

はつとしたMr.9とミス・ウェンズデー。だが、2人が何かの反応を起こす前に。

「矢筈斬り！」

そんな声が響き、2人の体に斬撃痕が生じた。

血飛沫を上げて倒れる両者の背後には、何時の間にか移動していたブルツクが静かに鞘に剣を納めていた。



第157話・ウイスキーピーク（前編）（後書き）

まずはブルック

基本、エースにサボ、ゾロにサンジは余り攻撃行動に出ません

怒ってるが故に止めようのないブルック以外は、たしぎに片付けさせるつもりでサポートに回っています

次回は後方から、たしぎを主役にお送りします

第158話・ウイスキーピーク（後編）（前書き）

なんか壊れた……

## 第158話・ウイスキーピーク（後編）

「はあ……はあ……」

たしぎは荒い息を整えた。

何人を斬っただろう？

人を斬る感触は初めの頃は吐いた。

人を斬り吐き、臓物をぶちまけた死体に吐き、恐怖や絶望、怒りを浮かべたまま事切れた顔を見て、また吐いた。誰もが通る道だと、エースもサボもゾロも見ても振りをしてくれた。

何時頃からだっただろう？それに吐かなくなったのは。

人を斬る感触に慣れる事だけはしたくなかったが、ふと気付いた時、慄然としたのは何時だっただろう？

だが、この道を選んだのは自分自身。

悪党の手に渡った名刀を再び表の世界へと取り戻す、そんな夢を抱いたけれど、今、愛刀として使っているそれらを「はい、そうですか」と渡してくれるような相手がいるだろうか？そんな訳がない。戦って取り戻すしか道はなく、そこには当然命の遣り取りがある。

などと、それらしく書いてはみたが、今息を切らせているのはそれらとは全く別の事。

ただ単に、多数を相手にして体力切れを起こしかけているだけの事だ。

これでも大分マシだ。

彼女の周囲には少し距離を置いてとはいえ、サボがゾロが、サンジがついてくれている。

たしぎは頑張ってはいるが、それでも原作のゾロのような無双が出来ている訳ではない。前方ではブルックが大暴れしているが、あ

んな事もまだ、今の彼女には出来ない。

仕留めたつもりが仕留め損ねていて奇襲を受けかけた事だってあるし、奇襲というならそれこそ路地から襲撃をかけてきたり、大量の銃撃を浴びせてきたり、或いは子供を庇う振りをして哀れっぽく涙まで流して見せつつ、『神のご加護目潰し！』と十字架から目潰しを吹き付けてきた相手までいる。

その度にフォローを受けてきた。

自信をつけるはずが、自信を失いつつあるような気がしてしまう。

(駄目だ、こんな事を考えていたら！)

頭を軽く振って、戦いに集中する。

前から殴りかかってきた男の脇をすり抜けざまにその脇腹を刀でなぞる。

悲鳴をあげて、倒れるが、その時点で既に次の相手が立ちはだかっ  
つていて、男にトドメを刺す余裕なんてない。

倒せばまた、その次が……。

感覚が麻痺するような中、次第に機械のように体はそれでも動き  
…… たしぎが、朦朧と仕掛けた時それは起きた。

受け止められた刃。

その音。

そして輝き。

それが、たしぎの意識を引っ張り上げた。

「よくもやってくれたな！だが、このMr. 11が……！」

目の前の男が喚いているが、そんな事はどうでもいい。

パートナーとなる女がいたようだが、そちらはゾロが片付け……

フェミニストのサンジと揉めているようだが、それもどうでもいい。

目の前の輝き。

その刃紋。

それは紛れもなく……！

「それは……良業物【花州】！」

「は？」

思わずMr・11は気の抜けた声を上げた。

……確かに、自分の愛刀はその通りだ。

以前に、とある海賊を倒した際に手に入れた刀。実力と釣り合っていないという陰口があるのも知っている。

だが、手に入れた以上は俺のものだ……。

「力が足りないなら、鍛えればいい。諦めなければ、生き続ける限り、可能性は残る」

そう思っただけで頑張ってきた。そのお陰か順調に数字も減り、11という数字を手に入れた訳だが……この女は一体何を言ってるんだ？ というか、何か目が怪しい……。

それがMr・11の最期の記憶だった。

その光景を見ていたサボもゾロもサンジも引いていた。

たしぎを弁護するならば、疲労やらで朦朧としていた部分もあったらう。

だが、名刀を見るなり、生気を取り戻して、相手を瞬殺するといふのは如何なものだろうか？

刀を奪って、鞘に納めた後頬擦りするというのは如何なものだろうか……。



後に、たしぎにそれとなくこの時の事を聞いてみたが、彼女は全く覚えていなかった。

何故、自分の傍に良業物があるのか、それもまた覚えていなかった。

それを知った時、一同の心は一致した。

(なかつた事にしよう)

当人として自分がそんな事をしたとは信じたくなかろうし、知りたくもないだろう。

ウイスキーピークでは疲労の限界に達した彼女は倒れ、その刀はゾロ達が拾ってきたという事にしたのだった。無論、彼女は落ち込んだが、この事件は完全な黒歴史として一同の間では封印される事になった。

尚、この後、たしぎは倒れたと聞いて、それが悔しかったのだらう。

嘆くより何より鍛錬に励む事になる。

ただ、その彼女へ向けられる視線はどこか生暖かいものだったぞうだ。

追伸ながら……ウイスキーピーク壊滅の一報を受けたクロコダイルは……。

「壊滅？どこぞの海賊にでもやられたか？」

「違うみたいね……訪れた賞金稼ぎのペットの鯨を食料として狙った拳句、怒った相手に返り討ちにされた、とあるわ」

「……金にもならん事に手出しやがって。俺は忙しいんだ、そんな事をいちいち言いに来るな」

海軍本部中将アスラとの激烈な暗闘と駆け引きを繰り広げているクロコダイルはこの一件を完全に無視した。

事実、ウイスキーピークの中途半端な連中は所詮、兵隊に過ぎない。

指揮官がやられたならばまた話は別だが、あの島にいるぐらいの兵隊連中ならば、幾らでも替えが効く。そう判断し、重要度の低い書類としてそれは回され……そのままアンラッキーズによって描かれたエース達の似顔絵もクロコダイルが目を通す事なく処分される事になるのだった。

第158話・ウイスキーピーク（後編）（後書き）

えーまず謝っておきます、すみません！

前編がブルツク無双で格好良かったのに、何だか後編がギャグっぽい話になってしまいました

途中詰まったと思うてたら、気付けばこんなのに仕上がってたんですよ……

うん、疲れてるんだな、寝よう

## 第159話・その頃のアスラの日々

アスラは、最近連日奮闘が続いていた。

クロコダイルの謀略戦だけでも忙しいというのに、そこに世界政府からの命令まで加わってくると「煩い、黙ってる！」と怒鳴りたくなってくる。

世界政府からすれば、自分達の面子を潰された以上、早々に殺害犯を処刑なり最低でも裁判にかけねば気がすまない。

ところが、アラバスタ王国は引き渡さない、いや、引き渡せない。向こうの状況に関しては、『何者かが煽っている節がある』事（まだクロコダイルという確たる証拠がない為）や、『アラバスタ王国としても国民が興奮状態になっている為に動くに動けないのでしばらくこちらが冷静になる必要がある』だの報告を上げていたというのに、馬鹿はどこにでもいる、というかのように『もしや、アラバスタ王国が世界政府から離脱する事を考えているのではないのか？』『実は例の軍人の背後にアラバスタ王国政府がいるのではないのか？』だから、引き渡さないのではないのか？』などと言い出す者がいる始末だ。

尚、その出所が、王下七武海との折衝なども行なう外交部であった事を知り、本気でクロコダイルの所に殴りこんで叩き殺したくなってきたアスラだった。

「……………なのに、この情勢下で余計な仕事を増やしやがって……………」

日々、言葉遣いが荒くなってきているのを自分でも理解しているアスラだった。

エース達と別れ、休暇を終えて戻ってきてみれば、この騒動に巻き込まれた。

一瞬、『原作までまだ2年弱あるのに、もう本格的に動き出した

のか!？」と思っただが、よくよく考えれば、既に原作の展開など遙か彼方に全力全開で投げ捨てている状況だ。  
何が起きるかなど分かったものではない。

(原作介入を続けた結果が、原作展開の崩壊と原作知識の価値の大幅減衰か)

分かっていた事を改めて意識した上で、頭を1つ振って、アスラは現実に向かい合った。

CP9のフル稼働含めた活動の結果として、アラバスタ王国では現在、様々な噂が乱れ飛んでいる。

規模と装備に勝るCPサイファーボールとはいえ、アラバスタ王国にいわば特化したBW相手では、ことアラバスタ王国内においては優勢は早々簡単に奪取出来ない。

一旦形成された噂はなかなかしぶとく、未だ世界政府の役人を殺した軍人を英雄と看做す空気は燻り続けたままだ。

とにかく、この噂を消さない事には国民に真実を伝えても、意味はないし、コブラ王としても引渡しだの何だの言っけいられる状況ではないだろう、というのに……。

「……それなのに外交団の派遣だと……?」

しかも、極秘訪問のはずが、すっかりアラバスタ王国流通の新聞に訪問予定や、推測内容として英雄(仮)の引渡し要求の為という訪問目的まですっぱ抜かれていた。おまけにこれらが全て事実だから余計に厄介だ。

アスラはこれらのリークもクロコダイルが関わっていると確信している。どうせ、ルートを探った所で時間と手間がかかるだけでまともな証拠など掴めると思っけはいないから大雑把な確認だけして、細かな追跡調査などしていないのだが。

「しかも、連絡がこちらには全然来ていない」

外交官という任においては、アスラもその任にあるのは確かだ。ただ、アスラは比較的穏健な立場の外交官と見られている。

加えて、コブラ王とはプライベートでは友人だと一般には思われている。

仕事とはまたそれは別のはずではあるが、一応、今回のような場合によってはアラバスタ王国に強引に引渡しを求める事になるような案件からは外しておこうと考えたのは分かる。だが……。

「……下手をしなくても、火薬庫で火遊びするようなものだぞ」

しかも、下手に政府が隠していたせいでこちらにまで連絡が遅れた。

しかも、最終的には隠蔽に失敗している。中途半端に成功した隠蔽など却って害悪でしかない。

何とか無事に終わってくれ、そういう願いも虚しかった。

結果から言おう。

世界政府の外交団はアラバスタ王国上陸後間もなく、洩れていた情報を元に集まった国民達に道を阻まれた。

今回海軍は動いていなかった代わりに、世界政府の護衛達がついていたが……彼らはそれを強引に突破しようとした。

彼らがそのような行動を取った理由の1つには外交団がアラバスタ王国の住人に対して、余りいい思いを抱いていなかったという事もある。

とはいえ、そんな事をすればアラバスタ王国の国民も反発する。激しく揉み合う混乱を嫌い、大使が少し下がって様子を見る事に

して、いざ下がった時　銃声が響いた。

後にアスラの下へ不確定ながら、と届いた報告によれば、大使が胸を押さえた後で銃声が聞こえたような気がした、という大使の斜め後ろから見ていた護衛の証言があった。

もし、それが真実だとすれば、国民の誰かが闇雲に撃った流れ弾ではなく、間違いなく狙撃だ。

だが、証言はその一人からのみ。他の面々は周囲の警戒と揉み合う仲間と一般人に意識が向いていた。加えて、当人も『気のせいかもしれないが』という、おまけつき。これでは証拠になりようもない。

これが元で武器を抜いた護衛団はこれ以上外交団からは被害を出してはならないと発砲した。

当然反撃が集団側からも行なわれる。

銃撃戦になり、更に駆けつけたアラバスタ王国正規軍に対しても護衛団は攻撃を加え、やむなく正規軍側も反撃。

護衛団も含めた外交団にも、アラバスタ王国の一般人にも多数の犠牲者が出た。もちろん、外交団はコブラ王と面談など不可能なまま外交船に撤退、そのままアラバスタ王国より離脱した。

その報告が届いた瞬間、アスラは机を殴り壊した。

非常に珍しい、というか初めて見る光景に報告に来たジャブラでさえ目を丸くしていた。

……後でアスラが机を叩き壊したという事を聞いたスモーカーも驚いていたが、さすがに機密に関わると察したか、いや、それは元帥や大将もそうであったが、敢えて聞く者はいなかった。

ただし、余人に話せない内容がアスラの職務には多いだけに、溜め込む事も多かろうと彼らなりに気をつかい、大将や中將らが中心となって、体を動かすのに付き合ってくれたのには感謝すべきだろ

う。

まあ、青キジ大将の作った巨大な氷山が1度ならず崩壊するよう  
な大規模な鍛錬は海軍でもしばらく話題となる程だったのだが……。  
ただ、お陰でアスラの気分転換にはなったようだったが……。アラ  
バスタ王国と世界政府の関係は戦争にこそなっていないものの、一  
気に緊張状態を孕んだものとなった事だけは確かだった。

そんなある日の事。

アスラに聖地マリージョアへの出頭命令が下る。

呼び出した者達の呼び名を【五老星】といった。



第159話・その頃のアスラの日々（後書き）

ギャグの翌日がいきなり重い展開の話になりました

次回は聖地マリージョアにて最高権力者との面談になります

第160話・五老星（前書き）

本日も裏社会的な黒いお話ですW

## 第160話・五老星

世界政府の頂点。

【五老星】。

彼らの前に立つアスラはけれど、全く緊張していなかった。前世でならば、それこそいきなりサミットの真っ只中に放り込まれたような気持ちが味わえただろうが、アスラも出世してそれなりに長い。さすがに緊張するような時代は当の昔の通り過ぎていた。

「さて、お前さんと呼んだのは他でもない」

「今、アラバスタ王国で起きている事は知っているな？」

「その事に関して、お前がCPを動かして何かをしているのは知っている」

「現状、この状況が長く続くのは好ましい事ではない」

「故に、お前が知っている事を話せ。現時点では証拠がない事でも構わん」

口々に告げる五老星。

アスラが想定していたより、遥かにマシな言葉だった。

「了解しました。現在、私が黒幕とみなしているのは……」

この際だ、率直に全て言ってしまうおう。アスラはそう決めた。

世界政府のトップである彼らとは、例え海軍本部中將にしてCP長官であるアスラであっても気軽に会える相手ではない。ならば、

この機会に言うべき事を言っておいた方が例え結果として担当から外されたとしても、「言っておけば良かった」と後悔するよりはマシだ。

「……というのが現時点での形になります」

話そのものは長いものになった。

まず、現在一番怪しいと思われる組織と、その黒幕と思われる存在が誰なのか、から始まり、何故その組織が怪しいと思ったのか、や、では、それに対してこれまでどのような捜査を行なってきたのか、その結果どのような反応や結果が起きたのか、まで詳細に語ったからだ。

とはいえ、五老星もそこは世界を統べるトップ達だ。

いずれもが真剣に時折質問を加えつつ、最後まで聞いていた。

アスラが話し終えた後、しばらく全員が沈黙していた。

出されたお茶で喉を潤しているアスラはともかくとして、五老星も考えをまとめているのだろう。

しばしして、1人が口を開いた。

「まさか、最有力の黒幕候補が王下七武海とはな」

とはいえ、その声に驚きはない。

世界政府配下となったとはいえ、彼らは所詮、海賊だ。海軍とは根本的にその根っこが異なる。

「クロコダイルか、面倒な奴が動いているものだ」

また別の1人が苦々しい口調で呟く。

とはいえ、このまま放置しておく訳にもいかない。

今回の一件で通常的外交官を送り込むのは困難になった。とはいえ、アラバスタ王国とこのまま戦争状態に突入という訳にもいかない。戦争に突入するにせよ、回避するにせよ国のトップと話をする必要はある。世界政府所属とはいえ一応建前としては、国と世界政府に上下はない。

きちんと外交官を派遣してこちらの要求を相手に伝えなくてはならない。

一方的に相手に通達して、むしろ、では相手を格下に見ています、と宣言しているようなものだし、目的は達成出来ても後々のトラブルの種を蒔いている以外の何物でもない。

もちろん、相手の国もそんな事を言われて、へこへここと従っていたらそれこそ恥だ。

双方の面子を立てる為にも正式な外交官を送る必要がある……ただ、今の情勢となると自らを守るだけの力が必須となる。

「故に次はアスラ中将、君が行け」

「了解しました」

元より自分が行くべきだと判断していた事。

下手に誰かを派遣して、今回の二の舞になつたり、後で失敗に終わった結果を知らされるよりはマシだ、とアスラは割り切っていた。最終的に当面の対応はアスラに任せられる事を伝えられ、アスラは退室した。

……もつとも、アスラは五老星がただ好意でそんな事を許可してくれた、とは微塵も思わなかったが。

「……どう思う？」

「さて、上手く行けば良いが、最悪の場合も考えておかねばな」

アスラの退室後、五老星は再び協議を始めた。

最悪のケース、それはクロコダイルが王国の乗っ取りに成功した場合の対処だ。

本来、人質を取ろうが海賊の国家樹立は認められない。それを1つ認めてしまえば、後は收拾がつかなくなる。国の事業として海賊を認めるなどと称されては面倒だ。

だからこそ、嘗てロブ・ルッチが人質500名ごと海賊を殲滅しても世界政府は沈黙を守った訳だから……。

「最悪が現実になった場合、どうする。以前と同じく全てを抹殺するか？」

「それは良くない。以前とは状況が違う。それを口実にして、反抗的な国を滅ぼしたと思われるやもしれん」

以前は海賊が人質を取った上で、自分達を国と認めろという主張だった。

今回は既にある国の頭を挿げ替えようという話だ。

「確か、アラバスタ王国には歴史の本文ポネグリフがあるとされていたな？」

「ああ。……クロコダイルにそれまで握られては面倒だ」

故に……。

「クロコダイルが成功した場合は、古代兵器もしくはそれと疑われる歴史の本文と引き換えに奴の乗っ取りを認めよう」

「そうだな、その場合はCPには全力でそのカバーを命じよう。その時には、必要ならアラバスタ王国の王族の生き残りを処理する必要も出てくるだろう」

「奴が素直に従うか？」

友人の子を、小さい頃より見知っている子供を消す命令が下せるか？

自身も幼い子供を持つ身で。

「大丈夫だろう。奴の正義は【最大多数の最大幸福】……だからこそ、四皇とも必要ならば見逃すが……逆に言えば」

「必要なら、手を汚す覚悟もある、という事か。そう判断しているのならば構うまい」

「よろしい、では次の議題だが……」

第160話・五老星（後書き）

アスラの正義の表と裏の顔です

その方が幸せになれる人が多いから、四皇たるシャンクスとも笑って友情を交わすのなら、その方が幸せになれる人が多いなら、必要ならビビでも手にかける

それが覚悟と言いますか……



## 第161話 - 虎穴

五老星の元を辞して、マリージョアの通りを歩く。

同じマリージョアではあるが、天竜人の住む区画とはきちんと分けられている為、出会う事はない。妙なトラブルを避けたいのはどこも同じだ。

天竜人には、一般人のエリアとは区別しているといえ、それで済む。もちろん、逆の見方をしてみれば、天竜人をこそ隔離していると見えなくもないのだが……。

メルクリウス号が見えてきた所で、アスラは「ふう」と溜息をついた。

アスラにも分かっている。

自分に任せたのは別に五老星の優しさなのではない、と……。ただ単に、下手にこれ以上情報が周囲に洩れる危険性を減らしたかったのだらう。

クロコダイルが背後にいる、となるとそれなりの力量を持つ実力者が必要になってくる。

その上で、最悪はクロコダイルが出てくるといふ事を教えておかなければならない。味方面して出てきて、背中を向けてたら全滅させられました、など論外だからだ。

だが、知る人間が増えれば増える程、秘密は洩れやすくなる。

それならば、ちょうど一番事情を知っている人間が担当可能な役職を持っている事もあり、この事件に関しては任せてみようという判断になったのも分からないでもない。

無論、それだけではないだらうが……。

(ロビンの事は言えずじまいだったな)

最大の理由は証拠不足だ。

クロコダイルが関わっている事さえ表立っては言えた話ではない。ましてや、ロビンの場合、表どころか裏にさえ全く出てこない。せめて、クロコダイルのカジノの奥深くに諜報員を送り込む事が出来れば、彼女がいるかどうかの確認も取れるのだから……さすがに本拠地だけある、というべきか、試みた者で生きて出てきた者は未だ1人もいない。

まあ、それはCP本部も同じ事なのだが。

せめて、ニコ・ロビンがいる、と断言出来れば、五老星の危険に対する認識も大幅に上昇していたのだろうが……。

さすがに「いるかもしれませんが」の状況では言えない。原作とは既に大幅乖離している現状、果たして原作通りなのかも不明だし。そんな事を考えている間に、船に到着した。

「出航だ。目的地はアラバスタ王国！」

アラバスタ王国にとって、世界政府関係の船というのは最近では悪い意味での注目的だ。

実の所、王国の国民で本当に騒いでいるのは極一部に過ぎない。

正規軍の軍人達は国王の下にあり、むしろ騒ぎ立てる人間に苦々しい思いを抱えている。

国民の大部分にとっては、騒ぎ立てるより日常生活の方が大事だ。無論、だからといって世界政府の船を歓迎しているという訳ではないが、わざわざ妨害までしようとはしない。

問題は、極一部だ。

大声で喚くその一部こそが、騒動の主因であり、目立つが故にアラバスタ王国と世界政府との間の混乱を発生させていた。

これがBWの仕込みというならば、アスラは当に片をつけていた

のだが、最初こそ扇動を行い、資金提供なりを行なっていたのだらうが……それは最初だけだった。今では彼らは勝手に集まり、勝手に動いている。その動きを制御しようという事をクロコダイルは行なっていない。する必要がない。

そして、今日もまた、世界政府の旗を掲げる船が到着した。

多数の市民からすれば、旗をあげるのを止めてくれれば目立たないし、静かになるだろうにとも思うのだが、世界政府からすればそれは出来ない相談だ。そんな事をすれば、世界政府が屈したと見られかねない。

かくして、船は常に堂々と旗を上げ、結果的にまた騒動が起きるのだった。この日まで。

「来たぞ！世界政府の船だ！」

その日入港したのは豪華客船を思わせる船だった。

自衛の為だろうか、目立たぬよう幾門かの大砲が取り付けられてはいるが、どちらかと言えば見栄えと居住性を重視した船だ。逆に言えば、それなりの立場の人間が乗船するという事でもある。

加えて上げられた旗は世界政府の外交船である事を示していた。

「またきやがったのか！」

「懲りない奴らだな！」

口々に喚く彼らだが、その身なりは整っている。

当然だろう、彼らはそれなりに裕福な家の出ばかりだ。

だからこそ、こうして港を見張り、寄港した船が世界政府の船なら何時でも集まれるだけの時間的余裕がある。

それぞれが武器なりを隠し持って、待ち構えていた訳だが……。

「え……」

誰かが呆然と呟いた。

船の降り口で待ち構えていた集団の前に、だが微塵の動揺も見せずに降りてきた人間は海軍軍人。それも、海軍本部中将の階級章を持つ人物だった。アスラである。

更に、続いて海軍准将スモーカーに多数の海兵が整然と降りてくる。

所詮は暴徒といえど、普通の市民だ。

武装した軍人に喧嘩を売る程、命を捨てられない。

呆然としたままふと船を見れば、偽装されていた武装が全て顔を出していた。

飾り板などで巧妙に隠されていた武装が露になった、その姿は紛れもなく海軍の軍艦、それも中将座乗の戦艦の姿だった。

「ではスモーカー。留守は任せた」

「了解した」

そう告げると、アスラは一步を踏み出す。

その一步に反応するかのように、道を塞ぐ群集が一步下がり……無意識の内に遠ざかるうとするのか道が出来る。一步、また一步と歩むごとに、群集が割れ、そこに道が出来る。その足取りは全く躊躇がない。

敬礼で見送る海兵らかの視線を遮る事なく、群集を真っ二つに切り裂いて、アスラは王宮へ向け歩み去った。

この日。

世界政府の船が寄港したにも関わらず、騒動が起きなかった事に港近辺の住人は安堵した。

ようやく、落ち着いた日々が戻ってくるのか、と……。

当初こそ愛国心が燃え立っていても、話し合いに来た世界政府の外交官が射殺された、といった記事が表に出てくれば、次第に引け目も感じるようになる。

ここにC Pからの情報操作も加われれば尚更だ。

C Pの情報操作は別に、アラバスタ王国の軍人が悪いというものではない。

初期こそそれもあったかもしれないが、次第に国民に冷静になるよう呼びかけるような内容へと変化していた。なまじ煽るような意見が反乱していただけに、国民は少し落ち着いて、『まあ、きちんと話し合えば……』という空気が醸成されていた。

このまま状況が落ち着けば、クロコダイルには都合が悪い筈だ。

けれど、クロコダイルは……この時点では不気味に沈黙を保っているのだった。

（さて、今回のこちらの行動で、奴がどんなリアクションを返してくるか……）

最悪、面談の最中に国王暗殺を仕掛けてくる可能性も視野に、アスラは王宮へと歩を進めた。

第161話 - 虎穴（後書き）

虎穴に入らずんば虎子を得ず

さすがに整然と整列する軍人相手に喧嘩売る程にはイカレテませんでした

群集とありますが、精々数十人程度のデモ隊規模だとお考え下さい

## 第162話・虎子を得れども

(……結局、何も手出ししてこなかったな)

顔はにこやかに。

けれど、腹の内ではいぶかしむ声と疑念で顔を歪めながら、アスラはコブラ王と握手した。

此度の会談で、アスラはクロコダイルが何らかの手を打ってくる  
と判断していた。

王が引いて会談を為し、その上で暗殺されたらどうなるか？

……世界政府への疑念は一気に膨れ上がるだろう。海軍への怒りも絶大なものとなっていたはずだ。真実がどうかは関係がない。一気にアラバスタ王国において燎原の如く燃え広がっていた筈だ。

無論、それは王国側も理解していた。

だが、今回の会談ではクロコダイルは何も仕掛けてこなかったのだ。

(……原作知識が役に立たない。それだけでこつも見えないとは、な)

原作知識とはすなわち確定した未来の話だ。

だが、原作から乖離した今、この世界は完全な『ONE PIECE』の平行ワールドと化している。その世界に措いては当然流れる歴史、未来の流れは全く異なったものになる。  
見えない道を歩いてゆく。

その不安さに、アスラは内心で深い溜息をついた。

クロコダイルが動かなかった事に疑念を持った者は他にもいた。それもクロコダイルの至近に、だ。

「意外だったわ」

「何がだ？」

応接セットのソファにどっかりとふんぞり返るクロコダイルの前で、ロビンが珈琲を淹れていた。

自身のカップにも注ぎ、改めてクロコダイルに向き直る。

「今回の訪問で王と2人きりの所に襲撃を掛けるかと思っていたの」

不可能な話ではない。

王宮にもクロコダイルの手駒はいる。深く潜り込んでいる者や買収した者、弱みを握った者など様々だが、彼らを総動員すれば海軍本部中将との会談の最中に暗殺という手も可能だったはずだ。

「そいつは下策だ」

やるならば、暗殺でなくてはならない。

それも王宮の人間の誰かがやったのだと分からないような。

理想はそれこそ、2人きりの面談の最中に国王が殺される事だが……その為には必須の事が1つある。……下手人が捕まらない事だ。

「犯人が捕まったら意味がない。何しろ、世界政府とはまるで関係のない人間が捕まるんだからな」



情報操作で操るにせよ、そこには真実がなければならぬ。

真実のない情報を人は敏感に感じ取る。

そして、一度疑われた情報源の信頼はなかなか取り戻せない。

「毒を使うか？無理だな、面と向かい合ってる状況、しかも片方は海軍本部中将って状況で殺す気なら何故、直接手を下さない？」

「……………」

沈黙するロビンの前で、クロコダイルは謳うように呟く。

「狙撃？王宮内部奥深くでどうやって？外に出てから？いいやあ、それじゃあ世界政府が殺したって印象が薄くなりすぎる」

かといって、暗殺者を送り込んだ所でアスラがいる状況下で成功するかどうか、万が一いや兆が一成功した所で犯人が逃げられる程、アスラ中将が甘い人間だと樂觀出来る程、クロコダイルは相手を甘く見てはいない。

理想で言えば、殺されている国王、凶器は目の前の世界政府の役人の手中に、役人は狼狽し、自分ではない、別の奴が飛び込んで来てと主張し、これはそいつが落とした物を拾っただけだと主張……そんな光景だ。

だが、アスラ中将相手ではどうしてもその光景が見えてこない。

10人近くの腕利きを使い捨てにした所で、無傷のコブラ王とアスラ中将両者に、生きたまま捕えられた暗殺者達という、そんな光景と似たり寄つたりの結果しか計画を何度頭でシミュレートしてみても思い浮かばないのだ。

やる前から成功を確信出来ないような計画に賭けねばならない程、こちらが追い詰められている訳でもない。

「そう、貴方がそう判断しているのならいいわ」

そう言うと、ロビンは焦った様子もなく、珈琲を口に運んだ。

その様子を視界に納めながら、クロコダイルは考える。

そう、焦る事はない。

既に、今回の事件で種は蒔かれた。

1度燻った炎は容易に消えはしない。今回の案件を上手く納めた所で、それは表面上だけだ。

(今の内に精々安心している)

クロコダイル自身も珈琲の香を楽しみながら、視線を卓上の新聞に目をやる。

そこには、今回の事件に関する決着が書かれていた。

『裁判の開催決定！裁判は世界政府派遣の司法官が行なうも、裁判の様子はアラバスタ王国国民に完全公開の中行なわれる模様』

第162話・虎子を得れども（後書き）

焦らないクロコダイル

警戒を強めるアスラ

双方の精神というよりは攻める側と守る側の立場の違い、というのが大きい感じでしょうか

予想がつかないからこそ面白い、とアスラも自分の事なら思うのですが……

守らないといけない、となるとまた感想も違ってくるのですよね

## 第163話 - 実験終了

公開裁判自体は粛々と進んだ。

野次を飛ばす者は存在しなかった。

もちろん、事前に野次を飛ばす者などの実力をもつての排除や、不満がある場合の抗議申し立ての場所などがきちんと設けられていたからでもあるし、海軍とアラバスタ王国正規軍双方が裁判の行なわれる場所を厳重に警備していたからでもある。

法廷の左右にそれぞれ両軍が武器を構えて整然と立っている中で、騒ぐ馬鹿もいなかった。

「……意外だったな。抗議は殆どなしか」

アスラからすれば、訳の分からない抗議が殺到するものだと思っていた。

この辺りはもう、薄ぼんやりとしか思い出せない前の世界の記憶が作用しているのかもしれない。抗議の為の抗議、難癖をつけての強請りなどが脳裏にあったのだろう。

だが、この世界はそこまでまだいつてなかったらしい。

数少ない文章にしても、きちんと納得がいかない部分に関する指摘が為されており、これらが教養の高い人物らから法というものを理解した上で為された指摘だという事を示していた。

（騒ぐだけの連中では、気圧されてまともな文章など書けなかったという事か）

抗議文はただ文句を書き連ねればいいというものではない。

書き上げた上で、ちゃんと専門の法務官がそれを確認して、疑問点やおかしな点についてその場で答えられるものであれば受け答え

し、或いは指摘する。

時間はかかっても、やれ。

それが今回の命令であり、彼らはそれを忠実に行った結果、やたらと騒ぐだけの連中の書いた文章は簡単に論破され、しどろもどろになってすくすく帰っていく様をアスラも1度ならず目撃している。

今回の法廷においては軍人側の主張を聞いた上で、最終的には純粹な殺人事件としての面と賠償面から裁判を行なう事になっている。最終的な落とし所としては、酒に酔った役人が酒場の女性に絡んでいたのを、軍人が間に割って入り突き飛ばした結果、酒に酔っていた相手が踏ん張れず頭部を打って死亡した、という所に落とし込む事になっている。

所謂、過失致死、という奴だ。

これで最終的には純粹な事故の結果の殺人事件として、ある程度の懲役刑（アラバスタ王国内の監獄に収監）と遺族への賠償金という形で決着する事で合意している。世界政府としても、これ以上1人の役人の為に延々と騒動に巻き込まれたくはなかったからだ。

外交官？

そちらは今回の事件とは全く関わりのない話だ。

むしろ、狙撃の可能性が高いとして、アラバスタ王国でも捜査が続いている。国内に正体不明の狙撃手がいるなんて、ぞつとした話ではないからだ。

「よう」

そんな事をつらつらと考えている内に、アスラの傍に歩み寄ってきた相手から声を掛けられた。

当に気付いていたアスラとしては驚く事なく、にこやかに対応する。

……何しろ、ここでは周囲の目がある。アスラも警備の最高責任

者である以上は、彼のような海軍本部中將という世界でも有数の戦力として目立つ事も警備の一環だからだ。

「やあ、久しぶりだな、サー・クロコダイル」

そう、近づいてきたのはクロコダイルだった。

見た目は実に暑苦しそうな黒い服だ。

とはいえ、スナスナの実の能力者である彼はまるで平気なのだろうが…… 見てるこちらの方が暑くなってきそうだ。

とりあえず、人目につかない位置へと移動する。

「それで何をしにきた」

「くつくつく、ご挨拶だな」

「今更お前と仲良く握手という間柄ではないだろう。パフォーマンスでもない限りな」

「違うない」

双方とも警戒はしているが、戦闘態勢には入っていない。

分かっているからだ、今の互いの立場を考えればここで戦闘をやらかす事が双方にとってどれだけ不利益をもたらすものかは。

海軍本部中將と王下七武海。

双方、元々の立場を考えれば親友などと呼べるような間柄ではないのは誰だって分かるが、それでも世界を安定させる勢力を形成する一角として、今この場で争う訳いんはいかない。まあ、クロコダイル辺りは別の思惑もあるのだろうが……。

「改めて聞こう。……何をしにきた」

最悪、上記の理由から戦闘をやらかす事が非常によろしくない話であったとしても、それでもやらねばならないかもしれない。

そんな思いを込めて、アスラは告げる。

もし、この裁判を混乱させる気ならば……いや、既に仕込みを入れているのかもしれない。ただ、騒ぐだけの連中ならば強制排除するよう命じてはあるのだが……。

「そんなにピリピリするな。『今回は』何もしねえよ」

強いて言うなら、警戒心バリバリのお前さんの面を拝みに来たって所かねえ。

と笑うクロコダイルに、アスラはそれでも警戒を隠さない。

これまでやりあつてきた体験がそれを許さない。実際に陰謀劇を演じる片割れになってみると、どれだけ陰謀家という奴が面倒で厄介で嫌な奴なのかは散々味わってきた。

「そうか……『今回は』、な……」

「当たり前だろう?」

ああ、当たり前の話だったな。

クロコダイルにしてみれば、本当の話だ。

何が楽しくて、相手が警戒している所へ突つ込まねばならないのか。人間というものはずっと警戒していられるような動物ではない。本気で集中する時間となれば僅か数分。これが一対一の戦闘となれば、場合によっては数時間の集中が必要となるが、それらが訓練で何とかなるとはいえ、著しく体力を削るのは言うまでもない。

元々、今回の軍人の件は実験の要素が強かった。

たかだかたった一つの事件でこれだけアラバスタ王国と世界政府

の間をかき回す事に成功したのだから、実験はまず成功といってい  
だらう。

どんな事とてそうだ。

最初は小さな規模での実験から始まる。

それが上手く行つて初めて、大規模に商売や作戦として組み込ま  
れる。いきなり組織の命運をかけた大博打などする必要は、ない。

「また、会おう」

「……そうだな、また会う事になるだろう」

そう告げ、身を翻したクロコダイルをアスラは引き止めはしな  
か  
った。

ただ、彼の背を黙って、砂煙と共に姿を消すまで見送っていた。



第163話・実験終了（後書き）

という訳で、砂ワニさんからすると、今回は実験が予想外にうまくいったなー

という感じですよ

そして、更新ですが、数日お休みします

よろしく願います

## お知らせ

明日からの更新をしばらくお休みします

と、言いますのは明日からしばし、応援の為に夜勤出張が重なりまして……

しばらく、ネット環境が携帯だけになってしまうのです。

生活も相当不規則というか、ただでさえ寝不足確定になりそうな状況ですので無理をしたら本気で倒れると判断し、出張の間は更新をお休みさせていただく事にしました。

今回は12（火曜）の夜の更新となります。

これまで頑張つて、毎日更新してきただけに残念ですが、ご了承下さい

## 第164話・アスラの場合

原作開始まで1年を切った。

とはいえ、これだけ歴史を変えてきたのだ。あれから更に追加での歴史変動も起きた事を考えれば、原作など何時始まってもおかしくない。

事実、先だつて入ってきた情報だが、白ひげ海賊団四番隊隊長サッチが、二番隊副隊長マーシャル・D・ティーチに殺害された、という情報が入ってきた。

当然だが、白ひげは激怒しているだろう。

だが、ティーチに関しては歴史通りのはずだ。何しろ、白ひげに對してはるくに干渉していない。そんな余裕はなかった。

ならば、奴は手に入れたのだろう、自然系悪魔の実ヤミヤミの実を。

(だが、それにエースが関わる事はない……それに)

現在、奴の上にしたのはダイヤモンド・ジョズの筈……。

奴なら、白ひげの制止を聞く筈だ、とも思う。

何しろ、下手に追跡などされて、ダイヤモンド・ジョズが海軍に引き渡されるような事になりでもしたら……。

(今、頂上決戦は避けたい……)

クロコダイルと裏で陰惨な遣り取りを繰り返している真つ最中だ。そこへ四皇でも最強と謳われる勢力である白ひげを敵に回すなど悪夢だ。

そんな事を考えつつ、この1年の事を思い返していた。

その日、アスラの執務室にはCP9のメンバーが集められていた。と言っても、潜入組はいない訳だが。

「揃ったな」

アスラはぐるりと、ジャブラ・ブルーノ・クマドリ・フクロウを見回す。

腰をおろした所で、代表する形でジャブラが尋ねる。集合を命じたのは一体どのような命令の為かと。

それに対して、アスラは簡潔に命令を下す。

「……Mr.2、ですか？」

ブルーノが確認するように名前を呟く。

アスラの命令とは、Mr.2すなわちボン・クレイを探せ、という事。

もちろん、探すだけで終わる訳ではない。

「そうだ。奴を探し出し、居場所を確定せよ。見つけたら……」

ぐるりと顔を見回し、告げる。

『殺せ』と。

殺せ、という命令に怯みを見せるような者はここにはいない。だが、疑念は浮かぶ、何故Mr.2なのか、と。いや、クロコダイルを狙わないのは分かる。

クロコダイルは王下七武海の一角だ。

名声だけでなく、実力も世界でも上から数えた方が早い。

もし、そんな相手を暗殺しようとして、時間がかかってしまった

ら……それこそアラバスタ王国に世界政府が手を伸ばしていた、混乱を図った証拠と言われかねない。この場合、厄介な事に世界政府が動いたという事実が出来てしまう。それは避けたい。

「B Wの上位を占めるオフィサー・エージェント。この中でM r・2だけは違和感がある」

他が男女で組を作るのに対して一名のみ、というだけではない。

「他のオフィサー・エージェントは基本、暗殺を含めた戦闘能力者だ」

モグモグの実際の能力者は少々異なるかもしれないが、M r・1を含めて暗殺や組織の裏切り者の抹殺などにかく戦闘能力に長けた者が多い。

もちろん、M r・2の戦闘力が低いという訳ではない。オカマ拳法を用いた戦闘力は原作でもサンジと真つ向やりあえる程だった。

だが、彼の能力は違つのだ。

全身刃物、全身棘、蠟燭に色による催眠、土竜に砲弾とも見紛う弾を吐き出す銃犬。そして爆弾に大重量。

これに対して、M r・2の能力は変身能力。

戦闘でも使えない事はないが……その本質は別だ。上手く使えば、原作が正にそうであつたように大きな混乱を生み出す事が可能だ。戦闘能力では自然系には遠く及ばないが、民衆を扇動する能力としては実に効果が高い。そんな人間を上から5番目の地位に置くという事は……。

「……民衆攪乱の可能性が高い、つて事ですか」

「というより、既に行なわれている」

そう言いつつ、アスラは直近で届いた報告書の写しを全員に見せる。

読むとフクロウはともかく、他全員の顔がそれぞれに歪む。最終的に全員が納得した。この後ロブ・ルツチやカク、カリファにも連絡がいき、Mr. 2を捕捉。その後、ジャブラを含めたCP9、4名、場合によってはアスラ自身も出張って確実に仕留める事になる。CP9が退室後、アスラは散々納得したはずが、どこか原作を守ろうとしていた意識があったのかもしれないと思い返していた。

自身の下した命令には、これまでBWのオフィサー・エージェントに対しての抹殺命令が含まれていなかったからだ。その必要性がなかったと言えなくもないが……やはり漫画でよく知る相手を直接殺す命令をどこかで躊躇っていたのかもしれない。

だが、遂にアスラはMr. 2ことボン・クレーへの抹殺命令を正式に下した。

おおよそ1年前。

アスラが下した命令だったが、ボン・クレーの確実な捕捉には時間がかかった。

何しろ、彼は普段の格好はとにかく目立つのだが、顔が変わる。なまじ、普段の外見が派手極まりないだけに、顔を変え、その上でその顔に合った服装に着替えるだけでまずばれる事はない。

最近自身が追われているという自覚があったのか、ボン・クレーも警戒していた。

この1年で捕捉したと思いきや、偽者だったケースが3件。捕捉、殲滅と思いきや逆に罠にかけられかけたケースが1件。追い詰めながら、まんまと逃げられたケースが20件近く。

「……だが、それも終わりだ」

現在、アスラはメルクリウス号の艦上にいる。

エース達の事は暇だったミホークが十分に面倒をみてくれたお陰で、自分はこちらに専念出来た。

自身に届いた、ボン・クレーと思われる相手の活動記録。あれがアスラにこれ以上彼を見逃す道を放棄させた。

「……悪いな、お前にはお前の目的があるんだろうが……こちらも守りたいものがある」

静かに執務室で、アスラは報告書を手に呟いた。

## 第164話・アスラの場合（後書き）

ようやくと鬼のように忙しい日々が終わりました

……いや、本当に休む事にしていて良かった。そうしないと体力が  
とてももたなかった……

本日より再開です

原作ではありませんが、1年余りの時間が過ぎた状態になります

明日は狙われているボン・クレーが何をしているのか

明後日はエース達はこの1年何をしていたのか、を書く予定です



## 第165話・BWの策謀

さて、何故アスラはMr.2ことボン・クレーの殺害命令を下す事になったのだろうか？

それには少し時間を遡らねばならない。

……ある日の夜の事、ここはアラバスタ王国王都アルバーナ。

その街の一角、スラムという程酷くはない、だが高級酒場という程高級でもない。ごくごく普通の市民が集まって騒ぐような酒場で暗い顔で飲む男性がいた。

フードを被っていて、よく顔は見えないのだが、その雰囲気は周囲にも伝わる。

折角、或いは仲間と楽しく騒ぎ、或いは1日の疲れを気持ちよく洗い流したいと思い、或いはうさ晴らしにぱーっと騒ぎたいと思つてやって来た人達にとっては、すぐ傍にそんな暗い雰囲気があると酒が不味くなる。

「おいおい、おっさん。どうしたんだよ？んな暗い態度じゃこっちも気持ちよく呑めないんだがよ？」

完全な酔っ払いが絡む前に、まだ余裕のある人間が様子を伺いに行った。

この辺は面倒見のいい人間だったという事もあるが、面倒ごとは御免だという店主を含めた周囲の空気もある。1度面倒な人間がからみだすと引き剥がすだけで大変だし、その方が空気が悪くなるからだ。

「？あ、ああ………すまない」

相手は割りと素直に謝った。

その様子を見て、気になったのは問いかけた側だ。

フードの端から見える衣服は決して派手ではないが、結構品質は良さそうだ。商人であった彼はその辺りを目敏く目をつけた。態度からしても、決してむやみやたらと空気を読めない人物とも見えな  
い。どういう事か？

ふと疑問に思った彼は『なあ、どうしたんだよ。なんか心配事でもあるのか？』、そう相談に乗るふりをしつつ、顔を確認した。

(………どっかで見たような)

見覚えのある顔に、記憶を探った彼はすぐに思い至る顔にぶち当たり、息を呑んだ。

アラバスタ王国の住人ならばさすがに知らない訳がない。

「こ…っ、こぶ」

コブラ陛下と叫びかけた彼の口を慌てて王は塞いで、しいっと反対の手で口の前に指を立てた。

商人も慌てて頷く。

確かにお忍びでやって来たならば、下手に騒ぐと拙いだろう。

それに国王であれば、気持ちが悪くような事があるのも分かる。それを誰かに言えないのも当たり前だろう、というかそんな国王が悩むような事に一介の市民である自分が首を突っ込みたくない。

『すまないが、任せるので適当に誤魔化しておいてくれないか？』との言葉に一も二もなく頷き、商人は席へと戻った。

「おい、どうしたんだ？」

「いや、何でもない。……娘さんが突然どこの奴とも知れん男を連れてきてな、なのに奥さんがそいつを気に入っちゃったせいで奥さんと娘と大喧嘩になっちゃったらしいんだ……」

だから、そつとしておいてやろうや。

適当な嘘ではあったが、その話が広がるにつれて周囲の視線がどこか生暖かくなったのを察し、商人は内心ほっと安堵の溜息をついた。

本当は、ビビ王女がどこの馬の骨なんて連れて来れる訳がないし、来たとしても恋愛なんて不可能だろう。奥さんに至っては既に亡くなっており、コブラ国王は現在、独身だ。完全なデマカセだけに、後で責任を問われる事もないだろう……そう判断して、商人は忘れるように酒を頼んだ。

その数日後の事だった。

先だつての国王が呑んでいた酒場とは別の、もう少し上品ではあるが市民が呑みに来るレベルの酒場。

そこに王国護衛隊と思われる面々がいた。

王国護衛隊はエリートだ。王の、王族の近くに位置し、その身を守る立場にある。それだけに機密に接する事も多い彼らがどこか苛立たしげな空気を纏っていた。

触らぬ神に祟りなしとばかりに、周囲の人間も少し距離を置いて……だが、耳を傍だたせて彼らの話を聞いている状況だ。

彼らはいえ、小声で話しているが、大きな声で叫べぬ分も苛立ちに加わっているようにも見える。

「それにしても王もお気の毒に……」

これは割りと普通の声での呟きだった為に聞いた者が何人か出たが、これだけならば特に問題はなかっただろう。

何か相当に悩むような事があったのかと思う程度だ。だが。

「全くだ、世界政府の連中が……！」

苛立ちが頂点に達したかのように別の1人が上げる声が大きくなる。

慌てて、他の者が口を塞ぎ、当人も焦ったのか彼らはそそくさと酒場を離れた。

だが、それだけ聞けば十分だ。というより、こうした噂は具体的な内容が出なかつた分、余計に憶測が混じって広まってゆく。

この噂は瞬く間に、前からの一件で世界政府に対して不満が燻っていた国内に広がり、更に商人の1人がそれを聞き、「そういえば……」と洩らした言葉と化学反応を起こし、広がっていった。

更に幾つかの事象が加わり、アラバスタ王国における世界政府への不満は再び急速に燃え上がりつつあった。

「んがっはっはっはっ！こんな仕事でいいとは楽なのねっい」

周囲に人がいない砂漠の一角で、派手な格好の男が高笑いを上げていた。

バレリーナのような衣装にコートを纏い、両肩にはオスメスの白鳥を模した飾り。

背中には燦然と輝く『オカマウエイ』。

いわずとしたMr.2ことボン・クレーだ。

最近はこの格好をする事もめつきり減った。

何しろ、ついつい仲間を守る為とはいえ、ダンスパウダー事件の際にCP隊員サイファーボールの前に立ちはだかっている。お陰でそのインパクトのある姿は指名手配されている状況だ。そして、この派手な格好では一目見れば誰だって分かるだろう。

如何に世界政府に対して不満が燻っているとはいえ、砂漠の国でダンスパウダーを使おうとした一味となれば、例え知らずに雇われた護衛だったと言った所で国民とて黙っていない筈だ。

「さてと、次はどこかしら〜あ？」

部下に問いかけ、新たな街へと向かう。

……彼の行く所では、また新たな種火が燻る事になるのだった。

これらの報告はアスラに届いていた。

普通の市民であれば、国王がお忍びで酒を呑んでいたといっても、問い合わせる事や国が『そのような事実はない』と返答した所でそれ以上の確認は出来ない。

だが、世界政府ならば別だ。

アスラの下へは正確な裏づけのついた情報が回ってきていた。

特に大きかったのは、国王がいたとされる酒場の商人に対してCPの1人が直接確認を取れた事。その時、間違いなくコブラ国王は王宮にいた事が確認が取れた事だった。

故にアスラは『クロコダイルは遂にMr.2を用いた人心工作に出た』と判断さざるをえなかった。

「いいだろう、それならば……そもそもの大元を消すしかあるまい」

アスラは静かにそう呟いたという。

## 第165話・BWの策謀（後書き）

という訳で、BW編をお送りします

明日はエース達がこの1年どうしていたのか

ミホークが何故行ったのか、彼がどう原作を変えたのかなどをお送りします

## 第166話・エース達の環境+

エース達はこの1年余りを鍛錬に当ててきた。

最大の理由は、リトルガーデンで足止めを食った事による。

当初はアスラなりに迎えに来てもらった方がいいのでは……という意見も出たのだが。

『じゃあ、これから困る度に「たすけてー」ってアスラを呼ぶのか?』

というエースの言葉に誰もが押し黙った。

足止めはログが溜まるのに1年かかる、というグランドラインでは避けようのない現実故に、だ。今後、更にログに時間がかかる場面はあるかもしれない。

それこそ10年だの20年だというのなら、さすがに助けを求めのも仕方ないかもしれないが、この島で長年戦っているというエルバフの戦士、ドリーとブロギーの言葉からも自分達がまだまだ未熟な部分が多いと知った事もあり、折角先だつての模擬戦で色々と教わった事でもあるし、と一応連絡だけ入れて、頑張った、という訳だった。

さて、連絡を受けたアスラはというと、エース達の選択そのものは納得すると同時に喜んだ。

原作ではこの島でMr.3のコンビらに襲われ、それを撃退した事により手に入れたエターナルポースによってアラバスタ王国へ向かった訳だが、アスラ自身と壮絶な暗闘を繰り広げている現状でわざわざウイスキーピーク1つの為にオフィサー・エージェントを派遣するような余裕がクロコダイルにあるとは思えない。



そうなる、原作と異なり、エース達はリトルガーデンで1年を過ごすのか、と思ったが、ここでふと気付いた事があった。

そう、原作でナミが罹った病気……高温多湿の密林に住むというダニに刺される事で発症する、現在ではリトルガーデンのみ存在する通称『5日病』ケスチアの存在だ。

刺されたらえらい事だと、急ぎ抗生剤を届ける事にしたのだが……ここで困ったのが、誰に運んでもらうか、だ。

自分は忙しくて、とても直接持っていけない。悩む中、駄目元でちょうど見かけたミホークに頼んだのだが……あっさり引き受けてくれた。

何故ミホークが引き受けたのか、というならば、結局の所暇だったからだ。

ミホークは残りの人生を遊んで暮らせるぐらいの蓄えを詳しい事情はアスラも知らないが既に持っている。

王下七武海の一角でありながら、海賊団を結成せず、1人故に面倒を見なければならぬ相手もない。

とはいえ、王下七武海の一角という立場が邪魔をして、下手な相手に勝負を吹っかける訳にはいかないし（白ひげなどが代表例だろう）、かといって普通の連中では歯応えが無さすぎる。

そういう意味では普通に相手をしてくれて、歯応えもあるシャンクスとアスラの2人はありがたい存在なのだが……シャンクスはようやつと自身と同じ四皇の1人カイドウとの手打ちが出来そうな面倒な時期で、本人がやりたくても状況がそれを許さない。

アスラはクロコダイルと壮絶な暗闘の真っ最中でとても落ち着いて相手をしてられる状況ではない。

それならば、弟子を鍛えに行くのも良いかと判断したのだったのだろう、というのが後で落ち着いて考えたアスラの結論だった。

結果として、エース達はミホークに半年以上に渡り、みっちり鍛え上げられた。

『島喰い』？

そんなものはミホークが島から去る際に問答無用で三枚におろされ、残骸は美味しく頂かれていた。サンジが腕を奮った料理はこの時ばかりはドリーとブロギーも舌鼓を打ったという。

或いは悪魔の実の能力に。

或いは剣術に磨きをかけ、一部の者は覇気すら身につけ……1年余りの後、未だ戦い続けているドリーとブロギーに別れを告げ、彼らは再び出航していった。

尚、ケスチアの薬だが、最終的に『火』であるエース以外の全員が抗生剤を使用する事になった、とは言っておく。

ただ、このミホークの帰還途中におきた出来事を知ったアスラは意外とでも言うべき思いに捕らわれる事になった。

余談としてだが、その時の事を語ろうと思う。

その時、ミホークは何時ものように棺船に乗り、リトルガーデンからの帰路にあった。

そうして、とある冬島の近くを通る航路を進んでいたのだが……。突如として、ミホークの前方の海上が沸きあがった。そこから飛び出してきたのは……大型の潜水帆船。何とも不思議な船種だが、正式には大型潜水奇襲帆船という。

とはいえ、この程度に驚くようではグランドライン、それも新世界では生きていけない。

平然と視線を向けるミホークに向けて、笑い声が響いた。

「まっつはっつは！我が領土を黙って通ろうとは不屈きな奴だ」

帆船の最上段で、白い毛皮をまとった小男がふんぞり返っていた。

「我が名はブリキング海賊団船長ワポル！例え、1人であろうとも我が領土を通るからにはつうこ「海賊団なのだな？」」

遮って、尋ねるミホークにワポルは不機嫌そうな表情になった。

「王の言葉を途中で遮るとは！余程命がいらんらしいな！だがまあ、我輩は寛容だ、通行料は通常の10倍でかんべ「邪魔だ」へ？」

ふう、と溜息をつき、ミホークの腕が一瞬霞み……澄んだ音がした。

次の瞬間、ワポルはそれ以上の言葉を言えなくなった。

むしろ、言えたとしたら、それは自然系の悪魔の実の能力者など限られた存在だろう……普通は脳天から真つ二つにされて生きていられる人間はいない。超人系でもバラバラの実など斬撃ならば無効化可能な能力もあるのだが、残念ながらワポルのバクバクの実ではそれは不可能だった。

2つに分かれて倒れるワポルの体を慌てて左右から思わず、といった様子で支えたのは片や両腕の長い大柄な男であり、もう片方は……アフロな男性だった。そうとしか言いようがないのだから仕方が無い。

「わ、ワポル様！」

「き、貴様！貴様何という事を！」

支えた男達、チェスとクロマーリモにとってみれば、大問題だ。

彼らの権力は結局の所、国王ワポルの信を得ているという1点にある。逆に言えば、ワポルからの信を失えば、彼らの後盾もまた

消える。ワポルが死んだとなれば、国に戻った所で再び王政復古どころか自分達が権力を握る事すら不可能になりかねない。  
そんな焦りが一杯だった。

「「いいか！貴様が殺した方は「失せる」は？」」

眉をしかめていたミホークが再度腕を振った瞬間、今度は2人が腰の辺りから横に2つに分かれた。

何時の間にもやら立ち上がっていたミホークは懸命に救助ボートに乗り込もうとして、固まっていた他の船員らに視線を向けて一言。

「まだ、何か言いたい事がある者はいるか」

全員無言で首を横に振った。

後に、ドラム王国に帰還したイッシー20らは、王下七武海が国王を殺害した、という、この事件に対してワポルがブリキング海賊団を名乗り、ドラム王国国王とは全く名乗らなかった事などを証言。相手が海賊ならば襲撃の権限を持つ王下七武海故に、ミホークが一切責任を問われる事はなかった。

尚、この事件の結果として、サクラ王国の成立が早まると同時に、嘗ての医療大国を取り戻すべく全員一丸となって国を復興させていく事になるのだが……アスラはこの話を聞いた時、苦笑するだけであつたという。

第166話・エース達の環境+ (後書き)

ちよつと説明っぽかったかな……

ドリーとブロギーと出会つての話なども書こうかと思つたんですが、何しろ事件らしい事件が起きないのですよね

原作の展開見る限り、やはりきちんとした師匠がいるいないでは強さに差が出ますね

第167話・閑話（前書き）

本日はちょっとお休み気分です……

## 第167話 - 閑話

### 同期の少佐の話

「何？アスラ中将の話だった？いや、俺は確かに彼と同じぐらいの時期に海軍に入ってマリンフォードにいたけどさ。余り詳しくはないぞ？え？それでもいい？当時の事を知る人が殆どいないって？まあ、そういう事なら……」

「そうだなあ、もう海軍に入った時点でアスラ中将は……他と違ってたね」

「どう違うのだった？普通は海軍に入ったら下っ端からだ。けど、中将は実力がずば抜けてたせいで、最初から7000万の賞金首を倒すわ、少尉の階級を得るわ……そりゃあ、最初は嫉妬もあったさ、けどすぐに無理だって諦めた」

「悪魔の実？いやあ、使わなくても強かったよ。六式を使いこなすっただけでも凄いしね。だって、大人になっても使える奴なんて限られてるし」

「もう……当時一緒に入った連中、束になっても敵わなかった。むしろ、彼の場合手加減するのが難しかった、という感じだったかな？」

「おまけに、出世してどんどん重要な部署任されて、それどころか自分で提案して……なんだ、上に立つってのはこういう奴なのか、って彼が佐官になる頃にはもう別世界の奴だっという感じで同じ世界の住人だとは思えなかったね」

ガープ中将の話

「うん？アスラの事を知りたいじゃと？」

「アスラか。あいつと初めて出会った時はちよつくら驚いたもんじゃった。無人島かと思つた島のジャングルからでかい虎と一緒に出てくるんじゃないからう。ああ、今も一緒にいるアリスとその兄か弟かしらんがもう1匹おつた。グラントイガーの性質上、もう会う事はないじゃろうが」

「うむ、おそらく難破した船に乗っていたか海賊に襲われたり…或いは海王類に襲われたか。いずれにせよ、船から放り出されたのは確かじゃろうな。それ以前の記憶を失つておるから詳しい事情は分からんが」

「ん？あやつの強さじゃと？」

「ふむ、王下七武海のミホークはあやつと手合わせするのを気に入つておるみたいじゃがな。あれは悪魔の実で強いからではない」

「アスラの強さというのは積み重ねた強さじゃよ。何千何万何百万何千万と繰り返し、積み重ねて今の強さを手に入れた。じゃこそ、同じように積み重ねてきた強さを持つミホークは気に入つておるんじゃない。まあ、本気で怪我をさせるつもりでやっても大丈夫というのもあるんじゃないが」

「いずれにせよ、ワシらが引退した後、海軍の次世代を背負う一人なのは間違いないじゃろうな……」



ある島で出会った元海賊の話

「……俺が昔は海賊船に乗ってたなんて言わないでくれよ。もう、俺は足を洗って、真っ当に生きてるんだ。何？話を聞きたいだけ？礼もするって？いらんよ、黙っててくれりゃそれでいい」

「アスラ中将か……そうだな、俺が海賊を辞めようと決心したのはあの人のお陰だったな」

「俺は海賊っていつても見習いからやっと昇格したばかりって感じでよ。強くなって何時かは俺も一人前の海賊に！なんて思ってたんだが……」

「当時の船長やその幹部達は強いと思っててね。それこそ簡単にあしらわれて、戦闘でも敵なしかった」

「……けどさ、アスラ中将、だったか……その、別格ってのはいるもんだな、って今でも思うよ」

「もうね？強さって奴の根本が違っただよ。船長達の強さは確かに強いけど、人間として理解出来る強さだった」

「拳圧で船を砕くとか、船長らが子供の石を使った水切りみたいに飛んでくとかさ……信じられるか？え？見た事あるって？なら分かるだろう？あの人、拳で船を真っ向粉碎するんだぜ？悪魔の実の能力かと思いきや、それとは別に純粋な武術の腕らしいし……なんて知ってるのかって？当時、能力者か！って叫んだ船長とこいつは能力じゃない、って冷静に答えた彼の姿が目には焼きついててさ……」

事実、後に確認した所アスラ中将の拳は長年の修練の一撃でもって、戦艦でも粉碎可能だそうです

「あれを見たら、諦めもついたね。もう、なんだ。こんな世界に俺なんかいても死ぬだけだって、そう確信出来たからこそ、すっぱり足を洗って真っ当に生きる事にしたんだ」

「ああ、じゃあ、そろそろ仕事に戻るんで……くれぐれも、な？頼むぜ？」

インペルダウン収監中の海賊

「あ、アスラ中将！？やめてくれ！やつの事なんか思い出させないでくれ！」

「ああ、そうだよ！俺は当時、3隻の船からなる船団を率いてた海賊の船長だったさ！けどよ！あの野郎、裏拳の衝撃波で左右の僚艦同時に沈めやがるんだぞ！？」

「あんな化け物どう相手しろってんだ！？一味全員伸されて、捕まったさ！グランドラインを進んで来て、それなりに自信もあったけど、木っ端微塵に砕かれたよ！船も自信も！」

「ああ、もう！気が済んだらう！？さっさと帰ってくれ！」

ある街の一般市民

「はあ、アスラ中将……それってどなた……え？ああ、あの時の

！そうでしたか」

「ええ、そうですね、私達の街が海賊に襲われた時、救援に来てくれました」

「あの時、街はすっかり廃墟だったんです。海軍の人も以前にもっと小規模な襲撃を受けた際も来てくれたんですが、やはり専門の方ではないので手が回らなくて人海戦術でどうにかされてたんです」

「それがあの時は違いました。装備や人員がちゃんと救助の為のもので……きつとあの艦隊が来てくれなかったら、今、この街で暮らしてる人の半分は亡くなっていたと思います」

「うちの子も今は夫の工房で頑張つて、跡を継ぐんだと頑張ってますけれど……あの時は梁の下敷きになって助からないかと……そんな怪我を負ってたんです。でも、重機もなくて、しかもバランスが微妙なせいで下手に動かす事も出来なくて……」

「それをアスラ中将でしたか。あの方の力で丸ごと持ち上げて助けてくれたんです。本当にこの街にとっても私達家族にとっても恩人ですよ」

#### 新人海兵

「え？いや、自分なんかに聞かれても……はあ、そりゃアスラ中将の従卒になったのは確かですが」

「そ、そうですね……怖いけど、尊敬出来る人だと思います」

「いや、怒った時とか、戦闘時とかはもう何と言いますか……迫力満点で……圧倒されますね」

「でも普段は優しい方ですよ。忙しい方ですから教えてもらえない機会が限られてるのは確かですけど。自分も何時かはあの実力の一部でも身につけられたらとは思いますがね」

アスラ中将と一番長くいた方

「みや〜みやみやあ。みや？みやみやみや！」

「みやう？みや！」

「ぐるぐるるる……」

え、ちょっと待って、いや、決してご飯をわざと駄目にしようとした訳では！

ぎゃあああああああ！

## 第167話・閑話（後書き）

本日は感想であったほかの方からの視点でした

黒ひげのドラム王国襲撃は……多分、黒ひげが能力を確認する為、習熟する為にやったんだと思うんですね。だとすると、次々と呑み込んでいくって描写が続きそうではないかと、複数の街を壊滅させるなんて無理でしょうし

明日はいよいよボンちゃん抹殺指令の模様です……その予定です

## 第168話 - 死闘の序曲

ボン・クレー。

本名ベンサム。

BWにおける通称はMr. 2。

そんな彼は今、対峙していた。

相手は全身を砂漠の民が纏うような衣類で包み、顔も隠されていてよく分からない。だが、その相手が放つ気配や殺気を感じ取り、ボン・クレーはさっさと自分のおつき役を命じられた部下達を逃していた。

彼らは基本、本部からの指令を受け取り、伝えるのとボン・クレーの日常生活のサポート、例えば事前に向かう街での宿を取っておくなど、が仕事だ。戦闘は彼らの仕事ではない。

「Mr. 2だな」

「違っつて言ったら、納得するのかしらー？」

ボン・クレーにも分かっている。

相手は確証を持って言っている。

自分が否定した所で、相手は歯牙にもかけまい。

と、咄嗟にボン・クレーは体を捻った。即座に無言のまま動いた相手の一撃をかわす為だ。

恐ろしく鋭い一撃で、避けたにも関わらず、衣装の端が切り裂かれた。この遣り取りだけで、相手が容易ならざる事が分かる。

まず、攻撃の鋭さ。

ボン・クレー自身も腕に覚えがあるだけに、相手が恐るべき実力者だと理解した。

次に躊躇いのなさ。

相手は間違いなく、自分を殺しにきた。

その動きにも急所を狙う態度にも全く躊躇いがなく、確実に仕留めに来た。避けれたのは自身の腕と警戒があつたからに他ならない。間違いない。こいつはプロだ。

であるならば、長々と話をして無駄だ。

だが、気になる点がある。

先程の一撃は自身の服を切り裂いた。ゆつたりした衣類に隠されて、はつきりとは見えないが……ただの攻撃の鋭さだけとは思えない。考えられるのは2つ、武器を持っているか、そういう能力を持つ悪魔の実の能力者なのか……。

自分の仲間にも全身刃物人間という相手がいる。可能性はある。

「あんた、悪魔の実の能力者なのう？」

試しに声はかけてみたが、やはり返事はなく、無言のまま拳を構える仕草を取った。

だが、一瞬袖から見えた手をボン・クレーは見逃さなかった。

手の甲にまで毛の生えた腕。

異様に毛深いなんて可能性もゼロではないが、やはりここは素直に考えれば……。

(厄介ねい……獣人系かしら)

ボン・クレーの食った悪魔の実の能力は超人系悪魔の実マヌネの実。

この実は事前に触れた相手に変身する事が出来る、という能力だ。コブラ国王に触れるまでは大変だった。

王宮に潜入する為に兵士に触れ、中に入ったら今度は様々に触れつつ最終的に王の身の回りの世話する女官に化け、その頬に触れた。ただ、この実は確かに見た目はそっくりになれるが、変身した相

手の能力までは手に入らない。

この辺は原作のインペルダウンで副所長そっくりに変身しながら、第五層で凍り付いていた様を見れば分かるだろう。

逆に言えば、悪魔の実は純粋な戦闘力の向上には役立たない。

原作のサンジ戦では相手の性格につけこんで、能力を活用していた訳だが……相手が誰か分からない上、プロだ。女性に変身したぐらいで手加減してくれるような相手ならば苦労はしない。

そして、獣人系悪魔の実の最大の特徴は身体能力の向上。

もし、相手が自分と同等の格闘の腕を持つとしたら……勝敗を分けるのは身体能力の差となるだろう。だとするならば、獣人系を敵とするのは余りに不利。だが……。

(まあ、手はあるから、まずは様子見ねい)

そう思いつつ、ボン・クレーもまた構えた。

ジャブラはボン・クレーを目の前にしながら冷静に様子を見ていた。

腕は間違いなく立つ。

先程の奇襲攻撃、既にジャブラは獣人系悪魔の実イヌイヌの実モデル狼を発動させた上、【剃】で奇襲を仕掛けた筈だったが……それを相手はかわした。

容易ならざる相手。

これまで集めてきた情報から煮ても焼いても食えぬくわせもの、という印象を受けていたが、伊達にMr.2というBWでも高位の立場にはいないという事が、と戦闘力に関しても改めて考えを引き締める。

オカマ拳法。



名前はアレだが、カマバツカ王国の例もある。

あの国には入った事はないし、絶対入りたくもないが、独自の拳法などを保有しているという……。アスラ中将曰く、『王国と関係はない』そうだが……。

(……こちらは後詰が来ている。だが……)

既に幾度か眼前の相手とはやりあっている。

こちらがそうであるように、相手がそうでないと言えるのか？  
いや……。

(考えても仕方がないな。奴に増援があるとしても、増援が来る前に仕留めてしまえばいい)

構えを取る。

姿を隠しているのは、自身の正体を隠す為もあるが獣人系としての姿を隠す為でもある。獣人系の能力は実に多彩で、種類が変われば、その性能もまた変わる。

鳥を相手にすると、ゾウを相手にするのではまるで変わってくるのは想像がつかだろう。

(下手な小細工が為される前に……殺す)

下された命令は抹殺指令。

そこに生かして捕縛というものは基本的に存在しない。一応、捕縛可能ならば捕縛しろ、となっているが……それとて情報を引きずり出す為の捕縛であって、待っているのはCPの尋問という名の拷問だ。

いや、まあ、以前に比べれば大分マシになったのだが、それでもただ、インペルダウンがアレだ。取り調べの段階での尋問がどの

ようなものか……そのあたりはおして知るべし、という所だろう。アスラとて気にしなかった訳ではない。拷問というのは確かに情報を素早く引き出すには有効かもしれないが、その分間違いや嘘の告白も増えるからだ。

だが、この世界は嘗ての世界より余程その辺は厳しい世界だ。

結局、尋問の手段を変える事や、裏づけ調査をきっちりやるという事しかアスラにも出来る事はなかった。……尚、アスラが現在採用しているやり方の場合、厳しく責め立てた上で、一転間違いだつたと治療を施し、接待し、落ち着いた所で再び引きずり出して、というやり方が採用されていたりする。

下手に責め立てるだけより、有効だから、その分痛めつけられる時間が減る、という理由からだつたりする。

当人にとってどちらがマシかは置いておくとして、少なくとも尋問中に死亡した者が大幅に減つたのは紛れもない事実ではある。尋問が終わった後の怪我をしていた場合の治療を義務づけたのも大きい。

話を戻そう。

ジャブラもボン・クレーも互いに構えた。

ここから先は言葉ではなく、交わされるのは拳。

六式鉄塊拳法とオカマ拳法の激突。

死闘が始まるうとしていた。

## 第168話 - 死闘の序曲（後書き）

という訳で、ボンちゃんとジャブラの出会いです

尋問方法に関しては賛否あると思いますが、インペルダウンを見る限り、明らかに拷問と思えるやり方が普通にまかり通ってるのがワ  
ンピースの世界です

郷に入りては郷に従え、常識は別の世界では別の常識がある

より、有効なやり方でより犠牲となる者を減らせるなら、まだその  
方が……そんなものだと言っただけだと幸いです

## 第169話 - 死闘勃発そして

2人の攻撃が激突した。

「ケリ・ポアント  
蹴爪先！」

「マテンロウ  
魔天狼！」

双方の蹴りの激突はジャブラに軍配が上がった。

ボン・クレーの爪先での蹴りに対して、ジャブラの蹴りは両足によるもの、これだけならボン・クレーの方が勝っていたかもしれない。蹴りというものは軸足が大事だ。「赫足」のゼフが利き足の右足を斬り落としたのも軸足である反対の足の方が蹴りでは重要だからだ。

逆に言えば、両足で蹴るという事は踏ん張りが利かないということ事だ。

だが、それでもジャブラが勝ったのは獣人という部分が大きい。

(なんて硬いのよう！)

爪先をボン・クレーは覇気で強化していた。だが、そんな事を忘れさせる程に硬かった。それこそ爪先が壊れるかと思つた程だ。

ボン・クレーもまた否応なしに新世界に放り込まれた1人だ。

その結果として覇気を取得したが……それを言うならば、ジャブラもルツチとの連絡の関係上、新世界に入らざるをえなかった。つまり、ジャブラも覇気を覚えていた。正確には調査の段階でMr.1が覇気を取得しつつある事が分かった以上、対抗策として取得せざるをえなかったとも言つ。

これが悪魔の実の能力であれば、それでもまだジャブラにダメー

ジが行ったかもしれないが、【鉄塊】は能力ではなく技術だ。すなわち覇気で強化された分は双方覇気を込めているという事で相殺すると、残るは純粋な実力と技術。

鍛えられた爪先とはいえ、鉄の塊並に硬い相手を蹴った訳だ。これでは痛くて当然だ。

一方、ジャブラの方は己の技が通用している事を確認していた。アリスに敗退してからというもの、ジャブラはアリスと幾度となく模擬戦を繰り返してきた。

共に鉄塊拳法を使えるもの同士。

双方の実力は確実に上昇していった。その成果が今出ているとも言えた。

(このまま決める)

油断はしない。

着実に手を進めて行く。

オオカミハジキ  
「狼弾！」

「オカマチョップ！」

ボン・クレーのチョップは命中したがまともにダメージが通らず、逆に吹き飛んだ。

防御した故にボン・クレーのダメージは少ない。だが、距離は取れた。

ボン・クレーには遠距離戦闘技術はない。ならば、距離を維持するのが最善。

「嵐脚・孤狼」

波が跳ねるようにして嵐脚の斬撃が飛んでゆく。  
それを横つ飛びにボン・クレールが避ける。

「マスカラ・ブーメラン！キャッチしマスカラ！」

……さすがにこれはジャブラも意表を突かれた。

まさか、目の下のマスカラが取り外されて飛んでくるとは……刃物だったようで、衣服の一部が切り裂かれる。だが、それだけだ。

（血も出ていない、戦闘に特に問題はなし）

ならばとばかりに攻撃を強める。

変態チックな動きで回避し続けるMr.2には正直段々と苛立ってくるが、それでもその動きは本物だと言わざるをえない。

相手を幾箇所も切り裂いているが、いずれも浅い。

ならばとばかりに複数の斬撃を放つ。これで駄目ならば次の手はそう考えたジャブラの先で蠢いたものがあつた。

ボン・クレールは内心では焦りがあつた。

ボン・クレールの技は基本は蹴り技だ。距離を取られては、ジャブラの狙い通り有効な技は数少ない。その1つであったマスカラブーメランだが、これの最大の有効性は奇襲だ。その初撃がかわされたからには、もう効果は薄いだろう。

（むう）覇気が利いてないわねえ。相手も覇気を使えるって事が

しら)

武装色の覇気は既に纏った。

通常なら、自身の蹴りは相手が鉄の塊であろうが覇気を纏った蹴りでなら、ぶち壊せるはずだが、チョップも蹴りも酷く硬い鉄を殴ったような感触を味わうだけだった。痛かったのは事実だが、挫いたり骨が折れたりしていないのは不幸中の幸いだらう。

あの技は覚えがある。

かつて、ダンスパウダー事件でクマドリとフクロウと対峙したボン・クレイは彼らの使う武術に関して今後遭遇する可能性が多分にあるとみて、調べさせた。

その結果、判明したのが六式、と呼ばれる武術。

これはCPが相手だと分かっていたからこそ、迅速に判明した事だったが、さすがに修得方法までは分からなかった。

だが、どのような技を持っているかは分かった。

高速移動の【剃】

空を駆ける【月歩】

真空の刃を放つ【嵐脚】

鉄の如き強度を肉体に持たせる【鉄塊】

紙が風に吹かれるようにかわす【紙絵】

指で貫く【指銃】

以上の6つを総称して六式という。

ただ、相手の使う技は単なるそれだけではなかった。

聞いた話では、【鉄塊】は体の筋肉を硬直させる為に動けない筈だったし、【嵐脚】は真つ直ぐ飛来する筈だった。

なのに、相手は動き回り、刃は波打つように跳ねてきた。

なら、相手は六式を単純に取得しただけではない。自らのものとしている。

距離を詰めようと動くが、相手には移動の為の技もある。ボン・クレーとて遅い訳ではないのだが……さすがに【荊】に追いつける程ではない。

(くっ、このままじゃ拙いわねい……)

その視線の先で再び【嵐脚】が放たれる。  
今度は複数だ。

まるで狼のようなそれがボン・クレーに向けて襲い掛かって来る。知らぬ事だが、その技の名を「嵐脚・群狼連星<sup>ルーパーフォール</sup>」という。

拙い、と思った。

ボン・クレーは空を飛べない。

これまではバレリーナのように両手を上に上げてくると回転しながらかわしていたのだが、相手も対応してきたのだろう。今度の攻撃はその効果範囲が広い。

アレを喰らっては、あられもない姿を晒す事は避けられない……

！ついでに、怪我也避けられない。

ならば、少しでも自分の納得いく形で、と思い真っ向立ち向かおうとするボン・クレーの目の前で。

「キャンドル・ウォール！」

白い壁が立ち上がった。

ガリガリと反対で削られる音がするが、分厚い壁は持ち堪え、やがてドロリと溶け崩れる。蟬ではあっても、悪魔の実の蟬だ。その強度は鉄にも匹敵する。火以外ならば早々簡単には突破出来ない。

「遅いわよう〜」

「これでも急いできたガネ？」



Mr.3ギヤルディーノ参戦。

## 第169話 - 死闘勃発そして（後書き）

まずはBW側の一人目の増援が参戦

ちなみにMr.3の相棒も参戦を考えたんですが……こんな砂漠のど真中で、相手を殺す事に躊躇いのないプロの前に、非戦闘員である彼女を送るのは「殺してください」って言ってるようなものなので断念しました

戦闘シーンが淡々として御免なさい

## 第170話・戦い進んで

「さて、それでは引かせてもらおうガネ」

「ちよつとう!？」

「我々の仕事はあいつを倒す事ではないガネ。無駄な戦いなぞして何か意味があるのかネ？」

この言葉に内心鋭い舌打ちをしたのがジャブラだ。

何ともわざとらしいからだ。会話だけ聞くなり意見の食い違いが起きているとか、さっさと逃げる気かと思うかもしれないが、これがこちらに2人して視線は互いではなく、ジャブラに向けながら、口元には笑みを浮かべている、となれば話はまるで違ってくる。

問題は、こちらにだからといって見逃すという選択肢がない事にある。

アスラ中將から発せられた命令はあくまで『Mr.2の抹殺』だ。加えて、通常ならば不利な状況になった以上、一旦引くという選択肢が出てくるのだが、相手は面倒な変身能力の保有者、ここで見逃したら次に捕提出来るのが何時になるか分かったものではない。

「キャンドルウォール！」

考えている内に白い壁が視界を遮る。

1つ舌打ちして、ジャブラは一気に駆けて距離を詰めた。上空から攻撃を仕掛けるというのも考えたが、【月歩】の欠点として音がる、という事がある。技の性質上仕方ないのだが、それでは空中から襲撃を掛けるというのがばれてしまう。それならまだしも、壁の左右いずれからから攻撃した方が相手の攻撃も左右両方を見張っ

ていないといけない分、集中する事はないだろう、と読んだ。

「……？」

だが、回り込んだ先でジャブラの目に映ったのは幾つもの蠟製のカマクラとでも言うべきものだった。結果として、視界が至る所で遮られてしまっている。

試しに警戒しながら1つ覗いてみたが、誰もいない。

少し焦って周囲を見回した時、1つのカマクラから足らしきものが見えた。

急ぎ、そちらに駆け寄り……だが、到着した時点で、すぐに違うと分かった。白い、明らかに蠟で作られた彫像だった。

「くそ、どこだ……！」

焦燥に駆られて、振り向いたジャブラだったが。

「白鳥アラベスク！」

「がっ!？」

背後から連続して打ち込まれた蹴りに転倒した。

加えて、相手の一撃が相当硬いものによる攻撃らしく、【鉄塊】がこれまで程効果がない。

転倒しつつも跳ね飛んで向きを変える。その際に同時に飛来した悪魔の実による蠟製の武器に服を切り裂かれるが、構ってられない。そうやって振り向いた先にいたのは、何とも乗り気ではない顔のMr.2と上手くいったという様子のMr.3。

どうやら、カマクラの中、人形によつて死角となる場所に隠れていたらしい。人形と分かった時点で、『この中には人形だけ』と勝

手に思い込んでしまったジャブラのミスだった。

「はあく2人がかりってだけで嫌なのに、背後からなんて卑怯極まりないわねん」

「そういうのは組織を抜けてからの話にするガネ。君の理念は尊重するが、立場を考えて確実に勝てる道を探すのも仕事だガネ」

Mr.2の両手両足を白い蠟が包んでいる。

キャンドルロックという本来は相手の動きを拘束する為の技だが、原作でルフィがマゼラン相手に使っていたように、こういう味方の攻撃力を強化するという使い方もある。どうやら、同じ鉄並の硬さに向こうも攻撃箇所の強度を上げる事でこちらの鉄塊拳法に対抗するつもりらしい。

そして、ジャブラにとっては残念な事に、それは有効なようだった。

「はあくそれじゃ申し訳ないけどねい。嫌な仕事はさっさと終わらせるわよう」

そうしてジャブラの姿を改めて見て……。

「なんだ犬か」

「狼だあ！」

衣服が切り裂かれた事により、ジャブラの素顔を見えていた。その顔立ちを見て、思わずといった様子で呟いた2人に向けて、こちらも思わずといった様子でジャブラが反論していた。

だが、弛緩した空気もその一瞬だけだった。

元より相手も敵組織においてトップクラスの実力者達。

加えて、格闘戦において自分と真つ向やりあえる力を持つ相手と、それを支援する相手というのは厄介だった。距離を取ってしまえば、Mr. 2の攻撃を封じる事が出来るのだが、相手が逃げる可能性が消えた訳ではない。

これまでは移動速度においてジャブラの方が明らかに早かったが故に問題なかったが、今は違う。正確には逃亡が可能になる可能性が出てきた。

今回の場合、やるかどうかはおいておき、Mr. 3には代わりがあるが、Mr. 2はBWにおいても代わりがない。すなわち、Mr. 3が足止めをして、Mr. 2を逃がすという方法もない訳ではないし、或いは何らかの能力の使い方次第では2人とも逃げに徹すれば或いは、という可能性もある。

それ故にジャブラは接近戦を続けざるをえなかった。

だが、元よりボン・クレーは簡単に倒せるような相手ではない。

そして、激しい蹴りと拳の応酬をしている瞬間の合間、息を整える時を狙ってMr. 3が牽制攻撃を仕掛けてくる。

そうして遂に、キャンドルジャケットで動きを止められた所へ…。

「白蠟アラベスク！」

全身へと蹴りが着弾した。

呻き声を上げて、動きが止まった所へ更に蠟がジャブラの全身に張り付き、動きを拘束してゆく。

「こんな形で戦いたくはなかったわねん」

本当に残念そうな声だ。

確かに、武術家としては惜しく感じているのだろう。最も、これまでずっと裏の世界を歩んできたジャブラからすれば、笑止な話ではあるが。真つ向勝つのが困難ならば、味方を呼ぶ。勝率を上げる為に様々な策略を巡らす、背中から攻撃するなどはむしろ当たり前だ。

だからこそ恨む気はない。

まあ、サンダーソニアを悲しませる事になってしまつのは申し訳ない気持ちで一杯だが。

だが、周囲には未だこちらの味方の姿はない。

「さて、ではトドメを刺してやるガネ。あちらはこのような形でトドメを刺すのが余り気に入らないらしいから、申し訳ないが蠟で固めて窒息死してもらおうガネ？」

ドプリと近づいてきたMr.3が上げた右の掌から蠟を零れさせた時。

「それは困るな、私はまだ義妹を悲しませたくはない」

瞬間。

閃いた銀の尾がMr.3を吹き飛ばし、少し下がっていたMr.2もそのまま巻き込んで吹き飛ばした。

吹き飛びつつも、蠟の剣を作つて投げてきたが、それらは全てアスラの体を通していった。覇気も込めていない武器など通用しない。

足を振り上げた事から慌てて、壁を作るが……。

「嵐脚・大嵐」  
タイラン

巨大な斬撃が問答無用と言わんばかりにキャンドルウォールを切り裂いた。

啞然として、次の瞬間慌てて壁を消す。ぶち抜かれるならば、視界を遮るだけ今度は彼らにとって邪魔物になってしまふ。

そんな光景を呆然としてジャブラは見詰めていた。

「待たせたな、ここからは俺が相手だ」

海軍本部中將にしてCP長官、アスラ参戦。



第170話 - 戦い進んで (後書き)

アスラ登場です

周囲に姿が見えなかった理由は明日の分にて……

さて、明日はしばし無双にお付き合います

## 第171話 - 戦いは非情なり

「海軍本部の中将がお出ましとはおそれいるガネ？けれど、暗殺ならともかく、何をもって我々に手を出すガネ？」

Mr. 3がそうアスラに問いかける。

バロックワークス

BWの存在は未だ表だつては、賞金稼ぎの互助組織としての面しか表には出ていない。犯罪者でなければ、手出しは出来まい。

それ故の問いかけだったのだが……。

「賞金首を捕えに来るのに理由が必要か？」

そう言いつつ、アスラが示したのは一枚の賞金首が描かれた手配書……。

「あ

「あら

そこに描かれていた人物は……。

「あんた、何をやったガネ！？」

思わずMr. 3ことギヤルディーノが血相変えて、隣に立つ男に叫んでしまう程、よく似ていた。

まあ、これだけ特徴がありまくりの人物では、見間違える方が難しいだろうが。

「ダンスパウダーに関わる事件でな」

「ああ、そういう事もあったわねい」

アスラの言葉に、ポンと手を打ったボン・クレーだったが、Mr・3からすれば、頭を抱えたい気分だ。というか、実際抱えた。

これさえなければ、相手に手出しさせずに帰れたかもしれない。たのに！と思う。海軍本部の中将なんて相手にしたくない。とはいえ、見捨てる訳にもいかない。

こうなれば、と先程倒した相手を探す。

恐らく、何らかの関係がある様子だった。人質にすれば……そう思ったが、幾ら探しても、その姿はどこにもなかった。

Mr・3が内心で（消えたガネ！？）と叫んでいる頃、先程の場所から離れた岩場の陰で大気が渦を巻き、まるで扉のように開いた。

エアドア  
「空気扉」

ボタンと音を立てて、そこからジャブラを担いできた仮面にマントを羽織った男が扉を閉める。

それと共に、そこには何もなかったかのように普通の光景が広がっていた。

周囲を確認してから、男は仮面とマントを取り去る。ジャブラの服装や変身、彼の仮面やマントもそうだが、一重に裏で動く自分達の正体が誰かを分からなくさせる為の小道具。アスラがこのようなものを使っていないのも、彼の場合は表の世界の人間でもあるからだ。

取り去った事で現れたのはCP9のメンバーの1人、ブルーノ。彼は超人系悪魔の実ドアドアの実の能力者であり、その能力はどこ

にでもドアを作る事。  
その中でも、空気をドアとし、空間を移動するのはその真骨頂と  
いっていい。

「大丈夫か？」

「何とか、な」

あちこち痛いのは確かだが、骨が折れたりしている訳ではない。  
ならば、問題はないとジャブラは判断した。  
まあ、何はともあれ……。

「義兄貴が来た以上、これで終わりだろう」

「白銀平原」

一言。

呟かれた言葉と共にアスラの足元から白銀の液体が広がってゆく。  
嘗ては【白銀街道】の技名をつけていたが、あれではコースが読  
みやすい。何しろ真っ直ぐ伸びているのだから、真正面から来ると  
宣言しているようなものだ。

これはその改良型。  
線ではなく、面で広げる事でどこから攻撃するかを読みにくくさ  
せる。

広がった白銀は瞬く間にMr・2&3の足をも浸し。

「拳砲」

まるで氷の彫像が瞬時に水になったかのようにアスラの姿が崩れて、水銀溜まりに流れ落ち。

「弾種：徹甲」

ボン・クレーの右脇から盛り上がった時には既に拳が繰り出される瞬間だった。

それでも先の話から狙われているのはMr・2だけなのだろうと内心では自分に来たらどうしようかと怯えつつボン・クレーを見ていたからこそ、Mr・3の防御が間に合った。

拳とMr・2の間に蟬製の小型の盾を複数展開して。

まるで煎餅か何かのように纏めてお構いなしに叩き割りつつ、残骸ごとボン・クレーの横腹に叩きつけられた。

それでも意味がなかったのかと言われれば、もし、直撃していればMr・2の胴体には見事なトンネルが貫通していた所だっただろうが、拡散させた事で即死は避ける事が出来た。

だが、それでも尚、肋をまとめて叩き折り、ボン・クレーを吹き飛ばした。

「邪魔をするなら、貴様も同罪として処断するが？」

ガタガタと震えながらも、Mr・3からすれば、引く事はありません。

あの手この手でやっと組織でこの地位まで上がってきたというものもあるし、下手に上からの、未だ見えぬボスの命令に逆らったとなったら、どうなるか……これまで自分が何をしてきたかを考えれば、正直『考えたくない』というのが正直な気持ちだった。

「わわ、私にも事情つてもんがあるから引く訳にはいかんガネ…

…」

言った直後に後悔した。

向き直った迫力に圧倒されたのだ。だが、そこへ横から大怪我をした筈のボン・クレーがそれでも全力で蹴りをアスラへと打ち込んだ。

覇気の籠った一撃だったが、それを軽く上げた左腕でガードする。そのまま腕を振って弾くが、その間にMr.3も慌てて、Mr.2の下へと駆け寄り、アスラと距離を取った。

「だ、大丈夫カネ？」

大丈夫そうには見えない。

先程の一撃を喰らった際には嫌な音が自分にも聞こえた。

肋骨が折れたとなると、最悪内臓に刺さっている可能性もある。それでもMr.3としてはそう問いかけるしかなかった。

「Mr.3、あんた逃げなさい」

凄絶な笑みを浮かべたボン・クレーが何を言ったのか、一瞬ギャルディーノは分からなかった。

「なな、何を言ってるガネ！」

「あちしが足止めしてあげるから、あんたはさっさと逃げなさい。あいつはあちしが狙いみたいだから、あんたが逃げればわざわざ追ってくるとは思えないのよう」

自分からの正式な命令というなら、罰って事もそう酷くならないでしょ、多少はあるかもしれないけど、生きてなんぼよ。

そう続けたボン・クレーにならば何故、と問いかけたかった。

背を向けたボン・クレーはそれでも胸を張り、アスラに向け、啖呵を切る。

「あちしはオカマ！体は男で、心は女！」

「男の面子はないかもしれないけれど！  
女の誇りもないかもしれないけれど！

オカマにやオカマの意地がある！」

海軍が背中に正義の二文字背負うように、あちしの背に背負った

【オカマ道】！

仲間を庇って死ぬのなら！その道に何ら恥じる事なし！！咲かせてみせよう、オカマウェイ！」

そう告げ、構えを取ったボン・クレーの横にMr・3は無言で並んだ。

「……………逃げなさいって言ったはずよう？」

「……………あんた酷いガネ。あんな言い方されたら却って逃げられないガネ」

そう言いつつも、Mr・3の口元は笑っていた。

Mr・2ことボン・クレーも笑っていた。

「いくわよう！白蠟アラベスク！」

「キャンドルチャンピオン！」

渾身の力を込めた蹴りを。

全身を蠟で包み、巨大ロボットののような姿となって振り上げた拳

を。

アスラは静かに見詰め、両掌を体の前で合わせた。

「拳砲 弾種：三式」

三式弾と呼ばれる砲弾がある。

アスラが嘗てワンピースとして漫画を読んでいた世界において過去の戦争時に、対空用の砲弾として開発された焼夷溜散弾だ。

この世界の六式ではなく、それに名を借りたこの一撃の特徴は数すなわち、一撃一撃の重さではなく、速さによる拳の弾幕を繰り出す一撃。

だが、軽いとはいってもそれはアスラの間感。すなわち。

ボン・クレーも。

Mr.3も。

その攻撃を弾くどころか真っ向粉碎する形で全身に拳の弾幕を受け、吹き飛ばされた。



第171話 - 戦いは非情なり (後書き)

という訳で、アスラの前に2人共粉碎されました

ボンちゃんの啖呵は迷いました  
もう少し変えるかもしれません

## 第172話・戦闘終結

勝負は決した。

力なき正義は無力だが、力なき主張もまた無力だ。

もがいているが、Mr・2ボン・クレーもMr・3ギャルディー  
ノも立てる様子はない。

このまま放置していても、砂漠の真つ只中だ。

加えて、一種の隠れ場所みたいな所だったからこそ、ボン・クレ  
ーも指名手配されているのに、あの格好が出来た。裏を返せば、本  
来のキャラバンなどが通るルートからは外れているという事でもあ  
る。

放置しておいても、誰にも見つかる事なく干物の出来あがりだろ  
うが……そんな不確実な事はしない。

砂を踏む音をさせながら、アスラが近づくと、ボン・クレーが呻  
きながら声を上げた。

「海軍なんか……負けてらんないのよう……」

「オカマ王か？」

分かっているからこそ、アスラはそう呟いた。

オカマ王イワンコフ。

カマバツカ王国の永久欠番たる彼女(?)を目の前の男が探して  
いた事を思い出したのだ。

「……知ってるのねい。なら分かるでしょ。あんな謂われなき罪  
で」

「成る程、お前もそう思っているか」

ならば問題はなさそうだな。  
そう呟いたアスラに、ボン・クレーは疑念を浮かべる。その言い方ではまるで……。

「……あちしが知らない何かがあるっていつの？」

「かもしれんし、ないのかもしれん。どのみちお前には関係のない話だ」

あるわよう、と声を上げるも、立ち上がる事は出来ない。  
アスラはそのまま歩み寄り。

「嵐脚・暴風」  
ストーム

空へ向けて、わざと集束を甘くした嵐脚を放った。  
集束を甘くする事により、鈍器としての役割を果たすのがこの嵐脚だ。元々は原作のバギーを思い出して、選択肢の一つとしての斬撃以外の効果を持つ嵐脚を生み出せないか考えた結果だったが。  
この一撃を受け、上空からの奇襲を阻まれた人物が舌打ちしつつ着地した。

「あ、あなた……まさかMr・1カネ？」

胸に描かれた「壱」の文字。

以前に新世界にある施設ですれ違った事があったMr・3が掠れた声で呟く。

Mr・1はチラリ、と視線を送るがすぐにアスラへと視線を戻す。

「……お前も邪魔をするか。その様子だと彼らの仲間の1人、と

「いう事か？」

「……………白々しい事を言う」

Mr. 1の言葉に、顔には出さないが、アスラも内心『確かに』と苦笑する。

あくまで『自分はBWの内部など知らない』という風情を装っているが、アスラがCP長官であり、BWと裏で激しい暗闘を繰り広げているというのは知っている者には公然の秘密という奴だ。

それは当然、目前のMr. 1ことダズもそうであったが、アスラの立場としてはあくまで『指名手配の犯罪者であるボン・クレーの逮捕に来た』という姿勢を今、崩す訳にはいかなかったのだ。

ただ、同時にクロコダイルが原作での最終作戦同様戦力を集結させつつある事はこれで確認出来た。

これでMr. 4コンビと5コンビまで出てくればオフィサー・エージェントは全員集結となるが、現状でも1〜3が集結しているというのはクロコダイルが追込みを始めたのだとアスラは判断していた。

「……………まあ、いい。どのみちする事は変わらん」

そう呟くと、アスラは悠然と歩み寄る。

今度こそ呻く2人に止めを刺さんとばかりのその様子に、ダズ・ボーンズとしては立ちほだかざるをえない。

「スーパーレイク  
滅裂斬」

腕を交差させ、アスラを切り裂こうとする。

だが、その両腕を踏み込んだアスラががっしりと掴んだ。

刃物というものは掴んだ状態だと案外斬れない。無論、握ってい

る状態から引かれれば掌がすっぱりいくのだが、そこはアスラの悪魔の實の効果物が物を言う。

無論、Mr・1も覇気を用いているのだが、その制御はミホークなどと比べるべくもない。

（覇気の大判ぶるまいだな……）

原作では覇気を用いる人間は限られていた。

それだけにアスラとしては苦笑せざるをえない。それもこれもグランドライン後半、新世界にまでクロコダイルがBWの施設を広げたせいだと思つと腹立たしい。そう思つた直後に、自身やミホークもエース達に覇気を教えていた事を思い出して、再度内心で苦笑する羽目になつた。

「指銃変形・膝砲しっぽう」

放たれた膝蹴りに対して。

「！斬人！スパイダー」

咄嗟にMr・1は体を刃物に、すなわち鉄の硬度をに変えて耐えようとするが、予想以上の衝撃に顔を歪める。

元より【指銃】は【鉄塊】との併用だ。

今回の場合は覇気を纏つた鉄並の硬度の膝蹴りが叩き込まれている。これでは全身を刃物並の強度に変えた所でそれを打ち抜いてダメージが来ても、むしろ当然と言える。

思わず、といった風情で顔が下を向き、膝が曲がり、腰が引ける。そこへ追撃とばかりに叩き込まれた蹴りがMr・1を吹き飛ばした。

その光景を何とか……全身を蠟による鎧で包まれていただけにまだMr. 2よりはマシな状態だったMr. 3は何とか顔を上げて見ている。そして、その光景にはもう笑うしかなかった。バロックワークス相棒達はいないとはいえ、仮にも今ここには、BWのMr. 1と3という組織のトップクラスの実力者達が揃っている。確かに戦力の逐次投入に結果的になってしまったとはいえ、その総がかりでただ一人を止められないどころか、圧倒されている。

(……海軍本部の中将というのはここまで恐ろしい相手カネ)

暗い気持ちになるMr. 3だった。

Mr. 1にしても、こうまで自分達が歯が立たないというのは予想外だった。もう少し善戦出来ると思っていたからだ。

だが、到着してみれば既にMr. 2、Mr. 3双方とも戦闘不能。不甲斐ないという気持ちがなかった訳ではなかったが、いざ戦ってみれば自分とて彼らの事を笑えない有様だ。

だが、彼とて何も目算なしにここで戦い続けている訳ではない。時間を稼ぐ必要があったのだが、それは何とか報われようとしていた。

デザート・シラソーレ  
(砂漠の向日葵)

不意に踏み出したアスラの足元が不確かなものになった。

砂が急速に崩れ、飲み込まれる。流砂だ。

流砂というものは映画などと異なり、そうそう飲み込まれるものではない。ただし、それはあくまで通常のものである場合だ。悪魔の実で操られた流砂はその限りではない。

「……これは」

眩きつつ、冷静に対処する。

周囲へと水銀を平原同様に放出し、流砂でない足場の確保を探ると同時に九尾を伸ばして、埋まりかけた体を強引に引きずり出す。だが、この現象はそれ以上に厄介な相手の到着を意味していた。

(……クロコダイルまで来たのか?)

いや、自分が来た以上、あちらもトップが来たとしてもおかしくはない訳だが……。

それだけではない。

急速に周囲は砂に隠されつつあった。砂嵐が全てを包み込もうとしているのだ。

ふう、と溜息をつき、アスラは手元の電伝虫に連絡を取った。

「聞こえるか、ブルーノ」

『はい』

指示を下した後、アスラは顔を上げた。

既に周囲は砂嵐に包まれ、アスラが電伝虫に連絡を取っている間に、Mr. 1が2と3の下へと駆け寄り、砂嵐の中へと姿を消していた。これが自然発生したものならば、そんな行動は取るまい。

通常ならば、砂嵐が発生した場合は岩陰なりでひたすら吹き飛ばされぬよう、じっと身を潜めているべきだからだ。

「ここまでやって最終戦果が未確認とはな」

ぼやきつつ、九尾を伸ばす。

伸びた九尾は通常とは異なり、更に巨大に、そして分裂する。

「九尾・乱れ桜」

原作が載っていたのと同じ雑誌で嘗て掲載されていた古代中国風世界漫画『封神演義』。

その中でも強大な力を誇った禁鞭。

それを再現するかのような広範囲殲滅攻撃。

大地の上を、砂嵐の中を全てを薙ぎ払う銀の暴風が吹き荒れた。



## 第172話 - 戦闘終結（後書き）

アスラが来たように、BW側も最終兵器がギリギリで到着しました

何故、彼らが来れたのか

もちろん、アラバスタ王国に集結しつつあったのは事実ですが、わざわざ戦力を集中投入した理由というか、この場にクロコダイルまで来た理由は次回にて……

## 第173話・戦い済んで（BW編）

砂嵐に紛れて、クロコダイルはアスラを見ていた。

膨大な質量を持った銀の鞭が荒れ狂っていたが、さすがに巨大なそれら全てに覇気を行き届かせるのは無理だ。事実、幾度かクロコダイルの体も粉碎されていたが、その全てにおいて即座の再生を果たしていた。

「……ふん」

ここは砂漠。クロコダイルのフィールドだ。

だが、今手を出す訳にはいかない。

アスラ中將が指名手配されているMr. 2を狙って動き、Mr. 1と3はその妨害をしたという理由で攻撃したように、クロコダイルもまたアスラ中將に手を出せば反撃を受ける。

別にそれが恐ろしいとは思わないが、下手に手を出せば、自分が関わっている証拠になる。

どのみち今も関わっている事には変わらないが、姿を見せている以上、確たる証拠には程遠い。少なくとも、自身が関わっているという証拠として、堂々とBWに対して攻撃を仕掛けるには弱いらう。

「……本気で殺り合う時が来るのかね」

面白そうに呟きながら、背を向け歩き出す。

面倒なだけだから来て欲しくないような、全ての計画を放り出して思う存分やりあってみたいような気持ちが入り混じっているような複雑な気分だ。

口元に微かに笑みを浮かべたまま、クロコダイルはその場を離れ

て行った。

アスラとの戦闘があつた場所から実に数キロ離れた場所。

それでも尚、アスラが立っていた場所からは死角となる位置を選ぶように、白く大きな球体が砂漠から浮かび上がってきた。

しばらくすると、溶けるようにして崩れ去り、その中からMr. 2を肩に担いだMr. 1と、ポロポロながら何とか立って歩けるまでに回復したMr. 3が出てきた。

この辺の差は単純に鎧をまもつていたかどうかだけでなく、殺す気だつた相手とおまけの差もあつただらう。

あの時、砂嵐に身を隠した後、即Mr. 3は根性でこの球体を作らされた。

作らなければ死ぬ、そう言われては死ぬ気でやらざるをえない。

Mr. 3も先程の戦闘から考えて、『死ぬ』という言葉が冗談の類だと考えれる程樂觀的にはなれなかつた。そうやって、完成させた自分達をすっぽり包んで尚余裕のある蠟の球体は中からは分からなかつたが、そのまま地面が流砂　それも液体並に柔らかく溶け崩れ、球体を飲み込み、そのまま流れに乗せて、ここまで運んできたのだつた。

球体にしたのは圧力の関係上で、何しろ砂という水と比べれば遙かに圧力の高い中を通るのだ。シエルターに用いられているように、球体という形で圧力を分散させるのは基本だつた。

「……な、何とか生き残れた、カネ」

どことなく落ち着かない風情で辺りをきよろきよろと見回すMr. 3を責めたりはしない。

(……まだまだ未熟という事か)

ふう、とMr.1は溜息をつく。  
上には上がいる。

そんな事は分かっていた。

西の海にいた頃、ダズ・ボーンズは敵なしだった。超人系悪魔の実スパスパの実を食い、刃物人間となつてからは尚更だった。それはBWにおいても変わらず、ボスを除けばトップの地位にあるMr.1の名を順調に手に入れた。

新世界でも初期は勝てない相手もいたし、苦戦もしたが、何時しか普通に航海を可能としていた。

……だが、勝てなかった。

(……海軍本部中將にして、CP長官アスラ……)

大將に最も近い中將とも呼ばれる相手。

それがどこまで真実かは分からない。何しろ、ダズは海軍本部大將とやりあつた事などないのだから、比べようがない。だが、相手は中將だ、大將がそれより劣る事はあるまい。

面白い、と本気で思う。

これだから世界は面白い。

そんな事を考えるダズの傍で、Mr.3もまた考えていた。

今回生き残つたのは本当に偶然の結果だ。

もし、最初からアスラ中將が自分も殺す気で迫っていたら……そう考えると震えが走る。

Mr.3の食つた超人系悪魔の実ドルドルの実は、確かにMr.2のマネマネの実よりは戦闘にも使いやすい能力だ。その能力は悪

魔の蛹を生み出す事であり、それを操作する事。固まれば鉄並の硬度を持つから、壊すのも簡単にはいかない、いかない筈だった。

だが、現実はどうだっただろうか？

(まるで歯が立たなかつたガネ……)

あれが世界トップクラスの実力か、と思う。

自分はオフィサー・エージェントの中では元々強い方ではなかつた。

単純な戦闘力ではMr.4の方が上と言われながら、それでも策略を巡らす能力などが評価され、現在の立場に至つた。

新世界に放り込まれ、死ぬかと思ひながらも何とか生き延びた。

嘗ては仲間でも利用する道具だつた。

昔の自分だつたら、Mr.2が「逃げろ」と言われた時、さつさと逃げていた筈だ。もっともあの時点なら、「しめた」と思う以前に本物の恐怖から逃げていたかもしれないが。

だが、それでは新世界で生きられなかつた。

利用するだけの道具扱いで生き延びられる程、新世界は甘い海ではない。

いや、単純に生活するだけなら何とかなるかもしれないが、間違つても戦闘ではそんな事は不可能だつた。

ちらり、と視線をようやくと駆けつけたBWの構成員達に運ばれていくMr.2を見る。

この場所はBWの集結地点の1つだ。

今回の場合で言えば、Mr.2のおつき連中があゝの場所から脱出して、再集結した地点であり、彼らの顔はMr.2を心配する様子がありありと浮き出ている。

オカマだのなんだのは関係ない。

(……純粹に上に立つ者として慕われてるガネ)

ある意味羨ましい話だ。

見た目ではなく、中身、という事か。これまで積み重ねてきた信頼の成果だろう。

とはいえ……。

(私にはアレはマネ出来んガネ)

誰かの為に命を賭ける。

それも愛する人などではない。同じ組織の人間とはいえ、これまで親しくつきあってきた友人という訳でもない。

仲間。

ただ、それだけでMr. 2は命をあっさりと賭けた。

あれははつきり言ってしまえば、組織の幹部としては失格だ。組織の上に立つ人間、しかもBWの策略で重要な役割を任されているという事は聞いていたから、そんな責任者は何が何でも生き延びねばならない。

そう、それこそあの場ではMr. 3を犠牲にしても生き延びねば……。

それが理解出来て、ぶるりと体を震わせた。一歩間違えれば、自分の命はあそこで終わりだったのだろう。とはいえ……何とかしたいからと思つた所で、今からすぐ、アレを何とか出来るぐらいに、アレを足止めて逃げ延びるぐらいに強くなれるなら誰も苦労はない。

(……とすると……)

なるべく、あんなのと当たらずに済むように頭を使つしかあるまい。

（まあ、海軍本部中将なんて相手とそうほいほい出会う事もないガネ……ないでほしいガネ）

自分が働いているのが真つ当な組織ではない事に改めて思い至る。そりゃあ、表立ってはまだB Wは犯罪組織ではない。

だが、裏切り者の肅清なんて任務まであれば、ここが相互に助け合う単なる互助会だなんて思える訳がない。上げられている理想だつて穩便に済む計画だなんて思っていない。それでも1人でせこせこやっているよりは未来に目があると思つたから、今ここにいます。今更抜けるなんて道もない。

（しかし……）

今回の脱出で自分達をここまで運んだのは何者なのか。

さすがに砂の中をキロ単位で運ばれ、運ばれた先がB Wの集結地点の1つだなどという奇跡が偶然起きるとはMr. 3とて思わない。間違いなく、何者かが関わっているのだろうが、何故その相手は姿を見せないのか？

単純なエージェントならば、自分含めたここにいるメンバーの立場を考えると顔ぐらいいは出すだろう。

だとすると……。

（……まだ、顔を見せない組織のボスカネ……）

一体どんな相手なのだろう、ふとそう思った。

せめて、今度あんな相手が出てきたら、その相手と戦える人がボスでありますように、本気で空に輝きだした夜空の星に祈るMr. 3であった。

第173話・戦い済んで（BW編）（後書き）

小説書いてました

酷く眠くなって、少しだけ……と布団に横になりました

はい、予想つくと思いますが、目が覚めたら朝でした

やはり、仕事から帰って疲れてる時の仮眠のつもり、はあてになり  
ませんね……



## 第174話・戦い済んで（CP側）

マリンフォードの海軍本部、その一室。

そこにアスラの姿があつた。

片端から書類を捌いていたアスラが、ふと一枚の書類で手が止まつた。

「…………やはりか」

その報告書はBWの生存を伝えるもの。

現状、情報操作と思われる動きが停止しているのは単純に次のステージへと移つたからなのか、それとも自分がMr.2を叩きのめしたからなのか…………それが分からないのはもどかしい。

ただ、Mr.3の姿が確認された。

彼1人だけとは思えないから、これは3人共生存していると判断すべきだろう。

現在、Mr.1&3に関しては正式な手配書が回っている。

海軍本部中将アスラに対して攻撃してきた、或いは犯罪者を庇つたのは事実だし、裏で何をやっているかある程度判明している現在、彼らを手配するのは決して難しい事ではなかった。

まあ、賞金は然程高くない訳だが…………Mr.3は。ここら辺は元々の名前が売れていたかどうかの違いだ。

これによって、次に遭遇した際は捕縛なり攻撃なりの理由がつけられる。

もつとも、次が何時になるか分からないが…………。

前回、クロコダイルらが動いた原因は他ならぬアスラが原因だっ

た。

元々、アスラの動きをクロコダイルは警戒していた。

これは純粹に脅威という事もあるが、同時に目立つ為、行動を監視しやすい、という事もある。こちら辺はアスラがクロコダイルに対して監視をつけているのと同じだ。

事実、レインデイナーズのクロコダイルのカジノは政府関係者立ち入り禁止だが、実際にはカジノで遊ぶぐらいは政府関係者であるCPの人間がやっている。大物ならばともかく、下っ端の分析官や捜査員は怪しい行動を取らない限り、即ばれる程そこまで顔が売れていないからだ。

アスラは違う。

顔も知られているし、行動する際も目立つ。

戦艦メルクリウス号以外を使う事も可能だが、逆にアスラの立場上、王国に黙って潜入というのは余計な政治問題の原因になりかねない。海軍本部中將にして外交官、そしてCP長官というのはそうした面も含んでいる。例え、どんなにプライベートで、アラバスタ王国の国王や王女と仲が良くても、だ。

結果として、今回も堂々とアラバスタ王国に入港している。

その時点から密かな監視は為されていた。もちろん、アスラもそんな事（監視）は百も承知だ。

それを踏まえた上でドアドアの実の能力という裏技を用いたからこそ、一時的に足取りをくらませ、クロコダイルとMr.1の到着はMr.2が重傷を負ってから、という事態になった訳だが……。

（仕留め損ねたのは痛かったな）

現在の彼らの実力を測れた事、罪を犯した事で手配出来た事よしとするしかない。

まさか、命の危険がある、あの状況で実力を隠していたなどとい

う事はあるまい。

いずれにせよ、終わった事だ。今更どころする事は出来ない。  
問題は、これからどうするか、だ。

(間違いなく、奴の計画は追い込みにかかっている)

Mr・2 だけならば今動いている人員なのだから当然だった。

Mr・1か3が来ただけならば、その護衛役として考えられる可能性があった。

だが、今回は1と3の全員がいた。

(……3の相棒は直接戦闘能力はなかった筈だから、あの場になかった事は問題ない。1の相棒は……何とかいう酒場かどっかに原作ではいた、ような……)

本当はスパイダース・カフェなのだが、さすがにそこまで覚えていない。

最大の原因は彼女が余り表立って動いていないからだ。目撃回数そのものが少ないから、どうしても正体や拠点を探る動きもより活発な方に回さざるをえない。

「とりあえずはMr・2ばかりとは言ってられない、か」

変身能力を持つMr・2の捕捉にはかなりの要員を必要とする。

無論、今後も搜索は続くし、抹殺命令そのものは有効なのだが……  
…当面は動けないであろう相手よりも実際に動いている者達を優先しないといけないのは当然の話だ。

現状で想定されているのは、事前の活動によりアラバスタ王国内部に国民の不満を溜めた上で、世界政府の暴走を印象づけるものとみられている。

この際、各国にもその情報が広まれば尚良い。

もし、アラバスタ王国1国に戦力を集中出来なくすれば……クロコダイルの計画はほぼ成功をみる。

ルッチとカク、カリファにクマドリ、フクロウが今回の作戦に同行しなかったのも、そちらを全力で探っている、そして発見次第抹殺というサーチアンドレストロイに専念しているからだ。

幸いというべきか、BWの規模的にそこまで大規模にやる事は困難らしく、大部分の国においては新聞の買収や担当の者数名といった具合になっている。担当している者がいる場合は消した上で、CP要員が代わりに成り済まし、新聞を買収した場合はその発行を抑える準備を整えている。尚、記者が抵抗した場合は即効で『不幸な事故』が起きる手筈になっている。

「後の問題は……Mr.4にミス・メリークリスマス、Mr.5にミス・バレンタイン、だな」

彼らとて、原作では特にMr.5とミス・バレンタインはやられ役扱いだったが、実際に相手取るとなると決して馬鹿にしていい相手ではない。

幸いなのは、ミス・メリークリスマスを除けば彼らの能力が戦闘に偏っている事か。

アスラとしては、1つ大きな懸念となっていたのがクロコダイルが天竜人に手を出したりはしないだろうかという点だったのだが、今の所その気配はない。クロコダイルとしてもコントロール不可な相手だ。下手に手を出して厄介な事態を招くのは回避したいだろう、と判断する事にした。

そんな時だった。

「?電伝虫が……アスラだが」

上役という事もないではないのだが、そこは電伝虫が別になっている。

どうも、その仕組みが分からないのだが、ありがたいのは確かだ。そして、連絡の内容はクマドリからであり……正直に言おう。その内容はアスラにとっても予想外の事態だった。

『BWのMr.5コンビを発見。彼らの暗殺現場に介入し、戦闘に突入した』

通信はそのような内容だった。

第174話 - 戦い済んで（CP側）（後書き）

まず、昨晩は更新停止してごめんなさい

昨日帰ってきて、書いている最中の話でしたが、表現に悩みながら遅々として進まない時に、現在では削除されていますが、感想での最後の文章を読んでしまいました……

正直に申し上げれば、疲れて、頭を悩ませていた時に暴言といいますが、荒しいと思いますか……読んだ瞬間に、気力をごそつと削られた気分だったんです

結局、頑張ってみたものの、書き直しを繰り返した後、更新断念した次第です

遂に毎日更新途絶えてしまった……

## 第175話・コロシアイ

バロックワークス

BWのMr.5とミス・バレンタインは張り切っていた。

理由は上の失敗だ。

先だって、Mr.1から3まで上位を占める面々が揃って敗退した。

特に特殊工作を担当するMr.2は当面行動不能な程の重傷を負ったという。

これで、自分達が作戦に成功すれば上がこけた分、自分達の評価が上がるという訳だ。もちろん、相手が悪すぎた、という事までは伝わっていないのだが……。

もつとも、Mr.2に関しては2人とも「大丈夫か？」と心配してはいる。これはMr.2が理想国家建設後の地位には関係がない事が周知されているからだ。

無論、報酬がない訳ではなく、組織からMr.2がどうしても欲しがっている情報などが渡される事は判明している。

これはクロコダイルがMr.2の特殊工作に他の者が素直に協力可能なよう、Mr.2を蹴落とし、自分が上へと上がる為に妨害などしないよう配慮した為だ。自らの出世に関係がない、となれば同じ組織の人間として心配もしようというものだし、協力も可能だ。

かといって、まるで報酬がなければ、欲深な者から『何を企んでいる』と疑いの目を向けられかねないので、きちんと別の形ながらMr.2が求める報酬はあるし、それを提供する話になっている、という事も伝わっている訳だ。Mr.2の自らの命さえ賭けられる仲間思いな気持ちなどは、分からない奴には絶対分からない。

さて、悪魔の實の能力者は例外もあるが暗殺を狙うなら実に有効だ。

理由は単純で、特に武器などを必要としないからだ。ボディチェックを行なっても、武器らしい武器は全くない。その癖、相手を確実に殺せるだけの力をちゃんと鍛えていれば持つ事が出来る。

海楼石があれば、相手が能力者かどうか、或いはその能力を封じる事が出来るのだが、それらは世界政府が厳重に管理していて、それなりの高位にある世界政府関係者以外では滅多な事では手に入れる事が出来ない。

結果、Mr.5の場合だと、招待状なりを入手して中に入りさえすれば……後は起爆タイミングの問題だけだ。

狙った相手の襟元に髪の毛をつける。

起爆させれば、首は半分がた吹き飛び、血が噴き出した。一瞬の静寂の後悲鳴が上がり、パーティー会場は大騒動になった。

そして、その国の警察組織が来た時には既に屋敷の外へと脱出していた。

「きゃははは、上手くいった?」

「ああ」

今回のターゲットはアラバスタ近隣の王国の新聞の大株主の1人。現在、BWとしてはアラバスタ王国だけでなく、周囲の国でも世界政府への不信感を上昇させようと、この世界では広く親しまれている新聞を用いた戦略を取っている。

別に疑念をもたれるような内容をわざわざ書く必要はない。

世界政府にとって不利な内容でも遠慮なく書いて欲しい、のだから……この国最大級の新聞の大株主である、この御仁。世界政府からリベートを貰い、不利な事を書かないよう圧力をかけていたのだっ



た。そういう御仁だから当然あちらこちらから恨まれるような事を仕出かしており、暗殺したからといって素直にクロコダイルに辿り着かれるような事にはなるまい。

財産を継ぐべき息子の方はギャンブル好きで、そこについて借金だらけにしてある。

後は株式を穩当に譲り受けるだけの話だ。それだけで後の財産は残るのだから、実に親切な話だろう。

もちろん、イカサマギャンブルで借金だらけにしたのが誰かを考えなければ、の話だが。

「とりあえず、今はチャンスだからな。ここで功績を稼げば、上へと上げられる可能性が高い」

「きやはははは、確かにそうだよね」

上の失敗は下のチャンス。

加えて、Mr・1と3まで指名手配されている。

きちんと仕事をこなしていけば、Mr・1は厳しいかもしれないが、Mr・3ぐらいは十分に狙えるかもしれない。

「その為にはミスは許されん。だから……」

「きやははは、いい加減出てきたら？」

声をかけると、音もなく大柄で錫杖を持った男が木陰から現れた。

「気付いたあゝなかなかやるよよいっ」

その言葉に2人して苦笑する。

先程からわざとらしく殺気を出していた癖によく言うと思ったか

らだ。その証拠に目の前に姿を見せた後はピタリと見事なまでに殺気を抑えている。

……逆に言えば殺気をコントロール可能なぐらいの凄腕とみた方が良さそうだ。

「何の用かな？」

「なあに、少し話があるだけよよいっ」

そう言いつつ、無造作に歩み寄ってくる。

殺気もなく。

警戒さえ生まず。

無造作に踏み込んできて。

「死んで欲しいよよいっ」

「!!」

同じく無造作に突き出された錫杖を避けたのは奇跡だろう。

サングラスを掠め、外れたそれを、そのまま砕きながら。

けれど、錫杖は既に引き戻されている。

……反応があと僅かに遅れていたら、間違いなく眉間をぶち抜かれていた。そう理解出来ると同時にどつと背中に冷たい汗が噴出してくる。本気で命の危険を感じたのは久方ぶりの事だった。

慌てて距離を取る……取るうとした。

気付けば、目の前に男はいた。

自分が全力で後退する動きに易々といいてきて、今正に錫杖をまるでビリヤードのキューのように放とうと……。

「1万キロプレス！」

その前に瞬時に跳び退った。

直後にミス・バレンタインが飛び降りてくる。どうやら男の直上にジャンプ後、即座に重量を増して降下したらしい。

高度が低かったせいだろう、地面に多少めり込んではあるが、精々足首ぐらいまでだ。

「助かった」

「どういたしまして」

……何時もの笑い声がない。

ミス・バレンタインも緊張しているのか。……何故、あそこまであの攻撃が放たれる直前まで分からなかったのか、今になってようやく分かった。……ないのだ、殺気が。

殺気も何もなく、奴は俺を殺しに来た。

俺にとって起爆は作業だ。面と向かって殺す訳ではないからこそ平然と押せる。……だが、もし自分が相手と直接対峙して攻撃を仕掛けるならば殺気が洩れる。

だが、奴は……そう、人を殺す事そのものが奴にとっては作業なのだろう。……どれだけの人間を殺せば、或いは訓練を積みめばそこまでいけるのだろうか？ 1つだけはつきりしているのは、奴の手は自分以上に血に染まっているだろう、という事だ。

暗殺者か？

だが、賞金もかかっていない自分達を狙ってくる理由が分からない。

いや、これまで殺した奴の親族なりが雇ったという可能性はあるが……。

「お前は誰だ？ 誰に頼まれた」

返答は 2人に向け放たれた刃だった。

「嵐脚〜蓮華！」

渦を巻くようにして放たれた真空の刃が向かってくる。

この攻撃をミス・バレンタインは体重を最低に落とし、風の流れに乗りかわす。

Mr.5は地面に自身の体を叩きつけるようにして地面を爆砕し、吹き上がる土砂に塗れながら相殺した。

そのまま土塗れになりながら地面を転がる。予想通り。

「指銃Q！」

再び速射砲の如き勢いで錫杖が連射される。

慌ててミス・バレンタインが再び上空へと回ろうとして

「生命帰還 獅子指銃！」

髪がうねり、指のような形状を形作り、それがミス・バレンタインへ向け放たれた。

傘で咄嗟に防ぐもそのまま弾き飛ばされる。いや、むしろ1kgにしている助かったと見るべきか。下手に大重量にしていたら、傘ごと貫かれて一巻の終わりだったかもしれない。

再び地面を爆破し、その爆風に乗って距離を取ると共に、悲鳴を上げて吹き飛んだミス・バレンタインの傍に降り立つ。

「……能力者か？」

髪がうねっていた。

あんな事が普通の人間に出来る事とも思えない。髪なりを操る能力者と見るのが正しいのだろうか……何か引掛かる。

「……思い出した」

そんな時、ぽつりとミス・バレンタインが呟いた。

「普通のととは違ってるから、配布されたのと違うから分からなかったけれど　六式だわ、これ」

六式。

それで繋がった。

そうだ、【指銃】【嵐脚】、いずれも以前にオフィサー・エージエントに配布された資料にあった六式そのものではないか。すなわちそれが意味する事は……。

サイファーボール  
「CP……おそらくは」

「「CP9」」

Mr・5とミス・バレンタインの言葉が重なった。

## 第175話・コロシアイ（後書き）

まず……

多くの励ましの感想本当にありがとうございます

理想郷などでも投稿した事はありませんので……普段は流すんですが、あの時はどうにも反応してしまったんですよ

さて、今回は殺し合いです

CP9だって厳しい任務をこなしてきたんですから、経験とか相当なものだと思うんですよ

無論、Mr.5達だってこのままじゃ終わりません

相手が分からなかったが故の混乱で先手を打たれたが為に、今回の話ではこうなった、とお考え下さい

次回は逆襲です

第176話 - 決着と裏事情（前書き）

返信ももう少しお待ち下さい  
今晚か明日には…

## 第176話 - 決着と裏事情

相手が分かれば、相手の行動にも納得がいく。

そこからはMr.5らの行動は明らかに落ち着いたものとなった。無論、クマドリの攻撃はMr.5を掠めるのだが、クマドリ自身も掠める程度の場合はむしろ引かざるをえない。

既に情報として把握しているが、相手はボムボムの実の爆弾人間。下手に血でもこちらについたら、それこそえらい事になる。どの程度で致命傷になるかなど試したくもない。

結果として、このまま当たっても致命傷にならないと判断するや、クマドリは指銃Qを引く。

その繰り返しだった。

「ノーズファンシーキャノン  
鼻空想砲！」

無言でかわす。

爆発以前に絶対当たりたくない。あんなもの。

あんなものをそれなりの射程でちゃんと狙った方向に飛ばすのは大したものだと思うが、それでもその性質上 サイズが小さく、軽い どうしても速度は遅い。ネタさえ分かっていたら、真っ直ぐしか飛んでこないのだからよけるのはそう難しい話ではない。

(しかし……)

ちら、と視線をミス・バレンタインに向ける。

どういう訳か、彼女は先程から動いていない。

まるで何かを待っているかのように……。

(考えすぎか？だが……)



動かないならば脅威ではない。

彼女の能力はキロキロの実。能力は体重を1〜10000kgまで自由に変えられる事。

せめて、彼女に自分にある程度ついていけるだけの能力があればまた話は変わってくるだろうが、先程も上空へ舞い上がったのプレスアタックのみだった。

もし、自分に、クマドリにあの能力があれば、単純に同じステツプを刻んでもまるで違った動きが可能な筈。同じ動作だけに格闘に長けた者である程困惑は酷くなつたはずだ。

惜しいとは思うが、こちらとしてはありがたい。

そうして、それが幾度か続いた時の事だった。ふわりとミス・バレンタインがMr.5の肩に乗った。

何か仕掛けてくるのか、そう思う目の前で、再びMr.5が鼻をほじった。

またか、と思いつつも意識を向ける。

その視線の先で再び、指で弾く姿勢をMr.5が取る。

ノースファンシー  
「鼻空想………」

その瞬間。

クマドリは確かに見た。Mr.5の口元が歪むのを。

勘が警鐘を鳴り響かせる。瞬間、横に跳び。

メイン  
「地雷！」

クマドリのすぐ横手の地面が爆発した。

種明かしをすれば簡単だ。

ノースファンシーキャノン  
先程から幾度か放っていた【鼻空想砲】。放っていたハナク……

弾は外れたからといって消えたりはしない。

飛んだ弾は指で弾かれた勢いを失えば、自然と地面に落ちる。  
今回、Mr.5が用いたのはそうした地面に落ちた奴の再利用だ。  
いや、それを狙っていたというべきか。

幸い、直撃こそ咄嗟の判断で避けられたものの、クマドリはバランスを崩し、たたらを踏んだ。

急ぎ、態勢を立て直し、前を見れば。

「！」

空を飛び迫るミス・バレンタインの姿。

地雷が爆発する瞬間より僅かに早く、前に向かって飛び、地雷と共にMr.5が自分自身を起爆。地雷の爆発音に紛れて、ミス・バレンタインをクマドリに向けて飛ばしたのだった。

もし、失敗すれば体重を増加させて止まればいいだけだから気楽なものだ。

咄嗟の判断でクマドリは。

「生命帰還！」

自身の信頼する技に頼った。

だが、それこそミス・バレンタインの待っていた反応だった。  
自らに巻きついてきた髪をそのまま自身に絡むように、掴む。

「1万kgプレス！」

1kgで空を飛んでいた物体が急に10000kgになれば空ならんぞ飛んでいられず、急停止する事になる。

「！しまったくよよいつ！」

髪を掴まれているが故に引つ張られ、そちらへ体が泳ぐ。

生命帰還で操れるとはいえ、髪はあくまで髪だ。共に【生命帰還】で強化した場合、力的にはもっとも劣る。

急ぎ外そうとするが……。

何しろ、自分から突っ込んで掴んでいるのだ。通常の技としてクマドリから絡ませたのとは決定的に違う。

そして。

「！指銃Q！」

Mr.5が突っ込んでくるのを確認し、動こうとするが錨がくっついているようなものだ、動けない。

やむをえず、無理な姿勢から指銃Qを放つ。

だが、無理故にそれは血を飛沫かせはしたが、致命傷には程遠く、Mr.5がクマドリへと抱きつく。そちらに集中したが故に髪から力が抜けた所でミス・バレンタインは素早く手を離し、抜け出す。

一瞬迷ったが、このまま掴まれている方が拙いと判断し、クマドリもまた解く。だが、彼女が距離を取るように飛んだ所で……。

「全身起爆！」

「鉄塊・剛！」

大爆発が起きた。

「……逃げられたか」

鋭くMr.5は舌打ちした。

「きやはははは、貴方の爆発から逃れるなんて面倒な相手ね」

あの時の【全身起爆】に対して、この状況では逃げようがないと判断した為だろう。

クマドリは防御を全力を持って行なった。

結果として、何とか動ける状態のまま耐え、だが、これ以上の戦闘は困難と判断し、引いた。

足をやられなかったのも大きかっただろう。

そして、【剃】が使えるのならば、Mr・5らにクマドリの追撃は困難だ。

「……銃を持ってきてれば、もう少し楽だったんだが」

「きやは、仕方ないわよ。今回の任務じゃ目立つもの」

次に会う事があれば仕留める。

そう決意した2人だった。

「……ところで指名手配されないよな？」

「……世界政府の人間だからされるかも……」

そうになったら、自分達も折角功績立ててもMr・1らと同じ。

出世の夢が、と思い、冷や汗を垂らす2人だった。

ふう、とクマドリは溜息をつく。

無事脱出し、アスラ中将へと先程の戦闘の報告も入れた。

これでは長官が片付けてくれるだろう。怪我はしたが、防御が間に合ったお陰で致命的なものはない。

実は今回の暗殺は事前に察知していた。

ただ 邪魔だったのだ、世界政府にとっても今回の暗殺対象は。一見すると世界政府に尻尾を振る相手に思えるかもしれない。だが、癒着も過ぎれば毒になる。

初期には謙虚だった当人は次第に裏では一部勢力と結託した結果、他の勢力から恨まれていた。特に致命的だったのは、五老星直属の部下らの疑心暗鬼を結果的に煽る事になってしまった事だ。

何しろ、ある程度の情報を、別組織が台頭してきた際にそちらに擦り寄る手土産として提供したりしていたのだ。

次第に恨まれるようになって、今回の事態となった訳だが……。

「まったく〜疲れること〜疲れるが、んな仕事に関わりたくねえ〜よよいっ」

……では新聞社は、といえば、確かにBWは結構な割合の株式を抑えるが、それでも世界政府を抑える割合の方が大きくなっている。無論、BW側の影響も広がるだろうが、おそらく最終的にはどっちつかずの穏やかなものとなるだろう。

「まったく〜わしらのやってる事が〜何とも可愛く見えるよよいっ」

ぼやきながら、クマドリもまた任務へと戻っていった。

## 第176話 - 決着と裏事情（後書き）

とりあえずこの場での戦闘は決着

実はCP9にしてみれば出来レースではありませんた

もちろん、逆にBWが上手くいつてるケースもあるんですが……この辺は周辺国家に及ぼす影響力の差ですね

予定としてはBW編を一気に終盤に持って行って、その後にルフィらの冒険物語風味な話を書こうと思ってます

もしくは、BWとの最終場面に入る前にどっかで入れるか……どっちがいいですかね？

原作でのルフィは……まあ、なんとというか少年漫画ですよねw

## 第177話 - 状況進展

・世界政府、昨今の不穏な情勢を鑑えみて、の発表と共に駐屯地への兵力増強を発表。  
周辺国家からは一斉に反発の声が上がる。

・駐屯地に対して何者かによる襲撃事件発生。  
目撃情報の結果、服装や武器などからアラバスタ関係の人間ではないかとの記事。

・世界政府、アラバスタ王国に対して先だつての事件の調査への協力を要求。  
アラバスタ王国、国家の権利を侵害するような要求には応じられない、との談話を発表。  
あくまでアラバスタ王国主体とし、若干名の捜査官の派遣ならば受け入れる、との事。

・王下七武海サー・クロコダイル、仲介に乗り出す。  
世界政府側、アラバスタ王国側に会談の提案。

・アラバスタ王国軍駐屯地にて大規模な爆発事件発生。  
死傷者多数。  
その後の調査により何者かの爆発工作によるものである可能性が大と判明。

・サー・クロコダイル懸命の仲介により、会談催される。  
しかし、双方の意見が折り合わず、決裂に終わる。

「……サー・クロコダイルは今後も双方の仲介に努力する意を伝える。積極的な介入の意思を問うた所、当人は『平和でないと自身の商売に差し支えるから』と苦笑いしながら答える……か」

深い溜息をついて、アスラは新聞を放り投げた。

裏事情を知らない一般人がどのように思うか、想像するだけ馬鹿馬鹿しい。

結局、Mr・5らは指名手配出来なかった。

Mr・1と3はアスラという海軍本部中將という表の顔を持つ相手に対して、犯罪者の逮捕を妨害、攻撃を加えたという理由があった。

だが、Mr・5コンビの戦ったのはCP9の1人だ。

きちんとした理由なしに指名手配は出来ない。しかし、その理由としてCP9の1人との戦闘した事を上げられない。

というか、そもそも攻撃を仕掛けたのは政府側からだし、世界政府の職員がああ時あの島にいたという事自体が隠蔽対象だ。万が一という事も考えると到底出来るものではない。

(……おそらく、アラバスタ王国での爆発はMr・5の仕業だろうな)

他はどうか。

アラバスタ風の衣装を着せたBWの配下に襲わせてもいいだろうし、買収なり潜り込ませていた人員なりにそれっぽい衣装や武器を目撃した事を報告させてもいい。或いは、同じく買収なり脅迫なり



人質なりしたアラバスタ王国軍の人員を実際に用いてもいい。  
幾らでも方法はあるだろう。

……あの接触からBWの動きは加速した。

クロコダイル自身が表に出てくる機会も増えた。

余りの急展開に、アスラでさえ手を打つ機会を逸した程だ。どうやらクロコダイルが世界政府に働きかけたようだ。

といっても、別に軍を派遣してくれなどと言ってはいない。クロコダイルが連絡したのは1つだけ。

『不安定なのは困る、俺の部下どもを治安の安定に投入したいが  
？』

これだけだ。

言っている事はむしろ立派だ。

だが、世界政府からすれば、王下七武海の一角の戦力は幾ら味方側であっても削れるものならば削りたい。彼らは世界政府から認定されたとはいえ、所詮海賊に過ぎないからだ。

結果的に、世界政府は軍隊を増員して、治安の安定化を図ろうとした。それが周辺国家の神経を逆撫でするのは分かっている、クロコダイルの言葉を考えれば、アラバスタ近郊に世界政府陸軍兵力を置かざるをえなかった。

尚海軍ではないのは、海軍の本職はあくまで海であって、最悪、アラバスタ王国のような広大な国の奥深くに攻撃するような事は本来の任務ではないからだだった。

だが、後は見ての通りの有様だ。

海軍と陸軍はどこの世界でも仲が悪い。ましてや、この海が巨大な世界では海軍が予算の大部分を持って行ってしまい、海軍がエリートが集まると見られているから、陸軍は規模も小さく予算的にも  
圧迫される。

当然、それが当然と分かっているとしても、陸軍は海軍に不満を持つ。アスラムそこに介入する事は出来なかった。

(……緊張する世界政府とアラバスタ王国の関係、民衆の人気を高めるクロコダイル……原作ではああったが、今アラバスタでは反乱などは起きていない……とすると)

やはり、そういう事なのだろうか。

反乱軍の役割を政府軍に担わせる、そういう事なのか……。

(面倒なのはオフィサー・エージェント。入ってくる情報を吟味する限り、フロンティア・エージェントは危険なのは狙撃の2人組程度……)

自分がクロコダイルならばどうするだろうか？

それを懸命に考える。

今、クロコダイルは計画の最終段階に入っている。

ここでこちらが手を間違えれば……間違いなく、原作では失敗した計画の成功。

コブラ王もビビ王女も王家は途絶え、現時点で誠実な仲介者として世界政府とアラバスタ王国を懸命に交渉のテーブルにつかせようと尽力しているクロコダイルが民からの信任を受けて、王に就く。

チャカヤペルなど原作では最後の最後まで王家を守り続けた面々でも、現在はクロコダイルを信頼している有様だ。いや、コブラ王でさえ警戒を緩めてしまっている可能性がある。

当然だろうな……現状クロコダイルは自分の為と言いつつも、誠実な顔を見せている。

ビビ王女もイガラムも王宮にいる。

どこにいるかはつきりしていれば、狙いやすい……。

(……手が足りない)

あの時、Mr.13までを仕留める事が出来ていれば……いや、その場合は更にクロコダイルは延期していたか。

それに、クロコダイルには表に出てこないが、原作通りならばロビンもまたいるだろう……。

(……何より、このままいけば最悪……)

アラバスタの民衆と世界政府の妥協の産物として、正式にクロコダイルが新たな王として認められる可能性すらある。

嘗て、王として認められる事を求め、人質ごと抹殺された海賊がいた。

だが、今回は違う、クロコダイルは海賊とはいえ王下七武海として賞金を外されており、世界政府の側として認識されている。五老星とて下手な者が王位に就いて混乱するぐらいならば認める可能性もないではない。

だが……。

「……力押ししてくる相手ってのが楽なのが実感出来るな」

時間を確認する。

そろそろ約束の時間だ。

「……こうなったら、使える者は全て使っしか道はない、な」

そう呟くと、アスラは部屋を出て行った。

## 第177話 - 状況進展（後書き）

締めを持っていく、という事で展開加速です

BW編もこれから締めへと持って行きます  
じっくりと状況を作っていくクロコダイル  
時間のなくなっていくアスラ  
最後の締めへと向けて加速していきます

## 第178話 - 前夜祭

世界政府には陸軍と呼ばれる組織が、一応、ある。

何しろ、海軍が余りに巨大な為、そこに所属しているのは大概ピンキリのキリの方で、船に乗ると必ず酷い船酔いをする奴だの、海兵の選抜に弾かれただのといった何かしらの問題を抱えた面々が大部分だ。

それでも、いや、それだからというべきか、海軍への反発心は強い。

今回の行動もそれが原因だったのだろう。

アラバスタ王国が関与しているに違いない、そう思い定めた一部隊丸ごとが休暇を申請、部隊ごと制服だけ脱いで武器を担いだままアラバスタ王国の港町のホテルを借りた、と聞いて焦ったのは他ならぬ陸軍上層部だ。

下はともかく、上になれば政府への立場ってものもあるし、海軍に対抗しようとするだけ無駄な事も分かっている。そもそも世界政府全軍総帥の地位にあるコング元帥は先代の海軍元帥だ。当然、中立であるうとしてはいるが陸軍に対して根底では好感を抱いている訳がない。

そこへこんな騒動を起こしてしまったとなれば……。

陸軍上層部が混乱で責任の擦り付け合いになりかけたが、この騒動は予想外に早く終わった。

……独断行動を行なった部隊の全滅という形で。

その時の状況を知る者はこう証言した。

『そりゃあ盛大な爆発だった』、と。

そのホテルは当時、その陸軍部隊に実質占拠されている状況にあった。

ホテルとしても、当初は団体様という事で予約があった時は喜んだものの、すぐに彼らがとんでもない疫病神だという事に気付いた。何しろ、彼らは全員が全員武器を携帯したままやって来たのだ。

おまけに、現在アラバスタ王国とは緊張状況にある世界政府の陸軍部隊だという事が知れると、ホテルの他の宿泊客は次から次へとチェックアウトしていつてしまった。

武器を没収しようにも、相手は口では休暇中と言っているもの、れっきとした世界政府の軍隊だ。

この相手に下手に武器を奪うという事をやらかせば、それこそ大きな騒動の引き金になりかねない、という事でアラバスタ王国軍としても下手に手が出せず、部隊の責任者と話し合い、町中では民衆に不安を与えないよう目立つ形で持ち歩かない約束を取り付けるのが精一杯だった。

ホテル側としてはとつとと出て行って欲しいのだが、一応金を払っている客には違いない。

追いつく事も出来ない。

かといって彼らが居座っている限り、新しい客が来ない。

実質彼らの貸切状態に陥ってた事に対するホテル側の悩み、その結末は、ホテル全体が木っ端微塵に吹き飛ばすという形で終わりを迎えた。

その爆発は凄まじく、周辺でも倒壊した建物多数、死傷者多数。ホテルの支配人や従業員は残っていた全員が陸軍部隊諸共全員死亡した。

この爆発に対して、アラバスタ王国側は陸軍部隊が大量の弾薬を持ち込んでおり、それが爆発したのだと主張した。

この為、責任は世界政府陸軍にある、として、被害を受けた人々

への賠償金を求めた。

一方、世界政府陸軍はこれに対して、彼らが持ち出した弾薬は大量ではない、彼らが持ち出した弾薬量ではあのような爆発が起こる筈がない、としてアラバスタが仕組んだのではないかと逆に疑いをかけた。

これらの動きに対してアスラは何が起きているかをほぼ正確に把握していた。

クロコダイルは陸軍を利用している、そう判断していた。

アスラは自分でもそうする、と判断した。規模に桁違いの差があるとはいえ、組織としてはあくまで独立している。海軍ならば海軍本部長将という海軍のほぼ頂点に近い所にいるアスラならば命令を下せる。もし、更になが関わっていたとしても数がしれている上、顔見知りばかりだ。直接行って、事情を説明すれば事足りる。

だが、陸軍が海軍本部長将の命令を聞く義務はない。

クロコダイルからは実に躍らせがいのある相手だっただろう。

「だが、それも終わりだ」

さあ、次はどう動く、クロコダイル。

こちらは止まらないぞ。

「……コング元帥を動かしたか」

命令系統にないのならば命令系統にある人間に命令を出してもらえばいい。

全軍総帥という立場にあるコング元帥ならば、陸軍に撤収命令を下すのも容易だ。

そう、クロコダイルの眼前にある新聞には当初は激昂して動きかけた陸軍部隊が撤収を決めたという記事が掲載されていた。代わりに、海軍部隊が駐屯する事になる。

現時点までにクロコダイルに入ってきた情報によれば、アスラ中將からコング元帥へと話が伝わり、コング元帥が正式な命令を出した、という事らしい。

コング元帥とアスラとは、アスラの海軍入隊時期を考えれば、コング元帥が現役時代はまだ下っ端に近い時代であり、アスラが上上がった頃には既にコング元帥はマリージョアへと移っていた。その為、余り面識がある訳ではないが、それでもアスラの立場ならば会う事に問題はない。

必要なら、センゴクなりガープなりを間に挟めば十分だろう。

そして、きちんと説得すれば、元より陸軍に好意を持っていない総帥の事だ。これを機に撤収命令を下したのも不思議ではない。

「まあ、いい。俺の顔を売るといふ目的は達した。次の手に移るとしよう」

今回の件での最大の目的はクロコダイルが善意の仲介者を演じる事だった。

それに関しては十分なものを得たと言える。

結果的に一般大衆の目には、苦勞した割りには報いられなかったと見られているようだが、それでいい。

だが、現状に喜んでいる暇などない。

間髪入れず次の手を打たねばならない。

今、自分とアスラ中將が行なっているのは言うなれば、連続したじゃんけんだ。

一手勝ったからといって、喜んでいると相手が次の手を既に出して、自分が出し忘れた事で負けになる。その為には次から次へと手を繰り出していかねばならない。



勝った負けたと喜んでいゝ余裕なぞない。

そう、止まれば奴は必ず今度は自らの番とばかりに攻め立ててくるだろうから。

そうして。

2人がそれぞれに打った手がアラバスタ王国に最後の動乱を引き起こす事になる。

## 第178話 - 前夜祭（後書き）

昨日は体調不良で寝込んで、結局更新し損ねました……

といつても、風邪とかじゃないです

友人と近場の温泉いって……どうも、のぼせて調子崩したみたいなんですよね

気持ちは良かったんですが、帰りの車の中で次第に頭痛やらが強まってきました……

結局、翌朝まで寝込んでました

……何の為にいったのやら

次回から最終決戦に移ります

一晩あけて、当初の構想確認してから書き出す予定です  
ので、申し訳ありませんが、また1日更新あきます

## 第179話・動き出す舞台

その日、海軍が陸軍に代わった駐屯地へとアラバスタ王国の使者と名乗る人物らが到着した。

紹介状も携えてきた彼らは責任者を務める海軍少将の下へと案内された。

……そう、この時点では誰もこの後おきる騒動など予想だにしていなかったのだ。

突然だった。

激しい騒音と共に、血に染まった衣服を着た者を抱きかかえ、先程入っていったと思われる面々が飛び出して来たのは……。思われる、というのは、砂漠の民らしく彼らは顔を含めた全身を衣服で包んでおり、顔がよく分からなかったからだ。

余りといえば余りの事に硬直する海兵らを尻目に、怪我をしたと思われる仲間を抱えて、彼らは素晴らしい勢いで走り去り、待ち構えていたかのように、いや実際予定通りだったのだろう、既に動き始めていた自分達の船に乗り組むとそのまま快速船は滑るように出航していった。

それこそ正に咄嗟の出来事だったが故に機を逸した海兵らが我に返って、慌てて少将の下へと駆けつけようとした時だった。

「ぐっ……」

そう呻き声をあげ、怪我を負いながら、海軍少将が姿を現した。

『少将!』、その声を上げ、海兵が駆け寄る。

明らかに深手を負ったと思われる海軍本部少将は、だがそれでも膝をつく事などなく、しっかりとした光を目に宿し、周囲の兵士を

怒鳴りつけた。

「奴らを追え！」

「「「は……」「」「」

瞬間、誰もがその意味を理解出来なかった。

いや、分かってはいたのだが、怒りを込めたその声に、彼らは知らなかったが覇気すら籠ったその声に彼らは知らず体を硬直させ、動きを止めた。

「あのアラバスタからの使者達を追え！」

「は、それでは追撃部隊を……」

ようやくとという感じで、その声を出した将校に向かって、少将は叫んだ。

全軍を出撃、アラバスタ王国へ向かえ！と。

さすがに将校含めた海兵らも躊躇う。現在のアラバスタ王国と世界政府との微妙な状況を知らない者はいない。というか、それを全く知らないような奴がこの地に派遣されて来たりはしない。下手に騒動を起こしてもしたら、それこそ火薬庫に火がつきかねないからだ。

だが、それでも少将は命じた。

「責任は私が取る！」

そう断言した少将の言葉に、遂に、アラバスタ王国へ向け出撃した。

疑問を持つならば確認を取り、その上でそれが正式な命令ならば

命令に従う……それが軍隊だ。

正に海軍部隊は、精強な軍隊であるが故に命令に従い、進撃を開始した。

時を少し遡る。

アラバスタ王国王宮にて1人の使者が到着した。

砂漠の王国らしい服装に身を包んだ、まだ若い当人は書簡を渡すと、事前に連絡がついていたのだらう。『お待ちしてありました』、その言葉と共にやって来た近衛の、それなりの立場にあると思われる将校と共に王宮へと入っていった。

門を守る兵士自身はそれに興味はあったものの、すぐにその事を頭から振り払い、自らの職務に専念した。

そのまま王の下へと案内された使者は、懐から手紙を取り出し、コブラ王へと取次ぎを経て、渡す。

取次ぎは妙なものがついていないか念の為に手早く確認して王へと手渡した。それを開き、アラバスタ王国国王ネフェルタリ・コブラは内容を確認する。

「……成る程」

溜息をついて、コブラは親書を置んだ。

正直、手紙の内容に関しては現状ではとても公開出来るようなものではない。それこそ王宮内部ですら混乱が巻き起こるだらう。

実際、現在目の前に立つ人物、若き海軍将校ですらアラバスタ王国風の格好をして、ここまで来た。

普段の格好、海軍のコートを纏った姿では騒動が起こる。今は世界政府との関係はそこまで来てしまっている。

「とりあえず、現状は理解した。とりあえず」

君の事は了承したので、部屋を設ける。ひとまず休んで欲しい、そう言いかけたコブラだったが、兵士が駆け込んできたのはその時だった。

「王！大変です！」

急使が伝えたのは確かに一大事だった。

近隣の海軍駐屯地から海軍が出撃。一軍をもってアラバスタ王国へ上陸し、駆けつけたアラバスタ王国軍と対峙中。しかも、周辺の応援までどちらも駆けつけた為に、現在双方が多数の軍勢を擁して睨み合っているという。

どうしてそうなった！そう問うのは簡単だが、今はそんな事を追及している時ではない。

ただでさえ、緊張状態にあるのだ。たった一発の銃弾がそれこそ開戦の引き金になりかねない。

瞬時にコブラは状況を分析し、脳裏で様々なシミュレートを行い……決断した。

「私が出る！」

アラバスタ王国軍、世界政府の海軍。双方引くに引けない状況だろう。

これを抑えるにはどちらも黙らせる事の出来る立場の人間が必要。

イガラム、チャカ、ペル……いずれも王が信頼を寄せる人間だし、大臣でも問題ないように思えるが、それで抑える事が出来るのはアラバスタ王国側のみ……良くも悪くも、アラバスタ王国の顔は国王

ネフェルタリ・コブラなのだ。

王の命を受け、アラバスタ王国側もまた、動き出した。

「ああ……とりあえず、君も一緒についてきてもらいたい」

「分かった」

周囲を確認するかのように見回している海軍将校に向け、王はそうつげ、彼もまた素直に頷いた。

かくして、舞台は戦場へと移る……。

第179話・動き出す舞台（後書き）

何故、海軍少将はあのような判断をしたのか

何故、そう断定し、動かしたのか

もちろん、ちゃんとした理由があります

今後の話を見てもらえば、「ああ」と納得してもらえらると思いますので、その場面をお待ち下さい

多分、明日か明後日には出せると思っていますが……

さて、一気に加速です

急展開すぎるかな？とも思いましたが……まあ、状況とは動かない時はなかなか動きませんが、動く時はこんなものかと



第180話・主役端役で舞台は成る（前書き）

昨晚更新出来なかった理由

さあ、仕事終わった、帰るか

「あ、これから 君の送別会やるから」  
はい？

……せめて朝に言ってください&今日も仕事あったのに朝帰りは勘弁して欲しかった

## 第180話・主役端役で舞台は成る

それはほんの一時の出来事だった。

幸い、というべきか、コブラ国王が到着した時点で、ギリギリの緊張感の中、世界政府海軍、アラバスタ王国正規軍共に引き金がかかる事なく、対峙し続けていた。

海軍側は命令故にここまで来てしまったが、自分達で戦争の引き金を引く事への躊躇いと何より命令がない為に。

アラバスタ王国側は世界政府と可能ならば戦争に至る事は避けたいが故に、王が向かっている為到着まで堪えるよう徹底していた為、そうして、コブラ王が到着し、やや前に歩み出て、同じように前に歩み出てきた海軍少将と話を始め、しばらくしてそれは始まった。

話自体は水掛け論だ。

やっただろう、やってない、の応酬だ。

とはいえ、立場的に国王自らが出てきたアラバスタ王国に対して、海軍側は所詮少将、しかも上からの出撃命令なしに独断で追撃をかけた、という事もあり、どうにも押され気味だった。

その様子を見ながら、どちらもどうやらこの場は収まりそうだと内心安堵していた時だった。

突如、海軍側から前に出た海兵らが銃を向けた。

「!?!?なんだ、あいつら何を」

周囲の人間が騒ぎ立てる前に、彼らは銃を撃った。

コブラ国王へ向けて。

その瞬間、王の周囲には誰もいなかった。

通常は王の傍から片時も離れない近衛も、王自身から相手を刺激しない為にと言われ、やきもきしながらも後方に残っており、何が起きたのか一瞬頭が理解出来なかった。

そして、状況を理解した時には既に弾丸は発射された後だった。

「王！」

海軍もまた少なからぬ将校が瞬時に血の気が引いて真っ青になった。

『やつちまつた！？』

緊張に耐え切れなくなったのか、或いは何かしらの理由があるのか。

それは分からないが、今更発射された弾丸は戻らない。

誰もが全身を朱に染めて倒れるコブラ国王を幻視した瞬間。

王の前に立ちはだかった者がいた。

その相手はアラバスタ王国風の衣装を纏っていたが、近衛の人間は気づいただろう。

それが、海軍側から親書を運んできた海軍将校だという事に。

両手を広げ、コブラ王の盾となった彼の全身に弾丸は食い込み

そのまま背中が伸びた。弾丸が突き抜けたのではない。そりゃもう、みょーんとか何かしらの擬音がつきそうなくらいに弾丸は貫通せず、ただ海軍将校の体を僅かに変形させただけだった。

「きかーん！ゴムだから！」

その言葉と共に、押し戻された弾丸はゴムで加速され、来た勢いそのままに道に戻り、さすがに銃口に飛び込むなんて事はなかったが、撃った海兵らに直撃した。

あゝあ、穴あいちまった。と服を摘まんだ彼は、周囲が何が起きたのか目の前のギャグにしか見えない光景に啞然としているのを尻目に、服をさっさと着替えてしまう。

背中に背負った袋から取り出した正義のコートを羽織り、【MARRINE】の文字が記された帽子を被ればそこに現れたのは1人の海軍本部中佐、その名をモンキー・D・ルフィという。

蜂の巣にされたそんな事など微塵も感じさせない様子で、少し怒る素振りを見せた。

「まったく！お前ら何やってんだ！？」

だが、既に止まらなかった。

海軍側はギリギリで張り詰めていた糸が切れたか、つられたか、武器を構える者が現れ。

王を狙われたアラバスタ王国側は当然のように武器を構え。今正に戦争の火蓋が切られようとした、その瞬間の事だった。

双方の間を。

閃光が。

駆け抜けた。

次の瞬間、その先、無人の地域へと着弾した一撃と間を通り抜けた事による余波が吹き荒れた。

悲鳴をあげ、今にも放たれそうだった銃が、砲が転がり落ち、結果的に生まれた間が強制的に我を取り戻させた。

一同の視線が光の来た方向へと集中する。

その先にはゆっくりと蹴りのような姿勢を戻そうとする長身の男性が1人。

正義のコートを身に纏い、黄色のスーツを着込み、サングラスの彼を知らぬ者は海軍側には存在しない。

「……黄猿大将!?」

皆が異口同音に叫んだ。

その言葉を聞き、アラバスタ王国側も相手が何者か理解し、騒然となる。

海軍最高戦力たる3人の海軍大将の1人、黄猿ことボルサリーノ大将。

さすがに誰もが何も言えずに静けさが戦場となりかけた場を支配した。その中を黄猿の声が響き渡った。

「おお〜間に合ったみたいだね〜?すまないが、この場はわつしが引き取らせてもらおうよ〜?」

内心ようやくと話の通じる相手が来たと安堵しているコブラ王らを含め、その言葉に反対出来るような奴はさすがに誰もいなかった……。

「……ま、あちしの役割はこの場に軍隊連れて来るまでだし、こんな場面は想定外よねい?」

第180話・主役端役で舞台は成る（後書き）

前回親書持ってやって来た海軍将校の正体はルフィでした

ルフィが他より先に動けたのは見聞色の覇気のお陰、とお考え下さい

さて、表は一旦終結方向へ

その一方で、裏はこれからが本番です

## 第181話 - 裏の決戦

「さて……こっちは抑えたよぉ？後は君次第だねえ……」

さすがにこの状況で戦闘は起きない、起きようがない。

こそそと少将が逃げ出すのを密かに確認しながら、黄猿はそれを追おうとはしなかった。

既にあの少将が何者なのかは確認が出来ている。

だが、情報どおりならば、あの少将もどきは変身能力がある。それはこの大群衆の中ではそれこそ誰にばけたのか分からなくなる。

むしろ、さっさと逃げてもらって、単独になってもらった方がいい。

だが、そうなると今度は黄猿が対応する訳にはいなくなる。まあ、とりあえず……自分はコブラ王と共にこれ以上の騒乱が起きない事に力を注ぐとしよう。

「……ふん、まさか海軍本部大将とはな」

クロコダイルはそれを両軍が睨み合っていた現場から少し離れた今は枯れたオアシス（ユバではない）で聞いた。

自身も最後の一手の為に動き出していたが、とんだ邪魔が入ったものだ。

本来ならば、双方が激突している所へ自身が堂々と介入して、戦乱を止めるつもりだったのだが……。さすがに、海軍も大将が止めて尚動くとは思えない。

国王自らが出張ってきたアラバスタ王国に関しては何をかいわんや、だ。

「やむをえんか、まあ種自体が潰された訳ではない……」

そう呟いて踵を返そうとしたクロコダイルの前に立ちはだかった人物がいた。

本来ならば、この地にいるはずのない人物が。

「……どうした、Mr・6、何故ここにいる」

「この瞬間を待っていた」

だが、その言葉と共に放たれた拳に、クロコダイルは砂として再生しながら冷たい視線を向けた。

「……何のつもりだ？」

「俺は地位なぞどうでもいい。……Mr・0、クロコダイル。あんたと戦いたかった。今なら、今なら他のメンバーが全員各地に散らばっている。今なら邪魔が入る事なく、あんたと戦える」

そう告げ、構えを取るMr・6の姿を睨みながら、クロコダイルは脳裏で考えを巡らせた。

……成る程、そういう事か。

どうやらこの男もまた、海軍の手先だったのだろう。

(……潜入工作、となるとこいつもCP9辺りか)

海軍自身が暗殺を行えば、騒動も起きるだろう。

途中で世界政府直々の妨害が入りかねない。

だが、クロコダイルの抱える組織の内部の人間が、となればどう



だろうか？

それはクロコダイルの管理不行届けでしかない。真実がどうかはこの際問題ではない。そういう事に出来れば、それでいい。

実際、Mr・6ことロブ・ルッチが立ち向かっているのはその通りの理由からだ。無論、ルッチ自身からすれば先に言った事も嘘ではないのだが。

（案外、こいつは気に入ってたんだがな）

まあ、仕方あるまい。

他の奴と違い、Mr・1同様淡々と任務をこなす姿勢がクロコダイルからすればお気に入りだった。

だからこそ、オフィサーエージェントに準じる扱いをしていたのだが……。

そう考えるクロコダイルの目の前で、Mr・6がその姿を変えてゆく。

「獣人系か」

獣人系悪魔の実ネコネコの実モデル豹。

それがMr・6ことロブ・ルッチの食った悪魔の実だ。

こんなものを今まで隠してきたのか、そう思う。

と、同時に長らく忘れていた感覚。以前にアスラ中将とやりあった時にも感じた心のうずきが湧き上がってくる。結局の所、自分は後方で策を巡らすだけではなく、大将だてらに前に出るのも好きなのだろう。

「いいだろう、相手をしてやる」

口元に笑みを浮かべ、クロコダイルは構えた。

これと同じ光景はBワWの組織内部で起こっていた。

既にクマドリの報告で2人同時に相手をするのは厳しい事は理解していた。

それ故に……。

Mr・1の前にはジャブラがいた。

ミス・ダブルフィンガー経営のスパイダースカフェの前では赴いたカリファが。

Mr・2に対してはクマドリが向かったが、これは相手の怪我がまだ治りきっていないという事を把握しての事だ。

Mr・3に関してはカクが。

こちらは到着と同時にミス・ゴールデンウィークを逸早く制圧した。

更にフクロウはこの隙にレインディナーズへと潜入を図り……。

そして……。

「まさか、こんな仕事を頼まれるとはな」

Mr・4とミス・メリークリスマスの前にはサボとゾロが。

Mr・5とミス・バレンタインの前にはエースとブルックが立ち  
はだかっていた……。

「ヨホホホ、貴方達のお仲間が私どもの仲間に手を出したお返しに参らせて頂きましたよ」

## 第181話 - 裏の決戦（後書き）

裏では同時にこんな事が起きております

エース達には以前にBWと激突していますので、そこを突いてくれるようお願いしております

もちろん、礼金はきっちりアスラというかCPの裏会計から出ますが次回からそれぞれの勝負模様を書いていく予定です

## 第182話・Mr・5&ミス・バレンタイン(1)

エース達がアスラからの連絡を受けたのは、アラバスタ王国から2つ程手前の島だった。

さすがにリトルガーデンでミホークから鍛え上げられただけの事はあり、ここまで快調に船を進めてきた。

そこへ入ったのがアスラからの頼み事だ。

幸い、残りの島でログを溜める時間を考えても、時間的には間に合いそうだった事もあり、それ自体は了承した。ローグタウン含め、色々世話になった事だし。

さて、ここで求められたのは4名の足止めだった。

「時間を稼ぐのはいいけれど……別に倒してしまっても構わないんだろう?」

そのエースの言葉に、アスラは何やら少し驚いたようだったが、笑いながら『もちろんだ』と答えていた。

無論、アスラが驚いたのはその言葉に聞き覚えがあったからなのだが……。

さて、その上で、今回の相手に関して彼らは情報を受け取った。

対象となるのは一組はMr・4とミス・メリークリスマス。

能力は砲弾を放出するイヌイヌの実を食った大砲、その砲弾を打ち出すMr・4。

……初めて彼らが聞いた際、『何で砲弾を鉄のバットで打って、その時点で爆発しないんだ?』と心底不思議に思ったものだが、もう、それは悪魔の実の力と割り切るしかない、と考えない事にした。ミス・メリークリスマスは獣人系の土竜人間。

2人が組み合わさると、地中を高速で移動しながら、それこそ

ぐら叩きの如く地面の中から現れては砲弾を打ってくるという戦法が可能になる。

もう一組はMr.5とミス・バレンタイン。

こちらは爆弾人間と重量変化人間だ。

体のあらゆる部分を爆発物と化し、爆発させる男と自らの体重を1kgから最大1万kgにまで変化させ、爆風に乗り押し潰し、或いは足枷となる。

……むしろ、問題は爆弾男が前に戦った時には鼻糞を飛ばしてきた、って事に皆引いた事か。

確かに、気軽に飛ばせるものとしては間違っではない、間違っではないんだが……。

さて、相談の結果、エースがMr.5を担当する事になったのは相性以上に船長として皆が嫌がる相手を引き受けた、という事が大きかったりする。

そりゃまあ、誰だって鼻糞を飛ばしてくる相手と好き好んでやりあいたくはないだろう……。

後はそれぞれが選んでいった。

ちなみに、ブルックは老婆よりはまだこちら、という理由で女性を選んでいたし、ゾロは怪力という事に少し興味を持ったようだった。剣の達人でもいれば、またそちらを狙ったのかもしれないが……。

後はサボが出撃する事になった。

たしぎとサンジは留守番だ。

正確には買出しになる。こちら辺は、たしぎが落ち込んでいたが……やはり実力順に、少しでも怪我をする危険が少ないよう選んだ結果だった。

そして、今、エースとブルックは、Mr・5とミス・バレンタインの2人と対峙していた。

「ヨホホホ……それでは」

見た目は骸骨そのものというブルックの姿に警戒していた2人だったが……。

「早速ですが、パンツ見せていただいてよろしいでしょうか！」

「見せないわよ！」

首を傾げるようにお願いするブルックに、思わずミス・バレンタインも怒声を上げていた。

「いえいえ、空高く舞って頂ければよろしいので。それで拝見させていただきますので！」

思わず、といった様子でスカート裾を押さえたミス・バレンタインだったが、すぐに顔を顰めて舌打ちした。

この男は自分が空高く舞う事に躊躇いを感じさせようとしているのか、と判断したからだ。

もし、それを狙っての事ならば面倒な男だ。ミス・バレンタインの体重変化の力はやはり高空からの降下時に単独での最大の破壊力を生む。

それがダメとなれば、大幅な戦力ダウンだ。  
もし、それを狙ってとなれば、したたかな奴……。

ミス・バレンタインは改めて不思議そうに首を傾げる骨格標本を見た。

……とてもそんな風に思えなくなった。

複雑そうな顔になるミス・バレンタインに頭を切り替えさせたのは、やはり相棒たるMr.5だった。

「今は戦闘中だ。集中しろ」

そう言いつつ、Mr.5は懐から銃を取り出した。

南の海の最新型、新式銃であるフリントロック式44口径6連発リボルバー。

バロックワークス

BWの伝手を使って手に入れたMr.5の切り札的な武器だ。

本音を言えば、Mr.5にとってはここで時間を食われたくはない。

まだ、彼らは作戦の失敗を知らず、迅速に持ち場に移動しなければならぬというのに、目の前の2人組に阻まれている。ここで時間をかけずにさっさと倒し、先へ進む。そう決断した故に自分の切り札を出したのだった。

フリーズ・プレス・ボム

「そよ風息爆弾」

ふつと息を回転弾装に吹き込み、銃口を向け発射する。

向ける相手は骸骨ではなく、エースへ。

正直、あの骨格標本は本当に生きていいのか疑問に感じてくる。

悪魔の実の能力者として人間な事に違いはない。自分とて爆弾人間だが、見た目は人だ。それは自然系ですら変わらない。

むしろ、エースが操っている人形と言われた方が余程説得力があるだろう。

故にエースを狙い……何しろ、息すら爆弾になるのだから普通は見えない。見事に着弾した爆弾は、だが当たった事さえ感じさせず、何時弾丸が発射されるのかと注視していたエースに直撃した。

「よし、これではあの骸骨だけだ」

「きゃはははは、あっけなかったわね」

だが。

「いや、そう判断するのはまだ早いと思っぜ？」

爆煙の中から気負う事のない、そんな声が聞こえた。

はっとして視線を戻す2人の前に、爆発前と全く変わらない姿、腕組みしたまま顔にどこか皮肉げな笑みを浮かべ、エースは立っていた。

そんなはずはない、とMr.5は思う。

あれは自分の切り札だ。

自分の能力には自信があった。だからこそ……そんな馬鹿な事があるか！と思う。実際、よくよく見れば、骸骨は吹き飛ばされて、ずるずると尻を高くあげた情けない姿勢で壁際でへたれているではないか。

ならば、この男もまた何らかの能力者であり、その能力で防いだ可能性が高い、と急ぎ目を凝らす。

そうして気付いた。

エースの体から立ち上る炎に。

最初は爆弾の炎かと思ったが、噴き上がる炎はまるで意志を持つかのように、眼前の男にまわりつき、揺らめく。そして、その炎に対して、男は全く熱がる様子を見せない。

「……まさか」

嫌な予感がする。

このような事が可能な実は限られている。



もし、自分の予測が当たったなら、最悪の実だ。

「多分お前が予測してる通りだと思っぜ？」

エースの言葉に苦々しい顔になる。

最悪の予想が当たったようだ。

「……自然系悪魔の実の能力者、おそらくは……火」

「名前」

搾り出した言葉に、エースはにやりと笑った。

第182話・Mr・5&ミス・バレンタイン（1）（後書き）

順に5 4 3 2 1、そしてクロコダイルの順で行なっていく  
予定です

これが終わったら、BW編の締めまで突っ走って、ルフィ編をやっ  
て……

最終章に向けて、突き進みますかね

ルフィ編は結構長いものになる予定なので、まだまだ先の話ですが

……

## 第183話・Mr.5&ミス・バレンタイン(2)

「……ミス・バレンタイン、あちらの骸骨を頼めるか？」

「……………」

物凄く嫌そうな顔になった。  
気持ちは分かる。

あんなセクハラ発言をいきなりかますような相手と戦うなんて嫌  
だろう。

とはいえ……渋々ながら頷いたのは自分では自然系悪魔の実の能  
力者と戦えないと分かっているからだろう。

新世界に放り込まれた面々の中でも、覇気を覚えられた者もいれ  
ば出来なかった者もいる。

Mr.1とMr.2は比較的早くに修得した。

一方、Mr.3とMr.4は修得出来なかった。Mr.3はあの  
性格だから真面目にやってる振りをして、実はサボっていたとして  
も不思議ではないが、Mr.4が出来なかったのは意外だった。こ  
れはもう相性と言うしかない。

女性陣に至っては修得した者は存在しない。

と言っても、彼女らの責任ではない。

ミス・ダブルフィンガーはオフィサーエージェントの連絡場所  
あるスパイダーズカフェを長期間離れる事が出来ず、遂に覇気の修  
行に専念する時間が出来なかった。

ミス・ゴールデンウィークに至ってはそもそも戦闘員ではない。

ミス・メリークリスマスは各地を回っては地下基地建设の為の穴  
掘りに駆り出されていた。お陰で、そんな余裕なんてまるでなかつ  
た。

ミス・バレンタインはというと、これは……余り自分の相棒をけなしたくはないが、やる気がなかったとしか言いようがないだろう。まあ、弁護するとすれば、彼女の戦闘スタイルが覇気を活かすには向いていなかったという事もある。覇気は武器の威力の強化や身体能力の向上などに効果があるものの、単純なプレスアタックと、Mr.5のサポートを主体とするミス・バレンタインは接近戦闘など素人ならともかく、一定以上の腕の持ち主には通用しないレベルではない。覇気の取得に乗り気にならずとも仕方ないだろう。

これに対して、Mr.5は限定的……武装色のみ、それも自身の肉体の一部に纏わせて、というレベルではあるが、使えるようになった。ここら辺は上のナンバーを追い抜く為、と頑張った事もある。だから、自然系の能力者であれ、戦えない事もない。ミス・バレンタインよりはマシだ。

「いくぞ」

やや前傾姿勢に。そこから足裏、正確には靴底から連続して爆発させて推進力とし、一気に距離を詰める。

そのまま、上段蹴りへと移行。踵を爆破し、加速させ爪先に覇気を纏わせる……！！

エースは油断していたつもりはなかった。

だが、何らかのモーションがあると思っただけに、いきなり構えた姿勢そのままです突っ込んでくるとは思わなかったからだ。

蹴りに移っても、途中から蹴りが加速した。

「【鉄塊】！」

咄嗟に右腕を上げて、左腕で支えると同時に【鉄塊】をかける。火ならば通り抜けてもいいはずだが、そうはならなかった。間違いない、ジジイ（ガープ）やアスラらが使っていた覇気だ。それに気付くと、笑みが浮かんでくる。

……なんだ、こういう戦い方も出来るんじゃないか。爆弾だけの能力なら、勝敗は見えていた。

息でも鼻糞でも何かを飛ばしてこようが、爆発させようが、それは所詮は物理的な打撃に集約される。自然系の悪魔の実の能力者にとっては怖いものではない。

動き自体は荒削りだ。

ガープ中将、アスラ中将、ミホーク。彼らの動きに比べれば、洗練されているとはいいがたいが……。

さすがに、それらと比べる方が可哀想だろう。

「案外やるじゃないか……いくぜ！」

改めて構えを取る。

向こうも弾かれた態勢を立て直し、構えを取る。

「【焔脚】！」  
ほむひやく

なら色々と試させてもらおう！

火を巻き込んで赤く輝く【嵐脚】を放つ。これをMr.5は自身の左側を一斉連続爆破してかわす。

一気に身体を沈み込ませ、地面を這うような位置から空を飛ぶようにして接近、迫った所で地面側の体前面を爆破し、体を起こし浮上、左拳を今度は肘を爆破して加速させてくる。

いや、覇気を纏っていない？これは……！

開かれた手から、黒く細いものが数本撒かれる……次の瞬間、そ

れらが爆発した。

髪の毛だ。

爆発そのものは平気だが、眼前で爆破されれば視界が遮られる。不意打ちならば尚更だ。

瞬間、停止したエースの脇腹へと反対の右拳　本命が直撃した。

「ぐっ！」

骨は……大丈夫だ、折れてはいない。

爆発を自らの移動と攻撃の加速・減速に使用し、爆弾を攻撃ではなく、目潰し代わりに使用する。

……おそらくはこれこそが彼の奥の手。

Mr.5自身、新世界に放り込まれてから試行錯誤していたのだが、以前にCP9と激突してからは切り札として磨き続けてきた。それが今、エースという相手を得て、花開いたと言える。

……だが、パターンは読めた。

「【萤火】！」

火球を連続射出する。

以前に比べ、射出速度・数・大きさ全てが向上している。これでも、全身に覇気を纏えるジジイクラスならば、無視して突破してくるだろう。だが……。

案の定、慌てて空中に飛び上がって回避する。

……直線的なのだ、動きが。

円運動を基本とするアスラやミホークとはそこが違う。円ならば戻ってくる、繋がっている。

回避がそのまま次の一撃へと繋がりに、攻撃が回避へと繋がる。

だが、直線は行って帰って、だ。

せめて覇気を全身に纏えれば、こまめに小爆発を制御出来ていれ

ば、強引な方向転換なども可能だったのだろうか……爆発で方向を変えているから、急な方向転換は体への負担が大きいのだろう。停止と移動を開始する瞬間、僅かなタイムラグがある。

何より……。

（爆発は自身の上下と前後左右！斜め方向への移動は出来ていない！）

だから、こうして膝程度の高さに弾をばら撒けば、奴は真上に逃げるしかなくなる。

「【火拳・渦潮】！」

炎をMr・5の周囲に……そう、竜巻を横向きに放つのを想像してもらえばいいだろうか？

ただし、竜巻は風をたつぷりと孕んだ高熱の火だ。

こまめな小爆発が出来ないという事は、滞空を維持する事は出来ないという事でもある。落ちるか上昇し続けるか……結果は上昇し続けると出た。

「ぐあああああつ！」

高熱の火に焙られ、Mr・5が苦悶の声を上げる。

「【火渡】！」

【月歩】に自身の火を組み合わせた……先程、Mr・5がやってきた事と理屈は同じだ。

火傷を負い、服に火が点いたせいだろう、動きが鈍ったMr・5へと高速で接近する。

「これで終わりだ！【火砲】！」

渾身のフクロウの【獣敵】同様の【指銃】並の速度で放たれた炎の塊が直撃。

そのままMr・5を地面へ叩きつけた。



第183話・Mr・5&ミス・バレンタイン(2) (後書き)

少しMr・5にも健闘させてみました

爆発って、使い方次第では結構面白い戦い方が出来ると思うんです  
よね

単なる爆弾として使うだけじゃなく、全身起爆なんてのが可能なんですから、一部を起爆させる事も可能なはず……

明日か……今晚？はブルツクの側になります

こちらはギャグ混じりの大分軽いものになるかと……  
ルフィらと初めて彼らが戦闘した時みたいなのアリ？

## 第184話・Mr・5&ミス・バレンタイン(3)

ブルックと対峙したミス・バレンタインは改めて、その奇怪さに眉を潜めた。  
動く骸骨。

(……まあ、直撃すれば壊れそうな見た目じゃあるんだけど……)

あの言動を聞いた後で舞い上がるのは何か嫌だ。

眼球のない眼窩に、何かスケベな視線が見えるような気までしてくる。

とはいえ……。

(……うう、こんな事なら他の攻撃手段真面目に修得しておけば……)

そう、ミス・バレンタインには体重増加によるプレスアタック以外にまともな攻撃手段がない。

抱きついて押し潰すという手段もあるが、嫌悪感を除いてもアレは明らかに剣士の類だ。幾ら自分に武術の心得がまともになくとも、そこは『門前の小僧習わぬ経を唱える』という奴で、あれだけMr・5と色々な相手を見てくれば検討ぐらいはつくようにもなる。

あちらではMr・5と自然系悪魔の実の能力者との戦いが始まったようだ。

相手が相手だ。Mr・5にこちらを援護する余裕なぞあるまい。

(ええい、女は度胸！)

「きゃははは、それじゃ行くわよー！」

体重を最小限に軽くして、脚力を活かして天に舞い上がる。

足は揃えて曲げて、下からは覗けないよう工夫するのも忘れない。脳裏で考えている事は笑顔で固定した顔にも、口調にも出さないよう気を配る。何時からだっただろうか、顔に出る動揺をなくすべく、仕事に心を揺るがさないよう表情をなくしていったのは……。

そんな事を考えていると、下で動きがあった。

「よいしょ」

などと言いつつ、骸骨が何かを物陰から引っ張り出し、広げている……は？

「ヨホホホホ、さあ、おいで下さいませ！」

「！？いやー！？」

別に台所の黒い悪魔とかが、という訳ではない。広げたシートにはびっしりとスパイクが埋められていたのだ。あの骸骨はそのシートの上に板を載せて立っている。……骨だけなら軽いし、ゆっくり乗れば以外と痛くないだろうが、自分は上空からあれに向けて急降下開始しつつあったのだ。

……そりゃあ、空へ舞い上がる為に、地面へと急降下するのに耐える為に足腰は鍛えているが、それも程度問題だ。

考えてもみてほしい。

2 mの高さから普通の地面に飛び降りて欲しい、という事ならば普通の成人男性ならまずもって普通に飛び降りる事も可能だろう。

だが、地面に釘が一面に植えられていたら……絶対嫌だろう。

もちろん、ミス・バレンタインも慌てて加重を始めていた体重を

最低体重にまで戻す。更に傘を改めて開く事で加速を緩め、足を動かして、シートの上から移動しようとする、のだが。

「パンツ、ありがとうございます!」

いきなり響いた声に下を見れば、綺麗に腰を曲げて90度のお辞儀をしている。

……それが気がついた。

今、先程まで閉じていた足を動かしている自分が彼が見上げたらどういう風に見えるか……。

「って見るんじゃないわよ!」

思わず怒鳴りつけた。

慌てて、足を閉じて下からの視線を防ぐ。

「え〜?」

と言いつつ、眉を潜めて首を傾げているが……角度を変えて覗けないか試しているようにしか見えない。

「え〜、じゃないわよ!さっさとどきなさい、この変態!」

口論を交わしていると……。

「ヨホホホ……分かりました、どきましよう」

あっさりと板を持ち、シートの上から跳び退った。

はて?と思っただが、気がついた。

元々、今回は通常の爆風を利用しての上昇ではなかった為、高度

が何時もより低めだった。その為に、会話している間に高度が下がってしまっている。

幾ら軽くなつたとはいえ、重さがなくなつた訳ではないのだ。

……風が出ているから流されつつはあるようだが……先ほどまでシートを位置を細かく修正してくれやがったお陰で未だ逃れられていない。

そりゃあそうだろう、軽くなっている間はふわふわと浮いているだけなんだから、動かすのも楽だ。

「鼻唄三丁……」

眦を決して、骸骨を睨むとその声が聞こえたのは同時だった。

「矢筈斬り！」

気付けば、声が後ろから聞こえた。

激しい衝撃を受け、ミス・バレンタインの体は吹き飛ばされた……。

「ヨホホホ、上手くいきましたね」

笑いながら、剣を納める。

実は、あのスパイク、金属ではない。金属では重過ぎて、とても広範囲に広げられるようなものにはならない。ゴムを用いているのだが、それとて結構馬鹿にならない重量だった。

戦い方が分かれば、対応策も取りやすい。

今回に関していえば、明らかに事前に情報を集めたCPの勝利だったと言えるだろう。

とりあえず、今回は剣の腹を用いた峰打ちだ。  
意識は失っているようだが、死んではない。

「生き返った気分です、ありがとうございます！って私、もう  
死んでるんですけど！」

ヨホホホ、と笑いながら、改めてブルツクはミス・バレンタイン  
に向かって一礼した。

第184話・Mr・5&ミス・バレンタイン(3) (後書き)

現実の海での衝突映像の流出

朝鮮学校は反論もあるけど、強行無料化

ううむ、この場でそれに対する賛否を述べるつもりはありませんが、何だか政権末期の様相を呈している気がしますねえ……

次回、Mr・5らの締めからMr・4らの場面へと移ります

最近朝更新が続いてますが……疲れてると頭が働かなくなってるんですよねえ

なんで、そういう時は寝て、早めに起きて書いてるとゆー

## 第185話・Mr.4&ミス・メリークリスマス(1)

さて、Mr.5とミス・バレンタインが無力化されると、エースらをここまで案内してきたCPの隊員達サイファーボールがどこからともなく現れた。彼らはサポート要員であり、戦闘中は巻き込まれぬよう下がっていた。

そのまま気絶している2人を海楼石の手枷で拘束してゆく。

どうされるのかはエース達には分からないが、まあ、アスラが一番の上役である以上は酷い事にはならないと思っっている……インペルダウンに送られたりした場合はその限りではないのだが。

「それでは、こちらがアスラ長官よりの礼金となります」

隊員の1人がそう言って、金の入った袋を持ってくるが、エースは断ろうとした。

これは皆で話して決めた事だが、アスラ中將にはあれこれと世話になっている。そもそも船からして、アスラからの贈り物だ。

別にお金に困っている訳でもなし、ここはお金は断ろう、と思っ  
ていたのだが……。

「それとアスラ長官より伝言が『一度社会に出た以上、そして仕事として受けた以上は無料奉仕は駄目だ。報酬は報酬として、きちんと受け取るように』との事です」

それを聞いて、エースは苦笑した。

『読まれているなあ』、そう知ったからだ。……当然かもしれない、1年や2年の付き合いではない。それこそ自分が幼い頃からの家族として付き合ってきた仲だ。

さすがに、そこまで言われると受け取らざるをえない。



……そして、彼らがそんな会話としている頃には、他の地でも戦闘が勃発していた。

そんな戦場の1つ。

どこかの廃墟となった町の跡。

こうした廃墟は、砂漠の国アラバスタ王国では決して珍しいものではない。

古い国である、この国は同時に砂との戦いでもあった。原作で、幾度も砂嵐に襲われたユバが砂に埋もれ、住民が1度は町を捨てたように、或いは気候の変化によつて、或いはオアシスが枯れた事によつて、と様々な理由で人々は新しい地へと移り、生きてきた。

ここも、また放棄されて長いのだろう。

生活臭などは全くなく、建物の残骸も古びている。

そんな場所に、Mr. 4とミス・メリークリスマスがいたのは、支援物資を蓄える基地建設の為だ。

支援物資？と思うかもしれない。

そう、これもまたクロコダイルが名前を売る為の仕掛けの1つで、世界政府との戦争の結果として困窮する人々への支援を行う予定だった。その為には交通の要所で、尚且つ現在は人気のない場所が必要だった。

今更何故、と思うかもしれないが、これは戦争が終結した後の為のものだからだ。

最低でも戦闘が起き、それによる被害が発生し、尚且つそれが救援を求める程のものにならねば意味はない。

そして、そうなると地下基地建設には必須の存在としてミス・メリークリスマスが駆り出されたという訳だった。

「まったくっ！あたしっ！土木っじゃっ（土木作業員じゃない）」

「！」

文句を言いつつも、ミス・メリークリスマスは作業を続ける。  
高速で掘り進み、穴を拡張し、地上へと出た。

「ふう」

「お疲れさん、ほら、おしぼり」

「あんがとっ！」

受け取った冷えたおしぼりで自身の顔を拭き、あのウスノ口にし  
ちや気が利くじゃないか、たまにや褒めてやるか、そう思って顔を  
見上げる。

だが……。

「……あなた誰だい？」

そこにいたのは見知らぬ顔だった。

まだ若い。

鋭い目をしてはいるが、どこか柔らかい雰囲気も持ち合わせてい  
る。

癖っ毛の金髪に、シルクハットとコートを身につけている。腰に  
は刀が1本。

ここまで確認した所で、我に返った。

あたしゃ何のんびりとどこの誰とも知らない相手の至近距離で観  
察なんてしてるんだい！

即座に地面へと潜り込もうとするが、その前に伸びてきた手があ  
たしの手を掴む……甘い！

ゾン系の体力と、延々穴掘りを繰り返してきたあたしの力を舐

めんじゃないよ！

逆に引きずり込む勢いで地面に潜り込む。途中で慌てて、手を離れたのが分かった。

距離を取り、改めて、地上へ顔を出す。少し離れた場所に、奴がいた。

「馬鹿力」

笑いながら、そう言う。

妙に気障ったらしくもあるが、嫌味な感じはしない。

こいつは相当生まれがいい所の坊ちゃんだね……。

「で、あなたは誰だい。あたしゃ気が短いんだ、簡潔に言いな！」

つつい短縮しての早口になりそうなのを我慢して、物凄くゆっくり言う。

独り言の時なら早口で良いし、Mr・4なら付き合いが長い。あたしの早口でも、聞き取れるだろうが、初めて会う奴はそうはいかない。聞き取りにくいぐらい早口だと結果的に却って時間がかかってしまうんだよね。

「成る程、じゃあ、簡潔に言おう」

口元の笑みを苦笑へと変え、一言。

「敵さ」

うん、成る程、分かりやすいね。

さて、この段階で幾らウスノ口とはいえ、Mr・4が全然姿を見せない事に加えて、向こうで響く爆音と爆煙。ありゃあ見慣れた代

物だ。Mr・4が連れてるラッソーの吐き出す時限爆弾だろう。となりゃあ……。

「あつちでもあなたのお仲間と戦闘中かい！」

「当たり前だ」

……こいつ簡潔で、的を得た対応してくれるね。

うっん、敵じゃなけりゃこいつとMr・4交換して欲しいぐらいなんだが。いやいや、戦闘力は未知数だ。でも、魅力的な話だねえ……。つたく。世の中思うようにはいかないね！

「あたしやミス・メリークリスマスってんだ！あなたは？」

「サボ」

それだけ述べて、刀を抜く。

漆黒の刀身。

……黒刀かい。刀剣にや素人のあたしでも、あれが単なるそこらに転がってるものじゃない事ぐらいは分かるぐらい、見た瞬間にぞつとしたねえ。

禍々しいとかじゃない、一級品の芸術品なんかが纏う格、っていうのかね？

そういうもんがひしひしと伝わってくるんだよ！

……願わくば、使い手がヘボであって欲しいもんだけど……。うっん、簡潔で素早く反応する点は気に入っちゃいるし、Mr・4と交換するなら強い方がいいけど、敵となると弱い事を願っちゃうのは複雑なもんだねえ。

さて、それじゃいつちよやりますか！

第185話・Mr・4&ミス・メリークリスマス（1）（後書き）

ミス・メリークリスマスの口調ですが、当初は短縮しようと思ったのですが……

短くすると訳分からなくなるんですよ

「この、ばっ！」＝「この、ばか！」

なんて言われても、初めて見た人は意味分らないでしょうし……結局後で、意味を書かないといけなくなると判断したので、早口だけど普通の言葉で書いています

ご了承下さい

## 第186話・Mr・4&ミス・メリークリスマス(2)

時は少し遡る。

ミス・メリークリスマスが地底で穴を掘っている頃、地上ではサボとゾロがCP隊員に案内されて、現場へと到達していた。

『あそこです』、そんな言葉を受け確認してみると、成る程ちよつとしたテント村がある。

決して大仰なものではない。

むしろ、キャラバンが一時的に滞在している、といった印象を受ける。

その中でも、あれこれと動いている商人風の面々の中、護衛を装っているのか、変わった犬を連れた動かない大男が1人。

あれが、目標の1人、Mr・4らしい。

もう1人の目標は……地中らしい。

「で、どっちがやる？」

ゾロがどこか楽しみに尋ねた。

実際、口元も楽しげに吊り上がっている。

彼が言いたいのは、どちらがMr・4をやって、どちらがミス・メリークリスマスをやるのか、という事だろう。

現在までに、彼らについての情報は把握出来ている。

バロックワークス

BWはトップクラス、具体的には5以上の数字を持つエージェントをオフィサー・エージェントと呼び、他と区別しているが、基本的な形として男性が主に戦闘面を担当し、女性はそのサポート役となる事が多い。

無論、それは女性が弱いという事を意味しないが、Mr・4に関して言えば、純粋な戦闘面で言えば、Mr・3を上回る可能性もある、という。ただ、逆に言えば戦闘以外の面ではMr・3の方が上、

という事でもあるのだが。

現状把握出来ているのは、Mr・4は実は殆ど判明していない。ミス・メリークリスマスは獣人系悪魔の実モグモグの実を食ったモグラ人間と判明しているのだが、これは彼女が基地作成に当たる事が多く、結果的にMr・4とCPが交戦する事が少なかった為だ。そして交戦した全てで背負う鋼鉄バットもどきのみで敗退した。

他に何かしらの能力があるのか、などさっぱり分からない。

「……強い方とやりたいんだな？」

「当然！」

サボの確認とでも言うべき問いに、獰猛な笑みを浮かべてゾロは答えた。

どこか戦闘狂の気があるゾロの事だ、大体予想はついていた。結局、そのままゾロがMr・4と、サボがミス・メリークリスマスとやる事になった。

そして、彼女が地中に潜っているのなら好都合だ。サポート役になる事が多い、という情報は貴重だ。それはつまり、双方が協力しあえる態勢にあると、余計に強化されるという事だ。

一方、サボとゾロが協力したとして……無論、共に戦ってきた仲だし、同じ剣士だ。協力自体には問題はないが、彼ら以上の相乗効果を生み出せるか、となると……これは疑問が残る。互いの背中を預けて戦う事は出来ても、連携で1の力を10にするのはまた別問題だからだ。

何が言いたいかといえば……。

「おい、すまねえが、水を売ってもらえねえか？」

そう言って近付いていくゾロがいた。

まずは分断作戦だ。

砂漠地帯での水は貴重品だ。とはいえ、井戸なりが生きていれば、彼らとて間借り人。

「いや、幸い井戸が生きているからな。かまわんよ」

人当たりの良さそうな人物が笑顔で言って、水を渡す。

ここで騒動を引き起こすような者はこのような場所に配置されない。

求められているのは基地建設であり、それは騒動を起こして、この地に注目をひきつけては無意味なものになる。無論、警戒はしている。そもそも、この場所は1人がぶらりとやって来るような場所ではない。  
だから。

「ありがとよ……BW」

バロックワークス

ニヤリとゾロが水を受け取った際に、そう眩くなり。

その場の全員、目の前でにこやかに水を手渡した人間でさえ、瞬時に顔を変えて、武器を抜いた。

当然、水は地面に飲まされる事になるが、ゾロとて本気で水を求めた訳ではない。大体、連中から水を貰おうものなら、何が混ぜられているか分かったものではない。普通の水という可能性がない訳ではないが、彼らの同僚からウイスキーピークで何をされたか忘れた訳ではない。

ただ、この時点ではBW側は甘く見ていた。

バロックワークス

所詮、1人なのだ。

だが、もう少し考えるべきだったのは確かだろう。本当に1人なのかは確認していたが、もし、1人なのだとしたら、それが無謀によるものなのか、それとも実力を見極めた上での正当なものなのか、



それぐらいは意識すべきだっただろう。何しろ、結果的に言えば、正に鎧袖一触。下っ端構成員は瞬殺されたのだから。

「おいおい、これで終わりかよ。……お前はもう少し楽しませてくれるんだろうな？」

「……………」

ゾロの視線に、Mr・4は黙って武器を抜いた。

これがクロコダイルなどであれば、そもそも構成員らに武器を抜かせたりはしなかっただろう。

しらばっくれれば、おそらくゾロも手出し出来ず、素直に水を受け取って立ち去らざるをえなかった。それをわざわざ挑発に乗った拳句、こちらから仕掛けて武器を抜いた。こうなれば、反撃されても文句も言えない。

Mr・4とてミス・メリークリスマスによく「ノロマ!」「ウスノロ!」と罵倒されてはいるが、決して馬鹿ではない。今更、「すいません、勘違いでした」と言えるような状況ではない事は分かっているし、そもそもMr・4はそのような口八丁手八丁が出来るような人間ではない。  
したがって。

「あ?」

いきなりMr・4の傍にいた犬がくしゃみをした。

口から砲弾のようなものを吐き出し、それをMr・4が打った。

「なにっ!?!」

慌てて回避行動を取る。

砲弾もどきはそのまま直進して飛んで行って、着弾地点で爆発した。

「……爆弾かよ。って正気か、手前！」

ゾロが叫んだのは訳がある。

彼の周囲には先程倒したばかりのB W構成員達が未だ転がっている状態だ。このような状況で爆弾を撃てば……部下を巻き込む事になる。

とはいえ、Mr. 4からすれば、それでも彼を倒す事を優先するべきだと認識したに過ぎない。

だからこそ、それを無視して、ラッサーの放つ爆弾を更に連射する。

「くっ、よっ！」

一方、ゾロは何だかんだでそこまで割り切れない。

ここで下手に爆弾を斬れば、地面に転がって呻いている連中を巻き込みかねない。さすがにそれは寝覚めが悪いと懸命に回避していた。

「いい加減にしやがれ……！【二刀流ノ七十二煩惱鳳】！」

ボンドほう

斬撃がMr. 4に向け飛び、それをMr. 4は巨大な鋼鉄のバツトで受け止める。

三刀流を用いなかったのは、【秋水】を加えて放つ斬撃は1本の巨大な斬撃となって襲い掛かる。そこまでいくと周囲の連中を巻き込む公算が高かったからだ。

自分で叩きのめしておいて、連中の安否を考えてやるというのは何とも複雑な気持ちだし、ゾロの甘さといえは甘さだが、それでも

上司から見捨てられた連中にこれ以上傷口に塩を塗るような真似はしたくなかった。

「ちっ……」

鋭く舌打ちして、ゾロが駆け出す。

元々、逃走して相手を惹き付ける予定ではあったが……現状では、予定とは違った意味合いで、この場を離れるしかない。

Mr. 4は一瞬考え込んだ。

この場を守りきる事と、あいつを追撃する事のどちらが大事か……だが、すぐに結論は出た。今、逃げてゆくあの男が周囲に言いふらせば、どのみち今、地下に建設中の基地は放棄せざるをえなくなる。確実に息の根を止めておかねばならない。

そう判断すると、Mr. 4はラッスーと共に後を追った。

丘を越え、ある程度距離を取った所で、ゾロとMr. 4と向かい合った。

足場は砂ではなく、しつかりした大地だ。

一般に砂漠というのは案外限られていて、例えば元の世界の砂漠の内、砂がその地を構成する砂漠は世界全体の20%程度だった。降水量が少ない地帯を砂漠と呼ぶのであって、残る80%の地帯は土・礫・岩石の砂漠なのだ。

「……部下を巻き込んで平然としてやがるとは、いい性格してるじゃねえか」

言いつつ、ゾロは愛用の黒い手拭を頭に巻きつけ、縛る。

ゾロは本気で怒っていた。

無論、Mr. 4は優先事項を考えて行動しただけであり、殺人もその任務の範疇にある秘密組織の幹部としては決して間違っていない。ここら辺は組織の倫理と個人の倫理観の対立ともいえるし、

仮にも裏組織で必要ならば部下をも切り捨てられない人間に上立つ資格はない。が、ゾロにはそんなものは関係ない。

当初はゾロは、「まあ、仕方ねえな」ぐらいの感覚だったが……今は本気で相手を潰す気で武器を構えた。

その殺気をそれでも受け流すかのように……見た目は泰然自若としたまま、Mr. 4もまたバットを構えた。

第186話・Mr・4&ミス・メリークリスマス(2) (後書き)

昨晚の話です

F1見たくて、録画セットして寝ました

朝早めに起きて、書きながらTVで流して……と想ってたら……

念の為、1時間程は余裕をもってセットしてたんだけどなあ

日本シリーズ、何で連日延長戦で、12回……

第187話・Mr・4&ミス・メリークリスマス(3) (前書き)

正直、酷いやり方ですw

第187話・Mr・4&ミス・メリークリスマス(3)

「……どこに行く気だ、あいつ」

ゾロが駆けて行く方向を見て、サボは呆れたように呟いた。

当初の予定である方角とは全く別方向へと走っていったからだ。

まあ、いいだろう。彼の方向音痴っぷりは嫌になるぐらい熟知している。CPにもその旨は伝えてあるので、即座に動いてくれるだろう。

ゾロは【荊】のような高速移動手段を持っていない。

それならば、CPでも何とか見失う事はない筈だ。とにかく、ゾロが戦闘しやすいよう、足場がしっかりしている場所ならば問題はないのだ。それさえ本人が意識していれば、戦闘が終わればCPのメンバーがちゃんと連れて帰って来てくれるだろう。

既に周囲に転がった人材はいない。

ゾロとの戦闘で吹き飛ばされた連中は、ミス・メリークリスマスが戻ってくる前に、と素早く動いたCP隊員らが拘束、運ぶと共にまだ残っているテントの中に今回彼らが運んできたものを運び込んだ。

「では、よろしく願います」

そう言って戻ってゆくCP隊員にサボは頷くと、静かに佇んだ。

そう、殺意も何もなく、気配を自然と溶け込ませて……。

ミス・メリークリスマスが地上へと上がってきたのは、それからしばらくしての事だった。

戦闘開始とみるや、ミス・メリークリスマスは即座に地中へと潜り込んだ。

彼女はモグラ人間。

地中こそが彼女のテリトリーだ。

まあ、現実のモグラはこんなに掘削するような動物ではなく（穴掘りはモグラにとって相当な重労働）、先祖代々の巣穴を継承して修理補修してゆく生活を送っているらしいが……ここでは関係ないので置いておく。

（はっ、わざわざ地上で戦ってやる義理はないね）

その姿を無言のまま見送ったサボは、だが全く焦らず、荷物を取り出した。

ここまでCP隊員らに運んできてもらったものだ。

「……相手が何か分かってれば、こういう準備も出来る、と」

言いつつ……サボはその中身を次から次へとミス・メリークリスマスが開けた穴から放り込んでいった。

不足すれば、即効で先程CP隊員らが催涙弾を運び込んだテントへと移動し、運んできて再び放り込む。

「これでよし」

そう呟くと、サボは空中を跳びはね、近くの大きな岩の上へと上がり、待ちに入った。

……間もなく、穴からは白い煙が立ち昇りだした。

そのまま待つ事しばし。地面が盛り上がり、人型のモグラが飛び出してきた。



「げほっ！えほっ、げほげほっ！？」

ぼろぼろと涙を流しながら、咽ている。

当然だろう、あれは海軍御用達の催涙弾だ。

コンビを組んでいると聞いた時点で、おそらくMr. 4も本来ならば地面に引き込んで共に移動して、奇襲攻撃といった手法も当然あるのだろうと予想は出来た。

そうになると、掘った後を埋める、という手法は取らないだろう。

そもそも、彼女は最近では基地建设が多かったという。掘った後を埋めるような癖がついているとは思えない。

なら、話は簡単だ。地面の中は逃げ場のない煙突になる。

問題は必要なだけの催涙弾を用意出来るかだったが、それはCPが万事対応してくれた。多数の催涙弾もサボ達だけならば人手が足りないが、CPは組織改革によりこうした調達から搬送人員まで役割が定められている。その道のプロ達の熟練の腕で迅速に運んで来てくれた。

「あつ、あんだっ！ご、ごんな事っでっ！ば、恥ずかしくないっ！げほっ、ごほほっ！」

濛々と尚も煙突の如く煙を噴き上げる穴から懸命に脱出して、ミス・メリークリスマスは悶えていた。

「悪いね」

サボも、『酷いやり方だよな？』と思ってはいたものの……モグラと人間とでは得意なテリトリーが違う。

確かに【月歩】で空を舞えば、地中からの攻撃は受けない。

だが、それをやれば今度はミス・メリークリスマスは地中から出

てこないだろう。

持久戦に持ち込まれると面倒だ。

では、どうするか、と考えれば、自分から地上へと出てきてもらうしかない。そこで考えた末に出されたのが、今回の作戦だった。

「【荊】」

瞬時に、岩の上からミス・メリークリスマスへと移動する。

はっ、とミス・メリークリスマスがそれでも反応したのは、モグラの特性上目での感知が主体となっていないからだだろう。だが、もう遅い。地上で、剣士の間合いに入っている。くるり、と刃の背を向け上空より一撃。

「【竜墜閃】！」

逃れようもあるはずもなく……。

ミス・メリークリスマスは意識を刈り取られた。

……まあ、現在の彼女の状態ではこの方がまだ楽かもしれない。もっとも、目が覚めたらまた大変だろうが……。

「単純な獣人系悪魔の実の能力者だったら、真っ向勝負してくるような相手だったらこちらをもっとまともに相手してやっても良かったんだけどな」

何分、相手のフィールドが特殊すぎた。

そう思いながら、サボは刀を鞘へと納めた。

第187話・Mr・4&ミス・メリークリスマス(3) (後書き)

という形で決着

いや、実際相手が地中に籠っている限り、サボには攻撃手段はなく、地上へ出て真つ向戦闘つてのはミス・メリークリスマスの戦い方じやありませんからね

彼女の場合、時間を稼いでると、さっさと地面の中を掘って脱出されかねませんし

そうされても、逃げたのが分かるには時間がかかりますからね  
短期決戦が求められてた次第です

次回のMr・4戦はもつとまともな戦闘になります

## 第188話・Mr.4&ミス・メリークリスマス(4)

Mr.4とゾロ。

2人の戦いは奇しくも遠距離戦となった。

Mr.4の連射する爆弾がゾロの接近を阻んだ。ゾロとてやられっぱなしという気にはなれないから【煩惱鳳<sup>ほんとうほう</sup>】で反撃する。

Mr.4の戦闘方法は至極単純明快だ。

何時も連れている愛犬でもあるラッサーの吐き出すボール型時限爆弾を手にしたバットで打つ。

近付いてくれば、バットで相手を直接打つ。

使うバットは以前は4t、現在では実に6tに達する巨大な代物だ。

これで殴られれば、ただではすむまい。そんなものを木製の普通のバットと同じように軽々と振り回す怪力で殴り倒されれば、普通は死ぬ。

爆弾も1発や2発ならともかく、連打されると近付いた状態では、さすがにかわしきるのも難しい。

無論、ゾロはそうした連中とはまた異なる。

敢えて接近戦の距離へと踏み込もうとして果たせずにはいた。

何しろ、ゾロには高速移動手段がない。

相手が距離を取ろうとすれば、なかなかそれを詰める事が出来ずにいた。

(ちつ。あの野郎……確かにこの距離じゃ俺が不利だ)

確かに【煩惱鳳】は威力は高い。

だが、連射に向いた技とは言いがたい。

何しろ、【煩惱鳳】は溜めの姿勢から一気に威力を放つ技。1発の【煩惱鳳】を放つ間に、相手からは10発以上のボール型時限爆弾が飛来する。そもそも溜めの態勢に入った時点で次が飛来するか、実際にはもっと間隔が開く。

懸命に回避しながら、直撃コースに乗った爆弾を打ち払った時ふと気付いた。

(……ん？時限爆弾？)

ふと引つ掛かるものがあった。

(……やってみるか)

連打してくるとはいえ、ラッサーが吐き出す以上一定の限界がある。

それを見極め、Mr.4が打った瞬間。

ゾロはそれに合わせて前へ出た。

「おおおおおおおおおっ！」

両手で黒刀【秋水】を持ち、前へと出て、打ち返した。

こんな無茶は他の2本では出来ない。恐竜が踏んでも1ミリさえ曲がらないとまで言われる、とにかく頑丈極まりない黒刀だからこそ出来る芸当だ。

見ている気付いた事だが、あのボール型爆弾はとにかく頑丈であり、また起爆時間が来るまでは絶対に爆発しないようになっていたようだった。でなければ、あの豪腕で打った瞬間に爆発している。

では、何時起爆するようになっていたのか？

見ていた所、時限爆弾として一定の時間乃至最初に自分がいた位置付近で爆発するようセットされている様子な反面、距離を取った

場合、随分と手前で爆発する様子も確認出来た。

ならば、前に出て、爆発の時間が来る前に打ち返す事も可能なはずだ。

そして、その目論見は凶に当たった。

ただし、想定外の事もあった。

怪力に関してはMr. 4はゾロを上回る。その豪腕で打ち出された爆弾の勢いはゾロをしても完璧に打ち返すという訳にはいかず、野球で言うならばボテボテのゴロのような形になった。

それでも幸い下が固い地面だったのが幸いした。

跳ね返り、転がった爆弾はゾロ寄りの地面で爆発し、飛来する砲弾の軌道を逸らした。だけでなく、爆発によって2人の間の土砂を巻き上げ、視界を妨げた。

(好機！)

一気にゾロは斜め方向へと走る。

Mr. 4もまたこの爆煙に紛れて行動してくると予想して爆弾を打って来るが、やはりその飛来するのは真正面。

吐き出す砲弾は多いとはいえ短時間では限界がある故に、前方120度全てに向けて打つのは困難だ。とはいえ、煙の中に動く影に気付き、即座に方角を修正したのはMr. 4の面目躍如と言えるだろう。

「邪魔だあつ！」

だが、飛来する爆弾は僅かに3発。

うち、直撃コースは1発。

その1発を叩き切り、真っ二つに分かれたそれが自分を過ぎた地点で爆発する、その爆風をも後押しにして駆ける。

もちろん、いい事ばかりではなく、爆発によって吹き飛ばされた

砲弾の欠片や岩の破片が背中から襲い掛かり、幾つかはゾロの背に突き刺さる。それでも致命傷ではないと判断し、突き進む。

ゾロとて分かっている。ここで倒れれば、それこそ終わりだと。そして、遂にゾロは自身の距離へと踏み込む。

ことここに至れば、もう爆弾ノックは無理だ。それこそMr. 4 やラッスー自身も爆発に巻き込んでしまう。

空気を引き裂くような轟音を立てて、Mr. 4のバットが迫る。

これをゾロは【刀狼流し】で受け流す。

いや、受け流そうとした。

「ぐっ!?!」

Mr. 4は覇気を使えない。

努力はしたのだが、どうにも相性が悪かったのか修得する事が出来なかった。

だが、新世界へ行った事が無駄だったのかというところではない。実力者との戦闘も多々なし、怪力もアップした。何より、接近戦闘での小回りを効かせたバット捌きを身につけた。だからこそ、バットも単純に振るだけならばもっと重いバットを使う事も出来るが、この重量に留めている。

受け流そうとして、ゾロはその怪力によって態勢を崩された。

それでも、吹き飛ばされなかったのは、【刀狼流し】がゾロとしては珍しい真っ向受ける形の剛剣ではなく、受け流す柔剣だったからだ。

刀とこうした金属の塊は相性が余りよろしくない。

黒刀はともかく、他の刀では刃が欠けかねないし、歪みも出易い。下手をすればいかな名刀といえど、受けた瞬間にへし折れる。それ故の受け流しだったのだが、如何にゾロが怪力の部類に入るといえど、相手もまたゾロを上回る怪力の持ち主であり、武器を持つ手も

ゾロは片手に対して、Mr・4は両腕。その差が純粹に出た形となった。

この瞬間にゾロは悟った。

(受け手に回ったら不利、いや、やられる！)

崩れた姿勢から強引に受けたのとは反対の左手に持つ【三代鬼徹】を振り上げる。

これをMr・4は引き戻したバットで受け止め……ほぼ同時に襲い掛かってきた【和道一文字】を慌てて防いだ。

それを防げば、今度は【秋水】……正に息をもつかせぬ怒涛の連撃を加えてゆく。

ここが勝負所だとそう定めているからだ。

ここで、手数之差が出た。

武器の差といってもいい。

バットは1本、刀は3本、加えて打撃武器であるバットに対して刀は刃物。ましてや、ゾロの刀はいずれ劣らぬ切れ味を誇る名刀ばかり。掠めた刃でもMr・4に細かな切り傷を負わせてゆく。そうして左右同時に振られた刀の内、左手の【三代鬼徹】がMr・4の足を切り裂いた。

戦闘続行不能な深手ではない、だが、確かに瞬間、Mr・4は態勢を崩した。

瞬間。

ゾロは【三代鬼徹】を手放した。  
そのまま両腕で【秋水】を掴む。

「一刀流……【飛竜火焰】！」



斬鉄。

両腕で振るわれた刀は、僅かな抵抗を示し　バットを切り裂き、そのままMr・4の体をも切り裂いた。瞬間、発火した傷口はMr・4に膝をつかせ、トドメとばかりに打ち込まれた峰での一撃が遂にMr・4の意識を刈り取った。

地に倒れ伏したMr・4だが幸いというべきか、傷口が下になった為巨体によって押さえ込まれる形となった火も燻っているのみだ。これ以上広がる事はあるまい。ラッサーは心配そうにMr・4の傍に寄り添っている。

それを確認して、荒い息をつくゾロの口から【和道一文字】が零れ落ちた。

そのままゾロもまた倒れ伏した。

背中に刺さった破片は決して軽傷のものだけではない。中にはナイフ並の鋭さと大きさのある物もあり、ゾロの体力を着実に奪っていた。

勝敗がついたと見たCPの隊員らが駆けつけてくるのを確認しつつ、そのままゾロの意識もまた暗闇に呑み込まれていった。

第188話・Mr・4&ミス・メリークリスマス(4)(後書き)

戦闘シーンは大変です……

とりあえず、ゾロVS Mr・4戦決着しました

念の為ながら、ゾロは死にませんのでご安心をw

次回からは上位ナンバー戦

CP9達の活躍となります

第189話・Mr・3（1）

Mr・4とミス・メリークリスマスもまたCP隊員によって運ばれて行った。

だが、彼らはまだ運が良かった。

相手をしたのがエース達であり、殺しに来た訳ではなかったからだ。一方その頃……。

Mr・3は冷たい汗が自分の背を伝うのを実感していた。

目の前には1人の鼻の長い男がいる。

先程までは味方だと思っていた。今は敵だと思えない。

そう、誰だって今のMr・3の立場に立てば、そう思うだろう……

彼の足元に力なく転がるミス・ゴールデンウィークの姿を見れば……。

この男が最初に姿を現した時は、Mr・3もミス・ゴールデンウィークも警戒した。

当然だろう。何しろ、Mr・3は賞金首だ。以前と比べ、のんびりしてられる状況ではなくなってしまった。

「……何者だガネ？」

「ああ、すまんのう。敵じゃないわい。Mr・8と名乗れば分かってもらえるかのう？」

それを聞いて、多少は疑念を解いた。

「……何で、Mr・8がここにいるガネ？」

当然の疑問だったが、自分と相棒のミス・マンデーはそれぞれに援護に向かうよう命令が来たのだという。

Mr・8はMr・3である自分の所へ、ミス・マンデーはミス・ダブルフィンガーの下へ、だ。

「本当カネ？」

「あゝ疑うのはもつともじゃが、こちらとてアンラッキーズから何でそんなもんが届いたかは不明なんじゃ。こっちはオフィサーエージェントではないからのう。そっちから問い合わせてもらった方が早いわい」

ふむ、とMr・3は顎に手を当てつつ考えた。

……筋は通っている。

確かに、この重要な局面で、重要な部署に応援を回すのは当然だし、下手な雑魚を回した所で余り効果的な応援にはならない。それならば、フロンティアエージェントから役立ちそうな奴を見繕って……というのは十分ありえる。

Mr・3もMr・6がフロンティアエージェントながら、実力を評価されて新世界側に回された事ぐらいは知っている。実際、数字が上がっていけば、フロンティアでもオフィサーに為れる訳だからおかしな話ではない。

……自分の地位なら、すぐに振り落とされる危険はない訳だし。

Mr・3は手配書が回ってからのというものの、疑い深くはなっていないが、だからといってむやみやたらと疑ってばかりいては部下さえ疑わなければならない。

それに少なくとも、確認した限りでは彼は何年もB Wの一員として活動してきたなら当然の常識を間違いないで持っていた。

ハロックス

「分かったガネ。それならこちらとしても協力してもらおうガネ」

少しほつとしてMr. 3は言った。

ミス・ゴールデンウィークも敵ではないと分かったからだろう。どこか安心した様子だ。

彼女の場合、戦闘能力がない故に、彼に手配書が回ってからというものの尚更危険な状態にあった。

幾度危機的な状況に陥った事が……。

幸いなのは、彼女自身は手配されていない為に、騙されて連れられている様子を演出すれば手出しされる事はなかった事ぐらいか。

……もつとも、お陰でMr. 3の罪状は増えていたりするのだが。

「分かった。それで何をすればいいんじゃない？」

言いつつ、近寄ってきて、ミス・ゴールデンウィークの傍を通り、Mr. 3の下へ。

「【指銃】」

向かう途上。

彼女の傍を通り抜けざま、軽く一撃。

通常の【指銃】とは異なる。

そう、隣を歩きながら首筋に一撃を僅かに腕を上げ、肘を曲げたまま放たれた一撃で、だがミス・ゴールデンウィークは力なく倒れた。

瞬間、Mr. 3は何が起きたか分からなかった。

だが、そのまま近付いてくるMr. 8相手に咄嗟に手配されてか

ら追われた者故に身についた反応が。

「【指銃】」

「ドルドルアーマー！」

どろりと体前面に広がった蠟の鎧が何とかギリギリで間に合った。舌打ちするMr・8から急ぎ距離を取る。

「お前……！やはり、嘘力ネ！」

「いいや……Mr・8なのは本当じゃ。ただ、本当の所属が違うだけじゃ」

その言葉で悟った。

こいつがかねてからいるだろうと推測されていた世界政府のスパイなのだ……。

「成る程……だとすると」

こいつの相棒であるミス・マンデーもまたそうである可能性がある。る。

そう思いはしたものの、動ける状況ではない。

それに……。

(仮にもMr・1の相棒だガネ。本当だとしてもあちらで対処してもらっしかないガネ)

そう判断すると、自らの腕に蠟を垂らす。

力なく倒れ伏すミス・ゴールデンウィークの様子を見る限り、彼

女がこの戦闘中に復活するのは期待しない方がいいだろう。ならば、  
自分が自分の力で何とかするしかない。

(……私とて、BWのMr.3だガネ！)

今正に、戦いが始まるうとしていた。

第189話・Mr.3(1)(後書き)

カクVSMr.3 戦闘勃発です

……すみません、これから仕事に行くので返信とかはまた帰ってきてから……



第190話・Mr・3(2)

「ドルドル王国！」  
キングダム

「！」

咄嗟の反応で、カクは大きく跳び退つて難を逃れた。

Mr・3がそう叫ぶと、大量の真っ白な蠟が彼の全身から溢れ出した。それはまるで津波のように膨れ上がり、全方位へと広がり、カクもまた、あのままじつとしていれば飲み込まれる所だった。

現在、彼らがいる場所は枯れ果てたちよつとした林の跡だ。

嘗てはこの辺りも水が流れていたのだろうが……オアシスが枯れ、井戸が1つかろうじて生きている程度の状態では人々も木々も生きていけなかったのだろう。

それら全てを白い蠟が飲み込み……カクの眼前には枯れた木も岩も、目に映る全てが真っ白な蠟に包まれた光景が広がった。

その中に乱立する人型が幾つもある。そのどれもが真っ白ながらMr・3の形をしていた。

「……何のつもりじゃ？」

あの中に紛れようというのだろうか？

だが、ミス・ゴールデンウィークがいたなら、あれらに色を瞬時に塗る事も可能だろうが、現状では不可能だ。だとすれば、紛れようにも目だってしまう筈だが……。

(……いない)

周囲を確認するが、Mr・3の姿は、ない。

何らかの方法で隠れているのだろう。

……とはいえ、完全に埋もれてしまっただけに呼吸が困難な筈。そう思い、探していると……蠟が盛り上がった。

【ドルドル人形芝居<sup>マリオネット</sup>】

大型の蠟製のロボットとも思える人型が立ち上がる。

蠟製と侮るなかれ。悪魔の実の力によって作られた鋼鉄並の強度を持つ蠟の塊だ。

ゆえに……。

「【嵐脚】」

同じ六式使いでも、やはりそこは人間。得意なものと苦手なものがある。

ジャブラが【鉄塊】を得意とするように、カクにとっては【嵐脚】は得意技だ。だが、それでも鉄の塊には相性が悪い。白い蠟の塊には傷はつけられたものの、それは表面上のごく小さなものだった。それもすぐに埋まってしまう。

「……硬いのう」

どこかで見ているのは間違いない。

悪魔の実といえど、完全なオート機能などついていない。ならば、動かすにも修復するにもどこかで見ている筈なのだが……。周囲が蠟で埋め尽くされている状況では見当がつかない。いや……。

（少なくとも、あの人形の中ではない。あのいずれかに紛れていては、視界が通らない可能性がある）

いずれにせよ……。

(……軽い一撃では埒が明かんの)

【嵐脚】は軽い。

これはもう、真空の刃という技の特性上、仕方のない事と言える。ましてや、刃に相性の悪い相手。切り裂く特性も殺されている。ならば、とばかりにカクは全身に力を込めた。

(……ふふふ、上手くいってるガネ)

新世界はMr.3にとっては地獄のような日々だった。

何しろ、以前に倒したような4000万ベリー台の海賊など、こちらでは雑魚もいいた所だ。正直に言えば、とっとと逃げ出して帰りたいかった。

だが、その場合、どうなるだろうか？

間違いなく、自分のナンバーは落ちる。

フロンティアエージェントからも抜擢された者が新世界に来ているとい話だし、Mr.4とMr.5も懸命に頑張つて実力を上げているという。そして、Mr.1の実力は更に向上し、Mr.2はその立場が特殊故に陥落の危険がない。

つまり……下手をすれば、自分がフロンティアエージェントに落ちる。

(嫌だガネ！)

懸命に頑張つて、ようやくこのナンバーまで自分を上げた。

Mr.2が傭兵的な立ち位置にあるのはオフィサーエージェント

クラスには知らされているから、現在の地位は実質男性幹部のナンバー3。ここまで上がってくるのにどれだけ苦労した事か……。

それを全部泥に投げ捨てるなぞ認められる訳がない。ではどうするか？

最終的にMr.3が選んだのは悪魔の実の能力の制御向上だった。自身の直接戦闘能力はMr.4に劣る。

ここでそれを鍛えた所で、Mr.4に追い抜かれる可能性を高めるだけ……むしろ、自分の得意分野を伸ばした方がいい。そう考え、出せる蠟の量の向上、その制御。更にそれを利用した技などを懸命に考え、鍛えた。Mr.3はMr.3なりに頑張ったのだ。

その成果が今の目の前の光景。自分の身を安全な場所へ置き、離れた所から蠟人形を操って倒す。

倒された所で土台が土台だから幾らでも代わりは出せる。……問題は自分の精神力だが、鍛錬の成果か、ちょっとやそつとで疲れはしない！

(とりあえず、相性は悪くないみたいだし、じわじわと体力を削っていたぶって……)

そう考えていたMr.3は目の前のMr.8(名前を知らないのでもう判断するしかない)が全身に力を込めたのを見て、何を、と疑問に思ったが、すぐにその答えは眼前に示された。

(ぞ、象だガネ!?)

……目の前には今や1人の若者の姿などなく、完全なる獣の姿。巨大なマンモスが堂々と立っていた。

第190話・Mr.3(2)(後書き)

もうちょっとだけ続くんじゃ

2をお送りします

Mr.3はMr.3なりに頑張ってます

第191話 - Mr.3 (3)

変身が終わった時、Mr.3の視界にいたのは象だった。

それも全身が毛並みに覆われ、牙もまた現在一般に知られている象より大きい。何より全体が一回り以上大きかった。

(……覚えがあるガネ。確かマンモス)

古代種だったか、それともまだ辺境の島のどこかに生きていたか。そこら辺までは覚えていないが、獣人系なのははっきりした、が、それ以上に。

(……さっきまでの動きはスピードタイプだったのが、こっからはパワータイプカネ……)

戦闘スタイルがガラリと変わるであろう事が気になる。

能力者当人が、それに対応出来ていないならよし、だが、対応出来ていた時は……。

そして、その答えをMr.3はすぐに知る事になった。

カクの全身が肥大化し、巨体となる。

どこか鼻や牙も角ばった印象があるのは、変身前の素体故か。

この能力を手に入れてからはカリファ共々積極的に使用してきた。どんな便利な道具として使いこなせねば意味はない。

実際、自分以外の能力者と戦った事もあったが、振り回されている印象が強かった。

反面、CP長官の差配で密かに海軍兵士に混じって、海軍上層部

の能力者同士の戦いを見る機会もあった。

……あの時の印象を問われたなら、凄かったとしか言いようがない。

赤犬大将の奔流するマグマ。

青キジ大将の瞬時に海すら凍らせる氷。

黄猿大将の一撃で大地を削る光。

長官もまたその荒れ狂う銀の洪水が周囲を薙ぎ払っていた。

当人によれば、能力の鍛錬も兼ねていたから、普段はあそこまで能力ばかりではないそうだが……少なくとも、能力が多彩なのは、そして使い方次第で様々な応用が利く事も理解出来た。

以後、自分の能力を使い、試し、それに合った戦い方を模索し続けた。

「ゆくぞ！【双鉄槌】！」

変身に気を取られていたのだろう。

瞬間動きが止まっていた目の前の巨体人形……自分がこのサイズになれば、巨体とまでは言えないかもしれないが、自身の後ろ脚で立ち上がり、前脚を叩きつける。

参考にしたのは長官の家のグラントイガー、アリスだ。

動物の五式使いという事もあり、色々と参考になる点が多かった。

さて、悪魔の実の蠍は硬い。

だが、反面というべきか、脆い。

硬さはあっても、金属特有の粘りが無いからだ。

結果、斬撃から打撃へと変わった一撃に、操り人形は耐えられなかった。激しい衝撃を受け、腰付近から真っ二つに折れ……次の瞬間、溶けて新たな人形が生まれた。

(……やはりか)

所詮、あれは操り人形。  
人形師を何とかしない限り、相手の精神力切れが起きない限り、  
何度でも蘇ってくるだろう。

「む？」

……どうやら相手も危機感を抱いたようだ。  
人形の形状が変わった。

先程まではのっぺりとした人間を思わせるような印象だったのだ  
が……今は全身至る所から棘が突き出し、手も刃物みたいな形状へ  
と変化している。

（打撃が有効なのは分かった。後は……）

瞬時に体を半獣人形態へと変える。

パワーは落ちるが、同時に体のサイズも小さくなる。正に人間形  
態と獣形態の中間と言える。これが相手に通用すれば……。

「【流星槌】！」

空へと駆け上がり、そこからドロップキックをかける。

隙の大きな技だが……操り人形では、どうしてもタイムラグが生  
まれる。

棘？

こちらもまた【鉄塊】をかけたの攻撃だ。全く痛くない訳ではな  
いが、無視出来る範囲だ。

壊す度に相手もまた復活する。

正にイタチごっことも言えなくもないが……。



(ふむ)

やはり角度によって、相手の反応に差がある。  
低位置からの攻撃に対しては反応が一段遅れる。  
高い高度を取っての一撃にも反応がやや遅れる、が低空よりはマシだ。

確認の上で、今度は木々の高さ程度から今度は前から次は後ろから、その次は左右からと様々な角度から攻撃を加えて……人形への攻撃に対する反応から大体位置にも予想がついた。

再び高空へと舞い上がる。

そして……。

再度獣形態へ。その巨体を丸め、自身を砲弾として落下する。

「……これで終わりじゃ、【鉄塊丸】」

その光景に角度的に一瞬Mr.3は反応が遅れた。  
気付いた時には驚愕した。

「な、なんで人形ではなく、こっちに来るガネ!?!」

瞬間、頭の中で色々な対処法を考えた  
だが……。

改めて、上空を見た。

降って来る巨大な象のサイズの砲弾を。

自分の蛹の強度を考えた。

結論は簡単だった。ふつとMr.3はニヒルな笑いを浮かべ。

「あんなもん無理だガネ!?!」

血相を変え、現在の擬態　　蠟で形作ったガラスドウの樹木の中に潜んでいたMr.3は蠟を解いて、転がるように逃げ出した。カクが着弾し、潜んでいた樹木模型に着弾、その衝撃で軽い毬のように吹き飛ばされ転がったMr.3は他ならぬ自身の蠟でコーティングされたが故に鉄のように硬い別の樹木に頭部をぶつけ、気を失った。

第191話・Mr・3(3)(後書き)

蟬でコーティングされた樹木に混じって、完全に偽物の樹木を作成し、その中に潜んでいた、がMr・3の潜伏場所でした

Mr・3の場合、自身が前線に出ればまた状況が変わったのですが……  
この後、もう少し粘らせようかとも思いましたが、蛇足になりそうでしたので、ここで決着としました

第192話・Mr・2(1)

さて、ここまででは世界政府側が上手く勝利を納めて来た。だが、全てが全て上手く行っている訳ではない。その典型例がMr・2を相手としているクマドリだった。

「ケリ・ポアント  
蹴爪先！」

「ぐぐつ……」

強烈な蹴りを受け、【鉄塊】で防御するも尚ダメージが通ってき  
たクマドリは呻き声を上げた。

「んがっはっはっは、残念だったわねい」

どうにもおかしい。

アスラと戦ってから、それなりの時間が過ぎた以上怪我が治つて  
いたもおかしくはない。

だが、アスラとの戦闘後もCPとしてはこの厄介極まりない男を  
逃す訳にはいかない、と、追い続けてきた。

だが、その後のMr・2は復帰後も以前と異なり、逃走を行なう  
事が増えた。戦闘に突入しても時間が長引けば逃走を選んだ。

その結果として、以前程の戦闘力を失ったと判断されていた。

アスラ自身は果たして本当にそうなのか迷っていたのだが……如  
何に情報を分析しようとも、そこに真実が混じっていないければ意味  
はない。結局、保留とするのが精一杯だった。

しかして真実は……。

「こっちがたばかられたって事かい」

「んがっはっはっは。当然ねい！演技はあちしの得意技よう！」  
という次第だった。

結果として、覇気をも使える新世界で鍛錬を重ねてきたMr. 2  
ボン・クレイ相手にクマドリは苦戦していた。

クマドリとて決して弱い訳ではない。

むしろ、以前より余程強くなっている。何しろ、彼もCPの忙しさのせいで人手が足りず、新世界にちよこちよこ派遣されていたからだ。

それでも尚、地力においてMr. 2が上回っていた。

大将黄猿の介入により開戦前に両軍の対峙は終結した。

海軍側とて、海兵らは決して戦争がしたい訳ではない。ただ、上の命令があったから動いただけだ。

その上の更にも上。頂点に近い黄猿大将から「戦闘をやめろ」と直接命令が下った以上、海兵らは、いやアラバスタ王国軍もまた、どこかほつとした様子で双方とも軍を引いていた。

無論、両方の部隊にBWのバックワークスの作業員は紛れ込んでいたのは確かだが、コブラ国王の傍には現在は近衛たるペルやチャカ。更に銃弾をその身でもって防いだゴム人間であるルフィ海軍中佐ががちりガードしている。

一方の黄猿大将はというと、こちらに手を出して何とかなると考えるような無謀な奴はさすがにいなかった。

原作では万が一に成功すれば名を上げられるという願望から狙った奴がいたのは確かだが、ここでそんな事を行った所で何の意味もなく、それどころか先程暴走した面々がいたばかりなせいで、周囲の海兵もアラバスタ王国兵もピリピリしている所でやろうとしても、

即座に取り押さえられる事が確定だったからだ。

この撤収の混乱の中で、Mr.2は巧妙に脱出した。能力をフルに使い、或いは別の海軍将校に、或いは単なる海兵に化け、するすると戦闘を避けて逃げ出した。

お陰で、少将が突如消えた海軍側には密かに混乱が起きていたが、幸い目の前に海軍最高戦力がある。黄猿は既に詳しい事情を知らされていたから、すぐに状況を把握し、部隊を掌握。指示を下していた。

この逃げ出したMr.2を張っていたのがクマドリだ。

といつても、常について回った訳ではない。そんな事しても、まず振り切られるのがオチだ。

なので、軍の周囲にCPの監視員を配置し、部隊から離れる人間がいないか監視していた。

そうして引つ掛かったのが、合計11名余。

うち7名は混乱したり、サポートに潜り込んでいたBW構成員らである事が確認。3名はクマドリを含めた戦闘要員が始末し、遂に捕捉したのがMr.2だったのだが……。

「さうで、あんたを始末して、とつとオサラバさせてもらうわねい……」

「……………」

いざとなれば逃げるしかあるまい。

逃げるだけならば、【剃】や【月歩】を使えば容易い筈だ。

とはいえ……。

( あつしにも〜CP9の一員としての意地がある、とつくらあ )

政府非合法工作員。

その中でも最高の部隊を称されるCP9たる六式使い。

無論、Mr. 2が万全の状態という、この現状はCPの情報収集の失敗を意味している。クマドリが責められる事はあるまい。だが、本来はそうした失敗を覆す事を期待されるのがCP9だ。

(まあ、やれるだけあ、やってやる)

一方、Mr. 2も余り余裕がある訳ではなかったりする。

(拙いわねい。こんな所で足止め喰らってる訳にはいかないのよ  
ねい)

策が失敗した以上、早々に離脱しなければならない。

何しろここまで逃れてきたとはいえ、海軍はその大部隊が未だ近辺に留まっている。指名手配されている自分ならば、その追撃に躊躇しまいし、最悪海軍大將までやって来る。出来るだけ早急に目の前の男を片付けねばならなかった。

(ま、なるようにしかならないわねい)

双方の思惑が入り混じりながら、戦いは続く……。

第192話・Mr.2(1)(後書き)

うう、レス返しする時間の余裕が……

今日もこれから仕事です  
すみません



第193話・Mr・2（2）

Mr・2とクマドリ。

2人の戦いは案外早くついた。

Mr・2の勝利だった。

こちら辺は地力の差だっただろう。覇気を完全に修得したMr・2と、幾度か新世界に行く用事があったとはいえ修得出来ないクマドリ。

この差は大きかった。

「ぐうっ……」

膝をついたクマドリに、ボン・クレーはどこか申し訳なさそうに告げる。

「悪いわねい。あちしもここで捕まる訳にはいかないのよう」

ボン・クレーは決してBWの理想に<sup>パロックワークス</sup>応じている訳でも、BWが示している報酬を<sup>パロックワークス</sup>求めている訳でもない。

実際、クロコダイルがMr・1とMr・2を不動の位置に置いているのはそこが大きい。

この2人はいずれも、利ではなく、それぞれの持つ根本に基づいて動いているからだ。

或いはクロコダイルへの忠誠心故に。

或いは敬愛する人への想いと、仲間<sup>パロックワークス</sup>は裏切らないという自分の信念故に。

「……オカマ王イワンコフ、か」

「!……知ってるのねい。まあ、当然かしら」

前にアスラ中将と戦った時、彼は何かしらを知っている様子だった。

それを部下、それもそんじょそこらの雑魚ではないと分かる相手に教えたというのは別段不思議な話ではないだろう、そうボン・クレーは判断した。

「従ったからとて、あいつが解放されるなんてこたあ〜ないよいつ?それでも命令に従って、不幸にする奴を増やす手伝いをするのか〜よいつ!」

クマドリの話は真実だ。

如何にクロコダイルという王下七武海の一角が本当に釈放を働きかけたとしても、表向きの理由である猥褻物陳列罪ではなく、革命軍の一員である彼女(?)の解放はありえない。

……そもそも……。

「大体あいつあ〜既にインペルダウンで行方知れずになつてるよよいつ。上手くいつても行方不明を解放するのあ〜無理じゃねいか?」

「なっ!」

さすがにボン・クレーもまた驚きの声を上げる。

「まさか……あんたら、あの人を殺したの?」

だとしたら許さない、そんな気概を込めた目で睨むが……。

「生憎く違つよよいつ？」

そう、違つ。

現代の監獄とは違つ。別に、インペルダウンで死者が出るのは至極当たり前の話だからだ。

切られ、焼かれ、食われ、凍りつき、そして毒に冒されて、囚人達は死んでゆく。

その体にそうした傷跡が残る事は、日常に転がっている話。少なくとも、死んだなら死んだと公表されたとしても世界政府としては痛くも痒くもない。決してオカマという存在が世界一般に肯定されている訳ではないし、オカマ王の濃さを各国の王族は世界会議で知っている。彼女（？）もまた王の1人だからだ。

一部の真面目な王らはともかく、大部分の人間が反感なり不快感なりを持つていたからこそ、イワンコフが収監された時、世界各国は沈黙を守つたのだ。もちろん、それが分かつていたからこそ、世界政府も収監する事が出来た。

「長官の言うにやゝ過去にも脱走者がいなかった訳じゃないらしいよよいつ。死体も見つかからない連中の中には実は脱走した奴らもいるんじゃないかねえかつて疑つてるらしいよよいつ」

過去に脱走に成功した人間がいるのは事実だ。

金獅子のシキ。

海賊提督と謳われた海賊王ゴールド・ロジャーのライバルが正にそれだ。

無論、アスラは真実を知っている。

インペルダウン内部に広がるレベル5・5のオカマの王国。

だが、それをアスラは語る事はない。

自身の信念もあるし、そもそもインペルダウン内部を散策した事はないのだから、これまでずつと知られていなかった事を何故知

っているという話になりかねない。  
如何にCP長官といえど、どこから上がってきたか分からないよ  
うな情報を持ち出す事は危険なのだ。

「……成る程ねい」

ふっとボン・クレーは笑った。

「けど、あちしは1度この組織で働く<sup>と</sup>決断した！ひとたび仲間  
になると誓ったからには、あちしは仲間を裏切るつもりはない！」

ドーンと胸を張って、ボン・クレーは宣言した。

そして。

直後にバレーエのような形で回転した。

「【あの夏の日の回想録<sup>メモワール</sup>】！」

飛来した銃弾を弾き返して、クマドリに笑いかけた。

「お生憎さまねい。あんたが狙撃手の配置の時間を稼いでたのは  
途中で気付いてたわよう」

そう、クマドリはその為に会話で時間を稼いでいた。

Mr. 2ボン・クレーは超人系悪魔の実マネマネの実の能力者。  
確かに使いこなせば非常に危険な悪魔の実だが、そこには銃弾を無  
効化する能力などはない。だからこそその手だったのだが……見聞色  
の覇気を身につけたボン・クレーには通じなかった。

クマドリもダメだったか、と苦笑を浮かべた。

「それじゃあねい！また世界のどこかで会う事もあるかもねい！」

そう告げ、Mr. 2は改めて走り去った。  
クマドリにそれを追う余力は残っていなかった……。

第193話・Mr・2(2) (後書き)

という訳で、ボンちゃんは逃走成功です

そして寝坊した！

アップだけはと思ったので、会社行ってきます！

## 第194話・ミス・ダブルフィンガー

スパイダーズ・カフェ。

バロックワークス

それはBWの中でも精鋭、オフィサーエージェント達の為に用意された隠れ家的な酒場である。

表向きは古び、寂れた普通の酒場に見える。

だが、その中身は世界の銘酒から、くつろぎの為の娯楽施設に温泉まで用意しており、任務で疲れた体をのんびりとリラックス出来るようセキュリティもかしりしている。

この酒場の店主こそがMr. 1の相棒たるミス・ダブルフィンガーだった。

店の外へと出たその姿を離れた崖の上から見つめる姿があった。事前にCP隊員による旅人を装った人間に入らせた所、「これから用事があって出なければならぬ」という話で水を貰って店を出ている。

「どうやら間に合ったようですな」

ゆっくりと伏せていた身を起こし、【視力強化】を解除する。

ここからなら十分だ。

切りかえた【聴力強化】で確認するが、物音は地下からはしていない。未だ地上部分で動き回っている。脇に置かれた巨大な荷物に手を伸ばす。

「パワパワ 筋力強化」

一気に片腕で荷物を掴み、持ち上げ、それを投げる。長時間は自分の体がもたないから、一連の行動は瞬時に行なわなければならぬ

い。

巨大且つ大重量の荷物を強引に持ち上げた事で崩れそうになるバランスは己の鍛えた感覚で乗り切り、筋力強化を行なって、筋肉は耐えられても骨が耐えられない。軋み、外れた部分もあったが、即座に【回復力強化】を行い癒す。

激痛が走っているだろうが、そこはCP9というべきか、顔を歪めもしない。

その視線の先で放物線を描いた荷物は……見事にスパイダーズ・カフエに直撃した。

轟音を上げ、着弾して間もなく大爆発が起き、スパイダーズ・カフエは木っ端微塵に吹き飛んだ。

もうお分かりだろう。投げつけたのは爆弾だ。

その爆発を契機に隠れていたCP隊員らが駆け出し、配置につきもし、あれから生き延びていたとしても無傷ではすんでいる筈がない。そこを複数による狙撃によってとどめを刺す。

ミス・ダブルフィンガーの存在は長らくCPにとつても不明だった。サイファーボール

内偵による、Mr.1にも相棒がいる事は確かだった。だが、姿が見えてこない。

当初はそういう能力者なのかと疑われた程だったが、ルッチが新世界に派遣される程になって、ようやく概要が掴めた。

オフィサーエージェントらの集合場所となる隠れ家の主。

そうになると、今度はその場所を突き止める為に大騒動だった。

この場所がようやく突き止められたのはごく最近になって、オフィサーエージェントらの動きがアラバスタ王国内において活発化してきた事だ。

ここで問題になったのは彼女の能力だった。

『能力が分からない』



悪魔の實の能力者である事は複数の証言から疑いようがない。だが、前線に滅多に出てこないから、なかなかその能力を識別する機会がない。

バロックワークス

Mr. 1と異なり、BWに入る以前から名前が売っていたという訳でもないから過去の彼女を探すのもまた大変だ。

しかし、能力が分からなければ、想定外の事態が起きる可能性がある。

実際、獣人系であっても鳥類であれば空を飛んで逃げられる可能性があるし、超人系なら他ならぬCP9にドアドアの實の能力者という実例がある。

そうして最終的に判断されたのが……。

『能力を発動させる前に消してしまえ』

というものだった。

酒場の看板を上げている以上、経営をしていない訳ではない。

時折、何も知らない旅人を装い、或いは何も知らない旅人が入れば後でこっそり聞きだして、ポーラと名乗る彼女がいる事を確認し続けた。

これが街中になれば、こんな手段は取れなかった。

隠蔽の為に荒野に作ったからこそ、このような乱暴な手段が取れたのだ。

海軍には出来なかった。

彼女は指名手配されている訳ではない。

今回の作戦はいささか派手ではあるが、要は暗殺だ。

他のオフィサーエージェント相手ならこのような方法は取れなかった。

彼らは様々な街を渡り歩いており、どこか一箇所拠点を決めているという訳ではなかったからだ。

彼女相手だからこそ、出来た事だった。  
狙撃兵を配置した上で、カリファはゆっくりと残骸となったスパ  
イダーズ・カフェへと近付く。

ある距離まで到着した所で【聴力強化】で音源を探る。

……いた。

「……しぶといわね」

生きてはいる。

だが、血の流れや筋肉の動き、骨の音。それらを分析するに大怪  
我を負って、まともに動けずもがいているという所か、そう判断す  
ると彼女はそれでも警戒を緩めず近付き……。

「【嵐脚】」

巻き込まれ吹き飛ばす残骸の中に赤く染まった人体が混じっている  
のが見えた。

地面に転がった彼女へとゆっくり歩み寄る。

……既に致命傷だ。

治癒能力を異常なレベルまで高められるといった、そういう能力  
者でもない限り、最早助かる道はあるまい。

放っておいても死ぬだろうが……。

「あ……あん、た……なに、も……の」

「……まだ声が出せましたか、しつこいですね」

途切れ途切れで掠れた声ながら、まだ声を出すミス・ダブルフィ  
ンガーにカリファは冷徹な視線を向ける。

そのままゆっくり歩み寄ってくる彼女の姿に不吉なものしか感じられなかったのだろう、動かない体を何とか動かそうとするが、最早体は言う事をきかず、かすかに痙攣しているようにしか見えない。その彼女を射程に捕えると、カリファは銃を撃った。

1発ではなく、2発3発……。

ミス・ダブルフィンガーが確実に死亡した事を確認して、ようやくカリファは背を向けた。

「後片付けをお願い」

「了解しました」

CP隊員の傍を通り過ぎる際に命令を下し、隊員もまたそれを当然のように冷徹に判断し、行動にかかる。

……明日にはこの場所には酒場があったという痕跡すら残っていないだろう。

第194話・ミス・ダブルフィンガー（後書き）

今回は至極あっさりと……暗殺作戦です

彼女だけは拠点を持っていますからね

拠点というのは、そこが拠点だとばれた瞬間に安全な隠れ家から危険地帯へと変貌するという事で……

クロコダイルのカジノみたいに、ばれても権力で守られていたりして大丈夫な場所ならまた話は違ってくるんですけどね

第195話・Mr・1（1）

さて、Mr・1は作戦が完全には成功しなかった事を受け、撤退の途にあつた。

クロコダイルがMr・1を1の数字に置いているのは無論その実力もあるが、同時にその忠誠心故でもある。誰だって、策が成功した後に側近として置いておくのに疑わしい人物よりは信頼出来る人物を置いておきたい。事実、上位のオフィサーエージェントを見れば……。

Mr・1：忠誠心厚い権力に関心の薄い男

ミス・ダブルフィンガー：小規模ながら、扱いの難しい面々を抱える組織をきちんと運営

Mr・3：それなりの謀略の能力を持つ、上には逆らおうという気概のない男

ミス・ゴールデンウィーク：そのサポート役で、単体での脅威は低い

と、上位をクロコダイルが王となった際に、その側近としてとりあえず組織の運営や護衛に使える人材で固めてある。

無論、その上でより使える人材がいれば、そちらと入れ替えていく事もある訳だが……。

そんな男故に、Mr・1は揺らがない。

1つの計画が失敗したからとて、平然と帰還してゆく。その歩みが止まった。

「出て来い」

肩に担いでいた荷物を落とし、視線をその先の岩陰に向ける。

そこから静かに1人の男性が出てきた。髭を生やした30台ぐら

いの精悍な表情の男……。

「ダズ・ボーンズだな」

……名前を知っているのか。

以前に殺した海賊か賞金稼ぎの知り合いかとも思ったが、何か違う気がする。

……だが、この男からは血の臭いがする。

といつても、普通の人間には感じ取れまい。1人2人ではない、何十人もの人間を手に掛けてきた者が纏う気配のようなものだった方が正確だからだ。

或いは、自分を殺す事を頼まれた殺し屋の類か。

相手が本当に自分かどうかという確認というよりはお前がターゲットなのだという通告だろう。否定し所で意味はなさそうだ。

そう判断すると、ゆっくりと頷いた。

「……そうだ」

「死んでもらう」

余計な言葉はいらない。

相手の言葉も宣言に近い。

もし、にこやかな笑顔で近付いてきていけば、ダズは間違いなく問答無用で斬り捨てていただろう。互いの関係を一言で表したただけ。それが先の『死ぬ』という言葉だ。

次の瞬間、姿が消えた。

「！」

咄嗟にガードした腕に重い手応えが伝わってくる。

何より鉄と鉄を打ち合わせたかのような音。

一瞬、超人系悪魔の実の能力者かとも思った。体を金属に変える、そんな悪魔の実なのかと。それは幾度か耳にしたBWと敵対する海軍本部中將にしてCP長官たるアスラの存在も大きい。だが、すぐにそれを改めた。

当然だろう、目の前で男の顔が獣に変わっていれば……分らない方がおかしい。

「動物系か……以前に会ったな」

「ああ、新世界でな……」

Mr.2襲撃事件の際は2人は顔を合わせる事はなかった。

だが、以前に新世界のBWバロックワークスのダンスパウダー生産設備において両者は遭遇した。その時は侵入者であるジャブラと、そこを守るMr.1という形で……。

Mr.2から戦闘の詳細を聞いた時、以前にやりあった相手の事を思い出した。

それゆえにこのような形でのも再会もあるだろうと思ってはいた。それが分かっていたら、この相手が何故自身の命を狙ってくるか、という事に疑念はない。

フラッシュ・スバ  
「瞬抜斬！」

「紙絵！」

覇気を纏った一撃を受けては斬られると判断し、ふわりと回避する。

じゅっしがん  
「十指銃！」

反撃とばかりに放たれた手を揃えて放たれた一撃を。

「スバイダー  
斬人！」

Mr. 1もまた体を鉄の硬度に変えて防御するが……。  
受けた後、顔を顰めた。

防御に成功したものの、攻撃が通ってきた。幸い、致命傷や戦闘に支障が出るようなレベルではないが……防御した腕には10の穴が空き、そこから血が流れている。

「……お前も覇気使いか」

覇気での強化が為されていないければ、貫通していただろう。

既にこの時点で両者とも互いの戦力評価を終えていた。

攻撃力はMr. 1が上。

防御力はジャブラが上。

だが、攻撃力は大した問題ではない。1の攻撃力で相手に致命傷を負わせる事が可能ならば、それが10でも同じ事。そして、ジャブラには間違いなくMr. 1に致命傷を負わせる力はある。

結論、ややジャブラ有利。

「……ならば、その防御ごと切り裂くのみ」

アトミックスバート  
微塵斬速度！

無言のままに一気に距離を詰める。

だが、それに呼応するかのように【剃】でジャブラもまた距離を取る。

互いの間合いの取り合い。

【嵐脚】では攻撃力が足りない。あれにはその性質上、覇気を込



められない為に、鋼を切り裂くには至らないからだ。

だが、相手が間合いを詰めてきた時、それにそのまま応じるのは拙い。相手のペースに乗せられてしまふ危険が高いからだ。間合いに入るのならば、己のタイミングで。

それが分かるからこそ、そして互いに見聞色の覇気を使いこなすからこそ、先の先を読み動く。

それはMr.3以下の戦闘とはまるで別物だった。

互いに高速で動き、突然別方向へ動き、また別方向へと走る。

一瞬で交わされる攻撃に、鉄をも貫通する、鉄をも斬るその攻撃に血飛沫を上げるも致命傷を避け、更に先へ。

双方とも攻撃を交わす度にどこかに傷を負い、尚止まらない。巻き込まれた岩が砕け、切り刻まれる。

もちろん、ジャブラにはサポート役がいた。

だが、その激しさに誰もが呆然と見ているしかない。

「……離れて隠れてろって言われる訳だぜ」

誰かがぼそりと呟いた言葉に、誰もが心の内で賛同した。

2人の戦いは余人の介入する余地のないものとなっていた……。

第195話・Mr・i（1）（後書き）

難産でした

……ハイレベルの戦いって難しい

遅くなりましたが、2人の戦いをお送りします

この戦闘の後、クロコダイルの前にロビンがどうなっているか辺りを書こうかな？と思ってるんですがどうですかね？

その前にクロコダイル戦を書くべきなのでしょうが……

第196話・Mr・i(2)(前書き)

後書きにアンケートがあります

第196話 - Mr. 1 (2)

激戦は、だが、それゆえにつく時はあっという間だった。

激しく動き回る分消耗も激しい。

それはまず一流と呼べるだけの実力者である2人として同じだった。次第に動きが鈍ってくるものの、どのみち遠巻きに監視するCP隊員達にとっては監視を続けるしかない。何しろ、Mr. 1はジャブラが【鉄塊】状態のまま動けるように、全身を鋼とする事の出来る能力者。

幾ら命中しそうだからといっても銃で撃った所で効果が出るとは思えない。

ただ、ひたすら見る事だけが彼らの出来る事だった。

「……………貴様は何故戦う」

肩で息をしながら、ふと訪れた空白の瞬間にMr. 1が問う。

動き回っていた2人だが、申し合わせたかのように互いの動きが止まった瞬間だった。

「……………ああ？」

同じく荒い息をつくジャブラがいきなりそう問いかけてきたMr. 1に疑念の声を投げかける。

確かに命がけの戦いをしていた相手から、いきなりそんな事を聞かれても頭がすぐには切り替わらないだろう。

既に互いの全身は血に塗れている。

無論、相手の血ではなく、自分の血だ。

派手に動き回ったからだけでなく、流れる血が確実に体力を奪っている。それが理解出来るだけに、ジャブラとしてもこの問答は有

難かった。

「……何で、そんな事を聞く」

「特に理由はないが……」

ふと気になったのだという。

Mr. 1は自分が忠誠を誓った相手の為に戦っている。

自身が見定めた主君に忠義を尽くす、というサムライ的な信念に基づいている。

一方、目の前の男は何の為に戦っているのか。

彼が世界政府の実働要員である事は分かっている。その男は何の為に戦うのか。

世界政府の為？

それとも現在のCP長官への忠誠の為？

或いは自分自身の力を試す為に？

その問いにジャブラは胸を張って応えた。

「惚れた女の為だ」

「……何？」

「俺がこの道へ踏み込んだ時は強い奴と戦いたい、自分の力を示したい、そんな気持ちだっただろうよ」

思い出すのは昔。

誰が強い、誰よりも自分が強いに拘っていた時。

皮肉にもそれから脱した時、更に強くなれた。

「今は違うのか」

「ああ、違うね。今更、俺はこの道からは抜けられない」

そう、抜けられない。

精々が後方勤務で後輩の育成に回るぐらいだろうが……CPから抜ける事など裏の世界を知り尽くした自分には認められる筈がない。ましてや、今の情勢で抜けられる訳がないし……それに、この仕事として世界を守る仕事には変わりない。

例え裏方とはいえ、自分達の役割なしで世界は落ち着ける程平和ではない。

「だから俺は戦う。少しでも惚れた女が平和に暮らせるように、そして彼女の下へと戻れるように……」

その言葉を黙って聞いていたMr・1はやがてポツリと穏やかな笑みを微かに口元に浮かべ、『そうか』とだけ呟いた。

そうして、腕を刃物へと変じ、構える。

それに応じるかのようにジャブラは片手を抜き手の形に構えた。

「決着をつけよう」

「ああ」

最早互いに小細工や駆け引きをかける余裕はない。

双方とも残る覇気を集中させ、相手を睨む。

動きが止まり、奇妙な静けさがあたりを覆った。

そして、2人が音も無く動いた。

Mr・1はただ刃物と化した右腕に覇気を込めて突き出し。

ジャブラは【五指銃<sup>ごしがん</sup>】とでも呼べば良いのか。覇気を集中させた  
片腕のみを【指銃】の勢いで突いた。

そして。

「……」ここで差が出たか」

「ああ……俺の……勝ちだ」

勝敗を分けたのは僅かな差。

本人の力はほぼ互角。勝敗を分けたのは能力の差。特殊能力を与えるが身体能力の向上はない超人系と、特殊能力ではなく身体能力を向上させる動物系。最後に勝敗を分けたのはその違い。

体力の限界ギリギリの勝負だったからこそ、その違いが大きな差となり……。

Mr・1の一撃はジャブラの脇腹を抉り、肉を抉った。

……だが、それで終わった。

そして、ジャブラの一撃はMr・1の腹へと直撃し……貫通した。  
僅かにジャブラの一撃が早かった。

それ故にMr・1の一撃が逸れ……この結末を招いた。

ジャブラが腕を引くと共に、Mr・1の体も前に引かれ　その  
まま、その体は地面へと倒れた。

## 第196話・Mr・1(2) (後書き)

もうじき200話!

という事で短編を予定しています

あの人は&あの実は今、という事で、本編にろくに出てない、或いは全く出てないキャラや実は現在どうなっているのか、1人か2人、1つか2つ程度それぞれ描いてみようと思います  
なので、知りたいキャラ、知りたい実を感想の最後にちよこつと書いて頂けると嬉しいです

例：バギー、オイモ&カーシー

例：アルビダのツルツルの実、カリファのアワアワの実、など

尚、この後確実に登場予定の実や登場人物であった場合は一番多かった場合でも除外します

ただし、本編の準レギュラー級でも出ない人は出ませんし、出る人は端役でも出ますので、「彼ならほつといても出るだろう」って思ってたらとつと最後まで出なかった!って事もありえます  
よろしく願います



## 第197話・オハラの亡霊

アスラはその時、レインディナーズとアルバーナを結ぶ名も知れぬ小さなオアシスで1人待っていた。

無論、周辺には待機している部隊もいる訳だが……そこにはアスラ1人だった。

そんな彼の下へは次々と連絡が電伝虫を通じて入ってくる。それに応じて、必要な指示を出していった。

元々、今回の計画において最重要なのはクロコダイルだ。

クロコダイル1人を抑えれば、それでBWは自動的に崩壊する。バロックワークスその為の一手を動かす為の連絡を待っていた。

Mr.3までの戦力に対してはまず問題ない戦力を当てる事が出来た。

彼らならば、問題なくそれぞれの担当を捕り抑えてくれるだろう。

問題は、Mr.2とミス・ダブルフィンガー、Mr.1だった。

ミス・ダブルフィンガーに関してはカリファが「何とかします」というので任せた。……Mr.2に関しては偽装ではないかと疑いつつも、回せる戦力の関係上クマドリに任せるしかなかった。

Mr.1に関して言えば、最悪でもジャブラならば無傷で終わらせる事はないと判断していた。もし、ジャブラが敗れた場合は、CP部隊の狙撃部隊が不意打ちを次々とかけ、落ち着いて休む時間を与えない予定だった。疲労させた、その上で、他が片付いたら手すきの……カク辺りでもぶつける予定だった。

そうした計画を立てた上でアスラはある目的を持って、この地にいた。

……やがて、大地の向こうから疾走するヒッコシクラブが一体見えてきた。

「予定通りか」

小さく呟いた。

やがて、ヒッコシクラブは停止し、荷を降ろす。

このオアシスは前述の通り、レインディナーズとアルバーナを結ぶ街道の1つにあるオアシスだ。

より正確にはやや主要街道から外れており、規模が小さい事もあり、殆どのキャラバンは主要街道を通る。すなわち殆ど人が通る事はない。それだけに……。

「待っていた、ニコ・ロビン」

その声と急に湧き上がった気配に、はっとした者達が慌てて反応しようとしたが……アスラが睨むと同時に突如として、ばたばたと一斉に泡を吹いて倒れ伏した。何とか耐えたのは1人だけだった。

「貴方……何者？」

予想通り、ニコ・ロビンか。

手配書の顔はオハラのものだ。お陰で大将青キジに協力を要請する事になった。

その事を話した時青キジは……『……そうか』と言葉少なに現在の容姿を伝え、立ち去った。

……ニコ・ロビンらしき姿が確認されたのはギリギリだった。

最終計画が成功した場合に備えてだろう、レインディナーズを監視していた要員から、ヒッコシクラブに乗って移動を開始する一団

にそれらしき姿が確認された、と報告があった。そして計画が失敗した現在、再び帰還の途上にあった、という訳だ。

「アスラ、海軍本部中将。そして、現在のCP長官でもある」

その名乗りにロビンははっとした様子だった。

当然だろう。CPは彼女にとっては悪い意味で深い名だ。サイファーボール

「……私を捕らえに来たの？」

「さて、それはこれからの話の結果によるな」

【SIDE：ニコ・ロビン】

眼前のアスラ中将はスパンダインよりマシで、同時に悪い。

容姿などは置いておくとしても、態度や滲み出る風格や性格などはスパンダインとは比べるまでもない。こちらが遥かに上だ。少なくとも、こうして相対していても嫌な雰囲気は感じない。

だが、相手は海軍本部中将。

強さがスパンダインなどとは文字通り桁が違う。それは自分についていた半分以上は監視役の面々が彼から発する威圧感、とでも言えればいいのだろうか？ 自分も感じたそれだけで、気絶してしまった事からも分かる。

……自分も危うく気を失いかけた。

あれも、クロコダイルの言う覇気とやらの力なのだろうか？

いや、今はそんな事より……。

「これから……何を言いたいのか？」

「単刀直入に言う。歴史の本文の追求を諦め、CPの一員となれ」

……頭が真っ白になった。

何を言い出すのか、と。

次の瞬間、怒りが心の内から噴出してきた。

「ふざけないで！私は……！！」

「オハラを引きずっているのか？」

引きずっている、か。

確かにそうかもしれない。

私の時はあの時から止まっている。

オハラの皆はあの時死んだ。世界政府に殺された。

けれど、私が生きて、真実を解き明かそうと続ける限り、オハ

ラの、クローバー博士達の想いは死なない……！！

そんな決意を胸に宿した私に彼、アスラ中将は。

「あのクローバー博士という名の馬鹿に未だ引きずられているのか……正に呪いだな」

吐き捨てるように言われたその言葉に、思わず私はアスラ中将の頬をたたいていた……。

## 第197話・オハラの亡霊（後書き）

色々考えましたが、クロコダイル戦への布石も混じってるので、「少し時間を遡る」となるよりは、と思い、先にロビンをあげる事にしました

現在のアスラが、オハラの事をどう考えているかは、一部私自身の考察も混じっていますが……

ちなみに朝に上げ損ねたのは単純に「やべえ！？今日、何時もより30分早く出ないといけないの忘れてター！？」で、飛び出した為ですw

尚、前話のアンケートは198話アップの時点まで有効とします

第198話・罪と罰と（前書き）

アンケートを締め切ります

うづん、結構登場予定のあるキャラクターらを上げる意見も多いです  
すね……

## 第198話・罪と罰と

【SIDE：ニコ・ロビン】

「取り消して」

自分でも驚く程冷たい声が出た。

この男は何を言った？

クローバー博士が馬鹿？

違う！あの人は立派な人だった！真実を追究しただけなのに、理不尽な理由で追い詰められ、そして殺された。

睨みつける私に、けれどアスラ中將は冷静極まりない視線を向けている。

「何故取り消す必要がある？真実だろうか？」

再び頭に血が昇りかける。

落ち着け、この男は噂に聞くだけでも、相当タフなネゴシエーターだ。そんな相手に血が昇った状態で相対すればいいように翻弄されるだけ。中は業火で燃え盛っていても、頭は氷のように冷徹でなければ駄目よ、ロビン！

「真実？私達は正に真実を探求しただけよ！それが悪いというの！」

頭を冷やし、けれど落ち着いていないと見せかける為に口調はあくまで荒々しく。

そう叫ぶ私に彼は口調はあくまで穏やかに告げた。

「ああ、悪い」

そうして彼は告げる。  
オハラ、クローバー博士の過ちを。

「そもそも、彼らが犯したのはれっきとした違法行為だ。法を犯せば罰せられる。当然の事だ。たとえば、それが悪法であれ、法は法だ」

【SIDE：アスラ】

納得しきれていないな。

だが、語ったのは真実だ。

嘗て「悪法でも法は法」として従容として毒を啣り死んだソクラテスという哲学者がいた。

今回は悪法かどうかはさておき、正式に法として存在しており、オハラの考古学者達もまた、自分達が違法行為を行なっているという事を理解していた。

そして、法を犯せば罰せられるというのもまた当然の理だ。

アスラの元の世界を見ても、後世や外から見れば理不尽な、或いは奇妙な法は幾らでもあった。

例えばまだ穏やかなものではアメリカの禁酒法。

アルコールの製造そのものを禁止するこの法律によって結果起きた事は密造酒の横行。その違法行為によってマフィアが大いにその懐を暖める事となった。実際、名高いアル・カポネはこの時代に最も名を上げた男だ。

カンボジアはポル・ポト派。

彼らは僅か4年の統治の間に、人口800万の国で直接間接的に200〜300万人を殺したと言われる。その中には都市部に住み眼鏡をかけていただけで知識階級とされ殺されたという話すらある。



何故そんな事が起きたのか？答えは簡単だ、それが法だったからだ。

考古学に絞った話であっても、エジプトで考古学の為に地面を掘り返すにしても、どここの地区のどの範囲なら掘ってもいいけれど、こちらは掘ってはいけない、といった事が定められている。

オハラを考えてみれば、どうだろうか？

客観的な事実だけを指摘するならば、彼らは『好奇心に勝てず、違法行為に手を染めた』という事に他ならない。

それに罰が与えられるのは当然の話だ。

まあ、自分が言うな、と言われるかもしれないが、もし、それが嫌ならば対抗策を取るしかない。

或いは権力を執行する相手に対抗可能なだけの力を持つか。

或いは法自体をひっくり返すか。

或いは権力者と取引をするか。

或いは自分自身が権力の側に立つか。

どれでもいい。何がしかの、相手が権力を振るうのを躊躇つか、振るう気にならない何かを持てばいい。

それが駄目でも、何がしかの対策を取っておくべきだが……オハラの学者達は何もしなかった。

「クローバーが馬鹿だったのは、折角五老星に繋がられるだけの力を持っていながら、その使い方を選んだ事だ」

あの時、五老星はクローバーが禁断の名を出そうとした瞬間に口封じを決意した。

あの瞬間まで、五老星はその命令を、バスターコールの発令を指示しなかった。

クローバー博士があの時、もし、自分達が集めた情報から誤った方向へと進んだように偽装していたらどうだっただろうか？考古学

者の信念を少し曲げて、自分達は真実に辿り着いたという満足を胸に五老星と取引していたらどうだっただろうか？

おそらく、実際に研究に携わった考古学者達への何らかの処罰は免れなかっただろうが……それでも、オハラにバスターコールがかけられる事はなかったのではないだろうか。研究しただけでバスターコールが行なわれるのであれば、クローバー博士があの名を語るその瞬間まで、黙って聞いていた意味がない。

それなのに、クローバー博士が為したのは、『最高権力者に自分達は違法行為に手を染めて、貴方達が秘密にしたがってる謎を解き明かしましたよ』と考古学者の誇りという名の、ちっぽけなプライドの為に自慢したに過ぎない。

「言うなれば、彼らのプライドの為に、オハラは生贄に捧げられたようなものだ」

だから、アスラはクローバー博士らを馬鹿と呼ぶ。

……そして、そんな連中の想いという名の違法行為を、唯一生き残った少女は『もう、その違法行為は自分しか出来ないのだから』と、それが違法行為という自覚なしに未だに続けている。……これを呪いと呼ばずして、何と呼ぶのか。

「……………」

クローバー博士らの行動をそう断定されたロビンとしては沈黙するしかない。

理解はしていたつもりだ。クローバー博士達オハラの皆がやった事も、自分がやってきた事も、『真実を解き明かす』という言葉で隠れ蓑にした違法行為でしかない事など。

けれど、オハラを滅ぼしたのが他ならぬクローバー博士達自身であると言われるのは想定外だった。

あの時、あの瞬間に何があったのか、細かい点はその時避難していた、させられていたロビンには知る由もない。

あの場になかったという意味ではアスラとて同じだが、アスラには前のCP長官であったスパンダインが『何かに役立つかも』と書き残した資料と、当時スパンダイン長官と共に現場にいた人員の生き残り、当然彼らは汚職に手を染めて逃走した後拘束されたのだが、知る限りの事を話すという司法取引を交わしている。

そうしてアスラは更に五老星からも許される範囲で情報を得た。おそらく、あの時のオハラ状況を当事者であった五老星以外では最も詳しく知る人間とっていいだろう。

「その上で改めて言おう。……違法行為を止め、代わりに我々の下で働け」

そうすれば、彼女の本分たる考古学を研究する事も可能だろう。世界政府の為であり、監視がつくだろうが、落ち着いた安全且つ快適な生活を送る事も可能だろう、だが……。

「……嫌よ！」

それでも。

長年、ロビンは世界政府を、海軍を敵として逃げ続けてきた。

仲間の、友の、母の、恩師の仇として憎み続けてきた。それを全て捨てて、仲間となって自分達の為に働け、など……理性はアスラの言葉の意味を理解しつつも、感情が納得出来る訳がない。

「【八輪咲き（オーチョフルール）・クラッチ】！」

彼女の殆ど叫ぶような声と共に、アスラの体から腕が生える。

8本の腕が生え、それぞれが首・腕・肩を掴み、背骨を捻じ曲げ

ようとして……停止した。

曲がらない。曲げられない。

アスラの体から生えている腕はその全てがロビンの腕と同じだ。

そして、ロビンの腕力は決して高いものではない。海軍中将たるガーブが船すら上回る巨大な鉄球を投げる事すら可能とする程、接近戦闘を得意とする海軍の上層部の力はアスラの元の世界の住人からすれば想像を絶するものがある。

これに対してロビンの腕力は、原作におけるスカイピアで神官長ヤマという、如何に巨漢とはいえ所詮は人に過ぎない重さを吊り下げて、腕が軋み、痛みを感じていた。その程度の腕力でしかない。

関節技を多用するのも、より少ない力で、より効率的に相手を倒す為のものだ。

……だが、どのような技を使ってくるか分かっていれば、逆に筋力で抵抗する事も可能だ。

そして、アスラとロビンの単純な筋力の差といえば、それこそ生まれたての赤ん坊がキングゴングを投げ飛ばそうとするぐらいの悲しい程圧倒的な差がある。

「やむをえんか。……とりあえずは」

次の瞬間、ロビンはその意識を刈り取られた。

微かに最後に『眠ってもらおう』、そんな声が聞こえたようだった。

## 第198話・罪と罰と（後書き）

違法行為という点では、オハラがやった事も、海賊が暴れる事も同じ事

そして、厳しく禁じられているという点ではどちらも同じ

であれば、オハラの間人間が処刑される事と、海賊が処刑される事に何の違いもない

天竜人という例外があれど、法治国家である以上は違法行為を犯せば罰せられる

ただ真実を解き明かしたいだけ、そんな崇高な理念だからという理屈でもって見逃せば、殺人や強盗を何故見逃さないのか、と問われた時反論のしようがない

極論ではありますが、ある意味そんな単純な理屈なのだと思うて書いてお話です

無論、でも……と思う方もおられるかもしれませんが、ご了承いただければ幸いです

## 第199話・布石

呼ばれたCP部隊が次々と気絶したBWの構成員を拘束してゆく。その中にはロビンの姿もあった。

……彼女はその後、CPの本部へと運ばれる事になる。

彼女の扱いだが、実の所彼女次第、という所だ。

現在では、ロビンがオハラでクローバー博士らが研究し、解明したという歴史の本文解析ポネケリフにニコ・ロビンが関わっていなかった事はほぼ確実とされている。もし、知っていたとすれば、それを何も形として表に出さないのはおかしい。如何なる学者であれ、世間一般にその知識を公開するまでは無名であり、すなわち学者としては生まれていないのと同じ事。

クローバー博士らの業績を表に出さないのは、確かに新たに誰も巻き込まない為という可能性はない訳ではないだろうが、もし、このまま彼女が死ねば、クローバー博士らが何を研究し、何を解き明かし、そして何故に死ぬ事になったのかも全てが闇の中だ。

それなのに、何故如何なる形であれ、ロビンは公表しようとしな  
いのか。

……最も可能性の高い答えは、彼女がクローバー博士らの研究を知らない、という事だ。

だからこそ、ロビンの懸賞金は上がる事はなかった。

原作において、麦わらの一味のほぼ全員が多額の懸賞金がかける事となったエニエス・ロビー襲撃事件。この事件の後、既に懸賞金がかかっていたルフィやゾロへの懸賞金額が、例えばルフィのケースで1億ベリーから3億ベリーへ、ゾロで6000万から1億2000万へと跳ね上がったのに対して……ロビンの懸賞金額は7900万から8000万の僅か100万のみだ。

何故、彼女はこれ程僅かしか上昇しなかったのか？

その答えは、最初が高すぎたから、だ。

当初は彼女もまた、オハラ<sup>ポネグリフ</sup>の学者達が辿り着いた歴史を知る者と判断され、高額<sup>ポネグリフ</sup>の懸賞金<sup>ポネグリフ</sup>がかけられた。だが、後に歴史の本文<sup>ポネグリフ</sup>を読めるものの、オハラ<sup>ポネグリフ</sup>の研究の中身は知らない<sup>ポネグリフ</sup>と判明した。

……こうなると、7900万という額は高すぎる。

諸々の事情によりこの額はそのままだったが、結果として一味が高額になった際に、1人上昇額が小幅という形で調整される事となった。

……話が少々長くなつたが、とにかく彼女自身は未だ歴史の本文<sup>ポネグリフ</sup>を追い求めながらも、実物を目にした事が未だない。

だからこそ、今回捕縛されてもインペルダウンへ直行、ではなく……選択肢があるとも言えるのだが。

そんな事をつらつらと考えるアスラの持つ電伝虫が鳴り出した。

「……私だ」

『チャパパパ、見つけたチャパ』

声を確認した瞬間、アスラの口元に笑みが浮かんだ。

「早かつたな」

『クロコダイルは戦略家や策謀家ではあっても、スパイの専門家ではないチャパ』

そう、Mr.2戦に疑念と不安を持ちながらもクマドリのみを派遣した、そして、それが自分ではなくフクロウをレインディナース探索に回した理由だ。

アスラもそうだし、クロコダイルもそうだが……CPとBWとい

う組織において彼らは司令官だ。それ以前も海賊であり、海兵だった。スパイのやり方なぞ鍛錬した事などないし、隠し場所1つとつてもアスラならば鍵を開ける事は可能だが、どのような所に隠す事が多いのか、といった心理的なものが大きい部類。見つからないよう潜入する手段その他諸々においては大きな差がある。

ましてや、罨などはアスラは完全に『嵌って踏み潰す』事になる。誰にも気づかれずに、などという事はまず不可能だ。

だからこそ、こうした専門家がいる訳だし、潜入に関してはアスラなどより余程役に立つ、という訳だ。

幾つかの事を確認し、アスラは自身が望むものを手に入れた事を確信した。

元より、クロコダイルとニコ・ロビンも出撃し、オフィサーエージェントもその全てが不在のレインディナーズはがらあきだ。

原作を見ても分かるように、オフィサーエージェントとそれ以外のレベル差は激しい。

フクロウが潜入して情報を漁るのを邪魔する奴も……いや、そもそも気付けるような奴もろくにいなかったようだ。

そうして……。

『今回見つけたものは大体こんな所チャパ』

「よくやった。それを持って直ちにこちらに戻れ」

『分かったチャパ』

必要なものは揃った。

無論、正式にはフクロウが発見したものがこちらに届いて、その内容を確認してから、になるが……。

改めて、電伝虫に今度はアスラよりかける。



「……ああ、私だ。そうだ、計画通りに行っている。出番待ちで悪いが、準備はしておいてくれ」

これであいつの配置も完了……。

さて、これで今度こそチェックメイトだ、クロコダイル。

第199話・布石（後書き）

遅くなりました

本当は今日200を上げるつもりで書いてたけど……

うん、寝落ちで風邪引くと思つよつに進まんですね

## 第200話・クロコダイル

ロブ・ルツチの変身と共に、クロコダイルは自らの力を動かした。その上で、何食わぬ顔で対峙する。

……周囲の風は次第に強まりつつあった。

「名を聞こうか。……Mr・6じゃねえ、お前自身の名だ」

「……………」

「どうした、名乗れねえ程、自分の名に誇りも自信もねえのか？」

クロコダイルの挑発に、だが、ロブ・ルツチは沈黙を守る。

これは予定されている駄目押し的一点が入るまでは、これはあくまで自分による腕試しによるもの。

そういう事になっている。

であれば、名前という情報を与えるのは許されない。実の所、ルツチの名前はその業界では案外と有名だ。もし、クロコダイルがそれを知っていれば、気付くかもしれない。

クロコダイルもルツチが挑発しようが名乗る気がないと悟り、舌打ちすると腕を振るった。

「【砂漠の宝刀】デザート・スパーダ」

砂の刃が疾走する。

それを【紙絵】でかわすと、反撃とばかりに足を振るつ。

「【嵐脚・凱鳥】がいせつ・けいとり」

一撃が避ける気配も見せないクロコダイルに直撃する。  
砂が寄り集まって、再び再生する。覇気を込められない【嵐脚】  
では木っ端微塵に吹き飛ばした所で意味はない。だが……。

「何のつもり……」

言いかけたクロコダイルの声は途中で消えた。

瞬時に【剃】で間合いを詰めたルッチが目前にいたからだ。

……確かに自然系ロキアにダメージを与える事は無理だろう。だが、再生の瞬間の間に距離を詰める事は出来る。

「【指銃・斑まだひ】」

両手を使って連射される攻撃が立て続けに命中する。

矢張り、こと格闘戦に限っては長い鍛錬を積み、能力も動物系ソオンと  
いう身体能力を向上させる実を食ったルッチに軍配が上がる。

覇気を纏った一撃に、クロコダイルの顔も歪む。

が、その中でルッチを掴もうと無造作に伸ばしてきた右手を前に、  
ルッチは即座に距離をあげざるをえなかった。

クロコダイルの右手は水分を吸い取る。

触れられれば、それでお仕舞いになりかねない。

少しずつ、少しずつでも。岩に水滴が穴を穿つように、削ってい  
かねばならない。

ある種のクロコダイルの天敵であるアスラと違い、ルッチにはそ  
れしか選択肢はなく、そしてそれを理解した上での、志願しての今  
回の戦いだった。

だから、絶望などしない。

即座に無表情のまま、再び距離を詰めた。

そして、しばらくの後。

クロコダイルは目の前の男に視線を向けていた。既に互いに攻撃を交わす事幾度になるか。ロブ・ルッチが覇氣を用いる以上、クロコダイルとて当然無傷ではない。

……だが、それでも未だクロコダイルが優勢だった。

原因は幾つかあるだろうが、やはりクロコダイルが自然系ロキアという悪魔の実でも最強と呼ばれる実の能力者である事、そしてこの地が砂漠である事が大きいだろう。

無論、ルッチとて可能ならば岩石砂漠などでの戦闘に持ち込みたかったが、そこは用心深いクロコダイルの事。

そのような自身に不利になるような地域は極力避けて動いてきた。その結果として、現在の……環境が敵となるが故にルッチが不利な状況が生まれている。

覇氣は強力だ。

だが、熟練の自然系能力者の場合、そして受ける側も覇氣使いの場合、それでさえ効果が薄い場合がある。代表的なのは頂上決戦での赤犬大将を相手どったマルコ&ビスタの一撃だろう。この時、赤犬大将は首を切り裂かれながら「厄介じゃのう」とどこか他人事のような雰囲気語っている。

無論、ダメージを受けていない訳ではないのだが。

「……なかなか頑張るな」

クロコダイルもまた覇氣の使い手だ。

覇氣使い同士の対決だった故に双方の悪魔の実の能力が大きかった。

格闘能力に関しては、ルッチが圧倒している。

だが……。

「確かにお前の方が接近戦闘じゃ上だろっさ……真っ当に戦えばな」

そう呟きながら、クロコダイルはルツチを見た。

……周囲を荒れ狂う砂嵐を通して。

そう、クロコダイルは戦闘開始早々に砂嵐を巻き起こした。

動物系悪魔の実の能力の特徴は身体能力の向上。ロブ・ルツチの変身の時点でクロコダイルは相手が接近戦闘型だと判断した。無論、例外がない訳ではないが、動物系の能力を活かすならばやはり格闘戦の方が有効だ。

そして、その読みは当たっていた。

無論、匂いで追撃するという手がない訳ではないが……現状、ルツチは顔を布で覆った状態だ。もし、普通に匂いを嗅げるのならばまた状況は変わったのだろうか……周囲は荒れ狂う砂嵐だ。この状況で普通に匂いを嗅いだら、それは砂を吸い込むのと同義だ。

「【砂漠の金剛宝刀】デザート・ラスパーダ」

視界の効かぬルツチに向け、クロコダイルは刃を放つ。

4本の砂の刃を気配で察したルツチは咄嗟に回避行動を取り、かわすが、それは回避専念した場合の事。視界が効かず、鼻も耳も実質封じられた砂嵐の中では攻撃態勢に移ればクロコダイルからの攻撃に対する回避が遅れる。

そもそも距離を詰めようにもどこにクロコダイルがいるか分からない。

弄ぶかのように放たれる刃だったが、ふとクロコダイルは顔を顰めた。

(……どういう事だ?)

視界が次第に落ちている。

砂であれば、自身の支配する力だ。砂嵐がクロコダイルを遮る事はない。

だが、明らかに視界が何かで遮られている。

「こいつは……」

クロコダイルが呟きかけた時、何者かの姿が見えた気がした。

第200話・クロコマイル（後書き）

遂に200話……

外伝はもう少し待ってくださいね

現在書き上げ中です



## 200話記念外伝 - あの人は今

### 【ガイモン&バギー】

とある珍獣の島。

この島に、ガイモンという男がいる。

仲間達と宝を探しに来たは良かったが、箱に嵌り抜け出せずにもがいている内に、仲間達は船へと帰還。ようやくと箱から顔と足を出して動けるようになった時には既に船は地平線に消える頃合だった。

宝箱の姿は見つける事が出来た。

だが、それは突き出した岩の上、今の箱に嵌った状態では到底登れるような場所ではない。

それ以後、ガイモンはあれは自分が見つけたから自分のものだと、『自分の宝箱を守る』と称して、この島を守り続けてきた。これまででは。

「けつ、手間かけさせやがって」

その日やって来た海賊は『道化』のバギーに率いられた海賊団だった。

バギーの勢力は拡大している。

何しろ、東の海でも大物の部類だった内、『百計』のクロこそ実は生きていた、と復活したが、『魚人』アーン、『騙し討ち』のクリークといった大物達が次々と捕縛され、その縄張りがすっぽり空いた。特にクリークの勢力は傘下の海賊が多かっただけに広範囲だったから、バギーも嬉々として勢力を広げたものだった。

そうした中で訪れた、この島で見かけた宝箱。

こいつはいいものを見つけたとばかりに開けてみれば中には鉄砲を構えたアフロな髭もじゃが1人。

危うく撃たれる所だったとバギーが怒れば、宝箱を奪いに来たのか、という台詞。

さて、海賊相手に「宝箱」などと言えばどうなるか？

答えが冒頭の結末だ。

バギーは「ほほう、そいつは頂いていくか」と手を伸ばした所を狙撃され、激烈だが短い戦闘の末、ガイモンが叩きのめされて終わったのだった。

確かに、原作では周囲が周囲だけにバギーが小物に見えるが、東の海では間違いなくトップクラスの海賊の1人だった。

だが……。

「なんじゃこりゃあ!？」

引き降ろされた宝箱は……いずれも空だった。

腹いせに、ちょうど森から出てきた珍獣を殺そうとした時、全身ポロポロで転がされていたガイモンが立ちはだかった。

勝てないのは分かっている筈だ。

何の事はない、単なる珍獣のはずだった。

それでも、ガイモンはバギーの前へと立った。しばらく睨んでいたが……やがて、バギーは面白くもなさそうに鼻を鳴らすと背を向けた。

「ちつ……おい、お前ら帰るぞ」

「「え? いいんすか? 船長」」

モージとカバジ。幹部の2人が声を掛けるが、『阿呆! あいつ殺したって一銭にもなりやしねえだろうが! やるだけ時間と弾の無駄だ!』、そう叫んで帰って行くバギーの後を海賊達は一瞬、ガイモ

ンに視線を向ける者もいたが、いずれもこれ以上手を出す事なく、慌てて追っていった。

やがて、バギーの船が出航したのを見送り、ガイモンは改めて島を振り向いた。

「ああ、そうか……」

自分はこの島が好きなんだと。

そう理解して、ガイモンは満面の笑顔を浮かべた。

一方、バギーはといえば、船上から舷側に頬杖をついて、面白くもなさそうな顔で島を見ていたが、ふとニヤリと口元に笑みを浮かべた。

迫力も足りない、実力も貫禄も何もかも足りない。それでも嘗ての懐かしい、尊敬する人を思い出させた。だからこそ、バギーはアレ以上あの男に手を出す気を失った。

「ロジャー 船長に似た目しやがって……」

手前の命はその代金だ。

立ち上がり島に背を向けると、バギーは「行くぞ、手前ら！次に出くわした獲物は逃がすんじゃねえぞ！」、そう叫んだ。応える声が船に響く中、もうバギーは島に目を向ける事はなかった。

【フルボディ】

「失礼します！」

そう声を掛け、ローグタウン駐留部隊の一員であるフルボディ本

部大尉は部屋へと入った。

その中には黒いスーツと海軍のコートを纏った美女が1人。海軍本部大佐にしてローグタウン駐留部隊司令官『黒檻』のヒナである。といつても、それもあと少しの事。

これまでの功績が認められ、また、ローグタウンが落ち着いた事もあり、ヒナは海軍本部へと戻る事が決まっている。その際には海軍本部准将へと昇進が決まっている。

フルボディは東の海へ休暇でやって来た。

本来ならば、東の海で一夏の出会いを体験して帰る予定だったが、帰路でヒナ大佐に出会ったのが全てだった。

一目惚れ。

そうとしか言いようがない。

以後、彼女の傍にいられるよう転属届けを出し、ローグタウンで働き、更に頭角を現せば目を向けてくれるだろうと頑張り続け……。今ではヒナ大佐の信頼すべき副官となっている。

「ご苦労様、貴方も休んでいいわよとヒナ思つた」

「は、それでは失礼します」

敬礼し、フルボディもまた下がる。

そう、彼も昇進が決まっている。ヒナ大佐の海軍本部帰還に合わせ、少佐へと昇進し、副官を続ける事になる。

ヒナ大佐と出会ってから、女性を口説く事もめつきりと減った。どうしても女性と話していても、ヒナ大佐と比べてしまふからだ。

少しは彼女も自分に気を許してくれるようになったかな。

そう思いながら、フルボディは部屋へと戻っていった。

彼の傍らには別の世界で魂の相棒となった、同じ女性に懸想する

親友はいない。

その彼の歩いていった通路の壁には新たに張り出された手配書が何枚か。

黒ネコ海賊団副船長『1、2の』ジャンゴ。

懸賞金額1000万ベリ！。

そんな手配書が静かに張られていた。

……その頃。

「ふう、あいつは私より派手に活躍してるみたいね、ヒナ悔しい」  
久しぶりに何気なしに届いたスモーカーからの手紙。偶には手紙ぐらい寄越せとこちらにきて三ヶ月後ぐらいに手紙に書いて送ったら、律儀に定期的に近況を送ってくるようになった。

穏やかな、優しい笑顔で手紙を読み終わると、引き出しを開け、綺麗に整頓された手紙の中に仕舞い、引き出しに鍵をかける。

……その時のヒナを見たら、フルボディは崩れ去っていたかもしれない。

【インペルダウン】

「しよ、所長ー!？」

ハンニヤバルが泡を食って地獄のインペルダウン所長マゼランの部屋へと駆け込む。

その様子を見て、マゼランは深い溜息をついた。

「うわ、所長!？そんな深い溜息なんてつかないでくださいよ！

死んじやいますって!？」

ドクドクの実の能力者であるマゼランの吐息はこれ全て毒になる。限られた空間である所長室で、確かに毒ガスを撒き散らしてれば、ろくな事にならないのは確かだろう。

もつとも、マゼランが溜息をついたのは別にハンニヤバルを殺そうとした訳でもないし、ハンニヤバルの態度が情けないと思った訳ではない。

ハンニヤバルはこう見えてかなりの腕を持つし、何より確たる正義がある。

『大勢の普通に暮らしている人々が穏やかに暮らせるように』と、その為には地獄の釜の蓋たるこのインペルダウンからは絶対逃さぬと、その為に命を賭けられる男だ。

だからこそマゼランは彼を副所長につけているし、看守らも普段はからかいながらも、いざとなれば即座にハンニヤバルの指示に従う。良い意味で口先だけの男だと、口では何と言おうともやる時はやる男なのだと言が理解しているからだ。

そんな男がここまで慌てて駆け込んで来る。

もし、囚人が暴動を起こしたなら、ここに来るのは看守の1人であり、ハンニヤバル自身はそれを食い止めるべく最前線に立っている事だろう。となれば、ここに彼自身が来ているのは……。

「その、シリユウ看守長が……」

「やはりか……」

インペルダウン看守長『雨の』シリユウ。

マゼランと並び恐れられる男だが、囚人達にどちらが【危ない】男かと問いかければ、間違いなくシリユウの名が挙がるだろう。

マゼランは確かに恐るべき男だが、無駄な殺しはしない。

まあ、インペルダウンに放り込まれた時点で緩慢なる死刑に処せられたと言えなくもないし、一度騒ぎを起こせば容赦しないが、少なくとも積極的に囚人を殺す為に動く事はない。

シリユウは違う。

そもそも勤務時間が短いマゼランに対して主力となる男でもある上に、気紛れで囚人を殺す。

ハンニバルの制止も聞こうとせず、何しろ実力に措いては間違いないこのインペルダウンの双璧的な存在だ。ハンニバルに抑えきれるような男ではない。

「やむをえん……！」

だが、それでも彼の存在がインペルダウンに措いて必要だったが故に、殺すのが海賊に限られていたからこそ、これまで彼の行動は問題視されつつも見逃されてきたが……さすがにもう限界だ。

「ハンニバル！」

「はっ！」

「出るぞ。LEVEL6の檻を1つ開けておけ……！」

「えーーーーーっ!?!」

それが意味する所を悟り、絶叫するハンニバルを残し、マゼランは所長室を出て行った。

この後、激戦の末、シリユウは倒され、今度は彼が囚人として収監される事になる

## 200話記念外伝 - あの人は今（後書き）

最終的にこの面子となりました

尚、エネルギーは希望が多かったのですが……実は出ます  
なので、今回は省略致しました

悪魔の実に関してはスベスベの実は何故か海辺に転がっていたのを  
ノジコが拾い、ちょうどナミが帰省したのに重なった為にイタズラ  
で普通の果物に混ぜて皮を剥いて出した結果……なんてのも考えて  
いました



## 第201話 - 戦略

砂の吹き荒れる中に広がるそれがクロコダイルの視界を遮る。  
薄く、広く。けれど、確実に砂嵐の風に巻かれるようにして広がるそれは……。

「……煙？」

次第に煙る中、クロコダイルの右側から飛び出す人影1つ。  
そちらへとだが、クロコダイルは右手を向け……押し当てようと  
して違和感を感じた。

「よう、クロコダイル。お前は砂の自然系ロキアだそうだな」

葉巻を2本纏めて啣え、腹を貫通して背からクロコダイルの手を  
突き出させながら、スモーカーは告げた。

「俺も自然系ロキアだ」

次の瞬間覇気を纏い叩き込まれた一撃がクロコダイルを吹き飛ば  
した。

スモーカーが今回の作戦に参加を命じられた時、思わず問い返し  
ていた。

いいのか、と。

クロコダイルは王下七武海だ。当然、表立つての干渉は難しい。  
無論、確たる証拠があればいい。だが、なければ……？

「いいか、スモーカー。悪法でも法は法だ。奴が法で保護されている以上、それを犯せば、違法行為。罰を受けるのは当然の話だ」

どこか面白そうな笑みを浮かべて言うアスラにスモーカーは困惑気味だった。

違法行為をやれば、罰を受けるというなら、仮にも海軍中将がやらかすのは拙いんじゃないのか？と思ったのだが、続けた言葉に呆れた。

「ならば簡単だ。対策を取ればいい」

スモーカーが呆れたような顔をしているが、アスラからすればむしろ当然の話だ。

アスラはCP長官だ。そこでの仕事では違法行為が列を為している。外交官も似たり寄ったりだ。確かに明確な違法行為はしないものの、密かに情報を集め、場合によっては買収や脅迫で情報を集める事さえある。外交とは言葉を用いた戦争と言ったのは誰だったか。悪法でも法は法。

法を犯せば罰を受けねばならぬ。

ならば、それ相応の対策を取らねばならない。

違法であると分かっているながら何も対策を取らずに他者を巻き込むのは、それはもう何を言われても仕方がない。それは戦争に無策で挑むようなもの、そんな事をやらかした馬鹿は責められて当然だ。そうアスラは言っていた。

(……しかも、そんな橋を渡ってまでやらかしておいて、こいつが本命じゃないっていうんだからな)

スモーカーもロブ・ルッチ共々クロコダイルにぶつける。

実はこれは既にルッチも知っていた。

無論、一番良いのはルッチがクロコダイルを仕留める事なのだが、相手が相手だ。上手くいくかは分からない。それならば、それに備えて介入可能な戦力を置いておくべきだが、アスラは他にもやらねばならない事がある。

大将では目立ちすぎる。

故に、煙の自然系能力者であるスモーカーを投入した訳だ。

だが、アスラの狙いはクロコダイルには実は、ない。

無論、クロコダイルを捕縛するべく様々な手を打っているし、証拠固めも順調に行なっている。事実、スモーカーがこうして介入に至ったのも証拠書類を掴んだが故だ。

だが、それでも尚、七武海であるクロコダイルには逃げられる可能性がある。

そこでアスラが目論んだのが、BWの壊滅だ。

……実は捕縛が行なわれているのはオフィサーエージェントに対してだけではない。

フロンティアエージェントにビリオンズ、ミリオンズ。BW構成員2000名に対するCPを挙げた捕縛作戦だ。

クロコダイルは頭脳だ。

頭脳がいちいち動く訳にはいかない。ならば、最悪頭脳たるクロコダイルに逃げられたとしてもすぐに動けるような状況ではなくしてしまえ、とばかりにBWの壊滅作戦が実行に移されつつあった。

クロコダイルが解放されたとしても、その指示を受けて動く者がいなくなれば……さて、クロコダイルが再び動けるまでにどれだけの時間がかかるだろうか？

ただ組織を作るだけならば、クロコダイルの事だ。さして時間は

かかるまい。

だが、使える手駒という名の戦力は早々簡単には傘下に入らない。しかも、今度はCPが影に日向に妨害を加える。その隙を縫って組織を立て直し、更にそこから計画を練り直し、実行に移すまで……さて、何年かかるやら。

（ま、俺は俺のやれる事をやるだけだ）

そう頭を切り換えた。

自分が謀略に向いていない事ぐらいは理解している。だが、それだけに自分の可能な事はきっちりこなしていかなばなるまい。

（そういえば……）

あいつなら、どうだろうか？あいつならアスラ中將を助けて謀略を巡らす事が可能だろうか？

ふと、もつじき戻ってくる筈のヒナの顔が脳裏に浮かんだ。

## 第201話・戦略（後書き）

戦争を始めるのなら、その終わりも考えなければならぬ  
当然の事ですが、オハラの場合はそれが出来ていなかったと

総集編が出たので、購入。ワンピースの空島編を読み返しました  
いやあ……忘れていた部分も多かったですね  
改めて、色々と計画していた事を修正する部分も多かったです

## 第202話・転換点(前書き)

遅くなりました

……年末忙しいですね

年が変わるまでは、かなり忙しい状況が続くというか、不定期な更新が続きます

## 第202話・転換点

クロコダイル1人に対して、CP9最強を謳われるロブ・ルッチと自然系能力者であるスモーカーの2人。  
それでも尚……。

「舐めるな……!!」

砂漠は己のフィールドとばかりに獅子奮迅の戦いぶりを見せる。  
砂嵐は尚も吹き荒れている。  
確かに煙が立ち込めた事で視界は妨害された。だが、それだけだ。ここが砂漠ならば、砂が、己の分身が奴らの居場所を教えてください。

「【砂漠の向日葵】!!」  
デザート・シラソレ

砂が足場を失う。

だが、一瞬の間でその変質を察知し、急ぎ、ルッチもスモーカーも【月歩】で空へと逃れる。  
だが……。

「く……!!」

「面倒な……!!」

周囲は巨大な砂嵐が荒れ狂っている。

熟達の六式使いであるルッチでもバランスを崩しかける。

スモーカーは自然系能力者である為に本来は効かないはずなのだが、今は下手に煙に体を変えると吹き荒れる風に体が引き千切られ

そうになる。……どんな能力者でも何かしら弱点がある。

ルフィのゴムならば斬撃、バギーのバラバラなら打撃がという具合で、それは自然系とて変わらない。

事実、クロコダイルの砂ならば水分、濡れたら砂は固まってしまふ為に攻撃が有効になってしまふ。

では、スモーカーは？

実は煙の弱点は風だ。

強い風が吹き荒れていては煙は流されてしまふ。ただ、単に大量の煙を流して視界を遮るだけならばいいが……。

「くそ……！」

体を煙に変えられない為に、六式の習熟度で劣るスモーカーは【月歩】で空中にとどまっていられない。

バランスを崩しつつも、スモーカーは何とか着地する。

瞬間、ぎよっとする。クロコダイルが距離を詰めていたからだ。

しかも……その鉤爪には何かの液体が滴っている。この状況でアレがちよっと濡れただけさ、などと軽い気持ちで考えられる馬鹿がいる訳もなく……。

(……毒か！)

しかも、接近戦を仕掛けてきて、覇気を纏っていない訳がない。

急ぎ、背中の十手に手を伸ばそうとしたが……。

(……間に合わん！)

「【鉄塊・砕】！」

空から駆け下りてきたルッチが覇気を纏った蹴りをもって、クロ



コダイルを蹴り飛ばす。

ガードしたものの、これには溜まらず素直にクロコダイルは下がった。

「……すまん、助かった」

「……ふん」

互いに視線は合わさず、だが、背中合わせになるように位置取りする。

既に分かっていた。クロコダイルに自分達は一対一では勝てないと。……何より場所が悪かった。

これがアスラがやりあった時のように、試合会場のような場所であれば良かった。だが、ここは砂砂漠だ。クロコダイルがその全力を発揮出来る場所であり、使った砂は即座に補充される。

策はある。

互いに相手が誰か、どのような力を持っているかなどは聞いている。

事前に一応ではあるが、このように共闘する事になった場合の対応策なども考えてはいたのだが……まさか、激しい砂嵐の中戦う事になるとは予想していなかった。いや、こちら辺は想定が甘かったと考えるべきだろう。

ならば、こうなった以上、多少の危険を犯しても……。

その一方で、クロコダイルもまた焦りがあった。

(……何時までもこいつらに構ってはいらねえ……)

最高司令官たる自分が足止めを食っている訳にはいかない。

作戦が予想外の戦力の介入で中止に追い込まれた以上、早急に部隊の引き上げと手駒の再配置を行なわねばならない。その為には早急にレインディナースに戻らねばならないし、そもそも自分が最前線でありあっている事自体が余りよろしい話ではない。

無論、この時点で既にオフィサーエージェント1つとってもほぼ壊滅状態にある事をクロコダイルは掴んではない。知っていれば、また違う対応もあつただろうが……。

だからからといって、彼らを見逃すという手もまた、ない。

特にMr.6は色々危険な情報も知っている。無論、その大半は世界政府側に流されていただろうが、そもそもMr.6の立場にある者が裏切り者だったなど、その相手を討ち取れず放置しておくなどクロコダイル自身の組織における権威に傷がつきかねない。

だからといって、仮にも単独潜入を果たしていた程の豪の者。

加えて、自然系悪魔の実の能力者でもある海軍本部の将官。そんなものが容易く倒せるなら誰も苦労はしない。

(……ならば、やむをえん。少々危険を犯してでも早急に片付けるしかあるまい)

奇しくも双方を思惑が一致した事により戦場はまた動く。

## 第202話・転換点（後書き）

次回辺りで決着つけます

その後はBW編の締めへと向かう予定です

それが終わったら、ルフィによるお話を挟んで、最終章へと突入予定で

原作は……これは本気でカリブーが仲間入りでしょうか……？

## 第203話・終焉一つ

クロコダイルの鉤爪が閃く。

明らかに毒が滴るその爪を、砂嵐に紛れまるで砂の壁の中から手だけが伸びて襲ってくるかのような状況の中、ルッチとスモーカーは臨時のコンビを組んで、背中合わせになって防ぐ。

スモーカーは背中から十手を外し、それで。

素手戦闘に関してはスモーカーを上回るルッチは毒に触れぬよう巧みに伸びてくる腕を弾く。

(……ふん、やはりな)

砂嵐の中からクロコダイルはそれを静かに見ていた。

純粋な格闘の腕では海軍本部少将はMr.6に劣る。

無論、だからとて自然系の能力者である相手を甘く見るつもりはないが、だからこそ今の、自然系の特徴とも言える実体があって実体のない状態になれない相手を片付けておきたい。

そうして、幾度目かの攻撃の時、それは起きた。

スモーカーに向け、再び毒に濡れた鉤爪が伸びてくる。それをスモーカーは十手で弾き……直後伸びてきた右腕がスモーカーの喉を掴んだ。

「ぐっ……!?!」

それまで左の鉤爪を殊更に用いていたのはフェイク。

元よりクロコダイルにとって最大の武器は右腕であり、左腕の毒は手段の1つに過ぎない。

砂の能力の真骨頂とでも言うべき力を宿するのがクロコダイルの右

腕。

接触した点から対象の水分を吸い取り、渴きを与えるとつもの。その力は大地を砂の砂漠と化し、人一人ぐらいならば瞬時にミイラの如き姿へと変える、はずだった。

「……………なに？」

奇妙な脱力感。

吸い取れぬ水。

ふと気付く、左の鉤爪を逸らした後、押し付けられていた十手…

…いや、この強烈な脱力感は……………。

「……………海楼石かつ！？」

そうだ、この力の抜ける感覚は……………悪魔の実の能力者に共通する弱点。海に触れた時に感じるのと同じものだ。

しまった。

自身が鉤爪に意識を集中させようとしていたように、この男も十手に海楼石を仕込んでいたのを隠していたのか……………。

もつとも、ここら辺はアスラの裏技のせいと言える。

何しろ、アスラは原作知識でもって、クロコダイルの技を細かい点はさすがに最早覚えていないが、主だったものを忘れてはいない。無論、クロコダイルの右手の事も覚えており、事前にルツチとスモーカーの両者に伝えてあった。

だからこそ、2人は最終的なクロコダイルの狙いが右手であろうと予測もしていたし、対応も出来た、ただそれだけの事にすぎない……………そして、次はない事ぐらひはスモーカーも気付いていた。

クロコダイルが掴んだ右手を引く前に左手でスモーカーが伸ばされた手首を握り。

「今だ、やれ……！」

瞬時にルツチがちょうど十手と挟み撃ちにする位置へと移動し、両手の拳を押し付ける……！

「【六王銃】！」

衝撃がクロコダイルを貫いた。  
更に、とばかりにルツチは連射する。

「【六王銃】！」

「【六王銃】！」

無論、体への負担は並大抵のものではない。  
だが、二度はない。  
クロコダイルがもう一度、このような状況を許すとは思えない。  
だからこそ、ここで全力を注ぎ込む……！

「調子に乗るな……！【砂嵐・重】！」

だが、忘れてはならない。

海に触れたとて、能力を完全に封じれる訳ではない。即座にクロコダイルは周囲の砂嵐の一部を掌握し、自身も巻き込みながら無差別に圧縮した砂嵐を放つ。

最初の一撃こそ自分にもダメージが来るが、さすがにこれを喰らって十手を押し当て続けるのは難しい。

瞬間僅かに離れ、クロコダイルもそれを逃しはしなかった。  
全身を砂へと変え、離脱。

「【砂漠の金剛宝刀】！」

デザート・ラスパーダ

更に2人が背中合わせを停止した事により空いた間へと刃をぶち込む。

咄嗟に2人は後方へと跳び退る。結果として距離が開いた。

瞬時にクロコダイルは周囲を確認する。

強引に砂嵐を掌握して技として放った為に、周囲の砂嵐は急速に弱まりつつある……ならば。

ゆらりとその形を崩し、次に現れたのはロブ・ルツチの傍だった。

「「！」」

なまじ、スモーカーを明らかに狙っていた為に反応が遅れる。

それだけではなく、【六王銃】という六式の奥義を連発して放った為に、ルツチもまた体力の限界が近く、それが故に更に反応が遅れた事も大きい。とにかく結果から言えば、ルツチはその右腕を掴まれ……。

咄嗟に放った暴風を伴った蹴りによって全身が干からびる事は防いだ。

だが、右腕は完全に干物と化し、少なくとも戦闘に使える状況ではない。

一見、クロコダイルが有利になったかに思えるが、周囲の砂嵐が収まりつつある現状、スモーカーがその本領を發揮出来る状況が整いつつある上、クロコダイル自身も先程連発された【六王銃】によるダメージが想像以上に大きかった。やはり、海楼石で強制的に実体化された所へ叩き込まれたのが大きかった。

(これ以上やり合ったとしても……)

おそらくこれ以上は単なる消耗戦。

ましてや、海軍本部少将が自分に対して攻撃を仕掛けてきたとなれば、面倒な証拠を握られた可能性が高い。

瞬時にこれ以上の戦闘続行とそれに伴う不利益、ここで2人を逃す事による自身の権威の失墜などの不利益を検討し、クロコダイルは即座にこの場からの離脱を選択した。

砂を巻き上げ、視界を遮り……無論、瞬時にルッチとスモーカーはそれでも背中合わせになり、周囲を警戒する。

やがて砂が収まった時……周囲には誰もいなかった。

「……逃げられたか」

舌打ちするスモーカーに対して、だが、ルッチは焦る様子を見せなかった。

『クロコダイルと思われる影はA-4ルート方面に向かう予定』

『こちらポイント、クロコダイルを確認。A-4ルートを想定通り進行中』

『クロコダイルを確認。予想進路を逸れる様子はなし』

……クロコダイルとて道を選ぶ。

如何に砂漠を進んでも問題ないとはいえ、彼の立場がそれを許さない。連絡を取る者や、その支援を行う者の事を考えると、道なき道、砂漠のど真中では目印も何もない。

自然と使われていない裏街道や古いオアシスを通過してゆく。そこで情報を得ながら、焦りを隠して本拠地へと向かうのだ。



……この時点ではなまじクログダイルに権限が集中していた為に混乱し、状況を把握しきれしていない。もし、この時点でクログダイルが完璧に状況を把握していれば、即効で身を隠すなり、別の拠点なりに向かっていただろう。

だが、その全ては仮定だ。

CPからの攻撃を受け、現場が混乱している事のみをかるうじて掴み、それ故にクログダイルは急ぎ戻っていた。

……そう、脇道を通る余裕すらなく。

それであれば、進路を読む事も、先回りする事も容易い。

そうして、2人は出会った。

「……貴様……！」

「久方ぶりだな。まだ回復しきれしていないようだ……当然か、まだ1日とて経っていない。その時間でここまで戻ってくるとは砂漠での移動速度は矢張り素晴らしいものがあるな」

クログダイルの眼前に立ちはだかるは海軍本部中将アスラ。

ルツチが焦らなかつた理由がここにあった。

……そして結果から言えば、2人の戦いは一方的なものになった。万全の状態であれば、クログダイルとてこうまで一方的にやられはしない。

だが、激しい戦闘で負傷し、それを推して強行軍でここまで戻ってきた。幾ら砂漠を移動するのに通常の人間より遥かに体力の消耗が少ないとはいえ、長距離を移動すれば疲れも生まれる。回復もままならない。

一方、戦闘も行わず、移動も僅かな修正の為の移動のみでほぼ万全といつていい状況なのがアスラだ。これではまともな戦闘になどなりはしない。

更に……。

「がはっ……！」

苦悶の呻きを上げて、クロコダイルが崩れ落ちる。

その脳天から新たな水が流れ落ちる。

事前に樽で水を用意し、九尾でそれらをクロコダイルが倒れた所を狙いぶちまける。かろうじて回避したものもあるが、その大半を受け、既にクロコダイルの全身はびしょ濡れだった。

覇気でも自然系ロギアの能力者ならば物理的な攻撃を覇気で打ち消す事によって、ダメージを減らす事が出来る。

だが、これではどうにもならない。

「手前……！」

「すまないな、クロコダイル」

証拠を掴んだとはいえ、お前が権力とコネをフルに活用した場合、まだ束縛を逃れられる危険がある。

伊達に長年、王下七武海を務めてはいないから……だからこそ。

「ここで消させてもらう。ワの国の言い回しにある……【死人に口無し】、という奴だ」

「……………ふん」

クロコダイルはアスラを睨み付けていたが、やがて諦めたようにごろりとその体を投げ出した。

「負けたか。……………しょうがねえ、やれ」

雑魚にやられるより、まだマシだ。

もう、体に入らない。

このまま惨めに追われ、訴追されるなぞ真つ平御免だ。ああ、そうだな……。

長年、互いの全力を交わし続けてきた相手ならば、友とは言えない。だが、好敵手ぐらいには呼んでもいいだろう。

「一足先に地獄で待っててやる」

「ああ、どうせこっちの行き先も同じだろうっからな」

この世界に足を踏み入れた時点で、ろくな死に方をしないと覚悟していた。それも終わりか。死に場所には不満もあるが……だがまあ、こんなロクデナシの死に方としてはそう悪くもないだろうさ。そう思い、口元に何時もの皮肉げな笑みを浮かべて。

次の瞬間、何か湿ったものを貫くような音がした後、静けさが訪れた。

第203話・終焉一つ（後書き）

休みが欲しい

けど、稼ぎ時というか忙しい時期だから休めない  
そんな日々が続いています

世間様は相変わらず騒々しいようで……

日本から外に視線を向けてみると、昨今はウィキリークスが大騒動  
を起こしていますね

……けど、あれを見ててふと思うんですよね

「内部告発サイト」って銘打ってるけど、今のウィキリークスって  
どう見ても「機密暴露サイト」で世間の目を引く為の騒動起こして  
るだけで、内部告発とは全然関係ないですよ

第204話 - 次代（前書き）

何時も感想ありがとうございます

全て拝見させていただいておりますが、なかなか返信する余裕もな

く……

年が明けたら、もう少し余裕が出来るといいなあ……

## 第204話 - 次代

### 【五老星】

「全く面倒な事をしてくれたものだ」

「だが、奴の職務としては正当なものだ、責める事は出来ぬ」

「さよう、手遅れになって認めざるをえぬ状況となるより余程良  
い」

聖地マリージョアにある世界政府、その中枢。そこに集うは世界  
最高権力五老星。

その中で、ふつと1人が溜息をつきながら呟いた言葉に、他の者  
が口々に言う。

先だつてのアラバスタ王国での事件はあちらこちらに大きな波紋  
を投げかけた。

王下七武海の一角クロコダイルによるアラバスタ王国の乗っ取り  
未遂事件。

何年もかけての大規模な蜂起計画はけれど、最後の最後でCPを  
率いる海軍本部中將アスラによってクロコダイルが討ち取られて終  
結した。

だが、問題はここからだつた。

仮にも王下七武海の1人が死んだ。

まず、これを隠す事は不可能だつた。世界三大勢力は世界政府・  
四皇・王下七武海とされている。少なくとも表向きには。その勢力  
バランスの崩れは世界に激震をもたらしかねない。

隠した所で後で面倒が雪だるま式に増えるだけの話だ。

明かしたら明かしたで、そうなる今度は「何故死んだのか？」という事になる。

海軍本部長によつて討ち取られた？何故？となる。

それが読めたが故に世界政府は最初から全てを公表するという決断を下した。

「元々、奴は調子に乗りすぎていた面もある。海賊への引き締めには十分役立とう」

「だが、どうする？王下七武海は世界を安定させる為の装置の一环だ。適当な者をつける訳にもいかんぞ」

問題はそれだった。

誰でもいい、という訳にはいかない。

知名度があれば尚良いが、まず最重要なのは実力。

原作で黒ひげが懸賞金額0でありながら、新たな王下七武海として認められたのは、何より「白ひげ海賊団二番隊副隊長」を長く勤め、『火拳の』エースを倒したという実力によるものが大きかった、というよりそれが全てだった。

広く知られた名などいらぬ。

高額の懸賞金もいらぬ。

ただ必要なのは力。それも四皇の名を冠する4人の大海賊達。彼らを抑える抑止力たる力があるかどうか、だ。

「まあ、焦る事はあるまい……」

「そうだな、確と見極め、最善の者を選ばねば……」

「して、あ奴はどうする？」

海軍本部中將にして世界政府の外交官にしてCP長官アスラ。

この内前2つに関しては問題はない。

問題なのはCP長官としての地位だ。

果たしてこのまま現在の地位を預けたままで良いのか……汚職でガタガタになった組織の立て直しという意味では今回のBW壊滅作戦は見事な戦果を上げた。立て直された実力を見事に示したと言え、無理を推して兼職させた役割を終えたとも言える。

しばし、5人は考えていたが……。

「……当面このままで良からう」

「そうだな、変えるにしても適当な人材がおらぬ」

五老星達も先代CP長官の起こした事件を忘れてはいない。

単純に政治的要因だけで選ぶならば、CPの長を務められる人材はいるが、先代のスパンダインの二の舞となつては目も当てられない。彼が腐敗させたCPの立て直しにどれだけの金と時間がかかった事か！

その間に、どれだけ革命軍に出し抜かれたり、海賊による世界への被害が広がった事か……。

多少リスクがない訳ではないが、無能や腐敗されるよりは遙かにマシだ。そう結論を五老星は下した。

「ではとりあえず、王下七武海だが……」

「そうだな、ではあちらに関してはまず、下から推薦を上げさせよう」

「そうだな……それから良からう」



そうして、この後。

この話し合いの結果として命じられた海軍本部における王下七武海後任選定の為の話し合いの最中に1人の男が自分の売り込みを為してくる。

その男の名を……。

『黒ひげ』マーシャル・D・ティーチという。

## 第204話 - 次代（後書き）

少し短めでした

今回は五老星による後のお話

黒ひげの名前も登場です

無論、この時点では売り込みの気概は認めるが……って所ですね  
もっとも、次がルフィのお話なんでティーチどころかアスラもしば  
らく登場しないのですが……

## 第205話・夢追い人

CP長官の留任が決まった。

正直、クロコダイルの一件ではやりすぎと判断される可能性もあったのだが……ただ、原作と異なり、今回はクロコダイルはコブラ王の前には出ていない。裏で全ての片をつけてしまったせいで、王らの証言がない以上、逃げられる可能性というより奴の裏での影響力を惜しんで見逃される可能性は決して少なくはなかった。

だからこそあそこで仕留めねばと判断したし、それは間違っていないとは思わない。

……裏でどのような判断がされたのかは分からないが、今は現状を受け入れるべきだろう。

黒々とした事はさておき、明るい話題もあった。

正式にジャブラとサンダーソニアが結婚したのだ。

ようやっと長い時間のかかったBW壊滅作戦の一番武力と裏の仕事が必要な部分が終わったので、また次の任務が入る前に、となった結果だ。

参列者に元帥や大将連中まで来るのは予想外だったが……よくよく考えれば、アスラの家になんか住んでいたサンダーソニアとは彼らも顔見知りだったのでそう不思議ではないのかもしれない。

ちなみに新居はエニエスロビーの居住区に設けられた。

アマゾン・リリーは……こちらには教えていない。

何しろ、もう長い時間全く消息が伝わっていない。連れ去られたのが子供時代という事もあり、顔見知りも限られているだろうし、あちらも既に死んだと判断しているだろう。

むしろ、今更知らされてもこちららも向こうも混乱するだけだろうし……。

そのアマゾン・リリーだが、現状彼女らは海賊を行なっていない。1つは海軍の新技术によりカム・ベルトを越えての侵攻が可能となり、九蛇海賊団が不在の間のアマゾン・リリーの防御が困難になった事もあるが、そもその原因は彼女らが何故海賊を行なっていたか、の判明とその解消による所が大きい。

要は『男漁り』なのだ、これが。

アマゾン・リリーでは女性しか生まれない。

故に男はどこからか調達しなければならぬ。でなければ、生まれてくる子がなく、国が滅ぶ。

最初はその為に種となる男を狩るのが目的だったようなのだが、次第に何時も何時もやる内に自然と海賊として成立していった、という事らしい。

世界政府としても戦士全員が覇気を使えるような相手となれば、鎮庄には相応の被害が出る事が予想されるとなれば……ここは双方が穏便に解決出来ればそれに越した事はないではないか。

もっともその手段が女ツ気のない海軍士官佐官との合コンという手段は……まあ、どちらも気に入ってるから良いのだろう。きつと。昨今では九蛇の名は海賊から、優秀な傭兵の供給地として広がっている。

さて、そんなある種平和な日々が続き、アスラが部屋で書類を片付けていた時だった。

「アスラー！ 出航許可くれ！」

いきなり入ってきて、そんな事を言い出したルフィにアスラも思わず絶句していた。

『こんな所は、ガープ中将に似なくても……』

内心そう思ったが、口には出さない。

ルフィは先だつてのアラバスタ王国での功もあり、正式に海軍本部大佐へと昇進した。

元々実力はあつた男だ。

ただ、ガープに似て、とにかくフリーダムな男なので、昇進が遅れていたというのが実状だ。

……何しろ、フリーダムな男を上につけるとどうなるか、それはガープというこの上ない実例が海軍にはある訳だから当然と言えば当然の話だ。

とはいえ、間違いなく実力はある男だ。

そして、実力があれば昇進していくのが海軍。実際、前回のアラバスタでも中佐でありながら派遣されたのは『実力は将官級』と既に認知されていたからに他ならない。

それに昇進が実力の割りに遅れていたせいで、アスラの知っている所の原作の面々、ウソップやコビー、ヘルメツポにナミらがさすがにルフィに比べれば大きく遅れてはいるが、それでも尉官へと昇進してきている。ルフィとの仲もいい。

さて、大佐となれば、海軍の船を使って単独での出撃が可能になる。

元の世界でいう戦艦クラスの艦長となれるからだ。

アスラに許可を求めに来たのは、そうは言っても勝手に出撃していい訳ではない。

中将大将クラスならば、その辺は結構融通が効くが、大佐クラスならば上に『これこれこういう理由で、こういう出撃をしたいのですが』と許可を求めなければならぬ。その為にルフィはここへ来たのだらう。

しかし、普通は書面で提出して、裁可を待つものなのだが……それでも、それを許容してしまうような雰囲気を持っているのがルフィらしさであるとも言える。

「全くお前は……書類決済が終わるまで待てなかったのか？」

「だって、俺、自分で出撃出来るようになったら行きたい所があったんだ！」

満面の笑顔で言うルフィに、苦笑する。

出撃先が自分で選べるようになった者に、よくある話だ。

行きたいけれど、行けなかった、そんな場所に遂に行ける可能性が出た、となると大抵の奴は初めての航海先にそこを選ぶ。

ある者は故郷への凱旋。

ある者は仇となる海賊の追撃。

ある者は……。

では、ルフィは？そう思う。

「で？どこに行きたいんだ？」

そのアスラの問いかけにルフィは胸を張り片腕を突き上げ、満面の笑顔で言った。

「空島だ！」

## 第205話・夢追い人（後書き）

追える夢があるのは羨ましい話です

尖閣諸島の釈放はやはり政治主導だったようで……

まあ、検察主導なんて誰も信じていなかったでしょうが

しかし、それ以上に気になるのが東京都の表現の自由を制限する法案

…… 知れば知る程非常に曖昧で恣意的な判断が可能な法案

都知事、自分が書いてきた本の内容をもう一度見直して下さい

本当に、今の日本の政治はもう何かを言うのも虚しくなってます

しかし、この法案が成立したら、コミケはどっかに移転するんです

かねえ

## 第206話・アスラの失敗アスラの事情

「……待て、ルフィ。何故お前が空島の事を知っている？」

普通の海軍軍人は空島の事など知らない。  
だが……。

「え？アスラが以前言ったじゃんか」

「……なに？」

記憶にない。

が、ルフィが言うには……。

〈回想〉

それは、まだルフィが子供の頃の話だった。

アスラは当時、仕事に追われ、この時も家にまで仕事を持ち帰り  
処理を続けていた。

そして、この時たまたまルフィは本を読んでいて、アスラの部屋  
へと入り込んでいたのだった。その時に手にしていた本の名を『う  
そつきノーランド』という。

「なあなあ、アスラ。こいつ悪い奴なのか？」

「……いや」

「でも、皆を騙したのって悪い奴じゃないのか？」



「嘘をついていないからな」

……繰り返すようだが、この時アスラは非常に忙しかった。  
とにかく、こうしてルフィの問いに返事を返すのも殆ど反射的な  
もので、目の前の書類以外頭が働いていなかった。

「じゃあ、黄金郷ってどこかにあるのか!」

「ああ、空に吹っ飛んで空島に引っ掛かったからな……」

「へへ空島ってのがあるのか」

「ああ」

く以上回想終了く

「……って言ってたじゃんか」

ルフィの思い出を聞いて、アスラは頭を抱えなくなった。  
正直、全く記憶にない。

(……他にもやばい事洩らしたりしていないだろうな……)

そう思い、念の為に聞いてみたが、どうやら他にはないようだ  
った。

その点にはほっとしつつも、考え込んだ。

(……) どうする。そんなものは存在しない、子供の夢を壊さない  
為だ、と否定するのは簡単だが……原作ではこの時期エネルギーがス  
イピアを支配していたはず……ルフィは奴の天敵だ。今のルフィな  
らば、原作以上に優位に戦えるはずだ)

ちらり、と視線をやる。

それに、と考える。

元々、原作でも真つ当な連中、或いは干渉次第で何とかなる相手に対しては交渉してきた。

アマゾン・リリーなどはその成果の1つであり、実の所原作のジヤヤにも準備を行なってきた結果、やっと周辺の国家からも賛同を得て、世界政府からも『相手が受け入れた場合』ではあるが、許可を得た事柄がある。

問題は空島に行った上で対処せねばならない相手がエネルギー1人ではない事だ。

……神官とかいう連中がいたはずだが、その全員の事などもう覚えていない。何か玉のようなものに乗ったようなのがいたのと、うっかりのポケ頭がいたのは覚えているが……はて、他のはどんなのがいたか。

一応、空島の事は調べてはいた。

何かの役に立つ可能性がないでもないからだ……それに、珍しい貝というか、本当に貝か？というのがあった。

「……ルフィ、他の連中も行くのか？」

「ん？ああ、コビーとヘルメツポとウソップも行くぞ。ナミも誘ったら、面白そうって言ってたけど」

ふむ、ナミは海図作りの為、って所か？それなら可能性は……あるか。

だが、行く方法が限られている。果たして上手くいくかどうか……

かといって……。

「……とにかく、全員に話をしてからだ。海兵がついてきてくれるかも問題だからな」

とはいえ。

海兵にも色んな奴がいる。中には……こういう事に興味を持つ奴もいる。

一応、センゴク元帥らにも話はせねばなるまいが……。

(……途轍もなく厄介な事になりそうな気がしてきたな。BWが片付いてる分だけマシか)

もつとも、まだ逃走中のMr.2。生きたまま捕えられた連中、ニコ・ロビンらの事が残っているのでそう長い事出撃が出来る状況ではないのだが……。

(まあ、分かっていて、このまま放置するのも気が引ける)

何しろ、このままいけば確実に神エネルギーによって、スカイピアとそこに生きる人々は殺されるのだ。

あくまでルフィらが説明を聞いた上で尚行くと決めた場合ではあるが……助けられるものならば助きたい。

内心でルフィが確実に行くと言つのを確信しつつ、アスラは他の者も呼ぶよう手配を命じた。

## 第206話・アスラの失敗アスラの事情（後書き）

今回は一同を集めての説明です

アスラも空島の事は記憶にあったので、色々調べてはいました  
でも、行く時間が本人は取れなかったんですね

さて、アスラが何の許可を得たのか、ロビンらはどうなるのかを含  
めて……もう少しお待ちを

## 第207話・空を目指す者達

改めてアスラは集まった面子を見た。

ルフィ。

ウソップ。

コビー。

ヘルメツポ。

そしてナミ。

いずれも原作とは大幅に異なる道を歩んだ。

ルフィは幼い頃より海軍の島マリリンフォードで育ち、今では海軍大佐だ。

ウソップも元より原作でも器用な男だったが、Dr・ベガパンクの技術に惚れ込み、技術班へ移籍。

技術を実地で活かすという趣旨の元、技術班で開発した様々な武装を現場へと持ち込んでいる。ベガパンクの弟子候補の1人としてルフィの船にもアレコレと改造を（無論許可を得てだが）加えているらしい。

コビーはまだ原作に近い。

だが、覇気を戦争のシヨックで自然と覚えた事から素質があるとアスラがガープに相談した結果として、早期に覇気に目覚め、見聞色はほぼ完璧。武装色もある程度使いこなせるようになってきている。まあ、さすがに霸王色までは無理だったが。

ヘルメツポに至っては何と悪魔の実の能力者だ。

何の实の、かは話が進めば明らかになるだろう。原作同様ククリに似た2本のナイフを用いた戦闘術には変わりない。

そして、ナミは風を読み、天気と話す力はもう能力の域と云っていい。

原作ではクリマタクトを手に入れるまでまともな戦闘力を持って

いなかったが、今の彼女は棒術でそれなりの戦闘力を持っている……とはいえ、先に述べた男性一同に比べれば大分劣るのだが。ちなみにナミの髪は現在肩を越えて背中まで波打っている。どうも、ハンコックの綺麗な長い髪に憧れたらしい。

アスラからすれば何かしらの縁で繋がっていると感じる一堂だ。特に引き合わせた訳でもないのに、ルフィもウソップもコビーもヘルメツポも……出会い、友となった。

とりあえず、この面々ならば原作並と行くかは分からないが、それなりの相手でも何とかなるだろう、そう判断し、アスラは口を開いた。

「さて、空島を目指すという事だが……まず言うておく。空島は実在する」

アスラという世界政府でも最も情報に長けた人物に断言された事で、ルフィ以外の面々にどこかあった不安感が消えたのが分かった。何しろ、ルフィが聞いたと言っても小さい子供時代の話。しかも、語られた大元は有名な絵本。興味はあっても、半信半疑だったのだろう。

「『うそつきノーランド』、そういう童話を知っているな？」

北の海では知らぬ者のない有名な童話だ。

マリントードでも知っている者は多い。そして今回の話をルフィがするにあたって持ち出していた事もあり、皆頷いた。

「あの主人公として描かれているモンブラン・ノーランド。彼の遺したという航海日誌を分析すると、他の海の住人ならば荒唐無稽と取るかもしれないが、グランドラインの住人が読めばその正確さ

は目を見張るものがある」

つまり、あれが荒唐無稽な嘘をつく『嘘つき』とされたのは黄金郷の話が直接の引き金となったのは確かだが、同時にグランドライオンを知らぬ者達の地で広まったお話であった事も大きかったという事。

「そして、彼のお話で語られた黄金郷だが……それは空の上。ノックアップストリームに吹き飛ばされ、空島に引つ掛かり、今も空を漂い続けている」

「ノックアップストリーム？」

嫌な単語を聞いたとばかりに、ナミが顔を顰める。

気持ちは分かる。誰だってあんなものに好き好んで関わりたくはあるまい。だが、今回はそうはいかないのだ。

「空島へと行く方法は2つ。1つはハイウエスの頂から至る方法だ」

天空高く伸びる頂ハイウエスト、その天を貫く山は空島と時折接する。その時、空島へと至るのだ。

だが、これは時間もかかるし、何よりも全員は到達出来ない。

「なら、駄目だ」

それを聞くなり、きつぱりと言い切ったのはルフィだった。

全員で到達出来なければ意味はない、そう言い切るルフィのその態度は軍人としては未熟とも言える。優れた軍人とはどれだけ効率よく味方も含めて人を殺せるかに尽きる。味方1人の犠牲で10人

の敵を倒せたなら、それは実に優れた軍人の証なのだ。

だが、船長としてならば、そして人としてならばそれは正しい。だからこそ、ナミもウソップらもルフィを単なる海軍から任命されたというだけではなく、本当の意味で船長として認めているのだらう。

「では、もう一つの方法だな。それが突き上げる海流　ノックアップストリームに乗る事だ」

「ちよつと待つて！でも、あれは……」

疑問符を浮かべるルフィらとは別に、この中では唯一それを知るナミが血相を変える。

突き上げる海流、ノックアップストリーム。

それは本来、災害だ。

下手に飲み込まれれば空へと打ち上げられ、空島が上空になれば海へと落ちてきて叩きつけられる。空島があつたとて、海流に乗り損ねれば矢張り一環の終わり。

「ああ、だから行くのならお前の、ナミの腕が必須だらう」

アスラのその言葉に、ナミの顔が変わった。

「その上で問う。ノックアップストリームで空島へ至る道は0か100か。成功すれば全員が行ける、だが、失敗すればおそらくたすか……いや、まあ、ベガパンクの技術で改造された船だと……いや、10ぐらいは助かる可能性があるかもしれないが、死ぬ可能性も十分以上にある。それでも行くのか？」

最後の確認だった。



もつとも……。

「行く」

ルフィは揺らがない。

腕を組み、笑顔で断言した。

その様子に、他一同はと言えば、苦笑しつつも止める者や行くのを止める者はいない。

「いいだろう、ならば行こう」

「あれ？アスラも行くのか？」

「ああ……ノックアップストリームの起きる海を知り尽くしている男達、お前達が空島へ行くのならば絶対その協力が必要な男達……猿山連合軍の大ボス、そして『うそつきノーランド』の子孫……モンブラン・クリケットに会いにな」

第207話・空を目指す者達（後書き）

今の彼らはこんなものです

ヘルメツポとウソツプに関しては、疑念もあるかもしれませんが、  
この世界ではこういうものだと思って頂ければ……

なかなか時間が取れないのが最近の悩みの種です

ワンピース総集編で、改めて空島編を読み直しましたが……懐かしいですねえ

## 第208話 - 雇用契約

「アスラも空島へ行くのか？」

「いや、ジャヤまでだ」

さすがにアスラが空島へ行く余裕はない。

エネルギーやりあつたら……相性最悪という事もある訳だが。とはいえ、武器の破壊力などはアスラが覚えている限りではあるが、武装色を纏わせている気配はなかった。神官も含めてだ。

見聞色に特化しているとなれば……ルフィのゴムの特性も活かせるというものだ。

さて、アスラが自身のメルクリウス号まで持ち出し、やって来たのは実は猿山連合軍のスカウトにある。

彼らは貴重なサルベージ技術者だ。この世界では、悪魔の実という存在とシャボンディ諸島のコーティング技術などのせいだろう。ああした、純粋な技術と道具によるサルベージ技術は実に低い。

賞金がかかっている以上、何かしらの取引が必要かとも思ったが……調べてみると、猿山連合軍主力の2人は案外と問題がなかった。元々、彼らは『サルベージ王』と『海底探索王』という異名が示す通り、海底に沈んだ船が専門だ。

積極的に船を襲う訳でもない彼らが、では何故賞金がかけられたのか？実は誤解と貴族どもの傲慢さが大きく影響していた結果だった。

例えば、嵐で沈んだ船の情報を得て、積荷をサルベージしたとする。

当然、これらで宝石などを手に入れても、そのままでは単なる飾りだから現金化する訳だが、ここで彼らの名が上がる訳だ……沈んだ船から得たのに、普通はそんな事をしていないとは思わないから、その船を襲って沈めた襲撃犯として。

次が沈んだ積荷の扱いだ。

沈んでも、積荷の所有権を放棄していない者、特に輸送船などを運用していた商人や貴族の中にはそういう者がいる。

商人はまあ仕方がない。それを手に入れないと破産だ！という者も多い。

貴族は……まあ、言うまい。

とはいえ、そのままでは彼らとて何も出来ない。浅い海に沈んだレベルであれば、探索して必要な物を引き上げる事も出来るかもしれないが、何しろ海は広い。自分の船の情報を得て、そこから海の中を丹念に探索して沈んだ船を見つけ、その中から必要なだけの物を回収し……となれば、どれだけの手間と時間と金がかかる事か。おそらく、沈んだ荷を回収に成功しても、大幅な赤字は確定だ。

そこで引き上げに成功した彼らに傲慢に、或いは破産回避の為に沈んだ船の物資を売りさばいている情報を手に入れた彼らは引き渡しを迫り、或いは武力で脅そうとして……見事に撃退され続け、今度は船を襲った連中から奪い返そうとしてやられた、という情報が上がって、懸賞金も更が上がっていったという訳だ。

そこでアスラは外交官として動き回り、根回しをした上で纏め上げた。別に同情などではない。純粹にその技術を惜しんでの事だ。無論、貴族など不満とする意見もあったが……彼らとてゼロよりは戻ってこないよりは金を多少払ってでも戻ってきた方がいいに決まっている。最終的には調整出来た。

……そして、今アスラがいるのはこれらを纏めた外交官としてではあるが、同時に彼らがこれを断った場合、海軍本部中将がそのまま殲滅戦力に変わる可能性もある、という事を示している。

「……という訳だ。これを受け入れるのならば、懸賞金は解除しよう」

現在は、ジャヤのモンブラン・クリケットとアスラは会談している。

何しろ、猿山連合軍の2人は海を回っている。どこにいるか会えるかは運だが、彼ならばここに確実にいる。

「……………」

その当人はといえば、腕組みをして沈黙している。

だが、目を瞑り黙考している所を見ると、悪い話ではないと考えているのか……。

アスラが提示した条件では引き上げたものは彼らに所有権が発生する。

ただし、例えば貴族などが『これは家宝なのでどうしても取り戻したい!』といったものなどがあった場合、優先して買取り権が発生するといった具合だ。

事前に手配書と同形式で『この品があったら』『この船を発見したら』というのを手配しておき、引き上げた際に金を払って、その船や積荷を買い取る。

商人の場合は分割支払いだ。

彼らの場合は、とにかくその積荷がなければ破産を免れない、というものが大きい。

そこで買取り価格を設定し、例えばその荷物を引き上げた時点で荷物の1割を、残りは分割で支払っていくという感じになる。世界政府が保証した業者との取引だから、踏み倒そうとすれば当然それは犯罪となり、商人の方が罰せられる事になるから、そこら辺は安心だ。

それ以外の古い物などは引き上げた彼らが売買可能だ。価値のありそうなものならば、世界政府主催のオークションに出す事も可能だから、より高く売れる可能性もある。

その一方でマイナス面として世界政府から『どうしても至急に引き上げを！』という依頼があった場合は受けねばならないといった面がある訳だが……。

ちなみに自衛としての戦闘は認められているし、各国貴族らが踏み倒そう奪おうとして逆に撃退された場合でも、懸賞金がかけられる事はない。少なくとも、ちゃんと捜査がされる。

「……話はしてやる。後はシヨウジヨウとマシラ次第だ」

やがて、モンブラン・クリケットは黙考していた目を開き、そう言った。

この男の賞金は実は既に消えている。

……何故か。既に彼のものだった海賊団が壊滅しているからだ。彼が船員らと別れた後、彼らは海軍の軍艦との激しい戦闘を繰り広げ、最期は激しく燃え盛りながら沈没していった。生存者はいなかったという。当然行方不明者も多数発生し、船長だったとされていた彼もそこで死亡したものと判断され、手配書は廃棄された。その後、活動が全く見られなかった事もあり、既に死んだ者として忘れ去られた存在となっている。

とりあえず、これで第一段階は解決した。

そのまま海へと向かおうとするクリケットに、アスラは声を掛けた。

「潜るのか？」

「……………」

無言のまま海へと歩を進めようとする彼に船医が声を掛けようとしている。

この島に来た時、彼は倒れていた。……原作同様の潜水病が原因だった。

それでも尚潜ろうとすれば、それこそ命に関わる事になりかねない。

「黄金郷は空にある。それでも潜るか？」

「！？」

だが、さすがにその言葉には歩を止めた。

「……どついう意味だ」

今にも掴みかかりそうな雰囲気だが、海兵らは動かない。

事前に話し合いに行くから戦闘行為などは一切不要と通知した事もあるし、海軍本部中将たるアスラがこの程度の相手にどうこうされる事はないと信頼を受けている事もある。

何より、彼らも目の前で明かされる『うそつきノーランド』の真実に興味を持っている。

「……モンブラン・ノーランド。彼の航海日誌を知っているか？」

「……………」

「子孫たるお前は知っているだろうが、彼は嘘つきではない。事実彼が残した記録はグランドラインでは常識で、けれども外の海では御伽噺としか思えないような話が幾らでもある。……知っているか？彼の航海日誌は正式な世界政府の資料の1つとして残されている」

だが、御伽噺が修正される事はない。

一度広まった認識を変える事は容易ではなく、その手間を世界政府がかける必要もない。

「その中で唯一、そして最大の問題が黄金郷だったが……島の形状が変わっている。お前の半分になった家などは代表例だ。そして掘んだ情報が……400年前、ジャヤが消えたのと同時に出現した空島に浮かぶ巨大な大地。そしてその出現と共に島全土に鳴り響いたという澄んだ鐘の音だ」

「!!」

その言葉に。

モンブラン・クリケットは目を見開いた。



## 第208話 - 雇用契約（後書き）

アスラにしてみれば、覚えている、そして役立ちそうな殆ど最後に近い歴史なので奮発しておりますw

この後は個別の戦力はともかく、殆ど情報がないですし、どう動くかも分からないケースが多いもので……

## 第209話・ついでに掃除

その日の夕暮れ。

ジャヤの西、モックタウン。

この町は海賊達が集う。

海賊は無法者だが、彼らとてくつろげる町は貴重だ。だから、住人が彼らにきちんとしたサービスを提供する限りは町の人間にむやみやたらと手を出す事はないし、村の住人も彼らが落とす金で裕福な生活が出来るのだから誰も文句を言わず町の経済は回っている。

少なくとも、刹那の時を生きる海賊達はきちんとサービスしていれば、金払いは良い。

金払いが悪いような奴は余程の事情がない限り小物だし、そんな奴が威張っていても、長生き出来るような町ではない。

そんな町の酒場。

当然、客は海賊だらけだ。小物もいるし、大物に分類されるような奴もいる。

「だからよう、豪華客船みたいなのと護衛らしき船が東の岸に向かってたのよ」

「あの辺りの海は大猿兄弟の縄張りだろう？何で、そんな処に行きやがるんだ？」

こんな会話が交わされていた。

アスラの旗艦メルクリウス号は諸事情により見た目も内装も豪華客船な戦艦だ。

尚、ルフィの乗っている船ストローウィック号は本来は普通の海軍の快速艇だったはずなのだが……今、見ても海軍の人間でも同じ

船だと分かる奴はいないだろう。そのぐらい変わってしまった。ウソップ1人で出来る訳はなく、アレコレとウソップが手を加えている内に知り合い、という名の師匠らが手を加えていった結果である。

それ故に、目撃者もまさか海軍本部中将与大佐の船だとは思わなかったのだろう。

さすがに、白ひげなど四皇クラスやそれに準じる連中ともなれば知っているのだが……。

「ひょっとして、アレじゃないか？ほら、例の金塊」

「わざわざ金塊の為だあ？」

「いやいや、ほら、あそこにはあのクリケットのジジイがいるだろう？ほら」

「ああ、あのジジイの帆羅話にわざわざ暇した金持ちが聞きに来たってか？」

どつと笑い声上がる。

そこへ声が新たに上がった。

「おい、お前ら、金塊が何だつて？」

その声の主に一同の場が一気に冷える。

声を上げたのはベラミー。

『ハイエナの』ベラミー、懸賞金5500万ベリーを誇る海賊のルーキーである。

そうして、話を聞いたベラミー達はというと、大笑いしていた。

「あの『モンブラン・ノーランド』の子孫が『モンブラン・クリケット』？」

「俺たちや全員北の海出身だからな。よく言われたもんだぜ、嘘をついていると、ノーランドみたいになるよ』ってなあ」

そう言って、再びベラミーとサーキースは笑う。

他の者は敢えて声を出さない、共に笑う者もないが、それを止める者も。

「真実を確かめもせず、嘘だと決め付ける。夢のない海賊とは阿呆が多いな」

「ああ？」

一斉に視線が声の方へと、入り口脇の陰となる場所に向く。

そこはちょうど死角であり、薄暗く男が立っているとしか分からない。

「今、何て言った、手前？」

ベラミーが不機嫌そうな声で言う。

周囲の人間は誰も声を出せない。ベラミーが明らかに不機嫌になっているからだ。

「言った通りだが？現物はともかく、彼の航海日誌の写本が世界政府では正式な資料として認められている程だというのに、世間一般に広まっている情報だけで嘘と決め付けて、夢を諦める……夢を諦めない奴の方が大物になるのはどういう事だろうな」

どこから笑うような口調だった。

「ああ、すまん。お前の上にいるドフラミンゴの奴も割りと現実主義者だったか……シャンクスや白ひげはもつとロマンチストなんだがな」

さすがにぎよつとした空気が流れる。

シャンクスや白ひげ、この男は言い、ベラミーをドフラミンゴの配下と言った。

その名前を軽々しく口に出せるような人間は少ない。

果たして理解出来ないただの馬鹿なのか、それとも……。

それが分かったのだらう、ベラミーの声にも先程とは違う緊張感が漂っている。

「……手前は何者だ、そして何しに来た」

「ふむ、何をしに来た、というのならばお前達を捕えに……折角ここまで来て、目の前にいるんだ、海賊を放って帰る訳にもいくまい」

は、と一瞬一同は呆然となった。

この場で捕える、などという言葉が出てくるとは思わなかったからだ。

何しろ、ここにはベラミーを含めて大勢の海賊がいるし、ベラミーには及ばずともそれなりの懸賞金額の海賊も、外には匹敵するよきな船長だっている。

だが、笑い声が上がりがける前に、暗がりからその男の姿が見えた一堂の息は確かに一瞬止まった。

「何者だ、という方に答えるのならば、お前達相手ならばこつ名

乗るのがいいだろう……海軍本部中将アストラという

## 第209話・ついでに掃除（後書き）

ふと思い出して、そういえばこの島って他にも海賊いたっけ、とばかりにアスラはやって来ました

まだ、猿山連合軍の一同は原作と違い帰ってきていません

次回、ベラミーらとの戦闘です

## 第210話 - 強者

酒場は混乱状況にあった。

ベラミーでさえ、顔が強張り冷や汗が流れている。

海軍本部中将。

世界の海を統べる最大勢力たる海軍の中でもトップクラスに位置する者達。

それはすなわち世界でもトップクラスと同義だ。

一瞬全員が考えた。

逃げられるかは疑問だ。

それなら、ここにいる全員で襲い掛かれば……。

ただ、彼らの誤算はベラミーも考慮に入れた事だった。

「ここは……皆分かってるな!？」

そして、誰かがこう言ってしまった事だった。

もし、全員で掛かるぞ!とでも言っていれば、また少しは変わったいたかもしれないが……結果的に、この言葉で皆が分かったような気持ちになってしまい、中央付近にいた連中が一齐に襲い掛かったのに対して、窓付近にいた連中は咄嗟に外へと飛び出すという結果を生んだ。また、ベラミーもサーキー共々全力を持って外へと飛び出してしまった。

もっとも、襲い掛かった連中はそれに困惑する間すら与えられなかった。

「【嵐槌・咲乱】」  
さきみだれ

斬撃ではなく、衝撃として周囲に放たれた攻撃は、それでも十分



過ぎる破壊力を持って海賊達はまとめて吹き飛ばした。ついでに、酒場の備品も多数が粉碎される。

ただ、海賊達の行動が無駄だったかと言えば、そうとも言えず、この行動の結果として一目散に逃走を図った連中は外へと脱出する事に成功している。襲撃を選んだ連中の本意とはかけ離れているだろうが……。

一方、外へと逃れた者達は、何故海軍本部中将などという相手がやってきながら、外で騒がれなかったのかを強制的に理解する羽目に陥った。

そこには気を失った海賊達がゴロゴロと転がっていたからだ。その中にはそれなりの額の賞金首、4200万ベリーを誇る『処刑人』ロシオといった姿もあった。

(これだけの連中を、酒場にいる俺達に気付かせないぐらいの短時間で片付けたってのか！？)

多少賑やかだったのは確かだ。

だが、この町は普段から海賊が群れているだけに賑やかで、どこかで喧嘩でも起きたか、くらいにしか誰もが思わなかった。……その程度の騒音しかあげさせず、倒したのだ、あの海軍本部中将は。そうして、彼らが逃げる間もなく、酒場の扉が開いてアスラが姿を見せた。

(早すぎる！)

自分達が飛び出して、すぐといった感覚だった。

そうして、中から新たに誰かが飛び出してくる気配はない。……

瞬時に、あれだけの連中が片付けられてしまったのだろう。

勝てない。

誰もがそう思い、だからこそ、ベラミーへと視線が集中した。ベラミーの賞金額は5500万ベリー。ここにいる海賊達の中では最も懸賞金は高い。彼で何とか出来なければ……そんな思いが込められていたし、ベラミーとしても引けない。ここで逃げれば、彼の海賊としての名はスタスタになる。ドフラミンゴから見捨てられるだろう。

「ハハツハア！こうなりややるしかなさそうだなあ」

覚悟を決め、ベラミーはアスラへと向き直る。

自身の能力にはこの場はおあつらえ向きだ。

体を沈め、力を溜める。自身の能力を発動させ、跳ねる。

「スプリング跳人<sup>ホッパー</sup>！！」

正に目も止まらぬ速度で跳ね回る。

「……超人系悪魔の実バネバネの実の能力者が……」

飛び跳ね、飛んだ先で腕をバネに変え、再び別の方向へ。それによつて次第に加速し、十分に加速した所で溜め込んだエネルギーそのものを叩きつけ……ようとして、ベラミーは顔を掴まれていた。

「……………え？」

周囲からも同じような「……………え？」という声が洩れた気がした。

見えなかったベラミーが気付けば、アスラによつて顔を鷲掴みにされて停止していた。

溜め込まれたはずの力を至極無造作に無視して、ベラミーは停止

していた。

状況を理解して、顔が強張り、どっと汗が噴き出した次の瞬間。ベラミーは顔を地面へと叩きつけられていた。

それで終わり。もう、ベラミーはピクリとも動かなかった。

「あ……………」

どこかで分かっていた。だからこそ、サーキースも原作と違い、ベラミーに「冗談だろ」とも「立ち上がってショーを見せてくれ」とも言えない。

それでも僅かな期待をかけていた。

それが眼前で打ち砕かれた。

海賊達がもう終わりか、と絶望に包まれかけた時、声が響いた。

「ゼハハハハハ！さすが、海軍中将殿、やるじゃねえか」

誰もが声の主に視線を向ける。

そこには1人の男。

髭を生やした、けれど誰も顔を知らぬ男がそこにいた。

誰だ、こいつは？誰もがそう思った時、声を上げたのは他ならぬアスラだった。

「マーシャル・D・ティーチ……懸賞金こそかかっていないが……白ひげ海賊団の古株で、四番隊長サッチを殺害した事で、白ひげから追われている悪魔の実の能力者、だったな？」

「……………え？」「……………」

懸賞金の額とは強さといコールではない。

さすがに億越えともなれば、また話も変わってくるが……………その最

たるものがこの男だった。

『あの』白ひげ海賊団の隊長を殺しながら、懸賞金0ベリー？  
懸賞金の額に強さのような印象のあった海賊達からすれば、誰も  
が信じられないような目で見ている。

それを無視して、アスラはティーチへと声を掛けた。

「…………お前には懸賞金はかかっていない」

「ああ？」

一体何を言い出すのかと、ティーチも疑問に首を傾げる。

「本来懸賞金がかかっていないという事はまだ一般人に戻る、  
って事だ。だが…………海賊であるというならば容赦はしない」

口元に笑みを浮かべ片手を持ち上げるようにして言うアスラに、  
意味を理解したのかティーチの口元にも獰猛な笑みが浮かぶ。そう  
して、アスラはどこか笑うような口調で、その言葉を口にする。

「なあ…………お前は海賊か？」

「ああ！俺は海賊だ！ゼハハハハハ！」

その言葉に応じるかのように。

『黒ひげ』マーシャル・D・ティーチもまた、笑いながら肯定し  
た。

第210話 - 強者（後書き）

セングク元帥の悪魔の実の能力の名が明らかになったけれど……  
いいんですかね？あれって

今回はティーチとの戦闘です

まあ、お互いここで死ぬか捕えられるかまではやりませんが  
……島が沈むんで

## 第211話・三十六計

アスラとティーチ。

2人の戦いはアスラが先手を取った。

「【大嵐】」

巨大な真空の刃がティーチを襲う。

直撃を受けたティーチが苦しむも、体が破壊された様子はない。黒く噴き出した煙のような闇が治まると荒い息をつきながらもティーチは立ち上がる。

「……それが闇か」

「よく知ってるな……そうだ、こいつが自然系悪魔の実の1つ、悪魔の実の中でも一際凶悪と言われるヤマヤマの実だ」

通常 of 自然系と異なり無効化は出来ないと云うが……それはあくまで痛みだけのようだ、とアスラは判断せざるをえなかった。超人系や動物系の能力者ならば斬撃が無効な能力者でない限り、直撃していれば今の1撃で怪我の1つぐらいは負っている。

だが、ティーチは苦しみはしたものの、体には怪我の1つもない。

「今度はこっちから行くぜ！【闇水】！」

「……！」

黒ひげの掌から発生した闇がアスラを引き寄せる。

アスラは幸い、この闇によって悪魔の実の能力が封じられる事を

知っているが、知らなければ海軍大将とて不意打ちの一撃となりかねない。

「【鉄塊・剛】！」

だが、逆に言えば封じられるのはあくまで悪魔の実の力ののみ。叩きつけてきた豪腕に対して、純粋な技でもってアスラは耐える。

「……成る程、面白い能力だ」

悪魔の実の能力は使い次第。使い手の発想が貧困であったり、或いはそれに溺れたり、制御出来なかつたりすれば、同じ超人系動物系であっても、それをフルに発揮した人間に比べ大きく劣る。

ベラミーのバネバネの実とて、首や胴体をバネに変えれば敵から受ける打撃の有効性は大幅に下げられるし、顔全体をバネに変化させられたなら、あの叩きつけられた瞬間のダメージも大幅に軽減出来たはずなのだ。

或いはもし、バネバネの実による強度変化がスパスパの実同様の鋼のバネとして起きるのならば、防御にも使えるだろう。だが、実際はベラミーはただ移動速度の強化に使っただけだった。結果があれだ。

……元々、この目の前のティーチは生身の實力は高いはずなのだ。何しろ、悪魔の実の能力者となる以前にシャンクスと戦い、その顔に傷をつけた程の男のはずだ。

どうにもこの男については實力が原作を見てもはつきりしない。シャンクスにあそこまで警戒させるような事を言わせたかと思えば、妙な所で苦戦する……。

(いや、これはただ単に力に溺れているだけ、か?)

何しろ、長い時間をかけて探し続けてきた悪魔の実だ。

それをようやく手に入れる事が出来たとすれば、その力を試したいと思う気持ちは分かるし、試して自分のものにしていかねば黒ひげの命はあるまい。普通に手に入れたならばまだしも、彼は白ひげ海賊団における最大の禁忌を犯した。

白ひげが彼を許すとは思えない。

事実、原作ではエースが単独で飛び出したが、こちらでは白ひげ海賊団そのものが、その傘下共々活発に動いているらしい。

おかげで、一時は何が起きたのかと海軍でも大騒動になったものだ。もつとも、だからこそアスラがティーチの事を知っていても海軍で疑問に思われる事はない訳だし、センゴク元帥らがティーチの売り込みに対しても即効で切り捨てたりしなかった訳だから、世の中何が幸いするか分からない。

とはいえ……。

この男の七武海入りを狙う理由を知っているアスラとしては、出来ればここで仕留めてしまいたい。

(だが……出来るか?)

いや、迷うな。

そう自らに言い聞かせると、アスラは踏み込んだ。

#### 【SIDE：ティーチ】

くそつたれ、戦闘方法の相性が悪すぎらあ！

内心でティーチは罵り声を上げた。

目前のアスラ中將は能力者だ。だが、厄介な事に殆ど戦闘に能力を使用する気配がない。加えて、アスラ中將の戦闘は格闘戦だ。

【閻水ゲンスイ】で引き寄せた所で、六式と併用しての格闘が主体のアスラ中將相手じゃ、中將の得意な距離に自分から飛び込むのと同じだ



ぜ！

ちっ……しょうがねえ、余りやりたかねえ手だったが……。  
今はとつとと逃げるが勝ちだ。

そう判断すると、ティーチは早かった。

「ブラックホール【闇六道】！」

周囲の物質、果ては人間まで飲み込む。

町の人間も海賊もお構いなしだ。

それでも瞬時にアスラは闇の圏外へと空を駆け、離脱する。だが、構わない、目的は奴じゃない。

「ブラックホール【闇六道】！」

「ブラックホール【闇六道】！」

連発したお陰で、町は住人ごと大半吸い込んだな、ゼハハハハ！

途中で奴も気付いたらしく、攻撃が激化したが……何、防御に専念すりゃあ、何とかなるもんだ。

「リベレイション【解放】！」

そうして、突撃してきた所にカウンターでぶつけてやるが……ちっ、ここで能力を使うか。九尾で薙ぎ払って、突き進んできやつた。だが、これで終わりだ。

「おおっと待ちな。今、俺の中には大勢の人間がいる。海賊だけならともかく、町の住人もなあ……」

ゼハハハハ！そうだろうな、止まらざるをえねえだろう。  
さて、だがこういう奴はそっからが怖いんだ、吹っ切ってきやがるからな。だからもう一押しいる。

「いいのか？0ベリーの賞金首でもねえ海賊1人の討伐の為に町1つの住人を生贄にしてもよ？」

そう、今の俺はまだ賞金はかかってねえ。

これが多額の賞金がかかっているような高名な海賊ってんならまた話は別だろうがな……正義を背負っているからこそ、こういう時動けなくなる。

とはいえ、だからってここでこっちが人質を取っているとって攻撃しちまったら話はややこしくなっちまう。

とっとと逃げるが勝ちだな……。

まったく、ついてねえ。

結局、海軍本部中将相手に、それも次期大将とも言われるような奴にならこっちの実力を見せるにはいい機会だと思っただが、尻尾巻いて逃げる羽目になっちまうとはな。

あゝあ、ついてねえ。

第211話・三十六計（後書き）

白ひげと海軍との戦争ですが……  
原作とは異なる形ですが起きます

ベラミーの実も、結局使い方次第だと思っんですよね

最近、某小説賞に応募する為にオリジナルかいてます  
……間に合うんだろうか、1日400字詰め原稿用紙に直して最低  
3枚以上のペースが必要なんだが……

## 第212話 - 決断

あの壊滅事件から2日後、猿山連合軍の船が帰還した。

途中で合流したらしい『サルベージ王』マシラと『海底探索王』シヨウジヨウは連れ立ってクリケットの所へと戻ってきた。

この2人、名前が示す通り、基本はウータンダイバーズを抱えるシヨウジヨウが海底を探索して沈没船などを確認し、海図に記す。それを元にマシラが引き上げを行なうという分業体制を敷いている。結果として彼らは定期的に合流し、情報を交わしているし、2隻に分かれていても同じ一味として結束力も高い。こうして連れ立って帰ってくるのもそうした点ではむしろ当然と言える。

その彼らを島に残し、海軍の2隻は敢えて沖合いに停泊していた。今から行なわれるのは猿山連合軍の会議。その決断に海軍は口を出さないという意志の表明でもあり、同時に海軍側からの無言の圧力でもあった。

「それでおやっさんとしてはどう思う?」

アスラからの書状、条件。

それらをモンブラン・クリケットがまず説明した。

それによつて得られる利点、欠点。

マシラもシヨウジヨウも、そしてそれぞれの船のクルー達も誰もが黙って聞いていた。

その上で、シヨウジヨウが言った言葉だった。

「俺としては受け入れた方がいいと思う」

沈黙が広がった。

「海賊というのもいい。ロマンを追いかけるのもいい。……だが、否定した場合、どうなるか、それはお前達にも理解出来るだろう？」

たった1人の海軍本部中將によるモックタウンの海賊達の殲滅作戦。

僅かな海賊が脱出に成功したものの、町は壊滅状態に陥り、5500万の大型ルーキーであるベラミーや4200万のロシオも一蹴された。

「四皇や王下七武海と呼ばれる海賊の中でも頂点に近い怪物達……そしてそいつらと真つ向やり合えるのが海軍本部の大將であり中將という同格かそれを上回る化け物共なんだ。そうしてその1人が今、目の前にいる」

全員の視線が優美な姿を誇る海軍の戦艦メルクリウス号へと向けられる。

あのたった1隻であっても、自分達猿山連合軍が総力を挙げようとも、戦ったが最後、残るのは自分達の壊滅という結末だろう。

これに対して、与えられる利は大きい。

自分達のサルベージ技術が認められ、要は海軍御用企業たるウォーター7同様の会社たる事が求められている。この結果として船を襲ったりする事は出来ないが、代わりに懸賞金は消えるし、世界政府が彼らを認めてくれる。品物を引き上げても、これまでのように文句を言われる事も難癖をつけられる事もない。

王下七武海には及ばないにせよ、それに準じるとも言える破格の条件だ。

皆、それが分かるだけに何も言えない。

そして、もたらされたもう1つの話……それが更に彼らを悩ませ

る。

ジャヤは天空に飛んだ。

それを嘘だと決め付ける事は容易い。だが、それを告げた存在が問題だ。

海軍本部中將にして、CP長官。おそらく、現在世界を探しても、最も世界の情報に詳しい人物の1人のはずだ。その相手が断言した。もし、それが本当というのならば、このまま海底を探索し続けても『うそつきノーランド』の伝説は真実でありながら、彼らには真実をつかめない、という事でもある。

「……俺は受け入れようと思うが、お前らはどう思う。何言っても文句は言わねえ。忌憚のねえ、思う所を言ってくれ」

やがて、マシラが何かを決断した顔になって振り返って言った。

彼とて思う所はある。

だが、それ以上にマシラが決断したのは自分の後ろに控える存在信頼出来る部下達の存在。自分が夢を追い、海軍に反抗して潰されたとして、ではこいつらはどうなる？

船長である自分には部下の事を考える義務がある。

だからこそ、おやつさんもああいふ決断を下したのだろう。

そうして、部下達も船長たる彼が率先して賛成を表明してくれたからだろう、どこかほっとした様子で次々と賛成を述べた。

彼らとて分かっているのだ。ここへ帰る途上に、モックタウンの……海軍の復興船が訪れる中、再建途上にある町の光景を見てしまったから。そして、それが僅かな時間で、たった1人の……まあ、正確には町をああまで破壊したのは海賊の1人だが、やはりそこは印象の差、という奴だろうか、海軍本部中將が行なった事だったという事を。

こうなるとシヨウジヨウとしても部下達と視線を合わせる……口

では「次に王下七武海に選ばれるのは」などと言っていて、自分にはアレが出来るかと問われれば……無理だ。町だけならば可能かもしれないが、住人たる海賊までは対処しきれない。一つ溜息をついて、頷いた。

「確かに、奴とやりあう事になったらと思うと、ハラハラするぜ。俺も了解だ。けど、おやつさん……」

「ああ、分かってる」

そう呟いて、クリケットは海へと視線を向ける。それにつられるようにして、他一同も視線を向ける。

「俺達も行くぞ、空島へ」

既にサウスバードは確保されている。

アスラ中將はモックタウンが壊滅した後、海軍の復興船を手配後、歩いて戻ってきた。……途中でサウスバードを捕獲して。

ちなみに何故か本来侵入者と看做せば襲ってくる筈のカマキリや蜘蛛達は妙にヘコヘコした状態で後ろに行列を作っており、アスラが合図をすると慌てて逃げるようにして森の中へと帰還していった。……何があつたかは容易に想定がついたが、それに突っ込む事はなかった。

「そうと決まれば、早い所話をつけねえとな」

悠長に語ってる時間はない。

何しろ明日には積帝雲が来るのだ。

「空島か……そこに黄金の鐘があると来たもんだ。……ロマンじ

やねえか」

そうと分かれば彼らだけに行かせる話はない。

全員は無理だとしても……少なくとも自分は連れて行ってもらう。そう決意を固めるクリケットだった。



## 第212話 - 決断（後書き）

空島へ行くなら、彼らも連れて行ってみたかったんです

ちなみにサウスバードは原作同様森で妨害しましたが……

アスラの前に全滅状態に陥りましたw

まあ、アスラからすれば殺す気はありませんので、殺す必要もなかったんで、あっさり全軍降伏状態に追い込みましたが

第213話・空へ（前書き）

誤字って結構ありますね……  
教えて頂いた方々、ありがとうございます！

## 第213話・空へ

翌朝を待つてはいられなかった。

猿山連合軍の、世界政府からの提案受諾を伝えると同時に、もし空島を目指すのならば余裕は余りなかった。

「マシラのナワバリで日中に夜を確認した次の日には南の空に積帝雲が現れる。突き上げる海流も月5回の周期から見ても、明日それが起きる可能性は高い。そして、そいつも南の海だ」

100%とは言えないが、明日こそが絶好の機会だという事。

これを逃せば、次は何時の機会となるか分からないだけに、誰もが真剣に聞いていた。いや、そもそも最初から行く予定のない上、この辺は原作展開と同じかとアスラは割と聞き流していたのだが…。

最も、その心中は複雑だった。

(……原作でも幸運とは言えない程のタイミングで、ルフィはこの島に訪れた。そして今回もまた別に図った訳でもないのに、このタイミングの良さ……)

やはり、ルフィは世界に愛されているのだろうか。

ふと、そう思ったアスラだった。

そんなアスラの思いを余所に彼らの会話は続いてゆく。

「で、だ。本当に空島にノーランドの記した黄金郷があるっていうなら、俺はそれを見たい。俺も連れて行って欲しい。そこだけは譲れん」

「いいぞ」

モンブラン・クリケットの真剣な、殆ど睨みつけての気迫の籠った『お願い』に、けれどルフィはいともあっさりと言いた。それこそ、周囲のナミやウソップが思わず「いいのかよ！」と突っ込みを入れてしまい、クリケットも啞然としてしまった程だ。まあ、これがルフィだ、と言うべきか。

結局、それならば、とマシラとショウジョウの2人も手を挙げた。他の面々が手を挙げなかったのは、一つには海軍の軍艦に乗り込むというのは世界政府からの提案を受け入れた以上大丈夫だろうとは思っても、先日までというか未だ正確には海賊な彼らとしては度胸がある+これから行くのが突き上げる海流という自然災害を利用して空島という正体不明の場所へ突っ込む、という恐怖との二重奏故だろう。

いや、海軍側は元より「それでも行きたい！」って連中の塊だし、ナミは「アスラ兄さんがあるって言うなら信じるし、ルフィを放っておけない」、ウソップは「最悪でも船の乗員の生還は大丈夫なようにしてある！」と胸を張っていた。何をしたのやら……。

「とりあえず、全員にこいつを用意した。特にクリのおっさんはつけといてくれ」

ウソップが現在、マスクを渡している。

酸素マスクだ。

一気に上空へ、最低でも7000m余上昇する事になる為、空気が薄くなり、動く事が辛くなる。ある程度すれば慣れるのだが……。いや、実際月まで大気があるような世界だ。大気そのものは相当濃密なのだ。

（大気がなければ、プロペラ駆動のマクシムが辿り着ける道理がない……）

とはいえ、やはり、上空へ行けば空気そのものは薄くなるのは避けられないし、特に急激な変化は潜水病に犯されているクリケットの体には最悪の事態を招きかねない。正に黄金郷が真実かどうか知る事が出来る機会が目前に迫っている状況で死ぬのは馬鹿らしい。クリケットらもそれは素直に受け取った。

明日に備えて、全員が早めに休もう、という事になり分かれる前に……アスラはナミを呼んだ。

「何？アスラ兄さん」

「ああ、もう少しお前達が行く先について教えておこうと思ってな」

アスラがついていけるのならいい。

だが、ついていけないのならば、可能な限りの情報を与えておいてやりたい。

記憶の中から懸命に掘り出して、自分が覚えている限りの事と、手に入れた情報をアレコレと用意してある。

今晚中に無理をさせる訳にはいかないが、必要な事だけでも話しておく必要があった。

そうして、翌日の事。

アスラ達は安全な距離を取って、その光景を見詰めていた。

シヨウジョウの「探索の雄叫び（サーチ・ソナー）」で水中を探り、それをウータン・ダイバーズが聴き取る。

これによって海底の渦潮の兆候を探知し、そちらへ船を向ける。

この周辺の海域の情報、こうした探索能力。これらは彼ら、猿山連合軍の協力がなければ手に入らなかつただろう。さしものアスラ

も……いや、探せばCPのどこかにはより詳しい情報があるかもしれないが、アスラ個人ではそこまで詳細な情報は知らない。

手早く、シヨウジヨウとマシラが軍艦ストローウィック号に移り……そして、突き上げる海流に乗って、空へと舞い上がった。

「……一応はジェットエンジンに相当する代物も搭載していた筈だが……」

どうやら無事流れを掴んだ様子で、展開したウイングで風を掴み、空を舞っていた。

全員が酸素マスクをつけているから、原作と違い、溺れかけて意識を失うという事もないだろう。

「元気に帰って来いよ」

猿山連合軍居残り組一同は3人の帰りを、彼らが空から黄金の鐘を鳴らす事を信じて、待つという。

アスラは無事彼らが到達したと思われる以上（空から落ちてくる様子はない、という事は成功したのだろう）、帰還しなければならぬ。幸い、島の復興に当たっている部隊があるから、猿山連合軍が世界政府の条件を受諾し、雇われる事になった事伝える。元々、アスラが復興部隊を立ち上げた司令官だった事もあり、そもそもアスラは海軍本部中将だ。部隊指揮官が顔見知りだった事もあり、すんなりと話がついた。

「やて……」

もう夜は去り、空は再び明るくなっていた。

「無事戻って来いよ。そうしたら土産話を聞かせろ」

そう呟き、アスラはマリソフオードへの帰還を命じた。

……全知全能の神ならぬ身。さしものアスラも、この後、ルフィ達が空から戻ってくる前に起きる事になる大事件の事など未だ知る由もなかった。

### 第213話・空へ（後書き）

現在、オリジナル作品を応募の為に書いている関係上、毎日更新は厳しくなっていました……

当面は2日かそこらに1度の更新って形になりそうです

いよいよ空島へ

あと、金獅子のシキ出して欲しいって話が時折ありますね

先だつての映画、最初の1時間程は見落しましたが、後は録画したので……見てから決めようかと

尚、最後に書いた事件ってのは最終章のお話なので、空島編が終わってからになります



## 第214話・空での遭遇

突き上げる海流、ノックアップストリーム。

その凄まじさは知っている3人を除く、海軍メンバーにとっては恐ろしい光景だった。覚悟はしていたし、船も頑丈極まりないとはいえ、これに耐えられるのかと一瞬誰もが身が竦んだ、いや、ルフィだけはむしろ好奇心に満ちた瞳をしていたが。

巨大な渦に突入してしまえば、もう人知でどうこう出来るような状況ではない。これをどうにかしようと思えば、それこそ世界最強クラスの、具体的には青キジ大将のヒエヒエの実で凍らせるか、白ひげのグラグラの実で渦を越える破壊力を叩き出すかのどちらかだろう。

海王類でさえ、渦に抵抗出来ずに飲み込まれ　ストローウィックク号も飲み込まれたと思った次の瞬間、べた凧が来た。

一瞬呆けた海軍勢にモンブラン・クリケットらが怒鳴る。

「来るぞ！全員船室に入るか、船に掴まれ！」

既にマシラとシヨウジヨウ、彼らの船は全力で離脱している。

直後。

海が爆発するように盛り上がり、垂直に吹き上がった。

無論、最初は勢いで船も上昇していたが、次第に船は浮き上がる。当然だろう、垂直の海を航海するよう普通の船は出来ていない。

だが、ここで活躍したのがナミだった。

原作以上に海を知り尽し、グランドラインの出鱈目さを知るナミはこの状況にも全く動じなかった。即座にこれが例え垂直に立ち昇っているようが、海は海だと看破したのだ。

彼女の指示に従い、海軍軍人が一斉に動き出す。

垂直の甲板故に酷く動きづらいが、そこはプロだ。

作業を分担し、動ける者が動き、彼らは見事に仕事をやり遂げた。そうしてナミもまた己の仕事をやり遂げた。

「うおおおお！？船が飛んでる！」

ヘルメツポが叫んだ。

コビーもその隣で驚いている。

ウソツプはというと、万が一に備え、ギミックルームへと移動した。これでも足りない場合は緊急用のブースターで最後の上昇を行なうからだ。

海軍側が焦らなかつたのは、正にウソツプが今管理しているシステム、海軍の最高頭脳たるDr.ベガパンクらの構築したシステムへの信頼もあつた。彼らが作ったシステムが何とかする、と言つた以上、生還は何とかしてくれると信じていたからだ。

幸い、それらは使われる事なく、ぐんぐん船は上昇していった。

「雲へ突っ込むぞ！」

誰かが叫んだ。

既に全員が酸素マスクに相当するマスクを装着している。

ルフィやヘルメツポは雲に突っ込んだ瞬間、奇妙な脱力感を感じた。それは間違いなく海の証。海に嫌われる悪魔の实の能力者が海に触れた時に感じるのと同じもの。すなわちこの雲がただの雲ではない、海なのだという事を示す証でもあつた。

やがて光が差し込み。

飛び出すかのように船は雲の上へと飛び出し、そして船が雲へと着水……。そう、雲を突き抜けて再び落下などはしなかつた。正に海同様しっかりと雲は船を受け止め、船もまた真っ白な海に浮かんでいた。しばし呆然として周囲を見回していたが、それを理解した瞬間、ルフィは両の拳を突き上げ思わず叫んだ。

「来たぞ、空島あ！」

それと同時に歓声が上がった。

やはり不安は誰にもあつたからだ。

幾らCP長官たるアスラが「ある」と断言し、可愛がつているルフィやナミを送り出したと言っても何しろ未知の世界だ。もちろん、知ってる人間はその存在を知っているのだが、下っ端たる海兵らが空島の事など知る由もない。

どこかにあつた不安が払拭されれば、そして空島という未知の光景が目の前に広がっていれば、それは誰もが喜んで当然だ。

モンブラン・クリケット、マシラ、シヨウジョウの3人も目を輝かせて舷側から周囲を見ていた。だからだろう、最初にそれに気付いたのは。

「……………んん？」

モンブランが向けていた先に、煙が上がった。

そちらに視線を凝らす……………だけでは足りず、近くの海兵から双眼鏡を借りた。

「……………！おい、船が襲撃を受けている。向こうから誰か来るぞ！」

混乱しつつも、咄嗟にその声に反応して動き出したのは、海賊との遭遇戦も含めた経験豊富な軍人ならではだろう。

原作と異なり、魚に襲われる事はなかった。

だが、代わりに襲撃は早まったようだった。

「なんだ！雲の上を走ってくるぞ！」

ここの面子は事前に雲の海では普通には泳げない事は知らされていた。

だから原作のウソップのように飛び込む馬鹿はいなかったのだが……それだけに雲の海を走ってくる人間の姿は印象的だったらしい。飛び込んできた武器と盾を持つ人間だったが、その攻撃を咄嗟に防いだのはルフィだった。

原作では空気の薄さから最初はしてやられた訳だが、今回は酸素マスクをつけている。お陰で動きが鈍る事なく……。

「ゴムゴムの指銃シガントリング乱打！」

連射された【指銃】が盾を粉碎し、幾つか直撃する。

バランスを崩しかけたが、何とか空中で姿勢を立て直し、接近戦は拙いと判断したのか今度は武器を構え……た所で空から舞い降りてきた存在がいた。

「そこまでだ！」

盾がない以上、やむをえないとばかりに武器で槍を払う。その体を蹴って、飛来した相手は船へと着地した。

「！？誰です、貴方は……」

コビーの問いに鎧甲冑を纏った老人は悠然と武器を構え直し言った。

「ウーム我輩は空の騎士！」

## 第214話・空での遭遇（後書き）

事前に話しておきます

モンブラン・クリケットらも強さは多少修正を加える予定です

彼らの強さはどうにも疑問でして……

原作を見ると、モンブラン・クリケットは当初サンジと真っ向やりあっていました

途中潜水病で倒れた訳ですが一時は真っ向やりあって引けを取りませんでした

しかし、その一方で、1対3でベラミーに敗北し、そのベラミーはルフィに一撃で沈められています

じゃあ、ルフィとサンジはサンジが一方的に沈められる程弱いのか、と言われるとそんな事ないですよねえ……難しい所です

ので、多少は修正が加わるとお考え下さい

## 第215話 - 邂逅

空の騎士とシャンディア。

双方の緊張感が高まり、戦闘か離脱か、いずれかに天秤が傾きかけたその瞬間、彼らが動く寸前に声をかけた者がいた。

「待つて！ガン・フォール！それに……シャンディアの人も！」

一同が「え？」と問いたげな目で視線を集中させたのはナミだ。

ガン・フォールの動きが止まった事で、一人離脱を図りかけたシャンディアに、ナミは更に声を掛ける。

「待つてつてば！貴方達がカルガラの子孫つて本当なの！」

その言葉に彼は足を止めた。

大戦士カルガラはシャンディアにおいては半ば神格化されている英雄だ。その名前を軽々しく部外者に口にされては黙っていられなかったようだ。

向きを変える……だけでは飽き足らず、船の船首に飛び乗ってきて、ナミへと武器を向けてくる。それに呼応するようにナミの周囲に空の騎士、ルフィやコビー、ヘルメツポらが壁を作るように動くが、それを抑えて、ナミは前へと出た。

「その名を軽々しく口にするな……貴様何者だ？」

シャンディアが苛立ったような口調で声を掛ける。

だが、ここが勝負どころと見たナミは毅然とした態度で話し掛ける。

「それは御免なさい。けれど、話を聞いて。貴方達にとっても大事な話だから」

「俺達にとつてだと？そんな「400年前の出会いに関する事、それでも？」！！」

そんな事などない、そう言い捨てようとした言葉を遮るようにして、ナミが言った言葉に僅かにシャンディアの男は体を揺らした。それに頷くようにして、ナミは視線を変える。

……モンブラン・クリケットへと。

その当人は、驚いたように目を見開いていたが、ナミの視線を受けて我に返ったように前へと出てきた。

「なあ、教えてくれ。本当にカルガラはいたのか……？黄金郷は、黄金の鐘は本当にあったのか？」

「……何故貴様にそんな事を話す必要がある」

明らかに苛立ったような口調だったが、クリケットは確かにそうだ、というように頷いてどっかと腰を下ろした。

「確かにそうだな。少し長くなるが聞いてくれ」

そう言つて、彼はシャンディアに銃口を向けられるまま、しかとその仮面に覆われた顔に視線を向けて語りだした。

「そもそもは400年前に遡る。……俺の先祖は当時、地上にあつたつていう黄金郷、ジャヤに辿り着いたそうだ」

その言葉に明らかにシャンディアは体を揺らした。

「そこでカルガラ、って戦士と友人となったそうなんだが……それからしばらくして再び島を訪れた時、けれど島は、黄金郷はどこにもなかったそうだ。そうして、俺の先祖は『嘘をついた』って事で処刑された」

既にシャンディアは武器を下ろしていた。

どこか呆然とした様子で、クリケットに視線を仮面越しに向けている。

だが、それに気付かぬようにやや視線を下方に向けて、クリケットはどこか悲しげに話を続けた。

「それからだ。俺達の一族は『嘘つき』の一族としてずっと罵られてきたが……それでも一族は奴が類稀なる正直者だった、って話を頼りにずっと黄金郷を探し続けてきた。……かくいう俺も、奴を嫌っていたはずなのに辿り着いちまったジャヤで奴との決着をつけようと、黄金郷があるのかないのかはつきりさせたいと思って探し続けてきた。……なあ、教えてくれないか？カルガラはいたのか？黄金郷は、黄金の鐘は……本当にあったのか？」

クリケットの真摯な視線を向けられたシャンディアは、そこで初めて仮面を上げた。

その下の顔は涙に塗れていた。

涙を流し、目を見開いてクリケットに視線を向けていた。その様子に誰より驚いたのはこれまで幾度となく刃を交わしてきた空の騎士ガン・フォールだっただろうが、彼とてこれが重要な意味を持つ話と見て、問いを口に出す事はなかった。

そうして緊張が張り詰める中、シャンディアは、ワイパーは言葉を口にした。



「……お前の、名は？」

「……モンブラン・クリケット」

そう名乗った時、呆然とした口調でワイパーは呟いた。

「では400年前の先祖の名は……ノールランドか」

そんな彼らを見る中、一人悩む者がいた。  
他ならぬ、最初に声を掛けたナミである。

(……確かに、アスラ兄さんの言う通りの結果になった。それはいいけれど……でも、何故兄さんはここまで読みきっていたの?)

無論、上手くいった事は、その逆の結末を迎えるより遥かに良い事だ。

だが、同時にアスラの手の長さに驚きや疑念を感じざるをえなかった。

……実の所は、空島ならば自分の干渉した影響も殆ど及んでいないだろうと、知る限りの前世情報をアスラが与えただけだったのだが、ナミはそんな事など知る由もなかった。

## 第215話 - 邂逅（後書き）

仕事は忙しい

オリジナル小説は割りとか調？

現在、400字詰め原稿用紙で50枚程度まで進みました  
まだまだ完成まで先は長いですが

第216話・会談の冒頭（前書き）

難産でした……

## 第216話・会談の冒頭

「……何故、お前さんが泣くんだ？」

さすがに仮面の下の顔が泣いているというのは予想外だったらしく、クリケットも驚いた様子だった。さすがにこれは事情を知らなくっては仕方がないだろう。

「そうだな……お前がモンブラン・ノーランドの子孫というのなら俺はこう名乗ろう、大戦士カルガラの血を引く者だと」

モンブラン・ノーランドが救った少女。

彼女はカルガラの娘だった。

そうして、樹熱という疫病を止める為と称して、神官という特効薬の知識のない人間の最期の言葉に従い生贄にされかけ……ノーランドが人々の怒りを受けるのを承知で、神と崇められていた相手を殺した事が今へと繋がる架け橋。

いわば、ワイパーという青年が今ここにあるのも、ノーランドの行動が現在に繋がっている証でもある。

さすがに、これにはクリケットも驚いた。

空島へ来て最初に出会った住人が嘗ての親友だった先祖を持つ者同士とは！

信じられない程の偶然と言っていいたろう。

「あゝねえ、ちょっといい？」

けれど、そうも言っていられない人間もいる。

さすがに不快げに睨まれたが、それでもしないといけない事がある。

るナミとしては引く訳にはいかない。

「悪いけれど、今はそれよりしないといけない事があるの……エネルの狙いとか、ジャヤの本当の姿、黄金の鐘の現在位置とか」

既にガン・フォールがここに、こうして空の騎士としてある以上まず間違いないだろうと考えていたが、一応本人に確認を取った。予想通り、既にエネルは空島を支配しているらしい。

さすがに、ワイパーもそう言われると眼光が変わった。それはガン・フォールも同様だ。

「あの、ナミさん？」

「一体、どうやってそんな情報なんて……」

さすがにコビーとヘルメツポも疑問に感じて問いかける。

「さあ？アスラ兄さんから渡されたのよ。本人曰く『在庫一掃だ』って言ってたから案外、どこかで手に入れた情報を空島なら使う機会もない、って纏めてくれたのかもしれないけれど……ただ、それでも疑問は残るんだけど」

最後はさすがに小声になっただけ、と呟いた。

とはいえ、ルフィ達はそもそもエネルと言われても分からないし、ガン・フォールやワイパーにとっては聞き捨てならない話だ。

とりあえず、分からない人もいるから、とナミが語りだす。

「……とりあえず、私が教えられたのはエネルつてのが神を何年か前に乗っ取った自然系の能力者だ、って話。それで合ってる？」

「うむ、正確には6年前である」

「悪魔の实の能力者……自然系か」

ガン・フォールが補足し、ルフィが呟いた。

自然系。

光や氷、マグマに火など様々な自然現象そのものとなる最強とも呼ばれる悪魔の实。その戦闘力は桁違いで、島を構成する程の巨木を一撃で砕く、海をも凍らせるといった能力を持つが、その一番の厄介さは物理攻撃を無視するという所にある。

肉体が現象そのものである為に、破壊されてもすぐ復元してしまうのだ。

これをどうにかするには、海楼石を用いるか、覇気を用いるか、或いは何かしらの固有の实ごとの弱点をつく、といった方法が必要になる。

それゆえに、チラリとワイパーは自分のスケート型ウェイパーに視線をやった。彼のウェイパーには海楼石が仕込まれている。あれを使えば奴も……。

「何の能力者なのか分かるのか？」

「兄さんもそこまでは……ただ」

「ただ？」

「多分、雷とか雪とかその辺じゃないかって」

無論、推測だが、と断っているし、理由もちゃんとある。

自然系というのは自然現象そのもの故に、その種類も限られてい

そうしてアスラが知るだけで、既に青海には光、マグマ、氷、砂、火に闇、風が存在しているのは確実だ。そうなると自然現象としては他に何が残るか……確かにぱっと思いつくものと言えば、その辺だろう。

それにはナミも確かに、と頷いたものだった。

まあ、泥といった可能性もないではないし、アスラは本当の所を知っている訳だが。

「……しかし、長くなりそうだな。それに話も重要そうだ……一度白々海に上がった方がいいたろうが……」

天の門を通るには金がいる。

金がなくても入る事は出来るが、恐怖によって支配されている島の住民は彼らを神エネルに売るだろう。

しかし、この船の全員を国に入れるだけの金は……相当な額となる。

だが、抜け穴がある。

シャンディアもガン・フォールもある種のお尋ね者だ、通常の入りは通れない。

だが、この海へと降りてきている。

つまりは彼らが降りて来られるルートがあるという証明でもある。シャンディアは400年の間に構築したルートがあるし、ガン・フォールは元々神だった人物だ。神のみに代々伝えられてきた極秘ルートなどがあるし、現在の神エネルは強引に、この島雲の領域を奪い取っただけにそうした引継ぎが為されていない為、未だ神官らには伝わっていない。……エネル当人は興味がないだけかもしれないが。

「よかるう、ならばそちらのルートは我輩の持つルートの一つを提供しよう」

シャンディアの持つルートがどのようなルートかは分からないが……極秘のルートである以上、大規模なものを作る事は出来なかつただろう。おそらくはウェイバーを用いての移動が基本である筈だ。対して、神の持つルートは権力を使って堂々と構築されてきたルートだ。

これだけの船を通せるルートとなれば、どちらがいいかは自明の理だった。

そうして、ストローウィック号は本来の門を通らずして、上へと昇る事になる。



第216話・会談の冒頭（後書き）

難産でした

書き直すこと5回以上……それでも納得いく出来とは……

いや、ですね？

なんかネタが全然降りてこなかったのです。これまで割りと出てきたんですが……寒くなったのもあるかなあ……自分暑いのは割と平気なのですが寒いのが駄目なんです

でも、オリジナルの方はすすすす進んでるんですね……うーむ

第217話・シャンディアの思惑（前書き）

あけましておめでとついでいます

体調崩して、執筆予定がガタガタになった……

## 第217話・シャンディアの思惑

神が嘗々と蓄え続けてきた一種の資産とでもいうべき一般には知られていない雲の道を通り、更に上の白々海へ。

到達した場所から島雲が影となる場所を選び、ストローウィック号は停泊した。

「おお、すげえ！この雲歩けるぞ」

そう言つて、ルフィは雲の上で跳ねていた。

島雲は海雲とは異なる。

海雲は泳ぐのが非常に難しく、基本的にその上を移動するにはウェイバーを用いる。もしくは地上から上がってきた船を用いる。

正直、何故船などは良くて、人は駄目なのか。人がウェイバーをつけた途端に普通に立てるのは何故かとか色々と聞いてみたい事はあるのだが、それは置いておこう。

大規模な、町があるような島雲ともなれば数は限られ、こちら辺りではエンジェル島ぐらいのものだが、そうでない島雲も結構数はある。

そうした島雲の中でも、普通の雲に覆われた場所にシャンディアの隠れ里はあった。

さすがに部外者をいきなり招待する訳にはいかない。

ガン・フォールをその場に残し、ワイパーは一足先に村へと戻っていた。

「……それはまた驚く事もあるものだ」

長もさすがにワイパーのもたらした話には驚いた様子だった。

無論、仲間達もワイパーの言葉を信じる者、彼らの嘘ではないかと疑う者など様々だったが、それでも総体としてはワイパーの言葉が認められたのには幾つか理由があり、無論ワイパーが大戦士カルガラを引く者として一定の立場を持っていたのもあるが、それ以上にワイパーが村一番の戦士である事や、戦士達のリーダー格である事など実力による所が圧倒的に大きい。

「とはいえ、全員を招く訳にはいかないだろうか？」

これはブラハムの台詞だった。

「そうだな。大戦士カルガラの親友だったというモンブラン・ノランドの子孫。彼はいいだろう。問題は……」

「青海人の連中だな」

ブラハムの言葉をカマキリが引き取る形で言った。

「そうだ。別に味方とする意味は本来ないが……黄金の鐘の位置、というのが気になる」

ワイパーの言葉に一同も押し黙った。

エネルギーが何か不可思議な能力を持つのは確かだ。

だが、それだけであれば、ワイパーとてルフィらを味方に加えようとは思わない。

……だが、黄金の大鐘楼。シャンディアが今一度鳴らさんと欲しているそれが、神の島にはないのだという。

嘘だと決め付けるのは簡単だ。

だが、一度決め付けて、関係を断ってしまえば、関係の修復は難しい。

本当に、本来の場所にありませんでした。エネルギーも知りませんでした、じゃあ、一度手酷くふった彼らに聞こう、とはいかない。

「決まりじゃな」

「長……」

「我らシャンディアにとっての悲願。今一度黄金の鐘を鳴らす事。それに関わる事だ、このまま関係を切り捨てるのはあまりに惜しい」

わかつてはいたのだ、皆。

だから、その言葉に一同も黙って頷く。

とはいえ、隠れ里にほいほいと案内してやる程、彼らは能天気ではない。

「鍛錬用の隠れ場所が幾つかあったな……適当な所を見繕えるか？」

「それなら、停泊場所から近い、島雲を伝って行ける場所に一つあるな」

かくして方針は定まった。

一応は歓迎を示す意味合いもある。だが、今はまだ互いに後ろ手に何が隠されているか分からない状況だ。警戒しているのは相手とて同じ事だろう。

この為向かうのは戦士のみ。

その戦士の中でも選ばれた者が主体となる。これは些細な事で暴走するような奴は連れて行けない、という意思表示でもある。結果としてシャンディアでも主力と呼ばれる面々が向かう事となった。

この会談にて……シャンディアと海軍との関係が決まろうと……

多分、しているのだろう。

## 第217話・シャンディアの思惑（後書き）

本当なら、これを30日には上げて、31から日が変わった時に記念の番外SSでも……なんて考えてたんですよ  
ぜーんぶパーになりました……食中毒で寝込んで……  
いやもーベッドとトイレを行ったり来たりでした  
強制的に寝正月を迎えた次第です

……今日の夕方になってようやくと落ち着いてきたので、執筆……  
食事がこれまで食ってもすぐ気分が悪くなって吐いてしまったので、  
夜食ったのがほぼ3日ぶりの食事だった……

## 第218話・神の思惑

【SIDE：エネルギー】

「ほう、これは」

「どうかされましたか」

巨大蔓上空の島雲に位置する神の社。

六年前に、ガン・フォールと戦い、神の地位と共に奪い取った場所だ。

エネルギーには別段この場所に拘りはないのだが、神という立場で見ると、このスカイピアで最も高い、全てを見下ろすこの場所は気に入っている。

そこでくつろいでいた時、ふと眼を瞑っていたエネルギーの呟きに答えたのは神兵長を務めるヤマだ。神官達自身は神の島にて番アップバーヤードをしている為に、基本的に神に呼ばれた時以外は下にいる。

彼らは神エネルギーに従い、このスカイピアにやって来た。

故郷のビル力を滅ぼしたエネルギーに尻尾を振り、或いはその願望や力に憧れ、故郷の民を虐殺したエネルギーを神と崇めている。正に狂信者の群と言っていだろうか。

そう、エンジェル島で島民を内心の葛藤を抑えながら、エネルギーによってこれ以上殺される人間が出ないようにと抑え付けているホワイトベレー隊を除く全員が一種のカルト教団の構成員だと言っていだろうか。

「これは面白い、新たな侵入者が出現したぞ」

そのエネルギーの言葉にヤマの目の色が変わる。



「天国の門の監視官からは何も報告は来ておりませんが……」

もしや、アマゾンが倒されたのかとも思ったが、そもそもアマゾンは確かに管理をしているし、「金を払え」と言いはするが金を払わずとも当たり前のように通す。それならば余程の殺人鬼でもなければ、わざわざ害にもならぬ老婆を殺しにかかる者などいない。

かといって、神エネルギーの恐ろしさを理解している以上、裏切ったとも考えにくい。そもそも彼女が裏切ったのならば、神エネルギーはそう言うだろう。

「天国の門ではない。これは……ガン・フォールとシャンディアが傍にいるな。どうやら奴らの道のいずれかを使ったか……ヤハハハハ！」

彼らの使う隠し道がある事は分かっている。

如何に広い積帝雲とはいえ、広大な青海と比べれば狭い事は確かだし、彼らの動きを逆算すればある程度まで絞り込む事も可能だ。

だが、エネルギーはそれを探し出すよう命令を下す事はなかった。

彼自身はシャンディアの襲撃すら、箱舟マクシム完成までの、ある種の余興と考えている節があったが、それでも神官も神兵も誰も「神が決めた事ならば」と何も言わず、従った。

「そうしますと、彼らが総出で攻めてくる、という可能性もありますな」

「まあ、そうなたら面白いが……精々が遭遇しても戦わない、という条件を立てるのが精一杯だろう、ヤハハハハハ！」

シャンディアの人間は猜疑心が強い。

今回は青海人に彼らと少々でなく縁のある人間がいるようだから、多少は状況が変わるだろうが……だが、ガン・フォールと仲良く手を繋いで、などという真似に至れるはずもない。

精々が一時的な休戦、背中にナイフを隠して互いを見ないようにするような状況が限界だろう。何しろ、400年の恨みの蓄積の末にシャンディアと空島の人間の関係がある。余程の事がなければ、その溝は埋まらない。

「どのみち、単なるシャンディアの襲撃にも飽きてきた所だ。奴らが変わった事をやってくるのなら、それも面白い」

「また、神の気紛れが始まりましたな……」

「そうとも、神とは気紛れなものだ」

嘆息するヤマに、上機嫌に笑いながら、しかしエネルギーはその笑顔の裏で冷徹に事態を把握していた。

（……しかし、気になるのは心網マントラが酷く雑音がかかったように聞き取りにくい奴が2人程いる事だ……どういう事だ？）

或いは、青海人の中にも心網マントラが使える者がいるのか？  
だとすれば……。

（面白いではないか……心網マントラの使い手同士の対決。神官達の一方的な処刑も飽いた。……絶対的なアドバンテージが失われた時こそ真の強さが、永遠の大地へと向かうに相応しき者達が見えてくるというもの）

エネルギーは現在の神官達、神兵達、その全てを永遠の大地へと連れ

て行く価値のある者達だとは思っていない。

シャンディアであっても、青海人であってもそれに相応しい人物が行けばそれで良い。

最悪、全てを捨てて、自分だけが至ったとしても、それはそれ。神官達が彼らに敗れるとしたら……。

（まあ、神の加護がなかったのだろう）

これからの戦いに心を馳せ。

エネルはニヤリと笑みを浮かべた。

第218話・神の思惑（後書き）

昨日書きかけで寝落ちしちゃいました

風邪は引かなかったけれど……（暖房もつけっぱなし）

やっぱり仕事疲れが残ってるときついですね

## 第219話 - 涙

シャンディアと他との会談はエネルギーの読みどおりとなった。

シャンディアというグループは元々排他的な存在だ。それは地上にあった頃から変わらない。モンブラン・ノーランドがカルガラと友誼を結べたのは樹熱という伝染病の存在が極めて大きかったに過ぎない。

彼らはノーランドの子孫たるクリケットの存在故に席を蹴ったりはしなかった。

だが、基本として共同戦線には至らなかった。

もつとも、交渉役を一手に引き受けていたナミからすれば、それも仕方ないかと判断していた。

(少なくとも、島で出くわしても互いに攻撃はしない、って協定まではいったんだもの。よしとしなきゃ)

そう自分に言い聞かせていたナミに、シャンディア側からの問いかけがあった。

「ねえ、貴方なの？黄金の鐘の在処を知っているというの？」

「あ？ええ、私は教えてもらったただけけど……黄金の鐘はジャヤにはない。ジャヤ自体が今では雲に埋もれて本当の姿が隠れてしまっているけれど、黄金の鐘は巨大蔓の上にある神の社、そこより更に上にある小さな島雲の1つに引っ掛かっている、そうよ」

シャンディア側の女性ラキの問いに、ナミは至極あっさりと答えた。

隠すような事でもない、元々あれは彼らの物だったはずだ。

その言葉をしばらく考えている様子だったシャンディア側だったが、帽子を被った男ブラハムが呟くように言った。

「……その言葉、信憑性はどの程度ある？」

「少なくとも、この情報を提供してくれたのは青海で一番正確な情報の収集に長けている人なのは間違いないわね。それは断言出来るわ」

世界政府の諜報組織サイファーボールCPの長官を長年務める海軍本部中将アスラ、確かにこれ以上に現在の世界の情報を知る者は早々いないだろう。

「なあ」

全員が誰ともなく沈黙する中、一人声をあげた者がいた。

モンブラン・クリケットである。

「あんた達、シャンディアは……ずっと鐘を鳴らそうとし続けてきたのか？400年もの間」

「そうだ。……大戦士カルガラは自分達がこの天空へと飛ばされたと知った後……奪われた鐘を今一度鳴らそうと、我らの誇りたる鐘の音を今一度響かせようと、『シャンディアの灯を灯せ』その言葉を胸に戦い続けてきた」

黄金の鐘はただ一度で、親友たるノーランドに「自分達はここにいる」のだと必ず教えてくれると信じたから。

けれど　それは鳴る事はなかった。

カルガラは天空の薄い大気とダイアルを用いた戦いの前に命を散

らし、ノーランドは黄金郷の嘘をついたと黄金を手に入れ損ねた王に断定され、けれどシャンディアを誇り、斬首された。

それから400年、シャンディアは戦い続けてきた。

彼らの恩人へと鐘の音を届かせる為に……。だからこそ。

「ありがとう」

クリケットは万感の思いを込めて頭を下げる。

「俺の先祖との友誼を忘れないでいてくれて、ありがとう」

世間を見れば、舌の根も乾かぬ内に友人と言ったその前言を忘れ果てるような輩など掃いて捨てる程いる。

弱者を食いものにして恥じない奴がいる。

そんな中で、400年もの間、ただ先祖が遺した恩義と言葉に従い、戦い続けた者達の何と尊い事か。

青海では誰もが彼の一族を『嘘つきノーランド』の一族として嘲笑ってきた。

無論、中にはマシラやシヨウジヨウのように信じてくれる馬鹿だっていたが、殆どはクリケットは知らぬ事だが原作のベラミーがそうであったようにそれこそ馬鹿が感染すると笑いのネタとされ続け、それを覆してみせようと一族の者は海に乗り出し……。そして消えていった。

クリケット自身は幼い頃より嘲笑され続けた己の名を呪い、それでも最後は決着をつけようと挑み続けてきた。

深い海の底、孤独に耐え、体を壊し、それでも潜り続けてきた。

……。けれど、一人ではなかった。

何時しか、マシラが、シヨウジヨウが傍らにあるようになり……。そして、何より。空の上ではずっと戦い続けてきた者達がいた。

自分達は孤独ではなかった！

それが何よりも嬉しい。

だからこそ万感の思いがこみ上げ……クリケットの目からは涙が零れる。

だが、誰も彼を、男が泣くという事を笑う者はいなかった。

それは真実の、長い時の全てが籠った涙だったから。

だからこそ、家族同然につきあってきたマシラやシヨウジョウが彼の近くに集まり、或いは自然とワイパーがシャンディアの人間が傍に近付き、彼に笑いかけていた。彼らの顔も涙に濡れていた。

それは嘲笑ではなく、クリケットが浮かべるのと同じ……喜び故の涙だった。

だから ルファイ達もガン・フォールも笑顔でその光景を少しはなれた場所から見詰めていた。



第219話・涙（後書き）

忙しい

しかし、それ以上に最近「不運だ……」と思わず呟いてしまつよう  
な事の多い事

一度お払いにでもいった方がいいのかなあ

## 第220話 - 教育

感動の話もしばらくすれば落ち着く。

「……すまん、みつともない所見せちまったな」

恥ずかしげに、けれど口元には未だ笑みが浮かんだまま、クリケツトはそう言った。

誰もみつともないなどとは思っていないが、ここは照れ隠しというやつだろう。

それでも先程までとは大分和やかなムードとなって話は続いた。

「そういえば、意味が分からなかったんだけど、これは頼んでおけ、って言われた事があって」

これからの予定を打ち合わせる中、ふと思い出したナミが言った。

「空の戦闘をきちんと教えてもらえ、って言われたんだけど……」

その言葉に、確かに、と空を知る者達は頷いた。

大戦士と謳われたカルガラが倒れた原因は大きくあげれば3つあった。

1つは空の 대기。

遙かな高空に位置するスカイピアの気は薄く、地上に比べて全力を発揮するのは困難だ。地上の感覚で体を動かせば、それは動きの予想外の鈍さに繋がり、致命的な怪我を負う危険はより増す。

そして、もう1つが<sup>ダイアル</sup>貝の存在。

様々な特殊能力を持つ<sup>ダイアル</sup>貝は誰もが持てる限定的な悪魔の実の能力と呼ぶに相応しい。

最後の1つが異質な雲の存在。

神官達はそれぞれに特殊な雲を用いる。

玉雲、紐雲、沼雲、鉄雲……知ると知らないでは大違いだ。

特に紐雲と沼雲は知らずに戦闘に突入すれば、それがそのまま致命傷に繋がりがねない危険さを抱えている。

「へえ、面白いものが一杯あるんだな」

とは、大雑把に話を聞いたルフィの言葉。

「ああ、なんだか凄く面白そうだな！」

と賛意を示したのは、海軍開発部所属予定のウソップ。

他の面々と言え、どちらかと言えば渋い表情だったり、困惑したりといった様子だった。

それも当然だろう。

青海での戦闘と白海での戦闘は聞けば聞く程、まるで違う。

まだ、ウェイバーはよしとしよう。

どう聞いても、付け焼刃で何とかなるような代物ではない。……

まあ、マシラが「それってこういうのか？」と古く、壊れたウェイバーを持ってきた時には一同驚いたが、何でも、ここに来る少し前に空から落ちてきた船から回収したものだっただけならいい。

単なるガラクタと思っただけでなかったのは、やはり猿ベイジャーならぬサルベイジャーの本能だろうか？

さすがに、このタイプの修復は里では困難らしい。

元々、シャンディアは戦闘の為にウェイバーを使用している為に、こうした乗り物型のウェイバーは余り用いられない。

どうしても、最低でも片手が塞がってしまうからだ。

せめて、塞がるのにふさわしい利点があれば、例えば古代の戦車という名の馬車のように相手より高速で動けるといった利点があれば

ばまた話は別だろうが、むしろ小型軽量のウェイバーの方が早い時すらあると来ては確かに戦士が使う意味はないだろう。

「まあ、こいつを修理するなら……エンジェル島の奴に頼まない  
と駄目だろうな」

そう言われて、それじゃ無理か、と一同が苦笑する中、一人真剣な顔でウェイバーをじっと見ている者がいたりした……。

「とりあえず、それは後回し。じゃあ、空での戦闘は空気はしょうがないとして……」

「<sup>ダイアル</sup>貝の特性、雲の特性を知らなければ、戦闘は厳しいじゃろうな」

ナミの言葉に、ガン・フォールが答えた。

言いながら、1つの貝を取り出す。その貝を見たシャンディアの面々はそれで何をしようというのか検討がついたのだろう。

立ち上がったゲンボウが武器の中からハンマーを持って来た。

地面に敷かれた敷布の上に置かれた貝を指差しながら、マシラにハンマーが手渡される。

「これでその貝を殴ってみるがいい。全力でだ」

そして、その後起きた現象はルフィらを驚かせるに相応しいものだった。

マシラの怪力で振り下ろされたハンマーの一撃にびくともしない<sup>ダイアル</sup>貝、そして放出される衝撃……。

「これが<sup>インパクトダイアル</sup>衝撃貝だ」

目の前の光景に一同は渋い表情で見つめていた。

下手にパンチを打つても、この貝を間に挟まれれば、それは相手の武器とされてしまうのだから当然だ。

知らずに、この貝を用いた戦闘を行われれば、相当な不利に追い込まれるだろう。

「短時間ではあるが、神官どもが使っているのが分かっているものぐらいは教えよう」

ガン・フォールの言葉にシャンディアも反論はしなかった。

クリケットらに教えないという事はする気がないし、ガン・フォールはどうせ知っている。

クリケットらに教えるのなら、青海の住人らに教えるのもついでだと割り切っているのだろう。

「何時、エネルギーに気づかれるか分からんのでな。短時間での詰め込みになるが、しっかり覚えてくれ」

## 第220話・教育（後書き）

今年はどうにも運がない

いきなり何をと思うかもしれないけれど……

元旦の食中毒に続き、今度はパソコンが不調になりました

現在のこれは、サブのノートで書いてます

書きかけのが取り出せなくなりました……まあ、そろそろやばいかな？とは思ってたんで、データの大部分は移してあったのが不幸中の幸いなんです

とりあえず、ネットにつなげるようにノートにインストールやらやっ……何とかつながるようになりました

## 第221話・ゴイングマイウェイ

「私達が知らなかったとはいえ、或いは仕方ない部分があったとはいえ、不法入国になるのは間違いないのよ」

ナミが何かをこらえるような声で拳を握り締めながら言った。

「なのに、何でここに来るのよ、あんたは!!」

叫びつつナミが指差すのはエンジェル島ビーチ。

そう、あの会談を終えた後、ルフィはストローウィック号の進路をよりにもよって、エンジェル島に向けたさせたのだ。

この船は海軍所属であり、艦長はあくまでルフィ。

ルフィが決断すれば、船はそう動く。ナミが問題視しても、それが現実だ。

「え？だって、ここじゃないとあのウェイ何とかって奴直せないんだろ？」

心底不思議そうに返された。

「ああ、成る程。納得……出来る訳ないでしょうが!」

ズビシ、と思わず突っ込みを入れてしまったナミだった。

もっとも、それも当然の話だ。

エンエルという侵略者による恐怖政治が敷かれているのが、このエンジェル島だという。

無論、見た目は平和そのものだ。だが、もし一度自分達が不法入国者だと知らされれば……この地は敵地へと変わる。

そうなった時、自分達はエネルギーに従わされているだけの市民に対して刃を向ける事は出来るのだろうか……。

「って、あたしが真面目に考えてるのにあんた達は！」

ルフィは既に上陸して、遊んでいた。

ウソップは貝探<sup>タイアル</sup>した。

割と真面目なはずのコビーとヘルメツポまで降りていた。

「仕方ないですよ、ここまで来たらなるようにしかありません」

「悩むだけ無駄だ」

諦めて達観してただけだった。

コビーとヘルメツポの言葉に、はあ、と深くナミは溜息をついた。何だか、ここまで来ると悩んでいた自分がバカみたいだ。

「分かったわよ」

はあ、と1つ溜息をついて、ナミもまた白海へと降り立った。

「けど、不思議ね……」

雲として空に浮いているのに、こうして立って歩く事が出来るという現実。

木々が生え、人が生きていけるといふこの現実。

ルフィはといえば木の実を採取して、食べようとしていたが……硬くて歯が立たないようだった。

そんな時、音楽が聞こえた。

そちらを向くとハーブを奏でる少女が一人。



彼女はこちらに気がつく、笑顔で言った。

「へそ！」

これが空島での挨拶なのだが……ガン・フォールもそんな日常の事まで話してはいなかったし、シャンディアはそんな風習なぞに興味もない。

かくして、初体験でかまされたルフィ達は一斉に驚きの声を上げた。

「青海からいらしたんですか？」

「あ？ああ、下から飛んできたんだ。ここの住人なのか？」

話しかけられたルフィが戸惑いつつも、返事をする。

どうやら、先程ルフィが木の実に噛り付いたのを見て、ここの住人ではないと悟ったようだ。

ルフィが噛り付いた木の実の名はココナツシュ。

上の皮は鉄のように硬く、反面、裏側は柔らかい。ココナツシュは裏側の中心をナイフでくりぬいて、中身をジュースとして飲むのだという。

早速とばかりに飲みだしたルフィはといえば、その美味に感嘆していた。

それを聞いて、ウソップらも実を見よう見真似でカットして、中のジュースを飲んで驚きの声を上げていた。

「私はコニス。何かお困りでしたら、力にならせてください」

戦い方は教わったものの、この世界の一般常識に関しては、彼らは不足している事がまだまだ山ほどあった。

雲の加工などもそうだし、こうした木の実や空島の花もそうだ。それだけに見るもの全てが新鮮だった。が、同時にナミはここを良く知る必要がある事も理解していた。

ここは一瞬にして敵地となりうる場所。

その前提の上で行動しなければならぬ。それにはここでの常識を手に入れなければならない。

「おっすっげえ！」

「おお、こいつがダイアル貝かな！？」

……あいつらに任せておくとどうなるか分かったもんじゃない。

第221話・ゴーイングマイウェイ（後書き）

今年は呪われているんだろうか  
ふと、そう思ってしまう

元旦から食中毒

パソコンが不調に陥り

そして、今度は風邪引きました

いや、まあ……私の仕事は外での仕事なので、この寒空では引いてもおかしくないのは確かなんです……

寒いですよ

今年の夏は何時まで続くんだ！ってぐらい暑い日々が続きましたが

……

極端です

## 第222話・エンジェル島

間もなく、白海の向こうから一隻のウェイバーが戻ってきた。

「父上！へそ！」

「コニスさん、へそ！」

ルフィなどはまだ驚いているが、ナミらは既にこれがおそらく空島での挨拶なのだろうと薄々察していた。

所変われば品変わる。

ここは空の遙か彼方、雲に浮かぶ島なのだ。挨拶ぐらいで驚いていては仕方がない。

ちなみに、既にルフィだけでなくウソップやナミまでこの上空の薄い大気になれていた。未だ海兵達は慣れずに苦しんでいる者がいるというのに、だ。こちら辺、ナミも何だか言って家に染まったのだろう。

「やあ、お客さんですか？」

その人物はパガヤと名乗った。

気のいい人物で、白海きつての海の幸、スカイロブスターなど採れたのでご馳走しましょう、と誘ってくれた。

「そつかあ……悪いな、お前らー」

「……いえ、どうぞごゆっくり」「」「」

高度1万メートル。

この高度は我々の世界のエベレスト山頂より更に高い。

そんな高度へ一気に駆け上がったお陰で、酸素マスクなどを併用して、何とかここまで頑張ったものの、高山病に近い症状を起こして食欲なぞ到底ない、という状態の海兵達は一斉に手を上げて彼らを見送った後、力尽きた。

もちろん、こんな連中を放っておく訳にもいかない。

結局、責任感から居残りを選んだのはコビーとヘルメツポだった。ルフィはフリーダム以前に、住民に招待された以上は艦長たる彼が出向かないと失礼に当たる。

ウソップはどのみち戦闘という面では武装頼り。

この2人となると不安だからナミがくつついていく。

元・海賊の3人は彼らの命令系統には属していないから、メシに誘われたならついていく。

そんな感じだ。

さて、食事は美味かった。

原作と異なり、サンジはいなかったから、ナミが手伝った程度だが、素材が良い。

新鮮採れ立ての海の幸を用いた料理だ。

シンプルだが、豪快な料理の数々に皆、舌鼓を打った。

この間に、ナミはコニスと色々と話が続けていた。

既に、青海の出身であるという事は知られていたから、会話は弾む。

日常で用いられている様々な貝ダイアルにウソップ共々興味津々だった。

しかも、パガヤは貝船のエンジニアであり、マシラが引き上げた既に残骸といった方がいようなウェイバーも有難い事に修理してくれるという。

何だか悪いような気もしたが、この親子が非常に世話焼きで親切なのは理解していたから、ここは素直に感謝を受けておいて、後で何かお礼をしようという判断をしていた。

そんな時だった。

ルフィが突然立ち上がったのは。

「ルフィ？」

ナミが、ウソップがどうしたと言う意味を込めて問いかける。

ルフィからは明らかに戦闘の気配が立ち上っている。

まだ慣れているナミやウソップはいいが、特に戦闘などに慣れていないコニスとパガヤは冷や汗が伝っている。

だが、それを気にする様子すら見せず、ルフィは呟くように告げた。

「船が攻撃されてる」

次の瞬間、ルフィは空を駆け、ストローウィック号へと一直線に向かった。

……時はこの瞬間より少し遡る。

留守番を引き受けた者のする事もなく、海兵らを船室に運び込んだ後、後は未だ酸素マスクをつけたままのドクターに任せて、コビーとヘルメツポの2人は甲板でカードゲームをしていた。

「あ、くそ、腐ってやがる。ワンペアだ」

「じゃあ、僕の勝ちですね。スリーカードです」

それなりに長い付き合いだ。

楽しく遊んでいたが、そのまま黙ってカードを片付け始めた。

「何人だ？」

「10人は下りませんね。でも、歪んだ感じはしない……どちらかと言えば、僕らに近い」

コビーが読み取った彼らの思考には歪みはない。むしろ、憎まれようとも為すべき事を為す覚悟がある。

「つてそりややりにくいな」

ヘルメツポがぼやいた。

既に見えつつある彼らの姿は統一された制服に身を包んでいる。おそらくは、このスカイピアにおける何らかの組織なのだろう。こうして出てきた以上は治安に関わる組織か。

これが権力に溺れた横暴な連中ならば、叩きのめすのに躊躇はない。

だが、それが何らかの決意を持って、憎まれ役を引き受けているというような事であれば……それは一概に否定するのは間違っている。

「しゃあねえ、まずは話し合って……それでも駄目で、やりあう事になった時は多少手加減してやるか」

「ですね、なるべく怪我はさせないよう気をつけましょう」

そうして。

ホワイトベレー隊と2人は対峙する。

第222話・エンジェル島（後書き）

どうしても眠くて仮眠のつもりが気付けば朝

……やっぱり眠い時の仮眠なんてあてになりませんね  
起きれない



## 第223話 - 衝突

コビーとヘルメツポは白いベレー帽を被った男達と対峙していた。

「へそ！」

いきなりかまされた挨拶だったが、既にそれが挨拶なのは理解している分、困惑するだけで済んだ二人だった。

「いきなりどうも失礼します！見知らぬ船が停泊中と聞き、参上した次第！」

がつしりとした男性が先頭に立って、そう告げる。

その男の名をホワイトベレー隊長マツキンリーという。

「失礼ですが、そちらの船は青海から来られたのですな？天国の門からは青海からの入国者がいるという連絡は入っておりませんが」

マツキンリーはそう語りつつ、既に不法入国者なのだろうと察してはいた。

だが、問題はどうかやって入ってきたのか、だ。

この地に到達するには『天国の門』を通らねばならない。

しかし、アマゾンに確認を取ったが、「ここしばらくは船は通ってないよ」との事だった。……では目の前に浮かぶ船は一体何だ？ こうした大型船はこの空島では建造されていない。理由は単純で、青海同様の船を作るには大量の木材が必要であり、そしてこの空島で通常の木材は大地に生える……すなわち神の島にしか生えていない。

それを大量に切り倒して、など大事な資源でもある樹木が消えか

ねないし、そもそも空島は一つの雲の上にのみ広がる世界だ。

世界には他にも空島があるが、普段は空島は個別に独立した環境を持っている。何しろ、間に横たわるのが空だ。青海の海のようにちよつと航海して、という訳にはいかない。

つまり、青海のように大洋に耐えるだけの大型船を建造する意味合いに乏しい。この空島で必要とされるのは近海に出る為の足、近くの漁場で漁をし、<sup>タイアル</sup>貝を得る事が出来ればいい。それには通常のウェイバーで十分だ。

だが、時折こうして青海からの来訪者がある為、ミルキーウェイはこのサイズの船でも通れる訳だが……。

（個人レベルならばともかく、このサイズの船が上がってきた以上、何らかの大規模な道が用いられたのは間違いない。だが、そんな事が可能なのは……）

エネルギーではないのは間違いない。

エネルギー配下ならば、基本は天国の門を堂々と通過出来る。

シャンディアでもない。

シャンディアは確かに何らかの道を確保している可能性は高い、  
というかほぼ確定しているが、隠れて暮らしてきた彼らに巨大な運河を作れるだけの余裕があったとは思えない。

そうすると残るはただ一人。

（あなたが関わっているのか……？ガン・フォール様）

一方、コビー達も困っていた。

入国料を払えというが、空島の通貨は持っていない。

かといって、ベリーで聞いてもそんな大金は持ってきていない。  
どちらにせよ……。

「今、船長がいらないから決定を下す事は出来ない」

そう、ヘルメツポのこの言葉が示す通り、最高責任者であるルフィがいらない以上、勝手な判断で決定を下す訳にはいかない。  
出来る事があるとすれば……。

「そうですね……では、それまであなた方を拘束させていただきます」

「悪いがそれも認める事は出来ない」

マッキンリーの言葉ももつともだと思いつつも、拘束すなわちこの船に乗り込まれるのは拙かった。

色々と実験的ながら海軍の最新装備を取り入れている船だ。この世界に機密の塊のような場所へ他国の人間を入れるようなバカがいるというのか。

「……最終警告だ。いずれかを選択出来ないというのであれば……  
…実力行使となるが」

既に、ホワイトベレーの一同は臨戦態勢に突入している。  
これに対して、コビーとヘルメツポもまた臨戦態勢に入る。

「申し訳ないが……船長が戻るまではお断りする」

どちらも間違っではない。

だが、どちらも譲れないが故に、戦闘が始まった。

## 第223話 - 衝突（後書き）

賞に応募しようと思って小説かいてますが、そっちに時間とられま  
すね……

なかなか並行は大変です、ってかこっちを書く速度が大幅に落ちて  
しまいました……

## 大事なお知らせ

更新を一時凍結致します

あくまで凍結です

決して、「感想できつい意見が来て、書く気が失せた」とかではないので、その辺はご理解下さい

現在、私は某賞に応募しようとしてオリジナルを書いていきます

ですが、結果としてしわ寄せがこちらの作品により、影響が出てしまっています

もちろん、送ったら即賞確定なんて妄想は持っていませんが、やはり一度送ると決めて書き出した以上はきっちり完成させて送りたいと考えています

ですが、その為に、こちらの作品に影響が出続けています

更新速度が遅れるようになったのは、確かに元旦からの食中毒にパソコンの不調、風邪と重なったのは大きいですが、それ以外にもオリジナル作品の方にかかりきりになっていた面もあります

これまで仕事の合間に休憩がてら、こちらの作品展開を構築していたのですが、現在それが出来ない状態にあります

その結果として、こちらの「全てはある日突然に」の執筆は現状、他の時間を削って書いておりましたが、先だって内容が薄くなっているという旨の感想を頂きました

その意見に内心納得する部分があり、今後オリジナルが完成するまで合間合間を見ながら、短時間で構築した作品を上げていくか、それともオリジナルが完成するまできっぱりと一時凍結するかを悩んでおりましたが、この度、内容がスカスカのまま上げるよりは一時凍結する事に致しました

再開予定は、結果的にこの作品を開始し出した一年後になる5月頭からを予定しています

そこならば、完成した完成しなかったに関わらず応募は終了しておりますので……

続きを楽しみにしていただいている方には申し訳ありませんが、ご了承ください

書くのを止めた訳ではありませんので、当初計画していた完結まではきっちり終わらせるつもりです

## 外伝1「チョッパー日記」

月×日

今日、ワポルについてった人達がドラム王国に戻って来た。

船は真つ二つになってたけど、元々潜水可能な船だけあって半球のどちらも水密はしっかりしていたお陰でそのままでも沈まなかつたみたいだ。

驚いたのはワポルが死んだって事。

「よりもよって王下七武海に喧嘩売るとはね」

Dr.くれはがそう言っていた。

王を殺したりしたら、色々と面倒な事になるって聞いてたけど、大丈夫なんだろうか？

そう思ったけど、相手次第だって話だった。

「ワポルは確かに王だった。けどね、相手は王下七武海。鷹の目のミホーク。そいつ相手に海賊と名乗ったって話だからね。世界政府はワポルと天秤に載せるなら、迷いもしないよ。ミホークを取る」

ワポルの代わりは幾らでもいる。

けど、ミホークの代わりはない。そういう事だと言ってた。

「それより、これから大変だよ」

なんて言ってたけど、どついう事だろう？

月 日

今日、町でイッシー20の一人が殴り倒されるのを見かけた。慌てて駆け寄ったけど、町の人は顔見知りのやさしい人だった。オレの顔を見ると、気まずそうな顔でそそくさと立ち去っていった。

どういふ事なんだろう、と思つてたら立ち上がったイッシー20の人の足がふらついていたので、支えてどっかのお店に寄ろうかと思つたけど……。

「いいんだ」

そう言うので、仕方ないから壁に寄りかかるように姿勢を直してあげた。

「話を聞いてくれるかい？」

どこか聞いて欲しそうな様子だったので、黙つて頷くと、ぼつりぼつりと話をしてくれた。

……それによると、昔ワポルが国を支配していた時、あの人の奥さんが大きな怪我をしたらしい。その時にはもう、医者も追放されていたから、イッシー20に頼んできたんだけど、彼らはワポルから許可が出なかったから治療する事が出来ず、奥さんは亡くなつたらしい。

……悪いのはワポルだ。

けど、あの人が気持ちをぶつけるべきワポルは、もういない。だから、自分の姿を見た時、思わず抑えてきた気持ちが噴出したんだろう、とイッシー20の人はどこか寂しそうに言っていた。帰つて、DR・くれはに今日の事を話した。

「いいかい、チョッパー。あいつらは一度、理由はどうあれ信頼



を裏切ったんだ」

だから、今、それを取り戻す為に苦勞してるんだと。信頼というのは築くのは大変で、壊れるのは一瞬だ。けれど……。

「あいつらだって、分かってたはずだ。それでも、少しでも償いたい、そう思って戻って来たんだろう。今は我慢して、もう一度マインスになっちまった信頼を積み立てていくしかないのさ」

後日、イツシー20の人達は皆残って頑張ってるけど、他に戻って来た人達はもう、半分以上が再び島を去ったって知った。

島の人達の白い目に耐えられなかったらしい。

ワポルが作った傷はまだまだ癒えてないんだ、ドルトンさんはそう悲しそうに言っていた。

月 日

今日、新しい国の名前が決まった。

ワポルが死んだ事で、新しい国として再出発するんだ。

ドラム王国から脱出して、海軍に拾われて働いた人達も一部は戻って来た。

さすがに、全員が辞めて国に戻るってのは海軍が困るから、許可が出なかったらしい。

医者の人達も自分達が困った時に拾ってもらった恩があるし、やる事がまだまだあるのも事実だから、って事で順繰りに里帰りの形で戻ってくる事になったらしい。

それで、国の名前だけど、【サクラ王国】って決まった。

……ヒルルクの事が知られるようになって、彼はやぶ医者ではあ

ったけど、その医者としての信念は本物だった。

そんな彼が誰かを救う道へと踏み出したきっかけとして、再現しようとしていた花。

その花にちなんで、『もう一度この国が誰かを救う医療大国として踏み出す為に』、その花であるサクラの名前をつけたそうだ。

ちなみに、国王に選出されたのはドルトンさんだった。

けど、ドルトンさんは一代限りの王となるらしい。

『代々受け継ぐから、ワポルみたいな奴が出た時に止められないんだ』

ドルトンさんが王様に選ばれた時、引き受ける条件を言った際に言った事だ。

だから、前の王様が亡くなったら、その度ごとに次の王様を皆で話し合って決める事にしたそうだ。

「さて、そろそろ時間だ」

ドルトンさんが言った。

今、俺達は皆、島から少し離れた海上にいる。

……ヒルルクが遺した研究成果。

それを見る為に、今、俺達はここにいる。

やがて、島から何かが打ち上げられ……爆発した後、島に降る雪の色が変わった。

「わあ……」

綺麗だ。

思わず漏れた言葉だけど、皆、口々に感嘆の声を上げている。

雪をピンクに染めて、まるで島が一本の桜の木のように見える。

……それを見ながら誓った。ヒルルク、オレ絶対立派な医者になるよ。助けたい人に毒なんて食べさせたりする事がないように、ちゃんと助けられるように頑張る。

ヒルルクはオレの事責めたりしないだろうけど……。

そう思った時、先だつてのイツシー20の人の事を思い出した。そつか、責めてくれる方がまだ気が楽になるんだ。

逆に許してもらえた方が、相手への申し訳なさで胸が一杯になるんだ。

涙をこらえるオレに、くれはが満開の桜の木となつた島に視線を向けたまま、言った。

「チョッパ！ あんた、ハッピーかい？」

「ハッピーだ。ヒルルクの分も楽しんで、皆でハッピーになるんだ！」

にやりと、Dr.くれはが笑つたような気がした。

オレ、絶対、ヒルルクに何時か自分が死んで再会した時、「ハッピーだったか？」って聞かれた時、「ハッピーだった！」って断言出来るようになってやるんだ！

外伝1「チョッパー日記」(後書き)

息抜きで一気に書き上げた外伝です

たまに、息抜き感覚で書いてみようかな……って思ってます

次に書く予定のはアリスが出るかな

……まあ、応募用のが順調に進んだ場合なので、二週間は先になるかと思いますが……

## 第224話 - 怒り (前書き)

宣言通りの復活第一話です

……少しずつ感覚を取り戻していききたいですね

## 第224話 - 怒り

ホワイトベレー隊の攻撃はミルキーダイアルを用いた雲の道を形成する事から始まる。

ウェイバーによつて高速でそこを駆ける事によつて、あたかも空を駆けるかのような機動を見せるのだが。

「【剃】！」

「【鉄塊】！」

回避を重視するか、攻撃を重視するか。

それぞれの性格が出たとも言えるが、コビーは瞬時に目に見えぬ程の速度で移動。

一方、ヘルメツポは回避せず攻撃を受け止める。

まともに食らいはしたが、鉄の塊並の強度を誇る【鉄塊】を抜ける程の猛者がいるはずもなく、敢え無くはじかれた所へ、ヘルメツポの一撃が入る。

ヘルメツポはククリに似た大型ナイフを用いるのだが、これはその性質上片刃だ。逆に言えば、峰打ちが出来る。

「ふっ！」

一撃、二撃。

一撃を加え、その勢いで回転するようにもう一撃。

それで二人のホワイトベレーの意識をまとめて奪つ。

片方はヘルメツポの視界からすれば死角に位置していたのだが、まるで見えているかのように正確に叩き込まれた。

コビーも負けてはいない。

瞬時に【剎】で相手の視界外へと離脱し、【月歩】で空を駆け、相手の内懐へ。

手加減して普通の蹴りを放ったが、【剎】や【月歩】を身につけた脚力は凄まじい。

特に技として放った訳ではない普通の蹴りでもホワイトベレー隊を軽々と吹っ飛ばした。

「ぐ……」

マツキンリーは呻き声を上げた。

強い。

ホワイトベレー隊も決して弱い訳ではない。元々、先代の神ガン・フォールに仕える部隊だったのだ。実力で言えば、このエンジェル島を擁する島雲でも有数のものだ。

だが、それが一蹴された。

今の動きを見れば分かる。おそらく、いや間違いなく自分が出た所で勝てまい。

(拙い)

そう思う。

如何に彼らが強いとて神エネルギーに勝てるとは思えない。

そう簡単に勝てるならば苦労はしない。

どうする、どうする……。必死に考えるマツキンリーだったが、答えは空から降ってきた。

閃光。

轟音。

空から降り下る天槌。その名を雷という。

それは。

倒れ付した、すなわち敗れたホワイトベレー隊を狙い。

空が光った瞬間、そこに入り込んだ人影がホワイトベレー隊をその場から放り投げ、ただ一人残ったその相手を直撃した。

「ルフィさん!？」 「艦長!？」

コビーとヘルメツポが叫ぶ。

確かに彼らの目が間違っていないければ、直前に駆け込んだのは海軍大佐モンキー・D・ルフィだった。

一瞬、動揺した彼らだったが、地面を打った余波で舞い上がった煙が収まった時、そこには無傷のルフィがいた。

色々な意味で驚愕するホワイトベレー隊とエンジェル島の住民達。彼らはエネルギーの雷を受けて、立っている人間など初めて見たからだ。

海軍の方はといえば、そこまで驚いてはいないが、ほっとした様子だった。いかに信じてはいても、やはり雷の直撃など見ては、不安にもなる。

が、皆が皆、顔を強張らせた。

それはルフィから漂う気配であり、その表情。

普段は飄々とした、どこか抜けた表情を浮かべているルフィが、怒っていた。

すう……と大きく息を吸ったルフィは次の瞬間。

「え〜ね〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜!!!!!!!!!!」

神の島 アッパーヤードに向け、周囲にいた人間が振動を感じる程の怒声を放っていた。



## 第224話 - 怒り (後書き)

お久しぶりです

まずは復活第一話をお届けします

オリジナル小説は何とか完成……

東北大震災の影響で延期があったので、あらすじはこれからゆっくりと……

以前は毎日更新してましたが、しばらくは数日に一話程度で重ねていく予定です

……時間がないと焦るんですよ、本当に

何より、しばらくこちらの作品とは間が空いてしまったので、少しずつハリを兼ねて作品を上げていく予定です

## 第225話 - 挑戦状

「ヤハハハハ……所詮ガン・フォールの手下、この程度か」

神の島。

そこに生えるジャイアント・ジャックの上にある神の社。

そこに座しながら、神エネルギーはエンジェル島で起きている事象を把握していた。

（ふむ、ホワイトベレーが敗れたのは良いとして）

どのみち、エネルギーはホワイトベレーなどに重きを置いてはいない。彼らが何を考えて自分の側についたのか、内心で何を考えているかも知っている。

そもそも彼らが敗れたとて、別に四神官が敗れた訳ではない。

今回、雷を降らせたのも、懲罰という面が強く、威力という面では手加減している。

神の真似事をするのならば、情けをかけてやるのも神の仕事の一つと理解しているからだ。もっとも、雷の直撃を受けた者が慈悲を受けたと考えるかは甚だ疑問ではあるだろうが……。

（解せんのはあの男だ）

仮にも雷の直撃を受けた、そのはずだ。

脅す為、懲罰の証の為、下民達が恐れ逃げ出す時間を与えてやる為と色々あるが空を光らせるのと、雷を落とす間には僅かながらタイムラグがあった。

その一瞬で、ホワイトベレーの面々を直撃する場所から放り投げたのは見事と褒めてやろう。だが……。

（何故あの男、私がホワイトベレーを狙うと分かった？）

普通は自分の船、或いは部下が狙われたと考えるのが普通ではないだろうか？

そして。

（何故あの男、雷を浴びても平然としている？）

如何に手加減したとはいえ雷は雷。

死にはしなくても、かなりの火傷を負うのは必定だった、はずだ。だが、ルフィと周囲の人間は呼んでいたようだが、彼は無傷でそこに立っている。

「……奴も心網マントラの使い手、か？」

その呟きは小さく、周囲に……普段のどこか陽気なエネルギーとは異なる薄く笑みを浮かべたエネルギーに怯える者達が聞き取る事はなかった。

エンジェル島では誰もが硬直していた。

ホワイトベレーが雷に狙われた、というのもある。

だが、それ以上にエネルギーを呼び捨てにした人間に誰もが驚愕していたのだ。

しかし、しばらくすると、一人がまた一人が、と次々と怒声を浴びせた。

「おい、何て事を……！」

「そうだ、ホワイトベレーに手を出す事も問題だが、よりよつて神の名を呼び捨てにするなんて……」

だが、そんな声を上げた人々も未だ怒り冷め遣らぬ様子のルフィがじろりと睨むと、「う……」と呻き声を上げて、次々と沈黙していった。

彼らは結局の所、怖いから逃げているだけだ。だから、こうして強者を前にすれば、何も言えない。

それが悪いとは言わない。勝てないものに勝負を挑むのは愚か者か、それとも勇者かのいずれかだ。

だが、同時に挑まない者に勝利が訪れる事もまた、決してありえない。

そして、ある意味愚かで、だが立ちはだかるものを粉碎してきた勇者でもあるルフィは大きく息を吸い込み。

「エネルギー！俺と勝負しろお！！！！！！！！」

周囲の大気がビリビリと震える程の大声で吼えた。

無論、その内容にはエンジェル島の住人だけでなく、ホワイトベレー、いやコビーやヘルメツポですら「ええええええええええ」と驚愕の表情で叫んでいたが。

「…………ヤハハハハハハハハハハ！！！！」

その声をエネルギーは間違いなく聞いていた。

無論、周囲は何故神エネルギーが突然上機嫌にも見える様子で笑い出したのか、その事情は分からない。分からないが、何かを神が知ったのだという事は察していた。

だが、その直後。

笑いを収めた神エネルギーが天井を向いていた顔を正面に戻した時。その顔を見た者は一斉に顔を強張らせた。

その顔は言うなれば目が笑っていない。無慈悲に正に神の如く、蹂躪する暴虐。その表れだった。

「神官どもを呼べ。神兵どももだ」

腕を振りつつ、その腕から激しい雷を放ちつつ、エネルギーはそう告げた。

そして、その雷はエンジェル島では天より振り下る雷となって現れた。

ただし。

まるで道を示すかのように、ルフィの眼前に一発着弾した雷はそのまま神の島へと一直線に落雷していった。まるで、こちらだと、道を示すかのように……だからこそ、その光景を見た者は皆悟らざるをえなかった。神が挑発を受けたのだと……。

## 第225話 - 挑戦状（後書き）

多数の感想ありがとうございます！

頑張ってまたコツコツと書いていきたいと思えます

よろしくお願いします

## 第226話・ホワイトベレー

「待ってくれ！」

ホワイトベレー隊長マツキンリーは船に乗り込もうとするルフィに叫んだ。

ルフィらの周囲に人はいなかった。誰もが神エネルギーに喧嘩を売った彼らから距離を置く中、一人飛び出してきたのが彼だった。

「何故私達を庇った!？」

自分達は彼らを襲撃した敵だったはずだ。

だが、彼は自分達を迷う事なく助けた。

助かったんだから、いいじゃないか。そう思う者もいるかもしれない。だが、マツキンリーはそう思えなかった。責任感の強い男だからこそ、結果良ければ全て良し、で済ませる事が出来なかったのだ。

だが、ルフィの答えは。

「だって、お前達の心、ずっと悲鳴を上げてるじゃんか」

そう、あっさりと告げられた言葉にホワイトベレーの誰もが言葉を失った。

「嫌われても、恐れられてもいいから、一人でもエネルギーに殺される人を減らしたい、お前達の心、ずっとさそう叫び続けているじゃんか」

元々ホワイトベレー隊は神隊の一つ。

先代神ガン・フォールに仕える者達だった。だが、ビルカより襲来した神エネルとその配下達によって、先代の神が敗れた時、ホワイトベレー隊は神エネルに仕える道を選んだ。

命惜しさからではない。

エネルの恐ろしさは存分に理解した。

自分達では彼どころか、その配下の神官達にさえ勝てないという事も十分に理解した。

それはすなわち、エネルの気まぐれが起きれば、それに抵抗する事さえ出来ないという事。

そして、エンジェル島の住人ではない彼らが、この島をどのように統治するのか……もし、彼らが思うがままに動き出した時、どのような事になるのか。

それが恐ろしかったからこそ、彼らは神エネルに膝を屈した。

自分達というわかりやすい暴力が目の前であれば、エンジェル島の人達もエネルに反抗しようとする前に自分達に怒りを、憎しみを向けてくるはずだ。

例え、神に対して反抗しようとも、その前に自分達がその相手を打ち倒せば、殺されずに済むはずだ。

そう思ったからこそ、耐えてきた。

「だから、俺はお前らがみつともないとは思わない。だから、お前らは守るべきだって思ったんだ」

その背後では同じく見聞色の覇気に長けたコビーに、こっそりへルメツポが「そうなのか?」「ええ」と言ったやり取りを交わしている。

「お前達は……」

エンジェル島の他の人々が今のルフィの発言を聞いてざわつく中、



心網の使い手なのか。そう問いかけて、やめた。  
代わりに一つ頭を振って別の事を聞いた。

「お前達は神の島へと向うつもりなのか」

「ああ」

気負いもなく、あっさりとした答えが返ってきた。

「なら、貝船を持っていくといい」

貝船は元々、罪人を乗せる為に、騙して乗せる為に、それ専用のものが用意されている。

普段はこれに騙して乗せるのだが……。

「逆に言えば、これに乗れば、自動的に神エネルギーの所まで、そしてその神エネルギーの配下であり、壁となる四神官の試練の所へと運んでくれる」

襲撃を受けるといふ事は逆もまた然り。

こちらから攻撃を仕掛けようというのならば、向こうからわざわざバラバラに姿を現してくれる、という事になる。

無論、逆に相手のフィールドに自分達から突っ込んでいくというデメリットもあるのだが。

口にする事はない。

心で呟いた所で、心網で神エネルギーに聞かれているかもしれない、いや、聞かれているだろう。だが。

(知った事か)

自分達はしたくて、神エネルギーに従っている訳ではない。

いや、エンジェル島の住人と同じだし、エネルギーもそれは理解しているだろう。誰もが理解した上で、それでもどうしようもないと諦め続けてきた現状。誰もが勝てぬと喧嘩を売るところか、立ち向かおうと考える事さえごく僅かな例外……噂にある先代の神ガン・フォールやシャンディアの民を除けば、心を折られ続けてきた。

それに、今やろうとしている事は神エネルギー自身が命じていた事。別に違反している訳ではない。

話を聞いて喜んで貝船を受け取り、出航してゆく海軍の船。それに向ってマツキンリーは立つ、と背後に気配があった。ふと振り向けばそこにはホワイトベレー隊の一同。

「お前達……」

自分がやろうとしている事に巻き込む事になるかもしれぬとさがる事を命じるが、誰もが引かない。

ニヤリと笑って、そのまま立ち続ける彼らに、マツキンリーもふと口元を緩め、改めて神の島へと向う船へあらん限りの大声で叫んだ。

「へそ……!!」

どうか無事に帰って来いと、祈りを込めて叫ぶ。

その背後で、ホワイトベレー隊の全員が一斉に一糸乱れぬ行動で同じく叫んでいた。

それに気付いたルフィもまた、にかつと笑って叫んだ。

「へそ……!!」

第226話・ホワイトベレー（後書き）

感想いつもありがとう！

なかなか余裕が取れない為（∵GW中も仕事なのです、トホホ）、  
返信が出来ませんが、全部読ませて頂いてます

……本当に感想は続きを書く為の燃料です  
そう思います

## 第227話・集う者達

「ん？ああ、分かった。俺も行くぜ」

シャンディアの隠れ里。

そこに残っていたモンブランは会話の途中でかかってきた電伝虫に、相手に断ってから出た。

しばらく会話していたが、最後にそう言って電伝虫を切った。

「どうした、おやつさん」

既にマシラやショウジヨウも傍に来ていた。

その二人に、ルフィからの……途中からナミに変わったが、そこから連絡を伝える。

すなわち、神エネルギーにルフィが喧嘩を売り、それを神エネルギーが買ったと。

「行くのか？」

その声を掛けたのはワイパーだった。

「ああ。何だかんだで仲間になった相手だ。何が出来るかはわからねえが、だからって残るのは御免だ」

で、お前らはどうする、との確認に。マシラもショウジヨウも俺達も行く、と即座に返事を返す。

その言葉を僅かに口元に笑みを見せながら聞いていたワイパーもまた。

「そうか、なら神の島で後で会おう」

そう囁くワイパーの背後ではシャンディアのメンバーもまた立ち上がり、武器を用意していた。

カマキリが槍の刃を確認し、ブラバムが銃の調子を確認する。ゲンボウが鉄の砲弾の弾数を数え、ラキも銃弾の確認を行う。そう、それは彼らもまた出撃するという意味。

分かったからこそ、クリケットもにやりと笑みを浮かべた。

「だが、いいのか？自然系はお前さん達の武器じゃ……」

ここにいる間に空の戦いを教えてもらう傍ら、自然系悪魔の実について話をしていた。

動物系ゾオン、超人系パラミシア、そして自然系ロギア。

この内、動物系はまだ分かる。

彼らは動物の力を得る実であり、身体強化に関しては目覚ましい上に、それぞれの動物の持つ特殊な能力も得る事が出来るが、逆に言えばそれまでだ。変身すれば追加された能力には予想がつくし、全く関係のない異質な攻撃を繰り返してくる事はない。

超人系は何を仕出かすか分からないが、まだ何とでもなる。

面倒なのは自然系だ。

彼らには槍も効かない。銃も効かない。

そのくせ、それぞれの特性にあったとんでもない攻撃を平然と繰り返してくる。

これらが無効化するには大きく分けて四つ。

一つは覇気。

一つは何かしら一つ持つ弱点での攻撃。

一つは海に浸ける。

一つは海楼石を用いる。

主だったのはこの辺りだ。

この内海はどうにもならないから、可能性としては残る三つ。  
更に覇気は覚えようと思っただけで覚えられないようなものでもないから、これも却下。

弱点は雷なら推測としてゴムの可能性があるとは分かっていたが、空にゴムはない。

後は海楼石だが……。

これに関してはワイパーは黙り続けていた。

理由は簡単だ。神エネルギーには心綱がある。自分一人を選んでわざわざ海楼石の事を考えている時を狙って思考を読み取るという偶然の可能性は低いだろが、もし、シャンディアの人間が全員知っていたとしたらどうだろうか？

『ワイパーの海楼石があれば！』

『ワイパーの海楼石まで奴を引きずり出すんだ！』

こんな事を考えてしまう者は多いだろう。

そうなれば、奇襲効果は激減してしまう。敵を欺くにはまず味方から。ワイパーはそれを徹底して実践していた。だからこそ。

「分かっている。だが、俺達も何もしないではいられん。……せめて神官どもぐらいは討ち取ってくれるさ」

声に出してはワイパーはそう告げるのみだった。

そうして。

戦う気概を持つ者全てを巻き込み、急速に戦火が起きようとしていた。

第227話・集う者達（後書き）

雨が降ると鬱陶しいですね

私は現在の仕事の外なので尚更……

オリジナル完成して印刷も終了

……とはいえ明日も雨なんだよなあ。濡れると嫌だし、明後日……

あ、穴あけて綴じてなかったや

## 第228話 - 覚悟

「で？」

一度海軍の軍艦とやらにクリケットを送りに行っていたラキが戻って来た。

それはいいのだが、彼らから一つの物を受け取ってきた。

その名をゴム手袋、という。

确实ではないが、エネルギーに有効な可能性があるという。

自然系ロギアの能力者も、何かしらその力が無効化される条件があるという。

砂ならば液体に濡らす事でその能力を無効化出来るし、それは雷とて同じ事。

では、雷を無効化するのは何かと問われたならば、ゴムではないかという。

実の所、ウソップが確信を強めたのは、エネルギーの雷にルフィが無傷だった事だ。ルフィは仲間内では言わずと知れたゴム人間。間接的ではあってもそれがエネルギーの攻撃に耐えた……。

そこで、ウソップ、船にあるゴム手袋を取り出したのだが、案外これが少なかった。

正確には薄手の奴ならもう少しあったのだが、それなりに荒っぽい扱いに耐えれそうな厚手のものとなると僅かに五つ。

この内、当初はルフィらに渡す事も考えたが、結局受け取ったのはヘルメツポだけだった。

ルフィ曰く「俺はいらない」



「コビー曰く「僕も自然系相手でも一応戦えますから」

この二人は覇気使いだから当然だった。

かといって、一般の海兵では自然系の相手など無理だろうし、船を護る任務も必要だ。

ナミはそこまで戦闘に長けていないし、ウソップは接近戦闘の経験などろくにない。

結局、クリケットに一つ渡し、残る二つをシャンディアに譲ってくれた、という事らしい。これで冒頭に戻るが、それで「で、誰が持つ？」という事だった。

「一つは確定だな」

ワイパーに持たせる。

これは全員に異議はなかった。  
問題はもう一つだ。

「俺はいらん」

ブラバムが腕組みをしたまま言った。

「俺は見ての通りの銃使いだからな。今更手袋を渡されても有効な使い方は出来ん」

「なら私もそうね」

と、ラキが続いた。

彼女も長銃の使い手だ。無論、二人とて接近戦闘がこなせない訳ではないが、矢張り距離感覚というものが非常に重要な接近戦では普段、長射程の武器を使っている二人には合わない。

「なら、俺もやめておこう」

これはゲンボウだ。

彼も鉄を使ったバズーカを使うというのもあるが、同時に手が他の者に比べて大きい、というのもあったようだ。ある程度伸び縮みするようだが、無理に手を突っ込んで破れました、というのは怖い。

「となると……」

ふっと全員の視線が一人の男に集中した。

ん？という様子で彼は周囲を見回し……「俺？」と言わんばかりに指差した。それに全員が黙って頷く。

「いいのかよ、俺で」

そう言ったのはカマキリだ。

他のメンバーに、という声が上がらなかったのは、やはり今上げられた面々が実力的に、現在のシャンディアの戦闘員の中でも頭一つ抜けている、と皆が認めているからだ。

無論、カマキリも素手戦闘を行う訳ではない。彼の獲物は槍と貝ダイアルによるものだ。

だが……。

「使っておけ。俺らが使うよりはまだマシだ」

ブラバムが調整が終わったのだろう。くるくると銃を両手で回し、ホルスターに納めた。

カマキリもそれ以上は言わず、自らの両手に嵌める。

「……少なくとも、武器が滑りにくいのは確かみたいだな」

ワイパーは……現時点ではつけないようだ。

それを疑問に思う者はいない。彼は普段、掌に衝撃貝を仕込んで、バンテージで固定している。

下手に今着用して、手袋が破れるのを嫌ったのだらうと察したからだ。

「さて……皆」

さて、出るか、という段になってワイパーが口を開いた。

その声は重い。

「今回、俺はエネルギーの首を獲りにいく」

今回は好機だった。

これまで正体不明だったエネルギーの力の正体も分かった。出来る事ならば自分達で討ち取ってやりたいが、海軍とやらの力を使う事も出来る。

はつきり言ってしまうえば、ワイパーもそうだが、シャンディアの人間は青海の、海軍を信用している訳ではない。だが、その力を使う事は出来ると理解している。

大事なのはエネルギーを倒す事だ。

青海の人間はやがて白海からいなくなる。

黄金の鐘を奪いに来た訳でもない。ただ、その音色を聞きたいだけだと彼らの責任者が明言した。

ならば妥協しよう。

「いいか、これは千載一遇の好機なんだ。……誰か倒れても、俺が倒れようが、今隣にいる奴が倒れようが……引くな」

妙な言い方だが、これまではどこかで引いてきた。

一定以上の損害だったり、予想外の奇襲だったり……だからこそ決着がつかないままに、双方が倒れる事なしに、これまででずるずると何百年も続いてきた。

必要なのは終わらせる覚悟。

そう言わせたのはどこかで……本当にワイパーのどこかで勘が今回を逃せば、エネルギーを倒す事は不可能になると囁いていたからだった。

「行くぞ」

どこまで仲間達がそれを認識しているのかは分からない。だが、ワイパーは覚悟と共に。武器を手に立ち上がった。

第228話・覚悟（後書き）

疲れが溜まってる

それを実感する今日この頃です

本当に何かをしようとする気力が最近湧いてこない……

## 第229話・試練に舵を取れ

「これをこうして……」

貝船。

都合四隻積み込まれたその一隻をウソップが弄っていた。

「なにやってんだ？」

興味津々に覗き込んでいるのはルフィだ。

何しろ、既に貝船は原型を留めていない。

「改造だよ。俺はお前ら程生身で強い訳じゃないからな」

今回エネルの社に向かうメンバーは決まっていた。

ルフィ、コビー、ヘルメツポ、そしてウソップ。後はクリケットら三人が加わる。

ナミは知識はともかく、戦力としては一段劣るし、海兵らではルフィらと比べるべくもない。

ウソップも決して弱い訳ではないが、矢張り、ルフィらと比べると一段以上劣るのは否めない。それをカバーするのは彼の装備だ。

伊達に（自称）世界最高の頭脳であるDR・ベガパンクの弟子をやっていない。

「ま、細工は流々、つてな」

……

「……で、なんで俺の船に三人全員なんだよ!？」

いざ揃って神の島へ乗り込む段になって。  
ウソップの貝船にはクリケットに、マシラ、シヨウジヨウの三人もでん、と乗り込んでいた。

「しょうがないだろ、お前の船が一番大きいんだから」

というのが実は事実だったりする。

ウソップの改造した船は一際大きい。

他の船も決して小さい訳ではないが、もし第三者が見たら、これが同じ船だったとは思えないだろう。それぐらいサイズも何もかも異なる。

その結果として、ルフィらがそれぞれ一隻ずつ。

ウソップの船に四人という配分になっている。

もっとも、ウソップもぶつくさ言いながらも反論しないのは、理解しているからだ。

……すなわち、実力的に一番低い四人をまとめているのだ、という事ぐらいいは。

武器を確実に使えるかどうかは分からない。

かといって、他の三人と組んだのではコンビネーションも何もあったものではない。

必然的にクリケットら三人は組ませた方がいいのは間違いなく、そうなる元より巨漢の二人が加わっている以上、積載量に余裕があり、一番生身では弱いウソップの船に、というのは当然の話だった。

もちろん、そこ等へんはマシラとシヨウジヨウはともかく、クリケットはしっかり理解している。

「ま、すまねえが、よろしく頼むわ」

ぼんぼん、とクリケットがウソップの頭を軽く叩いて言った。  
ウソップも溜息を一つついて、それ以上は何も言わなかった。

既にウソップが貝船を解体した際、中にほぼ自動で動く仕掛けを  
発見していた。

今回はこれをそのまま活用する……ただし、こちらの指示で停止  
出来るよう弄ってはあるが。

「じゃあ、皆」

乗り込み進んだ所で、ルフィが周囲を見渡す。

既に貝船は動き出し、分岐点が見えてきた。

コビーは鉄を選んだ。

ヘルメツポは沼へと進んだ。

ルフィは紐へと。

そして、ウソップらは玉へと。

それぞれが進路を取った。

「皆！」

ルフィが進路を変えた船の上で声をかける。

「エネルの所で会おう！」



第229話・試練に舵を取れ（後書き）

いよいよ出発です

それぞれが試練にこのように舵を取りました

さて、戦闘は……誰から書くべきか

いやまあ、一人戦闘ない奴もいますが

## 第230話 - 秘めた決意

高速で森の中を駆け抜ける者達がいる。

ルフィ達ではない。ウェイバーの使い方を知らない彼らは貝船でのんびりと雲の道を進んでいる。

では何者なのか？

その答えは一つではない。

島の外からはシャンディアが、島の中央からは神兵が。それぞれを指して動きつつあった。が。

最初の戦闘は彼ら以外から始まった。

「油断するな」

そう口にするのは正しい。

だが、実践は難しい。

目前に対峙する敵がいるならば、それも可能だろう。

だが、目前に脅威も何もなければ、常に緊張し続ける事は出来ず、結果として油断する。

けれどもそれは悪い事ではない。

常に緊張し続けるという事は余計な疲労を招き、状況を悪化させる。新兵などが戦場に初めて出た折、緊張して眠れない、緊張しすぎてまともに動けない、緊張で敵を見間違えるといった事は決して珍しい事ではなく、適度に緊張を緩める事が出来てこそ一人前の戦士だと言える。

だが、もし、そこが。

何もいないと思っていた場所は、蜘蛛の巣であり、敵は静かに彼らを見続けていたとしたらどうだろうか？

きつと彼らは本当に美味しい獲物に見えたはずだ……。

それに気付いたのはシャンディアの先頭近くを走っていたカマキリをはじめとする一同だった。

『体が動きづらくなっている？』

何かが引つかかったようなそんな感触。

かすかな違和感に気付いたのは、彼らが優秀な証だったが、今は高速で移動している真つ最中だ。警戒を呼びかける事を考えた者もいたが、目の前に敵が来たのならばともかく、何も見えない状況でそれを発する事は自身が臆病者であるようで躊躇した。

結果から言えば、それに気付いた時には手遅れに繋がった。ぎしり、と。

突然そんな音を立てたかのような錯覚と共に全員の体が空中で停止した。

「なんだ!？」

誰もが叫ぶその中で。声が響いた。

「クカカカカ……ようこそ、シャンディアの諸君。……間が悪かったな。この神の島、少々前に状況が変わった……場所が変わってな。一足先に俺の試練は張り終わった」

既に幾度か戦ったが故に、その声の主の正体に気付いたシャンディアは、その結果として現状自分達が陥った状況も把握した。

「紐雲か……!」

見えない程に細く、けれど鉄のように強靱な紐のような雲。

それを島の入り口から手繰り寄せてきたとなれば、動けなくなる

のも道理。

一本一本は細くとも、束となれば鋼鉄のワイヤーロープにも匹敵する紐雲に絡まれれば、それは如何に屈強な戦士といえど、身動きが取れなくなるだろう。

「ああ、シャンディアの諸君。荒い歓迎を許したまえよ？そう、紐雲だ……それをお前らはご丁寧に自分の体でかき集めてきた訳だ……動けまい」

ここで、神官シユラは言葉を区切り、武器を構える。

「ただ一人を除いてはな！」

かつと目を見開き、空へ舞う。

その視線の先にある姿はワイパー。ただ一人違和感に気付いて、咄嗟に進路を変更した男だった。

空を舞いながらバズーカを放つ。

だが、舞う鳥フザの機動はそれを易々とかわす。

「馬鹿め！空で俺に敵うか！」

実際、シユラの戦闘力は空という分野に限れば高い。

高機動戦闘で真つ向立ち向かえるとしたら、射程の長い鉄の試練のモーム神官か、先代の神ガン・フォルぐらいのものだろう。

……ただ、それだけに油断したとしか言いようがない。

突き出されるヒートジャベリンだったが……無造作にワイパーは武器も盾も捨てた。

それが予想外で結果として、シユラはその穂先の狙いがずれ、ワイパーの肩口を貫いたに終わった。

ワイパーの狙いは『肉を斬らせて骨を絶つ』。

「馬鹿め、衝撃員などで俺が……！」と喚くシユラに構わず、排撃員を作動させる。

衝撃員の十倍に達するその一撃を受け、シユラは落ちていった。

「悪いが、お前一人に付き合っている暇はない」

排撃員。

ワイパーの狙いはそれに意識を向けさせる事にある。

周囲が排撃員を使った彼を非難する声を聞きながら、ワイパーの狙いは己で決着をつける事に意識を向けていた。

確かにクリケットとの出会いで、彼は譲る所は譲った。だが。

クリケットの子孫と出会えたからこそ、彼らがシャンディアの事を忘れず戦い続けて、ここに辿り着いたからこそ。ならば、シャンディアたる自分達も彼の一族との約束を、鐘を鳴らすのは己の力であらねばならぬと思うのだ。

その為に障害となるのならば……神をも倒してみせよう。

その覚悟を持って、ワイパーは口に出すのは「これぐらいやらなくて、こいつら神官が倒せるたまか！」と怒鳴るだけで済ませた。そう。

シャンディアの誇りにかけて、誓いにかけて。

大戦士の子孫である自分が鐘を鳴らしてみせる。

自分の命を賭けても、だ。

第230話 - 秘めた決意（後書き）

ストレス溜まる日々です……

何もかも放り出せたら、気楽だろうなあ……  
そんなのやりたければ、ジャンボ宝くじの一等でも当たったらんと無理  
でしょうが

## 第231話・玉の試練1

玉の試練。

それは神官サトリによって管理される玉雲漂う試練である。

もつとも、入り込んだ人間達にとつてはどうにも緊張感には欠ける光景だ。

何しろ、一見した限りでは森の中を抜ける雲の道のあちらこちらにふわふわと丸い雲が漂う、という光景が広がっている。危険、という印象は沼雲などに比べ、低いだろう。

洞窟を抜けていきなりの落下に全員が慌てたが、すぐに着雲して一安心。

現在は船に任せて進みつつ、周囲を見回していた。

「こいつが玉雲か……」

ぼんやりとウソップが周囲を見回す。

他の三人も周囲を興味深そうに見回していたが……。

「何か食えそうな雲だな！」

近くによつてきた雲をいきなりマシラが掴もうとした。

誰かが止める間もない早業だったが、途端に雲が割れ、中からは……。

「ウホ!？」

妙に大振りのバナナが出てきた。

でかい、何しろ地上の倍以上の大きさだ。

が、疑問に思う様子もなく、マシラはといえば早速皮を剥いて食

べだしている。

それを見て、シヨウジヨウも手を出すが……。

「うおっ！？……は、ハラハラするぜ。すまねえ、おやっさん」

「油断するな。ここは既に敵地だ」

飛び出してきたのは蛇だった。

噛み付こうとしたが、咄嗟に動いたクリケットが蛇を叩き落す。

「……………なんだ、この雲は？」

「ほっほほーう。何が出るかはお楽しみ。その雲の名は『びっく  
り雲』」

クリケットの呟きに答えるように新たな声が響いてきたのはそんな時だった。

「ほっほほっ。へそ！」

その視線の先には玉のように丸い体型をした男が一人。  
その名は神官サトリ。

「よくぞ我が玉の試練を選んでくれた」

その態度からは至極親しみのある様子を崩さない。  
無論、今回の連中がどういう相手かはサトリも理解している。彼  
らは神エネルギーに喧嘩を売った男の仲間であり、きつちりと始末しな  
ければならない。

だが、同時に大勢で袋叩きにするという道も選べなかった。



神たる者として、あくまで神罰を下すと悠然たる態度で行う事が求められていたからだ。

これが彼らがシャンディア同様に一丸となって攻め寄せてきた、というならばまた話は別だったが、彼らはあくまで一部の代表が試練に挑み、それを突破するという形を取ってきた。海軍側からすれば、コースが分からない故の選択だったが、こうなるとエネルギー側としても神の面上試練で応じざるをえない。急遽変更していたコースも戻したが、その過程でシャンディアが突入。結果的に神官シユラが落とされ、戦力として準備されていたが、試練を戻した結果浮いていた神兵と戦闘に突入した。

本心では神官らも「軍隊として突入してくればいいものを」と思っていたのだが……それだけに、こうして外見上は余裕を保っていても彼らの内心には焦りがあった。

まあ、そうは言っても、あくまで神の手をわずらわせる事になつては、という事であり、神エネルギーが敗れるなどという事は心配していなかったが。

びつくり雲が面倒なのは何が出てくるか分からない事だ。

しかも、入っているのは自然に入り込んだものばかりではなく、仕掛けられたものも混じっている。

これに、サトリ自身の攻撃が加わり、玉の試練は完成する。

「衝撃貝！」

動きを先読みされて、直撃を喰らったマシラが吹き飛ぶ。

「くそ……！」

「ほう、銃か」

ウソップが貝船に取り付けた武装を発射するも、避けられる。

「なら、こいつでどうだ！ウソップ・ロケットランチャー！！」

ガシヤリと船の側面が開く。

そこから発射される多数のロケット弾がサトリに襲い掛かるが…

…。

「遅い遅い」

元々ロケット弾はその性質上、初速が遅い。

かといって、人間サイズの追尾能力などある訳もない。……いや、ベガパンク自身の最新作を探せば、どっかに転がっているかもしれないが。

確かに威力は高かったし、直撃を喰らった樹木が折れ砕けてゆくが、当たらなければ意味はない。

「くそ……見聞色の覇気はやっぱり厄介だぜ……！」

ウソップはその力を持つ相手との戦闘経験がない。

理由は単純、彼が開発者であって、ヘルメツポのような戦闘要員ではないからだ。

原作のような少数で構成される海賊団ならば、例え戦闘力が低くとも戦闘に参加せざるをえない。間違いなく、相手の方が多いから、幾ら船長が強いといっても手が回らないからだ。

だが、この世界のウソップは海軍所属だった。

専門の戦闘要員が大勢おり、例え戦闘になっても、護衛として他に動く者が幾らでもいた。

それなのに今回ウソップが来たのはルフィらとの付き合いで本人もある程度は体を動かしていた、そこらの海兵よりは強かったとい

う事や、ウソップ自身が様々な武器を実地で試してみたいという事があったからだ。無論、実力が最弱な事は言うまでもなく、猿山連合軍はウソップの護衛も兼ねている。

「ほう？マントラを使う者が他にもいるのか？」

なるほど、神エネルギーの反応が疑念を持たれていたのは、そこ辺りが原因か……と推測する。

「ならば少し急がねばなるまい」

第231話・玉の試練1（後書き）

お待たせ致しました

最近、リアルが……忙しいというよりは、精神的に来るものが……  
多くて

ちよっと理想郷の方でモンハンの小説を突発的に書いたりしてました

## 第232話・玉の試練2

サトリの心を読む、という行動はウソップ達には強敵だった。そもそも、ウソップは見聞色の覇気の実在を知っていても、それにどう対処するかは知らない。する必要がなかった。

そして、猿山連合軍の三人で言えば、そもそも覇気の実自体知らなかった。

結果から言えば、サトリの攻撃にどちらも対応出来なかった。

「あiiiiiiiiiiii!」

今も、奇つ怪な叫び声と共に、マシラが蹴り飛ばされた。

既に、全員が船から蹴り飛ばされている。

サトリは神官として格闘戦の技術に関しても修行を積んでいる。ただ、心を読むだけの男ではないのだ。当然と言えば当然だろう。心を読めても、それに対応出来なければ意味はない。

「ほうっ!びっくり玉突き」

絶妙の力加減でサトリがびっくり雲の一つを蹴る。

さすがに彼のテリトリと呼ぶべきか。これがウソップ達ではあつさりとびっくり雲は破裂してしまふ。

そして、飛ばされた雲は別の雲へとぶつかり、それがビリヤードのように弾かれて、シヨウジョウへと向ったと思いきや、直前で更に弾かれ、モンブラン・クリケットへと向う。

「「おやつさん!」」

大猿兄弟の声に反応して、咄嗟に回避する。

危なくないものもあるが、ここまで飛来して飛び出してきた雲の中身、爆弾や槍の玉、或いは炎の玉など危険なものが入っていたら蹴飛ばす事さえ危険だ。

とはいえ……。

「!?水……!」

今回はちょっと水が入っていただけのようだった。ぱしゃりと音を立てて、背後でぶつかった木の枝に水がかかる。

「んゝはずれか」

その様子をサトリが笑いながら見ている。とはいえ……。

「余りお前達だけに時間をかけてはいられない。ほっほう」

他にも侵入者はいる。

ステッキから糸を伸ばし、事前に自分にだけ分かるよう印をつけていた雲を引き寄せる。

「びっくり玉蔓……玉ドラゴン!」

全身を爆弾と槍入りの雲で構成されたドラゴン。

その体のどれかに入っている火炎玉に触れた瞬間、大爆発を起こすとサトリは告げる。

懸命に全員が交わす。

くるりと杖を回し、サトリが自らの周囲にまとわりつくように玉ドラゴンを操る。

「ほっほっ。もう終わり「シヨウジヨウ！」んあ？」

サトリの声を遮って、クリケットが叫んだ。歌え！と。

疑念の声を上げようとしたシヨウジヨウに対して、怒鳴りつける。早くしろと。

シヨウジヨウもこれにはさすがに慌てて、歌いだす。

「ハボツク・ソナー！」

うおっほっ……と声が響く。

一体何をするつもりなのか……。

心の声をサトリは読み取る。

「ほほっ、成る程。無差別の衝撃波とでも言うべき歌か……ん？」

玉ドラゴンは言うまでもなく頂点となる頭部に糸を繋ぎ、操っている。

この為、回避された場合、自分を回り込むようにして回転させ、再び目標に突入を行わせる。そう……。

【自分を回り込むようにして】

さて、現在サトリを取り囲むようにして玉ドラゴンが浮いている。いわば、全周囲を爆弾入りのびっくり雲その他に囲まれているに等しい。

そして、びっくり雲はちょっとした衝撃でも中身が飛び出すぐらいに不安定な雲だ。……そこへ船すら破壊する程の超音波による攻撃が行われたらどうなるだろうか？

答え〃大爆発。

声にならない叫びと共に上へとサトリの体が煤けながら飛び出し

てくる。

ギリギリの所で何とか脱出したのだ。

「はあ……はあ……や、やばかった……このような事で心綱を乱すとは……」

まだ、修行が足りん、とは繋げられなかった。

自身は空中、玉蔓は咄嗟の事なのでまだどこにも繋がっていない。如何に声を読めたとしても、この状態では回避も満足に出来ない……そんな自分の前に。

腕をぐるぐると回すもう一人の猿がいた。

「猿殴り!!」

海王類さえ一撃で殴り倒す豪腕。

その一撃がまともに入る。

それだけでサトリは空を自分の意思ではなくかつとんで、大木に叩き付けられた。

「……………!!」

そして、そこは長年のコンビを組んできた間柄。

飛ばされたのはクリケットの傍。

叩き付けられたサトリに無言のまま、連続攻撃が叩き込まれる。

「が……………は……………!!」

「おっさん!よけるお!!ウソップトリモチ!」

するりと避けたクリケットの横を通過して、ここが勝負どころと



ばかりに飛来した粘着弾がサトリに直撃する。

「く……む、うお？な、なんだ、これは……！？」

べったりとくっついたトリモチ。

慌てて剥がそうとするも、粘つき伸びるそれはサトリの体を大木に貼り付けて逃さない。

そして、嫌な思考を読み取って、サトリはそちらへと視線を向ける。そこには……貝船に乗ったウソップが船の全武装を起動させていた。

「お、おい待て！神官に手を出すという事の意味が分かってるのか！？全能なる神エネルギーへの宣戦布告を意味するんだぞ！？」

分かっているのは、サトリの方だった。

いや、追い詰められた事でパニックに陥ったのか……既に、ルフィがエネルギーには喧嘩を売っている。宣戦布告した相手が、宣戦布告になるぞと脅されて手を引いたりする事があるだろうか？そんな訳がない。

「全弾持つていけ！……フルバースト！！！」

そして、改造貝船の全火力がサトリただ一人に叩き付けられた。

第232話・玉の試練2（後書き）

最近、別のお話ばかり書いてましたね……

これで、小説家になろう、に投稿してるのが三作……

うーん、一つずつ書いて終わらせていけないと……

## 第233話・沼の試練

沼の試練。

ここではある意味予想外というべきか……一方的な戦いになっていた。

「はあ……はあ……沼雲バーガー！」

「剃！」

まただ、とゲダツは思う。

自分はかなり危険な手段も取った。

今回の場合は、敢えて自身が沼雲に沈み、心綱で位置を読み取り、奴の背後から声を出さずに上半身を出して小声で放ったはずだったにも関わらず、わかっていたかのように避けられた。

「嵐脚！」

「く……雲貝！」

雲を噴出し、離脱する。

しかし。

「月歩！」

同じく空を駆け、追ってくる。

そして、生憎その速度と機動性において、雲貝のそれと月歩のそれでは大きな差がある。

「くっ……ジェット」

「近づくとそれを待ち構える。」

「パンチ！！」

絶滅種噴風貝によって加速する拳は相手に敗北すら知らせず、沈める、はずだった。

だが、如何に強烈な一撃であっても当たらなければ意味はない。

「指銃！」

そして、逆にその一撃が来ると分かっているにもかかわらず、避けられなければ意味はない。

例え、心綱でその一撃を打つてくると分かっているにもかかわらず、ジェットパンチでカウンターを狙うつもりが回避して叩き込んできた一撃をまともに喰らう。

何故、心綱が上手くいかないのか？

それは、ジェットパンチの売りが意味している。

噴風貝によって加速するジェットパンチは加速によって敗北すら相手に悟らせずに倒す、すなわちそこに繰り広げられるは高速戦闘。そして、その速度ゆえに、思考を読み取っている間に相手……ヘルメツポは瞬時に距離を詰めてくる。

そこには思考を読み取り、それにどう対応するかを考える時間はない。

（……この男、心綱を使う者との戦いに慣れている！）

ゲダツのその考えを聞けば、ヘルメツポはその通りと拍手しただらう。

彼が普段生活している周囲にいる海軍将官達は軒並み見聞色の覇気を使いこなす。更に、彼のライバルであるコビーもまた一足早く見聞色の覇気を身につけた。

そんな相手を相手どるにはいちいち考えている余裕などない。むしろ、どう攻めるかなどと考える時間があったら、一撃でも多く、というのが現実なのだ。

というか、アスラやガープなどが練習相手になってくれた時は考える間もなく動いて戦わないと、瞬殺されてハードトレーニングコースに放り込まれるのが必至だからだ。

そのお陰で、今、こうしてゲダツを圧倒している訳だが……。

ヘルメツポからすれば、この男の見聞色の覇気は海軍中将や大將が用いてるものに比べれば、まだまだだし、何よりアスラ中将の祈りの一撃や、ガープ中将の愛のある拳骨に比べれば、この男のジエツトパンチもまだ遅い。

しかし、同時に彼を優位にしているもう一つの理由があった。

がくり、とゲダツは膝をつく。

嵐脚に切られ、指銃で穴を穿たれ、ナイフで切りつけられた。

既にゲダツは満身創痍だ。

この点もそうで、鉄塊で弾く訳でもなく、悪魔の実の効果で無効化されるでもないこの男を恐れる理由はなかった。……いや、油断はするつもりはなかったが。

もし、油断でもしたと知られたら、後が怖い。

「貴様……何故だ」

荒い息をつきながら、ゲダツが問う。

「何故貴様……沼雲の位置が分かる!」

そう、それがこの戦闘を決定的にしていた。

この地は沼雲がいたる所にあり、そこは一度嵌れば抜け出せない。そして、見た目では区別がつかぬ以上、まともな戦闘すら困難、なはずだった。

だが、この男は、ヘルメツポは正確に沼雲を回避し、島雲を踏んで動いていた。

「……いいだろう」

その答えが今、目の前で展開される。

ざわざわとゲダツの視線、その前でヘルメツポの姿が変わる。

「これが俺の悪魔の実の力……動物系悪魔の実の一つ、バットバツトの実だ」

そこにいたのは正しくコウモリ人間だった。

### 第233話・沼の試練（後書き）

という訳で、ヘルメツポの悪魔の実公開です

……原作はようやっと盛り上がってきた気もするが……

最近、ジャンプで見たい気にさせる作品が減ってる気がするなあ

## 第234話 - 沼の試練2

「コウモリ……!?!?」

ゲダツは考えた。

しばらく考えた。

「何だそれは」

生憎、この空の世界にコウモリはいなかった。

実の所、この雲の世界というのは至極狭い世界だ。

空に適応した動物しかおらず、地上の生物はごく一部。この国で言えば、神の島ことジャヤヤにかつて生息し、生き残った動物のみだ。

最も、そんな事はヘルメツポには関係ない。むしろ都合だ。

……コウモリの能力を知られる事はない、という意味で。

「……なら、知らないままくたばれ」

「む!」

どんな能力でも、知られてしまえば対抗策を考える。

ゴムで打撃が効かないのならば、切りつければどうか?

どんなに切ってもバラバラになるだけなら、打撃はどうか?  
そういう事だ。

その場その場でどうにか出来るかどうかはまた別の問題だが、少なくともペラペラと自分の能力を語って、良い事など何も無い。  
故にヘルメツポはそれ以上は語る事なく駆け出した。

「がふ!?!?」



獣人化すれば、更に身体能力は上がる。  
その蹴りの一撃をゲダツはまともに喰らった。

「舐めるな……！」

それでも決死の形相で腕を振ってきたのは彼なりの矜持だろう。  
神官として、この空の世界でエネルギーに次ぐ力の持ち主としてあり続けてきた彼の。

そして、めり込み具合が、この一撃で決まったと一瞬思ったヘルメツポの油断がその腕を掠らせた。

いや、ただ腕を振るっただけならば、それでも当たらなかつたらう。

……噴出貝を用いたものでなければ。

無論、それは本来の威力を保ったものではない。  
無理な姿勢から無理やりに奮った一撃だからだ。

だが、それでもゲダツの力と、噴出貝の力は掠めただけで、ヘルメツポを吹き飛ばした。

……吹き飛ばしたただけだったが。

「……驚いたな、まだ動けるか」

空中で皮膜を用いて姿勢を整え、足から木へと着地する。

鉄塊を用いるまでもなく、ダメージなどなかった。

「はあ……はあ……舐めるな……！俺はゲダツ！偉大なる神エネルギーに仕える神官の一人、空番長ゲダツだ！」

それは彼の誇りだった。

けれど、同時にヘルメツポには何ら意味のない誇りでもあった。

海軍は力なき者を守る組織。

無論、建前と現実とは往々にして異なる。海軍にだって闇はあり、天竜人の暴虐に対してはそれを擁護しなければならない。

それでも、まだ若いヘルメツポには理想を願うだけの心があった。海賊に一度は騙され、重傷を負い、それでも今も尚海賊を追い続ける父の姿があった。

だからこそ……。

「理想に過ぎなくても……力があるなら、奪う事より守る事から考えやがれ！」

### 【剗】

瞬時に消えたヘルメツポの一撃が背後からゲダツを沼雲へと脳天から叩き落した。

沼雲に落ちてはもがいてもも、抜け出せるものではない。

沼でありながら、雲。もがけど、もがけど、沈んでいくのが沼雲だ。

そして、それは沼の試練を担当するゲダツもよく理解していた。

(く……このままでは……！雲貝・沼雲仕様……！)

ただし、致命的なまでのうっかりは健在だった。

そもそも、彼の試練は生存率が最も高い。

なぜなら、彼が「うっかり」眠っていたり、白目を剥いたまま見張りをしていたりするからだ。(逆に言えば、まともな時は生存率が極めて低いのも事実なのだ)

そして、彼の「うっかり」はここで炸裂した。

「なにいいいいい!?!」

猛烈な勢いで雲貝から噴出し、推進力とする。

ただし、下へ向けて。その光景を見たヘルメツポは思わず叫んでいた。

そして、そのままゲダツは下方へ、雲の下へと一直線に突き進んでいったのである。

「……………アホだ」

しばらく待つてみたが、戻ってくる気配はない。

ゲダツにしてみれば、進んでも進んでも雲から脱出出来ない為に前へ前へと進む。そして、抜けてみれば雲の下だった……………というのが真相なのだ。

そして、雲貝は空雲の環境下でなければまともに作動しない。

……………つまり、青海へとゲダツは落っこちていったのである。これで戻ってこれるはずがない。

「……………先進むか」

まだ、事態は終わった訳ではない。

最大の大物はまだこの先にいる。

仲間達は確実に先へと進んでいると信じ、ヘルメツポは歩を先へと進めた。

第234話・沼の試練2（後書き）

原作のジャヤの森で昆虫類はいたけれど、コウモリは多分いなかった、と思うんで今回の冒頭になっています

……本あるはずなのにどっかに潜って出てこない

## 第235話・鉄の試練1

荒い息をついた。

眼前の敵も無傷ではないが、自分よりはまだ余裕がある。

ギリ、と歯を強く噛み、コビーは目の前の神官を睨みつけた。

そう、鉄の試練の神官オームを……。

「ああ……何とも無駄な足掻きをするものだ」

タン、とサングラスの真ん中を軽く指で弾くようにして位置を直す。

とはいえ、神官オームとて実はそれ程内心に余裕がある訳ではない。

もし、一対一で戦っていれば、今頃この場に立っているのはコビーの方だっただろう。

何しろ、神官のアドバンテージたる『心綱』がコビーには通用しない。

結果的に、それ以外の部分での勝負となる。

コビーには海軍で鍛えられた六式が。

神官オームには鉄雲を仕込んだ武器とそれを応用した武術が。

その二つが激突したならば、前者が勝利しただろう。

伊達に、海軍は青海で幾多の海賊と戦い、その中で磨かれた武術として六式を用いている訳ではない。

だが、ここにはそれ以外の要因が一つあった。

「…」

瞬間、オームの攻撃の思考を察知し、コビーは空へと体を跳ね上げる。

普通ならば空へ動けば、体が動かない。人は空で動けない故に、死に体となる。だが、六式の力はそれを月歩によって無効とする。けれど……。

「ホーリー！」

神官オームの声と共にふつと陰る。

コビーの背後に舞った巨大な犬……ホーリーだ。

本来ならば、そちらに対処したい。だが、前面から強烈な殺気を叩きつけてくるオームを考えると、そちらに向かい合っている余裕はない！

「く……【鉄塊】！」

結果、背後からの攻撃に耐えるしかない。

その衝撃を受けながら、も空中で姿勢を整え着地……という名の着弾をし、そのままそこを飛び退る。直後に飛来した鉄雲の刃がその場を抉った。

戦いが始まってから、この様相だった。

神官オームとコビーの実力差は然程大きくはない。

だからこそ、そこへの一手。ホーリーの存在が大きな意味を持つ。10の力と9の力が戦闘すれば、普通なら勝利するのは10の力を持つ側だ。だがそこへ、9の側に5、とまではいかなくても3の力を持つ者が加われれば、そしてそれが完璧に意図を読み取ってコンビネーションを繰り返してくれば……それは大きな差となる。

鉄塊でダメージは抑えられる。

だが、【鉄塊】とは体の筋肉を硬直させて、鉄の強度を生み出す技だ。逆に言えば、内臓までは強化出来ない。……いや、上位者に

なれば、内臓も強化してしまえるのかもれないが、コビーには少なくとも無理だ。

何度も蹴り飛ばされ、何度も打ち付けられていけば、その衝撃のダメージは徐々にでも蓄積し、疲労を生み、体のキレを奪う。

その結果が、現在の状況だ。

実際、ホーリーの一撃で気が逸れた所を狙ったのオームの一撃で、軽い傷は幾つか負っている。

そして、それはこのまま事態が進めば致命傷にも繋がりがねないだろう。

漫画なら、ずんばらりと斬られても死なない事が多い。

確かにそれが筋肉までで止まれば、血は派手に出る事はあっても死なないだろうが、現実はその甘くはない。実際には内臓まで刃が届けば、まず助からない。……まあ、偶然運良く刃が急所を避けてくれれば話は別だが、世の中早々甘くない。そもそも、ここで倒れたら、確実にトドメを刺されるだろう。

そう判断出来るからこそ、オームからの攻撃に注意を払わざるをえない。

そして、その瞬間は唐突にやって来た。

オームはここまで刀としてしか使ってこなかった。

彼も、戦闘開始早々にコビーが『心綱』の使い手だと判断した。

それも当然、コビーは本来なら青海人が知るはずもない鉄雲、それだけならばシャンディアから聞いたと判断出来るかもしれないが、伸ばしての攻撃が飛ぶ直前に既に回避に動いていたからだ。

そう、伸ばそうと考えた次の瞬間に……。

『今だ！』

その声が余りにはつきり聞こえたが故に、コビーには何が起きようとするのか瞬間分からなかった。

『心綱』の、見聞色の覇気の欠点がこれだ。  
心を読む、それは確かに強い。

だが、心を読むという事は同時に一拍行動が遅れるという事でもある。

『顔面にパンチ！』。

そう考えていると読んで、それを回避出来るのはまだまだ二流だ。高速戦闘中にそれをしていては間に合わない危険が高い。だからこそ、本物の上位者同士の戦闘では見聞色の覇気は使えない。

『顔面にパンチ！』と聞こえた時には既に顔にパンチがめり込んでいる状態になるからだ。

そうした面ではまだまだコビーも能力に振り回されている訳だが……話を戻そう。

なまじ聞こえるだけに、つい耳を澄ませてしまった。しまった、と思った時は後の祭りだ。

鉄雲が変化し、檻と化そうとしている。

オームもまた、コビーの様子を観察していた。どうやらあの体の高度を上げる技は瞬間しか出来ないと彼は判断したのだ。ならば、鞭で締め付けるように、鉄塊が切れるまで攻撃し続ければ良い。

だからこそコビーも全力で後方に向け。

「【剃】！」

飛んだ。

それが狙いだったと気付いた時また、手遅れ。

先程から神官オームとホーリーはコビーを挟むように動いていた。つまり、今の真後ろに向って飛んだという事は……。

「ホーリー！カウンター！！」

真っ向から自身の勢いと合わせてコビーはホーリーの拳へと突っ



込んだ。

鉄塊をかける余裕はなかった。

瓦礫に叩き付けられた所へ追い討ちの踵落としの一撃が……。

それを理解した時、コビーは思わず叫んでいた。

何故その時そう叫んでいたのかは後になって振り返っても分からない。思わず、とっていい。

「ま……待て！」

そうして。

神官オームは焦燥を露にし、コビーは驚愕を隠せなかった。

……コビーの前には即座に踵落としを中断したホーリーが大人しく「待て」の姿勢で座っていた。

## 第235話・鉄の試練1（後書き）

久々の更新です

……本当にやっと生活が落ち着く気配が……

とはいえ、まだまだなんですけどね

矢張り、オフが落ち着かないとなかなか……応募用の小説書いてる  
のもあるんですがw

応募締め切りに間に合うかなあ……

## 第236話・鉄の試練2

「が、ふ……！」

呻き声を上げ、神官オームは倒れた。

一度、ホーリーの弱点が判明すれば後は簡単だった。

元よりオームもまたホーリーに対しての指示は声を出している。

その指示の直後にただ一言、「待て！」を付け加えてやれば、直近の指示に従うホーリーは素直に従う。

白茨デスマッチも空を駆け、心を読む取るコビーには通用しない。

とはいえ、それが戦闘を簡単なものとした訳ではない。

戦闘自体は極めて激しいものだった。

元より二人の間に大きな差はなく、そしてコビーはオームより消耗していた。

だが、最後を決めたのは想定外の一撃だった。

「鉄雲！」

波打ち襲う一撃がコビーを襲う。

「【鉄塊】！」

本来ならば消耗を避ける為にも【紙絵】で避けたい。

だが、鉄雲は正に雲。

下手に紙一重でかわせば、次の瞬間刃自体が形状を変えかねない。事実、回避した瞬間に雲が膨らみ、胴をなぎ払いにきた一撃があった。

それは結局、【紙絵】と【鉄塊】の双方を使用する結果になった。

「【嵐脚】！」

風の刃を放ち。

「【荆】！」

追撃に入る。

「鉄雲！」

だが、それをオームは鉄雲の形状を変化させ、自身を包み込むようにして防ぐ。

鉄雲が鉄の強度を有する雲である以上、これは雲製の【鉄塊】みたいなものだ。

しかも、扱いになれている者らしく、完全に自身を包み込むのではなく、網目状に張り巡らし、外部への視界も確保している。

結果として、【嵐脚】の余波で皮膚がある程度切れてはいるものの、それでも完全に視界を遮ってしまうよりはマシだろう。が、そのまま蹴り飛ばす。

六式自体の強さについて目がいきがちだが、六式を達成するには身体強化は必須だ。

例えば【鉄塊】を為すには十分な厚みの筋力が必須だ。

そして、一番強化を求められるのが、【嵐脚】や【月歩】【荆】を用いる脚力だ。

それを可能とするだけの脚力で蹴られたらどうなるか……。

結果は、鉄雲でのガードを行ったまま吹き飛ばされたオームが示している。

それでもダメージを食らった様子がないのはさすがというべきか。

(あと少しなんだ……！)

だが、コビーの狙いはそこにはない。

少しずつ、位置を修正してきた。

オームにとっては当り前、コビーにとってはそうでないからこそ有効な一撃……。

その為に。

距離を詰める間に、鉄雲でのガードを解除したオームがコビーの追撃から逃れる為に跳躍する。コビーがその方向に逃走してもらう為に、位置取りを考えていたなど考えもせず……。

(かかった！)

一瞬、オームの拳動が止まる。

つい癖、というべきかコビーのその思考を読んってしまったのだらう。

さすがに連続した攻撃の最中には読んでいる余裕はなくなっているようだが、こうしていわば大声を上げた状態なら気付きもする。

「ホーリー！前蹴り！」

「なに！？がッ！？」

瞬間。

神官オームの背後に立つホーリーの放った蹴りが無防備なオームの背中を直撃した。

これが狙いだった。

神官オームにとってホーリーは警戒すべき対象ではない。

彼にとっては本来、ホーリーは自身のペットであり、武器であり、

仲間であり、道具。さすがにホーリーの特性を知られてからはホーリーによる攻撃は中断されていたが、それでもホーリーへの警戒はしていなかった。

そして、結果としてホーリーの前へと神官オームを弾き飛ばした一瞬を狙い、敢えて指示を出さなかったホーリーへと命令を下したのだ。

この結果、隙が出来た。

待ち望んでいた大きな隙が。

そして、狙うはただ一点！

「【指銃】！」

「ぐあー!!」

狙ったのは親指の付け根。

鉄雲を収めた雲貝の入った柄、それを握る手の親指の付け根を粉砕され、ただけでは【指銃】の威力は治まらなかった。

そのまま他の指の骨まで砕く。

結果として、握りが緩み、そこを狙い手を蹴り飛ばす。

力の緩んだ手から柄はすっぱ抜け飛んでいった。

「しまっ……!!」

「これで終わりだ！」

態勢は大きく崩れ、剣であり防具である鉄雲はその手にない。

神官オームの弱点はその一点。

全てを鉄雲に頼っている為に、それを失うと手の打ちようがなくなる。

そこが槍と機動力に騎乗する鳥の戦闘力を持つ神官シユラ。

周囲に幾らでも武器と出来る玉雲が浮くサトリ。

沼雲と拳を武器とするゲダツらと違う点だった。

そうして、空へと舞い上がったコビーは踵落としのように大きく足を振り上げる。

「アスラ師匠直伝！【大嵐】！」

一際巨大な風の刃。

それが回避出来ぬオームを切り裂いた。

それでも神官オームは、コビーが大地に降り立ったその瞬間は立っていた。

そうして、余波で切られたサングラスが大地に落ちると、露になつた目でコビーを睨みつけ。

「ふー！」

次の瞬間、それが最後の力だったかのように、血を吐くと、そのまま前のめりに倒れ付した。

第236話 - 鉄の試練2 (後書き)

バイト始めました

……慣れるまでは大変だ

腰いてえ



## 第237話・意地の一撃

シャンディアは既にばらばらになっていた。

元より神官らの奇襲を避ける為に少数の集団に分かれていた、という点はある。

だが、それ以上に途中から襲撃を掛けてきた神兵達によるもの大きい。

神兵は確かに神官に比べればその戦闘力は劣るが、それでも伊達に精鋭を名乗ってはいない。

彼らの扱う『アックス・ダイアル斬撃貝』はスカイピアには存在していない。逆に言えば、長年空の戦いを経験してきたシャンディアにとっても未知の戦闘方法という事を意味する。

下手に盾をかざせば盾ごと斬られる。

そして、神兵長を勤めるヤマはその巨体にも関わらず敏捷にも優れ、シャンディアの精鋭にも劣らない戦闘力を持つ。

「メリヤーー！」

今も空には重い故に存在しない金属、鉄を用いた砲弾を使うゲンボウに逆に放たれた砲弾を蹴り返した。

別に他の人間に使えない訳ではないが、重い鉄球を複数持ち歩くとなると体力を消耗する。それ故に他の者はより効率的な燃焼系のバズーカなどを愛用しており、結果的にゲンボウはシャンディアでも精鋭に数えられていた、のだが。

避けられた事はあっても、蹴り返された事は始めてだった。

それ故にそれをまともに受けたゲンボウにヤマが十連斬撃を構え、迫り。

直後、回避行動を取った。

「ぐふ……ラキ、か」

「大丈夫かい？」

飛来した銃弾。

ライフリングを刻まれたその一撃を頭部に受けてはさすがにヤマとて厳しい。

「これはこれは……シャンディアでも精鋭に数えられる者がもう一人とはな」

それに無言で、ゲンボウは己の武器を構え直し、ラキは新たな弾を装填した。

原作では倒されたゲンボウは史実と異なり、ブラバムなど麦わら海賊団と相打っていた者達が海軍と中立という名の相互不干渉を貫いた為に多少の戦力の余裕が生まれ、結果として未だ健在だった。だが、その一方より窮地に陥っていた者もいた。

「く……！」

カマキリは呻き声を上げた。

彼はいま一人の仲間と雲の道を走る途中、突如としてエネルギーと遭遇した。

奇襲によって一人は倒されたが、カマキリがシャンディアの中でも特に五名の精鋭の一人である事から、エネルギーが神の力を示してやるうと、余裕を見せた。

『やるがいい五分間……私はここにじっとしていよう……』

カマキリの心を折らんとばかりに悠然とそう告げた。

『煮るなり焼くなり好きにしてみる。神の存在をお前は知るだろう』  
『う』

そう告げられ、幾度攻撃しただろう。

今もまた、槍でエネルギーの頭部を貫くが……当のエネルギーは退屈そうにあくびをしていた。

「おれは……お前に勝てない……のか!？」

分かつてはいた。

目前のエネルギーが自然系の能力者であり、雷そのものであるならば物理的な打撃はごく一部の例外を除き、効果がないはずだ。

そして、それをカマキリは実感していた。

燃焼剣を用いたが、それでも通じない。

真つ二つにされようが、雷が消える訳ではない。天災の具現化こそエネルギー。青海で自然系の能力者が反乱軍の頂点に立ち、海軍の最高戦力と呼ばれる三大将を為し、既に死んだとはいえ王下七武海にいたのは伊達でも何でもないという事だ。

「そろそろ五分だ」

「!?!」

どうする?とばかりにエネルギーの視線を向けられる。

「苦しかろう。雷に触れ続ければ当然だろうがな……」

一瞬、そのエネルギーの視線に恐怖を抱き、逃走をも考えたカマキリはだが……その言葉に疑念を感じた。

(……苦しい？雷に触れる？)

そつだ、自分は苦しいか？

いや、普段と変わらない。

何故、自分は雷に幾度となく触れ続け、それなのにこうして大きなダメージも受けずにいられる……？

その視線は自然と己の手に向う。

そこにあるのは手袋。

海軍より送られたゴム手袋。

滑り止めにちょうど良いとつけたままにしていたもの……。  
ぐっ、と拳を握り締め、振り上げる。

「あああああああああ！」

渾身の力を込めて振り下ろされる拳に、エネルギーはちら、と視線を向けた。

「ふう、武器が通じぬのなら拳で、か……全く無駄なあが」

言葉は途中で停止した。

バキ、と。

肉を殴りつける音によって。

瞬間、双方とも姿勢を崩しながらも、それぞれが異なった反応を示した。

片方は信じられないといった様子でエネルギーを呆然と見やり。

片方は何が起きたか理解出来ないといった様子で体を傾がせた。

直後、カマキリは即座に逃亡に移った。  
可能ならばこの事を伝えねばならない。  
それを理解したからだ。

だが、エネルギーがそれを許すはずもなかった。  
何が起きたか理解出来なかったのは一瞬だった。即座にその顔は  
怒り狂ったそれへと変わる。

「貴様……！神の顔を殴ったな……！」

凄まじい勢いでエネルギーから放電が発せられる。  
周囲に垂れ流されるそれはエネルギーの怒りを示すかのようだった。  
輝きを増し、エネルギーの視線は逃走するカマキリへと向けられる。

「雷から逃げられると思ったか……！！！」

怒りのままに更にその電圧を上げる。

本来ならば、無力感に苛まれる男を、シャンディアに自分達が無  
力な存在なのだとしめる生贄とするつもりだったが、そのよう  
な余裕も吹き飛んだ。

「一億V……！！！」

？神の裁き（エル・ツール）！」

無言のままに放たれた一撃はカマキリへと迫る。

背後で沸き起こる光で、雲の道に濃い影を落としながら、カマキ  
リは叫ぶ。

絶対の死が目前に迫りながら、それでもカマキリは笑っていた。  
笑いながら、仲間へと届けと叫ぶ。

「通じたぞ……!!」

「通じたぞ、ワイパー!!!」

その直後。

カマキリの姿はエネルの放った裂光の中へと消えていった。

「……しまった!」

エネル自身は黒焦げとなり墜ちて行くカマキリへと駆け寄りながら舌打ちしていた。

自分自身の事ながら、冷静さを欠いていたと言わざるを得ないと認識したからだ。

強力極まる放電が雲の道を伝わり、三十近い声、しかも神兵の方が多い、それだけが消えてしまった事もあるが、それだけではない。

「……くそ、矢張りダメか」

地面に力なく転がるカマキリの遺体を蹴り飛ばす。

ごろごろと転がるその両手は焼け爛れ、おそらくは自身へと打撃を与えた原因となったであろう何かは跡形も残ってはいない。

お陰で、その正体は不明。

分かった事はただ一つ。

「ゴム、だと?」

ギリギリで聞き取れた心の声の一つ。

「……だが、熱には弱いようだな」

金属は形を残している。

毛皮も燃えてはいるが、まだ残っている。

だが、ゴムの手袋は跡形もない。

お陰で正体が全くの不明なのは忌々しい話だったが……。

そうして倒れる者を増やしつつ、尚も空の戦いは続く。

第237話・意地の一撃（後書き）

シャンディアの一人が永遠に倒れました

少年誌では誰か死ぬ、って描写は滅多な事ではありませんが……戦争なら避けられない事でもあります

10月末に締め切りの小説賞が幾つかあるので頑張ってたんですが……間に合いませんでした

とりあえず、今月末までには一つは完成させたいなあ……



## 第238話・それは想定外です

神兵長ヤマ。

見た目は単なるふとつちよ。

だが、単なるデブがこの地位にいられるはずもなく、その体の下には筋肉が詰まっている。

しかも、その重さにも関わらず身も軽い。

「メリヤーー!!」

再び砲丸が蹴り返された。

その身軽な体術によってラキの狙撃を交わす。

そして、ゲンボウの放った砲丸は的確に蹴り返し、ラキを襲う。

「くっ!!」

狙いを定めていたラキはかろうじてその砲丸を回避した。

ゲンボウが放つ以上の勢いで飛来する砲丸の直撃を受ければ、しばらく動けない程のダメージを食らう事は避けられない。

ここまで三人の戦いは神兵長ヤマが優位に戦いを進めていた。

さすが、というべきだろう。

彼ただ一人の前に、シャンディア精鋭二人がかりで尚、優位に立  
てずにいた。

「くそ……拙いな」

「ああ」

ゲンボウとラキ、二人共舌打ちした。

ゲンボウの場合は特にそうだ。  
砲丸は決して弾数が多くない。

如何にゲンボウが力持ちといえど、嵩張る砲丸は大量に持ち歩けない。

空では存在しない貴重な素材である事もあり、撃った後はちゃんと回収して再利用する。けれど、この状況では回収などしている余裕があるはずもない。

確実に減ってゆく砲丸の残りはあとわずか二発。

ラキの弾丸はまだまだ残ってはいるが、元々ラキは狙撃系。精度は高いのだが、このような近距離戦闘は得意ではない。

かといって、ヤマのあの身のこなしを見る限り、ゲンボウが接近戦を挑んだとしても……。  
だが。

「こつなりや仕方ない」

ゲンボウが荒くなりつつある息の中、一步前へ出た。

「?どうする気だい」

ラキは何か嫌な予感を感じる中、ゲンボウの背に声をかける。

「……俺が奴を抑える。その隙に奴に銃弾を叩き込め」

ラキが息を呑んだ。

ヤマには斬撃員がある。下手に接近戦を挑めば、切り刻まれるのがオチだ。

力でも上回るならば奴を抑えていられるのは一瞬。  
それなのにそんな事を言うという事は……。

「まさか」

死ぬ気か。

その言葉を出す前に、ヤマが突っ込んで来た。

「時間がない！頼むぞ、ラキ！」

そして、その声にラキが思わず声を上げようとした時。

「そうか、だがその前に目を閉じる」

この場にいなかった新たな声が響いた。

その声に反射的にゲンボウとラキが従えたのは声が知った声であった事と、彼の武器の事を知っていたからに他ならない。

これに対して、なまじ前線に出る事が限られており、データとしては知っていても対戦経験のなかった相手に対しての対応としては、ヤマは遅れた。それでもそれが普通の攻撃ならばまだ良かっただろう。

飛来した弾丸に対して、早くもヤマは回避行動に入りつつあったのだ。

そのままならばヤマは回避に成功していただろう。

それが普通の弾丸であったならば。

それは次の瞬間眩い輝きを放った。

閃光貝。

本来それを仕込んだ拳銃を操るが、今回はその貝そのものを発射したのか。

「メ、目〜〜〜!?」

思わずという仕草で目を押さえて、苦痛に呻くヤマ。

至近距離で強烈な光を浴びた人間としては無理もない行動だった。だが、その行動は余りにこの場で取る行動としては余りに不適切だった。

「オウフ」

次の瞬間、ヤマは目を押さえるのも忘れ、股間から伝わった強烈極まらない痛み完全に動きが停止した。

ふさいだ目を大きく見開き、次の瞬間全身からぶわりと脂汗がわく。

目を覆った瞬間、ゲンボウが放った一撃。

だが、咄嗟に目を閉じたとはいえ、強烈な閃光はまぶたを通してゲンボウの目もチカチカと視界を落とし、その中でヤマの腹を狙って放たれた砲丸は僅かに下へと向かい……ゲンボウにとっては運の良い事に、そしてヤマにとっては最悪な事に急所へと直撃した。

完全に場の動きが停止した。

それは、それを喰らった本人だけではなく、ゲンボウもブラハムもその痛みが分かるだけに思わず、といって良い程完璧に動きが停止したのだが。

直後に、ヤマがその頭部を撃ち抜かれ、彼は苦痛から永遠に解放された。

「助かったよ、ブラハム」

閃光弾を放った仲間の一人、姿を現したブラハムに向け、銃弾を放った姿勢から、ヤマが動かないのを確認してようやく銃を降ろしたラキが声をかけた。

「無事で良かった。だが……」

そして、ゲンボウとブラハムの言葉が重なった。

「容赦ないな」

「何が？」

男の痛みが分からないからこそあの一瞬にも硬直する事のなかったラキはその言葉に首を傾げたのだった。

第238話・それは想定外です（後書き）

バイトが疲れます

帰ったら、寝て、起きてメシを喰ったらまたバイトに行く  
そんな生活で何も物事が進まない……！

まあ、一時期の仕事がなかった時より断然マシなのだけど  
慣れるまでの辛抱というか、慣れてない仕事はやはり大変ですね

## 第239話・合流と遭遇

次々と影が飛び出してくる。

いずれも瞬間警戒し、次にある者はそこに仲間を見つけて安堵し、ある者は敵を見つけ戦闘の態勢を整え、またある者は互いに不干渉の相手を見つけ視線を逸らした。

その中で、素早く仲間を確認し合流したのはコビーとヘルメツポであった。

「無事だったんですね」

「そつちもな」

短く会話を交わし、けれど視線は周囲から逸らさない。

現状、この場にいるのは自分達兩名の他にはシャンディアがワイパー他主力三名に追加で三名の合計七名、神兵が四名の合計十三名だ。

つまり……。

「さて……」

ワイパーがぎろりと睨み、バズーカを装填する。

「それじゃ……」

ヘルメツポが両手にククリを手にする。

「「殺るか」「」

そうしてシャンディアと海軍は並んで、神兵を睨みつけた。

無論、神兵自身は「調子に乗るな、偉大なる神エネルギーのメ〜により貴様らを討伐する！」と気合を入れたのだが……所詮モブはモブであった。

一斉に飛び掛った彼らは次の瞬間。

「バーンバズーカ  
燃烧砲！！」

「タイラン  
大嵐！」

「双演舞！！」

焼かれ、切り裂かれ、最後の一人も全身を穴だらけにされた上に砲丸に吹き飛ばされて果てた。

「後はアレを登るだけか」

ガシヤリとバズーカを降ろしたワイパーがジャイアントジャック巨大蔓に視線を向けるが、その目が訝しげに細められた。

「……何をしに来た」

不機嫌そうな口調だった。

その視線の先を追った一同だったが、コビーとヘルメツポが「おや、あれは」といった平然とした態度だったのに対し、シャンディアの面々は武器こそ構えなかったものの渋い表情になった。そこにいたのはまだら模様の鳥に乗った鎧騎士。そう、先代の神ガン・フオールであった。

彼もまたこちらに気がついたのだろう。旋回して、こちらへと降りてこようとしていた。



「……じゃあ、誰もいない、と？」

コビーの台詞にガン・フォールは重々しく頷いた。

彼のもたらした情報は巨大蔓の途中にある神の社。一足先にそこへ到達したガン・フォールが確認したそこは、既に放棄された地でもあった。

どうやってそこへ、とは誰も言わない。

何しろ、ガン・フォールは先代の神だ。かつて自分が暮らしていた場所なのだから抜け道のひとつやふたつ、知らない訳がない。そしてまた、今、彼がこの面々に嘘をつく必要も感じられなかったのである。

だが、彼らもエネルギーが逃げ出した、とは思わない。

そんな容易い相手ならここまで苦労しないし、恐れもしない。そもそも、その程度の相手ならば、ガン・フォールが神の座を追われたりしないだろう。

「じゃあ、どこに行きやがった……？」

そう、ワイパーが呟くように言った時。

「ヤハハハハ……私を探しているのかね？」

彼らの背後より響いた声に一齐に後ろを振り向いた。

そこには……半ば崩れた建物の上に鎮座する姿が一つ。神エネルギーであった。

ちらり、と僅かに倒れた神兵に視線を向けるが、すぐに興味なさげに視線を未だ立つ者達へと向けた。

「……後はお前だけだ」

「ヤハハハハ、そうだな、神官、神兵長、神兵。どうやら全滅したようだ」

至極楽しそうに笑いながらそう告げるその姿に言いようのない違和感を感じた。

当然だろう、部下が倒れて尚、平然としている。

「……いいのか、お前の部下は全滅だぞ？」

ブラバムが銃を回転させながらそう尋ねるが。

「ヤハハハハ、そうだな。まあ、神の加護がなかったのだろう。……だが」

そう笑った上で、すう、と笑みが変わった。  
先程までと異なり、目が笑っていない。

「頭が高い。神に対して何たる口のききようか？我は神なるぞ」

その瞬間放たれた威圧感に殆どの者は気圧される。

それに圧されなかったのはコビーぐらい。ワイパー、ヘルメツポもすぐに気を立て直す。ワイパーは本人の気概によって、海軍の両名はそれが覇気であるという知識を持つが故に。

一対十。

数字だけ見るならば、圧倒的に優勢。

だが、それでもシャンディアも海軍も未だ自分達が互角でさえない事を知っていたのだ……。

【その頃：ウソップ達】

「……おい、ここはどこだ？」

「どこだろうなあ？」

「っていうかお前らが下手にスイッチ押しして、緊急用噴射装置作動させるから迷ってんだろっが!!」

【その頃：ルフィ】

「ここより先は行かせぬ！メ〜!!」

周囲より三名の最後の神兵が迫る、が。彼らはルフィの体に触れる事さえ出来ず、途中で一斉にガクリと力が抜け、白目と泡を吹き落ちていった。

「……今のは……始まつちまつたか？」

海軍帽の下から鋭い視線を向けつつ、それでも静かに待ち続けるルフィだった。

## 第239話・合流と遭遇（後書き）

今年お初です

……いやあ、年末に何とかオリジナルが完成して応募しました  
まあ、簡単に通過すりゃ苦労はしないんですが、まずは第一次選考  
通過を期待するのみ

次のオリジナルも思いついた話があって書いてはいますが……  
さて、次はとりあえず飛竜かな

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1573/>

---

ONE PIECE - 全てはある日突然に

2012年1月10日04時34分発行